
奏世コンテイル

雪宮鉄馬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

奏世コンテイル

【Nコード】

N37770

【作者名】

雪宮鉄馬

【あらすじ】

国境近くの草原、人買いに攫われ、絶望に暮れる少女の元に現れたのは、空から舞い降りてきた少年だった。

三つの国が、不安定な関係にある世界を舞台に、赤い瞳の少年と銀色の髪の少女が出会う時、伝説を巡る旅と、世界を奏でる二人の物語が始まる……。

「剣と魔法のファンタジー」を、独自の設定とともに描く、長編ファンタジー小説です。

1. 空から落ちてきた少年（前書き）

はじめまして&こんにちは。

苦手分野であるファンタジー小説に再挑戦したいと思い、製作開始しました。

今作は、拙作ファンタジー「トーコと黒いこうもり傘」とは少し違い、架空の世界を舞台にした「剣と魔法のファンタジー」です。いろいろと、試行錯誤しながらも、より良い物語を届けられるよう、がんばっていく所存ですので、最後までお付き合いいただけたら、幸いと存じます。よろしくお願いします。

1. 空から落ちてきた少年

白き龍が目覚めるとき、この世界に、無限の安定と永遠の平和が約束され、世界から、憎しみも悲しみも、争いも飢えも、消えてなくなる……。それは、神とヒトが交わした、悠久の約束である。

果てしない草原には、長く地平線まで延びる三本の街道が見える。南から伸びる街道は、砂漠の鋼鉄国家「ダイムガルド帝国」から続いている。北から伸びる街道は、八百諸侯を束ねる連合国家「センテ・レーバン王国」から続いている。そして東より伸びる街道は、ベスタ教の聖地を首都とする宗教国家「ガモーフ神国」から続いている。

その三本の街道は、草原のちょうど中心で交じり合い交差点をなしている。その街道を一台の馬車が、センテ・レーバンへ向かって走り抜けていく。「ウォーラ」と呼ばれる、三頭立ての辻馬車である。

辻馬車とは、人を町から町へと運ぶ、交通機関のことを指す。その証拠に「辻馬車ギルド（組合）」の黄色い三角の旗が、荷台の幌の上にはためいていた。

しかし、この辻馬車を操るのは、何処から見てもカタギの人間には見えない御者ぎよしや。頬に傷、狼のような目つき、腰に帯びた曲刀。言わば、チンピラの類である。

そんな男が操る、馬車の荷台に、乗客は一人。両手を、鎖の錠でつながれた、少女である。銀色の髪、輪郭の細い指先、透き通るような白い肌。誰もが、美しいと思えるような女の子の、可憐な青い瞳から、ほろりと涙が落ちる。

そう、この馬車は辻馬車などではなく、「人買い」の馬車である。少女の名はネル。遠くガモーフ神国の、辺境の村から連れられてきた。人買いに攫われる、それは、もう二度と故郷へは帰れないとい

うことは、ネルにも分かっていた。だから、涙が零れ落ちるのだ。幌布の隙間から見える景色は、少しずつ北国のそれに変わってきている。もうじき、見知らぬ国にたどり着き、やがて自分は誰かに売られてしまうのだ。

故郷に残した、父や母、妹は無事でいるだろうか。悲しみに暮れているのではないだろうか。自分は、これからどうなってしまうのか。涙は、とめどなくネルの白い頬を濡らしていく。

ネルのかぶる箱型の帽子や、赤いワンピースの裾には、互い違いに重なった輪の文様が描かれている。故郷の村に伝わる、「カチュアの模様」である。カチュアとは、ガモーフの古い言葉で、「幸福あらんことを」という意味だ。しかし、自分の行く末に幸福はあるのだろうか。

ネルは、幌馬車のすみで、顔を膝に埋めた。しかし、あふれ出す涙は止まらない。たった、十六年の人生だが、これほどまでに悲しい気持ちに囚われ、これほどまでに神さまに祈ったことはない。

『ああ、正義の女神アストレアさま。どうか、どうか、わたしを故郷に帰してください。帰りたい、お父さんと、お母さん、メルにいるお家に帰りたい……!』

故郷を離れセンチ・レーバンへ至る、この数ヶ月。ガモーフ神国が、国教に定める「ベスタ教」の女神、アストレアに祈りを捧げて、その声は今日まで、届くことはなかった。やがて、国境を越えれば、そこはベスタ教の庇護なき王国。か弱い少女の運命は、もはや絶望の淵に打ち捨てられたものと同じだった。

「なんだ、あれは!?! 人が空から降ってくる?」

馬車を操る御者の不穏な声が、幌越しに聞こえてきて、ネルは顔を上げた。その瞬間、はるか頭上から別の声が聞こえてくる。男の子の声? ネルは幌の天井を見上げた。幌には、ところどころ朽ちて、大小の穴が開いている。その隙間からネルの涙で潤んだ瞳に映ったのは、青空の彼方から落ちてくる、栗色の髪をした少年の姿だった。

「うわあぁっ！！ いっえーいっ！！」

悲鳴なのか、喜んでいいのか、よく分からない声で、少年の体は自由落下してくる。そして、ややもしないうちに、少年は幌馬車の幌に直撃した。激しい振動、幌の裂ける音とともに、少年はネルの目の前に落ちてきた。派手に尻餅をついて。

「痛ってえ。やっぱ、空から降りてくるんじゃないっ！！」

涙目になりながら、少年は自らのお尻をさする。見たところ、ネルと大して歳の変わらない少年は、右手に抜き身の剣を携え、深緑色のインナーウェアと対照的な、白銀の胸当てを纏っている。

ネルは、少年の真っ赤な瞳を吸い込まれるように見つめた。少年は、その視線に気づいたらしい。ニツとまるでいたずら小僧がいたずらに失敗したときのように、苦笑する。

「あ、あの。大丈夫ですか？」

ネルは、少年に尋ねた。この人は一体なんなのか、何で空から降ってきたのか、何で抜き身剣を持っているのか……ネルの脳裏をいろいろな疑問符が飛び交うが、少年はそれに答えなかった。いや、正確には答えられなかった。

馬車が急ブレーキをかけて、街道の真ん中で止まったのだ。そして、幌が刃物で引き裂かれて、曲刀を構えた御者の男が、荷台に入ってくる。

「な、何なんだてめえっ！？」

御者は、ひどく汚らしい声で、乱暴に少年に問いかけた。

「正義の味方。って言ったら、納得するか、チンピラ野郎」

皮肉のようにも聞こえる言葉を吐き出して、少年は立ち上がり、剣を両手で構える。美しい輝きを放つ、両刃の剣。その剣身には「魔法文字」と呼ばれる、今は誰も読むことが出来ない言葉が刻まれてた。

しかし、御者はその美しい剣ではなく、少年の鎧のほうに目を奪われていた。

「その白銀の鎧……、まさか、お前『ギルド・リッター』の？」

御者の顔が青くなる。すると、少年はなぜかカラカラと愉快そうに笑った。

「そうだよ……って言いたいところだけど、この鎧は、ノミの市で売られてたもの。俺は、『ギルド・リッター』の人間じゃない。良かったね、もしもリッターの遊撃警備隊なら、今頃あんたの首、すっ飛んでるところだよ」

「フンっ！！ ビビって損したぜ。ギルドの人間でもなくせに、何のつもりだ？ 答えによっちゃ、幌の修理代だけじゃ、済まされねえぜ」

と言って、御者は荷台の天井を見遣った。そこには、少年が空から降りてきたときに出来た、大穴が開いている。

「心配すんな、幌の修理代なら、きちんと払ってやるよ。俺の要求はただひとつ。この子を解放しろ！」

少年はちらりとネルの方に視線を送った。ネルは、視線を交わしながら、少年が自分を助けに来てくれたのだと知って、少しばかり驚いた。なぜなら、ネルは少年が何処の誰だか知らないのだ。

「人身売買は、国際法でも、ギルド協定でも禁止されていることくらい、あんたでも知ってるだろう？ ここから、三クリーグ（※1）先に、ギルド・リッターの小隊がいる。もしも、俺がヤツらに通報したら、あんたはあつと言う間に捕らえられて、この子をセンチ・レーバンへは、連れて行けない。でも、この子を解放してくれるなら、あんたを警備隊に突き出したりしないって、約束しよう」

「正義の味方って、そういうことかよ。でも、残念だが、俺は『人買い』じゃねえ。センチ・レーバン親衛隊直々の依頼で、この娘を攫ったまで。つまり、俺のバックには、センチ・レーバンの親衛隊がいるってわけよ」

「センチ・レーバン親衛隊……」

「そうだ。『アローズの関所』へたどり着けば、親衛隊の護衛部隊と合流する。そうなれば、いくらギルド・リッターでも手出しは出来ねえだろ？ それに、俺がお前みたいながきに負けるはずがない」

御者は余裕たっぷり笑い、狭い荷台の上でぶんぶんと曲刀を振り回した。一方の少年は、硬く厳しい表情になる。

「交渉決裂ってことだな。じゃあ、死んでも文句はいわないよな、おっさん」

言い終わるや否や、魔法文字の刻まれた美しい剣と、少年の赤い瞳が、わずかに光った。

殺し合いが始まる！ ネルは、少年の言葉に怯えて、思わず瞳を閉じた。次の瞬間、肉を打つような鈍い音と、誰かが床に倒れこむ音が、ネルの鼓膜をたたいた。それと同時に、静寂が荷台を包み込む。聞こえてくるのは、自分の心臓の音と、誰かの息遣い。

「ねえ、君。大丈夫？」

ネルの肩を誰かが揺らす。ネルは恐る恐る瞳を開いた。目の前にはし、赤い瞳の少年。そして、大の字で昏倒した御者の姿があった。「死ん、でるの？」

怯えた瞳で、ネルは少年に尋ねた。すると、少年は先ほどの厳しい顔とは打って変わって、穏やかににっこりと微笑んで、頭を左右に振る。

「大丈夫。気を失っただけ。人殺しは趣味じゃないんだ」

どうやったのかは分からない。でも、一瞬のうちに、少年は御者を伸したらしい。安堵がネルを包み込む。しかし、この少年は一体何者なのか。なぜ自分を助けてくれるのか。何が目的なのか。悪い人には見えないが、いい人だと信じるだけの情報が、ネルにはなく、再び不安が胸を埋め尽くす。

しかし、少年はそんなネルの猜疑心など気にも留めず、鎖でつながれたネルの両手を取った。

「やっぱり炎の魔法、フランメの暗号で鍵がかけてある」

少年が親指で、錠のふちをなぞると、光の文字が浮かび上がった。ネルには読めない、魔法文字だ。少年は「これなら何とかなるよ」と笑って、ズボンのポケットから小さな紙切れを取り出した。ちょうど、賭博に使われるトランプほどの大きさだろうか。それを、ネ

ルの手錠にかざす。

「これは、水の魔法のカードだよ。俺みたいな魔力がない人間でも魔法が使える、夢のアイテム。青の精霊、その封印を解き放ち、水の盾となれ。ヴァッサー・バックラー！」

少年が小声で呪文を唱えると、カードに描かれた幾何学模様の魔法円が輝き、手錠を閉じていた魔法とぶつかり合って、まばゆく発光した。そして、その光が収まると同時に、ネルの手から、ぼろりと手錠が落ちる。

「あの、あなたは一体……？」

ネルは立ち上がり、空から落ちてきた少年に、その名を尋ねた。

「俺は、アルサス。君は？」

「わたしは、ネル」

「その服のカチュアの様……。君は、ガモーフ神国の人？」

「はい。辺境のラクシャの村に住んでいました」

「そっか……じゃあ、俺がラクシャまで送るよ。とにかく、このチンピラが目覚めます前に、ここを立ち去ろう」

アルサスは、またにっこりと微笑んで、ネルの手を引いた。聞きたいことはたくさんあるのに、アルサスは何故か急いでいるようだった。その答えは、すぐにネルにも分かった。ちょうど、辻馬車を装った荷馬車の荷台から降りようとしたそのとき、平原の彼方に舞い上がる土煙が、二人の目に映る。方角からすると、ダイムガルド。ここから、一クリーグほどの距離だろうか。

「やっぱりな。トンキチのやつ。ギルド・リッターの奴らに見られてたんだ。だから高度を上げろっていったのに」

アルサスが、土煙を睨みつけて言う。

「トンキチ？」

聞きなれない言葉に、ネルは小首をかしげた。

「質問は後。今、ギルド・リッターの遊撃警備隊に捕まったら、厄介だ。トンキチと、東の『アトリアの森』で合流する手はずになってるから、そこまで走ろう」

アルサスは、ネルのを強引に引っ張って走り出す。ネルは、わけも分からぬまま、謎の少年に救われ、少年に手を引かれて、背後に迫り来る土煙から、逃げる他なかった。

※1 クリীগ……この世界での長さの単位。一クリীগは、一キロメートルとほぼ同じ。

1. 空から落ちてきた少年（後書き）

ご意見、感想などございましたら、お寄せください。

2. ギルド・リッター

ギルド・リッターは、ギルド協会に所属する、戦士ギルドである。各国の腕に覚えある者たちが集まり、戦争や自治に武力介入する。言い換えるなら、傭兵集団と言ってもいいだろう。そんな彼らの表向きの仕事は、空白地帯の警備である。

空白地帯とは、センテ・レーバン王国、ガモーフ神国、ダイムガルド帝国、それぞれからの街道が合流する地点のことである。この周囲半径五十クリーグは、どの国家にも属さない空白領地であり、当然統治するものがない。そのため犯罪の温床になりやすい場所でもあり、誰かが未然に犯罪を防ぐ必要がある。そこで、どの国家にも所属しないギルド協会が自主的に治安維持を買ってでている。その治安維持の一翼を、ギルド・リッターが担っていると言うわけだ。

「おい、起きろっ!!」

突然の声に、馬車の御者は意識を取り戻した。まだ頭の中が朦朧としている。空から少年が降ってきて、積荷をよこせと言い、少年は目にも留まらぬ速さで、御者との間合いを詰めて、膝で御者の無防備な腹を抉り、剣の柄（柄）で後頭部へ一撃。内臓が飛び出しそうなくらいの衝撃と脳を揺さぶるような痛みのもと、意識が飛んだ。あの体術はどこかで見たことがある。しかし、思い出せない……。

馬車の荷台を見回してみると、少年の姿も積荷の少女もない。あの娘は、センテ・レーバン親衛隊から直々の依頼があって、センテ・レーバン王都へ運んでいた大事な積荷だ。それを、あんな十六、七の小僧に奪われたと思うと、ムカムカしてくる。今からでも、曲刀を振り回して追いかけて、あの小僧の首を刎ねてやらねば気がすまないほど、はらわたが煮えくり返る。

「こいつ、ゲモック・ラボンです。顔に見覚えがあります」

誰かの声がするのに気づいた、ゲモックはつきりしない意識で、

自分の周りを見回してみる。三人の人影がこちらを見下ろしているようだったが、まだ視界がはっきりしない。つよく頭を打たれたために、脳がグラグラしているのだ。

「ゲモックって、あの裏ギルド『運び屋』の？」

と、別の男の声。それに続いて、最初の男の声がする。

「ああ、ギルド協会に属さず、頼まれれば、ご禁制の品でも兵器でも運ぶ、違法集団だ」

「ゲモック・ラボン！！ 辻馬車を騙って何をするつもりだったの？ 言いなさい」

最後に聞こえたのは、女の声。しかも、なかなか色気のある声だ。どんな顔をしているのか、人目拌みたい。そう思ったゲモックの視界に飛び込んだきたのは、白銀の鎧だった。

「げえっ！ お前らギルド・リッター！」

思わず、ゲモックは叫んだ。すると、色気のある声をした女が、ゲモックの首筋に細身の剣があてがう。ゲモックが想像したとおり的美女だ。歳の頃は、二十代後半。やや褐色の肌は、南の帝国ダイムガルドの人であろうか。ギルド・リッターの鎧に包まれてはいるが、ゲモック好みの凹凸のはっきりしたスタイルをしている。しかし、女の目は、ゲモックのことを、汚いものでも見るかのように冷たい。

「ご名答。わたしたちは、ギルド・リッター遊撃警備隊一番隊。わたしは、隊長のフランチェスカ・ハイト。何があつたのか正直に話せば、死刑にならないよう、本部に嘆願してあげてもいいわ。その代わり、一生ブタバコ暮らしでしょうけどね」

「フン！ あいにくだが、何も話すつもりはない。おまえらこそ、俺を捕らえたりしたら、センチ・レーバン親衛隊が黙っていないぞ」脅しのつもりで、ゲモックが言うと、フランチェスカは短く溜息をついてあきれたような視線をゲモックに投げかけた。

「こいつ、アホね。依頼者の名を軽々しく口にするなんて。いいこと、ゲモック？ ギルドは何者にも、強制されない。しかも、ここ

は、空白地。センチ・レーバンの名を出したところで、どうにもならないのよ。ベイク、ランティ。こいつを拘束して。ダイムガルドの支部へ連行するわ」

フランチェスカが、細い顎を振って、部下の男たちに何事か命じる。すると、部下の一人ベイクと呼ばれた筋骨隆々の男が、ゲモックの腕に手錠をかけ、ランティと呼ばれた細身の男が、呪文を唱えて魔法の鍵をかける。それは、ゲモックが少女に施した魔法の手錠と同じものだ。この手の魔法の手錠は、呪文が暗号化されており、それが分からない限り解くことが出来ない仕組みになっている。

見れば、フランチェスカの足元、少女が座っていたあたりに、手錠だけが転がっている。どうやって、あの空から降ってきた少年が少女の手錠にかけられた鍵を解いたのか、ゲモックには分からなかった。

その外された手錠には、フランチェスカも気づいていた。

「どうやら、こいつ、人買いの真似ごとをするつもりだったみたいね。まあ、詳細は、支部でたっぷり聞かせてもらおうことにしましょう」

「隊長。あのエイゲルは、どうします？」

ゲモックを強引に立たせたベイクがの問いかけに、フランチェスカはしばらく考えると、ランティの方を向いて、

「こいつを襲わなかったところを見ると、お腹いっぱいだったんでしよう。でも、用心に越したことはない。ランティ、後でエーアデの魔法を使って、別働隊に連絡を取ってもらえるかしら？ エイゲルの警戒は別部隊に任せる」

と指示を与え、もう一度、足元に転がった手錠に目を落とした。

「センチ・レーバンの親衛隊が、裏ギルドとつるんで、人買い……まさか？」

フランチェスカの呟きは、ベイク、ランティにも、ふてくされた顔で連行されていくゲモックにも、聞こえてはいなかった。

悠然と広がる草原に、ぽっかりと森が見えてくる。アトリアの森と呼ばれるそれは、万年雪の被るアトリア連峰の麓にまで広がる広大な森林地帯だ。一度森に入れば、アトリア連峰にたどり着くまで、コンパスが効かなくなるほどの樹海であり、追っ手から身を隠すにはうってつけだった。

また、森を抜けた先のアトリア連峰は、大陸の中央を南北に分けるように横たわり、北の国センチ・レーバン王国とガモーフ神国の国境線を築いている山脈地帯だ。その中でも、最高峰シェラ山は「天下の険」と呼ばれるほどで、センチ・レーバンにとっては、アトリアの森と併せて、国土を守る天然の要害でもある。

「ここまで来れば、大丈夫だろう」

と、アルサスは森に分け入ったところで、足を止めた。ちょうどそのころ、あの御者の男ゲモック・ラボンが、ギルド・リッターに拘束されたとは、知りもしない二人は、そろって、背後に目をやる。もちろん、土煙も、追っ手の気配もない。

そもそも、コンパスの効かないこの森に、好き好んで入ってくるような人間がいないことは、アルサスにも分かっていた。つまり、この森は、本当の意味で、センチ・レーバンやギルド・リッターの警備が及ばない空白地といえる。だから、ここをトンキチとの合流ポイントに指定したのだ。

「あの、手を……」

銀色の髪をした少女が、恥ずかしそうに俯いて、アルサスに声をかけた。そういえば、馬車からずっと手をつないだままだった。すっかり、アルサスの手も、少女の手も汗ばんでしまっている。

「あ、ああ、ごめんっ!!」 その、歳の離れた妹がいるから、つい手をつなぐのが癖になって……」

アルサスも、何故か赤くなりながら、少女の手を離した。妙な沈黙が、二人の間に流れ、森の梢をさわさわと揺らす風の音と、鳥の鳴き声だけが聞こえてくる。二人とも十六の年頃の少年少女だ。異性の手を握ることに、慣れてはいない。

「えっと、ネルだったよね。君の名前」

アルサスは、沈黙を打ち払うように、言った。

「あ、はい。ネル・リュミレです」

「改めて、自己紹介するよ、俺はアルサス・テイル。一応、こんななりしてるけど、ギルド・リッターじゃない。いつてみれば、レイヴンかな？」

「レイヴン？」

聞きなれない単語に、ネルは思わず小首をかしげた。ちょうどその時、森のうっそうとした枝葉の間から、鳥の鳴き声が聞こえてくる。それを耳にしたアルサスは「トンキチだ。合流地点へ急ごう」と言って、その問いかけには答えてくれなかった。

森を歩くには、ネルの帽子もワンピースの服も邪魔で仕方がない。枝や蔓に引っかかってしまうからだ。もともと、ネルの服装は、ガモーフ神国でも高地にあるラクシャの村の服装である。ラクシャは酪農で生計を立てる村で、特に「リヤマ」と呼ばれる、赤羊の放牧が盛んだ。ネルが着ている、カチュアのワンピースと箱型の帽子も、リヤマの毛皮で出来ており、乾燥寒冷気候の高地での生活のために作られている。そのため、森を歩くようには作られていない。

だけど、前を歩くアルサスが、ネルのことを気遣って、剣で枝や蔦を切り、道を拓いてくれる。ネルは、アルサスの背中を追いかけるながら、彼が何者で、なぜ助けてくれたのか、それを尋ねるのは後にしよう、今はこの命の恩人を信じよう、と思った。

さらに小一時間ほど、森の深部へ分け入ると、どこから水音が聞こえてくる。

「もうすぐだよ」

アルサスの言葉どおり、茂みを掻き分けた二人の前に、森の中を流れる小川が見えてきた。そのあたりは、木々がなく、広場のようになっており、静かで、森林の匂いと、わずかな木漏れ日が当たる。休息をとるにも適した場所といえるだろう。

なぜコンパスのきかないこの森で、アルサスは迷うことなくこの

場所に來れたのか。それには、ちよつとした仕掛けがあつた。

「トンキチっ、いるんだろう？ 降りて来いよっ！！」

ネルの傍でアルサスが空に向かつて声を張り上げる。その声に反応するかのよう、突然上空より強い風が吹き降ろしてきた。アルサスは髪を、ネルはスカートと帽子を押さえる。すると、森の木々の隙間に見える空を、巨大な影が舞う。あれは一体なんだろう、と思う間もなく、より強い風が広場を覆うドーム状の木々をバサッと掻き分け、その開いた口から、二人の目の前に巨大な怪鳥が舞い降りてきた。

「きゃっ！！」

ネルは、思わず悲鳴を上げてしまった。

翼を広げた体軀はゆうにヒトの三倍はあろうか。赤茶色の羽毛に覆われ発達した胸筋、長い猛禽のクチバシ、鋭くとがった爪。外見は荒野鷲によく似ているが、鷲というには、あまりにも巨大で恐ろしい。しかも、驚いたことに、鷲は怯えて震える少女の姿を見とめると、口を利いたのだ。

「おんやあ、めんこい娘さんじゃ。アルサスよ、おぬしが助けたいと言つたのは、この娘さんじゃったか」

ぬつと黒い瞳が近づいてきて、ネルの顔を覗き込む。今にも、そのクチバシでつつかれるのではないかと、ネルは泣きそうな顔になった。

「トンキチ、そんなに顔近づけるな。ネルが怖がつてる。悪い魔物と勘違いされてるぞ」

ネルの手をそつと握って、ネルが安心するように微笑んで見せると、アルサスは巨大な鷲に苦言を呈した。すると、巨大な鷲……トンキチは、翼をまるで手のようにして頭をぼりぼりとかいて、少しだけバツの悪そうに笑つた。

「いやあ、すまんのお。あんたの、銀色の髪が珍しゅうて、つい顔を近づけてしもうた。堪忍じゃ。わしは、トニア。トンキチと呼んでくれて構わん」

「あ、あの。あなたは……？」

「見ての通り、魔物じゃ。エイゲル族といって、アトリアの峰に住む、魔物じゃ。じゃがの、安心せい、わしはあんたを食うたりはせん。悪い魔物じゃないからの」

と、言って、まだ怯えた瞳のネルに、ガハハとトンキチは笑った。その笑い方は、故郷のラクシャに住んでいた、羊飼いの老人そっくりだった。

ネルはトンキチのような巨大な鳥を見るのは生まれて初めてだった。トイフェルと呼ばれる魔界の住人、すなわち魔物がこの世界にはたくさん棲んでいることは知っているものの、ラクシャの付近には、ごくまれに、ヴォールフと言う三つ目の狼が、ネルたちの飼っている赤羊を襲いに現れる程度だった。それでも、大事な家畜を襲う魔物は悪の対象であり、同時に、人を襲う魔物もいると聞いたことがある。

「ふむ。言葉では伝わらぬこともあるか。人間は、信頼を得るために、握手のだったな。ならば、仲直りの握手じゃ、娘さん」

トンキチが、翼の先端をネルの前に差し出す。ネルは、恐る恐るその羽を手を取った。

2. ギルド・リッター（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せください。

3. アトリアの森

夜闇が、アトリアの森を覆い隠す。わずかに見える木々の隙間からは、春の星がきらめいていた。今から、ガモーフの国境を越えることは出来ない、今日はここで野宿して、明日ガモーフの国境を越えよう、と提案したのは、アルサスだった。

野営の支度は、すべてアルサスが一人で準備した。薪を集め、石を積み上げて焚き火を準備する。その間、ネルはトンキチが持ってきた、アルサスの鞆から、食料品を取り出して、夕飯の支度を始めた。どうして、トンキチがアルサスの鞆を持っていたのかは、よく分からなかったが、トンキチとアルサスは古い知り合いのようだ、彼らの会話からネルは察していた。

ようやく焚き火と夕飯の支度を終えて、アルサスとネル、トンキチは焚き火を囲んだ。

「あの、センチ・レーバンの味付けとか、よく分からなくて、美味しくないかもしれませんけど」

ネルは、食事を前に、少し恥ずかしそうに言った。ネルが用意してくれた夕飯は、アルサスが鞆にしまっていた、調味料と何の肉か分からない干し肉を川の水でしっかり煮込んだスープと、携帯用の小さな黒パンだ。スープは、少し白く濁った、ガモーフ特有の「キヤチャ」と呼ばれる羊肉のスープに似ている。

もっとも、アルサスが持っていた調味料はすべて、センチ・レーバンの調味料だ。ガモーフとセンチ・レーバンでは言語こそ同じだが、北国と東国では、多少なりとも文化に差異がある。そのため、センチ・レーバンの調味料で作った「キヤチャ」が、果たしてアルサスの口に合うか、ネルは不安だった。しかし、

「美味しいよ、すごく美味しい！ ネルは料理が上手なんだね」

という、アルサスの屈託のない笑顔は、お世辞を言っているようには見えなかった。それが証拠に、ネルの作ったスープはあつと言

う間に、空っぽになってしまった。

「トンキチさん、なんだかわたしたちだけご飯たべて、ごめんなさい」

二人の食事を毛づくろいしながら眺めていたトンキチは、夕飯を食べていない。ネルは食事の間も、トンキチに悪いような気がして、トンキチの分も用意しようとしたのだが、「人間の食べ物は食べられない」と断られてしまった。

「わしらは、動物と一緒に。生の肉しか食べられんのじゃよ。気持ちだけ、ありがたく頂いておくよ、娘さん」

生の肉、という言葉だけが、異様に怖く感じたが、たしかに、スプーンもフォークも、トンキチには小さすぎる。ネルは、申し訳ない気持ちでいっぱいになりながらも、スープをすすった。

「それよりも、娘さん。あんた、わしらに聞きたいことがあるんじゃないかの？　そういう顔をしとる。わしらも、あんたに聞きたいことがある」

食事が終わるタイミングを見計らって、トンキチは、真っ黒な瞳に焚き火の炎を映しこみながら、ネルに尋ねた。ネルは、ちらりとアルサスの顔を見る。満腹になって、幸せそうな顔をしていたアルサスは、その視線を受け取って、「そうだね」とトンキチに視線を回した。二人と一羽はそろって頷く。

「あの、まだお礼を言ってませんでしたね。アルサスさん、助けていただいて、ありがとうございました」

ネルは、金属の皿をひざの上において、丁寧に頭を下げた。もともと、ネルは物静かな女の子だった。おしとやか、と言い換えてもいいかもしれない。そんなネルに頭を下げられたアルサスは慌てて、「ううん、いいんだ。礼には及ばない。誘拐なんて許せないし、それに、これが仕事だからさ、気にしなくていいよ」

と、ネルに頭を上げるよう促した。

「仕事？　それがレイヴンなんですか？　レイヴンって何なんですか？」

「レイヴンってのは、放浪者のこと。国にもギルドにも参加せずに、自由気ままに旅をして、たまに路銀を手に入れるために、人助けをするんだ。それで、俺がちょうどガモーフの関所で立ち往生したときに、たまたま入った酒場で、君を助けて欲しいと頼まれたんだ」
「え？ 誰にですか？」

「さあ、名前は聞いてない。男だったよ。前金でいいから君を助けて欲しいって。五百ドラクマ（※2）と引き換えに、俺が依頼を引き受けたんだ」

そう言っ、アルサスは食料品や着替えなど、旅の道具が詰まった麻の肩掛け鞆から、小さな皮袋を取り出した。中には、ジャラジャラと音がするほど、金貨が詰まっている。五百ドラクマは、路銀としては破格の金だ。

「男の人……」

ネルは、アルサスの話に、小首をかしげた。アルサスに、ネルの救出を頼んだのは、一体誰なのだろう。村の人だろうか？ 新たな疑問符が、ネルの頭上に浮かぶ。

「それで、君を乗せた荷馬車を追いかけたんだけど、なかなか追いつけなかったんだ」

「そこで、こやつは昼寝をしていたわしの棲家にやってきて、空から運んで欲しいと言いつた。しかもタダで。辻馬車とて、金を取る時代にじゃぞ」

「いいじゃんか、トンキチ。昔馴染みなんだからさ、よしみってやつだよ」

「しかし、辻馬車の直上に落としてくれと言われたときには、肝を冷やしたぞ。あんな危ない真似、二度とせんでくれよ、年寄りのわしには、刺激が強すぎる」

「いや、その方がかっこいいかなって。正義の味方、参上！ みたいな？ ほら、幌がクッションになったし、あの人さらい野郎も、ヒビってたし」

「老体の心臓もビビったぞ」

「でかいの図体だけかよ。まるで、栗鼠^{リス}の心臓だな」

「繊細と言わんか。そもそも、お前と出会ってから長いが、ロクなことはなかった。依頼で盗賊団のアジトに忍び込んだときもそうじやった。この間の……」

「まあまあまあ、いいじゃん。細かいことは気にしない。俺もネルも無事だったんだから、結果オーライってことでひとつ」

「なにが、ひとつじゃ……」

ニツと、アルサスは白い歯を見せて笑い、トンキチはあきれ眼で溜息をつく。すると、突然、ネルがクスクスと声を殺して笑い始めた。

あれほど怖い思いをして、故郷から攫われ見知らぬ国へ連れて行かれそうになり、馬車の隅っこで、涙に暮れて女神さまに祈っていたのが嘘のように、笑いがこみ上げてくる。二人の気心の知れた会話が、冷たくなりかけたネルの心を、溶かしていくようだった。

もともと、ネルは物静かなところがあるが、根暗な少女ではない。屈託なく笑えるし、人並みに感情も持ち合わせている。

「お二人は、仲がいいんですね」

「腐れ縁じゃよ、娘さん。昔、こやつがガルナツクの西にある別邸で……」

「トンキチ！ 俺たちの話はどうでもいいよ！」

昔話を語ろうとする、トンキチの口をふさぐように、アルサスが語気を強めた。まるで、昔のことなんか話したくないといわんばかりだ。

「そんなことよりも、ネル。どうして、あの人攫いに連れ去られたの？」

「それは……わたしにも、よく分からないんです」

核心に触れられ、ネルの顔が再び曇る。思い出したくないことなのか、思い出すのがつらいのか、ネルは瞳を伏せた。

それは、突然のことだった。今から三ヶ月ほど前、ネルが十六歳になったばかりの日のこと。平和な村ラクシャに、胸に牙の模様が

刻まれた黒い鎧を着た数人の男たちが現れた。男たちは「銀色の髪
の少女を差し出せ。さもなくば、村を焼き払う」と言った。

長老も、ネルの両親も、もちろんそれには応じず、なぜネルを差し出せと言われるのか分からないまま、家の地下室にネルを隠した。村人たちが要求に応じないと悟った黒い鎧の男たちは、村に火を放った。逃げ惑う村人たちを次から次へと切り殺した。平穏だった村が、地獄に変わった瞬間だった。凄惨で無慈悲な叫び声が、地下室の仲間で響き渡り、それを思い出すだけでネルの心臓は、まるで悪魔に握りつぶされたように苦しくなり、涙腺から大粒の涙があふれてくる。

すると、アルサスがそっと近づいてきて、こわばったネルの両手を、暖かな手のひらで握ってくれた。

「ごめん、ネル。たくさん怖い思いしたのに、また、つらいこと思
い出させたね」

アルサスの優しい微笑みに、ネルは頭を軽く振って答えた。

「しかし、その黒い鎧の男とは一体何者であろうか？」

トンキチが首をかしげる。

「前に聞いたことがある。裏ギルドに『黒衣の騎士団』と呼ばれる
傭兵団がいるって話。やつらは、依頼があれば、どんなに非道なこ
とでもやってのけるらしい」

「依頼か。ならば、誰かが、娘さんの村を襲い、娘さんを攫ってく
るように命じた、と言うことかの？」

「ああ。おそらく、センチ・レーバン親衛騎士団だ。センチ・レー
バン王国はガモーフ神国との国境を越えられない。ガモーフとセン
テ・レーバンは今、休戦協定を結んでいるからね。いたずらに、国
境を越えれば『十年前の悲劇』を繰り返すことになる。だから、『
黒衣の騎士団』にネルを攫うように依頼したんじゃないかな？」

アルサスは、あの人攫いの御者ゲモックが口にした言葉を思い出
していた。しかも、馬車の行き先はセンチ・レーバンの領内だった
ことを思えば、奴の口にした「俺のバックには、センチ・レーバン

の親衛隊がいるってわけよ」と言う言葉が、ブラフでなかったのだろう。

「しかし、一国の正規騎士団が、違法集団に依頼してまで、どうしてこのような可愛らしい娘さん一人を攫うのじゃ？」

「さあ、それは分からない。ネル、何か心当たりない？ 黒衣の騎士団は、どうして君をさらったりしたのかな？」

アルサスの赤い瞳が、ネルの瞳を覗き込む。しかし、自分が攫われたことに心当たりのないネルは、困ったような顔をして、「ごめんなさい……」と答えるほかなかった。

あの日、地下室に隠れていたネルは、黒衣の騎士団に見つかり、連れ去られた。燃え上がる炎のなか、村人の屍骸がいくつも転がっていたが、その中に父や母、妹のメルは見つけれなかったことだけが、せめてもの救いだった。その後、ネルは手錠をかけられ、馬車に乗せられた。それが、ゲモックの馬車である。ゲモックの馬車は、「辻馬車ギルド」の乗合馬車に偽装され、いくつかの町を経由しながら、ガモーフの関所を越え、空白地帯へと入った。

三ヶ月にも及ぶ長い旅路だった。その旅路の間中、ネルが思うことは、自分がなぜ攫われたかという理由よりも、故郷の家族が無事であるか、故郷に帰りたいと言う願いだけだった。

「その銀色の髪……」

不意にトンキチが口を開く。トンキチの黒い眼は、まなこ焚き火の火に照らされたネルの銀髪に注がれていた。

「ガモーフの人間に、銀色の髪をした者はいないはずじゃ。それに、娘さんのその肌の色。まるでセンチ・レーバン人のように白い。のう、娘さんや。あんたは、本当にガモーフの人間か？」

「トンキチ！ 突然なに言い出すんだよっ！」

アルサスが、トンキチを睨みつけて、声を荒げる。

「しかしの、アルサスや。今の話を聞いて、不思議に思わなかったのかの？ 黒衣の騎士団は、最初から娘さんを攫うつもりだったよ。うじゃ。娘さんを誘拐した事件が、ただの人買いじゃないとしたら、

何か理由があつてしかるべきじゃろう？ 特に、その美しい銀色の髪、気にはならんのか？」

「それは……そうだけど」

トンキチが、悪気があつてたずねたわけではないことくらい、アルサスにも分かつていた。ガモーフ人の多くは、きれいな黒髪をしている。いや、この世界の何処を探しても、銀色の髪をした人間などいない。ネルの髪は、老人の白髪とは違い、つややかで美しい銀色をしているのだ。そのことに、トンキチが疑問を持っても不思議ではなかった。

「あの、ごめんなさい……わからないの」

ネルが、声を上ずらせる。

「わたし、小さいころの記憶がないの。お父さんとお母さんは、わたしが小さいころに崖から落ちて、強く頭を打ったから、記憶がなくなつたんだって教えてくれました。でも、そうじゃない。わたしは、父と母の子どもじゃないんだって、分かつてました。だって、わたし普通じゃないから……。髪の色だって、両親や妹とも、村のみんなとも違う。わたしは、普通の子じゃないんです」

普通の子じゃない。その言葉は、随分と実感がこもっているように、聞こえた。もしかすると、髪の色が違うことで、ネルは誰かにいじめられた経験があるのかもしれない。それは、想像に難くないが、ネルの十六年を知るのは難しい。

それでも、アルサスはなぜか、ネルの悲しそうな顔を見ていられなかった。

「だから、わたしの所為で、村の人たちが……。わたしがいなかったら、よかったのに」

ネルの瞳から、とうとう涙が零れ、アルサスの手の甲に落ちる。

「ネル……もう、この話はやめにしよう。どんな理由で、君が攫われたのかなんて、どうでもいい。知らなくても、いいんだ」

アルサスの人差し指が、ネルの頬に触れ、零れ落ちる涙を掬った。
「アルサスさん」

「誰かを思っ泣けるんだ。髪の色なんて関係ない。君は、普通の女の子だよ。俺たちと同じ。さあ、今日はもう寝よう。ラクシャマでは、ガモーフの関所を越えて、ヨルン平原を渡らなければならぬ、長い歩き旅になる」

再びアルサスは優しく微笑むと、その手をネルから離れた。その暖かな手に、ネルは少しだけ名残惜しさを感じた。

それからすぐに、アルサスとトンキチは、あわただしく就寝の準備を始める。アルサスは、ネルのために一枚しかない毛布を、鞆から取り出してくれた。

ネルにとって、ごつごつした川原の石の上に寝るのも、そもそも野宿をすること自体、初めての経験だったが、嫌ではなかった。

ネルは毛布に包まり、静かに瞳を閉じた。こんなに安心して眠れるのは、いつ以来ぶりだろう……。この三ヶ月、馬車の中で手錠につながれ、恐怖に怯え、家族の安否を心配して、ぐっすり眠ることなどなかった。

本当は、アルサスのことを少し疑っていた。突然空から降ってきた、何者なのかも分からない少年に、内心不安があった。だけど、きっとアルサスもトンキチも悪い人じゃない。悪い人の手は、こんなにも安心させてくれるほど、暖かくはない。

ネルは、涙を拭ってくれたアルサスの手の暖かさ、優しさを出しながら、そっと静かに眠りについた。

※2 ドラクマ……この世界で広く使われている通貨単位。ただし、国によって相場は多少ちがう。

3. アトリアの森（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せください。

4. 襲撃

「地下室に隠れていなさい。心配することはない、だから絶対に声を立ててはダメだ。分かってるね、ネル」

父の言葉は、ひどく震えていた。それが恐怖によるものなのか、それとも、夜の寒さに凍えているからなのか。聞くまでもなく、前者のほうだったに違いない。それなのに、地下室の扉を閉めようとする父の顔は、娘を不安がらせまいと、優しく微笑んでいた。

家の地下室は、本来食料品を貯蔵しておくための、小さなスペースしかない。小柄なネルでも、そこに入れば隙間などほとんどなかった。

地下室の扉を閉めた父の足音がする。そして、その足音が止まったかと思うと、不安げな母の声が続いた。

「あなた……あの黒い鎧の人たちは？ ネルを差し出せなんてっ！」

「大丈夫。あの子をあいつらに渡したりしない。いつか、こんな日が来ることは、あの子の親になったときから、分かっていたことじゃないか」

「でも、何故。どうして、あの子が連れて行かれなければならないの？」

「理不尽なことは、承知の上だ。それでも、女神アストレアさまとの約束だ」

父が、信奉する女神さまの名前を口にする。しかし、まるで本当に女神さまと何らかの約束をしたような、父の口ぶりに、真っ暗な地下室の中にうずくまって聞き耳を立てるネルは、疑問に思った。

「アストレアさまとの約束……そんなもの、反故には出来ないの？」

メルだけじゃない、ネルもあたしたちの大事な娘なのよ」

「分かってる！ だから、ネルをやつらに渡さない。たとえば、十六年目の今日が約束の日だったとしても、ネルは絶対に渡さない。お前は、メルと一緒に、奥の部屋に隠れている」

ネルの父は、母に次女のメルとともに隠れておくよう指示を与えると、屋根裏に秘蔵しておいた剣を手に、家を出て行った。すべての足音が消え、話し声も聞こえなくなると、地下室のネルは静けさの中で胸騒ぎを感じていた。

「銀色の髪の少女を渡す決心はついたか!？」

誰かの声がある。村の人の声でも、父の声でもない、野獣を思わせるような野太い声だ。

「たとえ誰であろうと、村の者を渡しはせん！ 早々に村から立ち去られるが良い！」

今度は長老の凜とした声がする。それに呼応するかのよう、村人たちの「出て行け、出て行け」と言う声がうねるように、こだました。

しかし、そのうねりを野獣の声が一瞬でかき消してしまう。

「愚かなことよ。者ども、火を放て！ 村を蹂躪じゅうりゃんしつくせ！ 銀色の髪の娘を探し出すのだ!!！」

その後聞こえてくるのは、武器のぶつかり合う音、炎の唸り声、悲鳴、足音。光のない地下室の中からでは、外で何が行われているのか、確かめることは出来なかったが、ネルはわずかな扉の隙間から漏れてくる音と、煙の匂いに、その惨劇を想像することは難くなかった。

「お父さん！ お母さん、メルっ!!！」

わたしのために、みんなが傷つけられている……。あの黒い鎧の人たちは、自分を連れ去るために、ここへきたのだ。何のために、自分を連れ去ろうとするのかはわからない。でも、そんなことよりも、このままじゃ村の人たちがみんなひどい目に合わされる。だけど、わたしが素直に出て行けば、全部丸く収まるはず。

だって、わたしは、普通の子じゃないから。神さまが間違えて生んだ、村に不幸を呼ぶ「落とし子」だから……!!

ネルはいてもたってもいられなかった。狭い地下室の中で、立ち上がり、扉を探す。だけど、扉には外から何かでかんぬき門がかけてあるの

か、びくともしない。

「お母さん！ 開けてっ　メルっ、お父さん！　誰でもいいからここを開けてっ」

開かない扉を両手で叩いて、ネルは叫んだ。だが、その声は誰にも届かなかった。焦り、恐怖、不安、いろいろな感情がない交ぜになりながら、ネルの頬を涙が濡らす。

「お願い……、みんなを傷つけないで。アストレア様、どうか、みんなを助けてください」

そう何度呟いたか分からない。ドアを叩き続けた両手からは、血がにじみ、涙は止まることを知らず流れ続ける。やがて、あたりから人の悲鳴が消えた。それが、最悪を意味していることくらい、ネルにも分かった。なぜなら、ドアの隙間から流れ込む煙の匂いに、ひどく鼻の曲がりそうな、人の焼ける匂いがしたからだ。

「残るは、ここだけか。村人どもはどうした？」

突然、野獣の声が聞こえた。そして、鎧の擦れる金属音とともに、どこかと乱暴な足音が近づいてくる。

「逃げた者もいるようですが、ほぼ皆殺しです。隊の者たちも、久々に暴れられて、喜んでいるようです」

別の声。口調は丁寧だが、無慈悲で冷酷な響きをしている。

「人を殺しに来たわけではないのだが……ダグ、お前は寝室の方を調べろ。俺は、その地下室を調べる」

「はっ、分かりました」

二つの足音が別れ、一際重苦しい足音が、地下室のネルに近づいてくる。そして、二、三度、がたがたと扉が揺れたかと思うと、ゆっくりと開かれ、ネルの瞳に真っ赤な光が飛び込んだ。それは、開け放たれた家のドア越しに見える、村の惨状だった。

ごうごうと炎が夜の空に燃え上がり、もくもくと黒い煙を立ち上らせすべてを燃やし尽くすまで収まらない。

「いたぞ！　銀色の娘だっ！！」

こげた匂い、血の匂い、それらを纏った黒い鎧の男は、声と同じ

ように野獣のような顔をしていた。男は、村人の血に濡れた剣を納めると、その手でネルの腕を乱暴につかみ、彼女を地下室から引きずり出した。

「離してくださいっ!! この、人殺しっ」

ネルは男の手を振り解こうともがいたが、あまりにも力の差は歴然としていた。出来ることは、憎憎しげに睨むことくらい。しかし、男はそのようなネルの尖った視線をさらりと受け流すと、

「大人しくしろ。さもなくば、その美しい顔に傷がつくだけだ」

野獣のような髭面をぐにやりと歪めて下品に晒う。それが、ネルには魔物よりも恐ろしいもののように見えた……。

「ネルっ! ネル!! 起きてっ」

誰かが、肩を揺らす。ネルはその瞬間、燃え上がる炎も、村の人たちの悲鳴も、あの男の醜い顔も、すべて夢だったと気づいた。そう、村が襲われたのも、ネルが連れ去られたのも、すべて三ヶ月前の出来事。あの日以来、毎晩見続けている悪夢。いや、記憶と言った方が正しいか。思い出すのもつらいのに、眠りにつけば、脳裏にこびりついた記憶が、呼び覚まされる。

「アルサスさん? ごめんなさい、もう朝ですか?」

自分を起こしたのが、アルサスだと気づいたネルは、まだすこし寝ぼけた意識のまま、起き上がった。しかし、森はまだ夜闇に包まれており、梢の隙間からは、星の瞬きが見える。いったいどうしたのだろう、と視線をめぐらせたその拍子に、ネルの視界に鋭く光るアルサスの剣が飛び込んできた。

「きゃっ!!」

ネルは、一瞬で目が覚めた代わりに、全身の血の気が引いて、驚きと恐怖で悲鳴を上げた。すると、すかさずアルサスの手が、ネルの口元を強く抑える。

「しっ!! 静かに」

と、言ったアルサスは、抜き身の剣を手に、小川の川岸を睨みつ

けていた。さらさらと流れる小川の対岸は、茂みになっている。しかも、ネルが眠りについて、それほど時間はたっておらず、まだ夜闇に包まれて、真っ暗だった。

「何者かが、こっちに近づいてる気配がするんだ」

そう言いながらも、茂みから目を離さないアルサスは、そっとネルの口元から手を離した。

「ギルド・リッターですか？」

「いや、違う。これは、人間の足音ではないな……」

ネルはアルサスに問いかけたつもりだったが、答えたのはトンキチだった。ネルは知らないことだが、巨鳥エイゲル族の耳は、人間には聞こえない音も聞き分けられる。

「囲まれておる。かなりの数じゃ」

「トンキチ。空飛べる？」

そっと、声を殺してアルサスは、トンキチにたずねた。

「アルサスや。鳥目という言葉を知っておるか？ それに、二人も背負って飛べるほど、わしは若くないぞ」

答えるトンキチも、尋ねるアルサスも会話を交わしながら、じっと茂みの方に神経を尖らせているようだった。

ネルは、そっと毛布をのけて立ち上がると、アルサスの傍で、目を凝らした。ネルにも、茂みの奥の異様な雰囲気は伝わってくる。まるで、獣が獲物を狙っているときのような、張り詰めた空気だ。

「ネルは、俺の後ろに。トンキチ、いざとなったらネルだけでも連れて、空へ逃げるんだ」

「アルサスさんはどうするんですか？ アルサスさんを置いては逃げられません」

「大丈夫、俺一人なら、何処へでもとんずらできる。それが、気ままな暮らしのレイヴンに備わった、唯一の必殺技だからね」

冗談めかしたつもりなのだろうが、アルサスの目は笑っていないかった。ネルは、そんなアルサスの横顔を見つめながら、彼の背に隠れる。

この世に、これほどまでに緊張感を伴った静寂があるとは、戦争や戦いとは無縁だったネルが知る由もない。しかし、一步、また一步と、気配は確実に近づいてくる。こちらの様子を伺いながら。

「来るぞ！」

突然、トンキチが声を張り上げた。その瞬間、茂みが大きく、さがさとうごめき、そこから黒い影が飛び出してくる。黒い影は、目にも留まらぬ勢いで川底の浅い小川を渡りきり、アルサスに飛び掛ってくる。その一瞬、影の頭の部分に、赤い光が三つともる。

それが、目であるということに、ネルが気づいたのは、アルサスの手にする、魔法文字の刻まれた剣が、影の腹を貫いた瞬間だった。「キャインっ！！」

獣の悲鳴。と同時に、バシヤツと、はじけるように血しぶきが上がる。黒い影はそれっきり動かなくなった。

「ヴォールフか」

焚き火の炎に照らされた、黒い影の屍骸に、アルサスが呟いた。ヴォールフ。大陸のほぼ全域に生息する、灰色狼に似た魔物。ただ、狼と違うのは、頭に三つの瞳があることだ。地方によっては、三つ目狼と呼ばれるヴォールフは、非常に獰猛な性格をしていて、しばしば旅人や家畜を襲い、その生肉を食らう。

「しかし、ヴォールフは、単体で行動するはずじゃ。このように、群れを成すことなどありえん」

気配はひとつではない。まだたくさんさんの気配が、アルサスたちを取り囲んでいる。まさに、トンキチの言うとおり、群れを成しているかのようだ。

「そんなこと、どうだっていい。次の奴がくるぞっ」

アルサスは、剣についたヴォールフの血のりを払うと、再び剣を構えた。

グルルルル。茂みの奥、いや森のあちこちから、まるで狼の声にそっくりな、ヴォールフの唸り声が聞こえてくる。しかも、相手は魔界の住人である、魔物。下手をすれば、狼などよりも危険な相手

だ。

「怖い？」

そっと、アルサスがネルに問いかけた。ネルは、頭を左右に振って「大丈夫です」と答えながらも、わずかに恐怖で震える手で、アルサスの服の裾をつかんだ。

4. 襲撃（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せください。

5. ハイ・エンシェント

「ガウっ!!」

「グルルルっ!」

闇に浮かぶ赤い三つの瞳が、次々と茂みから現れる。さらに、アルサスたちの背後からも、ゆっくりと獲物の様子を伺いながら、それらは姿を現した。

魔物ヴォールフの、獐猛な牙はよだれを滴^{したた}らせながら、じりじりとアルサスたちを取り囲んだ。一気に飛び掛られたら、勝ち目がない。どうすればいい? アルサスは後ろで震えるネルをかばうように、トンキチの傍に移動する。

「まずいな、トンキチ……数が多すぎる」

数えられるだけでも、十や二十はいる。群れと言うより、軍勢と呼ぶほうが正しいほどだ。一匹や二匹なら、ネルをかばいながら戦うことも出来るが、こんなにも数がいでは、多勢に無勢は火を見るより明らかだった。

斬れるだけ、斬るしかないのか……。アルサスは、額から流れ落ちる、冷たい汗を拭うことも出来ず、敵を睨みつけ、牽制する。

と、その時である、茂みからゆったりとした足取りで、一際巨躯のヴォールフが姿を現した。群れのリーダーなのだろうか、他のヴォールフたちは、彼のために道を開けた。

巨躯のヴォールフは、ゆっくりとアルサスたちに歩み寄る。焚き火の火に照らされて浮かび上がった姿は、他のヴォールフに良く似ており、三つの瞳はどれも獐猛な光を帯びている。しかし、体の大きさは他の者たちに比べると、倍ほどもあり、威圧感のあふれる雰囲気身をまとい、悠然と白いたてがみを夜風になびかせていた。

「バセット……」

その名を呼んだのは、トンキチだった。

「久しいな、トニア。貴様が人間とつるんでいるとは、思わなかつ

た」

バセットと呼ばれた、巨軀のヴォールフはまるで、旧知の友人に語りかけるように、穏やかな口調でトンキチに言う。しかし、その声は、魔物然とした、腹に響くような低く重苦しい声だった。

「トンキチ、知り合い？」

アルサスがそつとたずねる。

「うむ。古い友人だ。百年ぶりのか？　北方の雪山せつざんに身を隠したと聞いておったが……」

「百年！？　トンキチ、今何歳なんだよっ！？」

思いがけない単語に、アルサスは思わず素っ頓狂な声を上げてしまった。すると、バセットが、アルサスの顔を見て、愉快そうに笑う。

「吾ら、ハイ・エンシエントは、族をまとめる長にして、魔物の中でも崇高な存在だ。人語を解するだけでなく、この世のいかなる生命よりも、長命だ。そして、貴様がトンキチと軽々しく呼ぶその者も、エイゲル族を束ねる長。そのようなことも、知らなかったのか？」

「そ、そんなこと聞いてねえよ」

「ふむ、人間と付き合うのに、崇高だの、長だの關係のないことじや。アルサスは、わしを友人と呼んでくれる。ならば、わしもアルサスの友人。友人に、むだな氣遣いをさせたくはないからの」

トンキチは、そう言うのと、黒い瞳を細めた。バセットは、打って変わって冷たくトンキチに目をやった。

「愚かしいことよ。ハイ・エンシエントの誇りは何処へやったのだ、トニア？」

「とうに、何処かへ捨ててしまってたわ。そんなことよりも、これは何の真似じゃ？　まさか、わしらを食い散らかすつもりか？」

ぐるり、トンキチは周囲を見渡す。群れを成したヴォールフが、じつと長であるバセットの命令を待っている。

「わざわざ、そのためにアトリアの峻険を越えてやってきたと、本

気で思っているのか？」

「ならば、何用じゃ、バセット。ことと次第によれば、わしはそなたたちの敵になるぞ！」

「用向きはひとつだけ。人間の小僧。貴様の背後に隠れておる、銀色の髪の娘をこちらに差し出せ。そうすれば、同胞の命を奪ったことは、多めに見よう」

そう言って、バセットの視線が、ちらりとヴォールフの屍骸に移った。それは、先ほどアルサスが剣で突き殺したヴォールフだ。

「ネルを？ 何故だっ？」

アルサスはネルを隠すように、手を広げて、バセットに問う。アルサスの背中にしがみつくとネルは、怯えきって震えていた。そんな彼女の脳裏に、あの村を襲った黒衣の騎士団の姿が浮かんでいることなど、アルサスは知る由もない。

「銀の乙女。その白き力を『奏世の力』と呼ぶ。それは、この人の手に余る絶大なる力。故に、その娘に私怨はないが、『奏世の力』に目覚める前に、ここで死んでもらう！」

「わたしが、しろがねのおとめ……？」

バセットの言葉に、ネルが呟いた。

「大丈夫だよ、ネル。ネルを渡したりなんかしない……」

アルサスは振り向かないで、怯えるネルに囁いた。

「おい、三つ目の犬野郎っ。しろがねの乙女だか、そうせいの力だか知らねえけど、ネルを殺させるわけにはいかないっ」

右手にした剣にぎゅっと力がこもる。

「ならば、我れらに引き裂かれるか？ ハイ・エンシェントである吾は、無益な殺生を好まない。それでも、抵抗するというのなら、容赦はしないぞ」

脅し文句とともに、バセットの口元に鋭い牙がのぞく。その牙で噛み付かれれば、ノミの市で買ったギルド・リッターの鎧などひとたまりもないだろう。しかし、みすみす人の命を引き渡して、この場から逃げ出したいなどと、アルサスは思わない。

「かかってこいよ。ハイ・エンシェントだかなんだか知らないけど、女の子を見捨てて逃げたら、男として恥ずかしいからね」

「いい度胸だっ!!」

アルサスの言葉を挑発と受け取ったバセットは、たてがみを逆立てた。臨戦態勢。一瞬の後に、ヴォールフの群れが飛び掛ってくる。たとえ、バセットよりも巨軀のトンキチが味方してくれたとしても、無事では済まされない。その、鋭利なつめに肉を切り裂かれ、獐猛な牙に喉笛を食いちぎられ、後に残るのは、無残な骸^{むくろ}だけ。

「待ってくださいっ!」

突然、アルサスの後ろで震えていたネルが声を上げた。かすかに上擦ってはいたが、それでも凜とした良く通る声は、飛びかかろうとするヴォールフたちの足を止める。

「待ってください、バセットさま。わたしの命が欲しいのなら差し上げます。だから、トンキチさんと、アルサスさんの命は、どうか見逃してください、お願いします」

ネルは、そう言う、アルサスたちの前に歩み出た。ぎゅっと握られたこぶしは、恐怖の表れなのかもしれない。怖いのを必死にこらえて、アルサスたちを守ろうとするネルの後姿に、こんな女の子にバセットが言うような絶大な力があるとは、アルサスには到底思えなかった。

「ネルっ!?! 何言ってるんだよっ」

「いいんです、アルサスさん。これ以上、あなたにご迷惑をかけることは出来ません。それに……、わたしの所為で、誰かが傷つくのはもうたくさんです。わたしが死んで済むのなら、それでいいんです」

ネルは、アルサスの方に振り向くことなく言った。ネルの心の中には、あの日の村の惨劇が渦巻いていた。悲鳴と炎の音、人の焼け焦げた匂い。

「わたしは、村の人たちと、女神さまのところへ行きます……」

「良い心がけだ。せめて、苦しめぬようひと思いに殺してやろう。」

それが、銀の乙女への、吾からの敬意と思え」

静かにそう言うと、バセットはゆっくりとネルのもとに歩み寄った。ネルの足が震えている。肩が怯えている。死にたくない、背中を書いてある。アルサスは、すかさず、ズボンのポケットに手を伸ばした。

あと三枚！。

「そんなもの、敬意なんかじゃないっ！！」

アルサスの叫び声が、森の木々を振るわせた。一瞬だけ、ヴォールフたちがひるむ。その瞬間、アルサスはポケットから取り出した、魔法カードを、バセットめがけて投げつけた。

「緑の精霊、その封印を解き放ち、風の槍となれっ！！ ヴィント・ランツェー！！」

飛来する魔法カードが、まばゆく光る。

魔法カードは、魔法の力、即ち魔力を扱う素養のない人間でも、簡単に魔法を使うことが出来るように作られた道具である。カードの裏面には、魔法を封印するための幾何学模様が記され、表面には、魔法使いが魔力を込めて描いた魔法円が記されている。そして、封印解除の呪文と同時に、魔法円に込められた魔法が半自動的に発現する。ただし、一度魔法カードを使うと、描かれた魔法円は消滅する。つまり、使い捨ての道具なのだ。

「おのれっ！！」

バセットの足が、川原の砂利をける。しかし、まばゆく発光するカードから飛び出した風の槍は、バセットを追いかける。

その隙に、アルサスはネルの手をつかみ、強引に引き戻した。

「ネル、簡単に死んでもいいなんて言っちゃだめだ！」

「アルサスさん……でも」

「でもも、へちまもないっ！！ 俺は、魔物なんかに負けたりしないっ！！ 来いバセットっ！！ ハイ・エントだろうが、何だろうか、相手になってやるっ！！」

なぜか、アルサスは頭に血が上ったように、激しく怒りをあらわ

にした。一方、風の槍をすんでのところでかわした、バセットも三つの瞳を怒らせた。

「小僧っ！ 後悔しても知らんぞ」

「後悔するのは、お前じゃ、バセット。お前は、本当にこのか弱き娘さんが、銀の乙女だと思っているのか？」

トンキチが、翼を大きく広げて、ヴォールフの群れを威嚇しながら言った。

「愚問っ！ その娘の銀色の髪が何よりもの証拠」

「ならば、お前さんのしようとしている事は間違っておる。わしらは、銀の乙女を……」

「それ以上言うなっ！ これは、同胞のため、いや、世界を守るためっ！！ 邪魔立てするなら、同じハイ・エントエンとであっても、容赦はしない。みななもの、狩りだっ！！ 人間とエイゲルの長、そして、銀の乙女を殺せっ！！」

アオオンと、狼の遠吠えよろしく、バセットは戦いの雄たけびを上げた。

「トンキチっ、ネルを守ってくれっ！ 俺が負けたら、ネルをつれて逃げてくれっ」

アルサスは、ネルの手を離すと、両手で剣を構える。そして、飛び掛ってくるヴォールフに挑みかかった。

「待って、止めてください、アルサスさんっ！！」

ネルは、トンキチの傍に駆け寄りながらも、アルサスの名を呼んだ。しかし、その声は、ヴォールフたちの鳴き声に邪魔されて、アルサスには届かなかった。

「うおおっ！ たあっ！！」

アルサスの振り上げた、きつ先がヴォールフの顎を貫き、なぎ払った剣が足を切り落とし、振り下ろした刃が脳天を叩き割る。すでに、もうそこは戦場の様相を呈していた。

さらに、ネルを片翼に包んで守るトンキチも、右の翼を羽ばたかせては、食らいつこうと飛び上がるヴォールフを叩き落とす。だが、

次から次へと森の奥、茂みの向こうから、ヴォールフが現れる。

「ちくしょうっ！ きりがねえっ！！」

アルサスの剣は、あっと言う間に血油にまみれてしまい、切れ味が鈍る。アルサスはズボンのポケットに手を差し入れて、二枚目の魔法カードを取り出した。先ほどの魔法カードに書かれていた、魔法円とは形が違う。

「それでも、食らえっ！ 赤の精霊、その封印を解き放ち、炎の矢となれ。フランメ・プファイルっ！！」

アルサスの封印解除呪文が終わるや否や、カードの魔法円から、無数の炎の矢が飛び出した。それは、雨のように、ヴォールフの群れに降りかかる。

そして、運悪く炎の矢が突き刺さったヴォールフは、あっと言う間に炎に包まれて絶命する。難を逃れたヴォールフも、同胞たちの死に様に怯えて、動きを止めた。

「魔界に帰れ、魔物どもっ！！」

「フンッ！ ほざけ小僧っ。魔法を使えるのが、人間だけだと思っなっ」

炎の矢を軽々と回避したバセットが、風のような速さでアルサスに突撃してくる。そして、バセットが大きく口を開けた瞬間、鋭利な牙が生え揃った口の奥から、炎の剣が現れた。

「フランメ・シュベアートの魔法っ！？」

アルサスが驚きの声を上げる。魔界の住人だったといわれる魔物が、魔法を使うことは想像に難くないことだが、実際に魔物が魔法を使うところを見たことがない。しかしそんなことに驚いている暇はなかった。

バセットは、口の奥から出現させた炎の剣を加えると、一気にアルサスとの間合いを詰める。アルサスは、慌てて剣を振り上げた。しかし、それをいとも簡単に回避したバセットは、アルサスの振上げた両腕の真下にできた、無防備な懐へと反動を利用して、飛び込んだ。

アルサスの着ている、ギルド・リッターの鎧は、ほんの一部だけ。胸当てと肩当の部分だけを着ている。そのため、バセットが強く首を振った瞬間、くわえた炎の剣が、白銀の鎧に覆われていないアルサスのお腹を水平に斬り裂いた。

「うわあっ!!」

アルサスの悲鳴。両手から、剣が零れ落ち、地面に乾いた音を立てる。

「やばいかも……へへっ。やられちゃった」

傷口を押さえながら、アルサスは苦笑いを浮かべつつ、ちらりとトンキチの方を振り返った。その視線は、トンキチの翼の間から不安な顔をしてアルサスを見守っていた、ネルに注がれていた。

その刹那、アルサスは膝から崩れ落ちた。

5. ハイ・エンシェント（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せください。

6. 銀の乙女

「いかん、娘さんっ。危ないっ!!」

トンキチが制止するのも聞かず、ネルはトンキチの翼を跳ね除けて、走り出した。ほとんど、衝動的と言っても良かった。その拍子に、ネルの頭から箱型の帽子が落ち、後ろで三つ編みにして束ねた、銀色の髪がなびく。

「アルサスさんっ!」

ネルは、アルサスの元に駆け寄ると、その名を呼んだ。しかし、うつぶせに倒れたアルサスからは、返事の代わりに、だくだくと血があふれてきて、ネルの足元に溜まりを作る。

「しっかりしてください、アルサスさん!! アルサスさんっ」

「もう手遅れだ、銀の乙女よ。フランメ・シュヴェーアトで刻まれた傷口は焼け焦げ、『アルテミシアの葉(※3)』を以ってしても、直すことは出来ん」

炎の剣を咥えたバセットが、ゆっくりと近づいてくる。次に、この剣で刻むのはお前だ、とでも言いたげに。だが、ネルの視線は、バセットの炎の剣などには注がれていなかった。

「アルサスさん……」

膝を突き、アルサスの体を抱きかかえたネルは、瞳にいっぱい涙を浮かべた。アルサスの腹に刻まれた傷口からは、血がとめどなく流れ出してくる。その傷口をそっと押さえても血を止めることなどできず、徐々に冷たくなっていく、アルサスの体温しか伝わってこない。やがて、あの優しい手のぬくもりも、消えていくだろう。

「どうして? どうして、わたしなんかのために……」

ぼろぼろと、涙を流しながら、物言わぬアルサスに問いかけた。骸になってしまいう前に、教えて欲しい。なぜあなたは、出会ったばかりのわたしを助けるために、無茶をしたのか。

「人間とは愚かよ。誰かのために、命を投げ出すことを、美德とし

ている。それが、どれほど無意味なことか、知ることはない。知っていれば、その小僧も、無駄死することなどなかったものを」

まるで死者に鞭打つような、バセットの物言いに、ネルはきつく睨みつけた。こんなに、誰かを憎いと思ったのは、あの日、村を襲った「黒衣の騎士団」を睨みつけて以来だろう。

「誰かのために、何かをすることは無駄なんかじゃありません」

「ほほう。ならば、貴様を救うために、その小僧を含めてすでに何人の人間が命を落とした？」

的を射た、バセットの問いかけに、ネルは答えられない。

ネルを渡さないと言い切った村の長。幼いころよくネルの銀色の髪をからかった近所の青年。ネルにお化粧を教えてくれた羊毛織りのお姉さん。いつも昔話を語ってくれた羊飼いの老人。……どれだけの村の人が、ネルをかばって殺されたのか、数えることも出来ない。そしてまた、一人の少年が、自分のために死んでしまう。

「ごめんなさい、アルサスさん。わたしの所為で……」

「後悔してももう遅い。人は最も愚かな生き物。利欲のために、いつも戦争をして、命を粗末にする、ゴミのような生き物だ。そんなゴミがそなたの『奏世の力』を手に入れても、利欲のためだけに使い、手に余るのは目に見えている。その結果が、争乱となるなら、たとえ魔界の住人と呼ばれる、我ら魔物とて見過ごすわけにはいかない」

「だけど、アルサスさんは……」

そんな人じゃない。愚かで、ゴミのような人が、あんな温かな手で、優しい微笑で、不安と恐怖に押しつぶされかけた心を包み込んでくれない。そう言おうとしたネルの口を、バセットが止めた。

「ならば問おう、銀の乙女よ。そなたは、その小僧の屍を踏み越えて、それでも生きるられるか？　これから、そなたを巡^{せい}って、多くの人間が死んでいくだろう。それでも、己が生をまっとうできるか？　できはしないだろう。人間の心はそこまで強くはない。大人しく死んで、そのものとともに、アストレアさまのもとへ召される

がいい。それが、人間にとっても、世界にとっても、お前ができる唯一のことだ」

音もなく、炎の剣がネルの首筋にあてがわれた。熱い。その魔法の刃で斬られれば、痛いだろう。苦しいだろう。だが、ネルには抗う術がなかった。

「バセットっ!!」

トンキチが叫ぶ。しかし、ヴォールフの群れに取り囲まれ、噛み付かれて、身動きが取れない。

「ごめんなさい、みんな」

冷たくなっていくアルサスの体を抱きしめて、ネルは瞳を閉じた。この世との別れの際に、瞳の裏に浮かぶのは、家族の暖かな顔、自分を守ってくれた村人たちの声、そして、少年の優しさ。寂しさや恐怖よりも、悲しみがネルの心を埋め尽くしていく。

『目覚めなさい、銀の乙女よ……』

突然、ネルの脳裏に、声が響いた。何処から聞こえてくるのかは分からない。耳朶^{じだ}を打つと言うよりは、むしろ、直接ネルの頭の中に語りかけてくる。

『目覚めなさい、奏世の力に!』

それは、まるで母のような優しい響きの声。悲しみに黒く埋め尽くされていく心に、一条の光が差し込むような声。

「アス……トレアさま？」

閉じたネルの瞳から、一滴の涙が流れる。その涙が、アルサスの傷口を押さえる手の甲に落ちて、弾けた。その瞬間、ネルの手のひらから真っ白な光があふれ出した。

「これは……っ!!」

バセットがうろたえて、大きく飛びのく。しかし、神々しく、それでいて柔らかな光はみるみるうちに、大きくなって行き、ネルを、アルサスを、トンキチを、バセットを、ヴォールフの群れをまるごと飲み込んでいった。同時に、バセットの啞えた、魔法の剣が音もなく消える。森が光に包まれる。風も音も闇も消えて、何もかもが

真っ白に変わっていく。

『銀の乙女、約束の日は近い。世界があなたの力を欲しています。迷わないで、あなたの力は世界のためにあるのです』

次第に声が小さくなっていく。ネルは何処から聞こえてくるのかも分からない声に、「待って!」と呼びかけたが、届くことはなかった。声は消え、やがて膨れ上がった白い光は、始まりと同じように、ネルの手のひらへと音もなく収束していく。

「ネル……泣いているの?」

不意に別の声が、下の方から聞こえてきて驚いたネルは、視線を落とした。少年の赤い瞳が、ネルの顔を見つめている。

「アルサスさん!」

もう手遅れだと思っていたアルサスが、意識を取り戻している!

ネルは、驚きとともに、アルサスの傷口に触れた右手の違和感を覚えた。そこにあるはずの、焼け焦げた傷と、体温を含んだ血液が、跡形もなく消え去っているのだ。

「傷が、治ってる!」

ネルとアルサス、二人がほぼ同時に声を上げた。

「それは、奏世の力の一端にすぎない……どうやら、吾らが、そなたの力を目覚めさせてしまったようだな」

バセットが三つ目で睨みつけながら、歩み寄ってくる。ネルに抱かれたアルサスは、咄嗟に体を起こした。落とした剣は、手元にはない。今襲い掛かられれば、自分もネルも一卷の終わり。ポケットに忍ばせた魔法カードは、後一枚。それに封じ込まれた魔法を使ったところで、バセットを追い払うこと出来ないだろうことは、アルサスにも分かっていた。ハイ・エンシエントと呼ばれる、魔物の長は、人間よりもはるかに長い時間を生きて、はるかに強いのだ。

「アストレアめ、図りよったな。ええい、みななもの、撤退だっ!」

アルサスの焦りを他所に、バセットは思いがけずそう言うと、「同胞」と呼ぶ仲間たちの方を振り返った。

「間もなく夜が明ける！ 陽光に、目がくらむ前に、退くぞ！！」
バセットが一声吼え、それまで牙をむき出しにしていたヴォールフたちが、尻尾を垂れて、茂みの方へと引き返していく。一体何事か、アルサスとネルは、まるで潮が引いていくようなその光景に唾然とした。

すると、羽をばたつかせながら、トンキチが二人の元へとやって来て、

「ヴォールフ族は、闇夜の魔物。わしが鳥目であるように、ヤツラは太陽の光に弱い。わしらの勝ちじゃ」

と、そつと囁いた。しかし、バセットの耳は、狼のそれと同じように、耳ざとい。引き返す足を止め、首だけをこちらに振って、少し睨みつけてくる。

「違うな、トニアよ。朝日が吾らの邪魔をしたのではない。その娘が、力に目覚めた以上、吾らでは太刀打ちできない。それが、ほんの一端だとしても。アストレアは、この機会を待っていたのだ。吾らは、やつの罠にはまった、愚かな魔物よ」

「バセット……」

トンキチの黒い瞳が、再び旧知の友を見る穏やかなものに変わった。だが、バセットはそれを受け流してしまう。

「フンっ、貴様は最初から、その娘が銀の乙女と知っていたのだろう？ それなのに、何故人間の味方をする？」

「それは、わしに人間の友がいるからじゃよ」

「友だと。笑える。トニアよ、貴様は欲にまみれた、ゴミどもを信じていると言うのか？ このままでは、世界が終わる。人間どもの欲望はとどまることを知らない。やがて、争乱が始まる。その時、はたして貴様は同じ答えを吾に出来るかな」

「さあ。それは、この娘さん次第じゃ。わしが信じておるのは、人間の可能性というやつじゃ」

バセットはトンキチとネル、二人を交互に見やると、三つの目を閉じて何事か思案するような仕草をした。そして、短く「そうか」

と答えると、素っ気無く背中を向けた。

「待って下さい、バセットさま。どうか、教えてください。わたしは本当にあの『銀の乙女』なんですか？ 『奏世の力』って、何なんですか？ 教えてください」

それまで、トンキチとバセットの会話に耳を傾けていたネルが、バセットを呼び止める。だが、バセットはネルの問いかけに答えてはくれなかった。代わりに、

「そなた自身で、その答えを見つけよ。そうすれば、あるいは道を拓くこともできよう。しかし、吾はトニアのように甘くはない。もしも、道が拓けぬなら、次はこの命に代えても必ずそなたを殺す」と、冷たく言い残し、茂みの奥へと姿を消した。

「た、助かった」

ヴォールフの群れが、去っていくのを見届けたアルサスは、ほっと息をついた。魔法カードに伸ばしていた手を、ポケットから取り出して、そっと自分の傷口を触ってみたが、やはり、そこに傷はない。腹と一緒に切れたはずのインナーウェアも、元通りになっている。何故だ？ アルサスがネルの方に振り返ろうとすると、その目の端に、キラリと太陽の光が差し込んだ。

「夜が明けるぞ」

トンキチの声に合わせるように、遠く、木々の隙間から朝日のまばゆい光が漏れてくる。アトリアの森に朝がやってきたのだ。ネルは、そんな朝日を見つめながら、アルサスたちには聞こえないほど小さな声で、呟いた。

「銀の乙女……、奏世の力……」

※3 アルテミシアの葉……この世界で、古くから万能薬の素として重宝されている薬草。傷を癒したり、解毒の効果があるとされている。

6. 銀の乙女（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せください。

7. それぞれの朝

ライオット・シモンズの朝は、日の出とともに始まる。メイド長が、部屋の前でモーニングコール代わりのノックをするよりも早く床を出て、鏡台に映る、頬の肉の少ない自分の面に、ひとまず落胆しつつも、自慢のカイゼル髭を丁寧にとかす。

そうしていると、メイド長のモーニングコールがやってくる。メイド長は、二十歳になったばかりの歳若い娘で、今年で四十も半ばになるうかと言うライオットにとっては、娘のような存在でもあった。

だが、「おはようございます。ライオットさま」と頭を下げて挨拶をする、メイド長には、可愛気も色気もない。顔は、年頃の女らしく、美しい方だと思うのだが、職と雇い主に忠実な真面目な性格をしている。そんな、メイド長が珍しく、皮肉めいた口ぶりをした。「今日もお早いお目覚めですね。これでは、わたしのモーニングコールは不要かもしれませんね」

「そう言うな。国王陛下不在の今、私が朝議に出ぬわけにはいかんだろう。騎士団の連中が待っておる。そなたが起こしてくれなければ、騎士団の連中の前で、赤っ恥をかいてしまう」

メイド長の皮肉に、今日は雨でも降るのではないか、そう思ったライオットは、櫛を鏡台に戻しつつ、窓の外に目をやった。レースのカーテンがかけられた四角い窓辺からは、堅牢な城塞に囲まれたセンテ・レーバン王都の城下が見える。さらにその向こう、はるか遠方には、敵の侵入を阻むアトリアの峰がうっすらと雪を被っている姿が見える。どうやら、何クリーグも離れたアトリア連峰が見えるということは、雨など降りそうにもないようだ。

「お召し物、お着替えになられますか？ それとも朝食になさいますか？」

背後で、メイド長の声が聞こえ、ライオットは心臓が飛び出しそ

うになった。よもや、心の声は聞こえてはいないだろうが、この仕事に忠実なメイド長なら、心を読む魔法を持っていたもおかしくないように思えてしまう。もちろん、そんな魔法などこの世に存在しない。

あるとすれば……。

「聞かずとも分かっているだろう。先に朝食を。それから、メツツエをこれへ。例の件についての進捗を尋ねたい」

ライオットが指示を与えると、メイド長はお辞儀をして、部屋を後にした。

メイド長が下がると、入れ替わるように、食事が運ばれてきた。ライオットは、朝の食事を欠かさない。朝食のメニューはいつも決まっている。白パンに葡萄のジュース。それに、季節のフルーツの盛り合わせだ。すべて、この国の領内で採れたものだ。昨今、異常気象が続き、農村の収穫高が落ちているようだが、城下の町並みを見下ろしながら朝食を食べる身分のものとしては、関係のないことだった。

パンがなければ、菓子を食えばいい。それだけのこと……。

ライオットは、内心で呟きながら、ナプキンを着け、フィンガーボールで指先を洗い、フルーツを頬張った。程よい酸味と、たっぷりの甘みが口の中に広がる。糖分は脳にとって唯一の栄養源。朝は、しっかりと糖分を口にして、ぎゃあぎゃあとかましい騎士団のごく潰しどもの相手をしなければならない。その後も、仕事は山積みだ。

しかし、それが由緒あるシモンズ家にとって、誉れ高いことを知っている。富、名誉、すべてはシモンズ家のものであり、それを維持し高めていくことが、現シモンズ家当主たる、自分の役目なのだ。「メツチェ・カーネリア、ただいま参りました」

部屋の扉がノックされ、ゆっくりとメツツエが入ってくる。黒いスーツがよく似合う高い背丈と、モノクルの奥に理知的な目を持つその男は、ライオットが重宝している宰相府付の参謀官である。

「お食事中、申し訳ありません」

メッツェは、ライオットが食事をしていることに気づき、お辞儀をする。ライオットは、口元をナプキンで拭きながら、「よい、呼んだのは私だ」と、言った。

「例の件、どうなっておる？　そろそろ、アローズ関所に待機させた親衛隊の元に、例の荷物が届いているころではないか？」

「はっ。それなのですが……昨夜遅く、親衛隊のクロウ・ヴェイルより、エーアデの魔法通信がありました。いや、夜遅かったものですから、すぐライオットさまにお伝えするべきかどうか迷ってしまいました」

敏腕参謀官のメッツェらしくなく、非常に歯切れが悪い。ライオットは、ウィングラスに注がれた葡萄ジュースを一口あおると、きつくメッツェを睨みつけた。

「どうした、メッツェ？　なにがあつたのか、はっきり申せ。クロウはなんと言ってきたのだ！？」

「はっ。本来は、ギャレットから積荷を預かった『運び屋』の男が、昨夜のうちに、アローズ関所へ積荷の少女を届ける手はずになっていたのですが、夜半を過ぎても現れず、斥候を送ったところ、『運び屋』が偽装に使っていた辻馬車ギルドのウォーラ（三頭立ての馬車）が、街道に残されていたそうにございます」

「どういうことだ？」

ライオットは、眉間にしわを寄せて訝る。

「積荷も、『運び屋』の男も姿はなく、何者かに連れ去られたようだと、クロウは申しておりました」

「何ということだ！」

メッツェが驚きで目を丸くするほど、ライオットは大きな声で怒鳴ると、葡萄ジュースの入ったグラスを床に投げつけた。派手な音とともに、ウィングラスは碎け散り、リヤマの毛で織られた赤いカーペットにしみを作る。

「王が崩御され、あの忌々しいフェルトが不在の今が好機。そのた

めに、諸侯を説き伏せ、騎士団どもを丸め込みシオンさまを次期国王の座につけたというに！ 我が悲願を叶える道は、茨の道だと言うのか！？ ええいつ、ギャレットなぞに任せた私がバカであったわっ！」

まるで駄々っ子がそうするように、食卓を強く叩いたライオットは、メッツェを睨みつけた。そうしながらも、すでにライオットの頭の中では、想定外の事態への対処を如何にするべきか、計算が始まっている。もしも、ギルド・リッター警備隊に捕まったのであれば厄介だ……。

メッツェは黙って、ライオットの鋭い視線を受け止めた。

「雨か……」

不意に、ライオットが言う。メイド長の皮肉がとんでもない雨雲を呼び寄せた、ライオットはそう思っただけだが、メッツェは知らない。

「は？ 雨、ですか？」

「いや、独り言だ……」

ライオットはそう言って、自分が床に投げつけたワイングラスのかげらに目を投じた。その時である。せわしない衣擦れの音が聞こえてきたかと思うと、宮廷付文官がメッツェの背後から姿を現した。「おはようございます。ライオット宰相閣下！！ 緊急の用向きなれば、閣下の私室へ押しかけましたこと、お許しくださいませ」

すこし青ざめた宮廷付文官は、慇懃に頭を下げた。

「構わん。私室とは言え、ここは宰相府。して、緊急の用向きとはなんだ？」

「はっ！ 一刻ほど前、王城地下研究所の魔術師が、空白地帯はアトリアの森で強力な未知の魔力を感知した、とのことですよ！ 委細は、現在、魔術師府の総員で調査しております」

「何だっ!? わかった、報告ご苦労。下がっても良いぞ」

宮廷付文官の報告に、顔色を変えたライオットは文官を下がらせると、その足音が遠ざかっていくのを確かめて、メッツェを手招き

した。

「未知の魔力とは、『奏世の力』に相違ない。銀色の娘は、アトリアの森にいる。メッツェ、直ちに、私兵より密偵をアトリアの森へ放て。なんとしても、娘を奪った奴ともども探し出すのだ。黒衣の騎士団隊長のギャレットにも、連絡を入れる。名誉を挽回するチャンスだと付け加えてな」

メッツェの耳元に囁くような小声で指示を与える。ライオットが非常に用心深い性格をしていることを、メッツェは心得ている。

「心得ております。直ちに、出立させます。ところで、アローズに派遣したクロウ隊は、いかがいたしますか？」

「呼び戻せ。他の騎士や文官どもに、妙な勘繰りを入れられるわけにはいかん。メッツェ、くれぐれもこのことはシオンさまの耳に入るようなことがあってはならんぞ」

「それも、心得ております。それよりも……」

メッツェは、カーペットに散らばったワイングラスのかけらに視線を落とした。

「メイド長を呼んでまいりましょう。朝議の前に、割れたグラスなど、縁起が悪いですから」

そう言うと、背の高い参謀官は、静かに部屋を後にした。メッツェが出て行くと、ライオットはにやりと口元を歪めつつ、無造作に皿上の白パンを掴み、乱暴に食いちぎった。

ふと、目をやった窓の外、城下を取り囲む堅牢な城塞のあちこちに、いつの間にか、剣と盾の紋章をあしらったセンチ・レーバン国旗が、晴れ間を吹き抜ける風にはためいている。

「やまない雨は、何処にもないと言うことだ……あとは、奏世の力さえ手に入れば……」

クククつ、とライオットは人知れず、晒った。

東の空が明るくなり始めると、砂漠の太陽は容赦なく大地を焦がす。

空白地帯より南方、百クリーグ。事実上ダイムガルド帝国の関所ともいえる、スエイド運河を越えた先にある、「レメンシアの街」。別名を、砂漠の玄関口と呼ばれており、レメンシアの街を一步でもできれば、一面砂だけが覆う、広大すぎる砂漠が広がっている、まさに玄関口だ。

そんなレメンシアには、大小さまざまなギルドが、ダイムガルド支部を設けていた。辻馬車ギルド、ギルド・マーチャント、運輸ギルド……もちろん、空白地帯の自警や傭兵活動を担う世界規模のギルド・リッターも例外ではない。

ギルド・リッターの小隊長、フランチェスカ・ハイトは、寝不足気味の頭を抱えながら、支部の隊員詰め所から、レメンシアの町並みをぼんやりと眺めていた。

すでに、街は旅人や行きかう人の声で賑わい、砂を固めたレンガ造りの特徴的な家々には、ギルド・マーチャントの商店が軒を連ねて、「いらっしやい！」と威勢を振りまいている。

「今日も、暑くなりそうね……」

フランチェスカは溜息をついて、昨日捕らえた裏ギルドの男の報告書に目を戻した。フランチェスカは、砂漠に覆われたダイムガルドの生まれである。それが証拠に、フランチェスカの肌は、センチ・レーバン人に比べて、常に日焼けしたように浅黒い。だから、ダイムガルドの灼熱の気候には、慣れているのだが、問題は窓ガラスに映る自分が着込んでいる、白銀の鎧だ。世界中に組織のネットワークを張り巡らせたギルド・リッターのメンバーが揃いで着るその鎧は、通気性など皆無であり、汗で服が蒸れて気持ち悪い。

こんなものを着たまま、事務仕事をさせられるのは、うんざりだと、フランチェスカの顔に書いてあった。

昨日、空白地帯で捕らえた、裏ギルド「運び屋」の主要メンバー、ゲモック・ラボンは、フランチェスカの想定どおり、取調室でペラペラと仕事内容を明かした。

ゲモックに荷物運びを依頼したのは、同じく裏ギルドの「黒衣の

騎士団」だった。積荷は、武器や密輸品ではなく、十六歳の女の子。銀色の髪をしたガモーフ辺境の村の娘らしい。要するに、ご法度の人攫いに与したということだ。しかし、フランチェスカたちにとって問題なのは、裏ギルドの起こした誘拐事件よりも、「黒衣の騎士団」にその少女を誘拐するように依頼した者がいるということの方だった。

「聞いて驚け、こん畜生っ！ 黒衣の騎士団に人攫いを依頼したのは、センチ・レーバン親衛騎士団だ！！」

逮捕されて、やけっぱちになったゲモックは、まだ聞いてもいないのに、その依頼主の名前まで明かしてくれた。よく、こんなアホが、裏稼業をこれまでやってこれたなど、ある意味でフランチェスカは感心してしまった。

しかし、感心して終わるわけには行かない。事件は、それだけでは終わっていないのだ。ゲモックは、積荷の少女を乗せて、予定通り、空白地帯を抜けて、センチ・レーバンの国境へと向かっていた。ところがゲモックは、その道中で突然、謎の少年に襲撃を受けたのだ。

少年は空から落ちてきた、などとゲモックは言っていたが、さすがにそんなバカなことはないだろう、とフランチェスカは思う。しかし、実際に、ゲモックは馬車の荷台で何者かに伸されて気を失い、積荷の少女は姿を消していた。

一体誰が……？ 少年は、ギルド・リッターの鎧を一部だけ身に着けていたらしい。しかし、ギルド。リッターの人間にそのような少年は心当たりがない。おそらくノミの市かなにかで、白銀の鎧を手に入れた、放浪者のレイヴンか何かだろう、というのは、フランチェスカの推測である。

それにしても、ややこしいことになってしまった。「黒衣の騎士団」に「センチ・レーバン親衛隊」、レイヴンの少年。妙な事件に足をつっ込んでしまったことを、思わず後悔したくなる。そうすると、報告書が白紙同然になってしまうのも、仕方がない。フラン

エスカは、それを、この蒸し暑い鎧の所為にしたかった。

「センチ・レーバンが人攫いか……十年前の悲劇を忘れたわけでもないだろうに」

それは、ほとんど独り言のつもりだった。だが、タイミングを計ったように、詰め所の扉が開き、部下のベイクが顔を出す。

「どうしました、隊長？ 浮かない顔してますぜ」

ベイクは、フランチェスカと同じく、ダイムガルドの生まれだ。

筋骨隆々のいかにも「戦士」といった風貌は、その浅黒い肌とあいまって、とても厳つい。

「それは、あなたの暑苦しい顔を見たからよ」

「ええ？ そんな。ひどいですが、隊長！ 家は祖父さんの代から、こういう顔なんですから」

外見に似合わない、子どものようなふくれっ面をみせるベイクに、フランチェスカは苦笑した。

「冗談よ、それより、何か用かしら？」

「はっ。そうでした。ゲモック・ラバンの本部への移送手続き終わりました。これで、『運び屋』の悪事が芋づる式に暴かれると良いのですが」

「それは、わたしたちの仕事じゃないわ。それよりも、ランティは何処に行ったの？ わたしの代わりに、報告書を代筆して欲しいんだけど」

そう言って、フランチェスカは、ベイクの入ってきた扉の方を見やったが、もう一人の部下、ランティの姿は見当たらない。

「代筆って……。ヤツなら、馬の手入れをしています。昼ごろには、レメンシアを出立できるように。ほら、謎の少年と、ゲモックが運んでいた少女を探し出せ、って言うのがボスからの命令なんですよ？」

「そうよ。厄介な事件に首を突っ込んだのはわたしたちなんだから、わたしたちで何とかしろってことよ」

フランチェスカは、再び溜息をつく。

「いや、むしろ、ボスは隊長の手腕に期待してるんじゃないですか？」

「冗談はよしてよ。この事件にかかわるってことは、ギルドがセンテ・レーバンの政治に口出しするようなものよ。ギルドは、どの国にも属さない。その代わり、どの国の政治にも干渉しない。だいたい、相手がセンテ・レーバン親衛騎士団なんて、分が悪いわ。新聞ギルドにでも、売り込んだ方がマシよ」

「でも、ボスの命令は絶対ですよ」

「べつに、命令を無視するつもりはないわよ。だから気が重いのもうだよ、ベイク。あなたが、報告書の代筆してよ。その間に、わたしは出立の準備と仮眠をとっておくから」

フランチェスカは、白紙の報告書と普段は見せないような満面の笑みを、ベイクに手渡した。

「はっ？ 俺がですか？」

「ええ、お願いね。それと、謎の少年と、銀の髪の女の子の搜索は、午後二時より出発します。各自準備を怠らないように！」

「ええっ！？ それまでに、報告書を代筆するんスか？ 横暴です。ちよっ、待ってください、隊長っ！！」

肉体労働派の部下にとって、事務仕事は苦行にも等しい。フランチェスカは、それを知っていながら、ベイクの呼び止めに応じず、詰め所を後にした。

7. それぞれの朝（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せください。

8. ネルの決意

小川の水面に映る自分の顔見つめて、ネルは頬にはっきりと涙の後があることに気づいた。どうして、涙は、流しても流しても、枯れ果てることのないのだろう。そんなことを思いながら、そっと冷たい水に指をつけた。

アルサスがバセットに斬られた時、心の底から怖くて悲しかった。出会って間もないとは言え、故郷から攫われて絶望の淵にいたネルを救い出してくれたのは、アルサスなのだ。彼がくれた、優しい微笑みも、温かな手のひらも、悲しみを知るには十分すぎた。少しだけ、彼に心惹かれている。こんな気持ちは、生まれて初めてのことだ。

ネルは、小川の水を救い上げると、冷たい水で一気に顔を洗った。

「はい、タオル」

突然、ネルの横から手が伸びてきて、白いタオルが差し出される。見れば、いつの間にかアルサスがニコニコと微笑んで、ネルの傍にいた。

ネルは、ドキッとして、赤くなった顔を見られまいと、視線を逸らし、タオルを受け取った。幸い、アルサスは、ネルの心の機微きびには気づいていないようだった。

「あ、ありがとうございます、アルサスさん」

「礼を言わなきゃいけないのは、俺の方だよ。ネルが助けてくれなかったら、多分死んでた。ありがとう、ネル」

「え、その……、はい」

上手く答えられず、ネルはタオルに顔をうずめた。

バセットの魔法で瀕死の重傷を負ったアルサスを助けたネルの力。それを、バセットは「奏世の力」と呼んだ。人の傷を癒す力、だが、それは「奏世の力」の一端に過ぎないとするのなら、「奏世の力」とは一体何なのか？

「ねえ、ネル。ひとつ、聞いてもいい？」

アルサスは、ネルの隣に腰を下ろすと、唐突にそう切り出した。驚く暇もなく、アルサスは続ける。

「バセットが去っていく前、君はバセットに『わたしはあの銀の乙女なんですか？』って、言ったよね。銀の乙女が何なのか、知っているの？」

「アルサスさんはご存じないのですか？ 有名な、ベスタ教の伝説です」

きよんとするネル。知っていて当然だ、と言う顔ではないが、知らないことが意外だと言いたげだった。

「センチ・レーバンでは、ベスタ教は廃れてるんだ。その代わり、白い龍の言い伝えっていう昔話ならあるんだけど……。よかったら、その『銀の乙女』の伝説って言うのを聞かせて欲しいんだ」

「はい……。『銀の乙女』は、遠い遠い昔、この世界がまだ神話の時代、女神アストレアさまにお仕えした、天使の名前です。まだ世界が創世の時代。神様たちは、互いに争いあっていたそうです。ベスタ教では、それを黄昏の戦争と呼んでいます。何千年も戦争は続いて、大地は荒れ果て、川や海は毒の色に変わり、空は黒い雲に覆われ、正義の女神であるアストレアさまは悲しみに暮れました……」

これは正しいことなのか？ 神と呼ばれる者が争いをして、誰のためになるのか？ アストレアは日々涙を流し、荒れた世界を見つめ、せめて滅び行く世界のためにひとつの歌を歌った。その歌声を聴いたのは、アストレアに使える天使の一人、「銀の乙女」だった。銀の乙女は、アストレアをこれ以上悲しませないために、そして、世界を救うために、願い出た。『わたしの魂を、世界のためにお使ください』と。

アストレアは、その願いを聞き届け、銀の乙女の魂を五つに分けた。赤、青、黄、緑の四つの精霊に生まれ変わった銀の乙女の四つの魂は、世界に降り立ち、傷ついた世界を癒した。そして、最後に残ったひとつの魂に、アストレアは約束をした。

『いつか、この世界が再び危機に陥った時、あなたの力を再び必要とするかもしれません。ですが、もしも、世界が正しい姿になったならば、あなたには幸せを与えましょう。その日まで、眠りなさい……』

約束に従い、五つ目の魂は、静かに悠久の眠りについた。

それが、ネルの知る「銀の乙女」の話だった。ベスタ經典に記された一節であり、ベスタ教の教主が首長たる宗教国家「ガモーフ神国」の人間なら、子どもでも知っている下りだ。しかし、アルサスが言ったとおり、ベスタ教はセンチ・レーバンに根付いていない。遠く、数百年前にはセンチ・レーバンにもベスタの信者がいたそうだが、少なくとも現在は、ガモーフとセンチ・レーバンの間を隔てるように横たわるアトリア連峰を境に、センチ・レーバン側に信者を公言する者もいなければ、ベスタの教会も見当たらない。

そんなセンチ・レーバン生まれのアルサスにとって、ネルの話は、御伽噺でも聞いているような気分だった。だからなのか、アルサスは、押し黙って彼女の語りに聞き入っていた。

「じゃあ、君は、天使の五つ目の魂の生まれ変わり、ってことなの？」

「おかしいですよ。わたしなんかが、天使さまの生まれ変わりだなんて」

まるで自嘲するかのよう、ネルは苦笑して、水面に映る自分の顔を見つめた。銀色の髪、ガモーフ人にしては白い肌。幼いころ「普通の子じゃない」と知ってから、他の人と違う外見がずっとコンプレックスだった。

「そうかな。俺は、ネルをはじめてみた時天使みたいだって、思ったよ。だって、その……ネル、すっごく可愛いから」

「えっ!？」

突然のアルサスの発言に、ネルは目を丸くして、アルサスの顔を見た。すると、アルサスは急に赤い顔をして、頭をぽりぽりとかいた。下手な口説き文句みたいで、どうやら、口に出した本人も恥ず

かしかったらしい。

「いや、うん。その……えへへ」

二人して照れていると、背後でバサバサと羽の音が聞こえてくる。慌てて立ち上がり振り向いた二人の前に、トンキチの巨軀が空から着陸してきた。

「なんじゃ、老体のわしがお前さんたちのために空から偵察してある間に、若い者どもは川辺で、いちゃいちゃしておったのか？」

まるで冷やかすような、トンキチの口調に、アルサスが目くじらを立てる。

「そ、そんなんじゃねえっ！！ このジジイっ！！」

ガウツと、噛み付くように怒鳴ると、アルサスは溜息をつき、トンキチは高らかに笑った。

「それよりも、トンキチ。空から見た様子はどうだった？ 森の周りは安全か？」

「ふむ。ヴォールフの群れも、人影もなかったぞ。お前さんたち、これからどうする？ 娘さんの故郷、ラクシャまで、運んでいってやりたいところじゃが、二人を背中に乗せてやることは無理じゃしの」

「そこまでは頼めないよ。ネルを故郷まで送り届けるのは、レイヴンである俺の仕事だから。気持ちだけ受け取っておくよ。ありがとう、トンキチ。それに、あんたはハイ・エンシェントとして、エイゲル族をまとめる仕事もあるんだろう？」

「そうじゃな、ならば、お言葉に甘えるところでしょう」

「とりあえず、ガモーフ国境を越えるため、カルチエトの街へ一端向かおうと思う。俺は通行手形を持ってるけど、ネルの分を調達しなきゃいけないから。それから、ヨルン平原を越えて、ラクシャへ向かう」

「そうか……道中気をつけるんじゃぞ」

と、言ったトンキチの顔はどこか、息子を見送る父のような顔つきだった。それだけでもネルには、人間のアルサスと魔物のトンキ

チが交わす、友情が伝わってきた。

「娘さんも、息災でな」

「はい。ありがとうございます。あの……トンキチさん、ひとつだけいいですか？」

「うん？ なんじゃ、娘さん。わしの好物か？ じつはの、人間の肉が大好きなんじゃよ」

はぐらかすように、冗談を言うトンキチに、ネルは戸惑ってしまふ。慌てたネルが「いえ、そうじゃなくて」と言いかけると、それにかぶせるようにトンキチは急に真面目な顔になった。

「分かっておる……。銀の乙女が持つ『奏世の力』のことじゃな。ベスタの経典にも、『奏世の力』のことは記されていない。それは、記すことの出来ぬほど膨大な力なのじゃ。アルサスの傷を癒した力は、ほんの一端に過ぎない。じゃが、そなたにとっては、自分にそんな未知の力があるのは、不安で仕方がないじゃろう」

「はい」

「しかしの、バセットの言ったとおり自分でその答えを見つけなければならぬ」

「でも、わたし、まだ自分が銀の乙女だなんて、信じられなくて……」

「すぐには信じられんかもしれん。じゃが、わしはそなたを一目見た時から、気づいておった。そなたは、銀の乙女の生まれ変わりじゃと。娘さんや、世界の真実を知りなされ。自分のルーツを探しなされ。アルサスを救った、その優しい心があれば、それらを知った時、必ず正しい答えを導き出せると、わしは信じている」

「世界の真実……自分のルーツ？」

「そうじゃ。それを知ることが、絶大なる力をもつ、銀の乙女の使命なのじゃ。しかしの、もしも怖いと思うなら、ラクシャに戻り、ひっそりと誰にも見つからぬよう、隠れて暮らすがいい。それが、世界のためじゃ。どちらが、そなたにとって幸せか、それさえわしが教えてやることは出来ない。すまんの」

「いえ、わかりました。いろいろと、ありがとうございました、トンキチさん」

ネルは、心から感謝の微笑を浮かべ、自ら手を差し出した。昨日は、怖いと思った魔物のトンキチも、今では優しいお爺ちゃんに見える。

「うむ。では、そなたたちの道中の安全をアトリアの峰から祈っておる」

ネルの手を翼でそっと包んだトンキチはそう言うと、空を見上げた。トンキチの翼が大きくはためくと、あたりにつむじ風が舞い起こる。アルサスは、砂埃からネルを守り、ネルは帽子とスカートを抑えながら、飛び立つトンキチを見送った。

「また会う日まで！　さらばじゃ！！」

と、風とともに飛翔するトンキチが別れの言葉を告げる。ネルとアルサスは、空に向かって手を振りながら、エイゲルの長を見送った。

「ど派手なジジイだな、まったく」

トンキチの羽音が聞こえなくなると、アルサスは陰口するように苦笑して、髪の毛や鎧に挟まった葉っぱを払い落とした。

「さて、俺たちも出発しよう。日暮れまでに、カルチェトの街に着かなきゃ」

アルサスは、ネルからタオルを受け取りしまいこむと、リュックをよいしょと背負った。老草色のリュックは、本来登山者や修験者などが愛用するもので、食料品や雑貨が詰め込まれているほかに、毛布や鍋、水筒がぶら下がっている。放浪者・レイヴン御用達のアイテムなのだ。

二人は、来たときと同じように、アルサスを先頭に、森の木々を掻き分けて、再び空白地帯の草原へと舞い戻った。

「カルチェトは、ここから南の方角にある。しばらく休憩なしで歩くけど、大丈夫？」

と、春風が優しくなびく草原の彼方を指差してアルサスが言った。

「はい、大丈夫です。山育ちですから」

「そっか。じゃあ、行こう。カルチェトに着いたら、なにかおいしいものでも食べようよ」

アルサスは、ネルに微笑みかけて、草原を歩き始める。草を分ける足音が、少しずつ立ち止まったネルから遠ざかっていく。

「あのっ、アルサスさん！」

不意に、ネルは先に行くアルサスを呼び止めた。アルサスが振り向くと、ネルは胸の辺りで硬く両手を結び、アルサスの瞳を見つめていた。

「わたし、お金とか、そのお礼とか出来ないんですけど……お仕事をお願いしてもいいですか？」

「仕事？　ラクシャまで送り届ける分の金なら、依頼主からもらってる。ほら、あの五百ドラクマ」

アルサスが小首をかしげる。

「いえ、その。そうじゃなくって、わたし、このまま村に帰っちゃだめな気がするんです。どうして、あの黒い鎧の人たちはわたしを攫いに来たのか、バセットさまはどうしてわたしを殺そうとしたのか。トンキチさんの仰ったとおり、わたしが本当に銀の乙女の生まれ変わりなら、『奏世の力』について知らなきゃいけないんです。でも、わたし一人じゃ、どうやってそれを知ったらいいのか、どこへ行ったらいいのかも、分かりません。だから、一緒についてきて欲しいんです」

「でも……」

無理に知る必要はないと、言いかけたアルサスは思わず口を噤んだ。アルサスを見つめ、返事を待つネルの瞳は、真剣そのものだったからだ。自分の失った過去と、そしてこれから向き合う決意、そんなネルの思いを察したアルサスは、しばらく思索するように空を見上げた。

「知識を得るためなら、カルチェトから海を渡って、魔法使いギルドの本拠地『ルミナス魔法学校』へ行くのが一番いいと思う。あそ

こなら、いろんな書物と研究者が揃っている。いいよ、どうせ俺は
気の向くままの放浪旅をする渡り鳥^{からす}。君の気がすむまで付き合っ
てあげる。報酬もいらない」

「アルサスさん！」

ぱあっ、とネルの顔に笑顔が咲いた。しかし、アルサスは真剣な
眼差しをしたまま、続けた。

「ただし！ 二つだけ条件がある」

「条件ですか？」

「そう。俺と一緒に旅をする以上、もう二度と『死んでもいい』な
んて言うな。そういうの、大嫌いなんだ」

と、言われたネルは、少し驚いた顔をして頷く。アルサスは、ヴ
ォールフに囲まれた時、ネルがアルサスとトンキチを守るために、
命を投げ出そうとしたことを言っているのだ。

「それから、もう一つ」

不意に、アルサスの顔が穏やかになる。

「その、アルサスさんっての止めにしない？ 同い年なんだし、俺
は勝手に呼び捨てしてるんだから、ネルも俺のこと呼び捨てにして
欲しい」

条件と言うよりは、意外な申し出に、ネルはきょとんとしてしま
った。

「それだけで、いいんですか？ わかりました、アルサス。よろし
くお願いしますね」

「こちらこそ。じゃあ、行こう。カルチエトで船の切符を買おう」
二人は、互いに頷きあうと草原を南へと歩き出した。目指すは、
空白地帯最大の街、カルチエトである。しかし、同じころ、ダイム
ガルドはレメンシアの街を、フランチェスカ率いるギルド・リツタ
ーの部隊がアルサスとネルを探して出発したことも、アトリアの森
に影のような男たちが同じくネルを探して現れたことも、二人は知
る由もなかった。

8. ネルの決意（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せください。

9. 空白地帯の街

森林の枝から枝へと、いくつもの影が飛ぶ。猿か栗鼠のような獣に見えなくもないが、やがて、それが樹上から地上へ降り立つと、人の形をしていることが分かる。だが、人と呼ぶには、彼らの出で立ちあまりに奇妙だった。

彼らは、みな一様に、黒いタイツ状の装束に頭の方からつま先まですっぽりと身を包み、さらに肘から腕にかけて、三本の鉤爪のついたガントレットを装着している。もしも、彼らを目撃したものがいるなら、彼らの異様な姿に驚きを禁じえなかっただろう。それは、もはや人と言うよりも、魔物のシルエットに近い。もっとも、彼らは誰かに目撃されるような愚は犯さないし、もしも誰かに見られたなら、目撃者はアトリアの森に屍をさらしただろう。

「隊長、野営の跡があります」

と、一人の男が右手の鉤爪で指差す先には、アトリアの雪解け水運ぶ森の小川が流れており、その川辺に焚き火をした跡と思われる、石を積み上げた竈かまどがあった。隊長と呼ばれた男は、静かに竈に近づく、どこからともなく、手のひらと同じくらいの大きさの小さな箱を取り出した。箱の上面には、金属の棒が取り付けられてあり、表面には青銅の板が貼り付けてある。

隊長は、何かを探るように箱に取り付けられた棒をあちらこちらに向けてみた。すると、竈より少し離れた場所で、青銅の板が俄かに輝いた。青銅版に魔法の文字が浮かび上がる。

「エネルギーの片鱗が残っている。間違いない、未知の力の発生源はここだ。魔術師どもがこしらえた、こいつがそれを示している。ライオットさまがお探しの娘がどこへ行ったのか、手がかりを見つかるんだ！」

唯一、黒装束から覗く瞳が、仲間たちに向けられた。男たちは無言の返事を返すと、風のように散らばった。

「これは！ エイゲルの羽根です」

男の一人が、足元に落ちていた茶色の羽根を拾い上げる。

「こちらには、墓のようなものもあります」

べつの男が指差す場所には、石を積み上げた、簡素な墓らしきものがいくつもある。それは、アルサスが斬ったヴォールフを吊った墓なのだが、黒装束の男たちは知らない。

「随分と、河原の石が荒れております。おそらく、ここで何かがあったのではないのでしょうか？」

隊長の傍に近づいてきた、男が声を殺して言った。

「あたりに転々としている血痕。あれは、人間の血ではありません」
「魔物か……」

そう呟きながら、隊長は河原に点在する血痕に目を落とした。すっかり乾ききっているにもかかわらず、鮮血と見まごうほどの、赤々とした血の痕。人間の血ならば、赤黒く変色しているのが相場だ。おそらくもなにもない。ここで魔物と誰かが戦ったことは確かだ。その結果、未知の力が発現されたと推察するのが妥当だろう。だが、幸いにも人間の血痕らしきものは見当たらない。

「貴様の魔力で、娘の居所を探ることは出来るか？」

隊長に下知された男は、「はい」と短く答えて、瞳を伏せた。

魔力のない者には分からないことなのだが、魔法を使うと、わずかに『精霊イオン』と呼ばれるものが発生する。言ってみれば、精霊の力を借りて発現する魔法の残り香のようなものだ。それが、この場所には滞留している。おそらく、ここで戦った者か、魔物が魔法を使ったためだろう。

そのイオンの流れを追いかけるため、精神を集中し、身体の奥底に眠る魔力の感応を高めれば、それはわずかに森の外へとなびいていることが分かる。

「南です。すでに娘は森を後にしたようです」

「南……カルチェトの方角か。全員集合！ 娘を直ちに追跡を開始するぞ！！」

隊長の合図とともに、あたりに散らばっていた男たちは集まり、再び風のようにその場を後にした。

カルチエトの街は、空白地帯のダイヤモンド国境に程近い、南岸にある。海に面した港町であり、ここから、各国の交易船が寄航しており、商業の中継地点としても賑わっている、数少ない栄えた街である。ちなみに、ここに下ろされた貨物は、この街を取り仕切るマーチャント・ギルドに加盟している商人たちによって裁かれ、運輸ギルドによって、各国へ運ばれる。

そんなカルチエトは、貨物だけでなくいろいろなものが集まる。人、金、情報、ありとあらゆる有益、有害なものたちである。ある意味で、どの国にも属さない空白地帯らしい、無法の街とも呼べる。その分、活気にあふれており、ガモーフの辺境に育った、田舎娘のネルにとっては、見るものすべてが初めてのものばかりで、つい昨日まで、塞ぎこんでいたことも忘れて、笑顔をあふれさせた。アルサスはそんなネルを横目に、元来明るい子なんだと思った。

「アルサス！ 見てください。緑石英で作られた置物ですって！」
露天商が並べた、いわくありげな置物を手にとって、ネルはアルサスに見せてくれた。鳥なのか、獅子なのかよく分からない生き物の彫像だ。

「お嬢さん、お安くしておくよ」
ダイヤモンド人と思しき、肌の浅黒い露天商が、胡散臭い営業スマイルを、顔にまとりつかせて、ネルに怪しげな置物を勧める。
この手の露天商は、口八丁手八丁で、田舎者を丸め込むのが得意なタイプ、だと気づいたアルサスは慌てて止めに入る。ところが、アルサスが口を出す前に、ネルは置物をもとあった場所に戻すと、店主に向かって丁寧に頭を下げた。

「でも、旅の荷物になりますから。面白いものを見させていただき、ありがとうございました」

「は、はあ。どうも」

なぜか、店主も頭を下げる。ネルの無垢な笑顔には不思議な雰囲気があった、すでに六件目、ネルを丸め込んでわけのわからないものを売りつけようとした露天商はみな、同じように、何故か頭を下げ、ネルを見送った。

しかし、アルサスは、珍しいものを見つけると、それまでのネルからは想像できないほど、子どものように目を輝かせて飛びつく彼女の様にヒヤヒヤしっぱなしだった。

アルサスたちが、カルチェトに到着したのは、ちょうど昼を回ったところだった。アトリアの森を出て、街道で運良く辻馬車ギルドのウォーラを見つけた。黄色い三角の旗は、辻馬車ギルドの証だったが、ネルは少しばかり怯えていた。無理もない。ネルをセンチ・レバンへ誘拐しようとした、裏ギルドの「運び屋」は、辻馬車に偽装したウォーラで、ネルを運んでいたのだ。ネルにとって、その荷台はトラウマに近い。

それでも、何とかネルが辻馬車に乗ることを承諾してくれたのは、辻馬車ギルドの男が、陽気で気さくな男だったからだ。

そうして、馬車に揺られて、カルチェトへ到着した二人は、とりあえず、街を散策がてら、魔法使いギルドの運営する魔法学校がある、「学園島ルミナス」へ向かうための船の切符を買うことにした。「ネル、何でもかんでも飛びつくのは、勘弁してくれ」

港の方へと歩いていきながら、アルサスは、ネルに苦言を呈した。ネルは少しだけしゅんとする。言ってみれば、お上りさんなのだから、仕方がない。

「ごめんなさい……。なにかもが珍しくて。わたし、ラクシヤから一度も出たことがなかったから」

「別に怒ってるわけじゃないよ。俺もレイヴンになるため、家を出た時は、見るものが珍しくてワクワクしたよでも……」

と言うアルサスの傍をみすばらしい姿の男がすれ違う。不意に男がふらついて、アルサスの肩にぶつかかった。

「おっと、すまねえな、兄ちゃん」

そう短く謝って、男は立ち去ろうとする。すると、突然、アルサスは踵を返して、男の腕を乱暴に掴んだ。

「世の中には、悪いやつも沢山いるからね。たとえばこいつみたいにつ！」

「痛てえなっ！ 何しやがるっ！！」

男は往來の真ん中で叫んだ。アルサスは、驚いて目を丸くするネルを他所に、男の腕を強く捻ってみせる。すると、男の手から、小さな皮袋がこぼれる。あれは、お金が入ってるアルサスのお財布！ 気づいたネルはすかさず、革袋を拾い上げた。

「今時、ぶつかった隙にスリなんて、古典芸能通用しないぜ。ギルド・リッターに突き出されなくなったら、とっとと、どこか行きやがれっ！！」

アルサスは、男の手を離すと軽く毒づいて、男の尻を蹴飛ばした。往來を行く人たちの視線が、スリの男に集中する。スリに失敗した上に、衆目に曝されたスリの男は、恥ずかしそうにそそくさと逃げ出した。

「アルサス……」

革袋を差し出すネルに、アルサスは少し笑って、

「とまあ、油断はするなってこと。いい人ばかりじゃないのが、世の中ってやつだから」

と、革袋の財布を受け取った。ジャラリと、金貨の音がする。

「でも、アルサスはいいい人です」

「どうかな。じつは、悪いやつかもよ。レイヴンなんて、ヤクザなことやってる身分だからね。何の縛りもないだけに、裏ギルドよりずっと性質が悪い。実は、ネルを外国に売り飛ばそうとしてたりして……」

ちよつと怖い顔を作って、アルサスが低い声で脅すように言う、ネルはクスクスと声を出して笑いながら、アルサスの少し前に走り出す。そして、振り向くと、

「大丈夫です。手の暖かな人に、悪い人はいないって、お父さんが

言ってましたから。それに、そんな顔、アルサスには似合ってますよ！」

と、アルサスに言った。

「え？」

アルサスはネルの言葉の真意がつかめず、きょとんとしながらも、ネルの後を追いかけた。

往来を通り過ぎ、港の入り口に入る前にアルサスは街の路地裏に入った。建物と建物の間の細く薄暗い通路は、とても狭苦しく、時折猫が足元をすり抜けていく。しばらく路地裏を歩くと、その突き当たりに、小屋と呼ぶのがふさわしいような、三角屋根の家が現れる。他の建物は、ダイムガルドの建築様式に近い、砂のレンガを積み上げた箱型の建物であるから、余計に三角屋根の家が浮いて見える。

「ここは？」

三角屋根を見上げて、ネルがたずねると、アルサスは入り口の扉にかけられた小さな看板を指差して、

「魔法カード屋さん」

と、言った。「魔法カード」とは、ネルの手錠を解いたり、バセツトとの戦いの時に、アルサスがポケットから鳥足した、魔法円の描きこまれたカードのことだ。人間なら誰でも、魔力の素養があるわけではない。アルサスのように、まったく魔法を使えない人間でも、簡単に魔法を使えるように、魔法使いギルド「ワルブルガ」が開発した。利便性は高く、リスクも伴わないために、レイヴンをはじめとした旅人たちにとっては、御用達アイテムの一つである。もっとも、欠点もある。カードは、一度きりの使い捨てだし、威力をコントロールすることは出来ない。中には、極端に威力の弱いカードを売りつけるカード屋もいて、そういうカードのことを、誰ともなく「スカ」と呼んでいた。

「いらっしやい……なんだ、アルサスじゃないか」

店に入ると、カウンターの奥に座る小さな老婆が顔を挙げ、アルサスを見るなり溜息混じりに言った。フード付のローブから覗くその顔は、年輪のような皺が刻まれ、モノクルが皺の間にぼつちりと挟まっているようだった。

魔法カード屋の店内は、ランプが二つほどしかなく、やたらと暗い。その上、足元には、本があちこちに転がっていて、気を抜けば躓いて転んでしまいそうなほどだった。さらに、鼻をつんと突くような、カビ臭さがある。

「なんだはないでしょ、なんだは。一応、それでも俺、なじみ客なんだけど」

アルサスが返すと、老婆はギロリと睨みつけた。

「この前、値切りに値切って、カードを四枚も持っていたのは、どこのどいつだい？」

「俺だよ。っていうか、婆ちゃんのカード、高すぎるんだよ」

「品質保証代だ。スカを掴まれないだけ、安いもんさね……。ところで、今日は、随分と可愛らしいお連れさんがいるようだけど」

老婆は、アルサスの後ろで、店の中をきよろきよろと見回すネルに気づいた。ネルにとっては、これも珍しい場所のひとつだろう。

「カチュアの衣裳……。ガモーフの娘さんかい？」

「え？ あ、はい。そうです」

老婆の値踏みするような視線には気づいたネルはかしこまってしまふ。すると、老婆は「ヒヤッヒヤッヒヤッ」と、独特の笑い声を立てた。

「あたしや魔物じゃないんだ、取って食いやしないさ。こっちへ来て、もっとよく顔を見せておくれ」

手招きされて、ネルはカウンターに近づいた。老婆は、ローブの懷から虫眼鏡を取り出すと、右目のモノクルにあてがって、ネルの顔を興味深く覗き込む。

「ほうほう。銀色の髪とは珍しい。アルサスの赤い瞳ぐらい珍しい。かつて、女神アストレアに仕えた天使が二人いた。一人は、金の若こがねのわこ

子。もう一人が、銀の乙女。娘さんの髪は、その銀の乙女によく似ておる」

ネルの側からも、大寫しになった老婆の顔が百面相のようにくるくるとする。アルサスとネルは老婆の占いじみた鑑定に、複雑な顔をして視線を交わした。

「もつとも、あたしや、銀の乙女なんて見たこたないがね。ヒヤッヒヤッヒヤッ！ いいものを見せてもうた」

そう言うのと、なんだか愉快そうに、皺だらけの顔をよりくしゃくしゃにして、老婆は虫眼鏡をローブにしまいこんだ。

「さて、アルサス、今日は何のカードが用入りなんだい？」

「ああ、フランメ・プファイルを一枚、ヴィント・プファイルを一枚あと、四色バックラーのカードを一枚ずつほしい」

営業スマイルに戻った老婆に、アルサスは購入するカードを伝えた。

「なんだい、戦争でもおっぱじめるのかい？」

と冗談交じりに言いながら、注文を受けた老婆は、カウンターの下から六枚の真っ白なカードを取り出した。そして、その一枚一枚に、これまた皺だらけの手を添える。すると、老婆の手が俄かに輝き、カードに次々と、幾何学模様の魔法円が描き出されていく。こうして、一枚ずつ魔法を封じ込めておくのだ。

「別に、戦争するわけじゃないよ。護身用ってやつ。婆ちゃんの魔法カードは、俺の剣よりよっぽど頼りになるからね」

アルサスは、革袋から金貨を取り出す。六枚で、しめて百二十ドラクマ。レストランでの一食が、だいたい五ドラクマほどで済むのだから、安価とはいえないが、さすがにネルの手前、渋る気はない。

「アルサスがお世辞を言うなんて、珍しいこともあったもんだね」
カードに魔法を込め終わった老婆は、それをアルサスに手渡し、引き換えに金貨を受け取る。

「でもいいのかい？　ここで使い果たしてしまうことになるかもしれないよ」

「はあ？」

老婆の言葉の意味が分からず、アルサスは思わず小首をかしげた。「気づかないのかい、この気配に。店をいくつも取り囲んでる。こりゃ、敵意むき出しだね……」

老婆はまるで他人事のように言う。「まさか」と言いかけたアルサスは、ハッとなって、後ろを振り向いた。窓ひとつない、老婆の店。入り口の扉の向こうから、じりじりと迫りくる悪意を感じたのだ。

「魔物でしょうか……？」

ネルも、忍び寄る敵意を感じたのか、不安そうにする。だが、アルサスにはその敵意が、魔物のものでないと分かっていた。大きな街には、大抵、魔法使いギルドやギルド・リッターなどによって、魔物を寄せ付けなかったための「簡易結界」が張られている。魔物は、街に侵入することはおろか、近づくことすら出来ないのだ。

「違うね。こんなに分かりやすい悪意、人間以外の何者でもないよ」アルサスに代わって答えたのは、老婆だった。

「アルサスや、暴れるのは勝手にして欲しいが、店を壊さないでおくれよ」

「分かってるよ、婆ちゃん。一気に港まで駆け抜ける。ネル、走れる？」

アルサスが問いかけると、ネルはこくりと頷いた。

「よし、じゃあ行くよっ……！」

アルサスは腰に帯びた剣を引き抜く。そして、ネルの手を取ると、睨みつけた店の扉を勢いよく蹴り開けた。

9. 空白地帯の街（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せください。

10. 影走り

派手な音を立てて、開け放たれた扉から、光があふれ出す。暗がりの店内にいたため、一時的に眼球が明反応を起こしたのだ。だが、アルサスはそれにひるむことなく、ネルを手を引っ張って走り出した。裏路地を抜け、大通りをまっすぐ走れば、港が見えてくるはずだ。

「アルサス、屋根の上っ!!」

いち早く、太陽の光に慣れた、ネルが路地の両脇を囲む箱型の建物の屋上を指して叫んだ。そこには、太陽の光を背に受けて、いくつかの黒い影が飛び交う。と、その時である。不意にアルサスの足を風が切った。舗装されていない地面に何かが突き刺さる音。

アルサスは、急ブレーキをかけた。見れば、足元には十字架状の先の細い短刀が突き刺さっている。屋根の上を飛び交う黒い影が投げつけてきたことは明白だ。急ブレーキをかけなければ、今頃、殺意を帯びた短刀に突き刺されていただろう。

「ミセリコルデかつ！ やっぱり、魔物じゃねえな……」

アルサスはそう呟くと、再び走り出した。黒い影は、ひたすらにアルサスたちを追いかけてくる。その執拗たるや、獲物を付けねらう野犬の群れのような。しかし、野犬がミセリコルデを放ってくることはない。ミセリコルデとは、暗殺用の投擲短刀とうてきの名であり、ガモーフではステイレットと呼ばれている。本来は、甲冑の隙間や鎖帷子りかたびらを貫くために考案された隠し武器のことである。

そんな、殺傷目的の武器を放ってくるのは、人間のほかにいないことを、アルサスは知っていた。

「こっちだ、ネルっ!!」

突然、アルサスの踵が、くると路地を曲がる。さらに路地は狭くなり、ついには、三方を建物の壁で囲まれた行き止まりへと達する。振り向いた二人の目に飛び込んできたのは、列をなすように、

次々と地面に突き刺さりながら迫ってくる何本ものミセリコルデである。

「その、木箱を使って上へっ！」

路地の隅に、貨物用の木箱が置かれている。しかも、ちょうど建物の屋上へ上がれるように、階段状になっていた。アルサスは、それを見越していたのだろう。このまま往来に出れば、町の人を巻き込んでしまうかもしれないし、運悪くカルチェトの治安警備を担うギルド・リッターに見つかってしまうかもしれない。

ネルは、頷くとアルサスから手を離して、木箱に足をかけた。階段状と言っても、一段の高さは腰ほどもある。よいしょ、よいしょとネルが木箱を上る間、アルサスはひらりひらりと剣を振り回し、巧みに、ミセリコルデを打ち払う。

「アルサス！ 早くっ！！」

屋上に上ったネルが、手を伸ばす。アルサスは、すかさず木箱に飛び乗り、ネルの手を掴んだ。無論、非力な少女の力で、少年を引き上げることは出来ない。アルサスは、木箱の淵を強く蹴ると、屋上に飛び上がった。

屋上から見えるカルチェトの街の景色は、少し変わっている。老婆の店のような三角屋根の建物は他になく、また、建物の高さがほぼ均一で、このまま屋上伝いに走れば一直線に港へとたどり着けるようになっていいる。そして、ここからでも、港に停泊する海運ギルドの帆船がよく見える。そのうち、一隻はマストの先端に、海運ギルドを現す、牙鯨の紋章旗と、魔法使いギルドの白と黒の二色旗がはためいていた。

どうやら、あの船が魔法学校のあるルミナス島へと渡航するため客船らしい。しかも、好都合なことに、出航直前を表す信号旗まで揚がっている。船に逃げ込めば、こっちのもんだ！

と、アルサスが思った瞬間、背後に殺意が迫る。咄嗟のことにネルが「キャッ」と悲鳴を上げたかと思うと、アルサスはくると体を反転させて、すばやく剣を薙いだ。金属と金属がぶつかる音。ア

ルサスの剣がミセリコルデを打ち落としたのだ。

「足の早いヤツらだ。ネル、俺の後ろに隠れて」

アルサスはそう言うと、ネルを下がらせて、自らは剣を両手で構えた。黒い影が、幾重にも交差しながら、屋上伝いにこちらへとやってくる。そして、適当な間合いを取ると、影は立ち止まった。

それは、影ではなく人。アトリアの森から、アルサスたちを尾けて来た、黒装束の男たちだった。

「こいつら、『影走り』か!？」

アルサスが、掃き捨てるように唸る。知っているんですか？と問いかけようとしたネルは、アルサスの横顔を見て、思わず閉口した。焦っている顔。バセットと戦った時よりも、明らかにアルサスの顔に、焦りがにじみ出ている。

「ほほう、レイヴンの分際で、我ら『影走り（シャドウズ）』をご存知のようだな。これは、光栄だ。しかし、ここでお別れだ。その娘をこちらに渡せ。そうすれば、少年よ、貴様の命は助けてやろう」
淡々としやべる、隊長と思しき男の背後で、部下の黒装束が、ミセリコルデを構える。すでに、夕刻を示す赤みを帯びた太陽の光に、ミセリコルデの刃が俄かに光った。

「魔物どもと同じことを言うのな。お前らも、ネルが狙いなのかよ？ いや、そりゃそうか……。でも、素直に渡すと思うか？」

アルサスは、そつとズボンのポケットに片手を忍ばせた。

「アルサス……」

小声でネルが、アルサスの袖を引っ張る。アルサスは、視線を黒装束たちから離すことなく、囁くように応じた。

「大丈夫。魔法カードを使うから、魔法が発動したら、港へ一気に逃げるんだ。こいつらは、港にまで入ってこられない」

「え？ どうしてですか？」

「説明は後。途中で転んじゃだめだよ、振り返ってもダメ。こいつらは、人を殺すことに何の苦痛も覚えない『殺し屋』だ」

と言う、アルサスは、焦りを覆い隠すかのように、小さく笑った。

人を殺すことに胸を痛めない人間……だから、アルサスは焦っているのだ。

魔物よりも、強い殺意、それを放っているのが、この男たち。ネルの脳裏で、村を襲い自分を攫った黒い鎧の男が過ぎる。それは、あたかも目の前の男たちの黒装束と重なり合う。胸の奥が抉り出されるように気分が悪い。

でも、アルサスの言ったとおり、走らなきゃ。死んでもいいなんていっちゃダメ。アルサスとの約束だ。

「何をこそそとしている？ 素直に娘を渡さないと言うのなら、貴様を切り刻んで、その娘を連れて行くまでだ」

黒装束の隊長が、唯一装束から露出した目玉をギョロリと動かし、腕に装着した、クロール・ガントレットを構える。ミセリコルデを投げつけられるのが先か、ガントレットの爪が襲い掛かってくるのが先か。一瞬の誤差で、やられるのは人を殺すと言うことに迷いのある自分だと、アルサスは分かっている。

「女の子ひとりに、大の大人が寄ってたかって、恥ずかしくないのかなって話してたんだよ」

「なんだと!？」

刹那、隊長の顔色が変わる。その好機を、アルサスは見逃さなかった。

「帰ったら、アイツに報告するんだな。『がんばったけど、逃がしちゃいました』ってね!!」

と、毒づいて、ポケットから買ったばかりのカードを取り出す。

「黄の精霊、その封印を解き放ち、土隆の盾となれ。エーアデ・バツクラー!!」

解放の呪文とともに、カードに描かれた魔法円が解け、強い光を発した。すると、まるで黒装束の男たちと、アルサスたちを隔てるように、土の壁がどこからともなく隆起する。投げつけられたミセリコルデも、ガントレットの爪も、魔法の土壁に遮られてしまう。

「いまだ、ネル! 港まで走れっ!!」

アルサスの掛け声にはじかれるように、ネルは走り出した。すぐに、彼らは追いかけてくる。港に飛び込めば、こちらの勝ち、追いつかれれば負け。はっきりとした勝敗が、ネルの背中を押した。

魔法の土壁は、ものの数秒で跡形もなく消え去る。もともと、盾の魔法「バックラー」は一瞬の防御を行う、魔法障壁に過ぎない。マジック・バリア

「くそっ!! 港へ逃げ込ませるなっ!!」

追いかける黒装束たちの声。アルサスとネルは、その声を背中に屋上から屋上へと飛ぶように走り抜けた。しかし、その軽やかな足も、港を手前にして急停止する。

建物の高さは、二階建てより少し高いくらい。下は整備された硬い石畳。飛び降りるには多少の危険が伴う。まして、女の子であるネルにとって、そんな経験もなければ、勇気もない。そこは、まさに断崖のそれと同じだった。

「おおい、そんなところで何やってんだ、危ねえぞ!!」

下から、怒鳴り声が聞こえる。それは、建物の屋根の上から、港の敷地を臨むアルサスとネルの姿を見つけた、海運ギルドの水夫だった。

「おっちゃん! 助けてくれっ!!」

アルサスが水夫に背を向けて言う。もちろん、水夫は何のことだか分からなくて、きょとんとしていたが、屋根の上のアルサスが剣を振り、水夫の足元にミセリコルデが落ちてくると、顔を真っ青にした。

「お願いします、おじさまっ!! 助けて下さい」

ネルが屋根の淵に両手をついて、水夫に懇願する。水夫は、こくこくと頷くと辺りを見回した。クッションになるようなやわらかいものはないかと探すが、都合よく見当たらない。いや、あるじゃないか、船上で鍛えた、この逞しい胸板が!!

「お嬢ちゃん! 俺の胸に飛び込んで来なっ!!」

水夫は両腕を広げて、ネルを待ち構える。日焼けした肌に映える白い歯が、キラリと光るが、却ってそれが、ネルを困らせてしまう。

「あ、アルサス、どうでしょう？」

「迷ってるヒマなんかねえ！！ 急げ、ネルっ！！」

剣を構えるアルサスは、ネルに促した。ネルは、意を決して屋上から飛んだ。義侠心あふれる水夫にいやらしさはないものの、それでも、男の人の胸に飛び込むのは、女の子として気が退ける。だからなのか、ネルは「ごめんなさいっ！」と自然に叫びながら、水夫の逞しい胸に飛び込んだ。

それを確認したアルサスは、追いかけてくる黒装束にニヤリと笑い、身軽に屋上から飛び降りた。アルサスには、彼らが港地域に入って来られない理由が分かっていた。

「こいつぁ、一体どうしたんだい？」

ネルをキャッチした水夫は、彼女を地面に降ろしながら、抜き身の剣を手にしたアルサスに尋ねた。

「ちょっと、蜂の巣をつついちゃってね。こわーい、殺し屋のおっさんたちに負われてるんだよ」

自分でも耳を疑いたくなるような、適当な言葉がペラペラと口をついて飛び出す。しかし、水夫は疑う様子もなく「そいつは大変だ！ あわわ」と、筋骨隆々の図体に似合わぬ慌てつぷりを見せた。

「悪いんだけど、おっちゃん！ ルミナス島行きの船まで案内してくれ」

アルサスは、そんな水夫に言う。すると、水夫はニカツと白い歯を輝かせて笑い、

「そいつは、渡りに船だ。俺は、その船の乗組員だからな！ こっちだ、お嬢ちゃん、小僧っ！！」

と、腕を振って、こっちだとアルサスたちを誘導する。アルサスとネルは頷き合わせると、水夫の後を追った。

背後に迫る殺気が、屋上の上から悔しそうに、睨みつけてくる。アルサスは走りながら、ちらりと、彼らの方に一瞥をくれた。装束に覆われてはつきりとは分からないが、きっと苦虫を噛み潰したような顔をしていることだろう。アルサスの読みどおり、彼らは、海

運ギルドの港に入ることには出来ない。なぜなら、ギルド連合と各国政府は不可侵の協定を結んでいる。彼らが名乗ったとおりに、センチ・レーバン非正規部隊「影走り（シャドウズ）」ならば、武器と殺意を携えて、海運ギルドの領内である港に入することは、彼らの独断で、協定を踏み越えることになるからだ。

「センチ・レーバンか……」

「アルサス？　どうかしました？」

人知れず呟いたアルサスの声が聞こえたのか、少し前を走るネルが振り返る。さっきからアルサスの様子が変わだ……。ネルはそう思ったのだが、アルサスはいつもの余裕ある笑顔を見せて、

「何でもないよ。急ごうっ!!」

と言って、ネルの手を取った。

10. 影走り（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せください。

11. 月夜の船旅

アルサスたちが、ラツタルを上り船に駆け込むと同時に、船は舳はしけを下ろし、カルチェトの港を出港した。船に乗り込んでから、自分たちが切符を買っていないことに気がつき、青くなる。これでは、いわゆる無賃乗船、密航というやつだ。密航は、ギルド連合の約款やっかんで重罰が与えられる。

すでに、船はカルチェトを離岸している。どうしよう！ と慌てていると、アルサスたちを助けてくれた水夫が、もはやトレードマークとも思える白い歯をキラリとさせて、「心配するな」と言って、二人分の切符を用意してくれた。元来、人のいい男なのかもしれないが、ネルが何度も感謝の言葉を言うと、彼は高らかに笑って、

「困った時はお互い様さ！ それに、海の男は風鷗かぜかもめと可愛い娘こには、親切なのさ！」

と海風と一緒にさわやかに言った。

そんな水夫のおかげで、雑魚寝の船倉室ではなく、一晩のふかふかベッドを手に入れることができた。アルサスとネルに、一室ずつ個室の客室が用意されたのだ。ルミナス島までは、順風満帆でも半日以上かかることを思えば、危うく密航者にならずに済んだことも含めて、水夫の親切さは至れり尽くせりだった。

「それじゃ、明日の朝」

そう言って、それぞれの部屋へ別れ、自分の部屋に入ったアルサスは、リュックを下ろすと、ベッドに身を投げ出した。おそらく隣室のネルも同じように、ベッドに寝転がっているだろう。彼女にとっては、三ヶ月の間、過酷な日々の連続だったはずだ。それを思えば、船旅の間だけでも、そっとしておいてやりたいと、アルサスは天井を見上げながら思った。

天井にぶら下げられた、ランプが船の揺れに合わせて、ゆらりゆらりと揺れる。それを見ていると、どっと疲れが押し寄せてきて、

自然と睡魔が襲ってくる。アルサスは、そのまま、ふかふかベッドに埋もれるように、眠りに沈んでいた。

そうして、どのくらい眠りについていただろう。隣室の扉が開く音がして、アルサスが目を覚ました時には、船窓から見える洋上はすでに、夜に包まれていた。

「ネル？」

ベッドから起き上がったアルサスは、部屋の前を通り過ぎる靴音に耳を澄ました。潮騒と船体やロープがきしむ音に混じって、足音は客室の廊下を甲板へと歩いていく。アルサスは、怪訝に思い、そっと部屋の扉を開いてみたが、すでに廊下にネルの姿はなかった。

どうしたんだろう、眠れないのかな？ そう思ったアルサスは、護身用に剣だけを携えて、部屋を出た。甲板までは、薄暗い廊下をまっすぐ歩くだけ。その先にある階段を上れば、船の前部甲板へ出ることが出来る。

アルサスは、甲板をぐるりと見回して、ネルの姿を探した。彼女は、ひとり甲板の縁に佇み、夜の海をぼんやりと眺めていた。

さらさらと潮風に揺れる三つ編みにした銀色の髪も、海を眺めつつ愁いを帯びた横顔も、月影に照らされて、一枚の美しい絵画のよう映る。なるほど、水夫が「可愛い娘」と言ったのも頷ける。アルサスは、思わず声をかけるのも忘れて、ネルの後姿に見とれていた。

そんなアルサスの視線に気づいたのか、ネルが振り返る。

「アルサス！ ごめんなさい、起こしてしまいましたか？」

と言う、ネルの目に一粒の涙が光った。

「泣いていたの？」

アルサスが問いかけると、ネルは困ったような顔をして、手の甲で涙を拭う。そんなネルの姿に、アルサスは少しだけ微笑んで、そっとネルの傍に寄ると、夜の海を一望する。

「怖い夢でも見た？」

「い、いいえ。違います。その……船に乗るのはじめてて、酔って

しまったんです」

アルサスに妙な気遣いをさせまいとしたのか、問いかけに答えるネルの声は、どこかしどろもどろしていて、すぐに嘘だとばれる。

「ネルって、嘘つくの下手だね」

そういわれて、ネルは直良困った顔をして、再び夜の海を見つめた。船は、わずかな風を受けて陸地沿いに進む。波は低く、月を写しこむ水面は、キラキラと輝いていた。見上げれば、月影に負けじと輝く無数の星。空を縦断するのは、天の川と呼ばれる星の川。そして、頭上高く輝く星は北極星。こんな穏やかな気持ちで、夜空を見上げるのは久しぶりのことなのに、ネルの胸は苦しくて仕方がなかった。

「力のこと、知るのが怖い？」

アルサスがたずねると、ネルは頭を左右に振った。

「怖くないって言ったら嘘になってしまいますけど、でも、自分で決めたんです。奏世の力のことが知らなきゃいけないって。でも、それよりも、今は家族のことが心配なんです。妹のメルや両親、村のみんなが無事なのか心配で、そうしたら、なかなか寝付けなくて」

ひとたび眠ろうとすると、瞼の奥に家族の顔が蘇る。必死にネルを守ってくれた、村の人たちの顔が思い出される。幼いころの記憶のないネルにとって、実の親でないと知りながらも、大切に育ててくれた両親も、明るく慕ってくれる妹のメルも、優しい村人たちもすべて大切な家族なのだ。その家族のことを思えば、ふかふかのベッドで眠っていいのか、安心していいのか分からなくなつて、キュッと胸を締め付けられるのだ。

「そっか……。安受けあいするつもりはないけどさ、大丈夫だよ。きつと神さまが、ネルの家族を守ってくれているよ」

そう言って、少し照れくさそうに、アルサスは星空を仰いだ。塞ぎ込んでしまわないように、ネルを元気付けようと思ったのだろう。

ネルは、アルサスの言葉にふと、あのときのことを思い出した。バセットに斬りつけられ、大量の血を吐き出して倒れたアルサスを

抱きしめた時、頭の中に響いてきた声。どうして、あれを女神アストレアの声だと思ったのかは、ネルにも分からない。見守ってくれている……もしも、あの声が、アストレアが見守ってくれていると言ふのなら、信じたい。「奏世の力」が、バセットの言うようなものではないと。

「ねえ、アルサスは神さまを信じていないんですか？」

アルサスには、あの声は聞こえていない。自分だけが聞いたのだ。だからこそ、ネルは訊いてみたかった。

「信じてないわけじゃないけど……。目に見えないような神さまなんて、肝心なときに頼れないと思ってる。そういうの、現実主義っていうのかな。理想だけじゃ、なにも出来ないんだってこと」

「なにも出来ない？」

「一般論だよ。レイヴンなんて、その日暮の生活してるとき、頼れるのは神さまじゃなくて、この剣だけだって気づくのさ」

そう言って、アルサスは腰に帯びた剣の柄をぽんぽんと叩いた。刀剣に詳しくないネルでも、魔法文字の刻まれた美しい剣は、立派だと思ふほどの名剣だ。

「でもさ、神さまを心の支えに生きるとは、何も悪いことじゃないと思うよ。信心のない俺が言うのもなんだけど、要は、人それぞれに信じるものがあるってこと。君はアストレアを、俺はこの剣を」

「どうして……、どうしてアルサスはレイヴンになったんですか？」

アルサスほどの剣の腕前をもってすれば、王国の騎士さまや、ギルド・リッターの隊員さんになっていてもおかしくないと思います」

「うっ、痛いところ突いてくるなあ」

アルサスが苦笑する。ネルは「ごめんなさい、余計なことを！」と慌てたが、アルサスは怒っている様子もなく、

「前もって言うっておくけど、俺はそんなに強くないよ。ただ……気ままな旅がしたかったんだ。騎士やギルドメンバーになれば、出世だの、忠義だの、任務だのと縛られるものがたくさんある。何かに束縛された人生は、嫌だった。だから、家を飛び出して、剣と少し

だけの路銀で旅をしていたら、いつの間にかレイヴンになってたってわけ」

と、記憶を手繰るように言った。

「家出、したんですか？」

「さあね……それよりも、部屋に戻ろう。しっかり寝ておかないと、今度いつかふかのベッドで眠れるか分からないよ。それが、レイヴンの生活だからね」

アルサスは、くると踵を返す。まるで、自分のことはあまり語りたくない、アルサスの背中が言っているようだった。ネルは、「分かりました」と答えつつも、アルサスのことをほとんど知らないことに気づいた。魔物と友達だったり、「影走り」のことを知っていたり、よく分からないところが時々ある。

「ううん、アルサスは悪い人じゃない」

ネルは、部屋に戻るアルサスの背中に向かって、小さく呟いた。

エーアダ通信とは、土の魔法エーアダを応用したものである。遠くにいる相手と、通信会話をするため、エーアダの魔法で、地面を振動させるのだ。ただ、このエーアダ通信には欠点がある。返信を期待する場合には、相手も魔法を使えなければならぬため、一方通行な通信手段であり、心得ある魔法使いなら通信振動を読み取って、情報を中抜きすることが出来てしまう。つまり、通信の秘匿性に、いまいち信用が置けない。

そのため、書簡や手紙によるやり取りも、廃れてはいない。しかし、エーアダ通信が着信する速度は速く、緊急を要する通信では、専らエーアダ通信が用いられていた。

メツツエ・カーネリアがその通信を受け取ったのは、アルサスたちがルミナス島行きの船に乗り込んだ後だった。エーアダ通信の受信には、「アンバー」と呼ばれる土の魔法の振動を受け取る稀少鉱石を用いる。銀の装飾台に吊るされた、親指ほどの黄色いアンバーが震えて、声となるのだ。

『メッツェさま。こちら、シャドウズ一番隊。積荷を取り戻すこと
かなわず。積荷にはカラスが一匹かじりついていました。積荷とカ
ラスは、ルミナス行きの船に乗船した模様。指示願う』

アンバーの振動から聞こえる声は、朝方放った密偵からのものだ
った。メッツェは、小さく溜息をついて、ペンを置いた。

王城の南棟にある、宰相府付参謀官執務室。メッツェは、自分に
与えられた個室で、ランプの明かりを頼りに、雑務の処理をしてい
た。すでに窓の外には、夜の城下町が広がっている。雑務をこなす
のは嫌意ではない。メッツェは、まだ二十歳を過ぎたばかり。歳若
く、才気にあふれ、眉目も秀麗であるから、城のメイドたちには人
気が高く、他の参謀官や文官たちからは妬まれている。しかし、仕
事をしていれば、そういう周囲の反応など、気にしなくとも済むの
だが、悪い報告を聞かされると、つい疲れの混じった溜息がこぼれ
てしまう。

「カラス、か」

メッツェは、モノクルを外し、金髪をかきあげた。「積荷」とは、
上司である宰相ライオットが、黒衣の騎士団に攫わせた娘のこと、
「カラス」はその娘を運び屋から奪ったやつのことだろう。カラス、
即ち放浪者・レイヴンの事を指している。

「レイヴン風情が、何故娘を奪った？ 誰かに頼まれたか……」

レイヴンが路銀を稼ぐため、誰かの依頼を受けることは知ってい
る。ギルドや裏ギルドのように、組織立っていない分、面倒な奴ら
という認識があった。

「誰がレイヴンを雇った？ ……まさか、あのお方が」

メッツェはハツとなる。ハツとなってから、それは考えすぎだ、
と思い直し、アンバーに手をかざす。小さく魔法の呪文を唱えれば、
アンバーが小刻みに震え始める。

「こちら、カーネリア。報告ご苦労。積荷の対処はこちらで行う。
追って命令あるまで待機されたし」

メッツェの声を乗せた振動は、銀の懸架台を伝わり、城の壁を駆

け巡り、地上から相手へと向かう。メッツェはさらに、もう一度魔法を唱えた。

「こちら、カーネリア。『ガムウ』を使う。至急準備せよ」

エーアデ通信は、その秘匿性にかけるため、簡潔で暗号めいた言葉を送らなければならない。しかし、「ガムウ」の名を知るものはいないだろう。

通信を終えると、メッツェは一息ついて、再びモノクルを着け、ペンを持った。すると、そのタイミングを計ったかのように、個室のドアがノックされる。

「メッツェ参謀官。先ほど、親衛騎士団クロウ・ヴェイル隊が、アローズ関所より帰還したそうにございます」

下仕官の声だ。メッツェは、「そうか、今行く」と答えて、再度ペンを置くと、立ち上がった。今頃、上司である宰相ライオットは、私室でいびきをかいているだろう。自分が床に入れるのは、何時になることやら。部屋を出るメッツェの、目の端は、深夜を示す時計の針を捉えていた。

11. 月夜の船旅（後書き）

ご意見・感想などございましたら、お寄せください。

12. ルミナス魔法学校

潮風を辿り、海面ぎりぎりを滑空する風鷗は、海の男たちのコンパスの代わりでもある。そんな風鷗がアルサスたちの乗る船を、ルミナス島へと導いてくれた。

翌朝、風鷗の猫を思わせる鳴き声で目を覚ましたアルサスは、船窓から見えるルミナス島の全景に、思わず目を奪われた。

それほど巨大な島ではない。全景を目の中に収められるほどの大きさだが、驚きなのは、城がぽっかりと海上に出現したのかと勘違いしてしまうほど、巨大で荘厳な要塞が島の上に聳え立っているのだ。つまり、島全体が魔法使いギルドの本拠地である「ルミナス魔法学校」である。

魔法使いギルドは、大小五十あまりのギルドが連盟して作られる、大ギルドである。組織規模としては、ギルド・リッターやギルド・マーチャントを越える。その、魔法使いギルドの本拠地である「ルミナス魔法学校」はその名前の通り、次代の魔法使いを育てるための学校が中心にあり、さまざまな魔法技術の研究機関が研究室を設け、世界中の知識と技術が集約する、最先端の街でもある。

噂は耳にしていたものの、アルサスもこの島を訪れるのは初めてのことだった。まして、ガモーフ神国の辺境にあるラクシャ村から出たことがなかったと言うネルにとって、ルミナスの全景は多大な衝撃をもたらした。

アルサスよりも早く目を覚ましたネルは、今度はアルサスを起こさないように気を遣い、そっと部屋を抜け出した。甲板に出ると、透き通るような青空に吹き抜ける朝の潮風が心地よく、昨晚抱いた不安や悲しみを吹き飛ばしてくれる。どうしても、夜は心細くなってしまう。妹のメルや、家族、村の人たちのことを考えると、胸が苦しくなる。そんな自分を、アルサスが優しく元氣付けてくれたのは、心から嬉しかった。

ネルは甲板で伸びをして、あたりを見回した。甲板には、他の乗客の姿もあった。灰色のローブに身を包んだ青年や、商人らしき男、お金持ちの夫婦など、乗客の素性はさまざまだが、客の姿は少ない。だから、あの水夫はネルたちに個室を用意できたのだろう。

そんなことを考えていると、

「おはようさん。どうだい、船旅は？　よく眠れたかい？」

と、例の筋骨隆々の水夫が、姿を見せた。昨日と同じく、真っ白な歯をキラリとさせながら、水夫はネルのもとに寄って来る。

「あ、はい。おかげさまで。何から何まで、ありがとうございます。た」

「礼には及ばねえさ。金ももらってるし、どうせ客の少ない就航便だからな。それよか、お嬢ちゃん、あっちを見てみなよ」

水夫が太い腕で、海の向こうを指差す。そこには、洋上に浮かぶルミナス島があった。朝日の逆光を受けて、シルエットとなったルミナス魔法学校の城は、ネルに驚嘆を与えた。巨大な建造物など見るのは初めてだ。

「あ、あれがルミナス魔法学校ですか！？」

ぽっかりと口を開け、校舎というよりは城塞のような魔法学校を見つめて、ネルが驚きの声を上げる。水夫は、ネルの素直な驚きように、嬉しくなったのか、すこし自慢気になった。

「そうさ。魔法使いギルドの初代ギルド長が建造させた校舎だ。学園島のシンボルでもある。あそこには、二千人もの学生と研究者、それから世界中の本が集まってるんだ」

まるでガイドよろしく水夫が解説を加えると、ネルは感心したような声を上げながら、徐々に船が接近していくルミナス島の全景を見つめた。

「そう言えば、連れの小僧は、どうした？　女の子一人にして、まだ寝てやがるのか？」

水夫は、客室のある船室の方を見やって、仕方のないやつだな、と付け加えるように言った。ネルは慌ててアルサスのフォローを入

れようとしたが、水夫はアルサスにはあまり興味がなさしく、く
るりと顔をネルの方に向け、執拗なほど白い歯をキラリとさせる。

「しかし、ルミナスへ行きたがる奴なんて、珍しいぜ。大体が魔法
使いか商人。あとは、ルミナスへの物資だ。たまに、その夫婦み
たいに観光つての人もいるけど。君たちも、観光かい？」

「えっと、観光……みたいなものです」

ネルは、答えを濁した。自分たちを助けてくれた水夫に、嘘をつ
くことは、少しだけ良心がちくりとする。しかし、だからと言って、
「奏世の力」などと、無関係の人間に話せることではない。

「そうか、観光か。若い男女が、二人きりで観光旅行ねえ……もし
かして、あのアルサスって小僧、君のカレシ？」

突然、ニカリと笑って、水夫が野暮ったく尋ねてきた。その問い
かけは、一瞬でネルの顔を真っ赤に染め上げる。ネルが、頭を左右
に振ると、三つ編みにした長い銀色の髪が、尻尾のように揺れる。

「ええっ!？　ち、違いますっ」

「じゃあ、まだ友達以上、恋人未満ってところか？」

水夫の顔が、やたら意地悪な人に見えてくる。

「ううっ、それは、その友達以上でさえないと言いますか。その、
わ、わたしが勝手に、アルサスのことを……」

そう言い掛けた、まさに最悪のタイミングで、

「おはよう、ネル、水夫のおっちゃん。何か楽しそうだね。何の話
してたの？」

と、客室の方からいつものニコニコとした笑顔をたたえた
アルサスが姿を現した。アルサスは、すでに旅支度を終えて、白銀
の鎧をまとい、リュックを背負い、腰に剣を帯びていた。

アルサスの姿を見たネルの頭上に、ぽんつと煙があがる。

「な、ななな何でもないですよっ!」

そう言って、ネルは耳まで真っ赤にして俯き、水夫は愉快そうに
笑い、アルサスはわけが分からずきよんとした。

そうこうしているうちに、ついに船は接岸を知らせる半鐘を鳴ら

しつつ、ルミナス島の南岸にある波止場へとゆっくり接岸した。錨いかりを下ろし、艇をつなぐ。船を降りる人は少ないが、港は船の届けてくれた生活物資で賑わっていた。ルミナス島は、そこに滞在する魔法ギルドの人間にとっては、生活空間であり、一種のコロニー（共同生活体）を形成しているため、学園全体が都市となつていと言
い換えてもいいかもしれない。

アルサスとネルは恩人である水夫に慇懃に礼を述べた。水夫は陽気に笑いつつ、

「困ったことがあったら、いつでも声をかけてくれ」

と、世話好きの顔を見せて、入島するアルサスたちを見送った。

この島へ来た目的は、ネルの体に眠る「奏世の力」について調べるためだ。アルサスたちは港を後にすると、まずは、魔法使いギルドによる、入島審査を受けた。といつても、堅苦しいものではない。学園である島に、争いごとを持ち込まないため、武器に魔法の封印シーリングを施し、荷物を調べられる程度である。

「ようこそ、ルミナス島学園都市へ」

と、審査の歓迎でゲートをくぐると、そこからは、学園都市が広がっていた。長いコンコースは、階段状になっており、まっすぐに校舎の入り口へとつながっている。その両脇には、購買部や食堂が軒を連ねており、昼時ともなれば、学生や研究員で賑わうことは、想像に難くない。すでに、コンコースには人の往来があり、先ほどアルサスたちとともに到着した物資が、校舎へと運ばれていた。

「ネル、カルチェトみたいにはしゃぐなよ」

校舎に向かう階段を上りながらアルサスは、物珍しそうに辺りを見回すネルに釘を刺した。「わかってますよ」とネルは微笑むが、アルサスは内心不安だった。元氣を取り戻して、明るくいてくれることは、アルサスとしても願ってもないことなのだが。

「おや、あんたたち、見ない顔だね」

不意に、すれ違う中年の女性が、アルサスたちの顔を見て振り返り、声をかけてきた。「観光かい？」とたずねてくるおばさんのふ

くよかな顔は、いかにも気さくな笑顔だった。

「いや、ちょっと調べものをしたくて。そうだ、おばちゃん。この島で一番魔法に詳しい人って、誰だか知ってる？」

アルサスは立ち止まると、おばさんに問いかけた。おばさんは、校舎の天辺を見上げるようにして、

「そりゃ、多分魔法学校の校長だろうねえ。でも、お忙しい方だから、あんたたちみたいな、旅の人に構っているヒマはないだろうねえ」

と、申し訳なさそうに言う。ちなみに、ルミナス魔法学校の校長は、魔法使いギルドの長が歴任している。現在の校長も、現魔法使いギルドの長であり、世界中の魔法使いの頂点にいる雲の上の存在だ。もちろん、そんな人にお目どおりがかなうとは、アルサスも考えていない。

「いや、さすがにお偉いさんじゃなくてもいいんだけど」

「そうねえ、他に心当たりがあるといえば……」
しばらく腕組みをして考えたおばさんは、まるで頭上に明かりでもともるかのように、ぽんっと、両手を叩いて、

「そうだ、パットンに会ってみなさいな。ここの学生だけど、とても頭のいいのよ。ちょっと食が細いのが難点だけど」

と、アルサスたちに教えてくれた。よく見ると、おばさんは給仕の格好をしている。どうやら食堂のおばさん、と言ったところだろうか。

「パットンね、ありがと、おばさん！」

「あ、ありがとうございます、おばさま」

アルサスにあわせて、ネルもぺこりと頭を下げる。すると、おばさんはエプロン越しに自らの太鼓腹を叩く。

「あら、お嬢ちゃんも、食が細そうね。ちゃんとご飯食べなきゃ、あたしみたいに立派になれないよ」

いや、なりたくないだろう。ネルの隣で聞いていたアルサスは、口に出しかけた言葉を飲み込んだ。

「よし、お昼には、家の食堂に食べにきなさいな。うんと、大盛りサービスしてあげるから。あたしの食堂は、ここから、ふたブロック先にある、『ラ・リシェール』と言うお店だよ。絶対くるんだよ、いいね!」

そう言うのと、おばさんは踵を返して、コンコースの階段を駆け下りていく。

「なんだか、親切な方でしたね」

おばさんの後姿を眺めつつ、ネルが苦笑した。

「親切って言うか、世話焼きっていうか。どこの街にもああいう人はいるもんだよ。人の好意は素直に受け取るってのが、旅の鉄則だから。そんじゃ、昼になる前に、そのパットンってやつに会いに行こう」

「どんな人なんでしょうか？」

「食が細いって言ってたから、もやしかごぼうみたいにひよろ長い奴じゃないかな。会ってみれば分かるさ」

アルサスは、ネルを促して、魔法学園の校舎の方へ歩いていく。

「わたしって、もやしみたいですか？」

おばさんに食が細いといわれたことを気にしたのか、ネルはアルサスの背中を追いかけながら尋ねた。確かに、背は低いし、腕も細いけれど、もやしみたいなのではない。山育ちで、足腰は丈夫なつもりだ。しかし、アルサスは苦笑するばかりで答えてはくれなかった。

魔法学校の校舎は、巨大な校門をくぐった先にある。城のように見える建物の大部分が、講義講堂や研究施設となっている他、上層階にはギルドの運営部などがある。また、建物は上空から見ると、ドーナツ状になっており、中心には校庭が存在している。

校舎に足を踏み入れたアルサスたちは、ひとまず受け付けへと向かった。城ならぬ、校舎内部は、その概観に合わせた調度にそろえてある。特に、赤いカーペットは本当に王様の住むお城を思わせた。「ようこそ、魔法使いギルド・ルミナス魔法学園へ。御用は何でし

ようか？」

受付でアルサスたちを迎えてくれた女の子は、魔法学校の生徒だ。右胸のエンブレムが印象的な、紺色の制服に身を包んでいる。アルサスたちと年のころはそう変わらないだろう。

「パットンってやつに会いたんだけど」

と、アルサスが言うのと、一瞬何のことだか分からないといった風に、眉をひそめて、「パットンですか？」と怪訝そうにした。彼女は、二千人もいる島の人間の中から、思い当たる人物を手繰り寄せているのだろう。そう思った、アルサスは言い直す。

「ここの学生らしいんだけど。ちよつと教えてもらいたいことがあって……」

「ああ！ 三年生のパットンくんですね。彼なら、北棟の図書館にいますよ。今日は、講義がお休みの日ですから」

「図書館？ 俺たち部外者が入ってもいいの？」

「はい。わが校は、広く多くの方に門戸を開いています。学内もご自由に見学なさっていただいても結構ですよ。何なら、ガイドしましょうか？ あの有名な、大魔法使いエルフォードさまの像など、ご紹介さしあげますが」

営業スマイルを思わせる笑顔とともに、受付の女の子が言う。どうやら、学校の受付は生徒たちが持ち回りで受け持っているのだろう。そして、この島には観光客も訪れる。そんな観光客のために、学内や島のガイドも行っている。中でも、ギルド設立者でもありこの魔法学校を開校したという、大魔法使いエルフォード卿の巨大銅像は、観光の目玉となっているのだが、アルサスたちにはそんなものを観る為にこの島を訪れたわけではない。

「ありがとう。でも、今はパットンに会いたいから、また今度頼むよ」

アルサスは片目を瞑って、受付の女の子に返すと、ネルとともに廊下を歩いた。すれ違う学生たちに、図書館への道を尋ねながら、さも迷路を思わせる廊下に辟易し始めたとき、目の前に一際大きな

観音開きの扉が現れた。扉には「図書館」の文字。

「ここ、ホントに学校か？ 要塞だろこれじゃ」

誰に言うでもなく、アルサスは愚痴をこぼしながら図書館の扉を開いた。そこは、一階から三回までを吹き抜けにして、巨大な本棚が並べ立てられた、本に囲まれた部屋だった。

「すごい、本がいっぱいです」

頭上よりも遥かに高い本棚を見上げて、ネルが本日二度目の驚嘆の声を漏らした。遥か天井には、明かり窓が設けられているのだが、本棚と本棚の感覚が狭くて、光はほとんど下まで届かない。そんな圧巻の光景には、アルサスも思わず驚いてしまう。アルサスは世界の知識が集まる場所、と呼ばれるゆえんの一端を垣間見たような気がした。

「と、とにかくパットンを探そうか」

とは言ったものの、図書館には受付の女の子と同じ制服姿の学生がちらほら見受けられる。皆真剣な顔をして、本とにらめっこしている。その誰がパットンだか、容姿を知らないため、一人ずつ聞いて回るほかない。

図書館では静かに、という張り紙を尻目に、とりあえず手近な人に声をかけようと、アルサスが思ったその瞬間だった。

「危ないです、アルサス！」

突然、張り紙を無視したようにネルが叫ぶ。だが、ネルの顔は、アルサスではなく、図書館の天井を見上げていた。何事だ？ と、アルサスも上を見た。

唐突に視界が何かにさえぎられたかと思うと、硬いものの角が、アルサスの額を叩く。その拍子に、次から次へと、硬いものが頭上から降ってきた。それが、本だと分かった時には、アルサスは降り注いだ大量の本に埋もれてしまった。

「きゃあっ！ アルサス、大丈夫ですか!？」

焦るネル。騒然となる図書館。アルサスは痛みをこらえて、自分を埋めた本を払いのけた。

「痛ってえな！ 何すんだよっ！！」

本の角が当たって赤くなった額を押さえて、アルサスは頭上を睨みつけた。

「やあ、ごめんごめん」

それほど悪いとは思っていないような、からりとした男の子の声。その声は、三階部分の本棚から、聞こえてきた。

12. ルミナス魔法学校（後書き）

ご意見・感想などございましたら、お寄せください。

13. 図書館のルウ

上の階の本棚へは、本棚に取り付けられた梯子から、キャットウオークへと上る。怒り心頭のアルサスは、ネルの静止も聞かずに、乱暴に梯子を上った。確かに、いきなり本を落とされて、「やあ、ごめんごめん」だけでは、腹も立つだろう。

アルサスが梯子を上ると、その少年は本を落としたことなど忘れてしまったかのように、手元の古い本に目を落としていた。年の頃は、十歳前後だろうか。ガモーフ人らしいつややかな黒髪を短く刈っており、袖丈の余った紺色の制服とあいまって、まだまだ毛も生えていない子ども、といった雰囲気醸し出してはいるものの、丸メガネの奥のつぶらな瞳は、研究者を思わせるほど真剣そのもので、なにやら小難しそうな本の文字を追っている。

「おいっ！」

声をかけてみたが、ちらりとも、こちらを見ようとしない少年にムツとしたアルサスは、無言で彼の手から本を取り上げた。

「わあっ！ 何するんだようっ！」

少年はびっくりして、悲鳴を上げる。本を取り返そうと、両手をばたつかせるが、アルサスの方がうんと背が高いため、その両手は届かず、ついにはぴよんぴよん飛び跳ね始めた。それはそれで、見えて面白いのだが、べつに子どもをいじめたいわけではない。

「何するんだよって、そりゃ俺の科白だったの！ 人の頭の上に本を落としておいて『やあ、ごめんごめん』だけで済むと思ってるのか？」

キツつと少年を睨みつけて、アルサスが怒りを露にする。

「他にどうしろって言うんだよ。まさか、苦学生のボクから、お金を^{むし}取り取るつもり？ このチンピラっ！！」

本を取り上げられた少年も、飛び跳ねるのを止めてアルサスを睨みつける。

「そういうお前は、クソガキだろっ！ 金じゃねえよ！ 誠意っ！
心からごめんって気持ち伝わってこないから、怒ってるんだろ
っ！」

「うるさいなっ！！ 先生みたいなこと言わないでよっ！ だいた
い、下でぼんやりしてる兄ちゃんが悪いんだろ！」

「責任転嫁してんじゃねえよ、クソガキっ！！」

「わっ！ ボクのことクソガキって二回も言った。パパにも言われ
たことないのにっ！！ このチンピラ、チンピラ、チンピラ、チン
ピラーっ！！」

「チンピラじゃねえ、レイヴンだっ！！」

「一緒だろ。その日暮しの浮浪者さん？」

「ほ・う・ろ・う・しゃ！！」

売り言葉に買い言葉とはこのことだ。アルサスと少年は、ここが
静寂を好む図書館であることも忘れて、キャットウォークの上で言
い合いになった。しかも、図書館中の人たちが二人のことを見上げ
ているなんて、気づきもしない。

「落ちていてください、アルサス。皆さんが見てますよ」

いつの間にか、三階のキャットウォークに上がってきたネルが、
困った顔をしてアルサスをなだめる。見れば、ネルは少年が落とし
アルサスの頭を直撃した本を積み重ねて、両腕に抱えていた。

「ごめん。その、つい」

アルサスはネルと衆目の視線に気づき、子ども相手に思わずカッ
となった自分が恥ずかしくなって、照れ隠しに本の形がついた額を
さす。

「あなたも、気をつけなきゃだめですよ！」

ネルはアルサスに続いて、少年のことも窘めた。

「お兄ちゃんを取り上げた、その本を無理矢理取り出そうとしたら、
他の本まで落っこちちゃって……ごめんなさい」

叱られた少年は、しゅんとなって、アルサスに頭を下げる。どう
やら、子どもらしく素直なところがあるらしい。そうになると、さす

がにアルサスも大人気なく怒鳴るわけには行かない。

「分かればいいですよ。この本、どこに片付けたらいいですか？」
にっこりとネルは微笑んで、少年に尋ねた。すると少年は本棚の、
ぼっかりと空いたスペースを指差して、

「あそこ。ボク、手が届かなくて」

と返す。確かに、少年の背丈では、背伸びをしてやっと届くような高さだ。

「手伝うよ」

アルサスは、ネルの腕から本を三分の二ほど取ると、背表紙と睨めっこしながら、一冊ずつ片付けていく。すると、次第に額の痛みも退いていき、代わりに、本来ここに来た目的を思い出した。

「そういえば、お前、パットンってやつ知らないか？」

と、アルサスが尋ねると、少年はきょとんと小首をかしげた。先ほどの、受付の女の子も同じような反応をしたところを見ると、パットンという学生はよほど友達がいらないか、影の薄い奴なのだろう。ちょっと可哀想に思えてきた。そんなことをアルサスが思っていると、少年はアルサスの内心を見透かしたように、再び睨みつける。

「そりゃ、ボクは友達いないけど、寂しくなんかないやい」

フンっ、と鼻息荒く、少年はそっぽを向く。アルサスは驚き、思わずネルと顔を見合わせた。

「もしかして、あなたがパットンさんですか？」

アルサスに先んじて、ネルが問いかけた。すると、少年は腰に腕を当てて、不遜な笑みを浮かべる。

「そうだよ、銀色の髪のお姉ちゃん。ボクが、ルウ・パットン！
で、ボクに何の用？」

「それは……」

パットンが、こんな子どもだったとは思わなかった、とアルサスとネルは視線を交わす。魔法に詳しいという食堂のおばさんの推薦と、受付の女の子の「三年生」という言葉から、勝手に同じ年前後

の人間を想像していたのは、アルサスたちの勘違いだった。

「疑うわけじゃないけど、お前、ホントに魔法に詳しいの？」

訝るように、アルサスが尋ねる。小利口そうな子どもだが、食堂のおばさんが魔法学校の校長の代わりに推すような人物には見えな
い。どうしたものかとアルサスが思案していると、ルウは心外だ
でも言いたげに、ちよつと赤みを帯びた頬を風船のように膨らませ
た。

「この歳で魔法学科高等科三年生に飛び級したのは、ルミナス魔法
学校始まって以来の快挙と、言われてるんだから！ ほらほら、な
んでも聞いてよ。浮浪者のお兄さん」

フフンと、鼻を鳴らす。友達が少ない理由をなんとなく悟ったア
ルサスは、それでも他に当てがあるわけでもなし、仕方なくアルサ
スは、事情を話して聞かせた。

センチ・レーバンに狙われるネルのこと、ヴォールフの長である
バセットの言った銀の乙女のこと、瀕死のアルサスを救った奏世の
力のこと。そして、奏世の力とは一体何なのかそれを知りたい……、
ルミナス魔法学校を訪れるに至った経緯を話し終わると、何故かル
ウは、しばらく頭を傾げたり「うーん、うーん」と唸って、終い^{しま}に
は薄ら笑いを浮かべた。

「冗談でしょ？ 治癒の力なんて。冷やかしなら、帰ってよ。ボク
は、魔法文字解読の勉強で忙しいんだ。神童のボクをもってしても
ものすごく難しく、まだ、少ししか読めなくて苦勞してるんだか
ら」

まるで犬でも追い払うかのように、シッシツと手のひらを返す。
「冷やかしじゃありません。お願いです、ルウさん。信じてくださ
い！」

と、言ったのはネルだった。ネルとしては、自分の体に眠る力の
こと。知りたい、知らなきゃいけないと思っ
っていること。だから、
つい語氣に力が入り、懇願するような目で、ルウの顔を見る。

相手は少し年上とは言え、女の子にそんな顔をされたことがない

ルウは、少し困ったような顔になって、溜息交じりに階下を指差した。図書館は吹き抜けになっているおかげで、ルウの指差す一階部分、本棚の向こうに大きな机と、黒板の置かれたグループ閲覧室が見えた。

三人は連れ立って、キャットウォークを降りると、ひとまずそのグループ閲覧室へと向かった。その途中、図書司書と思しき女性に、「大きな声出さないで！」と叱られたのは言うまでもない。

グループ閲覧室は、図書館の隅にある小部屋で、学生たちが課題や研究を行う会議室として設けられている。

「この部屋は、風の魔法……ヴィント防音器があるから、大声出しでも大丈夫。たとえば……」

閲覧室に入るなり、ルウは息を吸い込んで、

「この赤目のチンピラやろーっ!!」

と、アルサスに向かって力いっぱい怒鳴った。アルサスは一度抑えた怒りが沸々と再沸騰するのを、ぐっと押さえて、わざと低い声を作る。

「殴りたいか、クソガキ」

「ちがうよ、ほら、見てみなよ、みんなボクの声に気づいていない」アルサスの声の重たさに、ちよつと怯えたルウは、慌てて館内を指差す。確かに、ルウが大声で叫んだにもかかわらず、先ほどの司書も、本を閲覧する学生たちもこちらに気づいていない。

「部屋の隅にある、マラカイトのおかげだよ。風の魔法をあの手に込めてやることで共振を起こして部屋いっぱいになり、この部屋から出る音を遮断しているんだ」

と説明する、ルウの視線の先には、銅細工の台座にすえられた、親指大の緑色した鉱石、マラカイトが安置されていた。

「魔法とは、大きく分けて四つ。火の魔法『フランメ』、水の魔法『ヴァッサー』、風の魔法『ヴィント』、土の魔法『エーアデ』。

これは、太古の昔、黄昏の時代に女神アストレアさまが銀の乙女の魂を分けて作った、四つの精霊に関係している」

いつの間にか、ルウの講義が始まる。ルウは黒板に魔法の名前、そして四つの精霊の名を白いチョークで書いていく。

アルサスとネルは、まるで講義を聴講する生徒のように、椅子に腰掛けた。

「赤、青、緑、黄。ボクたち魔法使いは、この精霊と契約し、その力のほんのごく一部を借りて、発現する。その方法には、これまた四つの様式がある。剣の様式『シュヴェーアト』、槍の様式『ランツェ』、矢の様式『プファイル』、そして盾の様式『バックラー』の四つ。つまり、魔法は四種類の精霊の力と、四種類の様式を掛け合わせた十六種類が存在する。そこから、高位魔法使いは、各様式を特化させ極限までその力を高めた魔法を使うことが出来る。それをボクたち魔法使いは『昇華応用』と呼んでいる」

「そのくらいなら、俺でも知ってるよ」

ルウが一息ついたところで、アルサスは横槍を入れる。今ルウが話したことは、魔力がなく魔法の使えない人間でも知っていることだ。

「いいから、黙って聞いてよ。赤目のお兄ちゃん。ここからが大事なんだから。魔法には、さまざまな『応用』が存在する。魔法と魔法をくつつけて、その効果や威力を強化する『結合応用』や、アンバーによる通信装置や、そのこのマラカイトの防音装置のような、特別な鉱石を用いて生活を補助する『機器応用』はその代表例。この学園にある研究室では、日々、魔法博士たちがあたらしい応用技術を編み出しているんだ。 فقط……」

そういうと、何を思ったのか突然、ルウがチョークをアルサスに向かって投げつけてきた。

「痛てっ！ 何するんだよっ！」

「魔法って言うのは、今のチョークみたいに、相手に対するベクトルしか持っていないんだ」

アルサスの言葉を見殺して、ルウは新しいチョークに持ち変えると、黒板に大きな矢印をひとつ書き記した。

「反転して戻ってくるベクトルなんて存在しない。なぜなら、精霊の力は破壊から再生を行う力だから」

「破壊から再生……？」

ネルが小首をかしげた。

「たとえば、枯れ草だらけの畑に新しい種を植えようとするとき、枯れ草を全部抜いて、土を耕して、新しい種を植えるでしょ？ 精霊の力、つまり魔法の力は、それと一緒にだって、言われてる。たしかに『機器応用』で、生活に役立つ魔法機器が作られているけれど、結局魔法のベクトルは、一方通行なんだ。だから、この世に治癒の魔法なんて存在しない。そもそも、そんな力があつたら、お医者さんたちは商売上がったんじゃないか」

「だけど、現実には俺はネルの『奏世の力』で一命を取り留めたんだ」「ついでに服も直ってた……。仕立て屋さんも商売上がったんだよ。じゃあ、その力、見せてよ銀色の髪のお姉ちゃん。そうしたら、ボク、信じてあげてもいいよ」

と言われたところで、ネルは困ってしまう。あの時、どうやって「奏世の力」使ったのか、ネルにも分からないし、あれ以来、アストレアの声も聞こえてこない。今この場でやって見せてよ、などといわれても、ネルにはどうすることも出来なかった。

「そもそも、銀の乙女なんて、伝説の天使の名前じゃないか。お姉ちゃんはとっても美人さんだけど、存在すら伝説の天使の生まれ変わりなんて、ナンセンスだよ」

ルウは溜息混じりにそう言うと、手についたチョークの粉を叩き落とす。

「じゃあ、ハイ・エンシェントが嘘をついたってことなのか？」
納得いかない。そんな顔つきで、アルサスが問いかけた。

「さあ。ボクに聞かれても困るよ。少なくとも、ボクに分かるのは、この世に治癒の魔法なんて存在しないってこと。まして、『奏世の力』なんてものも聞いたことがないし、この図書館に集められた、百万冊の本のどれにもそんなこと書かれていないんだ」

「そんな……」

じゃあ、アルサスの傷を癒した力はなんだったのか。ネルは、言葉につまり俯いた。

「ごめんね、お姉ちゃん。力になれなくて」

「いえ、ルウさんか悪いわけではないです……」

と言う、ネルの声には、明らかに落胆の色が伺えた。それは、ルウに対してではなく、自分が何者なのか、自分の体に眠る力が何なのか、世界中の知識が集まるこの場所でも分からない。つまり、手がかりが何一つないと言うことへの、落胆だった。

13. 図書館のルウ（後書き）

ご意見・感想などございましたら、お寄せください。

14. 食堂通り

お礼に昼食でも奢るよ、と言い出したのは、アルサスの方だった。もちろん、行き先はルウを紹介してくれた、おぼさんの食堂だ。折しも時刻は、ちょうどお昼近く。結局、「奏世の力」が何であるのか、まったく分からない、というお粗末な結果に終わったことに落胆しても、お腹はすくものだ。

図書館のある校舎を後にして、階段状のコンコースを下って、食堂へと向かう。こうして上から見ると、コンコースに広がる、購買部や食堂、その奥にある学生寮の建物は、さながら城下町のように見える。

「もしかしたら、エルフォードさまなら知っていたかも」

フォローのつもりなのか、食堂に向かう道すがら、ルウが言った。「エルフォードって、あれだろ？ 初代魔法ギルドの長で、大魔法使いだったって言う。もう、ずっと昔にあの世にいつてるじゃないか」

ルウの隣を歩くアルサスがあきれる。

「そうだけど……。瀕死の傷を治癒する『奏世の力』なんて、この世に知ってる人がいるなんて思えなくて」

実際、何百人もの生徒を母親代わりに見守っている、食堂のおぼさんが推薦してくれただけのことはあって、ルウの魔法に対する、若干十歳の子どもとは思えない、知識の豊富さと、造詣の深さは、感心するに値した。だが、そんなルウにも「奏世の力」が何なのか、分からなかった。

「ハイ・エンシェントが殺意を持って、人を殺そうとするってのも、俄かには信じられないくらいなんだ。本能に正直な普通の魔物たちとは違って、ハイ・エンシェントはとても崇高な精神と理性を持ってるって言われてる。実際に見たことはないけれど、彼らは故なく、人を殺そうとはしない」

ルウは、まるで難しい課題でも出されたかのように、頭をひねった。その割りに、いつの間にか、ルウの目は輝いていた。誰も知らないことを知ることが出来たら、どんなに素敵なことだろう。

「じゃあ、俺たちがわざわざお前に嘔吐くために、ルミナス島まで来たって言うのかよ？」

「違うよ。赤目のお兄ちゃんとはかくとして、銀色の髪のお姉ちゃんか嘘を吐くとは思えない。信じたくないんじゃないかって、信じられないだけ」

「なんだよ、それ」

ルウの言葉に、アルサスは小さく溜息をついた。ふと、隣に視線を向けると、ネルが俯きがちに、石畳を数えている。結局何も分かってなかったことに、落ち込む気持ちも分からなくもない。

学園へと一直線につながる大通りを曲がってひとつ路地に入ると、そこはいい香りがする食堂の店舗が立ち並ぶ通りだった。通称「食堂通り」と呼ばれている。

ギルドには国境がないため、センチ・レーバン人や、ガモーフ人、ダイムガルド人が集まっており、味の好みも様々だ。そのため、各地方の食材や、料理がルミナス島の食堂通りに集まっており、お昼時ともなれば、そこは万国食品祭りのような様相を呈する。

ルウを紹介してくれたおばさんが営む食堂は、その中でも、あまり大きな店ではなかった。それでも、すでに学生や研究員たちで賑わっており、おばさんがアルサスたちの姿を見つけてくれなかったら、席に座ることも出来なかっただろう。

「約束どおり、来てくれたね！ ルウちゃんも一緒だったんだね。さあ、遠慮はいらないよ、なんでも注文しておくれ！ ここは、あたしが奢ってやろう」

本当に脂肪がついて太っ腹なお腹を、ぽーんと叩いて、おばさんは威勢良く言った。見るからに世話好きそうな顔には、子どもたちがお腹いっぱいご飯を食べる姿を想像して、満面の笑みで埋め尽くされていた。

「おばちゃん、ルウちゃんってのはやめてよう」

そう言いながらも、アルサスの向かいに座るルウはメニュー表を眺めた。アルサスもメニュー表を手に取り、隣に腰掛けたネルに、「何か美味しいもん食べて、元気だしなよ」

と、微笑みかける。ネルは、少しだけその笑顔に答えるように頷くと、メニューを受け取った。

店舗の小ささに比べ、メニューは実に充実していた。ルミナス島に近いガモーフの料理だけでなく、ダイムガルドの料理や、センチ・レーバンの料理も並んでいる。

「ボク、マティネ（※4）のサラダ」

「わたしは……キャチャのスープをお願いします」

「俺は、この『今日のオススメ定食』大盛りで」

三者三様の注文を告げると、おばさんはエプロンのポケットから伝票用紙を取り出しそれを、書き込んでいく。そして、最後になっこりと笑って、

「お嬢ちゃんの分と、ルウちゃんの分も大盛りにしてあげるからね」と言って、ルウがとめるのも聞かず、厨房の方へと踵を返した。

厨房では、おばさんの旦那さんと思しきおじさんが、フライパンを巧みに操っている。どうやら、推察するまでもなく、夫婦で切り盛りしているようだ。

料理が運ばれてくるまでの間、その時間をつい持ち余してしまいがちになるのは、なにもアルサスたちに限った話ではない。そういったとき、大抵人は、連れとの会話に花を咲かせる。

「そう言や、カルチェトの船が来てたよな」

隣の席に座る学生も、料理を待つ間、連れと話をしていた。

「ああ。今回の補給物資、少なかったな」

ルミナス島は、全島が学園都市となっているため、農地などはなく、水以外の食料を外部に頼っている。特に、どこの国家に属さないため、空白地帯であるカルチェトからの物資は重要なライフラインなのだ。

「どこも貧乏ってことだよ。北のセンチ・レーバンじゃ、飢饉ききんが起きて、貧困に喘ぐ辺境の村が次々と滅びてるって話だぜ」

「らしいな。ガモーフでも、随分と湿気た話題が多くなってきてるし。やだねえ、世の中景気の悪い話ばかりで。十年前の悲劇のおかげで、戦争がやっと終わったと思ったら、今度は、貧困だぜ」

「ま、俺たち魔法使いギルドにゃ、あんまり関係のない話だよな。こうして、勉強するだけで、美味いメシも食えるわけだし」

「そうとも言えないぜ、おかげで物資補給が少なくなってるんだから」
「飢饉が終われば、元通りさ。俺たちが悩むことじゃねえよ」

「違うない」

そう言い合って、二人は声を立てて笑いあう。他の席でも、話題はほとんど同じような内容だった。空白地帯のカルチェトや、ここルミナスは、それなりに人で賑わっているが、世界は今、辺境に行けば行くほど、貧困によって飢えや病気が蔓延し始めている。それは、センチ・レーバン王国でも、ガモーフ神国でも、変わらない状態だった。

放浪者・レイヴンとして、世界中を旅したアルサスは、具ついでにその現状を目の当たりにしてきた。目の当たりにした分だけ、お気楽な魔法学生たちの会話に溜息が出る。

苦しみや痛みと言うのは、自分がその危機に直面しなければ分からない。国家ではなく、大手ギルドと言う温床に守られた人間には、到底それが分からないだろう。わざわざ目くじらを立てることもない。

学生たちの会話に耳を傾けていたアルサスは、同じく会話に耳を傾けて、ネルとルウが浮かない顔をしているのを嫌って、

「そういえば、まだ自己紹介したなかったな」

と、あえて隣の会話を耳に入れないように、切り出した。

「俺の名前は、アルサス・テイル。お前の言うところの、チンピラ・レイヴンだよ」

アルサスの自己紹介に続いて、ネルも顔を上げる。

「わたしは、ネル・リュミレです。色々と教えてくださって、ありがとうございました、ルウさん」

「え、えと、どういたしまして。あ、あとボクのは、ルウって呼んでよ、ネルお姉ちゃん。ボク、堅苦しいのと、子ども扱いされるのは嫌いなんだ」

ルウは、突然自己紹介を始めたアルサスの意図を理解したのか、にっこりと微笑んだ。子どもらしく愛らしいルウの笑顔に、ネルもつい顔を綻ばせる。

「ところでアルサス、ずっと聞きたかったんだけどさ」
ルウがアルサスの方を向いた。

「ちょっと待て、俺には『さん』はつかないわけ？ 一応、お前より年上だぞ、俺」

「面倒くさいよ。呼び捨てでいいでしょ？ 男同士なんだし」

カラリと笑ってそう言うのと、ルウはアルサスの剣を指差した。装飾は少ないが、魔法の文字が剣身に刻まれた、アルサス愛用の両刃片手剣だ。

「その剣。レイヴンがもつ剣にしちゃ、すごくいい剣だね。魔法の力で鍛えられた、きつと名剣だよ」

「そうなのか？ ノミの市でこのギルド・リッターの鎧と一緒に、格安で売られてたんだよ。じゃあ、俺、得したんだな」

まるで他人事のように、アルサスは言う。すると、ルウは多少の疑いの目をむけて、「ノミの市でねえ……」と呟いた。

「なんだよ。ちょっとは信じろよ。そんな風に、なんでも疑ってたら、友達出来ないぞ」

「余計なお世話だよ、アルサス！ そんなことより、これからどうするの？ もしも『奏世の力』について、知りたいとまだ思っているなら、ガモーフの『ウェスア大教会』へ行ってみるのもいいかもしれないよ」

「ウェスア大教会か」

とルウの言葉に頷きつつ、アルサスは脳裏にガモーフの地図を思

い浮かべた。ウェスア大教会とは、ガモーフ神都（※5）と並んで、ベスタ教の中心地である。バセットたちの言った「銀の乙女」は、ベスタ教の信奉する女神アストレアに仕えた天使の一人。ルウの言うことは、あながち間違っていないだろう

「ウェスアなら、ラクシャ村への通り道だけど……どうする、ネル？ このまま諦めてラクシャ村へ帰るのも、大教会を訪ねてウェスアに行くのも、君次第だよ」

「アルサス……」

ネルはちらりと、アルサスの視線にあわせた。優しく言葉を投げかけるアルサスに、ネルは少しだけ不安を感じていた。あてどなく「奏世の力」を求めて、旅をしてもいいのだろうか？ アルサスにも迷惑がかかるかもしれないし、何より、三ヶ月前に別れ別れになっってしまったラクシャ村の家族が心配だ。

「ま、今日はルミナスに宿をとるつもりだから、ゆっくり考えたらいいよ。ネルが、どうしても『奏世の力』のことを知りたいって、言うのなら、俺は依頼を受けたレイヴンとして、最後まで付き合うから」

アルサスのその言葉を最後に、ちょうど料理が運ばれてきたため、話題はそこで途切れた。

「なんだか、深刻な話でもしてたのかい？ 浮かない顔してるよ、三人とも。そんな時は、ウチの料理をもりもり食べて、元気だしな！」

と言いながら、食堂のおばさんは、大盛りのサラダ、スープ、それに定食をそれぞれの目の前に並べる。

「美味そうだな。いただきますーす」

「いただきます」

ネルとアルサスはほぼ同時にそう言うと、料理に口をつけた。アルサスの注文した料理は、センチ・レーバンの料理に近いものだったが、味付けはガモーフに近い、奇妙な料理だった。しかし、思っていた以上に、美味い。ネルもスープのおいしさに、嬉しそうだった。

た。ただ一人、ルウだけが山のような、マティネのサラダを目の前にして、うへえ、とあからさまに顔をゆがめていた。

まさにその時だった……。

港の半鐘が、ルミナス島全土に響き渡る。船の出港を知らせる鐘の音ではなかった。危険が訪れたことを知らせる早鐘だ。そんな空気を切り裂くような甲高い鐘の音は、アルサスたちのいる食堂まで届いた。何事だ、何事だ、と食堂は騒然となる。食事をしていたものはフォークを止め、厨房の旦那さんはフライパンを持ったまま、おばさんは別の客から注文をとりながら、全員の視線が港の方角に集中した。

ごうっ！ 突然地鳴りのような振動がいくつか連続して、破裂するような、爆発するような音が、半鐘の忙しない音を止めた。

「た、大変だっ！！」

食堂の表通りを誰かが、そう叫びながら走ってくる。

「魔物だ、港に魔物が出たぞっ！！」

※4 マティネ……ガモーフ特産の野菜。色や味は人参に似ているが、丸いカブのような形をしている。

※5 神都……ガモーフ神国では、首都のことをこう呼ぶ。

14. 食堂通り（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せください。

15. ガムウ襲来

魔法使いギルドの本拠地であり、当該ギルドが管理・運営するルミナス島には、独自の防衛システムがある。ヴァッサー・バックラーの魔法で作られた魔法結界である。これは、ルウが説明した「魔法の応用」の一種で、ルミナス島の近海に、島を取り囲むようにいくつも設置された、アクアマリンの魔法装置によって増幅され、魔物を寄せ付けないための障壁^{バリア}を形成している。

もしも、魔物が結界を通り抜けようとする、装置が作動して、水の盾が魔物から島を守るのである。そのため、ルミナス魔法学校に学生や研究員は安心して、勉学・研究に勤しむことができるのだ。しかし、ルミナス島に突如現れた魔物は、この結界を潜り抜けたのだ。どうやって潜り抜けたのかは分からないが、無論そういう事態も想定して、第二の防衛策もあらかじめ講じてある。

それが「全島防衛体制」と呼ばれるものだった。ルミナス島には、ギルドメンバーの魔法使いをはじめとして、魔法学生や研究員などが二千人ほど在中している。緊急事態には彼らが各々武装して、戦うことを「全島防衛体制」と呼ぶ。

「全島防衛体制を発令します！ 島内魔法使いは、全員戦闘体制に移行。魔法学校生徒の各学年は、上級生の指示に従って、日ごろの訓練どおり、落ち着いて行動してください！」

エーアデ通信技術を用いた、島内放送の呼びかけに応じ、学園都市は騒然となる。先ほども、のんきな会話を交わしていた隣席の魔法生徒も、飯を食べている場合ではないと、慌て始めた。島にいる者たちにとって、この島にギルドの本拠地が築かれてはじめての事態であり、平常心ではいられない。

「全島防衛体制なんて……ただの魔物じゃないのか!？」

ルウの言葉に、ネルとアルサスはハツとなり、互いに顔を見合わせた。魔法使いギルドの設置した、魔法障壁を乗り越えて、港へ侵

入するほどの魔物。それは……。

「もしかして、わたしのことを……」

言いかけたネルの口を、アルサスが微笑みでふさいだ。

「大丈夫。俺が守るから。ネルを殺させたりしないよ」

「でも、わたしの所為で、この島の人たちに迷惑をかけるなんてできません！」

「分かってる。でも、相手がハイ・エンシエントなら、説得できるかもしれない」

「バセットさまのように、譲らなかつたら？」

真剣な瞳でネルが、アルサスの顔を覗きこむ。だが、アルサスは笑顔を崩すことなく、「戦って追い払う」とはつきりとした口調で返した。

どこから、その自信があふれてくるのかはよく分からなかったが、アルサスの言葉は、ネルを勇気付けてくれる。大丈夫、この人なら、わたしを真実へと導いてくれる。だから、信じよう。

「行こう、港へ。魔物を止めに」

アルサスが左手を差し伸べる。ネルは軽く頷いて、その手を取った。心配そうに港の方を眺める、食堂のおばさんに、一飯のお礼と早く非難するよう促し、二人は表へと出た。

「ちよっと待って、アルサス！！」

食堂通りを港へと走る、アルサスとネルをルウが追いかけてくる。アルサスが足を止め振り返ると、息を切らせながら、駆け寄ってきたルウは、ズレかかった丸ぶちの眼鏡を直し、「ボクも行くよ」と言った。

「お前は、全島ナントカの、持ち場があるんじゃないのか？」

「そんなの、ボクがいなくても、他の人たちがやるよ。それより、相手がハイ・エンシエントなら、この眼で見たいんだ。足手まといにはならない」

そう言って、ルウは制服の内ポケットから、差し棒程度の長さのステッキを取り出す。そして、知識欲と好奇心で満たされた瞳をく

りくりさせながら、アルサスの返事を待った。

「怪我してもしらねぞ」

アルサスは、ニヤリと笑って、顎をしゃくった。「付いて来い」の合図だった。

ルウを加えた三人が、食堂通りから大通りへと出ると、港の方角にもくもくと上がる煙が見える。露天や購買部はすべて戸閉め、店主たちは魔法生徒たちに誘導されて、避難場所である校舎へと、階段状のコンコースを上っていく。それとは反対に、校舎から港へと一直線走ってくる一団。それは、上級生の魔法生徒を従えた、魔法使いギルドのメンバーだった。

「第一班は、消火活動、第二班は魔物に対処せよっ！！」

チームリーダーと思しき魔法使いが、声を荒げながら、アルサスたちの前を通り過ぎていく。アルサスは、ネルの手を引いて、ルウを従え、その一団の後を追いかけた。

最初の轟音と振動が伝わってからというものの、ひっきりなしにそれは続き、島全体が揺れ動いているような錯覚を覚えながら、アルサスたちは港へとなだれ込んだ。

港に停泊する船が木っ端微塵に打ち砕かれ、物見やぐらは押し倒され、物資を満載したコンテナ木箱は原形をとどめていない。

それらすべての所業が、たった一匹の魔物によるものであることも驚愕に値するが、それよりも、アルサスたちを驚かせたのは、その魔物の巨大さたるや、桁外れであったことだった。

「お、大きいよっ」

ルウが、あんぐりと口をあけて、水辺から今まさに這い上がるうとする魔物の巨軀を見上げた。ハイ・エンシエントは、同じ種族の魔物の中にあって、巨軀である。たとえば、トンキチやバセットがそうであることを知っているアルサスには、魔物の大きさくらい予想がついていた。

だが、ルミナスを襲った魔物は、その予想をはるかに凌駕していた。全長は人間の五倍はあるだろうか。赤黒い皮膚、長い頭部の下

には、ギョロリとした二つの目。そして、目の付け根の辺りから、二十本はあろうかと言う、吸盤のびっしりと張り付いた食指が蠢いていた。イカの化け物、そういう表現がぴったり来るだろうか。

「ガムウ……。スキード族の、ハイ・エンシェント！ この世に七匹しかない、ハイ・エンシェントの一匹だよ」

ルウが、本から得た知識を叫ぶ。

「ガムウってのが、あいつの名前か」

抜き身の剣を両手に構え、アルサスは呟いた。スキード族は、大きいものでも、食指の長さを合わせて、人間ほどの体長しかない。食用されるイカと違うのは、食指の数である。ガムウと言う名のスキードの長は、その食指をぶんぶん振り回して、港を破壊している。それは、まるで理性を失った獣が、手当たり次第に暴れているかのような光景だった。とても、崇高な知性を持ち合わせているようには見えない。

「アルサス！ 見てください。ガムウさまの額！」

とネルが、ガムウの両目のすぐ直上あたりを指差した。キラリ、何かが光る。それが、銀の金具に固定された大粒の宝石だと、気付いたのは、ルウの方が先だった。

「魔法装置。あの石は、レバードだよ」

宝石は、黄色と黒の交じり合った独特な模様をしていた。アンバーやマラカイトとはまったく異なる石だ。

「でも、どの魔法とも共振しないレバードを使った魔法装置なんて、そんなものありえない！」

ルウの叫びは悲鳴に近く、目の前で繰り広げられる壮絶な光景すべてを信じられないと言っているようだった。実際、魔物を取りまとめるハイ・エンシェントが、むやみに暴れることはない。

「あり得なくっても、目に映るものは、本当のことだ。こいつが夢じゃない限り、あのハイ・エンシェントがレバードの魔法装置に操られていることは、揺るぎのない事実だ！ ルウ、ネルを頼むっ！」

そう言うと、ルウとネルが止めるのも聞かずに、アルサスは剣を片手に、ガムウに向かって走り出した。ガムウは「るおおん！」と奇妙な叫び声を上げながら、食指を縦横無尽に振り回す。

先ほどの魔法使いに率いられた魔法生徒の一団は、すでに配置につき、各々魔法の杖を構えていた。

「赤の精霊と契約の名の下に、具現せよ。汝、^{なんじ}火炎の矢となれ……フランメ・プファイル！」

魔法生徒たちの、呪文詠唱に合わせて、杖の先端が輝き、炎の矢が無数に飛び出す。だが、それらは、食指の一蹴であつと言う間に霧散していく。何度魔法を唱えても、ガムウに一撃を与えることさえ出来ない。

「くっそうっ！！ 赤の精霊と契約の名の下に、具現せよ。汝、^{なんじ}火炎の槍となれ……フランメ・ランツェ！！」

「待て、止めろっ！」

剣を振り上げながら、アルサスは無謀にも魔法を唱え続ける魔法生徒の一人に叫んだ。案の定、放たれた魔法の矢は、食指が絡めとり、消えてしまう。しかも、呪文詠唱に気を取られている隙に、その魔法生徒は側面から忍び寄る別の食指に気付いていなかった。

「危ないっ！！」

アルサスは、咄嗟の判断で、魔法生徒の背後から体当たりをした。さらに、ポケットから魔法カードを取り出す。

「青の精霊、その封印を解き放ち、水の盾となれ。ヴァッサー・バクラー！」

カードが輝き、カードに封じ込められた魔法の力が解き放たれる。魔法はアルサスと生徒を包み込むように半円状の水のバリアを形成する。

「た、助かったよ。君」

魔法のバリアを叩いた、ガムウの太い食指に、ぞっとしたような顔をして、助けられた魔法生徒は礼を述べた。アルサスは、魔法が消えると同時に立ち上がり、剣の切っ先で、ガムウの額を指し示す。

「相手が、でかすぎるんだ。小手先の魔法なんて通用しない。あの、レバードの魔法装置を破壊できないか？　アイツは、あの装置に操られているかもしれない」

「何だって！？　でも、そうしたいのはやまやまだけど、食指の数が多すぎて、魔法が届かないんだ」

「分かった、食指の数を減らす。それまで、魔力を使い果たすな！」
アルサスはそう言うと、生徒の返事を待つことなく、駆け出した。別の場所では、悪戦苦闘する生徒たちが、食指の攻撃になぎ払われていた。戦闘が始まって、まだものの数分足らずしか時間がたっていないと言うのに、すでに劣勢だ。このまま、我を忘れ暴れまくるガムウが上陸したら、ルミナス学園都市は、あつと言う間に破壊されてしまう。魔法学校の校舎に逃げ込んだであろう、あの食堂のおばちゃんたちも、無事では済まされないだろう。

誰に操られている？　ネルを探してここに来たんじゃないのか？
アルサスは、食指に立ち向かいながら、思案をめぐらせた。バセツトのように、「奏世の力」を持つ銀の乙女であるネルを殺しに来た、と言うのであれば、こんなにむやみやたらに暴れる必要はない。事態の本当の意味に当惑しながらも、アルサスは剣を振るう。しかし、その太さだけでも、丸太並の食指は、微妙に柔らかく、剣の刃を通さない。ぐにゃつとした気味の悪い感触とともに、はじき返されるのだ。そのたびに、アルサスは、身軽に反撃をかわしていく。だが、不意に視界を、三本の食指がふさいだ。左右、そして上空から叩きつけるように伸びてくる食指。その太い腕に押しつぶされたら、死んでしまう。アルサスは、魔法カードに手を伸ばした。魔法の矢を打ち払うほど強靱な食指が三本だ。防御の魔法であるバツクラーを用いても、防ぎきれる自信はなかった。

と、その時。背後で、声が上がる。

「赤の精霊と契約の名の下に、具^{なんじ}現せよ。汝、火炎の矢となれ……
フランメ・プファイル！　固定！^{フェストレーキング}　赤の精霊と契約の名の下に、具現せよ。汝、^{なんじ}火炎の槍となれ……フランメ・ランツェ！　すべての

魔法を解除する、アレス・フライセンっ!!」

ルウが魔法を唱えたのだ。激しく破裂音のような音が鳴り響いたかと思うと、左側から迫る食指に、炎の矢を纏った槍が突き刺さる。その一瞬、ガムウの食指がひるんだ。アルサスはその隙を見逃さなかった。

「いちかばちかだ! 緑の精霊、その封印を解き放ち、風の剣となれ。ヴィント・シュベアト!!」

アルサスは、解放の呪文と同時に魔法カードを、剣にたたきつけた。剣身が俄かに輝いて、魔法のカマイタチを帯びる。それを、一気に振り上げてやった。

一閃。瞬くよりも早く、魔法の力を借りた刃が、食指を切り裂く。「るおおんっ!!」

ガムウのその叫びは、痛みによるものなのか、分からないが、切り取られた食指がのた打ち回る。

「大丈夫? アルサスっ!!」

ルウが魔法のステッキ片手に、駆け寄ってくる。

「助かった、ルウ。ありがとう。しかし、すげえな、魔法を組み合わせるなんて」

「固定魔法は、初歩的な応用だよ。アルサスもやるじゃん、魔法の剣で戦うなんて」

「お前の固定魔法が突き刺さっただろう。だから、もしかしたら、って思っただよ」

こともなげに言っただけだが、ルウはアルサスの判断の早さに、舌を巻いた。同様に、アルサスはルウの魔法の腕前が、伊達に飛び級するほどの神童、と呼ばれているわけでないことを目の当たりにして、感心してしまった。

二人は、各々の武器を手に背中合わせになり、食指をけん制する。「ボクが、ヴィント・シュヴェアトの魔法で、アルサスの剣に魔法を付帯するよ」

「頼む。一気に、カタをつけてやる」

これならいけるかも、確信めいた思いが、二人の胸に過ぎった。
だが、その淡い期待は、絹を裂くような悲鳴によって打ち砕かれた。
「きゃああっ!!」

突然のネルの悲鳴。アルサスとルウは咄嗟に振り向いた。少し離れた場所、食指が届かない場所で、不安気にアルサスとルウ、そしてガムウを見つめていたネルは、何の前触れも、音もなく、背後から近付いたものに、羽交い絞めにされた。

「あれはっ……シャドウズっ!!」

アルサスが絶句とともに叫ぶ。全身を黒の装束に包み、クローガントレットを身に着けた黒装束の集団、「影走り」こと「シャドウズ」の一人に違いない。覆面を着用しているため、はっきりとは分からないが、その男は、ニヤリといやらしく笑ったような気がした。しまった!　と思う間もなく、シャドウズの男はまるで影が走るように、ネルを連れ去ってしまう。周りにいる者たちは、ガムウとの応戦に集中していて、誰もそのことに気がついていなかった。

「アルサスっ!!」

連れ去られるネルが叫んだ。

「ネルっ!!」

アルサスもまた、彼女の名を叫んだ。だが、その一瞬の後には、ネルの姿は見えなくなってしまった。

15. ガムウ襲来（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せください。

16. 罠と入れ知恵

誤算はあるとして、うかつだったことは否めない。ルウにもその責任はあった。アルサスから、「ネルを頼む」といわれたにもかかわらず、ネルの傍を離れてしまった。しかし、ルウが魔法を唱えてくれなかったら、アルサスは、ガムウの食指に押しつぶされていたかもしれない。

だから、アルサスにルウを責める気はなかった。すべては想定外だった所為だと、言いたい。ハイ・エンシエントがルミナス島に現れたことも、ガムウが何者かに操られていることも、シャドウズが現れたことも、すべてが想定外だったのだ。

「何？ あいつら何なの！？」

ルウが、頭上にクエスチョンマークを浮かべながらうろたえる。無論、ルウの指す「あいつら」とはシャドウズのことだ。すでに、シャドウズの姿は街の方に消えて、見当たらない。

「くそっ！ ライオットめっ！！ どうすればいい！？」

アルサスはルウの質問に答えることなく、シャドウズの消えた方角と、眼前で暴れるガムウの両方に視線をめぐらせた。ガムウを放っておくわけには行かない。アルサスはバセットと戦って、ハイ・エンシエントの強さはよく知っている。魔法学生が束になっても、簡単になかなう相手じゃないだろう。しかし、ネルを見捨てられないのも分かっている。

迷っているアルサスの眉間に出来た、シワに気づいたルウは、軽くアルサスの背中を押した。

「事情はよく分からないけど、お姉ちゃんを助けてあげて。あいつらが、いいヤツにはとても見えない。きっと、お姉ちゃんを攫って、悪いことしようとしてるんだってことくらい、ボクにも分かるよ。だから行って！」

「だけど、それじゃあ、お前たちが……！」

「大丈夫。こう見えても、ボクは学園一の神童だよ。それに、ハイ・エンシェントと戦えるなんて、めったにないことだからね。何事も、経験だよ」

本当は、その場にいる誰もが、ハイ・エンシェントの来襲に怯えている。実戦経験がある者でも、魔物の長を相手にしたことがある者など、そうそういないだろう。ルウとて、それは同じことのはずだ。しかも、まだ十歳の少年には、目の前の魔物はとても強大に映っているに違いない。

だが、ルウはそれをおくびにも出さず、ニカッと白い歯を見せて笑った。

「なんだ、お前、結構いいヤツかもしれないな」

「今頃気づいたの、アルサス？」

「減らず口がなきゃ、完璧ってことだよ。分かった、ここは任せる。すぐに戻ってくるから、それまで頑張ってくれ」

アルサスは手を上げて、踵を返すと、駆け出した。ルウは、「了解！」と威勢良く返しながらも、その背中を見送ることなく、先輩たちとともに、ガムウに立ち向かう。

一方、ネルを攫った影走りの男は、その鍛え抜かれた跳躍力と脚力で、気を失ったネルを小脇に抱えて、ルミナスの街角を疾駆していた。すでに一般住民の退避が終わり、街はがらんどろとしていた。賑わいを見せていた食堂通りも、購買部も、学生寮もすべて、扉に硬く閉ざされており、まるで町全体がもぬけの殻になったようだ。

少女の華奢な体は、思うよりも軽い。しかも、すぐに気を失ってくれたおかげで、騒がれずに済むのも、男にとって都合だった。

このまま、街の西側にある、小さな^{はしけ}船まで駆け抜ける。そこで待つ仲間たちと合流し、その後は、ガムウに仕掛けた魔法装置を遠隔操作で爆発させる手はずとなっている。レバードの希石には、三万発分のフランメ・プファイルの魔法が詰め込んであり、それが解放されれば、ルミナスはひとまりもないだろう。三万発分の紅蓮の炎は、ルミナス島とともに、ガムウを使ったことの証拠をすべて隠滅

してくれる。

あとは、この娘をライオットさまに届けるだけ。ライオットさま付の参謀官、メッツェの入れ知恵だが、非道も辞さない影の部隊でも、舌を巻く大胆にして豪快な作戦だ。

ただ、腑に落ちないのは、何故これほどまでにして、ライオットさまはこの娘を欲しがるのか……。いや、それは、影の知るべきことではないし、興味もない。与えられた任務をこなすだけ。それが、センチ・レーバン宰相府附属特殊部隊「シャドウズ」だ。

そう考えが至ったところで、下宿通りのさらに奥まったところに、小さな階段が現れる。調度日陰になった場所で、その先には、簡素な木組みの舳が取り付けられただけの船着場があった。船着場には、五、六人が乗り込めるほどの小さな小型艇ボートが泊めてあり、ボートには仲間の姿があった。

『守備は?』

仲間の一人が、声を立てずに、手信号で尋ねてくる。

『上々だ、娘はここに』

男も手信号で答えた。

ボートは、ヴィントの魔法を応用したマラカイトの魔法装置が取り付けてある。これで、手漕ぎなしでも、ガレオン高速船の数十倍の推力を得ることが出来る。たとえば、追手の船が放たれても、帆船などでは、到底追いつくことが出来ないし、ルミナス港の船はすべてガムウが破壊した。

とどのつまり、階段を下りて、ボートに乗り込めば、この作戦は完遂したも同然なのだ。勝利を確信した男は、覆面の下でニヤリと笑った。

「なるほど、ガムウを操って暴れさせ、ドサクサに乗じて、ネルを攫うのと同時に、ガムウに港の船を壊させて、追手を排除する。随分、ド派手で回りくどいことしてくれるじゃねえか」

唐突に背後から声が聞こえ、男は、階段を下りる足を止めて振り返った。両側を下宿の壁に囲まれて、薄暗い路地を、誰かがこちら

に向かって歩いてくる。ギラリ。抜き身の剣だけが光った。

「貴様は……っ！」

絶句する男の前に、影からアルサスが顔を見せる。

「だけど、手っ取り早く、合理性は整ってる。メッツェの作戦か？
ライオットのバカにこんな作戦、考え付くはずないもんな。打算
でしか動けない政治屋に、魔法使いギルドと事を荒立てる勇氣はな
いだろう」

赤い瞳が、きつく男を睨みつける。

「なぜ、レイヴン風情が、ライオットさまやメッツェさまのことを
知っているのだ？」

「さあてね。風評なら、レイヴンでも耳に出来るってことだよ。も
っとも、悪評しか聞いたことはないけどね」

「同じセンテ・レーバン人が、宰相閣下を愚弄するとは……」

アルサスと、男がにらみ合っている間に、ボートにいた影走りの
仲間たちも、男の様子が変だと気づき、クローガントレットを構え
て、階段を駆け上がってくる。階段の上は少しばかり開けており、
その場であつと言う間にアルサスは、シャドウズに取り囲まれた。
だが、アルサスの瞳は怯えなど見せない。

「命が惜しかったら、その子を返せ」

アルサスは剣を構えて、シャドウズたちを威圧するように言った。
「残念だが、それは出来ない。我らが任務を放棄する時は、死ぬ時
だけだ」

「だろうね。じゃあ、悪いけど死んでくれっ!!」

そう言うが早いか、目にも留まらない勢いで、アルサスの剣が空
を薙ぐ。ややあって、どさりと音が聞こえた。そこに転がるのは、
胸をばっさりと斬られた出来立ての死体。

さらに、アルサスは身を翻す。そして、シャドウズたちのクロー
ガントレットが振り下ろされるよりも早く、彼らを貫き、切り殺し
ていく。最後に、ネルを抱えた男が一人残るまで、ものの数十秒だ
った。

「つ、強い。昨日とは別人のようだ……太刀筋に何の迷いもない」

男は、クローガントレットの刃を、ネルの喉元にあてがいがながら呻いた。幸い、ネルは気を失ったままだ。

「迷ってたら、お前たちは、この島ごとすべて破壊してしまうだろう？」

「なるほど、全部お見通しと言うわけか」

「そういうこった！」

アルサスが地面を蹴る。一瞬で男との間合いが詰まり、アルサスは剣を薙いでクローガントレットを弾きとばした。激しい金属音が鳴り響く中、アルサスはさらに、男の腹に膝蹴りを入れる。「ぐえっ」と唸った男の姿勢が崩れて、抱えたネルを離してしまう。アルサスはその隙を見逃さなかった。

蜂が刺すように、剣先が男の喉元を貫く。剣の先端はそのまま、男の首を貫いて、後頭部から姿を見せる。血に濡れた切っ先が、太陽の光に照らされて、不気味に光る。

「その迅雷の剣技……きさま、な、ぜ……」

何かを呟きながら、覆面の下の瞳がアルサスを睨みつける。だが、その瞳が濁ると同時に、男は絶命した。アルサスは、ふうっと、小さく溜息をついてから、男の首元から剣を引き抜き、鞘に収めた。

「それでも、一番迷っちゃいけないことは、ずっと迷いっぱなしなんだよ」

男の死に顔に、アルサスはそう言うのと、辺りを見回した。そこには、四人のシャドウズの変わり果てた姿が転がっている。あるものは、胸を突かれ、ある者は首筋を切り裂かれ、確実に急所を仕留められていた。

人の命を奪うことを、平然とした気持ちでやってのけたつもりはない。たとえば、相手が敵であっても、心は痛むものだ。だから、出来ればそうしない方法を模索したかった。だけど、今はそんな時間もない。迷っていたら、ネルも島の人たちも救えない。それを天秤にかけて自分が、少しだけ怖かった。

アルサスは雑念を振り払うように頭を何度か振って、膝を折った。息絶えた男の装束を探り、小さな箱を取り出す。箱には、魔法文字が刻まれており、呪文を唱えれば、ガムウに取り付けられた魔法装置が爆発するようになっていた。

『こんなことに、魔法使いたちの努力を無駄遣いしやがって!』

アルサスは、箱を目の前の海に投じた。小さな波紋が広がって、箱は海の中に消える。

ネルに、この惨状は見せられない。何も知らないで、平和にラクシャ村で過ごしていた少女にとって、人間の死体が転がる光景は、あまりにも刺激が強すぎるだろう。

気を失ったまま、うずくまるネルを抱え上げたアルサスは、もう一度だけ、自分が殺めた者たちに、別れの一瞥を送って、その場を後にした。

16. 買と入れ知恵（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せください。

17. 旅の仲間

「ネル、ネル！」

こうして、アルサスに起こされるのは二度目の出来事だった。ネルはゆっくりと目を開けた。そこは、食堂通りに近い場所。たしか、ルウがアルサスを助けるために駆け出して、それを見計らったかのように、シャドウズが現れて……。途中で気を失ってしまったため、それ以上のことをネルは覚えていない。

だが、シャドウズの姿はどこにもなく、目の前にいるのは、アルサスだけだ。アルサスは、ネルが目を覚ましたことにほっとしたのか、顔をほころばせた。

「良かった。どこか痛いところはない？」

「だ、大丈夫です。それより、影走りさんたちは？」

ネルはぼんやりとした頭を抱えながら、立ち上がった。

「追い払ったよ」

と答えるアルサスの顔色が少しおかしい。何故か、ネルと視線を合わせようとしない。気を失っている間に、何かあったのだろうか、怪訝に思ったネルは、アルサスの顔を覗き込んだが、彼の内心まで見抜くことは出来なかった。

港の方では、絶え間なく振動と轟音が鳴り響いている。推察するまでもなく、ガムウは依然健在で、港で暴れているのだろう。

「俺はこれから、ルウたちのところに戻る。ネルは、魔法学校へ非難するんだ。食堂のおばさんを見つけて、一緒にいるといい。あの人は、信用できる」

早口にそれだけ言うと、アルサスはネルを残し、港の方に駆け出そうとした。その足を、ネルが止める。

「ま、待ってください！ わたしも連れて行ってくださいっ！」
ネルの声に振り向いたアルサスの目は、明らかに「ダメだ」と言っているようだった。

「ガムウは、シャドウズに操られていたんだ。あのレバードの魔法装置には、罠が仕掛けてある。遠隔操作器は壊したけど、いつその罠が暴発するか分からない。だから、君は安全なところへ……」

「い、いやですっ！ わたしも行きますっ。だって、ガムウさまが暴れているのは、わたしの所為なんですよ？」

確かに、ネルを攫うために、ガムウは無理矢理操られているのだ。それを心苦しく思う気持ちは、アルサスにもよく分かる。

しかし、ネルは知らないことだが、アルサスがシャドウズを殺してしまったことにより、ガムウに取り付けられた魔法装置を解除する手立てはなくなってしまった。無論、彼らを殺さなくても、彼らは魔法装置の止め方を知らなかっただろう。

魔法装置に、罠が仕掛けてあると分かった以上、無理に魔法装置を破壊しようとすれば、暴発は免れない。結局、ガムウを止める唯一の方法は、ガムウを仕留める……即ち殺す以外に残されていないのだ。

「行って、君に何が出来る？」

アルサスの言うことは、ネルにとってもつとなことだった。だけど、非力なままにいるわけには行かないと、ネルは思う。

「何も出来ないかもしれませんが。でも、わたしには『奏世の力』があります」

アルサスの顔を見つめるネルの視線は、一度も揺らいだりしない。「あの力なら、ガムウさまを魔法装置から解放して差し上げられるかもしれません」

「かもしれませんが、連れて行くわけにはいいかない。見たらどう？ 船を叩き壊すほどのあいつの力は、尋常じゃない。ネルを庇いながら、戦えるほど俺は器用じゃないんだ」

「アルサスが、わたしのことを思ってくれる気持ちは、嬉しいです。でも、ガムウさまをこのままにしておくわけにはいきません。どうしても、と仰るなら、わたし、一人で行きます」

そう言うと、ネルはアルサスの脇をすり抜けて、港の方へと歩き

出した。石畳の通りを歩く、ネルの靴音だけが振動と轟音の隙間で響き渡る。

「ネルが頑固者だなんて、知らなかったよ……」

ネルの背中に降りかかってきた、アルサスの声は、少しばかり呆れたような声音だった。

「分かった、そこまで言うなら、一緒に行こう。危ないと思ったらこれを使え。どうしようもないと思ったら、すぐに逃げろ」

アルサスはそう言って、ポケットから魔法カードを取り出した。

カルチェトの街で買った、四枚の盾のカードだ。その内、一枚はカルチェトで、もう一枚は先ほど使ってしまった。残りは、ヴァイントフランメ風と火のカードだけだ。

「かもしれない、に期待するつもりはないけれど、もしもあの力が使えるなら、ガムウを救うことが出来るかもしれない。それが、最良の策なら、賭けてみるのも悪くない。行こう、ネル」

カードを手渡されたネルは、アルサスの言葉にくくりと頷いた。

自信はほとんど皆無と言っている。どうやったら、あの時の力を発揮できるのか分からない。魔法でもない、未知なる力。でも、もう一度あの力を使うことが出来たなら、人間に操られるハイ・エンシェントを救うことが出来る。三ヶ月前のあの日、村の人たちを救えなかったネルにとって、半ばそれは使命のように感じていた。

急ぎ港へと舞い戻ると、そこは、つい先ほどよりも、悲惨な状況だった。ガムウは、ついにその巨体を上陸させたものの、二十本もあった腕のほとんどを失い、体中から青色の体液をあふれ出していた。

そんな満身創痍のガムウの周りでは、魔法生徒たちもまた満身創痍となっていた。頭から血を流して倒れこむ者、声をからして助けを呼ぶ者、果敢に最後の力を振り絞って戦う者。ルウもまた、残りの少ない気力で、ガムウに立ち向かっていた。

「危ないです、ルウっ!!」

ネルが叫ぶ。その声はルウの耳に届いたのか、ルウがこちらを振

り向いた。その瞬間、ガムウの食指が、少年の小さな体をなぎ払う。投げ飛ばされたルウの悲鳴が聞こえたかもしれない。だが、それよりも大きくガムウの叫びが、港中にこだました。

「るおおおんっ!!」

痛みに対する叫びなのか、あまりにもその声は悲痛に聞こえる。

「ネルは下がって!!」

アルサスが剣を鞘から引き抜いて駆け出した。無謀とも思える突撃だが、アルサスはひらりひらりと、食指をかわす。そのすばやきたるや、雷が空を駆け抜けるかのようだった。

ネルがその背中を不安気に見守る中、アルサスはガムウに接近すると、ポケットの中からカードを取り出した。そして、カードを剣身にこすり付けると、封印を解く呪文を口にする。

すると、魔法カードが俄かに輝きを帯び、発現した魔法が剣身に炎を帯びさせた。まさに、アルサスの剣が、炎の剣に変化へんげしたのだ。唸り声か、それとも叫び声か、アルサスは腹の底から声を上げると、地面を強くけって高らかに飛翔した。そして、空中で剣を逆手に持ち変えると、落下の勢いに任せて、切っ先をガムウの眉間に突き立てる。

やったか!?! 意識のある者たちは、誰もが唾を飲み下した。

「だめだ……!!」

しかし、アルサスの眩きは、ガムウの悲鳴によってかき消される。人間ならば容易く切り殺せる剣も、ハイ・エンシェントの厚い肉は貫き通せなかったようだ。その瞬間、もがき、苦しみ、暴れるガムウに、アルサスは剣ごと振り落とされてしまった。

「攻撃が通らない……。いくら食指を切り落としたところで、どうにもならないぞっ」

ネルの近くにいた、魔法生徒の一人が呻く。彼もまた、左腕をだらりとたらし、油汗を額に浮かべていた。ネルは、改めて周囲を見渡した。

港はほぼ全壊して、ルミナス島に到着したときのような、賑わい

はどこにもない。その代わり、生徒の泣き叫ぶ声や、うめき声だけが反響し続ける。食指に投げ飛ばされたルウは、気を失っていい、減らず口も聞こえてこない。そして、ガムウに振り落とされたアルサスは、地面に強く体を打ちつけながらも、立ち上がり、再び剣を両手で構える。

誰もが島を守るために必死だ。逃げ出す者は誰もいない。

あの日、黒衣の騎士団が村を襲った夜に、一人だけ地下室の中でうずくまって泣いていた自分はどうか？ 目の前の勇敢な者たちに比べて、なんて情けないんだろう……。

『お願いします、アストレアさま！ 今一度、今一度わたしに力を貸して下さい！ みんなを、ガムウさまをお助けください！！』

ネルは胸の前で両手を合わせて、祈りよ届けとばかりに、天を仰ぎ見る。

『お願いしますっ！！』

強く祈り、両の瞳を瞑ったその瞬間、合わせた手のひらから、眩しい光が閃いた。みるみるうちに、光は大きく膨れ上がり、あたりを包み込む。傷ついた魔法生徒を、倒れこんだルウを、剣を振り上げるアルサスを、叫び声を上げるガムウを、光が満たしていく。

それは、眩しいはずなのに、心安らぐような柔らかな光。そう、アトリアの森でアルサスの傷を癒した、あの奏世の光だ。

やがて、戦いの喧騒も、風の音も、波の音もすべてが消えうせて、辺りには、静寂が訪れた。

「キミは……銀の乙女？」

声が聞こえて、ネルはそっと瞳を開いた。幼い少年のような、愛らしい声だ。しかし、辺りは光に満たされて、誰の姿も見えない。それでも、声は語りかけてくる。

「そっか……。おいら、キミたちにいろいろと迷惑をかけちゃったね。ごめんね」

「あなたは、ガムウさまですか？」

何の確信があったわけではないが、ネルが問いかけると、声の主

は「そうだよ」と答えた。あの巨軀からは想像できないほど幼い声だが、ガムウは確かにそう答えたのだ。

「ガムウさま、どうかわたしたちを許してください。あなたを無理矢理操って、悪いことさせたのは、人間です。そして、あなたを傷つけたのは、わたしたちです。ですが、どうか慈悲の心で、みんなを許してください！」

「キミは優しい女の子なんだね。でも……キミが謝ることじゃないよ。だって、おいらに希石の機械を取り付けたのは、キミたちじゃない。おいらこそ、みんなを傷つけたこと、許して欲しい」

声だけしか届かないが、どうやらガムウはにっこりと笑ったようだ。魔物と称され、人間に恐れられる生き物だが、トンキチと同じく、どこか人間くさい優しさを持ち合わせている。それが、ハイ・エンシエントなんだと気づいたネルは、そっと手を伸ばした。

細い指先に、ぬるりとした何かが触れる。ガムウの食指だ。島を守るためとは言え、シャドウズに操られたガムウを傷つけ、その体を痛めつけたことに、ネルは涙を流す。アルサスたちが感じた痛みとおなじように、きつと、痛かったろう、苦しかったろう。

「大丈夫、泣かないで、銀の乙女。おいらの傷は、キミの力が癒してくれる。おいらは仲間のスキードたちのところへ帰るよ」

「ガムウさま……」

「その力、正しく使えばキミの助けになるはずだ。ヴォールフのバセットたちが懸念するような事態にはならない。なぜなら、キミは心優しい女の子だから。じゃあね、おいらは行くよ。キミにアストレアさまのご加護あらんことを……」

すると、ガムウの食指がネルの指先から離れる。それと同時に、奏世の光はしゅるしゅるとネルの手のひらへと収束して、何事もなかったかのように消え失せた。

音が、風が、波が戻ってくる。

「一体なんなんだ？ あれ……？ 腕が、痛くないっ！！」

突然声を上げたのは、ネルの近くにいた魔法生徒だ。だらりとた

らしていたはずの左手を振り回して、嬉々とする。やがて、その場にいる誰もが騒然となった。ガムウと戦い、傷ついた者たちが、意識を取り戻し立ち上がる。そして、自らの傷が完全に癒えていることに驚いた。

さらに、彼らの視線は、ある一点に集中する。先ほどまで、そこで暴れていたはずのガムウの姿がどこにも見当たらないのだ。

ネルは一人だけ、分かっていた。ガムウがいた場所には、砕けたレバードの魔法装置の破片が散らばり、海にはわずかな、白波が立っている。彼は仲間のところへ帰ったのだ。

「ネルっ!!」

「ネルお姉ちゃんっ!!」

アルサスと、ルウが駆け寄ってくる。無論、彼らの傷も、何事もなかったかのように癒えている。ネルの奏世の力は、ガムウを含めてその場にいた者たちの傷を癒しただけではない、ガムウに取り付けられ、彼を無理矢理使役していた魔法装置も破壊したのだ。

その驚くべき現象に、ルウは目を白黒させていた。

「ネルお姉ちゃん、何したの？ あ的光は何？」

彼の知識ではおおよそ分りかねる事態に、半ばうろたえつつも、瞳をキラキラと輝かせていた。その疑問に、答えたのはアルサスだった。

「奏世の力を使ったんだね」

アルサスの言葉に、ネルはこくりと頷く。

「少しだけ、分かった気がします。わたしのこの力、きっと誰かを助けるための力なんだと……」

そう言って、ネルは視線を皆の方に向けた。港のあちこちで、危機が去ったことに喜び抱き合う、魔法生徒や魔法使いの姿が見受けられる。

絶望的と思われていたことが、ネルの力ひとつで、ひっくり返ったのだ。それは、驚嘆に値することだった。ルウの言葉を借りるなら、その力は魔法ではない。即ち、奇跡の力だ。そんなものが、自

分に備わっていることに、ネルは幾分か懐疑的だった。だが、二度目の奇跡は今日の前で起きたのだ。あの慈愛に満ちた優しい光、それによって、ガムウも島の者たちも助けられた。

目の前で喜び合う者たちの姿は、確かに現実のもの。「奏世の力」は現実に存在し、それは紛れもなく、自分が「銀の乙女」であると言ふ証拠だった。

「正しく使う……」

光の中でガムウが告げた言葉を何度も反芻しながら、ネルは、何にせよ自分が誰かの役に立てることを、心から嬉しく思った。

ギルドは国家とは違う。共同体としての側面が、より強固なのだ。そのため、魔法使いギルドの対応は素早かった。直ちに、島の機能は復旧し、元通りとは行かないまでも、夕刻が迫るまでには、賑わいを取り戻しつつあった。

ただし、ルミナス島が「誰かに操られた」魔物によって襲撃されたとする事実は、ギルド首脳部に衝撃を与え、アダー行きの連絡船を最後に、しばらくの間、島は封鎖されることとなった。

ちよつと待った！ 港の船はすべて、ガムウによって破壊されたはずではないのか？ そう思う方もいるかもしれないが、ルミナスには玄関口と呼ばれる「ルミナス―カルチュート港」以外に、島の北端に「ルミナス―アダー港」という勝手口が存在している。玄関口は、ガムウによって半壊させられてしまい、ほぼ港としての機能を消失しており、復旧に時間がかかるが、勝手口は無傷だった。そのため、封鎖されることになったのは、この勝手口側の港である。

ちなみに、アダーとは、ガモーフ神国領内の小さな港町であり、言い換えれば、ルミナス島へ入島できる港は、カルチュートとアダー以外に存在していない。その、勝手口が封鎖されれば、島から出られなくなってしまう。泳ぐには陸地は遠く、港の封鎖解除を待つには、旅費も気になるところだ。

それ以前に、アルサスには、島を一刻も早く出なければいけない

理由があつた。そう、アルサスが殺めたシャドウズのことだ。遺体は、島の下宿通りの奥に転がったままだ。あれが発見されれば、必然的に「殺人事件」が取り沙汰されることとなる。

なるべく、ネルに知られたくない。シャドウズが死んでいたと耳にすれば、犯人がアルサスであることに彼女は気づくだろう。そして、また「わたしの所為で」と顔を曇らせてしまう。そんなネルを見たくはなかった。

だから、アルサスは昼間の食堂に置いてきた、旅のリュックを引き取りに向かい、あの世話焼き大好きな、食堂のおばさんにお礼とお別れを告げたその足で、ネルの手を引っ張って、勝手口の港へと急いだ。

すでに、陽の光が赤くなり始めている。

「急げ、急げっ!!」

と、アルサスは街を駆け抜けた。それ一個が共同体として成立するほど大きくはない島とは言え、南側にある食堂通りから、北端の港まではそれなりの距離がある。魔法学校の校舎を迂回して、裏手にある住居や施設の間を駆け抜ける。

「わっ、わわっ、は、早いですっ!!」

ネルは、足がもつれそうになるのを必死で耐えながら、箱型のカチュアの帽子が飛ばされないように、抑えた。山育ちで、足腰は鍛えられているネルだが、ごつごつとした石が敷き詰められた、石畳の道は、走りにくいことこの上ない。

「もうすぐ港だ、がんばって! あの手を逃したら、ウエスアへは行けなくなっちゃうっ!!」

ぐいっと、手を引きながら、アルサスが言う。

ガムウが去った後、ガモーフ国領にある「ウエスア大教会」へ行きたいと言ひ出したのは、ネルだった。二度目の奇跡を起こして、「奏世の力のこと、もっとちゃんと知りたい」という思いを強くしたのかもしれない。そんなネルは、ルウが昼間に「行ってみるといい」と言ったことを、覚えていたようだ。もともと、どこにあるか

も分らない「答え」を探す旅だ。そして、ウェスアは、ベスタ教の総本山。少しでも可能性があるのなら、行ってみる価値はある。

だからなおさら、最後の船に乗り遅れるわけには行かなかった。

と、その時だ。アルサスの背後を、「おおーい！ アルサスつ、ネルお姉ちゃん」と呼び声が追いかけてきた。アルサスとネルは驚き顔を見合わせて、立ち止まり、ほぼ同時に振り返った。

「ルウ！？」

見れば、制服姿のルウが、鞆を肩から提げ、身の丈の倍はあろうかと言う長めの魔法杖まほうじょうを手に、こちらへと走ってくる。

「待って、待ってよう。ボクも行くっ！ ボクもウェスア大教会へ連れて行ってっ！！」

息を切らせながら駆け寄ってきたルウは、そう言うと、丸ぶちメガネの奥で満面の笑みを浮かべた。

「何言ってるんだよ、お前、学校があるだろう？ しっかり勉強しなきゃ立派な魔法使いにはなれないぞ！！」

アルサスが困った顔をして言うと、ルウはぷいっと顔をそっぽ向けて、

「レイヴンのアルサスに言われたくないよ。あんなすごい力を見せてられて、学校の勉強なんかやってらんないよっ！ ボクも『奏世の力』のこと、知りたいんだ！」

と言った。そして、付け加える「ねえ、ついて行ってもいいでしょう？」のセリフは、どこかおねだりする子どもに似ていて、思わずアルサスとネルは苦笑してしまう。減らず口を叩いたり、舌を巻くほどの知識を披露したりと、神童を自称するだけあって、十歳の子どもに見えないところもあるが、基本的に、自分の興味に正直なルウはやはり子どもなのだ。

「また、魔物に襲われるかもしれないぞ？」

アルサスはちよっとだけ脅かすような口調で言う。だが、ルウは、そんな脅しなど意にも介さず、キラキラとした瞳を向けて、

「ボクの魔法の力は見たでしょ？ 少なくとも、アルサスの剣なみ

には役には立つと思うよ」

と、豪語した。もちろん、張ったりではなく、ガムウとの戦いで見せた魔法の腕前は、確かに言葉どおりだ。だが、アルサスは、どうしたものかと悩んでしまう。いくらなんでも、子どもだ。

「一緒に来てくれますか、ルウ？」

アルサスが悩んでいる間に、ネルがそつとルウに手を差し伸べた。こくりと頷いて、「もちろんだよ」とルウがその手を取り、にっこりと笑いあう。アルサスは、そんな二人の姿を見て、半ば溜息混じりに、

「仕方ないな……」

と、ルウの随伴を許した。

ちやうどそのタイミングで、港のほうから、出航を知らせる半鐘の鐘が鳴り響く。

「やばいっ！ くそっ、ネル、ルウ全力で走れっ！！」

アルサスは、ネルの手を引き、ネルはルウの手を引き、三人は港へと全力疾走した。彼らが港に駆け込んだとき、まさにアダー行きの船は帆を張り、舳を下ろそうとしているところだった。あと一分でも遅れていたら、呆然と船を見送ることになっていただろう。

この幸運が、アストレアの導きであるか否かはさておいても、旅の続きは、新たな仲間を加えて、一路ガモーフ神国ウェスア大教会へ……。

17. 旅の仲間（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せください。

18. 巡礼の道

忌々しいのは、影走り・シャドウズの失態ではない。影を縫うように疾駆する彼らとて、ミスはある。「勝敗は兵家の常」と言う言葉があるように、一度の失敗で、彼らへの評価を変えるつもりはない。メッツェ・カーネリアにとって忌々しいのは、「運び屋」ゲモック・ラボンから娘を奪ったレイヴンの男と、そしてなによりも、自らの上司であるライオット・シモンズだ。

レイヴンの男が、十五、六歳の少年であることは、シャドウズ本隊からの報告から分かっている。名前も「アルサス」と言うらしいのだが、素性ははっきりとしない。それと言うのも、レイヴンとはギルドの名ではなく、剣や魔法だけを頼みに、当て所なく放浪の旅をする流浪人のことを、誰ともなくそう呼び始めたのだ。そのためレイヴン個々の情報を手にすることは容易ではない。すでに、「アルサス」という名のレイヴンについて、調査を行っているが、今のところ分かっていることは、背格好と名だけだ。

だが、おそらく、此度のルミナス島での失態は、そのレイヴンによるところが大きいだろう。ガムウを使い、ルミナスに騒動を起こさせ、娘を奪還する。乱暴な策だとは思ったが、こちらにも事情がある。第一に、娘のことを騎士団の連中に知られるわけには行かない。第二に、シオンさまの耳に入れてはならない。知れば、シオンさまはお怒りになられるだろう。第三に、ガモーフに知られてはならない。

時がたてばたつほど、情報は自然と漏洩し、センチ・レーバン王国がガモーフの娘を攫ったことは、白日の元にらされることになるだろう。黒衣の騎士団がラクシャ村を襲撃したその日から……いや、もっとその前から、すべての期限は決まっていたのだ。その日のことを「約束の日」とライオットとメッツェは呼んでいる。

その日までに何としても銀色の娘を、手に入れなければならない

のだ。だから、ことを急いってしまった。その結果、シャドウズに人的な被害を与えてしまったことは、ほかならぬメッツェの失策だった。おそらく、その人的被害を与えたのは、アルサスというレイヴンが殺めたのだろう。すでに、ガムウがルミナスの港で暴れている隙に、娘を奪還させるべく送り込んだ、五人編成のシャドウズ分隊が、帰投しなかったという報告は受けている。しかし、特殊な鍛錬をしたシャドウズを、たった一太刀で殺められるとは、アルサスという少年、何者なのであろうか……。

実に、謎の人物だ。忌々しい！ メッツェは涼しい顔を見せつつも、胸焼けにも似た不快感を感じていた。

そして、それに拍車をかけたのは、ライオットだ。

「これはどういうことだっ!!」

ガムウ襲撃から、五日後のことである。メッツェを宰相府の自室に呼び出したライオットは、開口一番、彼を責め立てるように怒鳴った。ライオットの言った「これ」とはルミナスの魔法使いギルドから直々に送られてきた、親書であった。

メッツェは、それを手に取り、文面に目を通す。

「こいつも同封されておった」

そう言って、ライオットが投げてよこしたのは、センチ・レーバンの紋章が刻まれた指輪である。親書には、丁寧な文言で、ガムウ襲来とセンチ・レーバンの関与を疑う文書が書かれていた。つまり、シャドウズの遺体に残されたセンチ・レーバンの指輪を発見した魔法使いギルドが、抗議の親書を送りつけてきたのだ。

「メッツェ、私の断りもなくガムウを使い、あまつさえ、ギルドに干渉するとは何事か!？」

もしもギルドとの関係性がもし崩れれば、国家はギルド連盟を敵に回すことになる。物流や交易など様々な分野をギルドによって支配されている以上、ギルド連盟とことを構えれば、センチ・レーバン王国はライフラインを失うことになる。それは、国際政治上最も避けなければならない事態である。

だが、ライオットは、もっとことの重大性に気づいていない。ルミナスで、新たな未知の力が魔術師府によって感知されたと言う報告も受けている。しかもアトリアの森のときより、強力になっている。確実に「約束の日」は刻一刻と迫っているのだ……。

ライオットはそのことに気づいていない。いや、そもそも「約束の日」の意味すら分かっていないのだ。彼の頭の中にあるのは、己の利益と保身のみ。シモンズ家はそうやって、宰相家と呼ばれるまでのし上がった、政治家一族だ。

「ガムウは、わが国の技術院が極秘裏に捕獲し、新型魔法装置の実験を行っていた、大事なモルモットだったのだ。それを失ったばかりか、大ギルドの魔法使いギルドと事を荒立てて、この失態の始末、どう付けるつもりだ!？」

ライオットの、耳を劈くつんざような怒鳴り声に、メッツェは「ほらね」と思う。ライオットは、ガムウを失ったことよりも、ギルドと険悪になるかもしれない言うことよりも、もっと大事な「娘を奪還できなかった」ということに、まるで気づいていない。

何よりも、優先されるべき事項は、銀色の娘を手に入れることだ。そうすれば、ギルドなど恐れるに足らない。新型魔法装置など、必要な代物と化する。何度説明しても、このボンクラには分かるまい。

「ガムウを使い、あまつさえギルドに疑念を抱かせたこと、弁明するつもりはありません。シャドウズの生き残りは、すべて本国へ引き上げさせるよう命じました。ガモーフ領へ入ったと思われる銀色の娘とレイヴンの行方は、シャドウズよりも勝手のいい『黒衣の騎士団』に追わせています。直に彼らが、追いつき銀色の娘を手に入れるでしょう。私の処分は、娘を手に入れてからにして下さい」

メッツェが語気を強めて整然と言うと、ライオットは何故か出鼻をくじかれたように、しゅるしゅると萎んでしまう。勢いだけで怒鳴り散らせば、冷静な返答に太刀打ちできなくなる、ライオットがそういう人間だと言うことを、メッツェは知っていた。

「今肝要なことは、シオンさま、騎士団、ガモーフどもに気づかれぬよう、娘を手中に収めること。それが、わたしの責務と考えています。ギルドへの対処は、宰相府親書による返答で、無関係の一点張りで通します。われらの技術院が、ガムウを捕獲していたことは、誰も知りません。幸いこの指輪は、多く世間に出回っている代物です。これしき指輪ごときで、センチ・レーバン王国とガムウの関連性を決定付けることは出来ません。こちらが、知らぬ存ぜぬを通せば、彼らとて、完璧な証拠が揃っていない以上、王国とことを荒立てたくはないはずです。それが、政治的なかけひきと言うものではないでしょうか」

「知った風な口を！」

ドンっ、と執務机をたたくライオット。だが、メッツェはその先の扱い方も心得ている。この男に仕えて五年余り。

「いえ、ライオット閣下もそうお考えだったのではありませんか？」
そうおだてた物言いをすれば、

「む、むう。その通りだ……」

と返ってくるくらゐ、容易に予想できた。

「では、至急、魔法使いギルドへの親書を書かせます。それをアローズへ運ばせる適任者は誰か居りますでしょうか？」

あえて、相手に決断のひとつを委ねてやる。挙がる名前はひとつしかないことをメッツェは分かっているが、そうすることで、ライオットに決断をしたと言う自己満足を与えてやるのだ。

「親衛騎士団のクロウ・ヴェイルに持たせ、アローズ関所へ向かわせろ」

「しかし、彼は先日戻ってきたばかりで、とんぼ返りになりますが……」

「あの没落一族の、子倅こせがれならば、我がシモンズ家には逆らえん。嫌とは言わぬさ」

ニヤリ、ライオットがいやらしく笑う。メッツェは、その笑顔を見るのも嫌気がさして、一例を返すと部屋を後にした。

廊下でライオットのメイド長とすれ違う。年の頃は、メッツェと大して代わらない若さだが、いつも鉄面皮のような女だ。彼女は、メッツェの姿をみるや、廊下の端に寄り、彼のために道を明けた。だが、彼女は、

「ご苦労」

と言って、通り過ぎるメッツェの眉間に、シワがよっていたことなど気付きもしなかった。

「えーっと、色々と聞きたいことはあるんだ。でも、まずは、この状況について説明してよっ！ 何、何、どうしてボクたち、魔物に追われてるワケ！？」

ルウが絶叫にも近い悲鳴を上げる。アルサスは、ネルの手を引きながら、

「いいから走れっ！！ あいつら、見た目はイノシシだけど、平気でターンしてくるから」

と、怒鳴った。

「そんなこと聞いてるんじゃないっ！！」

語尾の部分だけが、周囲にこだました。だが、その声も、背後より怒涛のごとく迫り来る足音にかき消される。彼らの後ろを、まさに猪突猛進で追いかけてくるのは、ボアル族と呼ばれる魔物の一種だ。アルサスの言葉通り、見た目は食用にもされることがある角イノシシによく似ている。だが、違うのは、草色の毛並み、そして先端に瘤状のスパイクを有した太い尻尾を持つていることだ。しかも、強靱な脚力で、一度狙った獲物は逃がさない。機敏に踵をかえして、獲物を狙う執拗さは、灰色狼に似たヴォールフ族に近いものがある。

「ボアルさん！ お願いです、気を静めてくださいっ！」

ネルが振り向きざまに言う。だが、そんなことで彼らの足はとまらないし、そもそも……。

「あいつら、ハイ・エンシェントじゃないから、言葉通じないよ、お姉ちゃんっ！！」

と、ルウが突っ込みを入れるが、それも空しく、ボアルの足音にかき消された。

何故、彼らがいきなりボアルに追いかけられているのか、その状況を説明するには、少しばかり時間を戻さなければならぬ。

ルミナスを出たアルサスたちは、その日のうちに、ガモーフ神国はアダーの街に到着した。小さな漁村らしく、簡単な入国審査を経てアルサスたちはガモーフの地を踏んだ。

ちなみに、レイヴンのアルサスとともにガモーフからルミナスの魔法学校に入学していたのルウはガモーフの通行手形を所持していたが、ずっと辺境のラクシャに住んでいたネルは、そんなものを持っていなかった。ところが、入国審査所を通り抜けられたのは、アルサスが連絡船の中で用意した偽造手形のおかげだった。本来ならば、三国が戦争状態にあった十年前ほど、正規手形を入手することは、それほど難しくはないのだが、なに分にも、慌ててルミナス後にしたため、それを買い求める余裕がなかった。

アダーで一晩宿をとった後、アルサスたちは、第二の目的地となった「ウェスア大教会」へと向かうことにした。ウェスアへの旅は、アダーからいくつかの村や町を経由して、街道沿いに北上する。旅程としては、昼夜歩き通して、一週間以上かかる道のりだ。整備された街道を歩く旅だから、それほど険しい旅ではないが、旅路としては長い。

そうして、星空の下で野宿を取りつつも、ようやく、二日目にし掛かったとき、アルサスたちの目の前に分かれ道が現れた。東の道はウェスアにつながる一本道。通称「巡礼の道」と呼ばれている。そして、西の道は空白地帯への関所へとつながっている。

無論、目的地はウェスアであるから、東の道へと進路をとる。

「巡礼の道」とはそもそも、ベスタ教を信奉する人たちが、聖地へのお参りに使う道である。いくつもの、丘陵が折り重なり、草と花が風に揺らぎ、時折小鳥の鳴き声が聞こえるのどかな風景は、まさに神の聖地へと向かう道にふさわしいものがあった。

だが、昼過ぎから降り始めたにわか雨は、のどかな風景とは裏腹に、激しく巡礼の道を叩きつけた。街道の傍に、一本の立派な「とねりこの樹」をみつけ、その下で雨宿りをしよう、と切り出したのはアルサスだった。にわか雨なら、雨が通り過ぎるまでしのげばいい。急ぐ旅でもなければ、何も慌てることはひとつもない。ネルもルウもすぐに同意し、とねりこの木立の下に入った。

ところが、とねりこの樹の下には先客がいた。成体のボアルである。ボアルは木の下で、ぶるる、ぶるると大げさないびきをかきながら、昼寝を取っている真っ最中だった。

アルサスは、思わず「きゃっ!」と悲鳴を上げそうになったネルの口を押さえ、

「しーっ、静かに。雨がやむまで、そっとしておこう」

と、提案した。眠っていてくれれば、何も恐れることはない。獣と変わりないのだから。太いとねりこの幹をはさんで、アルサスたちはなるべく物音を立てないように、魔物と背中合わせで雨宿りすることにした。しかし、雨に濡れた体は、徐々に冷えてくる。

「くしゅんっ!」

緊張感が和らぎ始めたその時、豪快に、ルウがくしゃみを飛ばした。それが、ボアルにとってはモーニングコールとなったことは言うまでもない。鼻息荒く立ち上がると、その鋭い目で、昼寝の邪魔をした人間たちを睨みつけ、猛烈な勢いで彼らを追い立てたのだ。

随分とお粗末な話だが、これが、アルサスたちがボアルに追いかけられる事となった顛末である。

18. 巡礼の道（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せください。

19. 出会い

にわか雨はすでに小康状態。雨雲の隙間からは、「天使のはしご」が降り注いでいる。本当なら、雄大なサジウ平野の風景を眺めながらの旅だが、今は絶体絶命の大ピンチ。

「だいたい、魔物が何で、街道沿いの木の下で寝てるんだようっ！」

ルウが両手を目いっぱい振りながら、アルサスに問いかけた。だが、返ってきた答えは、「知るかっ！！」の一言。怒り狂ったボアルは、手がつけれないことを知っているアルサスは、ネルの手を引くのに必死だった。

「なんだか、アルサスといると、走ってばっかりだよっ！！」

ぼやきと言うよりは叫びを、天使のはしごに向かって吐き出すルウ。

「うるさいっ！ 図書館にこもってなまった体には、ちょうどいいだろ！」

「ボクは、運動嫌いなんだっ！ こっち、こっちでがんばるタイプなのっ」

ルウは、ぼんぼんと自分の頭を人差し指で小突いてみせた。

「なにが、こっち、だよっ！ お前がくしゃみなんかするから、あいつ目を覚ましたんじゃないかっ！ あいつに轢き殺されたくないかったら走れ、クソガキっ！」

「分かってるよう、赤目っ！」

ああいえばこういう、二人は、ぎゃあぎゃああとわめきながら、街道をひた走る。

「二人とも、言い合いなんかしてる場合じゃないですっ！ ボアルさん、ものすごく怒ってます、何とかして止めないとっ！」

アルサスに手を引かれ、二人のやや後ろを必死に駆けるネルが叫ぶと、ルウは振り向きざまに、魔法杖を構えて、呪文を唱える。

魔力を帯びる魔法杖は、魔法使いが愛用する装備であり、自身の魔力を高める効果がある。ただし、魔法自体は、使用者自身の魔力に拠るところが大きく、もともと魔力の素養がないアルサスなどは、魔法杖を使ったところで意味を成さない。ちなみに、魔法杖の多くは、奇しくも「とねりこの樹」で作られている。とねりこの樹は、最も魔力を帯びた樹木なのだ。

「赤の精霊と契約の名の下に、具現せよ。汝、火炎の矢となれ……フランメ・プファイル！」

ルウの呪文に応えて、魔法杖の先端が輝きを帯びる。そして、放たれた無数の矢が、ネルの脇をすり抜けて、背後に迫るボウルを狙い撃った。だがルウの魔法は、着弾とともに四散する。それは、水が油をはじくかのようなだった。

「だめだよ！ あいつ、魔法防御してるっ！」

前に向き直り、悲鳴混じりに叫ぶルウにアルサスが問いかける。

「魔法防御？」

「魔物の中には、魔法の効果を打ち消すことが出来るやつがいるんだ。四つの精霊の力、つまり精霊元素を結集して具現化するのが魔法。それと同じだけの相対する、精霊元素を身に纏うことが出来たら、魔法の効果を打ち消せる、という学術的な論文がある。たしか、センテ・レーバンの技術院が、三年前に発表したんだ。知らない？」

と言われても、ルウが早口で説明することの大半を理解できないアルサスは、思わず小首を傾げてしまう。魔法防御？ 精霊元素？ 学術的な論文？ いくつもの疑問符が、年上の少年の頭の上を飛び交っていると察した、ルウは、「あー、もうっ！ アルサスのボンクラっ」と前置いてから、

「つーまーり！ あいつは魔法が効かない、超厄介な魔物なのっ！」と、後ろを指差した。

「ボンクラで悪かったな。俺は魔法なんて使えねえつつうの。だったら、神童のルウさんよ。この前みたいに、魔法と魔法をくっつけてやれば？」

「固定応用？ 走りながらじゃムリっ！！ 今度はアルサスの番つ、その剣で何とかしてよっ。雨宿りしようって言ったのは、アルサスなんだからね！」

こうなりや責任のなすりあいだ、とばかりに、ルウが怒鳴る。ガムウよりも小さい魔物、とは言え、人間の倍はあろうかと言う大きさ。勇敢に立ち向かったところで、前方に突出した鋭い牙に跳ね飛ばされるか、鉄のような色をした蹄ひづめに轢き殺されるかのどちらかだ。「あれを剣で？ 無茶言うな！ 大事な剣が折れちまうっ！」

「アルサスの、バカーっ！」

「二人とも、こんな時に喧嘩しないで下さい！」

三人の声が、地鳴りのようなボアルの足音とともに、巡礼の道に反響した。

助けを求めようにも、あたりに人影は見当たらない。「巡礼の道」と言うくらいだから、ウエスア大教会への巡礼者の一人や二人ぐらいいてもいいはずだ。あわよくば、街道警備をしているはずのガモーフ教会騎士団（※6）にでも助けてもらえるかもしれないと思っていたアテは完全に外れてしまった。

どこまで走れば、ボアルはあきらめるのか、途方もない追いかけて続ければ、先にばててくるのは、人間の方だ。

「きゃっ！」

不意に、小石に足元を取られたネルは、短い悲鳴とともにアルサスの手を離し、地面に転んでしまった。すぐに起き上がったものの、足首を押さえて、顔をゆがめる。

アルサスとルウは慌てて急ブレーキをかけ、踵を返すと、ネルの元に駆け寄った。

「お姉ちゃんっ！ 大丈夫？」

「だ、大丈夫です」

と、ルウの問いかけに応えつつ、立ち上がろうとするが、痛烈な痛みが頭の天辺まで駆け巡り、ネルは再びひひます跪いた。

「お二人とも、わたしに構わず逃げてください……」

「だめだ、足を挫いたネルを独り、置いていけるわけないだろ！」
アルサスは少し腫れたネルの足首を見るやいなやそう言うと、二人を庇うように、ボアルの前に立ちほだかり、剣を引き抜いた。魔物を斬るのは、人間を斬るときほどの心の抵抗がない。しかし、無益な殺生になることは分かっている。だからと言って迷う余裕はなかった。ただ、猪突猛進が如く走りこんでくるボアルを斬り殺すことが出来るかどうか、それは別の問題だ。

もしも、自分が跳ね飛ばされれば、ネルとルウは蹄に踏みつけられてしまう。一瞬の油断も許されない。そして、一撃で仕留めなければならぬ。

じり、と両足を踏ん張るアルサス……。

と、その時だった。視界に、一本の鉄槍が飛び込んできく。それは、ちょうどアルサスたちの背後から頭上を通過して、狙い済ましたかのように、ボアルの脳天に突き立った。一瞬何が起きたのか分からず、三人はきよんとしてしまふ。

脳天を貫かれたボアルは、大きな悲鳴を上げると、まるで荷馬車が横転するかのように、その場に斃^{たお}れた。だが、アルサスたちに危機が去ったと言う安堵感はない。

「何、何？　どうなってんの？」

ルウがうろたえを口にしながら、自分たちの後方、即ちウェスアの方角に顔を向けた。蹄鉄の音が近づいてくる。目を凝らしてみれば、天使のはしごにキラリと光る白銀の鎧をまとう、三人の騎士。彼らは、馬にまたがり、悠然とこちらに向かってきていた。

「ギルド・リッターだ」

と、口にしたのは剣を鞘に収めたアルサスだった。アルサスは、彼らと同じ白銀の鎧を着ている。もつとも、アルサスのそれは、ノミの市で買い求めたものであるが、彼らが着ている鎧は、紛うことなく私設傭兵団「ギルド・リッター」のそれだった。

「危ないところだったね、キミたち！」

アルサスたちのところまでやってくると、先頭の女性隊長が、馬

を下りた。にこやかな顔をして入るものの、鋭い目つきは、アルサスたちの素性をうかがっている。

肌が少し浅黒い……この女、ひとダイムガルド人か？ アルサスもまた、ギルド・リッターと思しき三人組に警戒した。

胸の大きな女だと思う。そして、彼女の左右に従う部下の二人は、筋骨隆々の男と、細面で知性を漂わせる男。随分とでこぼことしたトリオだが、どうやら、助けてくれたのは彼らのようだ。

アルサスは、ずっと、ネルたちの前に歩み出ると、

「危ないところを助けていただき、感謝する」

なるべく、警戒心を見せないように、言葉を選んだ。

「お前、その鎧は俺たちの……」

と、アルサスの鎧に最初に目を留めたのは、筋骨隆々の男の方だった。彼もおそらくダイムガルド人だろう。そして、細面の男は、アルサスと同じように白い肌をしているところを見れば、センチ・レーバン人といったところか。国籍も身分も問わないギルドらしい、混成部隊だと、アルサスと思う。

「これは、ノミの市で安く買ったものだ。きっと、あんたらのお仲間が、売ったんじゃないのか？」

「旅人には似合わない代物だ」

筋骨隆々の男は馬上からアルサスを見下ろして渋い顔をする。たしかに、その鎧はギルド・リッターの証であり、身分証とも言える。だが、アルサスは男の皮肉めいた言動をするりとかわす。

そんなアルサスに、女性隊長は少しばかり笑って、

「そんなことはないわよ、ベイク。ボアルに立ち向かうなんて、なかなか勇敢な少年よ。とりあえず、自己紹介するわね。こっちの筋肉ダルマはベイク。そして、そっちの瓜実顔うりざねがおがランティ。そして、わたしは、『ダイムガルド・ギルドリッター』のフランチエスカ・ハイト」

と、自己紹介がてらの握手を求めてくる。アルサスは、剣の柄に左手を添えながら、その手を取った。ある種の奇妙な緊張感が漂う。

本来ならば、助けたものと助けられたものの、のはずなのになぜかアルスとフランチェスカの間には、言い知れぬ、不穏めいた空気が流れている。その理由を今ひとつ分かっていないルウは、アルスとフランチェスカの顔を交互に見つめた。そして、気がついた。フランチェスカの視線は、アルスではなく、自分の傍でくじいた足の痛みに耐えている、ネルに向けられていることを。

「俺はアルサス・テイル。レイヴンだ。それから、こっちはルウ・パットン。魔法使いギルドの学生。それから……そっちの子は、ネル・リュミレ」

手短にアルサスが返すと、今度は細面の男……ランティが口を開いた。

「キミたちは、どうしてこんなところに？」

と言うその口調は、どこか尋問でもしているかのようだった。

「それは……」

ちらりと、アルサスはルウに視線を向ける。言外に「何か、上手い言い訳を頼む」と言っていることに気づいたルウは、

「じゅ、巡礼の旅です。それで、お祈りのために、ウェスア大教会に向かう途中だったんですが、ボアルに出くわしてしまって。本当に危ないところ、ありがとうございました」

と、取り繕う。嘘は言っていないぞ、とルウは思うが、そもそも行き先を告げなくなかったアルサスは、少しばかり苦渋の顔色をした。「へえ、ウェスアへ……」

案の定、握手の手を解いたフランチェスカは好奇の声音で、ネルを見る。カチュアの服と帽子を見れば、彼女がガモーフ神国の出身者であり、必然的にベスタ教の信徒であることは分かるだろう。だが、巡礼の旅装ではないし、センチ・レーバン人のレイヴンと魔法使いギルドの学生という奇妙な旅の仲間の組み合わせは、十分にフランチェスカに疑いを与える余地があった。

ところが、次にフランチェスカが口にした言葉は、意外な言葉だった。

「あなたたち、知らないの？　今、ウェスア大教会に行っても、お祈りできないわよ」

「は？　それはどういうことだ？」

「本当に知らないみたいね。今、ウェスアではちょっとした騒動が起きているのよ。おかげで、ご覧の通り、巡礼の旅をする人なんて、一人もいないわ」

そう言って、フランチェスカは周囲を見渡した。相変わらず、巡礼者の姿も、教会騎士団の警備隊も見当たらない。

「騒動？」

小首をかしげるアルサスに、「ええそうよ」と答えたフランチェスカは、

「ちょうど、わたしたちもウェスアへ向かう途中だったの。あなたたちの叫び声が聞こえて、引き返して来たんだけどね。どうかしら、一緒に行かない？　その子、足をくじいてしまってるみたいだし、早く医者に見せた方がいいでしょ？」

と続けて、自らの愛馬の背をぽんぽんと叩く。だが、アルサスは同意しかねた。フランチェスカたちギルド・リッターは、空白地帯で起きた辻馬車襲撃事件を知っている。もつとも、アルサスが襲った辻馬車はネルを連れ去ろうとしていた裏ギルドが偽装したものであったが、いずれにしても、今頃空白地帯を自主警備するギルド・リッターは、消えた積荷とそれを奪った者を探しているはずだ。

アルサスの警戒心は頂点に達するが、ルウの傍で青い顔をして、必死に痛みをこらえているネルを放っておくことは出来そうにもない。

「遠慮することあねえ。たとえ相手がレイヴンだろうが、魔法使いギルドだろうが、困っているヤツを助けるのも、俺たちギルド・リッターの仕事だ」

筋骨隆々の男……ベイクが言う。アルサスは小さく溜息をついて、「じゃあ、ネルを頼める？　俺たちは歩けるから」

と返事を返した。そして、ネルの傍に近づくと、リュックを下ろ

し中から、葉効の強い大きなアルテミシアの葉を取り出した。

「ごめんなさい、アルサス。足手まといになっちゃって」

心から申し訳なさそうにするネル。アルサスは、アルテミシアの葉をネルの足首に巻きつけて、布切れで覆ういながら、少しだけ微笑んで、

「仕方ないさ。それより、あいつらには要注意だ」

と、内緒話でもするかのような、小声で言う。

「いい人たちじゃないですか？」

「だといいんだけど……。とにかく、君は馬に乘せてもらうんだ。ルウ、いざって時の対処頼むよ」

「う、うん」

そんな三人の脇を通り過ぎ、ベイクがボアルの屍骸から、鉄槍を引き抜く。どうやら、それを放ったのはベイクのようだ。遠方からの正確無比な投擲は、思わずゾツとする。いや、ベイクだけではない、フランチェスカの一挙手一投足にも隙がないし、細面のランティはおそらく、ルウなみかそれ以上の魔法使いだろう。

何事もなければいいのだけど。アルサスは、ギルド・リッター三人組の姿をそれぞれ目の端に捉えながら、思った。

※6 ガモーフ教会騎士団……ガモーフ神国の騎士団のひとつで、ベスタ教会の頂点である、ウェスア大教会の指示によって活動する。他に、「ガモーフ神衛騎士団」が存在するが、こちらは法王（ガモーフの王）の命令のみに従う、国軍である。兵の数は、神衛騎士団の方が多い。

19. 出会い（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せください。

20. ウェスアの夕日

この世界には多彩な気候が存在する。たとえば、南のダイムガルド帝国などは、広大な砂漠に覆われた大地が広がる熱帯の国。北のセンテ・レーバン王国は、空気が乾いていて冷たく、冬になれば雪に閉ざされる国。その中でも、ガモーフ神国は、比較的安定した気候の国である。

気温は穏やか、豊富な水と湿潤な風は、「巡礼の道」と呼ばれる街道がのどかな野原であることに代表されるように、緑の多い国だ。だが、そののどかさとは裏腹に、ガモーフの自然にも、ここ数年来、変化が生じていた。山の緑徐々に減り、青い海はごくわずかに濁りを帯び、農耕や漁業などに徐々に被害をもたらし始めていた。アルサスたちも、ここまでの道すがら、枯れた森などを目にしている。

しかし、そんな異常現象は、なにもガモーフに限った話ではない。もともと、厳しい気候環境にあるセンテ・レーバンでも、ダイムガルドでも、作物が実らなかったり、井戸の水が干上がったたり、動物が姿を消したりと、異常な現象が各地で見られた。

なぜ、このような事態になったのか。おそらく、そう問えば、人々の口を突いて出てくるのは、十年前に起きた「ヨルンの悲劇」を口にするだろう。

だが、過去のことをぼやいても仕方がないことだというのは、誰もが思う共通の認識でもあった。それは、緑が減り、動物が姿を消し、魔物が人里を徘徊し、作物が実らない、などの異常現象は各国の辺境に深刻な貧困を引き起こし、小さな怨嗟えんさの声すら生まれ始めており、ひたひたと忍び足で迫り来る、世界の危機という予感があったからだ。

そんな、事態に声を上げたのは、ウェスア大教会の大司祭ウルド・リーだった。ベスタ教の大司祭は、宗教国家であるこの国の、事実

上のナンバーツである。彼は、女神アストレアに仕える身として、公然の説法会^{ミサ}で、ガモーフ神国の王である「法王」の政道を批判した。

「今、この世界に生きる私たちは、女神アストレアさまに試練を与えられている。異常気象、異常現象、それによって、小さな村や、漁村などは、貧困にあえいでいる。ところが、我らを導くべき法王さまは、神の都に居るにもかかわらず、神をないがしろにする悪臣の甘言に惑わされ、何の対策もおとりにならない。今こそ、過去の遺恨を棄て、隣国センチ・レーバンやダイムガルドと手を取り合って行かなければ、我ら憐れなる人間の仔は、女神さまの試練を乗り越えることは出来ないだろう」

その政道批判は、遠くガモーフ神都まで届き、法王に仕える大臣たちの輦轡^{ひんしゆく}と怒りを買うこととなってしまった。ただちに、大臣たちはウルドの大司祭解任と反逆罪逮捕のため、ガモーフ神衛騎士団をウェスアに派遣した。

あわや、ウェスアの門前町で、ガモーフの二大騎士団である教会騎士団と神衛騎士団が衝突する、という事態にまでなったが、これを収めたのはほかならぬ、ウルド大司祭本人だった。自ら、牢に入ることで、争いを鎮めたのだ。

それが、約一週間ほど前のこと。ちょうど、アルサスとネルが出会った頃だ。法王は、この事件に関して、つよい情報統制を敷いた。そのため、ちょうど同時期に、どの国の領地にも属さない空白地帯にいたアルサスたちはウェスアで起きた事件の事をまるで知らなかった。

「とまあ、そういうわけで、今ウェスアに行っても、教会にはは入れないし、礼拝も出来ないのよ」

ウェスア大教会へと続く巡礼の道は、「弧月湾」と呼ばれる弓なりの海岸に沿ってぐりと巡る。夕暮れに染まる凧の湾内を眺めながら、アルサスたちにウェスアの現状を教え終わった馬上のフランチェスカは、一息ついた。

「それで、巡礼者がひとりもいなかったんだね。でも、ウエスアの大司祭さまと、神都の法王さまが喧嘩するなんて、前代未聞の事件だよ。ガモーフ神国の長い歴史の中で、そんなこと一度もなかったはずだよ」

フランチェスカの馬の傍を歩くルウが、頭の中にある歴史書を紐解く。ルウもまた、ルミナス魔法学校の図書館に籠っていたため、ウエスアでの大事件を知らなかった。

「常に、法王さまの傍には、ウエスア大教会の大司祭さまがいて、常に水魚の交わりのように、互いを支えあって、国と信仰を守ってきた。それが、ガモーフ建国以来の伝統なんだ。とくに、今の法王さまと大司教様は異母兄弟で、お互いに誰よりも深く信頼しあっているはずだよ」

「あら、よく知ってるわね。ルウくんはガモーフの歴史に詳しいのかしら？」

「まあね。歴史を勉強するのも、大事なことから」

フランチェスカに褒められたのが嬉しいのか、ルウはふふんと鼻を鳴らす。そして、後ろを振り返った。

「でも、センテ・レーバンの歴史なら、アルサスの方が詳しいかもね。だって、アルサスはセンテ・レーバン生まれなんでしょ？」

ルウのやや後ろを歩くアルサスは、不意に話を振られて、少しだけ驚いた顔を見せる。ずっと、フランチェスカの話に耳を傾けながら、彼女の馬の背に同乗させてもらっているネルの様子を伺うとともに、警戒のアンテナを張り巡らせていた。

「あ、いや。俺は勉強嫌いだったから……」

と、適当に返すアルサス。すっかり、ネルもルウも、フランチェスカたちに気を許しているようだが、アルサスは、フランチェスカの異様な親切さを、却って訝っていた。

本当に、ただの親切心なのか？ いや、傭兵部隊のギルド・リッターは人助けをするギルドなんかじゃないことをよく知っている。今もアルサスのさらに後方を馬に乗ってついてくる、ベイク、ラン

ティの二人組みは鋭い視線をアルサスの背中に投げかけてくるのをひしひしと感じていた。それは、アルサスがフランチェスカに向ける疑いの視線と、よく似ている。

「でも、わたしは大司教さまの仰ること、よく分かります。わたしの住んでいた村でも、家畜のリヤマが病気になったり、畑の作物が育たなかったりしていました。村長さま^{むらおさ}たちも、頭を抱えていました」

馬上のネルが言う。すると、フランチェスカは、手綱を引いたまま目だけネルの方に向けて、

「ネルちゃんは、どこ出身なのかしら？」

と尋ねた。ネルは、答えてもいいのか、アルサスに視線を送ったが、アルサスは答えてくれない。それどころではないようだ。

「辺境のラクシャ村です」

仕方なく、アルサスの返事を待つ前に、ネルは答えた。

「ラクシャ、あそこは……」

ネルの答えに、フランチェスカが何か言おうとしたその時、話に割って入るかのように、ベイクが声を上げる。

「隊長！ ウェスアが見えてきましたぜ！」

と、ベイクの太い人差し指が、指差す先に見えるのは、弧月湾のほとりで夕日にに輝く石英の塔であった。それこそが、ウェスア大教会のシンボルであり、湾を見下ろすベスタ教の鐘つき堂である。ウェスア大教会の歴史は古く、ガモーフ神都が国家の首都ならば、ウェスアはベスタ教の中心地である。そのため、教会堂の周りには、門前町と呼ばれる、都市が広がっていた。

「大きな町だよ。商業と産業、それに信仰がひとつに集まっている。街に住んでいる人たちはみんな、ベスタ教の敬虔な信徒で、彼らの生活のリズムを刻むあの塔の鐘は初代大司教さまが作ったといわれる、ミスリル（※7）の鐘なんだ」

「ルウくんは何でも知っているのね。街に着いたら、ひとまずお医者さまのところへ行きましょう。いい医者を紹介するわ」

フランチェスカは、ダイムガルド人特有の浅黒い顔に、優しげな笑みを浮かべ、「ありがとうございます、フランチェスカさん」と慇懃に頭を下げたネルは、フランチェスカの親切にお礼を述べた。

そんな二人を横目に、アルサスはウエシアの全景を見つめた。ベスタ教とともに、歴史を刻んだ町並みは、夕日によってオレンジ色染まっている。

妙に恥ずかしくて、誰にも言ったことはないが、アルサスは、この時間帯の穏やかで静かなひとときが、昔から好きだった。「魔法の時間」それは……そう、それは妹から教えてもらったのだ。人も草木も街も空も雲も、あらゆるすべてものが、同じ色に淡く染まり、美しく輝く時間帯、だから「魔法の時間」と呼ぶのだと。

だが、センチ・レーバン見た夕日も、ガモーフでみる夕日も、見える夕日は同じ赤色をしているものの、何故か、アルサスは不安を拭いきれなかった。

「お腹すいたね。アルサス、街についたら、何かおいしいもの食べようね」

不意に、ルウが歩速を緩めてアルサスの隣に来ると、小声で言った。どうやら、フランチェスカたちに救われてから、妙に黙りこくったアルサスの事を気遣ったみたいだ。ルミナスから数日間、共に旅をして分かったことがある。ルウは普段、賢い自分の事を鼻にかけたような物言いをするが、時折、もっと子どもらしくないことがある。それが、まさに今、アルサスの事を気遣い、顔色を伺うルウの姿だ。

ルウは、まだ物心がつく前から、魔法の才能を見出され、ルミナス魔法学校に入学し、以来ずっと両親と離れ離れで暮らしてきた。そんな彼が年上の同級生たちに囲まれて、身につけた、ひとつの処世術なのだろう。本当なら、図書館で古書を読み漁るよりも、友人たちと走り回っている方が楽しい年頃だ。かつて、アルサス自身がそうであったように。

「じゃ、大盛り定食な」

アルサスは冗談を口にしながら微笑むと、ルウの頭をわしわしと、撫でてやった。

ギルド・リッターの腹のうちは分からなくとも、ネルとルウの身だけは守ってやる……。それが、すべてを捨てて、あいつに何もかも押し付けてしまったのに、一番肝心なことを迷い続けている。そんな自分に、今出来ることはそれしかない。

ぐっと、こぶしを硬く握りながら、アルサスは、馬上でネルと楽しげに会話を交わすフランチエスカの横顔を睨みつけた。

アトリア連峰に沈む夕日を左手に、センチ・レーバン王都からの街道をゆっくりと進む騎馬の一団があった。戦闘を進む白馬には、鞍のアタッチメントに、小さな旗がつけられている。剣と盾、立国より数百年、群雄割拠した八百諸侯を武力で統一した、センチ・レーバン王国の国旗である。そして、国旗の上には赤いひも状のリボンがくくりつけてある。それは「使者」を意味する、万国共通のサインだ。

つまり、白馬が率いる一団は、センチ・レーバンの使者の一団である。

その白馬にまたがるのは、一人の青年だ。名はクロウ・ヴェイル。年の頃は二十歳を直前にして、栗色の髪の下顔はまだ少年のあどけなさを残してはいるものの、鼻筋の通ったなかなかの精悍な美男子である。そんな彼は、銀色に、ブルーのラインと金の飾りがあしらわれた鎧を身に纏っている。銀色の鎧はセンチ・レーバン騎士団共通の甲冑であり、ブルーのラインは「親衛騎士団」をあらわしており、襟首にあしらわれた金の飾りは部隊長の証である。

「クロウ隊長。もうじき、アローズ関所です。陽が暮れるまでには、到着できそうですね」

青年の名を呼び、前方に見えるアトリアの谷を指すのは、彼の隣を併走する副官だ。顔立ちの整ったクロウと並べば、野獣のように見えるが、クロウが最も頼りにしている、歴戦の戦士でもある。

「親書はここに。魔法使いギルドと戦をするわけではないですから。不用意に、剣を抜くようなことがないように、隊の者たちにも徹底しておいてください」

クロウが肩から提げた筒には、魔法使いギルドへ宛てた宰相府の親書が入ってる。クロウ隊の任務は、これをアローズ関所で待つ、魔法使いギルドの使者に手渡すことだ。その上で、宰相閣下の指示通り、センテ・レーバン王国と、ルミナス島での一件は、何のかわりもないと伝える。

事情の委細を聞いているわけではないが、宰相閣下の命令を伝達したメッツェ参謀官は、妙にいらだっていた。その理由を問いただすつもりはないが、十中八九、センテ・レーバン王国はルミナス島の一件に関わっている。魔物を使役して、ルミナスを襲わせる。それに何の意味があるのか……？ 思わず考えようとしたクロウは、騎士のするべきことではない、騎士は命令に忠実であればいい、という自分への戒めを思い出して、メッツェに問いただすことはなくアローズへ旅立った。

「しかし、ライオット宰相閣下も人使いが荒い。細かいことは何も教えてくれないのに、アローズへ行けといわれたかと思えば、戻って来いといい、そしてまた、アローズへ出向けと。これでは、宰相府の小間使いじゃないかと、口にする者たちもいます」

副官は、渋い顔をしながら、部下たちを振り返った。みな騎乗してはいるものの、突然の命令に辟易しているのは目に見えていた。

「ライオットさまの陰口を叩いても仕方がないでしょう、副官。今は、これをお届けするだけです」

と、クロウがこともなげに言うと、副官は嘆息を返してきた。

「隊長は真面目すぎます。他の隊長のように肩の力を抜いてください」

「小間使いが出来るということは、この国が平和だということですよ。もう、十年前のようなことがあってはならない。これからの騎士の務めは、戦をすることではなく、平和を守ることです」

「やはり、隊長は真面目すぎますな」

副官の声は、アトリアからの風に流されて消えていく。

やがて、その風が夜風に変わる頃、クロウ隊はアローズの関所へと入った。関所内は、小さな町となっている。とはいっても、関所はそもそも生活する場所ではないため、住居などではなく、簡易の宿場や酒場が軒を連ね、旅人を待っている。その、メインストリートの突き当りには、感嘆には乗り越えられない高い壁と見張り櫓が設置され、空白地帯との境にあたる大門がある。すでに出入国管理の時刻は過ぎていたため、門は固く閉ざされていた。

ここは、センチ・レーバンの玄関口でもある。国境を越える方法はいくつかあるが、そのどれもが峻険な難所であるアトリア連峰を山越えしなければならず、魔物に出くわしたり、自然の猛威に阻まれたりする。また、ここより東にあるアトリア最高峰「シェラ山」のふもとには、このこと同じような谷間があるが、こちらはガモーフと直接国境を接しているため、要塞が築き上げられて、外国の旅人はおろか、センチ・レーバン人ですら、通過する事を許されていない。

つまり、安全に国境を越えるには、アローズを通過するのが一番良い方法である。そのためか、閉ざされた関所の門は、大の男が寄って集^{たか}っても、開けることは容易ではないほど巨大だ。それゆえ、「アローズの大門」と呼ばれている。

その大門の傍に、大きな建物がある。アローズの出入国管理局の建物だ。ここで、通行手形を提示し、問題がないと判断されれば、門をくぐる事が許されるようになっていた。そのため、入り口にはつねに、屈強兵隊が立っている。

彼らは、クロウの一行が到着したと知るやいなや、居住まいを正して、クロウを出迎えた。

「クロウさま、魔法使いギルドの方々は、当館の来賓室でお待ちしております」

「分かりました。馬をお願いします。僕……いや、私の付き添いは

副官だけ、他の者はここにて待機。大事にはならないから、休息でもとっていてくれ」

クロウは部下たちに指示を与え、馬の手綱を兵隊に預けると、副官を従え管理局の建物へと足を踏み入れた。

来賓室とネームの打たれた部屋で待っていたのは、黒いローブの正装に身を包んだ、魔法使いギルドの使者である。彼らは、意外にも歳若いクロウが入ってきたことよりも、彼が騎士の格好をしていることに驚いているようだった。

「これは、これは、親衛騎士さまがおいでくださると思いますもありませんでした」

席を立ち、使者の男はクロウに頭を下げる。やや皮肉が込められていることに、クロウは気づいていた。そもそも、こういった外交ごとは、外交官の仕事であり、騎士団の仕事ではない。それは、つい先ほど、隣に居る副官に言われたことだ。

「此度は、わざわざルミナス島よりおいでくださいました。こちらが宰相府よりの親書にございます」

慇懃な言葉を並べつつも、クロウは筒に入れられた親書を取り出した。すると、使者は少しばかりそれを受け取るのを拒んで見せた。「宰相府から？ 我らギルドは、王陛下さまに此度の一件の説明をいただけるものと思っておりましたが」

「ご存知の通り、先王はさきごろご逝去されました」

「しかし、次代にはご正室の御子であらせられる、シオンさまがおつきになるのでは？」

やや、使者の目の色が変わるのを、クロウの隣に控える副官は見逃さなかった。

「ご使者どの！ それは内政干渉ですぞ。まだ、次代の王は決定しておりません。シオンさまはまだ幼い上に、われらには……」

「副官！ 余計な事を言わないで下さい！！」

ピシャリと言葉を遮ったクロウに、あからさまにしまった、という顔をした副官は「失礼しました」と言っただけ口を噤む。

「とにかく、宰相閣下が現在、わが国の最高意思決定者であります。その閣下からの親書にも書かれている通り、わが国は此度の一件とは何の係わり合いもありませぬ。これ以上の詮索は、ギルドへの正式な遺憾の意として表明せざるを得ませんと、ギルド長さまにお伝えください」

「なるほど、それは我々魔法使いギルドも望まないことでございます」

クロウから親書の入った筒を受け取った、魔法使いギルドの使者は、センチ・レーバン側の真意を悟ったのか、クロウの言葉に意外にもあっさりと引き下がった。

「しかし、近頃、センチ・レーバン王国は軍備を拡張しているという話しも聞きますが？ その脅威がある限り、納得したとしても、疑念は拭い去れませぬぞ」

「分かっております。しかし、軍機ゆえ、専守防衛のためとしか答えられません。もっとも、我ら王国も、ギルドと事を起こしたいとは思っておりません。穏便に、済ませられるならそれに越したことはありません」

クロウはそう言って、ダメ押しの一手を懷より取り出す。出立前に、メツツェから渡されたものだ。金一封、即ち賂まがいの類である。使者を金で買収する。政治としては、常套手段の一手である。しかし、その事を知らなかった、苦勞の傍に控える副官は少しばかり驚いた顔をしていた。

穏便に、その意味を噛み砕くように、使者は賂の入った封筒を受け取ると、ニヤリと歪んだ顔を正し、使者然とした口調で、

「左様にございますか。では、親書は確かに、ルミナス魔法学校校長であるギルド長さまにお届けします」

と言った。

あっけなく使者との談合は終わり、管理局付きの兵隊につれられ部屋を後にすると、来賓室は静かになる。

「賄賂とは、政治家どもの考えることは、理解できませんな」

副官が憤りを言葉に乗せる。

「僕もです。けど理解しなくても、いいんじゃないですか？ 僕たちは、国を守る騎士団として、その任務をそつなくこなす、それだけでいいんですよ」

クロウは、小さく笑った。だが、その笑顔は、どこか自嘲にも似た色をしていた。

「そのような物言い、お父上が聞かれたら、お嘆きになりますぞ」

「苦言はよしてください、父は十年前に死んだのですから。死んだ人は、もう嘆くことも怒ることもできません。それより、副官。直ちに、王都へ引き返します。その前に、エーアデ通信を使って、メッツェさまに報告。『首尾は上々』と」

クロウはそう告げると、副官の返事を待たず来賓室を出て行った。

※7 ミスリル……この世界で採掘されるレアアースのひとつ。魔力を帯びた金属鉱石として知られている。魔

20. ウェスアの夕日（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せください。

21. ギルドの命令

病院というのは、どこでも薬のにおいが染み付いている。天井に、壁に、診察台に、医者白衣に。薬の多くは、アルテミシア葉や生薬を混ぜて作られる。そのため、アルテミシアの葉特有の、鼻の粘膜にまとわりつくようなにおいがするのだ。ルウは、それを称して「学園の保健室みたい」と言ったが、結局保健室も同じようなものなのだ。

フランチェスカが紹介してくれた医者は、ウエスアの町の片隅にある小さな町医者だった。他に大きな病院や、協会が運営する救護所があるのだが、そういったところは、ウエスアでの大司教逮捕事件に端を発して、ガモーフ神衛騎士団が閉鎖させている。

実際、町に入って驚いたのは、そこかしこに騎士団の兵隊が立っていることだった。全員、槍や剣を携え、青銅色の鎧を纏っている。その様相は、戦時下の都市を思わせた。町に入ってくるものは、兵隊たちによって、町の入り口で厳しく審査される。ネルの偽造手形も、さすがにバレてしまうところだったが、フランチェスカたちギルド・リッターが居てくれたおかげで、安易に通行を許された。それが、ギルドの威光のおかげであることは明白だった。

しかし、町並みは、どこか暗く沈んでいる。いつもなら、貧しくとも、巡礼者で賑わうような町だが、まるで通夜の夜を思わせるほど暗く沈んでいる。町の人の話に寄れば、いつも町の生活リズムを刻むように鳴り響く、教会堂のミスリルの鐘も事件以来、一度も鳴っていないそうだ。

「ややこしい時に、来ちゃったわね」

同情するかのように、フランチェスカは言った。たしかに、ややこしい時にきてしまった。この状況では、ギルド・リッター如何いかにに関わらず、「奏世の力」の事を聞きまわるなんてできやしない。下手をすれば、兵隊たちに怪しまれて逮捕されてしまいかねない。そ

のくらい、町の空気が、ぴりぴりとしているのだ。

そんな中、フランチェスカに案内された町医者診療所で、アルサスとルウは、ネルの手当てが終わるのを廊下で待っていた。

「お姉ちゃん、大丈夫かな？」

「ああ」

「お姉ちゃん、自分にあの力を使うことできないのかな？」

「ああ」

「今夜の宿を取らなくちゃね。まさか、街角で野宿するつもりじゃないでしょ？」

診察室の前に置かれた長いすに腰掛け、床に着かない足をプラプラさせていたルウが、沈黙に耐えかねてアルサスに話しかけた。アルサスは窓から、夜の街を眺めつつ、しかし、心ここにあらずといった風に、何を聞いても「ああ」と短く答えるだけ。

何を考えているのか、時々アルサスのことが分からなくなる。ネルは、それでも「アルサスはとても優しい人ですから」と笑うのだが、今のアルサスはどこか怖いとさえ、ルウには思えた。

「手当て、終わりましたよ」

がらり、と診察室の扉が開き、看護師の中年女性が顔を出す。診察室に案内されると、診察台の上に腰掛けたネルの足首には、包帯が巻かれており、なんとなく痛々しげであった。

「ご迷惑をかけてしまって、ごめんなさい」

開口一番、そう口にするネルに、アルサスは固い表情を崩して微笑んだ。だがそのぎこちない微笑みに気づいたのは、ルウだけではなかった。

「ずっと、浮かない顔をしていますね、アルサス……」

「そんなことは」

ないと言いかけた、アルサスは診察室の壁に貼り付けてある姿見に映る、自分の不恰好な笑顔に気づき、閉口してしまった。そして、ちらりと医者の方を見やる。視線に気づいた、白髪の老医者はかすかに笑い、

「わしのことは気にするな。大丈夫、お前さんたちがワケありなのは、見れば分かる。ギルド・リッターに告げ口したりしやせんよ。もつとも、あやつらのことじゃ、今頃お前さんたちの素性を調べているかもしれんがな」

と言って、丸いすをくるりと回し、アルサスたちに背を向ける。

アルサスはそれを確認してから、医者科の科白に続けた。

「多分、その通りだ。ここで、ギルド・リッターに捕まるわけには行かない」

「アルサス、何か悪いことしたの？」

ルウが魔法杖の先端で、アルサスを小突きながら尋ねる。

「ネルを誘拐した犯人から、俺がネルを誘拐した。つまり、誘拐犯の誘拐犯なんだよ」

「誘拐犯！？ アルサスって、やっぱり悪い人だったんだね！」

かいつまんでしか事情を聞かされていなかったルウにとって、アルサスの発言は爆弾発言にも近く、メガネの奥で、そうでなくともつぶらな瞳を丸くする。

「やっぱりって、お前なあ……そういう目で俺を見てたわけ？」

呆れ顔のアルサスに、驚いて見せたのもつかの間、ルウは急に真面目な顔に戻る。

「冗談だよ、間に受けないでよ。要は、誘拐犯から、アルサスがお姉ちゃんを助けたんでしょ？ それで、消えたお姉ちゃんとアルサスの事を追いかけているかもしれないギルド・リッターに捕まれば、あれこれ取調べを受けることになっちゃう。そうしたら、このまま、『奏世の力』のことも調べられないままになるかも知れない、そう思ってるんでしょ？」

「そういうこと。都合が悪いのは、ギルド・リッターだけじゃない。町中に、ガモーフ神衛騎士団が居ることも、予定になかった。少しでも怪しまれたら、それこそ、大司教と同じ目に合わされるかもしれない」

「それで、ずっと、怖い顔してたんだね。アルサスが悪い人じゃな

いってことは分かってるつもり。お姉ちゃんには優しいし、ルミナスを救うために戦ってくれたもん。でも、大変だね、あの黒服の男たちに、ギルド・リッター、ハイ・エンシェント、いったいどれだけの人に追われているのさ？」

「さあな、少なくとも、シャドウズは気にする必要はない。あれでも、あいつらセンチ・レーバン王国の人間だ。ガモーフ領でむやみに暴れることは出来ない。外交問題になるからね。ただそうなる、当面問題なのは、あのギルド・リッターだ。一番『奏世の力』の事を知っているだろう大司教に会えないまま、この街を去るのは口惜しいけど、ここに留まっていたら、きっと大変なことになる」

「大司教さまに会えない……。仕方がないですよ、ウェスアの街が、こんなことになってるとは、思いもしませんでしたから」

ネルの言葉を前に、また空振りとなってしまう事に思い至り、三人は重い空気に包まれる。ベスタ教の言い伝えにある「銀の乙女」。その「銀の乙女」に与えられた力。それは、ルミナスの知識を以ってしても分からず、ならばベスタの総本山へと、旅してきたのだが、ここでも空振りとなれば、どっと肩に疲れがのしかかる。

「大司教さまなら、会えないこともない」

不意に、三人の間に割って入ったのは、今の今までカルテを書いていた医者であった。ふたたび丸椅子をくるりとこちらへ反転させて、「ここだけの話だ」と声を潜めた。

世界中で活躍する自警組織ギルド・リッターは、各国に支部を設けている。ダイムガルドでは、砂漠の入り口と呼ばれる「レメンシアの街」にダイムガルド支部を持っている。当然、ガモーフ時部も存在し、それがこのウェスアの街角にあるのだ。

フランチェスカたちは、ダイムガルド支部所属の隊員ゆえに、到着の知らせをするため、アルサスたちを町医者に案内した後、夜闇の街路をガモーフ支部へと向かった。その途中、街角でフランチェスカは不意に馬を止め、振り返る。

「ベイク、あなたはそのままの子たちを見張って。ランティ、あなたはもう一度、町の入り口にある臨時管理局で、あの子たちの素性を洗い出して」

と言って、フランチェスカはポケットから、メモを取り出した。アルサスと言うレイヴンの少年が、ずっとこちらを警戒していたことは分かっていた。それだけに、フランチェスカにはピンと来るものがあり、通行手形を見せてもらう代わりに、そこに書かれた身元を人知れずメモしておいたのだ。

「すると、やはり……」

ベイクとランティ。フランチェスカが信頼する部下の二人も気づいていたのだろう。ランティは、メモを受け取りながら、フランチェスカの顔を見た。

「ええ、おそらく、あの女の子が、ゲモックの積荷だった、銀色の髪の女の子」

「一緒にいた、レイヴンの少年は、センチ・レーバン人でしたよね？」

「だから、気になるのよ。お願いできるかしら？」

フランチェスカは、片目をつむって合図を送る。声に出さず、頷いたベイクとランティは、その場で馬の首を返した。

蹄鉄が舗装された街路をかける音が聞こえなくなると部下と別れたフランチェスカは一人、ギルド・リッターのガモーフ支部へと向かう。事務所としている建物は、他の民家とほぼ変わりはないが、表の看板には騎士の鎧をモチーフとした紋章が描かれていた。そもそも、リッターとは、ガモーフの古い言葉で「騎士」をあらわしているらしい。つまり、ギルド・リッターは私設騎士団を気取っているのだ。

馬をつなぎ、事務所に入ると、すぐに係りの女性がフランチェスカを支部長の下へと案内した。いつもは、出張任務ではなく、空白地帯の警備にあたっているフランチェスカが、この町の支部を訪れるのは初めてのことだった。

「ギルド・リッター、ダイムガルド支部所属、小隊長、フランチェスカ・ハイト。ただいまウェスアへ到着いたしました」

支部長の個室に入ると、敬礼のポーズとともに、名を名乗る。もちろん、その間に、相手の容貌を確認する。随分と、白銀の鎧が窮屈そうな、やたらと太ったガモーフ人の中年男だ。容貌で相手を判断するような予断は許されないことだが、どうにも仕事の出来る男には見えない。

「ようこそ、ウェスアへ。ボスから、事情は伺っている。しかし、面倒な時に来てくれたものだ……。ウェスアで、今起きている事を知らんわけではないだろう。教会騎士団は直に解体される。下手をすれば、大司教さまの処刑が行われるかもしれない」

支部長は、溜息交じりに言う。

「はっ、知らないわけではありませんが、こちらも任務ですから」「律儀だのう、ダイムガルド人は。ならば、律儀ついでに、わしからの命令を聞いてもらおうか。一度しか言わんぞ」

そう言うのと、支部長はすうっと肺に息を吸い込んだ。

「銀色の髪の娘を殺せ」

低く重たい言葉のはずが、するすると支部長の厚ぼったい唇からこぼれてきて、一度しか言わないといわれたにもかかわらず、思わず聞き返していた。

「それは、どういうことでしょうか？」

「それが、ガモーフ神国からの依頼なのだ。どうしてもこうしてこないだろう？」

これ以上聞くな、言外に支部長がそう言っていることは分かっているが、突然の理解不能な命令に当惑してしまう。

「わたしたちは、『運び屋』ゲモック・ラボンの証言をもとに、黒衣の騎士団によって、ラクシャ村から連れ去られた銀色の髪の女の子を救うために、方々の情報を集めながら、遠路はるばるここまで来たのです」

「救うだと？　ボスからの命令は、銀色の髪の子を見つけることで

あろう。勘違いするな、救えとは言われていないはずだ。センチ・レーバンの手に渡る前に、娘は見つけ次第殺せ。法王さまは、ボスにそう命じられた」

「法王さまが？ お待ちください、われらはギルドです。ガモーフの王に命令される謂れはありません」

「だから、律儀だと言っているんだ。ギルドも国家との信頼関係なくして成り立たない。国家に義理立てする必要があるんだよ」

「それでは、ギルドの本懐は……」

フランチェスカの言いかけた言葉を、支部長はまるで蛇のような目つきで睨みつけた。

「命令を履行しろ。さもなくば、ギルドに立てた貴様の誓いは、破棄され、裏切り者の謗り^{そし}を受けることになるぞ！ わかったら、さっさと娘を殺せ！」

これ以上何を言っても、聞く耳は持たないだろう。そう悟ったフランチェスカは、わざとしぶしぶといった声音で、「了解しました」と口にした。

21. ギルドの命令（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せください。

22. ここだけの話

ウェスアの町医者が「ここだけの話」を、アルサスたちに打ち明けたのは、理由あつてのことだった。この街に住む人々は、そのほとんども、熱心なベスタ教の信徒であり、大司教を深く尊敬している。そのため、今回の事件に非があるのは、神都の大臣たちであると考えていた。

「大司教さまは、おそらく教会の地下にある、古い牢屋に閉じ込められているはずだ。教会の地下牢は、この街に張り巡らされている地下水道とつながっている。これは、街に住むものもあまり知らないことだ。神衛騎士団は、もちろん知っているはずがない」

「つまり、その地下水道を通れば、大司教さまのところへ行けるんだね？」

アルサスが尋ね返すと、医者はやや神妙な面持ちで、静かに頷いた。

「お前さんたちが、ワケありなのを承知で、ひとつ頼みを聞いてはもらえないか。どうか、大司教さまを救って欲しい。法王さまは大臣どもの讒言さんげんにのみ耳を傾けて、無二の友であつたウルド大司祭さまを早々に処刑しようとしている。教会騎士団は、神衛騎士団に捕縛され、街のものは、逐一監視されている。もうここには大司祭さまのために動ける者は誰も居ない。つまり、頼みに出来るのは、お前さんたちのようにワケありのよそ者だけだ」

「ワケありのよそ者ねえ……、否定はしねえけど、その言い方はきにいらねえな。戦争が終わって、もう十年になるんだ。大人たちがそろそろセンチ・レーバン人とか、ガモーフ人とかそういう垣根を越えられないといけないんじゃないかよ」

あからさまに、渋い顔をして、自分よりはるか歳上の医者に説教じみた事を言うアルサス。それを聞いた医者は、からからと笑い、「違う」と言った。

「ねえ、アルサス。大司祭さまをお助けしましょう。だって、大司祭さまは何も悪いことしてないんです」

急に、診察台の上に座るネルが真剣な眼差しを向けてくる。思えば、ネルはガモーフの辺境で育った女の子だ。彼女もまた、この医者と同じく、敬虔なベスタの信徒なのだ。

「ボクもそれ、賛成！」

そうだ、ルウもガモーフ生まれ。結局ここに居る人間で、ベスタに係わり合いのないのは、自分だけだと悟ったアルサスは、ネルとルウに苦笑とも微笑とも取れない笑顔を向けた。

「つまり、ついでに大司教を解放してくれればいいんだな？　ただ、俺はベスタの神さまなんか信じていない。だからそれは、レイヴンへの仕事の依頼と受け取ってもいいか？」

「しかし、わしにはお前さんに支払う金がない。歯牙ない町医者だ」「依頼両なら、ネルの治療代で構わない。ところで、その地下水道、ウエスアの外まで通じているのか？」

「ああ、地震で崩れたところもあるだろうが、この街の外にある丘のふもとに出られるはずだ」

昔々、アルサスたちが生まれるより前「黒死病」と呼ばれる病が流行ったことがある。その折、地下水道を徘徊するネズミ型の魔物「モイゼ」が病原菌を運んでいることが、病の現況であると突き止めたウエスアの医者たちは、モイゼを駆除するため地下水道に潜った。もちろん、当時はまだ若かったこの町医者も、モイゼ駆除隊に参加した。

医者は、その頃の記憶を辿りつつ手早く、メモ用紙に地下水道の地図を書き記していく。

黒死病は間もなく沈静化し、地下水道への入り口は、すべて鉄柵により封鎖した。それから、数十年、次第に町の人の記憶から、地下水道の存在は忘れ去られて行き、今では、当時モイゼ退治に加わった医者たちしかその存在を知らない。まして、地下水道が教会の地下につながっている事を知っている人間は、ほとんど居ないと思

つても差し支えないだろう。

「頼んだぞ、レイヴン」

そう言って、医者はアルサスに地図を認めたメモ用紙を手渡した。アルサスは「まかせとけ」と頷き、視線を仲間たちに向ける。

「表から出るのは得策じゃないな。ネル、足は大丈夫？」

「大丈夫です」

と、アルサスの問いに答えるネルだが、やはり痛々しく見える包帯に巻かれた足では、走ることは出来そうにもない。すでに窓外は、月影も薄い夜闇だ。病院を抜け出し地下水道に向かうなら、闇にまぎれて、町を警邏する神衛騎士団やフランチェスカたちギルド・リッターの目を盗むことが出来る今が、絶好の好機と言える。

いざとなったら、ネルのことは背負うしかないな……と、思案をまとめ、アルサスは診察室の窓を開た。平屋の病院の外は、夜風が通り抜ける路地裏に面している。こんなところから、出て行く姿を誰かに見咎められるわけには行かないと、注意深く路地の左右を確認するアルサス。幸い、路地の奥に野良猫の不気味な瞳が輝いている以外に、人の気配はない。

「世話になったな、先生」

と、振り返り礼を述べると、まずは、アルサスが窓枠に足をかけて外へ出る。次いで、ルウ。最後にネルが「ありがとうございました」と、いつものように丁寧に頭を下げて窓を出た。やはり、くじいた足が痛いのか、地面に降り立つと、ネルはその愛らしい顔を少しばかりしかめる。

「大丈夫。大丈夫です。行きましょう」

ネルの言葉に、多少の不安は拭い去れないまま、アルサスは頷き返し、窓辺から覗く医者に見送られながら、先頭を歩き始めた。

夜のウェスアは異様なほど静まりかえっている。本当なら、楽しげな夕餉の時間であるにもかかわらず、誰もが息を殺して、生活の物音ひとつ立てようとはせず、つんと耳が痛い。

そんな裏路地を駆け抜けて、大通りに出ると、軒を連ねて並ぶ商

店も大半がすでに店じまいを終え、店主や売り子の代わりに、そこかしこに、いかつい顔をして周囲を警戒する、青銅色の鎧に身を包んだ神衛騎士団がうろついている。

アルサスたちは、ひとまず民家の壁に身を寄せて、神衛騎士団がいなくなるタイミングを待った。おそらく、警戒順路をぐるぐると回っているはずだ。安易に飛び出して、下手に見つかって、荒っぽいことになるのは、得策じゃない。

「アルサスは、やっぱりいい人ですね」

不意に、傍でネルが囁く。アルサスは何の事を言われたのか、すぐに思い至らず、思わずきょとんとしてしまった。

「何、藪から棒に」

「だって、大司教さまをお助けすること、引き受けてくださったじゃないですか。レイヴンは、仕事を投げ出したりしないんでしょ？ それなのに、レイヴンとして仕事を引き受けたということは……」

「別に、ガ頼まれたから、やるだけ。それに、どちらかといえば、ネルの治療代ちよろまかしたかったんだよ」

にべもなく、アルサスは言い切って見せたが、その言い草にネルはクスクスと声を殺して笑う。彼女には、それがアルサスの本心ではないことが分かっているかのようにだった。

「素直じゃないんですね。まるで、ルウのようですよ」

「ちよっ、お姉ちゃん！ ボクとアルサス、一緒にしないでよっ！」
ネルの後ろで、ルウがぷうっと、頬を膨らませる。

実際のところ、ウルド大司教の謀反ともとれる発言は、ガモーフの内政問題なのだ。レイヴンになる時、国を捨てた身分としては、ガモーフの内情に干渉したくはない。しかも、アルサスはベスタ教の信徒ではない。以前、ネルに言ったように、神さまのような眼に見えないものよりも、自分の剣を信じている。それが、アルサスのスタンスだ。

しかし、その一方で、ウルドが憂う気持ちも分からなくもない。

世界が、飢饉ききんや貧困に喘いでいることはよく知っている。今、この世界は、究極の格差社会となっている。カルチェトやルミナス、ウエスアは富める側。旅の間に何度も目撃した、滅び行く村は貧しい側。

その現状を、ウルドは宗教家として憂いたのだろう。しかし、この国の王はそれに耳を貸さなかった。どこの国の王様も、自分は貧しくないから、その現実には気づかない。明日食べるものを必死でかき集める人たちの気持ちをわかってやろうとは思わない。統治者なんてものは、どこに行ってもおんなじだ……と、アルサスと思う。

だから、ウルドを助けるのも悪くはない。ウルドの言ったことは間違っちゃいない。

「少しだけなら走れるか？」

大通りの騎士が、通りの向こうへと歩いていく。それを確認したアルサスは振り返って、ネルに問いかけた。ネルは、頷いてみせる。足手まといになりたくない、そんな風に思ったのかもしれない。

アルサスは、いつものようにネルの手を取った。女の子の手を握ることに抵抗がないわけじゃない。少し恥ずかしい気持ちもあるが、ネルの手を離すと、彼女がどこかに言ってしまうような、そんな気がしてしまう。どうして、こんな不安な気持ちになるのか。それは、多分、ネルが放っておけないような女の子だからなのかもしれない。

「よし、大通りを一気に横断するぞ！ 地下水道の入り口は、その先だ！」

掛け声よろしく、アルサスはそう言うと、大通りへと足を踏み出した。すでに、警邏の騎士の姿はどこにもない。静かな大通りを、三人の足音だけか響き渡った。

「どこへ行くつもりだ！」

突然、あらぬ方向から声が浴びせかけられて、アルサスたちは心臓をつかみ出されたような思いがした。足を止め、振り返る。すると、アルサスたちの背後から、そして、病院の表通りの曲がり角から、見覚えある男たちが姿をあらわした。フランチェスカの部下、

ベイクと、ランティだ。

アルサスたちの背後から現れた、ランティはすでに、剣を鞘から抜いている。病院の表から、走ってきたベイクも、あの魔物を一撃で仕留めた、鉄槍を構えていた。

「くそっ！ こいつら、見張ってやがったな！」

ネルを後ろに下がらせ、アルサスは舌打ちと共に、腰に帯びた剣を引き抜いた。

「隊長の懸念が的中したか。どこへ行くつもりだ、お前たち」

屈強なベイクの口元には笑み。ランティは、冷たい視線をこちらに投げかけてくる。彼らの瞳には、アルサスたちが、犯罪者の類のように映っているのかもしれない。

「ちよっと、夜のデートに」

冗談だと分かるように、しかし、相手にこちらの焦りを気づかせないように、アルサスが言う。

「魔法使いギルドのガキと一緒にか？ やはりお前、空白地帯で、

『運び屋』ゲモック・ラボンから積荷を奪ったガキだな」

「分かってるなら、聞くなよ、筋肉ダルマ」

ネルは走れない。その事を見越しながら、アルサスはわざと相手を挑発するような口調になる。やはり、嫌な予感は的中した。フレンチエスカは最初から、アルサスたちのことに気づいていたのだろう。見張りを残す用意周到さには、舌を巻く。

「だれが、筋肉ダルマだっ！」

そして、思ったとおり、ベイクは頭に血を上らせた。挑発に弱いタイプらしい。

「ベイク、落ち着け！ アルサスくんと言ったね。われわれは、君たちを逮捕しようってワケじゃないんだ。ただ、事情を聞きたい。その娘さんも保護したい」

一方のランティは、見た目どおり、冷静な男のようだ。彼の言う言葉に、嘘偽りはないだろうが、ギルド・リッターに保護なんてされれば、ここで旅は終わってしまう。それは、アルサスも、ネルも、

ルウも望んではない。

「悪いが、これはレイヴンである俺の仕事だ。依頼主も、仕事も手渡すつもりはないね。ルウ、魔法だ!!」

「がってん! 緑の精霊と契約の名の下に、具現せよ。汝、疾風の槍となれ……ヴィント・ランツェ!」

アルサスの指示に、ルウが魔法の言葉を口にする。掲げた魔法杖が輝き、その先端から放たれたのは、二本の風の槍。一本は、ベイクの元へ、もう一本はランティのもとへと、稲妻のような速度で着弾する。

「青の精霊と契約の名の下に、具現せよ。汝、水流の盾となれ……ヴァッサー・バックラー!!」

瞬間、ランティも魔法の言葉を唱える。構えた剣の先端から巻き起こった、水流は瞬くうちに、ベイクとランティ、それぞれを半円状の水の膜で包み込んだ。

水のバリアに防がれた、風の槍が空しく四散するのは、目に見えていた。

「やっぱり、あのランティってやつは、魔法使いかつ! こんな大通りで暴れてたら、神衛騎士団の連中が来てしまうな。ルウ、炎の盾を展開して、時間稼ぎしてくれ。逃げるぞ!!」

「人使い荒いようっ」

などといいながら、自分の魔法がいとも簡単に防がれてしまったことに衝撃を受ける暇もなく、ルウは次なる呪文を唱える。

「赤の精霊と契約の名の下に、具現せよ。汝、火炎の盾となれ……フランメ・バックラー!」

魔法杖の輝きと共に、今度はアルサスたちの周りを、炎のカーテンが包み込む。アルサスは、すかさず背負ったリュックをお腹側に掛けなおし、ネルに背中を向けてしゃがんだ。

「ネル、俺の背中に乗って!」

「でも……」

言いかけた言葉を、ネルは飲み込んだ。男の子に背負われるのは、

手をつなぐよりも恥ずかしいことだが、迷っている暇はない。ネルは、恥ずかしさを偲びながら、アルサスの背中に体を預けた。

「魔法、消えるよっ!!」

ルウの声とともに、炎のヴェールが跡形もなく消え去る。

「走れ、ルウっ!!」

ネルを背負ったアルサスが駆け出す。ルウもそれに続いて、大通りの反対側へと走り出す。背後では、ベイクとランティの「待て!」と言う声が、輪唱のように重なった。

22. ここだけの話（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せください。

23. 地下水道探検

ウェスア地下水道への入り口は、頑丈な鉄柵で封じられていた。かつて、ここから病原菌が噴出し、大混乱を招いたとあれば、仕方がない処置だろう。これなら、保菌者の魔物も容易に地下水道に入り込むことは出来ないに違いない。それは、同時に、アルサスたちも容易に地下水道へ足を踏み入れられない、ということだった。

ネルを背負い、ギルド・リッターの追っ手から逃げ出したアルサスは、ルウを従え、複雑に入り組んだ、町の路地をジグザグに走り、追っ手を撒くことには成功した。しかし、安心してられない。ぐずぐずしていれば、彼らが追いついてくるかもしれないし、警邏中の神衛騎士団の目にとまってしまうかもしれない。

「ルウ。こいつをなんとか、開けられないか？」

ネルのお尻をさえるために両手がふさがっているアルサスは、顎をしゃくって、鉄柵を示す。

「魔法でぶっ飛ばすしかないよ。でも、いいのかな？」

「いいんじゃない？ 後であの医者のお爺さんたちが直すさ」

何の保証もないことを言っただけながら、ルウに早くしろと急ぎ立てた。ルウは、渋々といった顔をしながら、魔法杖を構える。

「じゃあ、赤の精霊と契約の名の下に、具現せよ。汝、火炎の槍となれ……フランメ・ランツェ！」

魔法の言葉と共に現れた炎の槍は、ルウが杖を振ると、まっすぐ鉄柵目掛けて、飛翔した。ごうっ、と着弾と同時に、爆発の音と振動が響き渡り、あたりにもうもうと白煙が巻き起こる。

「は、派手すぎだっ！」

白煙に包まれながら、思わず声を荒げてしまうアルサス。白煙が夜風に流されると、目の前には、ぐにやりとひしゃげた鉄柵が現れる。派手な爆発の割には、人が一人通るのがやっとと言った大きさだ。それだけ、鉄柵が強固だと言うことだろう。

「アルサス、もう大丈夫です、降ろしてください」

よほど、背負われるのが恥ずかしかったのか、ネルの声は少しばかり上擦っていた。

アルサスはネルを背中から降ろし、まず先頭切って、鉄柵に空いた穴をくぐる。そして、ネルが続く。やはり、くじいた足が痛そうだ。最後にルウが鉄柵の穴をくぐると、三人はいよいよ地下水道へと足を踏み入れた。

ウエスア大教会の周りに、街が造られ始めたころ、上下水道を完備するために、設営されたのが、この地下水道である。その後、街の広がりにあわせ、何度も増設れていったためか、内部は非常に複雑な迷路を形成している。町医者に書いてもらった地図がなければ、たちまち迷子になってしまうところだ。

「じめじめしてる」

と、言うルウの声が、トンネル内に反響する。薄暗いトンネルの先を照らすのは、アルサスに代わって先頭を歩くルウの魔法杖。どいう原理なのか、アルサスとネルには到底理解できないが、魔法を発現する際の光に似た輝きが、魔法杖の先端に滞留し、カンテラの役目を果たしていた。

時折、ポチャンと、水の滴る音が聞こえてくる通路の両脇には、二段になった水路がある。左の水路は井戸に供給される上水、右の水路は雨水や生活廃水などの下水と言った具合だろうか。たしかに、密閉されたトンネル内に水が流れているため、どこかじめじめとしているが、鼻を覆いたくなるような嫌なにおいはして来ない。それは、このウエスアと言う街がとても清潔な街であるということを表していた。

もしも、大司教の事件が起きていなかったら、いや、アルサスたちが気ままな旅行者だったら、その清潔で美しい町を心行くまで観光したいところだが、今はたくさんの者たちに追われる身。観光など、もっての外だ。

「わたし、重くありませんでしたか？」

不意に、ネルが言う。一瞬何のことだか、アルサスには分からなかったが、どうやら体重のことを言っているようだ。

「リュックより軽かったよ」

アルサスは微笑みながらそう答えたが、実際のところ、走るのに夢中で、ネルの体重など覚えていない。しかも、背中に密着したネルの柔らかな感触を思い出すと、アルサスまで恥ずかしくなってくる。

「はいはい、そこ。二人でラブラブしない！」

魔法杖を掲げるルウが、振り向き様に、キッと鋭く睨みつけて、頬を赤らめる二人を冷やかした。

「ら、ラブラブなんて」

「してませんよ！」

慌てて声をそろえて、否定する二人を他所に、ルウはずいずいと地下水道の奥へと分け入っていく。ルウにおいていかれては敵わないと、アルサスとネルはその背中を追いかけた。

「それにしても、教会の地下室に牢屋があるなんて不思議ですね……」

と、天井を見上げてネルが言う。確かに、聖なる場所とされる教会に似つかわしくない施設だ。しかし、その疑問には、ルミナス魔法学校の図書室でいやと言うほど知識を詰め込んだルウが答えてくれる。

「昔々、ボクらのお祖父ちゃんお祖母ちゃんの、そのまたお祖父ちゃんお祖母ちゃんよりも、ずーっと前の世代のころ。ベスタ教には、ふたつの宗派があったといわれてるんだ」

メモ書きの地図を片手に、分かれ道を曲がりつつ、ルウが語る。

「ひとつは、女神アストレアさまこそが唯一の神であり、すべてのことは女神さまのお導きであるとする宗派。もうひとつは、アストレアさまは『白き龍』人間の世界に使わした魂のひとつであるとする宗派。お互いに、二つの宗派は主張を譲らず、一時は戦いまでなりかけた。その頃に、白き龍派が、ウェスアの地下に牢屋を作って、

アストレア派の人たちを閉じ込めたんだ。その後の結果は知っての通り、白き龍派が論争で敗れて、異端派として追いやられてしまった」

「白き龍……それって、センチ・レーバンに伝わる伝説の？」

アルサスが驚いて、そう口にしたのも無理はない。ベスタ教の信仰が薄いセンチ・レーバンに伝わる伝承と、ベスタの古い宗派に奇妙な接点が生まれたからだ。

「多分、無関係じゃないと思う。ベスタ教の歴史を研究してる学者さまの中には、センチ・レーバンの伝承は、ガモーフを追われた白き龍派の人がばら撒いた話が元になっているんじゃないかと言っている人もいる。要は、白き龍派の成れの果てが、センチ・レーバンの伝承ってこと」

「センチ・レーバンに、ベスタの異端派がねえ。途方もなく、昔のことだ。俄かには信じがたいな」

「ボクもだよ、アルサス。でも、民族は違ってても、ガモーフもセンチ・レーバンも同じ地平でつながってる。ありえないことじゃないと思うな。そんなことよりも、ほら、見えてきた」

突然、ルウが明かりを通路の先に向けた。そこには、ぼんやりと浮かび上がる小さな階段がある。どうやら、その先が、教会堂の地下につながっているのだろう。

三人は用心を重ねながら、その階段に足を掛けた。使われなくなって久しい石の踏み板は、コケがびっしりと生えている。ともすれば、足を取られて転げ落ちてしまいかねない、と思ったアルサスは、ネルの手を引いた。やがて、何段もの階段を上り詰めると、頭上に扉が現れる。頭上に、と言うのは、普通の扉とは違い、上に開くようになっているからだ。

「物音はしないな」

耳をそばだてていたアルサスがそう言うと、ルウは頷き返して、扉を押し上げた。錆付いた金具が金切り声のような音を立てるが、幸い木製の扉は、子どもでも容易に開けられた。

そこは、壁に立てかけられたいくつかの燭台の、薄暗い明かりだけがともる、地下室の一番奥まった場所だった。眼前には、鉄の格子で仕切られた牢屋が、不気味にいくつも並んでおり、地下水道から這い出したと言うのに、なおもじめじめとしており、人間の生活臭が籠っている分、地下水道よりも居心地が悪い。

「見張りはいないよ。きっと交代の時間なんだ」

と、ルウが声を殺して囁く。今度はアルサスが頷き返した。

「じゃあ、今のうちに、大司教の閉じ込められている牢を探そう」
そう言って、アルサスは両側を牢屋に挟まれた通路を、慎重に歩いていく。どの牢屋も、最近使われた形跡はなく、格子も扉も、錆付いてしまっている。ただ、その一番入り口に近い牢屋だけは、少し違った。真新しい南京錠が掛けられ、格子もきれいに錆が落とされている。何故なのか考えるまでもなく、そこがウルドの閉じ込められている牢だった。

「あんたが、ウルド・リー大司教か？」

格子の間から、牢の中を見やって、アルサスは問いかける。すると、牢の隅で静かに正座する男が顔を挙げ、小さく頷いた。彫りの深い顔をした、壮年の男。しかし、ぼろ布を纏っただけのみすぼらしい格好とは裏腹に、その瞳はよどみなく、アルサスたちを見据えていた。

「あなた方は、どなたですか？」

少し枯れた声で、ウルドが尋ねる。

「善意の第三者ってやつ。頼まれて、あんたをここから、救い出すためにやってきた。すぐに出してやるから、ちょっと待ってろ」

「私を、ですか……？」

明らかに訝るような視線。アルサスは、その視線にニヤリと笑うと、ポケットから魔法カードを取り出した。それを南京錠にあてがうと、静電気のような光が、バチッと音を立てる。

「魔法で封印が掛けているな」

案の定と言った具合に、アルサスは呟いた。カードを離すと、南

京錠の表面に現れたのは、魔法文字。手錠や鍵などによく使われる、封印の魔法暗号だ。しかも厄介なことに、何重にも複雑化して、暗号が重ねられている。警備の薄さには、この南京錠が絶対に破られない、と言う自信があるからだろう。

「封印を解いてる暇はないな。ルウ、この鉄格子、さっき鉄柵を壊した時みたいに、魔法でぶち破れるか？」

「無駄だ。この鉄格子には、魔法障壁が込められている。内側からも、外側からもあけることは出来ない。そなたたちの、心遣いには感謝するが、交代の見張り番が来る前に、ここを立ち去りなさい」
「そんなっ。だめです、大司教さまをこんなところに閉じ込めておくわけには行きません！」

普段大人しいネルからは、想像もつかないくらい大きな声を上げる。両手で格子戸を掴み、無理矢理引いてみるが、当然ネルの華奢な腕ではびくともしない。

と、そんなネルの姿を申し訳なさそうに見つめていた、ウルドがあることに気づき、瞳を大きく見開いた。

「銀色の髪……あなたは、まさか、『銀の乙女』！？」

ウルドの視線は、ネルのつややかな銀色の髪に注がれていた。そして、何故か身分も下、歳も下の少女に向かって、ムシロに額をこすりつけて、深々とお辞儀をしてみせる。それは、あまりに滑稽な姿だった。

「大司教さまは、わたしの事をご存知なのですか？ もしそうなら、教えてください！ わたしに眠る『奏世の力』とは一体何なのですか？ もしも、わたしに使命があるなら、どうか導いてください」

虜囚となつてなお、ベスタの大司祭である、ウルドなら何か知っているかもしれない。その期待は、ネルの胸のうちに大きく膨らんだ。だが、それを破裂させるかのように、地下への階段から足音が聞こえてくる。衣擦れにあわせて、鎧ががしゃとこすれあうこの足音は、ウルドを捕らえた神衛騎士団の見張り役だ。

「まずい、交代の見張りが、帰って来たぞ！」

アルサスは慌てて、ネルの手を引く。しかし、ネルとしては、ここですべてを知りたい。アルサスの手を振り解き、じっとウルドを見つめた。

次第に足音は近くなってくる。アルサスは剣を抜き、ルウは魔法杖を構えた。

「あなたが、ご自分の事をわかっていないのなら、そのままひっそりと生きることが、この世界のために……いや、あなたのためになる。だが、どうしても、ご自分に隠された秘密を、そして世界の真実を知りたい、その覚悟があると仰られるなら、銀の乙女よ、ここより北、クアドラ山脈とアトリア連峰の狭間にある『エントの森』に行きなさい」

ウルドは、静かに顔を挙げ、その淀みない黒い瞳で、導きを欲するネルに応えた。まるで、それが大司祭としての最後の仕事だとも言わんばかりに。

「さあ、お行きなさい」

「でも、大司教さま……！」

「私は、ここで果て、女神まの元へと召される。わたしは、友である法王さまを裏切った、不忠者。一度の裏切りは、二度の裏切りを生む。やがて、わたしは女神さまをも裏切ってしまうかもしれない。そうなる前に、ささやかながら、あなたの幸せを祈りながら、死ぬるわたしもまた、幸せです」

「死ぬことが幸せなんて……」

「いつか、あなたにも分かる時がきますよ。さあ、ぐずぐずしていたら、見張りの者に捕らわれてしまいます。赤い瞳の少年よ、早く銀の乙女を！」

ウルドはアルサスに向かって、命じるような口調で、逃げるように促した。アルサスは、一瞬だけウルドに目を向けた。そうか、ウルドが虜囚におとしめられ、こんなじめじめした牢屋に閉じ込められてもなお、淀みない瞳をしているのは、大司教としての覚悟があるからだ。そのことに気づいたアルサスは、ウルドに頷き返して、ネル

の手を引く。今度は振り解かれぬように強く引っ張る。

ネルはやや抵抗を見せた。だが、ルウの「行こう、お姉ちゃん!」
と言う言葉に、名残を惜しむようにアルサスに従った。

再び、地下水道へと舞い戻る。アルサスがその扉を閉めた瞬間、
見張りの交代が地下室に戻ってきて、間一髪だったことを、アルサ
スたちは知らない。そして、ウルドが瞳を伏せ天井に、いや、その
はるか頭上にあるであろう星空に向かって、アルサスたちの無事を
女神アストレアに祈ったことも、アルサスたちは知らない。

23. 地下水道探検（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せください。

24. フランチェスカの微笑

街医者が言ったとおり、地下水道はウエスアの北にある、丘のふもとまで続いていた。幸い、追っ手が迫ってくる様子はなく、難なく出口までたどり着くことが出来たのだが、出口も入り口と同様、鉄柵で頑丈に閉じられていた。今更、入り口まで戻るわけには行かない。ということで、後に鉄柵を修繕する人たちの苦勞と涙を偲びながらも、ルウの魔法で鉄柵を吹き飛ばした。

じめついた地下水道から出ることが出来た開放感は、この上なくすがすがしいもので、夜更けの丘へと駆け上った、アルサスは両手を広げて、新鮮な地上の空気を肺いっぱい吸い込む。丘から見える夜空には、美しい星がいくつも瞬いていた

「クアドラとアトリアにはさまれた、エントの森か……。ヨルン平原を抜けていくのが一番近道だな」

と、呟きながら見つめる先は、星の輝く夜空にシルエットとなって浮かび上がる、クアドラの山々。巡礼の道は、ウエスアを中心に三本に分岐している。ひとつはサジウ平野を越え空白地帯へ向かう西街道。もうひとつは、ガモーフ神都へ通じる東街道。そして最後の一本は、クアドラ山脈を越えて、ヨルン平原へ向かう北街道。エントの森は、ヨルン平原からさらに北東へ上り、センテ・レーバンの国境沿いにある。

「行くの？ エントの森へ……」

アルサスを追いかけて、丘に登ってきたルウが尋ねる。アルサスは、すぐに答えずネルを見やった。傍らネルは、少しだけ落ち込んだように、星空ではなく地面に目を落としていた。思うことは、ウルド大司教のことだろう。その内心まで見抜くことは出来ないが、死を覚悟した彼の瞳は、少なからず少女の心に衝撃と影を落としたに違いない。

「ネル、もう一度聞く。もしも、ラクシャへ帰りたいなら、俺は反

対しない。ちゃんと、ラクシャ村まで君を送っていくよ」

そっと、声のトーンを落として、アルサスが尋ねると、ネルは俄かに顔を上げた。銀色の髪が、夜風に流される。

「行きます、エントの森へ。そのために、ここまで来たのですから」と言う、ネルの笑顔はどこかぎこちない。戸惑いがあるのだ。ウルドは、知るべきではない、その方が世界のため、ネルのためになると言った。本当にそうなのか？ トンキチは知ることが、世界のためになると言った。どれが真実なのか分からない。でも、トンキチのことも、ウルドのことも疑いたくはないという気持ちがある。そして何よりも、ネル自身は、真実を知りたいのだ。ネルのぎこちない笑顔は、その狭間で迷いを打ち消そうとする心の顕われだったのかもしれない。

「アルサスっ！ 見て！！」

突然、ルウの叫び声が、静寂な丘の上に響き渡った。彼の視線は、ウエスアの方角を見つめていた。ウエスア北門、そこを今まさに三頭の騎馬がこちらへと駆け抜けてくる。十分夜目に慣れた、アルサスたちには、それがひと目で、フランチェスカたちだと分かった。なぜなら、彼らは目を引く白銀の鎧を星影に輝かせていたからだ。

「くそっ！ 早すぎだろっ！！」

ひとりごちる間もなく、アルサスは剣を抜き、ネルを後ろに下がらせる。走って逃げたところで、馬の脚力に敵わないことくらい、誰の目にも明白だ。しかも、ネルは足をくじいて走ることすらおぼつかない。

「やっぱり、ここにいたのね。地下水道の鉄柵が壊されていたから、きつとここへ逃げたのだらうって。読みが当たってよかったわ」

丘の上、アルサスたちの下まで駆けてきたフランチェスカは、いなく馬上からアルサスを見下ろす。

「こっちとしては全然よくねえけどな。何の用だよ」

アルサスは、警戒心よりも、敵愾心^{てきがいしん}をむき出しにしたような口調で、フランチェスカたちを牽制する。

「少年！ いや、レイヴンよっ！！ 大人しくその娘をこちらに引き渡してもらおうか。抵抗するなら、ギルド・リッターの名において、手荒な事をしなければならぬ！」

答えたのは、ランティだった。馬上から睨みつける目つきは、異様なまでに鋭く、大通りであしらわれた事を根に持っているようだ。だが、アルサスはその程度で、臆するような少年ではなかった。

「やれやれ、ギルド・リッターまで、ネルの事を狙うのかよ。これじゃ、裏ギルドのゴミ連中と変わらないな」

「なんだとっ！ このガキっ、痛い目をみたいのか！？」

挑発じみたアルサスの言葉に、あからさまな喧嘩腰をみせるのは、アルサスの見立てどおり挑発に乗りやすい性格のベイクだ。だが、隊長であるフランチェスカだけは、読み辛い。何を考えているのか、あまりに冷静な顔色をしており、表情からそれを読み解くことは出来なかった。

「二人とも、落ち着いて」

隊長らしく、威厳ある口調でそう言うと、フランチェスカは静かに馬を降りた。その行動は、二人の部下にも予想できなかったらしい、うろたえる表情がどこか滑稽だ。

「アルサスくん。ギルド・リッターは、ネルさんの命を狙っている……。わたしたちは、その子を殺せと命じられたの」

「はあっ！？」

唐突な、フランチェスカの打ち明け話に、思わずアルサスは素っ頓狂な声を上げた。だが、彼女はそれを気にも止めず「わたしには、事情はよく分からない」と、前置いてから続けた。

アルサスたちが空白地帯での一件に絡んでいると睨んでいたことがモーフ神国からの要請で、銀色の髪の少女、即ちネルを殺せと命じられたこと。淡々とそれらを語り、そして、フランチェスカは無表情のまま、腰に帯びた細剣を引き抜いた。

「ガモーフまで、ネルのことを……。それで、あんたは、ギルドの誇りを捨てて、ネルの命を狙うのか？」

驚愕をもってフランチェスカの話に耳を傾けたアルサスは、引き抜かれた剣をじっと見据え、フランチェスカに問いかけた。すると、フランチェスカは不気味なほど顔色も変えないで、

「センテ・レーバンは、その子を欲している。それは何故？ 教えて頂戴。そうでなければ、わたしはあなたたちと戦わなければならない。わたしに誇りを捨てさせないで」

と、返す。

「さあな、俺にもわからない。ネルにもわからない。だから、旅をしている。そう言えば、剣を収めてくれるのか？」

じりじりと、迫るフランチェスカ、一歩ずつ後ろへ下がるアルサス。三対一。どちらが先に仕掛けるか、それを黙って見つめる、ネル。今までの戦いとは少し違う……緊迫した空気が、ぴりぴりと二人の間に張り詰めテイルのを感じたネルは、咄嗟にアルサスの前に歩み出た。

「あ、あのっ！ フランチェスカさん！」

「ネルっ！！」

アルサスが慌てる。だが、ネルは制止も聞かず、両手を広げフランチェスカの前に立ちはだかった。

「止めてください。アルサスもルウも死なせはしません。わたしも死にません！」

「ネルさん、状況が分かっているの？ 逃げ場なんてどこにもない」

「わかっています。でも、わたし、ここで死にたくないんです。わがままだと仰られるかもしれませんが。でも、わたしは、わたしが何者なのか知らなきゃいけないんです！ どうして、フランチェスカさんに命を狙われなきゃならないのか。そのために、エントの森へ向かいます」

「知ってどうするの？」

「もしも、わたしの『奏世の力』が誰かを助けることに使えるのなら、今困っている人、苦しんでいる人を一人でも多く助けたい。それが、きつとアストレアさまに仕える、天使の役目だから」

強い口調は、ネルらしくはなかった。しかし、ネルの青い瞳はまっすぐにフランチェスカの顔を捉えていた。

「天使……」

「はい。ハイ・エンシェントのバセットさまは、わたしのことを『銀の乙女』だと仰られました」

「それを信じているの？」

「信じるとか、信じないではなくて、現実にはわたしはあなたに剣を向けられています」

「そうですね……あなたの言うとおりだわ」

くすり。無表情だったフランチェスカの横顔に、少しだけ笑顔が灯る。

「わたしも、あなたが何者なのか、興味があるわ。道中、いろいろと聞かせてもらわなければならぬかもしれないわね。ここまでの、あなたたちの旅のこと。それから……、この先のこと」

そう言うと、フランチェスカは抜いた時と同じように、静かに剣を鞘に収めた。だが、フランチェスカの言葉に驚いたのは、アルサスたちだけではない。

「た、隊長！？ それってどう意味なんスカ！？」

槍を携えた、ベイクが屈強な体に似合わないような、高い声を上げて、驚きを露にする。

「言ったとおりの意味。わたしも、この子たちについていくわ」

「はい！？ 何言ってるんですかっ！！」

ランティが馬から飛び降りて、フランチェスカの元に駆け寄った。時々、突拍子もない事を口にしたりするところのあるフランチェスカだったが、今度ばかりは、信じられない！ とランティの顔に書いてある。

「ランティ……わたしは、人を殺すために『ギルド・リッター』になったわけじゃないの。十年前、軍属を退いて、ギルド・リッターに参加したのは、一人でも多くの、困っている人を、この剣で救いたいと思ったから。その思いは、ネルさんの思いと同じ。そんな子

を殺せと命じるような、ギルドに忠節を尽くす義理はない。国家とは違う、己の信念と正義のみで立ち上がる、それがギルドの誇り。それを失ったギルドは、もはやギルドではない」

「愛想が尽きた、とても仰るのですか、隊長っ!!」

「そんなことはないわ。でも、わたしの心は、間違っていると言っている。己の信念を曲げて、こんなか弱い女の子を殺すことが出来ないだけ。どちらを取るか。表か裏か、白か黒か、光か影か、上か下か、あなたかわたしか。わたしが選ぶのは、わたし。それだけのことよ」

憤るランティの肩に軽く手を置いて、細剣を手渡す。ギルド・リッターのメンバーが常に帯刀している武装。それをランティに手渡すと言う行為は、訣別を意味していた。

「あなたたちに、わたしの行いを強要するつもりはない。でも、わたしの部下であった誼よしみを感じてもらえるのなら、黙って見送ってもらえるかしら？」

「黙って見送る……」

フランチエスカの細剣を受け取るランティは、困ったようにオウム返しをした。

「ええ、そうよ。支部には、わたしが裏切ったと報告してもらって構わない」

「そんなこと、出来るわけがないでしょう……まったく、隊長、あなたと言う人は困った方ですね。でも、信念を曲げられるよりはマシというものです。分かりました、行って下さい」

溜息混じりに、ランティは言う。だが、彼の表情言うほど戸惑った様子はなかった。

「支部には上手く取り成しておきます。よもや、手配者になることはないでしょうが、我々があなたに出来ることは、見送ることくらいです」

「お、おい、ランティ！ それでいいのか!？」

ベイクも馬上より降りて、駆け寄ってくる。

「いいものにも、隊長が頑固者だということはお前も知っているだろう。それに、わたしもこの子たちを殺せと言う命令には、いささか不満があった」

「そりゃ、そうだけだよ……」

「ちよっと待ったー!!」

突然、話のカヤの外に置かれていた、アルサスが三人の会話に割って入った。見れば、ルウとネルは突然の予想だにしない展開に置いてけぼりにされて、同じような顔をしてぼかんとしている。

アルサスはずいずいと、フランチェスカの元に歩み寄った。背丈は、少しばかりフランチェスカの方が高い所為か、睨みつける瞳が上目遣いになってしまう。

「こっちは、何にも聞いてないし、納得もしてねえんだけど!？」

「あら、そうね。ダメかしら？」

「ダメかしらって、あんたなあ!」

「そうカリカリしなていで。ここからエントの森までは遠いわ。護衛は多い方がいいと思うわよ。それに、レイヴンのあなたより、役に立つこともあるかもしれないし」

からからと笑うフランチェスカ。思わずアルサスは呆れ顔になってしまう。

「何だよ、それ。変な女だとは思ってたけど……」

「あら、こんな美人を捕まえて、変な女だなんて、失礼しちゃうわね。そう思わない？ ルウくん」

「えっ!？」

何の前振りもなく、話を振られたルウは、びっくりしながらも、「フランチェスカさんがついてきてくれたら、鬼に金棒だと思うよ」と、しっかり答える。

「ルウくんの賛成票はもらったわ。ネルさん、あなたはどうかしら?」

フランチェスカは、ニコニコとしながら、さらにネルのほうに顔を向けた。

「えっ、あの、は、はいっ！ よろしく願います」

それまでの強い調子はどこへやら。いつものように、丁寧に頭を下げるネル。そんな二人の姿に、アルサスが吐き出した溜息は、ランティのそれとよく似ていた。しょうがない、という溜息だ。

「変なまねしたら、女だからって容赦しないぞ、フランチェスカ」
せめてもの、悪あがきといでも言わんばかりに、アルサスはどう言おうと、フランチェスカに背中を向けた。フランチェスカは、再びランティたちの方に向き直ると、後事を任せる旨を伝えた。それ以上、隊長の翻意に苦言を呈したりせず、素直に従う彼らは、フランチェスカのことをよく分かっているのだろう。それでいて、彼らも彼らなりの信念を捨てられずにいるのだ。

「さあ、行きましょうか」

揚々と、クアドラ山脈を指差すフランチェスカの後を、アルサスたちは付いていく。少し丘を下ったところで、ネルは振り返り、ランティたちに深々と頭を下げた。そんなネル越しに丘の上を見れば、ランティとベイクは別の道を歩むこととなった、フランチェスカを静かに見送っていた。

24. フランチェスカの微笑み（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せください。

25. ヨルンの悲劇

クアドラ山脈は、ガモーフ神国の中央部に横たわる。ガモーフの人々は、クアドラ山脈より北を「北部」と呼び辺境扱いする習慣があった。実際、ガモーフの北部にはそれほど大きな都市は存在していない。あるのは、ヨルン平原と呼ばれる広大な平野と、エントの森などの森林地帯。その奥には、隣国センチ・レーバン王国との国境を隔てる、アトリア連峰が聳^{そび}え立っているのだ。

ちなみに、ここで語るべきことではないのだが、ネルが暮らしていた酪農の村「ラクシャ」も、このクアドラ山脈より北に位置していることを付記しておきたい。

ウェスアを後にした、アルサスたちはまず、エントの森へ向かうために、クアドラの山道を歩いた。クアドラ山脈は、標高の高い山々で構成されてはいない。そのため、穏やかな気候と相まって、その旅は終始穏やかであった。

死を覚悟したウルド大司教の姿に、一時は気を落としたネルだったが、新たな随伴者となったフランチェスカは、予想よりも明るくよくしゃべる女であり、減らず口のルウとともに、大いに明るい雰囲気を作ってくれたため、アルサスの心配は取り越し苦労に終わった。

「クアドラの山道なんて、もう随分使われていないからねえ」

と、道端に生え広がる、白い花をつけた野草の群生を横目に、感慨深そうに言うフランチェスカの右手には、穂先を鞘で包んだ鉄槍が握られていた。別れ際、ベイクが細剣の代わりにと、フランチェスカに手渡したものだ。武器を選ばない、と言うのがフランチェスカの信条であり、すでに時折山並みの影から姿を現すヴォールフの前で、その華麗な槍さばきを披露している。

あの時、ウェスアの丘で、フランチェスカと剣を交えることになっていたら……想像するだけ、ゾツとしてしまう。

「フラン、ひとつだけ聞いてもいいか？」

アルサスは、そんなフランチェスカの武術の腕前を思い浮かべながら、ふとした疑問を口に出した。少し前を歩くフランチェスカは、ニコリとしながら浅黒い顔をこちらに向けてくる。

「なあに、改まって。わたしのスリーサイズなら、ご想像にお任せするわよ、ぼ・う・や」

自らの唇に小指をあてがって、淫びな口調のフランチェスカに、アルサスは顔を真っ赤にする。「あ、アルサス赤くなってる！」とルウがそれを冷やかしたのは、言うまでもない。

「違うっ！ あんたこの間、十年前に軍属を退いたって言ってたよな」

ルウに拳骨をお見舞いしながら、アルサスは続けた。

「ええ、そうよ。ダイムガルド正規軍の末端にいたの。懐かしいわ……」

「ということとは、あんた、今いくつなんだ？」

「あら、軽々しく女性に年齢を聞くものじゃないわよ。まあ、想像より若いかしら。今年で、二十七。そろそろ、優しい旦那様が欲しい年頃よ。だから、正規軍にいたときには、今のあなたと同じくらいの年頃だったわ。そう、ちょうどネルちゃんみたいに、可愛かったのよ、これでも」

フフツと笑いながら、フランチェスカの視線は、アルサスの傍に寄り添うネルに向けられた。あれから幾日かが過ぎ、くじいた足もすっかり治ったのか、山育ちの健脚はしっかりと地面を捉えている。

「そ、そんなこと！ フランさんは、今でも十分美人ですっ！！」

わたしも、フランさんみたいになりたいです」

「あらま！ 嬉しいこと言ってくれるわね」

ネルの言葉に、フランチェスカは上機嫌、と言った具合に鼻を鳴らした。もちろん、ネルの言葉に裏はない。お世辞は苦手な娘なのだ。

「でもさ、でもさ。十年前に、どうして軍隊を辞めちゃったの？」

フランお姉ちゃんくらい強かったら、きっと今頃は將軍さまになつてゐるかもしれないのに」

ルウの言葉に、隣でうんうんと頷いたアルサスは、

「確かに。將軍は大袈裟でも、あんたのその武技なら、高い位に上り詰めるのも、夢じゃなかっただろう？」

と、鉄槍を指差した。柄まで鉄で作られた長尺の鉄槍は、それを振るうだけでも、強靱な腕力を要する。ベイクのように、筋肉に包まれた腕の持ち主なら分からなくてもないが、ネルほどではないにしろ、フランチェスカの腕は華奢だ。そんな彼女曰く、コツさえ掴めば、武器を振るうのに腕力はいらないというのだ。

そんな事を軽々しく言つてのけられるフランチェスカの槍さばきは周知であるし、それを差し引いても彼女が、女だてらにギルド・リッターの小隊長を務めている事を鑑みれば、軍属においても、屈強な戦士たちを追い抜くのは容易なことのように思えた。

「それは、わたしにとって、出世が夢じゃなかったってことね。それに、軍属を辞めたのは、もっと別の理由……」

そう言つて、フランチェスカは歩きを止めた。彼女の前髪が爽やかな風にあおられ、漆黒の瞳が静かに眼下を捉える。そこは、ちょうど両側に広がる山のみねが切れたところで、張り出した岩の上に立てば、広大な草原を見下ろせる、自然の展望台になっていた。

「ヨルン平原……」

岩の縁に立ち、槍の穂先で指し示す、広大な草原。ガモーフ神国の北部の大部分に広がる、あまりにも広大な草原は、その全景を両目に収めることは敵わない。

「十年前、わたしはあそこにいた」

まるで、思い出話でもするかのような、遠い目をするフランチェスカの顔は、ある一点を見つめていた。草原の中心、そこだけ何故か大きくくぼ地になっており、周りの草原とは違い、茎も生えず黒い土をむき出しにしていた。何かが衝突した後、いや、爆発した後のようなその場所は、「墓標の地」と呼ばれていた。

「あそこって、墓標の地にいたのかよ!?　ってことは、まさか、『ヨルンの悲劇』に?」

アルサスは、珍しく驚きを言葉に乗せて、フランチェスカの横顔を見やった。やや、自嘲するように、フランチェスカは笑う。

「そう、その当事者の一人よ……」

「あ、あのっ。『ヨルンの悲劇』って何なんですか?」

不意にネルが、手を挙げる。この世界に生きていれば、その名を耳にすることは少くない。だが、当時、アルサスもネルも六歳になったばかりの子どもだったし、ルウにいたっては、図書館の本で得た知識こそあるが、まだ生まれたての赤ん坊だった。しかも、辺境の地に暮らしていた、ネルにとっては、なおさらその実態を知ることとは出来なかっただろう。

「あまりいい思い出じゃないけれど」

ネルの質問に答えるように、フランチェスカは、そう前置いて、十年前の記憶を語り始めた。

話は十年前にさかのぼる。この世界には、三つの国があった。八百諸侯を束ねる連合王国「センテ・レーバン王国」。ベスタ教を宗主とする宗教国家「ガモーフ神国」。そして、砂漠の中心に豊富な鉱物資源を有する鋼鉄国家「ダイムガルド帝国」。

三つの国が、戦争を始めた理由については、定かではない。数百年ほど前から、何度も戦争と休戦を繰り返してきた。時には、一年足らずで、休戦したこともあったし、二十年近く戦乱に明け暮れたこともあった。しかし、十年前には、確かに三つの国は、互いに鎬しのぎを削る戦争の真っ只中にあった。

長きに渡る戦のために、三国の軍隊はそれぞれに疲弊し、決戦の時を待ちわびていた。その決着の瞬間が訪れたのは、期せずして、十年前のヨルン平原であった。最初に、国境を越え、ガモーフ国領のヨルン平原に進駐したのは、センテ・レーバン軍であった。

ヨルンの平原には、二国の国旗が翻り、互いにアトリアの麓と、

クアドラの麓に陣を張ってにらみ合ったものの、互いの様子を伺うだけで、こう着状態が続いた。遅ればせながら、ダイムガルド軍が南よりヨルン平原に姿を現したのは、それから半月あまりが経った頃。黄金の鎧に身を包んだ、ダイムガルド軍。その末席に、まだ十七の少女あった、若き日のフランチェスカの姿もあった。

戦線が動く。こう着状態が終わり、三つ巴の様相を呈するに違いない。

もしも第三者的な立場で、その戦場を俯瞰していたものがいたとしたら、おそらくそう思ったであろう。しかし、戦局は思わぬ方向に動いた。ダイムガルド軍は、ガモーフ軍と結託し、センテ・レーバン軍に攻撃を仕掛けたのだ。

だが、数では圧倒的に勝る、センテ・レーバン軍。三つの国の軍隊は、弓矢と剣戟、そして魔法弾の飛び交う中、ヨルン平原の中心でもみ合い状態となった。そして、半時もしないうちに、ガモーフ、ダイムガルド連合軍は、劣勢に追い込まれることとなる。

その時である……。

「わたしは、その時部隊の最後方で、センテ・レーバンの別働隊と戦っていたの」

フランチェスカが槍の穂先で指し示した方角は、ヨルン平原の西の端。ここからでは空気にかすんで見えないが、空白地帯とガモーフを結ぶ関所がある方角だ。当時、戦線は何百クリーグにもおよび、ヨルン平原の中心「墓標の地」で戦っていた本隊以外にも、たくさんの分隊がぶつかり合っていた。

「別働隊って？」

尋ねるルウに、フランチェスカは思い出すのも辛いといった顔をして、「黒騎士団よ」と答えた。

「黒騎士団って、あのシャドウズの前身になったっていう、センテ・レーバンの部隊か……」

「あら、アルサス、よく知っているわね。センテ・レーバンでもシ

ヤドウズを知っている人間は、ごく限られているはずよ」

「そりゃあ、まあ、あれだ。情報がものを言う、レイヴンの端くれだからな」

小さくアルサスは笑う。苦笑とも微笑ともとれるあいまいな笑顔に、その横顔を目の端に捉えていたフランチェスカは気づいていた。だが、「そういうことにおきましよう」と、あえて心の中に留め置き、話を続けた。

「わたしのいた部隊は、黒騎士団に取り囲まれて、劣勢だった。隊長たちは、次々と戦死していき、まともに立っていられたのは、わたしを含めて数人だけ。その時は、死を覚悟した。でも、突然。そう、本当に突然、あの場所で、光はまっすぐ上から降ってきた……ように見えたわ」

墓標の地と呼ばれる、その直上に降り注いだ、辛辣なまでに眩い光。その瞬間、激しい爆音と土埃、さらには吹きすさぶ爆風が、フランチェスカたちを見舞った。

何が起きたのか、それすら理解することも出来ず、フランチェスカの華奢な体は一気に吹き飛ばされて、意識を失った。

「気がついたときには、戦争は終わっていた。三国合わせて、二百万人の命が失われてね」

「二百万人ですか……」

フランチェスカの言葉に、ネルが青ざめた顔をする。十年前、ここから見下ろすあのくぼ地で起きた、爆発のために、二百万人の命が奪われたと言うのなら、その墓標は、二百万の人たちの墓標なのだ。

「魔力の暴発、新兵器、神さまの怒り、色々な噂話が流れたわ。中には、『神々が争い合った黄昏の時代に、神さまが使った武器が爆発した』なんていう、実しやかな噂まで流れた。戦場伝説ってヤツね。結局のところ、あの光と爆発が一体なんだったのか、それは今でも分からない……。ただひとつ、確かなのは、あの戦場で、一瞬のうちに、二百万もの人の命が消えたってことよ」

「それで、フランお姉ちゃんは軍隊を辞めたの？」

墓標の地を見つめながら、ルウが問いかけた。それに答える、フランチェスカの言葉は、あまりにも客観的すぎて聞こえた。

「そうね。あの戦いは、あまりにも悲惨すぎたのかもしれない。二百万の命が奪われたなんて、悲劇というしかない。そんな悲劇を目の当たりにしたら、戦争屋である軍隊なんかにはいられなくなっちゃったのね、きっと」

今でも、あの時のことが、夢であったなら、フランチェスカは言外にそう言っているようだった。しかし、十年の歳月を経て、ふたたび見下ろすヨルン平原。そこには、挟まれた巨大なくぼ地が、確かに存在していた。あれは、夢でもなんでもない。ここでたくさんの人が、一瞬で命を奪われた。それが、現在、三国が結んでいる表面的な停戦関係だとしたら、あまりにも悲しすぎるような気がしてならないのだ。

「さて、お姉さんの昔話はここまでよ。エントの森まではまだまだ時間がかかるわよ。この辺りは、夜になると、魔物も出没しやすいわ。はやく行きましょう」

踵を返し、岩場を後にするフランチェスカの顔には、元通りの笑顔があった。

「ヨルンの悲劇か……」

アルサスは一人、もう一度だけ、墓標の地に目をやると、人知れず呟いた。

そよそよと、ヨルン平原の草原を駆け抜けた風が、クアドラの尾根を上り、アルサスの前髪を吹き上げる。この風は、十年前にもこの草原を駆け巡っていたのだろうか。すべての歯車が、十年前を境に少しずつおかしい方向へ進み始めた。だから、人々は、昨今の貧困や飢饉を「ヨルンの悲劇」の所為にしたがるのだ。だが、果たしてそれが真実なのか、知っているのはおそらく、この風だけなのかもしれない。

「おい、アルサス！ 置いてくわよ！」

すでに山道を下りはじめた、フランチェスカが振り返りながら、アルサスを呼んだ。アルサスは、はっと我に返り、フランチェスカたちの後を追いかけた。

うねりながら下っていく山道の先、目を凝らせばかすんだ風景の奥に、かすかに漆黒の森が見える。エントの森……それこそが、アルサスたちの目指す場所だった。

25. ヨルンの悲劇（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せ下さい。

26. エントの森へ

ヨルン平原での、悲劇。その命の代償として、停戦協定を結んだ三国は、戦争を止め自国の復興にその歳月を費やした。しかし、最初の五年は、すでに軍隊としての様相を失っていた騎士団の再建に努力した彼らも、その役目が終わると同時に、鬱憤^{うっぷん}をもらすようになった。そもそも、騎士団は剣と盾を持って、戦うことを生業としているのだ。そこに正義如何があるなしに関わらず、そういうものなのだ。

とくに、剣と盾を以って、八百諸侯を纏め上げたと言う自負のあるセンチ・レーバン騎士団の鬱憤は、想像を超えていた。中には、貧困に喘ぐ辺境の農民を駆り立てて、「一揆」を起こすなど、野蛮な騎士もいる。無論、騎士の憂さ晴らしにつき合わされ、農民たちには同情を禁じえないが、騎士にしろ農民にしろ、平和であることを享受できないということは、忌々^{かりそめ}（ゆゆ）しきことである。

悲劇が生んだ安寧の時間。それが仮初の平和であることを、誰も理解していない。この平和は永遠に続きはしない。すでに、その日はやってこようとしている。せめて、一時の平穏を楽しむことも出来ない人間は、とても憐れではないか。

そんな中、騎士団の中にあって、騎士の務めは国を守ること、と多少浮き足立つ騎士団を冷静な目で見つめる若き騎士がいる。親衛騎士団の、クロウ・ヴェイルである。

彼は、もともと王国に仕えた名家ヴェイル家の嫡子。クロウの父親は、ヨルン平原での戦いにおいて、前線の部隊を率いた、ホーク・ヴェイルである。常に勇猛果敢にして冷静沈着、配下からの信頼も厚い男だった。クロウは、父親の資質を存分に受け継いでいると言えるだろう。

だが、ライオット・シモンズは、彼の有能さにはまったく目もくれず、「没落した家の息子」「使ってやるだけ、ありがたく思え」

などと、傲慢な態度を取る。

その日も、ライオットの執務室に呼びだれた、クロウはライオットの見下すような視線を、静かに受け流していることに、ただ一人、メッツェは気づいていた。

「然るに、ファレリアのボレウス公爵は、領地の安定化が促されないのは、王国の怠慢であると抜かし、兵力を蓄えている。これは、反乱の兆しありとシオンさまは仰った」

ライオットの蛇のような目つきが、クロウの顔を捉えている。そんなライオットに、クロウは抑揚のない言葉で「シオンさま、がですか？」と問う。

「左様である。フェルトさまが不在である以上、シオンさまが次王になられる。その儀も、すでに準備を整えつつあることは、クロウ、そなたも知っていることであろう」

クロウが尋ねたのは、そういうことではない。だが、受け流すと言うよりは、ライオットには質問の意図を読みこなせていないのだろう、とメッツェは部屋の隅から二人を俯瞰しつつ、思った。

「それで、ライオットさま。わたくしめをお召しになられた理由をお聞かせ願いたいのですが」

「話は単純だ。兵三千を与える故、ボレウスを逮捕してくるのだ。無論、ボレウスの生死や、ファレリアの住人の命は問わん。そなたにとっては、ヴェイル家の汚名を返上する、良い機会だと思うが？」

いやらしく、相手の弱みを笑うその顔にも、クロウは動じることなく、いたって冷静に、抑揚を見せないように、

「我が一族に機会をお与え下さることは、大変光栄なものと存じます。しかし、我らは親衛騎士団。王家を衛^{まも}ることが務めです。すでに、部下たちからも不平の声が上がっております」

と、返した。すると、ライオットの顔色が変わる。明らかに「気に入らない」と書いてあるようだ。

「断ると申せば、永久に失地回復は望めないぞ。そもそも、誰のおかげで、親衛騎士団にいられると思っているのだ？　ヨルンでの失

態の責任を負わされ、国賊同然となったヴェイル家を救ってやったのは、誰だ？　それに、戦うしか能のない、騎士団に戦いの場を与えてやろう、と言うのだ。ありがたく思いこそすれ、断る道理はないであろう」

自分の言い分だけを相手に押し付ける。宰相という立場を利用して、上からものを言う姿勢を、快く思っている人間などそうはいないだろう。しかし、相手はシモンズ家。ヴェイル家にとっては、頭の上がない相手なのだ。クロウの答えは、ライオットにも、そしてメッツェにも分かっていた。

「拝命いたします。ただちに、軍備を整えて、ファレリアへと向かいます。吉報をお待ちくださいませ」

クロウは深々と頭を下げた。背中のマントがひらりと翻り、悔しさに固く結んだ彼のこぶしを覆い隠したことなど、ライオットは気づいていなかった。

クロウが執務室を後にし、その足音が聞こえなくなると、ライオットは溜息を吐き出し、窓の外を見やった。眉目に刻まれたシワがよりいっそう濃くなる。

「クロウめ、口ごたえしようとはな。使えるヤツだから、使っているだけのこと。ヤツめ、そのことに気づいていないのか？」

「さあ、それは分かりかねます。人の心の内は、読めないものですからね。ボレウス公爵にしてもそうでございましょう」

メッツェは部屋の隅から、ライオットの前に歩み出て、ライオットの見つめる窓外へと視線を投じた。いつもと変わらぬ、アトリアの峰と広がる王都の城下町。ライオットは、それを我が世と見つめているに違いない。

「反乱の兆しは読めなかったのか？」

「読めていれば、このような事態にはなりませんでした。閣下、起きてしまったことより、これからの事を算段するべきでしょう。ガモーフ国領に入った、銀色の娘とレイヴンの行方は、ウェスアを最後に杳ようとして知れません」

メッツェの言葉に、ライオットは振り返る。

「厄介なことよ。黒衣の騎士団のギャレットからは何の連絡もないのか？」

「それが……先日のウェスア大司教の一件以来、ガモーフはエーアデ通信に妨害をジャミング入れているようで、連絡がつきません」

「ギャレットめ、目をかけているというのに、成果を挙げられんとはな。シオンさま即位の日は近い……、それまでに、ボレウスの反乱を制圧し、なおかつあの娘を我が手中に収めねばならん」

ライオットの苛立ちは、机の縁を小刻みに叩く人差し指に顕われていた。

「承知しております、閣下。彼らの行き先が、私の予想と同じならば、彼らは、近いうちにハイゼノンへ向かうはずです」

ライオットの苛立ちを目の端に捉えながら、メッツェは確信めいた口調で言った。ライオットはいささか驚いたように、目を丸くして指先の動きを止める。

「ハイゼノン？ 城郭都市ハイゼノンか？」

「ええ、彼らがセンチ・レーバンへ向かえば、ことは容易くなりま
す。よく言うではありませんか、飛んで火にいる夏の虫と。クロウ
の采配を持ってすれば、ボレウス公爵の反乱は数日のうちに収めら
れるでしょう。その後、クロウ隊は、ハイゼノンへと向かわせます。
ファレリアからなら、とても近いですから」

「そうか、任せる。わしは、シオンさま即位の準備に忙しい。ガム
ウの時のような失態は見せんでくれよ」

「ご期待に沿えるよう、努力いたします」

メッツェは、クロウがそうしたのと同じように、ライオットに向
かって、深々とお辞儀した。

クアドラ山脈の山道を下れば、その道は吸い込まれるように、漆
黒の森へと入っていく。エントの森。エントとは、樹人と呼ばれる
魔物の名であり、幾度となくこの森で樹人の姿が目撃されたため、

その名がついたと言われている。

確かに、森は不気味なほど鬱蒼^{うつそう}としていた。アトリアの森が森林と呼ぶのなら、エントの森は密林と呼ぶのがふさわしいか。一步森に入れば、まだ昼過ぎであるにも関わらず、太陽の光が一切入ってこないほど、木々が頭上に覆いかぶさっている。足元には、蔦や木の根が張り出し、油断すれば足元をすくわれかねない。現に、ネルはすでに二、三度、根に足を取られて地面と仲良しになりつつある。険しだけで言うのなら、それは、アトリアの森を悠に超えるほどで、森に入って小一時間、あてなくさまよえば、アルサスたちの体力と精神力をことごとく奪っていった。

そもそも、ウルドから示された目的地は、エントの森という漠然とした目標だった。エントの森といっても、何クリーグにも及ぶ、広大な森林地帯。そのどこへ行けばいいのか、具体性のない目的地は、徐々にアルサスたちを苛立たせた。

「この森のどこへ行けばいいんだよ？」

目の前に垂れ下がる、蔦を剣で切り裂きながらばやくアルサスの後ろで、ネルが再び派手な音を立てて転ぶ。くじいた足の痛みは治っているものの、どうにも患部を庇って歩くクセがついたらしく、山育ちには似合わないほど、足元かおぼつかない。

アルサスは剣を逆手に持ち替えて、ネルの手を取り立ち上がらせる。

「大丈夫か？ 気をつけて。また足をくじかないように」

「は、はい。大丈夫です！ 少しだけ、森を歩くのにも慣れてきましたから」

ニコニコと笑って返すネル。だが、泥だらけになったスカートの裾を見れば、とてもなれたようには見えない。

「アルサス、何か不気味な気配がしない？」

唐突に、フランチェスカが言う。彼女は、ぐるりと森を見渡し、警戒心を眉間に集めていた。ネルを助け起こしたアルサスは、ネルの手を離しつつ、フランチェスカに倣って、周囲を見渡してみる。

鬱蒼と覆い茂る木々。時折「ゲーツ！」と奇妙な鳥の鳴き声が薄暗い森に響き、ともすれば迷子になってしまいかねない自然の迷宮は、それだけで不気味さを演出している。

しかし、その不気味さの中に、確かに、一点だけ妙に生々しい気配を感じる。ヴォールフか、それとも野犬か。こんなところで襲われでもしたら、ネルを護ってやることが出来ないかもしれない。

「ちがう。これは、獣の息遣いじゃない……」

フランチエスカはそう言うのと、物音を立てないように、槍の穂先を覆う鞘を外した。アルサスは、三人でネルを護るように円陣を組むよう、ルウに目配せをする。

「獣の気配じゃないって、まさかエントとか言わないよね！？　だって、エントを本当に見た人は誰もいないんだよ。学校の図書館の本にも、『エントは、未だ確認されていない、謎多き生き物である』って書いてあったもん！」

魔法杖を構える、ルウが珍しく怖がっているようだった。

「もしかして、怖いのですか？」

ネルとしては、そんなルウの事を心配して言っただけだったが、そう言われれば、自尊心にかけて、ぐっと胸をそらし「こ、怖くないかないよっ！」と強がって見せるルウ。

と、その時である。森の木々が風もないのに、不自然にざわめく。

「来るわよ！　みんな、構えてっ！！」

フランチエスカが一際声を張り上げた。この間まで、ギルド・リッター実働隊の隊長であった彼女らしく、よく通るその声が響き渡った瞬間、ざわめいた木々が一瞬だけ、しんと静まり返り、不気味な気配は頂点に達した。

静寂が破られる。枝葉が揺らぎ、鳥の鳴き声によく似た泣き声が響き渡ったかと思うと、その枝葉が、あちらこちらから伸びてきて、アルサスたちに襲い掛かった。

まるで生き物が飛び掛ってくるが如く、うねりを帯びて、緑が迫ってくる。

「何あれっ!!」

と、ルウが悲鳴を上げたのも無理はない。まるで木々が腕を伸ばし、アルサスたちを捕らえようとしているかのようで、恐怖と驚愕は誰しもが感じていた。

それでも、アルサスは剣を振るい、枝葉の食指を切り落とす。生き物のように動いてはいるものの、それは樹木に変わりはない。鋭い刃にかかれば、軽く両断される。フランチェスカも、鉄槍をまるでバトンか何かのように、ぐるぐると振り回し、絡めとろうとのびてくる枝を払いのける。

「ぐぐっ、ボクだってっ!!」

ぶるぶると、頭を振り、恐怖をふり落としたルウは、ずれた眼鏡を戻しつつ、魔法の呪文を口にする。

「赤の精霊と契約の名の下に、具現せよ。汝、火炎の盾となれ……フランメ・バックラー!」

魔法杖の先端が輝きを帯びると、たちまち火炎のヴェールがアルサスたちを包み込む。樹木には炎。着眼点は間違っていないかった。枝葉は、まるで獣が怯えるかのごとく、しゅるしゅるとひるむ。

だが、喜ぶのもつかの間。魔法の盾は、持続時間が短い。魔法の効果が切れるや否や、一度はひるんだ枝葉は再び勢いを取り戻した。「こうなったら、一気に燃^もしてやるっ」

「待て、ルウ! そんなことしたら、森が丸焼けになっちまう!! 俺たちも無事じゃ済まされないぞ!」

怒り心頭と、叫ぶルウを慌ててアルサスは止めた。その声を、その言葉の意味を理解しているとも言うのか、枝葉はここぞとばかりに大挙を押して、アルサスたちを瞬くうちに包み込んだ。

葉っぱが顔中に張り付いて視界をふさぎ、しなりを帯びた枝や蔓が、体を打ち据える中、アルサスは、手探りでネルの手を探した。こっつん、としなやかで細い指先に触れる。ネルの指だ! アルサスは必死でその手を掴もうとしたが、腹や足首に巻きついた蔓が、予想以上に強い力で、アルサスの体を引っ張った。ネルの手がほどけ

ていく。

「アルサスっ!!」

視界が深い緑一色に包まれる中、最後に聞いたのは、ネルの呼び声だけだった。

26. エントの森へ（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せください。

27. アルサスとフラン

暗闇の中で、小さな勉強机に向かう少年は、随分と身なりのいい服を着ているが、まだあどけない顔をしている。ただぼんやりと、それでいて悲しげな顔をして、赤い瞳で見つめる先にあるものが何なのか、それをアルサスは知っていた。なぜなら、その少年は幼少のアルサス本人だったからだ。

「ねえ、どうして戦争は起きるの？」

六つになったばかりのアルサスが言う。何故そんな疑問が頭に浮かんだのか、よく分からない。ただ、その疑問を胸のうちにしまっておくことが出来なかった。

すると、どこからともなく声が返ってくる。

「そんなことは考えなくてもいい。戦争は起こるべくして起きている。人間が英知を手に入れたという証なのだ」

暗がりに姿は見えないが、男の声だ。ひどく重く、腹に響き渡るような声は、どこか怖さを秘めているように感じた。しかし、英知などと言われても、難しい言葉がまだ分からないアルサスには伝わらない。

「だけど、みんなが仲良くすれば、戦争なんて起こらない。そうでしょ？」

机の上を叩いて、幼いアルサスはさらに問いを重ねる。

「そうだ、しかし人は奪い合うもの……それが正しいか間違っているかは関係ない」

わずかに、声は震えていた。姿は見えないが、その怖い声は、困っているかのようにだった。

「奪い合う？」

「そうだ」

アルサスの疑問に、再び男の声が答える。

「今、お前の眼前に、お前の好きな菓子がひとつ置いてあるとしよ

う。今日のおやつはそれひとつしかない。だが、それを別の子どもが横取りしようとする。その時、お前は黙ってその子に、菓子をくれてやる事が出来るか？」

机の上に、アルサスの大好きな、「ワック」という大麦をこねた丸型のクッキーが置かれる。白い砂糖がふりかけられたワックからは、甘く香ばしい匂いが香り立っていた。

「できない……かもしれない」

アルサスは思わず伸ばしかけた手を収める。

「このワックが、土地や財産、人の命だったとしたら、誰もそれを譲ることが出来ない。そうして、戦争が始まる」

「でも、でもっ、ぼくは、ワックを半分こにして、その子に半分あげるって言うよ。そうしたら、相手もわかってくれる。一緒にお菓子を食べようって」

そう言って、机の上の菓子を半分に割った。いつもはきれいに割ることが出来ないのに、その時はきれいに半月が二つ出来上がった。「ならば、あえて問い返そう。相手が、言葉の通じない子どもだったらどうする？ 端から、お前の菓子を奪いたいと思っていたらどうする？ 人間は、価値観や生きてきた環境、見ているもの、あらゆるすべての事象において、分かり合うことはできない、不器用な生き物なのだ」

姿なき男の声は、少年の胸に突き刺さる。じっと、半分に割られた菓子を見つめ、そして小さく声を上げた。

「でも、ぼくは……」

「ぼくは、それでも戦争したくない！」

自分の声でまさか目を覚ますとは思っていなかったアルサスは、一気に上体を起こした。あたりは、薄暗いエントの森。しかし、木々のざわめきは聞こえなかった。どのくらい気を失っていたのか、ここは広大な森のどのあたりなのか？ 体中がキリキリと痛む。それ依然に、体中から冷たい汗が噴出している。

「『ぼく』ねえ……」

すぐ傍で声が聞こえた。アルサスは慌てて、周囲を見渡す。すると、茂みががさがたと揺れた。また、エントが現れたのかと、思わずアルサスは身構えた。しかし、鞆に剣がない。エントに連れ去られた瞬間、剣を落としてしまったのだろうか。

「わたしよ、わたし」

茂みが半分に分れて、顔を出したのは、フランチェスカだった。

浅黒い顔には、少しばかり安心したような笑顔があった。

「なんだ、脅かすなよ、フラン」

ほっと胸をなでおろす。見れば、フランチェスカは、アルサスの剣を手に入っていた。

「そんなつもりはなかったんだけど……。辺りを調べていたのよ。随分奥地に連れ込まれたみたい。あ、アルサスの剣、借りたわよ。はい、返すわ」

そう言って、フランチェスカはアルサスの剣を逆手に持ち替えて手渡す。剣身に刻まれた魔法文字の刻印に、少しばかり草木の汁が付着しているところを見ると、本当にあたりを散策してきたようだ。「随分うなされていたようだけど……?」

「昔の夢を見てた。それだけだよ。あんまりいい思い出じゃないからな」

「ふうん」

と返す、フランチェスカは意味深な視線を向けてくる。女性にそんな目で見られることになれていない、アルサスは思わず視線を逸らした。

「気にはなっていけれど、あなた、一体何者なの? その剣、レイヴンが持つにしては随分立派な剣よね」

「はあ? 何だよ突然。こいつは、依頼料のカタにもらったんだよ。俺は、ただのレイヴンだ。それ以上聞くな」

受け取った剣を腰だめの鞆に戻しつつ、軋むような体を立ち上がらせた。フランチェスカの気遣いなのか、柔らかな草の上に寝かさ

れていたことに、ふと気づく。

「そうだ、ネルたちは？」

その辺にでもいるのだろう。エントに襲われて、気を失ってしまったなんて恥ずかしいな、などと思いつながらアルサスは尋ねた。すると、図ったかのようにフランチェスカの顔が曇る。

「この辺りにはいないわ。エントたちに連れ去られたんじゃないかしら……」

「何だって！？　どうして、それを早く言わないんだっ！　すぐに探すぞっ！！」

「探すって、何処を？　森は広いのよ、闇雲に歩けば、わたしたちまで迷子になってしまうわ。こういうときは、動かないのが鉄則。幸い、ネルちゃんはルウと一緒にはずよ。あの子達が無事なら……」
アルサスの傍に立てかけておいた、鉄槍を取り、フランチェスカが窘める。

「無事だって保障は何処にある？　ルウが言ってたじゃないか、エントはまだ未確認の魔物なんだ！　もしも、ネルを攫った理由が、捕食のためだったらどうするつもりだ！？」

あからさまに青い顔をするアルサスは、フランチェスカの制止も聞かず歩き出す。

「どうして、そんなにムキになるのよ。ああ、さてはあなた、ネルちゃんのこと……」

アルサスの背中に向かって、フランチェスカはニヤリとした。何かに思い至ったのなら、言えればいいのに、意味深に笑い、それ以上言葉にしない。アルサスは、怪訝な顔をしつつ振り返った。

「さては、何だよ？」

「何でもないわ。だって、聞いても答えてくれそうにもないし……」
そう言うと、フランチェスカは何食わぬ顔をして、アルサスを追い越し先導し始める。

「食えない女だな。そういうあんたはどうなんだよ。あんなに簡単に、ギルド・リッターを辞めて良かったのか？」

アルサスはフランチェスカのしなやかな黒髪を追いかけながら、問いかけた。ここまで、一度も切り出さなかったことだ。本人は、あっけらかんとしてアルサスたちに同行している。下心や企みがあるようなそぶりは見せていないが、アルサスの疑念がそれで晴れたわけではない。

「べつに、未練がないとは言わないわ。ただ、政治家の言いなりになるようなギルドに、こっちから三行半を突きつけただけよ。それにしても……分らないことだらけね」

絡み合う蔦を、器用に槍の穂先で払いのけながら、森の奥へと分けるフランチェスカ。「分らないこと？」と、アルサスが聞き返すと、フランチェスカは後ろを振り向かないで答えた。

「だって、そうじゃない。おそらく、センチ・レーバンは何かしらの目的のために、あの子、いいえ、あの子が持つ力を欲している。あなたたちの言う、奏世の力ね。だけど、ハイ・エンシエントもガモーフ神国もあの子を殺そうとしているのは、納得がいかないわ。わたしはまだ、信じてはいないけれど、あの子が『銀の乙女』だと言うなら、ベスタを国教とするガモーフは、あの子を護りこそすれ、命を狙う道理などない」

「確かに。いや、ネルがガモーフに命を狙われてるなんて、あんな話を聞いて始めて知ったくらいだ。あいつは、俺やあんなの知らないところで、欲されて、狙われている。本人でさえ、自分が世界の命運を握る鍵だって事を、まったくわかっていない」

「世界の鍵？」

「センチ・レーバンがもしも、ネルの力を手にいれれば、戦争が始まるかもしれない。少しずつ、ゆがみが生じているこの世界が、ネル一人によって、戦争と平和、そのどちらにも転がりかねない」

「この分だと、ガモーフもその危険性を認識しているかもしれないわね」

「そう。だけど、あいつは口には出さないけれど、まだ三ヶ月前の事を引きずってるんだ」

アルサスも蔦を払いのけながら、頭の片隅で、ルミナス島への航路での出来事を思い出していた。星空を見上げながら、潮風に涙を流すネル。自分の所為で、村の人たちが、家族がひどい目に遭わされた。いっそ自分なんかいないればいいのに。きつと、アルサスが空から降ってくるまで、「運び屋」の馬車に繋がれて、そんなことばかり考えていたに違いない。

「センチ・レーバンが……いや、ライオット・シモンズが欲しがる『奏世の力』、そして、ハイ・エンシェントやガモーフが殺そうとする『銀色の乙女』。あいつの肩にはその両方が重くのしかかっているんだ。ウエスアで、真実なんて知るべきじゃないと、ウルドは言ったけれど、知らなければ、あいつは前に進めない。あいつが前に進むことが出来たら、世界はいい方に向かうと思ってる。たとえ、その答えを知って、後悔したとしても、ネルなら、迷ったり挫けたりしない」

「アルサスは、まるでその答えってやつを知っているみたいね」

「知らない。知らないから、こうして旅をしてるんじゃないか」

「ふうん。まあ、そういうことにしておきましょう」

フランチェスカが含みのある笑いを、こちらに向けてきた。アルサスは、それに気づいていないフリをして、行く手をさえぎる蔦を切り裂いていく。

「なににせよ、俺たちで、ネルを守ってやらなきゃいけない。これでも、あんたの槍の腕前、期待してるんだ」

「あら、嬉しい。信用してくれてるのね。ご期待に沿えるよう、お姉さん頑張るわ」

それ以降、会話も途切れ一心不乱に蔦を分けていくと、唐突に蔦の茂みがなくなり、少しでも開けた獣道が現れる。獣道は、アルサスたちの前を横切って、まっすぐ森の深部へと通じているようだった。

「足跡があるわ……女の子の靴跡かしら」

獣道に沿って、点々と地面に刻まれた足跡に気づいたフランチェ

スカはしゃがみ、指先で足跡をなぞった。

「ネルの足跡か？」

「いいえ、少なくとも、数ヶ月は経ってる。ほら見て、泥が乾いてる。きつと、この道をまっすぐ、森の深部へ入っていったのね」

フランチェスカは立ち上がって、いつもそうするように、鉄槍の穂先で、足跡の向かった先を指し示した。闇へと吸い込まれるように、長くのびる獣道。一体そこで何があったのか、知る術はない。

「あれは……」

ふとその道の真ん中に、何か光るものが落ちているのに気がついた。アルサスは剣を鞘にしまうと、早足で駆け寄り、そっと土に埋めかけたそれを拾い上げた。わずかに湾曲した飴色のべっ甲飾りに、止め具が取り付けられたバレッタ（髪止め）だ。

「これ、カチュアの鎖ね」

と、アルサスの横から顔を覗き込ませたフランチェスカが、バレッタの飾りの表面に、丁寧な彫りで刻まれた、特徴ある鎖模様を指さす。

「カチュアの鎖って、ネルの服に描かれているカチュアの模様のことか？　じゃあ、こいつはラクシャ村の民芸品かなにか」

「かも知れないわ。地図の上だと、ここからラクシャへはそう遠くないはずよ。もしかすると、これを落とした女の子は、ラクシャ村の子かもしれないわね」

「ネルなら何か知っているかもな」

アルサスはそう言うと、もう一度バレッタに刻まれた模様を眺め、それをズボンのポケットにしまいこんだ。

「また、いやな気配がするわ」

不意に、フランチェスカが言う。足跡や、バレッタに気を取られて、気づいていなかったが、不気味な気配と、木々のざわめきがアルサスたちを取り囲んでいた。

「エントか。もしかすると、森全体がエントで出来ていたりしてな」再び鞘から剣を引き抜き、身構えつつ、アルサスが言う。冗談を

言うにとしては、不釣合いな緊迫した空気が張り詰めているが、フランチェスカはそれに応えるように、小さく笑った。

「あながち、外れじゃないかも。背中任せるわ。一気に畳み掛けて、この場を立ち去りましょう。また、どこかにつれて行かれる前に」

「がってん！ 来るぞ、フランっ！！」

アルサスの掛け声と、ほぼ同時に先ほどと同じように、不気味な気配は樹木の食指を伸ばし、アルサスとフランチェスカに襲い掛かった。

27. アルサスとフラン（後書き）

ご意見・ご感想などありましたら、お寄せください。

28. ネルとルウ

たすけて、おねえちゃんっ！

声は聞こえるのに、何処にいるのかわからない。真っ暗な森の中で、ネルは辺りを何度も見回した。しかし、鬱蒼と覆い茂る樹木、蔦、草、以外に人の気配も、動物の気配さえも見当たらない。

助けて、お姉ちゃんっ！！

間違いない、妹の、メルの声だ。確信めいた思い、だがどうしてメルの声が聞こえてくるのか、ネルには分からなかった。

「メル、何処？ 何処にいるのですか？」

それでも、ネルは何度も叫んだ。だが、助けを求めるメル声は、遠くなったり近くなったりするばかり。やがて、唐突にぷつりと声は途絶えてしまう。その代わりに、ざわざわと深緑の枝葉が不気味にざわめき始める。逃げなきゃ。ネルは、咄嗟にそう思い、頭の上に載せた箱型の帽子を右手で押さえて、走り出した。

何処へ逃げたらいいのか分からない。何処へ逃げても、木々のざわめきが追いかけてくる。獲物を捕らえようとする、獣の獰猛な気配にも似て、ネルの背筋を冷たくさせた。

『こ、来ないで下さい！ ルウ！ フランさんっ……アルサスっ！』

旅の仲間たちを必死で呼ぼうとするのに、何故か声が出ない。喉の奥が焼け付くような感覚に襲われ、こほこほと咳き込んだ瞬間、何かに足を取られた。「きゃあ！」と、悲鳴とともに派手に転がったネルは頭から泥をかぶってしまう。つややかで美しい銀色の髪も泥だらけ。カチュアの模様が織り込まれたワンピースも、箱型の帽子も、泥にまみれてしまった。

しゅるり。何かが、足元を触る。ネルは慌てて上体を起こし、足元に目をやった。薄緑色の葉を纏った蔓が、ネルの細い足首に巻きついている。そして、蔓は俄かにネルの足を引っ張り寄せようと力

を込めた。

『いやっ！ は、離して下さいっ』

血相を抱えたネルは、慌てて蔓を引きちぎった。案外、簡単に蔓ははがれたが、その千切れた口から零れ落ちたのは、樹液や草の汁ではなく、真っ赤な血液だった。ドロリとした鮮血は、たちまちネルの手のひらを目の覚めるような深紅しんくに染めていく。

『いやあっ！』

悲鳴を上げたいのに、声が出ない。まるでその代わりといわんばかりに、引きちぎられた蔓から血が噴出した。

「お姉ちゃん……助けてよう」

背後から、突然の声。心臓を抉り取られるような感覚を覚えつつ、ネルは後ろを振り返った。そこにいるのは、妹のメル。少しばかり大きな瞳と、愛らしい丸顔、ガモーフ人らしい豊かな黒髪。ネルとは似つかない妹は、ネルを拾い育ててくれた父母の実の娘である。しかし、ネルにとっては、血は繋がらなくとも、十年以上一緒に過ごしてきた、かけがえのない妹だ。

「お姉ちゃん、苦しいよう。痛いよう」

自分を見下ろす妹の姿を見たネルは、全身から血の気が引いていた。メルの胸には、黒鉄色の剣が突き刺さっていた。その切っ先は、背中から抜け、先端からポタポタとちが零れ落ちている。

「苦しいよう。助けて、お姉ちゃん」

必死に助けを求めるメル。ネルは、泥まみれ、血まみれであることも忘れて、立ち上がりメルの胸を貫く剣の柄を握った。

『今助けますっ。メル、頑張って』

声にならなくとも、心の中で、ネルは必死に呼びかけた。だが、深く食い込んだ刃は、簡単には抜けない。すると、何を思ったのか、突然、俯いたメルが笑う。それも、楽しい笑いではない。どこか気が狂ったような笑い声。

『メル？ どうしたのですか？』

「お姉ちゃんがいなければ良かったんだ。そうしたら、お父さんも

お母さんも死ななずに済んだのに」

笑い声をピタリと止めた、メルが言う。それまでの弱弱しい声とは違う。はっきりとした口調、それでいて、明らかな憎しみが籠っていた。

「お父さんを返してっ、お母さんを返してっ！ 村のみんなを返してっ！！」

『やめてください、そんな目でわたしを見ないで下さい……』

「村に不幸を呼ぶ、『落とし子』！ あんたがいなければ、あんたさえいなければっ」

憎しみ、悲しみ、苦しみ、そういったものが渾然一体となったような言葉を吐き出して、メルの手はネルの首筋を強く掴んだ。とても冷たい手だった。どうして、心優しくいつも明るかったメルが、自分の首を絞めるのか。その冷たい手のひらにこめられた感情が何なのか、ネルには痛いほど分かっていった。

全部、わたしが悪いんだ……！

『ごめんなさい……。ごめんなさい』

ネルは心の中で何度も繰り返した。涙が頬を伝い落ち、次第に全身の力が抜けて、意識が遠のいていくのを感じながら。

額に何か冷たいものが載っている事に気づいた。だが、体がずっしりと重く容易には動かせない。夢の中にいるのだろうか？ いや、違う。あれが夢だったんだと、ぼんやりとした意識がまとまり、ネルは瞳をゆっくりと開いた。すると、まるで水の中にいるように視界が潤んでいる。それが自分の涙であることはすぐに分かった。

体が重く感じていたのは、あちこち痛いからだ。それでも、起き上がれないほどじゃない。ネルは、目頭に残る涙を拭いて、上体を起こした。すると、額から何かが膝の上に落ちる。真っ白なハンカチだ。隅のほうに、魔法使いギルドの紋章が刺繍されている。ハンカチはどこかに水場でもあるのか、冷たく湿っていた。

「夢……？」

濡れたハンカチを手に取り、その感触を確かめる。現実感のある確か感触。周囲は鬱蒼とした茂みと木々が折り重なるエントの森だが、手のひらには鮮血も付着していなければ、衣服も思うほど泥まみれにはなっていない。しかし、あまりにも生々しく、そして恐ろしい夢だった。

村の事を思い出して、夢に見ることはこれか初めてではない。だが、いつもはネルが村から連れ去られた、あの日の惨状を追体験するばかりで、妹のメルが憎らしげにネルを睨みつけるような夢など、一度も見ることがなかった。

想像の産物。ネルの心の奥底で、三ヶ月前から渦巻き続け、ずっと影を落とし続けていることが、そういう夢を見させたのだと言ってもしまえばそれまでだが、そう言い切ることが出来ない。足首に薦が絡まる感触も、手のひらを染めた鮮血のぬめりも、首を絞める冷たいメルの手の感触も、すべてが本物のようだったのだ。それを、想像の産物と言ったのけることは、夢から醒めたばかりのネルには無理だった。

しばらく、白いハンカチを見つめていると、手の感覚、足の感覚、肩にのしかかる重力が戻ってくる。すると、すぐ傍で小さな寝息が聞こえた。

「ルウ？」

振り向いたそこには、木の幹に寄りかかり、なぜか大事そうに魔法杖を抱きしめて眠るルウの姿があった。推察するまでもない。ネルの額に置かれたハンカチはルウのものだった。

エントに襲われ、アルサスの名を叫んだが最後、そこから先の記憶がない。気を失ったことは明白だ。そんなネルをルウが助けてくれたのだろう。そして、少し疲れて、寄りかかった木の幹で、すやすやと寝息を立てている。しかし、あたりには、ルウ以外の姿は見受けられない。気配すらない。あの薦のお化けは？ フランチェスカは？ アルサスは？

思わず、ネルはきよろきよろと周囲を見渡してみた。すると、何

処かから、水音が聞こえる。それは、薄暗く不気味なエントの森には相応しくないほど、さらさらと静かで心地よい響きだった。

水音に導かれるように、ネルは立ち上がり、水音の聞こえてくる方を探した。すると、その物音に、浅い眠りのルウが目覚まし、

「気がついたんだね、よかったあ」

と、安堵の声とともに眼鏡の下目をまだ眠そうにこする。

「ごめんなさい、起こしてしまいましたか？」

「ううん、大丈夫だよ、お姉ちゃん」

にっこりと微笑む、あどけない少年の「お姉ちゃん」と言う言葉に、ネルはドキリとする。いつも、メルはネルのことを「お姉ちゃん」と呼び、慕っていた。血は繋がらなくとも、同じ両親に育てられた妹は妹として。

「どうしたの？」

立ち上がり、近づいてきたルウが、ネルの顔色が優れないとみや、心配そうに覗き込んでくる。慌ててネルは笑顔を浮かべ、「何でもありません」と応えては見せたが、明らかに取り繕ったような笑顔も、上擦った声も、頬に残る涙のあとも、何でもないようには見えなかっただろう。

「ルウ、わたしのことを助けてくれたんですね、ありがとうございます」

とりあえず話題を返るべく、そう言うと、ルウは頭を左右に振って、

「ボクもエントに襲われて気を失ってたんだ。それで、目が覚めたらここに、お姉ちゃんと一緒に横たわってた。アルサスたちの姿も見えないし、どうしたらいいのか分からなくて……怖かった」

と返す。心細かったのだろうか、今も必死に魔法杖を握り締めているルウの頭を、ネルは優しく撫でてやった。かつて、妹にそうしてやったように。すると、少しだけ陰の差していた心が、ほぐれていく。

あの優しいメルがあんなことをいうはずがない。メルはそんな子

じゃないって、一番よく知っているのはわたし。ネルは心にそう言い聞かせた。

「そうだ、ハンカチ」

ふと思い出したネルは額にのせられていた、ルウのハンカチを手渡した。

「これ、何処で濡らしてきたのですか？」

「すぐその先に、泉があるんだ。大きな木が生えていて、きれいな水が流れてた。きっと、アトリアとクアドラから流れてきた雪解け水だと思うよ」

まだ濡れたままのハンカチを受け取り、それを無造作にしまいこんだルウは、「こっちだよ」とネルを先導して歩き始めた。何時エントが襲い掛かってくるかも分からないこの場所を、早く離れたかったのかもしれない。あたりには、あの不気味な気配も、木々のざわめきもないのだが、確かに薄暗いこの森は、何故か異様な雰囲気があった。また、さっきの夢が脳裏を掠めていく。

「ま、待ってください、ルウ！」

どんどん茂みの中に入っていくルウを、ネルは急ぎ足で追いかけた。

絡まりあう蔦は、ルウが風の魔法で吹き飛ばす。炎の魔法を使えば一網打尽だが、乾燥した空気に火の魔法を放てば、たちまち自分たちまで丸焦げになってしまうかもしれない、ということはアルサスの叱責から学んだのだろう。しかし、今魔物に襲われたら、ルウの魔法だけが頼りだ。どうやったら使えるのか分からない「奏世の力」など即戦力としてアテには出来ない。ネルは、自分の非力さと同時に、気を失っている間一人ぼっちだったルウの心細さを改めて感じた。

やがて、幾分か鬱蒼とした視界が切り開かれ、水音が近づいてくると、不意に、ルウが足を止め、何を思ったのか、

「そういえば、お姉ちゃんと二人っきりになるのって、初めてだよね」

と、脈絡なく言う。思えば、ルミナスからこっち、ずっと三人一緒だった。ウエスアからは、フランチェスカも同行し、自然と旅は賑やかになった。

「そうですね。アルサスがいないと、こんなにも心細いとは思いませんでした」

ネルが応えると、ルウは妙に意味深な顔つきをして、ちらりとネルの顔を見る。

「この際だから、訊いておこうと思って」

「はい？ 何です？」

何を尋ねるつもりなのかと、ネルは思わずきよんとしてしまった。だが、直後のルウの言葉に、ネルは顔を真っ赤にしてしまう。

「お姉ちゃんって、アルサスのことが好きでしょ？」

「えっ？ あ、それはっ、えっと」

まさか、六つも年下の男の子にそんな事を言われるとは思っても見なかったネルは、しどろもどろになる。ルウは、ネルのそんな反応を見て、「顔真っ赤だよ、さては図星だね」と笑った。

「えっ、ええ？ 顔、赤いですか？ その、あ、アルサスには内緒にしておいて下さい。フランさんにも！」

「分かってるよ、言わない」

高潮した頬を両手で抑えるネルに、ルウはクククっと笑いをかみ殺す。

「でも、アルサスって、悪いやつには見えないけど、いつも態度大きいし、時々よく分からないところがあるよ。ほら、ボクたち、アルサスがレイヴンだってこと以外、あんまりよく知らないじゃない。故郷のこととか、家族のこととか、自分のことは何にも話してくれない。そんなアルサスのどこがいいの？」

「ルウは……、アルサスのことを疑ってるんですか？」

「そんなつもりはないよ。だって、旅の仲間だもん。仲間だから、気になるんだ。アルサスが何を考えているのかってこと」

確かに、ルウの言うとおり、アルサスのことをネルはほとんど知

らない。レイヴンだということ。それは本人から聞いている。そして、センチ・レーバン人だということ。それは、白い肌を見れば一目瞭然だ。いつも、身の上の話になると、アルサスはそれを避けようとする。だが、それは、些細なことだとネルは思う。

「人には、聞かれたくないことや、思い出したいくないことが、たくさんあるんですよ。ルウだって、わたしに知られたくないことがあるでしょう？　たとえば、ルウが学校で片思いしてる女の子のこととか」

「な、なんでボクが、ナタリーに恋しなきゃいけないのさっ！」

「ナタリーさんって、仰るんですか？」

自分で白状してしまった以上、返す言葉に詰まってしまうルウ。目を細め、ルウの顔を見つめるネルは、そっとルウの手のひらを取った。

「こうやって、アルサスがわたしの手をしっかりと握っていてくれると、わたし、なんだか安心するんです」

「安心する？」

今度は、ルウがきよんとする番だった。

「そうです。アルサスの手はとても暖かくて、不安なわたしの気持ちをいつも包み込んでくれます。そうしたら、胸のここのあたりが」

ネルはちょうど、胸骨の下の辺りを指し示す。

「ここのあたりが、少しだけドキドキするんです。ルウも、ナタリーさんとお話ししたりすると、ドキドキしませんか？」

「し、しないよっ。っていうか、ナタリーはそんなじゃなくって！　その、えっと……」

いつの間にか、形勢逆転。すっかり、ルウが頬を染めていた。これ以上墓穴を掘りたくない。そう思ったルウは、くるりと踵を返して魔法杖を構えた。

「今度、ゆっくりナタリーさんのこと聞かせてくださいね、ルウ」
「ううっ。お姉ちゃんって、意外と怖いかも……」

ネルに聞こえないように呟くと、つづけて魔法の言葉を唱える。

魔法杖の先端に、俄かな光が点り、どこからともなく現れたカマイタチが、鳶をばらばらに切り裂いた。

すると、突然眼の中に、光が舞い込んでくる。それまで薄暗い場所にいた、二人の視界は一瞬だけ真っ白になった。そして、徐々に明反応に慣れてくると、耳朶^{じだ}を打つ水音ともに、滾々（こんこん）と水をたたえた泉が姿を現した。

そこは、広く開けた場所で、ぽっかりと開いた木々の隙間から、さんさんと太陽の光が降り注いでいる。その光を浴び、泉のほとりには色とりどりの小さな花が咲いており、瑠璃色をした蝶々が花から花へ、ひらりひらりと舞っていた。そして、ルウが言ったとおり、泉の中央には、巨木が威風堂々と佇んでいる。

不気味なエントの森が一転して神秘的に見えたネルは、思わずその美しさに見惚れ、巨木を見上げた。

「多分、樹齢数百年……いや、千年ぐらいの木だと思うよ」

ルウは、巨木を指差して言う。ウロの開いた幹はとても太く、その巨木が生きてきた長い時間を感じさせる。これほどまでの、巨大な木に育つまで、はたして何年の歳月がかかっただろう。その途方もない時間を思えば、この泉が神秘的なのも頷けるような気がした。「そうだ、水筒に水を補給しておこう。それから、アルサスたちを探しにいきましょう」

と、ルウは巨木を見上げるネルに告げ、肩提げ鞆から小さな水筒を取り出す。泉の水は、とても澄んだ色をしていて、とても冷たかった。飲み水としては、申し分ないだろう。ルウは、泉のほとりにながみ、水面を眺めながら、水筒のキャップを取り外す。

その時である。泉の水面に、不自然な波紋が広がったかと思うと、泉を取り囲む密林がざわざわと不気味な気配を発する。エントだ！と思う前にルウは、緩めかけたキャップを締めて、立ち上がる。

「お姉ちゃん!!」

ネルもすでに気配に気がついたのだろう。両手を胸の前で固く結び、怯えたような顔をしている。ルウは、魔法杖を握り締め、ネル

の傍に戻った。いつでも魔法を唱えられるよう、ネルを守れるよう、身構える。

やがて、気配は、どんどん濃くなっていき、蔦の茂みが蠢いた。

28. ネルとルウ（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せください。

29. エントの長

「緑の精霊と契約の名の下に、具現せよ。汝、疾風の槍となれ……
ヴィント・ランツェ！ フェストレーキング 固定！」

一度固定した魔法を魔法杖の上で待機させる。「固定応用」と呼ばれる魔法手技の、さらに応用である「待機応用」。ルウは、魔法手技の中でも、これら固定応用を得意としていた。必要に応じて、魔法を組み合わせ、使い分ける。まさに、魔法の極意中の極意。これを達成できた先に、魔法使いたちにとって憧れの奥義「昇華応用」が存在しているのだ。

世界で一番有名な魔法使いになる。恥ずかしいから、アルサスたちには言っていないし、もちろん誰にも口にしたことはないが、ルウのひそかな「将来への夢」がその魔法には込められている。アルサス不在の今、ネルをちゃんと護らなきゃいけない！

全身に滞留する魔力を、その細い腕を通して、魔法杖の先端へと集中させる。待機している三本の風の槍は見る見るうちに太くなり、蠢く茂みに照準を絞った。

「すべての魔法を解除する！ アレス・フライセン！」
敵を射抜けとばかりに、ルウは叫んだ。

「わーっ！！ ちよつと待った、待った！！」

突然聞き覚えのある焦り声。慌てて、魔法杖を振り下ろし、風の槍を地面へと激突させる。舞い上がる土煙。その煙を掻き分けるように現れたのは、声の主、アルサスとフランチェスカだった。

「俺たちを殺す気かよっ！ ルウっ！！」

髪の毛や衣服、甲冑の隙間に、大小の葉っぱをつけたアルサスは、手に抜き身の剣を握っていた。何かにおわれ、息を切らせながらこちらへと走ってくるフランチェスカも同様だ。そして、その何かは、推察するまでもなかった。なぜなら、アルサスたちが現れた茂みを突き破るように、鳶がその腕を伸ばして追いかけてきたのだ。

「無事だったんだね、二人ともっ!!」

ルウは、アルサスの怒声を受け流し、心細さに固まりかけていた心を解いた。だが、再会を喜んでいる場合ではない。アルサスたちを追いかけてきた「おまけ」は、タコの足か蛇のような鳶の食指をうねうねとさせながら、一定の距離を保ち、あっという間に四人を取り囲む。

「なんだか、ここへ追い込まれたような気がする……」

と、眉間にしわを寄せ、鳶の食指を睨みつけるアルサス。アルサスとフランチエスカがここへたどり着いたのは、ほとんど偶然だったことをルウたちは知らない。獣道で、エントの襲撃を受けたアルサスたちは、姿のはっきりしない敵と真っ向勝負を挑むのは、危険だと判断して、一目散に逃げ出した。そうして、獣道はずれ、茂みに足を絡ませながら、たどり着いた先が、この泉だった。それは、まるでエントに導かれたように思わなくもない。

そんな、懸念を頭の隅に抱えつつ、

「ネル、怪我はない？」

と、アルサスは不安そうな顔をするネルに問いかけた。

「はい、ルウがわたしのこと守ってくれましたから」

「そっか、でかしたぞ、ルウ」

ちらりと、アルサスの視線がルウの方に移る。その視線が信頼を帯びていることに気づいたルウは、少し照れくさそうに「まあね」と、鼻頭をかいた。

「無事を喜ぶのは、まだ早いわ。結局最初に戻っただけよ」

と、フランチエスカ。たしかに、別れ別れになる前に戻っただけだ。どうしたらいいのか、エントたちの姿もはっきりと捉えられないまま、囲まれたアルサスたちにそれを突破する手立てがない。

「あのさ、気のせいかもしれないけど、エントたちはわたしたちを傷つけるつもりはないみたい。なんだか、じゃれ付いているだけって、感じがするんだ」

ルウが述べた意見には、アルサスもフランチエスカも同意すると

ころがあつた。どうにも、気配は不気味だが、明確な悪意がない。追いかけてはくるが、傷つけようとする意志を感じられないのだ。だから、アルサスは、「この泉へ導かれた」と思ったのだ。

無論、そう思う根拠は他にもある。

「案外、ルウの言う通りかもな……。なあ、エントの親玉さんよ！」突然、アルサスの剣があらぬ方に向いた。切っ先が狙うのは、泉の真ん中に立つ、巨木の方である。

「さつきから、ずっと視線を感じてた。あんたが、エント族の長老、ハイ・エンシェントだろ？」

物言わぬはずの巨木に、アルサスが声をかける。その光景だけ見れば、どこか頭でも打ったのではないかと心配になってしまいが、ルウたちの視線は一樣に、奇行のアルサスではなく巨木に向けられていた。

よく見れば、巨木の太い幹のウロは、人の目、口、鼻と同じような位置に開いている。むしろ、巨木の幹に顔が描かれているようだ。木がしゃべるはずがない、そんな風に思っていたルウとネルが見落とすのも無理はない。その顔は、人間の何十倍も大きかった。

「なんだ、びっくりさせてやろうと思っておったのに、もう気づいていたのか」

一番下部のウロ……即ち巨木の口から、まるで地鳴りのような声が聞こえてくる。人間でたとえれば、老人の声に近いが、その音量はあまりに大きく、あたりの空気すべてがぶるぶると振るえ、腹の中までかき回されてしまいそうだ。

「者ども、客人に粗相をするでない、下がれ」

長らしい口調で、巨木がアルサスたちの背後に叱責した。すると、鷲の食指たちは、何も言わずしゅるしゅると、茂みの奥深くへと戻っていく。ほっとするのもつかの間、再び腹の奥に響く声が聞こえてくる。

「一族の者が失礼をした。ここへそなたたちを連れてくるよう頼んだのだが、三ヶ月ぶりの客人に、喜び勇んで、乱暴なことをいたし

たやもしれん」

「それは、それは、手厚い歓迎で。こちらら、泥まみれ、葉っぱまみれだ。おかげで、口の中まで泥と葉っぱの味がする」

ちよつと喧嘩腰にも思える、アルサスの皮肉。しかし、アルサスの剣はすでにその切っ先を下ろしていた。

「許されよ、旅の子らよ」

巨木は、そう言うのと、頭上の枝葉を振るわせた。どうやら、頭を下けているつもりなのだろうか。しかし、びっくりさせてやろうと思った、と言うからには、驚かせる気は満々だったに違いない。厳格な口調とは裏腹な、巨木の性格を見て取ったアルサスは、ふとトンキチやバセットのことを思い出した。

ハイ・エントエントも、十人十色ってことか……。

「俺たちのことを客人と言うからには、襲うつもりはないんだな？」アルサスが問いたですと、ウロの口から「如何にも」と返事が返ってくる。ようやく、警戒を解くフランチェスカとルウを目の端に捉えながら、アルサスは剣を鞘にしまいこんだ。

「我が名はローアン。エント族をまとめる、ハイ・エントエントだ。そなたたちが何者で、何のためにここに来たのか、知っておる。いや、わしは、そなたたちを待っておった」

「あの、どうして、わたしたちの事をご存知なのですか？」

ぐつと、胸に手を当てたネルが、巨木……ローアンを見上げるようにして問いかける。

「風の便り。ご覧のように、地に根を張って動けないわしらエントは、そうやって外界の情報を手にする。そなたたちのことは、エイゲルの長、ヴォールフの長、スキードの長から便りをもらった。そう遠くない日、銀の乙女が訪ねてくであろうと」

ウロの瞳、その中に目があるのかどうかは分らないが、清かなさや泉を隔てて、ネルのことを優しくに見下ろす。

「お嬢さん、そなたがアストレア天使の一人、銀の乙女だね？」

ローアンが投げかける瞳に答えるように、ネルは頷き、

「わたしは……、わたしたちは真実を知りたくてここに来ました」
そう前置いてから、ここまでの出来事を淡々と語った。ローアンは、ネルが話し終えるまで、一度も口を開くことなく、静かにネルの話に耳を傾けた。

自分が、ラクシャ村の夫婦に拾われ、娘として育てられたこと。生まれてからその日までの記憶がないこと。十六歳のその日、村に現れた「黒衣の騎士団」により、センチ・レーバンへ連れ去られたこと。そして、アルサスに助けられ、「答えを見つけよ」というバセットとトニアの言葉に従い、ここまで旅をしてきたこと。

そうして、ネルが話し終えると、ローアンは再び頭上の枝葉をざわざわと揺らした。

「銀の乙女が何者で、奏世の力が何なのか、それを知って、そなたは何とする？ 知るべきではなかった、と後悔するかもしれない。それでも知りたいというのか？」

「自分が何者で、この体に宿る『奏世の力』とは何なのか、それをわたしは知る義務があると思っています。そうじゃなきゃ、わたしを助けるために傷ついた村の人や、お父さん、お母さんに顔向けできません。ローアンさま！ どうか、教えてください」

頑なな視線をネルは投げかけた。だが、ローアンの顔はやや、困ったような表情に変わる。ネルに語りかけるべき言葉を探しているようにも見える。

そうして、息苦しい沈黙の時間が流れた。沈黙に耐えかね、業を煮やし、アルサスが一步前へ歩み出て、泉の淵から、声を上げるまで、幾ばくの時間が流れただろう。

「なあ、ローアンさんよ。トンキチ……いや、トニアにしても、あなたにしても、ウェスアの大司教にしても、どうして知るべきじゃない、なんて言うんだ？ 自分が何者か知りたい、そう思うのは当たり前のことじゃないか。自分が何者か知ることが、それほど、ネルにとって辛いことなのか？」

「どう受け取るかは、その者次第。だが、答えを知るということは

多かれ少なかれ、何かを背負うということだ。それは同時に、背負いきる覚悟がなければならぬ。だから、バセットやトニアは自らの手で、答えを見つけるように言ったのだ」

「つまり、あんたも何も教えてくれない、と言うのか？」

アルサスの声は、少しばかり棘を帯び、ローアンは沈黙を持ってそれに答えた。舌打ちをしないまでも、アルスが蹴り上げた石ころが、泉に波紋を作る。

ルミナスで空振り、ウェスアでは思うような成果を得られず、こうして遠路はるばるエントの森までやってきた。そしてまた空振りならばどうやって、その「答え」とやらにたどり着けばいい？

「銀の乙女よ、その血を受け継ぐ者よ……世界の運命を背負う覚悟はあるか？」

泉に広がった波紋が、ローアンの根にまで届くと、彼は静かにそう言った。アルサス、ルウ、フランチェスカの視線が一樣に、ネルの返事を待つ。だが、「世界」というあまりにも漠然とした言葉に、戸惑を隠せないネルは俯いてしまった。

「その力、奏世の力は、あまりにも強大な力。決して、そなたが思っているような力ではない。世界を変える力と言ってもいいだろう。それが、銀の乙女の血を引く者に与えられた使命でもある」

「使命だと仰るなら、なおさら、わたしは知りたい……。世界の運命をわたしなんかが背負えるかどうか、今はっきりとお答えすることは出来ません。でも、努力します」

顔を上げたネルの青い瞳は、泳いでなどいない。かたく頑なな意思でしつかりと、ローアンの瞳を見据えていた。先に視線を逸らしたのは、ローアンだった。ウロの瞳を泳がせ、ローアンは、深く長い溜息を返す。

「ここへ来たそなたを、わたしは説得するつもりだった。人の目に触れない、誰の目にも留まらない場所で、ひっそりと生きてもらえるよう。だが、遅かれ早かれ、『約束の日』が来ればその力はやがて本当の目覚めを迎える……」

まるで、自分に言い聞かせるかのように、そう言ったローアンは、幾重にものびる枝のひとつをネルの眼前に伸ばした。すると、泉のほとり、色とりどりの花の間をひらりひらりと舞い踊っていた青い蝶々がその枝の先端に、静かに止まる。

「本当にそなたが、世界の運命を背負う努力をするというなら、その言葉とその瞳、信じよう。ここより三クリーグ先、森の最奥地に眠る『遺跡船』と呼ばれる場所がある。そこに求めるものの一端があるだろう。行くが良い。くわしい場所は、このルリボシタテハが教えてくれる」

わずかな木漏れ日に照らされると、瑠璃色に輝く翅^{はね}をゆったりと羽ばたかせる、物言わぬ蝶。

「ありがとうございます」

そう言っ、ネルが差し出す右手の人差し指に、ルリボシタテハは移る。

「銀の乙女。あなたの未来と、この世界の行く末に、幸福あらん事を」

ローアンは、枝を戻すと、やはり地鳴りのような声で、ネルに告げた。

29. エントの長（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せください。

30. バレッタ

こっちだよ、こっちだよ。遅れないように付いて来て。

ひらひらと、翅をばたつかせながら、行く先を先導するルリボシタテハは、まるでそう言っているかのようだった。勿論、蝶はハイ・エンシエントではなく、ただの昆虫だ。人間の言葉を理解したり話したりすることはない。そんな、蝶に導かれ、本当に「遺跡船」という場所にたどり着けるのか、少しばかりの不安はあるが、泉からの獣道は少しずつ森の最深部へと進んでいた。おそらく、その先に「遺跡船」はあるのだろう。

ただ、獣道はとても狭く、一列に連なって歩かなければならなかった。一行の先頭を歩くのは、アルサス。続いてネル、ルウの順番だ。

「もう夜かしら、空気が随分つめたくなったわ」

最後尾を歩くフランチェスカが言うとおり、時刻はすでに宵の口となっていた。歩きづらい、森の道を進むことは、本人たちが思っているよりも、時間がかかる。だが、その時刻を知ることができない。なぜなら、木々の枝葉が密集した、エントの森は常に薄暗く、かつ、空を見上げても枝葉に邪魔されて、それを確かめることが出来ないのだ。

「確かに、空気が冷たくなってきたな。ネル、寒くはないか？ 薄手のコートならあるぞ」

そう言って、ネルの目の前で、アルサスが後ろ手に、背中のリュックをぽんぽんと叩く。

「ありがたい、アルサス。でも大丈夫です。わたしよりも、ルウは寒くないですか？」

アルサスの気遣いに笑顔で返し、ネルはルウの方を振り返った。すると、ルウはやや興奮ぎみに、頬を紅潮させ、なにやら手帳のようなものに書き記している。

「歩きながら、よく書きものができるわね。何を、そんなに熱心に書いているのかしら？」

と、フランチェスカが背後からルウの手帳を覗き込む。子どもらしい雑然としたクセのある文字と、なにやら画才のない絵。それでも、本人にとっては、大事なもののらしい。

「ローアンの事を書いているの。他にも、アルサスから聞いた、トニア、バセットっていう魔物のこと、あと、ガムウ。世界には、七匹のハイ・エンシェントがいるって言われてる。その生態や存在は、まだ不透明なことが多いんだ。だいたい、目撃した人も少ない」

説明しながらも、ルウの手は止まらない。ローアンの事を思い出しながら、その姿や声、あらゆる印象を事細かに記していく。

「でも、ボクはそのうちの二匹をこの目で見た。アルサスはボクをからかって嘘吐いてる可能性もあるけど、ネルお姉ちゃんは嘘なんか吐かない。だから、少なくとも、四匹のハイ・エンシェントがこの世界には実在している。これってすごい発見だよ！」

「嬉しそうですね、ルウ」

にこやかなルウの姿に、少しだけネルの顔にも安堵が浮かぶ。

「うん！ これを学校に帰ったら、ちゃんとレポートにするの。きっと、先生たちびっくりすると思うよ。それを考えたら、ちっとも寒くなんかない！」

そういいながらも、ルウぶるぶると体を振るわせる。寒くない、などと強がって言っても、春の夜の風は体温を奪っていく。アルサスは溜息交じりに、足を止めると、

「ネル悪いけど、リュックからコートを出して、人のこと嘘つき呼ばわりするクソガキに、着させてやってくれないか？」

と言った。当然のように「いいよ、コートなんて！」とルウからの反論が返ってくるが、ネルはなんだかんだといって、お互いに仲間として信頼を寄せている二人の事を苦笑交じりに見ながら、アルサスの背中のリュックから、薄手のコートを取り出した。センチ・レーバンでよく見かける、雨合羽のようなデザインの防寒コートだ。

くすんだ草色は、雪のよく振る場所での視認性を高める効果があるらしいが、その色と相まってとても地味である。

ネルはしゃがんで、ぐずるルウにそのコートを着させてやった。

「ネルはいいお姉ちゃんねえ。なんだか、あなたたち三人兄弟みたいよ」

「じゃあ、一番年上のあんたは、お母さんってか？」

目を細め、クスクスと笑うフランチェスカに、アルサスは冗談交じりに返した。

「あら、そうかもしれないわね」

勿論、三人の母親というには、フランチェスカはまだまだ若い。

しかし、あえて否定の言葉を返してこないところを見ると、まんざらでもないようだ。

エントの森で別れ別れになってしまっただけで、アルサスはどこかフランチェスカを信用していない節があった。しかし、いつの間にか、すこしはかり打ち解けているような雰囲気、ネルは感じていた。

共に旅をする者同士が、家族のような親近感を持つことは、とても大事なことである。言い換えれば、何かしらの絆を持っているなければ、たちまち危険に飲み込まれてしまうことだってある。とくにエントの森のような、そのほとんどが未開の地で、常に危険が潜んでいるかもしれないような場所では。

「わたし、ラクシャ村に、妹がいるんです。わたしは、拾われっ子だから、妹とは血が繋がっていないんですけど……。優しくて、とても明るくて、時々ちょっと生意気で。ルウを見てると、そんな妹のこと思い出します」

コートのボタンを留めてやりながら、ネルは恥ずかしそうにするルウと、思い出の中のメルを重ね合わせるように言った。メルにもよくコートを着せてやった。高地にあるラクシャ村では、夏が近づくまで朝夕の気温は低く、油断していれば簡単に体調を崩してしまいかねない。子どもは風の子とはよく言うが、早く遊びに行きたいと、うずうずするメルを止めて、コートを着させてやったのは、そ

れほど遠い思い出ではなかった。

「妹って……ボク、男の子だよ？」

「分かってますよ。それに、メルより、ルウの方がずっとお利口さんです」

一番上のボタンホールにボタンを通し終えたネルはそう言って、ルウに微笑んだ。

メルは、今もどこかで元気にしているだろうか？ 黒衣の騎士団の凶刃から逃れることは出来ただろうか。無事でいてくれることだけを信じて、毎晩の眠りにつくネルにとって「もう、メルはこの世にいない」と暗示するようなあの夢は胸の奥を抉られる気分だった。そんな暗い気持ちを、みんなには見せたくない。見せちゃいけないんだと、ネルは気を張って笑顔を作る。

だが、そんな笑顔、アルサスはお見通しだということくらい、ネルにも分かっていた。

「そう言えば……フランと二人っきりの時、こんなものを見つけたんだけど」

不意に、何かを思い出したように、アルサスが自分のズボンのポケットを探った。中から取り出したのは、小さなべっ甲のバレッタ。ガモーフの古い言葉で「幸福」を意味する、カチュアの模様が丁寧に掘り込まれたものだ。

「これ、ラクシャ村のものかと思って拾ったんだ。ネル、何か心当たりない？」

そう言って、アルサスが差し出したバレッタを受け取ったネルは驚きを隠せなかった。

「どこで、これを拾ったんですか？」

声の上擦ってしまう。体中が震えてしまう。

「どこって、こことは別の獣道をずっと下った先だよ。それを拾ったすぐ後に、エントに群がられて、正確な場所は思い出せないけど」

バレッタを両手で大事そうに抱きしめるネルの姿に、アルサスは

少し怪訝な顔をする。

「これ、メルのこと……妹のバレッタです」

ネルの頬を一筋の涙が伝い、バレッタを抱きしめるネルの手のひらの上に雫を落とした。

「去年のお誕生日に、わたしが村長さまから教わって作ったんです。」

「ええっ!？」

今度は、アルサスたちが驚く番だった。偶然見つけたバレッタは、偶然にもネルが最も心配してやまない、妹のもの。偶然にしては、出来すぎぐらいの偶然だ。ネルは、小さなバレッタを抱きしめながら、心の中で、この偶然が、アストレアさまの導きだと信じたい、そう思った。

「あの日も、わたしが黒衣の騎士団に連れ去られたあの日も、メルはこれを身につけていました……とても大事にしてくれて」

「もしかして、ローアンが言っていた、三ヶ月前の客人って、ネルの妹さんのことだったのかしら？」

と、フランチエスカ。そういえば、ローアンがそんな事をいつていた気がする。だが、その時はまさか、その客人というのが、メルのことだったなんて、夢にも思わなかった。

「これがエントの森に落ちてたってことは、メルはラクシャから逃げ果おおせたってことだ。それで、この森を抜けてどこかに向かったんだ。エントたちが危害を加えるとは思えない。きっと、ううん、必ずメルは生きてる」

そっと、アルサスの温かな手のひらがネルの震える両手を包み込む。優しい暖かさが心にしみこんでくるような気がする。

「そう、ですね。そうに違いありませんよね!」

泣き顔のネルに、ややわずかな希望の光が少しだけ灯った。メルが生きている。それだけでも、胸の奥が熱くなる。また涙がこぼれ始める。だけど、その涙は悲しみの涙ではなく、嬉しさの涙だ。

「でもでも、どこかってどこへ？」

丈の合わないコートの袖をまくりながら、ルウが疑問を口にする。
「まったく、空気読めよ、ルウ……」

呆れながらも、アルサスは頭の中の地図帳をめくる。エントの森の周りには、ウェスアのような大きな都市は存在しない。森の外には、ラクシャのような小さな村がいくつか点在している。そのどこへ向かったのか、いや、たどり着いたのかを知る術はない。

「国境を越えた先にあるセンチ・レーバンの『城郭都市ハイゼノン』よ」

フランチェスカが言う。彼女もまた、頭の中に地図を広げていたのだろう。ギルド・リッターという国境を越えて活動する組織に所属していた彼女は、アルサスよりも地理に詳しかった。

「どうして、そう言いきれるんだよ、フラン」

「いくら、ラクシャが小さな村だとしても、人が住む村落が襲われた。それは、ウルド大司教の反抗と同じぐらい大事件のはずよ。ガモーフ神都がどのくらい、ネルを取り巻く事情を知っているのか、わたしには分からないけれど、少なくとも、事件の調査のためにラクシャへ派兵するはず。派兵が行われれば、その情報はギルド・リッターにも自然と流れてくる」

「じゃあ、神都は、黒衣の騎士団がラクシャを襲って、ネルを拉致したことは知らないっていうのか？」

「さあ、どうかしら。すくなくとも、メルちゃんがガモーフの街に逃げ込んだとすれば、情報は必然的に神都へも伝えられる。お大臣たちが、いくら無能だったとしても、彼らだって遅かれ早かれ、センチ・レーバンの関与に気づくはずだわ」

「だから、ここから一番近い、城郭都市ハイゼノンへ……？」

うーんと、アルサスは顔をしかめる。フランチェスカの言わんとすることは分かるのだが、可能性のひとつしかない。広い世界で塵のように小さいメルバレッタを、アストレアの導きにしろ、偶然にも見つけたことだけでもすごいことだが、どこにいったかも分からないメル本人を捜し当てることは、もっと難しく思えた。

「行ってみる価値はあるんじゃないかしら？」

「しかし、それは、ちょっと突飛すぎやしないか？ センテ・レーバンの辺境で最も大きな都市、ハイゼノンには、ガモーフ人を毛嫌いするヤツもいる……」

ルウの顔をちらりと見つ、言外に「気が進まない」という顔をするアルサス。ハイゼノンへ、ガモーフ人であるルウや、ガモーフの民族衣装を纏ったネルを連れて行く事を渋っているというよりは、センテ・レーバンそのものへ行く事を嫌がっているようにも見えた。ネルはふと、ルウの言葉を思い出した。アルサスは、自分の事を語ってくれない……。センテ・レーバン人であることと、家を飛び出してレイヴンになったこと。ネルが知るアルサスのことはそれくらいだ。

「アルサス……わたし、わがままばかり言っでごめんなさい。でも、メルがそこにいるかもしれないなら、わたし、ハイゼノンへ行きたい」

「メルがハイゼノンへ行っただってという保障は何もないんだぞ」

アルサスはそういいながら、難しい顔をして仲間の顔色を伺うように視線をめぐらせた。しかし、ルウもフランチエスカも、反対する意志はなさそうだ。

「わたしは、異論ないわよ。だいたい、わたしの勝手であなたちについてきてるんだから」

「ボクも。古代遺跡の上に造られたっていう、ハイゼノン。一度見てみたかったんだ」

二人は、そう言って仲良く顔をあわせる。

「なんだよ、お前ら。そりゃ、俺だってメルを探すのは反対したくないけど……」

アルサスはひとり、腰に手を当てて、困ったように溜息をつく。

と、その時、なかなか追いかけてこないアルサスたちを心配したのか、ルリボシタテハがひらひらと舞い戻ってきて、アルサスの目の前を横切った。

なにしてるの？ 早く来ないと置いて行っちゃうよ。

とても言いたげに、瑠璃色の翅を羽ばたかせ、虹色の燐粉を撒いていく。アルサスはそれを目で追いながら、蝶の迎う先に踵を返した。

「今は、遺跡船へ向かおう。ハイゼノンへ行くのはそれからだ」

あきらめたというよりは、自分の都合を押しとどめたかのようになり、アルサスは背中を向けたまま、そう口にした。小声で、ルウとフランチェスカが「やったね」とネルに囁く。

「はい！ ありがとうございますっ！！」

アルサスの言葉に、ネルは潤んだ瞳を拭って言った。

30. バレッタ(後書き)

ご意見・感想などございましたら、お寄せください。

31. 鉄の鳥

ルリボシタテハが導いたその場所は、とても大きく開けた広場であった。エントの森に入ってまだ半日ほどしか過ぎていないというのに、久々に夜空を見上げたような錯覚さえ覚えずに入られなかった。それくらい、エントの森は圧迫感があり、この広場は、広大な砂漠にポツンと現れたオアシスのようだった。

だが、そこはオアシスというには、いかにも奇妙な場所。広場の中心には、見上げるほど巨大な鉄の塊がその半分を地面にうずめるが如く、鎮座していた。表面は赤茶けた錆におおわれ、ところどころ、風雨によって朽ちかけている。それこそが「遺跡船」と呼ばれるもののだが、船というよりは、鉄で出来た鳥を思わせる。よく見れば、鉄の塊は、鳥が翼を広げたまま力尽き、横たわっているかのように見える。

それが、「まるで空から落ちてきたみたいだ」という印象を、遺跡船を目の前にしたアルサスに与えた。もっとも、鳥というには、その体軀はトンキチの何十倍もあり、巨軀が自慢のエイゲル族も真っ青だ。そもそも鉄が空を飛ぶなど、魔法の力を以ってしても不可能だ。子どもでも理解できる「ありえない」ことのひとつだ。だが、その子どもが、キラキラと目を輝かせて、興奮気味に声を弾ませている。そう、すっかりコートに馴染んだルウだ。

「エントの森に、こんなものがあったなんて！ ルミナスの研究者たちも、知らないことだよ！ せ、世紀の大発見っ！！」

そう言うと、ルウはボールが飛び跳ねるように、遺跡船へと走り出した。彼の背中を、好奇心と探究心がぐいぐい押しているのが、端から見てもよく分かる。

「待ってください、ルウっ！！ 危ないですよっ！！」

慌ててルウを追いかけるネル。二人は、あっと言う間に、遺跡船の側面へとたどり着く。一方、アルサスとフランチェスカは、慌て

る様子もなく、遺跡船の全景を見上げながら歩いた。

「思ってたよりも、大きいわね……」

言葉少なに、フランチエスカがその驚嘆を口にする。

「こいつは、一体何なんだろうな？ 神々の時代のものかな？」

アルサスは、遺跡船の側壁を触りながら、早速調査を始めたルウト、それを心配そうに見つめるネルの姿を眺めつつ、フランチエスカに尋ねた。もちろん冗談のつもりで「神々の時代」などといったつもりだったのだが、

フランチエスカはしばらく、小首をかしげてから、

「そうかも知れないわね」

と真剣な顔つきで返してきた。

「なんだよ、冗談に付き合ってくれるわけ？」

「違うわよ。超技術の産物かも知れないってことよ。ダイムガルドでは、ヨルンの戦いの後、本国へ帰還した人たちが主導となって、

『神々の時代』の超技術オーバーテクノロジーの軍事転用を研究しているのよ」

「超技術って何？」

聴きなれない言葉に、アルサスの頭に疑問符が浮かぶ。

「わたしはご覧の通り、学者じゃないし、あの後すぐにギルド・リッターに入ったから、くわしいことはよく知らないわ。ただ、神々の時代には、今よりもっと進んだ技術があったって言われてるのよ。もっとも、ルミナスの研究員や魔法使いたち、それに、各国の博士たちはそれを否定しているけれど」

「呆れたものだ……リアリズムの権化みたいな軍隊が、実在したかどうか分からない『神話』にすぎるなんて」

「事実はどうであれ、少なくとも、センチ・レーバンにも、ガモーフにもこれだけ大きな鉄の建造物を作ることは出来ない。遺跡という名前からも、これが神さまの超技術だって考えた方がしっくり来るわ。それに……、少なくとも、ローアンは、ここに『奏世の力』を知りたければ遺跡船へ行け、と言ったのよ。ベスタの言い伝えで神々の黄昏を治めた女神アストレア。そのアストレアに仕えた天使

の一人が銀の乙女。銀の乙女は、今わたしたちの前に実在している」
フランチェスカの視線の先には、ネルの美しい銀色の髪が、月影に照らされて輝いている。

「神話が真実か否かに関わらず、この遺跡が神々の時代のものであるとしても、不思議はないわ。もつとも、わたしはまだネルの力を見せてもらっていないけれどねえ」

そう言って、フランチェスカはからからと笑う。彼女自身、この鉄の鳥の正体に関して、興味があるようだ。そして、ネルの華奢な体に秘められた力のことも。しかし、彼女の言うとおり、彼女は学者ではない。その一方で、魔法使いギルドの一員であり、学者の卵とも言えるルウは、まるで歳相応の男の子がおもちゃを手にした時のようにはいしゃいでいた。

そんなルウの元にアルサスは歩み寄った。

「何か見つけたか？」

と、尋ねると、ルウは鉄の鳥の肌撫でるように触りながら、「中に入れそうなんだ」とこんこんとその肌を叩いてみせる。響く鉄の音が、その体内へ吸いこまれて行く。どうやら、遺跡船の内部には、広い空間が広がっている。

「でも、入り口みたいな場所はないし、扉もないんだ。外側には、何か手がかりになるようなものも見当たらないし」

うーん、とルウはあたまを悩ませる。だが、悩むのも楽しいといった顔だ。

「わっ！」

不意に、ルウの傍でルウに倣って鉄の鳥の肌に触れていたネルの指先が白い光を帯びる。すると、ネルの小さな悲鳴と共に、ちょうどその突起の真下に、手のひらが入るくらいの小さな扉が開いた。驚く一同。まるで、ネルに反応して、開いたかようだ。そんな扉の中には、白い吊革状の取っ手のようなものがあつた。

「アルサス、ちょっとその取っ手、引いてみてよ」

ルウがアルサスに目配せをする。得体の知れない取っ手に触れる

勇気がないわけではなく、背の低いルウの手が取っ手に届かないのだ。

「仕方ないな。みんな、下がってろ」

アルサスはそう言うと、ごくりと喉を鳴らして、白い取っ手にてをかけた。どうやら取っ手は手前に引くことが出来そうだ。トラップの類である可能性も否定は出来ない。アルサスはこの手の遺跡と呼ばれる場所へ来るのは初めてだが、予備知識として、遺跡には侵入者撃退用の罠が張られているものである、という認識を持っていた。

この取っ手を引けば、いきなり矢が飛んできて来たり、固定魔法の封印が解かれて、魔法弾が飛んでくると言う恐れもある。しかし、迷っていても仕方がない。ルウの言うとおり、遺跡船の中へ入るための入り口がどこにも見当たらない。外側に何もないとすれば、『奏世の力』を知るための手がかりは、中にあると思った方がいいだろう。

ええい、ままよ！ とばかりに、アルサスは思い切って取っ手を引く。

何かが外れる音。続いて、静かな振動が遺跡船を包み込む。慌てて、アルサスとはってから手を離し、遺跡船の外壁から離れた。なおも振動は続き、やがて外壁に長方形の亀裂が入る。そして、亀裂の内側がこちら側へと倒れこむように開いた。

取っ手は罠のスイッチではなく、遺跡船内部への扉を開くノブだった、と悟るアルサスたちの前にぽっかりと、エントランスが口をあける。人一人がくぐるのがやっとという大きさだろうか。

「中へ入ってみよう」

と、一番最初に言ったのはルウだった。足元に転がる、手ごろな大きさの枝切れを拾い上げ、その先端に、ごくごく力を弱めたフランメの魔法を着火する。簡易の松明だ。^{トーチ}

「待て、俺が先頭に行く」

アルサスはルウの手から、松明を奪うと、それを翳して、扉より

内部へと踏み込んだ。

遺跡船の内部は、遺跡と呼ばれるだけあって、随分と埃っぽい。ともすれば、鼻腔粘膜がくすぐられて、くしゃみが出てしまいくらいになる。ちょうど、入り口からは狭い通路になっており、アルサスたちは一列に並んで、奥へと歩み進んだ。

「中は錆びていないんですね……」

アルサスの後ろにぴたり寄り添うネルが、壁や天井を見上げる。どうやら、内部は鉄製ではないようで、どこも錆び付いてはいない。埃にまみれている以外、とてもきれいな保存状態だった。

「石じゃないみたいだけど、とっても硬い。ミスリルかなあ？」

興味と好奇心が尽きないルウは歩きながら杖の先端で、壁を叩いたり、靴のかかとで床を蹴ったりしてみた。金属特有の、甲高い音は聞こえてこないが、その感触は金属のように硬く冷たい。

「金属でもなさそうよ。もっと別の材質……、神さまの遺産というよりは、人工物に近いわね」

フランチェスカは、均一に角のたった壁や、あちこち壁面に描かれた奇妙な文字を指差す。その文字を、ルウは「魔法文字だよ」と付け加える要に言った。

「魔法文字は、世界でもっとも古い文字。その昔、神さまが使っていた文字だと言う学者もいるよ。ルミナスでも解読研究が行われている。少しくらいなら、ボクにも読めるよ。例えば……」

眼前の壁に書かれた文字を指し示し、

「睡眠……保管……部屋？」

幾何学模様には見えない文字列を、ルウが読み上げる。しかし、その脈絡のない単語の連続に、四人は一樣に小首をかしげた。

「何だよそれ。神さまの寝室だとも言いたいのか？」

アルサスが鼻で笑う。

「だって、そう書いてあるんだもん。そんなことより、行き止まりだよ、ここ！」

ぷうっ、と頬を膨らませるルウ。彼の言うとおりに、周囲は壁に囲

まれた行き止まりだ。しかし、ここまで何度か曲がり角を横切りはしたものの、通路には分かれ道らしきものはなかった。

「部屋ってことは、この先に部屋があるってことなのかしら？」

フランチェスカが再び、ルウの読み上げた文字の書かれた壁を指差した。

「でも、ドアノブもないし、さっきの入り口みたいに取っ手もない。こいつは間違いなく行き止まりかもな」

アルサスは壁に手を触れて見るが、亀裂が入りそうな隙間も見当たらなかった。思わず、溜息がこぼれてきてしまう。ローアンは何のために、こんな何もない場所へ導いたのか。冗談なら性質の悪い悪戯だ。神々の時代の遺跡を見せて欲しいのではなく、アルサスたちが知りたいのは、ネルの命運の鍵を握る「奏世の力」と「銀の乙女」の真実。それが、ここにあるものとはばかり思っていたアルサスは、目の前に現れた行き止まりに、落胆の色を隠せなかった。

「あの、ちょっと」

ネルが、アルサスの脇から、ひょいっと手を伸ばす。そして、ネルの手のひらが魔法文字の書かれた壁に触れる。すると、気ほどと同じように、ネルの手のひらが白い光に包まれた。「やっぱり」とネルが呟く。そのニュアンスは、どこか「知っていた」「分かっていた」とでも言いたげに、アルサスには聞こえた。

ぷしゅっと空気の抜ける音がして、壁がゆっくりとせり上がっていく。

「す、すごいっ！　ネルの手のひらに反応して、壁が勝手に開いた！」

ルウが一段と目を輝かせる。

壁の向こうは、フランチェスカが推察したように、広々とした部屋が広がっていた。背丈の三倍近い天井高、悠に走り回れるほどのフロアの広さ。一番奥の壁面には、大きな台座ととても巨大な石版らしきものが鎮座している。そして、両側の壁には、棺を思わせる箱がいくつも並んでいた。

「不思議な部屋ね。センチ・レーバンの様式とも、ガモーフの様式とも、もちろん、ダイムガルドの様式とも違う」

部屋中を見回しながら、フランチェスカが呟いた。奇妙な室内は、居辛いような環境ではなく、むしろ静かで温度も一定に保たれているのか、居心地がよく感じてしまう。それが、かえって奇妙な感覚を四人に与えていた。

「墓所かしら？ まさか、神さまのお墓じゃないわよね？」

「多分……違います」

フランチェスカの疑問に、ネルが冷静な声で答えた。驚いた、アルサスとフランチェスカはネルを振り返った。ネルは両手を固く結び、棺のような箱を見つめる。

「何か知ってるのか、ネル？」

「分からないです。でも、わたし、この場所に見覚えがあるんです。ずっと、ずっと昔。この場所に来たことがあるような」

「既視感ってやつ？ それとも、ネルが忘れている記憶……」

アルサスの言葉に、ネルは頭を振った。ネルには、リュミレ夫妻に拾われる前の記憶が欠落している。自分がどこで生まれ、誰の子であったのか、それすらわからないのだ。もしかすると、その欠落した記憶が、ネルに既視感を与えているのかもしれない、とアルサスは思った。

「これ、なんだろうね」

いち早く石版の台座に駆け寄った、ルウが言う。ひとまず、ルウの元に駆け寄ったアルサスの目に飛び込んできたのは、これまた奇妙な台座だった。

普通、遺跡と呼ばれる場所にある、石版の台座は、きれいな装飾が施してある。そうした装飾が、トレジャーハンター盗掘者に狙われることも少なくはない。そして、石版には様々な文章が刻まれているものだ。もしも、ここが墓所だとしたら、石版にはここに埋葬されている遺体の、功績や生きた証が書き記されていなければならぬ。

しかし、石版には何も書かれていない。そして、台座には宝石や

金銀の装飾など施されていない代わりに、小さなタイルがびつしりと並んでいた。

鉄で出来た鳥のような遺跡、ネルが触れると勝手に開く扉、棺の並べられた部屋、何も書かれていない石盤、タイルが敷き詰められただけの台座。あまりにも、理解に苦しむ光景には、さすがのルウも頭を悩ませてしまう。

「ええい、ままよ！」

まるで、アルサスの真似をするかのように、ルウが台座のタイルに触れた。すると、突然、タイルが赤く光り、点滅を始めた。

『Warnung! Unser Bote hat einen
Eindringling. Wenn ich prompt
die Geburt und die Abstammung
ver?ndere und nicht falle, en-
tferne dieses!』

女とも男とも、大人とも子どもとも似つかぬ声が、何処から部屋いっぱいに響き渡る。つづき、耳を劈く音が鳴る。危険を知らせるための音のようだ。

「何!? 何をしたんだ、ルウっ!!!」

アルサスが慌てて叫ぶ。音は次第に大きくなっていくばかり。ルウはもう一度、タイルに触れてみたが、二度とそれが光ることはなかった。

「何かくるわよっ!!!」

部屋の入り口に向かって踵を返したフランチエスカの声にあわせるように、部屋の扉が開いたときと同じように、空気の抜ける音がして閉まる。さらに、同時に部屋の中心部の床に三箇所、丸く穴が開いた。

アルサスは剣を引き抜き、ネルを自分の背に隠す。ルウはタイルをあきらめて魔法杖を構える。

足元から伝わる小さな振動。そして、穴の中から、出現したのは、アルサスたちを驚愕させるものだった。外見は蜘蛛を思わせる。も

つとも、狼ほどの体軀をしたそれは、もはや蜘蛛ではない。鉄で出来ていると思われる逆円錐型の胴体からは、四本の足が生え、そしてその胴の中心に、血のような真っ赤な瞳がひとつ。

「魔物か！？　こんなやつ、見たことがない！！」

アルサスたちの知識では、それを魔物と形容するほかなかった。しかし、どう見ても生物には見えない。しかし、生物でないとしたら、それは何なのだ！？

三匹の鉄の魔物は、金属音の足音を響かせ、ゆっくりとこちらへ歩み寄ってくる。無機質な敵意を露にしながら……。

31. 鉄の鳥（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せください。

32. 鉄の魔物

バチバチっ！ 円錐形を逆さにしたような胴の頂点にある、黒鉄色の棒。その先端は、槍のようになっていた。それが武器であることは容易に想像できたが、まさか、火花を散らすとは思ってもしなかった。ただの槍ではない。そう察したアルサスは、じりじりと迫り来る鉄の魔物に、たじろいだ。

相手は何者なのか分からないことは、ひどく戦いにくい。それは、十年も前から戦いに身を置くフランチェスカも同じだった。うかつに手を出せば、反対にこちらが傷つけられてしまう可能性もある。それは、経験があればあるほど、用心深くなるのと同じだ。

「ネル、あいつに見覚えは？」

アルサスは、背後に隠れるネルに問いかけた。この奇妙な部屋に見覚えがある、というのなら、あの鉄の魔物のことも何か知っているかもしれない、と淡い期待を抱いたが、ネルは頭を左右に振り返る。

「ごめんなさい……」

「なあに、ネルが謝ることじゃないよ。どうせ逃げ場もねえ以上、まとめて、一気に片付けるっ！！ ネルは下がってろ。ルウ、派手な魔法は抑えろ。フラン、行くぞっ！！」

アルサスの掛け声に、フランチェスカとルウは彼の方に視線を送りつつ頷いた。

まず、剣と槍を携えたアルサスとフランチェスカが、鉄の魔物に飛び掛る。その背後から、ルウが魔法の言葉を口にする。現れたのは、土の矢「エア・デ・プファイル」の魔法である。ただし、アルサスに釘をされたとおり、込める魔力を最小限に抑え、矢の数は三本にとどめる。出入り口を封鎖してしまったこの部屋は、密室状態。いくら広い空間とはいっても、あまり派手に魔法を放てば、味方にまで被害を与えかねないのだ。それは、憂慮してしかるべきこ

とだ。

ルウの魔法杖から飛び出した土の矢は、そのまま、アルサスとフランチェスカの脇をすり抜け、寸分たがわぬ精度で、鉄の魔物に直撃する。鈍い音が鳴り響いたものの、相手は鉄で出来ている。その硬度は魔法で生み出された土の矢を遥かに凌いでいる、つまり魔法が簡単には通用しないことくらい、ルウにもわかっていた。しかし、彼の魔法のおかげで、一瞬鉄の魔物たちがひるむ。

その隙を、突撃するアルサスとフランチェスカは見逃さなかった。剣を振り上げ、槍を繰り出す。金属と金属がぶつかり合う音。わずかに、火花が散った。

「か、硬ってえっ！！ 何だこいつらっ！！ ただの鉄の魔物じゃないぞ！」

両腕に痺れを感じたアルサスは、剣を取りこぼさないようにしながら、後ろへと飛びのく。

「これじゃあ、わたしたちの武器が刃こぼれするだけね」

槍を打ち据えたフランチェスカも顔をしかめた。

鉄の魔物は何も言わず、ただ無機質に獲物を狙い、一步步アルサスたちを追い詰めていく。真っ赤な瞳が気味悪い。だが、それ以上鉄の足音が恐ろしい。

剣も魔法も効かない魔物。そんなものが、この世に存在していたことよりも、突然舞い降りた危機に対処する術を、アルサスたちは必死で考えた。しかし、上手い手段が見つからない。まるで、魔物の餌場に迷い込んだ気分だ。ただ、眼前の鉄の魔物が捕食するようには見えない。そもそも、捕食するための口が存在していないのだ。ならば、何のために自分たちを襲う？ 遺跡を守るためか？ それとも、遺跡に迷い込んだ人間を殺すためか？

いずれにしても、目的の不透明な殺意だけが、真っ赤な一つ目と共に、近づいてくる。どこか、弱点はないものか……。アルサスは、真っ赤一つ目を赤い瞳で睨みつける。

「こなくそっ！」

と、突然アルサスは何を思ったのか走り出した。そして、鉄の魔物の前で、躓いたかのようにしゃがむと、剣を勢いよく振り回した。狙いは、足元。

予期せぬその足払いに、鉄の魔物は対応することが出来ず、バランスを崩した。

「今だ、出口へ走れみんな！ ネルっ、扉を開けるんだ！」

アルサスがそう叫んだ瞬間だった。まるで逃げ場を与えまいとするかのように、出入り口あたりに新たな穴が開き、そこから新たに二匹の鉄の魔物が姿を現す。さらに、バランスを崩したかに見えた魔物は、巧みに残り三本の足で踏みとどまっていた。

ふたたび、アルサスは飛びのいた。

「一体何匹いるの！？」

愕然とするルウ。その疑問は、アルサスとフランチェスカも感じていた。

「逃がさないってことらしいわね。随分、お利口な墓守なこと」

「冗談言ってる場合じゃないよ、フランお姉ちゃん！」

新たに現れた二匹の魔物は、やはり無機質に足音を立てながら、着実にルウたちを追い詰めた。ついに、部屋の隅にまで追いやられた、アルサスたち四人は、五匹の鉄の魔物によって取り囲まれてしまう。剣も魔法も通用しないのであれば、どうすることも出来ない。

すると、五匹のうち一体だけが、こちらの事をじっと見つめる。

そして、真っ赤な一つ目から、带状の細い光を発した。そり光の帯はまるで物差しで引いたかのように直線を空中に描き、ネルの額に当たる。

「きゃあっ！」

思わず、ネルは悲鳴を上げた。魔法か何かだと思ったのだ。しかし、痛みが走るわけでも、意識が遠のくわけでもない。むしろ眩しいだけで、何も感じない。光の帯は、ネルの体中を這い回る。一体何事か、手出しの出来ないアルサスたちは、じっとその光景に固唾を呑んだ。

ひとしきり、光の帯を発した鉄の魔物は、突然歩み寄るのをやめた。すると、再び何処から声が聞こえる。あの、女とも男とも取れぬ、奇妙な声だ。

『Die Passagierliste unserer
Bo ten hat eine anwendbare Person.
Ich halte prompt ein Verteidigungsgesamt an.』

意味の全くわからない、不思議な言葉だった。だが、その声が止むと同時に、鉄の魔物たちは、敵意を和らげたばかりか、現れたときと同じように足元に突如出現した穴の中に戻っていく。

何事もなかったかのように、部屋は静まり返る。それは、嵐の後の静けさのようだった。

「た、助かった……」

へなへなと腰を折るルウ。ネルは壁際に張り付いて、まだ怯えたような顔をしている。アルサスも深く息を吐き出して、腰の鞘に剣を収める。

「何で、あの鉄の魔物たちは、突然退いたのかしら？」

ただ一人、フランチエスカだけが、怪訝な顔をしていた。その瞳は、さきほどの声の主を探しているかのようだった。

だが、他に人の気配はない。そもそも、あれが人間の声なら、あの意味のわからない言語は一体何なのだろう。各国に伝わる古代語とも違う。どちらかといえば、魔法の言葉に似ているような印象がある。そのことをアルサスは、ルウに問いかけてみたが、

「分かんない。たしかに、魔法の言葉に似てるけど……」

と、曖昧な返事しか返ってこなかった。

「遺跡船が起動したか……」

事務机に向かうメツツェ・カーネリアは、書類に走らせていた羽ペンをピタリと止めて呟いた。その呟きは、すぐ傍にいた文官の耳にも届く。

「何か仰いましたか、メッツェさま？」

奇妙に思ったのか、文官は事務机から顔を上げ、メッツェに尋ねた。

ここは、センテ・レーバン城、宰相府文官執務室。三列に並べられた事務机には、文官たちが座り、一心不乱に庶務をこなしていた。陳情の処理、騎士団からの意見書、経理、公共事業や飢饉への対処、年貢の処理、様々な雑事をこなすことが、文官たちの仕事であり、陰日向に王国を支えている。

メッツェもまた、宰相付き参謀官として、その職務に励んでいた。「いや、何でもない。ただの独り言だ。それよりも、ファレリアへ派兵したクロウ・ヴェイルから、その後の連絡は？」

わざとらしく、メッツェは話題をすり替えたが、文官はそのことに気づく様子もなく、自分の机の上に広げられた書類の束から、一枚の紙を取り出した。それは、つい一週間余り前に、王国に対して反乱を起こした、ファレリアの領主ボレウス公を逮捕・反乱鎮圧するべく送った、親衛騎士団クロウ・ヴェイルからの書簡である。まめな男らしく、毎日のように戦況を報告してくるその真面目さは、実に目を見張るものがあると、メッツェは思う。

「先ほど送られてきた連絡によりますと、ボレウス・ファレリア公は会戦に破れ、ファレリア城内に立てこもっているとのことですよ」

「クロウなら、一週間もあれば、カタがつくと思っていたが、てこずっているようだな？」

「はい、噂を信じるわけではないですが、ハイゼノン公が、ファレリア公の後ろ盾となっているとかいないとか。辺境の諸侯どもは、どうにも国王さまへの忠誠心に欠けるようですね。ああいったものたちの事を、分離主義者と呼ぶのでしょうか」

と、文官は口にしてから、メッツェが渋い顔をしていることに気づいた。慌てて文官は、取り繕う。

「あ、いや、私見でございます。クロウさまより、増派の要請はうけておりませんので、ファレリア鎮圧は、順調と見るべきかと」

「そうか、分かった」

メッツェは素っ気無く返すと、再び、事務机に向かった。目の前にあるのは、最北の村の村長が宛てた、宰相ライオットへの陳情書である。本来ならば、この陳情に目を通すべきなのは、ライオット自身だ。無論、その陳情を取り合うかどうかはさておいても、である。

しかし、当のライオットは、奥の歯が痛いと言い、今朝から私室のベッドに籠っていると、メイド長から聞かされた。フルーツばかり食っているからだ、などと口が裂けても、メイド長には言えないが、メッツェは呆れながらも、古典医を招聘する手続きを取った。

王都の城下に居を構える、代々王室の医事を取り扱っている医者だ。もっとも、歯が痛くなくても、ライオットは陳情など相手にはしない。「庶民のわがままを、いちいち聞いていたら、身が持たない」と言うのだ。しかし、メッツェの前に置かれた陳情書には、貧しさに苦しむ村人たちの怨嗟が切々と書かれていた。わがままなどではない。世界は貧困の中であって、富める者はますます富み、貧しき者はますます飢えている。

ボレウス公は、そんな現実を鑑みて、反乱を起こしたのだ。もちろん、すぐに武力で物事をどうにかしようとするのは、あまりにも短絡的だと、メッツェは思う。納得のいかないこと、理解の出来ないことは、すぐに戦争で蹴りをつけようとするのは、人間の悪癖だ。何度世界が変わっても、それを理解する智慧が人間には備わっていないのか？

彼らを指して「分離主義者」などと揶揄したところで、結果は変わらない。ライオットも、ボレウスも、結果として、進化できない人間の姿なのだ。

『何故、分かり合おうとしない。相手に優しくあろうとしないのか』
「ああ、そう言えば！」

唐突に、先ほどの文官が声を上げて、メッツェははっと我に返った。自分の思考に没頭しかけていた、頭を何度か振って、「なんだ

？」と問い返す。

「これ、この黒い封筒。昨日、こちらへ届けられたもので、ライオット閣下宛ての手紙のようなのですが、あまりにも奇妙でしたので、まずメッツェさまに検分いただこうと思っていたのです」

そう言って、文官がメッツェに差し出したのは、確かに不気味な手紙であった。真つ黒に染め上げられた封筒。黒い蠟でしっかりと封印されている。表には、ライオット宛てを示す一文が白インクで書かれており、裏面には、魔法文字が描かれている。標準語で言え
ばそれは、「G」に当たる。

メッツェには、その差出人に心当たりがあつたが、あえて、そのことは口にせず、封筒を静かに開いた。

『黒衣の騎士団、ギャレット・ガルシアより、ライオット・シモンズ閣下。お探しの品、ウェスアよりエントの森へ。かねてより、メッツェさまの言いつけどおり、我々は先回りをして、城郭都市ハイゼノンへむかう旨、ここに報告奉る。吉報ご期待されたし』

ギャレットめ、エアデ通信に妨害がかけられているのを知って、手紙を寄越したか。便箋に書かれた文字を、モノクルの奥の目で追いながら、メッツェは内心に思った。

「何でしょう、その手紙……？」

ニヤリとするメッツェに、文官が怪訝な顔を寄越す。

「いや、なんでもない。ただの取るに足らない陳情書だ。このような黒い封筒に入れてくるとは趣味が悪いな」

メッツェは文官に嘘を悟られないように、手早く便箋を折りたたみ、封筒の中にしまいこんだ。

32. 鉄の魔物（後書き）

ご意見。感想などございましたら、お寄せください。

33. 過去からのメッセージ

突如静寂を破って、石版が光輝いたのは、鉄の魔物の襲撃からようやく落ち着きを取り戻した時だった。ブンっ、と奇妙な音が響き、石版の盤面がまるで火でも焚いたかのように明るく光る。そして、そこに次々と魔法文字が現れたのだ。

「なんだこりゃ……」

思わず石版を見上げるアルサスも、口をあんぐりとあけてしまう。白地に黒の文字の羅列が、次々と上へと流れて行っては、ぱっと消える。そして、最後に現れた短い一文で、止まり、文字は何かを請うように、ぺかぺかと点滅を繰り返した。

「情報を閲覧しますか？　そう書いてあります」

アルサスの隣で、冷静な声のネルがその文面を読み上げた。驚きが隠せないアルサスたちは、一様にネルの方を振り返った。

「お姉ちゃん、魔法文字が読めるの!？」

びっくり、が顔一面に書いてあるかのように、見開いた瞳を向けてくるルウが尋ねると、ネルは少しだけ困ったような顔をして、「なんとなく、わかるんです……。あの文字の意味が」と言った。さつきまで、壁に書かれた文字すら読めなかったのに、この部屋を見るにつけ、石版の文字を見つめるにつけ、何かしら記憶の底から染み出してくるような感覚があった。しかし、それを上手い言葉でアルサスたちに伝えられない。

「もしかして、ネルがここを覚えている、っていたことと関係あるのかしら？」

フランチェスカにそう尋ねられても、やはりネルにはよく分らない。ただ、ごく自然と慣れ親しんだ言葉のように、石版に現れた文字を理解することが出来た。

「情報を閲覧って……ということだろうね？」

小首をかしげるルウ。すると、それに答えるかのように、台座に

並んだタイルのひとつが、緑色に点滅し始めた。驚きはしたものの、ルウはそれを躊躇なく押してみた。もちろん、アルサスは慌ててそれを止めようとした。また、先ほどの鉄の魔物が現れては敵わないと思ったからだ。

しかし、ルウがタイルを押しても、魔物は現れず、代わりに石版には新たな文字が出現する。なにやら、長々しい文章であり、すべて魔法文字で書かれていた。

「読める？」

ひとまず胸をなでおろした、アルサスが問いかけると、ネルは石版に現れた魔法文字を目で追いかけた。

『報告書、第23466号。第一次計画の実証の結果、適応には個々の体質があるものと推測される。拒絶反応は認められないため、更なる研究を必要とする。このことは、すでにマリア博士にも報告済みである』

『ハンナは素直でとてもいい子です。赤の他人であるわたしの事を「お母さん」と慕ってくれます。目覚めた時、今と変わらぬ彼女でいて欲しい』

『報告書、第35000号。本来二本柱であった計画を、委細変更とする。第二次計画の破棄は、中止。実施中の第一次計画が終了し次第、第二次計画へ即時移行する』

『すべてを、ハンナに託します。世界を、未来の命運を変える力を。白き龍は人間に幸福などもたらしません。しかし、誰もそのことに気づいていない。滅びへの一步を自分の足で歩いていることに気づかない。わたしたちに出来ることは、最後の望みを託し、あなたをダスカードに隠すことです』

『報告書、第21306号。動物実験の一部が成功。高い知能。高い生命力を、付与出来たことを確認。人体実験へ踏み切るには、世論を味方につける必要があります』

『すでに聞き及びのことと思いますが、敵国は暴挙とも言える行動

に出ました。戦争が長引かないように、世界……いや人類の命運はすべてわたしたちの手にかかっています。「奏世」計画の早期実現を目指し、一層努力が望まれます』

『報告書、第400907号。マリア博士の提言に従い、金の若子には世界を監視する使命を、銀の乙女には世界を変える力を』

『ハイゼノンで収容した銀色の髪の少女に、ハンナという名を与えました。彼女もその名を気に入っているようです。ただ、その笑顔を見ていると、彼女が何も知らされていないことが不憫で仕方ありません』

『報告書、第103456号。本計画とは別個として、計画を二分割することとする。こと第二次計画に関しては、これを「金の若子」「銀の乙女」と名づけ、遂行のため二年を目処に予備実証を開始する。実証次第で、どちらの計画を「奏世」計画の骨子とするかを決定する』

『やがて、わたしたちの世界は終わりを告げるでしょう。そうして新たに再生した世界が、同じ未来を歩もうとした時、ハンナの眠りは終わりを告げる。そして、世界は再び……』

『報告書、第57340号。銀の乙女を「鉄の鳥」でハイゼノンから、ダスカードの本部へ移送する』

魔法文字の散逸的な文章の羅列。文字が読めると言っても、一体それが何を意味するのかわからない。だが、端々に聞き知った言葉が現れる。特に、ネルという名、そしてハイゼノンと言う地名。そして、何よりも、「奏世」「銀の乙女」と言う言葉。探していた答えの片鱗が、そこにあることだけは間違いない。

不意に、石版に映し出されたものが切り替わる。文字列ではなく、人の顔が大きく現れたのだ。色の白い、ひと目で才女だとわかるような、美女の顔だった。歳のころは、フランチェスカと変わらないだろうか。ただ、しなやかな金色の髪はほつれ、目元に疲れが見え隠れしている。

彼女は小さく咳払いをすると、静かに語り始めた。

『もうすぐ、この世界は終わります。そして、新生の時を迎えるでしょう。ハンナ、もしもこのメッセージを聞いているなら、あなたは、永い眠りから目覚めたということ。それがどのくらい長い時間なのか、わたしにはわからない。ただ、目覚めの日、つまりあなたとわたしの約束の日が訪れたということ……。そう言っても、あなたには何のことだかわからないかもしれない。あなたの記憶を消したのは、わたしだから』

少し、悲しそうな顔をする。ネルによく似た青い瞳が、じっとネルを見下ろす。ハンナという人に向けられているはずのメッセージなのに、その瞳はネルを捉えているかのようだった。ネルは、ただ押し黙って、石版に映し出された女の顔をじっと見つめた。

「ど、どうなってるんだ？ 石版の中に人がいるのか？」

「こんな薄い石版の中に、人間が入れるわけないでしょ！？」

端では、言葉の意味がわからない、アルサスとルウがうろたえる。女の話す言葉は、先ほど鉄の魔物が現れたときに聞こえた声と同じような言葉だのだ。だが、ネルにだけはその言葉の意味がわかっていた。

『ほんとうは、そんな日が来なければいいと思った。でも、人間は分かり合えない生き物。そうやって、何度も繰り返し悲しみを生んだ。きつと、欲望に駆られた人間は再び「白き龍」を求めるでしょう。白き龍が目覚めたその時、また世界が終わる。それだけは、絶対に許してはいけないの。だから、あなたにはその連鎖を解いて欲しい。いつか、誰もが幸せだと感じる世界を作って欲しい。そのための力、それが「奏世の力」なの。今、わたしに出来ることは、ダスカードへの旅を、ここハイゼノンで祈るだけ。せめて、約束が果たされないことを願いつつ……。マリアより』

女は、最後に名残惜しむようにネルの名を呼んで、石版から姿を消した。部屋が突然暗くなる。石版の輝きまで失われたからだ。

「待って！」

ネルは慌てて、ルウがそうしたようにタイルを押した。しかし、カチカチと音がするだけで、ふたたび石版に灯が点る事はない。まるで最後の使命を全うして、命が尽きたかのように、石版はウンともスンとも言わなくなった。ネルは、繰り返し「待ってください」と口にしながら、その場に膝をついた。

今の人は誰？　ハンナって誰？　計画？　記憶を奪った？　奏世の力？　永い眠り？　世界が終わる？　約束の日？　白き龍？　わからない、何もわからない。教えてくださいっ！

得体の知れない大量の疑問符は、恐怖を伴って、ネルの両肩に重くのしかかった。女の言葉に、今更ながら「世界を変える力」とローアンが呼んだ、自分に宿る力が恐ろしい。

「だ、大丈夫？　ネル……」

うずくまり、肩を震わせていると、そっとアルサスがしゃがみ、ネルの背に暖かな手を当ててくれる。心配そうに覗き込むアルサスの赤い瞳に、優しさを感じたネルは「大丈夫です」と答えようとしたが、言葉が出てこない。のしかかる疑問符が、喉元でその言葉を塞ぎ止めるのだ。

「石版の人、なんて言ってたの？」

アルサスは、石版に映し出された女のことを、「石版の人」と呼んだ。もちろん、もはや眼前の巨大な石版がアルサスたちの知る「石版」でないことは明白だったが、他に相応しい語彙が見当たらなかったのだろう。

「わかりません。上手く聞き取れなくて……」

上擦った声で、ネルは嘘をついた。上手く聞き取れなかったのではない。石版の女が言ったことの意味が、自分の中で、何一つ咀嚼できないのだ。だが、その疑問をアルサスにぶつけても、彼も何も知らないことは明白で、ただ無為にアルサスを困らせてしまうだけだ。だから、ネルは嘘をついた。

「そっか」

アルサスは短くそう言って、ネルの嘘を疑っているような様子は

見せなかった。ただ、震えるネルを氣遣って、いるだけなのかもしれない。彼の本心は、ネルにはわからない。

「それにしても、報告書って何なんだろうね」

ルウが手帳を広げながら言う。

「ちゃんと訳せたらいいんだけど、あんまりにも文章が散逸的過ぎて、意味がよく分からないんだ」

「おまえ、まさか今の間に全部書き写したのか？」

ルウの手帳にびっしりと書き込まれた文字の塊。それは、さきほど石版に映し出された、短い文章だった。

「ふふん、ボクは神童だよ、アルサス。あのくらいの魔法文字、かんとんに速記できるよ」

鼻を鳴らしながらルウは自慢するかのように、大きく胸を張る。さすがのアルサスも、それには感心したようで、よくやったと、ルウを褒めた。

「わかったことでもいい、教えてくれるか？」

「そう言われても。何かの計画を推し進めるための、報告書だと思うんだ。この不思議な石版が遺跡の中に最初からあったとすれば、そこにお姉ちゃんの名前が出てくるともよく分からない。それに、あの女の人は誰なんだろう……魔法装置の一種なのかな。でも、こんな魔法装置は見たことも聞いたこともない」

ぶつぶつと言いながら、ルウは手帳のページをめくった。ここにくれば、すべてがパツとわかるものと思っていたわけではないが、わからないことが増えてしまったように感じる。それは、ネルだけでなく、皆一様に感じていた。

「最後の文章、あれは多分、銀の乙女を『鉄の鳥』ハイゼノンから、ダスカードの本部へ送るって言う意味だと思う。鉄の鳥というのは、この遺跡のことじゃないかな。ほら、鳥の形によく似ているし、鉄で出来てる。つまり、この遺跡はもともとここにあったんじゃないかって、『銀の乙女』をハイゼノンからダスカードへ移す途中だった」

「ダスカード？　ダスカードと言えば、ダイムガルドのアンジェロ

山中にある、太古の遺跡の名前ね」

フランチェスカが言う。

「太古の遺跡？」

「ええ。ほら、言ったでしょ。ダイムガルド軍は遺跡から超技術を回収しているって。それが、神々の時代のものと思われる、ダスカード遺跡なのよ。ハイゼノンも、古い遺跡の上に建造された都市だと言われているわ。この遺跡船も含めて、すべてが同年代の遺跡だと仮定したら、その名前が石版の文章にあっても、不思議なことじゃないわね」

「じゃあ、やっぱりここも、神々の時代の遺跡。神話の聖遺イコンだということか？ まさか、さっきの女の人は神さま？」

アルサスの問いかけに、フランチェスカは少しだけ苦笑いを返した。

「さあ、どうかしら。わたしには、神さまには見えなかったけれど、でも、神話は実在する、そう考えた方が自然じゃないかしら」

「いずれにしても、もっと手がかりが欲しい。確証を得られるくらいの」

ぱたん、と音を立ててルウが手帳を閉じる。

「ここからなら、ダイムガルドのダスカード遺跡へ行くよりもセンチ・レーバンのハイゼノンの方が近い。ハイゼノンへ行けば、何か新しい手がかりが得られるかもしれない」

「新しい手がかりって、何だよ、ルウ？」

「さっきの魔法文字の文章中に、こんなのがあった。『白き龍は人間に幸福などもたらしません』って。『白き龍』と言う言葉。それって、センチ・レーバンに伝わる伝承だよ。つまり、銀の乙女と奏世の力、そして白き龍の伝承はすべてつながりがあることなんだよ、きつと」

「だったら、迷うことなんてないわね。メルちゃんのことといい、次の目的地はハイゼノンで決まりね」

フランチェスカの言葉に、ネルの傍でアルサスが頷く。だが、何

故かアルサスは浮かない顔をしていた。

「アルサス、どうしました？」

今度はネルが心配になって、アルサスの顔を覗き込んだ。すると、アルサスは何事もなかったかのように、いつもどおりの笑顔を作り、「なんでもないよ。立てる？　ひとまずここから出よう」

と、ネルを助け起こす。

部屋の出入り口の扉は、再びネルが手を当てることにより、入ってきたときと同じように、半自動的に開いた。ネルは部屋を後にする直前、少しだけ振り向いて、もう一度巨大な石版を見遣る。そして、そこに映し出された金色の髪の美しい女の顔と声を頭の中に浮かべた。

あの女の人、どこかで会ったことがある。この場所に訪れて以来、ことあるごとに脳裏を掠めていく既視感の数々。だが、ひとつだけ確かに分かったことがある。

あの人の声……わたしに呼びかけてきた、アストレアさまの声と同じだった！

この既視感の意味も、ハイゼノンへ行けば何か分かるというのだろうか？　いや、そんなことよりも、今はメルのことを考えたい。あの子が無事なら、もう一度その名を呼びたい。自分のことなんて、後回しでも構わない。なぜなら、大切な家族だから。

「行こう、ハイゼノンへ。メルを探しに」

アルサスがネルに手を差し伸べる。ネルは、部屋の方からアルサスの方へと顔を戻し、その暖かな手を取った。

33. 過去からのメッセージ（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せください。

34. ファレリアの陥落

「武器を捨て、投降する者の生命と財産は保障する」

銅版を丸めた拡声器で叫ぶのは、クロウの副官ブレックである。

そのよく通る声は、町中に響き渡り、ファレリア城内にいるクロウの耳にまで、届いていた。

センチ・レーバン諸侯の一人、ボレウス・ファレリアの反乱はついに終焉の時を迎えようとしていた。クロウたちは、約二週間かけて、ほぼ味方に損害を与えることなく、反乱を鎮圧した。残すところは、ファレリア城の最上階で待つ、反乱の首魁、ボレウス公を捕らえるのみだ。

すでに抵抗を示すものはほとんどいない。しかし、非戦闘員であるファレリアの住民たちの混乱や余計な煽動を防ぐため、クロウはブレックに後事を負かせ、自らは部下を数人従えて、ボレウスの元へと向かった。

「何卒、穏便に。旦那さまは、けして私利私欲に走ったものではございません」

城を案内する、ボレウスの執事が何度も同じ事を口にする。執事の良し悪しが、家の格式を表すとは、よく言ったもので、きれいに整えられた白髪やカイゼル髭といい、歴代のセンチ・レーバン王に仕えた名門ファレリア家の格式の高さを、その忠誠心篤い執事からうかがい知ることが出来る。

「心配しないで下さい。僕……私たちはボレウス公を殺すために来たわけではありません」

何度、クロウはそう返したかわからない。もちろん、それは建前半分、本心半分だった。ボレウスを裁くのは、ライオット宰相の役目であり、一介の騎士の出る幕ではない。ライオットのことだ、意にすぐわなければ、諸侯と言えども処刑し、御家お取り潰しにするだろう。しかし、クロウの個人的な意見としては、ボレウスは聡明

な人物であり、王国のためにはなくてはならない人物でもある。その事を鑑^{かん}みても、ボレウスの命を徒^{いたずら}に奪うことは、承服しかねる。

もっとも、執事にその本心を語ることが出来ない。だから、こうして、抜き身の剣を手に、城の廊下を歩いているのだ。

ファレリア家は格式高いと言ったが、城内は長屋かと思うほど、質素で飾り気がなかった。高価な調度品も、花を生ける花瓶も、豪華なランプもない。せめて、その質素な城に花を添えるのは、歴代のファレリア公の肖像画と、赤い絨毯だけだ。その上を、クロウたちの甲冑の足音が無遠慮に踏み鳴らしていく。この城にとって、クロウたちは、侵略者、招かれざる客に等しかった。

「騎士さま、こちらでございます」

そう言って、先導する執事の足が止まった。観音開きの大きな扉。その向こうがファレリア城、領主の間である。クロウは頷き、執事を下がらせると、自らの手でその扉を開け、部下たちを従えて、領主の間へと足を踏み入れた。外では、まだブレックの声が響き渡っている。

「ボレウス公！ われらは……」

クロウは、部屋の一番奥。玉座とも言うべき椅子に腰掛ける壮年の男に向かって言った。

「わかっておる。そなたは、ホーク・ヴェイルが一子、クロウ・ヴェイルであろう？ お父上の面影がある」

男が言う。威厳のある声だ。その威厳は声だけでなく、シワという年輪の刻まれた顔、蓄えられた髭、傷ついた甲冑と、ぼろのようになっってしまったマントからも発せられているようだった。そう、その男こそ、反乱の首謀者、ボレウス・ファレリアだった。

「父上をご存知なのですか？」

クロウは、ボレウスの元に歩を進めながら尋ねた。ながら、この部屋は謁見の間に似ている。壇上の椅子に腰かける、ボレウスはクロウを見下ろすように、こくりと頷いた。

「十年前、私はファレリア軍の指揮官として、そなたのお父上は、

センチ・レーバン軍の騎士団長の一人として、ヨルン平原でガモーフ相手に戦った。実に勇猛で誠実なお人だったことを覚えているよ。彼は、ヨルンからの撤退、ガモーフとの和平を声高に叫んでいた。その結果、他の騎士団長たちからの輦蹙ひんしゅくをかって、前線に送り込まれ、その命を散らした。じつに残念なことだ」

「そう言ってもらえて、天に還った父も喜んでいるでしょう」

「そうだいいがな。今の私の体たらくを笑っているかもしれん。自らと、同じ道を歩んだかと。惜しむらくは、私にはそなたのような息子がいないこと」

「いいえ、わたしは、そのライオットめに媚をうり、ヴェイル家を守っている、愚か者です」

自嘲気味な笑みを浮かべたクロウは、ボレウスの手前で足を止めた。

「あなたも、愚か者です、ボレウス公。なぜ、戦などしたのです。戦で世の中が変わるとでも思ったのですか？」

クロウがそう言うと、ボレウスも自嘲気味に笑う。

「いや、そんな大それたことなど思っていない。せめて、フェルト殿下に代わって、王位に就かれるシオンさまが、この世界にひたひたと迫っている危機にお気づきになられれば、この不忠者が生きた証となる。そう思ったまでのこと」

「ライオットが、あなたの反乱のことを、シオンさまのお耳に入れているとお思いか？　すべて無駄なことに過ぎないのです。それどころか、あなたは徒に世の中を惑わせた」

「無駄……か」

ボレウスの瞳がじっとクロウを見つめる。深い色をした瞳に、クロウは射抜かれてしまったような感覚を覚えた。敗軍の将だというのに、何故ここまで落ち着いていられるのか？　ボレウスの顔には、後悔の色すら見て取れない。

「クロウ。そなたは、ガモーフのウェスアで起きた事件を知っているか？」

「ベスタ教の大司教、ウルド・リーがガモーフの政道を批難したということですか？ それならば聞き及んでおります」

「三日ほど前、ウルドは処刑されたそうだ」

「なんと！」

クロウは驚きを思わず口にしてしまう。

「この世界は、ゆがみを正すことなく、進んでいる。貧困、飢餓、異常気象。やがて、それらのゆがみは、大きな戦争が再び起すだろう。そうなれば、世界中で多くの血が流れ、多くの人間が死ぬ。ウルドは、神の名を以って人々を導く者として、それを案じ、一石を投じた。だが、その声はどこにも届かない。私は、ファレリアの領主として、センチ・レーバン諸侯の一人として、せめてこの国の人間だけは救いたい。その思いは、ウルドと同じだ。だが、皮肉なことに、結果としてウルドと同じ道を歩むこととなってしまった。肝心なことは、誰の耳にも届かず、私も死ぬ」

そう言うと、ボレウスはおもむろに椅子から立ち上がり、腰だめの剣を引き抜いた。慌てて、クロウの傍に控えていた部下たちが、各々の武器を構えた。しかし、クロウは腕を広げそれを制した。

「ならば、せめて、裁きの場でその事をお伝えください。死ぬのはそれからでも遅くはないはず！」

「いや、そうはいかん。シオンさまの即位を前に、私のような愚かな反逆者が甘んじて生を請うでおっては、その治世に汚点を残すだけ。もしも、シオンさまに、我が願いが届かぬと言うのであれば……今も何処かの空の下に折られるであろう、フェルト殿下にだけでも、世界を救って欲しいという願いを込めて、私は自ら決する」

ボレウスの剣が俄かに輝きを帯びた。だが、その狂気はクロウたちの方には向いていない。そう、ボレウス自身の首にあてがわれたのだ。

「お待ちください、ボレウス公っ！！」

クロウが手を伸ばす。ボレウスは、深い色をした眼差しをクロウに投げかけたまま、首筋に這わせた剣を手前に引いた。音などしな

かった。切り裂かれた動脈からは、だくどくと赤い色の血がこぼれだし、彼の足元に染みを作る。

「剣と盾の王国に、栄光あらんことを……」

最期に発したボレウスの言葉。その余韻が過ぎ去ると同時に、ボレウスは膝から崩れ落ちて、そのまま帰らぬ人となった。古くから王国に仕えた名門武家の当主であり、自らの意を伝えるために反乱を起こした分離主義者として、自刎^{じふん}する。それは潔い決断だった。せめてもの武士の情け、完全に息を引き取るまで、見送ろう。クロウはそう自分自身に言い聞かせながら、自らの剣を鞘に収めた。

「おおっ！！ 旦那さま、旦那さまーっ！！」

部屋の外に待機していた執事が、異変を察して飛び込んできた。

玉座に斃れた主人の亡骸に駆け寄り、嗚咽と咆哮をあげる。

「ボレウス公の最期、ご立派であった。公の魂は天にて、その罪を赦^{ゆる}される。これより、ボレウス・ファレリア公の名を貶^{おとし}めることは、決して許されない」

そう言う事は、武人としての最大の礼儀である。無論、クロウの意志と反して、ファレリア家はお取り潰しとなり、その家名は地の果てに落ちると同時に、彼の親類や縁者はことごとく連座の刑に処されることだろう。ライオットと言う男は、齒向かうものには、蛇のような容赦なさ周到さで、厳しく冷たく当たる。

だが、クロウには、ボレウスが何故反乱などと言う愚行を犯したのか。その理由が分かっていた。十年前、ヨルンの悲劇が起きて以来、世界は少しずつだが貧しく、苦しくなっている。流行り病や、飢饉、そういったものは、王都でぬくぬくとしているライオットや王族には伝わらない、だから、ボレウスは反乱を起こし、その火の手で、王都に暮らす人々、そしてこの国に暮らす人々に、伝えようとしたのだ。

ボレウスの思いは分かっている。戦争を好んでするような人間ではないことも分かっている。自分も同じ思いなのだから。しかし、突然受け継ぐこととなった家名を守らなければならないクロウに、

一体何が出来ると言うのだろうか……。

ボレウスが評したように、父ホーク・ヴェイルは、勇敢で誠実な男だった。クロウはそんな父を尊敬し、父のような騎士になりたいと思っていた。しかし、その父は、ヨルンでの戦で、三軍指揮を任されながら、進軍を拒否した。何十年もの戦い続きで、兵隊も民衆も疲れきっている。今は恥を偲んで、ガモーフ、ダイムガルドと和平を結ぶべきだと主張した。だが、好戦的な騎士たちは、その意見を批難するばかりか、ヴェイル隊を前線に向かわせた。そうして、父はヨルンの悲劇で、一瞬のうちに二百万人の命とともに消え去った。いまでも、亡骸は発見されることもなく、ヨルン平原の中心、墓標の地に眠っているのだ。

だが、姑息であったのは、前線に向かわず、陣の最奥、アトリアの麓で安穩としていた、騎士団長たちである。現場指揮官として、ヨルンでの敗退の責任を問われた彼らは、こともあろうか、その責任を父に擦り付けた。^{なす}そのため、父は、王国を聞きに陥れた大罪人として、地位も名誉も剥奪された。そうして、ヴェイル家は没落の一手手前まで落ちていった。

だが、それを救い出してくれたのは、他ならぬライオットであった。ライオットは、お取り潰しが決まっていたヴェイル家を経済的に社会的に救ったばかりか、跡取りとなった一人息子、クロウを親衛騎士団として取り立てたのだ。

親衛騎士団は、王家と王都を守る、センチ・レーバン騎士団の中でも、もつとも名誉な存在だ。発言力も高く、また、人々からの尊敬も集める。それと同時に、直接的な指揮権を宰相府に依存しているのだ。

もはや、没落しかなかったヴェイル家、そしてクロウにとって、ライオットは命の恩人とも言えた。その命の恩人の命令なら、自分の考えや心など、押しとどめてでも、聞き届けなければならぬ。分かっている。それを傀儡^{かいらい}と呼ぶのだ。十字に交差した二本の棒と、底から垂れ下がる糸に手足をつながれ、ライオットと言う名の人形

師に操られるマリオネットと同じ。

もしも、反乱を起こしたボレウスが愚か者だというのなら、それをライオットの命令で無下に潰した自分もまた……。

「愚か者め」

吐き出した溜息は、ボレウスの遺体に泣きすがる、忠実な執事ではなく、自分に向けたものだった。

「クロウさま！」

突然、執事の泣き声とクロウの溜息をかき消して現れたのは、つい今しがた間で城の外で、ファレリアの民衆に、拡声器で呼びかけていた、副官のブレックだった。どうやら、下から駆けてきたのだろう、肩で息をするブレックがこちらへ走りよってくる。

「どうしましたか、ブレック副官？」

「ライオット閣下より、エーアダ通信で至急電です。『発、プレジス。宛、ナイディア。反乱の平定、ご苦勞のことと存じ上げる。ついては、先ごろお伝えした、ハイゼノン行きの命令を取り下げ、王都へ凱旋されたし。シオンさまもお待ちかねのことである』」

ブレックが、エーアダ通信の内容を復唱する。プレジスとは、セнте・レーバンの古い言葉で「大臣」を意味し、ナイディアは同様に「騎士」を意味するらしい。傍受を想定した、ある種の暗号であり、宰相府からクロウに宛てられた通信である事を意味していた。

「命令を取り下げるとは……。すでに、手勢の者たちには、ハイゼノン行きの支度を整えさせています。しかも、シオンさまはファレリア反乱のことをご存じないはずでは？」

命令の変更は、現場では多々あることだが、ファレリアへの出陣前、ライオット付きの参謀メッツェがわざわざ、ハイゼノン行きの念を押したにも拘らず、それを取り下げるというのは、腑落ちないそんな顔つきをするブレック。彼の言うとおり、次期王位継承者であるシオンは、ライオットの「即位を控えたこの時期に、要らぬご心労を与えるべきではない」という勝手な判断により、ボレウスの反乱は伝えられていないはずだ。むろん、何かしら事情が変わった

と言うことも考えられる。

「まるで、われらをハイゼノンへは向かわせまいとしているような」とは、ブレックの勝手な憶測である。少なくとも、数日前まで、ライオットはクロウ隊をハイゼノンに向かわせたがっていたように思える。そこに不信感を抱くと同時に、なぜ自分たちをハイゼノンに向かわせようとしたのかも、今更ながらに疑問として持ち上がった。

「いかがいたします？ 隊長」

ブレックが命令を請う。クロウは、ちらりとボレウスの亡骸に目をやった。自ら首を切り果てた男は、もはや何も語らない。だが、彼の信念を少しでも感じ取ってしまったクロウは、九つのとき、家を継いでから十年間、くすぶり続けていた思いに、とうとう火がついてしまったと言う感覚に、胸中を埋め尽くしていた。

「以下命令は、受諾していないものとします。ただちに、手勢だけを率いて、我々は『城郭都市ハイゼノン』へ。残りの部隊には、フアレリアの治安維持を行わせるよう、指示を。それから、街の自治監督者を住民の中から選出し、正式に王国への保護を求めてください。以上」

命令を受け、部下の兵は敬礼と共に、領主の間を後にする。彼らの足音が遠ざかると、再びクロウの耳には、執事の泣き声が聞こえた。

クロウは踵を返し、執事に向かって言った。

「ボレウス公の亡骸は、丁重に葬って下さい。直、フアレリアには、王国から官吏が次の領主としてやってくるでしょうが、それまでこの城を守るのは、あなたの務めです。どうか、よろしく願います」

それだけ伝えると、返事を待たず、自らも部屋を後にする。長年ボレウスに使えてきた執事に、哀悼の時間を与えてやるつもりであった。

「宜しいのですか？」

後を付いて来るブレックが言う。クロウは歩を緩めることなく答えた。

「名家の家人としての誇りがあれば、主人の後を追って自害などしないでしょう」

「いえ、そうではなくて、宰相府からの命令を無視なさるおつもりですか？　ということですよ」

「一度くらい、命令に背いたところで、ライオット閣下もそれほど目くじらをお立てになられませんよ」

「後々問題になりかねません。そうでなくとも、騎士団はシオンさまの即位に反対なされている。あなたも、騎士の一員であり、他ならぬフェルトさまとあなたは……」

言いかけたブレックの言葉に、クロウはかぶせるように、

「それで、ライオットに付けいれられたところで、シオンさまの即位はすでに決まっていること。フェルトさまが居られぬ以上、元首不在のままというわけには行かない。どの道変わらないのであれば、一度くらい命令に背きたい。ここからハイゼノンへはそう遠くはないですが、帰りが遅くなれば、その方がライオット閣下からいらぬ叱責を受けることとなる。直ちに、ハイゼノンへ出発します！」

と、強い口調で言い放つと、クロウは足早に廊下を去って行った。ブレックは、いつもにないクロウの大きな声に驚きながらも、去り行く彼の背中に、少しばかりの苛立ちを感じていた。

アトリアの峰を越えたアルサスたちの眼前に現れたのは、センテ・レーバン王国、最東端の街、ハイゼノンである。

遺跡戦を後にした彼らは、ラクシャ村から逃げ出したメルが目指したと思われる、ハイゼノンを目指した。メルを探すのと同時に、遺跡船の石版から手に入れたメッセージの謎を解くためである。そのどちらも、雲を掴むような話であり、実に希薄な情報と勘だけが便りだった。そのため、エントの森のその先、ガモーフとセンテ・レーバンの国境に横たわるアトリアを越える旅は、彼らの足取りを

重くさせた。

本当にメルはこの山脈を越えて敵国であるセンチ・レーバンの街へ向かったのか？ 本当にハイゼノンに真実を知る手がかりがあるのか？ ネルだけでなく、アルサスもルウもフランチェスカも、同様にそんな自問自答を内心に繰り返し続けた。

春先のアトリアには、まだ冬の間に降り積もった雪が残っている。そのため、谷の間道はとても険しく、挫折そうになったり、根を上げそうになった。

だが、ついに山の麓に降り立ち、目の前に現れたハイゼノンの姿をその瞳に映したとき、彼らの疲労は一気に吹き飛んだ。

「城郭都市」その形容の所以は、周囲三クリーグほどもある都市全体を囲む巨大な城壁にある。その城壁こそが、遺跡船とおなじく、太古の遺物なのだ。ハイゼノンはその遺物の上に、造られた街。

そして、遺物は、遺跡としての役割と同時に、敵を阻む壁となる。高さは、二階建て民家の三倍ほどもあり、はしごをかけても容易に上ることは出来ない。しかも、外に向かって広がるように傾斜しているため、壁をよじ登ることすら不可能である。

まさに、町全体が城郭のようであり、巨大要塞のようでもある。

その威容をみるにつけ、何かしらの期待感がアルサスたちの胸に過ぎった。雲を掴むような話だというのなら、その雲を少しずつかき集めればいい。ここでひとつでも、なにか真実に繋がる手がかりが見つければ、次へのステップになることだけは間違っていないのだから。

アルサスたちは、そう期待を胸に描きながら、ハイゼノンの城門をくぐった。

34. ファレリアの陥落（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せ下さい。

35. 城郭都市ハイゼノン

ハイゼノンの町並みは、他のセンチ・レーバンの町並みと大して変わらない。センチ・レーバン生まれのアルサスにとっては、何の変哲もない石畳の道が城門より続き、その両側に、白壁と赤い屋根瓦の家々が立ち並ぶ。民家や商店などが、ブロック単位で敷き詰められて区画を形成しているのだ。それでも、センチ・レーバンの街を初めて訪れるルウは、終始目を輝かせていた。

「すごいねー、おっきいねー！」

と、見聞を広められることにいちいち、喜ぶ様子は、どこか空白地帯のカルチェトの街を訪れたときのネルによく似ているような気がした。もつとも、アルサスの隣を歩くネルは、はしゃいでなどいない。ネルもまた、センチ・レーバンの街を訪ねるのは初めてのことなのだが、「はやく妹を見つけない」と、そんなことばかりが頭の中を占めているのだろう。ネルは通りを歩く、十三、四歳の少女を見つけては、それがメルではないか、と確かめる。そんなネルに、アルサスは、

「とりあえず、宿を取ろう。メル探しと情報集めは、それからだ」と、言い含めた。

遺跡の上に造られたという大都市だけあって、宿を探すのには、それほど手間を取ることはなかった。宿だけでも、何軒もあって、ハイゼノンへの数少ない客を待ち構えていると言う状況なのだ。だが、旅の路銀はそれほどたくさんあるわけではない。アルサスの分、ルウのお小遣い、それにフランチエスカの財布を合わせても、それほど高級な宿を取ることは難しかった。幸いだったのは、ベッドが固くても、夕飯が冷や飯であっても、文句を言うような四人ではなかったことだ。ウェスアからこっち、ろくな寝床で寝ていないアルサスたちにとって、ひとまず腰を落着けることが出来るのなら、わがままなど言うつもりはない。

ところが、宿を取ることに難色を示したのは、アルサスたちの方ではなかった。

「いらっしゃい」

と、愛想よく出迎えてくれた、場末の宿の主人が、「一晚宿を取りたいんだが」というアルサスたちに、一変して渋い顔をしたのだ。カウンターの向こうに座る主人の視線は、アルサスの後ろのルウに注がれていた。

「悪いが、うちの店は、そのガキみたいなガモーフ人お断りなんだよ。それに、そっちの背の高い姉ちゃんは、ダイムガルド人だろう？」

「そういうのを、人種差別っていうんだよ、おじさん」

明らかに難色を示した、主人にルウは食って掛かった。ガモーフ人だから、と言われれば、さすがのルウも我慢できない。

「わめくな、ガモーフ人。そういう決まりなんだよ。貧乏人と外国人には関わるなってね」

「人種も職業も貴賤も問わず、お客を泊めてあげる。それが、旅籠ギルドなんじゃないの!？」

「そりゃ、ウチだって旅籠ギルドの加盟店だ。しかしな、ハイゼノンで店を構えている以上、ハイゼノン公の決めたの決まりごとに従わなければならないんだ。それが、大人の社会ってやつだ。まあ、女神さまだかなんだか得体の知れないものにすぎるしか能のないガモーフ人のぼっちゃんには、分からねえかもしれんがな。とにかく、出て行け」

取り付く島もなし。主人はそう言うと、手の甲をひらひらさせて、まるで野良犬でも追い払うかのように「しっしっ!」とアルサスたちを店から追い出す。大人の社会、などと言うものの、主人の態度は明らかに、自らがガモーフ人嫌いである事を表しているようだった。

「おぼえてろーっ! 魔法使いギルドは旅籠ギルドの横暴を許さないぞ!」

がるるっ、とまるで子犬が癩癩^{かんしゃく}を起こしたように、通りから宿に向かってルウは叫んだ。

「落ち着きなさい、ルウ。仕方ないわよ、ハイゼノンはセンチ・レーバンでもガモーフ嫌いでは有名な都市だって聞いているわ」

と、ルウをなだめるフランチェスカ。

「だけどさ！ フランお姉ちゃんもダイヤモンドガルド人だからって、バカにされたようなものじゃないか。ボク、ああいう大人、大嫌いっ！」

通りの真ん中で、ルウは怒鳴り散らした。ルミナスから出たことのない、ルウにとって、初めての屈辱だったのだろう。頭の上に、湯気が立ち上るほど、怒りを露にしている。そんなルウに、往來を行くセンチ・レーバン人は奇異の目を向けてきた。

「仕方ありませんよ、あの方も商売をされているんですから……」

フランチェスカに倣って、ネルもルウをなだめようとした。しかし、その言葉は返って、火に油を注ぐ結果となってしまった。

「そりゃ、ネルお姉ちゃんは、センチ・レーバン人にそっくりだから、いいよね。ガモーフ人のくせに……」

ムスっとした顔で、ルウがネルを睨みつけた。ネルの言うことは分かっているつもりだった。だから、行き場のない怒りが、ルウそうさせたのだろう。

たしかに、ルウの言うとおり、ネルは髪の毛が美しい銀色をしている事を除いても、可憐な顔立ちも肌の白さも、瞳の色も、ガモーフ人よりもセンチ・レーバン人に近い。そのことで、昔、村の幼なじみたちにいじめられた経験を持つネルにとって、その事を指摘されるのは、心苦しいことだった。

「ごめんなさい……」

としか、答えることの出来ないネルは、困ったように俯いてしまう。その姿を見たルウも、自分がネルを傷つけてしまったと言うことに気づき、しょんぼり俯き、二人を中心に、あたりはどんよりとした空気に包まれた。

「まったく、腹が減ってるから、イライラするんだ。ほれ、ふたりともっ、次の宿を探すぞ」

「そうよ。ぐずぐずしてたら、今日も野宿になっちゃうわよ」

アルサスとフランチェスカは、少しばかり溜息を吐き合い、アイコンタクトを交わすと、アルサスはルウの背中を、フランチェスカはネルの背中を軽く叩いた。

しかし、次の宿も、その次の宿も、訪ねた宿すべてが、明らかに空き部屋があるにも拘らず、「ただいま満室です」などと言って、その言葉の裏に「ガモーフ人やダイムガルド人はお断り」とアルサスたちを追い払った。

さすがに、六件目に断られる頃になると、アルサスまでも、頭に血を上らせていた。「同じ、センチ・レーバン人として恥ずかしい！」と、石畳に地団駄を踏む。

現在は、空白地帯を設け、停戦協定下にある三国の微妙な平和関係。しかし、センチ・レーバンには、根強く十年前の恨みがあるのだと言う事を、浮き彫りにされたように感じずにはいられなかった。ヨルンの戦いの時、ガモーフとダイムガルドは密約を交わし、結託してセンチ・レーバン軍を攻めたという過去は、事実として拭い去ることは出来ない。だが、その恨みを関係のないルウにぶつけるのはお門違いだと、アルサスと思う。ルウはまだその頃生まれてはいなかった。フランチェスカも、ダイムガルド軍の末席にいたに過ぎない。

「アルサス、提案なんだけど……」

そんなルウが、そう言ったのは、ついに七件目の宿にあしらわれた後のことだった。すっかりあたりは夕刻の気配が忍び寄っていた。もうじき、城壁に囲まれるハイゼノンには、早い夜がやってくる。

「さすがに、このままじゃホントに野宿になっちゃう。だから、ここからは二手に分かれたほうがいいと思うんだ。ボクとフランお姉ちゃんは、メルちゃんとハイゼノンの遺跡についての情報を集めるよ。だから、アルサスとネルお姉ちゃんは、宿を探してきて欲しい」

家路へ急ぐ人の群れとは逆方向を向いて、ルウが言う。アルサスに、異存はなかった。

「確かに、その方がいいかもしれないな。じゃあ、ルウ、フラン、頼めるか？ 俺たちは、お前たちが情報を集めている間に、宿を何とかして取っておくから」

「うん。晩御飯、たくさん出してくれる宿にしてね」

もちろん、それはルウなりの冗談だった。もはや、疲れた体を休めることが出来る寝床が確保できれば、何だって構わない。

「あの、ネルお姉ちゃん。あの、その、頑張ってメルちゃんのこと、探してくるから」

ルウはネルの方に向き直り、そう言うのとネルの返事を待たずに踵を返して走り出した。あっと言う間に、背の低いルウは往來の人ごみに紛れてしまう。

「まったく、素直じゃないわね、あの子も。ちょっと待ちなさい、わたしを置いてくつもり？」

慌ててルウを追うフランチェスカの姿も、あっと言う間に人ごみに消えた。

アルサスとネルはその場で、しばらく二人を見送る。すると、不意にネルが、

「わたし、ホントはセンチ・レーバンで生まれたんでしょうか？」

と、口にする。ルウに言われた事を気にしているのか、浮かない顔が夕日に照らされていた。アルサスは、小さく溜息を吐き出すと、右手の甲でこつんとネルの頭を小突いた。

「センチ・レーバンの生まれだろうが、ガモーフの生まれだろうが、そんなこと、どうだっていいじゃない」

「アルサス……」

小突かれた頭を押さえながら、ネルがこちらを見る。アルサスはあえて視線を合わせなかった。遠目に見える、ハイゼノンの中心地。そこに聳える城。センチ・レーバン諸侯の一人であり、この町を統治するハイゼノン公の居城を、アルサスは見つめていた。

「ネルはネル、俺は俺。どこで生まれても、誰の血を引いても、人間であることに変わりはない。俺はそう思ってるけどな。生まれた場所や住んでる場所、生き方や考え方、裕福だからとか貧しいからとか、そういった価値観の違いで、他人のことを蔑んだり、恨んだり、妬んだりすることは、争いにつながる。そういうのは、ナンセンスだよ。ルウだって、分かってる。お腹が減って、ちょっとイライラしてただけだよ」

「そう、ですよね……。ルウは、とてもいい子ですから」

「じゃあ、さっさと宿を探すか。ルウのリクエスト通り、晩飯をたくさん出してくれるような宿」

アルサスはそう言って、いつものようにネルの手を取った。しかし、宿探しはさらに難航することとなる……。

アルサスたちと別れた、ルウとフランチェスカは、遺跡の情報を得るため、街のあちこちを訪ね歩いた。往来を歩くハイゼノン市民たちは、皆一様に、ガモーフ人とダイムガルド人の二人を奇異の目で見つめる。ともすれば、敵意のある視線さえ飛んでくる。しかし、最初はその視線が気になったものの、慣れてしまえば、気にするほどのことでもなかった。「市民は外国人にかかわるな」という、領主ハイゼノン公からのお触れがでているのだから、敵意を行動に移そうとする市民など居はしない。

しかし、こうも外国人に警戒心が強い街となると、情報を得るのも容易なことではない、と言うことに気づかされる。街行く人に、「あの、お聞きしたいことがあるんですが」などと尋ねても、無視されたり、話しかけるな、と邪険に扱われるのだ。そうして、へとへとになりながら、重たい足を引きずった。

箱庭だ。そう呟いたのはフランチェスカだった。振り向いたルウは、彼女の視線が町を取り囲む遺跡の名残、城壁へと向けられている事に気づいた。センテ・レーバンの都市は、多くが城を中心にした城下町であり、町は堀と城壁に囲まれている。

しかし、このハイゼノンの城壁は、異様なまでに高い。敵の侵入を拒む城壁としては、無駄なほど高いのだ。まるで、人や魔物ではない何かから、町全体を守ろうとしているかのようにさえ、見えてしまう。それが、民族意識というのなら、まさに、ハイゼノンは箱の中にしか存在しない、箱庭と言って過言ではなかった。

「この町に、ギルド・リッターの支部ってないの？　ほら、今ならまだ、フランお姉ちゃんがギルド・リッターを辞めたっていう報告が、ここまで届いてないかもしれないよ」

ルウが言う。情報を集めるなら、警備のためにそれを多方面から収集しているギルド・リッターは、うってつけだ。だが、フランチェスカは頭を左右に振った。艶やかな黒髪が、さらさらと揺れる。

「残念だけど、ハイゼノンには、ギルド・リッター支部はないのよ。もともと、この街は閉鎖的だったから、ギルド・リッターも、支部を配置しなかったって聞いているわ」

ヨルンの悲劇以前から、人種混合で構成されるギルドの中にあつて、もっとも、多種多様な民族が集まるギルド・リッターにとって、ハイゼノンのような街が、一番厄介な街であつた。そのため、長い間、ギルド・リッター支部が設けられることはなかったのだ。

「どうしよう……。このままじゃ、アルサスとネルお姉ちゃんをがっかりさせちゃうよ。いつそのこと、壁まで行ってみよっか？」

「でも、外から見た限り、ミスリルで出来た、ただの壁だわ。もっとも、これほどまで大きな金属の壁を精製することができる、神々の時代の技術には、目を見張るものがあるけれど」

「そこは、興味の尽きないところだけど」

そういいながら、二人は街角を練り歩く。どことなく、遺跡船に似た印象を放つ、ハイゼノンの壁は、フランチェスカの言うとおり、総ミスリル製の壁だった。現代の鑄造技術では、これほど大きなミスリルの壁を鑄造することは不可能に近い。学術的にも、科学的に言っても、それは遺跡と呼ぶに相応しいものだった。しかし、そこに、真実に繋がる手がかりを得ることは出来そうにもない。

アルサスたちが、未だ宿を取れず苦戦していることなど知らない、ルウは、出来ないからと言ってあきらめるつもりはなかった。なんとかして、ひとつでも幸先の良い情報を仕入れなければ、思わずネルに向かって吐き出した暴言のお詫びが出来ない、と子ども心ながらに思うのだ。

「そういえば、この街って遺跡の『上』に作られたんだよね。って言うことは、この下にも何かあるのかな？」

ふと、気付いたルウは、地面を指差した。指先は、丁寧に切り出された石を組み合わせた石畳、その遥か下、ハイゼノンの地下を示している。

「それは、言葉のアヤってやつじゃない？」

「だよ。言葉尻を捕らえて、希望を託すなんて、いよいよ末期症状かもしれないね……。誰か、この町の歴史に詳しい人に話を聞けると、手っ取り早いんだけど。こんな調子じゃ、誰も何も教えてくれそうにもないよ」

はあっ、と溜息を吐き出したルウは、暮れなずむ茜空を見上げた。「ボク、センチ・レーバンがこんな国だと思わなかった。がっかりだよ」

溜息が、茜空へと霧散する様をルウは眺めつつ、ぼやく。どんな旅にも、そこに住む者たちがいる限り、どんな形であれ、人と人の触れ合いが待っている。そこに、外国への憧れが重なれば、それはもう旅の醍醐味と言っても過言ではなかった。

しかし、逆に見知らぬ土地で、見知らぬ人たちから冷たく当たられることは、とても辛く、落胆に値する。

「センチ・レーバン王国は、三国の中でも最も保守的な国なのよ。その中でも、ハイゼノンはさらに特別。仕方ないわよ。でも、人間は十人十色っていうじゃない？ きっと親切な人もいるわ、アルサスみたい」

がっくりと肩を落とすルウの頭を、軽くはたくと、フランチェスカは口許に笑みを浮かべた。しかし、ルウは内心に「十人中九人は

同じ色だ」と思う。

事実、人のよさそうな街人を見かけては、声をかけてみるものの、ルウたちが外国人だと見るや否や、みな一様に閉口する。

そうこうしているうちに、薄暮の時間となり、人の姿もまばらになってしまふ。途方にくれたルウは、憔悴した気分を引きずりながらも、フランチェスカと共に街角を練り歩く。と、いつの間にかあたりの風景が一変する。センテ・レーバン特有の赤い屋根瓦に白壁の家々は、一斉に姿を消し、古びた木を組み合わせただけのバラック小屋が姿を現す。そこは、ハイゼノンの壁に近く、おそらく日中でもほとんど陽の光が当たらないのだろう。やけにじめじめとしていて、陰鬱な雰囲気醸し出していた。

それを、ルウは「寂れている」と表現する。

「たしかに、寂れているわね……大都市には似合わない光景だわ」立ち止まり、フランチェスカはバラック小屋が軒を連ねる町並みを見渡した。ふと、その隣でルウは「貧乏人」という言葉を思い出す。

ここって、もしかして、そう言いかけたときだった。突然足音と気配が、二人の背後に迫った。

「おいっ、お前たち」

声をかけられ、驚いたルウとフランチェスカは各々武器を手に、振り返った。こんな場所で暴れたくはないが、彼らに向けられる視線には、明らかな敵意が含まれていたからだ。

「ガモーフ人に、ダイムガルド人か？ お前ら、こんなところで何してやがる」

ドスの効いた、ガラの悪い声を纏いながら、こちらへ近づいてくるのは、初老の男だった。白髪が目立つ頭に似合わず、どこか野犬のような鋭い目つき、歳に似合わぬ逞しい双腕。返答次第で、タダじゃおかない、と彫りの深い顔に書いてあった。

35. 城郭都市ハイゼノン（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せ下さい。

36. 再会

旅籠ギルドは、ギルド・リッターや魔法使いギルドと同じく、ギルド連盟に加盟している、商業系ギルドのひとつだ。商業系ギルドは、既得権益を守るために結成されたギルドの、本来の姿と言われ、例えば商人の集まりであるギルド・マーチャントや、交易を執り行う海運ギルド、辻馬車ギルドなどがそれに当たり、経済の一端を担っている、商品やサービスを提供する。旅籠ギルドの場合、旅人に宿泊施設提供することを主としており、人種や所属、信教において客を選ぶことはなく、安価な寝床と食事を提供する、という誇りを持っている。

しかし、最初は愛想良く迎えてくれる、どの宿屋の主人も、ガモーフ人とダイムガルド人の連れがいる、と口にした途端、宿泊を断る始末。これでは、ギルドとして本末転倒である。よっぽど、ギルド・リッターの誇りを捨てて、自らの信念に従ったフランチェスカの方が立派だ、とアルサスと思う。

センテ・レーバン人の前に、旅籠ギルドの一員としての誇りはないのか？ 十二軒目の宿屋に断られたアルサスは、とうとう堪忍袋の緒が切れて、主人にぶつかった。

「そう言われてもねえ……。あたしは、ヨルンで家族を失ったわけじゃないけど、ハイゼノンには、ヨルンの悲劇で命を落とした者も多い。前ハイゼノン公も、その一人だ。それに、センテ・レーバン人のあんたなら分かるだろう？ もともと、この国の人間は、ガモーフの人間が嫌いなんだ。その感情が、ヨルンで憎しみに変わった。その片棒を担いだ形になった、ダイムガルド人も同様だよ」

恰幅のいい、いかにも世話好きそうな宿屋の女主人は困った顔をしながらも、つらつらとそう答えた。

「だけど、俺たちはただの旅人だぜ？ それに、代表者はセンテ・レーバン人の俺だ」

「いや、あたしは泊めてあげてもいいと思ってるんだよ。だけどね、領主さまが『だめだ』と言う以上、あたしにはどうしようもないんだ、ごめんね、あんたたち」

「そう言えば、最初の宿屋のハゲ親父もそんなこと言ってたな……」

「おや、あんたたち、知らないのかい？　ここハイゼノンでは、領主さまから『市民は貧乏人と外国人には市民権を与えない』っていうお触れが出ているんだよ」

女主人がカウンターの引き出しから取り出したのは、ハイゼノン公の名が入った一枚の通達書であった。おそらく、ハイゼノン市民の各戸に配られたものなのだろう。

「そいつはまた、乱暴な話だな……」

アルサスは、受け取った通達書に目を通す。

「十年前から、この街には、戦災で家を失った人達や、折しの異常気象やらで住む家や村を失った人達が、流れ着くようになったんだよ。街の西側には、そういった人たちが住み着いた『貧民街』というところがあるのさ」

「貧民ですか？　でも、その方たちは、センテ・レーバンの方々なんですよね」

ネルが横から尋ねる。この宿屋の女主人も、ネルのことをセンテ・レーバン人だと疑っていない様子だった。

「そうとも言い切れないんだよ。ほら、ガモーフでも、辺境にある村とか町が滅びて、難民になった人達がたくさんいるでしょ？　そういう人たちまで、アトリアを越えて、貧民街に集まってるんだ」

「だからって、このお触れは度が過ぎてるだろう」

「確かにそうだけどね……。でも、貧民たちは常々、待遇改善を求めて、大通りでデモを起こしたりしてるんだ。貧民たちのリーダーの名前、なんて言ったかしらね」

「それで、ハイゼノン市民は、貧乏人と外国人には関わるなってわけか」

「もともと、遺跡の高い壁に守られたこの街の人たちは、同じ民族

でも他所の人たちや、外国人たちに免疫がないんだ。そういう感情がない交ぜになって、もしも市民と貧民が衝突する、なんてことになったらいけないだろ？　だから、心優しい領主さまは、みんなを守るためにお触れをだしたんだと、あたしは思ってるけどね」

女主人の話に耳を傾けながら、通達書に目を通したアルサスは、「なるほどね」と呟いた。

通達書には長々と、貧民街の人間とハイゼノン市民を区別する旨が記され、商店やそれに関与するギルドに対して、貧民や外国人を相手に商売をしてはならない、という文言が書かれていた。

「そういうことだから、悪いけどあんたたちを、泊めてあげられない。もしも、そのお触れを破ったら、この宿を取り上げられちゃうからね」

そう言われてしまえば、アルサスも無理強いできない。レイヴンなどという、やくざな生業をしていても、裏ギルドのような野蛮な人間だとは思いたくない。そういう、誇りがレイヴンなりにもある。だが、そうは言っても、寝床を確保できなかったとなれば、街角で野宿するほかなくなってしまう。メルを探し、「奏世の力」の真実に迫る手がかりを見つけ出すまで、何日この街に逗留することになるかも分からないというのに……。

女主人の宿を後にした、アルサスとネルは途方にくれてしまった。もうじき、夜が来ようとする薄暮の町並み。温暖なガモーフ神国と違って、センチ・レーバンの夜は冷え込む。ネルやルウの事を思えばこそ、安心できる屋根のついた寝床が欲しいところだ。

「残り一軒を当たってみるか……」

一人ごちたアルサスはネルの手を引いて、溜息交じりに薄暮の街を歩き出す。当てはないが、一件一件しらみつぶしに当たってみるほかないだろう。路地を曲がり、次なる宿屋を探す。センチ・レーバン有数の大都市にも拘らず、大小あわせて十三軒ほどしか宿がないというのも、このハイゼノンがどのような街がをしめるかのようだ。

薄暮の町並みは、すでに夜の支度を始め、人もまばらに、時折、夕餉ゆうけの香りが民家から漂ってくるばかり。ルウではないが、そろそろお腹が空いてきたな、などと思っていると、軒先に民宿を意味する魔法文字の書かれた看板が見えてきた。

「これが最後の希望。いっそ、神頼みしたい気分だ」

「どうか、アストレアさまのご加護がありますように」

二人は、祈るような気持ちで、宿屋の玄関をくぐる。だが、その足を止めさせたのは、通りをはさんで反対側の薄暗い路地裏から聞こえてきた、随分とガラの悪い声だった。

「ガモーフのガキが、市民街をうろついていて、いいと思ってるのか？」

アルサスとネルは思わず振り返ったが、路地裏は薄暗く、明らかに大人の男が誰かに絡んでいると言うことしか分からない。しかし、彼の言葉から察するに、その誰かはガモーフ人の子どものだろう。

「まさか、ルウのやつ!？」

アルサスの脳裏に、嫌な予感が過ぎる。だが、先に踵を返して走り出したのは、ネルの方だった。アルサスの手を振りほどき、路地裏へと駆け込むネル。慌てて、アルサスもその後を追って路地裏へと駆け込んだ。

「なんだ、ガモーフ人のクセに、随分と可愛らしい顔してんじゃねえか。裏ギルドの奴隷商人どもに売ったら、好事家が高い値で買ってくれるかもしれないな」

路地の奥、真っ暗なその先から、別の男の声が聞こえてくる。やはり、光のない路地裏は真っ暗で、その姿は見えないが、どうやらガモーフ人の子どもに絡む男は、一人ではないようだ。

「好事家って、どんなヤツに売るつもりなんだよ？」

また別の男の声、続いて聞こえてくるのは、ゲヒヤヒヤと品のない笑い声の輪唱だった。ネルは、意を決して、男たちに近づこうと一歩踏み出す。すると、背後から突然腕をつかまれ引っ張られた。思わず、声を上げそうになったのだが、それがアルサスであること

に気づき、自ら両手で口許を塞いだ。

「下がってろ」

と、アルサスの目が言っている。すでに彼の手には、魔法文字の刻まれた剣が握られていた。

「やめてください、離してっ!!」

男たちの笑い声の間から、女の子の悲鳴が聞こえてくる。それが誰のものかは分からなかったが、少なくともルウでないことは確かだ。アルサスは胸をなでおろすと共に、剣を構えて男たちの背中を睨みつけた。

「おい、チンピラども。その薄汚い手を離せよっ」

アルサスの挑発的な口調を投げかけられた男たちは一斉にこちらは分かるが、あまり賢そうな面構えはしていない。アルサスの吐いた、チンピラと言う言葉が、あまりにも似合いすぎているような男たちだ。そんな彼らの脇には、細い腕をつかまれ顔をしかめる少女の姿がある。年の頃は、十三、四歳と言ったところだろうか。ルウと同じような黒髪と、深い翠の瞳^{みどり}。愛らしい丸い顔つきに、カチュアの鎖が紋様された、藍色のワンピースは彼女がガモーフ人であることの象徴のようだ。

はっと、息を呑む声がある。口許を押さえたままのネルが、大きな瞳を丸くしている。そのネルの反応だけで、その少女が誰なのか、アルサスにも察しがついた。

「なんだ、てめえ? 痛い目見たくなかったら、あっちへ行ってろ」

男の一人が、凄みを利かせた声音でアルサスを脅す。しかし、そんなことに臆するようなアルサスではない。いつものように、余裕ある笑みを浮かべながら、

「痛い目ってどんなだよ。頭悪いの丸出しだぜ、おっさん」

「なんだとっ!?!」

軽々と挑発に乗る男は、袖を捲くり、拳を作る。だが、脇に控えていた別の男が、それを制して、アルサスの白銀の鎧を指差す。

「さて、ガキの鎧。ありゃ、ギルド・リッターの鎧だ」

「ギルドがどうした。ここは、ハイゼノンだ。そんなこと、関係ねえ！！」

仲間の制止も聞かず、男はアルサスに飛び掛った。筋肉のよくついた豪腕が唸りを上げ、アルサスの顔面に迫る。だが、その拳がアルサスの鼻頭を叩いたと思った瞬間、そこにアルサスの姿はなかった。

「遅いんだよっ！」

拳が空振りした上に、真横からアルサスの声がして、男は驚きを隠せずそちらに顔を向ける。だが、次の拍子に彼の意識は、何処かへと遠のいてしまった。アルサスが剣の柄で男の後頭部を叩いたからだ。さらにアルサスは、地面を蹴って、雷が天より降り注ぐ速さで、もう一人の腹に膝蹴りをねじりこむ。全身のバネを利用したアルサスの蹴りは、体躯の割りに思い一撃となって、男を昏倒させた。「これで二人。後はお前だけだな」

二人の男が気を失うまで、数秒間、身動きできなかった最後の男は、その首筋に冷たい剣の切っ先を向けられ、ひいつ、と情けない悲鳴を上げた。

「その子を離してとつとつ、この場からずらかるか、この剣に首を刎ねとばされるか、好きなほうを選んでくれよ」

ニヤリとアルサスは顔をゆがめた。もちろん、脅しのためであり、剣を振るつもりなどない。ネルの目の前で、人殺しをしたくはない。

「か、勘弁してくれよおっ！」

ガモーフ人の少女の細腕を離れた男は、大概のチンピラがそうであるように、情けない声を上げながら、しかも、地面と仲良しになっている二人の仲間を見捨てて、脱兎の如く逃げ出した。

アルサスは、やれやれ、といった表情で逃げ行く男の背中を見送りながら、剣を鞘に収めた。その傍らで、少女はへなへなと膝を折った。よほど怖かったのだろう、まだその小さな肩が小刻みに震えている。

「ありがとうございます……」

アルサスに礼を述べようとした少女の顔が、冷たく凍りつく。彼女の視線はアルサスを通り越してその向こうで、驚きと歓喜の表情を浮かべるネルに向けられていた。

「メル……！ やっぱり無事だったんですね。良かった！」

目頭にいっぱい涙をためて、ネルが声を上擦らせた。やはり、その少女はネルの探していた妹、メル・リュミレであったと、アルサスは得心したものの、肝心のメルの顔はこわばっており、とても偶然の再会を喜んでいるようには見えなかった。

確かに、ネルの妹と言う少女は、長い黒髪を丁寧な三つ編みにしていること以外、ネルに似ているところは一つもない。ガモーフ人の女の子らしい愛らしい顔つきも、髪や目、肌の色もネルとは違う。もともとネルはリュミレ夫妻に拾われた養女であり、メルは夫妻の実子である。そのた所為だったとしても、同じ環境で暮らせば、少なからず似てくるものだが、二人の雰囲気はあまりにも違った。ネルを春とたとえるなら、メルは冬のように冷たい顔色だったのだ。

「お姉ちゃん……何でこんなところにいるのよ」

風に攫われそうな声で、メルはそう言うと、すつくと立ち上がり、何故かアルサスの脇を通り抜け、ネルを押し退けて走り出した。まるで、ネルから逃げるように。

「メル！？ どうしたのですか？」

突然のメルの行動に、困惑を隠しきれないネルは、慌ててメルを追いかける。あっという間に、彼女たちの姿は薄暮の街に消えてしまう。

ただ一人、蚊帳の外に置かれたような気分になったアルサスは、姉妹の間に何があるのか、それを勘繰ることも出来ず、二人を探した。

36. 再会（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せください。

37. 姉妹の事情

「いや、驚かせてしまったかな。そんな物騒なものを持っているから、もしやと警戒してしまった。わしは、クレイグ・ノースと言う。お前たちは、見たところ、ダイムガルド人とガモーフ人のようだが……」

人壁に立てかけられた槍を指差し、野犬のようだと思った初老の男……クレイグの瞳は弱いランプの下で、優しく微笑みを湛えた。バラック小屋の中は、人が最低限生活できるだけのものしかなく、また人家というには、人が五人も入ればいっぱいになってしまふほど、恐ろしく狭い。フランチェスカとルウが腰掛けた椅子も、椅子と言うにはお粗末な、ただの丸太で、テーブルは少しばかり斜めになっている。そんなテーブルの上には、威^{おど}かしたお詫びにと、フランチェスカたちのためにクレイグが淹れてくれた「モック」という木の根を煎じたコーヒーが、ゆらゆらと湯気を立てていた。

フランチェスカの隣でルウは、歩きつかれたのか、その湯気を眺めながら、ぼんやりとしている。ともすれば、舟をこぎ始めそうだった。

「わたしは、フランチェスカ・ハイト。そして、この子はルウ・パットン、ルミナス魔法学校の学生です」

フランチェスカが名乗ると、クレイグは深い彫りの奥にある瞳で、しげしげと二人の事を観察する。

「難民というわけではなさそうだな」

「ええ、色々と事情があつて、この街にやってきました。ですが、この町の方々は、ひどく疎外的ですわね」

あてつけるつもりはないが、正直なところを口にする。すると、クレイグは、白髪交じりの頭をぼりぼりとかいて、溜息をついた。

「やつらは、街の端に居座る、わしらが疎ましいんだらう。自分たちは、何不自由なく暮らしているのに、街の平和と安全、美観を損

ねるわしらが、邪魔で邪魔で仕方がないと、顔に書いてある。だから、難民や仕事を求めてやって来る、外国人や貧乏人は毛嫌いだ」

クレイグの言葉は、やっかみのようにも聞こえるが、あえてフランチェスカは指摘しなかった。

「言ってみれば、ここは、社会の最底辺の受け皿だ。現実の在り処とも言える」

そう言って、クレイグはモックをあおる。やはり飲みなれた人間でも不味いのか、一瞬だけクレイグは顔をしかめた。

情報集めに街をさまよった、ルウとフランチェスカがたどり着いたのは、ハイゼノンの西側、最も壁に近い一帯にある、貧民街と呼ばれる場所だった。その名の通り、貧しい者たちが肩を寄せ合って暮らしている。その大半は、他の街から仕事を求めて移住してきた者や、戦災孤児、自分の住む村を失ったガモーフ人と言った、まさに貧民たちだった。多かれ少なかれ、どこの国のどんな大都市にもこうした貧民街と呼ばれる場所はあるものなのだが、ここはある意味特別だった。なぜか？ それは統べて、この街がハイゼノンの壁と呼ばれる、巨大な遺跡の壁に取り囲まれていることに起因している。

「では、あなたは、この貧民街の人達のまとめ役、ということですか？」

しばらく、愚痴のようなクレイグの話を聞いたフランチェスカは、このまま愚にもつかない老人のやっかみを聞かされ続けるのも面倒だ、と内心に思い、話を変えるべくそう切り出した。

「ああ。わしは、貧民街では古株だからな。もとは、この街に屋敷を持っていたんだが、この足の所為で、転落人生だ」

自嘲気味に言ったクレイグはズボンの裾をめくって見せた。そこから覗くのは、人間の足ではなく、木製の義足だった。そういえば、クレイグの歩き方が少しおかしかった事を思い出す。尋ねるまでもなく、クレイグは傷痍軍人の類なのだろう。

「じゃあ、この街にある遺跡についてもお詳しいのですか？」

「なんだ？ わしにも分かることと分からんことがあるぞ」

怪訝な顔をするクレイグ。フランチェスカは本題に移る前に、モックを口に運んだ。泥のような味がする。しかし、鼻に抜けていくなんとも香ばしい匂いは、好きな人にはたまらないだろう。

「遺跡のことです。わたしたちには、この街の遺跡を訪ねて、ガモーフはウェスアより来たんです」

「ほう、それはまた、遠路はるばるなことだ。しかし、何でまた？」

「それは……」

言いかけたフランチェスカは、ちらりとルウの方に目をやった。

とうとう、瞼がくつついてしまったルウは、座ったまま、器用に寝息を立て始めていた。

「この子の研究を手伝うためです」

と、口に出してから、フランチェスカは我ながら嘘が下手だと思った。しかし、クレイグは疑う様子もなく、ルウの着る、ルミナス魔法学校の制服に目をやった。フランチェスカの鎧もそうだが、その衣裳は、それだけで身分の証になる。

「それで、ここの遺跡はあのミスリルの壁だけなんですか？」

たとえば、地下に坑道のようなものがあつたりはしませんか？」

「という話は聞いたことがないな。そもそも、そんなものがあれば、今頃ギルドの学者どもが、研究に研究を重ねているだろうよ」

確かにその通りだ。フランチェスカには、遺跡に関する学術的な知識はないが、遺跡船のように、まだ誰も発見したことのない、秘密の遺跡が眠っていたとしても不思議ではない。しかし、このように街となり、人の多い場所にある遺跡が、学者たちによって、その全容を明らかにされていないはずはない。

やはり、ダスカードへ向かうほかないのか。クレイグの言葉を受けて、フランチェスカは脳裏に、遙か遠方の故郷、ダイムガルドの遺跡を思い浮かべた。ダスカードへは、以前、ギルド・リッターに入ったばかりの頃、一度だけ赴いたことがある。フランチェスカが、

アルサスたちの見た案内役を買って出ることには、何の不足もないだろう。

「さてと、ランプの燃料ももったいない。その少年もうオネムのようなだ。お前たち、どうせ、夜を明かすところもないんだろう？ だったら、家に泊まっていくといい。もうじき、同居人も帰ってくるはずだ」

クレイグは、義足の足を庇うように立ち上がった。どうやらこの男には、ハイゼノンにあって、民族意識の薄い男のようだ。警戒するに越したことはないが、その厚意に甘えてもいいかもしれない、とフランチェスカは思った。だが、その前にアルサスたちと連絡を取り合わなければ。

「同居人というのは？」

フランチェスカが尋ねる。

「浮浪児だよ。ちよつと、お使いごとを頼んでいて、出ているがこれこれ小一時間は経っている。そろそろ戻ってくるはずだ」

時計代わりにクレイグが確認するのは、板張りの壁の隙間から覗く、外の暗さだ。

「浮浪児ですか……。いや、わたしたちにも、あと二人連れがいるんです」

と、フランチェスカが打ち明けると、クレイグは驚いて少しだけ困ったような顔をする。この狭いバラック小屋に、クレイグと同居人、そしてアルサスたち四人が寝るようなスペースはどこにもない。狭苦しいことこの上ないのだ。

「ソアンにでも、頼んでみるか、ちよつと待っていなさい」

そう言うと、クレイグはテーブルを離れ、玄関扉代わりの板をどける。すると、それを待っていたかのように、聞き覚えのある声がバラック小屋の中に舞い込んできた。

「待ってください、メル！！」

あの声は……。フランチェスカが振り向く前に、目を覚ましたルウが言う。

「ネルお姉ちゃんの声だ!!」

どうして、メルが突然逃げ出したのか、ネルにはちっとも分からなかった。何度も待ってくださいと、促しては見たものの、メルは振り向きもしないで、走っていく。そうして、ようやくメルの腕を掴んだのは、みすばらしいブラック小屋が立ち並ぶ、貧民街の真ん中だった。

「待ってください、メル!!」

「離してっ!! 来ないでっ!!」

振り向いたメルは、金切り声を上げて、ネルの腕を振り解いた。そして、向ける眼差しは、ネルの知る妹の目つきではなかった。

「どうして、逃げるんですか？ わたしの顔を忘れたんですか？」最愛の家族に、冷たく睨みつけられたネルは、悲しくなって問いかけた。

「忘れるもんかっ!!」

「じゃあ、どうして。どうしてそんな風に怒ってるんですか？ せっかく、せっかく再会できたのに……」

再会できたことが嬉しくないのだろうか？ いや、そんなことはない、とネルは心に言い聞かせる。だが、返ってきた言葉は、ネルの胸を深く抉った。

「うるさい。わたしは二度とお姉ちゃんの顔なんか、見たくなかった!!」

「どうして、そんなこと……」

困惑するネル。ラクシャに居た頃、何度か喧嘩をしたことがある。少なくともそれは、ごくありふれた姉妹喧嘩であって、憎しみをぶつけあうようなものではなかった。しかし、眼前のメルが吐き出した言葉は、何故か黒々とした憎悪にまみれている。

「どうして、どうして、どうしてっ、聞かなきゃ分らないの？ あたしが言わなきゃ分らないの!？」

「ごめんなさい、わたし馬鹿だから……」

睨みつける翠の瞳から、逃れるように、ネルは俯いた。

「全部、ぜんぶっ、お姉ちゃんの所為なんだ。三ヶ月間、あたしはずっとお姉ちゃんが死んでればいいって思ってたっ」

「えっ？」

「銀の乙女だかなんだか知らないけど、お姉ちゃんの所為で、ラクシャ村の人達はみんな、あの黒い鎧の人たちに殺された！むらおき村長さまも、カエデお婆も、リンもチェットも、みんな殺された！お姉ちゃんが村にいたからだっ！お姉ちゃんがいなければ、お父さんもお母さんも死なずに済んだんだ！！」

恨み言を次々と重ねるメルに、そうであって欲しくないと思っていた現実を突きつけられたネルは、思わずよろめいた。地震でもないのに、空がぐらぐらと揺れ、地面が水で出来ているように不安定な感覚を覚える。お父さんと、お母さんが死んだ……？

「消えてっ！今すぐあたしの前から消えてっ！！」

唐突な訣別の言葉。血は繋がっていなくとも、ずっと妹として共に育ってきた。三ヶ月前のあの日まで、一緒に笑いあった。なのに、たった三ヶ月で、目の前の妹は、怒りを露にする。家族を、村を、無慈悲な者たちによって奪われた恨みを、悉く言葉に乗せて、ぶつけてくる。

「おおーいっ！お前らこんなトコで、喧嘩なんかしてんじゃねえよっ！！」

背後から声が飛んでくる。遅ればせながら追いついてきたアルサスだ。アルサスは、こちらへと走り寄ると、仲裁者よろしく、ネルとメルの間割って入った。

「喧嘩の理由は分からないけど、折角会えたんだ、ちっとは喜べ」
アルサスの言葉に、メルはぷいっとそっぽを向く。

「これっぽっちも嬉しくなんか無い。っていうか、あんた誰？」

「年上に向かって、あんたって言うなよ。俺は、レイヴンのアルサス。君は、ネルの妹さん？」

確認の意味も込めて、アルサスそう尋ねたが、メルはネルの顔も

アルサスの顔も見ないで、その問いかけに答えようとはしなかった。アルサスはやや困った視線を、ネルに向ける。そして、ズボンのポケットを探ると、何やら取り出して、メルに差し出した。

それは、エントの森でアルサスが拾った、バレッタだった。アルサスが預かっていたものだ。

「どうして、それを？　森で捨てたのに……」
ちらり、とバレッタに目をやったメルはやや驚いてみせる。

「これを見つけたから、俺たちはハイゼノンにやって来たんだ」

そう言って、アルサスはメルの手を取って、まだ幼さの残る手のひらに、ちょこんとそれを載せた。しかし、メルは何を思ったのか、アルサスにまで辛辣な視線を向けて、受け取ったバレッタを地面に掛けて、投げつけた。

「こんなもの、いらないうっ！」

派手な音を立てて、バレッタの金具が飛んでいく。まるで、メルの憎しみを表現するかのよう。それに比して、アルサスたちは沈黙に包まれた。憎しみ、困惑、悲しみ、色々な感情だけが、沈黙の三角形の真ん中をぐるぐると飛び交う。

「なんだなんだ、メル。大声出して。領主親衛隊にモメごとだと思われたら、どうするんだ？」

メルの背後、バラック小屋の一つが扉を開ける。中から現れたのは、初老の男だ。目つきは鋭く、一見して軍人であった事を匂わせてはいるが、見た目はひどくみすばらしい。おそらく、貧民なのだろう。メルとこの男は知り合いのようだが、ネルはそんな男のことは知らない。改めて、メルが言った「三ヶ月間」が、姉であるネルの知らない月日であった事を、感じずに入れなかった。

「クレイグさん……ごめんなさい」

振り返ったメルは男の名を呼んで頭を下げる。クレイグと呼ばれた初老の男は、メルのそばにいる、アルサスとネルを見止めて、「誰だ、そいつらは？」と言った。

「あの、わたしたちは……」

口を開きかけた、ネルの瞳が、ブラック小屋から出てきた別の人影を捉えた。見覚えのある顔が二つ。向こうも驚いたような顔をしてこちらを見ている。

「アルサス、ネルお姉ちゃんっ！」

二人の名を叫んで勢いよくブラック小屋から駆け出し、ネルの元へと駆け寄ってきたのは、ルウだった。

37. 姉妹の事情（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せください。

38. 妹

「あなただけでも、生き延びて」

母はそう言って、メルを家の窓から逃がした。メルは、一人で逃げたくない、何度も母に言っただけで、母は窓を閉じ、「行きなさい」と目配せをする。二人の娘、一人は実の娘、もう一人は十年前に拾った娘。しかし、そのどちらにも生き延びて欲しいと言う母の願いだっただけかもしれない。

メルは、恐怖の中に後悔の二文字を描きながら、母の意を汲んだ。姉のように大人しく利口でない妹は、いつも母の手を煩わせてばかりだった。だから、せめて最後くらいは、母の気持ちに沿うことが、実の娘のして出来ることだと、心に言い聞かせた。

村は、突然の襲撃によって、紅蓮の炎に包まれた。襲ってきたのは、黒い鎧を身に纏ったセンチ・レーバン人たち。血も涙もない、残虐非道な連中だった。迷うことなく、人家に火をつけ、逃げ出してきたものを剣で切り裂き、槍で突く。メルは、息を殺して村のほとりの森に身を潜め、その凄惨な村の姿を目に焼き付けた。そして、やがて、黒い鎧の男たちは我が家へと忍び寄った。

窓にかけられた白いカーテンに、母の血飛沫が花のように咲いたのは、今も忘れられない。そして、炎の光に照らされて、村のあちこちに無造作に転がった、遺体の数々は、今も瞼に焼き付いている。その中に父の姿を見つけたときの絶望感は今でも、胸を抉る。

怖くて怖くて仕方がなかった。生き延びて、という母の言葉だけを頼りに、メルはひたすらに逃げた。村から、いや悲劇的な現実から、一步でも遠くへ離れたかった……。

黒い鎧の男たちが、村を襲った理由はとても呆れるほど単純なことだった。メルの姉である、ネルを連れ去るため。どうして彼らが、姉を攫おうとしたのかは、分からない。

姉はみなしごだった。メルがまだ四つの頃、森で彷徨っていた少

女を、不憫に思った父と母が引き取った。そうして、家族の一人となった少女は、何故かあらゆる記憶を失くしており、住んでいた場所も自分の名前すら分からなかった。だから、母は、メルの名前になぞらえて、「ネル」という名前を与えた。

自分より年上だったので、メルはネルの事を「お姉ちゃん」と呼んだ。そんなネルは、記憶を失っても、心優しい女の子であり、メルの事を本当の妹のように可愛がってくれた。だから、メルも姉となったネルのことを慕った。それは、とても平穏で暖かな毎日。

しかし、一瞬でそれは、脆くも崩れ去った。黒い鎧の男たちは「銀色の髪の娘を差し出せば、お前たちの命までは奪わない」と言っただけで、そんな約束、何の保障もないことくらい、十四歳のメルにも分かる。たとえ、父たちが姉を引き渡したところで、彼らは容赦なくラクシャ村を蹂躪しただろう。

アストレアさま、どうか大好きなお姉ちゃんをお助けください！
クアドラの山をエントの森方面へと駆け下りながら、空に浮かぶ月に、何度もそうねがった。しかし、村から一步離れるごとに、熱の冷めてきた脳裏に浮かぶのは、怒りの色であった。

もしも、お姉ちゃんがいなかったら？ 村は襲われることもなく、誰も死ぬこともなく、リヤマの世話をする平穏な暮らしが続いていたんじゃないだろうか。

お姉ちゃんさえいなかったら……！

ラクシャ村を後に、メルはエントの森を彷徨い、不安と恐怖の中で、ついに結論に至った。そのメルの心境の変化を辿ることは難しい。本人も、分からないだろう。だが、一度そう思うと、それが正しいか間違いかは、もう、どうだってよく、胸の内に生じた憎悪の芽は、止め処なく膨らんでいく。夢だと思いたいような、悲惨な現実の責任を誰かに負わせなければ、メルの心はとても平静を保っていられる状況ではなかったのだ。

そして、訣別の証として、三つ編みの根元を止めていた、バレッタを捨てた。姉が、誕生日を祝って作ってくれたものだ。その時、

憎しみは完全な形で、メルの上に根を張った。あんなに好きだった、姉がもはや憎くて仕方がない。人を好きになるよりも、嫌になることの方が、こんなにも簡単だという事を、メルは始めて知った。

村を出て、一月あまり。エントの森を抜け、アトリアの山を越える。その先が外国であることをメルは知らなかった。行く当てなんて、どこにもなかった。そもそも、ラクシャ村から一步も出たことのないメルは、何処に行けば、他の街にたどり着けるのか、それさえも分からない。それでも、矛先を歪めた怒りだけが膨らみつづけ、ただ無意味にメル足を動かした。草の根をかじり、川の水を飲み、生き延びてという母の言葉だけを頼りに、冒険家をして険しいと言われる、ガモーフハイゼノンの山道を越え、ついに眼下にハイゼノンの街が見えたとき、メルは力尽きた。

そんな彼女を救ったのは、芝刈りに現れたクレイグだった。クレイグは、行き倒れとなったメルを担ぎ、貧民街で彼女を介抱した。貧民街の人たちは、メルがガモーフの人間だと知っても、嫌な顔一つしない、まるで我が娘のように、面倒を見てくれる。時には暖かな粥を持ってきてくれたり、ラクシャからの長旅でぼろぼろになってしまったカチュアのワンピースを丁寧に繕ってくれたり。その一つ一つの優しさが、荒みかけたメルの上と体を癒してくれた。困った時はお互い様だ、とクレイグは笑うが、メルにとっては、命の恩人にも等しい存在だった。

そうして、ひと月あまり、クレイグたちと生活を共にして、ようやくハイゼノンの暮らしにも慣れ始めたその日、クレイグの言いつけで出かけた先で、ハイゼノン市民の男たちに絡まれたところを助けてくれたのは、見知らぬ赤い瞳の少年と……あの日以来、ずっと憎み続けた、姉だった。

さすがにクレイグのバラック小屋に、アルサスたちの寝床はない。ということ、アルサスとルウは、クレイグの家に、ネルとフラン

チェスカはクレイグの隣家、ソアンの家にお世話になることとなった。ソアンは、十年前のヨルンの悲劇で、夫と息子を同時に失くし、この貧民街に流れ着いたらしい。気のいい老婦人で、寝床を貸すことに、快く同意してくれた。

貧民街の人々は、やたらと気さくなところがあり、ことあるごとに「困ったとはお互い様」と彼らは、合言葉のようにして言う。大都市ハイゼノンの隅っこで肩を寄せ合いながら暮らしていくには、そういう心がけが大事なのだ。

しかし、一方で、ハイゼノン市民からの風当たりは冷たい。「貧乏人」と烙印を押し、まるで害虫かなにかのような目で、彼らの事を見る。貧民たちの中には、ガモーフからの難民も含まれており、もともとこの街にある、外国への悪感情と併せて、市民たちは貧民を蔑むのだ。それなのに、貧民たちは居心地の悪い、ハイゼノンから出て行こうとはしない。

「不毛の壁の外で暮らすより、バカにされたって、壁の中で暮らす方がマシだ」

と、貧民たちは口をそろえて言う。確かに、ひもじくとも、明日をつなぐための食べるものや、清潔な水がここには揃っている。街の外は、異常気象や飢饉などで、徐々に村が消え去っている有様であることを考えれば、彼らの言うことには一理ある。

だが、アルサスはそのに、この世のひずみと、悪循環を感じずにはいられなかった。世界は刻々と悪い方向に進んでいる。それが、この壁の内側に吸い寄せられて、溜まっていつていてのではないか？ 一度壁の中に入ったひずみは、そのまま壁の外へ出ることはなく、ハイゼノンの街を埋め尽くしているのではないか？ 貧民と市民の区別、それこそが、ひずんだ世界の縮図ではないか？

薄手の毛布に包まり、穴の開いた天井から見える小さな星を見つめながら、アルサスは思った。寝床言っても、テーブルをどけて毛布を敷いただけのお粗末なものであるにも拘らず、隣では、ルウが心地よさそうな寝息を立てている。

固い床の所為で、背中が痛いからか、なかなかルウのように寝付けない。寝付けないと、余計な思案が頭の中を巡っていく。たつぷり、一時間以上はそうしているだろうか。これでは、明日からの遺跡調査に響いてしまう、と感じたアルサスは、気分を変えるため、こっそりと寢床を抜け出すことにした。

なるべく、クレイグとルウを起こさないように気を遣いながら、玄關戸を開き外に出ると、ややひんやりとした夜風が、ふわりと頬に当たる。

「あれは……」

背伸びをしたアルサスは、前方の暗がりには、ぼんやりと星空をみあげる人影を見つけた。草色のワンピース。三つ編みにした長い黒髪は、メルの後姿だとすぐに気づく。メルも、クレイグの家から出てきたアルサスに気づいた。

「アルサスさん、でしたよね？ 眠れませんか？」

アルサスたちに自らの寢床を提供したため、メルはソアンの家に泊まることになってしまった。だが、メルが寢床を抜け出しているのは、同じソアンの家に泊めてもらっている、ネルの所為だろう。

メルが姉であるネルの事を、恨んでいることは分かっている。それがお門違いもいいところだということを、アルサスは告げたかったのだが、ネルに止められた。「いいんです」なんて、ネルは言っただけで、なにがいいのかアルサスには分からない。家族に誤解されたままで、いいはずなんてない……。

「メルこそ、眠れないの？」

と、アルサスが問えば、案の定返答に困ったように、メルは俯く。アルサスは、メルの傍までやってくると、同じように夜空の星を見上げ、少しばかり溜息を漏らした。

「俺にも、妹がいるんだ。君より少し年下だけど、俺より利口で賢い」

いきなり、何の脈絡もなく切り出したアルサスに、メルは少し怪訝な顔をして、「何の話ですか？」と問いかける。すると、アルサ

スはにっこりと笑って、

「ネルのことだよ」

と返し、話を続けた。

「いろいろワケがあつて、俺と妹は半分しか血が繋がってないんだ。しかも、妹と始めて対面したのは、俺が十歳になった時のことだ。でも、妹は俺を慕ってくれたし、俺も妹のことを大切に思ってる。だって、俺たちは家族だから」

メルは何も言わない。ただ押し黙ったまま、アルサスの言葉に耳を傾けていた。アルサスは、ポケットから、今一度、バレッタを取り出した。メルが怒りに任せて投げつけ、止め具は壊れてしまったが、ネルが作った飾りは、傷一つついていない。

「エントの森でこいつを見つけたとき、ネルは心のそこから、君の無事を喜んでいた。その心に偽りなんか無い。十年一緒に暮らせば、血のつながりがなくなつたって、家族だ。家族が家族の事を心配しないなんて、ありえないと俺は思うんだ」

アルサスは、メルの手のひらにバレッタを載せ、ルミナス島への航路での出来事を聞かせた。甲板に佇んだネルが、月影を眺めつつ、その瞳に涙を引いていたこと。メルのことが心配だと、アルサスに打ち明けたこと。

「ラクシャ村が襲われたのは、ネルの所為かもしれない。でも、本当に悪いのは黒衣の騎士団の連中だ」

「分かってます。でも、あたしは……」

お姉ちゃんの事を許せない。そう続いたのだろう。しかし、メルは言葉を飲み込んだ。じっと、バレッタの飾り彫りを見つめ、思い出すのはそれをプレゼントされた日のこと。お姉ちゃんは、何処までも優しく、何処までも自分の事を想ってくれる。その反面、お姉ちゃんがいなければ、ラクシャ村が襲われることはなかったという結論をかき消すことが出来ない。それは、アルサスにも分かるほど、はつきりとした葛藤として、メルの顔に現れていた。

「俺たちは、ネルが何故攫われなきゃいけないかったのか、それを知

るために旅をしている……。その旅が何時終わるのか、分からない。だから、すぐに心の整理がつかなくてもいい。でも、旅が終わって、ネルが……お姉ちゃんが帰ってきたら、その時はもう一度家族として迎え入れてやってくれないか？ この世にたった二人だけの姉妹なんだからさ」

アルサスがそう言うと、メルはそつと顔を上げた。そして、ちらりとアルサスの赤い瞳と視線を合わせ、また、バレツタに目を落とす。何度かそうして、メルはこくりと頷き、「努力します」と付け加えた。

38. 妹（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せください。

39. ハイゼノン公のお触れ

遠くガモーフより訪れたと言う、旅の少年たちに寢床を貸してやった翌朝、クレイグは騒々しい声にたたき起こされた。

「クレイグの旦那っ！！ 大変ですぜっ！」

玄関戸を乱暴に叩くのは、クレイグと同じ貧民街に住む若者モートンである。モートンは、家主であるクレイグの断りもなく、扉を開けると部屋の中に駆け込み、危うく床に寝るアルサスとルウを踏みつけそうになった。

「なんだ、朝っぱらから騒々しい」

やれやれと言った顔つきでクレイグが起き上がり、床のアルサスたちも驚いて、毛布を跳ね除ける。モートンが開け放した扉からは、早朝の冷え切った空気が流れ込み、思わず身震いをしてしまう。だが、モートンはそんなことお構いなしに、

「一大事だっ！！ ハイゼノン公が、貧民街を軍隊で取り囲んで、バリエードを築きやがった！ やつら、とうとう俺たちを実力で排除するつもりだっ！！」

と、クレイグにまくし立てる。

「落ち着け、モートン。順を追って説明してくれ」

クレイグは焦りが表情に浮かんだモートンを一喝する意味を込めて睨みつけた。凄みのある視線に、モートンはやや落ち着きを取り戻し、緊急事態をクレイグに説明する。

もともと、この街に対立があったことは、昨日一日で、アルサスたちの知り得るところとなった。「貧乏人と外国人に関わるな」という、ハイゼノン公爵からのお触れは、即ち貧民街に住むクレイグたちや、ガモーフからの難民を示していた。その根幹には、ハイゼノン市民の保守的な思想と同時に、貧民街の人々が「少しでも暮らし向きを楽にして欲しい」と、公邸であるハイゼノン城に向けて、幾度となく待遇改善を要求することにあった。

貧民たちの待遇を改善すると言うことは、市民から集めた税金が投入されると言うことだ。そんなのたまったもんじゃない。というのが、市民たちの当たり前の意見だった。貧民街に住む者たちが、助け合いの精神にかこつけて、楽をしようとしているようにしか、市民の目には映らなかった。

そのため、常に市民と貧民の間には、軋轢と深い溝があった。それでも、これまで、乱暴な事件に発展することはなかったのだが、その微妙な均衡が破られたのは、つい昨日の深夜のことだった。

ちょうど、寝付けないアルサスとメルが、星空を見上げていた時刻、街の片隅で市民の若者が暴れたのだ。その若者と言うのが、昨日の夕刻、街角でメルにちょっかいを出していた男たちだと言うことは、誰も知らない。彼らは、自分たちの非は棚に挙げておいて、アルサスに伸されたことを逆恨みして、貧民街に魔法で火をつけようとした。それを見咎めた、貧民の若者と揉み合いになり、ついには、貧民の若者が過って、市民の若者を殺めてしまったのである。ちなみに、市民の若者の暴挙を見咎めたのは、他ならぬモートンであり、彼らを殺めたのは、モートン自身であったが、彼はそのことを伏せた。

しかし、都合が悪かったのは、その市民の若者と言うのが、ハイゼノンでも有数の実力者であり、ハイゼノン公に仕える役人の息子であったため、事件は一夜にしてハイゼノン公の耳に届いたことだ。そして、ついに軋轢が顕在化した事をハイゼノン公は悟り、兵隊に指示を送ると、貧民街にバリケードを作らせたのだ。

「それだけで、ハイゼノン公がわしらを排除しようとしているとは、言い切れないだろう。どれ、わしが確かめてこよう」

モートンの話を黙って聞いていたクレイグは、難しい顔を見るとベッドから立ち上がった。すでに、彼の横顔は貧民をまとめる長としての顔になっている。

「クレイグさん、俺たちも行きます」

モートンを従えて、バラック小屋を出ようとするクレイグに、ア

ルサスが言った。振り返ると、赤い瞳の少年は、すでに枕もとの剣に手を伸ばしている。その隣では、魔法学生だという眼鏡の少年、ルウがまだ眠そうな目をこすりながら、きょときょとしている。クレイグは、少しばかり笑って、

「お前たちは、関係のないことに首を突っ込まなくてもいい。これは、俺たち貧民とハイゼノン市民の問題だ」

と言うと、少年たちを残し玄関戸を閉めると、ブラック小屋を後にした。

外はまだ、街が眠りから目覚める前の時間。それにも拘らず、騒ぎを聞きつけた貧民たちの多くが井戸広場に集まっていた。井戸広場と言うのは、貧民街に一つしかない共同の汲み井戸で、街の通りと貧民街を分ける境界線のような役割を持っていた。

ハイゼノン城からやってきた兵隊たちは、その井戸広場と街の境界線に沿って、有刺鉄線の張られたバリケードを築きあげていた。

「皆、下がっていなさい」

怯えながら、その異常な光景をただ黙って見つめていた貧民たちの間に、クレイグがやってきたことで、俄かにざわめきが起った。そのざわめきに、兵隊たちも、クレイグに気づく。

「これは、いかがいたしたのでしょうか？」

クレイグが兵隊の隊長らしき男の元に歩み出ると、一際豪華な剣を携えた男がクレイグを睨みつけるようにして、一枚の紙切れを取り出す。

「ハイゼノン公より、貴様たちに新たなお触れが出た。本日中にごを立ち退き、街の外へ出て行かなければ、我らは貴様たちを排除する」

差し出された紙切れには、簡潔な文章と、ハイゼノン公のサインが入られている。

「それは、また物騒なことを……」

「物騒なのはどちらだ？ 街の端とは言え、ここを占拠して、市民に不安を与えているのは、貴様たちではないか」

「話は、このモートンから伺っております。しからば、私めが身命を賭して、罪人を探します故、何卒、ここは穩便に済ませてもらえませんか？　今、街を追い出されれば、我らは飢えて死にます」

「貴様たちが死のうが、我らには関係ない。ハイゼノン公のお触れは絶対である」

何を言っても聞く耳は持たない。男は、ともすればその腰の剣に手を伸ばしかねない勢いだった。

「横暴だっ！！」

貧民たちの中から声が上がる。やがて、それに呼応したかのように、貧民たちから次々と怨嗟の声が巻き起こった。

「ええい、静まれっ！」

一喝の声を上げたのは、クレイグだった。その一声だけで、貧民たちはしんと静まり返る。

「せめて、我らの言い分を一度でも聞いていただく機会はお持ちいただけないのでございましょうか？　我々として、市民に迷惑をかけるつもりなどありません。しかし、ここを放逐されれば、明日さえも分からなくなります。どうか、ご慈悲を……」

クレイグは貧民たちを代表するように、深々とお触れの紙切れにお辞儀した。

大変なことになってしまった……。

バラック小屋にいろと言われたところで、大人しく出来ないアルサスとルウが井戸広場に駆けつけると、すでに貧民たちの群れの中に、ネルとフランチェスカの後姿があった。ネルの髪は他のものたちと違い、銀色をしているし、フランチェスカの背丈は飛びぬけて長身であるため、見つけるのはとても容易だった。

「ネル、フランチェスカ！」

アルサスが声をかけると、二人は揃って振り返った。やや、ネルの目元にくまが出来ていることに気づく。察するまでもなく、ネルもまた昨夜は寝付けなかったのだろう。それは無理もないこと。両

親の死を知らされ、メルに辛辣な言葉を浴びせかけられた彼女の心中は、察して余りある。

「おや、あんたたちは……」

駆け寄るアルサスとルウの方に振り返ったのは、ネルたちに寢床を貸し与えた、隣家のソアン婦人である。痩せぎすな体つきからは母性を感じることとは出来ないが、優しい目元は、彼女の性格を現していた。そして、彼女の傍ら、ちょうどソアンをはさんで、ネルと反対側に、メルの姿もあった。だが、二人のその距離が、姉妹感のわだかまりが、まだ解消に至っていないということを、アルサスに知らしめる。

「ネル……大丈夫か？」

そう尋ねれば、ネルが空元氣を見せることくらい分かっていた。だが、やはりネルはあえて、メルの方を見ようとはしない。メルもまた、赤の他人であるかのように装っている。

アルサスは溜息をつきたくなるのをこらえつつ、「どうなってる？」とフランチェスカに目配せした。アルサスたちは、群集の最後尾にいるため、黒山の向こうで何が起きているのか見ることは出来ない。

「どうもこうもないよ。ハイゼノン公があたしたちに、ここを出て行けなんて言うお触れを出したんだ。出て行かなければ、あたしたちを剣で排除するって」

憤りを見せつつ、フランチェスカより先にソアンが口を開いた。

「お城の高みにいて、町を見下ろしている身分の人には、あたしたちが地べたに這いつくばって生きていることなんて、到底分かりやしないのさ」

ともすれば、愚痴にも聞こえる言葉を吐き出して、ソアンが見つめたのは、町の中心に聳える古城である。意匠のない無機質なミスリルの壁に対して、センチ・レーバン王都の城を思わせるような、古めかしい建築様式の城は、城郭都市ハイゼノンの行政を司る中心にして、センチ・レーバン諸侯の一人、ハイゼノン公爵が住まう居

城でもある。

「ウェスアのときといい、どうにもボクたちは大変なことに巻き込まれるみたいだね……」

と、呟いたのは、アルサスの傍らで、人ごみの背中を見つめるルウだ。たしかに、ウェスアでも、街で起きている事件に巻き込まれた。そして、レイヴンとして仕事を請けたにも拘らず、大司教の命を救えなかったことは、アルサスにとっても、心残りがあることだった。

「このご時世、何処の街も少なからず問題を抱えているってことなのよ」

ルウの呟きに、フランチェスカが返す。その問題の渦中に巻き込まれそうにも関わらず、フランチェスカはいつものように、落着いていた口調だった。

人ごみの向こうでは、クレイグたちの声がしているが、ここからでは何を話しているのかははっきりと聞き取れない。しかし、バリケードをこしらえ、剣や槍を手に居並ぶハイゼノン兵の威容たるや、まるで貧民を脅しているようにしか見えない。しかも、クレイグの言い分はまったく通さないと言わんばかりに、お触れの書かれた紙切れを貧民たちに突きつけている。

「でも、不味いわね……。クレイグさんたちは、ここを出て行くわけにも行かない。でも、ハイゼノン公は彼らを街から追い出すつもりでいる、となれば、一触即発は免れないかもしれない」

「それって、喧嘩ごとになるってことですか？」

フランチェスカの言葉に敏感に反応したのは、ネルだった。不安を表すかのように、胸の前で両手を合わせた彼女が願うのは、アストレアへの救済の言葉だろう。だが、フランチェスカの言うように、このままでは、一刻もたたぬうちに、いさかいが顕在化する。それは、「喧嘩ごと」などという生易しい言葉では済まされないかもしれない。

もちろん、アルサスたちは、この渦中に関わるべき立場にはなく、

この街の遺跡、即ち城壁を調べに来た旅人なのだが、こうなっ
てしまえば、遺跡を調べている余裕などありはしない。

ハイゼノンは諦めて、あの遺跡船のメッセージにあった、ダイ
ムガルドのダスカード遺跡を目指すのが正解だったか……。今更
そう思っても、詮無きこと。

「フランチェスカ、俺がハイゼノン公に会って、直談判をして
来る。その間に、ルウと一緒に、騒ぎが起こらないよう時間稼
ぎをしてくれ」

アルサスが言うと、フランチェスカとルウは同じような顔
をして、驚いて見せた。

「何言ってるんだよ、アルサス！ 直談判って、あのハイ
ゼノン城へ忍び込むつもり！？」

ルウは素っ頓狂な声を上げて、朝靄に煙るハイゼノン城を
指差す。「いや、面会して、説得してくるだけだ。余計な騒
動は起こしたくないからな」

「面会って、ハイゼノン公は、諸侯なんですよ？ 旅の
レイヴンなんか、あってくれるわけじゃないじゃん！！
それとも、アルサスはハイゼノン公と知り合いなの？」

「いや、一度も会ったことはない。だけど、打算がない
わけじゃない。心配するな」

アルサスはそう言うと、ルウの頭をくしゃくしゃと撫
でてやった。だが、ルウの不安そうな顔は変わらない。それ
どころか、ネルまでも不安な顔をして、アルサスに視線を
送ってくる。アルサスは、あえてネルの耳に入らない
ように、ソアンの向こう側にいるメルにそっと近づくと、

「努力、するんだよね？ ネルの事を頼む」

と囁いた。メルは困ったような顔をしながらも、こくり
と頷いた。「でも、どうやって時間稼ぎしたらいいの？」

と、フランチェスカがこちらを見る。

「その鎧は、伊達じゃないだろ。それに、ルウの魔法
学校の制服も。」

ギルドの名前を出すのは、気に食わないけれど、ギルド・リッターと魔法使いギルドが間に入ると嘯うそけば、少しくらい時間稼ぎになるはずだ」

「無茶をいうのね」

「無茶は承知の上。このまま、貧民たちと兵隊がぶつかるようなことになれば、俺たちだって危うくなるかもしれない。それは、避けなきゃ、だろ？ まだ、『奏世の力』のこと、何も分かってないんだ」

アルサスは、踵を返す。

「アルサスっ！ あのっ、気をつけて……」

ネルの言葉に、アルサスは少しだけ振り返って、ニッと白い歯を見せると、人ごみを離れて走り出した。目指すは、ハイゼノンの城。アルサスの胸中にある「打算」とやらが何なのか分からない、ネルはその後姿を見送った。

39. ハイゼン公のお触れ（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せください。

40. 侵入

朝靄の街角を走る。貧民街を抜け出したアルサスは、遠目に見える城の姿だけを頼りに急いだ。街は、しんと静まり返り、アルサスの足音だけが、建物に反響する。早朝だから町が静かなのではなく、おそらく、貧民たちを排除するために、今日は家から一步も出るな、というお触れが市民たちには通達されているのだろう。

忍び込まない、とルウには言ったが、面会を求めて手続きしている暇はないことくらい、アルサスには分かっていた。ことは急を要するのだ。だから、城が近づいてくると、アルサスはひとまず正門ではなく、裏手へと廻る。

城自体は城壁に囲まれていない。なぜなら、城壁となる壁は、街をぐるりと取り囲んでいるからだ。そのため、巨大な建造物に、進入することはそれほど難しいことではなかった。まずは、裏門を警備する門兵の数を確認する。そこでも、アルサスの打算が働いた。

兵隊のほとんどは、貧民街へ出払っているはずだ。と、するならば、城を守る警備兵の数は、限られている。その思惑通り、裏門には無用心と思えるほど、たった一人の警備兵しかいなかった。

ひとまず、裏門手前の曲がり角に身を潜めたアルサスは、門兵の様子を伺う。朝靄のなかで、あくびをしながら、間もなく陽が上ってくるであろう方角を見つめている門兵は、無防備を曝している。まるで緊張感などなく、アルサスの発する殺気にも気づく様子はない。

しめた……。

内心にアルサスはひとりごちて、曲がり角を駆け出す。声も足音も立てず、剣を引き抜き、門兵の背後に忍び寄る。門兵がその気配に気づいた時には、アルサスの姿は背後に迫っており、「クセものだっ！」と声を上げるよりも早く後頭部を強打されていた。

無論、アルサスの放つ殺気は、殺意ではない。昏倒し地面に臥し

た門兵に、申し訳ない気持ちを感じながらも、アルサスは剣を収め、裏門の扉を開いた。

裏門と言うだけあって、扉は頑丈な作りだが、施錠はされておらず、安易に開けることが出来る。センチ・レーバンの城の作りなんていうものは、何処も大して違いはない。思ったとおり、裏門からは階段があり、城の三階へと通じている。これは、敵が侵入した際に、惑わせるためのつくりである。このまま三階にたどり着いた事を知らず、上層階へ上っていけば、そこは袋小路になっているのだ。その事を知っていれば、一路一階への目指せばいい。

忍び込んだ城内は静けさに包まれていた。時折、領主に仕える執事やメイドの姿が廊下を横切るが、それ以外に、人の姿は見当たらない。アルサスは、彼らが行き過ぎるのを待って、階段の扉を開き、廊下を一階への階段へと走った。

そして、一階に出ると、巡回の警備兵をやり過ぎし、一際大きな階段を見つける。そこそが、ハイゼノン公の部屋へと向かう道である。幸い、ブーツの踵が蹴る床には、真っ赤なカーペットが敷かれており、足音を上手い具合にかき消してくれる。だが、ぐずぐずしてはいられない。

フランチェスカとルウに時間稼ぎを頼んだが、何時まで持つかも分からない上に、先ほど伸した裏門の門兵が、目を覚ませば、たちどころにアルサスの侵入は、城全体に知れ渡ることになってしまう。そうなる前に、ハイゼノン公の部屋に突撃し、ハイゼノン公に貧民たちの排除をやめさせなければならない。

時間との勝負は、アルサスを焦らせた。息を切らせながらも、躊躇すればそれこそ危険であると、分かっているため、彼はわき目も振らずに階段を駆け上った。

「ここか……」

やがて、階段を上り詰めると、左右にのびる廊下があった。その廊下の右先に豪華な扉が見える。ネームプレートが貼り付けられているわけではないが、ひと目でそこが領主の部屋であると分かるよ

うな扉だった。しかし、ここに来て問題が持ち上がる。

ハイゼノン公の寝室の前には、槍を構えた護衛の兵が二人、仁王立ちしているのだ。アルサスは、ひとまず階段の上がり口に身を潜めつつ、何とかして忍び込むことは出来ないか、と算段をめぐらせるが、彼らに襲い掛かって、大きな物音を立てれば、たちまち、城内中から兵隊が集まってくることは明白だった。

と、その時である。アルサスの背後で、はっと息を吞む声。振り返れば、そこには、階段を上ってくる歳若いメイドの姿があった。彼女は手にした、白いシーツの束を階段の上に落とす。その音はさして大きなものではなかったが、彼女は今にも金切り声の悲鳴を上げそうになっている。

まずい！　と思うよりも早くアルサスは、メイドの背後に回り、彼女の口を押さえた。

「しっ、静かにっ！」

アルサスはメイドの耳元に囁いた。メイドは、目だけ後ろに動かして、凍りついたような視線を送ってくる。

「悪いけど、協力してもらえるかな？　どうしても、ハイゼノン公に会いたい。」

押し殺した声でそう言うと、アルサスは開いた方の手を自らの腰に帯びた剣を引き抜き、その刃をメイド

「これ見える？　言う事を聞かなかったら、わかるよね？」

そう口にしてから、ひどく乱暴なやり口に、自己嫌悪しそうになる。女の子を怖がらせるのは、心外なことだが、手段を選んでいる暇はない。それがたとえ、脅迫紛いであつてもだ。

メイドは、真っ青な顔をして、うんうんと頷いた。彼女に抵抗の意志がない事を確かめたアルサスは、剣をあてがったまま彼女を歩かせ、ハイゼノン公の寝室へと向かった。

二人の護衛の兵は、すぐにアルサスたちに気づき、険しい顔をして、槍を構える。

「おっと、下手なことすると、この子の首が飛んじゃうぜ」

わざと低い声。わざと、悪辣さを演出したように、アルサスは言う。メイドの娘の助命嘆願するような瞳に見つめられた護衛の兵たちは、「ぐっ！」と絶句した。

「きさまっ！ 賊の類か！？」

「そう見えるなら、そういうことにしてよ。それより、俺は領主まに、直々の用がある。この子の命を大事に思うなら、おとなしくその扉を開けて、助けでも呼びに行くんだな。もっとも、ほとんどの在城兵は、貧民街に出払っているんだろうけどな」

凶星を言い当てられたのか、護衛の兵たちは、困った顔をする。城の主を守る身としては、ポーカーフェイスの一つも出来ない、と言うのは呆れてしまうが、城内のしかも本来なら、警備が厚い城の最深部である、この場所に侵入者がたどり着いた前例はないのだから、それは無理もないことだと言えた。

一つだけ、そんな護衛の兵褒めるべき点があるとすれば、なおも槍を構え、その場を譲ろうとしないことだった。しかし、彼らのその忠義心か、もしくは仕事熱心さは、部屋の中からの一声で、打ち碎かれた。

「お客さまかしら？ 構わないから、入ってもらいなさい」

鶴の一声とでも言うべきか。護衛の兵たちは、一瞬の逡巡を見せながらも、槍を下ろした。アルサスは、人質のメイドを連れたまま、彼女に寝室の扉を開けさせ部屋の中へと入った。そして、鍵を閉めさせる。

「まったく……物騒なことこの上ないわね。城に忍び込んで、無事に帰れると思っているのかしら？」

アルサスが部屋にはいるなり、そう言葉を投げかけてきたのは、広々とした部屋の窓辺に、ネグリジェ姿で佇む、妙齡の女だった。彼女こそ、この城の主にして、城郭都市ハイゼノンの領主、マレイア・ハイゼノンだった。

「その子の命を奪うつもりがないのなら、その剣を納めなさい。あなたの要求は、それから訊くことにします」

まったく動じる様子もなく、淡々と言ってのける、マレイアからは言い知れぬ迫力のようなものが漂っていた。年齢相応に刻まれた、眉目の小じわがそうさせるのか、独特の中年女の色気がそうさせるのかはわからなかったが、アルサスはマレイアに言われたとおり、剣を降ろし、メイドの口を押さえていた手を離した。

「悪かったね。怖い思いをさせちまって。ごめん。それと、協力してくれて、ありがとう」

侘びの仕様もないが、アルサスは謝罪を言葉にする。メイドの娘は、少しばかり驚いたような顔をして見せ、アルサスから離れ、部屋の間隙に逃げた。

「あんたが、マレイア・ハイゼノンか？」

「あら、人に名を尋ねる前に、自ら名乗るのが、センテ・レーバンの紳士じゃないかしら？」

「そりゃそうだな。俺は、アルサス・テイル……いや、あんたなら、俺が誰だか分かるはずだろう？ 高樓の上から、一度だけあんたの顔を見たことがあるし、あんたも、俺の顔を見ているはずだ」

アルサスは抜き身の剣を手にしたまま、じっと赤い瞳から視線を放った。マレイアもまた、アルサスの言葉に、怪訝な顔をして視線を合わせたが、やがて、その瞳を見つめる目が、大きく見開かれる。

「テイル……まさかっ!？」

思い至ったマレイアの驚愕の表情に、アルサスは不適に笑うと、

「だったら、みなまで言う必要はないよな。そのまま、聞いて欲しい。あんたには、あんたの思惑があつてのことだと承知の上で、今すぐ、貧民街で起きているバカ騒ぎを止めてもらいたい。こちらとしては、貧民たちに一宿一飯の恩義がある。それに、あそこには、俺の仲間や、仲間の家族がいる。すくなくとも、俺は彼らをこの街の喧騒に巻き込みたくはない」

と、口早に言った。しかし、マレイアが言葉にしなくとも、アルサスの願いを拒否していることくらい、顔つきを見れば、アルサスにも分かる。

「常に、不満を抱えた貧民たちが、命の危険に曝されたと思えば、彼らはどんな説得にも応じない。クレイグたちは、ここを出て行くわけには行かないと、一步も退かないだろう。そうなれば、兵隊たちは命令に従って、彼らを実力排除する。だが、黙って殺されるわけには行かない。不満と怨嗟が結合して、貧民たちは暴徒と化する。それが、波及すれば、あつと言う間に、この城郭都市全体で、争いが起きるだろう。そうなれば、ハイゼノン市民にも犠牲者が現れるかもしれない。そのくらいあなたにも分かっているんだろう？ 人間は、分かり合えない。自分の価値観や幸福を侵害するのは、決して許さない」

「人間は、分かり合えない……か」

不意にマレイアは呟いた。そして、俄かに、窓の方を向くと城下を見下ろす。ミスリルの遺跡、通称ハイゼノンの壁に囲まれる街の端。そこだけ、赤い屋根が途切れ、泥のような色をしている。そこが、街の掃き溜め、貧民街である。すっかり、朝靄は晴れて、貧民街を一望できるが、そこで今何が起きているのかを察することは難しい。

「人間は、分かり合えない」

もう一度、今度ははっきりとした声で言うと、マレイアはベッド脇にあるレターデスクの引き出しから、手のひら大の望遠鏡を取り出した。

「あなたは、わたしの思惑を承知しているといったわね。たしかに、貧民を排除する機会を、わたしたちは狙っていた。都市が発展すれば、そこに貧富が生まれ、やがて貧民たちが寄り集まる。それは仕方がないことだけれど、街にとっては不利益以外の何者でもない。そして、昨晚、ようやくその大義名分が出来上がった。バカな役人のドラ息子が問題行動を起こしてくれたおかげよ。天に召された彼には感謝しなければいけないわね。だけど、わたしの本当の思惑はそうじゃない……」

マレイアは、望遠鏡を瞳にあてがう。そして何かを確認すると、

再びアルサスの方に向いて、手招きをする。

「こちらへ来て、御覧なさいな」

そう言われたアルサスは、やや怪訝な顔をしながらも、差し出された望遠鏡を手にとった。

「壁の外を良く見て」

言われるがまま、アルサスは焦点をハイゼノンの壁の向こうに広がる、野原に向けた。野原の中心は、ファレリア領へと続く街道が縦断している。その街道に何か、白いものが見えた。それが騎馬隊だと分かったのは、その白いものが、馬の巻き起こす砂埃だと気づいたからだ。そして、さらに目を凝らすと、一団の先頭に、剣と盾の紋章が刻まれた、おおきな旗がはためいている。はっきりと見えるわけではないが、その旗印の色から判別するに。

「あれは、センチ・レーバン親衛騎士団の……！」

アルサスは、素直に、驚きを言葉に変えた。

「ええ、その通りよ。センチ・レーバン親衛騎士団の一群。彼らがここを目指していることは、昨夜のエアデ通信で分かったこと。

もっとも、彼らは使者の旗を上げていないことから、王国の下知を持参した使者の一団ではないし、そもそも、親衛騎士団の役目なら、あなたの方が詳しいでしょう？」

「だったら、何で親衛騎士団が？」

そう尋ねると、マレイアは難しい顔をする。

「一週間ほど前、反乱を起こしたファレリアが、王国の軍隊によって陥落した。ボレウス公は分離主義者ではないけれど、彼なりの警告を示すつもりだった」

そのころ、ガモーフ神国にいたアルサスにとっては、寝耳に水な情報だった。しかも、ボレウス・ファレリア公爵は、王国への忠義も篤い諸侯の一人だ。それが、反乱を起こしたとは俄かには信じがたい話だったが、後に続くマレイアの言葉には、それ以上に耳を疑いたくなってしまった。

「わたしは、ハイゼノン公として、ファレリアへ陰ながら援助をし

ていた。それは、誤解を承知で言えば、わたしがボレウス公の意図に賛同したから。これは、個人的な話。だけど、王国にとって見れば、個人的とは言えない。彼ら、親衛騎士団は、その事を問いたただすため使わされたのでしよう」

「なるほどな。あいつらを街に入れさせないようにするために、騒ぎを起こしたのか。そのために、貧民たちを利用しようっていうのか!？」

「有り体に言えばそういうことになるわ。たまたま、役人の息子が事を荒立ててくれたというのは、渡りに船だったけれど、それは此度のお触れには関係のないことよ。すでにハイゼノンの壁の正門は閉じさせた。このまま、事態収拾にかこつけて、彼らを待ちの外に締め出せば、彼らも退くほかない。さらに王国は、諸侯の領国の内政にまで干渉できない。結果として、この街は救われるのよ」

「政治の話なんか興味はないっ! たとえどうであれ、そのために貧民たちの命を利用するなんて、それこそ、横暴の極みじゃないかっ!」

アルサスは、手にした望遠鏡を床に叩きつけた。柔らかなカーペットの上とは言え、望遠鏡の金具が飛び、ばらばらに壊れてしまう。すると、部屋の隅で固まっていた、メイドの娘が「きゃっ!」と短く比類を上げる声が聞こえた。

「横暴? そうかしら。彼らは、無断で街の一角を占拠している。しかも、その中には、ガモーフ人も含まれる。この街は国境に近いから。だけど、この街の市民は、誰一人として、ガモーフに良い感情を持ち合わせていないのは、あなたも良く知っているでしょう?」

十年前、ヨルン平原で先遣隊の任に預かった、我が父とハイゼノンの兵は、あの眩い光によって命を奪われた。あれが、ガモーフの秘密兵器だったと信じる者も、少なくない。そんな中で、貧民たちが不満を抱えているように、親兄弟の敵でもあるガモーフ人と親しくする貧民に対して、ハイゼノン市民も不満を感じている」

マレイアは、淡々としやべりながら、壊れた双眼鏡の残骸を拾い

集めた。

「この街の壁は……外敵から街を守る城壁であると同時に、ここに住む者たちの心の壁でもあるのよ。心の壁に閉じ込められた鬱屈した二つの不満がぶつかり合った時、この望遠鏡のように街は、ばらばらになってしまふ。遅かれ早かれ、政治云々をさしひいても、起きるべくして起きたこと」

「それは、為政者の言い逃れじゃないのか？」

「違うわ。この街において、何の価値もない貧民たちに価値を与えるのよ。この街を守るための、人柱としての価値を。直に、我が兵隊は、貧民どもを一人残らず殺す。それを虐殺と呼ぶならば、あなたの自由。でも、あなたの立場でなにができるというのかしら？ さっきも言ったけれど、王国は諸侯の内政に干渉できない」

「くっ！」

言葉に詰まってしまうアルサスを尻目に、マレイアはかき集めた望遠鏡の残骸を、おっかなそうな顔つきで見守るメイドに手渡した。そして、アルサスの方に向き直ると、眼光鋭く、睨みつける。

「人間は分かり合えない。ならば、分かり合う必要などない。争い、奪い、そして勝てばいい。そのために、わたしたちは原始のころより、魔法を、剣を手に入れた。わたしは、為政者として、その争いを操作し、結末を導くだけ」

「そうして、負けたほうは、犠牲になった者たちは、どうなる？」

「あら、あなたは根本的なことを理解していないようね……。わたしは、マレイア・ハイゼノン公爵。ハイゼノンの領主として、領民であるハイゼノン市民を守る義務はあっても、勝手に住み着き我が物顔の貧民たちを守る義理はない」

アルサスの嘆願は、マレイアのその一言で、簡単に打ち砕かれてしまった。そして、そのタイミングを待ちわびていたかのように、町中に爆発の轟音が鳴り響いた。

「始まったわね……！」

マレイアの視線は、貧民街の方角に向けられていた。アルサスも

慌てて窓の外を振り返る。フランチェスカたちの時間稼ぎの労も空しく、ついに貧民とハイゼノン兵がぶつかり合ったのだ。貧民街を見つめるアルサスの目に映る黒煙の帯が、ここまで聞こえてくるはずもないのに、その喧騒を伝えてくるようだった。

40. 侵入（後書き）

ご意見・ご感想などありましたら、お寄せください。

41. 均衡が崩れるとき

微妙な均衡とは言いえて妙である。利害は一致していないけれど、互いに距離をとり、平穏を装っているような関係は、ちよつとしたことで簡単に崩れてしまう。それは、まさに、センチ・レーバン、ガモーフ、ダイムガルドの三つの国も同じようなものだった。ヨルンの悲劇を経験してなお、なんの歩みよりも見せないまま、空白地帯と呼ばれるある種の緩衝材を置くことで、仮初の平和という不均衡な盤上にある三国の微妙な関係は、些細なことで緊張感を高めてしまいかねない。

だが、ここで言う微妙な関係とは、ハイゼノンに住む、市民と呼ばれる富裕階層と、貧民と呼ばれる貧困階層の軋轢のことである。市民に言わせれば、貧民たちは他所から集まってきた人たちが、勝手に街の一部を占拠している、不法居住者に過ぎない。また、貧民たちは、貧困や戦争で村を失い、明日の命をつなぐため、ここに流れ着いた自分たちを、慈悲と寛大さで迎え入れて欲しいと思うのだが、ハイゼノンとてたしかに大都市ではあるが、裕福とはいいがたない。貧民たちに譲るものがあるなら、自分たちのものにしたいたいと思うのが、至極当然の人間心理であった。しかし、その一方で、無下に貧民たちに暴力を振るえるほど、悪辣になれないのは、市民たちもまた、ごく普通に生活をしているごく普通の人間だからである。

そうして出来上がった、微妙な均衡は、何年もの間、貧民と市民の間に深い溝を作り上げた。だが、井戸を掘るために、人が掘削するには限界があるように、心に出来た溝にも限界があるもので、フアレリアの反乱、センチ・レーバン親衛隊の到着と言う二つの要素が、ついにその時を招いたのだ。

ハイゼノンの均衡が崩れる。

それを、何とか堰きとめようとしたのは、奇しくも外国人であった。貧民の群集を掻き分けて、最後尾からハイゼノン兵たちの前に

姿を現したフランチェスカとルウ。アルサスの言ったとおり、フランチェスカの白銀の鎧と、ルウの魔法学校の制服は、それだけで抑止力となる効果を秘めていた。

貧民たちの中に、ギルドの人間がいると思っても見なかったハイゼノン兵たちにどよめきが起こり、同時に貧民たちにも、ざわめきの波が巻き起こる。

フランチェスカは、そんなざわめきの中で、クレイグたちに一宿一飯の恩義を返す意味を込め、ギルド・リッターの無形的威力を口にした。裏切り同然に、ギルド・リッターを抜け出したフランチェスカは、もはやギルドの構成員ではないのだが、ギルド連盟に加盟する大ギルドは、その名だけでも各国の政府や行政に多大な影響力がある事を知っており、それは恫喝にも近いものがあつたが、アルサスが戻ってくるまでの時間稼ぎにはなることをフランチェスカは心得ていた。

もっとも、ハイゼノン公を説得するなど、無茶にもほどがある。相手は、センテ・レーバン諸侯の一人だ。レイヴンごときが面会を頼んだところで、聞き届けてもらえる道理がない。しかし、去り際のアルサスの顔には、どこか言い知れぬ自信のようなものがあつた。ならば、仲間として、もしもハイゼノン公との交渉が決裂したとしても、貧民たちの命を守るよう、自分の立場を最大限活用したい。フランチェスカはそう考えていた。

しかし、その思いを水泡に帰したのは、他ならぬ貧民たちであつた。いや、正確に言えば、貧民の若者、モートンであつた。

真犯人を見つける。クレイグの言葉を間に受けたモートンは、自らが役人の息子を殺した下手人であることがばれるのを恐れ、ポケットに忍ばせていた魔法カードを取り出したのだ。

何処で手に入れたのか、貧民には高価すぎるフランメ・プファイルの魔法が描かれたカードから、次々と炎の矢が現れた。それらは、上空へと打ちあがると、まるで雨のようにハイゼノンの兵士たちの頭上に降り注いだ。

ハイゼノン城のマレイアの寝室に殴りこんだアルサスが見た、貧民街に立ち上る黒煙の正体は、モートンの放った魔法だった。炎の矢は、木組みのバリケードにも突き刺さり、激しく燃え上がる。

「ええいっ！ 貧民どもを捕らえろっ！」

「抵抗する者は、構わん！ 斬って捨てろっ！」

「第一小隊、第二小隊、突撃ーっ！！」

鉄盾で魔法の攻撃を防いだハイゼノン兵たちは、口々にそう叫ぶと、手にした武器を振りかざし、雪崩を打った。モートンの軽はずみな行動で、ハイゼノンの均衡は崩れ去り、交差する悲鳴、怒号のような唸り声。瞬くうちに井戸広場は、戦場に似た光景になってしまった。

「お待ちください！ 何卒っ、何卒っ」

混乱を鎮めようと必死に叫び、兵士に縋る、貧民の長クレイグにも、その凶刃が迫る。繰り出された名も知らぬハイゼノン兵の剣は、義足のクレイグに逃げる暇も与えず、その胸を貫いた。

「クレイグさんっ！！」

真っ青な顔をして叫ぶルウ。だが、その叫び声も、あつと言う間に喧騒に飲み込まれてしまう。フランチェスカは、咄嗟に振り向いた。混乱をきたした群集の中に、ネルとメル、二人の姿を探した。

銀色の髪であれば、容易に見つけることが出来そうなものであったが、その姿が見当たらない。均衡を崩した張本人であるモートンも、すでに何処かへ逃げおおせてしまったようだ。広場に残っているのは、年老いた者や、女、子どもばかり。「せいやっ！」

突然、兵士の一人が剣を構えて、フランチェスカに踊りかかってきた。すぐさま、踵を返すが、相手も戦士である。フランチェスカの振り回した鉄槍をかわし、その切っ先をフランチェスカの胸に突き立てようとした。

「緑の精霊と契約の名の下に、具現せよ。汝、疾風の盾となれ……、ヴィント・バックラー！！」

鋭利な剣先が、フランチェスカの胸を貫く直前、ルウの声が響き、

魔法の盾が二人の間に、一陣の風となって、割って入った。

巻き起こった土埃をともに食らった兵士は、低い悲鳴を上げて両目を瞑る。フランチェスカは、体勢を立て直すと、その隙を突いて、鉄槍の穂先ではなく逆側の柄の先端で、兵士の腹を強く叩いた。兵士は、再び唸り声を上げるとそのまま崩れ落ち、気を失う。

「大丈夫？ フランお姉ちゃんっ!!」

「助かったわ、ルウっ」

駆け寄る眼鏡の少年に、フランチェスカは言いながらも、その視線は、すでに他に向けられていた。

ハイゼノン兵たちは、無慈悲にも逃げ惑う貧民たちを追いかけては、まるで猛獣が小鹿を狩るが如く、逃げ遅れた者を、その凶刃にかけていた。ある者は捕らえられ、抵抗する者は斬り殺される。その恐怖に絶望した悲鳴ほど、鼓膜を激しく叩き、胸の内を締め付けるものはないと、フランチェスカは思った。

十年前の、あの戦場とよく似ている……。

「魔法小隊、前へっ！ 街に巢食う貧民どもに、魔法の矢をお返ししてやれっ!!」

ハイゼノン兵の声が響く。一時は、モートンの攻撃で、列を乱したハイゼノン兵たちだったが、訓練の賜物なのか、あつと言う間に乱れた列を直し、その一番最後尾に控えていた、ローブ姿に甲冑を纏う魔法使い部隊が前進してくる。彼らは皆、ルウが持っているものと同じような、長柄の魔法杖を手にしていた。

「いけないっ、ルウ、わたしたちも逃げるわよっ」

フランチェスカは咄嗟に、ルウの手を掴んだ。

「でもっ！」

「全員が魔法を使ってきたら、いくらあなたでも防ぎきれないっ！

ここは、一端退いて、ネルたちを探しましょうっ!!」

そう言って、ルウを従え、貧民街への奥へと走り出した直後、魔法使い部隊の魔法の言葉が轟き、虚空から炎の矢が、井戸広場に降り注いだ。

貧民の群集の一番後ろにいたことが功を奏したのかもしれない。

「逃げましょう」と言ったソアンと共に、ネルとメルは、ハイゼノン兵が迫り来る前に、バラック小屋の立ち並ぶ貧民街の奥へと逃げ込んだ。ややあって、井戸広場の方から、魔法の落ちる音の直後、悲鳴が折り重なるように聞こえてきたが、振り向いている余裕などなかった。

ソアンを挟んで、先頭を走るメルは終始無言のままだったが、それでも時折ネルを気遣うように、ちらちらと振り返る。

「誰かが、この街のことを『世界の縮図』だと言った」

ソアンが走りながら、おもむろに口を開いた。

「もしも、それが当たってるとしたら、また十年前のようなことが起きると言うのかしら……」

ハイゼノン兵たちが、狂気をはらんだ眼で、剣を振り上げる姿を目の前にしたソアンは、ひどく怯え、蒼い顔をしていた。彼女にとって、夫と息子を失った十年前の戦は、トラウマにも等しい。そして、今まさに降りかかってきた、ハイゼノンの火の粉は、彼女にそれを想起させた。

「十年前なんて、関係ありません。戦争なんて、関係ありません。今は、あたしたちの命が危険なんです。逃げなきゃ、逃げなきゃっ……」

メルが弱気になるソアンを叱る。メルの脳裏にもまた、三ヶ月前のラクシャ村の悲劇が過ぎているのかもしれない。逃げなきゃ、という言葉の裏に、強迫観念じみたものを、ネルは感じていた。自分が「運び屋」のゲモック・ラバンに連れ去られての三ヶ月、妹は妹なりの血の滲むような日々だったに違いない。クアドラの山を下り、エントの森を抜け、アトリアの峰を越える。その旅路は、十四歳のメルには、過酷過ぎるものであった。

そのことも知らずに、ただ再会を喜ぼうとした自分が恥ずかしい……。もしも、両親が死んだというのなら、銀の乙女としてこの世

に生を受けた自分の所為に間違いない。誰に何と言って詫びればいい？　メルと言うとおり、自分が父と母に拾われなければ、ラクシヤ村の人たちは死ぬことなんてなかった。女神さまに祈りをささげる前に、自分の生まれの不幸と、自分が生きてきたことで振りまいたかもしれない不幸の、すべてを謝らなければならないのだ。

そうしなきゃ、メルに許してもらえない……。

ハイゼノン兵から逃げるネルの頭の中は、メルが地面に投げつけて、ばらばらになったあのバレッタのことでいっぱいだった。

「お姉ちゃんっ！　しっかりしてっ！」

心ここにあらずだったネルの耳朶を、突然メルの声が叩いた。

「あいつらの目、あの時の黒い鎧の人達とおなじ目をしてたっ！　このままじゃ、ソアンさんもお姉ちゃんも、あいつらに殺されちゃうっ！！」

と、叱責するメルの顔は、三ヶ月前とは別人のようだった。凜とした声も、真剣な眼差しも、いつも甘えん坊だった妹のメルとは違う。たった三ヶ月で、過酷な旅路はメルを成長させたのだ。

「ごめんなさい、メル……」

「謝ってるヒマがあったら、走って、お姉ちゃんっ！！」

それでも、メルは自分の事を「お姉ちゃん」と呼んでくれる。今は、それだけでいい。今、メルとソアンを守れるのはわたししかないんだ。

ネルは、こくりとメルに頷き返して、心の中で言い聞かせた。しかし、胸騒ぎはとまらない。

やがて、迷路のように入り組んだ、ブラック小屋の町を駆け抜けると、何処から焦げ臭いようなにおいと、朝靄とは明らかに違う白い煙が、ネルたちを取り囲んだ。ハイゼノン兵が、貧民街に火を放ったのかもしれない、と気づいたのはソアンだった。

「火を放つなんて……ひどい！」

メルが震える自分の両肩を強く押さえた。ラクシヤ村も、同じように黒衣の騎士団によって、火を放たれたのだ。民家が燃え盛る、

紅蓮の色は、ネルの記憶にもこびりついている。その記憶が、唐突に現実感を帯びて、はっきりと呼び覚めされたのは、貧民街を包もうとする煙の匂いの所為ではなかった。

「やれやれ、ようやくお姫様を見つけたと思ったら、随分と楽しいことになってるじゃねえか……」

突然の声に、三人は足を止める。声は、濃くなっていく白煙の向こうから聞こえていた。この声、聞き覚えがある。そう思ったのは、ネルだけではなかった。メルもまた、顔をこわばらせ、拳を強く握る。

「三ヶ月ぶりか、お姫様」

煙を掻き分けるように、黒い鎧が現れる。白い煙と、黒い鎧、そのコントラストは不気味なほど、男の顔を映えさせた。野獣のような顔に、大きな頬傷。生やした無精ひげが、その男の乱雑さを象徴しているかのよう。

そう、その顔は忘れもしない。三ヶ月前、ラクシャ村を襲い、村人を、ネルとメルの両親を、無慈悲に斬り殺した「黒衣の騎士団」団長、ギャレット・ガルシアだった。

「なんですか、あなたたちは!？」

ソアンが、怯えたように声を上擦られた。ギャレットに続き、その団員たちが煙の中から狂気をはらんだ姿を現せば、彼らが放つ異様な殺気を、ソアンが感じ取るには十分すぎた。

「名乗るほど大した者じゃない。老婦人よ、何も聞かず、その銀色の髪の娘を、こちらに渡してもらおう」

ギャレットはそう言うのと、腰だめの剣を引き抜いた。あの日、村人を斬り殺した剣だ。あの時の血は、すでに拭き取られているが、そこからにじみ出る殺意までは、拭えていない。

「そんな、何処の誰だかわからないようなお方に、この子を渡すなんて出来るワケないじゃないですか。わたしは、クレイグさんからこの子たちを預かっている責任があります」

凜とした声で、一歩前に出ると、自らの背後にネルとメルを下が

らせたソアンが言った。ネルは、気丈なその後姿に、あの日の父の姿を思い出していた。

4 1. 均衡が崩れるとき（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せください。

42. 黒衣の騎士団

「だめですっ!」

ネルは咄嗟に叫び、ソアンの前に出る。穏やかでない胸中に蘇るのは、父の最後に見た姿。ギャレットたち黒衣の騎士団に、ネルを渡せと要求され、それをきっぱりと断ったネルの父は、ギャレットの凶刃にかかって、殺されてしまった。今また、ソアンは、ギャレットたちに気丈にも立ち向かおうとする。だが、戦う術を持たないソアンが、殺されるような光景を、ネルは見たくなかったのだ。

「騎士さま。どうか、ソアンさんと、メルのことを見逃して下さい。わたしなら、何処へだって行きますっ」

「ほほう、殊勝な心がけだ。分かった、老婦人とガモーフの少女の命は保障してやろう。約束しよう」

ネルの言葉に頷いたギャレットの口許が、不適な笑みに染まる。その顔に、ネルは覚えがある。あの日、地下室に隠れ潜んだネルの腕を掴み、引きずり出したギャレットが、見せた魔物よりも恐ろしい、悪意と殺意、狂気と血の色に満たされた、おぞましい笑顔だ。「しかし、随分と手こずらせてくれた。アローズ経由でお前を運ぶことには、俺もゲモックも反対だった。確実性を求めるなら、頷けない話ではないが、距離がある分、安全な道のりとは言いがたい」
落ち着き払った声で、ギャレットがこちらへと歩み寄ってくる。

そして、こわばったネルの腕をあの日と同じように、乱暴に掴んだ。「危惧というのは、往々にして当たるものだ。俺は、そういうのをいやと言うほど、戦場で経験してきた。十年前のあの日も……。しかし、まさかレイヴンごときにお前を搔っ攫われるとは思ってもみなかったよ。依頼人も、そのことには随分焦っていたようだ」

「依頼人？」

引っ張られる腕の痛みをこらえながら、尖った視線と一緒にネルが問う。

「どうせ、分かっているだろう？ 俺たちにお前の拉致を依頼してきたのはセンチ・レーバン王国の人間だ。俺たち『裏ギルド』は、レイヴンと同じく依頼人の依頼を通して活動する。しかし……そのレイヴンの姿は見えないようだが」

と、ギャレットは、あたりにアルサスの姿がないことを確認する。ハイゼノンの喧騒とは無関係に、ネルたちを追いかけてきたギャレットは、アルサスがハイゼノン公に会うため、ハイゼノン城へと向かった事を知らない。

「アルサスなら、ここにはいません……」

ネルがその名を告げると、ギャレットは、ネルに視線を戻しその眉をひそめた。

「アルサスと言うのか……。おそらく、そいつは偽名だな。アルサスとは、センチ・レーバンの古い言葉で、平和の王を表す『アーサー』の変じた言葉だ。アルトスは、武力で国の礎を築き挙げた王国の歴史を汚すものと伝えられているため、その名を付ける者は誰もいない」

「物知りなんですね」

わざと、余裕のある口ぶりを見せても、ネルの心は恐怖と不安に満たされていた。それが分かっているのか、ギャレットはニヤリと顔をゆがめる。

せめて、ソアンさんとメルだけは助けなきゃ。それが出来るのは、わたしだけ。自分はどうなっても構わない、とその顔を睨みつけるネルは心の中で何度も反芻した。

『お姉ちゃんがいなければ、お父さんもお母さんも死なずに済んだんだ！』

メルにそういわれた事を気にしないはずがない。昨夜は、一晩中眠れず、ソアンの貸し与えてくれた毛布の中で、泣き腫らしていた。メルも眠れなかったようで、外に出て行く足音を聞きながらも、そんなメルに声すらかけられなかった。

何と言って許してもらえばいい？

メルの言うとおりに、確かに、自分がいなければ、父も母も死なずに済んだかも知れない、というのは拭い去れない事実だ。記憶も身寄りもないネルを引き取って育ててくれた、心優しい人たちに、自分は恩を仇で返したのも同然だと、ネルは思う。記憶がなくても、悪いのは間違いなく自分なのだ。

そのせめてもの償いは、ギャレットたちに殺された、愛すべき両親と村の人達のため、メルを救うことだ。

唯一つ、アルサスとの約束は守れなくなってしまった。それでも、許して欲しい……。

「物知りと言っても、そのアルサスとやらほどではないさ。我々がラクシャを襲撃したことは、今を以って、ガモーフ神国の大臣連中くらいしか知らないことだ」

ギャレットは、ネルの睨みつける瞳にそんな意志があることまでは気づきもせず、饒舌に語る。

ラクシャ村が、ギャレット率いる黒衣の騎士団によって襲撃されたことは、かなり早期にガモーフ首脳の知りうるところとなっていた。ガモーフ神国は、ガモーフ法王を頂点とする宗教国家であるが、その政府機能は、センチ・レーバンやダイムガルドとそれほど変わらない。女神の言葉を代弁する法王の傍には、ちょうどセンチ・レーバンで言うところの「宰相府」にあたる、「十二神官議会」と呼ばれる大臣たちが侍っており、彼らが主に国家の運営を行っていると言っても良い。

十二神官議会は、すぐに村人ほぼ全員が全滅したという「ラクシャ村襲撃事件」の事後調査を開始した。あらゆる情報が集められる中、憶測と疑念が飛び交い、事件の背後に敵国であるセンチ・レーバン王国の陰を見つけた。

しかし、ちょうどその頃、ウェスア大教会の長である、ウルド・リー大司教が、事実上の謀反とも言える、法王に対し苦言を呈する演説を行ったため、十二神官議会の大臣たちは、そちらへの対処に追われることとなった。

そこで、ラクシャ村の事件は、徒に、和平状態にあるセンチ・レバンとの関係を悪化させない、つまり、事を荒立てないように、緘口令を敷いて、議会に近いごく一部の人間を除き、一般民衆には一切知らせないという政治的な判断が下されたのだ。

もつとも、黒衣の騎士団にネルの誘拐を依頼した、ライオット・シモンズがそこまで考えていたかどうかは、図りかねるところである。

「だが、アルサスとやらは、お前がラクシャから連れ去られた事を知っていて、かつ我々が依頼者の指示通り、ゲモックにお前を運ばせていたことも分かっていた。もはや、物知りを通り越して、神通力の域だとは思わんか？ よもや、十二神官議会に近い人間かとも思ったが、影走り（シャドウズ）を介して、依頼者から伝えられた情報では、その少年はセンチ・レバン人というではないか。どうやって、事のあらましを知りえたのか。胡散臭いというなら、そのレイヴンの方だ」

淡々と言ったのけるギャレットの言葉に、ネルはアルサスの言葉を思い出していた。

『ガモーフの関所で立ち往生してたときに、たまたま入った酒場で、君を助けて欲しいと頼まれたんだ』

レイヴンであるアルサスに前金で、五百ドラクマという大金を支払って、ネルの救出を依頼したという男。それが誰なのか、アルサスも知らないと言っていたが、物知りと言うのであれば、アルサスではなく、むしろその男の方だと考えるのが自然だろう。

しかし、ネルはあえてその事を告げなかった。今更、そんな事を言及したところで、どうしようもないからだ。

「さて、ハイゼノンの小競り合いに巻き込まれる前に、娘を連れてこの街をずらかるぞ」

ギャレットは、ネルの腕を掴んだまま、振り向き様に部下たちに目配せをした。すると、ギャレットと同じく、漆黒の鎧に身を包んだ黒衣の騎士たちが、おもむろに剣を引き抜いた。それが、何を意

味するのか、分からないはずがない。

「待ってっ、待って下さいっ！ ソアンさんとメルは関係ありません！！」

「残念ながら、俺たちの顔を見た者を生かしておくわけには行かないのでな。なにせ、俺たちは、日陰の『裏ギルド』だ……！」

凶暴な殺意がギャレットの顔を染め上げていく。ネルは背筋の凍る思いがした。無我夢中で、ギャレットの腕を振り解こうとするが、華奢すぎる少女の力では、丸太のように太いギャレットの豪腕を振りほどくことなど到底かなうはずもなかった。

「二人の命は助けてくれるって、約束したじゃないですかっ！ わたしなら、どうなったていいんですっ。だから、メルだけはっ！メルだけはっ！」

「お嬢ちゃん、平穏な山奥の村で過ごしてきたお前に、いい事を教えてやろう。約束と言うのは、破るためにあるんだ」

にべもなくそう言うのと、ギャレットは再び部下たちに目配せをして、ただ無感情に「片付けろ」とだけ命じた。

姉が何を思って、自らを差し出そうとしたのか。それを知ることが出来ない。共に同じ親に育てられたと言っても、メルとネルは血の繋がらない姉妹だ。それなのに、ネルはいつも優しくて、メルのことを本当の妹のように接してくれた。悪い方に考えれば、記憶を失ったネルが居場所を得るために、姉を演じていただけだと、ひねくれた考え方も出来るが、しかし、ネルの笑顔にそんなあざとさは感じられなかった。だから、メルも妹でいることに幸せを感じていた。

それがたった一夜で崩壊した……。今、目の前にいる、黒い鎧の男たちの手によって、メルの幸せだけじゃない、村の人すべての幸せも、そしてなにより、ネルがようやく手に入れた家族さえも。憎むべき相手は、姉ではなく、その黒い鎧の男たちではないのか？

『エントの森でこいつを見つけたとき、ネルは心の底から、君の無

事を喜んでいた。その心に偽りなんかない。十年一緒に暮らせば、血のつながりがなくなっちゃって、家族だ。家族が家族の事を心配しないなんて、ありえないと俺は思うんだ』

メルはアルサスの言葉を思い出し、ワンピースのポケットに納めた、バレッタを確かめた。それは、アルサスが昨日の夜、渡してくれたメルのバレッタ。たとえば、姉の事を恨んだとしても、一つだけ確かなことがある……少なくとも、姉が生きていてくれたことは、間違いなく嬉しいことだ。

「悪く思うな」

黒い鎧の男たちが、剣を引き抜きゆつくりと迫ってくる。彼らには慈悲の色などありえなかった。ラクシャ村を襲った時と同じ、魔物と言うよりはもはや、悪魔と言った方が近いような狂気を見せ付けている。何の迷いもなく、数瞬あとには、その剣の切っ先で、ソアンとメルを殺めるのだろう。

だけど、死にたくなかない。母が言った「生き延びて」の言葉を忘れることなんか出来ない。それは、メルにだけではなく、ネルにも向けられた言葉であつたはずだ。

「全ての魔法を解除するっ!! アレス・フライセンっ!!」

黒衣の騎士団が剣を振り上げた瞬間、メルはポケットから手を出し、それを高く突き上げた。目いっぱい広げたメルの手から、風の矢が巻き起こる。だが、その一つ一つは、ルウの魔法に比べてあまりにも弱弱しかった。

メルの巻き起こした風の矢は、狙いを黒衣の騎士団ではなく、地面に向ける。それは、先ほどモートンが魔法のカードでやって見せた方法と同じだった。風の矢は、舗装されていない土の地面に直撃すると、爆ぜ、土埃を巻き起こす。

「ぬおっ、あの娘っ! 魔法使いか!?!」

巻き起こった土煙は、火災の白煙を押し退けて、目潰しの要領で黒衣の男たちをうろたえさせた。魔法の力は弱くとも、逃げるだけの際を作るのには十分と言えるメルの不意打ちを受けたギャレット

が思わず、ネルを話してしまったのは、その瞬間だった。

「お姉ちゃんっ、こっち!!」

メルは力いっぱい叫んだ。驚きを隠せないネルは、目を白黒させていたが、すぐさま踵を返した。

何処へにげたらいい？ 姉の手を取り、ソアンと共に走り出したメルは必死に考えた。井戸広場の方からは、ハイゼノンの兵隊が、背後からは、黒衣の騎士団が追いかけてくる。しかも、貧民街は、ハイゼノン兵が放った火によって、白煙に包まれている。ともすれば、走るだけでも息苦しい。

「メル、魔法なんて、何処で覚えたの？」

メルに手を引かれて走るネルが、驚きを込めた声音で尋ねてくる。「クレイグさんに教えてもらったの。この世界に住む人は、ダイムガルド人以外、全ての人が魔力を持ってる。練習次第で、誰だって魔法を使えるんだって。あとは、本人に才能があるかないか、それだけだって」

クレイグに拾われて、ひと月あまり、メルはクレイグの家に世話になる傍ら、魔法の使い方について教わった。飲み込みがいいのか、もともと素養があったのか、それとも、元軍人であるクレイグの教え方がよかったのか、メルは瞬くうちに魔法の基礎を習得した。だが、魔法の師であるクレイグは、メルの本心を知ることなく、ハイゼノン兵の凶刃に斃れた。

メルの本心。それは、魔法に興味を示した空などではない。すべては、父と母の仇を討つため……。メルは、魔法を一つ覚えるたびに、復讐の炎に身を焦がしていたのだ。

「いたぞっ！ 貧民と外国人だっ!!」

不意に、背後とは別の方向から、声が聞こえた。それは、ハイゼノン兵の声だった。不味い！ そう思った瞬間、目の前に現れたのは、絶望だった。

人の背丈の何倍もある、黒いハイゼノンの壁。わずかにミスリルの持つ魔力の輝きを感じられるその壁面は、メルたちを逃がさない

ように、眼前に立ちはだかった。

「なんでっ！？　こんな壁っ」

メルは蒼い顔をして、物言わぬハイゼノンの壁に毒づきながら、振り返った。

「追い詰めたぞっ！！　ちょこまかと逃げやがって、このドブネズミどもがっ」

がしゃがしゃと、鎧の音がしたかと思うと、白煙の中から、ハイゼノン兵が現れる。メルたちの背後は登る事の出来ない壁。左右は、密集したバラック小屋。おそらく黒衣の騎士団も迫っているだろう。つまり、そこは逃げ場の無い、袋小路だった。

「きええっ！」

煙の中から現れたハイゼノン兵は、奇妙な掛け声と共に、戟げきを振りかぶって、大きく飛び上がる。もはや、相手が女子どもであろうとも、容赦はしない、貧民への恨み言をその一撃に込めてやる。その顔に書いてあるようだ。

メルは凍りついた。悪意はここまで人の顔を変貌させるのか。普段は、ただのハイゼノンの兵隊。きつと家に帰れば、その兵士として、妻子には良い父であろう。だが、今の彼の、悪魔のような顔は、黒衣の騎士団のそれと何一つ変わらない。積もり積もった侮蔑と憎悪が、彼の心に巣食っているのだ。

そんなハイゼノン兵の戟が振り下ろされた瞬間、メルの視界が何かに塞がれた。

「ソアンさんっ！！」

メルがその名を呼んだのもつかの間、ソアンの背中を戟の刃が袈裟に切り裂く。ソアンは悲鳴を上げなかった。その代わり、メルとネルをしっかりと抱きしめ、二人を守ったのだ。

「あなたたちは、この街の子じゃない……、あなたたちが殺されるいわれなどないのよ。生き延びて、メルちゃん」

ソアンが小さく呟いた。そして、それがまるで遺言のようにソアンの体は力を失い、崩れ落ちていった。

「フンっ、ババアめっ」

唾を吐き捨てるように、ハイゼノン兵は言うど戟で空を切つて、刃の先に付いたソアンの血を払った。

42. 黒衣の騎士団（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せください。

43. こんな世界

「次は、お前たちの番だ、小娘！ 『ヨルンの悲劇』での、同胞の仇をお前たちに押し付けると言うのは、いささか心苦しいが、恨むなら、生まれの不幸を恨め」

ハイゼノン兵は、再び戟を振り上げる。ネルの傍らで、メルはソアンの亡骸にすがって震えていた。もはや、彼女の魔法も間に合わない。だが、ネルは気丈にも、メルの前に立ち、ハイゼノン兵を睨みつけた。他人の事をこんな風に睨みつけるのなんて、初めてのことで、内心、とても気分が悪かった。

「生まれの不幸って何ですか？」

「何！？」

突然の問いかけに、ハイゼノン兵はうろたえる。ネルの声はよく通り、一瞬だけだったが、ハイゼノン兵を戸惑わせたのだ。

「貧民に生まれることが、外国人に生まれることが不幸だなんて、おかしいです。だって、見て下さい！ あなたのその武器についた血を！」

ネルの指先を辿り、ハイゼノン兵は自らが振り上げた戟の先端に視線をやった。そこには、拭いきれないソアンの真っ赤な血が、べったりとついている。

「その血の色は、あなたと同じはずです。貧しいから、民族が違うから、だから憎しみあうなんて、間違ってますっ！ だって、わたしたちはみんな同じ人間なんです」

「だから、このままお前たちを見逃せというのか！？ バカも休み休み言え。十年前、多くの同胞を新兵器で殺めたのは、ガモーフ人だ！」

十年前、ヨルンの地で起きた悲劇。戦場の真ん中を駆け抜けた、一条の光。それに包まれた、二百万もの人間が、一瞬で消えた。残されたのは、平原の真ん中にぽっかりと開いた、草木も生えない、

「墓標の地」と呼ばれるくぼ地だけだ。

その実、あの光が、はたしてガモーフの新兵器だったかどうかは分からない。現に、ダイムガルド軍の末席に居たというフランチェスカは、センチ・レーバンの秘密兵器だったという噂を教えてください。結局のところ、誰にもあの光の正体はわかっていないのだ。

しかし、ネルの目の前で、戟を振り上げるハイゼノン兵は、その時、少年兵として、部隊の最後列に居た。直接的に、敵軍と剣を交えたワケではないが、光が見えたその刹那、もしも逃げ遅れていたら、自分も死んでいたかもしれない。現に、隣に居た部隊長は返らぬ人となった。

あの日の悲しみと絶望。それは、その場にいたものしかわからない。だが、日増しに募った悲しみが、やがて憎しみへと変貌する。それは、メルが三ヶ月の間に辿った心の変化と同じだった。そして、このハイゼノン兵の男は、十年かけて、その矛先をガモーフ人と、彼らを匿う貧民たちに向けたのだ。

「だけど、ガモーフ人であるソアンさんは、わたしたちに優しくしてくれました。決して悪い人じゃありません。ここにいるわたしの妹だって、とってもいい子です。ガモーフの人や、貧民の人が、悪い人だって思う前に、何故分かり合おうとしないんですか？ 知ろうとしないんですか？」

ネルの声も瞳も、鋭い棘となって、ハイゼノン兵の胸に刺さる。いつしか、彼の顔には悪意よりも、戸惑いが占拠していた。

「分かり合っていれば、こんなことにはならなかった。そうじゃないですか？ 分かり合い、許しあい、互いに手を取り合って生きていく……」

「そんなことが出来ていれば、とつくの昔に、戦争なんてなかった。小娘よ、そんな戯言じみた説得で、命を永らえようと思っているのか？ 愚かなっ」

ハイゼノン兵は頭を振って、戸惑いを打ち払った。再び、彼の顔に殺意が蘇り、空を切る鋭利な音とともに戟がネルの頭上へと振り

下ろされた。

「お願い、これ以上あなたの手を血に染めないで下さいっ！」

嘆願とも言えるような言葉を口にしながら、ネルはその瞳を閉じた。

もはや、その刃を止める術はない。せめて、メルに生き延びる時間を与えてほしい。ネルは女神アストレアに祈りを捧げた。だが、いくら経っても、ネルは痛みも衝撃も感じない。その代わり、あたりは、しんと静まり返った。

「だめ、お姉ちゃんを殺させない！」

瞼の奥で、メルの声だけが聞こえ、ネルは不穏な空気を感じ取った。そして、瞳を開いたネルは愕然とする。

残酷切り落とされた左腕。滴る血。苦しい息遣い。それらは、ネルのものではなく、先ほどまでソアンの亡骸にすがっていたメルのものであった。メルはその身を呈してネルをかばったのだ。

「メル……！」

全身の血の気が失せていくのを感じながら、ネルは息を呑み、両手で口許を覆った。

「もう、家族の誰も、失いたくないっ！！」

ネルの前で悲鳴にも近い甲高い声でメルは叫ぶと、残された右腕を伸ばし、ハイゼノン兵の顔面にかざした。

「赤の精霊と契約の名の下に、具現せよ。汝、火炎の槍となれ……フランメ・ランツェ！！」

メル魔法の言葉が轟く。突然のことに、再び戸惑ってしまったハイゼノン兵に、逃げる余裕などなかった。直後、メルはまだ幼さの残る手のひらから、炎の槍が繰り出されたかと思うと、ハイゼノン兵の顔面にそれは直撃した。

「ぎゃああっ！！」

断末魔の悲鳴のような声を上げ、ハイゼノン兵が吹き飛ばされる。それとほぼ同時に、メルもその場に倒れた。

「メルっ！！　しっかりしてくださいっ！」

ネルはメルに駆け寄り、傍にしゃがんだ。切り落とされた肩口からは、だくだくと血が零れ、メルの顔は蒼白となっていた。

「お姉ちゃん……」

風が吹けば飛ばされるようなメルの声。ネルは胸中を締め付けられる思いで、メルを抱き起こした。すでに、その命の灯は消えかけているのだろう。心なしか、抱きしめた妹の体温は低くなっているような気がした。

「どうして、わたしのために」

「ごめんなさい……、お姉ちゃんにひどいこと言って」

メルは泣いていた。痛みからだろうか、それとも死ぬのが怖いからだろうか。いや、そのどちらでもない……。

「お父さんが死んだのも、お母さんが死んだのも、本当はお姉ちゃんの所為なんかじゃないって分かった。なのに、誰かの所為になきゃ、あたし、耐えられなかったの」

「いいんですっ！ もうそんなことどうだってっ。すぐにお医者さまのところへっ」

ネルがそう言うのと、静かに妹は頭を左右に振った。

「この街には、ガモーフ人を診てくれるお医者さまなんていないよ。分かってる、あたし、もう助からない……。だから、お姉ちゃんは生き延びて。黒衣の騎士団なんかには捕まらないで」

「メルを見捨ててなんて、行けるわけありません。なんとかしますっ」

頭の中で、メルを助ける方法はないかと、思案をめぐらせるが、焦りばかりがネルの頭を支配した。メルの傷口からは、もう助からないほどの血が溢れている。それが、ネルのワンピースを汚している。

「お願いメル、わたしを一人にしないでください」

「大丈夫、お姉ちゃんには、アルサスさんたちがいる。あの人は、いい人よ。信じて大丈夫。だから、お姉ちゃんは一人ぼっちになんかならない。あたしも、お姉ちゃんの心の中で生き続けることが

できるなら、死んだって、さびしくなんかないよ」

「メルっ」

言葉に詰まってしまう。メルは、自分が死に直面しているというのに、あまりに晴れやかな顔をしており、それが却って、ネルの心を強く痛めた。零れだす涙が、ネルの頬伝い、メルの額に落ちる。メルは、ぼんやりとした視線で空を見上げた。

「雨、かなあ……」

かすれた声で、メルがつぶやく。ネルの涙を、雨と勘違いしながら、ないはずの左腕を必死に空にかざそうとする。だが、そこにあるのは、ハイゼノンの喧騒とは裏腹なほど、のどかな青空だった。

「空が曇ってる……。ああそうか、あたしがくすんでいるから。お姉ちゃんを悪者呼ばわりしたからだ。もう、青空を見ることはできないのかなあ、いやだなあ、あたし。いやだなあ、こんな世界」

うわ言に近いその言葉を最後に、メルの全身から力が抜け落ちていった。自分のために、また一人、大切な人が死んでいく。

「メルっ！ 目を開けてくださいっ、メルっ！！」

ネルは大粒の涙をこぼしながら、何度もメルの名を叫んだのだが、メルは二度とその瞳を開くことはなかった。

いやだなあ、こんな世界……。

こんなことなら、センチ・レーバンへ帰ってくるんじゃないかった。ハイゼノン城から飛び出したアルサスは、そんなことを思いながら、貧民街へ急いだ。遠目に見える、あの黒煙と白煙は、ハイゼノンの兵隊たちが、街に火を放った証拠だ。昨日街にいたばかりだというのに、たった一夜で、街のいざこざに巻き込まれてしまった。これでは、遺跡の調査などではしない。それどころか、自分たちの身まで危うい。

もっとも、そのために、アルサスはこの遺跡に囲まれた街の領主マレイア・ハイゼノンの城に押し入ったにもかかわらず、ハイゼノ

ン公の説得は失敗に終わったばかりか、アルサスの帰りを待たず、貧民たちとハイゼノン兵たちが衝突を始めてしまった。

嫌な予感がする。額にじむ汗は、ぬめりを帯びた脂汗。それを拭ういとまもなく、アルサスは街角を駆け抜ける。ネルたちは無事だろうか？ アルサスの心は騒いでいた。

街を二分したような、争いの音が、街中に響き渡っている。無論、ハイゼノン兵たちが一方的に、貧民たちを蹂躪していることは火を見るよりも明らかだった。

やがて、朝靄の代わりに、火災の煙が包み込む、貧民街の入り口……即ち井戸広場が見えてくる。思えば、そこに張り巡らされたバリケードは、貧民たちを囲い込むためのものだったのだろう。

「何だ、貴様はっ！！ ええい、止まれ、止まれっ！ ここから先へは、部外者の立ち入りを禁じているっ」

バリケードの傍で、ハイゼノン軍の徽章が胸に彫刻された鎧を身に着けた兵隊が、走り来るアルサスの姿を見つけ、声を荒げた。

アルサスは、兵隊たちを睨み付け、

「これが見えないかっ！！」

と一喝すると、アルサスは左手にした、一枚の書簡を掲げた。

「センテ・レーバン王国からの書簡であるっ！！ 我を害するは、次期国王陛下シオンさまを害するも同じっ、ここは押し通らせてもらうっ！！」

「何だと！？」

うろたえる、ハイゼノン兵。しかし、王国の銘と紋章の描かれたたった一枚の書簡の効果は靦面であった。まるで、道を譲るかかのように、ハイゼノン兵たちが雲の子を散らす。アルサスは、勢いよくバリケードを飛び越えて、彼らの見守る中を走り抜けた。

井戸広場には、いくつもの貧民の亡骸が転がっている。その中に、クレイグの姿もあった。だが、ネルやフランチェスカ、ルウの姿は見えない。少なくとも、無事であることに賭けたいアルサスは、少しばかり胸をなでおろしつつ、迫り来るハイゼノン兵を斬りふせな

がら、貧民街の奥に向かう。

すでに、貧民街の南半分は、火の海であった。魔法で点けられた炎は、魔法の水でしか、沈下することができない。おそらく、この炎は貧民街を飲み込むまで、消えないだろう。

「貧民を皆殺しにでもするつもりなのか!? それがあんたの望む

『結末』なのか?」

アルサスは赤い瞳に、紅蓮の炎を映しこみながら、マレイアの言葉を反芻した。

『わたしは、為政者として、その争いを操作し、結末を導くだけ』

今頃、ハイゼノンの領主は城の高みから、貧民街の惨状を見下ろしているだろう。根本が違うのだ。地べたを這っている生きる者の気持ちをも、理解するとかとしないとかではない。彼女は、この街を治める者という立場だけしか見ていない。だから、分かり合う必要などないと、口にする。

「だったら、何のための領主なんだ!?!」

そこにいるはずもないマレイアの頑なな顔を、炎の中に思い浮かべ、アルサスは言葉を吐き出した。

と、その時である。

「アルサスっ!!」

背後より、名を呼ばれたアルサスははっとなり、後ろを振り返った。こちらへ向かって走りよってくる、見覚えのある顔が二つ。

「フラン、ルウっ!!」

アルサスも、二人の下に駆け寄る。

「どうやら、交渉は決裂してみたよね……」

開口一番、アルサスの眼を見てそう言ったフランチェスカの鉄槍は、赤黒い血に濡れていた。ルウも、顔を泥だらけにしている。あえて問うまでもなく、二人の姿を見れば、何があったのかくらい容易に想像できた。

「ああ。暖簾に腕押しだ」

「じゃあ、ハイゼノン公に会うことはできたの?」

と、ルウ。

「まあな……。ルウ、ひとつ頼みがある。今から、壁門へ走って、こいつを届けてほしい」

そう改まった口調でアルサスは言うと、ポケットから一枚の書簡を取り出した。蠟で封印された書簡には、ハイゼノン公のサインがある。ルウは、それを受け取りつつ少しだけ驚いた。

「これ、何！？　せ、センテ・レーバン王家直筆の命令書じゃない？」

「ああ、そうだ。マレ……。ハイゼノン公のところで、こいつだけは手に入れることができた。その書簡は、王国から、センテ・レーバン親衛騎士団クロウ・ヴェイルに宛てた命令書だ。自治権を有する諸侯の領地に、騎士団の介入を許可する旨と、貧民たちの身柄を王国が預かる旨が書かれている」

「クロウ・ヴェイル？」

「ああ、今この街には、センテ・レーバン王国の親衛騎士団が来ている。その隊長の名がクロウ・ヴェイル。けどおそらく、壁門が封鎖されて、やつらは門の前で立ち往生している。この書状があれば、門兵に壁門を開かせることも可能はずだ。だから、こいつをクロウ・ヴェイルに届けて、やつをここまで連れてきて欲しい」

「ねえ……。アルサスっては何者？　ただのレイヴンじゃないよね。どうしてこんなものが、ハイゼノン公のお屋敷にあるのさ？」

アルサスは、訝るルウの視線を受け流し、

「いや、俺はレイヴンで、そいつは俺が王国の名を騙って、捏造したものだ。回りくどい方法だが、この馬鹿げた騒ぎを収めるには、どうしても王国の力が必要なんだ」

と、ルウの背中を強く押し出した。

「分かった。任せて。それよりも、ネルお姉ちゃんと、メルの方がどこにも見当たらないんだ。きっとどこかにいると思う。早く、見つけてっ」

「ああ、そっちは任せろ！」

ルウの走り去る背中に向かって言うと、アルサスはフランチェスカと頷き合わせ、ルウとは反対方向に走り出した。

「親衛騎士団が来たら、事態の鎮静までに、混乱が増すかもしれない。だから、状況を聞いてる暇はねえっ!!　ネルのいそうな場所へ急ごうっ!!」

「ええ、そうしましょうっ!」

43. こんな世界（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せください。

44. 仇討ち

王国の書状を託されたルウは、それを掲げ、貧民街を抜け出した。大通りを駆け抜け、わき目も振らずに、まっすぐハイゼノンの壁に設けられた、街の入り口、通称『壁門』へと急いだ。

アルサスの言ったとおり、書状に書かれた、王国の名は効果覲面であり、恐ろしい顔をしてガモーフ人であるルウを睨み付ける兵たち、手出しをしてこない。それは、壁門の番をする門兵も同じであった。詳細を話している余裕などなく、ルウが書状のサインを見せ、「門をあけてっ！」と迫ると、怪訝な顔をしながらも、門兵は門扉を開くよう、魔法鍵を解いた。

巨大な壁に作られた巨大なミスリルの門扉は、魔法装置によって制御されている。ひとたび、封印の呪文を唱えれば、門は硬く閉ざされ、軍隊がよって集っても破ることはできない堅牢さを誇示する。しかし、開放の呪文を唱えれば、人間の手を煩わせることもなく、簡単に開くのだ。

観音開きに、地鳴りのような音を立てながら門扉がひらくと、すぐそのそばに、馬にまたがる、騎士たちが待ち構えていた。

太陽の光を受けて、まばゆく輝く銀色の鎧、そして、はためく剣と盾の紋章が刺繍された旗。彼らが、アルサスの言った、センチ・レーバン親衛騎士団である。その先頭で、白馬の背に乗るのは、アルサスと年の変わらないような、眉目の整った青年だった。

「親衛騎士団さまに、ご書状ですっ!!」

ルウはそう叫びながら、青年の下へと駆け寄った。

「隊長のクロウ・ヴェイルさまは、どなたでしょうか!？」

と、問いかけると、白馬の青年がよく通る声で「私です」と答えた。ルウはひざまづき、書簡をクロウに差し出す。クロウは、馬上からでは手が届かないと思ったのか、わざわざ馬を下りて、ルウの手から書状を受け取った。そして、蠟の封印を解いて、書状にすば

やく目を通す。

文面を読み勧めるうちに、それまで冷静な顔をしていたクロウの顔色が変わった。だが、書状にに何が書かれているのか、ずっと下を向いたままのルウには分からなかった。

「君は、街の人……ではなさそうですね」

書状を読み終えた、クロウの視線は、ルウの纏う魔法使いギルドの制服に注がれていた。

「いいえ、ボクは魔法使いギルドの、魔法学生です」

「そうですか」

そういうと、クロウは踵を返し、すぐ背後に控えていた馬上の副官ブレックにそれを見せる。ひげ面のブレックは、やや驚きをもつてその文面を見つめた。やがて、文面を読み終えたと、物言わず頷き返す。

それを確かめてから、クロウは再び、ルウの方に向き直ると、膝を折った。

「貧民街の一件、了承しました。これより、センテ・レーバン親衛騎士団は、王国の名代として、諸侯の領地に軍事介入します。危険があるかもしれませんが、君は街に戻らない方がいい」

と、穏やかな、しかし、芯のしっかりした声音でクロウはルウに言う。

「でも、アルサスが、あなたたちを貧民街まで案内しろって……」

「アルサス？」

「ボクの旅の仲間です。それに、ネルお姉ちゃんともはぐれちゃって。心配なんです。だから、ボク、街に戻ります」

懇願するようにルウが言うと、クロウは何故か、口調を変え、

「分かったよ。なら、僕の馬に乗るといい」

親しみのある声音になって、軽くルウの手を取って立ち上がらせた。

「よしっ！ クロウ隊、前進っ！！」

副官ブレックの、太い声が響き渡る。手にした指揮棒を振れば、

それを合図に、控えていた騎士団総勢二十名あまりが、馬の蹄鉄の音を響かせて、壁門をくぐっていく。その威容は、ルウに心ばかりの安堵をもたらした。

アルサスたちが、ひと度、貧民街の曲がり角を曲がれば、どこもかしこも血の海だった。幾人もの貧民がハイゼノン兵の手にかかって、無残にも殺されており、まともに直視することすらできなかった。抵抗した貧民も数知れず、ハイゼノン兵の遺体も転がっている。すでに、街の中は、殺し合い……いや、戦争に近い状態になりつつあった。

十年前、父親である前ハイゼノン公の急逝により、その地位と責任を受け継ぐことになったマレイアにとって、貧民への処遇は、諸侯としての重圧に拍車をかけていた。そうして、マレイアが下した決断を、町の外の人間であるアルサスがとやかく言える立場ではないことは、重々承知している。

しかし、一方的な殺戮が招く反発は、ハイゼノン兵にも及び、やがて市民たちが暮らす場所にまで波及するだろう。

そうなってからでは遅い、ということが、マレイアは分かっているのか。もしも、この街が世界の縮図だというなら、やがて世界に同じような騒ぎが起きるというか。そのとき、それは確かに「戦争」という二文字で語られる。

『それを防ぐために、レイヴンになったんじゃないのか!?!』

何を言っても、立て板に水だったマレイアの言葉を聴くたびに、アルサスは悔しさを思い知らされた。

『戦争をとめる方法……それはひとつしかない……』

もはや、迷いを捨てるときが来てしまったのだろうか。二つを天秤にかけ、アルサスが決断を下せば、ひとつの危機を収められる。そうすれば、少なくとも、この街のありさまは、世界の縮図ではなくなるはずだ。

「アルサス、いたわっ！　ネルよっ!！」

フランチェスカの声に、我に返ったアルサスは、彼女が槍の穂先で指し示した方向を見据えた。聳え立つ壁のふもと、うずくまるようにして座り込むネルの後姿。その傍には、顔面を焼かれたハイゼノン兵の亡骸と、背中を切り裂かれたソアンの遺体があった。

それだけでは、何があったのか察するのは難しい。ただ、ネルが無事であったことに少しばかり胸をなでおろしたアルサスは、ネルに駆け寄った。

「ネルっ!!」

その名を呼んだアルサスは、ネルの姿をみてぎよとなった。ネルが膝に抱えていたのは、彼女の妹、メルだった。左腕がぼつさと斬り取られ、青白い顔をしたメルは、すでに息がない。それなのに、ネルはなぜか愛しむように、妹の黒髪を撫でていた。

「一緒ラクシャへ帰りましょうね……。帰ったら、お母さんのキャチャを食べましょう。そうしたら、野原へでかけるの。今頃、野原には、シエムの花が咲いているはずです。それを編んで、お父さんとお母さんのために、真っ白な花冠を作りましょう」

メルの亡骸に語りかけるネルの姿は、あまりにも哀れであった。

妹の死を受け入れられず、泣きながら微笑んでいるのだ。

「しっかりしろ、ネルっ!!」

と、アルサスが肩を揺さぶっても、ネルはメルの髪を撫で続け、アルサスには意味の分からないことを、つぶやき続けていた。その顔には、いつもの朗らかさなどない。

「ネルっ! よく見ろっ、メルはもう死んでるんだっ!!」

アルサスは、そう怒鳴りつけると、ネルの頬を思い切りはたいた。女の子に手を上げるのは、気が引けたが、うつろな顔をしたネルのことを見ていられなかったのだ。

「アル……サス? メルが、わたしを守ってくれて……。いやあっ、メルっ!!」

頬の痛みに、ようやく我に返ったネルは、アルサスの顔を見ると、強くメルの亡骸を抱きしめ、半狂乱にも近い声を上げて泣いた。正

気を失い、堰きとめようとしていた悲しみが、どっと溢れかえってくる。アルサスには、そんな彼女の悲しみを止める方法は、思いつかなかった。

「ネル、この街から出よう。悲しみに浸るのはそれからしてくれ」辛辣な物言いではあるが、もう直、親衛騎士団が街に入ってくる。そうなれば、事態が鎮圧するまで、更なる混乱が生じるはずだ。その前に、この場を離れなければ……。

アルサスは、メルの遺体をネルの膝からおろす。ネルはそれを拒否して、いやいやを繰り返したが、アルサスは許さなかった。

不意に、メルのワンピースから、バレツタが零れ落ちる。

「メル……」

アルサスの思ったとおり、メルはネルのことを憎みきれなかったのだろう。彼女が最期に何を思ったのか、推し量ることはできない。それでも、その穏やかな死に顔は、最期に姉を守ることができた、満足感のようなものに充たされているように思えた。

アルサスは、ネルを立たせながら、バレツタを拾い上げ、自らのポケットに仕舞い込んだ。

「フラン、とにかく街から離れよう……」

「でも、ルウはどうするつもり？」

ネルを気遣うような面持ちをしていたフランチェスカの問いかけに、「置いていく」とアルサスは言うのと、歩き出した。

「まさかあなた、最初からそのつもりで、ルウに王国の書状を届けさせたの？」

「ああ、そうだ。あんたも、この街を出たら、ギルド・リッターへ戻れ。後は、俺一人で何とかする……」

無感情に、抑揚なく、アルサスと言う。フランチェスカはその言葉に驚いた。何か、アルサスが隠している、フランチェスカはそう思ったのだが、

「何とかって、どうするつもり」

と、尋ねようとしたその口は、アルサスの足が止まると同時に閉

じられた。

前方から鎧のこすれる音。白煙を割って現れる、幾人もの人影は、ハイゼノンの兵士などではなかった。漆黒の鎧。血に濡れた剣。黒衣の騎士団である。

「てこずらせてくれる……。貴様が、その娘をゲモックから奪ったという、レイヴンか？」

頬に傷がある大柄な男が野獣のような声でアルサスに尋ねる。

「人にものを尋ねる態度じゃねえな、ギャレット・ガルシアさんよ」と、アルサスが言うと、ギャレットはいささか驚いたような顔になった。

「なんと、俺のことを知っているのか？ フンっ、俺も有名になっただもんだな」

「裏世界じゃ、あんたのことは、どこの国の王様よりも有名人だろうが。だが、その実、ライオットの犬風情だとは誰も知らねえみたいだけだよ」

左腕でネルを抱え、右腕で剣を引き抜く。アルサスは、余裕のある振りをしながらも、内心は予想だにしていなかった相手の登場にうろたえていた。憔悴しきったネルを抱え、フランチェスカと二人で、十名近い黒衣の騎士団を相手にすることができかどうか、その自信はなかった。

「フラン、あいつらを牽制してくれ。俺は、ネルを背負って逃げる。あんたも、すぐに逃げて……」

ちらりと視線を送り、フランチェスカに囁いたアルサスは、フランチェスカの異変に気づいた。いつも、どこか飄々とした雰囲気はどこかに消え、まるで猛禽のような目つきで、フランチェスカはギャレットたちをにらみつけている。

「元、センチ・レーバン黒騎士団……。こんなところで、お目にかかるのは、思っても見なかったわっ！」

「待て、フランっ……！」

アルサスの制止も聞かず、フランチェスカは槍を構えて駆け出し

た。センチ・レーバン黒騎士団、その名を一度だけ、フランチェスカの口から聞いたことがある。十年前、ヨルン平原でダイムガルド正規兵として、フランチェスカの部隊が戦った相手が、センチ・レーバン黒騎士団。

そして、あまり知られてはいない事実だったが、ギャレットたち、黒衣の騎士団はその成れの果てである。センチ・レーバンでは、ヨルン平原の戦いで生き延びた者たちを英雄扱いすることなく、死んだ者たちと同じように冷遇した。剣と盾で八百諸侯を纏め上げた「武の国」にとって、敗北の二文字は恥以外の何者でもなかったのだ。そのため、ヨルン平原の端っこで戦っていた、ギャレットたち黒騎士団も、王国から爪弾き者にされた。そして、王国を離れた彼らは、裏ギルド「黒衣の騎士団」として活動を始めたのだ。

「あんたたちが、隊長やわたしの仲間たちをつ！ あれほど、命乞いしたというのに、笑いながら殺したつ！！」

冷静さなど欠片もなく、フランチェスカは槍を繰り出す、しかし、その一撃一撃は、笑みさえ浮かべるギャレットに、すべてかわされていく。冷静さを失った剣戟など、歯牙にもかけない。それは、ギャレットとフランチェスカの実力の差を示していた。

「貴様の隊長？ ああ、十年前の腰抜けダイムガルド人どもの生き残りか。あれは傑作だった。戦争はもう終わったなどと抜かして、俺に命乞いをしてきたんだからな！ あの、白い光を見て臆したか、戦場で、騎士が命乞いをするなど、女々しいことこの上ないっ！」

「何をっ！ 死者を愚弄するの！？」

「戦場では、最期に生き残った者だけが、正義っ！」

ギャレットの剣がフランチェスカを捉える。しかし、瞬間的に危険を察知したフランチェスカの感性は、刃が喉元を切り裂く前に、身を翻させた。空を切るギャレットの剣。一端間合いを取ったフランチェスカは、きつくその剣先をにらみつけた。

ギャレットの背後では、黒衣の騎士団のメンバーたちが、にやにやとしながら、観戦を決め込んでいる。アルサスが、ネルを抱えて

いて手出しできないと分かっているからなのか、それともリーダーであるギャレットの實力に全幅の信賴を寄せているのかは分からなかった。

「ただの人殺し風情が、正義を語るなあっ!!」

フランチェスカの右足が地面をけり、高々と舞い上がる。そして、空中で槍を逆手に持ち帰ると、落下の速度に任せて、ギャレットの頭上へと突撃する。

「だめだ、フラぁんっ!!」

咄嗟にアルサスが叫んだ。その瞬間、剣ではなく、ギャレットの太い脚が伸び、その靴底がフランチェスカの腹をたたいた。

「きゃあっ!!」

女らしい悲鳴を上げながら蹴飛ばされるフランチェスカ。地面に横わり、「ううっ」ともらすうめき声を上げるのは、全身を駆け巡る激しい痛みの所為だろう。

「残念だが、その程度の腕では、仇をとるなど、途方もないこと。だが、かつて剣を交えた敵としてのよしみだ、最期くらいは楽に死なせてやろう」

そういうと、ギャレットは、ゆっくりと倒れたフランチェスカのもとに歩み寄り、刃を喉元に突きつけた。

「やめろ、ギャレット・ガルシアっ!」

「吼えるな、レイヴンの小僧。おとなしく、その銀色の娘を渡してくれるなら、この女の命は助けてやろう」

不敵な笑みが、アルサスの赤い瞳に叩きつけられる。フランチェスカか、ネルか。それを選べとギャレットは言うのだ。

できるはずがない。しかし、ギャレットの手首が少し振れるだけで、フランチェスカの首筋は切り裂かれ、そのダイムガルド人特有の浅黒い肌から、鮮血が噴出すだろう。

「さあ、どうする? 十数える間に、答えを聞こう。ひとつ!」

「待て、ギャレット! その前にひとつだけ聞きたい。どうして、俺たちがハイゼノンにいるって分かったんだ?」

アルサスが問うと、ギャレットはカウントを止め、再び不敵な笑みを浮かべる。

「あるお方の予測だ。貴様らが『奏世の力』の謎を求めて、エントの森へ向かったなら、その先はハイゼノン……『始まりの地』へと向かうだろうと。俺たちは、そのお方の命を受けて、ここへ至ったまでのこと」

「始まりの地だと……？ そのあるお方とは、ライオットのことか？」

「さあな、そこまで答える義理はねえ。時間を稼ごうてのなら、お生憎だな。俺たちも、影走り（シャドウズ）がルミナスでしくじってくれたおかげで、少々時間がないものでな。ふたーっ！」

不穏な空気をはらんだまま、フランチェスカ処刑のカウントが再び始まった。

44. 仇討ち（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せください。

45. アルサスたちの敗北

ギャレットのカウントは、ネルの耳朵を打ちつけた。『約束は破るためにある』その言葉が、カウントとともに、脳裏に蘇る。

人が人を殺すような世界……。ラクシヤを離れ、絶望に暮れたこともあった。命の危険を感じたこともあった。必死に戦おうとする人の姿も見た。死を覚悟してもなお心静かでいられる人がいることも知った。だけどこのハイゼノンの街を覆う、気分が悪くなるほどの敵愾心、嫌悪感に包まれた感覚は、ネルがはじめて知るものだった。

どうして、簡単に人が人を殺そうとするのだろうか？ ソアンとメルを殺した兵士は何を思っ、武器を振ったのだろう。そして、目の前にいる黒い鎧の男は何を思い、ラクシヤ村の人たちや父と母を殺し、今また、フランチェスカの命を奪おうとしているのだろうか……。彼の笑みには、人を殺すことへの愉悦すら垣間見える。どうしてそんな顔ができるのか。

分からない。分かりたくもない。

ネルには、目の前にいるギャレットが、真っ黒で汚らわしい塊しか見えなかった。人ではない、悪魔。いや、生き物ですらない。憎悪と悪意の集合体。そんな者の考えを知る必要など、どこにもありはしない。

ただ、ひとつだけ、ハイゼノンの地を踏んで分かったことがある。それは、この世界に、ギャレットのような人間がたくさんいるということだ。たとえば、お城の高みから貧民街を見下ろし、貧民たちを皆殺しにするように命じたハイゼノン公。ウルドの思いも聞き届けず、処刑しようと決めたガモーフの大臣たちもそうだ。ソアンとメルを、そして貧民街のひとたちを次々と殺める、ハイゼノンの兵隊たちもおなじこと。

いや、そんな具体例なんか出さなくてもいい。この世界には、常

に憎悪が満ちており、やがてそれが戦争と言う形で結実する。そのひとつが、ヨルンの悲劇なのだ。

世界は、ハイゼノンと同じように壁に包まれている。ミスリルや石でできた壁ではない。見えない人間の、欲と傲慢、己のみを大事に思う心が作った、見えざる壁だ。

こんな世界、わたしもいやだ……。

「ななーっ!!」

ギャレットのカウントがそのときを迎えようとしている。

ネルはそつと瞳を閉じた。貧民街が燃えていく焦げ臭い煙のにおいと、血のにおい。それに混じって、鼻を突くような人間の焼けるにおい。凄惨で、あまりにも無常な現実が、瞳を閉じてもそこにある。

「ネル、俺が合図したら逃げるんだ。何処だっていい。とにかく逃げろ」

カウントの声に混じって、アルサスがネルに耳打ちした。視線はじつと、ギャレットを睨み付けている。アルサスは何をしようとしているのか。一抹の不安とともに、ギャレットのカウントは、ついに十を数えた。

「答えを聞こう、レイヴンっ!! その娘を差し出すか、この女を見捨てるか!？」

轟く宣告の一言。アルサスは、半ばネルを突き飛ばすようにその手を離すと、腹のそこからうなり声を上げて、ギャレットに突撃した。

「うおおっ!! 逃げろ、ネルーっ!!」

振り上げられるアルサスの剣。迅雷の素早さで、ギャレットの懐へと飛び込む。しかし、ギャレットは余裕ある表情を崩すことなかった。むしろ、血なまぐさい愉悦の笑みを浮かべている。

「だめっ! アルサスっ、行かないでっ!!」

アルサスが殺される! ネルが悲痛な叫び声を上げたその瞬間、フランチェスカの喉元にあてがわれたギャレットの剣が、風を薙い

だ。その一撃は、アルサスの剣が振り下ろされるよりも遙かに早く、確実にアルサスの脇腹を突いていた。

「ぐっ！」

脇腹を貫かれた痛みに、顔を歪めるアルサス。

「迅雷の剣技……センチ・レーバンの騎士団に伝わる、王家の剣術。なるほど、レイヴンよ、貴様もセンチ・レーバンの騎士崩れの類か」

「おまえと、一緒にするなよ、ギャレットっ！」

アルサスは、自ら後ろに飛びのき、ギャレットの剣を脇腹から引き抜いたものの、その傷口からは、ボタボタと血の塊が地面に零れ落ちた。

「アルサスっ！」

傷は見た目よりも深く、立っていることも出来ず、肩膝を突くアルサス後姿に、逃げろといわれたことも忘れて、ネルはその場に座り込んでしまった。

みんな死んじゃう……。フランチェスカの槍も、アルサスの剣も、ギャレットに及ばない。ソアンに、メルに続き、フランチェスカがアルサスが殺されてしまう。何も知らない、守られてばかりの自分の所為？ それとも、人を殺すことに、心を痛めないような人間所為？

『ううん、この世界がこんなにも汚い所為……。わたしも、ギャレットも、みんなみんな、悪いんだ。悪い人間の所為で、いい人間が殺される。……こんな世界、わたしもいやだっ!!』

心の中で、ネルが叫んだ瞬間、彼女の体から光があふれ出した。目に痛いほどの眩く真っ白な光。

「奏世の力っ！」

そう叫んだのが、ギャレットであったか、アルサスであったか、フランチェスカであったか。それを確かめるよりも早く周囲は光に包まれた。

もしも、我々人間が鳥のよう空を飛べたとしたら、ハイゼノンの端に現れた一条の光が膨れ上がり、まるでドミノ倒しかなにかのよ

うに、街をなぎ倒し、破壊していく光景を目の当たりに出来たであろう。しかし、人は空を飛ぶことは出来ない。ネルの全身から溢れ出した、「奏世の力」の光は、瞬くうちにアルサスたちの視界は真っ白になった……。

光に吹き飛ばされる。光とともに、激しい突風が吹き荒れる。それは、爆風にも似た強い力だった。しかし、ひと時もすれば、その光はしゅるしゅると収束し、あたりは静けさを取り戻す。その静けさの中で、アルサスは自分の体の半分が瓦礫に埋まっている事に気づいた。幸い、その瓦礫はすべてバラック小屋の木片で、除けるのは容易いことだった。

「ネル……っ」

瓦礫を押し分け、ずきずきと痛む脇腹を押さえながら立ち上がるアルサス。そして、わずかな粉塵が舞う眼前の光景に、アルサスは全身を強張らせた。破壊の跡。うずくまるネルを中心に、バラック小屋というバラック小屋がなぎ倒され、跡形もなく廃墟になっている。

ネルが「奏世の力」を使ったことは明白だった。

「くそっ！ 本当の力に目覚めちゃった！」

脇腹の痛みをこらえながら、アルサスはネルの方を睨み、強く歯噛みした。

「俺が、迷ったからだ……これじゃあ、ライオットの思惑通り、白き竜が目覚める」

そうつぶやくアルサスの声は、ネルの悲鳴によってかき消される。眼前に現れた瓦礫と化した貧民街に、ネルは自らの力に恐怖し、震えている。こんなつもりじゃなかった、といやいやを試してみても、目の前の破壊の光景は変わらない。子供のように泣きじゃくって、悲鳴を上げる姿は、メル亡骸にすぎない姿よりも惨めに見える。

アルサスはよたよたと、ネルの元に駆け寄り、ネルの頬を血のついた手で引っぱたいた。

「どうして、逃げろって言ったじゃないかつ！」

「ごめんなさいっ、ごめんなさいっ」

今までのネルからは想像もつかないほどの、狼狽振りと困惑を見せながらも、その言葉だけを繰り返そうとする。それが、却ってアルサスを苛立たせた。

「ごめんなさいじゃないっ！ お前が破壊衝動に駆られたからだ！ 力をコントロールせず、ただ無闇に使えば、次は人が死ぬ！ その次は、世界が滅びるっ！ そうならないために、気をしっかり持ってくれ、ネルっ！！」

「アル……サス？」

何を知っているの？ アルサスの言葉に戸惑いを隠せないネルは、怯えたような顔をして、赤い瞳を覗き込んでくる。

と、そのときであった。アルサスの背後に、殺意を持ったギャレットの気配が。咄嗟に振り向いたが、黒い影のようなものが行き過ぎた瞬間、アルサスは背中に熱を感じた。熱はまたたくうちに痛みに変わる。

噴出す鮮血。倒れこむアルサス。悲鳴を上げるネル。

「ギャレット、てめえっ！」

踵を返して、剣を振ろうとするが、力が入らない。アルサスはそのまま転倒するように地面に突っ伏した。

「すばらしい力だ。あのお方の仰ったことは真であったか！」

下品な笑い声とともに、ギャレットは地の滴る剣身に舌を這わせた。そして、乱暴にネルの右腕をつかむ。

「あのお方がお待ちだ、銀色の娘！ 来いっ！！」

「いやあっ！ 離して下さいっ！！ アルサスっ、アルサスっ！ 死なないでっ」

ネルは左の手のひらを伸ばす。アルサスもその手を取ろうと腕を伸ばしたが、その指と指が触れ合う前に、ギャレットの拳が、ネルの腹に叩き込まれた。ネルは、声なき声でアルサスの名を口にする。と、そのまま、意識を失ってしまう。

「ここで、罫り殺しにするのも一興だが、その時間はないようだ。
女神アストレアも意地悪なもんだ」

皮肉とも取れる言葉とともに、ギャレットがニヤついた視線でアルサスを見降ろす。

「野郎ども、王都へ急ぐぞっ!!　グズグズするなっ!!」

「待て、ゴミ野郎……!」

精一杯の汚い言葉を吐き捨て、伸ばした手の先、ネルを担いで去っていくギャレットと、黒衣の騎士団の後姿がぼやけていく。何度か、似たような場面に出くわした。ルミナスで、エントの森で。だが、今回は違う……。

言い知れぬ漠然とした敗北感の中で、ギャレットとネルの姿たちが、見えなくなると、代わりに聞こえてきたのは、馬のいななきと、ルウの叫び声だった。

「アルサスっ、しっかりしてっ!!」

アルサスは駆け寄ってくるルウの姿を見ることなく、その意識を失った。

ハイゼノンから遙か西に位置する、センテ・レーバン王都は祝賀ムード一色であった。王城へとつづく、沿道には、花で飾られた垂れ幕が掲げられ、「シオンさまのご即位に万歳」と描かれていた。分離主義者ファレリア公爵の反乱を鎮圧したことを受けて、ついに七日後、新たな王国の王が即位すると、宰相ライオット・シモンズが、公表したのだ。

シオン・コルネ・レーバン。前王の正室の子であり、国民にその姿を見せたことはないが、風のうわさでは、側室の子、フェルトよりも聡明で王の器にある人物だと囁かれる。

飢饉や異常気象といった、暗い話題ばかりが席卷していた王都の人々は諸手を上げて喜び会う。そこには、これで世の中が少しはマシになるのではないかという期待すら含まれていた。それは、お祭り騒ぎにも近いものがあり、七日間、王都の人々は仕事を放り出し

て、祝いの酒を酌み交わす。王が代替わりするたびに行われてきた、伝統の慣わしだ。街には、陽気な音楽と笑い声が絶えない。

そんな王都の人々は、張る上空を飛び回る、一羽の鳥の姿に気づいてなどいなかった。

その鳥は、ぐるぐると空を旋回しながら、黒い眼で王都を見下ろしていた。巨大な翼、鋭い鉤爪……魔物の一族、エイゲルの長、トンキチことトニアである。

トニアは、ため息混じりに、「愚かなことだ」と呟いた。けして、明るい話題に喜び合い、大騒ぎをする人間の姿を嘲笑したわけではない。これから、何が起きるかも知ろうとせず、ただ浮かれる姿のため息を漏らしたのだ。

「バセットよ、どうやら、わしの賭けは失敗じゃった。お前さんの言ったことが、正しかったのかも知れん。すぐに、マリア博士が望んだ未来がやってくる。何故、人間どもは同じ道を歩もうとするのか……、世界が終わってしまうかもしれないというのに」

ともすれば、老人のぼやきのような声は、けして誰かに届くものではない。

「わしらは、わしらの務めを果たすべきか。それとも、バセット、お前さんのように使命に逆らうべきか。それが問題だ……」

トニアは、再びため息を漏らすと、そのまま王都を離れて、アトリアの峰に向かって羽ばたく。地上から聞こえてくる、にぎやかな笑い声が遠ざかっていくと同時に、トニアは薄ら寒い空気に、ぶるぶると、頭を震わせた。

45. アルサスたちの敗北（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せください。

46. クロウとアルサス

アルサスが目を覚ましたそのとき、彼は一瞬、そこが天国のような場所のように思えた。真っ白な空、ほのかに暖かな光と、頬を撫でるさわやかな風。ああそうか、自分は使命を果たすことも出来ずに、死んでしまったのだ、と思う気持ちのどこかに、ようやく重荷を下ろせたという安堵感と、何も出来なかった自分への後悔が入り混じった、複雑な思いがこみ上げた。

だが、全身がきりきりと痛み、背中と腹の傷がうずいた瞬間、ぼやけたアルサスの意識は、一気に現実に取り戻された。真っ白な空は清潔な天井、暖かな光は魔法装置の電灯、さわやかな風は開け放たれた窓から吹き込む現実の風で、ここは天国などではなく、ハイゼノンの街角にある病院の一室だった。

「俺、生きてるのか……？」

アルサスはかすれた声で一人ごち、ベッドの中から手を取り出し、それを天井にかざしてみた。その指と指の隙間に、貧民街の惨劇が蘇る。累々と築かれた死体の山、燃え上がる魔法の炎、メル亡骸。そして、黒衣の騎士団に連れ去られる……。

「ネルっ！」

白い布団を跳ね除けて、飛び起きたアルサスは、狭い病室の隅で、背もたれのない丸椅子に腰掛けて、報告書の束とにらめっこをする青年の姿を認めた。彼の銀色の鎧は、センチ・レーバン騎士が着用する重鎧。彼は、アルサスが目を覚ましたことに気づくと、手元のテーブルに報告書を置いて、こちらに向き直った。

「良かった、気がつかれたんですね……」

と、丁寧な言葉の裏に、安堵と親しみをこめた口調が漂う。

「クロウ！」

驚きとともに、青年の名を呼んだアルサスは、ベッドから這い出そうとしたが、また傷口が傷む。見れば、腹と背中に巻かれた包帯

には、赤い血がにじんでいた。

「傷口に障ります。安静にしておくようにと、お医者様より仰せつかっておりますので」

騎士の青年……クロウ・ヴェイルは精悍な顔に困ったような表情を浮かべ、アルサスを諫めると、ベッドに戻るよう指示した。渋々従うアルサスは、その視線を病室の窓外へと投げる。夕日の色に染まった、穏やかなハイゼノンの町並み。まるで、喧騒など嘘のように、静かであった。

「クロウ……、俺はどのくらい眠っていたんだ？」

再び、クロウの方に視線を戻したアルサスも、親しみのある声音で問いかける。だが、答えるクロウの言葉に、アルサスは青くなつた。

「あれから、三日です。」

「三日も！？ くそっ！ 貧民街はどうなった！？ フランは、ルウはっ、ネルはっ！？」

アルサスの心に湧き上がった焦りが、クロウにぶつけられる。

「そのように一度に尋ねられましても、困りますっ！ 順をおってご説明しましょう。……ところで、今はアルサスと名乗っておられるようですね？」

再びクロウに諫められたアルサスは、ため息混じりに「ああ、そうだ」と返事を返す。焦りは収まらないが、

「だから、そういう堅苦しいしゃべり方はやめてくれ。それに、お前の方が、俺より年上なんだ。兄貴みたいなもんだろ？」

「そう、だね。分かったよ、アルサス。さて、何処から話そうか……」

肩の力をフツと抜いたクロウは、旧知の友に語りかける、打ち解けた表情になった。

ハイゼノンに入った親衛騎士団は、瞬くうちに事態の收拾に乗り出した。生き残った貧民の保護、さらには消火活動に当たった。幸いであったのは、ハイゼノン兵たちがほとんど抵抗しなかったこと

だ。親衛騎士団の掲げた、王国の御旗には、その存在だけで、大きな威力を秘めている。その御旗を倒すということは、王国に対して反乱を起こすということである。おかげで、それ以上の犠牲を払うことなく、本国への治安維持部隊派遣の要請、さらには、ハイゼン公の逮捕と、市民たちに混乱が波及する前に、事態を沈静化させることが出来た。その背後には、クロウの敏腕があったことは言うまでもない。

「今は、治安維持部隊が街を、代理統治している。貧民たちも疲れきっていて、暴動がおきる様子はない」

そう言って、クロウ報告書の束を、アルサスに見せた。治安維持部隊や、親衛騎士団からこと細かく上がってくる報告が、つぶさに記されている報告書から、街が平穏を取り戻したことを、アルサスは伺い知ることが出来た。

「マレイア・ハイゼン公は？」

「現在は、我々親衛騎士団の監視下で、私室に軟禁状態だ。大人しくしている。彼女には、ファレリア公反乱への援護を行っていたという嫌疑もかかっているから、ひと月のうちに、宰相府に召還されると思うよ」

「そうか……」

報告書を閉じたアルサスは、ふとマレイアの顔を思い出す。十年前、ヨルンの戦いで命を落とした、前ハイゼン公の跡を継いだ彼女は、その重責に耐えながら、この壁に囲まれた街の統治に尽くしてきた。その結果が歪んだ統治であったというのなら、それをマレイア一人の責任として押し付けることは出来ない。もしも、その害意の発端を探すとすれば、十年前だ。

すべては「ヨルンの悲劇」から始まっている。世界のバランスがおかしくなり、それが飢饉や異常気象という目に見えた形で現れたことをはじめとして、フランチエスカがギャレットを前に冷静さを失ったことも、クレイグたちが貧民となりハイゼンに集まったことも、マレイアが重責に押しつぶされそうになったことも。

そして、アルサスの目の前にいる、クロウ・ヴェイルもまた、ヨルンの戦いで父、ホーク・ヴェイルを失っている。

だが、過去を悔やみ、過去に縋ったところで、目の前の現実を変えられないことを、アルサスは重々承知している。それを人は、後悔と呼ぶことも、承知しているつもりだ。それでも、せめて、マレイアが貧民たちの気持ちを少しでも分かってやったら、クレイグたちがマレイアの重責を少しでもわかってやれたら、ことは大きくならなかったと、思いたい。

「所詮はワックと同じか……」

アルサスの呟きに、クロウは柄にもなくきよんとする。クロウの瞳はアルサスと対照的に青い。まるで海のような色をしている。

アルサスは、そんな友の顔を見て、思わず苦笑してしまった。

「いや、なんでもない。ハイゼノン公には、温情も必要かもしれない。あの人に、責任を押し付けても、ハイゼノンの街が元通りにはならないだろう。この街の人たちは、ハイゼノン公の一族を深く信頼している」

「うん。分かってるよ。もう、本国へは赦免の文を届けさせた。エーアデ通信ではなく、きちんとした文書で。ライオット閣下がそれを、取り上げてくださるか、それは僕にも分からないけどね」

「ライオットか……あの蛇野郎」

そう毒づいてから、思い出すのは、ライオットの飼い犬、ギャレット・ガルシアの憎らしい顔である。野獣……いや、悪魔のような凶悪なその面は、思い出すだけでも気分が悪くなる。あれで、元セリテ・レーバンの騎士というのだから、クロウやその父親とはひどい違いだ。

「フランとルウは無事なのか？」

と、アルサスが尋ねる。

「ああ、二人とも無事だ。ルウくんは、君たちのことを、とても心配していたよ。仲間のことが心配だ、連れて行ってくれて。いい子だね、あの子は」

「かなり生意気なやつだけだな」

合いの手を入れるアルサスに、クロウは苦笑を返した。

「フランチェスカさんも、無事だ。もっとも、肋骨にいくつかひびが入っていて、無傷とは言いがたい。今は、隣の病室で眠っているよ」

「そうか……」

思わず、アルサスの口から、安堵の息が漏れる。仲間とはいえ、もともとアルサスとネルの旅に無縁の二人だ。それを、よりにもよってハイゼノンの事情に巻き込んでしまった自責の念は耐えない。ハイゼノンへ来るべきでなかった、と思うのは、それもまた後悔の念というやつだ。

「こんなところで、君と再会するとは思っても見なかった。もう二度と会えないものだと思っていたからね。だから、あの書状を見たとき、本当に驚いたよ」

クロウは、しみじみと言う。クロウの指す書状とは、ルウに託した親衛騎士団への命令書である。アルサスは、それを捏造したものだ、と言ったが、その書状がなければクロウたちはハイゼノンの門前で立ち往生していたのは事実だ。

「皮肉のつもりか？」

「そうじゃない。詳しい話は、ルウくんから聞いた。君たちの旅の話、ネルという女の子のことも……。それで、君が言った、君の使命というやつのが、ようやく、僕にも分かった。それに、ライオット閣下が何故、僕たちをへのハイゼノン行きの命令を取り下げたのか」

「どういうことだ？」

「ギャレット・ガルシアだよ。彼らが君たちに追いついたから、僕たちは用済みになった。でも、その命令を無視してハイゼノンに来てよかった」

にこりとするクロウに、アルサスは複雑な気持ちになった。自分は、ハイゼノンなんかに来るんじゃないかと思ったと思っているのに、友

は来てよかったと口にする。まるで正反対だが、クロウが来てくれなければ、貧民たちは皆命を奪われていたかもしれないと思うと、背筋が冷たくなってしまう。

「だけど」

クロウは、そんなアルサスの内心など知るはずもなく、続ける。

「ネルさんは、おそらくギャレットたちに連れ去られた。彼らの行き先はおそらく……」

「王都だ」

クロウの言葉にかぶせるように、アルサスが言う。意識が途絶える前、ギャレットが部下に言っていた言葉。たしかに、王都へ向かうと言っていた。直接的にハイゼノンから王都へ向かったのなら、もうじき、ギャレットたちは王都へと到着するだろう。もしかすると、もう到着しているかもしれない。

「ずっと、分からなかった。なぜ、ライオット閣下が、僕たちにアローズで辻馬車から荷物を受け取るよう命令したのか。ベスタ経典に書かれた、銀の乙女が持つと言う『奏世の力』、それを手に入れるためだったんだね」

「いや、ライオットは、それを手に入れたも同然だ。そうになったら、戦争は避けられないかもしれない……」

アルサスは、布団の端を握り締める。悔しさが震えとなって、腕の先から伝わっていく。

「でも、ベスタの経典なんて、眉唾じゃないのかい？」

「それなら、ライオットが執着する意味はない。それに、俺はこの目で、『奏世の力』を見たんだ。あいつは……ネルはもう半分以上その力に目覚めている。もしも、記憶を取り戻したら」

そう言いつつも、アルサスは頭をぶんぶんと左右に振った。

「俺が、迷ったからだ」

「迷いは誰にだってあるよ、アルサス……。それに、まだ時間はあ。四日後にシオンさまの即位の儀が行われることになっている。王都はいまごろ、お祭り騒ぎだろう。ライオット閣下だって、それ

を無視することは出来ない。四日、まだタイムリミットは残されている」

「その間に、迷いを捨てろってか？」

アルサスが尋ねると、クロウは報告書を片手に、椅子から立ち上がった。

「君がどうするべきなのか、それを考えるんだ。これは、年上からのアドバイス。だから、今日のところは、大人しく寝てるんだ。傷の癒えないうちは、何も出来やしない。僕は、まだ仕事が残ってる」
そう言うと、クロウは踵を返し、病室から去っていった。すでに、その背中には友ではなく、騎士団の隊長としての威厳が現れているように、アルサスには見えた。

静かになった病室の中、アルサスはぼんやりとする。焦りは禁物だと言われても、ネルのことを考えると平穏ではいられない。あの時、もう少し手を伸ばせば、ネルの細く小さな手を取ることが出来た。なのに、伸ばさなかった。伸ばせなかったんじゃない、伸ばさなかったのだ。

それが、迷い……。

窓外の町並みが夜の帳に覆われていく中、再びベッドに身を横たえたアルサスは、その言葉だけを何度も反芻し続けた。

46. クロウとアルサス（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せ下さい。

47. アルサスの書置き

親衛騎士団の隊長と言っても、それほど華々しいものではない。部下への指示は、副官のブレック・ケイオンが代わりを務め、クロウの仕事と言えば、もっぱら部下から上がってくる報告書に目を通し、判を付くことだ。戦争が終わって、十年あまり。騎士は戦場を失い、国家を守る盾となった。その点では、ファレリアの反乱を平定したり、ハイゼノンで起きた粛清事件を鎮圧することは、国と国民を守ることにつながり、クロウにとってこの上ない騎士の本懐だと言える。

しかし、一日中報告書とにらめっこをしていると、さすがに頭が痛くなってきた。裁量と責任、その両方が報告書には詰まっているのだ。もともと、幼いころ父ホーク・ヴェイルの仕事を手伝っていたクロウは、騎士の仕事が、その銀色の鎧を着けて戦うことよりも、机に向かい報告書を総覧することのほうが多いと言うことを知っていた。それなら、騎士という仕事も悪くない。名門ヴェイル家の跡取り息子だった、クロウは幼心にそう思ったのだが、見るのと実際に遣ってみるのは大違い。報告書に判をつくことがこれほど重労働だと、思っても見なかった。

早いところ、王都から代官が赴任してこないものか。ガラにもなく、そんな不真面目なことを思いつつ、報告書から顔を上げると、病室の窓の外はすでに白んでおり、自分が徹夜していたことに気づいた。

アルサスたちのこともあって、クロウは、騎士団の本拠を据えたハイゼノン城ではなく、アルサスたちを収容した病院の一室に間借りしていた。

「王都か……」

疲れた目頭を押さえながら、頭痛を抑え、クロウはふと呟く。アルサスと旅をともにしていたと言う、銀色の髪少女の名前をネル

と言ったか……。アルサスの話では、ガモーフはラクシャ村の娘らしい。その娘が、元黒騎士団の団長で、現・黒衣の騎士団のリーダーであるギャレット・ガルシアに攫われ、王都へと向かった。

元を正せば、アルサスは空白地帯で、裏ギルドは「運び屋」と呼ばれるゲモック・ラバンによって、センチ・レーバンに攫われていた彼女を助けたところから、始まっている。そう、ネルこそ、クロウたち親衛騎士団がアローズで「運び屋」から受け取るはずだった「積荷」なのだ。

クロウは、ライオット子飼いの騎士であるが、知らないことが多い。積荷のことも知らされていなかった。有無を言わず下される命令と、断片的な情報のいくつかの中に、運び屋や黒衣の騎士団という、一国の宰相が付き合うべきではない名前を耳にしては、眉を潜めていた。それらが、アルサスという旧知の友と再会し、彼の仲間たちと出会ったことで、すべて繋がった。

ライオットが何を考え、何をしようとしているのか……。ネルという名の少女に課せられた、過酷な運命の一端を知り、クロウは愕然とした。自分も、その片棒を担いでいたのだ。そして、アルサスもまた、渦中の中心に居るのだ。

騎士は、国を守る盾。平和となったならば、再び戦争が起らないよう守る。それが騎士の本懐だと思っているクロウにとって、アルサスの仲間の口から語られたことは、あまりにもショックだった。自分はライオットの手駒に過ぎなかったのか……。そう思えば、家名すら汚されたように思えてならない。命令に従うのは、騎士の務め。ヨルンの悲劇以降、国賊だのシモンズ家の犬だのと揶揄されても、耐えてきたのは、それが王国のためになると信じていたからだ。しかし、そうではなかったと知れば、愕然とせざるを得ない。そして、友はすでにそのことが分かっていて、自分の持てるものすべてを捨てた。当初は、アルサスが彼に課せられるはずだった責任のすべてを捨てたことに、腹を立てたこともあった。

しかし、今になって思えば、自分の方が正しくなかったのかも知

れない。騎士の本懐だ、と心を偽って、ヴェイル家を救ったライオットの言いなりになることに、甘んじていた自分の方こそ、責任を放棄していたのかもしれない。

そんなことばかり考えていれば、仕事は捗るはずもなく、山積みになった報告書の束がクロウを苦しめる。しかも、ライオットからは、命令を無視してハイゼノンへ向かったことのお咎めがないことにも、疑念を抱かざるを得なかった。

もはや、駒ですらないと見限られたか。ならば、自分がすべきことは何だ？

「考えていても埒が明かないということも、あるんだな。まったく、考えるより先に動き出す、君が羨ましい限りだよ、アルサス……」

クロウはそう言うと、報告書を机の上に放り投げ、椅子の上で背伸びをした。気づけば、ずっと鎧を身に着けたままだ。思案と仕事に没頭していて、まったく煩わしいと思わなかった。

さて、休憩がてら、アルサスの様子でも見に行くか。大人しくしている、と釘を刺したつもりだったが、アルサスの性格からして、じっとしてられるタイプではないことを、クロウはよく知っている。今後の方策についても、話し合っておく必要があるし、友人クロウとしては、友の傷の具合も心配だ。

そう考えて、椅子から立ち上がり、部屋のドアを開こうとしたその瞬間、クロウの目の前で、激しくドアが叩かれた。ただ事ではないと言わんばかりに強く。

「クロウさんっ、大変だよっ!!」

許可も得ずに、ドアを開け放ち部屋に飛び込んできたのは、丸ぶち眼鏡の少年だ。丈のあわない魔法学園の制服がいささか滑稽だが、彼の知識の広さはクロウも驚きとともに、一目置いている。

「どうしたんだい、ルウくん。そんなに慌てて」

クロウが尋ねると、丸ぶち眼鏡の少年……ルウは青い顔をしながらクロウの目の前に、一枚の紙切れを差し出した。

『ネルを助けに行つて来る』

ひどく雑な字で、たった一言だけ。だが、その文字に見覚えがあった。アルサスの文字だ。予想通りとでも言うべきか、その一文だけで、アルサスがそっけない書置きと、ルウたちを残して、一人でセンテ・レーバン王都へ向かった事を示していた。

「アルサスは、センテ・レーバンの騎士で、クロウさん友達だったんでしょ？　何か聞いてないの？」

ルウの縫るような視線が、真下からクロウを見つめる。クロウとアルサスは、かつて王都とともに騎士を務めていた友だ、と説明してある。ルウたちはそれを疑わなかったが、それはすこしだけ事実と異なる。

「王都だ……。ネルさんを助けに行ったなら、センテ・レーバンの王都だ。しかし、今はシオンさまの即位式の準備で、警備も厳しくなってる。簡単に王都へは入れない……。まさか、メスカルの！？」

「何？　何か知ってるの？」

ぶつぶつと語尾を濁し呟くクロウに、業を煮やしたルウが、クロウの腕を引っ張った。

「フランお姉ちゃんにも知らせなきゃっ。一緒に来て、クロウさんっ」

強引に腕を引かれ、部屋を出たクロウとルウは、廊下の一番奥、フランチェスカのために与えられた病室へと向かった。

フランチェスカ・ハイト。本人は、ダイムガルド人だとしか名乗らなかったが、着用している白銀の鎧はギルド・リッターのものだ。気になったクロウは、部下に命じて、その素性を探った。元ダイムガルド軍の兵士で、十年前のヨルンの戦いにて、ギャレット・シモンズ率いるセンテ・レーバン黒騎士団と戦った。その後、軍を退きギルド・リッターへ。しかし、ひと月ほど前、突然そのギルド・リッターを辞め、アルサスたちに同行した。報告書を読む限りで分かっていることはそれくらい。どうにも、奇妙な女だが、アルサスもルウも彼女を信頼しているらしい。

「フランお姉ちゃんっ！！」

ルウは、クロウの部屋にやって来た時と同じように、乱暴に扉を叩くと、また許可も得ずに扉を開け放した。

「こら、ルウくんっ。女性の病室にかつてに……！」

ルウのことを叱責しようとしたクロウの視界に、何も身に着けていない浅黒い肌が飛び込んできた。運悪く、ちょうど、フランチェスカは自ら包帯を取り替えているところで、こちらに背中を向けているものの、裸体を目撃してしまったクロウは、顔を真っ赤にし、慌てて後ろを向いた。

「こ、これは、失礼っ！」

ルウの頭も驚づかみにして後ろを向かせる。少年は、何故そうされるのかよく分かっておらず、少し訝るような視線を向けてきた。

一方、裸身の背中を見られたフランチェスカは、意外にも落ち着いていた様子で、

「あら、騎士さまは、純情なのね。もう少し、そうして待っていてくださるかしら？」

と、笑いをかみ殺す。しばらくの間、包帯を巻く音と、上着を羽織る衣擦れの音だけが部屋を支配した。

「いいわよ、こつちを向いても」

フランチェスカの許可を得て、クロウが振り返ると、フランチェスカはセンチ・レーバン特有の絹織物の上着を羽織っていた。ダイムガルド人が、センチ・レーバンの着物に袖を通す。ある種滑稽にも思えたが、ひと目で美人と分かるフランチェスカの雰囲気、よく似合っていた。

「もう起きても大丈夫なのですか？ フランチェスカさん」

「フランでいいわよ、純情な騎士さま。いつまでも、寝ていては体が腐ってしまうわ」

にこりとするフランチェスカの真意は読み取りにくい。ただ、思わず先ほどの背中を思い出してしまいそうになるのを、何とか押しとどめながらクロウは、ルウに目配せした。

ルウは、フランチェスカにアルサスの書置きを見せる。

「あら、アルサスったら……。それで、アルサスは何処へ向かったのかしら？」

書置きに目を通したフランチェスカの問いかけは、クロウに向けられていた。

「おそらく、王都だと思います。ネルさんを攫った、ギャレット・ガルシアも王都へむかったと聞き及んでおります。アルサスがネルさんを取り戻そうとするなら、王都へ向かったに違いありません」

「ずいぶんと詳しいのね、センチ・レーバンの騎士さま。わたしの知る限り、裏ギルドのゲモック・ラバンに積荷を運ばせていたのは、親衛騎士団だと聞いているわ。そこのも訊いておきたいところね」

不意に、フランチェスカの目が辛辣になる。まるで、取調べ尋問のようだと、クロウは内心に思った。

「確かに、アローズで辻馬車……。いや、ゲモック・ラバンから積荷を受け取るよう指示されていました。しかし、積荷がまさかネルさんであるなど、知らなかった。信じていただけとは思いますが、すべてはライオット・シモンズ閣下のご命令です」

クロウは、自らのヴェイル家が置かれた立場と、自分がほとんど何も知らされていなかったことを付け加えた。

「ライオットって言ったら、王国の宰相ね。俄かに信用しづらい話だわ。ライオット閣下は、ネルさんの力を手に入れて、どうするつもり？ まさか、センチ・レーバン人が、ベスタの伝説を信じるワケではないでしょう？」

「そう思いたいものです。しかし、ヨルンの戦いの後、宰相付参謀官になったメツツェ・カーネリアという男は得たいが知れません。彼が、ライオット閣下に何事か吹き込んだとしたら？」

「ネルお姉ちゃんの力を使って、戦争をするの？ でも、奏世の力は人の傷を癒す力だよ。まさか、ネルお姉ちゃんを看護士さんにするわけじゃないでしょ」

口を挟むルウ。

「いや、傷が癒えれば、何度でも戦える。無敵の軍隊になるし、兵隊の士気も上がる。だけど、アルサスは奏世の本当の力は、傷を癒すことじゃないと、言っていました。フランさんは何かご存知ですか？」

さらりと、言い返されたルウは少し不機嫌そうに頬を膨らませた。そんなルウの姿に、フランチェスカは目を細めながら、クロウに頭を左右に振って答えた。

「それを知るために旅をしていたと、先日お話したばかりじゃないかしら？　でも、あなたの言うことが本当なら、アルサスは何か知っているのね……。あなたも、わたしたちも知らない何かを」

意味深で含みのある言い方をするのは、フランチェスカ自身が以前からアルサスのことに疑いを持っていた証拠だ。それは、仲間としての信頼というよりも、自警組織ギルド・リッターとしての性^{さが}なのだろう。

「それにしても」

唐突に、フランチェスカが話を切る。

「王都までは、全力で馬を飛ばしても四日近くかかるはずよ。わたし、地理には少し詳しいの。ライオット閣下が、ネルの力を手に入れたとして、それを戦争に使おうとしているとして、アルサスが王都にたどり着くまで、じっとしていられるかしら？」

「それなら、アルサスにも話したことです、四日後、我らが王国に新たな国王が誕生します」

「ええ、聞いているわ。なるほど……シオン陛下誕生の即位式典まで、ライオットは動かない。つまり、タイムリミットは四日」

「ええ。もしかすると、僕がそんなこと話したから、あいつは」クロウが肩を落として言うと、フランチェスカは小さく笑って「違うわ」と返した。

「あなたが言わなくても、アルサスはわたしたちを置いて、王都へ向かったでしょう。だって、アルサスはネルのことが好きなのよ」

「でもでも、みずくさいよね！　ボクたちだって、ネルお姉ちゃん

のこと大好きなのに」

ルウがなお頬を膨らませ、蛙のような顔をする。その怒りの矛先は、アルサスに向けられていた。

「わたしたちを氣遣つてのことでしょうけど、たしかに水臭いわね……。騎士さま、馬を一頭、用立ててもらうことは出来るかしら？」

フランチェスカはベッドから立ち上がり、ルウの頭を軽く撫でてやってから、クロウに尋ねた。

「まさか、まだ傷も癒えていらっしやらないというのに、アルサスを追うおつもりですか？」

「アルサスを一人生かせるわけには行かないもの。傷なら、アルサスの方がひどいはずよ。それにね、わたしたちもネルを救い出しにいくの。それなら、文句は言えないでしょう？」

「しかしっ！ 王都は式典の準備で、警備が嚴重になっています。いくら、ギルドの威光ちらつかせても、街へは近づけませんよ！」

「ならば、強行突破するわ」

「ボクの魔法を侮らないでよねっ」

にべもなく言つてのけるフランチェスカとルウに、クロウは思わず頭を抱えそうになった。なるほど、この人たちは、案外楽天家なところがあるのだ。だから、アルサスの旅に同行した。理屈ではないということが分かれば、奇妙に見えていたフランチェスカとルウのことも、少しだけ分かったような氣がする。

「止めても、無駄なようですね……。分かりました、あなた方にお供します。僕が同行すれば、あなた方をセンチ・レーバンの軍隊と戦わせるような、馬鹿な真似をさせずに済むでしょう」

クロウはため息交じりに言つたが、それほど嫌な気分ではない。フランチェスカたちについていけば、頭を悩ませていることに、少しばかり踏ん切りが付くような氣がした。

「そうね、騎士さまがいてくだされば、わたしたちも事を荒立てず、アルサスと合流できるわ」

「でも、クロウさんはお仕事があるんじゃないの？」

フランチェスカの病室の隅に立てかけられた魔法杖を手に取り、早速出立の準備を進めるルウが、クロウに尋ねる。クロウは、少しばかり笑って、

「僕の仕事は報告書に判をつくだけ。こまごまとしたことなら、ブレック副官がすべてやってくれる。能無しの上官は居ないほうが、彼の仕事も捗るだろう。それに……もしも、ライオット閣下が再び戦争を起こそうとしているのなら、シモンズ家に救われたヴェイル家の人間として、閣下をお止めしなければならない」

と返した。

「そっか。いろいろと大人は大変なんだね……」

クロウの言葉を、自らの自嘲と受け取ったのか、ルウはなぜかクロウを憐れむような瞳を向けた。

「そういえば、アルサスはどうするつもりなのかしら？ 王都の警備が嚴重になっているのなら、アルサスだって、王都へは入れないはずよ」

ギルド・リッターの鎧を、センチ・レーバンの上着の上に着込むフランチェスカが、疑問を口にする。それには、クロウは心当たりがあった。

「おそらく、メスカルにある王家別邸の、地下通路を使うはずですよ」

47. アルサスの書置き（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せ下さい。

48. メリクスの迷宮

王都から百クリーグ東。ハイゼノンから、その数倍以上は西に位置する、街道の外れに、センテ・レーバンきつての名勝がある。その名は、メリクス湖畔。メリクスとは、センテ・レーバンの古い言葉で、満月を意味する。上空から湖の円周を見渡すことが出来たら、ほぼ真円に近い形をしていることに気づくだろう。だが、丸いから名勝と呼ばれるわけではない。メリクス湖畔は、常に薄い霧が立ち込め、その霧の向こうに、うつすらとぼやけたアトリアの最高峰「シェラ山」を望むことが出来る。夕刻ともなれば、淡いオレンジ色の光が、霧によって拡散し、あたかもシェラ山から降り注いだ光に輝き、静謐な湖畔全体を照らしているかのように見えるのだ。この、幻想的な眺めこそ、名勝と呼ばれる所以なのである。

センテ・レーバンは、宗教国家ではない。国の礎は剣と盾。そのため、ベスタ教の威光で国家を照らすガモーフ神国と違い、宗教に關して寛容なところがある。アトリアの麓にある村などでは、このメリクス湖畔の幻想的な景色を、「御山の精霊」と称して崇拜する、土地信仰まで存在している。

そんな幻想的な景色を斜めに見下ろす、湖畔のほとり。そこには小さな丘があり、頂上にぼつんと邸宅がある。一見すると、夕刻の鮮やかな光にシルエットとして浮かぶ邸宅は、城のように見える。しかし、城と呼ぶにはいささか、小さいものの、つややかな大理石の外壁や、真紅の屋根、人があまり寄り付かなくなった今もそれらが、美しく輝いていることに気づけば、そこが並々ならぬお方の邸宅であると分かるだろう。

「十二年ぶりか……」

鉄格子の正門前で、豪奢な邸宅の姿を見上げるアルサスは、そっと呟いた。背後では、すこし息を乱した馬のいななきが聞こえる。ハイゼノンの肅清事件から、早くも五日近くが過ぎていた。この

湖畔の邸宅まで、寝食を惜しんで馬を飛ばし、ようやくたどり着いたばかり。だが、邸宅を見上げるアルサスの赤い瞳には、時間が無い、という焦りが映し出されていた。

本当は、ルウとフランチェスカに黙ってハイゼノンを後にしたことを少しだけ、後悔していた。今頃、二人は憤慨していることだろう。しかし、だからと言って、これ以上ルウとフランチェスカを巻き込みたくはない。この先は、二人とも、関係ない人間なのだ……。勿論いくらか迷いはした。一人でネルを救うため、王都に殴りこみをかけるには心もとない。それは、旅を始めて、初めて仲間とともに歩き、戦うことを知ったためだ。レイヴンになったときは、一人で何とかしようと頑なに思っていたのが嘘のように、ルウやフランチェスカ、そして何よりネルが傍に居てくれる温かさに、慣れてしまっていた。

しかし、ルウは彼の興味だけで、ここまで付いてきた。フランチェスカは、ギルド・リッターとの仲違いで旅に同行してきた。広義の意味で言えば、これからおきるかもしれないことは、アルサスだけじゃなく、世界中の誰にも関係していること。しかし、狭義の意味で言えば、それはアルサスとネル、そして彼女の力を我が物とし、己の野望を果たさんとする、ライオット・シモンズの三人の問題だと言っても、過言ではないことを、アルサスは最初から分かっていた。いや、むしろ、そこで収まるのであれば、それに越したことはないのだ。

「俺が迷ったからだ」

と、アルサスはタイムリミットが迫ることを悔いた。悔いてなお、脳裏に浮かぶのは、カルチェトの街やルミナスで見た、ネルの朗らかな笑顔と、その手に伝わるネルの手の柔らかさと体温だ。

でも、迷っていたら、関係ないとアルサスが線引きする、ルウやフランチェスカ……。いや、それだけではなく、この広い世界に息づくあらゆる生命が危機に陥る。クロウには傷が癒えるまで、大人しくしていろと釘を刺されたが、その友人のありがたい申し出を耳に

してなお、じっとしているわけにはいかなかった。三度目の奏世の力を使ったネルの、絶望と狂気に満ちた顔は、記憶に残る笑顔さえ、かき消そうとする。

それに耐えることが出来ず、アルサスは、ルウたちを巻き込まないよう、ひっそりと一人ハイゼノンを抜け出して、馬を飛ばしたのだ。

馬は、騎士団のものを黙って拝借した。何頭も厩舎に並ぶ中から、適当に選んだ栗毛の一頭だったが、なかなかの駿馬だった。

しかし、それでも、すでにギャレットたちな追いつくことは適わず、彼らはネルを連れて、王都にたどり着いているだろう。そうなれば、王城へ直接乗り込み、ネルを救う他ない。例え、城のものと刃を交えることになっても。それに、その方がここまで抱え続けた「迷い」を打ち捨てることが出来る。

アルサスは、三日間の馬旅の間、ずっとそんなことばかりを繰り返して考えていた。

「さて、別邸を眺めていても仕方ない。そろそろ行くか。地下通路が残っていればいいんだけどな」

ひとりごち、湖畔の邸宅の正門に手をかける。ポケットから取り出したのは、古びた鍵だ。それは、この正門の門扉を開くための鍵でもある。

そして、そこにある秘密の地下通路。直線距離で百クリークにわたって、王都への秘密通路が掘られており、内部は複雑な迷路になっている。正しい道を知らなければ、やがて入り口に戻ることも出来ず、屍をさらすことになる。

それは、何百年も昔、王都にある城が敵に攻め落とされたときに、王家の人間が逃げおおせるように作られた、避難経路だ。そう、メリクス湖畔のほとりに建つ、打ち捨てられた邸宅は、王家の別荘として作られた、通称「メリクス別邸」である。

アルサスは、門扉を開き、手入れがされなくなって、ずいぶんと雑草にまみれた庭を歩いた。十二年前、とある事件があって以降、

この場所は捨てられた。その不要とも思える別邸の鍵を手に入れたことは、アルサスにとって、好都合であった。

地下通路の迷宮を越えれば、直接王都、しかも城内に出ることが出来る。王都の警備も、城の護衛もパスして、敵の懷に忍び込めるのだ。それは、ハイゼノンで、マレイアの元に向かったときよりも、容易なことだった。

しかし、問題は、地下通路を越えることが出来るかということだった。直線距離で百クリーグといえば、走っても、一日以上はかかる。タイムリミットギリギリではあるが、他に王都へ侵入する手立てが思い浮かばなかった。

庭を越え、入り口のドアを蹴破り、誇りっぽい別邸の中を進む。地下通路の入り口は、エントランスに掲げられた、この別邸を建造した王の肖像画の下にある。ずいぶんと、えばりくさした、髭面の男。第五代国王の巨大な肖像画である。もはや、誰も寄り付かない別邸に、今でも守り神のように、その肖像画はたたずんでいた。その真下の壁は、強く抑えると、亀裂が入り、開くようになっていた。隠し扉だ。

むっと、湿気を帯びた風が、扉の隙間から流れ出してきたかと思うと、その先には真っ暗でがらんどうとした空間が広がる。よく目をこらせば、深遠の闇に吸い込まれるように、石造りの階段があることに気づく。

アルサスは、リュックを下ろし、カンテラを取り出した。あらかじめ、途中の街に立ち寄って買っておいた、魔法装置のカンテラだ。カンテラの中心には、カーマインと呼ばれる石が安置されており、ここに、魔法カードでフランメを着火すれば、普通のカンテラの数倍の時間、明かりを点すことが出来る。

魔法使いギルドが、さまざまな技術を開発してくれたおかげで、便利な世の中になった。それなのに、十年前から、歪み始めた世界が、安定することはない。異常気象、飢餓、争い。それらが、全体として表面化することはない。だが、世界の縮図とマレイアが言っ

た、ハイゼノンでの出来事が、本当に世界の縮図と言うのなら、やがて、同じようなことが世界に起きるかもしれない。かもしれない、を放置すれば、必ず歪みは顕在化する。

アルサスがしようとしていることは、この世界が滅びを向かえるかもしれない、その小さな芽を未然に摘み取ることだ。そうすれば、例え分かり合えなくても、争いが起きることはないだろう。

「行くか……」

アルサスは、リュックを背負い直すと、意を決して、深遠へと続く階段を下りた。

迷宮には、簡単な法則がある。右手、もしくは左手を壁につけて歩けば、いずれかの出口へと通じているものなのだ。しかし、メリクス別邸の迷宮は、何ブロックかに分かれており、現在位置を特定しにくくなっている上に、壁自体が連結していない構成になっているため、単純な迷宮であるにもかかわらず、出口や入り口に向かうことは難しい。それゆえ、一度入れば、その道を知らない限り、出口へは到達できない。

脱出口というには、あまりに不可解な作りは、そもそも追っ手を撒く、という意味と、迷い込んだものを王都に近づけない、という二つの側面から、複雑な迷宮を構成しているのだ。これだけのものを全長百クリーグも築きあげたという、五代目国王が、えばったような肖像画になるのも無理はない。

カンテラを暗闇にかざしながら、アルサスはそんなことを思う。いくつかの分かれ道、先ほど通った道と同一ような景色の連続。すでに、道を誤っているのではないのかという不安に押しつぶされそうになる。

似たような地下迷路を、ウェスアでも通った。ウルド・リーのことは今でも心残りだが、あの時は、ネルがいて、ルウがいた。ネルのか細い手を握っているだけで、実のところ安心していたのは、アルサスの方だった。

どんなに余裕ぶった口ぶりをして、それほど強い人間でないこ

とは、アルサス自身が一番よく知っている。だが、自分が使命と
思ったことに、もはや誰も巻き込むわけには行かない。己の手で、ラ
イオットを止めると誓った日から、独りで戦うつもりだったのだ。
それを一時の弱さに流されてしまったことは、恥ずべきことだと、
思う。誰の助けも借りない。それは、強がりではなく、誰かの助け
を借りるわけには行かないのだ。信頼すれば、その人たちを「戦争」
に巻き込んでしまうかもしれない。そのとき、信頼した人は、敵で
あるか、味方であるか。いずれにしても、悲しい結末を迎えること
だけは、必定というものだ。

ライオットの野心を止められるのは、それを知っている者、そし
て、それを間違いだと分かっているものの務めだ。

「たとえば、無謀だと言われてもな……」

幾度となく、角を曲がり、一体どのくらいの時間が過ぎたか。焦
る気持ちを抑えながらの、地下迷宮の踏破は予想以上に、体力を蝕
んでいく。アルサスはひとまず、休息を取るため、通路の端に腰を
下ろし、壁に背を預けた。リュックを漁ると、保存食料として持っ
てきた、ワックが一袋。ただ、ワックは小麦粉をこねて焼いた菓子
だ。幼いころからアルサスの好物ではあるが、今口にすれば、あつ
と今に口中の水分を吸い取られてしまう。水筒の水に限りがある事
を思えば、腹を空かしていても、ワックを食べるというわけには行
かない。

アルサスは、ため息をつきながら、リュックにワックの袋を仕舞
い込み、ぼんやりと通路の天井を見上げた。

王国の歴史が始まって以降、この地下迷宮が使われたことは一度
もない。それは、この国が武力によって、安定をもたらし、それを
崩すことなく長い月日を経てきたという証であるが、内心に、誰も
使ったことがなければ、もう崩れてしまっているかもしれない、と
いう不安があった。

たしかに、迷宮の壁はかなり朽ちかけているものの、それでも頑
健に造りを維持していることは、第五代国王の命を受けて地下迷宮

を建造した人たちの、技術力の高さを思い知る。ただ、迷宮の狭苦しい圧迫感には、息苦しさを覚えてしまうのもまた事実だ。いや、あの時を思えばまだマシか……。ギャレットに付けられたこの傷の痛みさえも。

しばらくの間、天井を見上げぼんやりとしていた頭が、すこしばかり眠気を欲する。休めるうちに休んでおこう。アルサスは、カンテラの明かりをすこしだけ小さく絞って、そっと瞳を閉じた。

熟睡などではしなかったし、するつもりもなく、その眠りは、ものの二時間ほどで覚める。しかし、両足に貯まりかけた疲労はすっかり取れて、十分な休息となったと感じたアルサスは、立ち上がり、ふたたびカンテラを手に、迷宮を歩き始めた。

記憶の中にある地図が役に立つとは思えない部分もある。人間の記憶というのは、時にあいまいで、時に裏切る。しかし、頼れるものは、かすかな記憶にある地図だけなのだ。なぜなら、この迷宮の地図は残されていない。信じられるのは、レイヴンとして培った勘と、記憶だけ。ルウほど賢いつもりはないが、ルウよりもいろいろな経験を摘んできた分、フランチェスカにも負けない勘を持っていると信じたい。

やがて、その記憶と勘を信じる気持ちは、目の前にぽつんと光となって現れた。比喻ではなく、実際に白い光の点が、長い一本道の先に現れたのである。それは、紛うことなき、迷宮の出口だ。

「ネル。今行くから……」

呟いたアルサスは、カンテラを前にかざし、一歩ずつ確かな足取りで、光に向かって歩いた。少しずつ光は大きくなる。その光……即ち迷宮の出口の先は、王国の中枢にして、今まさにシオン次期国王の即位式典を控えた、センテ・レーバン王城である。

48. メリクスの迷宮（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せ下さい。

49. センテ・レーバン王都

式典を夜に控えた、街道には、十クリーグも手前から、関所が設けられていた。王都への出入りを著しく規制し、監視するためである。

式典の最中には、王都にたくさんの人間が集まる。その中には、大ギルドの幹部や、ダイムガルド帝国、ガモーフ神国の要人も含まれている。休戦状態にある三国と、ギルド連盟、それぞれの関係は、表面上敵対していないことを表すための、いわば自国民へむけたパフォーマンスの意味もある。それでも、祝賀に現れる客人たちに、何かあつては、センテ・レーバン王国の名に傷が付く。そのため、威信をかけた警備は、とても厳しい。少しでも疑わしい不逞の輩がいれば、王都より追放される。運が悪ければ、王国騎士団に逮捕されて、式典が終わるまで、牢獄に繋がれる。

強行突破すればいい、フランチェスカは、三日前、ハイゼノンを発つ前に言った言葉を撤回したくなった。だが、この世に顔パスというものがあり、フランチェスカとルウに同行したクロウが、一度親衛騎士団隊長という身分を明かせば、関所をあつけなく潜り抜けてしまうことができる。たとえば、クロウがギルド・リッターと魔法学生を従えていても、なんら疑おうとはしないのだ。

これには拍子抜けしてしまいそうになるが、同時に、センテ・レーバン騎士団の上下関係の厳しさを物語っている。そもそも、軍隊というのは、何処の国でも、上下関係が厳しいものであり、そうでなければ統率をとることは難しいだろう。

何にせよ、アルサスの友人という、クロウが親衛騎士団のいち隊長であったことには、感謝しなければならぬだろう。おかげで、王都に入ることが出来るのだから……。

やがて、十クリーグの道を進めば、目前に目的地、センテ・レーバン王都が見えてくる。国王一族の住まいにして、政治の中枢でも

ある、五つの塔がそびえたつ、巨大な城を中心に、三百六十度、城下町が城をぐるりと取り囲みながら広がる都市の様式は、ハイゼノンのそれによく似ている。もっとも、ハイゼノンの壁のようなものはない、という意味では、むしろ学舎を中心に造られたルミナス島や、大教会の教会堂を中心とするウェスアに近い。その規模は、首都たる威厳とともに、それらの何倍にも及ぶが。

街としての名前はなく、センテ・レーバン人からは「王都」と呼ばれている。八百諸侯を纏め上げる、王国の権力が集う場所であり、そこに住む人間だけでも、かなりの人数だ。しかも、今は、前国王の急逝からついに、新たな国王が誕生するその瞬間をひと目見ようと、人々が集まり、街全体がお祭り騒ぎになっていた。

家々には、横断幕が張られ、「新国王さま、万歳」の文字が、所狭しと躍っており、沿道には、色とりどりの花が飾られている。まるで今だけ、王都は世界の歪などものもしないような、浮かれぶりで、華やかさそのものに彩られていた。

「前王が、急逝したため、継嗣問題が長い間片付かなかった。宰相府をはじめとする文官は、正当な後継者としてシオンさまを推し、騎士団たち武官は、シオンさまの兄上であらせられるフェルトさまを推し、対立が続いていたんだ」

すれ違う人たちが、口々に言う他愛もない会話に、フランチェスカは耳を傾けた。噂くらいなら、ギルド・リッターの一員として小耳に挟んでいた。自警組織として世界中に散らばるギルドとしては、各国の国内情勢に疎いわけには行かないのだ。フランチェスカが地理に詳しいのも、それが一因といえる。

「しかし、フェルトさまが突然失踪され、騎士団は擁する者を失った。もともと、フェルトさまはシオンさまの兄上と言っても、愛妾が産んだ子。ご正室の子であるシオンさまに比べるまでもないと、わしは思っておった」

「しかし、王位を継ぐのは、長子と昔から決まっていたはずだ。だから、騎士団はフェルトさまを推したのではないか？」

「なあに、フェルトさまは昏君（馬鹿殿）との噂もあるくらいだ。シオンさまが王位に付かれた方が、わしらの暮らし向きはずっと楽になるだろうて」

好き勝手言う彼らは、王都に住んでいても、遠目にしか王家の間を見たことがない。政治と同様、彼ら王都の一般民衆にとって、王家そのものが雲上の人、別世界の存在なのだ。だから、興味本位に噂話を繰り広げる。だが、フランチエスカとルウを先導して、城へと進むクロウは騎士であり、またその騎士のなかでも王家を護ることを本懐とする親衛騎士である彼にとっては、それほど別世界の存在ではなかった。騎士団が挙って推す、フェルト殿下のことを馬鹿にもされれば、腹も立つだろう。そつとマントの奥で握り締めた拳を、フランチエスカはさりげなく見止めていた。

「他人事であれば」

すれ違う町の人たちが通り過ぎたのを確かめて、フランチエスカは声を殺しながらクロウに言った。

「他人事であれば、人は好き勝手に想像を膨らませ、日ごろの鬱憤を別世界の人間に押し付ける。自分たちの暮らしと直結しない事柄は、彼らにとってはお酒の肴程度でしかないのよ」

「そんなこと、言われなくても分かっています。ただ、フェルトさまは、昏君ではない。それを国民が、王都の人間が知らないというのが、情けなくて」

人の流れに逆らいながら、歩くクロウの顔は、前を向いたままだった。彼の視線が捉えているのは、眼前にそびえる巨城か、それともそこに住む王家の人間か、フランチエスカには図りかねる。しかし、王室は下々の者に開かれてはいない以上、彼らの知らぬところで、ちょっとした噂に尾ひれが付いてしまうのは止むを得ないことだ。

「あら、あなたはシオン殿下の即位に反対なのかしら？」

「わたしは、將軍でもなければ、一隊の隊長に過ぎません。しかも、王家の皆様をお守りする立場。ただ、シオンさまは、今年十一歳に

なられたばかりなのです」

「十一歳って、ぼくとひとつしか変わらないじゃん!!」

驚きの声を上げたのはルウ。十二歳のルウにとって、身近な年齢の者が国王になる、というのは衝撃以外の何者でもない。かたや、魔法使いギルド魔法学校のいち生徒、かたや王国を統べる長なのだ。生まれの違いで雲泥の差の人生である。しかし、どちらにしても、まだ子ども。

「重責をその幼い双肩に委ねていいものか。シオンさまを存じ上げる身としては、無責任にその王座をシオンさまに押し付けるわけには行かないのです……」

クロウは難しい顔をしてそう言うのと、おもむろに立ち止まり、道の両端に渡された横断幕の文字に視線を移した。

「あら、まじめなのね、騎士さま」

フランチェスカは軽くクロウの背中を叩き、流し目に微笑んでクロウを追い抜いていく。

「からかっているんですか？ フランチェスカさんっ」

「さあ、どうかしら」

少し怒ったように、ぶんすかしながらフランチェスカを追いかけるクロウ。その後姿を見つめながら、ルウは「子どもなんだから」とぼやきつつ、二人を追いかけようとした。しかし、その視界に人ごみの中から、ふと見慣れた姿を見つけ、足を止める。

大通りを行きかう街の人たちの列。その隙間に、少しだけ背の低い後姿。女の子らしい華奢なで肩よりも、特徴的な二つ結びのツインテールが目止まる。

「ナタリー……?」

小さく呟いたルウの足は、フランチェスカたちを追いかけるのを止めて、その後姿を追いかけた。ルウの姿が見えなくなったことに気づいた、フランチェスカとクロウが振り返ったときには、すでに視界の何処にも、丸ぶち眼鏡の少年の姿はなかった。

授業の時間であっても図書館にこもり、書籍を開く。ルウは、飛び級生と言っても、まだ下級生。島の外に出ることは許されない身分であり、見聞を広める最良の手段が、外の世界を見ることだと知っていた。叶わかった。だが、教室で学ぶようなことは、すでにルウが習得した範疇であり、詰まらない。そのため、ルウは、本を読み漁った。古書や学術書から知識を得ることだけが、彼の背伸びを支えていたのだ。

そんなある日、出会ったのが、同級生のナタリー・リウルという少女である。授業に出席しないルウを気にかけて、図書館に現れた彼女は、ルウよりも三つも年上の彼女は、ルウたちの学級の級長を務めている。ガモーフ人らしい、艶黒の髪を頭の両端で束ね、見た目はとても愛らしく見える。しかし、ルウは「頭の固い人」という第一印象しか持てなかった。

何故授業をサボるのか。他の生徒と協調性を持たないのか。図書館の真ん中で、憚りなく大声で説教するナタリーに、ルウは困り果ててしまった。困り果てて、とうとう口論になってしまった。司書に止められるまで、言い分をぶつけ合った、ルウとナタリーはどちらかと言えば、犬猿の仲となった。

顔をあわせれば、廊下でも教室でも、何処でも喧嘩を始める。だけど、ある日ふとルウは気づいた。ナタリーが叱ってくれるのが、少しだけ嬉しいのだ。気に入らない相手なら、普通は口をきかないものの、ナタリーはことあるごとに、ルウを心配して、声をかけてくれる。

それが級長としての義務なのか、そうはないのかは分からなかったが、「天才ぶりやがって」と、飛び級生のルウを妬ましく見るような他の生徒たちと、ナタリーは明らかにちがった。

一度その気持ちに気づくと、ナタリーのことが嫌いではなくなつた。そして、ナタリーと顔をあわせると、胸の奥がどきどきしてくる。言葉を交わせば、それが口論であってもなんだか温かくなる。思えば、エントの森でネルが話したことと、同じだ。それを恋と呼

ぶのか、十歳の少年にはまだよく分からなかった。

「ナタリーっ!!」

雑踏をかき分けて、ナタリーの姿を追いかけるルウは、頭の片隅で、出会ったころのことを思い出していた。そして、なぜ、センチ・レーバン王都に彼女の姿があるのか。奇妙な疑問に、小首をかしげた。

大人たちの肩の隙間に、ちらりちらりと見え隠れする、亜麻色のツインテール。それだけを追いかける。何度か、その後姿を雑踏に見失いかけるたび、他人の空似かもしれないと不安が過ぎったが、自分がナタリーの後姿を間違えるはずがないという自負が彼の足を急がせた。

やがて、ルウは大通りをはずれ、家々が密集する狭い路地へと入る。大通りの賑わいと歓声は徐々に遠くなり、ひとつの足音だけがルウの耳朵を打った。ナタリーと思しき少女の足音だ。その足音を追いかけて、路地を進めば、住宅街の中心に作られた、小さな広場に出る。おそらく、共同の洗い場として使われる場所なのだろう。真ん中に水路があり、その傍に立てかけられた盥や洗濯板が、生活の匂いを醸し出していた。

少女は、広場の中央で足を止めると、ふわりと身を翻した。少女も、後から追いかけてくるルウの気配に気づいていたのだろう。その瞳は、ひどく辛辣にとがって、ルウを射すくめた。

「誰っ!？」

少女が手にするのは、簡易魔法杖「ワンド」である。ルウの愛用する、とねりこの魔法杖に比べれば、魔力の集中は少ないものの、ミスリルで作られたそれで自慢の、「炎の槍」を撃たれてはさすがにひとたまりもない。あわてて、ルウは駆け寄ると、西日の下に自らの顔をさらした。

「ボクだよっ、ルウ・パットンっ!」

「ルウっ!？」 どうしてあなたがここにいるのっ!？」

驚きに口許へ手をあてたナタリー・リウルは、すかさずワンドを

下げた。

「それは、ボクの質問だよ。ナタリーこそ、どうしてセンチ・レーバン王都なんかにいるの!？」

お互いに質問で質問を返す。ルウは、そんなナタリーの制服姿を懐かしく思った。まだ、ルミナスを離れてひと月あまりしか立っていないと言うのに、ずいぶんと久しぶりのような錯覚さえ覚える。

ブレザー型の魔法学校制服は、ルウが着ているものと同じ。男子は、半ズボンもしくはスラックス、女子はスカートと言う差はあるものの、デザインはまったく同じである。しかし、ナタリーの右腕に、見慣れぬ赤い腕章があることに、ルウは気づいた。

腕章には、紋章のワッペンが貼り付けられている。その紋章は、魔法使いギルドのエンブレムでも、学内委員のエンブレムでもない。「エルフォードさまの紋章……その腕章は何?」

ルウが口にした、エルフォードとは、魔法使いギルドの創設者にして、世界最高峰と謳われた大魔法使いの名だ。ルウがあこがれる魔法使いでもある。

「あ、あなたには、関係ないっ」

突然取り乱したような口調になる、ナタリー。そんな彼女を見るのは初めてだった。女の子だてらに、級長を務めるナタリーは、いつも威厳と尊厳に満ちていた。取り乱すところなど、一度も見たことはない。

「関係ないって……どうして、ナタリーがエルフォードさまの紋章が入った腕章なんかつけてるんだよ」

口ごもるナタリーに、いつもの口喧嘩の調子で問いかけるルウ。すると、二人の間を割るように、別の路地からいくつもの足音が重なった。ゆっくりとこちらへ近づいてくる足音は、やがてルウの前にその姿を現す。

ルウよりは年嵩な魔法学生たちだ。その先頭を率いる少年に、ルウは見覚えがあった。年のころは、アルサスやネルと同じくらいか。切れ長な瞳と、少しばかり頬骨の張ったその顔は、上級生の中でも、

主席学生として皆から尊敬を集めるガモーフ人、ジャレン・ジャラである。

「エルフォードさまは、かつて、まだこの世界に数多の国が存在していたころ、故郷の島を救うため、その志を胸に敵国を滅ぼした。それが、魔法使いギルド、ひいてはルミナスのはじまりとされている。俺たちは、その志を継いで、故郷のために戦う同士。その証が、ルウ・パットン、お前の言う赤い腕章だ」

ジャレンはそう言うと、手にした魔法杖の先端をルウに向けた。

49. センテ・レーバン王都（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せ下さい。

50. 研究室の罠

センテ・レーバン王家の居城、通称「王城」はハイゼノンの城とは比べ物にならないほど、巨大である。故に、下手をすれば、メリクス地下の迷宮と比肩しうるほどの迷路となっていることは言うまでもない。しかも、城は宵を待って始まる、シオン殿下の即位式のため、そこかしこに兵隊の姿があった。彼らの多くは、クロウが所属する、親衛騎士団の人間だ。クロウの部隊は、ハイゼノンにあるから、ここにいるのはクロウ隊を除くメンバーであるが、それでも百、二百という人数ではない。ピリピリとした空気は、猫の子一匹たりとも見逃さない、そんな風に言っているように見えた。

メリクス別邸から伸びる、地下迷宮を無事踏破したアルサスが、顔を出したのは、王城の最深部。今は使われなくなった、地下倉庫である。カンテラに照らされた倉庫には、古い武器、価値も分らないほど埃をかぶった、壺や絵画がある。財宝と呼ぶには、非常に無造作なそれらは、すべて本物ではない。ここが脱出口であることを隠すために置かれた、ダミーである。

本来ならば、王家の者にとって最後の生命線となる地下迷宮だが、建設から現在に至るまで、一度も使われなかった証が、それらダミーに積もった埃だ。おそらく、迷宮を通して城に入り込んだのは、長い歴史上アルサスが初めてだろう。そもそも、王家の者でも、この地下迷宮の存在を知っている者は少ない。ある種、この城最大の弱点ともなりうる。もっとも、それは、複雑怪奇な迷宮を潜り抜けることが出来たらの話であり、アルサスのように迷宮の順路を知っている人間はいない。ほぼ皆無だと言っている。五代国王が建造を命じた、大工たちは皆、五代国王の手によって秘密とともに殺されている。

かつて、アルサスがその話を聞いたときには、夜も眠れなかった。しかし、こうして、王国初の地下迷宮踏破という偉業を成し遂げて

みれば、なぜかしら不思議な気持ちになってしまう。

「さてと、迷宮よりもこの先の方が厄介だな」

独りごちると、アルサスは倉庫の扉にそっと耳を当てた。扉の向こうは場内の廊下。左右に伸びるどちらへ進んでも、上の階に上られるが、ハイゼノンの城とよく似ていて、片方は偽ものの階段。上階へ上がったても行き止まり。もう一方だけが、本当の道。

アルサスは、廊下に人の気配がないことを認めると、そっとさび付いた扉を開き、廊下へと出だ。アルサスは正解の階段が右側であることを知っている。十分な警戒と、手荒なまねはしたくはなかったが、もしものために剣を引き抜いた。

すばやい行動と足音の殺し方は、シャドウズのそれに近い。壁から壁を伝い、巡回の兵隊に見つからないように、階段を駆け上り、廊下を走り、城の北側にある塔へと急ぐ。五つの塔で形成されるセンチ・レーバン王城は、塔単位でブロックとなっている。中央にそびえるひとときわ高い塔は、「中央城」と呼ばれ、王家の生活の場でもあり、朝議や執務、謁見などの大広間がある。そして、「中央城」を取り囲むようにそびえる四つの塔には、宰相府、騎士団府、魔術師府などの政務機関が存在している。中央集権体制を敷く、センチ・レーバン王国の政治と、それに携わる者の暮らしが、この巨大な城には詰っているのだ。

その中で、アルサスが目指すのは、宰相府の下位機関「技術院」である。アルサスは、なんども警備の親衛騎士団兵をやり過ぎながら、何とか、誰にも見つかることなく、技術院の研究室へとたどり着いた。

ちなみに、親衛騎士団の名誉のために付記しておくならば、アルサスがまんまと研究室に忍びこむことが出来たのは、彼らが無能だからではない。アルサスが、城の構造を熟知し、また「影走り」と呼ばれる、シャドウズも顔負けの隠密行動の鋭敏さにある。

研究室の中は明かりもついておらず、いたって静かだった。もぬけの殻と言ってもいいかもしれない。今日は新たな国王の誕生を

祝う、めでたい日。おそらく、研究員たちも今日ばかりは、祝賀ムードに参加しているのだろう、と踏んだアルサスは、そっと部屋の中央に据えられた、大きなテーブルに近づいた。

テーブルの上に散乱するのは、何事かびっしりと書き込まれた図面と、計画書の束だ。そもそも、「技術院」は王国兵団のために、新しい武器や備品を開発する部署である。たとえば、かつて、ルミナス島でスキード族のハイ・エンシェント、ガムウを暴れさせた「レパードの魔法装置」も、この技術院が開発したものだ。もっとも、そこに散乱する図面に何が書かれているのか、それを理解するには、アルサスの知識は乏し過ぎた。

「まったく、こんなものと睨めっこしてるなんて、技術院の連中にも頭が下がるな」

そう呟きつつ、アルサスは一通り、図面を見る。ほしいのは、新型武器の開発図面などではない。「銀の乙女」「白き竜」そんな単語が書かれているものを一心不乱に探した。

そして、テーブルの隅に置かれた、ひと綴りの計画書が目止まる。

魔法文字で書かれた「銀の乙女計画」の計画書。魔法文字読解の心得があれば、そこに記されている文字の意味を知るのは容易である。ほとんどその知識を有していないアルサスにとっては、タイトルを読解するのがやっとではあるが、それは探していたものに他ならない。ライオットの目的が集約された計画書、それを確認し、手に入れることが出来れば、あとはシオン新国王に掛け合うなり、その証拠をクロウに手渡すなりすることで、ライオットの目論見を台無しにすることが出来る。

そうすれば、何も悩むことはない……。すべては円満に終わるかもしれない。

アルサスは迷宮を独りで歩きながら、そんな希望に縋った。そうでなければ、アルサスは決断しなければならない。迷いをすべて振り切っても。だが、振り切れない迷いが、二の足を踏みたくなる

心が、ここにアルサスの足を向けさせたのだ。

「ネルは何処にいるのだろう……？」

あっけなく、ライオットの計画書らしきものを手に入れたアルサスは、いささか拍子抜けした。そして、計画書を片手に、研究室の中を見回す。だが、そこにネルの姿はない。本来の目的は、ネルを救い出すこと。この広大な城のなかから、ネルを見つけ出すことは、それ自体が広大な砂漠の中から、一粒の宝石を見つけ出すのと同じくらいに、難しいことだ。

しかし、もしもギャレットに連れて来られたネルが、ライオットから客人の待遇を受けているのだとしたら、その身柄は宰相府にあるという公算が大きい。ひとまずは、危険を冒してでも、宰相府へ向かうのが近道だろう。宰相府であれば、この技術院がある北塔の上層階にある。

アルサスは、計画書を手を踵を返した。

と、そのときである、研究室の扉の向こうに、いくつもの足音と鎧のかすれる音が響いた。まずい、見つかったのか！？ 冷たい汗が、アルサスの額を伝う。その嫌な予感をなぞるかのごとく、研究室の扉が観音開きに開く。廊下から差し込む、ひとすじの光は淡く夕刻の光となり、赤く染まっていた。

「動くな、賊徒……！」

光を割って、雪崩を打つように現れた幾人もの親衛騎士団は皆、銀色の全身甲冑に身を包み、物々しい雰囲気漂わせて、研究室に忍び込んだアルサスを威嚇した。

「シオンさまご即位の、この記念すべき日に、場内に忍び込むとは」「不届き者め！」

「大人しく縛につけっ……！」

口々に叫ぶ親衛騎士団の槍が、アルサスの眼前に突きつけられる。悪意はない、騎士としての義務感だけが、その穂先から伝わってくるようだ。この場合、城へ忍び込んだ自分のほうが悪者である。しかし、剣を下ろすわけには行かない。

むしろ、研究室がもぬけの殻であったことや、あまりにも無造作にテーブルの上に置かれた計画書に、少しばかりの違和感を感じつつも、注意を払わなかった自分の迂闊さを呪った。

「手荒なまねをするでない！」

じりじりと迫る騎士団の間を一喝の下に制止して、一人の男が闊歩してくる。

「これは、これは……。今はアルサス・テイルと名乗っているそうですね。メッツェの言うとおり、技術院に兵を忍ばせておいて正解でした。のこのこ、やってきてくださるとは。もつとも、宰相府へ直接お出ましになることも考え、あちらにも警備をまわしたため、盛大なお出迎えが出来ず、申し訳ない」

鬢付け油で整えられたカイゼル髭。フルーツばかりを嗜むという偏食家故の、痩せぎすでひよろ長い体躯。不遜な顔つきは、いかにも態度が大きく、口調の丁寧さとは裏腹に、相手に対する敬意など微塵も含まれてはいなかった。

「さて、そのアルサス殿は、今日のこのめでたき日に、シオンさまの祝賀にいらっしゃったのですかな？　それとも……」

「その先は、言わなくてもわかってるんじゃないのか、ライオット・シモンズ殿？　ネルは何処だ？」

不遜な態度には、不遜な態度で返す。剣を構えたまま、アルサスが問いかけると、ライオットは口元をにやりと歪めた。

「ネル？　ああ、銀の乙女の名か……。彼女なら、私^{わたし}めの客人として、宰相府にてメッツェが丁重におもてなしさせていただいておりますぞ。彼女は式典の大事なゲスト……。心配召されるな。それよりも、今はご自身の心配をされたほうがよろしいのではないですか、アルサス殿？」

ライオットの言葉に眉を顰めるアルサス。しかし、踵を返したライオットは、ちらりとこちらに視線を送り返しただけで、それには答えようとしなかった。その代わりに、騎士団に命じる。

「何をしている、さっさと賊徒を捕らえろ！　式典が始まるまで、

牢にでもぶち込んでおけ」

「で、ですが、ライオットさま。彼は、もしや……！」

騎士の一人が、アルサスのことに気づいたのだろう、躊躇を言葉にしてしまった。ライオットは、そんな騎士を鋭くにらみつけ、

「構わん。その者は、レイヴンのアルサス・テイル殿だ。ドブ鳥のレイヴンには、地下牢が相応しい。そして、あなたの名は、その伝来の名剣『ナルシル』とともに、お返しいただく。もうここには居場所などないということを、身を持って分かっていたただかなくてはならん」

と、にべもなく言い放つ。宰相はこの国の国王に次いで高位である、彼に逆らうことは出来ない、と感じた騎士たちは、あつという間に、アルサスを取り囲んだ。今更、何を言ったところで、騎士団はライオットの命にそむいたりはしない。かといって、「ナルシル」を振りかざして暴れたところで、多勢に無勢は目に見えていること。ここで無駄な血を流す覚悟は、アルサスにはなかった。

「迷いが致命的ってか。仕方ない、大人しく従うか……」

アルサスはナルシルの剣を床に放り投げた。乾いた音が鳴り響く。そして、左手の計画書も、投げ捨てる。もはや、無用の長物。いや、おそらくこの茶番が、アルサスを捕らえるための罠だったのなら、その中身は偽者であろう。後生大事に持っていたところで仕方ない。両手が空いたアルサスは、投降の意を示すべく、両手を挙げて見せる。騎士団は武具を突きつけたまま、手際よくアルサスを拘束した。

センテ・レーバン王城の正門は、城と同じく巨大である。さながら、巨人の玄関とでも形容したくなるほどだ。クロウは、その門前で困っていた。

街角で人ごみにルウを見失ってしまった、クロウたち一行は、しばらくルウを探してみたものの、少年の背丈が、町の人たちより小さいためか、見つけ出すことは適わなかった。そこで、一度ルウの

搜索を諦めて、先に王城へ向かうことにした。何故ルウは突然いなくなってしまったのか、皆目見当が付かなかったが、何にせよ追っ付けルウも王城に現れるはずだ。それならば、無駄に歩き回って探すよりも、同じ目的地へ向かうほうがいいのではないか、というのはフランチェスカの提案だった。

しかし、城門の前まで来たクロウたちは、門がぴったりと閉じられ、門兵が物々しい顔つきで仁王立ちしていることに気づいた。今宵は、新たな国王がこの王城で即位する。そのため、警備が厳しくなっていることは分かっているつもりだったが、それでも、クロウが親衛騎士団の分隊長であることを明かしても、門兵は頑なに、「お通しできません」の一点張りであることを、クロウはいささか奇妙に感じた。

「すでに、来賓のお客様はみな、入場されています。警備の万全を期すために、たとえクロウさまといえども、お城に入れるわけには行きません。不逞の輩は、排除せよとのライオット閣下からの命令です。これ以上ごねられるようでしたら、クロウさまを捕らえなければならなくなってしまいます。どうか、それだけはご堪忍を」

職務に忠実そうな若い門兵。といっても、十九のクロウよりは年嵩なのだが、位はクロウの方が上である。しかも、没落した家とはいっても、ヴェイル家は何代もセンテ・レーバン国王に仕えた、騎士の名家である。その名を知らぬ、騎士や兵隊はいない。

「しかし、即位式のあとは、沿道でパレードを行うはずでしょう？　ならば、私たちが城内に入ったところで変わりはない。それに、私の身分は、ライオットさまが保証してくれる。そして、連れの方の身分は私がほしうします」

クロウはそういいながら、少し後ろで黙って立つ、フランチェスカを示した。ハイゼノンほど、民族意識に固着していない王都では、フランチェスカのことを奇異の目で見るとような人間はいない。しかも、今宵の即位式には、ダイムガルドからの来賓も来ている。

しかし、それでも、門兵は、フランチェスカのことを「不逞の輩」

と見ているような視線を送る。それは、フランチェスカの肌の色ではなく、彼女が纏う、ギルド・リッターの鎧に向けられているように感じ取ったクロウは、

「城で何かあったのですか？」

と門兵に尋ねた。クロウの察しの良さに、門兵は少ばかり驚き目を丸くしてから、顔をクロウの耳元に近づけた。あえて、フランチェスカの耳に入れたくない、とても暗に言っているようだ。もっとも、フランチェスカは良くわきまえており、嫌な顔はしない。

「何かあったのですね……」

クロウが尋ねると、門兵はこくりと頷いた。

「たった今しがた、城内に賊徒が忍び込んだようなのです。お連れの方と同じく、ギルド・リッターの鎧を身に着けていたそうです」
押し殺した声。しかし、予想に反してよく通る門兵の声は、明らかに、フランチェスカの耳にも届いていた。すこし驚いたような顔を覚えた。それは誰だ、と出すねるまでもなく、レイヴンの少年、アルサスだ。

「それで、その賊徒は捕らえたのですか？」

「ええ、ライオット閣下が直々に。ですが……問題はそれだけではありません。これはあくまで、宰相府の情報院が集めた噂なのですが、この式典を壊すため、ガモーフの過激派が街に紛れ込んでいるというのです。そのため、即位式後の街頭パレードも中止する運びになりました。ですので、例えクロウさまといえども、門をお通しするわけには参りません。どうか、ご理解下さい」

「そう、ですか……」

クロウは、頷くとフランチェスカの方を振り返った。そして、フランチェスカの目配せを受け取ると、門兵に「手間をかけさせました」と謝辞を述べ、フランチェスカとともに正門前を後にした。

立ち去る背中に投げかけられる門兵の視線を感じながら、クロウはきちんと押し殺した声で、フランチェスカに言う。

「面倒なことになりました。アルサスが捕まったようですね……」

「ええ。あの子、向こう見ずなどところがあるから。でも、どうするの、騎士さま？ 城に入れなければ、ネルもアルサスも助け出せない。もしも、ライオットが何かをしでかそうとしているなら、今夜、時間がないわ」

そう返して、フランチェスカは西の空に沈み行く、真っ赤な夕日を見つめた。

「夜までは、時間がまだ少しだけあります。他の門を当たって見ましょう。もしかすると、他の門兵なら、私の名が力を発揮できるかもしれません。しかし、気になるのは、ガモーフの過激派とやら」

「信憑性の置ける情報かしら？ 過敏になっているだけじゃない？」

「そうだといいいのですが」

嫌な予感ほど、的中するものだ。クロウはそう言いたげに少しだけ、城を振り返った。

50. 研究室の罨（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せ下さい。

51. エルフオードの会

魔法学生ジャレン・ジャラ率いる、「エルフオードの会」のメンバーは、皆、魔法使いギルドの来賓の付き添いとして、何の弊害もなく、あっさりと正門から城内へと入った。それは、クロウたちが門兵に追い返される少し前のことである。

「エルフオードの会」のメンバー五名は、ルミナス魔法学園の学内でも優等生たちがそろっている。会長である、ジャレンも、すでに主席卒業が内定している秀才だ。また、そのほかに、三名のメンバーも、皆級長や寮長を務めるガモーフ人ばかり。ナタリーもその中の一人だった。

ナタリーは、ずっと無言のままだった。学園支給のモスグリーン色したコートの下には、赤い腕章がある。それは、「エルフオードの会」の証でもある。そして、なにより、その赤が意味しているものは……。

「ナタリー。ねえ、ナタリー。やっぱりダメだよっ」

ルウが声を押し殺して、ナタリーの袖を引っ張る。来賓控え室へと案内される魔法使いギルドの幹部一行、その最後尾に従う「エルフオードの会」のメンバーたちの、さらに最後尾についていくルウは、センチ・レーバン王城の美しく豪華で、かつ落ち着きのある、調度品などには目もくれなかった。いつものルウなら、そういったものに興味を示さなはずがなかったが、今はそれどころではない。必死に、ナタリーの後ろを付いていき、ことあるごとに、彼女のコートの袖を引っ張っては、ナタリーを思いとどませようとする。

「だったら、付いてこないで、ルウっ」

取り付く島もないといった風に、ルウの手を振り解いたナタリーは、「エルフオードの会」の先輩たちに遅れないよう、その後ろを必死に追いかけた。

街角でナタリーの姿を見つけて、それを追いかけたルウは、そこ

で「エルフォードの会」と出会った。表向きは、魔法使いギルドとルミナス島の歴史を研究する、魔法学園のサークルのひとつとして有名である。秀才たちかそろこのサークルが、魔法使いギルドからの来賓に付き添うことを許されたのは、彼らがギルドメンバーからも信頼が厚いということの顕われだろう。

しかし、ナタリーとルウの元に現れた、会長ジャレンの話を聞いたルウは驚愕した。脈々と学園の歲月とともに受け継がれる「エルフォードの会」の裏の顔……彼らが魔法使いギルドの幹部に随伴してきた、本当の理由。

『われらは、祖国のために、エルフォード様に倣い、敵を討つ』

魔法使いギルドの祖にして、大魔法使いエルフォードは、ルミナス島の独立を守るため、彼女の雇い主であった国を裏切り、戦争をした。そうして、勝利と独立を勝ち得たのである。彼らは、それに習い、たとえルミナスの魔法学園を裏切っても、祖国ガモーフ神国のために立ち上がるというのだ。そして、彼らが「敵」と称するのは、ほかならぬ、センチ・レーバンの新国王シオンである。

それは、テロルにも近い行為。何故彼らがそんなことを言うのか。ルウには冗談にしか聞こえなかったが、赤い腕章と、彼らのギラついた瞳がなによりも、冗談などではないということを証明していた。ジャレンたちが、テロルを辞さないという考えにいたったのには、ルウも知るあの事件が関わっている。そう、ルミナス島で起きた、ハイ・エンシエント「ガムウ」の襲撃事件である。王国と魔法使いギルドの間に、政治的な駆け引きがあって、ことは有耶無耶になってしまったが、ガムウを操っていたのが、王国の者であったことは、周知の事実となっていた。そのため、ルウがアルサスに引付いて旅立った後、ルミナス魔法学園では、センチ・レーバン人の生徒とガモーフ人の生徒の間で、対立が起きていた。そんな中、対立は徐々に大きくなり、ガモーフ人の下級生の一部が謂れのないイジメに

会い、女学生の一人が図書館で首を吊った。痛ましいその事件は、センテ・レーバン人の多い魔法使いギルドの幹部によって、表沙汰になることはなかったものの、ジャレンたちガモーフ人で構成される「エルフォードの会」のメンバーは怒りに震えたのである。

思えば、ヨルンの悲劇で何万人ものガモーフ兵の命を奪ったのもセンテ・レーバン人。罪なき魔物の長を操ってルミナス島を襲ったのもセンテ・レーバン人。そして、女学生を自殺に追いやったのもセンテ・レーバン人。何もかも、センテ・レーバンが悪い。ジャレンたち、ガモーフ人で構成され、かつ愛国心の強い「エルフォードの会」のメンバーは、怒りを露にしたのである。

その怒りを分からなくもない。ルウにも、ガモーフ人であるという誇りはある。ジャレンの話を聞いて、胸の奥にふつふつと怒りさえ覚えた。そこに、無常な肅清を行ったハイゼノン公や、外国人や貧民を冷たくあしらうハイゼノンの街の人たちがダブって見えた。

だが、その一方で、アルサスやクロウ、貧民のまとめ役として分け隔てなく接するクレイグという、センテ・レーバン人のことを知っている。だからこそ、ジャレン……いや、いつもちょっと喧嘩腰ではあったものの、自分のことを心配してくれていたナタリーがしようにしている無謀なことを、放っておくわけには行かなかった。

センテ・レーバン人が悪いからといって、十一歳の新国王を殺すなんて、間違っている……。そのことに、ナタリーが気づいていないなら、止めなくちゃ！

「お前もガモーフ人だ。付いてきたいなら、好きにするといい」というジャレンの言葉に、ルウはナタリーを止めるという本意を隠し、フランチェスカたちとはぐれたまま、彼らに先んじてセンテ・レーバンの城内に入った。

「本当に、やるつもり？ そんなことしたら、魔法使いギルドも学園も……」

ルウは、ナタリーの後ろにぴったりと付いて、何度もその言葉を口にした。もう十回目だろうか。ほとほと嫌気が差したのか、ナタ

リーは返事を返してこない。その代わりに、前を向いて廊下を歩きながら、

「ルウはどうして、王都に来たの？ もう一ヶ月近く、学校をズル休みして、何をしていたの？」

と、級長らしい威厳を垣間見せる。

「ボクは……」

ここまでの旅のことを、ナタリーに話して聞かせたい。初めての野宿やキャンプ。ボアル族の魔物に追いかけられたこと、ウェスアでの出来事、フランチエスカを加えてクアドラ山脈を越え、エントの森での冒険。ハイ・エンシェント「ローアン」との出会い。そして、何よりもルウの知識欲をそそった、遺跡船。辛いこともたくさんあったけれど、学園の図書館に籠っていたは、体験することのできなかった様々な旅の日々を、ルウが学園で最も心を許す友達に聞かせてあげたい。きつと、以前のままのナタリーなら、興味深くその話に耳を傾けてくれたはずだ。

しかし、今はそんな時間もないし、目の前を歩くナタリーの背は、以前の彼女のそれとは違う。ある種異様な正義感や復讐心にとらわれていることを、ひしひしと感じる。

「別に話したくないなら、いいけど。余計なことはしないで」

口ごもってしまったルウに、最初から返答など期待していなかった、とでも言いたげな冷たい視線をナタリーは投げかけてきた。

「余計なことって……」

何が余計なことなのか。暴挙を止めようとすることは、余計なことではない。そう口を開きかけたルウは、突然列が足を止めてしまったため、ナタリーの背中にぶつかってしまった。

「それでは、魔法使いギルドの来賓の皆様と、付き添いの学生諸君は、こちらの控え室でお待ち下さい」

係りの文官らしき、身なりのさっぱりした男が、扉を開けたのは、来賓用に用意された個室だった。個室と言っても、ルミナス学園にある百人用・階段講義室ほどもある。しかも、部屋の中は豪華なタ

ピストリーや壺、美しいレースのカーテンに、きめの細やかな赤いカーペットで飾られ、部屋の中央にはこれまた豪勢な軽食が用意されていた。

即位式は、センテ・レーバン王国きつての大事業。同時に、ガモーフやダイムガルド、ギルド連盟に王国の経済力を見せ付けるといふ政治的側面を持っていた。来賓として招待された、魔法使いギルドの幹部たちは、皆「ほほう」と関心して色めき立ち、あるものは軽食にかじりつき、またあるものは美しい調度品に目を奪われていた。

しかし、「エルフォードの会」のメンバーたち、そしてルウは、黙りこくったまま部屋の隅に置かれた、椅子に腰掛けた。

暢気なもんだ。幹部たちの姿を見て、ルウは思う。幹部たちは、忙しい身の上の魔法使いギルドの長、即ち校長の名代としてここに訪れているのだ。その責任は重い。しかし、この中の一人として、随伴する「エルフォードの会」が腹に抱えた計画を知っている者はいない。

落ち着かない表情でセンテ・レーバン人である幹部たちの姿を見つめているナタリー。その横顔を、そっと見やるルウの頭の中は、どうすれば、ナタリーを止められるのか……、懷に隠し持った、ミスリル製のナイフを取り上げることができるのか……、そのことでいっぱいだった。

「ライオット閣下、火急の用である！ 取次ぎ不要、我らを通し給え！」

正門の門兵に追い返されたクロウは、攻め方を変えた。一路、四つある城の門のうち、西の門に、フランチエスカを従えて向かったクロウは、声高に言った。親衛騎士団の分隊長であるクロウの顔と、ヴェイル家がライオット・シモンズの子飼いであることは、周知のこと。火急と言われては、門兵といえども、騎士に口答えできる身分ではない。しかも、宰相ライオット・シモンズの名まで持ち出さ

れては、例え命令を破ってでも、クロウたちを通さざるを得なかった。

門さえ潜り抜けてしまえば、こっちのものだ。クロウの顔とその鎧があれば、誰も怪しむ者はいないのは至極当然のこと。更に、クロウとともに城内に入ったフランチェスカに、すれ違う者たちは、一瞬怪訝な顔をするものの、即位式にはダイムガルドの来賓も招かれていて、なによりギルド・リッターの来賓も招待されている。ダイムガルド人やギルド・リッターがそこにいても、なんら不思議なことはないのだ。それでも、親衛騎士がギルド・リッターの、それもダイムガルド人の美女を従えているという光景は、やはり城の者たちには奇妙な取り合わせに映るのだろう。

「ぐずぐずしていたら、面倒なことになりそうね」

と言ったのは、フランチェスカだった。彼女の言うとおり、奇妙な取り合わせは、きっと城の者たちの記憶に残ってしまうだろう。そもそも、ありもしない「ライオットへの火急の用事」という名目で城内に入ったのだ。取り次ぎ入らないと言ったが、クロウがハイゼノンから王都に帰ってきたことは、直にライオットの耳に入ることだろう。そうなる前に、やることは三つ。

まず、城に入り込み捕まったアルサスを救出する。そして、ギャレット・ガルシアによって王都に連れ去られたネルを見つけ、これも救出する。あとは、即位式のどさくさに紛れて、城から脱出する作戦を立てている余裕はない。しかし、勝機もない。騎士として、算段の付かない戦ほど、不透明で不安を感じずにいられないが、ことは親友とその仲間に関わることだ。そして何よりも、今のクロウを突き動かしているのは、自らが討ち取ったファレリア公の最後の姿。自分が正しいと思うことのために、命を賭けた男の姿である。

すでに、シモンズ家の飼い犬であるつもりはない。自分は、影走りとは違う。信念と誇りを持った、センテ・レーバン騎士団の一人なのだ。

「おそらく、アルサスは地下牢に閉じ込められているはずです」

足早に廊下を進むクロウは、フランチェスカの方に顔を向けずに言った。

「地下牢？ お城に牢屋があるなんて、物騒ね」

「地下牢と言っても、政治犯などを仮に閉じ込めておくものです。現在は使われていませんが、即位式の日『賊徒』が城に忍び込んだという不名誉を表沙汰にしないために、地下牢へひとまず閉じ込めているはずです。しかし……アルサスを賊徒呼ばわりするとはっ！」

クロウは拳を握り締める。その口調に、ただならぬものを感じたフランチェスカは、訝るような視線を向けてきた。

「どういふことかしら？」

「えっ、あ、いや、深い意味はありません。それよりも、急ぎましょう、フランさん」

言葉を濁し、クロウは更に歩く速度を速めた。地下牢へは、五つの塔のうち、東塔から入れる。クロウの言ったとおり、ずいぶん昔には、政治犯などを臨時収監するために設けられたものののだが、現在はほとんど使われることはなくなっている。

そのため、地下牢へと続く長い階段の先には、長い間開かれることのなかった錆付いたドアがある。その足元に、錆の赤茶けた粉が落ちているのは、つい今しがた、誰かがその扉を開けたと言うことだ。

「アルサスっ！」

クロウは用心のため、剣を引き抜き、地下牢の扉を開けた。

51. エルフォードの会（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せ下さい。

52. 地下牢のアルサス

「何者だ、貴様たちっ!!」

扉の向こうは少し湿った空気のする地下牢。明かりのほとんどない廊下の両端には、まさに牢を表すかのように、鉄格子の小部屋がいくつも立ち並んでいた。そして、今まさに罪人の収監を終えたばかりの、騎士が二人、地下牢に入ってきたクロウたちを見咎めた。だが、見咎めてうろたえる。

「なっ、何故クロウ隊長がここに!?!」

彼らは、クロウと同じ親衛騎士団の一員であるが、クロウ隊の隊員ではない。しかし、クロウの名も顔も知らないわけではなかった。クロウは、先ごろファレリアの反乱を鎮圧した分隊の隊長、しかもヴェイル家の跡取りである。一方、いち隊員に過ぎない彼らの動揺ぶりは、却って滑稽に見えた。

「見張りか……お前たち! 収監した賊徒が誰だか分かっているのか?」

クロウは剣を構える。威厳に満ちた声音は、騎士団隊長のそれである。しかし、戸惑いを隠せない騎士たちは、その問いかけに答えることなく、各々鞘から剣を引き抜いた。相手が誰であろうと、地下牢に通すな、とでもライオットに言いつけられているのだろう。彼らが戸惑いの中で、判じたのは、騎士団分隊長よりも、宰相の言葉に重きを置いたと言うことである。

「やる気みたいよ」

フランチエスカがクロウの耳元で囁くまでもなかった。クロウは両手で剣を握り締め、その切っ先を騎士たちに向けた。

「彼らは任務に忠実なだけです。命まで奪う必要はありません」

そう言うと、クロウは床を蹴った。センチ・レーバン王国騎士団に伝わる、王家の剣技「迅雷」である。一对一の突撃戦法に特化させ、強い蹴りだしとともに雷が天から降り注ぐがごとく駆け抜けて、

一瞬のうちに敵の急所を斬ることから、その名で呼ばれている。センチ・レーバン王国が、八百諸侯を纏め上げ、同時に数で勝るガモーフ神国や、鋼鉄国家ダイムガルド帝国に比肩してきた、その背景を支える、センチ・レーバン王国騎士団の強さの秘密である。

しかし、クロウがその剣技を扱えるように、おなじ親衛騎士である彼らも迅雷の剣技を習得している。手の内は、読まれているのだ。地下牢の廊下に、剣と剣がぶつかり合う音が鳴り響き、赤い火花が散った。

「例え相手が、クロウ殿でも、容赦はいたしません！」

騎士は強くクロウを睨み付ける。そして、剣を無理やり降りぬくとその返しで、クロウの胸元を狙った。クロウは咄嗟の判断で、一歩飛びのき切っ先を寸でのところでかわす。

クロウはそれほど剣技に自信があるわけではない。将が、絶対的な剣術センスを有していなければならぬと言うことはなく、畢竟、彼が分隊長という役目にあることと、剣の腕前はまた別の話なのだ。少なくとも、相手との剣の実力は伯仲している。

一方、騎士の片割れはそんなクロウの傍をすり抜けて、フランチェスカの元に迫る。剣と槍。リーチの長さは槍が優れるものの、狭い地下牢の廊下では、槍の取り回しはすこぶる悪い。しかし、フランチェスカはそれをものともせず、まるで蜂が刺すように、穂先を繰り出し、騎士の剣を防いだ。

他人の心配をする必要はなさそうだ。クロウはそう感じ、剣先に念を込めた。自らが握る得物は、人の命を殺めることができる、凶器である。一步間違えれば、剣技の差は関係なく、あいてを殺めてしまうかもしれない。しかし、目の前にいるのは敵ではなく、おなじセンチ・レーバン王家に仕える、親衛騎士である。年のころは、自分と変わらないだろう。そんな騎士を殺してしまうことと、アルサスたちに協力することは、また別の問題だと分かっている。

「やあっ！」

クロウとのにらみ合いに痺れを切らした騎士が、迅雷の剣を振り

上げる。殺意はないが、害意のあるその剣が振り下ろされる瞬間、クロウは足を軸に、それをかわした。隊長の印であるマントがひらりとためき、騎士の視界をふさぐ。クロウはその隙を見逃さなかった。そのままの流れに身を任せつつ、騎士の背後に回った彼は、甲冑唯一の弱点である、後頭部に柄の先端を打ち付けた。その強力な打撃は、おそらく痛烈な痛みを与えたであろう。騎士は、短く「ぐえっ」と悲鳴を上げて、うつぶせに倒れこんだ。

落雷のごとく、一瞬で勝負が付く。迅雷の名の由来のもう一つの意味である。

フランチェスカも、もう一人の騎士が一瞬怯んだ隙を見逃さなかった。迅雷の剣技ならば、十年前にギャレットたちに見せ付けられているし、彼女がその後ギルド・リッターで鍛えた戦闘術は伊達ではない。狭い空間を大きく動くことなく、効果的な槍の打ち出しに加え、隙を突いての蹴りは、見事に騎士の腹に決りこまれたのである。たとえ、全身甲冑と言っても、体重も乗せた蹴り込みはその衝撃は甲冑内部を貫く。騎士はうめき声を上げながら、クロウの相手と同様にうつぶせに倒れた。

「フランさん、彼らをそこの空いている牢に閉じ込めておきましょう」

そう言って、クロウは倒れこんだ騎士の腰から、鍵の束を取り出した。この地下牢が使われていなかったことを表すような、古びた鍵である。それを、フランチェスカに投げると、自らは牢の奥へと走った。

廊下の両脇に並ぶ格子の小部屋は、両側併せて二十近くある。政治犯が一度に、二十人以上も出たという話は聞いたことがないし、クロウ自身、この地下牢に入るのは初めてのことだった。一部屋一部屋、アルサスの姿がないか確認して回る。すると、もつとも奥まった部屋に、人影が。

どうやら、先ほどの騎士たちに気絶させられたのか、小部屋の中でうずくまっている。見たところ怪我をしている様子はないことか

ら、頭でも殴られたのだろう。牢に閉じ込められる前、アルサスが悪あがきしようとしたことは、想像に難くない。

「アルサスっ！ アルサスっ！」

鍵はひとまずフランチェスカに預けた。クロウは、格子を持って揺らしながら、友の名を叫んだ。何度か叫ぶうちに、気を失っていたアルサスはゆっくりと目を開く。

「クロウ？ 何でお前が」

視界にぼやけたクロウの姿をみとめたアルサスが起き上がる。つと、頭を駆け巡る痛みに顔をしかめ、自身の後頭部にできたこぶを押さえた。

「無事かい、アルサス？ 怪我はしてない？」

「大丈夫だけど……、どうしてお前がここにいるんだよっ！ ハイゼノンは？」

格子まで駆け寄ったアルサスが、クロウを睨み付けて来る。

「わたしもいるわよ」

ひょこっと、クロウの隣に顔を出したのはフランチェスカ。騎士たちを空き部屋に閉じ込め、鍵をかけたフランチェスカは、図らずも驚くアルサスを他所に、ニコニコと再会を喜んでいるかのようだ。「ハイゼノンで言っただろう、フラン？ あんたたちはそれぞれ、自分の居場所に戻って、聞いてなかったのか？」

「あら、わたしたち、耳が遠いのよ」

悪びれる様子もなく、アルサスの言葉に答えるフランチェスカ。

彼女は、先ほどの鍵の束をクロウに手渡す。

「わたしたちって……まさか、ルウもいるのか？」

慌ててアルサスは、あたりに視線をめぐらせて見たものの、丸ぶち眼鏡の少年は何処にも見当たらない。それもそのはずだ、街角ではぐれてから、ルウがどうしているかは、想像が付いても確かめる術がクロウたちにもない。アルサスの訝るような視線を受け取ったクロウは、鍵を開けながら答えた。

「いや、街角の雑踏ではぐれてしまった。あの子のことだ、きっと

心配することはないと思う。とにかく、牢屋からでるんだ。ここは、君には似合わない」

クロウはアルサスの閉じ込められた牢の扉に手をかける。長い間使われず錆ついた格子の扉は、甲高い音を立てて開いた。

「まったく！ 僕に何も告げなかったことはまだしも、あんな素っ気無い書置き一つで、フランさんやルウくんまで置き去りにするのは、困った人だな、君は！ だから、こんなところに閉じ込められる始末なんだ！」

アルサスが牢屋から出てくるなり、クロウはアルサスの行いを叱責した。バツの悪そうな顔をしたアルサスは、ちろりと舌を出して、

「クロウ……ルウみたいなこと言うなよ」

と、アルサスが助けを求めるように、フランチェスカに目配せをする。しかし、フランチェスカは苦笑するにとどまり、アルサスに助け舟は出さなかった。彼女としても、ハイゼノンに置き去りにされたことは、ルウと同様、少しばかり腹に据えかねていたのだ。

「それで、君はメリクスの迷宮を抜けたのか？」

溜息交じりに、問いかけるクロウ。

「ああ、あそこはよくお前と探検したからな。道順ならだいたい分かった。しかし、ライオットめ、俺が来ることを見越してやがった。レイヴンには、薄暗い地下牢がお似合いだとさ」

アルサスは自らの後頭部にできたこぶをさすってみせる。再びクロウは、友のあっけらかんとした物言いに、溜息を漏らした。

「誰も助けに来なかったら、どうするつもりだったんだ！？ こと、ライオット閣下は君のことを邪険にしか思っていないことは、重々承知のはずだろう？ 命を危うくする前に、もう少し思慮深くしてくれ。閣下がなんと言おうが、君はこの国の……」

「その先は言うな！」

突然大きな声で、クロウの言葉を制するアルサス。その声は何度か、地下牢に反響した。空き部屋に閉じ込めた騎士たちが目を覚ま

すのではないかと、一瞬懸念したが、反響した声が静まり返っても、その様子はなかった。

「すまない、大声を出して。でも、ライオットが言うことは正しい。俺は、レイヴンのアルサスだ。俺を買いかぶるな、クロウ……」

アルサスがそう言うのと、クロウも返す言葉を失ってしまう。

「それで、ネルは見つかったの？」

沈黙だけが無駄な時間を作り上げようとするのを、フランチェスカは本題に触れることで割り込んだ。アルサスは、フランチェスカの問いかけに頭を左右に振って答えた。

「いや、宰相府で丁重にもてなしていると、ライオットは言っていたけど、それを信用することは出来ない」

「じゃあ、すぐに宰相府へ向かいましょう。ネルを救い出すために、王都まで来たんだから」

フランチェスカが揚々と言うと、アルサスはそれにも頭を左右に振る。

「時間がない。即位式が始まれば、ライオットはネルの力を使う。客人などと言っても、心の底じゃ、ネルを道具程度にしか思っていないやしないんだ！」

「どうしてそう言い切れるのかしら？　まるで、あなたは、ライオットのことを良く知っているようじゃない？」

「それは……今話している余裕はない。俺のことなんてどうでもいい。即位式を台無しにしても、とにかく、ライオットを止める。それが先決だ」

「まさか、アルサスっ！！　君は即位式に殴りこむつもりかい？」
クロウが慌てて、アルサスの肩をつかんだ。そんな馬鹿なことは止める、と視線を尖らせたが、逆にアルサスの赤い瞳に射すくめられる。

「ネルの『奏世の力』は、傷を癒す力じゃない。どうして、そんな作用がもたらされるのか、俺にもわからない。だから、俺はネルと旅をした。『銀の乙女と奏世の力』の真実を知るため。それでも、

結局その真実にはいたることが出来なかったけれど、これだけは確かだ」

奏世の力は、白き龍を蘇らせるための力……。

アルサスは、たつぷりと重みを含ませた語気を吐き出した。その言葉に、クロウは驚きを隠せない。薄々は、感づいていたからかもしれない。その感覚は、おそらく『奏世の力』を目の当たりにした、あるさすとして、同様だったに違いないと分かる。

アルサスは、クロウの驚きを踏まえつつ、続けた。

「この世に、再び白き龍はよみがえらせてはならない。龍が幸福をもたらすなどと言う言い伝えは、その力に魅了された人たちの、まやかしだ。巫女だった、俺の母さんの言葉……俺は忘れていない。クロウ！ お前はどうかんだ？」

いつになく、威厳のある声音に、クロウは掴んだ肩を離れた。その言葉、自らもアルサスと同じように聞いた。そして、ライオットは少女に宿るその力を使って、センチ・レーバンの伝承に残る「白き龍」を蘇らせようとしている。そんな彼が望むのは、ファレリア公が思い描いた平穏な世界とは程遠い。

そこまで分かっておきながら、目の前の友はライオットの野望を阻止しようとしているにもかかわらず、自分はどうか？ 騎士として衛^{まも}るべきものはなんだ？ このまま、ライオットの悪意の一翼を担う、子飼いの騎士でいいのか？ それは、ヴェイル家の名に恥じることではないのか？

「それでも、間に合わなかったら？ ライオット閣下が白き龍をよみがえらせたなら？」

クロウは、あえてそう問いかけた。問いかけながら、同じ言葉を自分にも投げかける。

「そのときは……そのときは、迷いを捨てて」

「その覚悟はできているのか？ 迷いを捨てると言うことの意味、分かっているのかい？」

「分かっている。だけど、そうなる前に、刺し違えてでも、ライオッ

トの野望を止めなければ。それが、俺があいつにしてやれる唯一のことだ」

アルサスは小さく笑った。クロウには、その笑みの意味と、向けられた先に誰がいるのか分かっていた。だが、迷いを捨てると言う言葉、それが真偽如何であっても、友の言った言葉の末尾だけは嘘ではないだろう。ならば、自分は……。

「じゃあ、僕も即位式に殴りこもう。僕も迷いを捨てる」

そう言うクロウは、アルサスの微笑みに微笑みで返した。そこには、親友同士でなければ分らない、意思の疎通のようなものがあって、フランチェスカは独り蚊帳の外であったが、彼女は拗ねるでもなく、鉄槍を手に、

「あなたたちの話は良く分からないけれど、仲間として放っておくわけには行かない。わたしも行くわ」

と、朗らかに言った。

「フラン、いいのか？ 今ならまだ、ギルド・リッターに戻る。ルウを探して、あいつとともに居場所へ戻ってくれ。これは、センテ・レーバン王国の問題なんだ。ハイゼノンの時みたく、あんたたちを巻き込みたくはない」

「あら、優しいこと言ってくれるのね。でも、騎士さまにも言ったけれど、あなたを一人で行かせるわけにはいかないわ。だって、あなたも、ネルもわたしの旅の仲間。ネルを救い出したいと言う気持ち、わたしもルウも同じよ」

いつものように、飄々とした物言いは、アルサスを丸め込むにはうってつけだった。「仕方ないな」とアルサスは、フランチェスカの助力にまんざらでもない様子。ルミナスから、ウェスアから、山を森を谷を越えた長い旅路の苦楽を共にしてきた「仲間」と言う言葉は、アルサスの心の内を透かした言葉であった。

「しかし、このままの恰好というのも、親衛騎士団の目に付きやすいな」

クロウは話がまとまったことを確かめ、二人の衣装を指して言っ

た。アルサスとフランチェスカは、ギルド・リッター特製の白銀の鎧を纏っている。色合いこそ、センチ・レーバン騎士団の銀の鎧に近いものがあるが、堅実な防具であるギルド・リッターの鎧とは、明らかにデザインが違うため、却って目立ってしまう。

即位式には、ギルド・リッターの幹部も祝賀に訪れているものの、彼らに紛れ込むことは難しいとなれば、その鎧は邪魔なだけだ。

「そう言うと思って……」

フランチェスカが踵を返し、先ほどの騎士たちを閉じ込めた牢屋の前に向かう。

「さっきの騎士たちの、身包み剥いでおいたわ。使えるかしら？」

そして、再び戻ってきた彼女の両腕は、センチ・レーバン騎士団の甲冑と剣一式を抱えていた。

52. 地下牢のアルサス（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せ下さい。

53. 悲しみのネル

ここがなにもない暗闇の世界ならどれほど楽であったか。自分かもしれない、物言わぬ雑草であったら、これほどまでに胸を痛めずに済んだかもしれない。しかし、ここはあまりにきらびやかで、あまりに騒々しい。そして、自分は雑草ではなく、人間だ。

悪夢から目覚めるたびに、そのことを嘔み締めなくてはならないことが、つらくて仕方がなかった。悪夢は、一週間前から、毎夜見続けている。うなされ、もがき、心とともに全身が引き裂かれたような痛みに目を覚めます。覚醒しきらないばやけた視界は、ただ自分が寝ぼけている所為ではない。大きな瞳いっぱい、涙の粒が溜まっているからだ。それが目じりから枕元へと零れていく度に、頭の中を支配するのは、愛する妹の死に顔だった。

街を焼く炎の黒煙が汚していく空を見上げ、「こんな世界いやだ」と呟いた妹は、ミスリルの壁に囲まれた異国の街で父と母の元へと旅立った。二度と帰ることのない、人生最期の旅へ。だが、そのときを迎えるには、メル的人生はあまりに短すぎる。たった十四年。おしゃまで、ちょっと生意気な子だったが、まだ恋の一つも知らぬまま、姉の膝元で息を引き取った。

何故、メルは死ななければならなかったのか？メルを外国人だからと、殺したあのハイゼノン兵が憎い。そして、何も出来ず泣いていた自分が憎い。憎悪の気持ちには、ぐるぐるとめぐり続けながら、ネルの心を縛り付けていく。雁字搦めに縛り付けていく。それは、アルサスと出会う前、「運び屋」の辻馬車に揺られていたときの、孤独と絶望感に似ていた。

そして、自ら怒りの中で、力を使った。「奏世の力」と魔物の長が呼んだ力。それは、あたりを吹き飛ばす嵐となって、それまでとは違う顔を見せた。

分かり合えないから争いあう。貧乏人だから、外国人だから、自

分たちにとって邪魔だから、名も知らない人を平気で殺してしまう。そんな欲や恨みによって、メルは死んだんだ。こんな世界なら、要らない……！

まるで、ネルの憎しみが爆発するかのようだった。

だが、そんなネルをアルサスは、あの優しい赤い瞳の少年は、いつになく声を荒げて、ネルを叱責した。その言葉を聴くにつけ、自分の中にある力が、本当は恐ろしいものではないのか。ネルがそう思い至った瞬間、彼女の憎しみが恐怖に彩られた。大粒の涙が止まらない。

自分の所為でたくさんの命が失われた。そして、後一步間違えれば、「奏世の力」で大切な人まで巻き込んでしまうところだった。

許してほしいと懇願するネルの目の前で、アルサスは黒衣の騎士に斬られた。血を流し伸ばす少年の手をネルは取ることが出来ず、黒衣の騎士団によって、あのラクシャ村の悲劇の日と同じように、愛する者と引き離された。

両手を縛られ、馬車に乗せられ、あの時と同じように積荷として運ばれる。あの時と同じように、心の中は真っ暗闇になった。しかし、あのときと違うのは、四日間の強行軍で目的地が見えてきても、空から少年が助けにやってくることはなかった。

奏世の力が何なのか、もう知りたくない。憎しみと悲しみと恐怖が交じり合った、自分の心も癒せない力のことももうどうでもいい。何のために自分は攫われ、王都に連れてこられたのか、そんな自分が置かれた身の上もどうでもいい。すべて投げ出して、暗闇の中に閉じこもってしまいたい。出来ることなら、雑草にでもなってしまいたい。

それなのに、ギャレットに連れられてやってきたこの、センチ・レーバン城では、なぜかそれまでとは打って変わって、手厚く迎え入れられた。ぼろぼろになったカチュアのワンピースに代わり、見たこともないきれいなドレスを与えられ、絵本の中でしか見たことのない、お姫様のような部屋に案内された。

だからと言って、この気持ちが晴れやかになるわけではない。目を開ければ、アルサスたちは無事だろうか、もう一度会えるだろうか、そんなことばかりが頭の中を過ぎり、目を閉じれば、もう二度と会えない人たちの顔と、メル最後の顔が蘇る。

王都に連れてこられて苦しみ満ち満ちた、三日間。ネルは、お姫様のような部屋で、城と城下のにぎやかさは裏腹な、暗い気持ちを抱え続けていた。

「メル……」

ベッドの隅に座り、窓から見下ろせる、センチ・レーバン王都の夜景を眺めるネルは、今日だけでもその名を何度呟いたことか。本当は美しいその景色も、不意の涙で透明にぼやける。

ネルは、アルサスたちがこの城に乗り込んできていることはおろか、今日がこの国にとって大事な日であることも、自分にとって運命の分かれ道であることも知る由もなかった。お姫様と形容する部屋の外には、銀色の鎧を身に着けた騎士らしき人が、交代で見張りに付いている。言ってみれば、広々としたこの部屋に、ネルは軟禁状態なのだ。

「おや、口に合わなかったのかな？」

突然声がして、ネルは窓から視線を部屋の中に移した。ぼんやりしすぎていて、ノックの音も聞こえていなかったのだろうか、部屋の入り口に、一人の青年が立っていた。

さらりとした金色の髪。切れ長の瞳と精悍な細面によく似合うモノクル。背は高く、すらりとしており、所作にまったく隙がないその青年は、自らのことを「メッツェ・カーネリア」と名乗った。宰相府と呼ばれる、センチ・レーバンの最高行政機関の参謀を務めているそうだ。だが、そんなことはどうでもいい。

この青年には、どこかアルサスのものとは異質な優しさがあった。ギャレットによって城に連れてこられたネルは、宰相ライオット・シモンズに面会した。だが、カイゼル髭の蛇男とは、三日の間それっきり会っていない。代わりに、ライオットの召し抱えるメイド長

と、この青年がネルの身の回りの世話を焼いてくれた。

「驚かせてしまったかな？」

メッツェはそういいながら、部屋の中央に置かれたテーブルの上にある、色とりどりのフルーツで飾られた皿を見つめていた。ネルはこの三日間何も口にしていない。センチ・レーバンの食べ物が口に合わなかったわけではない。ネルは、そのようなわがままを言うような娘ではなかった。しかし、メルやアルサスたちのことを思えば、食べ物が喉を通らない。世話を焼いてくれるメッツェの手前、何度か食事を取ろうと、むりやり口に詰め込んでみたが、メッツェのいないところで戻ってしまった。

見かねたメイド長が、センチ・レーバンの豪華な食事の代わりに用意してくれたのが、ライオット御用達のフルーツである。しかし、それすら、ネルの喉を通らなかった。

与えられた青いドレスこそ、彼女の銀色の髪を引き立てて、美しいものの、今のネルの姿は、アルサスが見れば心を痛めてしまうほどに、弱弱しく苦しげである。だが、そのアルサスが無事かどうかさえ、この部屋の中からでは分からない。せめて、暗く沈み行く心の傍で、想い人の無事を祈ることしか出来ない自分に何が出来るだろう？

「食欲がないのは分るが、何か食べなければ、体が持たない……」

メッツェは、ネルの傍までやってくると、親愛の笑みを浮かべる。出会って間もないと言うのに、この青年と目を合わせると、どこか親近感を覚えるのだ。アルサスの暖かさとは違う、それはちょうどメルの視線によく似ていた。何故そのような感覚にとらわれるのかは分からなかったが、かろうじて、ネルが軟禁状態にあっても、心の闇に巢食われずにいられるのは、メッツェのおかげと言っても過言ではなかった。

「それでも飲んで、少しは栄養をつけてくれ。君は、大事な客人だ」
そう言って、メッツェはネルにグラスを差し出した。メイド長特製の、野菜とフルーツのミックスジュースである。固形物が喉を通

らないのならと、メッツェが氣を利かせて、メイド長に作らせた。浅緑色をしたジュースは、見るにまずそうであったが、メッツェの氣遣い無碍にするわけには行かないと、ネルは「ありがたいございます」と述べ、そのジュースを受け取った。

味は思ったよりもさわやかで、口当たりも悪くはない。この一週間、栄養らしい栄養を取っていない体には、優しい味だった。

「フォトン・アクションが君の恒常性を保ってくれると言っても、君も同じ人間だ。息をして、水を飲み、ものを食べなければ、いずれ死んでしまう」

ジュースを飲むネルの横顔を優しく見つめながら、メッツェが言う。ネルは聞きなれない言葉に、小首をかしげた。

「フォトン・アクション？」

「そうか、君は何も覚えていないんだな……」

メッツェは窓辺に立ち、ネルに背を向けた。ベッドの隅に腰掛けるネルには、メッツェの表情は分からない。しかし、少しばかり悲しげな声をしているように思えた。

「フォトン・アクションは、『奏世の力』の源。世界を救うため五つに分裂した『銀の乙女』の魂のうち、女神アストレアの手元に残った、最後の魂に与えたもの、それがフォトン・アクションだ」

「メッツェさまは、どうしてそれを知っておられるのですか？」

こわごとと、青年の背中に問いかける。すると、メッツェは以外にも、悲しげな顔でちらりとネルに振り返った。

「君には本当につらい思いをさせた。申し訳なかった。君を育ててくれた、父君と母君のこと、そして妹君のことはとても残念だ。君をここに連れてくるため、黒衣の騎士団を使うようライオット閣下に進言したのは、私だ」

悲しげな目じりと、その言葉はネルを驚愕させた。息を呑み、全身に悪寒が走り抜けていくのを感じながらも、揺らぐ視界を必死にメッツェに合わせ続けた。

「約束の日が訪れる前に、君にここに来てもらう必要があった。十

年前の戦役で、ライオット閣下が大恩ある彼らなら、迅速に君を連れてきてくれると思ったんだ。そのために、ギャレットがラクシャ村を滅ぼすなどと言う愚かな行為に及ぶなどとは、思っても見なかった。それは私の不徳とするところだ」

「あなたが、父や母、メル、それに村の人たちを殺したわけではありません。ただ、一つだけ、教えてください……、わたしは何のために、お城に呼ばれたのですか？」

ネルは謝罪の言葉を口にするメッツェから視線を落とし、美しいカーペットの毛並みを見つめた。

「世界を変えるため、と言えば君は信じるだろうか？」

メッツェも再び視線を窓の外に向けた。シオン次期国王の即位式を迎え、十年近く暗い話題ばかりだった、城下のものたちにとって、久々の明るいニュースだったのだろう、夜景はいつになく光り輝き、その光が踊っているかのように見える。

「この世界はとても美しい。風と土と水と火、四つの精霊の恵みが、大地に潤いを、緑に光を、海原に慈しみを与えている。しかし、その反面で、世界は長い間、人々によって争いが絶えない。ヨルンの悲劇はその頂点と言ってもいい。だが、二百万もの命が失われてなお、争いは終わらない。君がハイゼノンで見たものは、その一端に過ぎないのだ」

その言葉に、ネルの脳裏に、ハイゼノンでの出来事が蘇る。目の前で次々と死んでいく人たち、メルの顔、暴発する力、凶刃に倒れるアルサスの手のひら。あれは、地獄のような出来事だった、それが、一端に過ぎないと、この青年は言うのだ。

「人は、分かり合えない生き物だ。己の価値観がすべてで、それ以外の価値観に触れることが出来ない、とても不器用な生き物だ。だから彼らの価値観は歪を生む。時としてそれは、諍いとなり、争いとなり、戦となる。そうして、不幸を目の当たりにしても、分かり合うことが出来ない、相手をこの世からけしてしまいうまで分かり合えない。永遠にその繰り返しが続き、いまやこの美しい世界は疲れ

きっている。疲れた世界が天変地異や飢饉を引き起こしていることは、君も旅の途中でつぶさに見てきただろう？」

「はい……。だけど、それと、わたしに何の関係があるのですか？ 銀の乙女って何なんですか？ 奏世の力って！」

ネルが問いかけると、メッツェは少しばかり肩を震わせて苦笑した。そして、窓辺から離れると、何を思ったのかこちらに歩いてきて、ネルの隣に腰掛けた。

「質問が増えている……。いや、無理もないか。だが、真実を知れば、君は選ばなければならぬ」

「選ぶ？」

戸惑うネルの手を、メッツェはそっと取った。心の底から暖かな手。どうして、この人の手は、アルサスと同じような手をしているのだろうか……。

「つまり、極端な話をすれば、世界を救うか救わないか。平たく言えば、誰の手をとるか」

メッツェの言っていることの意味はよく分からない。だが、メッツェの口から語られる、おおよそ真実と疑いようなない上に、あまりに途方もない話は、ネルを更に戸惑わせた。

どのくらい、時間が過ぎただろう。メッツェは一通り話し終えたと、もう一度「世界を救う、それが銀の乙女に与えられた使命」だと付け加えた。

その折をちょうど見計らったかのように、部屋のドアがノックされる。メッツェが「誰だ」と返せば、扉の向こうから聞こえてくるのは、メイド長の声だ。

「即位式のお時間です。ライオットさま言いつけの支度がありますので、殿方は退室していただけますでしょうか？」

ひどく淡白で、事務処理のような喋り方だが、わずらわしさはない。メッツェは「分かった」と返事を返し、ネル傍から立ち上がった。

「ネル……約束の日は今宵、即位式の会場で。そのとき、君が正し

い選択をすることを、私は信じている」

メッツェはそう言うと、化粧道具やアクセサリを載せたカートを押すメイド長と入れ替わりに、このお姫様の部屋を後にした。ネルは、口を真一文字に結びつつ、メッツェの背中を見送りながら、そつと呟いた。

「世界を変える力……」

53. 悲しみのネル（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せ下さい。

54. 王位継承即位式

中央塔の舞踏の間。飾り窓に、いくつ者きらびやかなシャンデリア、赤いカーペットが華を添える舞踏の間の奥にある謁見の間と、それをしきる扉を開け放てば、縦に細長い、式典会場が出来上がる。その広さと言ったら、走り回っても剣を振り回しても、有り余るほどである。しかも、舞踏の間の入り口に立つと、謁見の間の一番奥にある、一段高い玉座は豆粒ほどにしか見えないのだ。

そんな式典会場に、人々が集まる。千人は下らない祝賀客である。しかも、普段では見ることもかなわないそうそうたる面子。まず、玉座に一番近いところには、センチ・レーバン各地から集まった諸侯。無論、反乱を起こしたファレリア公や、逮捕されたハイゼノン公の姿はないものの、八百諸侯と呼ばれるほどたくさん諸侯がこの国にはいることを、改めて見せ付けられる。

その後ろに並ぶのは、ガモーフ神国からの使者と、ダイムガルドの高官たち。敵国の人間ではあるが、現在は停戦協定を結んでいる。表面上は友好の印として、センチ・レーバンに新たな国王が即位することを祝っている。だが、内面ではやはり、形だけの祝賀ということなのか、それぞれの間に、言い知れぬぎすぎした空気が流れていた。

そんな三国の要人の更に後ろに参列するのは、ギルド連盟の主催者たちである。ギルド・リッター、ギルド・マーチャント、海運ギルドなどをはじめとする、主要ギルドから、小規模ギルドの主催者たちまで集まっている。彼らとしては、ギルド連盟と王国の間柄が、とても友好的であることを示す、パフォーマンスの意味も込められていた。

ただひとつ、魔法使いギルドからだけは、主催者たる魔法学園校長の姿はなく、その名代としての幹部と一部の学生が参列していた。それには、ルミナス島で起きた、ガムウ事件が関与しており、魔法

学園校長の姿がないのは、彼らなりの意思表示でもあるのだが、それを知っているものは少ない。

各来賓たちの思惑や感情が渦巻く中、伝統に則って、アトリア連峰の上に月が昇る時刻を待ち、ついに次期国王の即位式がしめやかに始まった。

即位式と言っても、戴冠の儀式自体は、夕刻のうちにすでに済ませてある。これには、王家のものだけが出席を許されており、各国の来賓が出席する式典そのものは、どちらかと言えば「お披露目」の意味が強かった。

「おお、あれが、シオン・コルネ・レーバンさまか！」

「聞いていたよりも、幼い」

「しかし、幼いながらに、すでに気品を備えられている」

壇上に、ウェーブがかった栗色の髪をした一人の少女が姿を現すと、参列する来賓たちは口々に囁いた。それもそのはず、大衆の面前に、シオン・コルネ・レーバンが姿を見せるのはこれが初めてのことだった。噂だけなら、民間にまで流布している。しかし、見ると聞くとは大違い。シオンと言う名から、その次期国王たる子どもが少女であることを想像した者は多くはないだろう。センチ・レーバンでは、シオンと言う名は本来、男子につけられる名なのだから、無理もない。しかし、その名にそぐわぬ少女は齡十一歳の幼さに、可憐さと王家の女性ならでわの気品を兼ね備えていた。

そして、人々が目を奪われたのは、きらびやかなドレスと、輝きを放つ王冠である。ドレスは、先代国王の妻であり、シオンの実母である后が愛用していた純白のドレスを、まだ幼いシオンに合うよう、仕立て直したものである。ルリボシタテハ蝶の繭から採られた絹糸は、真っ白に透き通り、色あせたりはしない。

また、王冠は新たに作られたものであり、それこそが次期国王の象徴でもあった。金の細工には、色とりどりの輝きを放つ宝石がちりばめられている。中でも一際、人目を引いたのは王冠の中心で燦然と輝く、まだら模様の宝石である。センチ・レーバンでしか採る

事の出来ない、とても希少価値の高い宝石だ。

「センテ・レーバン王国、第五十五代国王陛下、シオン・コルネ・レーバンさまの御前である！」

玉座に越しかける少女……シオンの隣に立ち、皆の平伏を促すのは、王国宰相ライオット・シモンズ。整えられたカイゼル髭は一つになく、尖っていた。まさに、それは、センテ・レーバン王国での、ライオットの権勢が頂点を極めたがごとくであった。

ライオットの即位式に際しての口上が終わると、来賓の者たちは、一人ずつ玉座の麓へ歩み出て、跪いてはお祝いの言葉を重ねる。まずは名と身分を名乗り、「このたびは、この良き日に、シオン陛下がご即位なされましたことを、お喜び申し上げます」といった型どおりの文句は、式典会場を右へ左へと抜けていくばかりである。

それに対し、「ありがとう」と子どもらしい口調で述べるシオンは、どこか空ろな顔をしていた。可憐な顔に似合わぬ、焦点の定まらない瞳。眠たいわけでもないのに、口調も確かなものではなく、まるで人形が賛辞に礼を述べているかのようだ。

来賓たちは皆、シオンのぼんやりとし心ここにあらずといった姿に、疑問符を浮かべかけたが、武器を手に式典会場を護る、親衛騎士団や、なにより壇上から見下ろすライオットの、蛇のような瞳に圧倒されて、その口を噤んだ。

肅々と、来賓代表者の賛辞が続く。そんな参列者の最後尾、背が低く、シオンの姿さえまともに見えないまま、やきもきしている少年が一人。丸ぶちの眼鏡に、切りそろえられた前髪、身の丈よりも大きなとねりこの杖を手にした少年……ルウがやきもきしているのは、なにもシオンの姿を見ることが出来ないからでも、形式的な即位式典に退屈しているからでもなかった。

自らの前に立つ、ナタリーが、いつその懷から短刀を取り出し、シオンを殺そうとするのか、気が気ではなかった。ルウは式典の間ずっと、ナタリーの制服のすそを握り締めていた。ぎゅっと強く掴んでいると、何度も「やめて」「離して」とナタリーに叱られたが、

その手を離せば、ナタリーは今にも飛び出していった、センチ・レーバンの新国王を殺めるような気がしてならなかった。

すべては祖国ガモーフのため。優等生のジャレン・ジャラ率いる「エルフォードの会」はそう言ったが、ルウにはどうしても納得が出来なかった。ナタリーたちがしようとしていることは、悪いことだ。人の命を奪うことは、人殺しと同じだ。たとえば、「ガモーフを護るため」と大義名分を口にしたところで、それはハイゼノン公が街の平和を護るために、貧民たちを襲ったこととなんら変わりはないだろう。殺される側の心情を考えれば、すぐに分かりそうなものである。

だが、ナタリーたちにも譲れないものがある。その想いが噴出したのが、ルウ不在の内に起きた、ガモーフ人学生の自殺事件であったとしても、一番ルウが悲しく思うのは、ナタリーが人殺しになる覚悟を決めていることだった。

だから、手を離すことが出来なかった。本当は、アルサスがネルの手を握るように、自分もナタリーの手を強く握っていたい。そうすれば、もっと確実に、ナタリーの戦意を挫くことが出来るかもしれない。でも、そうできないのは、ルウが、どんなに生意気な態度をとったり、大人に対して物怖じしない子どもであっても、純情なところがあるということなのだ。

せめて、今すぐにでもナタリーとセンチ・レーバンの人たちが、分かり合うことが出来たら。そう願う気持ちは、ナタリーの制服を掴む手のひらをよりいっそう強くする……。

『女神アストレアさま、どうかお助け下さい!』

やがて、参列者からの祝いの言葉が終わる。最後に順番が廻ってきたのは、魔法使いギルドである。幹部の代表者が祝辞を述べるべく、玉座の方へと歩み出る。エルフォードの会と、ルウもその後に従った。そして、玉座にちょこんと可愛らしく座るシオンの前まで来ると、幹部に倣って、エルフォードの会のメンバーも、みな跪いた。

「この良き日に、シオン様が新たな国王陛下となりましたこと、魔法使いギルド一同、ここよりお喜び申し上げます。こちらに控えます若者たちは、我らがルミナス魔法学園の学生にして、もつとも優等な成績を収めている者たちにございます。いずれ、この者たちが世界に羽ばたいた際、何卒、お引き立て願いますよう、シオン陛下、ならびにライオット閣下にお願います所存にございます」

幹部の慇懃な挨拶とともに、返ってくる言葉はやはり、人形のよ
うなシオンの「ありがとう」の一言である。ルウはその違和感に
気づき、ふと王冠の中央にあしらわれたまだら色の宝石に目を留めた。
『あれは……レパード!』

嫌な予感が脳裏を駆け抜けていく。と、そのときである、すつくと立ち上がったのは、ジャレン・ジャラであった。主席卒業を控えた優等生らしい理知的な顔に、一瞬恐ろしいものが宿るのを、ルウは見逃さなかった。「あっ!」と思う間もない。それどころか、シオンの御前で、ナタリーの制服のすそを手放してしまったことをひどく後悔した。

「われら、大魔法使いサクラ・エルフォード様の意思を継ぎ、祖国のための剣となるっ!」

ジャレンの言葉に合わせて、他のメンバーが制服の懷から、教鞭のようなステッキを取り出した。先端にはミスリルの欠片がはめ込まれた、簡易魔力増幅装置だ。彼らはそれを振り上げると、いっせいに魔法の言葉を唱えた。

「騎士団っ!」

ライオットが危険を察知するのは、思ったよりも早かった。狡猾な政治屋である彼らしくない振る舞いだったが、それも空しく、魔法ステッキの先端から現れた火の矢、土の矢がまるで生き物のように、式典会場の天井に踊った。

ガラス作りのシャンデリアが豪快な音を立てて割れる。粉々になったそれらの破片は、まるで冬の空を飾る雪のように、来賓者たちや騎士団の頭上に降り注いだ。それが雪だったら、どれほど良かった

たであろう。幸いだったことは、ガラスが細かい破片となったおかげで、たいした怪我人が現れなかったことだ。

しかし、それでも式典会場内に悲鳴と混乱が巻き起こる。女たちは驚き泣き叫び、男たちはうろたえる。むしろ、それを狙って、エルフォードの会のメンバーは魔法を天井めがけて撃ち放ったのだ。更に言えば、玉座に目かけて魔法を放てば、玉座に仕掛けられた魔法装置による魔法障壁が展開し、彼らの魔法が防がれてしまうことは明白だった。

だから、シオンの命を奪うには、直接その手を下さなければならぬ。魔法を使うのではなく、己が手でシオンの命を奪わなければならないのだ。そう、その役目を担うのが、ナタリーだった。小柄で足の速い彼女に、その任が任されたのは、至極当然といえば当然のことだった。

シャンデリアの碎け散った破片が降り注ぐその瞬間、音もなく立ち上がったナタリーは、ツインテールに結んだ髪を揺らしながら、懷に手をしのばせ、玉座の段を駆け上った。

「ダメだ、ナタリーっ!!」

どうして、そうしようと思ったのか、それはルウにも分からなかった。ただ無我夢中で立ち上がったルウは、心のどこかで恋している少女の名を叫びながら、走り出した。とねりこの杖を投げ捨てて、ナタリーを追い抜き、玉座の前で両手を広げて踵を返す。

どんっ！ 強い衝撃がルウの胸に突き刺さった。一瞬、式典会場が沈黙に変わる。まるで、時間が止まったかのように、降り注ぐシャンデリアの音さえも、消えうせた。

「ナタリー、ボクの好きな君に戻って」

ルウの声はとても穏やかだった。ナタリーは何が起きたのか、理解出来ず、少しばかりうろたえながら後ずさりした。そして、自らの手のひらを見る。真っ赤に血で汚れている。しっかりと握っていたはずの短刀が見当たらない。顔を上げ、目の前に立つルウを見る。すると、彼の脇腹に短刀が突き立てられていることに気づく。

そして、すべて理解した。

ルウがその幼い身を擲^{なげ}って、シオンを庇^{なげ}ったのだ。ナタリーの短刀は、その殺意の矛先を向けた、憎い相手であるセンテ・レーバンの新国王シオンではなく、いつも心配で気になって仕方なかった男の子、ルウの脇腹を突き刺していた。そう、突き刺したのは自分……。

「いやあぁっ！！ ルウっ！！」

自らの行いに恐怖したナタリーの、悲痛な声。それと同時に、脇腹を真っ赤に染め上げたルウは、血の気が失せていくような青い顔をしながら、その場に崩れ落ちた。

参列の人々は、自らの頭上に降り注いだシャンデリアの欠片を払うこともなく、泣き崩れる少女と、シオンを庇った少年の二人を見つめる。その空気を打ち払うかのように、叫んだのはライオットだった。

「ええい、騎士団！ 何をしておる！ 直ちにこやつらを捕まえろっ！！」

怒声がびりびりと式典会場に響き渡り、突然の事態にぽかんとしていた騎士たちが、弾かれたように鎧の音を鳴り響かせた。

再び会場に喧騒が戻る。参列者たちは、混乱を取り戻し我先にと、会場を抜け出そうとする。騎士たちは、抵抗を試みるジャレンたちをその槍と剣を振りかざし捕らえていく。ナタリーは血に染まったルウの体を抱きしめながら、泣き叫ぶ。ライオットは、壇上から忌々しげにその光景を眺めた。

その中で、ただ一人、シオンだけは空ろな目をしたまま、何の感慨も持たぬ人形のように、すべてを俯瞰する。

54. 王位継承即位式（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せ下さい。

55. 白き龍の目覚め

突然の出来事。それでも、ライオットが、騎士団の多くを会場に配置していた背景には、あらかじめ噂を耳にしていたからであろう。そういった意味では、ジャレンたちの突然の蜂起は、予測の範疇であり、青天の霹靂とは呼べなかった。

だが、ルウがシオンを庇い、自らの身を擲つなど誰が予想したのだろうか。事実、ナタリーが隠し持った短剣でシオンを突き刺さうものなら、その前に、玉座に仕込まれた魔法装置が働き、ナタリーは炎の矢で串刺しとなっていただろう。

つまり、ルウはナタリーとシオンの二人を守ったのだ。もつとも、そのことを、ナタリーもシオンも、ルウ本人でさえ気づいてはいない。ただ、ルウはナタリーに人殺しをして欲しくなかっただけなのだ。いつも生意気で、減らず口ばかり叩き、ことあるごとにナタリーと衝突しあっていた少年の、まさかの行動に、一番驚いていたのは、彼を刺したナタリー自身であった。

「ごめんなさいっ」

涙でくしゃくしゃになりながら、ナタリーはルウを抱きしめた。脇腹の傷口からは、赤くどろりとした血液が零れ落ちる……。だが、何故だか、ルウはほっとしたような顔で、ナタリーを見つめる。

「ナタリー、ルミナスに帰ったら、話したい事がいっぱいあるんだ。聞いてくれるよね？」

「うん。なんだって、聞くよっ。だから、死なないで、ルウっ!!」
ぶつかり合っていたが、ナタリーにとってルウという男の子はどこか心を許せる友達でもあった。そんな彼のことを刺してしまったのは、自分だ。はじめて、人を殺すことの恐ろしさを知り、同時に自分がジャレンたちにそそのかされて何をしようとしていたのか、何故ルウが自分をとめようとしたのか、そのことを理解した。

「ボクは死なない。だって神童だもん……」

根拠のないことを言っでは見せるものの、ルウの体からは生きる力が抜けつつあることを、ナタリーは感じていた。

「ええい、きさま！」

ジャレンや魔法使いギルドの幹部たちを捕らえた騎士団は、ついにナタリーの元にまでやってくる。

「ルウっ、ルウっ!!」

何度も、その名を叫んだが、新国王暗殺未遂の実行犯とでも言うべき、彼女は無情にも、ルウから引き剥がされた。

「メツツェ! あの花をこれへ！」

騎士によって壇上から引き摺り下ろされるナタリーと、虫の息となったルウを、ゴミ虫でも見るかのように蔑んだ瞳で見つめるライオットが、突然怒鳴り声を上げる。すると、玉座の後ろに控えていた、メツツェがすばやく壇上の裏手にある扉へと駆け込んだ。そして、ややあつて彼は、その手に一人の少女を引いて、再び姿を現す。目の覚めるような青いドレスと、銀色の髪に映える黄金のティアラを着けた少女……ネルである。

「ようこそ、センチ・レーバン王国へ、ベスタの天使『銀の乙女』よ！」

と、ライオットがメツツェからネルの手を強引に奪うと、その華奢な体を自らに引き寄せた。だが、当のネルは何も言わず、ただ空ろな目をしてぼんやりと会場を見つめる。目の前に、血を流して倒れるルウの姿があるというのに、何の感慨もなく、ただぼんやりと見下ろすだけ。その様は、玉座に腰掛けるシオンとよく似ていた。

「ご来賓の皆様、そしてセンチ・レーバン諸侯諸君! これより興ざめたこの即位式に、ひとつ余興をお見せいたそう! お国へ帰られるのは、それからでも遅くはあるまい!!」

ライオットの言葉に、慌てふためきながら会場を脱しようとしていた参列者たちを止めるべく、騎士が出入り口を硬く封鎖した。

やむなく行き場を失った参列者たちの視線は、壇上のライオットへ。ナタリーたち、騎士に拘束された魔法使いギルドたちの顔も、

ライオットとネルに釘付けにされる。何が始まるのか、固唾を呑む中、玉座の脇に人の背丈の倍はあろうかと言う巨大な石版が、ローブに身を包んだ技術院の研究者たちによって、運ばれてくる。

「ううっ……あれは、遺跡船にあった、石版？」

ルウは流血の止まらぬ傷を押さえながら、その石版に目をやった。だくだくと流れ出す鮮血に、もう視界もぼやけてきてはつきりとはしないが、それでもライオットが運ばせてきたその石版に見覚えがあった。そう、エントの森の奥深くに眠る「遺跡船」と呼ばれた遺跡の中枢にあった、石版と同じような形をしている。

「これは、我ら宰相府技術院が、古代遺跡の超技術を研究し開発した、『遠見の鏡』にございます。その名のとおり、ここではない、どこか遠くの間所を映すことが出来る鏡にございますっ！！」

研究員の一人は、多少自らの技術を自慢するかのように、やや抑揚した声でそう言うと、石版の隅にある小さな突起を押し込んだ。すると、石版が俄かに輝き、そこに「ここではない」場所が移された。

月の浮かぶ海に、ぽっかりと浮かぶ島。その島には、まるで要塞をおもわせるような、堅牢な城がそびえる。それが何処なのか、会場の多くが察したが、それよりも早く、ルウやナタリーは「ルミナス島」であることに気づいた。

「して、余興とは何でございませうかな、宰相閣下！」

諸侯の一人が、石版に映し出された映像に目を奪われながら、大きな声で問いかけた。ライオットは、おもむろに口元をにやりと歪めた。

「今宵！ 我がセンチ・レーバン王国は、白き龍を手に入れる！ 新たなこの国の王、シオン陛下の御世が未来永劫となるため、この世界が、センチ・レーバンの支配によって、磐石なる平和を築くため！」

高らかな宣言とともに、会場にどよめきが起きる。「白き龍」……センチ・レーバンの人間ならば多くの人が知っている、伝承に

伝わる神の使い、もしくは神そのものではないかと言われる存在だ。それを信仰の対象としている者も少なくはない。また、ベスタ教の国であるガモーフでも、廃れたとはいえ、白き龍の伝説が残っているし、ダイムガルドにもそれに似た言い伝えがある。

その伝説とは……。

『白き龍が目覚めるとき、この世界に、無限の安定と永遠の平和が約束され、世界から、憎しみも悲しみも、争いも飢えも、消えてなくなる……。それは、神とヒトが交わした、悠久の約束である。』

口伝として伝わる伝説には、尾ひれのついたものも存在するが、おおむね概略としてまとめるならこうだ。しかし、それと石版に映し出された、ルミナス島の光景に何の関係があるのか、それは誰にも分からなかった。むしろ、一国の宰相が、夢物語に近い伝説を口にすることが、滑稽にさえ思えてくる。そのため、来賓の多くが小首をかしげていると、ライオットはそのある意味アホ面を眺めて、愉快そうに笑う。

「白き龍は、救いをもたらすものではない！ 絶対なる神の威光を以ってして、世界を支配する！ そして、ここにいるベスタの天使、銀の乙女は白き龍を蘇らせることの出来る唯一の鍵！ ご照覧あれ、われらがシオン陛下に刃を向けた、愚かなる魔法使いどもの末路をなっ！！」

そう言い放つと、ライオットはネルをにらみつけた。

「さあ、銀の乙女よ、神とヒトの約束をいま我が手に！」

人形のように空ろな目をしたネルは、少しだけ唇を動かすと、何事か口にした。はっきりと聞き取れないまでも、その言葉の意味が分かるものなどいなかっただろう。ネルが口にした言葉、それは確かに魔法言語と呼ばれる、言葉であったことを、ルウだけが聞き届けていた。

そのときである。固唾を呑む参列者たちをかき分け、誰かがこちらに走ってくる。

騎士？ ううん、違う。あれは……。

「止めろっ、ネルーっ!!」

ぼやけた視界の中で、ルウは真紅の瞳を目に、聞きなれた声を耳にした。

騎士の鎧を着込み、式典会場を警備する騎士団に紛れ込んだまでは良かった。騎士の鎧はすべて共通のデザインをしており、皆銀色の鎧である。そのため、アーメット（兜）を着用すれば、誰が誰であるか認識することは難しい。そのため、アルサスたちのことを疑う騎士は誰もいなかった。

即位式典は、肅々と進む中、アルサスたちのいる場所から玉座のシオンや、ライオットの顔まで見ることは難しかったが、何とかして近づき、そして、脅しを以ってしても、ライオットに「白き龍」を蘇らせることを思い留まらせなければならない。

この聴衆の面前でライオットに剣を向けることは、無謀以外の何者でもない。ただ、ライオットを殺めるつもりは、なかった。たとえば、彼が腹の中で何を思い描いていたとしても、それを止めるためにセンチ・レーバン宰相を殺せば、そのダメージはアルサスにはなく、王国そのものに与えられることとなることは必至だった。

それ故、ライオットを止める手立ては、剣をかざし、そして脅し半ばに説得する他なかった。もちろん、ライオットが脅しに屈さなかったとき、アルサスには最後の選択が迫られる。その選択こそが、アルサスが迷い続けたことの原因だった。だから、アルサスたちが出て行くタイミングは重要だった。来賓の参列者たちが、祝辞を述べ終えた後、おそらくそこにネルが連れてこられるはずだ。白き龍を蘇らせるために。そのときこそ、アルサスたちが、剣を手に玉座へ駆け上るタイミングだった。

しかし、魔法使いギルドの学生が蜂起し、ルウが少女に刺された瞬間、アルサスは駆け出そうとした。はぐれたと聞かされていたルウが、なぜ魔法使いギルドの幹部や学生たちとともにいるのか、それは良く分からなかったが、そんなことはどうでもいい。むしろ崩

れ落ちたルウのことが心配で仕方がなかった。

それを止めたのは、フランチェスカだった。アーメットのおかげで、表情までは読み取れなかったが、アルサスの腕を掴み制止するフランチェスカの手には、力が籠っていた。まだ、行ってはいけない。とアーメットのスリット越しに、少しでも除くフランチェスカの黒い瞳が、アルサスに言っているかのようだ。

アルサスは拳を握り締め、ぐっところえ、ルウの無事を願った。

そうして、ライオットの命を受けた騎士たちが、ばたばたと魔法使いギルドの幹部や、蜂起した学生たちを次々と捕らえられていった。その手際のよさは、さすがはセンチ・レーバンの騎士である、とさえ思う。しかし、彼らが拘束された後、そのような感慨をはさむ余地もなく、ネルがついに壇上に姿を現した。

だが、様子がおかしい。

そう思ったのは、アルサスだけではなかった。フランチェスカとクロウにも、ネルの瞳が空ろで、どこか焦点の合わない顔をしていることは分かった。

そんなアルサスの目に飛び込んできたのは、「遠見の鏡」と呼ばれる石版である。そこに映し出されたルミナス島の光景。そして、ライオットの高らかなる宣言。

アルサスはフランチェスカの腕を振り解くと、参列者たちの驚きと悲鳴を掻き分けて走った。走りながら、アーメットを脱ぎ捨て、腰に帯びた騎士の剣を引き抜く。

「止めろ、ネルーっ!!」

叫び声とともに、壇上へ走ってくるアルサスを、ライオットが見逃すはずもない。すぐさま手を挙げ、ネルの呪文を途切れさせぬよう、騎士団に指示を送る。まるでライオットの手足のように騎士団たちは、アルサスの行く手をふさいだ。

「邪魔をするなっ!!」

と、アルサスに言われたくらいで、道を開ける騎士団ではない。剣を構え、アルサスに切りかかってくる。

「アルサス、騎士さま!!　ここはわたしに任せて、二人はネルのところへ!」

背後から追いかけてきたフランチェスカが、槍の穂先にかけた鞘を取り外し、騎士団に飛び掛った。華麗な槍さばきは、騎士の腹や頭を叩き、次から次へと蹴散らしていく。アルサスとクロウ、互いに頷き合わせて、壇上目指して、駆け出した。

「道を開けろっ!　我が名は、親衛騎士団小隊長クロウ・ヴェイル!　邪魔立てするなら、容赦はしないぞ!」

クロウが現れたことで、騎士たちの顔色が変わる。少しばかりうるたえ、隙を見せた拍子に、アルサスとクロウは、雷が駆けるがごとく、騎士たちの包囲を潜り抜け、壇上へ駆け上がった。

「アルサス……」

壇に上る階段の中腹、息も絶え絶えなルウの瞳が、いつになく弱弱しくアルサスを見つめる。アルサスはルウの元に駆け寄ると、その体を抱き起こした。

「しっかりしろ、ルウっ!!　傷はそんなに深くねえっ。こんなとこで死んだら、許さないぞっ!」

「クロウさんと同じ騎士の恰好、全然似合わないね……」

心配そうに覗き込むアルサスの気も他所に、ルウは冗談交じりに、アルサスの姿を見て言った。脇腹を血に染めてなお、冗談交じりの減らず口に、アルサスはなんだかいたたまれない気持ちになった。

「傷口をしっかりと、押さえろ。まったく、無茶なことしやがって!」
「うん……。あのね、ボクもアルサスとネルお姉ちゃんみたいに、手をつないでおきたかったんだ。ナタリーの手を」

そっと、ルウの潤んだ視線が、壇の麓で騎士に拘束されたナタリーの方に向く。ナタリーはうな垂れ肩を震わせながら、ルウの視線には気づかなかった。

「ナタリーは悪くないんだ。だから、許してあげて」

「分かってる、分かってるからそれ以上喋んな!」

アルサスはそう言うと、傷口を押さえるルウの手に、自らの手を

そつと添えた。そして、顔を挙げ、きつくライオットを見上げ、睨み付ける。

「ライオット・シモンズ……」

「おやおや、これはこれは、アルサス・テイル殿ではありませんか」辛辣なアルサスの視線を軽く受け流したライオットは、悠然と構えた。そして、アルサスの傍で剣を構えるクロウに眼をやると、少しばかり忌々しげに、

「クロウ・ヴェイル。貴様はもう少し利口な男だと思っていたのだがな。誉れ高きセンチ・レーバン騎士であるを捨てて、恩ある私に楯突くとは、愚かしきは、父親と同じと言うことか」

と、毒づいた。無論、クロウの胸の中に怒りが湧いたのは言うまでもない。だが、クロウはその怒りをコントロールする術を知っている。

「父を愚弄するのは、お止め下さい。私は、あなたが間違っていると感じたから、アルサスに手を貸したまで。私は騎士の誇りも捨てていなければ、親友のアルサスを見捨てたりもしない」

冷静に返すクロウ。

「それを『恩を仇で返す』と言うのだ。もうじき、銀の乙女による儀式の言葉が終わる。そうしたら、貴様の処分と併せて、ヴェイル家はお取り潰しとする。それまで邪魔をせず、そこで大人しくしておくがいい。そのの、ダイムガルドの女もだ！」

ライオットの視線の先、騎士団に囲まれた、フランチエスカはアルサスが壇上へ向かったのを見届け、多勢に無勢を悟ったのか、武器を下ろしていた。

「儀式が終われば、世界が変わると本気で思っているのか？ 奏世の力……いや白き龍は人間の手に負えるものじゃない」

アルサスはライオットに言う。しかし、その言葉がライオットの耳朵を打つことはなかった。それどころか、あきれたような物言い

で、
「フェリスの戯言をまだ信じているとは……。つくづく、母子とも

に無能なことよ」

と、その蛇のような目を向けてくる。

「母さんの言ったことは本当だ。あんたが、それを信じるか信じないかは別として、シオンにあんた作った負債を背負わせたくはない！」

「負債？ いや、莫大なる国家の財産だ。これより、何千年も、この国は世界をあまねく支配し続ける。白き龍をもってして！ 安心れるがいい、我が忠誠はシオン陛下にとどいておるぞ……」

にやり、ライオットの顔が歪む。だが、玉座に座る、まだ年端も行かぬ少女は、国王としての威厳を放っていると言うよりも、ただ、そこに座らされている人形のようにでしかない。しかも、アルサスとライオットの会話に耳を傾けるでもなく、ぼんやりとしているのだ。もくもくと、魔法の言葉を唱え続け、白き龍復活の儀式を行うネル。そして、感情そのものを失ったかのような顔をするシオン。

どうして、二人の少女がそのような顔をしているのか、アルサスには心当たりがあった。

ネルが額に着けるティアラと、シオンの被る王冠には、「レパード」が散りばめられている。レパードの希石……いや、魔法装置とすべきか。大ききこそ、ガムウの額に埋め込まれていたものとは小さいが、それでも人間一人、それもか弱い少女たちを操るには、十分だった。

怒りがふつふつと湧いてくる。自己中心的な解釈ですべてを動かすこの男のことを、アルサスはついぶん昔から嫌っていた。顔を合わせたことがあるのは、二、三度だが、それでもその度に、ひとの神経を逆なでる。

「忠誠心？ シオンの、ネルの心を操っておいて、忠誠心なんて、反吐が出るっ。あんたの望みなんだ！？ それで、どれだけの人が死ぬ？」

「我が望みは、この国が未来永劫繁栄し続けることだ。だがその過程で死ぬものたちは、悲しむことなどない。我がシモンズ家の千年

王国のため、礎となることを喜ぶべきなのだ。あなたも、そのようになりたくなければ、そこで指をくわえてみているがよろしい。この記念すべき瞬間を……！」

ライオットの言葉にあわせ、ネルは魔法の言葉の結びを告げる。その言葉の意味は、魔法文字や言語に詳しくないアルサスにも分かる。

『すべてを破壊せよ！』

「ダメだ、ネルっ！！ やめろーっ！！」

絶叫にも近いアルサスの声が、式典会場を貫いた。その瞬間のことだった。「遠見の鏡」に映し出されたルミナス島が、眩いばかりの白い閃光に包まれる。俄かに、諸侯や来賓たちからどよめきが起きる。悲鳴もわずかに混じっている。

何故なら、その光は皆の心に刻まれ、拭い去れない過去の記憶として脳裏にこびりついているからだ。そう、諸侯や来賓だけでなく、ここにいる多くの者たちが、直接それを目にするのは初めてだったとしても、それが間違いなく、あの光であることに気づいていた。

十年前……。三国の決戦の場となった、ヨルンの平原を包み込み、一瞬のうちに、二百万人もの将兵をしに至らしめた、白い光。

そう、それこそが、白き龍と呼ばれるものであった。

55. 白き龍の目覚め（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せ下さい。

56. シモンズ家の宿願

ルミナスの人々は逃げ出す暇もなかった。それどころか、自分たちの身に何が起こしたのかさえもわからぬまま、光の中で塵となったのだ。おそらく、即位式に参列しなかった学園の校長も、ルウと机を並べる学生たちも、あの世話好きな食堂のおばさんも、みな塵となって消えた。島ひとつが、何千人の人々が、一瞬の閃光で消え去る。それをどう表現したらよいのか、それは誰にも分からない。ただ、光が収まり、月明かりの夜空にもくもくと上がる煙だけが、そこに、ルミナスという島があつて、そこに住んでいる人たちがいたことを、静かに、悲しく物語っていた。

「これぞ、白き龍の力！ この世のすべてを支配する。これより、宣言する。我が王国にたてつくものは、悉く白き光によって滅ぼされるだろう！ さあ、いかが致すかな、参列者の皆様がた！ 我に忠誠を誓うか、それとも滅ぼされるか！？」

高らかな笑い声とともに、宣言するライオット。参列者たちは一瞬何が起こしたのか理解に苦しんだ、だが、その高らかな笑い声に、眼前の光景の意味を理解し、皆一様に、戦き、怯え、うろたえた。

センテ・レーバン王国が、比類なき力を手に入れた。それは、新たな戦争の始まりを意味していると同時に、センテ・レーバンに適う国はないということを表している。何故なら、ヨルン悲劇は、ある種誰かが胸に抱く、トラウマなのだ。

あの悲劇が再び繰り返される。いや……もう繰り返された。魔法と科学の最先端であり、ギルド連盟でも、もっとも大規模な魔法使いギルドの根城であるルミナス島が、消え去ったのだ。大勢の魔法使いの命とともに。

「おおっ！ 偉大なる、ライオット閣下、万歳！ 万々歳！」

ルミナスの二の舞になりたくない諸侯たちは、我先にと歩み出て、シオンの即位を祝したときよりも声高に、壇上のライオットに賛辞

を述べる。その声は、壇の中腹にて、ライオットをにらみつける、アルサスとクロウの背中を通り越して行った。

「われら、ギルド・マーチャントは、これから、センテ・レーバン王国に、忠誠を誓いまする！」

ギルド連盟も口々に声を上げる。ただ、「遠見の鏡」に映し出されたルミナスの光景に愕然とする、魔法使いギルドの面々を除いて彼らとしては、怒りよりも、目の前の光景を信じられなかったのだろう。鏡に映るものが、魔法の作り出した幻で、すぐにでも、ルミナスの無事を確かめたいが、式典会場の出入り口は、ライオットの手足となった、親衛騎士たちによって、固く封鎖されている。

そんな中、怒りの声をあげたのは、ガモーフとダイムガルドからの使者である。彼らは、それぞれの国の王の代弁者として、この場を訪れていたのだ。それが、とんでもないことになってしまったと驚くと同時に、外交者としての危惧を露にした。

「これは、我々に対する最後通牒ですか？」

褐色の肌をした鋼鉄帝国の使者が叫ぶ。それに追従せんと、黄色の肌をした宗教国家の使者たちも、まるでライオットを糾弾するかの様な口ぶりで、

「やはり、ヨルンの悲劇を起こした張本人は、センテ・レーバンであつたか！？ ガモーフ神王さまは、このようなこと、許されませぬぞー！」

と、怒鳴った。彼らは、国家から遣わされた特使。その権威は国そのものと同様であるという自負から、はつきりと非難した。だが、ひと度、ライオットが右手を上げれば、親衛騎士たちが槍や剣を振りかざす。祝いの席ということで、武器を持ち込んでいない、参列者たちは丸腰に近く、親衛騎士の武器が妖しく光れば、たちどころに「ひっ！」と悲鳴を上げてくちを噤んでしまうことを、ライオットは分かっていた。

なんと、情けないことか……。ひれ伏し、おべっかを口にする者。ひどく素直に恭順する者。武器を見ただけで悲鳴を上げるもの。あ

まりに滑稽な姿に、ライオットは人知れずほくそ笑んだ。

「これで、我がシモンズ家の宿願が果たされる……」

今より、百年以上のことである。かつて、この国がまだ群雄割拠の時代にあったころ。センテ・レーバンの地には、諸侯が犇いていた。シモンズ家は、いち諸侯として、現在の王都より遙か北方、夏になっても凍りに閉ざされた場所にあった。やがて、センテ・レーバン王国は、ファレリア、ハイゼノンといった大諸侯を傘下に収め、まもなく、シモンズ家の領内へと進軍を始めた。当時、勢いづくセンテ・レーバンによって諸侯に与えられた選択肢は二つ。「滅亡」か「恭順」か。武力を背景に統一を掲げるセンテ・レーバンを前に、ライオットの先祖に当たる、シモンズ公は恭順を良しとはせず、これに立ち向かった。

だが、その強大となった軍隊を前に、シモンズ家はあえなく敗退し、投降することを望んだ。しかし、ファレリア公とハイゼノン公は自らの力量もわきまえず徹底抗戦を掲げ、徒に領民を苦しめたとして、シモンズ家の投降を許さなかった。

ところが、時の国王は、シモンズ家の所有するレパード研磨の技術を欲し、滅亡寸前のシモンズ家を救い、傘下へと入れることとした。そのときから、シモンズ家にとっては、屈辱の歴史が始まる。

センテ・レーバンが地方を統一し、八百諸侯を束ねる連合王国となり、シモンズ家はその大臣格として、歴代の王に仕えた。憎き敵である王国の禄を食む。このジレンマがシモンズ家の人間にある宿願を芽生えさせたことは、言うまでもない。

いずれ、シモンズ家の力でこの国を「千年王国」にする。そして、あまねく世界を導く者となるのだ。それが、戦争で死んだ故郷の領民や兵たちに対する、供養である。

それは、代を経て、ライオットまで受け継がれてきた、家訓でもあった。

しかし、センテ・レーバン、ガモーフ、ダイムガルドの三つの国の力は、いずれも伯仲しており、センテ・レーバンが世界を導く「

千年王国」になることついぞないと思われた。そんな繰り返される戦争の中で、ライオットは、一条の光を見た。今を遡ること十年の昔。ヨルン平原の真ん中で閃いた白い光は、当時宰相府の参謀官として、アトリアの本陣に構えていたライオットの目にも映った。

もともと、シモンズ領のあった、センチ・レーバン北部には、「白き龍」の伝説を真実だと信じる人間も少なくない。それは、ライオットも同じだった。そして、彼が目の前に現れた光と、伝説を結びつけたのは、ごく自然の成り行きだったと言ってもいいだろう。

ついに、一族の悲願を果たすときが来た。ライオットは、人知れずほくそえんだ。そうして、新たな宰相に就任したライオットは、ここ数年、あらゆる政治よりも、白き龍を手に入れることを優先させた。その結果がファレリア公の反乱に結びつき、ハイゼノン公にハイゼノンこそが世界の縮図と言わしめた、などとライオットは知る由もない。何故なら、秤にかけて一族の悲願を優先した彼にとって、白き龍を手にすることだけが、この国を支えると盲目的に信じてやまなかったからだ。

そうさせたのは、シモンズ家の因習だけではない。メツツェ・カーネリアが、彼に近づき、「白き龍」とベスタの天使である「銀の乙女」を結びつけ、より現実味を与えたからである。

白き龍を蘇らせることが出来るのは、銀の乙女が持つと言う、「奏世の力」だけ……。

ライオットは、メツツェを参謀官に引き立て、彼の言う約束の日、すなわちシオン王女の即位式までに、銀色の髪の少女、ネルを手に入れることに躍起になった。伝承にのみ伝わるとされる「白き龍」を用いて、王国に強大な力をもたらす。ライオットが果たしたことは、シモンズ家にとっての悲願だった。

そして、ルミナス島は、光の中に消え去った。

ルミナス島で失われた多くの命は、死んだことを喜んだりなどしない。だが、果たされることのない恨みや憎しみは、今この即位式典の会場で、驚愕と呆然の入り混じった顔をして、「遠見の鏡」を

見つめる、各国の幹部や、諸侯、ギルド連盟の人々に、恐怖という形で伝わった。

それは、十年来止まったままだった、三国の微妙な均衡を崩し、再び新たな戦争の呼び水となる。ライオットは、そのことを確信して、ルミナスを滅ぼしたのだ。例え、ナタリーたちがシオンを害そうとしなくても、すでに、ガムウ事件以降その標的は、ルミナス島に絞り込まれていたといっても、過言ではないだろう。

ルミナスの消滅をもって、シモンズ家の「千年王国」の幕開けとなる。最初から思い描いていたライオットの目標が、紆余曲折を経ながらも、ついにそのときを迎えたことに、ライオットはほくそ笑んだのだ。

だが、それは、ルウを抱きかかえるアルサスも耳に届いていた。「宿願だど？　そうやって、シオンから王位を奪い、この国の王になろうとでも言うのか？　答えろ、ライオットっ！！」

「それもいいでしょうな。白き龍の力を手にした私に敵う者など、この地上にはいない。ヨルンの平原で二百万の命を消し去った、この地上で最強の力。それを手に入れ、支配することが、世界を束ね、新たな時代を築くこととなる。愚劣なる人間には到底理解も出来ぬでしょう」

悠然と語るライオットの不遜な態度は、アルサスだけではなく、会場に集まる参列者にも向けられていた。その誰もが、「遠見の鏡」に映った光景に眼を疑いつつも、恐怖に戦き、同時にライオットを畏怖の籠った瞳で見つめている。

「自分が優秀だと思うのは、思いがりだっ。戦争を起こす人間こそ、愚劣だと知れ、ライオット！」

「これは手厳しい。しかし、戦争こそ人間の英知。知性を持たぬ野蛮な動物は戦争などしない。本能だけで生き、知性を持たぬものは己の主義のために争いはしない。人間は知性を持つからこそ、戦争をする。いや、戦争をしてこそ、人間本来の意義があるのだ。それは、神が与えたもうた、人間だけの特権だ。そして、それを手のひ

らで転がすことの出来る立場となった、私こそ、神と同義の存在。それを優秀と呼ばずして、なんと言うのですかな？」

立て板に水。そんな風に、アルサスには思えるほど、ライオットの考えとアルサスの考えは、根本からまったく違う。もしもライオットの言わんとすることが、一分でも理解出来たとしたら、アルサスは自分を呪ったであろう。しかし、幸いにも、自分はライオットと違うと確信できたことが、アルサスの手にする剣に力を込めた。

アルサスはちらりと、シオンの顔を見る。レパードの魔法装置に操られた、シオンは物言わぬ人形のようなのだ。

ごめん、シオン……！

アルサスは、心の中で念じて、シオンの緋色の瞳をしばらく見つめ、ルウをその場にそっと寝かせると立ち上がった。

「アルサス……？」

不安げな声が、足元から聞こえてくる。ルウの顔が青ざめているのは、苦しいからではなく、アルサスの意図を悟ったからだ。

「もうすぐ全部終わる。そしたら、医者のところへ行こう。お前を死なせたりはしない」

静かな声で、アルサスはそう言うのと、風のように壇上へと駆け上った。そして、ライオットめがけて、迅雷の剣を繰り出す。参列者から、驚きと悲鳴が持ち上がる。

アルサスが所持していた、「ナルシルの剣」に比べれば、騎士の剣は切れ味が心もとない。それでも、フルーツばかりを貪るひ弱な文官一人、斬り殺すのには、十分すぎるほどだ。そのひよろ長い体躯を、アルサスの剣が貫くまで、ほんの三秒もかからない。むしろ、壇上までアルサスの接近を許したのが、ライオットにとって死を意味していた。

「ライオットーっ！！」

迅雷の剣技は、すべて一瞬の一撃必殺の剣。しかし、なぜかライオットはうろたえたりなどしない。むしろこうなることさえも予測していたかのようなのだ。それでいて、死を覚悟しているわけでもなか

った。

パチン！ アルサスの剣がその切っ先をライオットの腹に突き立てる寸前、ライオットの指が鳴る。あらぬ方向から、一瞬の黒い風。その瞬間、アルサスの体が、俄かな痛みとともに宙に浮いた。何が起きたのか理解するまもなく、アルサスは、壇上の階段から転げ落ちる。

「アルサスっ！」

クロウの声に、階段の下まで転げ落ちたアルサスは、くまなく打った全身の痛みには耐えながら、剣を支えに立ち上がった。しかし、痛烈な痛みを発するのは、全身ではなく、腰の辺り。ハイゼノンで、背後から貫かれた場所だ。傷口が再び開いたのかもしれない。だが、それだけで痛みを感じているわけではないことをアルサスは分かっていた。

アルサスは、壇上をにらみつける。シオン、ネル、ライオット、メッツェの他に、壇上にまるでライオットを守る護衛のように現れたもう一人の人影。漆黒の鎧を身にまとい、悪魔のような邪悪な笑みを浮かべた、この即位式典にもっとも似合わぬ男、黒衣の騎士団長、ギャレット・ガルシアである。その憎憎しい姿が、アルサスの傷を再び開かせたのだ。

「それに……この国の王になるためには、あなたには死んでもらわなければならない」

ギャレットの背後から、ライオットの視線は、真っ直ぐアルサスを捉えていた。その口から放たれるであろう言葉をアルサスに止める手立てはない。剣を振りかざし、迅雷の剣技で壇を駆け上ったとしても、ギャレットに敵わないことは、すでに身をもって知っている。

「そうでしょう？ アルサス・テイル殿……いや、先王の愛妾フェリスが産んだ、この国の第一王子、フェルト・テイル・レーバン殿下」

ライオットの口から告げられた言葉は、白き龍がルミナスを消し

去ったときと同じほどの、ざわめきを呼んだ。

56. シモンズ家の宿願（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せください。

57. アルサスの決意

「アルサスが、王子さま……?」

傷口を押さえ、青白い顔をするルウの瞳が、アルサスの方を向く。アルサスは黙ったまま、何も答えようとはしない。

「そのお方こそ、先代国王陛下の愛妾であった、フェリス・テイルの忘れ形見にして、この国を見捨て、行方をくらませた、フェルト王子その人だ。センチ・レーバン王家の血筋である、赤い瞳が何よりの証拠ぞ!」

何も答えないアルサスに代わり、ライオットがもう一度言う。そして、彼が指差した先には、玉座の背後に飾られた、歴代国王の肖像があった。あまり大きなものではないため、はっきりと肖像の顔を拝することは出来ないが、どの王の瞳も、アルサスと同じ、炎のような赤い瞳をしていた。そして、玉座に人形のような顔をして腰掛ける、シオンの瞳も緋色である。

即ち、年端もいかぬ傀儡国王となった彼女は、アルサスの妹、ということになる。もともと、シオンは正室の娘であり、腹違いの妹ではあるが。

「このギャレットや、我が私兵のシャドウズより報告を受けた時には、まさかと思いましたぞ。無理もないでしょう、国の行く末を妹君であらせられる、シオン陛下の御身に押し付け、放蕩を続けた王子殿下が今更、どの顔をひっさげて、我が宿願の邪魔立てをするのか……お聞かせ願いたいものですな、フェルト殿下!」

「シオンにはすまないと思っている。だけど、俺は放浪していたわけじゃない。お前の愚かな宿願を止めるために、家も身分も名前も捨てた。今の俺は、フェルトじゃなく、アルサスだ」

と、返してはみたものの、どこか歯切れが悪い。ライオットは、さらにそこに付け込むかのように続ける。

「ほほう、伝説の平和の王、アーサーをもじったと言うわけですか

……。しかし、それは剣と盾の国の王子には、似合わぬ名ですな。もつとも、妾ごときが産んだ望まれぬ子には、ちよいどのいいのかもしれないませぬ。そんな人間に、シモンズ家の崇高な宿願は、止められまぬぞ！」

「崇高？ 愚行の間違いだろうっ！ 争いで産んだ、千年王国は、千年も立たぬうちに、争いによって滅びる。そうやって、この世界は何度も戦争の歴史を紡いで来た。せつかく、ヨルンの戦いで人々は戦争の愚かさを知り、曲がりなりにも、平和の道を選んだ。それを覆そうとすることは、愚行そのものだ」

「ならば、その愚行を如何にして、止めるおつもりかな？ 現実には白き龍を手に入れた。やがて世界は、私の白き光に怯え、ひれ伏すだろう。よしんば、とめることが出来たなら、すでに止められたはず。そうしなかったのは、フェルト殿下に迷いがあったに、相違ない！」

ライオットの高笑いに呼応するかのように、遠見の鏡に映しだされたルミナス崩壊の様子が、突然暗転する。再び、会場にどよめきが走ったのは、暗転した遠見の鏡に、新たな映像が映し出された瞬間だった。

ミスリルの青白い光を放つ、背の高い鐘つき堂を備えた教会を中心に、民家や礼拝堂が立ち並ぶ、宗教色に染め上げられながらも、夜空に馴染む閑静な街並み。あれは、ウェスアの街だと誰もが気づくよりも早く、そこが、一瞬にしてルミナスを滅ぼした白き龍の第二の狙いであることを悟った。

ガモーフの使者たちが、大声でわめく。その声がライオットの耳に届くことはなかった。歪んだ笑みを顔一面に浮かべ、ライオットは右手を掲げた。

「ベスタ教の聖地であるウェスアを、ルミナスの二の舞にしたくないというならば、ガモーフの諸君よ、我が千年王国に忠誠を誓え！」
そういわれたところで、簡単にガモーフがひれ伏すなどと、ライオット自身も思っただい。その掲げた右腕が振り下ろされ

ば、レパードの魔法装置に操られたネルは再び、魔法の言葉を口にする。そして、ウェスアの街は、一瞬で葬り去られるのだ。その時、ガモーフの人々は絶望感に浸されるだろう。そして、ウェスアの人々は、自らが死んだことさえも理解できぬまま、ルミナスの人々と同じように天に召される。

すべて、ライオットが言った通り、自分の迷いの所為だ……。

アルサスは、唇を強くかみ締めて、壇上で空ろな瞳をするネルを見つめた。ネルの視線は、空中を彷徨っていて、心ここにあらず。そんな彼女がもしも、我に返ったとしたら、自らが白き龍を目覚めさせ、罪なき大勢の命を奪ってしまったことに、悲観し絶望してしまうだろう。ハイゼノンで別れたとき、ネルの悲壮な顔はアルサスの胸に焼き付いている。怯え、うろたえ、悲しむ姿は、本来朗らかな彼女の心が壊れかけたことを示していた。それも、すべては自分が迷っていた所為だ、とアルサスと思う。

すでに、絶対なる破壊の力を、世界の人が目の当たりにした。それは即ち、白き龍を自在に操ることが出来る「奏世の力」を知ったということだ。ハイ・エンシェントのバゼットが人間の手に余ると言った、その力を。

人間はとても欲深い。目の前にとてつもない力があれば、それが身の丈に合うものかどうかも確かめず、執拗に欲する。ライオットはまさに、その人間の欲深さを体言しているかのようなだった。そんなライオットを、この手で殺めたとしても、第二第三のライオットが現れることは明白だ。それがガモーフ人であるか、ダイムガルド人であるか、はたまた諸侯やギルドの連中であるかなど問題ではなく、誰もがその力を欲し、ネルを奪い合うようになるだろう……。

ネルが白き龍を蘇らせた時点で、アルサスの採るべき道は一つしか残されていないのだ。迷いに迷った挙句、結局最初の決意に立ち戻ることとなった、自分の不甲斐なさを、アルサスは呪った。

「ええいっ！ センテ・レーバンの思い通りにはさせん！」

唐突に、式典会場に殺気が満たされる。ウェスアが第二の標的と

知った、ガモーフの使者たちが、隠し持っていた魔法杖を懐より取り出し、その切っ先を遙か壇上のライオットに向けたのだ。

まずいっ！ アルサスが振り返った瞬間、ガモーフの使者たちの魔法杖が俄かに輝き、幾重にも炎の矢が飛び出した。他の参列者たちの悲鳴を追い風にするかのごとく、炎の矢は、燃え盛る雨となつて、真っ直ぐライオットを捕らえる。

だが、悠然と佇むライオットは、微動だにしなかった。それもそのはず、シオンの座る玉座の背もたれに仕掛けられた、魔法装置が輝きを帯びて対抗する魔法障壁を展開し、飛来する魔法の矢を退けたのだ。

直ちに、ガモーフの使者たちは親衛騎士団に囲まれてしまう。剣を突きつけられれば、彼らとて命は惜しい。悔しそうに舌打ちをしながらも、手にした魔法杖を放り投げる。

「フェルト！」

その、騒然とした事態の隙について、クロウがアルサスの本名を口にしながら元に駆け寄った。心配そうな親友の視線を他所に、アルサスは俄かに立ち上がると、ちらりと周囲を見回した。

荒縄に縛られ下手人として捕らえられた、フランチェスカ。彼女は眼を閉じてただ静かに、時が過ぎるのを待っているかのようだ。視線をめぐらせば、シオンの命を奪おうとした「エルフォードの会」のメンバーたちも、観念したのか大人しく縛られている。ただ一人、ルウの想い人であるナタリーだけは、頬を涙で濡らし、シオンに襲い掛かった時とは比べ物にならないほど、弱弱しく見えた。そして、悲鳴とざわめきに満たされた、参列者たち。彼らの心中はライオットにかき乱され、誰もが冷静ではない。しかし、ここで暴れれば、ガモーフの使者たちと同じく、捕らえられる。彼らに用意されているのは、センチ・レーバンの極北にある監獄か、広場の断頭台だ。

このままでは、壁に囲まれた城郭都市ハイゼノンで見た「世界の縮図」が現実のものになる。その時、国王である妹は……シオンは、ハイゼノン公と同じ決断を下さなければならぬのか？ レパード

の魔法装置に操られたまま、ライオットの傀儡として、あんな無情な決断を、十一歳の少女が下さなければならぬのか。

望まれなかったとしても、母の教えは胸に刻まれている。人は、生まれたからには、何かを守り、何かを救わなければならない。自分を守るべきものはなにか。そのために払う犠牲は何なのか、それを問いかけ続け、過ぎていく旅の時間に身を任せていた。だが、もう、自問自答を繰り返す余裕はない。

今この手にある剣を振るわなければ、大勢の人が死ぬ。ヨルンの悲劇とは比べ物にならない悲劇が、この世界の歴史に刻まれてしまう。

「クロウ……。俺は覚悟を決める。親友として、頼みを聞いてくれるか？」

ざわめきを背景にして、クロウだけに届くような、小さな声でアルサスは囁いた。クロウは驚きを隠せず眼を丸くしたものの、アルサスの声音が真に迫っていたためか、頷いてみせる。

アルサスは、ライオットの意識が、騒ぎの方に向いていることを確認してから、何事か耳打ちした。再び、クロウは眼を丸くして、「今更、僕が聞くのも変だけど……フェルトは、それで良いのか？」と、確認の意をこめて口にしたものの、アルサスは「良いわけがないだろっ!!」とだけ言い放つと、剣を振り上げ、壇上へと迫った。

慌ててクロウもその後を追いかける。

すでに、即位式の体を失ってしまった、式典会場のざわめきが、ぴたりと止まる。誰もの視線が、アルサスとクロウに釘づけとなった。

「ギャレット！ 殺せっ!!」

ライオットは、殺気を帯びたアルサスの赤い瞳に、「ひっ」とのけぞりつつ、傍らのギャレット・ガルシアに命じる。

「うおりゃあっ!」

ルウの傍を駆け抜け、彼が呼び止める声を掻き消すかのように、

怒鳴り散らしたアルサスは、壇に登る階段の最後の一段を強く蹴り、剣を振り上げると高らかに飛び跳ねた。

「隙だらけだぜ、フェルト殿下っ!!」

一刀両断に振り下ろされるアルサスの剣を、ギャレットは余裕綽々といった風に、受け止めた。アルサスの剣と、ギャレットの鎧と跳えたような黒い剣が火花を散らす。

アルサスが旅の共に城から持ち出した、王家の剣「ナルシル」であれば、更に剣を引き、すばやいなぎ払いを繰り返すことが出来ただろう。しかし、騎士団の剣は切れ味こそナルシルの剣に匹敵するものの、重さや丈が違う。その微妙な違いが、アルサスの太刀筋を鈍らせた。

「王子殿下と、殺り合えるなんて、思っても見なかったぜ」

アルサスの剣を受け止めたギャレットはニヤニヤと口元を歪める。狂気に満ちたその顔で、騎士の誇りを捨てて、一体どれだけの悪事を働いてきたのか。ぎりぎりど罅迫り合いをしながら、アルサスは思う。

「別に、てめえの命なんて、欲しくない。何処かで野たれ死ね、ライオットの犬ところっ!!」

不意に、アルサスは剣を握り締める手の力を抜いた。その拍子に、力任せにアルサスの剣を押さえつけていたギャレットの体がバランスを崩す。

「何っ!?!」

図らずもうろたえてしまうギャレットの言葉に、アルサスのやや後ろから、「せいやあっ!!」とクロウの掛け声が折り重なった。

アルサスが身をひねる。するとアルサスの背後から姿を現したクロウは、剣を斜に構え、騎士団隊長の証である赤いマントを翻し、無防備を晒したギャレットの懐に入り込んだ。振り下ろされたクロウの剣は、ギャレットが体勢を立て直すよりも早く、ギャレットの首筋に宛がわれた。

「動けば、貴様の首を刎ねるぞ、元黒の部隊隊長、ギャレット・ガ

ルシア殿」

低く重たい声で、威嚇するクロウの顔は、親衛騎士の隊長の顔だった。

「おのれ裏切り者め、手駒として大人しくしておれば良かったものを。貴様の処分は後で下すっ！ 銀の乙女よ！ 今すぐウェスアを火の海にしまえっ！」

忌々しくクロウをにらみつけたライオットは、視線を玉座のほとりに投げかけた。しかし、その眼に映った光景に、ライオットは驚愕する。

ギャレットとクロウに氣をとられ、その奥で何が起きているのか、アルサスが何を考えて、無謀にも突撃してきたのかを悟る余裕がなかった。だが、ギャレットとたった一合だけ剣を交えたアルサスは、その相手をクロウに譲り、自らは玉座の傍らで空ろな顔をするネルの元に駆けた。

そして……。

「ごめん、ネルっ、許してくれ！！」

その一言を口にし、両の瞳を強く閉じたアルサスは、手にした剣の切っ先を、ネルの胸元につきたてた。ネルの胸を貫く瞬間、音こそしなかったが、剣身から伝わる鈍い感触は、どんな相手を切りつける時よりも悲痛で、アルサスの胸をきつく締め付ける。

ライオット一人を殺めても、他の人間が欲にまみれて、争いを欲し、ネルを奪い合うことになるというなら、その根源を断ち切るしか道はない。果てのない戦争で失われるかもしれない沢山の命と、それを守るために失われる一つの命。アルサスは、それを天秤にかけた。そうして、アルサスは選んだのだ。ネルの命を奪い取ることを。

「こうするしかないんだ。許してくれ……」

剣を握り締め俯くアルサスの悲しみの色に染まった言葉。まるで、それに被さるように、小さな呟きが聞こえる。だが、それははつきりと、アルサスの耳に届いた。

「アル……サス」
顔を上げた、アルサスの眼に、ネルの青い瞳があった。

57. アルサスの決意（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せください。

58. 訣別の刻（とき）

「な、何故だっ!？」

ライオットは青ざめた顔で、信じられないと、呟いた。アルサス……いや、フェルトがその性格から、銀の乙女を安易に殺したりなど出来ない、タカをくくっていた節はあるものの、それでもフェルトの行動に驚きは隠せない。だが、それ以上に驚愕すべきは、銀の乙女がその口を開いたことだ。

レパードの魔法装置は、技術院に直接命じ、「遠見の鏡」と同様に古代遺跡の技術を転用させて開発させたものである。レパードは、四精霊の魔力に反応する他の魔宝石と違い、魔力を蓄え人間の精神に作用する。ライオットは、それに目をつけて、説得や勧誘を施すよりも、もっと手軽にシオンや銀の乙女を、自らの意のままに操ろうと画策したのだ。

そうして、何度となく罪人などを用い、人体実験を試みた。更には、捕獲したハイ・エンシェント「ガムウ」の巨体での実験も試みた。それらはすべての実験は順調に成功し、レパードの魔法装置を取り付けられた者は、自ら自我やアイデンティティすべてを喪失し、自らの意思で言葉を発することはおろか、体を動かすこともままならず、ただひたすらに、ただ従順に、主たる者の命令に従い続ける。だから、目の前の少女が、フェルトの剣に胸を貫かれ、彼の名を呼んだことは、驚きに値した。レパードの魔法装置が失敗作だったというのか？ それとも、銀の乙女が、魔法装置の呪縛を解き放ったというのか？ いろいろな疑問符が、ライオットの脳裏を掠めていく。

一方、アルサスもまた、ネルがか細い声で自らの名乗った偽名を口にしたことに驚いていた。顔を上げたアルサスを見つめるネルの瞳に、先ほどまでの空ろな色はない。代わりに、薄っすらと涙と憂いを帯びて、アルサスの顔を見ていた。

「ネル……？」

胸を貫かれたにもかかわらず、ネルは痛がりも苦しみもしない。それどころか、傷口からあふれ出さなければならぬ、真っ赤なものが一滴たりとも零れない。確かに、アルサスの剣は、ネルの薄い体を貫き、その切っ先は彼女の背中から顔を見せている。

「アルサス、どうして嘘を吐いたのですか？ 最初から、わたしを殺すつもりだったのなら、どうしてアトリアの森で……ううん、辻馬車の中でわたしを殺さなかったんですか？」

今度ははつきりとした口調で問いかけてくる。すると、突然ネルの全身を、光り輝く微細な粒のようなものが包み込んだ。それはまるで、ネルの体が光っているかのようなだった。光の粒子は、徐々にアルサスの剣を包んでいく。アルサスは、咄嗟に剣を離れた。危険を感じたからではない。ただ、得体の知れないその光の粒子に、言い知れぬ不安を感じたからだ。

「ネルっ、お前まさかっ」

アルサスが言いかけた言葉を塞ぐかのように、アルサスの剣が光の粒に浸食され、跡形もなく消え去った。それどころか、ネルの胸には傷一つついてはいない。

「どう……なってるんだ？」

うろたえるアルサスは、後ずさりする。ブーツの踵が、壇の端にかかり、危うく転げ落ちそうになったアルサスの眼は、心なしか怯えているようだった。

そんなアルサスの耳元に、高らかな男の笑い声が響いてくる。疑問符を浮かべるライオットではない。クロウに剣を突きつけられたギャレットでもない。

「私たちの体を取り巻くフォトン・アクションがあれば、傷を直すことなど、造作もないことです、フェルト殿下。だから、あなたは王家に伝わる聖なる剣、『ナルシル』を持ってこの王城を出奔なされたのでしょうか？ 銀の乙女を殺すために」

悠然たる足音を響かせながら、そう不敵な笑みとともに言ったの

は、モノクルが良く似合う精悍な顔つきと金色の髪が印象的な青年、メッツェ・カーネリアだった。先ほども、その存在を消すがごとく、宰相付き参謀官として玉座の背後に控えていたメッツェが、含みのある言い方をしながら、歩み出てきたことには、誰もが驚いた。「どういふことだ、説明しろ、メッツェっ!!」

ライオットが怒鳴る。しかし、メッツェは動じることなく、冷ややかな笑みを落とした。

「メイド長に頼んで、ネルのティアラに仕掛けた魔法装置を取り外しておきました。彼女に、真実を確かめてもらうため。そして、『約束の日』を達成するため……。今彼女の額にあるのは、ただの飾りです」

「何だっ! あの子、メイドの分際で舐めた真似を……っ!」
ぎりぎりど歯軋りするライオットの脳裏には、鉄面皮のようなメイド長の顔が過ぎる。

「日ごろから、あなたのバカさ加減には愛想尽きていたそうです。もっとも、それは私も同じ。クロウ殿と同じく、私にとっての使い勝手のいい手駒に過ぎないあなたが、千年の王国を築くなどと、身の丈を弁えられてはいいかな?」

「貴様も私を裏切るのかっ!」

「裏切る? そもそも、私はあなたに与した覚えはない。十年前、行方の分からなくなった銀の乙女を探すのに、宰相と言う立場が、ちょうどいい手駒だった。操り人形立ったのは、あなたご自身だったということですよ」

「このシモンズ家当主である、私を操り人形呼ばわりするとは。何が目的か!」

「それをあなたに話したところで、その果糖でできた貧相な頭で理解することは出来ないでしょう。しかし、それでも、あなたは、愚かな人間の代表格だ」

齒に衣着せぬ、まさにそんな風にメッツェはぱつぱつと言葉の剣で、主人たるライオットを切り落とすと、その視線をネルに向けた。

「ネル……これで分かったろう？ 人間が如何に愚かで、分かり合えない生き物か。私利のため、自らの身の丈に合わない力を欲する者。それを見るや、手のひらを返したようにひれ伏す者たち。彼らもまた、その力を求めている。自らの欲のため、他人を犠牲にすることを正しいと思う者たちだ。それこそ、シオン殿下に剣を向けた、その魔法使いの少女とて同じ。人は、誰かを犠牲にすることで、自らの幸福を得ることしか知らない。こんな分かり合えない世界では、明日も命が失われるだろう。ハイゼノンで君を守って死んだ、あのメルという少女のように……。そんな世界に、何の希望がある？ 価値がある？」

語り掛けるメッツェの言葉は、他の誰に向けたものではなく、光の粒に覆われたネル一人に向けられていた。

「約束の日が来たのだ。アストレアと、私たち『奏世計画』の子が交わした、約束の日が……。十年前、遺跡船で君のコールドスリープが解けたことも、こうして私と再会したことも、すべてはアストレアさまのご意思だ」

「アストレア様のご意思……」

視線だけ、真っ直ぐにアルサスを捉えたまま、メッツェの言葉を反芻するようになぞるネル。

「アストレアの意思だっ！ お前自身も、白き龍の力を手に入れただけじゃないのか？ そうして、世界を滅ぼすのか！？」

ネルにだけに語り掛けるメッツェの間に割って入るように、アルサスが声を荒げた。アルサスの声は心なしか上ずっている。それは、ネルが魔法装置に操られていたわけではなく、自らの意思でルミナスを滅ぼしたという事実を目の当たりにして、怯え、戸惑っていたからだ。何か得体の知れないもの、そんな眼でアルサスは、ネルから視線を逸らした。

そんなアルサスのことを、冷ややかに見つめるメッツェは、静かにネルの傍に歩み寄り、アルサスの問いかけに答えた。

「フェルト殿下。ライオットと同じように、何か勘違いをしている

そうですね。『奏世の力』は白き龍を蘇らせる力ではありません。白き龍など、たった十六個の解除コードを唱えれば、誰にでも蘇らせることが出来る。忌むべき白き龍と、神聖なる使命を帯びた『奏世の力』を同一視してもらっては、困ります」

「神聖なる力なんて、どのみち世界を終わらせる力であることに、何の変わりがあると言うんだ!？」

「世界は終わるわけではありません。生まれ変わるのです。悲しみも苦しみもない世界へと……」

「悲しみも、苦しみもない世界……」

再びメッツェの言葉を反芻したネルは、ようやくメッツェの顔を見た。硬い表情で、二人を見つめるアルサスとは対象的にメッツェは優しくネルに微笑む。

「そうだ、ネル。そのために、アストレアが約束の日が訪れるまで、封印した君の記憶と真の奏世の力を完全に目覚めさせなければならぬ。君の力があれば、この世から、悲しみも苦しみもすべてなくなる。あらゆるものが、幸福のうちに生をまっとうできるんだ」

「本当に、アストレアさまは、わたしたちとそんな約束をしたんですか？」

「君は眠りにについている間、その力を悪用されぬよう、アストレアによって記憶を封印された。だから、憶えていないのも無理はない。だが、アストレアは、終末の前に、私と君に約束をした。それはベスタ教の伝説ではなく、真実だ」

「あなたは一体……？ 何故、何もかも知っておられるのですか？」

ネルの問いかけに、メッツェはそっと彼女の肩に手を置いた。すると、ネルの体を包み込む光の粒に呼応して、メッツェの全身もすっぽりと光の粒に覆われてしまった。

「フォトン・アクション。私たち『奏世計画』の子にのみ与えられた神の光。私は君の兄であり、世界を監視する『奏世の眼』。即ち

『金の若子』だ」

メッツェの言葉に、メルは驚きを隠せず振り向いた。「金の若子」

であることを示すがごとく、メッツェは金色の髪をかきあげつつ、慈愛ともとれる優しい笑みのまま、続ける。

「そして、君は我が妹。『奏世の力』即ち、『銀の乙女』ハンナ・フリーゲール。それがネル、君の本当の名前だ。私たちは、欲望と悲しみに満ちたこの世界を、真の幸福たる世界に生まれ変わらせるという崇高なる使命を、マリア・アストレアさまから頂いた天使なんだ」

その信じがたい言葉と裏腹に、ネルはまるでそうであることを予見していたかのように、少しだけ眉を動かした。

だが、アルサスはメッツェの口から語られる真実に、頭を振る。母から聞かされた話とずいぶんと違う。しかし、それだけではない。メッツェ・カーネリアという宰相府の参謀官に過ぎないと思っていた男の、突然の告白は、アルサスの足元を揺らした。

いくつもの疑問が、結びつきそうに結びつかない。真実を知る一歩手前で、足止めを食らったようなもどかしさ。だが、それに比しても、アルサスの心の内をかき乱すのは、メッツェがすべてを知る立場。すなわち、「金の若子」であるという告白だ。

「金の若子」とは、ベスタ教の経典に記された、「銀の乙女」と対を成す、女神の天使。それまで、ライオットの金魚の糞だと思っていた男の、想像しえなかった正体の暴露に、アルサスは言葉を失った。

ネルの本当の名が、ハンナ？ メッツェと兄妹？ 世界を生まれ変わらせる？ マリア・アストレア？

あらゆる疑問の中で、アルサスはメッツェとメルの間を交わす、言い知れぬ絆のようなものを見つけ、自分がその外側で、ライオットと同じ線の上に立っていることに気づかされた。

「奏世の力は、世界を変える力」エントの森で、ローアンが語った言葉。今更ながらに、その本当の意味は、白き龍と呼ばれる、あの滅びの光のことではないことを思い知る。だが、何が出来る。何をすればいい？ あと一歩後ずさりすれば、体は壇から転げ落ちるだ

ろう。そして、ネルがどこか遠くへ行ってしまうような焦りがあった。

「何が、奏世の力か。何が、奏世の眼か……。世界を生まれ変わらせるなどと、我が千年王国の理想の前には兎戯にも等しい。そのようなわけの分からぬものを受け入れられるものか」

不意に耳元に届く、ライオットの呟き。メッツェとネルの会話に閉口していたのは、アルサスだけではなかった。手駒と思っていた腹心の裏切りにも等しい告白は、信頼の分だけ、クロウの離反よりも、ライオットの心をざわつかせ、怒りに火をつけた。

「おのれ、メッツェーっ!!」

腹心と思っていた男の、予想もしない突然の裏切り。すでに驚きを通り越して、ライオットの脳裏は怒り一色に染まる。そこには、なぜメッツェが裏切ろうとするのか、という疑問など差し挟む余地はなかった。裏切り者は死を以って購え。そんな短絡的かつ単純な思考のみが残されたライオットは、完全に頭に血が上った状態で、そうでなくとも吊りあがった、蛇のような眼をより一層吊り上げ、腰に帯びたサーブルを引き抜く。式典用の装飾を凝らした飾りの細剣だが、丸腰の男を突き殺すことくらい造作もない。

「か、閣下!!」

傍で、クロウが制する声も、耳に入らぬライオットは、細剣でメッツェを突き刺した。その刹那、メッツェの体を覆うフォトン・アキシオンなる光の粒が、ネルを貫いたアルサスの剣同様に、ライオットの細剣を飲み込み、消し去った。

「金の若子たる私を殺そうとする方が、兎戯に等しい……」

薄く他人を見下すような笑みを浮かべたメッツェが、指を鳴らす。乾いた音が当たりに響いたかと思うと、おもむろに、黒い影がライオットの背後に近づいた。

油断していたわけではなかったが、クロウがライオットに気をとられている隙に、ギャレット・ガルシアがすばやくライオットを背後から切り伏せたのだ。

「ギャレット……！ 貴様もかつ」

振り向きざまに、血反吐を吐き出したライオットの眼が、ギャレットをにらみつける。ライオットの血反吐は、黒い鎧をべったりと汚したが、ギャレットは気にすることもなく、いたってまじめな顔で、

「俺も好き好んで人殺しをしているわけじゃない。ヨルンの戦で、戦場を得ることも許されず、おめおめと生き延びたと、汚名だけを着せられた俺たち黒の部隊の生き残る術が、人殺しだけだった。だがな、その名誉を取り戻せるのであれば、俺は誰にだって着く。それが、天使サマでもな……。あんたは忘れてたのさ、俺も、誇り高き騎士の端くれだってことを！」

「ぐぬうつ！」

ギャレットの剣が引き抜かれ、その傷口から大量の鮮血が噴出すとともに、ライオットは奇妙な声を上げて絶命した。あと少し、あと少しで頂点を極めようとした、シモンズ家の男の末路としては、あまりにもあっけなく、あまりにも情けない最期だったといわざるを得ない。

「ギャレット・ガルシア。お前が名誉を取り戻したいというなら、天使の騎士となれ……。お前の罪と、お前が失った名誉は、世界が生まれ変わるその日、回復されるだろう」

崩れ落ちたライオットの亡骸を、ただの肉の塊でも見るような顔をして、メツツエが言う。ギャレットは血塗られた剣を腰の鞘に収めると、膝まづきメツツエに服従の言葉を継げる。

「はっ！ 仰せのままに！ 金の若子さま、銀の乙女さま」

僕の言葉を耳に、メツツエは再びネルの方に向き直る。

「世界を変える。私たちは、その使命……。いや、約束を果たす。さあ、ネルこの手を取るんだ」

そう言って、メツツエはネルの目の前に手を差し伸べた。

今更ながらに、アルサスはギャレットの口走った「あのお方」というのが、メツツエであったことに気づくが、もはやそんなことは

どうでもいい。すべてが、はじめからメッツェの思惑に沿ったものだったとしたら。ネルを生かし、彼女の真実を知りたいという気持ちに付き合った結果、ハイゼノンの騒動に巻き込まれ、彼女の心に癒えない傷を与えた自分は、メッツェのいう「世界を生まれ変わらせる」ことの片棒を担いだにすぎない。

だが、何が正しいのか、今アルサスにそれを論じる時間はなかった。

「だめだ、ネル！！ 世界を生まれ変わらせて、その世界が本当に幸せになるかどうかなんて、誰に言える？ 人は分かり合えない。だから戦争をする。命を落とす。でも、メッツェの手を取れば、君は必ず後悔する」

根拠のないことを言っていると分かっているながら、アルサスは咄嗟に手を伸ばした。ネルがこれ以上遠くに行ってしまうのが怖かったのかもしれない。だが、それにも増して、メッツェの言葉を信じられないとアルサスは思う。

「いいだろう。ハンナ、君が選ぶんだ。私の手をとるか、フェルト殿下の手を取るか……」

ネルの前に差し出された、二つの手……。一つは、自分を助けてくれた少年の手。もう一つは、自分と同じ運命を持つ青年の手。

どちらを取るべきなのか、どちらが正しいのか、ネルには良く分からなかった。しかし、少なくとも、メッツェの言うとおり、分かり合えないで戦争を繰り返し、命が消えていく世界に希望も価値もないと、ネルも思う。

『こんな世界、いやだなあ……』

心の隅で、眠っていても目を覚ましていても、いつでも蘇るメルという言葉。血は繋がらなくとも、妹として十年間寄り添ったメルの最期の言葉は、ネルに十六個の解除コードを口にさせた。

決まっていたのだ。これも最初から。ネルが自らの言葉で、ルミナス島を滅ぼした瞬間から、もう後戻りしないという、覚悟が。

「世界を変えられたら、メルは……メルは笑ってくれますか？」

そつと顔を挙げ、メッツェに問う。メッツェは言葉にせず、ただ静かに頷いた。その頷きをかき消そうとするかのごとく、アルサスが叫ぶ。

「行くなネル！　メルが死んだのは、君の所為なんかじゃないっ！　失われた命は、君が後悔し続けることを望みはしない」

「分かっています……。だけど、あなたは、わたしを殺して全部終わらせるつもりだった。メッツェさまからお話を聞くまで、わたしは何も知らなかった。あなたが、この国の王子さまで、わたしを殺すために家出したことも……。だったら何故、出会ったその時にわたしを殺してくれなかったんですか？　そうすれば、メルは死ななくて良かったかもしれない」

「それは……っ！　何も知らない君を、殺すことが出来なかったからだ。君が悪い人間には見えなかった。世界を滅ぼすような人間には見えなかった。だから迷った。君を殺すべきなのか、生かすべきなのか。それは嘘じゃない、本当だ！　だから……」

「死んでもいいなんていうな。あなたは、旅の約束にそう言いましたよね？」

ネルの言葉がアルサスを絶句させる。

「わたしは、多分あなたを信じられない……。嘘で塗り固めた、あなたの言葉を。だって、そうでしょ？　あなたは現に、わたしを剣で貫きました。人が分かり合えないというのなら、あなたとわたしも分かり合えない。だから、あなたの剣がもう一度、わたしを貫く前に、わたしは世界を変える」

ネルはメッツェに視線を戻すと、メッツェの差し伸べた手のひらに、細い指先を添えた。それは、暖かなアルサスの手のひらに告げる、決別の意思だった。

「では、行こう。君の記憶を取り戻し、世界を変えるための旅に……」

メッツェはネルのか細い手をしっかりと握り締めた。そして、左手で玉座の背後を指差す。すると、その指先に光の粒が集まる。メ

ツツエの指先が空中になぞるように、なにやら魔法文字を描くと、音もなくあたりは輝きに満たされ、一瞬の後に玉座の後ろに、巨大な光の扉が現れた。

扉はゆっくりと観音開きに開き、メツツエとネル、そして僕たるギャレットを招き入れる。固唾を呑み

それを見送るしか出来ないアルサスと対照的に、参列者たち、そして、ルウ、ナタリー、フランチェスカ、クロウは、ただ呆然とその神秘的な光景を見つめていた。

やがてメツツエに手を引かれたネルは、一度も振り返ることなく、光の扉の向こうへと姿を消す。その扉の向こうが何処へ繋がっているのか分からない。アルサスの知らない場所、それだけは確かだ。

「行くな、ネルーっ!!」

アルサスの叫びを他所に、光の扉は光の粒になってはじけ、最初からそこには何もなかったかのように、消えうせた。

58. 訣別の刻(とき) (後書き)

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せ下さい。

59・ 生い立ち

センテ・レーバン王には、美しい妻がいた。諸侯の一人、デイルパイル伯爵の妹であり、傾国の美女とたたえられた、才色兼備の誰もが羨む王妃。だが、彼女は子宝に恵まれなかった。厳格な男性社会の名残を残すセンテ・レーバン王国の妃に与えられた使命は、政を動かすことでも、剣をとり戦うことでもなく、世継ぎとなる子を産むことであった。

子どもを授かることが出来ない。そのことが、王妃だけの責任ではなかったとしても、世継ぎが生まれないことに焦りを感じ始めた王が他の女性と恋に落ちたことは、無理もない話だった。

フェリス・テイル。巫女の家系に生まれたものの、センテ・レーバンが信仰をすて武力を背景とした「剣と盾の連合王国」になって久しい現代、巫女としての役目はなく、王室に雇われた世話係の一人だった。フェリスは、王妃のような美しさはないし、田舎の娘らしく学もないが、その代わりに純朴で直向な性格は、若さの中に強さを秘めていた。王妃を庭園に咲く最も美しい薔薇と例えるなら、フェリスは荒野に咲く一輪の可憐な野菊を思わせる。

ここで、誤ってもらっては困るのが、センテ・レーバン王の人となりである。けして彼は、女好きの放蕩者ではなかったし、戦争好きの粗野で乱暴な男でもなかった。たしかに、高貴な気品とはかけ離れた厳つい顔をしてはいるものの、王としての資質を備えた、実直で優しい男だった。

国王と世話係の道ならぬ恋。最初のうちは、フェリスも困り果ててしまったが、王の誠実な人柄に次第に心惹かれ、王妃が二人の恋を勘繰るようになる頃には、二人の愛の結晶となる一人の男の子が生まれていた。

それが、フェルト・テイル・レーバン……即ちアルサスである。無論、お世継ぎのために、側室を設けるということは、王国では

禁止されていない。諸侯の中には五人も妻を持つ者もいるし、歴代の国王も側室を持っていた。しかし、嫉妬深い性格だった王妃は、世話係に落ちぶれた巫女の娘を側室とすることを許さなかった。

王妃の嫉妬が殺意に変わり、フェリスばかりか、生まれたばかりの息子であるフェルトに害が及ぶことを恐れたセンチ・レーバン王は、フェリスとフェルトを城より逃がし、メリクス湖畔の傍に佇む、今は使われなくなった、王家の別邸へと匿った。

母子二人きりの生活は楽しいことばかりではなかった。金銭面は、王が内密に工面してくれていたし、世話係の老夫婦や警護の兵もつけてくれた。

そうして静かな湖畔で次第に成長していくフェルトは、自分がセンチ・レーバン王の息子であり、この国の第一王子であることの重責を知り、それでも、もう二度と会うことが出来ないかもしれない愛しい人を窓辺で待ち続ける母の、悲しげな背を見て育った。

フェルトにとって、母フェリスは、親である以上に人生の師であった。「常に、誰かのために生きなさい……それが、センチ・レーバン王子としての使命です」とフェルトに説いて聞かせるフェリスの言葉に、厳しさと優しさ、そして愛に溢れていることを、普通の子どもとは違う生い立ちを背負うことになったフェルトは敏感に感じ取った。

更に彼の成長にとって幸いだったのは、世話係の老婦人が引き取った一人の少年の存在があったことだ。少年の名は、クロウ・ヴェイル。騎士の名門、ヴェイル家の跡取り息子であったが、フェルトが六歳になった春、クロウの父はガモーフ神国で起きた「ヨルン平原の戦い」の全責任を負わされ、ヴェイル家は没落し、遠い親戚であつた老婦人に引き取られたのだ。

フェルトは六歳、クロウは九歳。城を追われメリクス別邸から一歩も出ることを許されない愛妾の子フェルトと、没落名家の息子クロウ、二人は親の負債を人知れず背負うことになった身の上と、年が近いこともあってか、すぐに親友と呼べる間柄になった。

クロウは真面目な男の子ではあったが、フェルトを王子ではなく友として接してくれる。日がな一日、騎士ごっこやチャンバラに明け暮れたり、別邸の地下にある危険極まりないメリクス迷宮を探検しては、傷だらけになってフェリスに何度も叱られた。それでも、二人の友情はまったく変わることはなく、ともに同じものを見、同じ時間の中で成長して行った。

それは、大人になるまで変わらないことだと思っていた。

しかし、フェルトが十二、クロウが十五になったある日、クロウの元に宰相ライオットの使いなる人物が現れた。今になって思えば、それがメツエ・カーネリアであったのだろう。もっとも幼い日の記憶は曖昧であるが、行方不明になった銀の乙女を探すため、メツエが利用できる手駒を集めていたのだとすれば、彼が持ちかけた「ヴェイル家再興の好機」という言葉も頷ける。

クロウはフェルトとは少し違う。クロウは自分がたった一人のヴェイル家の跡取りであることをきちんと自覚していた。やがて、クロウはその使命を帯びて、フェルトの前から姿をけした。

奇しくも、フェルトの母フェリスが病に倒れたのは、その直後であった。もともと体の強い女性ではなかったため、長年の心労が崇つたのだと、フェルトは思っている。

メリクスの湖畔を眺められる私室の病床に伏せる母の姿を見ることはこの上なく辛かった。しかも、その辛さを分かち合える友はもういない。必死に母の看病を続けたが、その命の灯は徐々に弱まり、「あなたが大きくなるまで、ちゃんと見届けられないことが寂しい、ごめんなさい」と口にする母は、今わの際にフェルトに一つの遺言を託した。

『やがて、権力を持つ人間たちが、己の幸福と繁栄のために、白き龍を求める。だけど、白き龍はこの国の伝承に伝わるような存在ではなく、世界に破滅を導く忌まわしき存在。今も地底深くで眠るその白き龍を蘇らせることのできる奏世の力を持つ女の子、銀の乙女を探しなさい。そして、権力者の手に渡る前に、彼女をその手で殺

し、この世界に平和をもたらすのです。それは、己だけの幸福のためではなく、世界すべてに生きる人の平和のため。あなたに、世界を想う心があると、母は信じています』

母の言う言葉の意味は良く分からなかった。巫女の家系に生まれた母はよく、「神託」^{オラクル}なるお告げを耳にすることがあった。その類だったのかもしれないし、もしかすると、絶命間際に意識が朦朧としていたのかもしれない。いずれにしろ、その言葉は不覚フェルトの胸に刻み込まれた。

母は静かに息を引き取り、フェルトは孤独感にさいなまれた。世話係の老夫婦は優しい人であったが、家族と呼べる唯一の人を失ったことは、まだ幼さの残るフェルトには辛いことだった。そんなフェルトを引き取ったのは、意外にもセンチ・レーバン王の正室、即ち王妃であった。

さすがに不憫に思ったのか、王妃の内心を知るとは難しいが、フェルトが生まれてから五年の後に生まれたシオンが、次期国王としての確約を手にしたことが、王妃の心情に大きな影響を与えたことと言うまでもなかった。フェルトは、直ちに王都に呼び寄せられた。そこで「フェルト・テイル・レーバン」という王子としての名を与えられ、王宮での暮らしが始まったのだ。

慣れないことは多くあったし、何よりも、父たる国王を恨んだ時期もあった。国王としての多忙や立場があったことは子どものフェルトにも良く分かっていた。しかし母は、長い間国王が会いに来てくれることを、メリクス別邸の窓辺で待ち続けていた。しかし、母が死の床に伏せても、一度も会いにこなかった父に、ある種の反感を覚えていたからだ。

そんなフェルトの心を癒してくれたのは、意外にも王妃の娘、シオンだった。シオンは、フェルトの異母妹に当たる。つまり、半分血を分けた兄妹なのだ。シオンは、屈託のない女の子であり、フェルトのことを「お兄さま」と慕ってくれた。その笑顔をみるにつけ、次第に父への反感が薄らいで行ったことはいうまでもない。

自分は次の国王になりたいとは思わないが、せめて妹のために、何か力をかしてやりたい。兄としての想いが芽生え、フェルトに希望が宿った。

ちょうどその頃、クロウは厳しい訓練に耐え、親衛騎士となり、再びフェルトの前に姿を現した。「あの頃と変わらない友情を」クロウがそう言い出す前に、再会を喜ぶフェルトはクロウに告げた。ともに、シオンを輔^たすけていこう、と。

そうして、王宮での暮らしは四年に及んだ。フェルトは、大嫌いだった勉強に勤しむようになった。父の下で政治学を学び、経済学の本を紐解き、騎士団から軍事学や魔法学を学んだ。更にクロウに剣術の稽古をつけてもらうこともあった。彼の迅雷の剣技は、クロウ仕込みということだ。

そんな中でも、フェルトの興味を引いたのは、歴史学である。なぜならば、母が残した最後の言葉、それを謎解くことが、フェルトにとって大事なことのように思えていたからだ。

しかし、事態がぐると変わったのは、半年前……。

フェルトは十六になったばかり、クロウは十九になり親衛騎士団の中隊を率いる部隊長に昇格した。本人はライオットが推挙してくれたおかげだと言っていたが、フェルトはクロウの実力がライオットの推挙に適ったからだ、と思っている。

それはさておいても、半年前、突然国王である父が他界したことは、フェルトにとって寝耳に水であった。理由は良く分からなかったが、まことしやかに暗殺説まで流布した。いずれにせよ、次期国王にシオンが即位することとなっていたのだが、ここで親衛騎士を除く騎士団と諸侯の一部が、シオンの即位に反対した。

これには少しばかり、込み入った事情がある。先にも話したとおり、王妃はデイルパイル伯爵の妹である。また、この国は諸侯にそれぞれの領地の事実上の独立統治権を委ねている、連合国家である。そのため、諸侯の発言というのは非常に重要なのだ。しかし、シオンはまだ十一になったばかりの少女。それをいいことに、外戚関係

に当たるデイルパイル伯が、王国での発言権を握るのではないかと懸念したのである。

無論、デイルパイル伯にその目論見があったことは事実であり、大諸侯であるフアレリア家やハイゼノン家も大昔には、そうした外戚政治を用いたこともあった。

そのため、王国は「正室の産んだ王女、シオン派」と「愛妾が産んだ王子、フェルト派」に別れた。フェルト派は騎士団と諸侯、シオン派はデイルパイル伯と貴族や政治家たち。その政治家の中に、ライオット・シモンズも含まれる。

これもまた、複雑な話だが、シモンズ家とデイルパイル家は親戚関係にある。そのため、デイルパイル伯の発言権が多少高まることに目を瞑っても、ライオットの宿願であった恐怖と武力を背景にした強固な国家「千年王国」を築き上げるために操りやすいシオンを選んだのだ。

事実として、国王が嫡子としたのは、シオンであり、それを廃嫡してフェルトを王座に就けるというのは、いささか難しいものがあったのだが、明けても暮れても国のトップたちは激しく論争を繰り返した。フェルトは、そんな大人たちに心を痛めた。

わずか数年の間に、両親を失い、城での立場も微妙になりつつあったフェルトは、自らの預かりと知らぬところで渦中に投げ込まれ、政争の中心に立つこととなってしまったのだ。

「お兄さまが王になるのが、正しいと思います」

シオンは、そんな兄の姿を見て、そう切り出した。

「お兄さまは、とてもお優しく、聡明でいらっしゃいます。母は違えども、わたしの自慢の兄です。そんなお兄さまが王になられた方が、国民にとってはきっと良いはずです」

たった一人の妹がそういつてくれることは、この上なく嬉しいことだったのだが、フェルトとしては、そう言うシオンこそ、王の器に相応しいと思った。

だが、ヨルンの悲劇以降、異常気象や天変地異により、世界中が

飢饉に苦しんでいる。それなのに、誰を国王にするかで無駄な論争をつづけることは無意味に等しい。「フェルトさまだ」「シオンさまだ」と、顔を付き合わせるたびに言い合いを続ける大人たちに、そんなことしてたら、いつか同じ国の人間同士で戦争になってしまいかもしれないと、フェルトは心の奥で不安になった。

その不安は、程なくして現実のものとなる。

耳にはしていないこと。しかし、耳にすべきことが、フェルトの耳朵を打った。それは、ライオットとメッツェ・カーネリアの秘密の会話である。

シオンを王にするよう、最初で最後に王子としての立場を使い、宰相に進言しようと考えたフェルトが、宰相の執務室前でたまたま聞いてしまった、と言いたいが、盗み聞きしてしまったことは、無作法であつたと思わなくもない、しかし、その会話がフェルトの心を突き動かした。

「シオン姫を国王に即位させ、フェルト殿下を早々に始末しなければならぬ。ディルパイル伯の始末も含めてな……」

ドアの外に聞き耳を立てるフェルトがいることも知らず、覇ばかりない声でライオットが言う。それは余裕ではなく、油断だったのかも知れない。一方、それに続くのは、対照的に押し殺したメッツェの声。

「しかし、トライゼン將軍たち、騎士団の者たちは納得するでしようか？」

「しなければ、肅清をかければいい。主力である親衛騎士の多くは、こちらの味方だ。それに、亡き陛下は、シオンさまを嫡子とされているのだ。愛妾の産んだ汚らしい子など、王に据えるわけにはいかん。それよりもだ、すべては、白き龍を我が物と出来るかどうかにかかっている」

「その件ですが、白き龍を蘇らせることの出来る、奏世の力を持つ少女、『銀の乙女』の所在が、ガモーフの辺境と判明いたしました。すでに、地下ルートを通して、裏ギルドの黒衣の騎士団には催促し

ています」

「ギャレット・ガルシアも、王国に恩を売りたいだろう。よもや、しくじることもないはずだ。白き龍を手に入れた暁には、再び起きる戦乱の中その絶対なる力で、世界を制する千年王国の理想を作り上げる。たのむぞ、メッツェ」

「はっ！ 心得ております」

踵を返し、ライオットの執務室を後にしようとするメッツェの足音に気づいたフェルトは、扉の前から一目散に逃げ出した。

しかし、その心は平静ではいらなかった……。

『やがて、権力を持つ人間たちが、己の幸福と繁栄のために、白き龍を求める。だけど、白き龍はこの国の伝承に伝わるような存在ではなく、世界に破滅を導く忌まわしき存在。今も地底深くで眠るその白き龍を蘇らせることのできる奏世の力を持つ女の子、銀の乙女を探しなさい』

母の最期の言葉を思い出す。白き龍……銀の乙女……奏世の力。母の口から語られた、その謎の言葉をフェルトは、自らを亡き者にしようとするライオットから耳にしたのだ。即ち、母が言った「権力を持つ人間」とは、ライオットのことだったのかもしれない。

彼が言う「千年王国の理想」が、もしも「己の幸福と繁栄のため」ならば、彼らの会話を黙殺することは、やがて世界を破滅へと導くことになるかもしれない。自分を慕ってくれる妹のシオンと、この世界を案じた母、そして父やこの国の人たちのために、それを見過ごすことは出来ない。

どうすればいい？ 母の言葉をもう一度手繰る。

『権力者の手に渡る前に、彼女をその手で殺し、この世界に平和をもたらすのです。それは、己だけの幸福のためではなく、世界すべてに生きる人の平和のため。あなたに、世界を想う心があると、母は信じています』

母には厳しく育てられた。そして王都に来てからも、その教えは胸に刻まれている。

「常に、誰かのために生きなさい……それが、センチ・レーバン王子としての使命です」

何度も言い聞かされたその言葉を胸に、フェルトは旅立つ決心をその日のうちに固めた。そして、王家代々伝わる聖なる剣「ナルシル」と何かのためにと溜め込んでおいた路銀を手に城を抜け出した。ライオットが十年間の停戦状態に終止符を打ち、白き龍の力を以って再びこの世界に戦争を呼び覚ますというのなら、自分はセンチ・レーバンの王子……いや、この世界に生きる人間として、それを止めなければならぬと思ったのだ。

親衛騎士である、親友のクロウに迷惑がかかることを嫌って何も告げることはなかった。ここからは、一人の人間として、権力者の悪意を止めたい。だから、フェルトという名前も捨てた。新たに、自分に付けた名前は、幼い頃、母が読み聞かせてくれた絵本の中に登場する勇者「平和の王・アーサー」の名を変じた、アルサスとした。

アルサス・テイル。新たな名前とともに、彼は「銀の乙女」なる少女の命と引き換えに、世界の平和を守る決意を固めたのだ。

そして……銀の乙女の所在を探るべく、各地を放浪した。やがて、銀色の髪の少女がガモーフ神国の辺境ラクシャ村にしていることを知ったのは、ギャレットたち黒衣の騎士団がラクシャ村を襲い、ネルを攫った日から二週間も過ぎてのことだった。

アルサスは、「レイヴンの男に、君を救い出すよう依頼された」などと、ネルを運び屋から救い出した後方って聞かせたが、他ならぬ依頼した男とは自分自身だった。そして、その目的は、少女の命を救うためではなく、その命を奪うことだった。

だが、アルサスは心の奥で迷った。本当に自分がしようとしていることは、正しいことなのか？ だから、ネルをすぐに殺すことが出来なかった。だが、その心の葛藤や謝罪を伝えたくとも、すでにネルはいない……。

「金の若子」と自ら名乗ったメツツエとともに、ネル・リュミレで

はなく、本当の名前である「ハンナ」として、彼女は光の扉の向こうへと消えた。世界を生まれ変わらせるといふ、「銀の乙女」の使命を抱いて。

59. 生い立ち(後書き)

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せ下さい。

60. 旅の仲間の解散

請われるがまま、自らの生い立ちと、ここにいたる経緯を語って聞かせたアルサスは、深い溜息を吐いて、その濁った息を目で追うように、天井を見上げた。

調度品や家具は少ないが、立派なカーテンやカーペットは、その部屋が来賓用の客間であることを伺わせる。そんな部屋には、ルウ、フランチェスカの他、クロウの姿があった。誰もが神妙な面持ちで、ベッドの傍らに腰を下ろしたアルサスの話に聞き入っていた。

シオンの即位式から、すでに三日が過ぎていた……。メッツェの反抗、ネルとの訣別。それだけではない、センチ・レーバンの宰相たるライオットの暴挙により、ルミナスという一つの街が白き龍に飲み込まれた。また、彼自身に降りかかった死という幕切れは同時に、センチ・レーバンに余計な負債を置き土産にしてくれた。

一見すれば、第一王子であるアルサスことフェルトと宰相ライオットのお家騒動とも受け取れないことはないが、ライオットが刃を向けたのは、フェルトではなく、魔法使いギルドとガモーフ国領であった。

そのため、即位式に来賓として招かれた各国の使者や、ギルド連盟の幹部は、この事態を忌忌しきものとして、本国や本部に伝える意向を示し、王都をあとにした。また、諸侯の多くも、口には出さなかったが、その内心に今後の身の振り方を考えている節は大いにあった。幸いであったのは、彼らの中に死傷者が出なかったことではあるが、センチ・レーバン国内に混乱が広がることは必定であった。

もともと、武力で統一国家化した連合王国は、一枚板とはいえない。争いとなる火種は常に、そこ此処に点在していた。たとえばそれが、飢饉や貧困を理由とした各地の農民の反乱や、それを是正しない王国へのファレリア公の謀反であった。しかし、戦争を起こす

には体力が必要だ。資金や兵糧、武器だけでなく、戦争を起こす者たちの大きな士気が欠かせない。だが皮肉にも、貧困や飢饉はそういったものまでも奪い、戦乱は局在的となり、大きくなることはなかった。

しかし、今度ばかりは違う。人々は白き龍……即ちあの白い光を見たのだ。それは十年前、三つの国が互いにぶつかり合ったヨルン平原での戦で、一瞬にして二百万もの将兵の命を奪った、あの光。それを白き龍と呼ぶことなど誰も知らなくとも、あの光は人々の心にトラウマのように植え付けられている。

トラウマは恐怖に、恐怖は憎悪となって、それを打ち払うべきだと言う結論に至る……。

自らを「銀の乙女」と相対する「金の若子」と名乗ったメッツェは、白き龍を蘇らせたのは奏世の力ではなく、十六個の解除コードさえ唱えれば、誰でも蘇らせることができると言った。その解除コードとは、ネルがレパードに操られている振りをして唱えた魔法言語であろう。

魔法言語は太古より伝わる言葉であり、解読が進められているにもかかわらず、ほとんど意味は分かっていない。そのため、十六個の解除コードを知っている者は、この世界にいるとは思えないのだが、それでも、もしも誰かがその言葉を知っていたら、という疑心暗鬼にかられれば、それは脅威となり得るのだ。そして、その脅威の発端は、他ならぬ今は亡きライオットに始まるのだ。

つまり、センテ・レーバンはすでに各地の諸侯、ガモーフやダイムガルド、ギルド連盟にとって、脅威となってしまったのだ。

そのため、ギルドは大小かかわらず、空白地帯や外国へと引き上げ始めている。更に、ダイムガルド帝国は国境にあるスエイド運河の橋を上げ、更に港をすべて封鎖してセンテ・レーバンとの国交を一切遮断した。そして、最大の敵国であるガモーフ神国は使者たちの報告を受けるなり、教会勢力の神衛騎士団を再編し、センテ・レーバンへ攻め込むための軍備を整えているという情報も入ってきて

いる。

しかし、センチ・レーバンにはそれに対抗しうる手段がほとんどなかった。

先にも述べたとおり、諸侯たちは自領に引き上げ、身の振り方を案じている。あるものは病気を理由に、領内の館に引きこもっている者もいるし、また別のあるものは早々にガモーフやダイムガルドへの助成を打診しているという、裏切り者までいる始末。

そして、騎士団の主力を形成する親衛騎士の多くが、ライオットに加担した。彼らが本意であったかどうかは、人それぞれであるが、ライオットの暴挙に加担した罪を白紙にすることは難しい。極刑こそ赦したとしても、騎士の位を剥奪することは避けられそうにもない。そうしなければ、親衛騎士を除く騎士団たちの士気に影響を及ぼしてしまうのだ。

更に、センチ・レーバンにとって不幸なことは、新国王に即位したシオンのことである。ライオットがギャレットにより切り殺されたため、行政のトップである宰相が不在となり、その穴を埋め国政を一手に引き受けなければならぬはずのシオンは、現在意識不明で床に伏している。

彼女の幼い体と心を操っていた、レパードの魔法装置は取り外したものの、そのまま意識が戻らなくなってしまったのだ。技術院の研究員たちによれば、長い時間レパードの魔法装置を装着していたため、その副作用が出てしまったのではないか、と言うことだった。難しいことは良く分からなかったが、シオンが意識を取り戻すとしても、今日の明日に言うわけには行かないようだった。

メッツェとネルの居所は杳として知れない。宰相殺害の下手人でもあるギャレットは、メッツェに従い姿を消した。さらに、メッツェに加担していたと思われるライオット付きのメイド長も、行方をくらませた。

事態は、センチ・レーバンにとって、アルサスにとって、そして世界にとって、暗澹と姿を変えて、戦争と言う暗い影を落とし始め

ている。それを、ライオットの負の置き土産と呼ばずして何としよう？ 死人に鞭打ちたくはないが、ライオットは罪を残して逝ってしまった、大罪人なのだ。

もはや、戦は避けられないかもしれない……。そうなる前に出来ることは、世界を変えろと言い放ったメッツェとネルを見つけ出すか、それとも……。

「馬子にも衣装だね」

アルサスの話を聞き終えたルウが、部屋に籠った暗い空気を払いのけようと、アルサスのいでたちを指して言った。

そんなルウは、シオンを庇って出来た傷がなかなか治らず、医者「安静にするように」と念を押されて、この来賓用の客室に設えられたベッドに寝かされている。命に別状はないが、傷は浅くもない。しかも子どもであるため体力にも乏しく、あれだけの流血をして尚、無事でいられたことは、奇跡に近いと医者は言った。「それが神童と呼ばれる所以なんだよ」と、ルウはわざとおどけて見せたが、それは一様に暗い顔をするアルサスやフランチエスカを氣遣ったのと、自らが同じような顔にならないようにするための、空元気だった。

無論、ルウだって本当は暗い気持ちになりそうだ。好きな女の子が、少しばかり離れ離れになっている間に、まさかテロリストになって、センチ・レーバン国王の命を狙おうとしたことは、未だに信じられない。そのナタリーは、現在王国によって、エルフォードの会のメンバーとともに捕らえられている。ナタリーを除くメンバーたちは審議官たちに、自分たちの正当性を訴えていると言うが、ナタリーだけは何も語らず、ただ一人泣きはらしていた。

自分の知るナタリーは、そんな子ではない。良く怒るし、気が強いけど、どこか他人を心から心配する優しい女の子だった。けして涙を見せたりはしない……。そんな彼女のことを思えば、ルウの胸は張り裂けそうになる。

だが、それを見せないのは、ルウがその分賢い子どもというこ

となのかもしれない。

「そうだな……久しぶりにこの服に袖を通したけど、なんだか窮屈だ」

アルサスは、窓ガラスに映る自分の姿に苦笑する。「馬子にも衣装」とルウに言わしめたのは、王子フェルトのフォーマル。高貴な装飾の袖や襟元もマントもすべてオーダーメイドの品だ。それらが、ぴったりと合っているのは、アルサスが本当はこの国の王子であるという何よりの証拠だ。

事態の收拾とシオンの名代を務めるため、城の私室にしまい込んだフォーマルに、半年振りに袖を通した。そう……半年前、アルサスはこの世を破滅へと導く「銀の乙女」と呼ばれる少女、即ちネルを殺すために、その決意と一緒に、このフォーマルを脱ぎ、名前も身分もすべて捨てたつもりだった。

「ねえ、アルサス……。本当に、ネルお姉ちゃんを殺すつもりだったの？」

ルウはアルサスの赤い瞳を見つめて問いかけた。

「ああ、そうだ。俺はネルを殺すために旅に出た。あいつがあいつの意思でないにしろ、白き龍を蘇らせれば、世界が破滅する。巫女の家系だった母さんが残した言葉を俺は信じていたからな」

「でも、違ったんでしょ？ 奏世の力は世界を変える力で、白き龍を蘇らせる力じゃないって、あの金色の髪の人が言ったよね」

「それでも、現実に魔法の言葉で白き龍を蘇らせたのは、ネル自身だ。母さんの予言は外れてはいなかった。だから、そうなる前に、ネルを殺すべきだったんだ。母さんの言ったとおりに……。でも出来なかった」

アルサスはなぜか、ルウから視線を外した。所在を求めるように赤い瞳は、部屋の隅で壁にもたれ、腕組みをしたまま目を閉じるフランチエスカで止まる。

彼女としては、十年前の憎い仇であるギャレットが、メッツェに加担していたことを、どう思っているのか。その表情から読み取る

ことは出来ない。

「どうして、出来なかったの？ 少なくとも、ボクは旅をしている間ずっと、アルサスに殺意なんて感じなかったよ」

「それは……ネルが普通の女の子だったから。もっと悪い人間で、世界を滅ぼそうとしていたなら、すぐにでもナルシルを振り下ろした。でも、あいつは『運び屋』の馬車の荷台で泣いていた。ハイ・エントエントのバゼットに俺が負けそうになったときも泣いていた。そんな女の子を何も思わないで殺せるほど、俺は人間が出来ちゃいない。世界のために、一人の犠牲で何億人もの人を救うなんて、口で軽々しく言ったって、俺には出来なかったんだ」

「その結果を君は考えたの？ こうなってしまうことは、考えたの？」

突然、フランチェスカが顔を挙げ、目を開きアルサスに問いかけた。アルサスは再び、その視線を泳がせなければならなくなる。

「考えたさ。だけど、あいつは奏世の力のことでも自分のことも何も知らなかった。何も知らないで殺されることほど、辛いものはないだろ？ だから、せめて……」

「せめて？」

「あいつが自分のことを知り、その上でどうするか見届けたかった。だから、俺は『自分のことが知りたい』と言うあいつの依頼を受けることにした。バゼットと同じように、俺もあいつに賭けてみたんだ」

「そして、賭けに負けた。そのことをとやかく言うつもりはないわ。あなたの気持ち、分からなくもない。だから、大事なのはこれからどうするかってこと。ネルを探し出し、彼女を説得するのか、それとも彼女を殺すのか。その決断は、君にしか出来ないのよ」

フランチェスカの言葉は、芯を射て、アルサスを黙らせてしまう……。沈黙が、部屋の中に訪れて、ただ静かに時間だけが刻まれていく。それに痺れを切らしたのは、やはりルウだった。

「お姉ちゃんを探しに行こう。あの金髪ヤローから、お姉ちゃんを

連れ戻すんだ。ボクたち三人で説得すれば、きっとお姉ちゃんも分かってくれるよ！」

力説するルウ。しかし、アルサスは泳がせた視線は結局その居場所を床に求めてしまった。

「ごめん、ルウ……俺は行かない。いや、行けない」

「何言ってるんだよ、アルサスっ!!」

予想外の答えに驚いた、というよりも、今まで見たこともないほど、歯切れの悪いアルサスに、ルウは苛立ちさえ覚えた。

「お姉ちゃんを見捨てるの!？」

「そうじゃない。ガモーフは、再三の調停申し入れを拒否し続けている。それは、戦争への最後通牒だ。近いうちに、ガモーフの軍隊がアトリアを越えて来る。シオンが意識を取り戻さない今、この国を守るのは王子の俺だけだ」

そういつて、まるで話を打ち切ろうとするかのように、アルサスは立ち上がった。その横顔は、ルウの知るアルサス・テイルの横顔ではなく、まったく知らないフェルト・テイルの横顔のように思えた。

「そんな、大人の理屈みたいなこと、言わないでよ! ネルお姉ちゃん、アルサスのこと好きだったんだよ」

クロウを従えて部屋を立ち去ろうとするアルサスに、ルウは食い下がった。その言葉に、アルサスの足がぴたりと止まる。だが、振り返りはしない。

「アルサスだって、お姉ちゃんのこと好きだから、殺せなかったんでしょ!？」

「そうだよ……。でもな、例え俺がレイヴンのアルサス・テイルだと名乗っても、どれだけの嘘を吐いても、結局俺は俺でしかない。この国の王子フェルトをやめることは出来ないんだ」

アルサスは背を向けたまま、低い声で言った。ルウは布団を跳ね除けベッドから飛び降りる。

「じゃあ、ボクも行く! 行って、ガモーフの兵隊を追い払う。そ

したら、お姉ちゃんを連れ戻しに行こう

と、威勢良く言ったものの、完治していない脇腹の傷が痛みを走らせ、思わず膝をついてしまう。

「そんななりじゃ、足手まといだ。それよりも、お前は、ナタリーを助けてやれ。俺には、刑を重くしないように図ってやることはできても、あの子の心の傷までは面倒見てやれない。それが出来るのは、ルウ、お前だけだ」

「アルサス……」

ナタリーのことを引き合いに出されては、ルウも言葉を失ってしまふ。

「旅の仲間はここで解散だ。身の振り方も含めて、考えておいてくれ……フラン、ルウのこと頼む」

「それでいいの？」

アルサスの別離の言葉と受け取ったフランチェスカは、その背中に問いかけた。君はそれで納得できるのか？　だが、アルサスは返事を返すことなく、部屋を後にする。

残されたルウとフランチェスカの二人は、ただ押し黙って、アルサスの出て行った扉を見つめていた。

客室を出たアルサスとクロウは、廊下を宰相府のある北塔へと歩く。宰相が他界してしまった宰相府は事実上解体されたものの、ライオットに与していなかった文官を中心に、アルサスが宰相を兼任する形で、臨時の行政機関を担わせている。

「フェルト」

アルサスのやや後ろを歩くクロウは、親友の背中に呼びかけた。アルサスは立ち止まりはしなかったが、顔だけ、こちらに向ける。

「今なら遅くはない。君は、フランさんたちと、ネルさんを連れ戻しに行くんだ。メッツェは、まだネルんが奏世の力に目覚めていないと言っていた。その約束の日が、いつなのかは分からないが、少なくとも時間はまだあるってことじゃないのか？　彼女が本当に、

世界に絶望していなければ、彼女が耳を傾けるのは、きっと君の言葉だけだ」

「希望的観測に縋りたい気持ちはあるけれど、この国には時間が無い。本当は……半年前に城を抜け出したとき、名前も身分も何もかも捨てたつもりだった。でも、捨てられなかったんだよ」

自嘲気味な苦笑いを浮かべるアルサス。

「俺があいつを殺すことに迷ったから、結局こうなった。誰に責められてもおかしくはない。だから、せめて俺が生まれたこの国は守らなきゃいけない。シオンのためにも」

「後悔はしないのかい？ フェルト」

「後悔しないわけないだろ。でも、もう決めたんだ。俺は、もう一度フェルト・テイル・レーバンに戻る」

「そうか……だったら僕は何も言わない。君の親友として、ヴェイル家の騎士として、君の力になるよ」

クロウはそう言うのと、足を止め、マントに隠していた一本の剣を取り出す。

飾り気のない鞘に収められてはいるが、そこから見え隠れするのは、ただならぬ気品と威圧感。ただの剣でないことは、ひと目で分かる。クロウはその剣を引き抜くと、逆手に持ち替えて、アルサス……いや、フェルトの前に差し出した。

「これは、ナルシル？」

剣を受け取り、アルサスは刃こぼれ一つしていないその艶やかな剣身に刻まれた魔法文字を見つめる。それは、半年前旅の護身のために城から持ち出した、王家の剣。城に舞い戻った際、ライオットに奪われてしまったものだ。どうやら、クロウはそれを探し出してくれてらしい。

「本来は、国王陛下が受け継ぐ剣の一つだけど、来るべき日まで、今は君が受け継ぐのが相応しい。フェルト殿下！」

「そう、だな……。こいつで、みんなを守る」

アルサスは剣を鞘に収め、それをフォーマルの腰ベルトに取り付

けられたホルダーに通すと、居住まいを調べ、威厳のある声で、クロウに命じた。

「直ちに宰相府へ、トライゼン將軍以下、王国騎士団団長を召集しろ！ 俺たちもガルナックへ向かう！！」

60. 旅の仲間の解散（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せ下さい。

61. ガルナツク砦

センテ・レーバン王国とガモーフ神国の間に横たわるアトリア連峰。万年雪の被る峻険な山々が連なるその中でも、もっとも標高の高い山をシエラ山と呼ぶ。シエラとは、センテ・レーバンの古い言葉で、神々の住まう場所、という意味があるらしく、現在でも信仰の対象としている村落もある。

そのシエラ山が見下ろす場所には、谷がある。この谷はガモーフまで抜けており、センテ・レーバン側からは、ガモーフのヨルン平原へと通じているのだ。

ガモーフ神国から、センテ・レーバンへ抜ける道は、三つある。一つは空白地帯の街道を北へ進んだところにある、アローズ関所を通り抜ける道。二つ目は、アルサスたちが通った、エントの森經由でハイゼノンへ出る道。前者は、空白地帯を通らなければならないため、ギルド連盟がそれを邪魔する。また、後者は深いエントの森が行く手を阻む。そのため、ガモーフ軍が進軍してくるとすれば、シエラ山の麓の谷であった。

谷の出口は、センテレーバン側も平原となっている。ガルナツク平野と呼ばれるそこには、巨大な要塞城が威容をたたえていた。

その名も「ガルナツク砦」。

十年前のヨルン平原での戦の際には、前線基地として使われた経緯を持ち、本来のその目的は、谷を抜けて、ガモーフ軍が進軍してきても、この要塞をやり過ごすことは出来ないようにする、拠点である。

つまり、センテ・レーバンにとっては、防衛の要であり、ガモーフにとっては、前後の挟撃を防ぐために潰すべき、敵拠点なのである。

ガルナツク砦は、その役目から、かなり堅牢に築かれている。見晴らしのいい平原の真ん中に陣取り、ハイゼノン並に高い城壁と、

鉄の門、城の周りには、馬防柵と堀が巡らされている。また、城壁に設けられた東西南北四つの見張り台が、敵の姿を具に睨み付けている。戦闘を目的として築かれているため、城下町などは形成しておらず、センテ・レーバンにあるどの城よりも、生活感は無に等しく、冷たい感じがするのも、ガルナツク砦の特徴と言えた。

そんなガルナツク砦にアルサスがクロウと王都守備兵を率いて到着したのは、ルウに「旅の仲間の解散」を告げてから三日目の夕刻だった。王都を後にする若き王子の出陣を王都の人たちは、万歳とともに見送った。しかし、そこにルウたちの姿はなく、アルサスは心苦しいものを感じずにはいられなかった。

もしかすると、王子フェルトに戻るというアルサスの決断を、彼らは怒っているのかもしれない。いずれにしろ、彼らはアルサスのことを勝手だと思っているに違いないだろう。そんな風に考えながら、アトリア連峰が夕日を受けて幻想に輝く光景を見つめる余裕もなく、アルサスは王国の国旗が風にはためくガルナツク砦へと入城した。

すでに、先行してガルナツク砦に進駐している王国騎士団の面々は、右往左往しながらも、着々と戦の準備を整えていた。彼らは、アルサスの姿を見ると、一様に仕事の手を休め、深く敬礼をする。アルサスも、威厳を見せるよう、馬の背で、胸を張った。

彼らがどのような気持ちで、このガルナツクに集まっているのかはわからない。しかし、彼らは彼らなりに、国を守るという使命を胸に、騎士団の鎧を身に着けているのだ。それが、彼らの誇りでもある。フェルトに戻ると決心したアルサスは、王子としてその期待に応えなければならない。そのために、王家の剣である「ナルシル」を腰に挿しているのだ。

「フェルト殿下！ お待ちしておりました！！」

アルサスたち兵団の姿を認め、声高にその名を呼びながら、砦の中心部にある城より駆け出してきたのは、二十代後半と思しき背の高い騎士である。

余談であるが、センチ・レーバン騎士団の鎧はすべて共通のデザインである。しかし、所属する部隊別に、少しずつ、意匠が異なるのだ。それによって、どの部隊に所属しているのかが、騎士団の間では一目瞭然となっている。たとえば、親衛騎士は胸当てに、鳥の羽を思わせる飾りがついている。一般の王国騎士団は、肩当に「矢受けの袖」と呼ばれる鎧袖が設けられていたり、各所の砦や関所の守衛隊の鎧には、胸当てから肩当にかけて、それぞれペイントが施されている。また、部隊隊長格になると、クロウのようにマントを着用することが多い。

アルサスの本名を呼んで、彼の前に現れた背の高い騎士もまた、マントを着用しており、同時に鎧にガルナツク砦を表す紋章がペイントされているところを見れば、彼がガルナツク砦の守衛隊司令官であることは、すぐに分かった。

「ご苦労さまです。キリク・クオーツ司令官」

ガルナツク守衛隊司令官、キリクにそう言ったのは、アルサスではなく、彼に随伴したクロウだった。司令官は、馬上のクロウの方をちらりと見ると、やや軽くお辞儀をする。

「すでに、トライゼン騎士団長たちは作戦会議室にお集まりです。殿下もお急ぎください」

「ああ、分かった。クロウ、馬を頼む。それから……後でお前も作戦会議に参加しろ」

アルサスは、自らの馬を下りると、クロウに向かって言った。クロウはいささか驚いた顔をする。

「しかし、僕は親衛騎士の部隊長だ。將軍たちの集まる作戦会議には……」

参加できない、と言いかけたクロウにかぶせる様に、アルサスは続ける。

「ブレック副官が、ハイゼノンより戻れば、事実上、お前が現親衛騎士団の団長だ。俺の力になってくれるって言ったよな。期待してるんだ、これでも」

そう言われれば、クロウは異論を唱えることは出来ない。たしかに、親友の力になると言ったのは自分だ。しかし、いきなり親衛騎士団長という身の丈に会うかも分からない大任を任されたことに、否が応でも萎縮してしまう。

「本気なのかい？」

問いかけるクロウに手綱を渡しながら、アルサスは頷くと踵を返し、キリクに案内を請った。クロウはしばらく二人の背を見つめていたが、頭を振って馬番を呼んだ。アルサスから預かった馬と自らの馬を馬小屋につなぐためだ。

一方、城に入ったアルサスはキリクの後を付いて行きながら、窓一つない城内に、窮屈さを感じずにはいられなかった。窮屈といえば、自らが纏う鎧もそうだ。騎士たちの鎧に近い形状だが、もともとは父が若かりし頃に愛用していた鎧らしく、それ相応の飾りが施されている。ノミの市で手に入れた、ギルド・リッターの鎧とは違い、きているだけで重圧も一緒に肩にのしかかってくるような気がする。

「このガルナツクが前線となる日が、こんなに早く訪れるとは、思っても見ませんでした」

突然、アルサスの少し前を、マントをはためかせながら歩くキリクが言った。キリク・クォーツというこの騎士とアルサスは初対面だ。ずいぶんと背が高く、それでいて尖った顎や、灰色の瞳は、表情が読みがたいほどに、びくりともしない。そのため、キリクの言った言葉が、ただ単に驚きを口にしたものなのか、アルサスへの叱責を込めたのか、よく分からなかった。

アルサスが答えに窮していると、キリクの足が突然止まる。城内の最深部にある、会議室へと辿り着いたのだ。

「こちらです」

抑揚ない声でキリクは言うど、鉄の扉を開いた。会議室は、軍議を行うために設けられた部屋だ。中央には、円卓と地図を広げるための台が用意されている以外には、ひどく殺風景だった。

キリクの言ったとおり、すでに騎士団の軍団長たちが勢ぞろいし、円卓に就いている。彼らは、部屋に入ってきたアルサスに、起立し一礼を送った。アルサスは、なるべく毅然とした態度で「ご苦勞」と声をかけつつ、円卓の一番奥にある自らの席に腰掛けた。

「まずは、初対面であるわれらから、自己紹介をば」

アルサスの着席にあわせそう言ったのは、アルサスの席に一番近いところに座る、初老の男である。オールバックにまとめた髪には白髪が混じっているが、年齢を感じさせない筋骨隆々の腕と、細い目からのぞく瞳は、現役武官らしい逞しさに満ちていた。

「センテ・レーバン全権騎士団長、トライゼン・バルックにございます」

全権騎士団長とは、親衛騎士団と王国騎士団をあわせたこの国のすべての騎士の長である。すでに前国王であるアルサスの父の時代から、腹心として活躍していた男で、人々からは「將軍」の愛称で親しまれていることを、アルサスも知っていた。しかも、何あろう、次期国王にフェルトを推したのもこの人物である。

「同じく、センテ・レーバン第一大隊長、アーセナル・ビルゴです」
トライゼンに続き、名を名乗るのは、大隊長の一人アーセナルである。年のころは四十半ばか。ずいぶん太っており、アルサスとは違った意味で、鎧が窮屈そうだ。

アーセナルに続き、第二、第三大隊長や、作戦仕官たちが名を名乗っていく。その数二十余名。一人一人の顔と名前を覚えるだけでも一苦勞しそうであった。

「センテ・レーバン、ガルナック砦守備隊指令、キリク・クォーツであります」

ようやくキリクが自己紹介を終えて、最後、アルサスとは円卓の中心にある地図台をはさんで真向かいに座る騎士が席を立つ。

「センテ・レーバン北部方面隊長の、カレン・ミラ・ソアードです。若輩者ですが、よろしく願います」

と、名を名乗ったのは、アルサスより少し年上の、それでもまだ

少女と呼ぶのがふさわしい様な娘だった。髪を肩まで切り揃え、年頃というのに紅のひとつも指していないその顔は、凛々しいというよりも、可憐な風合いがあり、この軍議に場違いのようにさえ思えた。しかし、彼女が名乗るとおり、鎧には地方部隊の紋章があり、またマントも羽織っている。

「カレンは、先月入団したばかり。二十歳の娘っ子ですが、ヴェイル家と並ぶ名家と呼ばれたソアード家の子にございますれば、その実力はワシが保障しますぞ」

アルサスが不思議そうにカレンを見つめているのに気づいたのか、トライゼンが笑顔で注釈を加えた。騎士の中には名家があり、たとえばクロウのヴェイル家や、トライゼンのバルック家も、数々の騎士を輩出した代々の家柄である。ソアード家もそのひとつと言える。しかし、それに比しても、カレンの姿は、血なまぐさい戦場にはあまりにも似つかわしくないように、アルサスには思えた。

カレンの自己紹介が終わると、それを見計らったかのように、会議室の扉が開き、クロウが姿を見せる。クロウの後ろには、副官のブレックの姿もあった。

「ただいま到着いたしました、センチ・レーバン親衛騎士団長を拝命いたしました、クロウ・ヴェイルです」

「同じく、副長ブレック・ケイオン。ハイゼノンより馳せ参じました」

敬礼とともに名乗る二人に、トライゼンは着席を促した。これで、各騎士団長がほぼ全員そろったことになる。

「これより軍議を始める」

アルサスは、クロウとブレックが着席したのを確認してから、低い声で口火を切った。軍議は、目下迫り来るガモーフ軍への対処という議題で進んだ。

偵察に赴いた斥候の話では、一両日中には、ガモーフ先遣の部隊が、アトリアの谷を越えるという話だ。そうなれば、ガモーフ軍は間違いない、ガルナック砦の前に広がる平野に展開するだろう。見

通しが良いぶん、戦略を立てるのが難しい。

作戦仕官たちは、台の地図上に並べられた駒を動かしながら、戦況の展開を予測立てた。

「しかし、先定石どおり城攻めのため、先遣隊だけでも三倍の兵隊を送り込んでくるとは……しかもガモーフ本隊をあわせれば何十倍にもなる。敵は総力を傾けてきているのだ、これでは太刀打ちできませんぞ」

渋い顔をするのは、アーセナルである。彼は、肥満した額に浮かぶ汗を拭いながら、どうするつもりなんだと、嫌味な視線をこちらに向けてくる。

「今も、諸侯の多くに出陣を依頼しておりますが、どの諸侯も首を縦には振りません。しかも、親衛騎士のほとんどが、ライオット事件の引責でその役目を解かれた今、わが国の兵力は、悉く寡兵であると言わざるを得ません。現状を鑑みるに、ここを守りきることは難しいかと」

キリクは、アーセナルを無視するように、アルサスに現状の再確認を促した。本来ならば、国の有事の際には、各諸侯が自領の兵を引き連れて馳せ参じる手はずとなっているのだが、彼らはライオットの引き起こした一件依頼、顔を見せようとはしない。そうなれば、戦うのはセンチ・レーバン王家に忠誠を誓う、王国騎士団だけとなる。

そのことは、アルサスも重々承知していた。だが、それで事態が好転するわけではなく、改めて、騎士団長たちは、頭を垂れてしまふ。そんな一同に、渴を入れんとばかりに、トライゼンが机を拳で叩いた。

「諸侯どもの力を当てにしても、彼らは自分の領地大事。真に国を守るのは、騎士のみじゃ。そのような弱気でどうするんじゃ、皆のもの！」

「しかし、トライゼン將軍。現実には現実として、受け止めてくださらねば。精神論だけで、何十倍もの兵を打ち破れるわけがないでし

よう。向こうとて、烏合の衆ではありませんまい。徒に死者を増やすよりも、降伏もひとつの手段とお考えいただきたい」

返すアーセナルの口ぶりは、やや呆れているようにも聞こえる。

「なんじゃと!? 貴様っ、国を売れと申すかっ!」

トライゼンはきつくアーセナルをにらみつけたが、「ならば他に方策がございますか?」と問われれば、トライゼンの怒りもしゆるしゅると萎んでしまった。

沈黙だけが、会議室を漂っていく。どうすることも出来ない負け戦となることが分かっているだけに、良い案など、トライゼンだけでなく、誰の頭にも浮かびようがなかった。

「殿下! フェルト殿下はどうお考えなのですか?」

突然、沈黙を破ったのは、アルサスの向かいに座るカレンである。カレンの青い瞳は、真っ直ぐにアルサスの赤い瞳を見つめていた。

その瞳が、少しだけネルに似ているように思ったアルサスは、心臓を鷲づかみにされたような気分になった。

「俺は……降伏するつもりはない。国王であるシオンの名代として、俺はこの国をガモーフに手渡ししたくはない。だけど、現実的な見方をすれば、アーセナルの危惧するところも分からなくもない。だから、使者を立てる」

「しかし、使者でしたら、もう何度もガモーフへ送っています。でも、一人として帰ってきてはいません。もう無駄なのではないでしょうか?」

アルサスは、そう返すカレンの視線から逸らさずに続けた。

「使者を送るのは、ガモーフ先遣隊から、この砦を守ったあとだ。苦しい戦いになるかもしれないが、先遣隊を破れば、戦争が長期化するかもしれない。そうなれば、我が国と同じように飢饉に苦しんでいるガモーフも、戦争を長引かせるわけには行かなくなり、譲歩せざるを得ない」

「しかし、三倍の兵を相手に勝てる道理など……!」
と、アーセナル。

「精神論も捨てたものじゃない。確かに兵法書に書かれている通り三倍の兵で挑めば、城を攻落とすことはできるかもしれない……だが、国を守るといふ使命のある俺たちのほうが士気は上。戦の勝敗は、数ではなくて兵の士気による。これも兵法の本に書かれていることだろう？」

「気楽なことを」

「だったら、アーセナル。生まれた国を捨てて、敵に命乞いをするか？ 他の者にも聞く。ガモーフに降伏したいという者がいるなら遠慮はしなくて良い。ここを立ち去ってくれても構わない。みんなに死んでくれなどと言えるわけがない。ただ……」

アルサスは、ずっと席を立ち円卓に就く騎士たちの顔を一人ずつ見つめた。

「シオンの不肖の兄として頼む。どうか、力を貸して欲しい」

そう言うのと、アルサスはこともあろうか、深々と頭を下げた。俄かに騎士たちの間にどよめきが走る。そのどよめきを、先ほどの沈黙を破ったのと同じように、カレンが打ち払う。

「わたしは、センチ・レーバンの誇り高き騎士として、殿下についていきます！」

「私も。フェルト殿下の親友として、この剣を振ります！」

カレンに続き、クロウも声を上げる。すると、次々と騎士たちが

「ご命令を！」と叫んでいった。

「どうやら、アーセナル以外は皆、戦う決意を固めているようですな」

トライゼンが髭面に少しばかりニヤリと笑みを浮かべながら、アルサスに言った。だが、その言葉は同時に、アーセナルにも向けられていた。アーセナルは、バツが悪そうに「フンっ！」と鼻を鳴らしそっぽを向く。

「すまない、みんな」

「なに、殿下が謝ることではございませんぞ。騎士として、ライオットの暴走を止められなかった責は、われわれにもあるのです」

再び頭を下げたアルサスに、トライゼンは言った。

61. ガルナツク砦（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せ下さい。

62. カレンの歌

軍議が終わるころには、空に丸い月が浮かび、ガルナック平野を冷たい夜風が吹きぬける時刻となっていた。

作戦と呼べるほど、作戦が立てられるわけではない。敵の出方を待つ以外に、彼らに作戦らしいものが立てられるわけではなかった。しかし、戦いになることだけは確かであり、砦内はある種、戦の前の高揚とした空気に包まれているようだった。

そんな空気の中を、美しい歌声が聞こえてくる。透き通った女の声だ。眠りに就けず、砦内を散策していたアルサスは、その歌声にふと足を止めた。

『生れ落ちた意味は、誰も知らない。この旅に果てなどなくて、僕も君も独り死んでいく前に、君の名前を叫ぶから』

歌声は、砦の胸壁の上から聞こえていた。アルサスは、その美しい声の主が誰であるか知りたくて、胸壁へと駆け上った。

アルサスがやってきたことに気づいた、歌声の主はぴたりと歌を止める。そして、アルサスの方に向き直った。騎士団の紅一点、カレン・ソアードだ。鎧の似合わない、細い輪郭の彼女が、歌を唄っていたのだ。

「で、殿下！ お休みになられていたのではないのですか？」

カレンは、恥らったように頬を染めて俯く。アルサスはそんな彼女に眼を細めて、近づいた。

「眠れなくて……散歩してた。カレン、だったよね？ 今の歌、初めて聞いた」

「わ、わたしの作った歌です。『旅人の歌』と名づけています。その……」

今にも頭の上から湯気が立ち上りそうなほど、耳まで真っ赤にするカレン。アルサスは、その姿に再びネルのことを思い出してしまう。出会ったあの日、手をつなぐアルサスに、頬を赤らめた少女。純真

で朗らかだった瞳は、どうしてあんなにも暗くなってしまったのか……。

後悔しても始まらないことは分かっている、ネルの明るい瞳に少しだけ心が揺らぎ、世界を変える力を持つ彼女をこの世から葬り去るという使命を忘れてしまった。いや、迷ってしまった。その所為で、ハイゼノンの混乱に巻き込み、彼女に「分かり合えない世界を滅ぼす」という一番到って欲しくなかった結論に、到らせてしまったのは、結局アルサスの所為なのだ。

だが、今アルサスは、ルウ曰く、ネルのことを見捨てても、自分が一番嫌った争いの中に身を投じようとしている。そんなアルサスの姿をネルが見たなら、彼女は更に落胆するだろう……。それが心苦しくて、ガモーフとの戦を前に、眠れないのだ。

「どうかなされましたか？」

カレンの顔を見つめ、ネルのことを思い出して、ぼんやりとするアルサスに、カレンは少しばかり怪訝な顔を向けてきた。アルサスは、慌ててカレンに対して失礼だったと自らを内心に叱責した。

「いい歌だね……。それに、王都劇場の歌手にも負けない歌声だった」

「い、いえ。お恥ずかしい限りですっ！」

カレンは、アルサスの内心など知らぬまま、恐縮してしまう。アルサスは、そんなカレンに少しだけ苦笑した。

「はじめから聞かせて欲しい。君が嫌じゃなかったら」

「ええっ!？」

カレンは、突然のアルサスの申し出に驚き、恥ずかしそうにこくりと頷くと、咳払いでのどの調子を整えて、「旅人の歌」をはじめから歌い、アルサスに聞かせた。

不思議なメロディだった。センチ・レーバン伝統の歌謡とは違う、はっきりとした抑揚のある旋律に、どこか物悲しげな詩がのせられる。それが、ガルナック平野の夜風に乗って、まるで平野の草花をそよそよと揺らすかのようだった。

「お、お粗末さまでした」

歌い終わったカレンは、尚も少女のように恥ずかしげな顔をする。アルサスは、拍手と賛辞でカレンの歌を喜んだ。

「不思議に思っただけけど、カレン、君はどうして騎士になんかなったんだい？」

アルサスは、胸壁から見渡せるガルナック平野の夜景を見つめながら、問いかけた。その質問に、別段深い意味はなかったのだが、カレンは少しばかり暗い顔をする。そして彼女も、アルサスの隣で、月明かりが照らし出す、夜風の野原を見つめた。

「わたしの父は、ヨルンの戦いで大隊を率いていました……」

カレンの父、カーネル・ソアードは名門の騎士として、十年前ヨルン平原で命を散らした。あの白き龍の光によって、命を奪われた二百万人の一人である。当時、カレンは、歌手になることを夢見る幼い少女だった。父の非業の死は、カレンに衝撃と悲しみを与えた。しかし、幸い彼女には、弟がいて、まだ幼いかったが、家督を継ぐのは彼と決まっていた。そのため、彼女の夢が潰えることはなかった。

生前の父が褒めてくれた歌声を、王都の劇場から天国の父に聞かせることが、彼女の新たな夢となった。しかし、世の中はそれほど安寧に作られてはいない。

幼い弟は、父の死からまもなくして、病に倒れた。カレンやカレンの母の必死の看病もむなしく、病魔は弟の体を蝕み、ついには弟を父の下へと召したのだ。

宰相のライオット・シモンズは、これを受けてソアード家をお取り潰しとすることを決めた。当時、すでにヴェイル家を手駒とすることを決めていたライオットにとって、余計な騎士の名家は不要だった。特に、カーネル・ソアードは、ことあるごとにライオットに盾突いていたため、ライオットにとっては、ソアード家の存在自体が目の上のたんこぶであったのだ。

母と二人家を追われ、住む場所も食べるものも、失ってしまう。

それは同時に、歌手になると言うカレンの夢を無残にも潰した。だが、そんなソアード家に手を差し伸べたのは、トライゼンであった。ヨルンの戦いの折、後陣を任されていたトライゼンは、他の騎士たちが死に、自らが生き残ったことを後悔していた。その罪滅ぼしにと、カレンが家督を継ぐことで、ソアード家のお取りつぶしを免除するよう、ライオットを説得したのである。

どのみち、歌手になると言う夢を失うのなら、母のため、天国の父と弟のために、騎士になる。カレンがどのような心境で、そう決めたのかは、アルサスには到底分からなかった。それは、クロウがライオットのことを快く思っていないにもかかわらず、その庇護の下、ヴェイル家を再興しようとした想いに近いのかもしれない。

残念ながら、アルサスには、家というもののへの執着がない。それは、愛妾の子として、王家に望まれず生まれてきてしまったという生い立ちが、そうさせるのだ。だからこそ、アルサスはフェルト・テイル・レーバンの名を捨てることが出来た。

比してみれば、カレンやクロウと背負っているものが違いすぎる。そう、胸壁の上で、カレンの生い立ちを聞きながら、月夜のガルナック平野を見つめるアルサスと言う。

「でも、フェルトさまだって、シオンさまのため、この国のためにここに立っていらっしゃるじゃないですか」

「そんなの建前だよ。結局、どうにもならなくて、戦争をする。それって、ライオットの思い描いていた、戦争の時代の再開に手を貸しているだけなのかもしれない。その先に、千年王国なんて馬鹿げた理想さえ、ないというのに」

やや自嘲気味に、アルサスは笑った。すると、カレンは何と答えていいのか分からず、困ったような顔を向けてくる。

「昔、前国王……親父に尋ねたことがある。どうして戦争が起きるのかって。親父は、俺の好きだった菓子を持ってきて、俺に教えてくれた。人は自分の欲に正直で、互いにその欲がぶつかり合う時、人は分かり合えなくなつて、戦争をするんだって」

「フェルトさまは、欲があるのですか？」

「さあね、自分でもよく分からない。何のために、あの子を殺そうとして、何のために、今ここにいるのか……。そこに欲があるんじゃないかって思うこともある。……いや、ごめん。歌まで聞かせてもらったのに、変なこと言っちゃって」

アルサスは、ぶるぶると頭を振り、胸壁を降りる階段のほうへ踵を返した。すると、アルサスの背中をカレンが呼び止める。

「前王陛下の言葉を否定するつもりはありませんが、わたし思うんです。人は分かり合えるって。たとえば、歌。歌はどんな歌でも、世界中の人が共感し合えます。それと同じように、共感し分かり合うことが、出来ると思います。そういう可能性が、わたしたちにはあるんだって、信じてます」

「だから、君は歌うのかい？」

アルサスは、振り返って尋ねた。カレンは再びこくりと頷く。

「フェルトさま……。どうか、御心のままに。わたしたち騎士は、殿下の力になります。あなたの迷いが晴れて、いつか人と人が分かり合えるその日まで」

「そうか。ありがとう。カレン……。話せてよかった。そうだ！ この戦いが終わって、王都に帰ったら、また歌を聞かせてくれ」

そう言って、階段を下りるアルサスに、カレンは三度頷いた。今度は、声に出して。

翌日。早朝の靄をかき分けるように、ガモーフ神国の軍隊が、シエラ山の麓の谷を越え、ガルナツク砦の前に姿を現した。すでに斥候からの狼煙で、敵軍の接近を知らされていたアルサスは、結局ほとんど眠ることは出来ずに、馬を引き、出陣することとなってしまった。

ガルナツク砦内に、キリク率いる守備隊のみを残し、全軍を砦前に展開させる。一方、ガモーフの軍隊は、アトリアの東から昇る朝日に、青銅色の甲冑を輝かせ、平野を吹き抜ける初夏の風に、軍旗

をはためかせた。

「壮観ですな」

アルサスの隣で冗談交じりに言ったのは、全権騎士団長のトライゼンである。確かに、彼の言うとおり、平野に居並ぶ敵軍の威容は壮観であった。その数は、こちらの三倍。整然とした敵の姿は、さながら軍隊アリのようにさえ見えてしまう。ならば、彼らにとってこちらは、獲物にしか見えていないのかもしれない。

「俺は、ここから三十クリーグほどのところにある、メリクス別邸で育った。この平野にも遊びに来たことがある。しかし、こんなところで、戦争をする日がくるなんて、思いもしなかった」

と、敵軍を見つめながらアルサスが言うと、馬を寄せて隣にやってきたクロウが少しだけ苦笑する。

「僕も。君とこの野原を駆け回った日々が、遠い昔のこのように思う……」

「クロウ、ガモーフはどうあっても、俺たちと戦争をするつもりなんだな？」

最後の確認、と言わんばかりにアルサスが問いかけると、クロウが頷き、トライゼンが補足する。

「昨夜、三日前に送った使者が丸裸にされて、ガルナックに帰ってきました。命を奪われないだけマシだと思え、お前たちの声には耳を傾けるつもりはない、という彼らのメッセージですな」

トライゼンの言葉に、アルサスは深く溜息を漏らした。彼らの怒りと恐怖に火をつけた張本人たる、ライオットはすでにこの世にいない。その尻拭いをするために、これから何人の兵が死ぬだろう。

「そのような顔をなされますな。兵たちは皆戦うつもりでここへ来ております。ライオットを止められなかった責は、殿下だけが負うものではありません。我らも、同様に、その責めを負いましょう」

そう言われながら、アルサスは、昨夜のカレンの言葉を思い出していた。御心のままに……。迷い続け、今もまた迷っている。それでも確かなことは、自分がフェルトの名を再び名乗ると決意したこ

とだ。

アルサスは、馬の首を返し、兵たちの方に向き直った。皆緊張を隠しきれない様子で、アルサスに視線を注ぐ。

「この戦いは、守るための戦いだ。勝利しても何かが得られるわけではない。いや、むしろ失うものの方が多いだろう。それでも、俺たちは大切なもののために戦う。家族、恋人、友人。そういった人たちのために、戦うと思え！ この国を我らの手で守るのだと思え！」

声高に叫び、アルサスは腰だめのナルシルの剣を引き抜いた。そして、王家に伝わるその剣を空高くかざすと、兵たちは一斉に「おーっ！！」と怒声を上げ、十分に漲った士気を轟かせた。

「よし！ 全軍進めっ！！」

再び馬の首を返し、敵軍のほうに向けると、アルサスはかざしたナルシルの剣を力強く振り下ろす。それにあわせて、ざっくざっくと、進軍する兵隊の足音とともに、ガモーフとの戦争の火蓋が切って落とされた……。

62. カレンの歌（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せ下さい。

63. 攻防戦

「魔法使い隊、前へ！！」

ガモーフ軍の指揮官が房のついた指揮棒を振る。それに併せ、ローブに甲冑を纏った魔法使いたちが、とねりこの魔法杖を振り上げた。

「魔法が来るぞ！ 全員防御ーっ！！」

すかさず、トライゼンが声を荒げる。それと同時にセンチ・レーバン**の**兵隊は、手にした方形の盾を斜め上空にかざすように構えた。盾の表面には、ミスリルの鋼板こうはんがはりつけてあり、対魔法戦に備えた装備であることを伺わせる。

セオリー通り、ガモーフの魔法使いたちは、魔法の言葉を唱え、土の矢をセンチ・レーバン軍めがけて射掛けた。雨がごとく、土砂がごとく、魔法の矢がセンチ・レーバン軍の上に降ってくる。それらは、大地に突き立ちきえるものもあれば、盾の表面で砕け散るものもある。

だが、その程度に戦っている暇はない。戦争は始まってしまったのだ。これから、どれだけの兵隊が犠牲になるか分からない。しかし、もう引き返せないことも分かっている。一瞬でも戸惑えば、その時自分の体が無事でいる保障など、どこにもない。

「第一騎馬隊、突撃ーっ！！」

魔法の矢の来襲が収まると同時に、ガモーフの指揮官は第二の指令を叫ぶ。

「敵を突破させるな！！」

アルサスは、トライゼンが指示を送る前に、声を張り上げた。すぐさま、盾を構える兵がアルサスたちの前に展開し、その盾の隙間に槍兵が待機する。

一方、ガモーフ軍の魔法使い隊の後ろから、土煙を上げ、騎馬の一団が突撃してくる。数は少ないが、その勢いは、津波のようであ

る。アルサスたちは、一様にその騎馬をにらみつけながら、唾を飲み下す。もしも、騎馬隊の突撃に耐えることが出来なければ、それだけでセンチ・レーバン軍は突き崩されてしまうかもしれない。

「まだだ、まだ引き付けろ！」

兵の焦りを制するように、アルサスが声を低くして言う。じわじわと迫り来る、ガモーフの騎馬隊。青銅色の鎧と、彼らが構える騎乗槍が鈍く輝きを放つ。一瞬、ガモーフ騎馬隊の馬の瞳と、目が合った。

「今だ！ 槍構えっ！ 馬を突け！！」

アルサスが叫ぶ。それと同時に、槍兵が盾の隙間から、長柄の槍を突き出した。雪崩を打って突撃してくるガモーフ騎馬隊は、急ブレーキをかける暇もなく、長柄の槍の餌食となる。次々と突き刺された馬は、苦しみの悲鳴を嘶き、背中の騎士を振り落としながら、センチ・レーバン兵の上に倒れ掛かってきた。

馬には何の罪もないが、騎馬隊を倒すには、馬を直接攻撃することほど、効果的なことはない。

「おのれ、センチ・レーバンっ！！」

落馬した、ガモーフ騎士はランスを投げ捨て、剣を構える。だが、馬を失った騎馬隊など取るに足らない。あっという間に、センチ・レーバン兵によって取り囲まれ、切り殺されていく。

「間髪入るな、王国騎士団、進軍！！ 敵を駆逐せよっ！」

トライゼンの指示する声が響き渡ると、センチ・レーバンの兵はガモーフ騎馬隊の亡骸を踏み越えて、敵軍へと突撃を開始した。アルサスも、鎧を蹴って、馬を走らせる。

それに呼応するように、ガモーフ軍は、魔法使い隊に魔法攻撃の第二波を指示する。だが、センチ・レーバン軍にも魔法使いの部隊はいる。騎士の中でも、魔力の高い人間をそろえた、先鋭の部隊。その名も「センチ・レーバン魔法騎士団」である。

「魔法騎士団！ 応射ーっ！！」

トライゼンのすばやい指示に、魔法騎士団は走りながら、魔法杖

代わりのミスリルの剣を振りかざした。ガモーフの魔法使い隊と、魔法騎士団、それぞれの魔法はほぼ同時だった。弧を描き、土の矢と炎の矢がちょうど上空でぶつかり合い、パンッパンッと、花火のように弾けた。

アルサスたちは、魔法の花火の下をくぐって、ガモーフ軍の先頭に雪崩込んだ。剣と剣がぶつかり合う音。怒声と悲鳴、いくつもの足音と爆発音。あらゆる喧騒が乱戦となった戦場に集中する。

「てやあっ!!」

アルサスは馬上から、ナルシルの剣を敵兵の兜と鎧の隙間をめがけて突き出す。鈍い感触は相手の首を断ち切る感触だ。すでに、アルサスは人を殺めた経験がある。ネルと出会う前も、出会ったあと、必要に迫られて。しかし、これほど気持ち悪く、吐き気のする感触はないだろう。それでも、血糊がついた剣を引き抜き、返す刀で次なる敵を切り殺す。

アルサスのそばでは、クロウが剣を振るう。更に前方では、老体に似合わぬ巨大な戦斧を軽々と振り上げるトライゼンの姿。そして、ぴたりと寄り添うように、双剣を華麗に舞わせるのはカレンだ。

誰もが、その気持ちの悪い感触に吐き気を覚えながらも、戦争と言うある種異常な高揚感の中で、声を張り上げ、自らの命を護るため、敵の命を奪っていく。

しかし、センチ・レーバン騎士団伝統の「迅雷の剣技」を以って、斬っても斬っても、敵の血しぶきが己の鎧を汚していくだけで、その数は減らない。その一方で、少しずつ、センチ・レーバンの兵にも犠牲者が出はじめる。短い悲鳴とともに、腕が飛び、足が飛び、血を噴出し、斃れていく兵士たち。

そんな中、いったいどれだけの時間が過ぎ、いったいどれだけの敵兵を切り殺しただろうか。「多勢に無勢」その言葉が、アルサスの脳裏をよぎるころ、徐々にセンチ・レーバン軍の氣勢が削がれて、徐々に押され始めた。傷だらけになって戦う兵士、すでに息絶えた兵士。血の臭い。人肉のこげた臭い。アルサスは、青ざめた顔でそ

れらを見渡しながら、戦う。

「怯むなーっ！ 進めーっ！！」

と、声を荒げるトライゼンだが、彼の戦斧にも、疲れの色が見え隠れし始めた。

「フェルトっ！ 兵たちが疲れ始めている。このままじゃ、敵に飲み込まれる！！」

そう言っ、こちらに駆けてくるクロウがアルサスに目配せをする。一時撤退を促す視線だ。アルサスは思考を回転させる。今退くべきか、それとも戦うべきか……その判断は将たる自分の双肩にかかっているといってもいい。それは、プレッシャーというよりは、自分だけに委ねられた決断すべきことだ。

「フェルト、危ない！！」

不意にクロウの叫び声がする。

「センテ・レーバン王子、覚悟ーっ！！」

きええっ！ と、奇声を発しながらガモーフ兵がアルサスの脳天めがけて剣を振り下ろしてきたことに、撤退の判断に氣をとられたアルサスは、一瞬の隙を見せてしまった。

戦場とは、一瞬の油断で、屍を晒すか屍を作るかが決まってしまう。前者は死を意味し、後者は生を意味する。生きるか死ぬか、たったそれだけの律^{りつ}によって構成されていると言っても過言ではない。決闘とは違う。どれほどの手練であっても、死はそこに迫っているのだ。

だが、その油断は、アルサスだけのものではなかった。センテ・レーバン軍の大将であるアルサスの首を目の前にして、勝利を確信したガモーフ兵は、彼に迫り来る死に気づいていなかった。

「殿下っ、伏せてっ！！」

突然の女の声に、アルサスは咄嗟に身をかがめた。その瞬間、アルサスの頭上を一本の剣が飛来する。その剣は、鈍い音を立ててガモーフ兵の胸に突き刺さった。

「ぎゃっ！」 短い悲鳴とともに、ガモーフ兵は地面に落ちて、絶命

した。

アルサスは、頭を起こすと声のした方に目を遣る。すると、そこにはカレンの姿があった。ガモーフ兵の胸を貫いた剣は、カレンが愛用する双剣の片方を、彼女が投げつけたものに相違ない。

「ご無事ですか、殿下！」

馬の首を返して、こちらへ駆け寄ってくるカレンの鎧は、彼女の可憐な姿に似合わないほど、べったりと血しぶきに赤く染まっていた。

「カレン、すまない。助かった！」

アルサスはなるべく、カレンに不安を抱かせぬよう、笑顔を作って答える。無論、そんなものは作り笑顔であり、それはカレンにも分かっていた。

「やはり、士気だけでは、どうにもならないか……」

カレンの姿に、アルサスは独りごちると、傍らに來たクロウに頷き、そのまま少し前方のあたりで戦斧を振り上げるトライゼンに向かって叫んだ。

「トライゼン將軍！ 撤退の合図を！ 一路、ガルナック砦に引き返し、相手の出方を見る！ アーセナルとキリクに撤退の援護を要請！！！」

「なんの！ まだ戦えますぞ！ この命果てるまでっ！！」

トライゼンは、武將然として、鼻息荒くそう言ったが、アルサスはそれを認めない。

「忘れるな！ 俺たちは、敵を皆殺しにすることじゃない。この戦に勝って、ガモーフ本隊を退かせることだ！ ここでがむしゃらに戦って死んでも意味がないっ！！」

と、言われれば、頑固者ではないトライゼンも、それ以上突き進むことは出来なかった。

「くっ！ 左様にございますなっ！ 致し方ないっ。伝令兵！ 信号魔法を打ち上げろ！ アーセナルの第一騎士団と、キリクのガルナック守備隊に援護させろ。退くぞっ！！」

トライゼンの命令が飛ぶ。すぐさま、伝令の役目を預かる兵士が、小型の魔法杖を懐より取り出し、空めがけて魔法を放つ。それは、真っ赤な炎の光球となり、上空で輝いた。

命令伝達の方法はいくつかあるが、これが最も手っ取り早い。すでに軍内の取り決めで、赤い魔法の光球は、「撤退」を表すことは、全軍に伝えている。それと同時に、砦に待機するキリク率いる守備隊と、本隊後陣に控えたアーセナルの第一騎士団が、出撃して本隊の撤退を援護する手筈となっていた。

そのため、ガルナツク砦の見張り台から、赤い魔法の光球を確認したキリクは、砦の門を開けさせ、かつ部隊を出撃させた。

撤退は迅速に行わなければならない。逃げるということは、敵に背中を見せるということだ。それがどれだけ危険なことなのかは、語るまでもないだろう。

「退けっ！ 退けーっ！！」

トライゼン、カレン、クロウたち騎士団長が、口々に指示を飛ばす。さすがは、トライゼンが育てた騎士団である。焦り乱れて、散り散りになることなく、整然と撤退していく。

アルサスも馬の首を返し、ガルナツク砦の方に向いた。砦からは、キリク隊がこちらに向かって駆けてくるのが見える。しかし、異変に気づいたのはその直後だった。

「おかしい……アーセナルの部隊が動いてないっ！」

アルサスの言葉を代弁するかのように、クロウが叫んだ。ガルナツク砦のやや東側で、進軍せず控えていた、いわゆる殿軍のアーセナル隊が、微動だにせずその場に留まっているのだ。彼らにも、伝令兵の撃った、赤い魔法球は見えたはずだ。にもかかわらず、まるで命令を無視するかのようにではないか。

驚きは、すぐに動揺となって、センチ・レーバン兵に広まってく。

「アーセナルめっ！ 臆したか、腰抜けっ！」

トライゼンが毒づく。思えば、昨日の軍議において、アーセナル

はひどく消極的な発言を繰り返していた。騎士でありながら、政治の世界に浸かり、どっぷりと太った、鎧の似合わない騎士は、ここに来て臆病風にとうとう吹かれてしまったのかも知れない、と思っていると、唐突にアーセナル隊がゆったりと動き始めた。

「どうやら取り越し苦労だったのか……。」

「違いますっ！ 旗をっ」

カレンが驚愕に声を震わせる。動き出したアーセナル隊は、センチ・レーバン軍の軍旗捨て、こともあろうに槍を構えると、その狙いを、たった今ガルナツク砦から出撃したキリク隊に差し向けたのである。

本隊の撤退援護のため出撃したキリク隊は、アーセナル隊に横腹を叩かれたことになり、あっという間に総崩れになってしまふ。それは、明らかな、アーセナルの裏切りであった。

「キリク隊を救援するんだっ！」

アルサスは大きな声で、撤退を開始した兵たちに呼びかけた。そして、自らも馬の腹を蹴って走り出す。後には、クロウたちも付いてくる。

「まさか、アーセナルが裏切るなんてっ！」

予想していなかったわけではない。しかし、クロウは唸らずにはいられなかった。

「アーセナルは、ガモーフの外交官とも親しくしていました。わたしたちの知らないところで、密約を交わしていたということでしょうか？」

馬を走らせながら、カレンが言う。

「そんなこと、今はどうだっていい！ アーセナルを止めろっ！」

叫ぶアルサス。やがて、撤退から、一転して危機に陥ったキリク隊の救援に転進した、センチ・レーバン軍はアーセナルの部隊とぶつかる。しかし、背後にはガモーフ軍が追撃してきている。つまり、挟み撃ち状態なのだ。しかも、アルサスたち、センチ・レーバン兵にとっては、裏切りとは言っても、アーセナルたちも同じセンチ・

レーバンの兵隊である。中には、見知ったものや、友人もいる。そんな相手に、躊躇してしまうことは仕方がなかった。

それでも、アーセナル隊は、アーセナルの命令に忠実に、センチ・レーバン軍に襲い掛かる。彼らは、ガモーフ先遣隊の威容を目にして、アーセナルとともに生き残る道を選んだのだ。そのためならば、仲間を殺すという矛盾を、喉の奥に飲み込んだ。

覚悟あるものと、突然のことに戸惑う者。その勢いの違いは歴然としている。混乱は、瞬くうちに広がり、前からは数刻舞うまで仲間であった者たちが、後ろからはガモーフの軍隊が遅いかる。アルサスたちの本隊が総崩れとなってしまうまで、それほど時間はかからなかった。

新たな悲鳴が響き渡る。しかし、先ほどまでとは違い、あまりにも悲痛な叫び声だ。

「くそっ、なにやってるんだよ、お前たちっ！」

アルサスは、剣の峰でアーセナル隊の兵士を叩く。だが、やがてアーセナル隊の兵士は、アルサスの馬に目をつけ、その白馬の美しい体に槍をつきたてた。

「うわあっ！」

アルサスは、馬が崩れ落ちるのと同時に、地面へと投げ出された。全身に走る痛み、アルサスは目を瞑った、その瞬間、アルサスをアーセナル兵が取り囲む、クロウが慌てて、「フェルト！」とアルサスの本名を叫んだが、その声は、剣を振り上げるアーセナル兵の怒声にかき消されてしまった。

アーセナル兵の剣がアルサスの首を狙う。先ほどのように、カレンの剣が投じられることはない。何故なら彼女もまた、アーセナル兵に取り囲まれているのだ。クロウも、トライゼンも同様である。

アルサスは、ナルシルの剣を振り、アーセナル兵の剣を受け止めようとした。だが、手元にあるはずの剣を落馬とともに落としてしまったことに気づく。万事休す！ 死の一字がアルサスの脳裏を過ぎった。

その時である。眼前を灰色の影が、まるで風のように通り過ぎた。それと同時にアーセナル兵は、首をごろりと落として、そのままその場に斃れてしまったのである。

いったい何が起こったのか。アルサスがそれを理解する前に、アルサスの背後から、低く重たい声が聞こえてきた。

「味方に裏切られた上に、戦の最中、剣を落とすとは。情けないものよな、少年よ……」

トライゼンのものとは違う。まして、カレンやクロウのものとも違う声に、アルサスは振り向いた。

63. 攻防戦（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せ下さい。

64. 思いがけない援軍

「申し開きがあるなら聞こう」

アルサスは砦の地下室中に響き渡るようなよく通る声で言うと、その男の首に、ナルシルの切っ先を突きつけた。男は、脂肪の塊のような体に、荒縄を食い込ませながら、アルサスを睨み付ける。今この光景を見れば、その肥え太った男が、騎士の一人であったなどと、誰が思うであろうか。

「アーセナル、黙っていても、何の利得にもならんぞ。我らを裏切り如何にするつもりだったのじゃ!？」

アルサスの傍で、トライゼンが眉間にしわを寄せる。しかし、その顔にはやや疲れが見え隠れしていた。彼にとって、騎士は団長クラスから末端に到るまで、すべて部下なのである。その部下が粗相をした。本来なら、その始末をつけるべく、アーセナルの首を刎ね、自らも自刃するのが、騎士の掟である。しかし、今はガモーフとの戦の真っ最中であり、全騎士団の指揮を任される身。しかも、アルサスに固く、自刃は許さないと、戒められている。その分、トライゼンの怒りはストレートにアーセナルへと向けられていた。

アーセナル隊の裏切りにより、混乱とともに瓦解したセンチ・レバン軍は、全軍の三分の一を失う結果となった。しかし、思わぬ救援によって、事なきを得て、裏切りの首謀者であるアーセナルを捕らえ、生き残った者は、ガルナツク砦に逃げ込むことが出来た。それを不幸中の幸いとするべきかは、まだ分からないが、ガモーフの軍隊は、それ以上追撃してくることはなく、アルサスたちはガルナツク砦の門を固く閉ざして、立てこもることとなった。

「知れたこと! 諸侯の中には、すでにガモーフの傘下に下った者もいる!」

アーセナルは血を含んだ唾を吐き捨てて言った。地下室の頼りない明かりに浮かび上がる、厚ぼったく腫れたアーセナルの顔は、太

っているからだけではない。怒り収まらぬトライゼンによって、何
度も殴りつけられたのである。

「貴様！ ガモーフに王国を売るつもりだったのか！？」

「この売国奴め！」

アーセナルを取り囲み、叱責する騎士団長たちが次々と声を荒げ
た。その勢いは、トライゼンに負けず劣らず、今にも腰だめの剣を
引き抜き、アーセナルを斬り殺さんばかりだった。アルサスは、そ
んな騎士団長たちを諫めつつ、アーセナルを睨み付けた。

「そうして、生まれた国を捨てて、仲間を裏切り、自らが生き
残ることに、価値があると思ったのか？」

「価値ですと？ ならば、前国王陛下が逝去され、国内が荒れてい
る折に、国を捨てて半年もの放浪を満喫し、挙句、この国をヨルン
の悲劇以来の戦禍に巻き込もうとする、王子に何の価値があるとい
うのか！？ わしはただ、国を戦火に滅ぼしたくないが故に、ガモ
ーフと手を結んだまでのこと！！」

己の言い分を吐露するアーセナルに、アルサスはやや目を伏せて
から、彼の首筋に突きつけたナルシルの剣を納めた。

「ガモーフがもし、俺たちの降伏を受け入れて、センテ・レーバン
に戦火を持ち込まなくても、やがて民族同士の軋轢が生まれる……。
俺は壁に囲まれ、外界と途絶して、世界の縮図となったハイゼノン
でそれを見た。そうならないためのアトリアの国境線なんだ。アー
セナル、お前が国を憂う気持ちも分かる。そして、俺に信頼にたる
価値がないことも分かる。だが、騎士としての誇りを失ったお前を
このままにしておくわけにはいかない」

「いかなさるおつもりで？」

と、踵を返すアルサスにトライゼンが問う。

「アーセナル隊の生き残りの者たちとともに、丸裸にして砦から放
逐しろ。ガモーフに助けを求めるもよし、そのまま姿を消すもよし。
ただし、楽に死なせたりはしない……」

トライゼンの問いに答えたアルサスは、自分の声がひどく冷たい

ことに気づいた。何にせよ、アーセナルたちを赦すことは出来ない。^{ゆる}アルサスにとって、アーセナルに与える罰は、ギリギリの選択だった。

「了解しました、直ちにこやつと、こやつに与した愚か者どもの身包みを剥ぎ、裏門から放逐いたします」

騎士の一人が命令を復唱したその時だった。鎧のこすれる音ともに、誰かが地下室の階段を駆け下りてくる。その足音はただ事ではないと言っているようで、地下室にいるアルサスたちは思わず身構えた。しかし、明かりの元に姿を現したのは、守備隊司令官のキリクである。

長身の彼にとっては、天井の低い地下室は、いかにも狭そうだった。

「大変です！」

開口一番、そう言うキリクに、トライゼンが眉をひそめる。

「何事か！？ よもや、ガモーフが早速攻めて参ったか！？」

「いえ、そうではなくて……兵たちが『彼ら』に怯えて、暴動を起こしそうですねすっ！」

やや青ざめた顔でキリクが報告する。キリクの言う「彼ら」が誰のことかわかっているアルサスは、

「分かった、俺が行く……クロウ、付いて来てくれ」

と傍らのクロウを従えて、キリクの横を通り過ぎ、地下室の階段を昇った。階段の入り口はそのまま、砦の表側にある庭への通路に通じている。そのため、階段を昇りきると、兵士たちの怒声と喧騒がアルサスの耳元まで届いた。

「まったく、諍いなど起こしている場合ではないと言うのに！」

アルサスのやや後ろを小走りに付いてきながら、クロウが目くじらを立てる。

「無理もないさ。俺だって、驚いたんだ」

そう言ってクロウをなだめると、アルサスは夜風が吹き抜ける前庭に出て、兵士たちに向かって声を張り上げた。

「静まれっ!!」

鶴の一声とはこのことである。色めき立っていた兵士たちは、アルサスの声ら驚き、静まり返った。その静けさの隙間から、グルルっ、と獣のうめき声が聞こえる。

「ちよつと、道を開けてくれ」

と、アルサスは人だかりを掻き分け、兵士たちに取り囲まれた「彼ら」のもとに歩み出た。「彼ら」は、調停に現れたアルサスをも威嚇するかのごとく、牙をむき出しににする。

「殿下、危ないです」

兵士の誰かが言ったが、アルサスは気に止めず「彼ら」に近づいた。「彼ら」は、無防備を晒すアルサスのことを、じっと睨み付ける。外見は、灰色狼に似ているが、その少し大きめの体軀、三つの瞳、鋭利な牙と爪は、彼らが魔界の眷属「魔物」と呼ばれるものであることの象徴であった。そして、人はとりわけて「彼ら」のことを「ヴォールフ」と呼ぶ。

「少年よ、この人間どもを大人しくさせろ。こやつら、我らが敵でないことを理解できぬようだ」

ヴォールフの群れの奥から、一際体軀の大きなものが、こちらに歩いてくる。アルサスは、そのものの名を知っていた。

「バゼット!」

アルサスは、その人語を解するヴォールフの名を呼ぶと、兵士たちの方に振り向く。

「みんな、安心してくれ。バゼットは智慧ある魔物の長、ハイ・エンシェント。俺の知り合いだ」

「し、しかし……」

兵士たちは、困ったような顔をする。ヴォールフ族は家畜を襲うような、獰猛で人間にとって危険極まりない生き物である、というのが共通の認識であった。俄かに、敵でないと言われても、信じがたい。

「フェルト殿下がこう申しておられるんだ。それに、我々はバゼッ

ト殿のおかげで事なきを得たのだ。分かったら、みんな持ち場へ戻れ！」

アルサスの言葉に付け加えるかのように、クロウが言うと、兵士たちは納得いかない、という顔をしながらも、散っていく。それでようやく、牙をむき出しにしていたヴォールフたちも、大人しくなる。

「すまない、バセット。あんたたちのおかげで、俺たちは助かったと言うのに……」

と、アルサスがバセットに言うと、バセットは少しばかり笑った、ような気がした。彼らの生態は、狼に似ているため、本当に笑ったのかどうかは、はっきりとしない。ただ、彼らには、かつてアトリアの森で出会ったときのような敵意はない。

それどころか、アルサスたちは、バセットに助けられたのだ。アーセナル隊の裏切りにより混乱をきたしたセンチ・レーバン軍の危機に、颯爽と現れた灰色の影。それは、バセットが率いる、ヴォールフの群れと、そしてトニア率いるエイゲル族の群れであった。

彼らが来てくれなければ、アルサスはガルナツク平野に屍を晒していたことだろう……。しかし、何よりもバセットとトニアの救援に驚いたのはアルサス自身であった。

「なに、恩を返しに來ただけのことだ。我も、トニアも人間に疎まれるのは、慣れている」

「恩？」

「貴様たちは、アトリアの森で命を落とした我が同胞はらからのために、墓を作ってくれた。それは、人間どもの最高の礼儀と聞く……」

アトリアの森でバセットたちに襲われた後で、アルサスは自らが斬り殺したヴォールフを墓に埋葬した。といっても、穴を掘り盛り土したに過ぎない。それでも、それをバセットは「恩」と受け止めたのである。

「それと、貴様とトニアの賭けが失敗したことを、笑いに來たのだ。銀の乙女が、自らの使命に従った以上、新たなる再生のために、世

界は滅びる」

「だから、あの時、アトリアの森であんたはネルを殺そうとした……。俺がやろうとして出来なかったことを」

「そうだ。たとえ、アストレアの意思に背いてでも、我は今ある世界を守りたかった。それを、あの娘の心に賭けてみると言ったのは、そなたたちだ。その賭けは見事に失敗した。やがて、世界が滅びる瞬間を、共に見届けよう。我も、そなたたちの賭けに乗った身だ」

「アストレアの意思に背く？」

「そうだ、その時点で我らは、『魔物』でさえなくなった……!」

そう言うと、バセットは群れを率いて、砦の隅へと歩いていった。彼の言葉の意味は良く分からなかったが、アルサスはその背中を見つめながら、『ネルの心が変わってしまったのは、俺の所為だ』と、心の中で呟いた。

「クロウ。ヴォールフたちと兵士たちが、喧嘩しないよう見張っていてくれ。彼らは、俺たちの貴重な戦力だ。それから、負傷兵には薬を惜しまず出してやれ。頼んだ」

アルサスは、バセットたちの姿が見えなくなると、クロウの肩を叩いて、そう命じ、踵を返した。

「フェルト、君は？」

呼び止めるクロウに、アルサスは「夜風に当たってくる」と言い残して、胸壁に上る階段を目指した。

そこは、昨日の夜、カレンが歌を聞かせてくれた場所だ。そのカレンも、今は忙しく負傷兵の手当てに当たっている。さながら、戦場の天使と言ったところだろうか。もしも、この場に、ネルの力があれば、傷ついたものたちはたちどころに、回復したことだろう。

胸壁に上がったアルサスは、夜風に当たりながら、何度か頭を振った。カレンのことを思うと、なぜかネルのことを思い出してしまう。二人は似ても似つかない顔立ちだし、喋り方も、声も違う。だが、それでもカレンの姿に、ネルを思い出すのは、それだけアルサスの心にネルが住み着いている、と言うことの何よりの証拠だった。

溜息を吐き、見下ろせば、夜のガルナツク平野が広がる。しかし、昨日とはまるで違う光景を見せていた。いくつかの戦いの後をうかがわせる煙の帯。月明かりに、浮かぶ小さな山のようなものは、累々と折り重なった戦死者の亡骸だ。そして、その向こう、遙か十数クリーグ向こうに、点々と見えるのは、螢火のような光。しかし、それは螢の求愛行動などではなく、ガモーフ軍の野営地の灯りである。

その野営地の方から、何かがこちらに向かって飛んでくことに、アルサスは気づいた。夜目を凝らしてみれば、それが鳥であることが分かる。しかし、鳥にしてはかなり大きい。翼を広げた大きさは、人間の三倍以上もあるだろうか。

鳥はやがて、翼をはためかせ、ガルナツク砦の上空を何度か旋回すると、ホバリングしながらアルサスの傍らへと降り立った。

「トンキチ！ 偵察、ご苦労さん」

アルサスは髪を押さえながら、巨大な鳥……エイゲル族の長の名を呼んだ。エイゲルも魔物の一種である。猛禽の一種、鷲によく似た生態を持っているが、その大きな違いは、遙かな高度を飛ぶことが出来ることと、人間を背に乗せられるほどの、巨軀である。

「まったく、フェルトは老体に厳しいやつだのう」

と、人間の老人のような声音で愚痴をこぼしながらも、その漆黒の眼は真っ直ぐ、ガモーフの陣営を見つめている。

トンキチは、バセットと共に、危機に陥ったアルサスたちを救援に現れた。ヴォールフとエイゲルは、魔物の中でもっとも恐れられる存在である。そのため、ガモーフは追撃を諦めたと言っても過言ではない。そして、ガルナツク砦に逃げ込んだアルサスは、日が暮れるのを待って、トンキチに空からの偵察を依頼した。彼らの飛行高度では、魔法も矢も当たらない。安全にかつ確実な偵察の任務は、トンキチたちエイゲルに向いた仕事だった。

「どうやら、敵さんは、攻城戦の支度をしておるようじゃな。衝車や梯子を用意しておる」

「そうか……後で皆にも伝える。この砦はもともと、攻城戦用に作られた砦だ。簡単には落とされない。ただ……予定外だったのは、緒戦で三分の一もの犠牲者を出してしまったことだ」

アルサスが、ガモーフの野営地を見つめてそう言うのと、トンキチは少しばかり翼をはためかせ、ぐっと胸を張った。

「そのために、ワシとバセットは駆けつけたのだ。頼ってくれても構わん」

「そのバセットに言われたよ。俺たちの賭けは失敗した。滅び行く世界を共に見届けようって……」

「あやつらしい言い草だのう。しかし、あの娘さんが、まさか金の若子と共に行ってしまおうとは。あの優しい顔を思い出したび、今でも信じられん気持ちだ」

トンキチの脳裏には、アトリアの森で出会ったネルの顔が思い浮かべられていたのだろう。確かに、あの時のネルが「世界を変える」などと言う光景は、思いもよらないかもしれない。だが、トンキチと別れてから、随分色々なことがあった。本当はその旅の中で、彼女が真実を知り、正しい道を選んでくれることを願っていた。それが、アルサスとトンキチ、そしてバゼットが、アトリアの森で賭けたことだ。

だが、今は何が正しいことなのか、アルサスにも分からなくなっている。あれほど嫌っていた戦争を、今まさに自分の手で起こしている。剣を手に、今日だけでも数え切れないほどの敵を斬り殺した。それが嫌だった。話し合えば、分かり合える。そんな風に思っていたのは、もう遠い昔のことなのだろうか。

『わたし思ってます。人は分かり合えるって』

不意に、カレンの言葉を思い出す。それが本当なら、せめてネルにはそのことを分かって欲しかった……。

「まだ時間はある。ネルが世界を滅ぼす前に、もう一度説得することは出来るはずじゃ。そのためにも、そなたはここで死んではならん」

トンキチは、アルサスの内心を見透かしたかのように言った。アルサスは、少しだけ作り笑いを口許に浮かべて、
「あいつはもう、俺みたいな嘘つきの言葉には耳を貸さないさ。人は分かり合えない。俺もネルも……」
と言って、トンキチに背を向けた。

「人間とは難儀なものな」

トンキチは、アルサスの背中にそっと呟いた。

6.4. 思いがけない援軍（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せ下さい。

65. 背に腹はかえられない策

まだ、夜空が白む前に、アーセナル隊の生き残りとアーセナルの身包みを剥ぎ、両手をロープで縛った状態で、ガルナック砦の裏門から放逐した。彼らは、敗軍の将として一目散に逃げていく。本来なら、センチ・レーバン騎士の掟にしたがって、裏切り者には厳しい死罰を与えなければならないのだが、アルサスがそれを望まなかった。

せめて、無抵抗な人間まで殺したくはない。というのがアルサスの心情であったが、ガルナック平野の朝はとても寒い。丸裸でいれば、何クリーグも先にあるガモーフの野营地や、近隣の町に逃げ込むまでに、彼らは体力を奪われ、凍死してしまうかもしれない。それだけでも、十分厳しい罰だ。

だが、他の騎士や兵士の手前、彼らが彼らなりの意思を持って裏切ったのだとしても、それを赦しておくわけには行かなかった。

そんな矛盾をかかえつつも、アトリアの峰に朝日が昇り、ガモーフとの戦は二日目を迎えた。ガモーフ軍は、城壁を乗り越えるための梯子や門扉を破壊するための槌の付いた戦車を用意し、籠城の構えを見せるアルサスたちセンチ・レーバン軍を包囲した。

バセットたちヴォールフ族と、トンキチたちエイゲル族の魔物が味方についてくれたとは言え、すでに大多数の戦力を失った上、生き残ったものの中にも、怪我人は数知れない。援軍を請うにも、諸侯たちは戦の行く末を静観する構えである。即ち、彼らは、センチ・レーバンが勝つなら変わらず忠誠を守り、ガモーフが勝つならばかの国へと鞍替えするつもりなのだ。もつとも、前者はその可能性が限りなくゼロに近い。なぜならば、今ガルナック平野に展開する、こちらの三倍ものガモーフの軍勢は、先遣の部隊であり、その背後には、それ以上の本隊が控えている。

その点では、諸侯に独立自治権を預けるセンチ・レーバンの弱点

が露見したと言えなくもないだろう。いずれにしても、アルサスは先遣隊を破り、講和に持ち込みたいと思っていた。そうすることで、国と民は戦火から守られる。それが、センチ・レーバンの王子として、シオンの兄としての使命だと感じていた。

その一方で、瞳を伏せれば、ネルの顔が思い出されてしまう。今、ネルはどうしているだろうか。彼女の心の傷を守ってやることが出来なかった。ルウに「お姉ちゃんを見捨てるの?」といわれても、甘んじてその批難を受けるほかなかった。

「魔法騎士団。構えっ!」

邪念を振り捨てつつ、アルサスは胸壁の上から、迫り来るガモーフ軍を睨み付け、魔法騎士団に命じる。彼らの唱えた魔法は、敵のど真ん中に着弾するものの、その程度でガモーフの軍は崩れない。「正門は、ハイゼノン製のミスリルで造られた門扉。簡単には破られますまいが、いつまで持ちこたえられるか」

アルサスの隣で、ガルナック守備隊指令のキリクが言う。アルサスは「弱気なことを言うな」と叱責しつつも、内心に、城門が破られる可能性は懸念していた。どれほど、ミスリルの頑健さがあるうとも、壊れないものは、この世にはない。

「今のうちに、我らを門外へ。エイゲルどもと空と地上からの挟撃をかける」

キリクの傍でそう言ったのは、バセットである。確かにその手は有効かもしれないが、駆けつけたヴォールフとエイゲルの数は、たかが知れている。心強い味方ではあるが、無謀な突撃を許すわけには行かない。

「魔法を放ちつつけろ! 軍を一人でも、ガルナックに近づけさせるな!」

アルサスは、怒号のような命令を飛ばすトライゼンに目をやりながら、

「策はある。そのために、魔法装置を砦内に仕掛け、クロウとカレンを、アーセナル放逐と一緒に、砦から出したんだ」

と、バセットに言った。

弓矢と魔法の波状攻撃は、成果を見せないまでも、敵の進軍を少なからず阻んでいる。堅牢なガルナック砦は、簡単には陥落しないが、それでも、最初の梯子部隊が、ガルナック砦の城壁に梯子をかけたのは、それから数時間後のことだった。

アルサスたちは、煮えたぎった油などを撒き、敵が梯子を上ってくるのを妨害したが、ガモーフ軍の怒濤の勢いは収まることを知らない。

「一人も城壁を越えさせるな！」

アルサスも弓矢を放ちつつ、敵を射殺していく。心を痛めている余裕はなかった。敵兵の眼には、殺意が込められていて、例え相手がどう思っているようと、敵である以上殺すという執念だけが、瞳の奥に燃え上がっていた。

これが戦争だ。

まざまざと見せ付けられた、はじめての戦争。恐ろしいと思う。バセットやガムウと戦った時も恐ろしいと思った。だが、戦争とは違う。名も知らぬ、多数の人間。それらが悪意を見せ付けているわけではなく、ただ、己の正義のために戦うのだ。

徹頭徹尾、分かりあうことは出来ない……。

それが戦争だ。

「衝車が、門に付きました！」

見張り台から弓矢を応射していた兵の声が響き渡ると同時に、巨人の足音を思わせるような、低く腹に響く音が聞こえてくる。

「エイゲルに、衝車を攻撃するよう、伝令！」

トライゼンが声を張り上げる。すぐさま、見張り台から伝令用の魔法球が打ち上げられた。まもなくして、雲の上から、何かが急降下してくる。それは、見る見るうちに大きくなり、巨大な鳥の形を成すと同時に、戦場に滑り込み、真っ直ぐガルナック正門を目指した。トンキチの率いるエイゲル族の部隊である。

彼らは、鋭い爪と嘴を武器に、正門を突き壊そうとするガモーフ

の槌戦車、衝車を急襲した。俄かに悲鳴が巻き起こる中、ガモーフ兵は、鷹狩の要領で弓矢を射掛ける。エイゲルの巨軀にとっては、矢など針が刺さった程度であるのだが、それでも何百もの矢や魔法が注げは、彼らとて耐え切れるものではない。

ギャーっ、という悲鳴は、まさに魔物の断末魔。一羽、また一羽と射落とされていく中、ガモーフの衝車が正門を突く音は止まない。一方、胸壁の上では、ついにガモーフ兵の一人が、槍を振りかざし梯子を上り詰めた。「撤退っ！」の声と同時に、胸壁の上にいたアルサスたちは、胸壁から駆け下りる。

決壊する堰と一緒だ。誰か一人でも、胸壁の上に上ってくれば、彼らの勢いをとめることは出来ない。それよりも、極力被害を減らす。そして、この砦が堅牢であることを利用する。アルサスの策は、まさにガモーフ兵が胸壁の上に上った瞬間から始まっていた。

「退け、退けーっ！」

アルサスは叫びながら、胸壁を駆け下りる。その瞬間、四つある見張り塔のうちひとつが、敵の魔法によって爆発する。無論、中にいた者たちは助からないだろう。アルサスは下唇を強く噛みながらも、頭上に降ってくる瓦礫を盾で防ぎながら、迫り来るガモーフ兵をにらんだ。

予想以上の数が、すでに胸壁の上に登って来ている。アリの中でも、攻撃的な役目を負ったアリのことを「兵隊アリ」と言うが、まさに、ガモーフ兵たちは青銅色の兵隊アリのようだ、アルサスは思った。そんな、青銅色の兵隊アリたちは、容赦なく、撤退するセンチ・レーバン兵を矢と魔法で射殺していく。あるものは背中から胸に鏃が飛び出し、血を吐いて絶命し、またあるものは魔法の礫に脳天を打ちぬかれて一瞬のうちに命を落とした。だが、ガモーフ兵は胸壁越しに、砦内に飛び道具を射るばかりで、アルサスたちを追いかけてこない。

「トライゼン將軍！ あいつらを誘い込むための、しんがり殿軍が必要だ」
弓矢を敵に射掛けながら、階段を下りてくるトライゼンにアルサ

スが言うと、トライゼンは少しばかり渋い顔をした。無論彼とて、アルサスと同じことを思っていたに違いないが、「無茶ですぞ！兵を再編している余裕はございませぬ！」のである。

「くそっ！！」

アルサスが言うと、少し前に行くバセットが急に足を止め振り返った。

「少年、策が成るまで、ここは引き受けた！行くがよい！」

「バセット！？独りで行くつもりか？だめだっ！！」

「策が成らねば、そなたはあやつらに殺されるのであろう？それでは、あの娘の心を救ってやる事が出来ない。それは、即ち、世界が滅びる。生まれ変わった世界に、そなたも我もない……。それを止める事が出来るのは、そなただけだ」

「バセット……何を言ってる……！」

「好いた女の一人も、分かり合えなければ、人間など滅びる運命なのだ！」

その言葉に驚いている暇もない、狼によく似た脚で踊るように階段を駆け上るバセットは、アルサスの制止も聞かず、魔法で生み出した炎の剣を口にくわえた。そして、三つの眼でちらりと、アルサスの顔を見ると、

「一族の者を頼んだ！」

と叫んだ。彼は、一匹で殿軍を引き受けたのである。殿軍とは、その規模にかかわらず、決死の部隊であることを意味している。己の命と引き換えに、敵軍をひきつけるのだ。

「殿下！今のうちに！！」

キリクがアルサスの手を引く。

「滅びの時を共に見るんじゃないのか、くそっ！！」

アルサスは、敵に駆け込むバセットから目を逸らし、階段を駆け下りた。まもなく聞こえた、狼の遠吠えのような悲鳴は、誰のものだったのか、アルサスは分かっていた。

その代わり、と言ってしまえば、あまりにも無機的に聞こえてし

まうが、バセットの働きは効果的であったといっているだろう。ガモーフ兵たちは誘いに乗り、アルサスたちを追いかけてきた。

ガルナック砦内は、最後の最後まで抵抗することを考慮してか、複雑に通路が入り組んでいる。砦内の構造に熟知したキリクを先頭に、アルサスたちは敵を誘導しつつ、砦の奥地へと入り込んだ。

「全軍に撤退の命令は？」

アルサスが問いかけたのは、トライゼンである。小走りに通路を駆け抜けながらも、トライゼンは厳しい顔をしていた。

「すでに通達してありますが、逃げ遅れる者も出てくるでしょう。しかし、彼らが大人しく降伏に従ったとしても……」

「一人でも多くの兵が逃げおおせるまで、爆索ばくさくに点火するのは待った。それに、そのほうが、多くの敵を巻き込める」

「はっ、分かっております。しかし、殿下自ら、このような策を申されるとは思っても見ませんでしたぞ」

「なんだ、皮肉なら勘弁してくれ。緒戦敗退のツケを払わなきゃならないんだ。そのためには、背に腹は返られなくなったただけだ」

と言うと、アルサスは前方に見える扉から手招きする兵に手を上げる。

「クロウ隊とカレン隊への連絡は密に。直ちに、砦を放棄する。お前たちもすぐに撤退しろ」

兵たちが頷くのを確認したアルサスは、扉から続く石造りの階段を下へと駆け下りた。まるで奈落へと続くように下へ降りていく。時折頬を掠めるひんやりとした風は、外の風が、地下で冷やされたもので、その奈落へ続くような階段は、外とつながる脱出口であった。

アルサスたちが地下の階段を駆け下りているその頃、地上では、エイゲルの攻撃も空しく、ついにガルナック砦の正門が打ち破られた。抵抗を続けるものもいたが、なだれ込んできた何千ものガモーフ兵にあっさり討ち取られた。だが、誰一人として降伏を受け入れないのは、理由があったからだ。

一方、地下を抜けたアルサスたちの前に広がるのは、ガルナツク平野の北にある小高い丘である。戦場を一望というわけには行かないが、ガルナツク砦の様子くらいは見る事が出来る。

正門が破られた今、ガルナツク砦には多数のガモーフ兵が乗り込んでいる。彼らは、センチ・レーバン軍の大將である、王子フェルト……即ちアルサスを探して、どんどんと砦の奥に入っていく。そのことはあらかじめ考えていた。ガルナツク砦という拠点を未練もなく捨てるつもりはなかったが、大軍勢を前に、選択肢の一つとして、前もって考えていた作戦である。

敵を砦内におびき寄せ、そしてあらかじめ砦内に仕掛けておいた、魔法装置を暴走させて、連鎖爆発させる。それを、アルサスは「爆索」と呼んだ。魔法装置を爆発させるという方法は、あの忌まわしきライオットの技術院が開発した技術である。もともと、魔法の宝石自体が希少性が高いため、実用的ではないとされていた。

その、報告書をアルサスが読んだのは、つい数日前である。精神を操るレパードの魔法装置を取り外したシオンの意識を戻すため、技術院が何か手がかりを残してはいないかと思ったのだが、結局得られたのは、魔法装置の暴走という技術だけであった。

「もう十分でしょう……爆索点火！ 砦もろとも、ガモーフ軍を一掃しろ！！」

キリクが代表するように、魔法騎士団に命じる。魔法騎士たちは、そろって魔法の言葉を唱え始めた。その魔力の念は砦内に仕掛けた、魔法装置に呼応する。

すると、まずは四つの見張り塔のうち、健在の三本が爆発と共に崩れ去った。それを合図に、砦内の内側に向かって、爆発が連鎖していく。その地鳴りのような音と共に、砦内にいるガモーフ兵のほとんどが、爆発と瓦礫の下敷きになって、命を落としただろう。

あまりにも恐ろしい策ではあるが、勝つために手段を選べないという辛さを、アルサスは崩壊していくガルナツク砦の姿に重ね合わせて、固く拳を握り締めた。

「よし、敵がガルナック崩壊に混乱している今が好機！ クロウ隊とカレン隊に合図を！！ 三方向より、敵の残存兵力を叩く！！」

トライゼンの指示にあわせ、合図の魔法球が打ち上げられる。すでに、アーセナルの放逐にあわせ、朝霧に紛れて裏門より、クロウ隊とカレン隊を砦の外に出し、各々を戦場の東西に配置済みである。

「俺たちも徒で、敵に突撃する！！ いくぞっ！！」

アルサスが腰のナルシルを引き抜いて、振り上げたその時だった。キリクが声を上げる。

「あ、あれは何だ！？」

キリクが指差す方向は、遙か南。ガモーフ軍の背後に聳え立つ、アトリアの最高峰「シエラ山」の頂上だった。

65. 背に腹はかえられない策（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せ下さい。

66. 翼ある人

季節外れの雪だろうか？　しかし、温暖な気候のガモーフ神国との国境沿いで、この季節に雪が降ることはない。ならば、シエラの山から降りてくる、あの白いものは何なのか。鳥？　それとも……。「人だ！！」

アルサスの傍らで誰かが叫ぶ。アルサスの眼には、それがはつきりと分かるわけではなかったが、鳥のような真っ白な羽を背中から生やした、人であった。言い換えるなら「翼ある人」。それらは、シエラの山頂にかかる薄い雲の中から次々と現れて、山肌をすべるように地上を目指した。

「どうなってるんだ……？」

思わず、唾を飲み下したアルサスは、額から冷たいものが流れ落ちるのを感じていた。

シエラ山の異変は、ガモーフ軍も気づいていた。ガルナツク砦の放棄と爆破というアルサスの策により、混乱をきたしたガモーフ先遣隊は、背後に聳える山の頂上より姿を現した、「翼ある人」に驚愕と更なる混乱を来たし、軍列を乱した。

その光景は、アルサスのいる丘からもよく見えた。予期せぬ事態、兵たちも浮き足立つ。

「まさか、ダイムガルドの新兵器か！？」

などと口々に叫び、うろたえる兵たちを、「静まれ、皆のもの……！！」とトライゼンが一喝したその時であった。その声ははつきりと聞こえた。鼓膜を揺さぶる空気の振るえなどではなく、確かにアルサスたちの頭の中に、響き渡ったのである。

『聞け、おろかなる者たちよ、私は女神との約束をここに果たす』
脳裏に呼びかける声、アルサスはその声に聞き覚えがあった。どのように語気を強めても、その声の裏に鉄よりも冷たい響きが見え隠れする声。

「メツツエ……！」

『千年前、私と銀の乙女は女神アストレアと約束した。時が過ぎ、再び人々が戦をするならば、この世界に再誕の鐘を鳴らせと。そして、彼女の予言の通り、十年前のヨルンの悲劇以来、世界は混沌とし、破滅への道を歩んでいる。世界は、異常気象や飢饉によって人々が命を落としていると言うのに、それでも争い続ける者たちよ、世界が生まれ変わる音を聞くがいい！ これは罰ではない。光となった魂は、清浄なる女神の慈愛のもと、新たな世界に生まれ変わる。それが、金の若子と銀の乙女が、アストレアより受け継いだ救いの願いだ！』

何処からともなく、人々の脳裏にメツツエ・カーネリアの声が響き渡った。それとほぼ同時に、ガモーフ軍の列に、文字通り雪崩れ込んだ「翼ある人」は、何処からともなく三叉の槍を取り出し、無機質な顔をして、次々とガモーフ兵を突いた。だが、それは殺すと言う行為とは、少しばかり違っていた。三叉の槍に貫かれた人たちは、うめき声を上げるわけでもなく、一瞬で光の粒になって消えたのである。

ガラススコップを取り出し、その光景をつぶさに見つめたキリクは青い顔をしながら、それをアルサスたちに伝えた。

「これが、救いだって！？ 殺戮と何が違うって言うんだ」

騎士の誰かが、声高に毒づいた。アルサスはひとり、遠目に見える白い翼をにらみつけながら、それがネルのしたことなのだと、心をざわつかせた。

あの時、即位式典の会場で「白き龍」を目覚めさせた時から、ネルは何かを決意していたように、アルサスの眼には映った。その決意が何であるかを知る術は、本人に聞き質す他にないのだが、言い換えれば、あの時、ネルは「銀の乙女」としての使命に目覚めた。

それでも、アルサスは心のどこかで、白き龍を目覚めさせ、ルミナス島を滅ぼしたのが、あの心優しい少女の行いと思っていたくはなかった。それは、アルサスにとって、ネルの裏切りに等しいことだった。

たからだ。しかし、目の前に突きつけられる現実、否応なしにアルサスを絶望させた

「始まってしまった……。もう、あいつの心を取り戻してやることなんて、俺には出来ない。やっぱり、人は分かり合えないんだ……！」

ナルシルの剣を握り締める手に、力が籠る。

「全軍に到達！！ 作戦を変更する。直ちに、クロウ、カレン隊と合流し、ガモーフの兵を助ける！！」

アルサスの声に、兵たちはどよめいた。つい今しがたまで、命のやり取りをしていた相手を助けるなどと、あまりにも突拍子もないことで、瞬くうちにどよめきは疑問と不満の声に変わる。

「説明している暇はない。だが、あれにみえるは戦争ではない！メッツェの殺戮だ！ その殺戮から、隣国の人を助けることは、騎士道の真髄ではないのか！？」

「し、しかし、それでは、死んでいったものたちが浮かばれません」「彼らも、俺たちが悪しきを挫き弱きを助くという騎士道の真髄を捨てる事を望んではない」

だが、アルサスの言葉に納得が出来ない様子の兵たちを、見るに見かねたトライゼンが一喝する。

「皆のもの、殿下の申される通りじゃっ！！ 敵の敵は味方と言う！ 我らが戦うべき相手は、誰か。思い起こしてみよっ！ ライオットを彼の欲望を餌に操ったメッツェ・カーネリアではないか！？」
トライゼンの怒号はびりびりと空気を震わせて、兵たちを奮起させた。あちこちから「そうだ、トライゼン將軍の仰られる通りだ！」と、声上がる。

「すまない、トライゼン……」

アルサスは、改めて自分の人望が、王子と言う位にのみあるのだと悟り、やや肩を落とした。

「そのような顔をされますな、殿下。兵を束ねるは、ワシの役目ですぞ」

トライゼンはアルサスの肩を軽く叩くと、兵たちに手早く指示を与えていく。アルサスたちセンチ・レーバンが攻撃の目標を変えて進軍を開始したのは、それから間もなくである。

その頃、戦場の東部に身を潜めて、時を待っていたクロウたちは、眼前の敵がシエラの山から下りてきた「翼ある人」たちによって、攻撃されていることを知り、こちらも俄かに騒然とした。

「いかがされますか？」

と、クロウに問いかけたのは、副官のブレック・ケイオンである。クロウはしばし瞳を閉じて思案をめぐらせた。状況がおかしな方へと変わってしまった。しかも先ほど聞こえてきたのは、メッツェの声である。ライオットのことはどちらかと言えば嫌いであったが、それでもヴェイル家を救ってくれた男である。たとえ、それが「使える駒」のためだったとしても、その恩を忘れたつもりはない。いわば、メッツェはその恩にとって仇である。

「これより我らは、あの白き翼をもつ者たちを攻撃する」

瞳を開き、そう命じたクロウに、兵たちは驚きを隠せなかった。

その驚きを代表したのも、またブレックであった。

「よろしいのですか？ フェルト殿下からの命令もないままに、攻撃対象を変えても」

「フェルト殿下……いや、アルサスならそうする」

「何故そう言いできますか？」

訝るブレックに、クロウは間をおかず、「僕があいつの親友だからだ」と言い少しだけ笑った。このとき、アルサスたちが「翼ある人」を攻撃し始めていたことを、クロウたちは知る由もなかった。本来なら、エアデ通信などを用いて、部隊間の連絡を取り合うのだが、アルサス側にその装備と準備がなく、作戦会議の予定では、アルサスたちがガルナック砦を爆破し、無事逃げおおせたら、魔法球を打ち上げ、本隊とカレン隊の同時三方攻撃を開始する手筈だった。

しかし、ガルナックから爆炎と煙が上がっても、その合図がない

今、クロウは親友のとりでであろう行動を察知し、独断で命令を破ることを決意した。

同じ頃、西側に配置したカレン隊も、同様の算段をまとめ、ガモーフ軍から目標を「翼ある人」に変えて、進軍を開始していた。このときに及んで、彼らの信頼が必然のように合致したことを、それぞれは知ることもなく、同じ敵に向かって兵を進めたのである。

炎上するガルナツク砦の脇を抜け、駆け抜けたアルサスたちは、各々の武器の先を「翼ある人」に向けた。突然の援軍が味方ではなく、つい今しがたまで矛を交えていた敵であることを知ったガモーフの青銅色の騎士たちは、少なからず動揺した。

しかし、アルサスたちが当面の敵でないことを悟ると、彼らは徒にアルサスたちを攻撃することではなく、共に、シエラの山より次々とあふれ出してくる「翼ある人」を攻撃した。

「翼ある人」を間近で見ると、その異様な姿に、皆青ざめた。皆同様の三叉槍を携え、鳥がごとく宙から攻撃を仕掛けてくる。その背中に映えた翼は、白鳥を思わせるほど真っ白であり、身にまとう白い鎧と白いスカートと併せて、その清浄さが不気味にすら見えた。だが、もっと不気味なのは、端正な顔立ちである。青い瞳に生氣はなく、どちらかと言えば石像か何かを思わせる無機質さがある。そして、なにより、どの「翼ある人」も同じ顔をしているのだ。

「こいつら、双子かよ!?!」

「いや、千つ子だろ!」

そんな声さえ飛び交ってくる中、アルサスたちは「翼ある人」に斬りかかった。地面を蹴って高く舞い上がり、一刀のもとに切り伏せる。だが、その手に伝わってくるのは、肉を絶つ鈍い感触ではない。いや、むしろ、感触がないのだ。それでも、剣身は「翼ある人」の左腕を確実に斬り取っていた。

ところが、地面にごろりと転がった、「翼ある人」の左腕は、突然光の粒になり、もとあった場所へと還っていく。それは、アルサ

スの眼に、まるで斬り落とされた腕が再生していくように見えた。

「な、何なんだ、こいつらっ!!」

アルサスは思わずうろたえた。すでに、彼は「翼ある人」が人間、いや生き物でないことを認識していた。だが、生き物でないとすれば、何と形容していいのか。それは、おそらく、光の粒の集合体。思えば、即位式典でネルを刺したとき、彼女の体を覆った光の粒と、「翼ある人」の光の粒はよく似ているような気がした。

フォトン・アクション……。

その言葉の意味をたどる暇などない。左腕を再生した「翼ある人」は無機質な表情のまま、三叉槍をアルサスめがけて繰り出してきた。咄嗟に、アルサスは地面を蹴って後ろへ飛びのいた。「翼ある人」の攻撃にまったく迷いがない。たとえ、いがみあい、憎しみあつて戦争をしていても、誰もが相手を殺すときには、一瞬の躊躇をするものだ。それが、普通の心をもった人間だ。その一方で、たとえば、黒衣の騎士団団長のギャレット・ガルシアのように、人を殺すことに愉悦を感じるような輩もいる。しかし、「翼ある人」のそれは、ギャレットのような人間とも違う。まったくその刃に感情がないのだ。

その所為なのか、センチ・レーバンの兵も、ガモーフの兵も、却って恐怖を感じて、「翼ある人」に隙を与え、瞬くうちに光の粒になって、みんな消えていく。

両軍がごちゃ混ぜになり、混乱がピークに達したときには、すでに戦場は「翼ある人」で溢れかえり、恐怖と光の粒で満たされていた。

それに引き換え、アルサスたちは何度剣を振っても、なかなか敵を殺すことが出来ない。剣で斬っても、槍で突いても、弓矢で射ても、魔法で焦がしても、一度光の粒になったかと思えば、すぐに再生する。

「トライゼン将軍！ クロウと、カレンを探して体勢を立て直すっ」
アルサスは、「翼ある人」の繰り出す槍を避けながら、近くで戦

斧を振り回す老体に、呼びかけた。

「了解いたしたっ!!」

トライゼンが、少しばかり疲れの見え始めた顔で、そう答えたその瞬間だった。アルサスは不意に、足元の石に疲れた足を取られてしまった。視界がぐるりと反転する。転倒してしまう、と思ったその瞬間には、アルサスの眼前に「翼ある人」の槍が迫っていた。咄嗟にアルサスはナルシルを平行に構え、三叉槍を防ごうとした。だがその刹那、激しく弾け飛ぶような音がして、ナルシルの剣が、剣身の中央から折れてしまう。

「な、何っ!？」

折れた剣先が弧を描き、地上に突き刺さる。アルサスの手元に残ったのは、柄と剣身の三分の一だけ。そして、同時に、三叉の槍はアルサスの肩口を容赦なく突き刺した。そこは、胸甲冑と肩当の間。悲鳴を上げる余裕もなく、アルサスの肩を真っ赤な血が染め上げていく。

「殿下ーっ!!」

トライゼンが青い顔をして飛び込んでくる。振り上げられた戦斧は「翼ある人」の頭上から、真っ二つに切り下ろされた。「翼ある人」は光の粒になり消える。その光の粒はガルナック平野を吹き抜ける風に乗って、シエラの頂へと昇っていく。それが、再び「翼ある人」の形を成すのだ。

「トライゼン將軍っ、剣をくれっ!!」

アルサスは、折れたナルシルを鞘に収めつつ、トライゼンに命じる。だが、その右肩の痛みは尋常ではなかった。よろめき膝を突くアルサスに、トライゼンは、「傷の手当てを」というが、そんなことをしている余裕などなく、アルサスは無理矢理トライゼンの腰から、帯刀の剣を引き抜いた。トライゼン愛用の、幅広の剣「ブロードソード」である。

「このままじゃ、皆光の粒になって消えてしまう……。キリクっ!!」

トライゼンの剣を片手に、アルサスはキリクを呼ぶ。キリクは額から血を流していたが、どうやら大事には到っていないらしい。アルサスの元に駆け寄ってくると、「何でございますか?」と尋ねる。「全軍とガモーフの軍に撤退を勧告しよう。このままじゃ、埒が明かない」

「しかし、部隊は、バラバラです。クロウどのも、カレンどのも、一体何処にいるのか、無事なのかさえ分かりません。退路も塞がれ、もはや、進むことも戻ることも適いませんっ」

ガルナックで顔をあわせた折、冷静に見えたキリクの顔が、焦りの色とも取れる顔色に変わっていた。

「それでもっ。ここで死ぬわけには行かない!!」

アルサスは、キリクをにらみつけた。確かに、彼の言うとおり、混乱の中、進むことも戻ることもままならない状態になってしまった。クロウたちが広大な戦場の何処にいるのかさえも分からない。そんな状況を打破する方法を思案してみるが、思いつくはずもない。と、アルサスが歯噛みしていると、そんなアルサスの内心を悟ったのか、それと意を汲んだのか、トライゼンがおもむろにこう言った。

「ならば、ワシが王都への血路を切り開きますぞ!!」

66. 翼ある人（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せ下さい。

67. 再誕の鐘が鳴る

「血路って……？」

アルサスは思わず耳を疑った。しかし、トライゼンの瞳ははつきりと、アルサスの眼を見つめていた。

「クロウとカレンであれば、無事でしよう。すぐに、魔法騎士団の生き残りに撤退の合図を打ち上げさせます。その上で、我らが撤退すれば、ガモーフの者たちも、撤退を始めるでしょう。後は、追撃を退けつつ、王都へ。王都であれば、常に魔物よけの魔法障壁が築かれています。彼らにそれが通用するかどうかは分かりませぬ」

淡々と、トライゼンは言葉を吐き出していく。いっそ清清しくも聞こえてしまう。

「更に、老婆心ながらの進言にございます。メッツェの力……いや金の若子と銀の乙女の力は未知ゆえに、ここは各国と同盟を結ばれることを具申します。とくに、ダイムガルドは我らよりもはるかに進んだ技術と国軍力を養っていると聞き及びます。あるいは、彼らなら、不死身の『翼ある人』を葬る手立てを知っているかもしれない。さらにもうひとつ。王都へご帰還なされましたら、直ちにここより近い王都は放棄し、西の果てにある第二の砦、ルートニア城へ移られることをお勧めします。それが、わが国の最終的な防衛線です」

「そんなこと、どうだっていい！！ 將軍、死ぬつもりなら許可できないうっ！！ 將軍の力は、センチ・レーバンになくってはならないものだ。將軍がいなければ、兵たちを誰が纏め上げるといふんだ？」

アルサスは、声を荒げた。すると、トライゼンは立派な髭の下で満面の笑みを浮かべた。どうしてそのような顔が出来るのか、アルサスには甚だ理解できなかったのだが、トライゼンはさも嬉しそうに、

「そのお言葉だけで、センチ・レーバン王国に尽くしてきた甲斐が

「ごさいました」

と、言った。

「兵の統率であれば、クロウが適任でございましょう。人望などというのは、後からついてきます。必要なことは、冷静で的確な判断が出来る人物です」

「將軍、血路を開くことは、冷靜的確な判断とはいいい難いぞ！」

「いや、的確です。クロウには、ブレックも就いております。さらに、キリク、カレンが彼を補佐すれば、ワシのようなロートルなど出る幕はございません。……そもそも、騎士団を預かる立場として、ライオットの野望を阻止し、メッツェの正体と本心を暴けなかったのは、このワシにも責任がございます。その名誉を取り戻す機会を何卒、おあたえくだされ。あの魔物のバセットとやらばかりに、いい恰好はさせられませぬ」

何を言っても聞く耳は持たない。トライゼンの言葉の裏には、老人らしい頑固な意思が読み取れて、アルサスは返す言葉を失った。

「殿下……。あなたさまは、聡明さにおいてシオンさまに劣る。武勇においてクロウに劣る。しかし、何よりも、他人を想う優しさは、あなたの最も秀でたところにございます。その心、ゆめゆめお忘れなきよう。さすれば、人はいつか分かり合う事が出来るでしょう」

「トライゼン將軍……わかった。俺たちのために、血路を開いてくれ。魔法騎士団には、ただちに撤退の合図を送らせろ。將軍が切り開いてくれた血路を、王都へ撤退する！ キリク、ナルシルを預かっておいてくれ」

トライゼンに頷きつつ、アルサスは鞘ごと折れたナルシルを手渡した。そして、トライゼン愛用のブロードソードをかざし、

「この劍に誓う。トライゼン・バルック將軍の名を、センチ・レーバン王家末代まで伝えると……」

トライゼンはその言葉に頷き返し、戦斧を振り上げた。そして、群がる「翼ある人」めがけて突撃していく。振り上げた斧は、ばっさばっさと敵を切り裂いていく、すぐに再生し元に戻る。だが、舞

い散る光の粒の中、その鬼気迫るトライゼンの姿に、徐々に「翼ある人」たちの列が乱されていった。

魔法騎士団はこの機会を逃すまいと、撤退を知らせる魔法球を打ち上げた。魔法球は、四色の色によってその指示内容が変わり、それを見たセンチ・レーバンの兵隊は、悔しさを滲ませながらも、トライゼンの切り開いた退路から撤退を開始する。

「我々も、急ぎましょうっ!!」

キリクが言う。アルサスはすでに「翼ある人」の群れの中に身を投じ、見えなくなってしまったトライゼンの後姿を見つめていた。

と、その時である。まるで屍に群がるハゲワシのような「翼ある人」の中心から、光の粒が溢れた。それは、トライゼンの最期の姿だったのかもしれない。それを確認する術はなく、アルサスはブロードソードを固く握り締めて、踵を返した。

何度目の敗北か。自らの無力さは、ここに来て確定的となった。せめそんな自分に願えることは、クロウとカレンが無事であることだけだ。王都へ戻り、トライゼンの遺言通りルートニアへ遷都する。シオンの目覚めを待つことは出来ない。各国が力をあわせ、来る再誕を前にした滅びと戦わなければならない。そして、今度こそ、ネルを殺さなければならない。そうしなければ、この世界に息づく人々すべてが、光に変えられてしまう。

アルサスは気弱になりかけた心を奮い立たせ、キリクの後を追いかけた。一度敵に背を向けることは、戦場において無防備と言う。トライゼンの切り開いた血路は、瞬くうちに修復する。それは、「翼ある人」が感情を持たない相手だからである。トライゼンの最期の姿を見ても、なにも心が揺れることなく、命じられたことを粛々と護る。何故なら彼らは死ぬことのない「翼ある人」だからだ。

彼らは、逃げ行くセンチ・レーバンの兵をカモとばかりに空から追いかけて、次々と三叉槍の餌食と変えていく。貫かれたセンチ・レーバンの兵は悲鳴を上げることも泣く光の粒となって消えていく。それは、人の死としては、あまりに美しく、あまりに空しい。

だが、決死の殿軍を組織する余裕などなかった。いや、むしろ、トライゼン以上の犠牲を払うだけ、冷酷になれなかった。すでにここ数日の間に、アルサスはたくさんの犠牲を払った。名も知らぬセンチ・レーバンの兵、裏切り者のアーセナル、救援に来てくれたバセツト、斬り殺した幾人ものガモーフの兵。

心のどこかでは分かっていた。人と人が争いあっている場合ではないことを。本当の敵は「奏世の力」であることを……。

「くそっ！ みんな、走れっ。振り向くな！！」

アルサスの声は枯れていた。振り回すブロードソードの重さに、腕が悲鳴を上げている。しかも、斬っても斬っても、手ごたえのひとつ感じられない。

そうした疲れは、誰もが抱えていた。ガルナックを放棄した際には、まだ東の空にあった太陽が、いつの間にか、西の空に傾いている。そんなことに今更気づいたところで、どうにもならないが、ただそれだけの長い時間、時を忘れて戦っていたと言うことだ。

疲労を溜め込んだ両の足は重く、アルサスが「翼ある人」に振り向いた瞬間、迫り来る別の殺意に気づかなかった。

「神国に仇なすセンチ・レーバン王子、覚悟っ！！」

突然の叫び声がアルサスの傍を掠めると、アルサスの背中が斬られるのは、ほぼ同時のことだった。振り返ると、そのガモーフ兵は、自分と同じ年かそれよりも年下の少年であった。彼は、傷ついた全身を小刻みに震わせながら「やった、やったぞ」と、うわ言のように繰り返す。

「このっ、何やってんだっ！！ 俺たちは敵じゃないっ」

アルサスはガモーフの少年兵を睨み付けると、乱暴に少年を殴った。少年は殴られた頬を押さえながら、悲鳴を上げる。

「て、敵だ！！ 白き龍の力で世界を支配しようとする敵だっ！！ 俺は出征するとき、ガモーフの父母にセンチ・レーバンを滅ぼしてくると誓ったんだ」

「メツツェの声が、聞こえなかったのか！？」

「あれだって、お前たちが俺たちを嵌めるために考え出した奇策だろう！？」　ユベルも、エランも、お前たちに殺されたんだ」

何を言っているのかよく分からなかったが、ユベル、エラン、というのは、彼の友であったのだろう。少年兵の瞳に宿るその憎しみは、真っ直ぐにアルサスを捉えて離さない。アルサスがどう諭しても聞く耳など持たない。少年兵はそんな顔をしていた。

「殿下っ！　上ですっ！！」

突然キリクの叫び声が、アルサスの耳朵を打つ。立ち止まっている人間は、「翼ある人」にとって絶好の標的であった。一羽の「翼ある人」がアルサスと少年を狙いに定めて、上空より急降下してくる。振り向いたキリクの叫んだにもかかわらず、アルサスは疲労で重たくなった体を上手く反応させることが出来ず、ブローソードを振り上げるだけがやっとだった。そんな勢いのない剣など、「翼ある人」の槍の前に歯が立つはずなどなく、アルサスは剣を取りこぼしてしまう。

「殿下ーっ！！」

キリクの声も空しく、アルサスはわき腹を貫かれた。喉の奥を逆流してくる生ぬるくぬめったものが、自分の血であると思った時、アルサスは自分もまた光の粒になって消えてしまうのではないかという恐怖にかられた。

だが、伝わるのは痛みばかりで、光になったりはしない。どうして、自分だけ光にならないのか、その理由は定かではなかったが、アルサスは三叉槍が引き抜かれると同時に、足元に落とした剣を拾う。

「くそっ！　死ぬわけにはいかねえんだ」

アルサスは霞む視界で、剣を振り下ろすが、その切っ先は「翼ある人」を掠めもしなかった。ちらりと背後に視線を送れば、先ほどのガモーフの少年兵がみつともないほどの泣き声を上げながら走っていく後姿が見えた。

「くっ、バケモノっ！　こっちだっ！！」

アルサスは剣を構えながらも、挑発じみてそう口にしたが「翼ある人」はそれに対して憤慨も見せない。ただ無感情に、再び三叉槍を繰り出した。その鋭い切っ先が、アルサスの体を貫いた瞬間、キルクの叫び声が聞こえたような気がしたが、アルサスは遠のく意識の中で、ネルのことを思い浮かべていた……。

カルチェトの街で見た、彼女の朗らかな笑顔は、とても美しいと思った。可憐だが頼りない後姿を、彼女の心を守ろうと思った。その時から、アルサスは迷っていた。「奏世の力」に目覚める前にネルを殺めるという使命を、果たすべきか否か。

だが、そのどちらも選ぶことが出来ないまま、彼女は妹の死に心を碎き、争いと隣り合わせの世界に絶望した。誰かが誰かを思いやり、互いに分かり合うことが出来たなら、この世界はもつとマシになる。だから、世界を「分かり合える世界」に生まれ変わらせる。

ネルはその決意とともに、アルサスと訣別した。ネルの力によって消えた人々は、ルミナスの人たちを含めて、新たな世界に生まれ変わることだろう……。だが、その世界のために、今ある世界の人間が恐怖することは、正しいといえるのだろうか？

「ネル……間違ってる。この世界は、そんなにひどい世界じゃないはずだ」

アルサスは剣を落とし、その手を何もない虚空に掲げた。まるで、ネルの手を取るように。だが、そこにか弱く細い少女の手はない。

「フェルト殿下ーっ！！ お逃げ下さいーっ！！」

キルクの絶叫をバックに、「翼ある人」は、止めの一撃と言わんばかりに、三叉槍を振り上げた。光にならないのなら、死んでしまえ。無機質な「翼ある人」の眼はそう言っているようだった。

その時。不意にアルサスの頭上を影が覆う。突風のような風とともに、何かが舞い降りてきて、その太い足でアルサスの血まみれの体を、文字通り驚づかみにした。

「トン……キチ」

もはや、血が足りず、はっきりと見えるわけではないが、その巨

大な翼は間違いない、人外の友であった。

トンキチは、体中に矢を突き立て、羽毛の隙間から血を滴らせながら、ほうほうの体でアルサスを助け、空を飛ぶ。

「まだじゃ。まだ死んではならんぞ、アルサスっ!!」

アルサスの意識がぷつりと途絶える瞬間、トンキチは確かにそう言った……。

命令を無視することの重大さは分かっていたつもりだが、クロウは隊を率い、敵軍の中を駆け抜けて「翼ある人」に飛び掛った。剣を振り「翼ある人」を斬っていくが、アルサスたち同様、何度斬っても再生する未知の存在に、次第に劣勢の色を極めていった。

一方、カレン隊も、クロウ隊と同様の決断を下し、ガモーフ軍の救援のため戦場を駆け巡っていた。カレンの双剣はすでに片方の剣を失っていたため、騎士団の通常装備である剣に持ち替え、次々と迫り来る「翼ある人」を斬っていた。

そんな両部隊が合流を果たしたのは、戦場の中心であった。

「クロウさま!! このままでは、わたしたちも光になってしまいます!」

カレンは開口一番、クロウに撤退を進言した。それは奇しくも、アルサスたちが撤退を決意したのとはほぼ同じタイミングであった。しかし、そのことを知る由もないクロウは、馬上で剣を振り上げながらも、一瞬戸惑った。

「だけど、フェルトが!」

「殿下ならば、逃げおおせているはずです。あのお方ならば、退き際に弁えていらっしゃる。隊長! 我らも撤退を!!」

ブレックの声が、クロウに決断を迫った。武器も魔法も効果が無い、不死身の化物相手に、これ以上戦闘を続けることは出来ない。アルサスならば、そう思うに違いない。いや、例えばアルサスが意固地になっても、キリクやトライゼンがそれを止める。

すぐさま、クロウはカレン隊を併せた全軍に撤退の勧告を発令す

る。冷静な判断力。トライゼンが評価したとおり、クロウは生き残るという選択肢を選んだ。だが、そのトライゼンが決死の突撃を行ったことも、クロウは後になって知ることだった。

「ガモーフ兵！　すでに戦争は戦争としての体を失った。このままでは、徒に死するのみ。今は互いに剣を収め、自国にもどられたし！！」

クロウは声を張り上げ、ガモーフ兵にも撤退を促す。その間も、シエラ山の頂からは、次々と「翼ある人」があふれ出し、その山肌を滑り降りて、襲い掛かろうとしていた。ガモーフ軍の中には、クロウの声に、更なる反発を見せ、「翼ある人」に挑みかかる者もいたが、多くはアトリアの谷を目指し逃げ出していった。

それを確かめたクロウは馬の首を返す。と、隣のカレンが「あっ！」と声を上げて、南の空を指差した。クロウも空を見上げる。

「あれは……エイゲル？」

空のとても高い場所に、一羽のエイゲルが飛んでいる。地上からでははっきりとその姿を確認することは出来なかったが、そのたくましい両足で、何かを掴み、まるで戦場の真上を飛び越えて、南に向かって姿を消した。クロウは、その魔物の姿に胸騒ぎを覚えつつ、カレンを従えて、追撃してくる「翼ある人」を追いつつ、王都への帰路に就いた。

その日、アトリア連峰の最高峰、シエラ山の頂より姿を現した、白い翼を持つ人、「翼ある人」は瞬くうちにガルナック平野から、世界を席卷した。それが、世界再誕の始まり「再誕の鐘」の音であったことを、本当の意味で理解している者は少なく、人々は無機質に生き物を光に変える彼らの出現に、ただ怯えた……。

67. 再誕の鐘が鳴る（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せください。

68. 無限の砂漠

世界に暗雲がたち込める。実際には、空は平和に雲ひとつない姿を晒しているだけなのだが、人々はそんな青空を見上げている心の余裕がなかった。それを暗雲と呼ばずして何としよう。

遡ること一週間あまり前。センチ・レーバンの新国王即位式典に端を発した、センチ・レーバン王国とガモーフ神国の諍いは、ガルナック平野でその火花を散らした。

ガルナック砦に立てこもるセンチ・レーバン軍に対して、先遣隊だけでも三倍、本隊を併せればほぼ十倍以上の総勢力を傾けたガモーフ神国。自国の防衛基盤を捨ててまでの行動の背後に、後顧の憂いとなるダイムガルド帝国との「不可侵条約」があったことは、あまり知られていない。だが「白き龍」に怯える気持ちは、両国にとって共通のものであった。それだけ、ホルンの悲劇は、この世界に生きる人たちにとって、トラウマ以外の何ものでもなかったのだ。そのため、ダイムガルド帝国は「ホルンの戦い」以来の自国の専守防衛の観念から、センチ・レーバンに力を貸さない代わりに、ガモーフにも力を貸さず、その隙に乗じて領土を侵さないという密約を交わした。それは、センチ・レーバンにとっても好都合であった。

そうして、ガルナック平野に大挙を押し攻め入ったガモーフ軍は、終始優勢のまま、戦争を進めたいらしい。本来ならば、センチ・レーバンには独立自治権を有する諸侯たちが居り、王国の一大事には馳せ参じることとなっていた。そうして初めて戦力は拮抗するのだが、これもまた即位式の一件以来、諸侯たちは自領に閉じこもってしまったのだ。そのため、早いうちに、二つある騎士団をまとめていたガモーフ軍は、「ウェスア大司教肅清事件」の影響もなく、圧倒的な数の有利を勝ち得た。

ところが、その戦争の事態が一変したのは、二日目のこと。突如天より声が舞い降りた。それは、ガルナック平野どころか、全世界

の人々の脳裏に響き渡ったのである。

世界再誕。どこか、現実離れたその響きに、人々は笑ったが、間もなくその言葉がけしてまやかしなどではないということを知る。シエラ山の頂にかかる薄い雲から次々とあふれ出した、白い翼を生やした人。「翼ある人」と便宜上名づけられたそれは、人というにはあまりに無機質であった。戦場を駆け巡り、携えた三叉の槍で、センチ・レーバン、ガモーフ両国の人々を光の粒に変えた。そして、戦場を混乱と悲鳴に埋め尽くすと、「翼ある人」はついに世界中へと散らばった。

その数は、数えることすら難しい。その、おびただしい「翼ある人」が世界中の街や村を襲ったのである。彼らは、どんな武器で傷つけてもたちどころに蘇る。そして、無感情に人間を狩るのだ。世界中の人々はその時になって初めて、「世界再誕」の意味を知った。すべてを壊し、作り直す……。

人々は、その事実に怯え、ヨルンの悲劇と重ね合わせた。折りしもの飢饉と、「翼ある人」の出現は、誰しもの心に暗雲を呼び寄せる。

そうして、一週間でどれだけ街や村が消えただろう。今や、白き龍に匹敵する恐怖の対象となった、「翼ある人」が世界を滅ぼすまで、それほど猶予はなかった。

鋼鉄の国ダイムガルド帝国には、何処までも砂が埋め尽くす大地が横たわる。そこは、太古より砂漠であり、地平線の向こうまで砂丘が続くため、「無限の砂漠」と呼ばれていた。水もなければ草木もない。オアシスのひとつもありはしない。もしも何の装備もせず、ひと度、無限の砂漠に入れば、二度と生きて砂漠から出ることは出来ないと言われている。それほど過酷な場所なのだ。

そのため、無限の砂漠はダイムガルドにとって、天然の堀に等しい存在であった。また、この砂漠のおかげなのか、「翼ある人」は、無限の砂漠の中心部に位置する、ダイムガルド帝都にまで押し寄せ

て来ない。しかし、現状を鑑みれば、それも時間の問題だろう。すでに「翼ある人」は、無限の砂漠への玄関口と呼ばれるレメンシアの住人を一夜にして消し去った。街の南に広がるのは、無限の砂漠。そしてその向こうには、ダイムガルド帝都がある。つまり、天然の堀と言われる無限の砂漠の、外堀を埋められた状態なのだ。

そんな砂漠を三人の人影が、足跡を残しながら帝都の方角へと歩いていく。彼らはダイムガルド軍制式装備である金色の兜と鎧を、じりじりと照りつける太陽に反射させていた。

その先頭を歩くのは、兜のため顔は見えないが、少女であった。少女は兜のバイザーに設けられたスリットから見える、砂の大地をじっと見据えながら歩く。帝都の方角は太陽の位置と照らし合わせれば分かるし、バイザーの裏面にあるヘッドアップ・ディスプレイに、緑色の文字でコンパスが表示されているから、それを頼りにすればいいのだが、集中力を絶やせば、砂漠に迷ってしまうかもしれないという不安はかき消すことが出来ない。それは、いくら機器が発達しても、ダイムガルド人の心に刷り込まれた、民族的な考え方に相違ない。だから、少女は砂漠を流れる砂の文様を見据えて歩くのだ。昔からの言い伝えで、砂漠の文様は帝都に続いているといわれている。現に、少女の眼に映る文様は、コンパスと同じ方角を示していた。

しかし、そんなものばかり見ていては、かえって集中力をそがれてしまう。だから、突然、ヘルメットの内部で鳥の鳴き声のような呼び出し音が鳴り響き、少女はドキリとした。

『セシリア中尉。セシリア・ライン中尉！』

少女の名を呼ぶ音声は、ヘルメットの耳と密着する部分から聞こえてくる。多少、ザラザラとした雑音ノイズが混じっていたが、その声は男のものとはつきり分かるほど、野太い。

「何だ、ジャック・ハイト軍曹？」

少女……セシリア・ラインは努めて威厳のあるような低い声で、音声の主に問いかけた。

『いえ、別に何かあるってわけでもないんすけど。こう黙りこくって、砂漠の文様ばかり見つめていると、頭がおかしくなっちまいそ
うで』

音声の主、ジャック・ハイトはそう言うとおどけたように笑って見せた。いや、笑ったかどうかは、ヘルメットの所為で分からないが、雑音に混じって、ジャックの笑い声が聞こえたような気がした。

『僕も。レメンシア方面のパトロールから、もう三日ちかく口聞いていると、気が滅入りそうですよ』

今度は、別の声が聞こえてくる。ジャックよりは若い、というよりは少年のような透き通った声だ。その声は、列の一番後ろを歩く、少し背の低い甲冑からである。

「でも、マーカス・ヒル伍長。装甲の電源にあまり余分はない。無駄話で、電源を使ったら、帝都に帰り着く前に、無限の砂漠で行き倒れになってしまうかもしれない」

『そうですか……もうじき帝都が見えてくるはずですよ。少しぐらいならいいでしょう？』

マーカスに言われて、セシリアは少しばかり思案した。正直なところ、砂漠の哨戒任務ほど退屈で、気が滅入ってしまうものはない。少しくらいなら……と思ってしまうあたり、いくら威厳ある声を出したところで、セシリアも年頃の娘に過ぎなかった。

「そうね。少しくらいなら。それで？」

と、セシリアは話題を振りながらも、返ってくる答えは大体分かっていた。

『あの鳥人間ですよ、鳥人間。ガモーフじゃ、「翼ある人」なんて呼ばれてるみたいすけど、ありや何です？』

セシリア、ジャック、マーカスの三人が、哨戒も含めてレメンシアの街の現況を確認する任務を仰せつかり、レメンシアへ向かったのは、三日ほど前のことである。帝都を出発して、無限の砂漠を越え、ようやくレメンシアに辿り着いた彼らの眼に飛び込んだきたの

は、がらんどうとした静寂の町並みであった。

レメンシアの街は、先述の通り無限の砂漠への玄関口である。と同時に、空白地帯の国境と結ぶ、スエイド運河と面した交易都市として機能している。そのため、世界が飢饉などで元気がなくなった今でも、活気に溢れ、帝都に匹敵するほどの人口を抱えていた。

それが、たった一夜にして、全員光の粒になって消失したなどと、実際に目にするまでは信じられなかった。

だが、現実には街からは、人がすべて消えていた。残されたのは、争った跡とその直前までの生活の跡。無残にも廃墟と化した街並みに、活気などおおよそありはしなかった。

さらに、セシリアたちは廃墟の中で、敵の姿を目撃した。白い鎧、白い肌。そして背中には白い翼を生やした人。それが、「翼ある人」だとすぐに気づき、事を問い質そうとしたのだが、彼らは問答無用の構えで、セシリアたちに迫った。だが、武器がまったく通用しない。斬っても突いても、光の粒になって再生しまた、襲い掛かってくる。「翼ある人」の恐ろしさを目の当たりにしたセシリアたちは軍司令部への報告を優先して、レメンシアから退いた。

『あれって、魔物なんですかね?』

と、マークス。

「少なくとも、あの感情のない目は、生き物のそれには見えなかった。魔物と言っても、本当に魔界から来たわけではない。だけど、あいつらは、本当に魔界から来たのかもしれないな」

『魔界……そんな御伽噺みたいなことあるんですか?』

「どこまでを現実の話として、どこからを御伽噺だと言うのかは、とても曖昧なもの。白き龍の存在以前に、神話ですら、実在していることを、わたしたちは知っている。そして、事実として『翼ある人』はこの世界に現れ、人々を光の粒に変えている。その目的があるの言ったとおり『世界再誕』だというのなら、魔界も御伽噺じゃないのかもしれない」

そう言って、セシリアは二人に聞こえないように苦笑した。魔界

だの御伽噺だのそんな物語のような言葉を口にしながら、自分たちが現実主義の権化である軍人であることが、少しでも滑稽に思えた。『それにしても、パイル・パレットのバヨネットも効かないなんて折角、技術部が開発した対魔法使い用の新兵器なのに』

『俺たちに魔法が使えたら、あいつら敵じゃなかったんスかね?』

マーカスとジャックが揃って悔しそうな声を漏らす。

パイル・パレットとは、ダイムガルド帝国軍がある技術を用いて開発した、新型兵器である。ダイムガルド人は、その殆どが魔法を使うことが出来ない。よしんば、魔力のある人間も、所詮は火起こし程度の魔力しかなく、他の二国の民に劣る。十年前、ヨルンの戦いで、その事実を突きつけられたダイムガルド人は、自国防衛の名目で新兵器の開発に着手した。そして、完成したのが、パイル・パレットである。パイルとは、ダイムガルドの古い言葉で「杭」を表し、パレットとは同じく「弾」という意味があるらしい。つまり、パイル・パレットのバヨネットとは、「杭の弾丸」を打ち出すための細長い長方形の鉄筒で、内部に仕込まれたミスリルの杭を、取っ手に取り付けられた引き金を引くことで、魔法を用いない「火薬」と呼ばれるものを小爆発させて打ち出すという、これまでにどの国でも見たことのない兵器であった。追記しておけば、外見はかつてダイムガルド軍が使用していた「いしゆみ（ボウガン）」によく似ている。

「魔法だって、通用したかどうか……。とにかく、早く帝都に戻って、報告しなきゃ」

『でも、報告書をどうやってまとめるんスか? まさか、報告書に「魔界」だなんて、書くわけじゃないっスよね?』

おどけて言うジャックに、セシリアは人知れず溜息を付きながら、「報告書を書くのは、体調のわたしの役目。心配してくれなくてもいい。それよりも、帰ったら、わたしの装甲の手入れも頼む。さっきから、砂詰まりのアラートが鳴りっぱなしだ」

と、兜のバイザー裏に設えられたディスプレイの隅に、小さく表

示される赤い魔法文字に目をやった。ほぼ全身甲冑であるダイムガルド帝国軍の金色の鎧は、油断していると風に舞いあがった無限の砂漠の砂が、あちこちの隙間に入り込む。すぐに支障があるわけではないが、放っておくと目詰まりを起こして、後始末が大変になる。しかし、鎧の手入れときたら、大事なことではあるが、退屈な哨戒任務よりも、欠伸が出してしまうのもまた事実。しかも、セシリアとしては無骨な鎧と睨めっこするのはあまり好きではなかった。

『えっ、マジっスか？』

げっ、と声に出して露骨に嫌がるジャック。セシリアは兜の内側でクスリと笑って「マジっスよ」と答えた。

『ジャック先輩。頑張れ』

『うるせえ！ マーカス、てめえも手伝えよなっ！！』

セシリアは、部下である他愛のない二人の会話を聞きながら、ふと視線を上げた。バイザーのスリットから見える視界はそれほど大きくはない。戦闘においては、その視界の狭さが却って足手まといになるのだが、こうして砂漠を横断する際には、直射日光を避けるために、しっかりと着用しなければならなかった。

それでも、バイザーのスリットから見えるダイムガルドの青空は、いつでも夏の空のように青く澄んでいる。そして、陽炎に揺らめきながら、地平線の彼方まで無限に広がる真っ白な砂漠……。時折灰色狼によく似た三つ目のヴォールフの姿など、魔物のはいかいする姿は見えるが、人の姿はない。

帝都で生まれ育ったセシリアにとって、見飽きるほど見てきた風景なのに、砂漠はいつでも表情を変えて、新しい驚きを与えてくれる。国家運営にとって、ほとんど負にしかない砂漠も、眺めるだけなら、それほどひどいものに思えてはこない。現に、この苛酷な環境だからこそ、本来駆逐されるべき、魔法の使えないダイムガルド人が、ひとつの国家を気づきあげることが出来た。その影にある、恩恵はすべて砂漠と、偉大なる母の山、アンジェロ山からの賜りものである。

そのアンジェロ山が、薄っすらと地平線の彼方に見える頃、ようやく電源の無駄遣いを止めた、ジャックとマーカスが揃いも揃って、声を上げた。

『セシリア中尉！ あれをつ！！』

二人が指差す方角に、セシリアは目を遣った。陽炎に揺れるアンジェロ山を背景に、砂丘の折り重なったあたりに見えるのは、ひらりひらりと舞い、何かを啄ばむ鳥のような白い翼を持つ人影。それが何であるか察する前に、セシリアは砂を蹴って走り出した。

「『翼ある人』だ！ 二人とも、戦闘準備つ！！」

68. 無限の砂漠（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せください。

69. バヨネット

周囲に見える「翼ある人」の姿は一人だけ。それを確認してから、セシリアはバヨネットの取っ手に取り付けられた小さなレバーを引いた。弾けるような音は、バヨネットの鉄筒の中で、火薬が爆発した音だ。その、バンっと言う音とほぼ同時に、鉄筒の先端から、手のひら大の杭^{パイル}が撃ち出された。その音に気が付いた「翼ある人」は、こちらに気づく。だが、秒速の速さで飛来するミスリルの杭をかわすことは出来なかった。

パーンっ、と勢い良く「翼ある人」の腕が弾け飛ぶ。しかし、それは光の粒になって、再び下あった場所へと集まり復元していった。「ジャック！ マーカス！ 散開！ 敵は一人だけ。囲い込んで、十字砲撃っ」

兜のバイザーの内側で、セシリアが叫んだ。「了解！」と威勢のいい返事とともに、後ろを付いてくるジャックとマーカスが、左右に散らばった。

セシリアはそのままバヨネットを構えつつ、銃口を「翼ある人」に向ける。視界を狭める兜を脱いでもいたかったが、そんな余裕はない。バイザーのスリット越し見える情報だけを頼りに、その狙いを定めて、杭を発射するが、「翼ある人」は新兵器を目の当たりにしても、まるで驚く様子もなく、するりするりと宙を滑って、杭をかわしていった。

「これも簡単に避けられたんじゃ、技術部の博士たちはみんな泣くな」

そう一人ごちた、セシリアの口許に、人知れず苦笑いが浮かぶ。バイザーの裏に設えられた、ヘッドアップ・ディスプレイに、映し出される照準計は、杭を打ち出すまで、確実に敵の胸を狙い済ましているのだが、一度攻撃すれば、そこに敵の姿はない。

その無駄のない動き。そして、セシリアの攻撃に何にも動じる様

子がなく、ただ無機質に無感情な視線でこちらを見つめる、「翼ある人」の顔に、セシリアは言い知れぬ嫌悪感を感じた。

言ってみれば、生っばさがないのだ。まるで、レバーを引けば火薬が爆発して杭が撃ち出される、バヨネットと同じ。機械仕掛けの人形のように思えてくる。

「少なくとも、人間じゃないことだけは確かか……。徹夜で報告書を書かなくちゃならない！」

ひょう、と「翼ある人」の三叉槍が飛んでくる中、セシリアはまた独り言を口にした。そして、その槍の穂先が突き立てられる寸前に、砂煙を上げながらセシリアはそれをかわす。砂の特性を理解し、その柔らかさに足を取られないようにするのは慣れたものだ。

一方、狙いを仕留めそこなった三叉槍は、砂の上にサクリと刺さった。だが、次の瞬間三叉槍は、宙に浮かぶ「翼ある人」の手元にすうっと引き寄せられていく。その光景を見つめるセシリアは、少なからず驚嘆した。

「魔法？ 手品？」

そのどちらとも言えないだろう。

『セシリア中尉！ 配置に付きました！！』

マーカスの声が、耳あてを介して耳朵を打つ。

「よし！ 撃てっ！！」

という、セシリアの命令と同時に「翼ある人」の左右から、×の字状に幾本もの杭が交差して、「翼ある人」の体を貫き、光の粒があふれ出す。

さらに、セシリアは留めを刺すために、砂地を強く蹴って高らかに飛び上がると、バヨネットを剣のように振り上げた。

バヨネットには、鉄筒の先端にミスリル製の片刃の小剣が取り付けられている。故に、ダイムガルドの古語で「バヨネット（銃剣）」と呼ばれているのだ。その小剣は、白兵戦闘も加味した予備装備であるが、切れ味は普通の剣と何ら変わりはない。

今もまさに、振り下ろされたセシリアのバヨネットが、「翼ある

人」を脳天から、真っ二つに切り裂いた。悲鳴や断末魔の叫びはない。その代わり「翼ある人」は砕け散るがごとく、光の粒に変わった。

それらの光の粒は、砂漠を吹きぬける風に乗り、北の方角へと流れていく。

『あっちにあるのは……アトリア連峰か』

空を舞い消え行く光の粒を目で追いながら、セシリアは見たこともない「アトリア連峰」を思い浮かべていた。

『セシリア中尉！ お見事っス』

さくさくと砂に足音を立てながら、ジャックとマークスがこちらに歩み寄ってくる。

『しかし、こんなところにまで、「翼ある人」が迷い込んでくるなんて。他の哨戒部隊の警戒網にも引っかけからず、何処から飛んできたのやら』

マークスも、光の粒が流れていった方角を見つめていた。分析するような口ぶりは、真面目な性格の彼らしいといえば、彼らしい。

「あの鳥人間、何かを啄ばんでいるように見えたけど……」

『まさか、獲物を追いかけて、無限の砂漠に足を踏み入れた？ 獣ではないんですから』

それはない、と言いかけたマークスに言葉をかぶせるように、「魔物でも、食事はする」とセシリアは返しつつ、あたりを見回した。だが、「それ」に最初に気づいたのは、セシリアではなく、ジャックであった。ジャックは良く自慢していた。五人兄弟の仲で、最も目が良いと。その視力が遺憾なく発揮されたのか、少しは離れた場所に何かがある。茶色の塊と行った方がいだろうか。バイザー越しに目を細め、その正体に気づいたセシリアは、背筋に冷たいものを感じて、反射的にバヨネットを構えた。

「あれは、エイゲルだ！」

セシリアの口にする魔物の名前に、ジャックとマークスもバヨネットを構える。エイゲルは、鷹や鷲などの猛禽に良く似た姿をして

いるが、翼を広げた大きさは猛禽の何倍もあり、またより獰猛な性格で知られている魔物だ。未知の敵である「翼ある人」に次いで、今度は獰猛な「魔物」、なんてツイていないのか……、セシリアは砂の上にうずくまるエイゲルを睨み付けた。

ところが、エイゲルは身動きひとつしない。それどころか、翼を折りたたみ、背中や腹に矢をつきたて、体のあちこちから血を滴らせていた。どうやらすでに息はないようだ、感じた三人は、警戒しながら、エイゲルの死骸に近づいた。

『こいつはでかい……並のエイゲルじゃないっスね。死んでるとは言え、ちよつと怖いっス』

と、エイゲルの死骸を驚きと共に見つめるジャック。彼の言うとおり、普通のエイゲルよりもまだ一回り大きい。その見たままの素直な感想の隣で、冷静な分析を行うのは、マールカスである。

『エイゲルに刺さっている矢は、ガモーフの神衛騎士団の矢羽です。まさか「翼ある人」は、このエイゲルを狙っていたんですかね?』
「分からない……、でも付けられた傷は、明らかに、あいつの槍のものじゃないな」

セシリアは、確認のためバヨネットの小剣で、つんつんとエイゲルの背中をつついてみた。すると、もぞもぞとその翼が動いたではないか。驚きとともに、セシリアはバヨネットの引き金に指をやった。

『待ってください、セシリア中尉! 羽の下に何かいるみたいっス』
ジャックがセシリアのバヨネットを押さえつけると、自らエイゲルの翼を「よっこらしょ」とはぐった。すると、そこにいたのは、セシリアと大して歳の変わらない少年であった。

全身をぼろぼろに傷つけ、青白い顔をする少年は、衰弱しきっている。このまま放置しておけば、日が傾くまでには、少年もこのエイゲルと同じように死んでしまう。一方のエイゲルはおそらく、ここで力尽き、最期に少年を砂漠の直射日光から守るために、その翼で覆い隠したのだろう。

だが、そこにどんな事情があるのか、皆目見当もつかない。それでも、栗色の髪と肌の白い少年の哀れな姿に、セシリアは胸が苦しくなった。

『この人の着ている鎧。センチ・レーバンの鎧です。しかも、この装飾は、騎士団長クラス以上の……』

「マーカス、分析はいい！　すぐに手当てを！」

『こんな砂漠の真ん中じゃ、無理ですよっ』

「それなら、この人を帝都まで運ぶ。二人とも、手を貸して」

セシリアは、バヨネットをホルダーに収めると二人に指示を下した。二人がの驚きの声が、兜の耳あてを介して聞こえてきたのは、ほぼ同時だった。

全身を映し出す鏡の前に立っているのは、禿頭の男。髭こそ蓄えてはいないが、神経質そうな眼光は鋭い。初老にもかかわらず背筋はピンと張り、背も高く、身を包むダイムガルド軍将校の浅緑色の軍服もしつくりと馴染んでいる。

「皇帝陛下の御前会議は気が重い……」

男は少しでも振れたネクタイを元に戻すと、顔色は変えずに深く溜息を吐いた。

「良い報告が出来れば、少しは気も楽なのだが、参議の連中は軍部に金を落とすことを、以前から嫌っていた」

「仕方がありませんわ。彼らは軍政のことにまるで疎いのですから」
まるで砂漠の国に似合わない、清涼な風を思わせる女の声が、男の背後から聞こえた。その声の主が誰であるのか知っている男は、振り向かなかった。

「しかし、この事態において、未知の敵に対する防備を固めなければならぬ。そのためには、追加の予算が要る。停止した『飛航鯨^{ひこうげい}』の三番艦の建造すらままならないようでは、『翼ある人』に対抗することは難しい」

「そのことですが、第三兵工廠から予算計上の上奏が届いています

わ。御前会議で提出されますか？」

「しないわけにはいかないだろう」

男は踵を返した。部屋の中は、ほとんど殺風景だった。執務机と応接セット。作り付けの暖炉はただの飾りで、その上にずらりと並べられた勲章は男の、せめてもの調度であつた。そんな部屋の片隅に立っていた女は、ヒールの踵を鳴らしながら、男に歩み寄ると、携えていたファイルの中から、一枚の紙切れを取り出した。彼女の言った「上奏文」である。

それを受け取ると、男は上奏文に目をやりながら、ふと女の姿を目じりに捉える。スラリと伸びた背丈、軍服に包まれた女らしい体つき、妖艶ささえも伺える眉目と唇に、ダイムガルド人特有の浅黒い肌が華を添える。別段、この私設秘書の女を女として見てはいないが、それでもお世辞抜きに美女と呼んで差し支えはないだろう。しかも、秘書としての腕は厳格で、折り紙つきとくれば、言い寄らない男も少なくはない。しかし、何を思っているのか、この女は良縁さえも断り続け、自分の秘書として働いてくれる。そのことに感謝しない男ではなかった。

「第三兵工廠め、予算計上にかこつけて、工員の増派まで要求しておる。今から、御前会議での参議どもの青筋が目には浮かぶよ」

上奏文を秘書に返しながら、男は鼻で笑いながら言った。

「この国は、センチ・レーバンやガモーフに比べて、苛酷な環境にある。鉄鋼資源こそ郡を抜いておるが、交易そのものがギルド連盟に握られている以上、金も水も食い物も、すべてが有限の資材だ。しかし、それを踏まえても、いつ戦争が起こっても良いように、動的防衛力の強化はしておかねばならない。『翼ある人』などという得体の知れない敵を前に、もしも戦うこととなれば、憂慮しなければならぬのは、それこそセンチ・レーバンとガモーフの存在だ」

「そうですね。我々が『翼ある人』と戦っている間に、かの国が手を結び、わが国の領土を侵犯しないとも限りません」

と、秘書が返すと、男は少しばかり驚いた顔をして「なんだ、君

が軍務に口を挟むとは、珍しいな」と笑った。だが、秘書はにこりともせずに返す。

「わたしも、軍人の一人です、お忘れですか？」

「むっ、そうであったな……。さて、そろそろ御前会議の時間だ、参るぞ」

男は苦笑すると居住まいを整えて、秘書を従え部屋を後にした。部屋の外は長い廊下が左右に伸びる。軍令部の施設、大本営であるから、華美な装飾は施されておらず、赤いカーペットが無骨な壁にひどく浮いて見えた。会議室までは、一度渡り廊下を渡って、大本营の向かいにあるダイムガルド皇帝の居城「皇居」に向かわなければならぬ。それほど遠くはないのだが、これから始まる参議とのやり取りを思えば、足が重くなるのも無理はない。

廊下ですれ違う士官たちは、皆、男の姿を見止めると、背筋を伸ばし敬礼をとる。それだけで、男の身分の高さがうかがい知れるものだが、いちいちその敬礼に答えると言うわけには行かないので、男は無視するように通り過ぎた。もともと、軍隊と言うところは上下関係が厳しい。それは、何もダイムガルド帝国軍に限った話ではなく、センチ・レーバン騎士団でも、ガモーフ騎士団でも同様であった。

ただ、とりわけダイムガルドはそうした慣習がきつく、とくに男のように位の高い者ほど、神のように崇められる。しかし、男としては、自分の存在と言うものをそれほど過大評価はしていなかった。『ヨルンでのうのと生き残った、臆病者』

と、自分で評していることは、まだ誰にも語ったことがない。傍らを歩く、信頼の置ける美人秘書にもである。示しがつかない、という理由もある。そのため、表面上は偉そうに胸を張り、威厳をちらつかせているが、内心は軍の厳しい上下関係を気にはしていないのだ。それよりも、懸案事項は、禿頭の中にぶら下がっているのだ。渡り廊下を越えると、香の匂いがする静寂の「皇居」である。さすがは皇帝の住まい。渡り廊下一本を隔てて、そこはセンチ・レー

バンの王宮にも負けない美しさがある。そんな場所で、会議を催すなど無骨すぎる話だが、御前会議は皇帝陛下の前で陛下を交えて行われるものであり、臣下の身としてはこちらから赴くことが、礼節であった。

何度か階段を昇り、何度か廊下で皇室付きの侍女とすれ違い、ようやく辿り着いたのは、大きな観音開きの扉である。言わずもがなだが、その向こうが御前会議の会議場となっている。さて、いざ「戦場」へ！ 男はぐっと厳しい顔つきをしてドアノブに手をかける。

このとき、男はよもやこの会議中に、軍部の末端である哨戒小隊から「『翼ある人』が無限と砂漠に現れた」という報告を受けるとは、夢にも思っていなかった。ただ、いつもと同じようにドアをノックし、自らの名を名乗り、参議どもの浮かない顔を総ざらえしながら、会議室の中に入る。

「ダイヤモンド陸軍元帥エイブラムス・コック大将、ただいま参りました！！」

69. バヨネット（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せください。

70. 喪われた記憶

どこかで声がする……。何と言っているのかはつきりと聞き取れることは出来なかったが、聞いたことのない声だ。いや、そもそもどんな声を聞いたことのある声と呼ぶのか、よく分からない。頭の中にもやがかったようで、どうしても何か大切なことを全部忘れてしまっているような気がしてならなかった。だが、それが何なのかも良く分からない。

「その話は、情報部にすでに伝えた。わたしたちは任務をこなしただけだ。あとのことは、大本営の軍令部が考えること」

声が少し大きくなる。女の子の声だとはっきりと分かる。それでも、やはりその声に聞き覚えはなかった。

「ですが、オスカー・ラインどのの娘である、あなたのご意見も伺えと、アルフレッド・ノース大佐は仰られています」

今度は、男の声。明らかに年嵩に聞こえるその声に似合わず、どちらかと言えば、女の子の声に気おされているような雰囲気があった。

「わたしは父とは違う。買いかぶられても困るだけだと、アルフレッドおじさまにはお伝えしておけ。いいな？」

「は、はあ」

気弱な生返事の後、男の足音が遠ざかって行った。ややあって、今度は扉の開く音。近づいてくる足音は、その歩幅や丁寧な歩き方から、女の子のものであると容易に察しがついた。

その気配が自分の傍まで近づいてくる。そこで、ようやく重たいまぶたを開くことが出来た。かすかにはっきりとしない視界に薄ぼんやりと浮かぶ天井を、朝日が照らしている。清潔感のある白い壁は、ここがそういう場所だと、薬の匂いがかぐ前に分かった。

「気がついたか？ あれから三日三晩、死んだように眠り続けていたんだ。そろそろ起きる頃だと思った」

年頃の女の子の声。だが、ひどく男っぽい喋り方が、違和感を浮き立たせていた。

「まあ、わたしたちが見つけたときには、ほとんど虫の息で、一時は本当に危なかった」

「ぼくが死にかけた……？」

そう口にして、ひどく喉が渇き、声がガラガラにかすれていることに気づいた。それが可笑しかったのか、女の子は少しだけ笑った。見れば、自分とそう大して歳の変わらない、女の子だ。浅緑色の軍服が少し大きめに感じるほど華奢な体つきに、肩まである艶やかな髪。少女の名残を残す黒い瞳と顔。少しでも褐色の肌は、彼女がダイムガルドの人であることを知らしめた。

「ここは、ダイムガルド帝国？」

「そうだ。ダイムガルド帝国陸軍の軍病院。わたしは、ダイムガルド帝国陸軍近衛騎士団、第二十八歩兵連隊所属第五哨戒小隊隊長、セシリア・ライン中尉だ」

「長い名前……」

思わずその舌を噛みそうな肩書きに、苦笑してしまう。すると、少女は少し眉を吊り上げた。

「仕方がないだろう、肩書きを名乗るのは軍人のさがだ。別に気負うことはない、セシリアと呼んでくれたらいい。それであなたの名は？」

「ぼくは……」

窓から差し込む朝日に輝く赤い瞳を持った少年は、天井を見上げて、まるで記憶を手繰り寄せるかのように言葉に詰まった。だが、自分の名を名乗るのに、記憶を手繰る必要などあるだろうか。セシリアは怪訝に思いながら、ベッドに横たわる少年の姿を見つめた。

三日前、無限の砂漠のご真ん中で彼を発見した時には、言葉の通り「虫の息」であった。哨戒任務のため、消毒やアルテミシアの葉を練った傷薬などを携帯していたものの、そんな応急手当では、助

かりそうにもなかった。もしも傷に砂が入り込めば、やがて破傷風や敗血症を引き起こして死んでしまうかもしれない。

それでも、どうしてこの少年を助けようと思ったのか、セシリアにも良く分からなかった。そのあまりに惨めな姿に同情したのか、それとも人間が持つ本来的な善の心が、彼を救えと呼びかけたのか。いずれにしても、セシリアは今にも息絶えそうな少年を捨て置くことは出来なかった。

敵国の人間である少年を助けることに、部下の二人は渋ったが、隊長命令という既得特権的な圧力で、なんとかジャック・ハイトに背負わせて帝都に帰還した。

幸い、亡骸となっていたエイゲルが、大きな翼で彼を砂塵から守っていたおかげで、危惧したような感染症も起こしておらず、肩や腹、背中の切り傷を縫合し手当でするだけで、一命を取り留めることが出来た。それから、彼は死んだように眠り続けた。

一方で、報告を上官に上げるべき立場のセシリアは少しばかり迷ってしまった。マークス・ヒルの言葉を借りるなら、少年が身に着けていた甲冑は、センチ・レーバン騎士団の団長クラスのものであった。そのことを、報告すれば、彼の立場が一変してしまう可能性もあった。また、彼の肩や腹の傷は、魔物と戦った痕ではなく、明らかに鋭い武器によって傷つけられたものであった。

想像には難くない。おそらく、一週間ほど前ガルナック平野でガモーフ神国と争っていたセンチ・レーバンの騎士なのだろう。傷はその証。だが、どうしてダイムガルドの砂漠で行き倒れになっていたのか。あの大きなエイゲルは何なのか。何故「翼ある人」に狙われていたのか。セシリアは少年が目を覚ましたら、問い質そうと思っていた。少年に関する、詳細な報告を上げるのはそれからでも遅くはない。だいいち、大本営の軍令部は「翼ある人」がついに無限の砂漠を越えたという情報で、右往左往している。この、素性の良く分からない、センチ・レーバンの少年にかまけている余裕などないだろう。

ところが、少年は記憶をたどりつつ、ひどい頭痛に襲われたのか、両手で頭を押さえて、苦しそうに唸った。

「だ、だめだ。名前、思い出せない……。名前以外にも、何か大切なことがあるはずなのに、頭に靄がかかったみたいに、何も思い出せないんだ」

記憶喪失。

どうやら、嘘偽りではなく本当に名前すら思い出せずに、苦しむ少年の姿を見て、セシリアはふとその言葉を思い出した。

あまりに衝撃的なことや、命の危険に晒された時、人間は精神を保護するために、必要な記憶を一時的に封印する。それらは、本人の精神がそれに追いつくまで、脳が封印を守り続けるという、人間的な防衛本能である、と書かれたダイムガルドの医学大学の論文がある。セシリアは軍士官学校の、図書館でそれを読んだことがあった。医学の本を読んでいたのは、戦場での簡単な医療知識の習得のため、ではあったのだが、実際に記憶を失った人が目の前に現れるまで、その論文のことは忘れていた。

「無理に思い出すことはない。それよりは、早く心と体の傷を癒すことだ。後で、栄養のあるものを持ってこさせるから、それを食べて早く良くなるんだ」

「ごめん……」

セシリアの気遣いに、少年はやや頼りなく返した。騎士というには、その顔は本当に頼りない。

「謝られても困る。あなたが悪いわけじゃないんだ。……でも、ずっと名無しと呼ぶわけには行かないな、アルサス・テイル」

「えっ？」

セシリアが少年の名を呼ぶと、少年はそれと分かるように赤い瞳を大きく見開いて驚いた。

「セシリアは、ぼくのことを知っているのかい？」

少年が尋ねると、セシリアは静かに頭を左右に振った。

「いや、そうじゃない。あなたが着ていた甲冑に、名前が刻まれて

いた。センチ・レーバンでは、ドッグタグの代わりに、甲冑の喉輪の裏に、名前を書き入れると聞いたことがあったんだ」

そう言って、セシリアは軍服の首元から、銀色の小さな板を取り出した。そのドッグタグとは、戦場で身元不明の遺体とならないようにするための名札である。同様に、センチ・レーバンでは甲冑の喉輪（急所である喉を護るための外装）の裏側に名前を刻み込む。

余談ではあるが、ガモーフは胸当ての外側に氏名が書き入れてある。

「あの甲冑が君の持ち物なら、あなたの名前はきつと、アルサス・テイル。例え違ってても、どうせ、名無しでいるよりはマシだ。その名を借りればいいんだ」

と、セシリアが言うのと、赤い瞳の少年はわずかに頷いた。

「分かった。そうさせてもらう」

「傷が癒えるまでは、ここで大人しくしていた方がいい。ただ、記憶喪失と言うのがあなたの嘘で、ここから逃げ出そうと思っても、帝都は戒厳令が敷かれて、民間人は帝都の外に出ることが出来ない」
「どこにも行かないよ。行きたくても、体中がとても痛い。頭も肩もお腹も」

少年はわずかに笑って見せたが、すぐに苦悶の顔に戻る。傷は深かったのだ。五体満足でいられるとしても、出歩くことは出来ないだろう。

「そうか……。わたしはお役目があるから、詰め所に戻る。何かあったら、お医者さまを呼ぶといい」

セシリアは、くると踵を返した。少年は、部屋を後にしようとするセシリアの背中に向かって、

「お礼、言っただけだね。助けてくれて、ありがとう。セシリア」と、言った。

幾日経っても、すっぱりと抜け落ちたアルサスの記憶は戻らなかった。本当に自分がアルサスと言う名前なのかも分からない。どうして、自分はこんなにも傷つき、こんな見知らぬ外国の病院に運び

込まれたのか、それさえも分からなかった。目が覚めたとき、いや、その直前まで、何か大切なことがあったはずなのに、どうしても思い出せない。

セシリアの話では、砂漠の真ん中に倒れていたらしい。しかし、砂漠を訪れた記憶さえ、アルサスにはなかった。

一日をベッドに横たわり、天井ばかり見つめていても、一向にそれは変わらず、半ば三日ほどで思い出すことを諦めた。セシリアの「いつか思い出すよ」と言う言葉を真に受けたに過ぎないのだが、思い出そうと無理をすると頭が痛くなるためでもあった。

命の恩人であるセシリアという少女は、いつも軍務の合間をぬって、アルサスのもとに見舞いに訪れてくれた。記憶があるなしにかかわらず、知る人のいない外国において、心細い思いをせずに済んだのは、セシリアという少女がいてくれたからに他ならない。

そんなセシリアは少しばかり変わった女の子に見えた。女の人が騎士や兵隊になることは少なくない。しかし、彼女から滲み出す雰囲気は、明らかに軍人のそれとは違っていた。何とか言葉尻を男っぽくして、厳つさを見せようとしているのだが、それはなんだか窓辺の花が虚勢を張っているようにしか見えなかった。現に、彼女の顔は美しく、指先も細くしなやかで、おおよそ軍服を着ていなければ、往来を歩く年頃の町娘と何ら変わりがなかった。

あるとき、どうして助けてくれたのか、とアルサスは尋ねた。しかし、セシリアは素っ気無く「わからない」とだけ答えて、それっきり教えてはくれなかった。他人の考えていることは、よく分からないもので、そもそも、彼女が何故軍隊に属しているのかも良く分からない。

ダイムガルドでは、軍隊の階級呼称が他の国と違う。しかし「中尉」という階級は、中堅どころで、かつ彼女は二人の部下を従えているらしい。彼女は、「父の後を継いだだけ」と言っていたが、アルサスは、女の子が軍隊に属す理由は、たったそれだけではないような気がした。

そうして、日が過ぎて、七日もすればアルサスの傷はふさがった。それだけ彼が若いということだ。そうして、おそらく病院に運び込まれて以来だと思われる、鏡に自分の姿を映しこんだ、なんとも、痛々しいほどに、頭や肩、腹などを包帯で巻かれた姿。はたして、そこに映る赤い瞳の少年が、自分の姿なのかも良く分からなかった。さらに三日もたてば、包帯は少しずつ取れていき、日がな一日を窓辺でダイムガルド帝都の風景を見ながら、すごす退屈な日々が始まった。

ダイムガルド帝都の街並みは少しばかり変わっている。箱のような建物がいくつも立ち並び、それらから黒い煙突が何本も空に向かって伸びている。キューポラと呼ぶらしいのだが、アルサスには煙突の林のように見えた。そして、煙突からは、黒い煙や白い煙がもうもうと立ち上り続ける。夜になれば、時折火を吹き上げるのだ。

そんな街並みを、アルサスなりの言葉で表せば「灰色の街」といったところだろうか。本当は、いくつもの色が折り重なるはずの街並みが、まるでモノトーンのように見える。さらに、この街を特徴付けているのは、朝から深夜までひっきりなしに聞こえてくる、鉄の音だ。

セシリアによれば、この陸軍病院がある場所の近くには「ミスリル製鉄所」や「兵工廠」と呼ばれる、工場が沢山並んでいるらしい。はじめは、その騒音に睡眠を奪われかけたものの、住めば都とはよく言ったもので、慣れてくると、それほど気にはならなくなった。

本当に不思議な街だ、とアルサスは思う。窓から見える街並みに、有機的な生活の匂いはせず、ざらざらと乾いた無機的な印象を受けるのは、きっと脳の底に眠る記憶のどこかで、他の国の街並みと比較しているのだろう。そんな些細なことも早く思い出せれば、それに越したことはないのだが、それにはまだ日がかかりそうな予感があった。

ベッドを離れ、軍医から出歩いてもいいという許可をもらったのは、それからさらに数日後。アルサス退屈しのぎに、菓の匂いしか

しない病室から抜け出した。と言っても、アルサスのいる陸軍病院は、軍施設の集合する区画の中にあり、フェンスと呼ばれる金網で、街とは仕切られている。そのため、街に出ることはできないし、軍機に触れる場所へ立ち入ることも許されない。

案外にも自由はないのだが、記憶のない不安は、誰かに話したところで楽になるわけでもなく、外の空気に触れることは、多少なりとも気晴らしにはなる。背伸びをして、空を見上げ、工場の煙突から流れてくる煙の匂いに顔をしかめ、あたりを散策して歩く。

軍施設と言っても、砦や要塞ではなく、帝都及びその周域の守備任務を仰せつかる「近衛騎士団」の詰め所と、軍隊の本部がある大本営の施設があるだけだ。大本営の後ろには、政治の中枢である議事堂があり、さらに軍施設からでは一部分しか見ることが出来ないが、この国を治める国王「皇帝」の住居である皇居がある。これら三点セットで、「内裏^{だいり}」と呼ぶらしい。

アルサスはいかめしく聳え立つ、ダイムガルドの象徴たる三つの建物を眺めながら、通りを曲がる。すると、通りの影から何やら声が聞こえてきた。

「すでに同志が皇居に忍び込んでいる。午後の御前会議が終わった後……」

やたらと押し殺した男の声。気配は二つ。死角になって見えないが、その声にはどこかただならぬ雰囲気漂っていることを、アルサスは感じ取って耳を澄ました。

70. 喪われた記憶（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せ下さい。

71. 迅雷の剣技

どこの国でも、多かれ少なかれ内部に問題を抱えている。それをどうにか表面化せずに国家運営が出来るなら、それに越したことはないが、一度ふきこぼれはじめると、それを押さえ込むことは、難しくなるものである。その一例が、ガモーフにおけるウェスア大司教肅清事件であったり、センテ・レーバンにおける即位式事件である。

同様に、ダイムガルド帝国も、水面下で問題がふきこぼれようとしていた。ダイムガルドが慢性的に抱える問題というのは、国土の大部分が、天然資源以外の資源を有さない不毛地帯である砂漠という、苛酷な環境にある。そのため、国民の生活向きは楽なものではなかった。それに追い討ちをかけるように、ここ数年続く大飢饉。政府は、食料や水の配給制を敷いて危機回避を試みたのだが、日に日にその支給量は減ってきている。それは、ある意味で、センテ・レーバンやガモーフとは比べ物にならない深刻ぶりであった。

そうした中、世論として巻き起こったのが、センテ・レーバンへの侵攻による領土拡大という、リアリズムである。もともと、政府批判を許さない風潮のあった帝国では、しばしばそうした世論が持ち上がる。水や食料といった貴重なものを、外国から奪えばいい。乱暴な考え方ではあったが、水も緑もほとんどなく、開拓も農耕も難しい砂漠の国だからこそ、考え方と言っても差し支えはないだろう。

ところが、このリアリズムに水を差す人物がいる。国民のほとんどは見たことがないという、ダイムガルド帝国の首魁たる皇帝陛下である。この国では、砂漠に国を築き上げた皇室一族を神のように敬う風潮がある。そのため、皇帝の一言は、とても重く、誰もがそれに異を唱えることは許されない、という暗黙のルールが存在しているのだ。

元来、今上皇帝（在位中の皇帝という意味）は、戦争を好まない人物で、参議たち議会勢力が軍部を頭打ちにしている傾向にある。戦争が正しいか否かは、ここで語るべき論議ではないにしろ、それは軍部として面白くない。

しかも、センテ・レーバンには、十年前の恨みがある。ヨルンの戦いで多くの兵隊の命を失ったことは、ダイムガルド人にとって、事実などどうでもよく、恨み以外の何者でもなかった。

つまり、センテ・レーバンに攻め込み、積年の恨みを晴らすと同時に、水と緑のある大地を手に入れる。それは、ダイムガルド国民の悲願でもあるのだ。しかし、それにもかかわらず、皇帝と議会は、軍部を押さえつけて、戦争を回避しようとしている。軍部に出来ることは、限られた予算の中で新型の兵器を開発し、皇帝と議会を説得した上で、戦争の始まる日を待つ他ない。そうして、どれくらいの時間が過ぎただろう。「軍部と世論」「皇帝と議会」の両者の対立は、国民に鬱憤を植え付け、ダイムガルドが抱える「問題」へと発展した。

そんな事情さえも知らない、アルサスの前に、その「問題」が姿を見せたのである。

「この国は正当な軍国化の理想を実現しなければならない。それは、我ら軍人だけの願いではない」

足音を殺しながら、そっと近づけば、二つの気配が発するひそひそ声はよりはっきりとアルサスの耳に届く。

「しかし、急いては事を仕損じると言う。慎重に行わなければ」

もうひとつの気配の声だ。こちらも男の声だった。

「これまで、どれだけ慎重に事を進め、どれだけ我らの活動の芽を議会に摘み取られてきた？ 軍部も政府も『翼ある人』の出現と来襲に混乱をきたしている今こそが、何よりの好機。この機会を逃してはならない。皇帝陛下を亡き者とし、この国を正当な軍国主義の国とする！」

物陰に潜むアルサスは、男の言葉にドキリとした。皇帝陛下を暗

殺する……？　ただ事では済まされないその言葉は、二人がダイムガルド帝国にクーデターを起こそうとしているのだ、とアルサスに気づかせた。

「そして、固着化した軍隊を改革した上で、センチ・レーバンに天誅を与え、国土を得る。それが、十年前に失った同胞への手向けとなるだろう」

「それは、分かっている。貴様たち実働隊が始めてしまうというのなら、俺には止めることは出来ん。御前会議の終了に併せて皇帝陛下を暗殺し、議会に解散を要求する。教導団の同志は政府機能を確保し、近衛騎士団をすべて抑える。手はずはすべて整っているんだな？」

「ああ、もちろんだ貴様は、同志を動かしてくれるだけでいい」

「了解した……と、言いたいところだが、皇帝陛下暗殺の前に、始末しなきゃならんネズミがいるようだ」

もう一人の男の声音が突然変わる。

「おい、その物陰に隠れているやつ！　出て来いっ。そんなところに隠れて見つからないとでも思ったか？」

男の声は明らかに、アルサスに向けられていた。どうしよう、逃げるべきか。だが、怪我が治ったと言っても、まだ痛みは残っている。走って逃げたところで追いつかれるのが関の山だろう。

アルサスは、大人しく物陰より姿を見せた。驚いたことに、クーデターを起こそうとしている二人は、軍服に身を包んだ軍人だった。その一方で、彼らも驚きを隠せない様子で、アルサスの事を見る。

「な、なんで、センチ・レーバン人がここに！？」

白い肌と栗色の髪をみれば、アルサスがセンチ・レーバンの人間であると言うのは、一目瞭然だ。てっきり、諜報員か何かだと思っていた二人は、それで気も抜かれた形となり、呆然としてしまった。アルサスはその一瞬を見逃さなかった。

どうしてだか分からないが、自然と体が動き、相手の懷に飛び込むと、膝蹴りを食らわせながらも、一瞬のうちに男の腰だめに備え

られた剣を引き抜いた。そのすばやさたるや、雷の如しで、男たちはさらに出遅れる。アルサスは、奪った剣を構え、一人の男の腿を切り裂く。

「ぎゃあっ！」

という悲鳴と共に男は傷口を押さえて、その場に尻餅をついた。だが、もう一人の男はその間に、剣を抜くとアルサスの首元に、その刃を突きつけた。

「動くな！ 動けば貴様の首を刎ねてやる！」

男は倒れこんだもう一人を気遣うような視線を送りつつ、アルサスに言った。思わずアルサスは身を竦め、絶句してしまう。

「どうして、センチ・レーバン人がここにいいのかじっくり問い質したいところだが、今は時間がない。大人しく捕まるなら、命は許してやろう」

「ごめんだって言ったら？」

アルサスは、腹の傷が少し開いた事に気づいた。しかし、それを相手に気取られないように、余裕のある口ぶりで返す。もちろん、本当は余裕などない。

「ちようどいい見せしめだ。これから起きる、ダイムガルドの歴史の新たな一ページに、貴様が華を添えることになるだろうよ」

ニヤリ。男の顔が歪む。だが、アルサスは動じることなく、

「歴史の一ページ？ 反乱を起こして得られる歴史に、二ページ目はないよ」

と言ったのけた。どのみち殺されるなら、別段どのような事をほざいたところで、変わりはない、という諦めがあったわけではない。しかし、火に油を注がれた男は、剣を振り上げた。

「何だと！？ 言わせておけば！ ならば、ここで死ね！」

ひゅっ、と風を切る音。アルサスは瞳を伏せた。と、その時である。忙しない足音とともに、通りの手前から声がした。

「おい、お前たち、何をやってる！」

聞き覚えのある声だと思った瞬間、またもやアルサスの体が自然

と動く。突然の掛け声に驚き、男が剣を止めた隙を見逃さず、アルサスは男の胸に肘打ちを食らわせ、さらに剣の峰で男の後頭部に鋭い打撃を加えた。男は「ぐえっ」と唸り声を上げながら、地面に崩れ落ちる。

「アルサス……これは一体？」

通りの手前からこちらに駆けてくるのは、やはりセシリアだった。セシリアはちらりと男たちに目を遣った。一人は、足を斬られてうめいている。もう一人はつい今しがた、アルサスによって昏倒させられた。名前までは知らないが、二人とも軍服に身を包んだ、近衛騎士団の一部隊「教導団」の腕章を着けている。

「セシリア、助かったよ」

「だから、あまり出歩くなって、わたしは言ったんだ。軍属の人間には、いまだにセンチ・レーバン人に恨みを持つものも多い。そういうやつらは、あなたがセンチ・レーバン人だと知れば、容赦しない。こんなところで県喧嘩なんかして、大問題になるぞ」

「そうじゃないんだ、セシリア！」

アルサスはその視線を皇居の方に向けた。

「御前会議ってのは、いつ終わるの？」

突然の問いかけに、セシリアはきょとんとしてしまう。

「もう十分もすれば、終わるはずだが……なんでそんな事を聞く？」

「なんでって……、こいつら、御前会議を占拠して、皇帝陛下の命を狙っているんだ」

「なっ!？」

そんな馬鹿な、と言いかけてセシリアは吐き出しかけた言葉を飲み込んだ。クーデターの噂は、すでに耳にしていた。セシリアたちの所属する大隊は関与していないが、それでもそういう情報は、情報部から漏れてくるもので、いま目の前でアルサスに伸された男たちが、その裏切り者であることは、ほぼ間違いなかった。

「大変だ!　すぐに上官に通報する!」

慌てて踵を返すセシリアの腕を、アルサスはひしと掴んだ。

「それじゃ間に合わない！！ どうせ、軍隊なんてどこの国の軍隊も一緒。報告を上に出している間に、皇帝陛下は殺されてしまう！！ とにかく、御前会議をやっているとこまで、ぼくを案内してよっ！」

アルサスの真剣な視線が、振り向いたセシリアの瞳を捕らえる。セシリアは少しばかり、その赤い瞳に気おされた。

「だ、だめだ。皇居は、皇帝陛下の居られる神聖な場所。簡単に入りできる場所じゃない」

「だったら、強行突破しても、クーデターなんて止めさせる」

先日の頼りない顔とは一変して、はっきりとした口調に、凜とした瞳。セシリアは一瞬、アルサスの記憶が戻ったのではないか、と思った。

「どうして……？」

「分かんないけど、人が殺されるのを黙って見ているわけには行かない。胸の辺りがざわざわするんだ」

そう言って、アルサスは自分の胸の辺りをさすって見せた。どうやら記憶が戻ったわけではないようだ。セシリアは溜息を吐くと、軍服のスカートから、小さな箱のようなものを取り出した。箱の中心には、黄色い宝石が嵌められている。

「これ？ これは簡易のエアデ通信機。魔力がなくても、電信が可能のように造られているの……ジャック、マーカス聞こえるか？

こちら、セシリア！ 今から言うことを、アルフレッド大佐にお伝えしろ」

セシリアは通信機を耳元に当てると、通信機の向こうにいる相手にむかって、事情を説明した。通信機の向こうでは、驚きの声がアルサスの耳にまで聞こえてくる。

「おそらく、教導団はこの機に乗じて、近衛騎士団を包囲するつもりだ。すぐに教導団の詰め所を封鎖するよう具申しろ。それから、陸軍病院の裏路地に男が二人転がってる。二人ともクーデターの主犯格とおもわれる。逮捕しろ！」

『それで、セシリア中尉はどうするつもりなんスか？』

やや野太いジャックの声が、セシリアに問う。セシリアは、少しだけアルサスと視線を合わせると、頷いた。

「わたしは、アルサスと一緒に御前会議の会議室へ向かい、直接皇帝陛下をお守りする」

『はあ？ アルサスって、あのセンチ・レーバンの？ ダメっス！
！ あいつは信用でき……』

ジャックの声が、まだ通信機から聞こえているのに、セシリアはエーアデ通信を一方的に終わらせた。ふただひスカートのポケットに、通信機を仕舞いこむセシリア。

「いいの？ ばく、嘘を吐いているかもしれないのに」

アルサスが言うと、セシリアはわずかに笑った。その笑顔は言葉遣いとは裏腹に、どこか少女らしい可憐な笑顔で、アルサスはちょっとだけ見とれてしまった。

どこかで、こんな笑顔を見た覚えがある……。

「信用に足りない人間は、嘘を吐く時に眼を泳がせる。そんな凜とした目つきで、わたしの顔を見ることなんて出来ない。そう、ずっと前に父から教わった」

セシリアは、アルサスの赤い瞳を見据えて言った。

「そっか……じゃあ、ばくのこと信用してくれるんだね」

「ええ。一応、だけど。それより、急ごう。御前会議は皇居の上層階にある会議室で行われているはず。一度大本営から、皇居と大本営を繋ぐ渡り廊下を渡ったほうが早い！」

セシリアは、もう一人の男の手から手際よく剣を奪うと、再びアルサスに頷き返してから、皇居を目指して走り出した。アルサスは、今一度男たちの顔を見やってから、セシリアの後姿を追いかけた。

71. 迅雷の剣技（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せ下さい。

72. 御前会議のクーデター

陸軍元帥エイブラムス・コック大將は、禿頭の頭に血管を浮き立たせていた。無論、憤りが脳髓にまで達しているのだ。円卓に腰掛ける、参議どもは何も分かっていない。迫り来る国家存亡の危機を。「このごに及んで、軍事費を増大させれば、増税やむなしとなる。そうでなくとも、水と食料の配給が滞っている今、そんな事をすれば、国民は暴動を起こしかねない」

「国民が暴動を起こしたら、それを鎮圧すればいい、などと、少々野蛮ではございませんかな？」

参議たちは、口々に言って、エイブラムスを批判の矢面に立たせようとする。内政改革を進めるのは自分たちの務めであり、それを軍費が圧迫するという理論は分からなくもないが、事態が事態であると言うことを把握していないのだ。

現に、参議たちは自らの持つ莫大な財産を裁いて、国民生活の維持に少しでも貢献しようとする者はいない。誰もが、政治の中枢で己の保身にばかり目を向け、石橋を叩きまくっているのだ。そして、エイブラムスの唱える「対『翼ある人』軍事拡張及び統合整備計画」は、彼らの石橋に大打撃を与えるものであった。

「ですが、『翼ある人』はすでに無限の砂漠にまで現れているとの情報があります。彼らは、通常武器も魔法も効果のない不死の人と聞き及んでおります。早急の対策を取らなければなりません」

エイブラムスは声を荒げた。しかし、その声の矛先は、保身と用心しか知らない参議どもではなく、部屋の奥にある御簾みすに向けられていた。御簾の向こうにいるのは、ダイムガルド帝国の王である「皇帝陛下」である。

御簾の所為で陛下の顔を拝見することは出来ない。そもそも、ダイムガルドの皇帝は下々に顔を見せたりはしない。それは、皇帝という立場に神聖さを与え、絶対不可侵のものとする、という皇室の

伝統であり、下々には、エイブラムスや参議たちも含まれている。

「不死のものと申されるか？ バカバカしい。長命なハイ・エンシエントですら、いつかは死ぬ日が来るのだ。不死などそれこそ御伽噺だ」

参議の一人が、エイブラムスの言葉を止める。

「そもそも、ことをしでかしたのは、センチ・レーバンの宰相付参謀官メツツェ・カーネリアだ。ならば、センチ・レーバンに攻め入って、かの国を滅ぼせばいい。もともと、そのために十年前より軍事費を拡張し、財政を圧迫しているのだということが、分からんのかね、エイブラムス大將！」

「お言葉ですが、財務大臣。そのメツツェなる男は、センチ・レーバンさえも『翼ある人』を用いて、襲わせているとの情報が入っております。もはや、三国にとって、メツツェ・カーネリアは共通の敵。そして、今も、世界中の街や人々が『翼ある人』によって、その命を奪われているということを、お忘れ召されるな」

恰幅のいい財務大臣をギロリとにらみつける。軍人のそれらしく、エイブラムスの眼力には、剣のような切れ味と、槍のような鋭さがあつた。

問題は、参議たちがまったくもって、この国が……いや、世界がおかれている状況を理解していないと言うことである。空調設備の整った帝都に籠っていれば、世界を見通すことなど難しいと言うのは、道理もないことだが、それでも、予断なく情報収集をしているエイブラムスにとっては、参議たちが危機感を持っていないことに、呆れるほかなかった。

しかも、まるで水を差すかのように、伝家の宝刀を抜き放つ者まで現れる。

「ならば、エイブラムス大將は戦争をするというのかね？ 皇帝陛下は、平和を愛するお方だ。戦争を望まれないと言うことを、あなたも知らぬわけではありませんまい」

御簾の向こうにいるお方の代弁者を気取り、そう言われれば、エ

イブラムスにも返す刀がない。この国において、皇帝陛下は絶対の存在である。陛下の意向に背くことは、反逆と同じである。それが、この国の体制を固着化している要因ではあるが、同時に皇帝陛下の存在は、不毛な砂漠に住む国民全体の心のよりどころでもある。

そのため、エイブラムスとしても、皇帝陛下が戦争を望まれない、と言う以上は、「翼ある人」と事を構えるわけには行かなかった。

案の定、御簾の裏で衣擦れの音がしたかと思うと、御簾のすみから顔を出した侍女の女が、「陛下は、戦争を望まない、と仰せです」と皇帝の言葉を伝える。

「では、軍費はこれまで通り、ということでございでしょうか？」
エイブラムスが問いかけると、御簾の向こうでまた衣擦れの音がする。

「左様にせよ、と仰せです」

侍女の女は、何の抑揚もなく答えた。

これでまたエイブラムスは下からの突き上げを押さえつけなければならぬ。すでに不満をもらす兵士もいる。それらを押さえつけるには限界と言うものがあるのだ。

「致し方ありません……。大本営に一度計画案は差し戻させます」と、言ったものの、気が重い。前回の御前会議中、「翼ある人」が無限の砂漠に姿を現した、という情報が舞いこんできたために、軍費拡張の話は立ち消えとなってしまった。今日こそはと意気込んだものの、相変わらず現実の見えていない参議によって、結局は白紙撤回させられてしまった。

大将という最高位の位にあって、中間管理職のような気分を味わうのは、なにもこれが初めてではないが、エイブラムスは皇帝陛下に忠義の心を持った男である。皇帝陛下の意向が確かめられたならば、その上で軍備計画の見直しを図らなければいけない立場にいる。

戦争をする相手は、センチ・レーバンやガモーフではないのだ。人であるかも定かではない未知の敵。願わくは、それらが無限の砂漠を越えて、帝都に押し寄せないこと。そして、兵士たちが不満を

爆発させないことのふたつである。それらが願っただけで叶えば、それに越したことはない……。

「では、今日の御前会議はこれで終わりいたします」

議長役を務める大臣が、にべもなく軍費拡大の議題を横に投げ、エイブラムスが人知れず溜息をもらしたその時だった。

会議室のドアが派手に蹴破られると同時に、幾人もの腕章をつけた男たちが会議室に雪崩れ込んできて、エイブラムスのささやかな願いは碎け散ってしまった。

「全員大人しくしてもらおう!!」

と、怒声を上げ、バヨネットの銃口をこちらに向ける髭面の男に見覚えがある。彼らが右腕につけている青色の腕章と照らし合わせれば、参議たちが悲鳴を上げるよりも先に、エイブラムスの脳裏に「教導団」という言葉が過ぎった。

「何のまねだ、貴様ら! 皇帝陛下の御前であるぞ!」

エイブラムスは席を立つと、腹から怒声を浴びせかけた。教導団の兵士たちは、その一喝に戦いたが、先頭に立つ髭面の男だけは、まったく動じる様子もなく、厳しい視線を向けてくる。

「我々は、陛下のお命を頂に参った次第。陛下がこの場にいてくださらなければ困る」

その口調は、クーデターを起こしたものの言葉とは思えないほど落ち着いていた。リーダーが冷静であれば、部下たちも冷静になれる、という言葉の通り、一度はエイブラムスの怒声に戦いた教導団兵士たちだったが、すぐに平静を取り戻すと、手際よく会議室の扉を閉めて、参議たちに部屋の隅へ集まるように促した。抵抗すれば、彼らのバヨネットから、パイルが打ち出されるだろう。その威力を一番良く知っているのは、開発を指揮したエイブラムス自身である。「軍の中に、軍国化を望む者たちがいる、という話は内偵から聞いていたが、よもや教導団の連中であつたとはな……。身の程を知れ」「その言葉、そっくりお返ししたいそう。緑ある国土を手に入れることは、我々の悲願であつたはず。それなのに、十年間ただ力

を蓄えるだけで、センチ・レーバンやガモーフを攻めようとしてもしない」

「それは……」

「それは、陛下が安穩としたお方であるから。ならば、この国にそのような平和かぶれの皇帝など必要ない。陛下を殺し、軍部が政権を握り、完全なる統制された社会として、センチ・レーバンを、ガモーフを滅ぼし、肥沃な大地を手に入れる！」

まるで熱を放つかのごとく、髭面の男は高らかに言い放つ。

御簾の後ろでは、悲鳴がわずかに折り重なった。御簾の裏手には、陛下が参議たちに顔を見せず会議室へ入る事のできるの扉がある。しかし、侍女たちがどれだけノブをひねろうとも扉はまるで張り付いたかのごとくびくともしない。

「ひ、開きません！」

やや取り乱した、侍女の声。扉には魔法装置で自動的にかかる鍵があるそれは、会議室の外側からしかかけることが出来なかったため、一度鍵がかかると、会議室側からではどうすることも出来なかった。「どこへ逃げるおつもりかな、皇帝陛下！　すでに皇居は我が百人の同志が占拠している。今頃は、大本営の近衛騎士団も我が教導団によって、制圧されているだろう」

悠然と語る髭面の男。

「これは、国家の、いや……国民のためです。大人しく、その命をなげうってもらいましょうや」

「ならんっ！　皇帝はわが国の礎！　それを討つとは向けるべき矛先が違うのではないのか！　教導団司令官モーガン・トール！！」

エイブラムスは髭面の男を名指しで叱責した。会議と言うことで、武器の携帯は許可されていないし、この分だと、皇居の警備兵も皆捕まっていることだろう。髭面の男……モーガン・トールには、エイブラムスの怒鳴り声は、負け犬の遠吠えにしか聞こえなかった。

「むろん、向けるべき矛先にはきちんと向けますぞ、エイブラムス大将。皇帝を亡き者とし、この国を正当なる軍国国家作り変えた後、

まずは手始めに、ルートニアへ遷都したセンチ・レーバンへ侵攻いたします。もっとも、それはあなたの指揮ではなく、私の指揮でおこなうこと。共和国にあなたのような及び腰の将は不必要だ」

「何をっ！ 貴様たちは分かっぺおらん！ 向けるべき矛先は、いまこの国にも攻め寄せている『翼ある人』をおいて他にはない！ 目先の利益に国家の未来を見失うな！」

「フンっ！ ヤツの戯言を真に受けて、目的を見失っぺおられるのは、大将の方ではありませんか。何のために、このような素晴らしい武器を作ったのか」

モーガンは口を歪ませながら、バヨネットを撫でる。エイブラムスはその顔に空恐ろしいものを感じた。力の使いどころが分かっている、力に溺れたものの顔だ。それは、この国に迫る危機を理解していないと言う点では、参議どもと変わらないが、持ち得た力の意味を理解していないと言う点においては、なおさらたちが悪い。

「さて、大人しく、皇帝陛下には死んでいただくでしょう」

エイブラムスの内心など知るはずもなく、ついにモーガンは無慈悲な処刑を宣告し、御簾に近づいた。御簾の内側では、侍女たちの悲鳴が一際大きくなる。

一貫の終わりか……そう思われた次の瞬間、閉めたはずの会議室の扉が、勢いよく開け放たれた。そして、唸り声のような少年のかけ声が聞こえた。

「せい、やあーっ！！」

驚くエイブラムスの視界の前を、軍病院の寝巻き姿に剣を振り上げた、赤い瞳の少年の姿が横切っていく。少年は迷うことなく、円卓を踏み越えてモーガンの下まで走ると、目にも止まらぬ速さで斬りかかった。

「何っ！？」

咄嗟に振り返ったモーガンのバヨネットと、少年の剣が激しく打ち合っぺ、火花を散らす。

「センチ・レーバン人！？ なぜ、センチ・レーバン人がここに！」

？」

少年の姿に、まず驚きの声を上げたのは、参議の一人だった。あつという間に会議室にどよめきが満たされていく中、少年は不敵に笑った。

「なんでって、そりやたまたまってヤツだよ！」

「おのれ、生っ白^{しろ}いセンチ・レーバン人めっ。邪魔をするなーっ！」

モーガンは悪態を吐くと、力の限り少年の剣を押しつけた。そして、力負けした少年がよろけた拍子に、バヨネットの銃口を向ける。「よけて、アルサスっ！！」

扉のほうから別の声。エイブラムスが顔をそちらに向けると、そこには、肩で息する少女の姿があった。華奢な体に似合わない軍服と襟章から、近衛騎士の一人だとわかる。すくなくとも、教導団の人間ではないようだ。

「死ねやっ！！」

刹那、モーガンのバヨネットが火を噴く。火葉の破裂する音と、ほぼ同時に銃口から発射されるミスリルの杭。エイブラムスは、その瞬間だけが、スローモーションに切り取られたような錯覚を覚えた。

「い、いかん！」

少年は無防備な状態。蜂の巣にされれば、神聖な皇居を血で汚すことになる。慌てたエイブラムスは、思わず叫んでしまった。

72. 御前会議のクーデター（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せ下さい。

73. 近衛教導団

教導団……。正確には「ダイムガルド近衛教導団」という。教え導くという言葉の通り、下士官を募って、訓練や教育を施す部隊である。いわば、軍学校と言ってもいい。すでにその歴史は長く、この国に軍隊が出来上がった頃から、その名で存在していた。

しかし、十年前、ヨルンの悲劇を教訓として、軍役制度を募兵制から徴兵制に切り替えた時点で、教導団は形骸化してしまった。徴兵された若者は皆、各配属場所で各自訓練をする。いまや、教導団は近衛騎士の育成のためだけに存在しており、その力を持ち余している形であった。つまり、力を持っても使いどころがないのだ。その鬱憤が、軍国化などという、蛮勇的な考え方に到らせたと言っても差し支えないだろう。

だが、その教導団が本当にクーデターをもくろむなどと、誰が想像しただろうか。皆、それを聞けば「まさか、そんなはずはない！」と一度は耳を疑うに違いない。

それだけに、記憶もなければ、ダイムガルド人の常識や観念も当然のように持っていないアルサスは、すぐに行動に起こせたのである。

大本営の渡り廊下を抜けて、皇居に押し入ることはそれほど難しくはなかった。何故なら警備兵たちは教導団と交戦中であり、その脇を通り抜けて皇居に入った少年と少女に構っている余裕などなかった。そうして、城内を駆け抜けて、御前会議の会議室に辿り着いたのだが、すでにモーガンたちは会議室に雪崩れ込んだ後だった。

「わたしたちだけで飛び込むのは危険だ」

セシリアはそう言ってアルサスを止めようとしたのだが、部屋の中から聞こえてきた「皇帝陛下には死んでいただくでしょう」というモーガンの一声に、アルサスは突き動かされた。扉の前に見張りとしてついた、二人の教導団兵を倒すことはそれほど難しくはなか

った。皇居を押さえた事で生じた、彼らの油断を突いて飛び掛れば、あとは体が勝手に動く。雷のような速さで教導団兵を伸した。

「そんな剣技、何処で身に着けたんだ？」

セシリアは素直に驚きを口にしたが、アルサスにも良く分からなかった。失った記憶のどこかで、見に染み付いている剣の技、と言うことくらいしか見当がつかない。少なくとも、一瞬でも気を抜けば、その剣は相手の命を奪いかねない狂気を孕んでいた。

「もしかすると、ぼくは暗殺者だったのかもね……」

なんて、アルサスはおどけて見せながらも、会議室のドアを勢よく蹴破って、会議室内に飛び込んだ。広い部屋には二十人以上の人間がいた。壁際に集められているのが参議たち、そして、腕章を腕に巻いているのが教導団。

その中でリーダーがどの人物なのかはすぐに見当がついた。円卓の向こうで、御簾に向かってバヨネットの小剣を振り上げている髭面の男、モーガン・トールだ。アルサスは迷うことなく、円卓を飛び越えてモーガンに切りかかった。背中を向けていたモーガンはくると振り返り、アルサスの剣を受け止める。そして力任せに、アルサスを押しのけると、バヨネットの銃口を向けてきた。

「よけて、アルサスっ！！」

セシリアの声にはじかれて、とっさにアルサスは身をよじって椅子の陰に隠れた。その拍子に、バヨネットから秒間隔で打ち出された、鋭いミスリルの杭がたんっ、たんっ、次々に椅子の座面に突き刺さっていく。

ぞっ、と背筋が寒くなる。よけなかったら、今頃蜂の巣にされていた。

「くそっ、ちょこまかと！」

撃ち方をやめた、モーガンが舌打ちする。

「おい、何をしている、その娘も捕らえろ！」

アルサスとモーガンの戦いに、少しばかりあっけに取られていた教導団兵たちを、モーガンは叱責しながらも、バヨネットを小脇に

構えて、ゆつくりと、椅子の後ろに廻る。

「こんなこととして、国が変わると思ってるのか、あんたたち！」

椅子の後ろで、アルサスが言う。今椅子の後ろから飛び出せば、間違いなくバヨネットの餌食になる。それが分かっているから、セシリアも大人しく、剣を捨てた。今更になって、ちよつと無謀すぎたかな、と思いつつも、時間稼ぎのために、モーガンに話しかける。「反乱なんて、出目の悪い博打と一緒にじゃないか……。そんなことして、あんたらが無事で済むと思っているのか？」

と、問えば、案の定モーガンはびたりと足を止めた。少しでも時間を稼げば、セシリアが連絡した近衛騎士団が駆けつけてくるはずだ。

「センテ・レーバン人ごときに、わが身を心配されるとは思っても見なかった……。無論、無事で済むかどうかはこれからにかかっている」

「これから？」

「そうだ。ここで皇帝を亡き者として、皇室という仕組みを廃止する。そして、近衛騎士団にその罪を被ってもらい、我らの手で軍隊を再編し世界に強国をアピールするのよ。平たく言えば、そういうことだ」

「とんだ誇大妄想だな。よしんば、反乱が成功したとして、国民はついてくるかな？ この国の人たちは、みんな皇帝一族を敬っている。その敬意の対象を殺せば、あんたたちだって無傷じゃいられない」

アルサスはそういいながらあたりの様子を伺った。

他の教導団兵は、セシリアを捕まえ、固唾を吞んでモーガンと、椅子の後ろに隠れるアルサスを見守っている。そんな教導団兵に銃口を向けられているのは、参議たち。ちよつと、円卓を挟んで向かいの壁際に固まっている。そして、モーガンの背後。御簾と呼ばれる竹で編まれたのカーテンの奥にうごめく人影。皇帝とその侍女たちだ。逃げ場を失った、彼らもじつと固唾を吞んでこちらの様子を

伺っているようだった。

「革命には、犠牲も付き物だ。無傷でいるつもりはない。少なくとも、お前がその心配をする必要はない。それから……近衛騎士団が来るまで、時間稼ぎをするつもりなら、話はここまでだ。そんなところに隠れていないで、でてきたらどうだ？」

「お見通し……ね」

フツ、とアルサスは鼻で笑う。どのみち、時間稼ぎなど出来ないか。アルサスが椅子の後ろから出てこなければ、モーガンはバヨネットで先に皇帝を射抜くだろう。その隙を突いてモーガンを切り伏せたとしても、皇帝が死ねば、本末転倒と言うことになってしまう。迷っている暇はない！

アルサスは立ち上がると同時に、カーペットを蹴って、天井近くまで飛び上がる。

「軽業のつもりか!？」

唸り声を上げながらモーガンは、バヨネットの引き金を引く。撃ち放たれたパイルは、アルサスを追いかけるように、壁や天井に突き刺さっていくが、アルサスを仕留めることは適わなかった。

アルサスは、モーガンの言うとおり、サーカス・ギルドの軽業師のように、ひよいひよいと右へ左へ飛び跳ねながら、巧みにパイルを交わしていく。紙一重ではあるが、アルサスには飛んでくるパイルの軌道が見えていた。火薬によって打ち出されるパイルは、言わば一直線に飛んでくる。モーガンの視線と銃口を捉えておけば、その弾道を読むことなど、造作ないことなのだが、口で言うほど簡単に出来ることではない。現に、セシリアや参議たちは、アルサスの見事な軽業に、驚きの声を上げている。

どうして、こんなことが出来るのか。記憶を喪った彼には、分からないことだが、身に備わったその動体視力と敏捷さに感謝した。やがて、モーガンのバヨネットはパイルを打ち出すのを止め、カタカタとかすれた音を立て始める。アルサスは、それを好機とばかりに踵を返すと、雷のようなステップで、モーガンとの間合いを詰

めて、その首筋に剣身をあてがった。

「弾切れたみたいだね……。バヨネット火薬で杭を打ち出す魔法みたいな武器だって事は、セシリアから聞いて知ってた。でも、パイルは無限じゃない。形勢逆転だ。全員、武器を捨てろ!!」

「野郎っ! やらせるかよっ!!」

リーダーの危機を悟った教導団兵たちが、一斉にバヨネットを構えた。しかし、アルサスの剣がリーダーの首筋に突きつけられている以上、彼らもバヨネットを撃つわけには行かず、パイルの代わりに、鋭い視線を投げつけた。

「武器を捨てるのはお前のほうだ、センチ・レーバン人!」

教導団のクーデター、そしてセンチ・レーバン人の少年の登場。めまぐるしく膠着するかに見えたのだが、モーガンはアルサスの不意をつき、その腕力で力任せにアルサスを突き飛ばした。それほど体重の重くないアルサスの体は、ふわりと宙に浮き、そのまま御簾の裏に転がっていく。

「アルサスーっ!!」

セシリアがアルサスの名を呼ぶ。おかげで、体を打ちつけ、再び開きかけた傷口の痛みに、何とか平静を保つことができた。

アルサスは剣を握り締め、立ち上がりとして、突いた肘に何かやわらかいものを感じて戸惑った。振り向くと、ちょうど自分の下敷きになって、見知らぬ女の子が苦しそうに呻いている。複雑な幾何学模様の刺繍の施された、綺麗な光沢をみせる赤絹のドレス。ゆったりとした合わせと、袂の大きなデザインはダイムガルドの民族衣装だ。そしてダイムガルド人特有の褐色の肌に薄化粧に良く似合う、気品のあるきらびやかな宝飾の数々。その女の子が誰であるのかアルサスが察する前に、傍らの侍女が目を吊り上げた。

「ぶっ、無礼者! 皇帝陛下を押し倒すなどと、何ごとですか!」

きいっ! と今にもマニキュアの塗られた長い爪で、アルサスを引っかこうとする侍女。アルサスは慌てて飛びのいた。

「き、君が皇帝陛下?」

と言いながらも、アルサスは思わずぽかんと口を開けてしまう。目の前にいるのは、自分やセシリアと歳の変わらない少女なのだ。皇帝と言う響きから、男を想像していたのは、アルサスの早合点だとしても、まさか十六、七歳の少女だとは思ってもよらなかった。

皇帝は、アルサスに押しつぶされそうになった鼻頭を押さえながら起き上がると、

「そうじゃ。いかにも、わらわがダイムガルド皇帝『アイシャ・マイト・ダイムガルド』じゃ。そちは何者じゃ？」

と、殷懃な口調で言った。疑念と警戒というよりは、どちらかと言えば、素直な疑問をアルサスに投げかけたのだ。確かに、突然現れた、謎の救世主。しかも、外国人とあれば、疑問に思わぬはずもない。

アルサスは、すこしだけ答えに窮した。なんと答えるべきか、いい言葉が見当たらない。セシリアに助けられて、記憶喪失で……なんて、説明している余裕はない。

「ええっと、ぼくは……暗殺者だよ」

「はあ？」

今度は、皇帝アイシャが驚く番だった。もちろん、アルサスのそれは冗談だったのだが、アイシャと侍女たちは少しだけ気色ばむ。

「こ、殺し屋とな！？」 殺し屋がわらわを何故助けるのじゃ？」

しかし、モーガンの「撃て！ 皇帝もろとも、センテ・レーバン人を撃ち殺せっ！！」と言う声を聞くなり、アルサスはそんなアイシャたちを無視し、手前にあった皇帝の執務机を倒した。

「机の裏へっ！」

アルサスは、アイシャと侍女を手招きする。彼女たちが机の裏に潜むと同時に、バリバリと机にバイルが突き去る音が重なった。

「とにかく、ここから逃げよう。もうじき、セシリアが呼んだ近衛騎士団がここに駆けつけるはずだ。でも、その前にあいつらは、君を殺す。あの目は本気だよ」

「ですが、逃げると言っても、裏口の扉は開きません。おそらく彼

らが細工したのではないでしょうか」

侍女が青ざめた顔をして言う。アルサスの事を信用してはいないが、少なくとも敵ではないと感じたのだろう。むしろ、目の前でバヨネットを撃ち続ける教導団の方が敵。敵の敵は味方の理論だ。

「こちらから、その鍵を解除できないの？」

アルサスの問いかけに、侍女は首を左右に振る。

「無理です。安全のため会議室側からは、鍵を開けることは出来ない構造になっています」

「そんなことなど、どうでもよい！ わらわは、本当に殺されるのか？ わらわは、何の罪を犯したと言うのだ。何故、あのような野蛮な者たちに殺されなければならんのじゃ！？」

机の裏でうずくまるようにして、アイシャは嘆いた。その皇帝らしからぬ威厳のない青ざめた横顔に、アルサスはふと胸を揺さぶられた。何か、記憶が語りかけてくるような気がしたのだ。こんな女の子をどこかで見たことがある……。

「アイシャ、君を死なせたりしない。ぼくが君を守るよ」

そう言うと、アルサスはアイシャの手を取った。アイシャが驚いたのはもちろんだが、侍女も「まあっ！」と声を上げた。下々のものが、神聖なる皇帝陛下の手を取るなどと、あつてはならないことだ。しかし、アルサスは、そういうダイムガルドの柵しがらみを知らない。

アルサスの視線は、壁際にある小窓を見つめていた。アイシャは歳の割りに小柄だ。その窓を抜けられると判断したアルサスは、侍女が制止するのも無視して、立ち上がると、アイシャの手を引っ張って、一直線に小窓めがけて走った。

「何をするつもりなのじゃーっ！？」

悲鳴共に突かぬアイシャの声を背中に受けながら、アルサスは小窓のガラスに体当たりした。派手にガラスは砕け散り、アルサスと、アルサスに手を引かれたアイシャは窓の外へと飛び出した。

そこは、皇居の五階。眼下に広がるのは、固い地面……。

73. 近衛教導団（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せ下さい。

74. アルサスとアイシャ

アイシャの悲鳴が落下していく。その場にいた全員が、アルサスとアイシャが飛び出した小窓を見つめて、呆然となっていました。どうしていいものかと、数十秒の間、誰しもの思考が停止して、ただ時間だけが凍りついたようだった。

無数パイルが突き刺さり、ボロボロになった皇帝の執務机の後ろから、両手を挙げて侍女が姿を現し、我に返ったモーガンは苦虫を噛み潰したような顔をして、小窓の方へ走った。割れた窓ガラスの破片をバヨネットで押しのけながら、身を乗り出して、下をうかがう。

会議室があるのは、皇居の五階。下は固い地面だ。そこから飛び降りれば、まず二人とも無事では済まされないだろう。飛び降りて死んでくれたなら御の字、とモーガンは思ったが、覗き込んだ地面にそれらしき死骸は転がっていない。変わりに、皇居の壁面に等間隔に吊るされた、縦長の国旗がぶらぶらと揺れている。

すぐに察しはついた。小窓から飛び出したアルサスは、国旗に手を伸ばし、ジャングルの猿がツタを渡って隣の木に飛び移るがごとく、反動を利用して、国旗伝いに皇居の裏側にあるテラスまで渡ったのだ。

「本当に、軽業師なのか……？」

と、モーガンはその常人離れた芸当に舌を巻くとともに、練り上げた反乱の計画が、たった一人のセンチ・レーバン人の少年に崩されたことに、腸が煮えくり返った。

「下の部隊に伝令！　すぐに、センチ・レーバン人の小僧を追わせろ！　生死は問わん！　皇帝もろとも殺せ！！」

獣の唸り声のようなモーガンの声にはじかれて、教導団兵たちも我にかえる。一気に、会議室は騒然となり、数人の教導団兵が伝令のために部屋を後にした。残されたセシリアたちは、相変わらずバ

ヨネットの銃口を向けられたままだ。

「エイブラムス大将。外国人を使って、我らの正義を押さえつけようとは、どうにも芝居が過ぎやしませんかな？」

モーガンは、バヨネットの先端に取り付けられた小剣の切っ先を、セシリアの傍らに立つエイブラムスに突きつけた。だがエイブラムスは、まったく脅しに動じる様子もなく、大将然とした居住まいで、モーガンを睨み返す。

「大将閣下、あの者は何者ですか？」

「知らんな。小芝居を打つつもりなら、貴様ら悪逆の者をここに入れたりなどせんよ」

と、平静かつ低く相手を威圧するような声で、モーガンの問いかけを一蹴すると、傍らのセシリアに顔を向けた。

「中尉、あの者は一体……？」

「えっ、あ、はいっ。あの者は、三日前我が小隊が無限の砂漠で救助した者であります！」

唐突に尋ねられ、驚いたセシリアはかしこまって答えた。尉官以上の将校と言っても、所詮は小隊長であるセシリアにとって、大将は雲上の人であった。場違いであるとはいえ、セシリアは思わず緊張してすくんでしまう。

「ほほう、そのような報告は受けていないが」

エイブラムスは口髭をさすりながら言った。当然のことながら、セシリアたちの部隊が、レメンシア哨戒任務からの帰路にセンチ・レーバンの騎士と思われる少年を救助したことは、セシリアたちの手によって報告されていない。傷つき生死の境をさまよっている少年の事を報告すれば、騎士の鎧を身に着けていた彼は傷を癒すことも出来ず、軍の執拗な取調べを受けることとなるだろう。

セシリアには、それが忍びなかった。せめて、傷が癒えるまで、彼の記憶が戻るまでは、報告を差し止めておこうと思ったのだ。それが、こんな事態になるとは思っても見なかった。

「信用できる少年なのか？」

エイブラムスの問いかけに、セシリアは少しだけ戸惑いながらも頷いた。皇帝を連れ去った彼を今は信用するしかない。少なくとも記憶はなくとも、あのゆるぎない瞳を持った彼であれば、信用に足りるとセシリアは思った。

テラスに降り立ったアイシャは、まだ足が震えている事を自覚した。突然名も知らぬ外国の少年に手を引かれ、五階の小窓から飛び降りたかと思えば、絵本で読んだことのあるサーカスのように、皇居の壁面に吊るされた国旗を伝い、裏側にあるテラスに辿り着いた。それは、皇帝と言う立場から、温室で育ったアイシャにとって、ドキドキするようなちょとした冒険だった。

少年の方も、そこまで上手くいくとは考えていなかったようで、内心ほっとしたような顔をこちらに向けてくる。赤い瞳がとても印象的な男の子だと、自分の命が危うかった事など忘れて、アイシャはつい少年の瞳を覗きこんでしまった。

「何？　ぼくの顔に何かついてる？」

少年がアイシャに見つめられていることに気づき、小首をかしげる。

「あ、あのっ、そろそろ、手を離してはくれまいか」

アイシャが慌てて言うと、少年は「ごめんっ」と、少し頬を染めて手を離れた。どうやら、少年はアイシャの手を固く握り締めていたことを忘れていたようだ。しかし、不意に少年は、しげしげとアイシャと繋いでいた自分の手を見つめ、まるで自分に問いかけるかのようにつぶやいた。

「こんなこと……前にもあったような？」

少年はうつ、と呻くと頭が痛いのか、顔をしかめた。

「思い出せない……くそっ！」

「なんじゃ、そち、記憶がないのか？」

悔しそうに歯軋りする少年に、アイシャが尋ねる。察しがいいと言うよりも、最近読んだ絵本で見たことがある、と言うのが正しい。

しかし、現実には記憶喪失者を前にすると、違った感慨も沸いてくるもので、頭痛に苦悶の表情を浮かべる少年のことが、心配になってきた。

「無理をするでない。そちが、ここで倒れてしまったら、わらわはどうすればよいのじゃ？」

「そう、だね……。ごめん」

先ほどの無謀ささえちらつく勇壮な雰囲気とは打って変わって、力なく少年は笑う。

「なんじゃ、さっきから謝ってばかりじゃの。それよりも、わらわは名乗ったのじゃ、そちの名を聞かせてはくれぬか。それとも、名前すら忘れたのかの？」

「あ、ああ、そうだね。ぼくは、アルサス・テイルだ」

「アルサスか……センチ・レーバンの絵本に出てくる、平和の王様の名前じゃの」

知っているぞ、という顔で、ふふんと鼻を鳴らすアイシャ。アルサスは、そんなアイシャに「絵本？」と問いかけた。すると、アイシャは、やや悲しげに長い睫を伏せる。

アルサスは知るはずもない。絶対不可侵の神聖なる存在であるダイムガルド皇帝と言う地位にあること。それは、神秘性を高め人々の忠誠心を煽るために、下々に顔を見せないよう、皇居の奥まったところに幽閉されているのと同じであった。

口を利くのは、お付の侍女だけ。見えるのは、窓からの風景だけ。十数年の人生を広い世界から見れば、芥子粒ほどの小さな空間だけで過ごしてきた。歳の近い友達もいなければ、年上の人間がぺこぺこ頭を下げる。わがままを言っても叱ってくれる人はいないし、かと言って、わがままを口にするのも莫迦らしい。

そんな歳頃の女の子にとって、皇帝と言う地位にあることは生まれながらに決まっていることで、責任だけが重くのしかかり、寂しい時間をすごしていくことは、鬱憤でもあった。

その鬱憤を晴らすことが出来る唯一の友が、皇居の書庫に納めら

れている書物だった。その中でも、アイシャの想像力と夢を育んでくれたのが、絵本である。古今東西あらゆる絵本を読んでは、皇帝と言う身分にある自分と、物語のヒロインを結び付けていた。帝王学の本よりも、それらはアイシャに実りある時間を与えたと言っても、過言ではないだろう。

「はじめて、空の下に出た　はじめて風の中に立った。はじめて太陽を見上げた」

アイシャはそう言って、雲の流れる青空を見上げた。命を狙われたと言うのに、晴れやかな笑顔であることに、自分自身滑稽に思えてくる。だが、この胸の高鳴りは何だろう……。あこがれたものが、今日の前にある。一生外に出ることは許されないと思っていたのに、ここに風があつて、空があつて、陽の光が溢れている。それが、この上もなく、胸をドキドキさせるのだ。

「はじめて、殿方と手をつないだ。わらわと直接口を聞いたのは、侍女以外では、アルサスが初めてじゃ」

アイシャはにっこりと笑い、再びアルサスの赤い瞳を見つめた。アルサスはやや照れたような顔をする。

「それにしても、どうして、そちはわらわをたすけてくれたのじゃ？　そちがいてくれなければ、わらわはモーガンとやらに、殺されておった」

「どうしてって、上手くは説明できない。誰かが殺されるかもしれないのを黙ってみているわけには行かなかった」

「じゃが、センチ・レーバン人で、記憶のないそちにとって、わらわの命など関係ないことであろう？」

「そうだけど」

と言いかけたアルサスの言葉にかぶせるように、アイシャはやや悲しげな声をする。

「わらわは、皇帝に即位した時から、いつかこんな死に方をするんじゃないかと、思っておった。定かなことではないが、わらわの父もヨルンの戦の敗退の責を負わされ、軍部の者に暗殺されたと言わ

れている。同じように、あのものたちが、わらわを殺そうとするのは、わらわに落ち度があったからじゃ……」

「何を言ってるんだよ！」

返すアルサスの語気は、非常に強いものだった。アイシャはその勢いに、思わずたじろいだ。

「反乱を起こして、誰かの命を犠牲に変えられる未来は、結局分かり合えないままの未来だ。分かり合えないなら、潰せばいいなんて正しいことじゃない。落ち度なら、誰にだってある。それを認め合えるようにならなきゃいけないんだ！ 間違ってるのは、モーガンの方だ」

「どうして、そういうきれるのじゃ？ そちは記憶もないというのに」

「それは……そんな気がするんだよ。記憶とか、そんなんじゃないで、心がそう言ってる。それに、少なくとも、君だけが間違ってるんじゃない」

アイシャの問いかけに答えるアルサスは、少しずつ語気を緩めると、最後に優しい微笑をくれた。アイシャはその笑顔にドキリとする。まるで胸の中で何かが弾けたような気がした。

「君、と呼ばれたのはじめてじゃ……。アルサス、そちはわらわを皇居から連れ出してくれる、王子さまだったのかもしれない」

「ぼくは王子なんかじゃないよ。きつと暗殺者か、そうじゃなかったら軽業師だよ」

おどけてみせるアルサスに、思わずアイシャは声を立てて笑った。

と、その時。まるでタイミングを計ったかのように、和やかな雰囲気壊して乱暴な足音が聞こえてくる。探るまでもない、アイシャを追いかけてきた教導団の連中だ。

「早いな！ ここで戦うか……？」

アルサスの視線が、ちらりとアイシャに送られる。先ほど会議室で見た、雷のような剣技を用いても、大人数のバヨネットを相手

にすることは難しいだろう。戦いのことは、てんで分からないアイシャにも、それくらいなら察しがつく。

「足手まといにはならん。それに、そちはわらわの事を守ってくれるのじゃろ？」

アイシャはそう言つて、アルサスに右手を差し出した。アルサスは、頷くと抜き身の剣を構えつつ、アイシャの手を握る。

乱暴な足音は、すぐさまテラスに駆け込んできた。案の定、青色の腕章をつけた、教導団兵であった。彼らは、そこにいるのが、アルサスとアイシャである事を確かめようともせず、バヨネットを構えた。問答無用、と彼らの顔に書いてあるようだ。

そのため、「そなたたち！ わらわは、ダイムガルド皇帝なるぞ！ バヨネットを収めよ！」と、アイシャが言ったところで、教導団兵はだじろぎもしない。

「われらの理想のため、そのお命いただきたく存じます」

逆に、がちやりとバヨネットが無機質な音を立てれば、今にもその銃口から、ミスリルの杭が打ち出されるかもしれないと、アイシャは足がすくんでしまった。そんなアイシャの代わりに、アルサスが言う。

「理想だって！？ 戦争することが理想なのかよっ！」

「黙れ、センチ・レーバン人！ 貴様らに、この砂漠の国の苦しみが分かるはずがない！ 緑ある大地を手に入れることは、我々ダイムガルド人の悲願なのだ。しかし、そこにいる皇帝は、地位に胡坐をかき、戦争に臆病になるどころか、平和などと口にする！ それが、ダイムガルド三億人を苦しめていると言う事実を、貴様ごときが分かるはずもないだろう！？」

そうだ、そうだと、教導団兵は声を合わせる。

アイシャは、いたたまれない気持ちになった。戦争は正しいことではない。自分が読んだ絵本の中に、何度も出てきた言葉。アルサスと同じ名を持つ、センチ・レーバンの伝説の王も、そんなことを口にした。だから、平和の王と呼ばれるのだ。ところが、戦争をし

ないから、と教導団はアイシャの命を狙う。

それは理不尽なようで、その一方、自分が本当は何も知らないで、平和を口にしていないのではないのかと思えてくる。やはり、自分に落ち度があったのだ。

「平和の何が悪い！？ 分かり合えば、互いに助け合える。国境とか、そんなもの取っ払って、手を取り合える。その努力もしないで、責任だけをアイシャに押し付けるのは、間違ってる！」

「知りもしない事を抜かすな！ 人は分かり合えない。だから、十年前も、そして今も、この世界に白き龍が現れたんだ！ あの力を我らのものとすれば、センチ・レーバンもガモーフもすべて我らの土地と出来る。戦争こそが、真たる人間の姿だ！」

「モーガンといい、あんたたちといい、誇大妄想が過ぎるってんだよ！！」

アルサスはわずかに後ろに下がる。二度は通用しないかもしれないが、それでもここで蜂の巣にされるくらいなら、テラスから飛び降りて、ふたたび国旗伝いに逃げる方が、分がある。

「アイシャ、もう一回飛ぶよ」

と、小声でアルサスが言い、アイシャが頷いた。じりじりと、牽制の視線を送りながら、一歩ずつテラスの淵に下がる。

不意に、雲が翳った。あたりが急に薄暗くなり、思わずその場にいた全員が空を見上げた。

「あれは……雲じゃない！」

青い空の、ちょうど太陽と重なる位置に、ぽっかりと浮かぶ白いもの。一見するとひつじ雲に見えていたそれが、瞬くうちにばらばらになり急降下してくる様に、一番最初に声を上げたのはアルサスだった。

74. アルサスとアイシャ（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せ下さい。

75. ぼくが君を守る

「高角滑空砲の音だ」

どん、どん、と腹に響く落雷のような音に、セシリアの傍らで、エイブラムスが呟いた。高角滑空砲は、街のいたるところに設置された、帝都防衛用の大型パイル・バレットである。饅頭を押しつぶしたようなドーム状の射撃室から、円筒の砲塔が伸びている。原理はバヨネットのそれと同じく、「火薬」と呼ばれるもので、ミスリル製の杭「パイル」を打ち出す装置だが、その大きさはパイルの何十倍にもなる。パイルと火薬を発射筒に込める給弾手、射撃の位置や方向を指示する指揮手、砲座の向きと砲塔の角度を調整する操作手、そしてパイルを発射する砲撃手の四人が、ドーム状の射撃室にはいる。

もともとは、十年前、ヨルンの悲劇を教訓として整備された、敵軍を帝都に近づけさせないようにするための長距離曲射砲撃の砲塔だったのだが、以降、不安定とはいえ一応の停戦協定が結ばれ、今日まで稼動することはなかった。

そのため、セシリアはもちろん、この場にいるほとんどの人間が砲撃の音を耳にするのははじめてだった。

これは、近衛騎士団が反乱鎮圧に乗り出したのではない。教導団を鎮めるために、高角滑空砲は必要ない。それは、その場にいる全員の共通認識であり、その事態の変容を直接受けたのは、モーガンたち教導団の面々だった。

「何事だ!？」

砲撃の音と音の隙間でうろたえるモーガンたち。予測できない事態に、彼らは前後不覚の様相を呈していた。それでも、砲撃の音が続く。

兵のひとりが、アルサスたちの飛び降りた小窓に近づき、外の様子を探って、

「空です、空に向かって撃っています。町中の高角砲が」

と報告する。モーガンはセシリアたちの前で、あからさまに眉をひそめ、バヨネットの銃口をこちらに向けたまま、小窓のほうへ駆けた。不意に、エイブラムスがセシリアの肩を叩く。

「中尉、やれるか？」

顔は真っ直ぐ向けたまま視線だけで、後ろを向き油断している若い教導団兵の一人を指し示す。何を「やれる」のか瞬間的に悟ったセシリアは無言で頷いた。

「ありゃあ、何だ!？」

モーガンはそうとも知らず、空を見上げて指を指す。青空から降ってくるそれを、セシリアたちは見ることが出来ないが、少なくとも、そんなものに氣をとられている暇などなかった。一瞬の隙を突くかのように、走り出したセシリアは、カーペットの上を滑り込むようにして、後ろを向いた教導団兵の背後に回り足払いをかけた。そして、教導団兵が前のめりに倒れこむ前に、その手からバヨネットを奪う。

「何をしている!？」

小窓から振り返ったモーガンが叫ぶよりも早く、セシリアの銃口はパイルを打ち出した。迷いなく飛来したパイルは、カツ、と音を立てて、モーガンの脳天を貫いた。断末魔の悲鳴も上げることなく、モーガンは大きな字でカーペットの上にどざりと斃れる。それは、反乱者のあまりにもあっけない末路だった。

モーガンが射殺されたことを契機に、エイブラムスは軍人ならでわの凄みのある目つきで、

「教導団の若人たちよ、貴様らは反逆者だ! 国家に仇名すその汚名を捨てなければ、今すぐ武器を捨てて、大人しくしろ!!」

と、若者たちを一喝する。その怒号たるや、響き渡る雷鳴のような砲撃音よりも、鋭く尖って、教導団兵を突き刺した。教官職を除けば、教導団という性質から、ほとんどがセシリアたちと歳の変わらない若者である。特に、会議室に雪崩れ込んだモーガン率いる部

隊は、彼を除き、皆実戦経験もない若輩者であった。そのため、大將の怒号は、必要以上に彼らを怯えさせた。

「わ、我々は反逆者ではないっ！　皇帝がいる限り、この国は貧しいままなんだ！　それを購うは、我ら国軍の使命！」

急に青冷めた顔をして、教導団兵の一人がエイブラムスに向かってパイルを発射する。だが、怯えて狙いの定まらないミスリルの杭は、エイブラムスの禿頭の脇を通り過ぎ、そして背後の参議たちの頭上を越えて、壁に突き刺さった。

「黙れ、反逆者！」

すかさず、セシリアはその教導団兵を撃ち殺した。その横顔に見え隠れするのは、冷徹な軍人の顔。おおよそ少女らしきなど微塵もない。エイブラムスは、その横顔に見覚えがあることに気づいた。

彼女が、近衛騎士団の中尉であることは、襟章の星とラインの数で一目瞭然だが、数いる将校の一人に過ぎない彼女の名前もしらなければ、顔をあわせた事さえない筈だった。

「武器を捨てろ。脅しではない、捨てなければ、軍規第百九十九条に則って、反逆者は全員撃ち殺す！」

芯の通ったセシリアの声は、砲撃の音よりもはっきりと響き渡った。残された教導団兵は、セシリアの気迫におののき、皆そろってバヨネットを投げ捨てた。

会議室に、ほっ、と安堵の空気が流れる。

「教導団め、我らを拘束するとは許せん！　早くその醜い愚か者どもと、死体を運び出せ」

「エイブラムス大將、近衛騎士団を用いて直ちに反乱を終息させろ！　抵抗する者は全員射殺だ！」

「そんなことよりも、皇帝陛下だ！」

「何なんだ、あのセンチ・レーバンの小僧は！？　陛下を何処へ連れて行った？」

「皇帝陛下をお助けするのだ。猶予はないぞ！」

「陛下を救出した後、センチ・レーバンの小僧は誘拐犯として、縛

り首にしろ！」

解放された参議たちは、口々に叫んだ。

だが、エイブラムスは彼らの勝手気ままな発言など無視して、窓辺へ駆け寄った。今確かめるべきは、教導団のことでも、皇帝を連れ出したセンチ・レーバン人の少年のことでもない。窓辺から見上げる空に、帝都上空より急降下する白い翼の人影。帝都に騒然としたざわめきが巻き起こり、燐粉のような光の粒が舞い上がる。

この眼で実際に確かめるのはこれがはじめて。哨戒隊が魔法装置に録画した映像でしか見たこのない、「翼ある人」が帝都を急襲しているのだ。

「翼ある人」に襲われる帝都を鳥瞰しながら、エイブラムスは拳を握り締めた。彼らは無限の砂漠を越えて、ついに帝都にまで押し寄せたのだ。翼がある、と言うことは、彼らにとって天然の堀である無限の砂漠など、何の障害にもならないということ。

センチ・レーバンとガモーフのガルナック平野での戦の最中、彼らが出現したの一報を聞いたときから、エイブラムスは懸念を抱いていた。そして、レメンシアが襲われ、前回の御前会議中にもたらされた、無限の砂漠での翼ある人」と哨戒小隊の交戦。

それらを踏まえても、世界中の都市や人を襲っている「翼ある人」が、遅かれ早かれこの帝都に現れることは分かっていた。分かっていたからこそ、その準備を参議どもに呼びかけていたのだ。

「このままでは、ウルガン殿の仰った通りになってしまう……」

懸念をエイブラムスに伝えた者。その者の言葉を思い浮かべながらも、すでにその時が来てしまった事を痛感しつつ、エイブラムスは踵を返した。すると、彼の前に財務大臣が駆け寄ってくる。

「ええい、なにをぼんやりとしている、エイブラムス大将！ 早く教導団と、あのセンチ・レーバン人を捕らえろ！！」

唾を飛ばしながら、怒鳴る財務大臣。エイブラムスは、この期に及んでも、事態を把握していない、愚鈍なこの男に失望と共に、怒りが湧いてきた。

「所詮は、あなたも、モーガンと同じですな」

吐き捨てるように、エイブラムスが言う。無論、財務大臣は顔を真っ赤にして、わめき散らしたが、エイブラムスを取り合わなかった。会議室には、いつの間にやら、近衛騎士の部隊が到着していた。おそらく、セシリアが呼んだのであろう。

エイブラムスは、セシリアを手招きする。

「中尉、そなたは手勢を率いて、あの少年と皇帝陛下を探せ」

「はっ。しかし『翼ある人』は、いかがなされるおつもりですか？」

「そっちは、私に任せよ。すぐに、都民には避難命令を出させ、近衛を招集後、対処に当たる。人手は足らぬゆえに、皇帝陛下の救出はそなたの手にかかっている。いいな？」

エイブラムスは、セシリアへの指示に期待を込めて言った。すると、セシリアは背筋を伸ばし、敬礼を取る。「ご期待に沿えるよう、尽力いたします！」

と、言うなり、まだ歳若い少女は踵を返し、手近にいた近衛騎士を呼びつける。二人は、どうやら彼女の隊の人間らしい。しかし、気心知れた相手にも、男顔負けの凜と張った声で、命令を伝えた。

「ジャック、マークス。皇帝陛下をお助けせよとの、大将直々の命令だ！ 行くぞ！！」

セシリアたちが会議室を駆け出していく。エイブラムスは、その後姿を見送ることなく、険しい表情で軍務に就いた。

白い鳥が落下してくる。誰もがそう思った。しかし、慣性も抵抗も無視したかのように、高速で落下する無数の飛翔体は、その姿がはっきりとしてくるにつれ、それが鳥ではなく、人……白い翼を生やした人である事に気づいた。

「あれは、『翼ある人』だ……！」

「何匹いるんだよっ!？」

「街へ降りていくぞ!!」

呟きとも悲鳴とも似つかない声を上げたのが誰であったかはわか

らない。落下してくる「翼ある人」に戦いた教導団兵はアルサスとアイシャに狙いつけていた銃口を空に向け、闇雲に一斉射する。弓矢より早く、槍よりも鋭いパイル。しかし、「翼ある人」は、くるりくるりと旋回しながら、こちらへ向かって、急降下してくる。迷いのない無機質な黒い瞳が、こちらを凝視した。何もかも吸い込むような、恐ろしい瞳だ。

「ひゃあっ！」

情けない悲鳴を上げて、教導団兵の一人がうろたえ、バヨネットを落とす。その瞬間テラスに舞い降りた「翼ある人」は、手にした三叉槍を突き出す。貫かれた教導団兵の青年は、一瞬にして、光の粒となって弾け飛んだ。

混乱は瞬く間に、テラスを埋め尽くした。その中で、アルサスは、割れんばかりの頭痛に顔をしかめた。記憶が何かを呼びかけている。それなのに、その記憶の扉を開けてはならないと、心が言っているのだ。その先には絶望しかない。

「アルサス、痛いのか？ 大丈夫か？」

アルサスの背後で、アイシャが不安そうな声で覗き込んでくる。

「大丈夫だよ」と強がって見せても、顔面は蒼白で、明らかに大丈夫ではない。

「開けるべき記憶じゃないなら、開けないから、今だけ痛みよ、鎮まってくれ！」

アルサスは誰に言うではなく、自分に言い聞かせると、強くアイシャの手を引いて、「翼ある人」をにらみつけた。「翼ある人」はアルサスすの視線に気づいたのか、くるりと顔をこちらに向けた。そして、笑うでもにらむでもなく、ただ無表情に、無感情に、翼をはためかせ、アルサスの元へと滑り込んでくる。

「やられてたまるかっ！！」

アルサスとの剣と「翼ある人」の三叉槍がぶつかり合い、激しい金属音を奏でる。アルサスはやや力を抜き、敵のよろめきを誘うと、返す剣で「翼ある人」の腕を切り裂いた。

しかし、わかっていたような気がする。切り取られた腕が、光の粒に変わり、再びもとあったところに再生することを。それでも、躊躇している暇はなかった。眼前の敵に氣をとられていると、何処からともなく現れた別の一人が、アルサスの背後にいるアイシャを狙う。

「アルサスっ」

アイシャは恐怖に、思わずアルサスの背中にしがみついた。アルサスは眼前の「翼ある人」を蹴り飛ばすと、反動を利用してアイシャを片手で抱きかかえ振り向く。

「やられてたまるかって、言っただろ！ この化物っ」

悪態つきながら、剣を投げつける。その切っ先が「翼ある人」の胸に突き刺さると、無表情な顔に少しだけ歪みが生じる。そして、「翼ある人」は光の粒となって弾けとんだ。

「胸が弱点なのか!？」

風に乗って、北の空に流れていく光の粒を見送りながら、アルサスは呟いた。すると、再びアイシャの悲鳴がアルサスの耳朵を打った。

「今度は、こっちじゃ!」

アイシャの言うとおり、先ほど蹴飛ばした「翼ある人」が三叉の槍を振り上げる。まずい!　と思うよりも早く、アルサスの体が反応する。アイシャを抱えたまま、姿勢を低くすると、その鋭い一撃をかわし、同時に教導団兵たちの方に駆け出す。

「あんたたち、胸だ!　胸を狙うんだっ!」

アルサスは教導団兵たちに言うど、足元のバヨネットを拾い上げた。使い方はよく分からないが、取っ手についている鉤型の「引き金」と呼ばれるレバーを引けば、先端からパイルが発射される仕組みだ。

「いっけえーっ!」

掛け声よろしく、アルサスはバヨネットの引き金を引いた。激しい反動に腕をもがれそうになる。狙いの定まらないパイルは、上手

く敵を捉えることは出来なかった。

その一方で、アルサスの声にはじかれて、教導団兵たちがバヨネットを両手で構えて、一斉射撃する。無数のパイルが翼ある人に突き刺さり、もう一人の「翼ある人」も光の粒となって弾けとんだ。

「やった!」と、教導団兵たちから勝ち鬨^{どき}の声上がる。突然、未知の敵が襲来し、本来の目的を忘れた彼ら。実戦経験のない、彼ら教導団の青年将校にとって、それは、はじめて味わう勝利だった。

しかし、間も空けずに、空から新たな「翼ある人」が舞い降りてくる。倒しても、殺しても、どこから溢れてくる「翼ある人」。

まるで、塵が集まって出来ているみたいだ。と、アルサスは内心に思いながらも、再びバヨネットを放った。一度目とは違い、今度はしっかりと小脇に抱えて、引き金を引く。弓矢よりもずっと扱いやすい武器だが、それも、「翼ある人」を仕留めるには至らない。

アルサスの傍で、教導団兵が三叉槍の餌食になる。ひとり、また一人と、あっけなく消えてなくなる。アルサスの握るアイシャの手が小刻みに震えていた。皇居の奥に閉じ込められた彼女にとって、それは、はじめて知る人の死だった。

「アルサス……怖い。怖いのじゃっ」

必死にアルサスにしがみつくアイシャ。

「大丈夫、ぼくが君を守る……!」

アルサスは、「翼ある人」めがけてバヨネットを放ちながら、強くアイシャの華奢な手を握り返した。

75. ぼくが君を守る（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せ下さい。

76. テラスの戦い

「テラスだ！ 急げ！！」

廊下の窓の向こうに見える、テラスを指差しながら、セシリアの前を走るのは、短く刈り込んだ髪型と、彫りの深い顔が印象的な、はたち二十歳そこその青年だ。肩幅の広い軍服が良く似合うのは、彼が頭よりも手足を使うことをモットーとしていることの顕れである。

「テラスにも、『翼ある人』がいますっ！！ 危惧したとおり、ついに帝都にもヤツらが！」

セシリアの後ろで叫ぶのは、いかにも利発そうな顔をした青年。学者のように知的な雰囲気は軍人のそれにそぐわないほどで、常に冷静な分析を是としている。しかし、時として若さがそれに追いつかないこともある。現に、彼の声は少しばかり上擦っていた。

「ジャック、テラスにアルサスと皇帝陛下は！？」

前を行く青年にセシリアが問う。

「いるっス！ 陛下もあの小僧も！」

「よし！ マーカス、バヨネットの安全装置は外しておけ。ジャック！ テラスへ駆け込むと同時に、敵を一掃する」

セシリアは指示を伝えると、ジャックを追い抜いて、テラスへと駆け込んだ。ざっと見た目算ではあるが、テラスに降り立った「翼ある人」の数は、五人ほど。人ではないから、五匹と呼ぶべきか。いずれにしろ、テラスの教導団兵は皆、足並みを崩して、混乱の真っ只中にあり、アルサスと皇帝の姿はテラスの端に追い詰められていた。

すでに、バヨネットのパイルが切れたのか、先端に取り付けられた小剣で応戦するアルサス。しかし、敵は斬っても撃っても、決して死なない化物。

「アルサスっ！」

セシリアはその名を呼び、軍服のウェストポーチから、予備の弾

倉を取り出した。ちょうど宝石箱程度の大きさのそれを、アルサスめがけて放り投げる。気づいたアルサスは、小剣で切り結ぶと、顔をこちらに向け弧を描いて、飛来した予備弾倉を受け取った。

「空の弾倉を取り外して、アタッチメントに取り付けろ！」

そう指示しながらも、自らのバヨネットを小脇に構えて、撃ち放つ。しかし、「翼ある人」は新手の登場にも、まったく動じる様子もなく、三叉の槍を突き出す。セシリアは咄嗟の機転で、トリガーから指を離し、三叉槍を小剣で受け止める。

「皇居には、一匹も入れさせないっ！」

セシリアの声に同調するかのように、ジャックとマークスのバヨネットが火を噴く。交差するパイルが、「翼ある人」を貫いた瞬間、それは光の粒に姿を変えて風に消えた。

「他のヤツも片付けろ！」

命令を飛ばせば、ジャックたちは「サー、イエッサー！」と、ダイムガルド帝国軍お決まりの返答を返し、一気呵成に、敵へと飛び込んでいく。セシリアは踵を返して、アルサスとアイシャを狙う「翼ある人」の下へ駆け寄った。

アルサスが弱いわけではない。この眼で見た、センチ・レーバン騎士団伝統の「迅雷の剣技」は一对一の戦術において、圧倒的優位を誇る。アルサスは、記憶を喪っても、なお体に染み付いた、騎士団の剣技を見事に会得しているといっていだろう。教導団の教官にして指令官であるモーガンに対しても、まったく劣らない。だが、たった一匹の「翼ある人」に苦戦するのは、他でもない、彼にぴつたりと寄り添う少女の所為である。

自分たちダイムガルド人が、崇め敬う皇帝陛下が、自分と変わらぬ少女であったことは、驚きに値する。代々皇帝陛下は、下々の前に現れたりしない。御前会議でも、侍女たちに代弁を頼むほどである。皇帝の正体を知っているのは、皇室の世話係である宮内省の一部の人間だけだ。ましてや、陸軍省下のいち将校であるセシリアは、そのご尊顔を拝する機会など、皆無に等しいものであった。

だが、その衝撃と感傷に浸っている暇はない。

セシリアは、バヨネットを振り上げると、「翼ある人」の背後から迫り、その背中を袈裟に斬った。傷口から、光の粒が溢れる。だが、とどめには到らず、「翼ある人」はくると振り向くと、左手を伸ばした。一瞬、セシリアはその黒く何も感情のない瞳に、眼を奪われてしまった。

殺意も悪意も怒りも悲しみもない。人形の瞳よりも、無機質。なぜそんな眼をしているのか。余計な感傷が胸を過ぎったのだ。

「くっ！」

セシリアは、首筋を強く握られ思わず呻いた。背丈ならば、「翼ある人」の方が、頭二つ分ほど高い。そのため、首根っこをつかまれたまま、高く上げられたセシリアの足は、地面から離れてしまう。まったく持って冷たいのに、何の殺意のない手がぎりぎり、セシリアの首を絞める。

「セシリアを放せーっ！！」

アルサスの叫びが響き渡った。その瞬間、「翼ある人」の背中から胸にバヨネットの小剣が突き出す。不意に、「翼ある人」はセシリアを離れた。アルサスは、すかさず引き金を引く。ばりばりと何本ものパイルが敵の体を貫いて、その光の粒と共に空へ飛んでいった。

解放されたセシリアは、肺に大量の空気を吸い込んで咳き込み、ふらりと膝を突く。

「危ない、隊長っ！！」

突然背後からマーカスの声が飛んでくる。セシリアはハッとなって、振り向いた。迫り来る黒い影。別の「翼ある人」が膝を突いたセシリアに狙いをつけて、槍を投げつけたのだ。

逃げられない！ そう思った瞬間、転がるようにマーカスがセシリアの眼前に飛び込んできた。槍の切っ先は、マーカスの右大腿を貫いた。

「ぐあっ！」

強烈な衝撃にマーカスが悲鳴を上げる。だが、彼の傷口から、口から血が逆流するでもない。その代わりにはらはらと光の粒が溢れてくる。

「マーカスっ!!」

「くそっ!　なんだよ、これっ!」

マーカスは血の気が引いた顔で、太もみに刺さった槍を引き抜いた。不思議なことに痛みはない。だが、少しずつ体の力が奪われていくような感覚。慌てて、軍服のポーチから布切れを取り出したマーカスは、それを大腿に巻いた。彼が丸太のようにどさりと倒れこんだのは、その直後だった。

「マーカスっ!!」

セシリアはまだよろめく足で立ち上がり、部下の下へ駆け寄る。そんなセシリアの傍を、パイルが掠め飛んでいった。セシリアの背後で、アルサスがマーカスを仕留めた「翼ある人」めがけて、バヨネットを撃ったのだ。

アルサスのパイルは幾重にも重なり、「翼ある人」を光の粒に変えた。それを皮切りに、テラスの戦況は好転の兆しを見せる。セシリア隊、そしてアルサスの奮戦ぶりを見て、生き残った教導団兵たちが奮起したのである。いくつかの叫びと怒号、そして無数のパイルと剣戟が奏でる音を背景に、テラスに降り立った「翼ある人」はすべて姿を消した。

「ジャック!　マーカスを救護班の衛生兵のところへ!」

セシリアは、気を失ったマーカスの体を抱き上げながら、ジャックに命じる。ジャックはそそくさと駆け寄ってくると、セシリアからマーカスを受け取り「しっかりしろ」と声をかけながら、彼を背負ってテラスを後にした。セシリアは、そんな部下二人の後姿を見送ってから、生き残った教導団の方に向く。

「教導団兵!　貴様たちの目論見は破綻した。モーガンはもうこの世に居ない!　直ちに投降し、近衛騎士団に加勢して、『翼ある人』を討つならば、貴様たちの罪も軽くなるであろう!」

高らかなセシリアの声に、教導団の青年たちは少しばかりの戸惑いを見せながらも頷いた。そして、教導団との訣別の証に、青い腕章を腕から耒り取った。

「では、我らは街に降り立った『翼ある人』の掃討に取り掛かります」

小隊長らしき少尉の青年が言う。歳の頃は、セシリアより少しばかり上か。血気盛んを絵に描いたような顔をしている。階級が上に当たるセシリアに敬礼をすると、生き残った少ない部隊を率い、踵を返した。数十分前まで、その命を奪おうとしていた皇帝には、眼もくれず。

「大丈夫か、セシリア！」

テラスが一気に静寂に包まれると、足音を立てながらアルサスが駆け寄ってきた。セシリアは、多少の安堵を込めてゆっくりと振り返った。ひと心地つきたい気持ちもあったが、アルサスの傍に寄り添う少女の姿を見れば、まだ、「セシリア・ライン中尉」である必要があると、思い直した。

「大丈夫だ。それよりも、アルサス……皇帝陛下、お怪我はありませんか？」

アルサスの後ろで少しだけ青い顔をした少女は、ひしとアルサスの左手を握り締めている。二人に何があったのかはよく分からないが、どうやらアルサスを信用しているようだ。

「わらわは無事じゃ。それよりも、これはいかがいたしたというのじゃ。センチ・レーバンの……ガモーフの秘密兵器なのか？」

「いえ、そうではありません。彼らは『翼ある人』。世界を滅ぼそうとしている、ある男の兵隊です。世界中で、今多くの人が、光の粒になって消えています。それはすべて、その男と『翼ある人』の起こす悲しみなのです。我が国も、すでに、レメンシアをはじめとする、いくつかの街が襲われました」

部下の死を悲しむ心の隅で、何故かちくりとする胸を押さえながらセシリアは、アイシャに説いて聞かせた。

「戦争……なのか？」

と、怯えたアイシャの眼をセシリアは見据えた。「翼ある人」の眼とは違い、瞳がゆらゆらと揺らめく様は、絶対不可侵の皇帝陛下が、機械や魔物ではなく、自分たちと変わらない「人」であると感じた。

「陛下。僭越ながら、わたくしめは陛下がヨルンの悲劇で、腹違いの兄上であるライベル親王殿下を失われたことは存じ上げております。それ故、戦争を憎んでおられるということも、父より聞いております」

「父上とな？」

「はい。我が父……と言っても、戦災孤児のわたしを拾ってくれた養父ですが、名をオスカー・ラインと言います。陛下の兄上と共に戦い、両足を失った敗軍の将です」

セシリアは静かに言った。

彼女が陸軍准将のオスカー・ラインに拾われたのは、十二年前。まだ五つだった、セシリアはセンチ・レーバン、ガモーフとの戦争で両親を失い、戦災孤児となり無限の砂漠で行き倒れた。それは、アルサスがそうであったのと同じように、もしも、哨戒中のオスカーに見つけてもらえなければ、いずれエイゲルに亡骸を啄ばまれていただろう。

オスカーには子がなく、セシリアはオスカーとオスカーの妻の養女となった。そうして、十年前、ヨルンの戦いに従軍する父オスカーを見送った。オスカーは、当時の近衛騎士団の大隊長として、アイシャの兄であるライベル親王殿下の軍に随伴していた。ライベル殿下は、アイシャにとって腹違いの兄であり、またライベルには皇位継承権がなく、いずれは軍の一翼として妹の身をまもる立場にあった。

しかし、火蓋の切って落とされたヨルンの戦いで、ライベルは白き龍の光に包まれ、塵も残さず消えてしまった。また、オスカー・ラインも両足を失った。何とか命からがら生き延びて、ダイムガル

ドに帰還したものの、父はそれ以来、近衛騎士としてライベルを守れなかったことを後悔し続けている。そんな父の背中を見て育ったセシリアは、「軍人の家系だから」と言いつつも、自分を拾ってくれた父の無念を晴らすために軍人となったのである。

「兄上は、とても優しいお人じゃった。わらわのことを守ると、そう言っ、十年前戦場に出て戻らなかった……。それでも、わらわはそなたの父が悪いとは言えない。確かなことは、戦争こそ憎むべき相手だということ。わらわは、沢山の本を読んで、そう結論したのじゃ。わらわの代に何があっても戦争はしない。それが、亡き兄上への手向けの花だと思ったのじゃ」

「戦争が正しいとは言いません。ですが、ご覧下さい陛下！」

セシリアは顔を挙げ、その視線をテラスの向こうにむけた。眼下に広がるのは、ダイムガルド帝都の街並み。遠くで高角対空砲が唸り声を上げ、民家、工場、軍施設、様々な建物と煙突が立ち並ぶ街の景色のいたるところから、悲鳴と光の粒が舞い上がる。それが何を意味しているのか、アイシャにも分からないはずがない。「翼ある人」はその無機質な瞳で、都民を次々と光の粒に変えているのだ。「戦うべき時に剣を取らなければ、悲しみが増えるだけです。陛下がお守りすべきは、ダイムガルドの人々。そして、世界に生きる人たち。ウルガン様が我らに教えてくれました、銀の乙女が生み出した『翼ある人』も、金の若子メツツエ・カーネリアも、世界を滅ぼすことを諦めたりしないと」

セシリアの声を聞きながら、アイシャは食い入るように帝都の惨状を見つめた。小さな肩がやや小刻みに震えている。

「どうして、こんなことが起きたのじゃ？ 世界を滅ぼすなんて……」

……絵本の中では、魔王の所業じゃ」

「それは、分かりません。ですが、メツツエたちが魔王であるかはさておいても、少なくとも、御眼に映る光景は、現実ということですよ」

「そうじゃな……」

アイシヤは瞳を伏せて、振り返った。

「アルサス……もしもわらわが、わらわが戦争をするといったら、そちはそれでもわらわのことを守ってくれるか？」

「もちろん。お兄さんのようには行かないかもしれないけれど」

アルサスがそう答えると、アイシヤは再び街のほうに向き直り、

「そうか……」と短く返した。街では、エイブラムスの召集した近衛騎士団が金色の甲冑を身に纏い、「翼ある人」の鎮圧に乗り出していた。それは形勢が徐々に逆転しつつあることを示していた。

76. テラスの戦い（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せ下さい。

77. 夢幻

銀色の髪の女の子が笑っている。アルサスの名を呼ぶ。手を振る。ぼんやりとした意識の中で、アルサスは怪訝な顔を返した。

『君は誰?』

そう問いかけたいのだが、声が出ない。その代わりに手を伸ばす。だが、指先も触れることが出来ない。何故? 疑問符の中で、アルサスは戸惑った。

『君は誰、ここは何処?』

もう一度、銀色の髪の少女に問いかけた。すると、銀色の髪の少女は、突然笑顔をひそめた。そして、青い瞳でじっとアルサスの事を見据え、「覚えていないんですか?」と問いかけた。

アルサスには答えることが出来なかった。おぼろげに、記憶の底から何かが呼びかけてくるのだ。思い出せ、思い出せと。その度に、二日酔いでもしたかのように、ひどい頭痛が押し寄せてくる。

「そう……覚えていないんですね」

銀色の髪の少女は長いまつげをそつと伏せて、アルサスに背中を向けた。アルサスは、頭痛の走る頭を押さえながら「待ってくれ!」と口にした。無論、声は出ない。それでも腹の底から叫んだ。少女はちらりと振り向くと、不敵に笑う。あの子はそんな笑い方をしただろうか……霞がかった記憶の底でアルサスと思う。

歩き出した少女の眼はまるで、アルサスに「付いて来い」と促しているかのようなだった。少女の後姿が、少しずつ真っ白な霧にかすんでいく。アルサスは二、三度頭を振ると、慌てて少女を追って霧の中へと飛び込んだ。

『ねえ、待ってよ。君っ!』

クスクス、笑い声がする。五里霧中とはこのことで、あっという間に少女の姿は、立ち込める真っ白な霧に消えてしまった。その隙間を縫うように、少女の笑い声が聞こえてくるのだ。それだけを頼

りに、彷徨うことどのくらいの時間が経っただろうか、ようやく少女の後姿を発見したその時、辺りの霧はいつの間にか晴れ渡っていた。

『ここは……!?!?』

思わず、アルサスは言葉を失った。いや、もともと声が出せないのだが、それでも、後に続く言葉が思いつかなくて、ただ呆然と見上げた。そこは、見たこともない街並み。全面ガラス張りの、塔よりも高い建物がいくつも林立し空を四角に切り取っていた。そして、ビルの低い位置には、見たことのない文字の看板がいたるところに掲げられている。しかも、その看板はピカピカと光り輝いて、次々と文字を変えていく。魔法装置か何かなのだろうか……、そんな事を思いながら視線を落とすと、地面は固く黒いもので覆われその上を白やオレンジのペンキで線が引いてあった。ブーツの踵で踏むと、土の地面よりも固く、石畳とは違い、ざらざらとしていた。

センチ・レーバンの街の風景でも、ガモーフのそれでもない。強いて言えば、建物はダイムガルドの建築様式に似ているようにも思えるが、ここは砂漠というには、それほど乾いていなかった。

「ここは、始まりの街です……」

アルサスの疑問を見透かしたかのように、少女はオレンジ色のラインの上をたどるように歩く。辺りに人の姿はなく静かで、少女の足音だけが鳴り響いた。

「ほら、向こう。あそこに見えるのは、ミスリルで造られた壁。敵の侵入を拒むため、ITSの軍隊が街を取り囲むように築かせたんですよ」

少女の細い指が、ガラス張りの建物と建物の隙間から見える、黒い壁を指差した。それは、ぐると街の外周三百六十度を取り囲んでいる巨大な壁である。その高さは、人間がよじ登るには、あまりにも高すぎる。そして、それだけ巨大なミスリル精製の建造物を築き上げる技術は、たとえ鋼鉄の国ダイムガルドであっても、存在していない。

『あい・ていー・えす?』

その意味も良く分からないまま、アルサスは戸惑いを隠せなかった。しかし、少女は気にも留める様子なく、ラインの上を軽いステップで歩いていく。アルサスは、声が出ないことに苛立ちつつも、少女の銀色の髪を追いかけた。

「人間の心はひとつじゃない……。だから分かり合うことが出来ず、何度も争いを繰り返す。それはとっても悲しいことだと思いませんか?」

やがて、少女はぴたりと足を止めた。そこは、四方から伸びる道が重なり合う交差点。白いペンキで縞々の模様が描かれており、赤や緑に点滅する不思議な街灯があった。

「もしも、人間に優しさと誠実さがあって、ほんの少しでも他人のことを理解しよう、譲り合おう、そう思えば、争いはひとつ消えます。でも、人間というのは、とても欲が深く、常に自分のことを愛してやまない生き物なのです。だから、相手に理解して欲しいと思っても、相手を理解しようと思わない」

『そんなことはない!』

アルサスは叫んだ。無論、声が出ないため、その叫びは少女に伝わらない。しかも、根拠のない否定を言っているのは、自分自身がよく分かっていた。そんなアルサスの内心を見透かしてか、少女はまるでアルサスの瞳を覗き込むように、

「理解できない相手は排除する。それが戦争の形です。時に思想や、食料、貧富、宗教の違いなど、理由は様々でも、この世界で、何度も戦争は繰り返されました。そして、この先も。それは、止まない雨、明けない夜と同じです。そんな世界に、価値なんてない」

と、言い放ち、くるとアルサスに背を向ける。その刹那、ごうっと唸り声を上げるように街に風が吹きぬけた。風は塵と共に舞い上がり、ガラス張りの建物をブーンと鳴かせる。

何事だろう。アルサスは驚きと共に風の舞いあがった空を見上げた。不意に辺りに影が差す。塔のように聳え立つ建物によって、四

角に切り取られた空を、羽を広げた一羽の巨大な鳥が横切っていく。いや、鳥ではない。全身が鉄に覆われた、「鉄の鳥」だ。羽ばたきもしなければ、鳴きもしない。ごうごうと、音を立てながら飛んでいく。

そして、鉄の鳥が飛ぶ音が聞こえなくなると、辺りは耳に痛いほどの静寂が包み込んだ。

「鉄の鳥が南に飛んだ後……始まりの街は光に包まれました。白き龍の光に」

少女はやたらと抑揚のない平坦な声音で呟いた。次の瞬間、天空が眩く光り、爆風と衝撃が地上に降りてくる。ガラス張りの建物が弾け飛ぶように倒壊していく。地面がめくれ上がる。アルサスはその眩しさに、思わず眼を伏せた。

しかしいつまでたっても、アルサスの体は衝撃に襲われない。それどころか、まぶたの奥に光を感じなくなった。その代わり、小さな足音と共に、少女の気配が近づいてくる。

「これは夢幻。あなたのフォトンが見せる夢幻です。だから、目を開けてください」

囁くような、少女の声に、アルサスは恐る恐る眼を開いた。そこは、先ほどまでの奇妙な街ではなく、ツタや木々が覆い茂った原生林の森だった。アルサスは辺りをぐるりと見回したが、少女の姿はどこにもない。薄暗い森のどこへ行ってしまったのか。不安になったアルサスは、茂みをかきわけながら走った。

今にも、森の木々が動き出しそうだ。物言わぬはずの樹木の、根や枝がうねうねと動き立ち上がり、樹人となってアルサスに襲い掛かってくる……そんな気がした。

どのくらい歩いただろうか。気がつけばそこは、枝葉の開けた広場だった。ぽっかりと口をあけた夜空を見上げると、炎と煙に包まれた鉄の鳥が見えた。

『危ない!』

アルサスがそう思うよりも早く、鉄の鳥は広場に墜落してくる。

着地と同時に、激しい振動と土煙を上げながら。やがて土煙が収まると、炎に包まれた鉄の鳥が、静かにその骸を横たえていた。この景色……どこかで見たことがある。それが、喪われた記憶の内側なのか、外側なのか分からなかったが、たしかにその風景に既視感を感じていた。

すると、またしても唐突に世界が反転する。まるで盥^{たらひ}に張った水面に映る景色が、投じられた一石によって乱されるがごとく。

そうか……これは夢なんだ。少女が言った「夢幻」の意味を少しばかり理解したアルサスは、視界の乱れに身を任せた。その矢先、炎がアルサスの視界を埋め尽くす。だが、身を焦がす熱を感じることはなく、アルサスはゆっくりと炎の中を歩いた。鉄に覆われた廊下、あたらしから炎が噴出しており、火災でもあったのだろうかかと首をかしげる。少女の姿はもちろん、人の姿はどこにもなく、パチパチと炎が燃える音が響き渡っていた。不意にその隙間から、子どもの泣き声らしきものがアルサスの耳朵を打った。

炎の中に佇む少年。年のころは十歳にも満たない、金色の髪をした幼い男の子だった。少年は顔をくしゃくしゃにしながら泣き叫び、まるで迷子にでもなったかのように、何度も何度も人の名を呼んだ。「マリア」

はつきりと、そう聞こえる。母親だろうか。いや、母親のことなら、名を呼び捨てになどしたりしないだろう。

『ねえ、君。大丈夫かい？』

それが夢幻だと分かっているのに、アルサスは少年を放っておくわけには行かなかった。少年はアルサスに気づきこちらに近寄ってくる。そして、アルサスにしがみつく。

「僕はあの子のように眠りにはつけない。永遠の時間の中で、何度もフォトンを再生しながら、世界を監視する。それが、僕に与えられた使命なんだ」

いつの間にやら泣き止んだ少年は、かすれた声で言った。またしても、その声に聞き覚えがあるような気がしたが、それが誰のもの

であつたか、思い出すことは出来ない。

「もう直、世界は終わる。そして、世界は新たな時代を刻み始める。あの子の力は次の時代のためにある……。僕たちは、マリアの遺志を継ぐもの。計画の子。だから、お休み。僕の妹……」

少年のその言葉を最後に、再び視界が乱される。マールブル模様に彩られ、今度は神の視点のように、アルサスの体は天空にあつた。そこからじつと夜の地上を見下ろしているのだ。

入り組んだ海岸線、人の営みを表す明かりの点描、静かに起伏する山々。はじめに、海岸線に光が走った。そして、それは伝播するかのように、次々と大陸のあちこちできらめく。その数は数え切れないほど無数であつた。どどん、どどん、そんな音が腹の奥に響いてくる。光はやがて、灼熱のドームを築き上げ、衝撃波を広げていく。衝撃波は、森の木々をなぎ倒し、人々の営みを消し去っていく。世界が終わる。少年の言葉を反芻しながら、大陸を真っ白に染めていく滅びの光。

『世界中に、白き龍が……！』

アルサスは愕然としながら、世界の終わりの景色を見つめた。

やがて、光はアルサスをも包み込む。四度目、次はどのような夢幻であつても、もう驚く気にもなれなかった。だが、それまでとは違い、アルサスが降り立った場所は、のどかな平原の景色だった。草木が風にさらさらと揺れる。遠目にかすんだ山の峰、その麓の緑濃い森。平原には、北、南、東から一本ずつの街道がひとつに交じり合う。その街道を馬車が走っていく。黄色い旗を立てた三頭立てのウォーラと呼ばれる、辻馬車ギルドの貨物便だ。

不意に空から少年が降ってくる。白銀の鎧を身に纏い、両手を広げながら、真っ直ぐ馬車めがけて落下してくるのだ。少年は愉快そうな雄たけびを上げ、ついには馬車の荷台にかけられた幌を突き破って、馬車の中に転がり込んだ。馬車は突然のことに急停車する。

『あれは……ぼく？』

「そう、あなたです。ここは、あなたとわたしが始めてであつた場

所。あなたがわたしを殺すために、出会った場所です」

唐突な言葉と、草を踏む足音に、アルサスは振り向いた。そこには、銀色の髪 of 少女が佇んでいた。少女の丁寧に編み上げられた髪が、風に揺れる。

『ぼくが君を殺すだって？ 冗談言わないでよ』

「いいえ、それが戦争を止める唯一の方法だと教えられたから。そう……それが唯一の方法だった。でも、わたしはあなたが迷った事を責めたりしません。だって、おかげで人間がどれだけおろかで、世界がどれだけ歪んでいるのかを知ることが出来ました。わたしは、わたしの使命を取り戻す事が出来ました。わたしはこの世界を滅ぼし、そして生まれ変わらせる。人と人が理解しあえるような世界に！」

『そんな！ どれだけ人間がおろかで、世界が歪んでいても、この世界には沢山の人が生きている。それを滅ぼすだなんて！』

「未来永劫を平和で暖かな世界に変えるためです」

『人はいつか分かりあえる！』

「その夢想、証明して見せてください」

少女は少しだけ笑った。そして、体の輪郭がぶれてぼやける。と同時に、光の粒があふれ出し、それはひとつの像を作り上げた。真っ白な翼を生やし、三叉の槍を手にした「翼ある人」。

「翼ある人」は、無表情で無機質な感情のまま、翼をはためかせて、アルサスに迫る。咄嗟にアルサスは剣を引き抜こうとしたが、腰に剣はない。おおよそ戦うための道具を持ち合わせないまま、アルサスの体は三叉の槍に貫かれた。

「うわああっ！！」

「きゃっ！」

アルサスの悲鳴と、女の子の悲鳴が重なり合う。アルサスは首筋を流れる汗を感じながら、夢幻から醒めたことを自覚した。カーテンの隙間から朝日がこぼれ、白い部屋を一層白く際立たせている。

アルサスは、おもむろに起き上がった。

「び、びっくりさせるな！ まったく」

溜息混じりにそういうながら、カーテンを開けるのは、軍服姿のセシリアだ。

「寝坊するのは勝手だけど、随分うなされていたな。何かひどい悪夢でも見たのか？」

「ああ、まあね。それより、わざわざぼくを起こしにきてくれたの？」

アルサスはベッド脇の棚からタオルを取り出すと、汗を拭いながらセシリアに尋ねた。セシリアは、やや不愉快そうな顔を朝日に照らしながら「違う」と言った。

「わたしは、あなたの世話係じゃない。用があったから起こしに来ただ」

「用？ まさか、尋問の続き？ だったら勘弁してくれよ。拷問されないだけマシだとは思うけど、それでも一日中缶詰にされたら気も滅入る」

「尋問なら終わった。何も覚えていないんじゃない、聞き出しようもない。ダイムガルドの嘘発見器は優秀だからな」

「それもそうか……」

帝都を騒がせた二つの事件から、既に二週間が過ぎようとしていた。近衛教導団が反乱を起こし、奇しくも「翼ある人」が襲撃したことによって、事態は終息することが出来た。近衛教導団は解体され、それぞれモーガンに協力した青年将校たちは、セシリアたちの温情もあって、辺境の警備隊に回され、処刑は免れた。一方、帝都を襲った「翼ある人」は一掃され、警戒態勢はさらに厳となした。その効果があつてか、あれから「翼ある人」の姿は見えていない。

一時は、敗戦でもしたかのように沈み込んだ帝都の雰囲気も、徐々に落ち着きと活気を取り戻しつつある。

その一方で、アルサスはセンチ・レーバン人で、しかもセシリアに救助された際に騎士団の鎧を身に纏っていたことから、陸軍情報

局による尋問を受けることとなった。

ただ、モーガン反乱、「翼ある人」襲撃に際して、帝国に協力してくれたという事実のため、拷問や違法な取調べを受けることはなく、いくつもの質問と「嘘発見器」と呼ばれる装置にかけられるだけで済んだことは、不幸中の幸いというべきであろう。

しかし、その間、軍施設の敷地内から出ることは許されず、皇居で暴れたために開きかけた傷も癒えたというのに、軍病院の一室を間借りしての生活を強いられていた。今も、病室の外には監視の兵が立っている。

また、セシリアは、モーガン討伐の功績がたたえられ、大尉にひとつ昇格した。その所為もあってか、忙しくしており、この二週間ろくに顔もあわせていない。

「それで、用ってなんなのさ」

アルサスが問いかけると、セシリアは手に持っていた、衣服一式をベッドに放り投げた。

「これに着替えろ」

と、セシリアが指差すそれは、ダイムガルド陸軍の深緑色をした軍服だった。

「これって、軍服じゃない？ どうしてこんなものに」

「こんなもの、はないだろう。あなたは正装を持っていないんだ。まさか、あのセンチ・レーバン王国騎士団の鎧を着ていくわけにも行かないだろう」

そう言うのとベッドを回り込んで部屋の出口へ向かうセシリア。

「まさか……！」

「そのまさか。エイブラムス・コック大将から、直ちに皇居の御前会議室へ参内せよとの呼びがかかった」

セシリアの言葉に、アルサスはしばし、ぽかんとしてしまった。エイブラムスといえば、御前会議室にいた禿頭の男の名だ。センチ・レーバンの陸軍をまとめる元帥にして、陸軍大臣。セシリアにとっても、雲の上の存在である人物から、記憶もない歯牙ないセンチ・

レーバン人にいったい何の用があるというのだろうか……。
アルサスは小首をかしげずにはいられなかった。

77. 夢幻（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せ下さい。

78. 入隊志願書

軍服を窮屈に感じるのは、アルサスがそのような格式ばった衣装を身にまとうことを嫌っているからに他ならない。しかも、金のカウスボタンや、動きにくい服装に実用などなく、詰襟によって息苦しささえ覚える。

そんな恰好をさせられる理由も良く分からなかったが、もっとよく分らないのは、エイブラムスがアルサスを呼びつける理由である。教導団がクーデターを起こそうとした際、乗り込んだ御前会議室でその姿を見かけたが、言葉を交わしたわけでもない。覚えているのは、軍人らしい強面と見事な禿頭くらいだ。すでに、アルサスへの取調べは終わっている。記憶を喪ったアルサスから聞きだせる情報は何もない以上、帝都から放逐するか、密入国者として投獄するかという選択肢しか残っておらず、軍服を着せられて、ダイムガルド帝国陸軍のトップに謁見するという選択肢は想像だにしていなかった。

どういふことなのか、セシリアに詳しく問い質したいと思ったのだが、先導して大本営の廊下を歩くセシリアは、やや緊張した面持ちで、容易に問いかけに答えてくれそうにもなかった。

渡り廊下を抜けて、皇居に入る。入り組んだ廊下を上へ下へと歩かされるのは、暴徒の侵入を拒む造りであり、センテ・レーバンの城建築の様式に通じるものがある。もっとも、こちらのほうが皇室関係者の生活面での合理性を重視している分、安易な造りではある。やがて、いくつかの曲がり角と、階段を抜けると、目の前に見覚えのある御前会議室の扉が見えてくる。

セシリアは扉の前で足を止めると、咳払いをひとつ。そして、肺いっぱい息を吸い込んでから、扉をノックした。

「ダイムガルド帝国陸軍近衛騎士団、第二十八歩兵連隊所属第五哨戒小隊長、セシリア・ライン大尉、アルサス・テイル殿をお連れ

いたしました！」

長い肩書きをいとも簡単にすらすらと述べるセシリア。すると、部屋の奥から、威厳のある男の声が聞こえてきた。

「入れ！」

セシリアは少しばかり視線をアルサスに向けて、「入るぞ」と合図する。もちろん、その視線の裏には、粗相のないように、と釘をさす意味も含まれている事を、アルサスは感じ取り、ここにきてセシリアの緊張がアルサスにも伝播してきた。

御前会議室は、壁もカーペットも皇帝陛下の姿を隠す御簾も、すべて綺麗に修繕されていた。クーデターの痕跡などどこにもない。軍としても帝国としても、長い歴史の中で起きたクーデターの事実には闇に葬り去りたい意向があった。モーガンと教導団幹部の責任にすることにより、クーデターに参加した青年将校たちの処分を軽くするという意味も込められている。そのためには、早期に教導団との戦いの痕跡を消すことが求められたのだろう、というのはアルサスの勝手な想像である。

「ご苦労、セシリア大尉」

劳いの言葉もそこそこにエイブラムスは、席に着くよう促した。エイブラムスの傍には、美しい女性秘書官が立っていたが、部屋全体が妙な緊張感に包まれており、気にしている余裕は、アルサスにもセシリアにもなかった。

「単刀直入に申し上げよう」

アルサスとセシリアが向かいの椅子に腰掛けたのを確認するや否や、エイブラムスは口を開いた。それに併せる形で、女性秘書はヒールの踵を踏み鳴らしながら、円卓を迂回してアルサスの元にやってくる。そして、手にした書類をアルサスの前に並べた。

書類に書かれた文字は、共通言語の文字であり、アルサスにも理解できたが、その文言まで理解することは難しかった。なぜなら「入隊志願書」と書かれているのだ。

「アルサス・テイル殿。そなたに、我が軍の一翼を担ってもらいた

い」

エイブラムスは務めて平坦な口調で言った。もしも、室内に他のダイムガルド人が居れば、驚きと共に会議室内は騒然となっただろう。しかし、広い会議室内には、セシリア、エイブラムス、エイブラムスの秘書の三人以外、ダイムガルド人は居ない。そのため、事情を聞かれていなかったセシリアが少しばかり驚きに息を呑む音以外、これといって静かなものだった。

「それは、どういうことでしょうか？ センテ・レーバン人であるぼくに、ダイムガルド軍の兵隊になれ、ってことでしょうか？」

アルサスは訝りを多分に含んだ言葉を、エイブラムスに向けた。しかし、エイブラムスにはべもなく、「その通りだ」と返す。

どの国でもそうだが、普通その国の軍隊は、その国の民族によってのみ構成される。たとえばギルド・リッターのような、私設自警団でない限り、民族混在の軍隊など何処にも存在していない。まして、ダイムガルド人とセンテ・レーバン人には「十年前」という軋轢がある。

「ヨルンの悲劇、シオン殿下即位式典での白き龍騒ぎ、それらすべてにおいて、ガモーフのみならず我が国の人間も、少なからず長年にわたって積もった良くない感情を、センテ・レーバン人には持ち合わせている。かく言う私もだ」

「それなら、何故ですか？」

話が見えてこない。アルサスはそう言いかけて、隣席のセシリアに止められた。本来、軍というのは縦割り社会である。上官の言葉に疑問を差し挟むことは絶対に許されない。それは、アルサスも分かっているのだが、現時点では、まだエイブラムスは上官というわけではない。

「そなたが疑問に思うのも無理はない。強制するものでもないし、そなたの安全を脅かすものでもない。しかしな……」

エイブラムスが言葉を発しようとして口を開いたその時だった。エイブラムスの背後に掛けられた御簾の奥で扉の開く音がした。

「皇帝陛下のおなりにございます！」

甲高い侍女の声。ややもすると、厳かな衣擦れの音と鈴の音が聞こえてくる。御簾の向こうでその姿はシルエットにしか見えないが、それでもアイシャであると、アルサスには分かった。

「御簾を開けよ」

唐突なアイシャの言葉に、侍女たちは色めき立った。ダイヤモンドでは代々皇帝陛下は、一部の宮内省関係者や世話係の人間を除く下々の者に見せたりはしない。その神秘性を確たるものとするためである。しかし、アルサスたちはすでにアイシャの顔を見知っている。今更、顔を隠す必要はない、とアイシャは言うのだ。

カラカラと音がして、ロールカーテン状になった御簾が上げられる。エイブラムスとセシリアははじかれたように立ち上がり、深くお辞儀をした。アルサスも慌てて、それに倣う。

姿を現したアイシャは、以前と少し違う、白地に赤い花の刺繍を施した、袂の大きなドレスを身に纏い、小さな鈴のついた冠を被っていた。アルサスはその美しさに、思わず見とれてしまう。すると、アイシャはクスリと女の子らしい微笑を浮かべた。

「そうかしこまらずとも良いのじゃ。二週間ぶりじゃの、我が君」
アイシャの科白に、一堂が耳を疑い驚きの眼をアイシャに集中させた。だが、アイシャは気に留める様子もなく「早く会いたくて、夜も眠れなんだぞ。昨日の夜もずっとドキドキしておった」と続ける。

「陛下、何を仰られます、センチ・レーバン人ごときに！」
眉をひそめた侍女が諫める。すると、アイシャはあからさまにムツとした顔をして、

「わらわがどんな殿方を好いても、そなたたちには関係ないであろう。わらわは、センチ・レーバンの人だろうと、アルサスのことが好きなのじゃ！ 悪いかの？」

と、臆面もなく言い放ち、エイブラムスをはじめとしてその場に居合わせる者全員の驚きの声を誘った。

「わ、悪いなどと滅相もございません」

侍女はしゅんとなってしまう。おそらく、これほど強くアイシャから反論を受けたことはなかったのだろう。

「えっ、えっと……」

戸惑いはアルサスも同じだった。自分を見つめる少女の眼が、恋する乙女のそれだったからだ。

「わらわにとって、アルサスは絵本に出てくる白馬に乗った王子さまと同じじゃ」

嬉しそうにニコニコとしながらアイシャが言う。これには、普段身分など気にも留めないアルサスも、思わずかしこまってしまう。何処がどうなってそうなったのか。そういえば、二週間前、テラスでそんな事を言っていたような気もするが、ここまで好かれる所以は分かりかねた。

アルサス自身に自覚がないというわけではないが、ほとんど皇居に幽閉された状態だったアイシャにとって、アルサスは始めて手を握り、言葉を交わした同年代の少年であった。しかも、そんな男の子から「君を守る」などと言われれば、絵本ばかり読んで夢見がちなアイシャが恋してしまうのも当然であった。

「あー、よろしいですか、陛下？」

唐突に、エイブラムスの咳払いが、アイシャの登場と爆弾発言によって一変してしまった会議室の空気を元に戻した。

「うむ。そうじゃの。エイブラムス大将、続きを」

とのお言葉を受け、エイブラムスは再びアルサスの方を向く。何かなにやら頭がこんがらがってきたアルサスは、少しばかり助けを求めるようにセシリアを見たが、セシリアはつんとそっぽを向いてしまっていた。

「アルサス殿、そなたを近衛騎士団に推したのは、他ならぬ皇帝陛下だ。来るべきその日に向けて、これから、軍病院は忙しくなるだろう」

「来るべきその日……まさか、戦争を!？」

アルサスが声を上げると、エイブラムスは静かに頷いた。

「昨日、御前会議で陛下がご裁可くださった。われらダイムガルド帝国軍は、十年ぶりに戦地に赴く。だが、その相手は、ガモーフでもセンチ・レーバンでもない。『金の若子』と『銀の乙女』その二人と戦う」

「こがねのわこ、しろがねのおとめ……」

聴きなれない言葉に、アルサスは小首をかしげた。記憶のどこかでその言葉を耳にしたような気もするが、無理に思い出そうとすると、頭が割れんばかりに痛む。

「石頭の大臣どもを説得するのに二週間も要してしまったのじゃ。しかし、わらわはあの『翼ある人』を放っておくわけには行かない」

とアイシャ。

「皇帝として、この国のため、世界のため、世界を滅ぼして生まれ変わらせるなどという彼らの世迷いごとを、野放しにしておくわけにはいかないのじゃ。戦争はしたくはない、じゃが、戦わなければわらわは天におられる兄上に笑われてしまう」

「そうと決まれば貴殿が軍病院の病室一つを間借りしては甚だ迷惑だ。しかし、そなたには、教導団クーデターの際に陛下の御身を守ってくれたという恩義がある。そなたをこの国から追放してしまつては、我らは恩義に反してしまう」

「つまり、ぼくという存在が微妙な立場の厄介者だといいたいのですか？」

「有体に言えばそういうことだ。そこで、陛下の推挙を鑑みて、そなたに異例ながら軍籍を授けることとした。そうなれば、ダイムガルドでの生活は保障される」

エイブラムスの言葉を受けて、傍らの秘書が胸の前で資料を開いた。

「入隊志願書に記入いただけるなら、アルサス殿は少尉待遇でお迎えいたします。セシリア小隊の欠員補充という形ではありますが、

そうなれば、恩給の対象となり、住まいを軍から提供させていただきます」

資料を読み上げる声は冷静そのものだが、アルサスは驚きで何も答えることが出来なかった。代わりに、アイシャが口を開く。

「アルサス。わらわが我俣を言うておるのは、よく分かっておる。

じゃがの、そちはわらわのことを守ってくれと申した。その言葉、わらわは信じたい。これから、この国は戦争をする。そちには、わらわのことを守って欲しいのじゃ。いや、そち以外に頼みたくない」

「で、ですが、ぼくは記憶がない。何も覚えていないだけで、本当はこの国をスパイするために来たのかも知れません。そんなぼくを信用していただけるのですか？」

アルサスは、やや声の調子を落とした。本当の自分が分からないという不安が鎌首をもたげるのだ。あの夢も気になる。あれが、何か意味のあるものだったなら、自分は大事なことを忘れてしまっているのではないか……。医者はいずれ記憶が戻ると言った。もしも記憶が戻ったその時、自分の本当の名前と共に、知りたくなかった本当の自分を知れば、それは、多大なショックをもたらすだろう。

「少なくとも」

エイブラムスは再び咳払いをする。

「少なくとも、記憶のないと言うそなたなら信用できる。もしも、記憶がないというのも嘘偽りであって、そなたの正体がセンチ・レバン騎士団のスパイであったとしても、そなたは陛下のお命を守った。それだけは確かだ」

エイブラムスの言葉に、アルサスは閉口してしまう。アルサスの不安の向こう側で、エイブラムスたちは手を差し伸べてくれているのだ。このまま断って、帝都を後にすることも出来る。旅の路銀なら、レイヴンでもやって稼げはいいだろう。しかし、何処へ行けばいいのか。自分が何の目的を持っていたのかも、分からない。自分という存在の記憶を喪ってしまったアルサスにとって、居場所はここにしかないような気がした。

アルサスは、無言で席に座り、ペンを取った。本当の名かどうかも分からないが、入隊志願書に「アルサス・テイル」の名を書き込む。

「ぼくは、お役に立てるのでしょうか？」

書き終えた志願書を差し出しながら、アルサスが問いかけると、アイシャは少しだけ笑って、

「傍に居てくれるだけでよいのじゃ」と言った。

78. 入隊志願書（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せ下さい。

79. セシリアの気持ち

「マジっすか!？」

素っ頓狂な声を上げて、驚きを顔全体で示したジャックは、セシリアに食ってかかった。

「あの、小僧をマーカスの代わりにつて、そりゃいくらなんでもひど過ぎるっすよ!」

軍施設の片隅にある、軍御用達の酒場。薄暗く、酒の匂いとタバコのおいが充満した、雑多で不衛生な店ではあるが、軍人にとつて、数少ない憩いの場所でもあった。

普段、セシリアは利用しない。酒が飲めないというわけではないのだが、騒がしいのより静かな事を好む。それに、セシリアはまだ未成年だ。それでも、この酒場に顔を出したのは、他ならない部下であるジャックに、アルサスの入隊を知らせるためだった。思ったとおり、ジャックは怒りを露にした。彼自身が直接センテ・レーバン人に不利益を被った経験はないのだが、ダイムガルド人が一様に持っている、センテ・レーバン人に対しての良くない感情を、ジャック自身も持ち合わせている。

それは、あまりにも漠然としたものではあるが、容易にその感情を取り払うことが出来ないのは、セシリアも十分承知している。その点において、他の人間のように、センテ・レーバン人に悪感情を持ち合わせていない自分がいるのは、養父であるオスカーの教育の賜物であるといわざるを得ないだろう。

「エイブラムス大將直々の命令だ。それに、わたしとジャックの二人だけでは小隊は維持できない。マーカスの代わりになる補充兵が必要だ」

「じゃあ、真っ当なダイムガルド人を寄越せってんですよ!」

エイブラムスの名に、ふてくされたようにジャックはジョッキをぐいっと飲み干した。ビアという、麦芽を発酵させた、ダイムガル

ド特有の苦味の強い酒だ。この酒場に居る者のほとんどが、ビアを飲んでゐる。麦そのものは、無限の砂漠にあるオアシス地帯などで栽培されており、ほぼ唯一の農産物と言っても過言ではなかった。

「真っ当がどうかは別としても、アルサスは十分マーカスの穴を埋めてくれる。彼のセンチ・レーバン剣技は、実に優秀だと思う」

なだめるようにセシリアが言うと、ジャックはテーブルの上にジョッキを置いて、リザーバーから二杯目を注ぎ込みながら、じとつとセシリアを睨む。

「隊長……。何か、あの小僧に肩入れしてやしませんか？」

「そ、そんなことはない！ マーカスの容態が良くなったら、アルサスは用済みだ！」

「それなら、それでいいんすけど」

ジャックは、ためらいもなく二杯目も一気に飲みし、酒の匂いに染まった息を天井めがけて吐き出した。

「『飛航鯨』の三番艦が突貫で建造されています。それが出来上がり次第、戦争が始まる。その時、俺はあいつに背中を預ける気はないっすよ」

「わたしもだよ」

セシリアは椅子を跳ね除けて立ち上がると、テーブルの上にジャックの分の酒代を置いて、酒場を出た。

帝都は酒場の熱気やざわめきとは裏腹に、夜風が吹き抜け、静寂の中に佇んでいた。眼前には皇居がセシリアを見下ろすように聳えている。セシリアは皇居を見上げて、溜息を吐いた。

アルサスに背中を預ける気がないなんて嘘だ。それなのに、いとも簡単に嘘をジャックに吐いてしまった事が、溜息になったのだ。

どうしてだろう……。アルサスのことを思うと、胸がもやもやする。そして、アイシャの事を重ねると、チクリと痛むのだ。

少なくとも、アルサスは信用に足りる。仲間としては申し分のない男だと思う。しかし、それ以上にあの時、彼の瞳を見つめたときに、何かを感じたのだが、それが何なのか分からなかった。

「だめだ、だめだ！」

セシリアは人知れず、自らの頬を叩いた。こんなことでは、戦いに挑むことが出来ない。敵は恐ろしく強い、光の粒で出来た化物。油断すれば、その三叉槍で貫かれ、自分が光の粒になる。運良く急所を外れたとしても、体組織が徐々に光の粒となり、生命力を奪われていくことは、マークスで実証済みといってもいいだろう。

セシリアを助けるため身を呈したマークスは、あれから軍病院の床についている。大腿に巻かれた包帯の隙間を、真っ赤な血液ではなく、光の粒が漏れ出して消えていくのだ。そのたび、どんどんマークスは痩せ細っていく。このままでは、マークスの命もそう遠くない。隊長としてどうにかしてやりたいが、自分ではどうしようもないという、焦燥感もある。

そんないろいろな感情を抱えたままで、いざ「翼ある人」と対峙して、生き残ることが出来るか。祖国を世界を救うことが出来るか。気を強く持たなければいけない。

「あれ？ セシリア。こんなところで何やってるの？」

突然声を掛けられ、驚きと共にセシリアは、咄嗟に振り返った。酒場の前の通路を歩いてくるのは、まだ新品の軍服を着こなせていない、件のアルサスだった。セシリアは飛び上がりそうになるのを必死にこらえた。

アルサスは少しばかり微笑みながら、こちらに近づいてくる。胸の奥のもやもやが膨れ上がってくるような感覚を覚えたセシリアは目を逸らし、

「何でもない。明日から訓練だ、さっさと寝ろ！」

と、自分でも驚くほどぶっきら棒に言っていると、女子寄宿舎の方につきま先を向けた。そのあまりに素っ気無い態度に、アルサスはきょとんとしている。しかし、セシリアはその視線を受け流しつつ、寄宿舎へ向かって歩き出した。

バヨネットの扱い方は、剣術とも弓術とも違う。剣術であれば相

手を一刀で切り伏せる腕力の鍛錬は欠かせないし、弓術であれば相手の急所を一撃で射抜く精神力の鍛錬が欠かせない。しかし、バヨネットは射撃時の反動に耐えうる足腰の筋力さえ備わっていれば、あとは取っ手に付いた引き金と呼ばれるものを引けばいい。どういう仕掛けで、どうやってミスリルの杭が発射されるのか、その仕組みを知る必要もなかった。

もっとも、その仕掛けはとても複雑であり、アルサスには理解できるものではない。かいつまんで説明するなら、バヨネットの筒の中には、魔法装置がある。ただし、ダイムガルド人は魔力を持たない。そのため、鉱山から採掘される、もともと魔力を含有している魔法石を利用する、という技術がダイムガルドにはあった。そして魔法装置によってパイルの後端にある「火薬」という黒い粉に着火する。すると、火薬は一気に爆発して、パイルに推進力を与えるのである。

要はそんな仕組みなど知る必要はなく、相手の攻撃が届く前に撃つ。それが、バヨネットの基本的な使い方だ。もともと、肥沃ではないダイムガルドの大地では、農産物の生産は少ない。その一方で、鉱山などから大量の鉱石が採掘されている。他国では貴重なレアメタルであるミスリルも、帝都からさらに南方五百クリーグにある、「モリア」という鉱山で得られるのだ。

十年前は、ここまで技術進歩しておらず、兵器の質もセンチ・レバンやガモーフと大差なかったのだが、それでも魔法という力のないこの国が他の二国と渡り合ってこられたのは、鋼鉄帝国の名のとおり、豊富な鉄鉱資源にあった。

ただ、それでもアルサスには「ミスリル」が貴重な鉱石であるという固定観念的認識がある。そういうことは、記憶から消えてなくなっていないというのだから、不思議なもので、つい引き金を引くよりも、バヨネットの先端についている近接武装の小剣を振り回したくなる。そのたび、セシリアにどやされた。

「違う！ 小剣はあくまで敵の接近を許した場合の武器だ。引き金

を引き、敵を撃つ。これがバヨネットの戦い方だ!」

軍人然とした厳しい口調で、叱りつけられてしまう。ここ最近、彼女は何故かすこし怒りっぽい。棘が言葉のあちこちに見え隠れするのだ。始めてであったときは、軍人らしさを見せて背伸びしようとする女の子に見えたのだが、今はそんなそぶりも見せない。

どうしたことか、と当惑していれば、練習相手の放ったパイルがアルサスの額を直撃する。訓練では、パイルに模した樹脂性の棒を用いる。とは言え、ものすごい勢いで発射される棒は、当たれば痛い。

「いったあっ!」

思わず悲鳴もでる。練習相手は、少しばかり心配そうに「大丈夫か、少尉?」と声を掛けてくれるが、セシリアはにべもなく「ぼんやりしているからだ」と詰めたい言葉を吐き出した。

軍人の普段の職務は、訓練にあるといわれている。任務が与えられない間は、近衛騎士団詰め所にある訓練場で、鍛錬を重ねる。主に隊の者同士で訓練をするのだが、今アルサスの練習相手をしてくれているのは、別の隊の若者だった。ジャックは、センチ・レーバン人の相手をするなんて真っ平ごめんだ、と言って取り合わないため、セシリアが別隊から練習相手を借り受けてきたのだ。

アルサスの入隊に関して、軍内では賛否両論が渦巻いた。「皇帝陛下のお命を守ったなら、仲間だ」とする意見と「たえなんであろうと、センチ・レーバン人は敵だ」とする主張である。しかし、そんな風当たりなど気にも留めないで、アルサスはここ一週間、訓練に打ち込んだ。

何故か身に染み付いているセンチ・レーバンの剣技は、バヨネットの戦闘ではほとんど役に立たない。飛び道具の側面を持つバヨネットは、相手との距離を詰めるものではなく、相手と距離をとる必要があるのだ。弓矢より威力も射程も弾速も圧倒的なこの武器を使いこなすためには、一対一の戦闘を意識した迅雷の剣は忘れなければならぬ。

「大丈夫だ。もう一回！」

アルサスは練習相手にそう言うと、再びバヨネットを構えた。

日中ともなれば、ダイムガルドの気温は一桁以下の温度から四十度以上にまで跳ね上がる。砂漠の気候というのは昼夜の温度差が激しく、体に堪えるもので、ダイムガルド人の強靱な肉体は、この厳しい環境から生まれたと言っても過言ではないだろう。事実、アルサスはすでに二度ほど熱中症になりかけた。それでも、訓練に勤しむのは、アイシャのためなんだろうか……。

あの皇帝と言う立場に置かれた少女に、何か別の誰かを重ね合わせているような気がしてならない。それが誰なのかは、記憶の底で眠ったまま、アルサスにも分からなかった。分からないことは、無理に思い出そうとすれば、頭が痛む。だから、今は傍に居て欲しいと言うアイシャのために、近衛騎士となる。

そんな想いの中で、地面を蹴って、練習相手との間合いを取る。ともすれば、体が勝手に反応して、先端の小剣に頼ってしまいがちになる。小剣には訓練用にカバーがかけてあるが、その剣で相手をしとめた方が早いような気がする、そういう固定観念を捨てながら、引き金を引く。

狙いの定まらぬ練習用パイルは、激しい反動とともに、打ち出され練習相手の傍を掠めて、背後の防護ネットに当たる。

「無闇に撃つな！ 弾切れは命取りだ！」

セシリアの叱責が飛んでくる。アルサスは頷く余裕もなく、反対側に足を蹴りだしてもう一度バヨネットを構えなおした。相手のパイルの軌道を動体視力を駆使して、先読みしつつ照準を絞る。攻撃のチャンスは相手が隙を見せた瞬間。バヨネットは、火薬カスの目詰まりを防ぐため、連続発射しすぎると、一時的に攻撃が止む瞬間がある。とはいっても、一秒足らず。しかし、その瞬間こそがチャンスなのだ。

「今だ！」

掛け声よろしく叫ぶと、アルサスは引き金を思い切り引いた。火

菓の匂いがつんと鼻をついて、パイルが撃ち出される。今度は狙いを外さない。鋭く狙った獲物を射抜く鏃がごとく、練習相手の胸を射た。練習相手は、小さく悲鳴を上げて片膝をつく。

「そこまで！ 今日の訓練はここまでだ」と、セシリアの声が響き、訓練の終わりを告げた。アルサスはバヨネットを降ろし、練習相手に駆け寄る。今度はアルサスが心配する番だった。

「大丈夫か？」

「少し息苦しいが、見事な腕前です、少尉どの」

練習相手は、苦笑いをしながら、アルサスが差し伸べた手を取り立ち上がる。ちらりと時計を気にしたかれは「私はこれで。元隊に戻りますので」と握手を交わすと、何事もなかったかのように踵を返し、訓練場を後にする。と、そこへ入れ替わりのように、事務官らしき女性が駆け込んできた。

「セシリア・ライン大尉。アルフレッド・ノース大佐がお呼びです」事務処理のような口調で、事務官の女性がセシリアを呼ぶ。アルフレッド・ノースはセシリアたちの所属する大隊の隊長である。つまり、セシリアにとって直属の上官に当たる人物だ。

「分かった、すぐ行く」

セシリアは素っ気無く返すと、アルサスのことをちらりとも見ないで、事務官とともに訓練場を後にした。取り残されたアルサスは独り、「なんなんだよ」と呟いたが、訓練場のに響き渡る声にかき消されてしまった。

79. セシリアの気持ち（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せ下さい。

80. 与えられた任務

各大隊の指揮所と呼ばれる場所は、軍令部のある大本營の中に併設されている。訓練所を後にしたセシリアは、背中にアルサスの視線を感じながら、何も言わなかったことを少しばかり後悔していた。出会ったばかりの頃は、ごく自然に彼の顔を見ていられたのに、何故かここ最近では素っ気無い態度を取ってしまう。それがどうしてなのか自分でも良く分からないから、余計に苛立ってしまうのだ。

そんな苛立ちを抱えたまま、廊下を進めば、指揮所の一番奥に大隊長の執務室が見えてくる。セシリアは居住まいを正し、軽く咳払いをしてからドアをノックした。

「お呼びでしょうか、大隊長」

と、室内に入り開口一番にその言葉を告げると、アルフレッド・ノースは書類を睨むしかめっ面を上げて、少しだけ顔をほころばせた。アルフレッドは熊のような大男だ。浅黒い肌にも、もじゃもじゃの髭が良く似合っており、肩幅も広いため、軍服を着る彼は、自分の何倍も大きい人物のように錯覚してしまう。

「よう、来たか、セシリア嬢ちゃん」

まるで旧知の間柄のようなラフな喋り方で、アルフレッドはセシリアを迎える。彼は普段からそういう喋り方で、軍人としての格式ばった威厳はないものの、気さくさで多くの部下から慕われている。もつとも、セシリアとアルフレッドは旧知の間柄でもある。セシリアの養父だったオスカー・ラインの後輩だったのがアルフレッドであり、オスカーが軍を退役した後、軍属になったセシリアの面倒を見てくれているのが、このアルフレッドだと言ってもいい。

それでも、「嬢ちゃん」呼ばわりされるのは、少しばかり気に障る。

「止めてください、大佐。わたしももう十七です」

「十七歳なんぞ、ガキに毛が生えたただけだ。そういう科白は、もつ

と色気つてもんを身につけてから言うもんだぜ」

と、にべなく言い放つと、アルフレッドはガハハと大口を開けて笑い、セシリアの不満を一蹴した。セシリアはやや聞こえないように溜息を漏らしながら、

「そんな事を言うために、わたしをお呼びになったのですか？」

と、少しばかり棘のある言い方をする。

「そんなわけねえだろう。大尉どの。大尉に昇格した今が潮時つてやつだ、そろそろ、俺の頼みを聞いて、軍令部指揮所詰めになっちゃくれねえかい？ お前さんの知識は役に立つ。それに、安全な部署にいてくれねえと、もしもお前さんの身に何かあってからじゃ、オスカー先輩に申し訳がたたねえ」

「そのことなら、何度もお断りしたはずです。わたしは父のようにな、一線の軍人でありたい。そのことは、大隊長も認めてくださっているはず。父も反対しておりません」

「そうかい……まあ、そう言うとおもってたよ」

今度は、アルフレッドが溜息を吐く

「お話は、それだけです。では、わたしはこれにて失礼させていただきます」

セシリアはそう言うのと、くるりと踵を返して、ドアノブに手をかけた。ところが、そんなセシリアをアルフレッドは呼び止める。

「待て待て、用件はまだ終わっちゃいねえよ。ところで、セシリア嬢ちゃ……いや、セシリア大尉、あのセンチ・レーバン小僧は使い物になりそうかい？」

「アルサスですか？ ええ。まだバヨネットの扱いに腐心しているようですが、エイブラムス閣下の期待以上に働きを見せてくれるものと、思っております」

「ふうん」

アルフレッドは頷くと、今一度書類を取り上げ、セシリアに差し出した。セシリアはドアノブにかけた手を離し、アルフレッドの下に歩み寄って書類を手を取った。

「もうじき、『飛航鯨』の三番艦が完成する。その前に、わが軍は敵の正確な情報を集めておかねばならない。そして、あのセンチ・レーバン小僧が、真に我が軍の一員として働いてくれるかを見究めなきゃならん」

「それは、アルサスの本心を探れと言うことですか？ エイブラムス閣下はアルサスをお疑いなのですか？」

書類に目を落としながら、アルフレッドに問いかけると、アルフレッドは「そうじゃねえよ」と返した。

「エイブラムス閣下も俺もあの小僧にそこまで、疑念を抱いちゃいねえ。皇帝陛下の信が篤いというのは、癪に触るがな。ただ、あいつが役立たずだったり、千両役者だった場合、いざあの翼の生えた化物どもと戦おうって時に、軍の足並みが崩れちゃ困る」

「だから、アルサスをテストしろと」

「手っ取り早く言えばそういうことだ。そこに書いてある任務を達成することが出来れば、彼を堂々と我が軍の一角に迎え入れられる。その布石を作って欲しい、っていうのがエイブラムス閣下のお考えだ。それ以上のことは分からねえがな」

アルフレッドの言葉に、セシリアは頷く。

「了解しました」

「よし。では、セシリア小隊は明朝、ベル小隊とともに任務に就かれたし！ 任務内容は、マーカス・ヒルを含む負傷者の治療方法と、敵についての情報を統合するため、改めてダスカード遺跡のウルガン殿に協力を仰ぐ旨の書かれた、皇帝陛下直筆の書状を届けること」

「任務受け取りました。明朝、負傷者の治療法と敵の情報を得るため、皇帝陛下の書状を持参し、ベル小隊と共にダスカード遺跡のウルガン殿の元へ向かいます！」

セシリアは命令書を手に復誦ふくしょうすると、アルフレッドに向かって敬礼した。

ダスカード遺跡とは、帝都より南東位置するアンジェロ山麓にあ

る、古代遺跡のことである。アンジェロ山は、帝都からもその姿を遠くに見ることが出来る。旅程にして一日ほどの行軍ではあるが、砂漠では騎馬を使うことが出来ないため、徒^{かち}となり、思うよりその距離は遠い。

命令を受けて、翌日の早朝、気温が上がる前にセシリアはジャック、アルサス、そして、もう一小隊、ベル隊を加えた六人で、ダスカード遺跡へ向けて出発した。随行するベル小隊を率いるのは、デイビット・ベル中尉である。歳はセシリアより五つほど年上であるが、大尉に昇格したセシリアに任務のリーダーを一任した。

皆、バヨネットを手に、ダイムガルド軍の金色の甲冑と兜を着用する。アルサスは、その不思議な兜に驚きを隠せなかった。

頭全体を覆い隠すような兜を被ると、バイザーの裏側に様々な情報^{ヒョウ}が文字にて表示されるのだ。方角、地図はもちろん、着用者の身体状況に到るまで。さらに驚くべきは、耳あての部分に取り付けられた「スピーカ」と呼ばれるものから、声が聞こえてくる。エーアデ通信その技術を応用したものらしいのだが、兜を着用していてもバイザーを上げることなく、会話が出来る。

その仕組みは、バヨネットと同じく良く分からないもので、おそらく、喪われたアルサスの記憶の何処にも、そんなものを見たことがあるという覚えがなかった。

「すごい、すごい！」

と思わず子どもみたいにはしゃいでしまう。

さらに驚かされたのは、全身甲冑の鎧を着込んでもまったく暑くないことである。肩鎧の部分に、「インテイク」と呼ばれるダクトがあり、それが背中にある「バックパック」という箱につながり、鎧全体を空冷する仕組みになっているのだ、とセシリアに教わった。

かつて、ヨルンの戦いのころ、ダイムガルド軍は砂漠の国特有の軽装であった事を思えば、重装備をしても変わらない機動性と、気候に適応する機能は、バヨネットにせよ鎧兜にせよ、目覚しい進歩だと言っても過言ではないだろう。

ただ、ジャックだけは、はしゃぐアルサスに渋い顔をした。

「そんなことも知らずに、少尉が務まるかよ。さっさと行くぞ、センチ・レーバン人」

と、棘を丸出しにした言葉を投げかけてくる。セシリアは前もってジャックに「無用な波風を立てるな」と釘を刺しておいたのだが、マークスが負傷し戦列を外れたことと、彼自身が持つセンチ・レーバン人への不快感は拭い去れていないようで、実際問題、ベル小隊の面々も「センチ・レーバン人は嫌いだが、任務だから仕方がない」と顔に書いてある。

ダスカード遺跡に向かい、そこである人物に皇帝陛下書状を手渡す。危険な任務ではないとは言え、道中でもしも「翼ある人」が襲い掛かって来たりすれば、今のままでは足並みがそろわず、両隊とも全滅しかねない。

そういう懸念を抱きつつ、セシリアは隊を率いてダスカードへ出発した。セシリアを先頭に、ジャック、アルサス、ベル隊の三人が続く、一列の隊列である。

無限の砂漠に昇る太陽は、あつという間に冷え切った気温をじりじりと焦がし、灼熱の地獄に変える。砂漠に風はなく、淀んだ空気だけがそこに停滞し続けているようだ。幸い、甲冑の空調のおかげで、徒もそれほど苦難ではないが、終始無言で隊列を組み、ざっくざっくと砂を踏みしめる音だけが聞こえてくると、自然に気も重たくなってしまふ。

『セシリア』

と、唐突に耳あてのスピーカ空声から、誰かがセシリアを呼ぶ。振り返ろうかと思ったのだが、バイザーの裏に表示された文字が、アルサスからの、セシリアだけに接続された秘匿回線であることに気づき、振り向くのを止め、何事もないかのように歩き続けた。

『こうやれば、内緒話が出来るんだな。すごいな……』

アルサスは、今日何度目かの「すごい」を口にしつつ、鎧兜の機能を遊んでいるかのようにだった。

「アルサス。あんまりいじつてると、電源がなくなるぞ。電源がなくなったら、空調も使えなくなる。下らない話をして、ミイラになって死にたくなかったら、黙って歩け」

冷たくそう返すと、セシリアは通信を遮断しようとした。遮断するには、目の虹彩でバイザー裏の画面の右端を数秒間見つめればいい。セシリアとアルサスが会話していることは、ジャックたちに知られることはない。それが、内緒話のできる秘匿回線である。

『ちよっ、ちよっと待った。聞きたいことがあるんだ!』

アルサスの慌てた声にセシリアは、慌てて画面の右端から視線をずらし、バイザーのスリットから見える砂漠の景色に目を投じた。

「聞きたいこと?」

『ああ。これから、会いに行くウルガンってやつのこと。みんな知ってるみたいだけど、ジャックに訊いても教えてくれそうにないし、デイビッドたちも同じだ』

「そう……だな」

セシリアは砂の文様を見つめながら、呟く。確かに、アルサスには任務の概要は伝えたが、肝心のウルガンの事に関しては何も伝えていなかった事を思い出したのだ。

「どうして、ダイムガルドがたった十年で、センテ・レーバン王国技術院や魔法使いギルドの研究員も思いつかないような、あなたが「すごい」を連発する技術を開発できたと思う?」

『それは、ダイムガルドの人たちの努力の賜物だよ』

さらりとそう言つてのけるアルサスに、セシリアは不意に苦笑を浮かべた。彼には、民族の意識という観念が薄いようだ。ジャックのように、民族意識が強ければ、他の民族を褒めたりはしない。それは、そもそも本当のアルサスという人間がそういう性格なのか、それとも記憶を喪っているからなのかは、判断付きかねた。

「そうだったら、わたしたちも胸を張って自慢できるんだけどな。そうじゃない……」

『まさか、そのウルガンってやつが?』

「そう。話せば長くなるけれど、軍備改革は、十年前のヨルンの戦いから始まっている。とは言っても、そのころ、わたしは七歳だったから、これは父から聞いた話だ」

セシリアは、そう前置いてから、少しばかり電源の残量を気にかかけつつ、秘匿回線でアルサスに昔語りをはじめた。

十年前に遡ること、ヨルン平原に進駐したガモーフ軍と秘密同盟を結び、センテ・レーバン軍と対峙した。数の上では、圧倒的となったダイムガルド・ガモーフ連合軍。しかし、当時のダイムガルド軍は軍隊としては他の二国に劣っていた。厳しい国土環境のため、国軍力の発展において、常に後進を歩んでいたのである。さらに一条の真っ白な光が戦場を駆け巡り、全軍併せて二百万人もの将兵が命を落とした。

国軍力に歴然たる差を付けられた上に、戦争の結果としてもダイムガルド軍はヨルンの戦いで完全なる敗北を喫したのである。特に、ダイムガルド軍を戦かせたのは、あの白き光である。その名を「白き龍」と呼ぶことは知らずとも、あれをいずれかの国が手にしたとしたら、ダイムガルドの国土はたちまち焦土と化してしまう。その恐怖に端を発し、ヨルンから撤退したダイムガルド軍は徹底的な軍備改革をはじめた。

主導を執ったのは、当時中将であったエイブラムス・コックである。

「まずは資源の獲得。モリアの鉱山から採掘されるミスリルは交易の資源だから、それとは別に軍が保有するミスリルが必要だった。そこで、エイブラムス大將は、神聖な霊場として崇めていた、神の遺跡ダスカードに眼を付けた」

『神の霊場……』

「そう、わたしたちの知る歴史のもっと太古の昔、この世界には神さまがいたと言われている。それって、ガモーフのベスタ教で言うところの、アストレアの時代。ダスカードはその頃に作られた、神さまの遺跡だと、この国では信じられている」

格別に信奉する宗教がなくとも、それに近い信心は人間の心に宿っているものである。たとえば、センテ・レーバンの一部の地域でアトリア連峰のシエラ山を崇める、山岳信仰などはその一例であり、ダイムガルドでも似たような信心があり、その対象のひとつが、ダスカード遺跡だった。

しかし、軍隊と言うのは、常に現実主義リアリズムの代名詞であり、エイブラムスはダスカード遺跡のあるアンジェロ山に、軍備改革の活路を見出したのである。

「アンジェロ山には、国有ミスリルの約十倍以上のミスリルが眠っていた。エイブラムス大将の読みは当たったんだ。だけど、ミスリルと一緒に、ダスカード遺跡の最深部で……」

セシリアの声がやたらと低くなる。

「軍が掘り当てたのは、知恵……」

『知恵?』

あまりにも曖昧模糊とした表現に聞こえたアルサスはが語尾を上げる。

「何千年もダスカードの地価で生き続け、神々の時代から脈々とその知恵を蓄え続けた、それがウルガンどのだ。もはや彼は『知恵』そのものと言ってもいい」

『何千年も……って! 長生き過ぎるだろ、その人っ』

「誰が人間だと言った?」

『まさか……!』

セシリアが浮かべた不敵な笑みを感じ取ったアルサスが、スピーカの向こうで絶句する。記憶がない彼でも、思い当たる節があるのだろうか。

ダスカード遺跡の最深部でウルガンと出会ったことによって、ダイムガルドは変貌を遂げた。得体の知れない相手の話を鵜呑みにするなという議会の反対を押し切って、軍部はウルガンに協力を仰ぎ、古代の知識を手に入れ、今セシリアたちが着用する甲冑やバヨネットなどを作り上げたのである。

「古代の文明は、今よりずっと進んでいた。それがどうして滅んでしまったのかは、わたしたちには分からない。しかし、その超技術オーバーテクノロジーを糧に、軍備や暮らしを拡張し、来る戦争の日に備えた。『翼ある人』たちとの戦争の日を」

『途方もない話だな……。バヨネットやこの甲冑を手にしても、ぼくには俄かに信じられない』

「実際に会ってみればわかる。これから会いに行くのだから。話しは終わりだ。電源の無駄遣いになるから、もう回線を切るぞ」

セシリアはそう言うと、再びバイザー裏の画面を見つめた。しかし、縋るようにアルサスの声が続く。

『待った、もうひとつだけ訊きたい。なあ、セシリア。最近なんか、妙に冷たくないか？』

その問いかけに、セシリアはドキッとした。セシリアの素っ気無い態度はバレバレで、アルサスもその事を気にしていたのだと知ると、急に心拍数が上がり、バイザー裏の画面に映し出される、心拍計の数値が跳ね上がる。

「気のせいだ」

セシリアはそう言って、強制的にアルサスとの秘匿回線を切った。また、素っ気無い態度をとってしまったと思いながらも、セシリアは心拍を落ち着けることに専念したその時、切ったはずの回線が再び接続される。しかし、今度は秘匿回線ではなく、相手もアルサスではなかった。

『セシリア大尉！ 前をっ！！』

飛び込んできた、太い声はデイビッド・ベル中尉の声だ。はっとなって、セシリアが顔を上げる。すると、唐突に眼前の砂丘が盛り上がった。

ごごごっ、と砂漠の底から地鳴りのような音と振動。バイザー裏の画面に、緊急事態を知らせる文字が浮かび上がる。それとほぼ同時に、盛り上がった砂丘が激しく爆発して、砂煙の柱を天高く舞い上げた。

「スコルピオだ！ 全員、戦闘体勢をとれ！」
セシリアは、反射的にバヨネットを構え、叫んだ。

80. 与えられた任務（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せ下さい。

81. 砂漠の魔物

節足動物の節がきしむ音。舞い上がる土煙の中から、その姿を現す。アルサスは、その驚嘆すべき敵の姿に絶句した。

魔物。その言葉は知っていても、喪った記憶の内側にも外側にも、その魔物に関する知識は存在していない。それは、ダイムガルドの砂漠にしか生息しない魔物であり、それが「スコルピオ」と呼ばれることも、今まさにこのとき知ったのである。

スコルピオは、外見こそ砂サソリに酷似しているものの、その大きさは魔物のそれに例外なく、人の三倍近くあり、強靱な殻に覆われた体躯、六本の節足、はさんだ物を引きちぎるハサミのような爪を備えている。だが、最も恐ろしいのは、十二の節でつながれた尻尾の先に尖る、毒針である。その猛毒が体内に入れば、死するどころか、たちまち肉は腐り、骨だけになってしまう。

そう聞かされれば、戦かないものが居るだろうか。しかし、恐れて二の足を踏めば、スコルピオの餌食になってしまう。アルサスは、バヨネットを小脇に抱えながら、前もって訓練された行動にしたがって走った。ベル小隊のメンバーと併せて、こちらは六人。戦って勝てない相手ではない。

ところが、『おかしい』という呟きがアルサスの耳朵を打った。耳あてのスピーカから聞こえてきたその声は、セシリアのものだった。

『スコルピオは大人しい魔物で、人間を襲うことは稀だ』

『何かに怒っているみたいっスね』

セシリアの声に続くのは、ジャックの声。何が異変なのか、アルサスには分からないが、目の前で爪バサミをぶんぶん振り回すスコルピオは、明らかに、何かに激昂していた。それは、我を忘れていると言ってもいいだろう。

一体なにがあったのか。何がこの魔物をここまで怒り昂ぶらせて

いるのか。それは、アルサスにも分からない。しかし、このまますんなりと通してはくれそうにもない。

『ベル隊、スコルピオの後方へまわれ！ ジャック、アルサスは爪バサミをひきつける。スコルピオの弱点は腹だ！』

セシリアの指示が飛ぶ。ベル小隊の三人はすばやく砂を蹴って、スコルピオの後ろに向かう。全身甲冑ではあるが、その重さは軽く、かつ関節の動作を阻害しない構造のおかげで、すばやい移動が行える。アルサスは、ジャックと共に駆け出した。

『おい、センチ・レーバン人。足引っ張るな。邪魔だと思ったら、てめえごと撃ち抜いてやる』

ジャックの挑発とも取れる言葉が飛んでくる。アルサスは、その悪意ある部分を見逃して「そっちこそ！」と返した。

振り下ろされる爪バサミ。アルサスは身軽にひょいと飛び跳ねながら避け、バイザー裏の画面に浮かび上がる情報を読み取る。金色の甲冑に異常が発生すれば、すぐにその知らせが届く。これまた、どういう仕組みなのか理解できるものではなかったが、少なくとも、異常は知らされていない。

いける！ アルサスの脳裏にその三文字が感嘆符とともに横切る。爪バサミをかわし、着地と同時に踵を軸に体の向きをスコルピオに向けると、その顔面めがけて、一気にバヨネットの引き金を引いた。筒の中で火薬が爆発し、先端からミスリルの杭が撃ち出される。

『ダメだ、アルサスっ！！』

唐突に、セシリアが叫んだ。その言葉の通り、アルサスの放ったパイルは、スコルピオの固い殻にはじかれてしまった。もともと、ミスリルの硬度は鉄などよりもはるかに高い。しかも、魔力に対してそれを吸収するという効果がある。そのため、とねりこの木と並び、魔法使いの杖の素材^{ケイン}として扱われるのだ。バヨネットも、対魔法使い用の兵装として開発された側面を持つ。しかし、そのパイルさえも通さない強固な殻は驚きにも値した。

『センチ・レーバン人！ 聞いてなかったのかっ！？ ヤツの弱点

は腹だ！ 足手まといになるなら、今すぐ俺たちの前から消えろ！

このグズがつ！』

ジャックの耳が割れんばかりの罵声が飛んでくる。アルサスは「ごめん」とだけ返しつつも、その視線はスコルピオから外さなかった。

バイザーのスリットから見えるスコルピオは、後ろに廻ったベル隊の牽制射撃を尻尾で払いのけながら、爪バサミでアルサスたちを攻撃する。その死角のない攻撃は荒々しく、狂気に満ち満ちていた。セシリアの言った、スコルピオが大人しい魔物だと言うのが信じられないほどだ。

腹の下に入り込めれば、勝機が見える、と言っても、その腹の下に入り込むと言うのが問題である。後ろから回り込めば、毒針のついた尻尾の餌食となるだろう。正面から飛び込めば、複眼の双眸に睨まれて、爪バサミで体が泣き分かれになってしまうこと受け合いだ。

『何とか、注意を逸らして、逃げられないか！？』

耳あてのスピーカから回線を通じて流れ込んできたデイビット・ベルの声は、アルサスに向けられたものではなく、セシリアに向けられたものだった。

『それはわたしも考えていた。だが、こうなってしまっただけでこいつを放置すれば、他の誰かを襲う可能性もある。退治する他ない』

『しかし、セシリア大尉。我々の任務はスコルピオを倒すことではないはず！』

デイビットの意見にも一理ある、と感じたセシリアが言葉に詰まってしまうのを、アルサスはスピーカ越しに感じた。

「セシリア、眼だ。あいつの眼を狙ってくれ。そうしたらぼくが、あいつの腹の下に入る」

助け舟とばかりに、アルサスが言うと、セシリアは驚きの声を上げた。

『何を言ってるんだアルサスっ！ そんなことをしたら、腹の下で下敷きになってしまおう！』

「他にこいつを倒す方法があるのか！？」

語気を強めて言うと、返ってきた返事はセシリアのものではなくジャックだった。

『お前はバカか！？ 任務達成前に、屍晒してどうするんだよっ。』

センテ・レーバン人ってのはそんなことにも頭が廻らないのか！？

「そうじゃないよ、ジャック。セシリアの言うとおり、このままじゃこいつは帝都に向かうかもしれない。そうしたら、必ず犠牲者が出る。『翼ある人』と戦う前に、誰かが死んでしまうかも知れないんだ」

『そんなことは分かってるっ！ だがな……』

「ダイムガルドの人が襲われるのを黙って見過ごして、ダイムガルド近衛騎士団なんて、名乗れないだろ？」

ジャックの反論を、ある意味で屁理屈とも思えるような正論で塞いだアルサスは、バヨネットを構えなおした。スコルピオの碧眼がこちらを睨んでいる。怒りを露にしながら。

『分かった……。でも、パイルをスコルピオの腹に打ち込んだらすぐに逃げるんだ。わたしは、アルサスのこともダイムガルドの一員だと認めている』

決断を下すセシリア。それでも一抹の不安は拭い去れない様子だった。そんなセシリアの不安を感じ取ったのか、ジャックが言う。

『だったら、隊長。俺があいつの腹の下に滑り込むっス。センテ・レーバン人にはかりカッコいいところを持って行かれないっスからね』

しかし、セシリアはジャックの要望を跳ね除けて、

『いや、足ならアルサスの方が速い。任せる、アルサス。ジャックはわたしを援護しろ。スコルピオの眼玉を撃ち抜くっ』

すばやく指示を下すと、アルサスの目の前で砂を蹴った。セシリアの後を追うジャックがバヨネットを撃ちながら、スコルピオの爪

バサミを引きつけつつ、セシリアはその懷に飛び込むと、怒りの満ち溢れる碧眼めがけてパイルを撃ち放った。

節足動物の大半がそうであるように、魔物と言えどもスコルピオの瞳もいくつもの眼球が寄り集まった複眼構造である。ただ、眼は人間と同じく二つだけ。ちょうど人間の頭ほどの大きさがあるものの、たった二つの的を射抜くのは、爪バサミさえ牽制できれば、難しいことではなかった。

セシリアとジャックは、セシリアが小隊長になった頃からの相棒でもある。その息はぴったりとあっていて、アルサスが思うよりも早く、セシリアたちはスコルピオの眼を潰した。

「ギャアアアっ」

縦に割れた口吻が大きく開き、スコルピオが苦痛の悲鳴を上げてのけぞった。魔物であるから、虫とは違う。その獣じみた悲鳴を合図に、アルサスは一直線に走り出した。バヨネットの戦闘では不要に思えた迅雷の剣技の脚力がものを言う。

腹から掛け声を上げ、アルサスはセシリアたちを追い抜いて、その腹の下へ滑り込む。蛇腹になった節。だが、腹の殻はそれほど厚くはない。ひと思いにバヨネットの先端に取り付けられた小剣を、その腹の節の間に突きたてた。

「いっけえーっ！！」

思い切り引き金を引く。火薬の爆発する振動と共に、引き金を引いている間、次々とスコルピオの体内に、ミスリルの杭が打ち込まれる。傷口からこぼれだした、体液がアルサスの甲冑を汚していく。その時である。

『やばいっ』

ジャックの声がスピーカを介して、アルサスの耳に届く。悲鳴を上げたまま、スコルピオの体がぐらつき倒れてきたのだ。逃げ出すのが一步遅れてしまった。などと冷静に分析する余裕はない。このまま、スコルピオの巨軀に押しつぶされてしまうのか……アルサスはずいぶん眼を閉じた。その瞬間、ものすごい力で甲冑の襟首をつか

まれ、アルサスはスコルピオの腹の下から引きずり出された。

間一髪。スコルピオが絶命し、砂埃を上げる直前に、辛くも腹の下から脱したアルサスは振り向く。甲冑の肩に記された識別ナンバーが、彼の命を救ったのがジャックだと教えてくれた。

「ジャック……」

『いいかつこさせてやらねえって言っただろう？ まったく、無鉄砲にもほどがあるぜ』

頭全体を覆う兜の所為でジャックの表情は読み取れなかったが、聞こえてくる声には、不思議と棘のようなものは感じなかった。

『怪我はないか？』

セシリアが走り寄ってくる。アルサスは頷きながら、立ち上がった。グローブで、鎧に付着した体液を払えば、エラーのメッセージもひとつずつ消失する。

「怪我はないけど、バヨネットがスコルピオの腹に刺さったままだ」苦笑いを浮かべてアルサスが言うと、なかば安堵したようにセシリアの溜息が聞こえた。

『怪我がなければそれでいい……デイビット中尉、そちらはどうだ？』

『こちらデイビット。我が小隊も全員無事だ。まったく、肝が冷やされた』

『すまない。全員聞け、任務はこのまま続行する。予定外の時間を食った分、急ぎダスカード遺跡へ向かう、いいな？』

全員の無事を確認したセシリアは、回線越しにそう言うと、返事を待たず、砂漠を歩き出した。そろそろとその後をベル隊が付いていく。

アルサスは、自らが打ち倒した魔物に一瞥をくれた。魔界からやって来たと言われる魔物、それを仕留めたという高揚感の影に、何故か申し訳なく思う気持ちがあることに気づく。魔物とは言っても、生き物であることに変わりはない。何故あれほどに怒り狂っていたのかも分らずに、無闇に殺生してしまったんじゃないだろうかと

いう不安がこみ上げてくる。

『おい、センテ・レーバン人』

唐突にジャックが、アルサスの後頭部を小突く。そして、彼らは自らが携帯してきた、剣を差し出した。ごくありきたりのブロードソードだ。

『バヨネットの代わりに使え。こっちの方が得意なんだろう？』

そう言うと、剣をアルサスに放り投げて、セシリアを追い歩いていく。アルサスはそれを受け取りつつ、ジャックの背中に向かって言った。

「ありがとう、ジャック。でも、ぼく、アルサスって名前があるんだけど……」

『知るかよ。さっと来い。置いていくぞ、センテ・レーバン人』

ぶつきら棒に言いながら、ちらりとジャックは振り向いた。アルサスは思わず苦笑したくなったのをこらえながら、剣を腰のホルダーに通し、セシリアとジャックを追いかけた。

ダスカード遺跡の姿が、はっきりとバイザーの隙間から確認できるようになるまで、終始無言のままセシリアはずっと考えあぐねていた。それは、スコルピオのことである。魔物と一口にまとめても、その生態系は様々であり、謎の部分も多い。たとえば、海に住むスキード族という烏賊の化物見たいな魔物は、ほとんど人間の前に姿を見せない。おかげで海運ギルドの航海に支障はないのだ。また、ボアルという猪に似た魔物は、より獣の性質に近い。縄張りを荒らさない限り、人間を襲ったりはしない。しかし、その一方で狼に酷似した、ヴォールフ族やエイゲル族は、獰猛であり家畜や旅人を襲うことがあり、恐れられている。

しかし、スコルピオは、どちらかと言えば大人しい魔物である。サソリに似た姿をしているにもかかわらず、その危険はサソリに比べて低い。それが何ゆえにあそこまで激昂していたのか。見境もなく、自分たちに襲い掛かったのか……。それには何か事情があるは

ずだ。しかし、考えたところで思い浮かぶものはいくつかあるが、どれも的を射ているとは言い難いものがあつた。

そうこうしているうちに、眼前に、夕暮れの朱に染まったダスカード遺跡が見えてくる。厳密に言えば、聳え立つダイムガルドの最高峰アンジェロ山の麓と言うことになる。セシリアがここに来るのは、はじめてのことだつた。

いくつかの砂に埋もれかけたミスリルの柱が、規則正しく立ち並び、遺跡へのコンコースを形作る。意味ありげな、箱のようなモニュメントが幾つか転がっている、それ以外には何もない、とても寂しい場所であつた。そのコンコースの先に、人工物だとはつきり分かる真四角な洞穴がぽっかりと口をあけている。それこそがダスカード遺跡の入り口だつた。ダスカード遺跡はそこから、アンジェロ山の内部に建造された、古代の遺跡なのである。

『妙だな……静か過ぎる』

デイビットが言う。デイビットは六人の中で、唯一ダスカード遺跡に来たことがあり、ウルガンにも面会したことがある人物で、それ故、セシリアたちの同行者選ばれたのである。

『衛兵の姿が見えない。採掘場の方も光がない』

そういつて、ダスカード遺跡のすぐ傍にある、ミスリル採掘場キヤンプの方を指差した。灰色の幌がけの小屋が立ち並ぶそれは、ミスリル採掘の作業員たちが生活する場所であり、すでに時刻から察するに、作業は終わっているはずにもかかわらず、生活の灯りが見えない。

『隊長！ あれっ』

と、言ったのはジャックだ。ジャックが指差すのは、採掘場のキヤンプではなく、ダスカード遺跡の入り口の方だつた。よく眼を凝らして、バイザーのスリットから見れば、入り口の辺りに、倒れこむ人の姿があつた。すぐに、それがダスカード遺跡の衛兵だと言うことに気づき、セシリアは遺跡の入り口に駆け寄つた。

81. 砂漠の魔物（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せ下さい。

82. ダスカード遺跡

「しっかりしろ！」

バイザーを開き直接声をかける。しかし、ダスカード遺跡を守る二人の衛兵はいずれもはぐったりとしたまま動かない。甲冑の隙間からこぼれ出ているのは、真っ赤な血液。それが夕日の陰になって、どす黒く見えた。

死んでいる……セシリアはそう気づき、膝を折った。そっと衛兵の手のひらに触れてみる。グローブ越しにわずかな体温を感じる。二人が息絶えて、それほど長い時間は過ぎていないようだ。

『これは、ということだ！？』

セシリアの背後で、デイビットが絶句する。言葉を失いつつ、衛兵の亡骸を見つめるデイビットに、セシリアは、

「何者かに殺されている。しかも確実に鎧の隙間を突かれているところをみると、魔物の仕業じゃない……」

『人間のしわざって言うのか！？』

遅ればせながらやって来たアルサスが、腰の剣をかちやかちやと言わせながら、セシリアに問いかける。セシリアは静かに頷いた。

「それも、一瞬の間に二人とも殺されたんだ」

『それって、まさか！』

言いかけたアルサスの言葉をセシリアは視線で遮る。一瞬の間に間合いを詰めて、一刀のもとに敵を斬り殺す。それは、センチ・レバン王国騎士団に伝わる、迅雷の剣技において他にはないだろう。『まさか、採掘場の方も皆やられたんじゃないのか？』

当然の推論に、デイビットが声を震わせた。おそらくそうに違いない。これは一大事だ。すぐさまベル隊にその調査を命じるも、言いたくない不穏な空気がセシリアたちを包み込んだ。

『なんのために……』

ベル隊の走っていく後姿を見つめながらジャックが問う。セシリ

アにその答えを期待しているわけではないが、明らかに大軍隊が来たと言うわけではない。少人数が薄暮に紛れて、不意をうった。それは容易に推理できることだった。

何のために？ 至極当然のように浮かんでくる疑問は、セシリアにとっても同じであり、正体不明の襲撃者が何のためにここに現れたのか。そもそも、「翼ある人」の出現以来、ダイムガルド軍は警戒態勢を続けている。「翼ある人」のように空を飛んででも来なければ、その警戒網に引っかかるはずだ。

疑問は、推理という形で、セシリアの脳から神経を駆け巡っていく。衛兵の遺体には、わずかな体温がある。即ち、襲撃者が衛兵たちを襲ってから、まだそれほど時間が経っていないということだ。

『こちら、デイビット。やはり、採掘キャンプの就労者は残らず殺されている。襲撃者の姿は認められない。これから生存者が居ないか搜索を開始する』

回線を伝って、採掘場の調査に向かったデイビットからの報告がくる。エーアデ通信を介した会話は「無線」と呼ばれ、遠く離れていても会話できるようになっている。セシリアは無線に「了解した」と返しながらも、推理を続けた。

ここに、襲撃者の姿がないとすれば……。セシリアは顔を上げる。ダスカード遺跡の入り口。ぽっかりと口をあけたそれは、まるで深遠へと続く地獄の道のように思える。そこに、襲撃者が居るとすれば、尚のことその暗闇は不気味である。

『もしかして、スコルピオが激昂していたのと、何か関係があるのかな』

唐突に、アルサスが言う。セシリアは思わず振り向いた。

「もしも、そうだとしても、このまま襲撃者を見逃してはならない。彼らが遺跡に侵入したのだとすれば、彼らの目的はただひとつだ」

『ウルガン……』

アルサスの言葉に、セシリアは頷いた。セシリアは衛兵の遺体に黙祷の意味を込めて一瞥すると立ち上がった。そして、開いたバイ

ザーを閉じる。

「アルサス、ジャック。警戒を厳に。敵の正体が分からない以上、気を抜くな。ウルガンどのの下^{もと}へ向かう」

厳しい声音を吐き出すと、セシリアは二人が頷くのを確かめて、ダスカード遺跡へと足を踏み入れた。

古代文明と呼ばれるものがある。ガモーフやセンチ・レーバンでも、そしてダイムガルドでも、その古代文明が栄華を極めた時代の事を「神々の時代」と呼んだ。「神々の時代」は、今よりもっと進んだ技術や文化があったと言われている。

それが事実には、入り口から続く長い下り階段を下りた先には、細長い通路があり、その通路はミスリルの壁に覆われていた。ミスリルの精製技術が進歩し、魔法杖やバヨネットのパイルに応用できるようになったといっても、建物自体をミスリルで作ることは難しい。それには、もっと進歩した技術が必要なのだ。

そんな「神々の時代」が何故滅び、そしてその名残が「遺跡」と言う形になったのか。それは、はっきりとしたことはまだ誰にも分からない。魔法使いギルドの연구원や、ガモーフの神官などが様々な説を唱えてはいるが、確かなことは「神々の黄昏」と呼ばれる時代がそこにはあったとされる。黄昏、即ち神々が争いをしたと言うのである。

ガモーフが信奉するベスタ教の経典には、その際、神の一人であった「女神アストレア」が、世界を滅亡の危機から救うため、天使であった「銀の乙女」の魂を五つに分けた。そのうち四つの魂に色をつけ、精霊とした。それが、魔力の根源であると言われている。そして、最後のひとつは「約束の日」が来た際に、再び「銀の乙女」が天使として蘇るために、長い眠りに就かせたのだという。

無論、それはあくまで、神職者が勝手に作り上げた物語であるが、そういった伝説とはしばしば、何かしらの事実が、脚色を以って描かれることが多い。しかし、その事実とは何なのか、現代を生きる

ものには、とうてい分かるはずもなかった。少なくとも分かっていることは、神々の時代が終わり、人の時代が始まり、二千余年の月日が流れたと言うことだけである。そこに、神が本当に居たのかどうか、ということに対して、結論付けることは難しく、そのため、アルサスはミスリルの壁を見つめながら、別の感慨を持っていた。

遺跡の通路は真っ暗である。アンジェロ山内部に掘られた洞穴のようなもので、光源となるものがひとつもない。そのため、甲冑の籠手に仕込まれた、カーマインの魔法装置を使用する。すると、少し赤みを帯びた光が暗がりの通路を照らしてくれるのだ。言うまでもないがその魔法装置に使われる宝石も、もともと魔力を含有しているもので、魔法が使えないダイムガルド人が、ウルガンなる人物から授かった知恵の賜物である。

それにしても……このミスリルの壁に見覚えがある。ダイムガルドのどこにもこんな施設はなかったし、喪われた記憶の中で見たものでもないだろう。そうして導き出されたのは、二週間ばかり前、ちょうどアルサスがダイムガルド近衛騎士団に入隊を決めた日の朝に見た夢のなかで、これに近い光景を見たことを思い出した。

あの時は、通路のあちこちから炎が噴出していた。そして、金髪の若い少年が炎の真ん中で泣いていたのだ。あれは、脳が作り出した光景だったはずだ。夢というのは、往々にして想像が脳裏で具現化したものに過ぎない。だが、その一方で、銀色の髪をした女の子がこう言った。

「すべては、フォトンが見せる夢」

フォトンとは何なのか。それさえも良く分からないが、カーマインの灯りに照らされる遺跡の通路は、間違いなくあの夢の中に出てきた、鉄と炎に覆われた通路に間違いなく、という確信があった。

『デイビット中尉に案内を頼まなくても、良かったんスか？ あの人だけなんでしょ、ここへ来たことがあるのは』

先頭を歩くセシリアに、真ん中を歩くアルサスを跳び越してジャツクの声が届く。

『仕方がない。遺跡内部の地図なら把握している。それほど遠い距離じゃない、心配するな』

と、セシリアは言ったものの、多少の不安があるのか、歩む足はどこか慎重そのものであった。無理もない、遺跡を襲撃した何者かが、この奥に潜んでいるかもしれないのだ。

遺跡の通路は何度も、ジグザグに曲がる。壁には時折、魔法文字が記されており、それが何処となく、現在の場所を教えてくれているかのようなだったが、魔法文字の意味を訳したとしても、結局は迷路のようになっていて、今居る場所が分からなくなってしまった。

『昔、聴いた話なんだが、センチ・レーバン王国の王家が使う別邸、メリクス別邸の地下には、王都とつながる迷路があるって聞いたことがあるが、それってこんな感じなんだろうか？　どうなんだ、センチ・レーバン人』

沈黙に耐えかねたのか、ジャックが問いかけてくる。どうなんだ、と言われても、おおよそ生活常識以外の記憶を喪ったアルサスには答えようもない。

「知らない。もしもあったとしても、ここまで複雑な迷路にはなっていないよ」

と、あいまいな答えを返すと、ジャックは詰まらなそうに『使えねえな』と溜息を漏らした。そこで、使えなくって悪かったな、とは思わないのがアルサスで、むしろ彼の心は別の方向に向いていた。何故記憶を喪ってしまったのか……。一体自分の身に何があって、ここに居るのかそれを知る手がかりが欲しいと思うのだが、肝心な記憶には霧がかかったままだ。もしかすると、その喪われた記憶の中に、ジャックの言う「メリクス別邸の迷宮」と言うものを知っている自分がいるかもしれない。

考えても見れば、自分が何者で、何処から来て何処へ行くつもりだったのか分らないと言うのは、漠然とした恐怖でもある。それを考えないようにするため、バヨネットの訓練に打ち込んでいた。だが、暗闇というのはどうにもそうした不安や恐怖を掻き立てるも

ので、今さらながらに、怖くなってしまふ。

せめて、誰かの手を握っていられたら。その恐怖も忘れられるかもしれない……。そう気づいたのは、モーガンたち教導団のの手から、アイシャを救うために握った彼女の手の感触だった。ぬくもりのある人の手。だが、記憶の底で、お前が握るべき手は、アイシャの手ではないと言っているような気がした。ならば、一体誰の手を握ると言うのか……。

つないだ手の感触からも結局その答えは導き出せなかった。無論、セシリアたちと共に居ることは苦痛ではない。セシリアが居なければ、記憶どころか命も喪っていた。ジャックに悪態をつかれても、彼がそれほど敵意の塊ではない事を知っている。アイシャは、その好奇心に満ちた瞳でアルサスを頼りにしてくれる。そういう人たちのために、剣を振ることが出来るのは、嬉しいことだ。

だが、本当にアルサスが剣を振るって救うべき人は別にいる。そんな気がしてならないのだ。フォトンが何であれ、あの夢に何か意味があるのだとすれば、今はその夢のことを忘れないでいることの方が肝心だと言える。その夢にこそ、喪われた記憶の鍵が眠っているような気がするのだ。

『ベー・フィーア』

自問自答に没頭していたアルサスの耳朵を、セシリアの声が打った。セシリアは、ミスリルの壁に記された大きな魔法文字を読み上げたのだ。

『この先にウルガンどのは居られる』

「あのさ、セシリア。気になったんだけど、遺跡の中には衛兵はいないの？」

『遺跡はただの遺跡だ。採掘場と違って、資源と呼べるのはウルガンどのだけだ。それにウルガンどのの要望で、遺跡内は静かにしておいて欲しい、と言われたのそうだ』

ウルガンは人間ではない、と確かにセシリアは言ったのだが、静寂を好むとは、なんとも人間じみた注文だ、とアルサスは図らずも

思ってしまった。

やがて曲がり角を曲がると、通路が少しばかり開ける。眼前には巨大な鉄扉があった。大の男が百人集まっても開けそうにもないほど巨大な扉だ。アルサスとジャックがあっけに採られていると、セシリアは扉の脇の壁に取り付けられた小さな箱に近づいた。大きさは手のひら大だろうか、九つの小さく四角形をした小石のようなものが整列しており、セシリアはすばやくその小石を押した。すると、ピッピッピッと、やたら無機質な音が聞こえてくる。

『キーロック・ナンバーはデイビットから聞いている。これで、扉が開くはずなんだが……』

セシリアが一人ごちた矢先、大の男が百人がかりでも開きそうになかった扉が、ちょうどその中心に亀裂を走らせて、左右に地鳴りのような音を立てながら開いた。

『すげえ……』

思わず感嘆の声を漏らすジャック。セシリアはちらりとこちらを振り返ると、左手を振って「いくぞ」とアルサスたちに合図した。

鉄扉をくぐれば、そこはさらに巨大な空間だった。天井高は人の背丈の何十倍もあるだろう。見上げたところで、カーマインの灯りも届かない。そして周囲の広さは、駆け回っても有り余るほどだ。その広い空間の中心に横たわる、小山ほどの塊にアルサスは気づいた。

『ウルガンどの！』

セシリアが声を張り上げる。すると、塊がのそりと起き上がった。それには、アルサスの傍らのジャックが驚きの声を上げた。

「なんだ……ずいぶん来るのが遅かったな。人の子らよ」

塊から声がする。しわがれた老人の声に似ているが、もっと低く、まるで地の底から響いてくるような、厳かで恐ろしい雰囲気を感じていた。

82. ダスカード遺跡（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せ下さい。

83. 黄金の鍵

この世界に棲む魔物には、学術的に確認されているだけで、七つの種族があると言われている。ヴォールフ、エイゲル、スキード、エント、ボアル、スコルピオ……そして今、アルサスたちの目の前にいるドラグノ族である。ドラグノの容姿を説明するのはとても難しい。その体軀は魔物の中でもとりわけ大きく、爬虫類に似た鱗が体表面を覆い、両手足の鋭い爪と長い尻尾が印象的だ。背中には、蝙蝠こうもりに似た小さな翼が生えているが、それは飛ぶためのものではなく退化した翼の成れの果てである。また、顔は体と同じく爬虫類、それも蜥蜴とかげを思わせる。ぎょろりとした双眸は威圧感があり、口元から生える牙や頭頂部の角は、獰猛ささえ感じる。それを総して言うならば、ドラグノ族の姿は……。

『ドラゴンだ!』

と、驚嘆とも驚喜とも取れる声で、ジャックが指差す。まさに、ドラグノ族のハイ・エンシェント「ウルガン」は、子ども向けの冒険活劇が描かれた本の中に出てくる巨大な「ドラゴン」に良く似ていた。おおよそ、この地上に住まう生態系を例に挙げてで説明することは難しく、架空の生き物に準えるのが、やっとだった。

無論、ウルガンとはじめて対面するセシリアも、ウルガンのことは話に聞いていたが、見ると聞くとでは大違いで、驚きに言葉を失っていた。

それはアルサスも同じである。小山ほどもあるその巨大な生き物は、魔物としても破格の大きさである。どうやってダスカード遺跡の地下にもぐりこんだのか、という謎よりもむしろ、目の前にいる生物への恐怖の方が勝っていた。すると、そんなアルサスたちの内心が伝わったのか、ウルガンはぬっと長い首をこちらに近づける。そして、値踏みするかのように、セシリア、アルサス、ジャックのことを見つめた。

「恐れずともよい。予はものを食べずとも、その命はフォトン・ゲージによって守られている」

ウルガンの口から発せられたのは、人の言葉ではあるが、明らかにその声音は人の声とは違う。冥府のそこから湧き出てくるような恐ろしい声だ。それでも、ウルガンは凶らずも怯えてしまった、矮小な人間を氣遣ってか、その言葉には幾ばくかの優しさを見え隠れさせていた。

「フォトン・ゲージ？ 魔力のようなものですか？」

アルサスが声を上擦らせながら、問いかけた。すると、ウルガンは、近づけた首を引っ込めつつ「左様」と頷く。

「フォトンとは魔力の源と言ってもよい。我が力の源は魔力、それさえ絶えねば、栄養と呼ばれるものを摂取する必要はない。無論、フォトンがあるべき本来の意味はそれだけではないのだが……そなたたちは、そのような事を問い質しにここまで来たのではあるまい？ だがその前に、人の子らよ、予に顔を見せてはくれぬのか」

『こ、これは、失礼しました、ウルガンさま！』

ウルガンの言葉にアルサスの隣で、セシリアはぺこりと頭を下げた。アルサスはセシリアに促されるまま、兜のバイザーを開いた。ウルガンは、それぞれの顔を確かめるように見つめ、その瞳をアルサスの赤い瞳の前で立ち止まらせる。双眸がやや細くなり、なにかを思い出したかのように頷き「ほう……そなたは」とウルガンは小さく呟いた。

それは、まるでアルサスのことを知っているかのような口ぶりである。記憶を取り戻すことを先決としているわけではないし、記憶を取り戻すことにわずかに戸惑いも感じているが、それでも、アルサスは自分が何者なのか知りたい。

「ウルガンさまは、ぼくの事をご存知なのですか？ ぼくはこの国に来て、記憶を喪いました。もしもご存知とあれば、お教え下さい！」

アルサスが請願の眼差しを差し向け、ウルガンは頷いて見せたが、

瞳を閉じるとそれを断った。

「記憶がないと申すなら、予が知るそなたのことを教えたところで、そなたがそれを受け入れることは出来ぬであろう……」

「ですが、ぼくは何か大切な事を忘れている。そのままにしておくわけにはいかないのです！」

「赤き瞳を持つ少年よ、そなたが、そなたの使命に気づき、自らなすべきことを知れば、自ずとそなたがこの世界の何を握っているのか知ることが出来る。予から言えることは、まだ時間は残されていると言うことだ」

ウルガンが話を締めくくるようにそう言うと、辺りに静けさがまわりついた。落胆の色を隠せないアルサスを見やったセシリアは、やや同情するような視線を向けた後、再びウルガンの方に顔を上げた。

「して、そなたたちの用向きとは何だ？」

ウルガンの問いかけに、セシリアは敬礼の姿勢をとった。ダイヤモンドガルドにとって、ウルガンは発展の知恵を授けてくれた恩人でもある。礼は尽くさなければならぬと言うことだろう。

それにしても、このような地下の薄暗い場所にウルガンが籠っているのは、不可思議でもある。恩人と言うならば、それ相応の扱いを受けて然るべきである。それが、たとえ魔物だとしても。その不可思議を代弁するかのごとく、ウルガンは続ける。

「我は、人の世界に干渉した。九年前、そなたたちが予を発見し、そして協力を仰いだその日から、予は、本来あるべき使命を捨てて、自らの赴くままにそなたたちに力を貸した。そなたたちが『神の時代』と呼ぶ遠い過去の技術をそなたたちに託した。その代わり、せめて静寂を、とここに留まる事を決めたが、その老いばれに、まだ何か問い質したいことがあるか？」

「他でもありません。ウルガンさまが我々に予言された、『約束の日』が近づいております。金の若子こと、メッツェ・カーネリアと、銀の乙女が『翼ある人』を世界に放ち、この時代を終わらせようと

しております。我が国の人々だけでなく、世界中の人々がなす術もなく、ただ彼らの凶刃に、こうしている今も斃れています。なにとぞ、ウルガンさまの持てる知恵で、彼らに対抗する術を教えていたきたいのです」

反響を繰り返すセシリアの声に、ウルガンは瞳を閉じて考え込むように黙り込んだ。アルサス、セシリア、ジャックの三人は固唾を飲んで、彼の答えを待った。ややもすると、ウルガンは手のひらをセシリアの前に差し出した。

足に比べて、小さな手はそれでも手のひらだけでセシリアの体をすっぽりと包み込めるほどだ。そんな手のひらには指が三本しかなく、いずれも鋭い爪が生えており、そのうちの一本に小さな鍵がかかっていた。これも、小さいと言っても、短刀ほどの大きさがあり、金色に輝く柄の部分に魔法文字と四色のきらびやかな宝石がはめ込まれていた。

「これは、ルートニアにある遺跡の鍵。かつて、六本作られたうちの一つであり、アストレアが予に託したものだ。人の子よ、この鍵で記録を知れ。さすれば、そなたたちが『翼ある人』と呼ぶ化物とどう向き合うべきか分かるだろう」

「ルートニアの遺跡……」

セシリアはウルガンの言葉を繰り返しながら、彼の爪先から、黄金の鍵を受け取った。ずしりと両手にのしかかるような重たい鍵である。

「ルートニアって言ったら、センテ・レーバンの西方にある要塞っス。今は、王国が王都から拠点をルートニアに移していて、そんなところにある遺跡の鍵を渡されても、俺たちにはどうしようもないっスよ」

ちらりと黄金の鍵に眼をやったジャックが反論の声を上げた。ウルガンの言ったルートニアは、対ダイムガルドのためにセンテ・レーバン王国が築いた要塞の名である。古代遺跡を利用して造営したと言う点では、ハイゼノンに近いものがあるが、語るべくもなくル

ートニアは敵国の領地。しかも、現在は即位式典事件に端を発し、ガルナツクの戦いで弱体化した王国騎士団が王都を放棄して、ルートニアにその拠点を移している。そんなところへ行って、ちょっと遺跡の調査をさせて下さい、などと簡単に通るわけがない。

「国境などと言っているようでは、人の時代も黄昏を迎える」

「な、何だどっ!？」

カッとなったジャックが憤懣^{ふんまん}を露にする。しかし、ウルガンはさりとそれをかわすかのように、

「人の子よ、この世界は終わりを迎え、新たなる時代に生まれ変わろうとしている。それなのに、国家だ民族だと言っているのは、再誕をとめることなど出来ない。何故なら、アストレアの天使たちは、そのような柵などないのだから」

と、冷徹な言葉でジャックの口を塞いだ。

「人の子よ、その黄金の鍵をそなたたちが使えるか否かが、人の時代を守るか否かにつながっている事を、ゆめゆめ疑うなかれ」

ウルガンの言葉に、セシリアは固く黄金の鍵を握り締めた。ジャックの言うとおり、今はこの鍵を使うことは難しい。しかし、これを持ち帰ることは、任務の達成とも言える事を、セシリアは理解していた。

「はい。肝に銘じておきたいと思います。もうひとつ、お尋ねしたいことがあります。帝都には、『翼ある人』によって傷つけられた人が大勢います。『翼ある人』の槍は普通の武器ではないことは承知しております。ですが、傷つけられた人たちは、傷口から光の粒を溢れさせ、日に日に生気を失っています。何か、治療を施すことは出来ないのでしょうか？」

自らの部下であった、マーカス・ヒルもその一人。助けたいと言う思いは、セシリアだけではなく、ジャックもアルサスさえも、共通に思っていたことである。しかし、ウルガンはそれに対しても明確な答えをくれはしなかった。

「フォトン化を止める手立てはない。ひとつだけその者たちを救う

手立てがあるとすれば、奏世の力だ。金銀の天使のうち、銀の乙女に与えられたその力があれば、その者たちをフォトン化から救えるだろう」

「それは……！」

傷ついた者たちを救うことは無理だ、とウルガンは言っているに等しい。軍病院のベッドで苦しむマーカスの顔が過ぎり、セシリアはわずかに眉間にしわを寄せた。「フォトン化」というのが何であるかは分からないが、少なくとも、傷ついた者たちを救うためには、自らが倒すべき相手の力を借りなければならぬとは、何たる不条理なことか……。

「他に、手立てはないと仰られるのですか？」

「うむ。予は魔物と呼ばれる生き物、その使命はそなたたちの力になることではない。畢竟、予が二千年余りにかけて蓄えたの記憶をそなたたちに教えたとしても、そなたたちのためにしてやれることは何もないということだ。忸怩たる思いだ……」

ウルガンは、少しばかり遠い眼をした。

「いえ、ウルガンさまのおかげで、我らは新しい技術を手に入れ、苛酷なこの国の環境の中で、ヨルンの悲劇から立ち直ることが出来ました。決して、あなたさまが恥ずかしがることなど何もありません」

心からそう思うから、セシリアは言葉に乗せたのだが、わずかにウルガンは笑ったような気がした。それは、まるで自らの事を嘲笑うかのような笑みであり、「そうではないのだよ」という言葉の影に、ウルガンが抱える何かしらの心の陰のようなものを感じ取らずにはいられなかった。だが、だからと言って、遙かな時を生きてきた、ハイ・エンシエントに掛ける言葉をセシリアは持ち合わせていない。

今、自分たちがするべきことは、黄金の鍵を持ち帰り、国に報告を伝えることだ。セシリアが踵を返したその時だった、兜の耳あてから雑音交じりの声が届く。それは、ミスリル採掘場の調査に向か

った、デイビット・ベルからの通信だった。

『こちら……ビット、セシリア大尉、聞……るか？ 敵が……近くにいる。警……るんだ！』

はつきりと聞き取れない通信は、そこでぶつりと途切れてしまう。

「エーアデ通信に妨害が掛けられている！？ デイビット！ デイビット中尉、応答願いますっ！」

呼びかけに応じる返事はない。しかし、確かにデイビットは「敵」と言った。『翼ある人』のことか？ いや、そんな推測なんて、どうだっていい。

「ジャック、アルサス！ 直ちに上へ戻る！」

セシリアは兜のバイザーを下ろし、バヨネットを構えた。ところが、彼女は踏み出した足を止める。ウルガンの部屋の後方、セシリアたちが入ってきた入り口とは反対側の入り口の方から、足音が聞こえてきた。悠然としつつも、威圧感を兼ね備えた足音だ。

「そんなに、早々と退散することはねえだろ。これから、面白いシヨーが始まるんだ。そいつを見てからでも遅くはない」

足音共に男の声。無論、ウルガンのものでも、ジャックのものでも、アルサスのものでもない。もっと軽薄で、それでいて相手を見下したような声音。セシリアには聞き覚えのない声だったが、反射的に返した脚を、もう一度ウルガンのほうに向けた。

「そうだろ？ ドラグノのハイ・エンシェント、ウルガンよ」

足音共に、声の主はゆっくりと姿を現した。その威容に、一同は息を呑む。獅子の紋章をあしらった漆黒の鎧、逞しい腕、そして、背中には三本の剣を携え、内一本は今まさに男の手に握られており、ヌラリとした鮮血が滴っていた。だが、セシリアが恐ろしく感じたのは、薄い笑みを浮かべた獰猛な獣のような、男の顔である。男は、殺しを悦楽とする、そういう顔つきをしていたのだ。

「来たか……、人の子にあって、世界の再誕を望む者よ」

ウルガンは長い首を曲げ、現れた男の顔を見遣った。

83. 黄金の鍵（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せ下さい。

84. 魔物の使命

アルサスは震えた。黒い鎧を纏った男の顔を見た瞬間、何故か心の中に嫌悪感が渦巻いたのだ。喪われたはずの記憶が、激しく心をノックする。その男を許しておくな……。怒りとも、憎悪ともとれる感情が渦巻き、アルサスは腰に差した、ジャックの剣に手を当てた。

だが、ウルガンの言葉に、アルサスは斬りかかるタイミングを逸してしまう。

「予を殺しに来たか……」

「ほう、俺が来る事を分かっていたみたいだな、ウルガン」

「スコルピオのハイ・エンシェント、ラジフのフォトンが散った。

それだけで、そなたがここへも来ることは分かっていた。しかし：

…そのために人を何人斬った？ 無益なことを」

ウルガンが言うと、黒い鎧の男は大きく口を開けて晒わらった。そして、

見せびらかすように、その手の剣を差し出す。両刃の何の変哲

もない剣だが、魔法文字と紋様が刻まれた剣身には、ぬめりを帯びた鮮血が付着していた。

「無益だと？ どうせ、どいつもこいつも死ぬんだ。ここで斬られて死ぬか、それとも、光の粒になるか、どちらにしても、そいつの人生はそこで終わる。下らないこの世界に別れを告げる手助けを、俺がしてやったまでのこと」

愉悦の笑みを浮かべる黒い鎧の男。男は自分のした事を当然のこととして、正当化するかのごとく言葉に変える。そして、自らの背中

中に差した残り二本の剣を視線で指し示した。

「メッツェが魔物狩りのために、俺に授けた三本の剣。ボアルの長チャッダは『魔剣ダーインスレイヴ』で、スコルピオの長ラジフは『蛇剣ナズ』で、そして貴様はこの『龍殺しの剣アスカロン』で仕留めてくれる」

黒い鎧の男が手にした剣……アスカロンが殺意と狂気にギラリと光る。

ダスカードへの途上、スコルピオが激昂してアルサスたちに襲い掛かってきたのは、この男が一族の長たるハイ・エンシエントを葬ったがためであったと、今更合点したところでどうすることも出来ない。あのスコルピオの怒りは、人間そのものに向けられていた。ハイ・エンシエントのような知性を持たない、ごく普通の魔物たちにとって、自分たちの長が殺されるという、黒い鎧の男の起こした凶行は、即ち人間そのものへの怒りとなったのだ。

「なぜだ、なぜ、魔物を狩る!？」

アルサスに先んじて声を上げたのは、やはりセシリアだった。男は、ニヤリとすると、顔をセシリアの方に向ける。アルサスもジャックも兜のバイザーを下ろしているため、三者とも同じ姿ではあるが、声だけでセシリアが女であることを悟ったのだろう。

「愚問だな、ダイムガルドの小娘。魔物どもは本来の使命を捨てた。自らの使命を果たそうとするメツツェにとって、魔物はもはや無用なもの。そんなものに、滅びを邪魔されるわけには行かない」

「魔物の使命？」

「そうだ。魔物とは、魔界から来た者ではない。純然たる神々の技術によって生物の進化を促した生き物。その使命は……アストレアの天使、即ち、金の若子と銀の乙女を守ることにある」

黒い鎧の男の言葉に、三人が驚きの感嘆符をあげたことは言うまでもない。男の科白は、魔物という概念を覆すようなものだった。魔界から来たもの……最初にそう言ったのが誰であるかはわからないが、少なくともその異形の姿はこの世のものではない、という固定観念があった。

「そんな……魔物がアストレアの天使のために作られたものだなって」

信じられるか、と続くジャックの言葉は驚愕によって消え入ってしまう。だがそんなどよめきの中、ウルガンは「その者の言うとお

りだ」と相槌を返した。

「女神アストレアは、我らハイ・エンシェントに長寿と知性を与える代わりに、金の若子と銀の乙女を守ることを契約とした」

「しかし、ハイ・エンシェントどもは自らの使命を捨てて、人間どもの味方をしやがった。ヴォールフのバゼットも、エイゲルのトニアも！」

黒い鎧の男は声を荒げた。

「我らが子孫が住まうこの世界を見捨てることが出来るか？ 人と同じく、我らもこの世界に息づく生き物だ。その事をバゼットたちも悩んでいた。使命を全うすべきか、それとも人ともに生きる道を選ぶか。答えはおのずと決まっていたのだ。予は、予の下した決断を過ちとは思わぬ。そなたたちには分からんだろう」

「分かりたくもねえな、ウルガン！ 下らないこの世界に住む、下らない人間の世界を守ろうとした。そんな裏切り者どもを始末するのは、当然のことだ！」

乱暴に振り上げられたアスカロンが、ブンっと空を切り、剣身に付着した鮮血が飛び散る。忌々しげに、ウルガンを睨み付ける男の眼にも殺意が宿った。おしゃべりはここまでだ、とでも言っているように見える。

「下らない人間か……そんなお前だって、その一人じゃないのか！ 瞬間的にアルサスは、地面を蹴った。バイザー裏の画面に、敵との距離を示すインジケータと呼ばれる数値が表示される。その数値が一気に減少すると同時に、男の顔が無精ひげの一本一本まではつきりと見える位置まで来て、胸の奥に渦巻く嫌悪感を剣に載せた。

はばきの音がチン、と鳴って、抜刀と同時に、男の胸倉めがけて横薙ぎに剣を振る。やはり剣の方が、バヨネットより手に馴染みやすい。しかし、それでも刃に手ごたえは感じなかった。男は、すつと剣を引き、その屈強な体軀に似合わぬ速さで、アルサスの剣をかわす。

「俺が下らない人間かどうか、分からんとはな！」

「分かるさ。お前の顔を見ていたら、胸がムカムカするんだよっ！」
もう一度床を蹴ったアルサスは、雷のような速さで、男の懷に飛び込んだ。一度振り下ろした剣を再び振り上げる。寸でのところで、その剣はアスカロンによって受け止められる。両者の剣は互いに火花を散らした。だが、それまで余裕を見せていた男の顔に、幾ばくかの驚きが浮かぶ。

「迅雷の剣技……、なぜ、ダイムガルドの兵隊が!？」

吐き捨てるように言うと、男は力任せにアルサスを蹴り飛ばす。筋力では、明らかに劣るアルサスの体は、大きく跳ね飛ばされて床に叩きつけられる。どんもりうつアルサスに、危険を知らせるエラーメッセージが、バイザー裏の画面に次々と映し出された。

『コード66、エラーメッセージ消去!』

耳あてのスピーカからセシリアの声が聞こえると、画面を埋め尽くすエラーメッセージが消去され、代わりにウルガンの間の天井が映し出される。強く背中を打ったことで、一時的に呼吸困難になりかけたアルサスは、顔をしかめながら、駆け寄ってくるセシリアとジャックの足音を聞いた。

『一人で突っ込むなんて、無茶な事を!』

セシリアの叱咤が飛んでくる。ジャックに助け起こされたアルサスは、少しばかりバツの悪そうな顔をして、苦笑いをする。もつとも、バイザーの所為でセシリアたちには見えないが。

「あいつ、ものすごく強い……何者なんだろう?」

アルサスは視線を眼前の黒い鎧の男に合わせながら、ジャックに尋ねた。無論、答えを期待したわけではない。ところが、思いがけずセシリアが口を開いた。彼女は真っ直ぐバヨネットの銃口を敵に向けたまま、

『知ってる……。いや、むしろ裏ギルドでその名を知らないものはいない。黒衣の騎士団団長、ギャレット・ガルシアだ。数ヶ月前に手下どもを残して姿を消した、と聞いていたが、こんなところで出会うとは、思ってもみなかった』

と神妙な声で言う。

「ほう、これは光栄なことだ、俺の名を知っているとは。俺も随分有名人になったもんだ」

返す黒い鎧の男……ギャレット・ガルシアは、からからと笑った。そして、背中に差した剣のうちの一本を引き抜き、双剣の構えを取る。引き抜かれた剣は、細剣レイピアに近い形状であるが、剣身奇妙に波打っている。さも、蛇が蛇行するかのような姿だ。その剣の名は「ナズ」と言った。

「老いぼれの魔物を仕留める前に、貴様たちから殺してやろう」
ギャレットはアスカロンとナズをバツテンに交差させると、その隙間からアルサスたちをにらみつけた。

『こっちは三人だ！ 一人で勝てると思うなよっ！！』

ジャックの声がスピーカからアルサスの耳に届いた瞬間、ジャックはすでに走り出していた。小脇にバヨネットを構え、その引き金を引く。セオリー通りに、間合いは詰めず、バヨネットの最大の利点である射程距離を稼ぐ。

だが、驚いたことに、ギャレットはまるで華麗な剣舞でも踊るかのように、両手の剣を舞わせて、次々とパイルを叩き落していく。

「銃口の向きを見れば、この程度、恐るるに値しねえ！」

『ジャック！ 無駄なパイルを撃つな！ アルサスを援護するんだ
！！』

セシリアの怒号を耳にしたジャックは攻撃の手を緩める。その瞬間、ジャックの目の前にギャレットが迫ってきた。センチ・レーバン王国騎士団伝統の迅雷の剣技である。彼もかつて十年前、センチ・レーバン騎士団の一翼を担った。しかし、ほとんど軍人と呼ぶには、規範に従わないはみ出し者の部隊であったものの、彼の体には、その剣技が染み付いているのだ。

『くっ！ うわあっ！』

もう一度バヨネットの引き金を引く余裕などなかった。ジャックは両側から首を斬り裂こうとする、二本の剣にうろたえた。

「やらせるかあっ!!」

唐突にアルサスの声が頭上から降ってくる。ふっ、と見上げればアルサスが天井ギリギリの高さまで跳躍し、落下の勢いに任せて、剣を振り下ろし、突撃してくるのではないか。ギャレットは咄嗟に、ナズをアルサスめがけて投げ飛ばした。

落下するアルサスに、その気転ともいう攻撃をよける術はなかった。幸いにもダイムガルド軍の金色の甲冑は硬度が高い。ナズがどれほどの名剣であったとしても、咄嗟の攻撃にそれほどの威力はなかった。だが、投げつけられたナズを打ち払うことで、アルサスは失速してしまう。

「しゃらくせえっ!」

ギャレットはその隙を見逃さない。大きくアスカロンを振りかざすと、一気にジャックの腹に剣先を突き立てる。と、あと数瞬で届くはずの刃が、あらぬ方向から飛んできたパイルによって阻まれた。みれば、跳躍して飛び込んでくるアルサスに気をとられている内に、セシリアがギャレットの背後に廻っていた。しかも、ギャレットが攻撃を避けることまで予測して、射線にジャックが入らないような位置取りからの、射撃である。

「小娘と侮ったかっ!」

舌打ちとともに、ギャレットは後ろに飛びのいた。間断なく、ジャックもパイルを撃ち、ギャレットは二方向からのパイル攻撃に晒されることとなった。

すかさず、もう一本の剣、ダーインスレイヴを引き抜く。黒い剣身のまがまがしさは、三本のうち、もっともギャレットに似合っているように見える。

『ジャック、アルサス、集まれっ!』

セシリアは牽制の攻撃を加えながら、アルサスとジャックに集合を促した。そして、バイザーの外に声が漏れないように、小声で囁く。

『いいか、二人とも。わたしとジャックで同時攻撃を仕掛ける。ア

ルサスはもう一度、飛んでやつの背後に廻れ。あとは、わたしたちと三方向から、近接で一氣にやつを仕留める！」

『ですが、そんなことしたら、こいつにもパイルが当たるかもしれないえっス！』

ジャックはアルサスを指さした。セシリアとジャックが正面から射撃すれば、背後に廻ったアルサスが流れ弾の餌食になってしまいかもしれない。そういう懸念をジャックは指して言ったのだ。しかし、セシリアの小さく笑う声が、スピーカから聞こえてくる。

『当てないようにする。そのために、射撃訓練をしてきたんだろう？ それに、アルサスなら、うまくかわしてくれる。仲間を信じるんだ』

『そんな無茶な！』

「信じてくれよ、ジャック。ぼくも、君を信じるよ。仲間だろ？」

アルサスは、悲鳴を上げるジャックの肩をぼんぼん、と軽く叩くと一氣に駆け出した。それにあわせて、セシリアとジャックが同時攻撃を開始する。交差するように、幾重にもパイルがギャレットに迫った。その、ゼロコンマ一秒。不意に、ギャレットの周りの空気が濃くなったことに気づいたのは、ウルガンただ一人だった。

「まずい、フォトンの力だ！ いかん、人の子らよ！」

ウルガンの叫びも空しく、アルサスはすでに床を蹴り上げて、空中に飛翔する。次いで、セシリアたちも射撃体勢のまま、ギャレットとの間合いを詰めていく。

と、ギャレットの体が陽炎のように揺らめいた。その揺らめきが右手から、アスカロンの先へと集まる。

「ぬおりゃあっ！！」

腹の底から、まるで獣の雄たけびのような声を上げると、ギャレットが下薙ぎにアスカロンを振り上げた。すると、剣に集まった陽炎が剣圧に変わる。それは、巨大なカマイタチとなり、床のタイルをめくれ上がらせながら、アルサスたちの目の前に迫った。

しまった！ そう思うまでに、それほど長い時間は必要なかった。

アスカロンの剣圧は跳躍するアルサスを、駆け抜けるセシリアたちを吹き飛ばし、壁や床にその体を叩きつけさせた。

そして、剣圧はそのまま彼らの背後に鎮座する、ウルガンの巨大な体を切り裂いて消滅した。弾け飛ぶような音がして、ウルガンの肩口から胸にかけてばっさりと斬られる。あふれ出した赤い血液が、床を汚し、ウルガンは悲鳴を上げた。

「くそっ……！」

エラーメッセージが視界を塞ぐ中、アルサスは全身を駆け巡る痛みをこらえながら立ち上がった。傍らでは、セシリアが、そのすぐ傍でジャックが、同じように立ち上がる。

『いまの、技は……？』

かすれた声でジャックが言った。分からない、とアルサスは首を左右に振る。

「皆殺しにしてくれる！ 死ね、ウルガンっ！！」

ギャレットの声が響き渡り、再び彼の周りの空気が濃密となり、陽炎を纏った。と、その時である、傷ついたウルガンがのそりと立ち上がった。肩口から血を流し、それがぼたりぼたりと、まるで滝のように床に落ちていく。しかし、痛みに顔をしかめることもなく、怖いとさえ思った顔にわずかな優しさを宿らせたウルガンは、双眸でアルサスたちの事を見つめた。

「約束の日は近い。世界が生まれ変わるか、それとも今ある世界を守りぬげるか、そなたたち次第だ。行け、人の子よ！」

ウルガンは叫ぶと、視線をギャレットの方に向けた。そして、大きく牙の覗く口を開け、なにごとか魔法の言葉を口ずさむと、彼の喉元から、業火があふれ出した。それは、冒険活劇の絵本に出てくる「ドラゴン」が火を噴く様に酷似していた。

ウルガンの吐き出した炎の魔法は、みるみるうちに部屋中を火の海に変えた。

『いまだ、撤退するっ！』

セシリアがアルサスの腕を引っ張った。

「でも、ウルガンが!!」

『わたしたちのために、ウルガンさまは退路を開いてくれたんだ。わたしたちは、この黄金の鍵を帝都に持ち帰らなければならない! 行こう、アルサスっ!!』

セシリアの言葉が正しいと分かっているアルサスは、後ろ髪引かれる思いのなか、今一度ウルガンの方を振り返った。ギャレットの姿は見当たらない。炎に包まれたか、それとも逃げたか……。ただ、バイザー裏で、気温の上昇を知らせるメッセージが、アルサスの視界を遮ぎる瞬間、アルサスは静かに永遠の眠りに就こうとする、ウルガンの姿を確かに見届けた。

84. 魔物の使命（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せ下さい。

85. センテ・レーバンの使者

時計の音だけが鳴り響き、沈黙の中でエイブラムスは、小さな紙切れを何度も読み返しては、難しい顔をした。紙切れには、タイプライターによる文字で「発、近衛騎士団第二十八歩兵連隊所属第五哨戒小隊長、セシリア・ライン大尉 宛、帝都大本営陸軍軍令部」の前置きに始まり、緊急エーアデ通信によって送られてきた、手短な報告が箇条書きにて記されていた。その驚くべき内容に、エイブラムスの執務室は沈黙に包まれたのだ。

「これが事実とすれば、忌^ゆ忌^ゆしき事態です。センテ・レーバン側への抗議も含めると、外務大臣も忙しくなりましょう」

と、言うのはエーアデ通信の電報を届けた、セシリア・ラインの直属の上司に当たる、近衛騎士団第二十八歩兵連隊の連隊長兼、帝都軍大隊長を務めるアルフレッド・ノース大佐である。ダイムガルドは国土のほとんどが砂漠であるため、実際に視たことはないが、熊のような屈強な軍人体型をしたアルフレッドの口から、政治的な話題が漏れてくるとは、思いもよらず、エイブラムスは苦笑をこらえた。

執務室内には、エイブラムスとアルフレッドの二人だけであり、秘書の姿はない。そのためか、異様にむさくるしく思いながらも、エイブラムスはちらりと視線だけアルフレッドに向けると、苦言を呈した。

「外務のことまで、陸軍省が口出しすることは出来ん。その先を決めるのは、外相の務めだ。そもそも、黒衣の騎士団ギャレット・ガルシアは、センテ・レーバンでもお尋ね者になっていると聞いている。一概に事を起こしたのが、センテ・レーバンの仕業などと早計過ぎると思わんか？」

「あ、いや、失礼しました」

「しかし……、ウルガンどのが死んだとなれば、我が軍は百万の軍

勢を失ったにも等しい。如何にこの事態に対処をつけるか。アストレアの天使とやらと戦争をすると陛下がお決めになった以上、それに従うは軍人の務めとは言え、不安は拭い去れないな」

ふうっ、と溜息を付くと、電報の紙切れをデスクに放り投げたエイブラムスは、自らの禿頭を撫でた。

「いずれ、世界は一度滅び、新たな世界に生まれ変わる。ウルガンどのの予言は当たっていた。そのことを、大臣連中の中には、いまだに信じていないものもおります。セシリア大尉が、ウルガンとのに授かったと言う黄金鍵、それが我が国の意識統一に一役買ってくればよいのですが」

アルフレッドは、エイブラムスが放り投げた電報の紙切れに眼を落とした。几帳面な文体はセシリアらしいと言えばセシリアらしい。「しかしな、その黄金の鍵とやらは、ルートニアにある遺跡を開くための鍵だそうじゃないか。ルートニアは知っての通り、センチ・レーバンの要塞。しかも、王国騎士団はガルナックでの敗退を受けて、ルートニアに政府機能と本拠を移設した

「事実上の遷都ですな」

「その通りだ。そんな場所へ、密偵を放てば済む、という問題ではない」

「それなんらば、いっそのこと、ルートニアを奪うというのはいかがでしょう？ センテ・レーバン軍の弱化はいまや、眼に見えて明らかです。即位したばかりの女王は意識不明のまま、諸侯は悉く離反し、ガルナックの戦いで戦死した騎士団長の後を継いだ新規師団長はまだ十九の若造だという話。国として、軍としてのの体さえなしでない。鉄機騎士団を用いるまでもありません。一軍さえあれば容易にルートニアを陥落せしめることでしょう」

柄にもなく力説する、アルフレッド。その言い分は分からなくもない。陸軍情報局の諜報員がかき集める情報の信憑性は非常に高い。軍部改革の第一段階として、エイブラムスが力を入れたのもその点である。センチ・レーバンやガモーフのような騎士団による忠義を

重んじる軍を旧式とよぶなら、完全な縦割り社会と装備のみならずその軍務形式の機械化を持ち込んだダイムガルドの軍隊は新式と呼べるだろう。その骨格といえるのが機械的に情報を諜報し統合化する組織、情報局である。

「ようやく、軍備拡張の予算が下りたからと言って、それはちと野蠻すぎるそれに、ルートニアはガルナツクに並ぶ要塞拠点。やすやすとは落とせまい。あの翼の生えた化物どもと戦う前に、戦線を多方面に展開できんことくらい、軍略に乏しい貴様でも、分かることだろう？」

「一般論を示したまでです。不愉快な思いをされたなら、申し訳ありません」

「一般論だと？」

「兵の中には、今ならセンチ・レーバンを落とすことも容易だとする意見が跋扈（はくご）しております」

実務に近い大隊長ならでわのアンテナである。陸軍大臣である大将格であるエイブラムスには、そうした末端の声は聞こえてこない。どちらかと言えば、軍務よりも政務に近い場所にいるため仕方がないことではある。しかし……。

「それでは、モーガンたち教導団と変わらんではないか。もうじき『飛航鯨』の三番艦が就役する。これで八年越しの構想も実現するが、その矛先を向けるべきは、センチ・レーバンではない。そのことを、十分に弁えてもらわねば、この戦を制することは難しい」

エイブラムスはその言うのと、席を立った。そして、そのまま踵を返すと、アルフレッドに背中を向けて、窓辺から見える帝都の景色に眼を向けた。 magari なりにも美しいとはいいがたい、キューポラの立ち並ぶ街並み。兵工廠や軍需工場からもくもくと上がる煙は、今もパイル・バレットを製造が日夜急ピッチで行われていることを示している。その度に、ダイムガルドの空気は少しずつ汚れていく。十年前はもっと澄み切った、砂漠のオアシスとも呼ぶべき街だったが、今はその影もない。ウルガンから手に入れた、神々の時代の技

術による、急激な発展のその先にあったものは、他の二国を凌駕する軍事力による、抑止力である。そのすべては十年前のヨルンの悲劇から始まった。

当時中将であったエイブラムスは、前線ではなく、この王都にある参謀本部から指示を行う立場であった。しかし、あつという間に、全軍の三十パーセント以上の兵隊を失ったことは、驚愕に値した。同時に、あの戦いを生き延びたものたちには少なからず、トラウマを植えつけたのである。

「この世界は、十年前、時計の針を止めてしまった。あのトラウマに戦々恐々として。世界が飢饉や異常気象に包まれたのは、もしかすると、人間がトラウマを抱え続けていたためかもしれない。些細な困難が、何倍にも感じられ、恐れ戦く。それはやがて、恨みつらみになっていき、相手を嫉む……。我が国も、そうやって、ここまですべてしてきたことは否定したくはないが、そうした嫉みが世界を狂わせて行っているのではないだろうか」

背後で、アルフレッドがぼかんとしているのが、気配だけで分かる。

「私は軍人だが、戦争屋ではない。だから、陛下の平和を愛するお気持ちには、よく分かる。だが、このまま世界が誰かの都合のいい世界に作り変えられるために、滅びを向かえるというのなら、軍人としてそれを止めるために、戦争をしなければならぬ。陛下にもよくよくそのことが分かっていたただけだろうだ。もつとも……それは、あのセンチ・レーバン人の少年に因るところが大きいようだ」

「センチ・レーバン人というと、セシリア隊に編入させた、記憶喪失のアルサス・テイルのことでしょうか？」

「そうだ。オスカー・ラインどのの娘子ともども、立派に働いてくれているようではないか。それだけで、信用に値するとは思っていないが、少なくとも、ルートニアに向かうキーマンであることだけは確かだ」

「すべては、セシリア隊とデイビット隊が黄金の鍵を持ち帰ってか

ら、と言うことですか、エイブラムス大將？」

読みがいいな、そんな風にちらりとアルフレッドに視線を向けたエイブラムスは、静かに頷いた。その静を打ち破るかのように、パタパタとヒールの音が廊下から鳴り響く。やがてその足音は、エイブラムスの執務室の前で立ち止まると、ノックもそこそこに扉を開けた。

現れたのは、エイブラムス付きの女性秘書、ミリー・ヤードである。いつも、冷静沈着にエイブラムスをサポートするこの美女に似合わない、血相を抱えた顔をしていた。

「お取り込み中、失礼します。エイブラムス閣下！」

ミリーはエイブラムスの傍まで駆け寄ると、つま先立ちをして、エイブラムスの耳元で囁いた。

「先ほど、センチ・レーバン王国からの使者が帝都に到着したとの知らせを受けました。ただその使者と言うのが……」

わずかな化粧の匂いと共に、妙に歯切れが悪くなる。エイブラムスが「何だ？」と問いかけると、ミリーは、

「ダイムガルド人なんです」

と、さらに声を潜めて言った。センチ・レーバンからダイムガルドへの使者が、ダイムガルド人？ それはまたおかしい話だ。エイブラムスは、秘書の言葉を疑った。しかし、ミリーは続けて、

「その使者は、元近衛騎士団員だった『フランチェスカ・ハイト』と、名乗っています」

と、さらに驚愕を伝えた。

ダスカード遺跡で、魔物はドラグノ族のハイ・エンシェントであったウルガンから、黄金の鍵を授かったという、セシリア・ライン率いる哨戒隊が戻ってくるのは明日のことである。それを待たずして、まさか、センチ・レーバン側からの使者が訪れるとは思っても見なかった、大臣たちは、大いに慌てふためいた。一体何のために、センチ・レーバンは使者など送りつけてきたのか。その真意は分か

らない。

ダイムガルドとして取るべき行動は二つ。一つは、使者とさえども敵国側に与する人間。捕らえて牢獄に放り込むか国外に退去させる。あまりに乱暴なやり方ではあるが、ほとんど鎖国状態であるこの国にとって、最大の敵である国の使者とまともに取り合うというものいかなものか。無論、もう一つは、即ち、きちんと使者として迎え入れ、然るべき手続きを踏む、ということである。この場合、使者の言い分を受け入れるか否かは別としても、皇帝自らが謁見を許可する必要があった。

現皇帝であるアイシャが取った行動は、後者である。センテ・レバンからの使者がやって来た、という知らせをアイシャが受けたのは、ちょうど、大臣たちに任せきりだった政務の勉強をしている最中、ふと窓の外にアルサスは今頃どうしているだろうか、と思いつかべていたときだった。アイシャは直ちに、緊急の御前会議を開いた。

そこで、エイブラムスから、アルサスたちがウルガンより「黄金の鍵」を授かったことや、そのウルガンが、ギャレット何某^{なにがし}というメツツエに与する騎士に殺されたことを知った。

居並ぶ大臣たちは、エイブラムスを目の敵にする財務大臣を筆頭に、使者を追い返せ、という意見に終始したが、アイシャは皇帝としての権威をここぞとばかりにかざし、それらの意見をねじ伏せ、謁見を許可した。

「話は聞いてみなければ分からない」

きつと、アルサスならそう言ってくれるに違いない、とアイシャは思ったのだ。一度、「これは皇帝の決定じゃ！」と強い口調で言えば、さしもの財務大臣も口をつむぐほかなかった。それほどまでに、皇帝陛下というのは権力があり、同時に忠誠に伴う責任がある立場だということを改めて感じた。

謁見は会議室ではなく、謁見の間で執り行われることとなった。おなじ皇居にあるのだが、積極外交を取り止めて以降、つまりアイ

シャが父の跡を継いで以降、そのへやはほこりを被っていた。使者を迎えるためには粗相をするわけにはいかないと、急ぎ掃除をさせ、本来は顔を見せてはならないというしきたりのため、謁見の間にも御簾が掲げられているのだが、それをアイシャの意向で取り外させた。

そうして、すべての準備が整う。謁見の間の中央には、赤いカーペットが敷かれ、部屋の奥に据えられた玉座にアイシャが座る。そして、警護の近衛騎士が部屋の中に配置され、カーペットの両脇には、エイブラムスたち各大臣が整列し、センチ・レーバンからの使者を迎えた。

「センチ・レーバン王国御使者さまの到着にございます！」

侍女の声とともに、謁見の間にセンチ・レーバンからの使者が姿を現す。使者の数は三人。伝統に則って、使者団の団長は、それを示す「シュレーフ」という藍染の襷たすきを掛ける決まりになっている。その団長の顔をみて、アイシャは思わず、「あっ！」と声を立てそうになってしまった。

使者の随行員二人は、色の白いセンチ・レーバン人だとひと目で分かるような顔だが、団長の女は、明らかにセンチ・レーバン人ではない。

ポニーテールに結われた髪は艶やかな黒髪、肌は日に焼け褐色、背は高く、それでいて、体の内側から美貌が溢れるような美女。誰が見ても、それはダイムガルド人の女であった。

さらに奇妙なことは、彼女が身に纏っているのは、センチ・レーバンの衣装でも甲冑でもなく、ギルド・リッターの白銀の鎧だ。

アイシャの傍で整列する大臣たちは、一様に「わけが分からない」と顔をしかめて、どよめいた。そのどよめきを打ち払ったのは、エイブラムスの咳払いである。

「御使者どの！ 皇帝陛下の御前であるぞ！ 頭が高いっ！！」
すると、使者の女はアイシャの前で、すばやく片膝を付きかしこまる。

「センテ・レーバン国王の名代として、王国騎士団長代理クロウ・ヴェイルより、書状をお届けに参りました」

丁寧だが、凜と張った声音は、よく通る声は、謁見の間中に広がった。アイシャは居住まいを正し、その女に負けじと声を張り上げる。

「わらわが、ダイムガルド皇帝、アイシャ・マイト・ダイムガルドじゃ！ ルートニアからの長旅、ご苦労であった。そちの名は何と申されるか？」

「はっ、皇帝陛下。お会いできて光栄でございます！ わたしは、元ダイムガルド帝国近衛騎士団員、フランチェスカ・ハイト、と申します！ 故あって、今はセンテ・レーバンに微力ながら助勢している身であります」

使者の女、フランチェスカは揺らぐことのない口調で、自らの身分をアイシャに明かした。

85. センテ・レーバンの使者（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せ下さい。

86. 書状と終末思想

「こちらが、クロウ・ヴェイルどのからの書状にございます」

フランチェスカ・ハイトに付き従って現れた、使者団の一人が魔法錠の封印が施された木箱から、一通の巻物スクロールを取り出した。巻物の封印は、魔法錠ではなく、伝統の赤い蜜蝋による封蝋である。

「お預かりします」と、侍女がそれを受け取ると、アイシャに手渡した。アイシャは固唾を吞んで見守る大臣衆の中で、巻物の封蝋を剥がした。

「包み隠さず申し上げます。現在、センテ・レーバン王国は、シオン女王陛下が昏睡されており、またガルナツクの戦いの指揮を執った第一王子フェルト殿下の生死も行方も知れず、代わって、王室に連なるストライン・イスカ・レーバン卿がその名代を務め、騎士団はクロウ・ヴェイルがまとめております」

アイシャが書状を読む間、フランチェスカは静かに、センテ・レーバンの内情を伝える。

「クロウ・ヴェイル……聞かぬ名だが、かつて我が軍を苦しめた王国騎士団の英雄ホーク・ヴェイルの関係者か？」

尋ねたのは、エイブラムスである。ヨルンの戦いで全軍の指揮を執った、ホーク・ヴェイルの名はダイムガルド軍の中でも知られている。勇猛果敢な智謀の将であり、礼を重んじる男だったホークは敵からも一目置かれる存在だったと言っているだろう。

「はい、クロウ・ヴェイルは、ホーク・ヴェイルどのの御子息。ガルナツクで戦死なされた騎士団長トライゼン・バルックどのから、カレン・ソアード、キリク・クオート両名と共に、後事を託されました。今、ルートニアでセンテ・レーバン王国が抗戦を続けられているのは、一重に彼らの努力です」

「抗戦？ 何と戦うというのだ。我が国と決戦でも交えるつもりか！？ それならばお門違いもいいところだ。諸侯に愛想尽かされた

王国など、我が国の軍隊の敵ではない！ 裏切り者の貴様と共に一ひねりにしてくれるわ！！」

いい加減痺れを切らしたのか、財務大臣が顔を真っ赤にして、怒鳴り上げる。他の大臣たちもそれに頷き、エイブラムスだけが、渋い顔をしているのをアイシャはちらりと横目に見た。大臣たちにとって、敵国センチ・レーバンの書状を持って現れた、フランチェスカと言う女は裏切り者にしか見えないのだろう。しかも、書状には宣戦布告の文言が書き連ねられているとでも思っているのかもしれない。

だが、書状にそのようなことは書かれていない。

「静まるのじゃ、皆のもの！」

アイシャは声を張り上げて、色めき立つ大臣を鎮めた。そして、書状を傍らの侍女に手渡すと、フランチェスカの顔を見つめた。

「フランチェスカどの。お尋ねしたいことがあるのじゃ。そちは、ダイムガルド人でありながら、こうしてセンチ・レーバン王国からの書状を持参した。さらに、そちの着ているのは、ギルド・リッターの鎧と見受ける。そちが『故あって』と言う事情が見えてこないのじゃ。そちは何者か？ それを教えてもらえぬなら、わらわとしても書状に書かれている内容を信用するわけには行かない」

毅然とした態度は、皇帝としての虚勢でもある。とくにフランチェスカは、アイシャのそうした態度を見抜いているだろう。それでも、皇帝陛下に平身低頭するのは、彼女が裏切り者ではなく、ダイムガルド人としての意識をきちんと持っていることの証でもあった。

フランチェスカはしばらくの間、口を嚙み、じっとアイシャの瞳を見つめた。視線と視線がぶつかり合いながら、ようやく口を開いたフランチェスカが身の上を語り始める。アイシャは静かに、それに耳を傾けた。

ダイムガルド軍の甲冑は、背中に取り付けられた箱の中にある、

魔法石の燃料によって駆動する。無論、魔力を持たないダイムガルド人が開発した、もともと魔力を帯びている魔法石が仕込まれており、それを「電源」と呼んでいる。使えば使うほど、魔法石が含有する魔力は消耗されていき、いずれ空っぽの魔法石になる。再度、魔法使いがその石に魔力を込めれば元通りになるのだが、あいにくとダイムガルド人に魔法使いがいないことは、すでに先述の通りである。

そのため行軍には、常に予備の魔法石を携帯する事を義務付けられている。幸い、魔力を帯びた魔法石は採掘されると同時に、優先的に軍に回されている。ただ、携帯できる数には限りがあるから、それでも、行軍は電源残量との勝負である。もしも電源がなくなれば、スピーカによるエーアド通信や甲冑の空調を含めて、あらゆる機能が停止し、砂漠の真ん中で、重たい甲冑を着て脱水症状になり、そのままあの世行きの切符を手にする事となる。

予定外の戦闘があった。スコルピオ、そしてギャレット・ガルシアとの交戦である。ある程度不測の事態は考慮に入れていたと言っても、その中で活躍を見せたアルサスの電源は著しく消耗しており、帝都に辿り着くのがやっとの状態だった。それでも、デイビット・ベルの小隊ともども、二度の戦闘を越えて一人の欠員も出すことなく、帝都へ戻って来れたことは、幸いと呼ぶに相応しいだろう。

セシリア隊、デイビット隊が帝都に帰還したのは、センチ・レーバンからフランチエスカが使者として来訪した、翌日のことであった。

帝都に到着したセシリアたちは、任務の疲れを癒す間もなく、ただちにウルガンから授かった「黄金の鍵」の受け渡しと報告のために、軍令部に上った。そこで、アルフレッドから、センチ・レーバンの使者が訪れている事を聞かされたのである。

「同盟、ですか？」

アルサスがセシリアの隣で、驚きを代弁してくれる。

「うむ、俺は直接謁見の間に入れてもらえる身分じゃねえからな、

エイブラムス大将に聞いた話だ。センチ・レーバンが使者を寄越して、同盟の締結を求めてきやがった。なんでも、センチ・レーバンから使者が来るのは五十年ぶりとか何とかで、大臣連中は大慌て。今も、御前会議の真っ最中だろうよ。もつとも、事の真偽は別としても、もしも同盟締結となりゃ、お前たちから預かった、この黄金の鍵を開けるチャンスが巡ってくるってわけだ」

アルフレッドはそう言う、飾りの付いた箱に丁重に収められた、黄金の鍵を見やった。たしかに、同盟が締結されれば、ダイムガルド、センチ・レーバン両国の共有のものとして、ルートニアにあると言う、神の時代の遺跡を開くことが出来る。ウルガンの言うことが正しいのであれば、そこには、アストレアの天使にかかわる何か眠っており、それを得ることはこの先の戦いに大いなる影響をもたらすに違いない。

しかし、そうは一筋縄には行かない。

「この期に及んで敵国と同盟を結ぶなど、ありえません！　ただちに、そんな使者など追い返せばよいのですっ！　センチ・レーバン人など信用に足りません！」

相手が大隊長であることも気に留めず、憤慨を口から吐き出したジャックに、アルフレッドは思わず苦笑いする。

「そのセンチ・レーバン人が隣にいるというのに、よくそんなことが言えるな、ジャック軍曹」

とアルフレッドに言われて、ジャックは口ごもってしまった。ジャックの隣では、アルサスが笑う。

「こいつはいいんすよ。どうせ記憶がないんすから」

「そういう問題じゃねえだろう。まあ、それは置いておくとしても、問題はウルガンどのの命を奪った、ギャレット・ガルシアだ。元センチ・レーバン騎士団の最右翼だった黒の部隊の指揮官らしいが、ヨルンの戦い以降、裏ギルドに身を落として、悪逆非道の限りを尽くした大罪人だ。そんなヤツが、アストレアの天使に与したとなれば、厄介だぞ」

「ギャレット……。おそらく、ヤツは生きています」

セシリアが言う。ウルガンの吐き出した、炎の魔法に包まれ、ギャレットの消息は分らないが、それでも死んだという確証は何処にもなかった。むしろ、生きている、再び見えるときがやってくる、^{まみ}というのは、三人が三様に感じている懸念だった。

「今度会ったら、次こそはやつの首を刎ねて見せます！」

「ジャック軍曹、意気込みは買いたいだが、そういうことじゃねえ。ギャレットのような輩が、天使どもの味方をしたとなれば、これから先、アストレアの天使を敬うシンパのようなものが現れても不思議じゃねえってことだ。いわゆる、終末思想ってやつだ」

「終末思想……」

ごくりと、ジャックが唾を飲み下す音が聞こえた。

「そういうのに怯えて、自分だけでも助かりたいと願うのは、人間の常ってやつだ。天使どもに、命乞いをして、祭りたてる。そうすれば、自分は助かるかもしれない。宗教思想の根幹だな。もちろん、ギャレットは放置しておくつもりもない。ギルド連盟が躍起になって追いかける、百万ドラクマの賞金首だ。ヤツが再び、我が軍の邪魔をするなら、ダイムガルド帝国軍の誇りにかけて、やつを始末する。問題は、そうしたシンパが、ギャレットのような犯罪者ばかりとは限らない、ってことだ」

「一般の人間に、軍隊として手を下せない……」

アルサスが言うと、アルフレッドはこくりと頷いた。そして俄かに、ガハハと笑う。

「どうにもいけねえや。そういうきな臭い政治話にもつれ込んでしまふ。昨日、エイブラムス大将に釘を刺されたばかりだというのに。まあ、あれだ、何にせよ、俺たちは命令に従う軍人だ。すくなくとも、お前たちはこの鍵を持ち帰ってくれた。それなりの、お褒めの言葉もあって叱るべきだろう」

そう言うと、アルフレッドは箱の蓋を閉じた。

「俺はこれから、大将にこいつを届ける。お前たちは、各自別命あ

るまで、待機。任務の疲れを癒してくれ。卿の、酒場の払いは俺の奢りってことで、つけといってくれ。セシリア隊、任務ご苦労！」

「はっ！」

アルフレッドの敬礼に合わせて、セシリアたちも敬礼を取った。ようやく休める、という感慨よりも、自分たちが帝都を空けている間に、事態が新しい方向へと展開しつつあることに、三人の関心ごとは向けられていた。

軍病院の個室からでも、酒場のにぎわう声が聞こえてきた。どうやら、ジャックがスコルピオやウルガンの話に色をつけて仲間たちに語り、暴れているのだろうと言うことは、容易に想像が付いた。

「終末思想ですか……」

セシリアの前で、マーカス・ヒルがベッドに横たわり、そつと窓辺から見える夜空を見つめて言った。アルフレッドの執務室を後にして、寮に戻り、仮眠を取ったセシリアは、酒を飲みに行こう、というジャックの誘いを断って、軍病院に足を運んだ。マーカスの見舞いのためである。

マーカスは、セシリアにとって参謀のような存在だ。つねに先陣を切ったがるジャックとは対極的に、冷静な分析で、セシリア隊を支えてきた。その欠員を、アルサスは十分に埋めてくれているが、それでも、セシリアにとっては、戦列を外れたマーカスも小隊の一員であることに変わりがない。

「あんな翼の生えた人間を見たら、誰だってそう思うかもしれないね」

と言う、マーカスの声はやたらと掠れて、弱弱しい。「翼ある人」に大腿を貫かれてから、日増しにその生気が失われていくのだ。だが、ウルガンはそれを癒す方法はないと言った。あまりにも無常なことだと思うから、セシリアはそのことだけは口にせず、任務の話を聞かせてやった。無論、セシリアたちが黄金の鍵を手に入れたことや、ウルガンが死んだことは、軍機に触れる。

軍人の一人とは言え、戦列を離れた傷病者であるマーカスにそれを語って聞かせることは出来なかったのだが。

「それにしても、隊長。随分と、アルサスのことを買っているんですね」

小さく笑ってマーカスが言う。本人は気づいていなかったが、スコルピオとの戦いの最中、アルサスが活躍した事をセシリアは、随分と熱っぽく語っていた。

「そ、そんなことは、ないっ！」

「無理しなくてもいいですよ。僕も、彼には見込みがあると思います。彼なら終末思想のようなことは思い描かない。きっと最後まで抗ってくれるはずです」

「なんだ、マーカスこそ、アルサスを買っているんだな」

「さあ、何故だか分かりませんが、彼の赤い瞳を見たとき、そう思ったんです。ダスカードへの出発の前日、見舞いに来てくれましたよ。彼は、きっと記憶を取り戻しても、民族とか国境という垣根を越えられる人だと思います。あとは……隊長がそれを支えてあげてください」

「わたしが……」

「ええ。そういえば、ジャックとアルサスは上手くやっているんですか？ ジャックはどちらかといえば、保守的なダイムガルド人です」

「それなら、心配は要らない、今もジャックに無理矢理酒場へ連れて行かれているはずだ。あれで、ジャックは面倒見のいいところもある。誤解が解ければ、あの二人は上手くやると思う」

セシリアはそう言うのと、ベッド脇に据えた背もたれの無い丸椅子から立ち上がった。

「また、見舞いに来るよ。マーカス、早く良くなってくれ」

と口にしつつも、本当はマーカスが死を待っただけの身の上だという事をセシリアは知っている。なるべく、嘘をつかないように、十七年間の人生を生きてきた。それは、養父であるオスカー・ライ

ンの教えでもあり、忠実にそれを守ってきたのだが、マークスに本当の事を告げる気にはなれなかった。

踵を返し、病室を後にする。セシリアが入り口のドアに手をかけた時だった、不意にマークスの声が、セシリアの背中を叩いた。

「隊長。隊長は死なないで、帰ってきてくださいよ。僕、ここで待ってますから」

マークスから掛けられたその言葉に、セシリアは振り返ることも、返事を返すこともなく、ただ押し黙って、友の死を受け入れなければならぬという現実を改めて再確認した。そして、涙をこらえ、病室から離れた。

86. 書状と終末思想（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せ下さい。

87. アイシャのお茶会

窓ガラスから差し込む朝日は、部屋の中を光で満たしていく。朝日を受ける調度類は、テーブルも椅子もカーテンも、隅に置かれた壺さえも、すべて高級な品々ばかりだが、下品さはなく、厳かで優雅なものばかりだ。フランチエスカ・ハイトは、そんな部屋の中をぐるりと見渡して、ふとセンチ・レーバン王城の景色を思い出した。あそこも、様々な調度が置かれ、城としての威風を見せ付けていた。しかし、センチ・レーバンのそれは、もう少し質素で、比較してみれば地味な印象をうける。

「こういった皇室の家財は、いずれ国費補填のために、売りさばくべきじゃと思う。それで、国民の暮らし向きが少しでも豊かになるなら、わらわはそれで構わないと思うておるのじゃが、中には先々代、もっと前から受け継がれてきた宝物も存在する。わらわの一存だけで売り払うことが出来んのは、忸怩^{じくじ}たる想いじゃ」

テーブルの向かいに座るアイシャはやや苦笑をフランチエスカに向けた。テーブルの上には、こぼこぼと音を立てるティーポットが、なにやらガラス製の不思議な機器に取り付けられていた。それは、お茶を蒸留するための装置で、ティーポットの底面と接触する部分には、カーマインの魔法石が設置されている。そして、ティーポットで湧かされた茶が長い管からティーカップへと注がれるのだ。それは、ダイムガルド伝統のお茶の飲み方で、「蒸留茶^{リーツァ}」と呼ばれている。

フランチエスカは、蒸留されたお茶がティーカップに注がれるのを見つめながら、驚いていた。無論、リーツァのことは良く知っている。そんなことに驚いているのではなく、アイシャが茶席に招待してくれた事を、である。しかも、部屋には侍女以外の人はおらず、彼女たちのことを無視すれば、そこには、ダイムガルド皇帝陛下と二人きりという状況なのだ。

フランチェスカは、ダイムガルド人である。生まれは帝都ではないが、ダイムガルド人共通の認識として、皇帝陛下は神聖な存在で、臣民はその顔を拝謁することすら許されないものだと思っていた。ところが、皇帝陛下は、十五、六歳という歳相応の屈託のない笑顔を浮かべて、フランチェスカのためにお茶を淹れてくれる。皇帝陛下が少女であったということの驚きよりも、むしろそのことの方が信じられない気持ちであった。

「陛下は、物欲がありませんね？」

皇帝直々に茶を淹れてくれるなどと、一生に一度あるかないかのような誉れ高いことだ。せめて、緊張のあまり会話が途切れないようにと、フランチェスカが口にする、アイシャは「そんなことはない」と言った。

「わらわにも物欲はあるのじゃ。世界中の本を読みたい。ありとあらゆる本を。わらわにとっては、本こそ財産だと思うのじゃ。

このような、美しい調度などよりも」

「さすがは、皇帝陛下です」

「お世辞など言わずともよいのじゃ。そちは、わらわよりもずっと年上。そのようにかしこまられては、わらわの方が困ってしまう」

アイシャは、何気なくそう言うものの、自分の立場が如何にダイムガルド人に畏怖の念を持たれている立場かを理解していないような発言だった。その辺りが、少しばかり世間ズレしていると言えなくもないだろう。

「フランチェスカどのは、ギルド・リッターとして世界中を飛び回られておったのじゃろ？　ここに閉じ込められているわらわにとっては、羨ましい限りじゃ」

「陛下は、そういうお立場に居られるからです」

と、フランチェスカが真つ当な事を言うと、アイシャの顔は少しだけ曇る。

「侍女たちと同じ事を言うのじゃな……。しかし、それは正しいと思うのじゃ。わらわは、皇帝。兄上が守ろうとしたこの国の王なの

じゃ。その責任は重い」

アイシャの兄、ライベル親王のことはフランチェスカも知っている。もちろん、ライベル親王も雲上人に変わりはないのだが、それでも皇位継承者ではない親王ならば、ちらりとそのお姿を拝見したことがある。アイシャとは随分歳の離れた兄である。それもそのはず、ライベルは前皇帝の二番目の妻の子であり、先に生まれたにもかかわらず、皇室典範に則って、皇位継承権が正妻の娘であるアイシャよりも下であった。そのライベル親王はいずれ妹が継ぐであろう国を守るため、十年前のヨルンで、白き龍によってその命を落とした。

思えば、アイシャとライベルの関係は、シオンとフェルトの関係に酷似している。少しばかり違うのは、フェルトの母親は正式な妻ではなく、フェルトは半ば私生児だったということだ。ただ、兄が妹を想う気持ちは、ライベルとフェルトに差などないように感じられた。そのことは、アイシャも感じているようで、

「フランチェスカどの、お尋ねしたいのじゃが、フェルト殿下とはどのようなお人なのじゃ？ フェルト殿下と友であったという、そちらならばよく知っているのじゃろ？」

と、まるで兄の姿を探すかのように、フランチェスカに問いかけた。

「虚勢を張った、馬鹿な子です。無理に強がって時に無鉄砲だったり、そのくせ弱い部分を隠しながら迷ったり挫けたり。でも、身分や人種にとらわれない広い心を持っています。その心根はとても真っ直ぐで、人の心を信じています。それが、彼の優しさでした」

「シオン国王は未だ目覚めぬまま、フェルト殿下はガルナツクの戦いで行方不明となった」

「はい。だから、せめて共に旅をした仲間として、フェルト王子のためにこの動乱に決着をつけたいのです。それに、銀の乙女もわたしにとっては、旅の仲間なのです。二人の旅の仲間たちがこの戦いに関わっているというのに、それを見捨ててしまうことは出来ない。

それが、わたしがセンテ・レーバンの使者として帝都を訪れた理由です」

「ふむ。その気持ちは、変わることはないのかの？」

アイシャが最後の質問とばかりに尋ねると、フランチェスカはこくりと頷いた。アイシャは「そうか」と返すと、なみなみと琥珀色の茶が注がれたティーカップを自らフランチェスカの前に運んだ。召し上がれ、と言われるがままに、フランチェスカは茶を口に運ぶ。良い葉を使っているらしく、香ばしさと甘さが口の中にふんわりと広がった。

「しかし、陛下はフェルト王子のことをお聞きになりたくて、わたしをここへお呼びになったのでしょうか？」

茶の余韻を楽しみたいところだが、核心を問いかけずにはいられない。わざわざ、茶会に招待した理由が、他国の王子がどんな人間かを問うためではないはずだ。

「察しが良いの」

アイシャは、ティーカップに口をつけると、ちらりと侍女に目配せをした。すかさず、侍女がフランチェスカの元に歩み寄り、一通の巻物を差し出した。それは、フランチェスカが持参した、クロウ・ヴェイルの書状ではなく、ダイムガルド帝国の封蠟がつけられた、アイシャの書簡だった。

「これは……」

「大臣のなかには、そちを信用できぬと申している輩も居る。彼らからしてみれば、ダイムガルド人であるのに、敵国センテ・レーバンの味方をする裏切り者だと映っているのだろう。じゃが、わらわはそちを信じたいと思うのじゃ。仲間のために、何かしたい。絵本で読んだ冒険のお話の主人公も同じ事を言っていた。仲間という言葉に、国家だとか民族と言った垣根は存在しない」

ティーカップから立ち上る湯気が、ふわりと揺れる。それは、アイシャが少しばかり微笑んだからだ。アイシャは大きく息を吸い込むと、凜と張った皇帝陛下の声で言った。

「ダイムガルド帝国は、センテ・レーバン王国と無期限の同盟を交わす。共に結束して、アストレアの天使と戦うのじゃ。人を無償で信じる心、それこそがやつらに対抗しうる、最大の武器じゃと思う」

フランチェスカの手元にある、その書状は他ならぬ、ダイムガルド皇帝直筆の書状であり、同盟締結の約定を記したものである。

ダイムガルドとセンテ・レーバンが同盟を結べば、それは歴史的なこととなるだろう。ヨルンの戦いの際にもそうであったように、両国は一度も手を取り合ったことがないのだ。それが、アストレアの天使、という共通の敵を前に手を取り合うことになるとは、奇跡と言っても過言ではなかった。

「外交交渉役として、我が国からはマクギネス・ハット外務参事官を派遣する。そちには、その書状とマクギネス参事官をストライン・イスカ・レーバン閣下の下に、無事送り届けて欲しいのじゃ」

「はっ！　かしこまりました！」

アイシャの命に、フランチェスカもクロウから外交を預かった使者の顔になる。軍属にいたころにも、ギルド・リッターとして活躍していた頃にも、感じられなかったほどの重責ではあるが、そもそもそれを気負うような人間ではない。これで道が開けるなら、クロウたちも喜ぶだろうという期待の方が大きかった。

「それと……」

と、唐突にアイシャが声を潜め、手招きをする。まるで、侍女たちには聞かれない話でもあるかのような仕草だった。フランチェスカはテーブルに身を乗り出して耳元をアイシャに近づける。アイシャもテーブルに身を乗り出し、部屋の隅に控える侍女の事を気にしながら、ごによごによと何事かを囁いた。

「へ、陛下、それはっ！？」

思わず大きな声を上げそうになって、口を噤む。にんまりと笑う少女の顔に、フランチェスカは今聞いた事を疑わずにはいられなかった。

「本気ですか？　そのような危険なことを、わたしの一存で許すわ

けには参りません」

大人の態度で、毅然と言ったのけたが、アイシャは何処吹く風。

「これは、皇帝としてではなく、アイシャとしての頼みじゃ。ストライン閣下は、王家の中でも保守的なお方だと聞いているのじゃ。もしものの時の保険。そう考えて欲しいのじゃ」

「そんな安易な……。そもそも、お立場を」

「それはもうよい！」

フランチェスカの言葉にかぶせるように、ピシャリとアイシャが言った。しかし、まだ信じられない。いわばそれは、とんでもなく危険な行為である。しかも内緒話のように囁いたということは、アイシャの独断であり、侍女や大臣たち周囲の者たちも知らないであろう……。そんなフランチェスカの危惧などそっちのけで、アイシャは続けた。

「心配は要らんのじゃ。そのために、信頼する者を付ける。もちろん、それはマクギネス参事官の護衛、という形で」

「信頼する者？」

意味深な言い方に、フランチェスカは小首をかしげた。するとアイシャは何故だか、すこしだけ頬を染めて、

「アルサスじゃ」と言った。

その名前、それがここで飛び出してくるとは夢にも思っていなかったフランチェスカは、再び驚き、今度は侍女たちまで色めき立たせてしまうこととなった。

任務を終えたばかりだが、次の任務を任される。それだけ、セシリアが信頼されているということなのだが、アルサスとしては、正直なところ休みたいという気持ちもあった。それというのも、二日前はジャックに付き合っ、酒場で人生初の酒を飲んだ。ダイムガルドでは未成年者の飲酒は禁じられているものの、軍人だけは例外とされている。翌日、即ち昨日は人生初の二日酔いに一日中頭痛と吐き気に見舞われるという、気だるい一日があっという間に過ぎ、

ようやく酒の臭いが消えたかと思った矢先、五日間の休暇を切り上げて、新しい任務が言い渡されることとなってしまったのだ。

軍人は命令に忠実でなければならぬ。というのは、セシリアから教わったこと。せめて二日酔いに苦しんだ昨日でなくて良かった、と思うべきなのだろう。

「よって、まだ非公式であるが、ダイムガルド帝国は、センチ・レーバン王国と無期限の同盟を締結することとなった」

二日前と同じく、直属の上官であるアルフレッド・ノース大佐の執務室で、横一列に並び、アルサスたちは辞令を受けた。アルサスの右隣でセシリアはいつものように厳しい顔で、命令を聞く。かたゆ左隣ではジャックが多少気に食わないような顔をしていた。アルフレッドはそんなジャックの顔に気づき、苦笑交じりに溜息を漏らす。

「不満が顔に出てるじゃねえか、ジャック・ハイト軍曹。しかしな、何でもセンチ・レーバンからの使者はお前の遠縁にあたる女だそうじゃないか」

「だから、余計に気に食わないんすよ。しかも、親戚と言っても、父方の分家の分家、顔も見たことないっす。だけど、ハイト家は代々軍人の一族っす。みな、軍曹止まりではありますが、それでも帝国陸軍の一人としての自負があるっす。それなのに、ハイトの一族から裏切り者が出たとなると、不満にも思いますよ」

「そう言うな、ジャック軍曹。同盟を結ぶとなれば、かの国は敵国ではなくなる。それに、目下俺たちには戦うべき相手がいるじゃねえか」

「わかってるっす。軍人は命令に従うまで」

ぴっと手のひらをのぼし、肘を曲げ敬礼のポーズをとるジャック。アルフレッドはうんうんと頷いてから、小隊長のセシリアの方を向く。

「じゃあ、その命令に従うように。ダスカードより戻ってきたばかりではあるが、貴様たちには、交渉ごとに当たるマクギネス・ハッ

ト外務参事官と、お付きのものの護衛として、センチ・レーバンへ
随伴してもらう」

「参事官さまに、お付きの方ですか？」

セシリアが疑問を口にする、アルフレッドは鍵を開けるような
仕草を見せた。

「お前たちがウルガンどのより授かった黄金の鍵だよ。これも一緒に、
ルートニアへ向かう。もしも、その場であの鍵を使うこととな
れば、その記録をとらなきゃならねえ。それと、参事官どのの身の
回りの世話をするために、三人ほど娘っ子が付き従う予定だ」

「娘っ子……ですか」

「その方が、相手に刺激を与えなくて良い。屈強な男を連れて行っ
てみる、センチ・レーバンのやつらが警戒して、まともに話しも出
来んかもしれندろう？」

「ですが、同盟話を持ちかけたのは、向こうですよ」

「そういう妙な駆け引きするのが政治屋ってやつだ。だから、護衛
にも、お前たち三人だけを付けることにした。ほら、ジャックを除
いて、セシリアもアルサスも輪郭が細いからな」

アルフレッドがワツハツハと大口を開けて笑う。アルサスは冗談
なのだろうかと小首を傾げたが、それに対しての回答はない。代わ
りに、おそらく道筋が開けてきたと言うことに対する、アルフレッ
ドの安堵感が、そんな冗談を言わせたのだろうという推論を導いた。
確かに、同盟が成立すれば、戦争が始まる。それも後顧の憂いな
しに、あの「翼ある人」と刃を交えることが出来るのだ。必勝の信
念というのは欠かさないことだが、それが少しでも現実味を帯びれ
ば、軍人としてこれほどうれしいことはないだろう。

そうして、小隊長セシリアの任務復誦を挟み、アルサスたちは、
マクギネス参事官、外務省員の「娘っ子」、そして黄金の鍵を守る
という、重大な任務を与えられることとなった。

出発は明朝。まずは帝都の北西にある、ウエンティゴという港町
を目指す。ウエンティゴからは、海を挟んで対岸が見える。その対

岸はセンチ・レーバンの領地であり、船に乗って潮流に逆らうこと、一時間ほどでセンチ・レーバンの勝手口とでも言うべき港町ジルブラントに到着する。さらにそこから真っ直ぐ街道沿いに北を目指せば、ルートニアに辿り着くのだ。

旅程は長い。そのため、準備を怠るわけには行かない、とセシリアたちに続き、アルフレッドの執務室を後にしようとするアルサスをアルフレッドが呼び止めた。

「待った、アルサス少尉。お前に会いたいと言っている人がいるんだ。先にそっちへ行ってくれないか？」

と、アルフレッドが紙切れを手渡す。紙切れには、走り書きのメモが書かれていた。

「フランチェスカ・ハイト……それって、センチ・レーバンの！」

「そうだ。何の用があるのかは知らんが、お前を指名してきた。フランチェスカ。ハイトのいる皇居の部屋はそのメモに書いてある。衛兵には話を通してある」

呆然とするアルサスは、アルフレッドに「さっさと行って来い」とに執務室を追い出された。

87. アイシャのお茶会（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せ下さい。

88. 再会

皇居へは、大本營の渡り廊下を渡って、直接向かうことが出来る、と言うのはすでに知っている。しかし、内部は城独特の複雑な通路となっており、以前御前会議室まで向かった道すら分からなくなってしまう。所々、見回りのための衛兵が立っており、アルサスは彼らに道を尋ねながら、メモの場所を目指した。

余談ではあるが、衛兵たちも近衛騎士団の一部である。衛兵、警備兵などと呼ばれるように、アルサスたち哨戒小隊とは別任務を仰せつかり、皇居の安全を守っているのだ。アルフレッドの言ったとおり、そんな彼らに話は通っているらしく、衛兵の一人が親切にも、わざわざ目的の部屋まで案内してくれた。

「君が、噂のセンチ・レーバン人の近衛騎士か」

道すがら、バヨネットを片手に歩く衛兵が言う。その言葉には、多少の好奇心が含まれてはいたが、悪意や侮蔑は感じられなかった。「センチ・レーバンからの使者がダイムガルド人で、ダイムガルドの近衛騎士がセンチ・レーバン人。面白いよな」

「そうか？　ぼくは、そんなに面白いとは思わないけど」

「いやいや、これは運命だよ。センチ・レーバンと同盟を結ぶって話。もう、部隊中その話題で持ちきりでさ、君がダイムガルドに来たことも含めて、偶然にしては神さまとやらの運命を感じるよ」

楽しそうに語る衛兵に、アルサスは少しばかり拍子抜けした。実際のところ、ジャックのように同盟に不満を持っている兵士は少ない。入隊からそれなりの時間が経ったにもかかわらず、今を以ってしても、アルサスが近衛騎士団に居ることを快く思わない者もいる。それだけ、根強い恨みつらみが、十年前……いやもっとその前から鬱積しているのが、この国の現状だ。特に、鉱物資源しかない砂漠の国という苛酷な環境にあるこの国の、緑と水に対する羨望が彼らの原動力となっている。そんな中で、この兵士はあっけらか

んとしていた。

「あんたは、不満に思わないのかよ？」

「別に。俺の実家はギルド・マーチャントの商家で、昔からセンチ・レーバン人と接する機会は多かったんだよ。だから、他の奴らほど抵抗感がないんだ。それに、今回の同盟は向こうから言い出したことだろう？　だったら、こっちは大船にに乗ったつもりでいればいいんだ」

「そういうもんかな」

「そういうもん、そういうもん。ほれ、着いたぞ。あそこが、センチ・レーバンの御使者どのがいる来客間だ」

ぽんぽんっ、とアルサスの背中を軽く叩いた衛兵が指差すのは、皇居の二階に設けられた、来客が寝泊りするための部屋である。ダイムガルドが半鎖国状態になってから、云年ぶりに使用されるその部屋からは、気配こそすれ、物静かであった。部屋の中には、センチ・レーバンから来たという使者がいる。しかもダイムガルド人で、ジャックの遠い親戚らしい。しかし、そのジャックですら、顔も見ることがないという使者が、何故自分呼びつけたりしたのか、その理由が今ひとつ釈然としないまま、アルサスは案内してくれた衛兵に礼を言った。そして、衛兵の姿が見えなくなるのを待って、深呼吸と共に扉をノックする。

「どうぞ」

中から聞こえてきたのは、聞き覚えがあるような、ないような女の声。アルサスはそつとドアノブをまわして、室内へ足を踏み入れた。

窓辺の椅子に佇む、女性が一人。ポニーテールに纏め上げられた漆黒の髪と、浅黒い肌はダイムガルド人のものだ。しかし、見覚えがない。いや、本当は知っているのに忘れていただけなのかもしれない。それが証拠に、女の方は驚いた顔を隠しきれずに、目を丸くしていた。

「近衛騎士団哨戒小隊、アルサス・テイル少尉です。御使者さまが

お呼びとお聞きしましたので、参上いたしました」

戸惑いながらも、アルサスが言うのと、女は立ち上がりつかつかとこちらに歩いてくる。彼女が着るドレスは、どうやらセンチ・レーバンから持ってきたもののように、アイシャのドレスとはデザインが違うな、などと思っていると、アルサスはいきなり抱きしめられた。

「わっ！　ちよっ、ちよっと！」

「良かった、生きていたのね、アルサス……！　みんな心配していたのよ、ルウくんも騎士さまも」

「ちよっと待ってください！　あなた、誰なんですか？」

アルサスは、抱きすくめられた恥ずかしさと、この女が自分の事を知っているかもしれないという驚きの中で、無理矢理にフランチェスカの両腕を引き剥がした。

「なあに？　まさか、わたしのことを覚えていないなんて言うんじゃないでしょうね。そんな詰まらない冗談を言う子じゃなかったでしょう」

フランチェスカが怪訝な顔をする。アルサスも怪訝な顔をする。ある種奇妙な空気が二人の間に流れるのを、アルサスは感じていた。やっぱりこの人は、ぼくのことを知っている……。

「覚えていないっていうか、知らないっていうか」

「どういうことかしら？」

「ぼくにも良く分かりません。ただ、ぼくが何者なのか分からなくなっていました。あなたは、ぼくのことをご存知なのですか？」

と、アルサスが問えば、フランチェスカは顔をしかめてしげしげとアルサスの頭の先からつま先までを見つめる。ダイムガルド陸軍の軍服に身を包んでいるとは言え、彼女は再び確信を以って頷いた。「この世界には、同じ顔をした人間が三人いるなんて、まことしやかに語られるけれど、あなたは、瞳も、顔も、声も、髪の色も、名前も、わたしたちの知るアルサスそのものよ」

やや悲しげな色が眉目を伝う。

「記憶喪失……なのかしら」

「医者はその言っていました。御使者どの、もしもぼくの事をご存知ならば教えてください。ぼくは、なにか大切な事を忘れてしまっている……このままでもいいはずがありません」

と、アルサスが言うのと、フランチェスカはやや困ったような顔をした。事態が飲み込めず、戸惑っているようにも見える。彼女はくると踵を返し、ベッド脇のレターテーブルに添えられた丸椅子をアルサスに勧めた。

それからしばらく、沈黙が訪れる。何から話せばいいのか、記憶喪失というのが冗談ではないのか、そう確かめるように、思案をめぐらせるフランチェスカのことを、アルサスは黙って待った。

「記憶喪失になると、性格まで変わってしまうのかしら。ぼく、だなんてあなたに似合わない。それに、わたしのことは、フランと親しみを込めて呼んでいてくれたのに」

たっぷり二十分ほどして、おもむろに口を開いたフランチェスカは、窓辺の椅子に背を預けながら、少しばかり苦笑する。

「すみません」

「謝ることじゃないわ。どうやら、冗談ではないみたいだから。それに、あなたの本当の正体を知れば、あなたがその軍服を着ていること自体、おかしいことになる」

「それは、どういう意味ですか？」

アルサスが問いかけると、フランチェスカはやや間をおいて、真剣な目で言った。

「あなたは、センチ・レーバン王国第一王子、フェルト・テイル・レーバン殿下なのよ。それも、忘れちゃったかしら？」

「ぼくが、センチ・レーバンの王子！？」 冗談は止めてください」

「あら、わたしが冗談ばかり口にする女に見える？ まあ、冗談を言うのは好きだけど、時と場合は弁えているつもりよ。あなたが、わたしたちの知るアルサスだというなら、あなたはセンチ・レーバンの王子」

フランチェスカは、そう言って、経緯をアルサスに聞かせた。それは、少年が一人の少女と出会い、そして別れ、決死の戦場へと赴くまでの旅の話。少年は、世界を守るため少女を殺すことに躊躇した。そして、少女は最愛の家族を失い、欲と傲慢に満ち溢れた分かり合えない世界に、終止符を打つため、自らの使命に目覚めた。そして、すべての旅の仲間との思い出や出会いを捨てて、金の若子とともに姿を消した。少年は自らの後悔に苛まれながらも、王子という立場と責任に押され、死地とも言うべき戦場へと赴き、その混乱の最中、生死さえもわからなくなってしまった。

物語を紡ぎだすかのように、フランチェスカは語る。その物語の主人公は、アルサス。そしてヒロインは、ネルという少女だった。「あなたに、旅の仲間の解散を告げられても、わたしたちには帰る場所がなかった。わたしは、ギルド・リッターに反旗を翻した身だし、ルウはルミナス島を失った。そして、ガルナツクの戦場から命からがら帰ってきた、騎士さまにあなたが行方知れずとなったことを聞いて、わたしにも何か出来ないか、協力を願い出たのよ。ルウも、収監されたまま裁判も行われていないナタリーの事を心配して、センテ・レーバンを離れるわけには行かなかったから。これで、わたしの知るあなたのことは、全部話したわ。どうかしら、何か思い出した？」

答えは期待していない、そんな風な微笑みがフランチェスカの顔に浮かぶ。正直なところ、話を聞いていても、どこか他人の物語にしか思えないのだ。それにも増して、自分がセンテ・レーバンの王子などと、信じるという方が無理難題である。

だが、フランチェスカが嘘を言っているようには見えなかった。嘘を言う人間はたいいてい目を泳がせるものだし、物語のような嘘をアルサスに聞かせ、すっかり窓の外が夕暮れになってしまふなどと、ありえないことだ。

「アイシャ陛下は、随分とあなたの事を慕っているようだけど……」
フランチェスカが瞳に、夕日を写しこむ。遠く無限の砂漠の稜線

に沈む夕日は、まるで血の色の様に真っ赤に染め上げられていた。

「それは、ちょっとした行き違いで」

「ってこともないんじゃないかしら？ 陛下は、それなりに真剣よ。わたしも女ですもの、乙女心は良く分かるわ」

クスリと笑うフランチエスカの大人の微笑みに、アルサスは当惑してしまふ。そうでなくとも、自分の知らない自分の姿を教えられ、いまだに何一つ事情が飲み込めていないところに、とどめのパンチが飛んできたようなものだ。しかし、フランチエスカはそんなアルサスに安堵したかのように言う。

「記憶を失っても、あなたの根底はあなたのままのようね。心配しないで、あなたがフェルト殿下であることは、誰にも話していないわ。アイシャ陛下にも。願わくは、ルートニアに着くまでに、あなたの記憶が戻ってくれば、良いのだけど……」

フランチエスカの部屋を後にして、どのようにして寮へ戻ったのか良く分からない。すでに、出発の準備を整えたジャックは、これでもかとアルサスを怒鳴り散らしたが、あまりにも元気がなく、却って心配させる結果になったことだけは覚えている。

だが、肝心なことは何一つ覚えていない。自分が、センチ・レーバンの王子、などと突然言われて、「はいそうですか」と楽天的な考え方は出来なかった。まだ、暗殺者だの、軽業一団の息子だと言われたほうが、マシだ。一国の王子などと、そんなことがあるはずもない、そう思いたいのだが、記憶の底の方で、フランチエスカの言ったことが真実のように思えた。

それだけではなく、信じられないことは山のようにある。ネルという少女のこと。顔も思い出せない、声も思い出せないその女の子が、「翼ある人」をこの世に放った、アストレアの天使の一人、銀の乙女だということ。そして、その渦中の中心に、自分とフランチエスカ、そしてルウという少年がいたことも、すべてが信じられない。まるで、アイシャの好きな絵本の中の出来事のようにじゃないか、

とアルサスと思う。しかし、それが絵本の出来事でないことは、分かっている。何故なら、この世界に「翼ある人」が現れ、次々と世界中の人間を光の粒に変えている、という事実があるからだ。

その事実をどうやって受け止めたら、記憶が戻ってくる？ 自分が何をなすべきか、それを思い出すことが出来る？

ウルガンは「自ずと分かる」とアルサスに言ったが、それがいつのことなのか、それさえも良く分からないままにいる。しかし、いくら歯がゆく思っても、暮れた日は昇るもので、翌朝にはすぐに任務へと着かなければならなかった。

まだ空が白み始めるころ、アルサスたちは甲冑を着こんで内裏の入り口に集合した。すでに、フランチェスカたちは騎馬にまたがり、出発の時を待っている。遅ればせに、現れたマクギネス・ハット外務参事官は、ひよろりとしたモヤシのような男で、いさか交渉役としては頼りなく見えたが、それでも敏腕外交官として知られる人物だ。

「これより、センテ・レーバンはルートニア要塞へ向けて出発する。貴君ら、近衛騎士団は我とともに、ダイムガルドの顔である事を忘れるな」

思いがけず、モヤシから吐き出された太い声に、アルサスたちは揃って敬礼した。

「セシリア小隊、全身全霊をもって、護衛任務に当たります！」

小隊の隊長であるセシリアがそれに答えると、マクギネスは頷き返した。マクギネスの馬の後ろには、馬車が控えている。センテ・レーバンでよく使われる、三頭立ての馬車、ウォーラである。その荷台の中に、アルフレッド大佐の言った「娘っ子」がいるのを見つけたアルサスは、ちらりとそちらを余所見する。

おそらく、アルサスたちとそう年齢の変わらない少女たち。みな、目深にフード付きのコートを羽織っているため、その顔まで確かめることは出来なかったが、可憐な乙女たちは、相手の警戒心を解くのにうってつけの世話係というところだろう。

ふと、アルサスはそのうちの一人の少女に目を向けた。どこかで
見覚えがあるような……と思ったのもつかの間、

「しゅっぱーっ！！」

という、マクギネスの声に弾かれて、すぐさま兜のバイザーを閉
じ、自らの騎馬に乗る。かっぽかっぽと、蹄鉄が街路を踏みしめる
音が鳴り響き、ルートニアへの第一歩を歩みだした。

88. 再会（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せ下さい。

89. ウェンティゴの港町

先頭を進むのは、フランチェスカと同行の使者。そのすぐ後ろを、マクギネスと馬車が続く。そして、それらを守るように左右に、アルサスとジャックが、最後尾にはセシリアが追随する。砂漠の馬は、砂に足を取られないように訓練されており、その行進に何ら影響はないものの、野盗や魔物の襲撃、最悪「翼ある人」の襲撃を見越しての護衛任務であると同時に、ダイムガルド軍がセンチ・レーバンにはない技術の武具を揃えていることを知らしめる、という重要な意味合いも含まれていることは、三人一様に認識していた。

そのため、ウェンティゴの街へ向かう道すがら、誰もが緊張感の中でずっと押し黙っていた。ところが、いち早くその沈黙を破ったのは、アルサスの予想に反して、最後尾のセシリアだった。

『アルサス。昨日何かあったのか？』

兜の耳あてから聞こえてくるのは、エアデ通信を介した無線である。回線は通常回線であったため、その声はジャックにも届いていたが、兜の外に漏れることはない。現に、マクギネスは外交交渉という大任に意気揚々と、砂漠を焦がす太陽を見つめているし、フランチェスカたちセンチ・レーバンの使者も同様であった。また、馬車の荷台にいる少女たちは、ひそひそとなにやら雑談を楽しんでいるようで、アルサスたち三人だけの会話に気づくものなど誰もいない。

「何もないよ……」

『何もなくて、あの女に呼び出されるわけないだろう。まったく、昨日幽霊みたいな顔して寮に帰ってきたのは誰だよ』

今度は馬車をはさんで反対側のジャックの声が聞こえてくる。

「なんだ、ジャック。ばくのこと、心配してくれてるの？」

『ち、違えよ！ ただ、なんで、その……任務に支障をきたして欲しくないからな。だってそうだろう、これから、俺たちは敵国のど

真ん中へ行くわけだ』

「大丈夫だと、フランチェスカさんは言っていたよ」

『信用できるか。センチ・レーバンに味方するようなヤツの言うことなんて。何かあったときには、俺たちはマクギネス参事官をお守りしなきゃならないんだ』

「でも、フランチェスカさんは君の遠い親戚だろ？ それに、ぼくはセンチ・レーバン人だ」

ジャックにそう言ってから、アルサスはふと思う。もしも、自分が本当にフランチェスカの言うとおりの人間だったとして、それをジャックに言ったら、彼はどのような反応を示すだろう。自分がセンチ・レーバンの王子であるなら、それは彼が毛嫌いの敵国の親玉ということだ。もしかすると、折角芽生え始めた同じ小隊の仲間としての友情が、ふいになっってしまうかもしれない。

そんなアルサスの邪推を、再び聞こえてきたセシリアの声が振り払った。

『あの女が信用できるかどうかは、さておいても、ジャックの言うとおり、正式に同盟文書に調印がおわるまで、わたしたちが向かう海の向こうは敵国だ。聞くところによると、ストライン・イスカ・レーバンという男は、随分保守的な貴族だそうだ。気は抜けない』
「分かってるよ、セシリア。そういえば、ぼくたちも調印式には出るんだね。調印式でセシリアはドレスを着たりするの？」

唐突に話題が変わり、スピーカの向こうでセシリアのうろたえる声が聞こえてくる。無論、わざと話の腰を折ったのだ。今はまだ、確かでないのに、フランチェスカから聞いた自分の正体を、セシリアやジャックに聞かせるわけには行かないと思ったからだ。

いささか唐突にも思える話題の振り方ではあったが、効果はきめんであったようだ。

『おっ、それは興味があるな。隊長ってば女の子なのに、いつも軍服だからな』

と、食いついてきたのは、ジャック。男のような喋り方をしても、

見た目も声も少女のそれであるセシリアは、いつも軍服姿である。すでに付き合いの長いであろうジャックも、セシリアのそうした女らしい恰好というのを見たことがなかった。

『馬鹿な事を言うな！ わたしたちは観光でセンチ・レーバンへいくんじゃないんだ。調印式でのわたしたちの正装は軍服だ！』

明らかに動揺していると分かる声で、セシリアが怒鳴る。ともすれば、マクギネスたちにも聞こえてしまいかねないような声だ。

『そもそも、ドレスなんてわたしには似合わない……』

「そんなの着てみなきゃ分かんないじゃないか、なあ、ジャック」

『そうそう、馬子にも衣装って言葉もあるっすよ。ドレスを着たなんて、オスカーさまが知ったら、きっとお喜びに』

『ならないっ！ いいから、黙って任務に集中しろ、ジャック、アルサス！ アルフレッド大佐の言葉じゃないが、終末思想にかられた輩だっているかもしれないんだ。無駄口叩いてると、敵に隙を与えるだけだ！』

ぷいっ、とそっぽでも向くように、セシリアからの通信回線がプツリと切れる。

『最初に話しかけてきたのは、隊長じゃねえか……なあ？』

ぼそぼそと、ジャックは言うのと、彼も通信を切った。上手く話をこまかせたアルサスは、バイザーのスリットから覗く、無限の砂漠に横たわった砂丘を見つめながら、ほっと胸をなでおろした。後には、砂風のもがり笛と、馬の闊歩する足音だけが残される。

それきり、セシリアからの通信はなく、時折退屈したジャックがどうでもいい事を、秘匿回線を通じて話しかけてくるだけで、旅程は平穏に進んだ。ウエンティゴの港町までは、距離にすればかなりである。しかし、徒歩でレメンシアへ向かう事を思えば、騎馬の背に乗って、進む旅は随分と気楽なものである。それは、まさに嵐の静けさかと思えるほど、平穏な旅路。もしも、そうだとすれば、この砂漠を越えた先に、嵐が待っていると言うことなのか……。

不安を抱いていても仕方がない。いざとなれば、バヨネットでマ

クギネス参事官の身を守るだけのこと。それが任務なのだ。しかし、願わくはすべてが円滑に進み、ウルガンより授かった黄金の鍵を開けられれば、それにこしたことはないだろう。そうして、記憶を取り戻せたなら……、取り戻せたなら、どうするのだろうか？ フランチェスカの言ったことが、本当だとして、記憶を取り戻した自分は、今の自分とはまったくの別人で、それが受け入れがたいものだったとしたら、どうすればいいのだろう。それをセシリアやジャックに相談するわけには行かない。かれらとて、歴史の転換になるかもしれないような重大任務に就いているのだ。それを、ごく個人的なことで煩わせるのは、間違っている。

だが、その一方で昨夜から漠然とした不安が少しずつ胸の内に溜まっている。アルサスの事を知るフランチェスカは騎馬に跨り、すっかり使者の顔に戻っている。本当は、昨日の話がやっぱり夢だったんじゃないのか、と思いたいが、抱きしめられた時のぬくもりも、彼女の笑顔も確かに覚えているのだ。

例え受け入れがたくても、受け入れる他ない……。アルサスは、覚悟にも似た気持ちを抱えながら、旅程を歩む。何処までも続く無限の砂漠。その先に行けば、答えはあるはずだ。

方角さえよく分からない砂漠では、砂目と太陽の位置が重要である。無限の砂漠を駆け抜ける砂風は初夏のこの季節、必ず西から東へ向かって吹く。偏西風の影響だと言われているがその理由は分かっていない。それはともかくとして、風が一定の方角に吹くということは、それを目安に向かうべき方角を決めることが出来る。また、季節と太陽のある位置で、時刻とおおよその方角を知ることが出来る。この二つを照らし合わせながら、注意深く進まなければならない。さもなければ、目標物のない砂漠の真ん中で、延々と同じところをぐるぐるし続けることになるのだ。

そして、砂漠を渡るにはもう一つ、きをつけなければならないことがある。砂漠というのが苛酷な理由の一つが、夜間ともなれば、砂漠の気温は一気に氷点下近くまで下がると言うことだ。砂漠は水

がなくとても乾燥しているため、夜間には地表の熱が消えてなくなるのだ。そのため、太陽が沈めば、行進を止め、キャンプを張らなければならぬ。無論、航海術の応用で六分儀を用いて、星の角度から方角を割り出すことは出来るのだが、氷点下の世界を無理に進むことは出来ない。アルサスたちは、空調機能の備わった甲冑を身に着けているが、フランチェスカをはじめ、マクギネスや馬車の中の少女たちは、そのようなものを持ち合わせてはいない。

そうして、何度かのキャンプを行いつつ、夜間の見張り役を務めたアルサスたちの疲労がピークに達しようとするころ、ようやく砂丘の向こうにきらめく海岸線と、ウェンティゴの街が見えてきた。

『ウェンティゴも何度か、「翼ある人」の襲撃を受けたらしい。まあ、レメンシアと違って、予め守備隊を配置していたから、まだ、街として機能している』

ウェンティゴの街を見つめながら、セシリアが言う。港町と言うだけあって、ウェンティゴはレメンシアに次ぐ、ダイムガルドの重要都市である。いくつもの建物や民家が立ち並び、ギルド・マーチャントの商家が軒を連ねていた。ウェンティゴが「翼ある人」に襲われたのは、レメンシアの襲撃から、約二週間後のことである。

ちょうど、帝都ではモーガン率いる教導団が、反乱を起こそうとしている頃。レメンシアの惨状を重く鑑みた近衛騎士団が、いち早くウェンティゴの守備隊を増強していた読みは、見事に当たった。無論、相手は不死身の軍隊であり、かなりの被害と、かなりの苦戦を強いられたものの、辛くも撃退に成功したことは、半壊した街並みをみれば分かる。

抵抗の跡だろうか、ある建物には、パイルが無数に突き刺さった痕が残されているし、別の民家は屋根が丸ごと崩れ去っていた。それでも、生き残った人々は、変わらぬ生活が続け、守備隊も戒厳令に従って常に見張りの眼をきつくしていた。

「ここからセンテ・レーバンの軍船で海を渡って、対岸のジルブラントへ向かいます。軍船は港に待機させてありますので、ひとまず

そちらへ。出航は本日の夕刻。それまで、体についた砂と疲れを癒して下さい」

街に入るなり、フランチェスカが海のほうを指差して、マクギネスに説明する。フランチェスカの指差す先には港があり、そしてそのはるか向こうに霞がかった陸地と、小高い塔のような岩山が見える。そこは、センテ・レーバン領の港町、ジルブラントである。

ウエンティゴとジルブラントの間は「ジルブラント海峡」と呼ばれている、非常に狭い海峡である。しかし、センテ・レーバンとダイムガルドの国境として横たわる「セントレア海」、即ち今アルサスたちが臨んでいる海の水が一気に流れ出す場所であり、潮流は思うよりも速い。そのため、海峡を渡るには、軍船のような大型船や、櫂で漕ぐカッターやガレオン船などが必要不可欠であった。

ウエンティゴの港には、そうしたダイムガルド軍船やギルドのガレオン船が並んでいる。そのなかで、大きな帆布はんぷに剣と盾の紋章をあしらった、一際巨大な帆船が、フランチェスカたちを乗せてきた。センテ・レーバンの軍船である。戦争以外で、この港にセンテ・レーバンの軍船が寄港するのは、初めてのことだろう。そのため、街の人たちは、ものめずらしくその軍船を眺めていた。

軍船のラツタルにかかる舢はしけの前には、ダイムガルド守備隊と、センテ・レーバン王国騎士団の者が待っており、アルサスたちを招き入れた。

「ダイムガルド軍の検閲が厳しくて、本船の武装はほとんど取り外されてしまいました。部屋は海運ギルドの客船よりも、広く快適かと思えます。ジルブラントへの短い船旅ですが、ごゆっくりくつろいで下さい」

皮肉交じりにセンテ・レーバン騎士団は言う。彼は、アルサスがセンテ・レーバン人であることに気づいたが、余計なことに口を挟んではいけないと思ったのか、何も尋ねては来なかった。

船室に案内された、アルサスはどうやく一息つく。幸いにも、一人に一室が与えられたおかげで、静かでいられることは寂しくも嬉

しかった。部屋には、水さしが置いてあり、アルサスはその水を飲み干して喉の渴きを癒すと、甲冑を脱いだ。

出航までは色々な準備もあって、数時間の暇をもてあそぶ事になるのは目に見えている。アルサスは、甲冑の関節ヒンジに詰まった砂を、小さな綿棒で取り除きながら、その時間を潰すことにした。しかし、部屋が静かであればあるほど、そうした作業に上手く没頭することが出来、甲冑の掃除が終わっても、まだ出航の合図はならなかった。しかも、直後に船員が、出航準備に手間取って、出航時刻が遅れることを知らせてきたのである。

仕方なくアルサスは、外へ出る。廊下の向かって反対側はセシリアの部屋、その隣はジャックの部屋だ。なんだかんだと言って、女の子であるセシリアの部屋を覗くわけにはいかない。アルサスはジャックの部屋をノックしたが、返事の替わりに聞こえてきたのは、随分とけたたましいイビキだった。どうやら、疲労が蓄積して、眠ってしまったのだろう。

無理に起こしてやるのも可愛そうだ。出航時刻が遅れるなら、おそらく今夜は船中泊となり、明日、ジルブラントへ到着することになるだろう。せめてジルブラントへ到着するまで、そっとしておう。アルサスは、そう考えて、一人甲板へと上がった。

港町を駆け抜ける夕暮れの風はやや冷たく湿り気を帯びていた。なにせ数クリグ先には、ダイムガルドとは気候のまったく違う、センテ・レーバン王国が広がっているのだ。その涼しい風は、おそらくセンテ・レーバンより吹いてきた風だろう。

アルサスは、船の縁に寄りかかると、ウェンティゴの街並みと、セントレア海を眺めた。

街の方から、カモメの群れが甲高い鳴き声を上げながら飛んでいく。雲は淡い朱色に染まり、波間に、きらりきらりと夕日が反射して、黄金に輝く様は、実に美しい。

そんな風景を見つめていると、まるで、世の中の喧騒など嘘のよう to 思えてくる。こんなに美しいものを滅ぼして、新しい世界を作

ることに何の意味があるのか。本当の自分が知る、ネルと言う少女は、この美しい世界を、それほどまでに憎んでいると言うのだろうか……。

「同盟が上手くいけばいいんだけど」

アルサスの眩きは、そっと涼しい海風に攫われて、輝く波間へと沈んでいった。

89. ウェンティゴの港町（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せ下さい。

90. クロウの危惧

「どうということだ!？」

烈火のごとく怒りを露にするのは、でっぷりとした腹を抱えた、三十路半ばの男だ。顔つきこそ、アライグマを思わせ、悪辣ではないものの、高貴な衣装を身に纏っていないければ、誰がかれをセンチ・レーバン王家に連なる人物だと思うだろうか。

名は、ストライン・イスカ・レーバン卿。メタボリックな体つきではあるが、フェルトやシオンの従兄弟に当たる。皇位継承権はないが、王家の親戚ということで爵位と領地を与えられた、言わば公の諸侯と言える。ガルナツクの戦の際には、一切の派兵をしなかったにもかかわらず、臨時の王位代行者となれたのは、他でもない、国王となったシオン女王陛下と、その兄であるフェルト殿下が不在であるためだ。

しかし、この男。随分と及び腰なところがある。保守的とは随分オブラートに包んだ言い方で、決定的に決断力に欠ける男、というのがクロウたち騎士団の評価だった。それでも、王の代わりとなる人物がいなければ、県と盾の王国は瓦解してしまう。ガルナツクに派兵しなかったのも、状況を鑑みて、究極的には王家と国家の存続にこだわれればこそである、と、及び腰になったことを弁解出来るだろう。「ワシに何の説明もなく、勝手にダイムガルドに使者を送り出すとは、どういうつもりだ、クロウ・ヴェイル騎士団長!!」

ストラインはテーブルを強く叩いた。叩いてから、手のひらに走った痛みに顔をしかめる。ここは、ルートニアの臨時宰相府となる一室だ。もともと、要塞ということもあって、飾り気はないが、ライオットが宰相であったときに、彼の趣味で集めさせた骨董品が幾つか並び、要塞の質素な部屋に違和感だけを与えていた。

「説明はしたはずです。われら、騎士団の総意として、カレン將軍、キリク將軍の承認のもと、フランチェスカ・ハイトどのに、使者と

してダイムガルドへ向かってもらったのです」

クロウが毅然と言い返すと、ストラインはまるでふてくされた子どものような顔をして、「ワシは聞いておらぬ」と言う。彼のために、フォローしておけば、彼とて王国のことは考えている。別段王国を滅ぼしたいなどとは思っていないし、ライオットの不始末とアストレアの天使の脅威については、その責任を果たすべく、落ち延びた先であるルートニアを良くまとめていると思う。しかし、その一方で、敵国であるダイムガルドと同盟を結ぶと言うことに、二の足を踏んでいるのだ。

「たしかに、バタバタしておりましたから、ストラインさまのお耳から漏れたとしても、これは、両国の力をあわせて、かの脅威に立ち向かうために大切なことです」

「左様なこと、言われずとも分かっておるわ！　だが、よりにもよって、ダイムガルドなどと」

「では、現在戦争状態にあるガモーフと手を結べども？　彼らが無条件で同盟を結んでくれる可能性など皆無でしょう。そのために要する折衝の時間はありません」

「ダイムガルドとて、何らかの条件を出してくる。それがこちらの飲めぬ要求となることは明白だ。それよりは、諸侯どもに呼びかけ、先代の国王の時のように、八百諸侯との連合軍で、アストレアの天使を打ち負かすことの方が、理に適っている！」

「理の問題ではありません。メツツェとネルさん……アストレアの天使が標的としているのは、世界そのもの。だからこそ、世界中の人々が手を結び、この危機に立ち向かわなければならぬのです」

「よもや、憎きガモーフとも手を結ぶなどと言い始めるのではないだろうか？」

「適うのであれば」

クロウが言うと、ストラインは「やはりな」と言う諦めにも似た顔をして、どっしりと宰相の席に腰を下ろした。ライオットの死後、ストラインが宰相も兼務している。ルートニアには王都に住む一部

の民間人も移住してきているため、非常時とは言え、内政も怠るわけには行かず、外交のほとんどをクロウに任せていた。

ガルナツクより舞い戻ったキリク・クォーツからの伝言で、トライゼン・バルック將軍の遺言代わりの進言に従い、ルートニアへの遷都を行い、騎士団の指揮権をクロウ・ヴェイル、カレン・ミラ・ソアード、キリク・クォーツの三人に委譲した。実際のところ、ガルナツクより帰還した騎士団長は全体の半数以下であり、戦死、行方不明者はフェルト王子を含めて、かなりの数に上った。そのため、騎士団の再建を若い力に任せるというトライゼンの意向を汲み、彼らが騎士団を束ねることには、誰も反対しなかったのだ。

しかし、ストラインとしては、ダイムガルドとの同盟には、難色を示さざるを得ない理由があった。

「貴様たち騎士団は、今だけを考えればいい。しかし、シオン陛下の名代を務めるワシは、この先何十年もの事を考えなければならぬ。そうして、シオン陛下がお目覚めになられたとき、万全の体制で政務を受け渡したい。分かるか、クロウ？　ダイムガルドがもしも、領土や主権を侵すような条件を提示すれば、ワシの独断では同盟を結べない」

「その折衝をなさるのが、ストレインさまのお役目では？」

すると、ストラインの言い分をかわすクロウ。思わずストラインは目を丸くして、ニヤリと笑う。笑えば、よりアライグマのような顔になる。

「ライオットの犬だった貴様も、言うようになったな……」

「ライオット閣下への恩は今も忘れてはおりません。ヴェイル家が滅びずに済んだのは、彼のおかげです。だからこそ、彼の不始末を私が何とかしたい。そのためには、言葉を慎んでいる場合ではないでしょう。ダイムガルドとの同盟も同様です」

クロウはそう言うと、ちらりとストラインの前の机に目を落とした。陳情書や報告書が山のように積み上げられている。それらは、日増しに激しくなる、『翼ある人』の攻勢を知らせ、助けて欲しい

と言う訴えの山でもある。センテ・レーバンは、西の果てにあるルートニアと王都を結ぶ街道を、防衛線としている。ここで、遊撃抵抗を続け、ルートニアを守るという戦略を打ち出したのはキリクであり、その陣頭指揮はキリクが執っているのだ。その一方で、各地の村や町は今日もひとつ、また一つとこの世から消えている。

一国の猶予も許されないからこそ、クロウはフランチェスカを使者に出したのである。

「キリク將軍の抵抗がいつまで続くか、何の保障もありません。目下、『翼ある人』がガモーフの西部、ダイムガルド北部へ侵攻し、敵の戦力が分散している今こそ、同盟を結ぶ好機です。何卒、ご承諾下さい」

クロウの言葉に、ストラインは溜息を混ぜる。しばし何事か思案するような顔を見ると、書類の山から報告書の束を取り出したストラインは、

「分かった。成否はとにかく言うな。ワシは政治家としての立場で、この国を守る者。その立場だけは忘れるな。後のことは、ワシの方で何とかする……」

というと、クロウを追い払うように手の甲を払う。

「はっ、承知つかまりました」

一礼をした、クロウはマントを翻しながら部屋を後に、廊下に出た。何とかする……ことがうまく運ばいいのだが、どうしても及び腰なストラインの態度は、危惧に値する。今はまだ、センテ・レーバンにも力は残されている。その今のうちに、人間の結束を固めておかねばいけないのだ。

「クロウさま！」

廊下を城外の騎士団詰め所へ向かおうとした、クロウの足を背後からの声が呼び止めた。かちゃかちゃと、鎧の鳴る音共に駆け寄ってくる相手が誰なのか、声だけで分かった。

「カレン。何かあったのか？」

「先ほどエーアデ通信にて、フランチェスカさんとダイムガルドの

外務参事官を乗せた軍船がジルブラントに到着したとの知らせが……」

と言う割りに、カレン・ミラ・ソアードの顔はやたらと深刻そのものだった。もともと、表情のころころと変わるような女の子ではない。しかし、それでも、眉目に多少の戸惑いが宿っていることに、クロウは気づいていた。

「それが……」

カレンは顔を近づけると、クロウの耳元に手を添えて内緒話でもするかのように囁く。そして、囁きを聞いたクロウは思わず、「何だって！ それは、本当か！？」と大きな声を立ててしまった。

予想通り、ジルブラント港に着いたのは、翌日になってのことだった。船中泊にて、十分疲れを癒した、アルサスたちは、船を降りた。

独特の石造り赤い屋根の、センチ・レーバン建築の家が立ち並ぶ、静かな港町である。センチ・レーバンの本拠地ルートニアが近いせいもあったか、町全体には緊迫感のようなものが、あまり感じられなかった。そもそも、ジルブラントは、セントレア海の狭い海峡を隔てて、常にダイムガルドとにらみ合う場所にあり、常に危険と隣り合わせという状況は、何も今に始まったことではない。それだけに余裕があるという証拠でもある。

この街から、街道沿いに北上すれば、ルートニア要塞がある。そのためか、むしろ、マクギネスたちの方が、緊張感を露にしていた。「寒いな」

船を下りて真っ先にそう言ったのは、ジャックである。兜のバイザーを上げ、見知らぬ異国の街を眺める彼は、少しばかり身震いした。確かに、灼熱の砂漠が広がるダイムガルドに比べれば、気候は随分と違う。とは言っても、ウェンティゴからそれほど離れているわけではないし、センチ・レーバンも季節は初夏を迎えている。要は、感じ方の問題で、アルサスはそれほど寒いと感じない自分が、

改めてセンチ・レーバン人である事を再確認したような気分になった。

「なあ、センチ・レーバン人、何か思い出したか？」

ふいに、ジャックが、船倉から降ろされる馬車と騎馬を眺めながら、アルサスに尋ねた。相変わらず、名前を呼んではくれないが、随分とジャックの声に棘がなくなってきた。

「何かって？」

「記憶だよ、記憶。この街並みを見たら、何か思い出したかと思つて。でも、その調子だと、何も思い出してないか……。お前つてば、一体何処の誰なんだろうな？」

ジャックの言葉に、アルサスは内心で呟く。王都生まれの第一王子。フランチェスカの言うことが真実なら、そういうことになる。しかし、ダイムガルドのウェンティゴと明らかに街並みが異なる、ジルブラントの風景を目の当たりにしても、頭の奥がズキリと痛むだけで、何かを思い出すことはない。一度失った記憶はそう感嘆には戻らないということなのだろうか……。

「ダイムガルド近衛騎士団の、アルサス・テイルだよ」

と、冗談めいた口調で返すと、アルサスは視線を馬車の方に向けた。見れば、馬車に少女たちが乗り込もうとしている。皆、相変わらず目深にフードを被っているため、どのような顔をした少女たちなのかはよく分からなかったが、最後に乗り込もうとした背の低い女の子が、唐突にふらついた。どうやら、船旅で酔ってしまったのだろう。

「きゃっ！」と悲鳴を上げると、荷台のタラップから足を踏み外して、そのまま派手に尻餅をついた。あの子は……出発前に、どこかで見覚えがあるような気がした子だ、とアルサスは無意識にその娘の下に駆け寄って、手を差し伸べる。

「大丈夫？」

と、アルサスが言うと、少女は手を取って、「ありがとう」とつぶやいき、そしてアルサスの顔を見て慌てて口をつむぐ。やはりど

こかで聞いたことのある声だ、とアルサスは思った。いつそのことフードをはぐって少女の顔を確かめたいところだが、まさかそんな無粋な真似が出来るはずもない。

一方で少女はよほど慌てたのか、アルサスの手を離すと、ふらついていたのが嘘のようにタラップを駆け上ると、荷台の幌の奥へと姿を消した。

「どうかしたのか？」

セシリアが背後から問いかける。アルサスは、今一度少女の消えた馬車の幌を見つめ、呟いた。

「いや、まかね……」

セシリアはきょとんとして、アルサスを見つめ、やがてマクギネスから出発の合図がかかると、アルサスを促して、騎馬にまたがった。

ジルブラントの往来を闊歩すれば、街の人たちが、何事かと家々の窓から顔を出す。さながら、軍隊の凱旋行進のようではあるが、紙ふぶきもなければ、歓声もない。代わりに、金色の甲冑を身にまとう、アルサスたちと、そして三頭立ての馬車ウォーラに掲げられた、ダイムガルドの紋章旗を、物珍しげに見つめる。

そんな視線に見送られて、ジルブラントを後にした一行が、ルートニアに到着したのは、それから数日の旅程を越えてのことである。眼前に現れた、古代遺跡の一部といわれるルートニア城砦は、ハイズノンのそれとは違い、どちらかといえば城のような概観をしている。無論、その概観は遺跡ではなく、センチ・レーバンが築き上げたものであり、遺跡と呼ばれるものは、ルートニア要塞の地下に広がっているのだ。そして、その一番奥には、王家の者、それも嫡流の者しか知らない、開かずの扉がある。扉の中心に開けられた大きな鍵穴に「黄金の鍵」と呼ばれる、神々の時代の秘宝を使わなければ、絶対に開かない扉である。

センチ・レーバンには、その鍵を持ち合わせてはいなかった。しかし、今、ルートニアに到着したダイムガルドの同盟の使者が、ダ

イムガルド皇帝陛下と議会の書状に加えて、ハイ・エンシェントのウルガンより授かった黄金の鍵を大事に持参している事を、ルートニアにいる者たちは知る由もなかった。

90. クロウの危惧（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せ下さい。

91. ルートニア要塞

外堀から城下町を抜けた使節団のルートニア入城を城壁の見張り台で見つめていたクロウは、その一団が城内に入ると、階段を駆け中庭へと降りた。使節団は、先頭にセンチ・レーバンの国旗を掲げるフランチェスカ、その後ろをフランチェスカの補佐のためにつけた外交官が二名。そのすぐ後ろをやや緊張の面持ちで続くのが、ダイムガルドからの使者マクギネス・ハットであることはすぐに分かった。

だが、クロウはマクギネスの顔を見たかったのではない。外交の糸口は開いたが、同盟の折衝を行うのはストラインの役目である。いくら、カレンたちとともに騎士団を束ねている騎士団長と言っても、底まででしゃばることができないと言う身の丈は重々承知していた。

マクギネスの後ろには、三頭立ての馬車ウオーラが続く。御者は年老いた老人で、荷台の幌の中間で確認することは出来なかったが、フランチェスカたちからの連絡で、三名ほど世話係として女の子を随伴させているとの話だ。そして、馬車の少し前と、馬車の後ろには、ダイムガルド軍の金色の甲冑を身に纏った騎士が警戒するように配置している。顔を覆い隠す兜の所為で、各々の顔はおろか、性別すら判じることが出来ない。

そのうちの一人が、ちらりとこちらを見た。横に真一文字に開けられたバイザーのスリットから、一瞬だけ赤い瞳が見えたような気がしたが、気のせいかもしれない。それに、その名を呼んで駆け寄ることの出来るような雰囲気ではない。

ダイムガルド人であるフランチェスカが、センチ・レーバンの使者として、ダイムガルドとの同盟締結を取り付けてきたのだ。マクギネスたちは言わば、政治の客人である。

「ようこそ、ルートニアへ。マクギネス・ハット外務参事官」

出迎えを仰せつかった騎士が、馬上のマクギネスへ慇懃に頭を下げる。マクギネスは懷より一通の書状を取り出した。それは、出発の前日アイシャがフランチェスカに見せた、直筆の書状である。

「皇帝陛下の同盟の書状を預かってまいりました。ストライン卿のもとへ、案内願いたい」

マクギネスが高らかに言う、騎士は再び一礼をして、「こちらへ」とマクギネスの馬を引いて行く。随伴する馬車と、ダイムガルド騎士やフランチェスカたち三人もそれに従い、やがてクロウの前から姿を消した。クロウは彼らの背中を見送りながら、数日前、カレンの伝えてくれた話を反芻していた……。

『それが……使節団の中に、フェルト殿下が居られると、フランチェスカさんが仰るんです』

信じられないことではあるが、クロウに伝えなければならないと感じたのだろう。クロウとフェルトは、歳はクロウが三つ上で、立場はフェルトが王子という間柄ではあるが、幼少期を共に過ごした、歳や立場を越えた親友でもある。そのため、何よりフェルトのことを心配していたのはクロウだ、とカレンは感じていたのだろう、言葉を濁し気味に言った。

『なんだって！ それは本当か！？』

『はい。ただ、アルサスと名乗るその少年はダイムガルド軍に属しており、しかも記憶がないと言っているため、本当にフェルト殿下なのか、分らないと』

フェルトがダイムガルド軍人？ 記憶がない？ ガルナツクで行方不明となった親友の無事を喜びたいクロウであったが、カレンの言葉に幾つかの疑問が浮かび、それを収束させることはついぞ出来ないまま、マクギネスたちダイムガルド使節団がルートニアに到着した。

「おお、ここに居られましたか、クロウ騎士団長」

入城する使節団を見送るクロウのもとに、副官ブレック・ケイオンが駆け寄ってくる。髭面のこの男は、クロウが親衛騎士団に入っ

た頃から常に支えてきてくれた人物でもある。また、何も言わなくても雑務をこなす、敏腕騎士でもあり、本来なら、ブレックのような人間が騎士団長になるべきなのだが、本人は陰日なたを望む。

「どうしました、ブレック副官？」

「どうしましたじゃありませんよ。団長クラスは、すぐに会議室へ集まれと、ストラインさまが仰っていたじゃありませんか。カレン將軍が血眼になって探していますよ」

やや困ったような顔をするブレック。

「どうせ、会議に出たところで僕……私には、難しい政治の取引なんて出来ませんよ」

「ですが、此度の同盟。提案なされたのは、クロウ隊長、あなたです。いまや、亡きトライゼン將軍の跡を継ぎ、ほぼ騎士団総長のお立場にあるのですから、自覚なさってください」

自覚がないわけではないが、実際クロウが交渉に出て、同盟し天使と戦うことを強く訴えたところで、政治家の駆け引きに水を差すだけだということが分かっている。だから、そういうことは、一日の長あるストラインに任せ、自らはもう一つの懸案を確かめようと思っていた。

だが、ブレックの言うとおり、トライゼンの遺志を、カレン、キリクたちと共に引き継いだ自分は、いまや事実上の騎士団総長である。ガルナツクの戦いで敗北で、決定的に人材を失った国にとって、クロウはいつの間になくってはならない存在となっていた。

「副官、お願いがあるのですが、私が会議に出席している間に、マクギネス参事官の護衛としてやって来た、ダイムガルド騎士のことを調べておいてください」

「は、ダイムガルドの騎士ですか？ あのとやらと目立つ金色の鎧の……」

髭面に似合わず、きょとんとするブレックに、クロウは思わず苦笑すると、踵を返した。

「よろしく願います」

ルートニア要塞は、周囲を外堀で囲まれ、内部に街がある。大きな町ではないが、現在は王都からの移民で随分と騒がしくなっている。その町の中心には内堀と城壁があり、その中にルートニアの中心部、ルートニア城がある。建築様式的には、センチ・レーバンの都市作りの基本を踏襲しており、戦闘要塞としては、都市機能を持たない完全な砦であるガルナックの方が、難攻不落の要塞と呼ぶに相応しいだろう。しかし、このルートニアも、深い外堀に守られており、同時に本来の目的としては、セントレア海を越えて侵入してくるダイムガルド軍に対抗するために築かれた、強固な要塞である。街並みも複雑なブロック単位の迷路になっており、さらに、城下にくもの巣のように広がる地下通路を介して、侵入した敵を取り囲み一網打尽にするという仕組みもある。しかし、その地下通路が、太古の時代の遺跡である事を知る者はあまりいない。

そのルートニアに、戦争ではなく、同盟のために足を踏み入れた、最初のダイムガルド軍人がアルサス、セシリア、ジャックの三人であろう。

馬を厩舎に繋いだアルサスたちは、一人の騎士に案内されて、城内の部屋へと通された。気が付くと、マクギネスたちの姿はなく、代わりに部屋の前に、見張り役の騎士が槍を手に仁王立ちしており、事実上アルサスたちは客室に閉じ込められることとなった。

油断した、とまでは言わないまでも、迂闊であったことは否めない。

「これじゃ、俺たち人質じゃないか」

と、ジャックが嘆くのも無理はない。あっという間に、マクギネスと分断されてしまったのだから、護衛としてここまでやって来た意味が分からない。ジャックはふてくされたように甲冑を脱ぎ捨てると、軍服のボタンを外し、ラフな恰好で、イライラしながら部屋の中をぐるぐると廻る。

「落ち着け、ジャック。ここで事を荒立てても仕方がない。いざと

なれば、こっちはバヨネットがある。あんな槍ごときに負けたりはしない。三人でも、王国騎士団をまとめて相手できる」

諫めるようにセシリアが言うと、ジャックは本日何度目かの溜息をついた。セシリアもすでに鎧を脱いでおり、軍服姿で、部屋の真ん中のテーブルに用意された紅茶をすすっていた。当初は、毒や眠り薬を警戒したが、そのようなものは混入されておらず、ほのかな葉の香りが部屋の中を漂っている。

「同盟交渉は上手く行ってるのかな。ここへ閉じ込められて、もう半日近く過ぎた」

アルサスは、すっかり日が暮れた夜の城下町を、窓辺に寄りかかって見つめていた。時折、生ぬるい夜風が、もがり笛を鳴らしながら、窓ガラスを叩く。時刻は刻一刻と過ぎていくが、一向に何の報せも届かない。マクギネスと、あの少女たちが何処へ行ったのかも分からないままだ。

「くそ、もっと警戒しておくべきだった！ やっぱり、この国は敵だ！」

ジャックが頭をかきむしって、唸り声を上げる。

「ジャック、ここはアルサスの故郷の国だぞ。そんな風に言うな」
「分かってるっすよ！ でも、アルサス。お前の故郷だっていうなら、一体何がどうなってるのか教えてくれ。マクギネスどのは何処へ行った！？ 交渉会議はどうなっている！？ 俺たちはどうすればいい！？」

矢継ぎ早にジャックが問いかけるが、その答えに返しようもない。嫌な予感が頭を過ぎるのは、何も、セシリアとジャックだけではなかった。記憶を喪ったアルサスにとっては、たとえこの国が故郷だと言われても、見知らぬ外国に來たような気分であることに変わりはない。「忘れてしまった大切なこと」には、自分自身のこと、生まれてから十六年間の人生の思いですべてが、ごっそりと欠落してしまっているのだ。幸い、生活常識などの知識的なものは喪われていないし、体に染み付いていると思われる剣術も、一度剣を握れば

思い出す。そのため、生活に苦勞することがない分、余計にこの国が自分にとって縁もゆかりもない場所にしか思えない。

「わたしは、この国に来れば、アルサスが何か思い出すんじゃないかって、思ってた。でも、何も思い出せていないみたいだな。それだけ、あなたの心は傷ついた。記憶をなくしても、傷口に蓋をしなければならぬくらいに……」

セシリアがティーカップをテーブルに置く。白磁のカップには金色の絵付けが華を沿え、生活臭のまるでしない質素なこの客室に、あまりにも不釣り合いなもののように見えた。

「ネル……」

アルサスは、セシリアを見つめながらふとその名を呟いた。セシリアの横顔に、顔も思い出せない少女を重ね合わせたその声は、セシリアまで届かない。何も思い出せてはいないが、何も知らないわけではない。フランチェスカから、自分の正体も、彼女が知ることすべてを聞かされた。しかし、何も思い出せないまま、そういう話を聞かされても、ただ漠然とした不安が過ぎるだけなのもまた事実である。だが、そのことで、フランチェスカを責める気にはなれなかった。

「なあ、センチ・レーバン人。たとえお前が記憶を取り戻しても、お前は俺たちの仲間だよな……?」

ジャックがぴたりと足を止めて、問いかける。アルサスは、小さく笑って「もちろんさ」と答えたが、その言葉に絶対な確信はもてなかった。

「下手に事を荒立てて、交渉会議に水をさす真似はしたくないが、もう半日、丸一日が過ぎたら、こちらから行動を起こす。それまで、ジャックもアルサスも休養と、甲胃のメンテナンスを怠るな。いざとなれば、『翼ある人』と戦う前に、センチ・レーバン騎士団を戦うことになるかもしれない」

セシリアは、場の沈みかけた空気を払いのけるように、言うとき再びティーカップに紅茶を注いだ。

その時である、こんこんつ、と部屋の扉が小さくノックされる。

「だれだ!？」とジャックが苛立ちを言葉に乗せて、凄みのある声で言う、了承も得ることなく扉が開いた。

「アルサスっ!」

突然の声とともに、扉を開けた誰かが、一目散に窓際のアルサスに抱きついた。見れば、十歳かそこらの男の子だ。肌の色から察するに、ガモーフ人だろうか。魔法使いギルドのエンブレムが入ったブレザーを着た少年は、顔の半分を覆うような丸ぶちの眼がねと切りそろえられた前髪が、利発そうな印象を与えた。

「やっぱりアルサスだ。アルサスだ! よかったよう。生きてたんだね、ボク、ずっと心配したんだよ」

男の子は顔をくしゃくしゃにしながら、アルサスの顔を見上げる。それは、再開を喜ぶ嬉し涙だったのだが、アルサスには彼が何者なのか分からない。その戸惑いは、フランチェスカに抱きしめられた時に感じたものと同じだった。

「どうしたの? ボクだよ、ルウだよっ、忘れたの?」

アルサスの反応が鈍いことに、男の子……ルウも気づいたのだろう、困惑した顔になる。

「ごめん、ぼくには君が誰だかわからない」

とアルサスが言うと、ルウは更におびえたような顔をして、アルサスから離れた。分かっている、この子もあのフランチェスカと同じく、喪われた自分の仲間だったのだろう。だが、顔も名前も心当たりがなく、ただ頭の中で、きりきりと頭痛だけが走り抜けて言った。

「『ぼく』なんて、アルサスに似合わない。それに、その軍服も似合っていないよ」

「そう言われても……ホントに君が誰なのかわからないんだ。君は、フランチェスカさんの知り合い?」

「じよ、冗談きつってば! ねえ、アルサスっ、どうしちゃったの!?!」

泣き出しそうな顔になる男の子にいたたまれず、アルサスはセシリアとジャックの方に視線を向けた。二人とも呆然としながら、こちらを見ていた。しかし、ルウが開け放した扉の向こうから、鎧の音が三つこちらに近づいてくるのを聞き、すぐさま軍人の顔になると、傍らのバヨネットをすばやく構えた。

「やめなさい、ルウ」

現れたのは、フランチエスカだった。無論、ドレス姿ではなく、ギルド・リッターの白銀の鎧を纏っている。そして、彼女の傍らには、アルサスより少し年上の背の高い青年と、アルサスたちと同年代の色白の少女だ。二人とも、センチ・レーバンの鎧と騎士団長クラスが身に付けるマントを着用している。

「誰だ貴様たちっ！」

予期せぬ来訪者に、ジャックが敵愾心を露にして怒鳴る。ともすれば、引き金を引いてしまいかねない勢いだ。

「待って下さい、私たちは敵ではないはずです。どうぞ、武器を下ろしてください」

背の高い青年が両手を上げて、敵愾心を鎮めようとするが、聴く耳を持たないジャックは、バヨネットの銃口を向けたまま、青年を睨みつけた。

「うるせえ、俺たちをこんなところに閉じ込めて、敵じゃないだど？ だいたい、名前も名乗らずに、そんな子と言われて、信用できるか」

そんなジャックの敵愾心をそぎ落としたのは、騎士の鎧に身を包む色白の少女である。

「無礼者！ こちらは、センチ・レーバン騎士団長、クロウ・ヴェイル将軍です！ 武器を下しなさい、ダイムガルド兵っ！」

色白の少女……カレン・ミラ・ソアードのよく通る一喝に、セシリアが慌ててジャックのバヨネットを降ろさせ、自らも銃口を下に向けた。

「クロウ……ヴェイル」

アルサスは、じつと青年の顔を見つめながら、記憶の底に引つか
かるその名を呟いた。

91. ルートニア要塞（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せ下さい。

92. カシオッペイアの夜空

「あなた方は、アルサスの事をご存知なのですか？」

と言ったのは、セシリアだった。警戒心を隠すように、神妙な問いかけは、カレンによって撥ね付けられる。

「まず、そちらが名を名乗るのが、礼儀ではありませんか？」

普段大人しく口数の少ないカレンにしては珍しく、棘のある言い方だ。年の変わらぬ二人の間に、言い知れぬ空気が漂っていることをアルサスは感じた。かたや、センテ・レーバン騎士団長の一人、かたや、ダイムガルド軍の騎士。立場の違いがそうさせるのだ。

「これは、失礼しました。わたしは、ダイムガルド帝国陸軍近衛騎士団小隊長、セシリア・ライン大尉。こっちは、わたしの部下、ジヤック・ハイト軍曹。そちらの、フランチェスカどのは、遠い親戚に当たるそうです。それから、アルサス・テイル少尉も、わたしの部下です」

「なっ！」

セシリアの自己紹介に、カレンがあからさまに不快感を示した。その不快感が何であるか分からないセシリアはきよとし、ジャックはきつくカレンをにらみつけた。

「無礼ですっ！ そちらに居られる方は、アルサス……いえ、フェルト・テイル・レーバン第一王子ですっ！！」

カレンの言葉に、二人のダイムガルド人は一瞬ぽかんとして、すぐさま後ろを振り返った。いくつもの視線がアルサスに集中し、傍らの魔法使いの少年もアルサスの顔を見上げた。

「本当か、アルサス？」

セシリアの問いかけに、戸惑いを隠せないアルサスは首を左右に振った。分からない、と言う合図だ。本当に分からない。ルウと言う少年も、フランチェスカと共に現れた二人の騎士も、なにも覚えていないのだ。

「人違いじゃねえのか？　だって、こいつが着ていた騎士の鎧には確かに『アルサス・テイル』と刻まれていた。俺も確認したから間違いないねえ」

再び、小剣の付いた長細い箱を構えた、ジャックが言う。だが、今度はクロウが首を左右に振る番だった。

「アルサスは、フェルトがある目的のために、自分に与えた名前です。アルサスは、この国に伝わる伝説の王の名をもじったもの。この国は、武力によって統制した国ですから、子どもにそのような名前をつける親はひとりもいません。だから、アルサスと名乗っている時点で、彼がフェルトであることは間違いありません。それに、ガルナックで着用していた鎧に、アルサスの名を刻んだことは、僕が一番良く知っています。その名を忘れぬようにと、フェルトが自らに課した戒めです」

淡々と言うクロウなる騎士団長は、再会を喜びたいのをぐっと我慢しているようにも見えた。

「マジかよ……」

ジャックが呟く。信頼を得かけた仲間がよりにもよって、敵の親玉だとは思っても寄らなかつたのだろう。

「ま、待ってよ。たしかに、ぼくは記憶がない。自分が誰なのかも分からない。でも、だからと言って、この国の王子様だなんて、突飛なこと言われても困る」

思わず弁解の言葉を吐き出したアルサスは、余計クロウに確信を与えてしまったのか、クロウは少しばかり顔をほころばせると、

「懐かしいな。旅に出る前の君の喋り方……」

と言った。だが、やはり思い出すことは出来ない。この喋り方で、意識せずに飛び出してくるものであり、懐かしいなどと言う感慨は、何処にも湧いてこない。

「話は、フランチエスカさんから聞いている。でも、何も思い出せない。君のことも、フランチエスカさんのことも、君たちの言う、ネルという女の子のことも。このひと月あまり、ずっと何か大切な

事を忘れていたような気はしていた。でも、今のぼくは、ダイムガルドの軍人だ。セシリアとジャック、それにマーカスに助けてもらった命を、ダイムガルドのために使おうと決めたんだ。ぼくはもう、ダイムガルド人だと思ってる」

アルサスが言うのと、クロウたちは神妙な顔をして、眉間にしわを寄せた。

「殿下……」

やや睫を伏せて、カレンが呟く。

「よく言っただ、センチ・レーバン人。いや、アルサス少尉どの、見直した！ 聞いての通りだ、こいつは俺たちの大事な仲間だ、手出しするなら、ダイムガルド軍の名において、黙っちゃいないぜ！」

意気揚々と、ジャックがバヨネットを構えた。併せてセシリアもバヨネットを構える。

「彼がフェルト・テイルである確たる証拠はない以上、わたしたちはアルサスを貴様たちに手渡したりはしないっ！！」

「武器を下ろしてください！」

そういいながらも、ダイムガルドの新兵器を目の前にして、カレンは腰に携えた双剣に手をやった。一触即発。セシリアたちが引き金を引くのが早いか、カレンの双剣が飛刀となって、セシリアたちの胸を貫くのが早いか。客間は一瞬で凍りついた冷たい緊張感に包まれてしまった。

「本当に、君は何もかも忘れてしまったのかい？ 君が何者であるかそれ以前に、僕のこと、ルウくんのこと、フランチェスカさんのことも。ネルさんのことさえも」

クロウは悲しげな顔をして、問いかけた。

「ホントに、ホントに、ネルお姉ちゃんのこと忘れちゃったの？ 記憶がないなんて、冗談だね？」

アルサスの傍らで、ルウが懇願するような顔つきで言う。記憶のある自分、すなわち、フェルト・テイルは冗談をよく口にするよう

な男だったのだろうか。それすら思い出せないまま、アルサスは「ごめん」と少年に言った。

少年は潤んだ瞳で、アルサスを睨み付けると、

「アルサスのばかりっ！」

と一声叫んで、緊張した空気の真ん中をすり抜けると、客間を飛び出した。

「ルウ、何処へ行くのっ!？」

フランチェスカの呼び止める声は、ルウの背中を追いかけたが、少年はそれを無視して姿を消してしまった。残された場の空気は、見事に引っ掻き回されてしまったようだ。

「セシリア大尉、武器を下ろして。わたしたちは、アルサスに危害を加えるつもりはないわ。だって、彼は私たちの仲間でもあるんだもの」

落ち着いたフランチェスカの声音に、セシリアがバヨネットを降ろす。

「ならば、名に用でしょうか？ 交渉がうまく進まず、我々を始末に來ましたか？」

「そんなことはないわ。でも、確かに交渉は上手く行っていない……。せめて、アルサスが記憶を取り戻してくれば、フェルト殿下として、シオンさまの名代を務められ、同盟交渉を取りまとめられると思ったのよ」

フランチェスカが言う。しかし、ジャックは舌打ちしながら、「こんなところに閉じ込めておいて、今さら信用できるかよ」と毒づいた。

「同盟交渉、上手く行っていないって本当ですか？」

ジャックの毒を他所に、尋ねたのは、アルサスだった。クロウは、アルサスにこくりと頷くと、カレンを諫め、同盟交渉の現況を語り始めた。

記憶がない。しかし、確かに声も、顔も、瞳の色も、自分の知る

アルサス・テイルであることだけには自信がある。口を開けばつい喧嘩腰になってしまうことが多いが、本気でアルサスのことを憎んだりはしていない。むしろ、ルウにとってアルサスは信頼できる兄のような存在だった。

もちろん、王子である事を隠していたり、旅の本当の目的がネルを殺すことだったと言うことも隠していたり、そういうことには多少腹も立った。しかし、暴走するガムウの手からルミナスを守るため戦ったり、旅の間、時折心が折れそうになるたび、みんなを元氣付けていたのは、他ならぬアルサスだ。そんなアルサスも、ルウの事を信頼してくれていた。誰かから、無償の信頼を寄せられることは、子どもであっても嬉しいことで、特に、魔法使いの神童とてはやされ、他人に疎外感を感じていたルウにとって、掛け値なしの信頼は、友情の証でもあった。

だから、アルサスのことは大好きだ。もちろん、ネルもフランチェスカも同じだ。楽しい旅とは言いがたくても、四人でガモーフの地を歩いたことは、かけがえのない思い出でもある。

しかし、突然の旅の仲間の解散と、そして戦争。アルサスは、本名であるフェルトに戻り、戦いの中生死すら分からなくなってしまった。だが、ルウもクロウもフランチェスカも、アルサスにかかわるすべての人が、彼の死など信じていなかった。

そうして、数ヶ月を経て、帰ってきたアルサスはアルサスではなかった。言い換えるなら、フェルトでもなかったのだ。そのシヨックはとても大きかった。

何も覚えていない。自分が誰かも、旅のことも。だが、一番許せなかったのは、ネルの事を覚えていなかったことだ。

「ホントに、ネルお姉ちゃんのこと忘れちゃったの？」

そう問いかけても、アルサスは困ったような顔をして視線を逸らし、「ごめん」と言った。本人も何に謝っているのか分からないのだろう。自分の知るアルサスなら、そんな顔はしなかったと、思う。「ぼく」と呼ぶことも、外国の軍隊の服も、見知らぬセシリアとジ

ヤックという人への信頼も、ルウはすべてが裏切られたような気持ちになった。

「アルサスのばかりっ！」

喉の奥からこれでもかと言わんばかりの声で、アルサスを罵ったルウは、フランチェスカが止めるのも無視して、クロウとカレンの脇を通り過ぎ、客間から逃げ出した。迷路のような廊下を走りぬけ、城の屋上にあるテラスへと駆け上る。

「どうしたんだ、少年」

見張りの騎士が、半べそをかいたルウを認めて、そう気にかけてくれたのだが、なんでもないとぶつきら棒に答え、夜空を見上げる。思うよりも、星空は美しく輝き、涙も乾いていく。天上に輝くのは、魔法文字の形をした星座だ。ガモーフとセンチ・レーバンでは呼び名も、その星座が持つ意味も違う。ちょうど、山型が二つ連なったような形のそれを、ガモーフでは「カシオッペイア」と呼んでいた。いつの季節にも、必ず夜空に輝く星である。

「どうも、交渉は上手く行っていないらしい……」

星空を見上げるルウの背後で、騎士たちがひそひそと噂話をしてる。先ほどルウのことを気に掛けた騎士も混ざっているようだ。その話題がなんであるかは、すぐに察しが付いた。

「同盟を交わすためには、交換条件を互いに出し合わなければならぬ。ストライン卿は、ダイムガルドで採掘されたミスリルの三十パーセントを要求したらしいが、向こうの外交官もやり手だ。空白地帯へのダイムガルド軍進駐を認めさせようとしているらしい」

「空白地帯って、ギルドの管轄じゃあないのか」

「いや、もともと三国で取り決めたことだ。ギルドに空白地帯を領有する権利はないさ。だから、この期に既成事実を作って、空白地帯をのつとるつもりだろう」

「だいたい、クロウ将軍が提案した同盟だ。向こうは『同盟しやるんだから、それくらい譲れ』って具合に、上からものを言っているんだよ。人の弱みに付け込みやがって」

「でもよ、俺たちだけじゃ、あの化物には敵わない。俺は、ガルナックで見たんだ。あの不死身の空飛ぶ化物を。斬っても突いても、光の粒になって蘇る」

「そして、人を光の粒に変えて消し去るんだろう？ そんなことはわかってるさ。ただ……、戦後のことも考えておかなければいけないってのが、政治屋どもの考えなんだろうよ」

「この戦に勝たなきゃ、戦後もないのにな」

折角の星空に水を差すような噂話に、耳を傾けるつもりはなかったが、自然と彼らの会話が耳に入ってくる。ルウは騎士たちに聞けないように溜息をついた。大人たちは、手を取り合うだけでも、損得を考えなければならぬのだろうか。「一緒に戦いましょう」と言うだけの簡単なことなのに、そうは行かないのが大人の難しいところなんだろう。賢い子どもである分、ルウはそのことについてとやかく言いたくはない。

ただ……、相手はネルだ。いつも穏やかで優しく、どこか悲しげな顔は絶対に忘れることが出来ない。しかし、好きな男の子の声も届かぬくらい、絶望し決意したネルは、今や人類の敵だ。白い翼を生やした化物を操り、世界中を蹂躪している。しかもその何処にも、ネルの心が見えないことが、ルウにとっては恐ろしいことだった。

せめて、ネルをとめることが出来たなら。それが出来るのは、アルサスだけだと思っていた。

「だって、アルサスはネルお姉ちゃんが好きで、ネルお姉ちゃんはアルサスのことが好きなんだ……」

呟いたルウは、その言葉が夜風につけて、カシオッペイアの方角に飛んでいくの目で追いかけた。ふと、その視線に、きらりと光るものが見える。流れ星？ いや、違う。一瞬だけ光ったあと、それが、白い翼の群れであることに気づいた。

こんな夜更けに鳥は飛ばない。エイゲルだって、夜は飛ばない。あれは……。

「みんな、あそこっ！ 『翼ある人』だっ！」

ルウは反射的に振り返って、騎士たちに声を掛けた。騎士たちは、ルウの指先を追う。夜空に見える無数の白い翼。それは、紛れもなく、「翼ある人」の大群だった。

「敵襲ーっ！ 敵襲ーっ！ 全軍、配置に付けっ！」

見張りの騎士が角笛を吹き鳴らす。その音は次々と、伝令役の兵士につたわり、瞬く間にルートニア要塞全体を幾重にも包み込んだ。

92. カシオッペイアの夜空（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せ下さい。

93. 赤銅の騎士

「ストライン卿は、採掘されたミスリルの三十パーセントを要求している。ミスリルは、センテ・レーバンにとってレアメタルだ。たとえば、三十パーセントでも、センテ・レーバンで採掘されるミスリルの何倍にもなる」

クロウの言葉に耳を傾けていたセシリアは、少しばかり苛立ちを募らせていた。やはり、思ったとおり交渉が上手く行っていないかったのだ。ジャックに「落ち着け」と言った手前、その苛立ちを露にするわけには行かなかったが、平然と言っているのける、クロウを腹立たしく思わずにはいられなかった。

「しかし、クロウさま。我が国とて、無限の資源を有しているわけではありません」

セシリアは勤めて丁寧な言葉で返す。相手は、センテ・レーバン騎士団の総長の立場にある男だ。

「先ごろ、ダスカード採掘場が敵の襲撃に遭い、現在は採掘事業そのものが停滞しています。センテ・レーバンに三十パーセントのミスリルを持っていかれたら、我が国では餓死者が出ることになります。そのことを、ストライン卿は分かっておられないのですか？」

「そうだ！ 俺たちは、センテ・レーバンのために身を切りに来たんじゃないえ！ 同盟を結んで欲しいって、そっちが言うから、ここまでやってきたんだっ！」

セシリアに同調して、ジャックが吼える。相変わらず窓辺に佇むアルサスだけは、話の外でぼんやりとしていた。きっと、あの魔法使いの少年のことを思い出しているのだろう。時折、頭痛に顔をしかめている。

ルウが部屋から飛び出して言った後、交渉はどうなっているのか、どうしてこのような場所に閉じ込められなければならないのかを、クロウたちに尋ねたのはセシリアだった。

「両者言い分があるのは最もだと思う。僕は、それでもミスリルより、君たちの力を借りたいと思っている。しかし、僕は政治家ではないから、戦後のことまで考えられない。だけど、君たちにとってダイムガルドが大事なように、僕たちにとってセンチ・レーバンは大事なんだ。だから、マクギネスどのの言い分を聞き入れることも難しい」

思いがけず、真つ当な言葉で返されて、セシリアは戸惑ってしまった。クロウの傍には、自分と年の変わらない、少女が参謀よろしく寄り添っている。名はカレンと言ったか。彼女もまた、騎士団長の一人である。騎士団長といえば、ダイムガルドで言うところの、大隊長に匹敵するだろう。すなわち、アルフレッド大佐とほぼ同格と言ってもいいかもしれない。

たった十八の若さで底まで昇った理由は、この国が血筋や家柄を重んじる旧軍制の国家であることと、ガルナツクの戦いで、多くの将兵が死んだことが挙げられるだろう。ルートニアにいる王国騎士のほとんどが、若者ばかりであり、センチ・レーバン軍が如何に逼迫した状況かが分かる。

だからこそ、クロウの言葉は本心だろう。

「両国に、無償の信頼があれば、このようなことにならなかったのだろう。しかし、長い歴史の中で、三国は常に水と油の仲だった。今更、何の条件もなく、手を取り合うなど、土台無理なことなのかもしれない」

「では、クロウさまは、この同盟が失敗すると、仰るのですか？同盟を立案したのは、クロウさまだったのではないのですか？」

溜息交じりのクロウにセシリアは問いかけた。

「そうだ。両国間の隔たりは理解しているつもりだが、今は共通の敵に対して、手を取り合うことが大事だ。シオンさまであれば、僕の意図を理解してくれただろう」

そういいながらも、クロウの視線はアルサスに向いていた。どうしたものか、そんな風に視線がクロウの心中を物語る。すでに何時

間もの時を費やした同盟交渉は難航し、再会を喜びたい友は記憶をなくしている。しかし、どちらもこのままにしておくわけにはいかない。騎士団総長を務める身として、悩ましい問題なのだろう。

「だから、君たちの力を借りたい。正確に言えば、アルサス。君にフェルトとして、同盟を取りまとめてもらいたいんだ」

「ぼくに!?!? でも、記憶が」

クロウの言葉に驚くアルサス。セシリアも驚きながら、しかしクロウが冗談を言っているようには見えなかった。

「本気ですか、クロウさま。そもそも、あなた方の言う、センチ・レーバンの王子殿下かも疑わしい。アルサスはアルサスで、フェルトではないのだから」

セシリアが言うと、クロウはこくりと頷いた。

「本気です、セシリアさん。たとえ、僕の思い違いで、彼が他人の空似であっても、一芝居打って欲しい。なんとしてもこの同盟を果たし、ガモーフを侵略する『翼ある人』を倒さなければならない。それが、人類にとって共通の急務なのです」

確かに、本当にアルサスが彼らの言うとおりの人であったとしても、クロウたちの勘違いでアルサスがフェルトでなかったとしても、アルサスがフェルト王子の振りをして、同盟を取りまとめることが出来れば、すべてが上手く行くかもしれない。そして、セシリア隊に課せられた、護衛任務とは別のもう一つの任務、「黄金の鍵」による、ルートニア遺跡の解放。そこに眠る記憶を知り、そしてアストレアの天使に対抗する術を見つけることを、成し遂げることが出来る。そうしてはじめて、あの不死身の軍隊と戦うことが出来るのだ。

「お召し物はこちらで用意しております。殿下の礼服です」

カレンが言うと、客間の外で待っていた給仕の老婆が、桐の箱に入った衣類一式を、部屋の隅のベッドの上に広げた。王子殿下が式典など公式の場で着用するための白絹の服、青のマント、王冠、帯剣。

「どうする？ アルサス。あなたが決めるんだ。わたしたちは、全力でサポートする」

ちらりと、王子殿下の衣類を見遣ったセシリアは、アルサスの表情を伺った。とても固い顔をしていた。頭痛がきりきりとするのか、それとも、突然降って湧いた大役に戦っているのかはよく分からなかった。だが、アルサスは、その場にいる全員の期待を込めた視線に応えた。

「保障は何も出来ないよ。ぼくが偽者だとばれるかもしれない。それでもいいというなら、ぼくは本当のぼくの振りをする」

アルサスは、窓際から給仕の老婆の傍まで歩み寄ると、そっと帯剣を手を取った。意匠に凝り、宝石などがちりばめられた、実用向きではない飾りの剣だ。しかし、オーダーメイドのその剣は、アルサスの身長や手の大きさに、しっくりと馴染んでいるように見えた。と、その時である。

甲高い音と低い音が入り混じったような、角笛独特の音が、全員の耳朵を打った。それとほぼ同時に、「敵襲ーっ！！」という、叫び声が反響する。クロウはいち早く立ち上がると、先ほどまでアルサスのいた窓辺へと駆け寄り、外の様子を探った。そして窓の外に何か見つけた、クロウは呟く。

「あれは……」

「敵襲の知らせが角笛とは古風っスね」

小さく囁くようにジャックが、セシリアだけに聞こえるように言った。しかし、どうやら、クロウは耳の良い男らしく、「伝統は我ら王国騎士団の誇りだ」と返すと、すぐさまカレンに命令を飛ばす。「お芝居どころじゃなくなった。カレン將軍、会議室の皆さんを避難誘導してください。それから、防衛拠点のキリク將軍に連絡を。」

僕……私が『翼ある人』を抑えている間に頼みます！」

「クロウさま、西棟のシオン陛下はいかがいたしましょう！？ 会議室のある東棟からでは離れすぎていて、どちらにも手は回せません！」

カレンが問う。現在、セシリアたちがいるのは、ルートニア要塞の城にある、南棟の客間。渡り廊下で東棟に連結されているが、西塔の一番奥にある部屋で眠るシオンの下へ行くには、北棟を越えて西棟に入るか、一度南棟に戻って、西棟へ向かう他ない。いわゆる二度手間になってしまうのだ。時間も手勢の数も限られている中で、東棟のストライン、マクギネスらの避難誘導と、西棟にいるシオンにまで、手を回すことは出来そうにもなかった。

「憎憎しいな、翼があるということが……！」

吐き捨てるように、クロウが言い放つ。空を飛べば、国境も海も山も砂漠もない。防衛拠点を敷いたところで、飛び越えられれば一巻の終わりである。そんなことは、クロウとて分かっていたことだろう。だが、同時に、防備に対して圧倒的に人手が足りていないと言う、事実も突きつけられたに等しい。

やがて、騒然としたざわめきが城下から聞こえてくる。戦闘が始まったのだ。剣で斬り殺しても、弓矢で射抜いても、魔法で焼き払っても、光の粒になって再生する。だが、彼らの三叉槍に貫かれれば、人間は同じような光の粒になり、虚空へと消え去ってしまうのだ。

その不条理を前に、迷っている暇はない。シオンかストラインたちか、そのどちらかを捨て置く他ない。その責務が、クロウの眉間に、ひどく似合わないシワを寄せさせた。

「ぼくたちが、シオン陛下をお助けする」

唐突な声は、アルサスのものだった。アルサスは、壁際に立てかけたバヨネットを取り上げると、セシリアとジャックに同意を促すような視線を向けた。

「待て待て、どうして俺たちが、敵国の女王を助けなきゃいけないんだ！」

予期していた返答が、ジャックから返ってきた。すると、アルサスは小さく微笑んで、

「ウルガンさまが仰った事をわすれたのか？ 国境なんて、そんな

ことばかり言っていたら、やつらに勝つことは出来ない。『翼ある人』はダイムガルドにとっても、センテ・レーバンにとっても共通の敵。それなら、ぼくたちにも協力する理由はあるはずだ。もちろん、ダイムガルド軍人として」

と、ジャックの憤懣をするりとかわす。だが、まだアルサスの眼には、本当の自分への戸惑いが浮かんでいた。センテ・レーバンの王子という、それが事実か、クロウの妄言か、それを信じるか、信じないか、甘んじて受け止めるか、受け止めないか。迷いにも似た、いくつもの二択が去来しているかのように、セシリアは感じた。

「同盟の成否は、こと、ダイムガルドにも関わること。わたしも、共通の敵を滅ぼすためには、センテ・レーバンと手を結ぶことが必要不可欠だと思う。ジャック、厭なら、ここに残れ」

セシリアも小脇のバヨネットを抱えなおした。もちろん、ジャックに言った言葉は、半分彼の性格を見抜いての科白だ。残れと言われれば、厭だ、と言うことは分かっている。案の定、ジャックは溜息混じりに、まだ納得のいかない顔をして、

「隊長がそういうならしかたがないっす」

と、踵を返した。

「分かりました。シオン陛下のことお願いいたします。フランチェスカさんも、彼らに同行してください」

クロウはフランチェスカにそう促すと、自らは剣を手に客間を後にする。続いてカレンも、セシリアたちに一礼すると、そそくさと自らの任務に就いた。

「さてと、フランチェスカどの。シオン陛下の居られる、西棟に案内してください」

二人の足音が消えると、セシリアはフランチェスカに案内を頼む。フランチェスカの手には、いつの間にか、長柄の鉄槍が握られている。ギルド・リッターには、武具の決まりがない。主に剣を使うものが多いとは聞いているが、そのほかにも魔法使いであったり、弓矢使いなどもいるが、槍を好む人物は少ない。

「ああ、これは、わたしの部下から手向けにもらったものよ」

セシリアの視線が鉄槍に向いていることに気づいたのか、フランチェスカが言う、そして、ちらりと遠い親戚の顔をみて「ちょうど、ジャック、あなたのようなタイプの部下だったわ」と、付け加えた。それが、気に食わなかったのか、ジャックはぶっきら棒に返す。

「無駄話してる余裕はねえ。さっさと、シオン陛下のところへ案内しやがれ、遠い親戚」

「そうね、こっちよ、付いてきて、三人とも」

そう言うと、フランチェスカは、すらりとした長い足で床を蹴った。セシリアは、アルサスとジャックを促し、甲冑を着込むことなく軍服姿のまま、フランチェスカの後を追った。

客間を後に、いちろ廊下を駆ける。要塞の全体が石で出来ており、廊下の床には赤いカーペットがしかれているにもかかわらず、軍靴ぐんかのから伝わる感触はひどく固い。ばたばたと足音を響かせつつ、西棟へ連なる、渡り廊下へ出た。屋根がなく、ちょうど橋のような渡り廊下を走れば、西棟と呼ばれる城砦である。

夜風の隙間から、戦いの音がここにも聞こえてくる。空から舞い降りる「翼ある人」の前に、苦戦を強いられていることは明白だ。

「セシリア！ 上っ！！」

背後からアルサスの声がする。同時に、ばんばんっ、と火薬の弾ける音がして、セシリアの頭上をいくつかのパイルが飛んだ。アルサスが、バヨネットの引き金を引いたのだ。見れば、頭上に「翼ある人」の姿。アルサスの放ったパイルは、見事に「翼ある人」の弱点である胸倉を貫いた。

ところが、「翼ある人」の体が弾けて光の粒となり、夜風に散る瞬間、黒い影……いや、月明かりに一瞬だけ紅くきらめく人影が、セシリアたちの行く手に舞い降りた。

「この先に行きたければ、わたしを殺すか、それともあなた方が持っている、『黄金の鍵』を渡しなさい」

人影は、女の声でそう言うと、ゆっくり立ち上がる。

二十歳前後の華奢な体を包み込む赤銅の鎧。胸当てには鷹の紋様が意匠として刻まれ、両手には長さの違う二対の剣が握られていた。輪郭の細い顔立ちや、長いしなやかな栗毛の髪を見るまでもなく、それはセシリアの知らない女だった。

「誰だ！ 貴様！！」

セシリアは、バヨネットの狙いを絞った。

「そうですね、あなた方にお会いするのは、これがはじめて……。わたしは、リアーナ・ロシェット。金の若子メツツエさまの理想に共感した者……。いえ、こう言ったほうが、お分かりになれるかもしれない」

ふっと、鉄面皮のような顔に笑みが浮かぶ。仰々しい赤銅の鎧がまったくに合っていない、たおやかな美女の顔つきではあるが、どこか冷たく感じていた。その顔に笑みが浮かぶと、空恐ろしい。まるで、目の前にいるセシリアたち四人を獲物か何かのように見ている。

「ライオット・シモンズのメイド……」

リアーナ・ロシェットが言う前に、呟いたのはフランチェスカだった。

「何だって!？」

一堂、声をそろえて、リアーナの鉄面皮に浮かんだ微笑を見た。

93. 赤銅の騎士（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せ下さい。

94. フォトン

リアーナ・ロシエツト。ギャレット・ガルシアにより、野望の最中で死んだ宰相、ライオット・シモンズの世話係をしていた、メイド長である。鉄のメイド、と周りから言われていたそうだ。直接、フランチェスカが彼女と顔をあわせるのは、はじめてのことだが、名だけならば、騎士さまことクロウ・ヴェイルから聞き及んでいた。数ヶ月前の、即位式典事件。かつてヨルンの戦いで、二百万の間を一瞬で塵に変えた白き龍の力を手に入れようと目論んだライオット・シモンズは、シオン陛下と銀の乙女を自らの意のままに操ろうと、レパードの奇石による魔法装置を、少女たちに取り付けるように、リアーナに命じた。ところが、銀の乙女が着用したサークレットに埋め込まれたそれは壊れていた。壊したのは、リアーナである。

人の心を操るのは簡単なことではない。意志そのものを奪い取るためには、まったく傷のないレパードの奇石を、着用者の身の丈にあった大きさに練磨する。寸分の狂いもなく。裏を返せば、身の丈に合わないレパードは何の効果も示さないのだ。実際、リアーナは予めメツツェに渡された、少し大きめのレパードと、銀の乙女のサークレットに仕込まれたレパードを取り替えた。

リアーナにそれを命じたのは、自ら「金の若子」を名乗ったメツツェ・カーネリアである。彼の目的は、行方知れずとなった銀の乙女を見つけ出し、そして来るべき約束の日のため、封印された女神より与えられし「奏世の力」を目覚めさせることだ。そして、彼は世界を生まれ変わらせるという使命を果たそうとしている。

だが、忠実な部下であったメツツェの裏切りと同時に、即位式典以降姿を消したリアーナの裏切りは、センテ・レーバン王国にとって、衝撃の出来事でもあった。

ライオットに、それだけ人望がなかったのか、それとも、リアー

ナに何かしらの事情があったのか、フランチェスカには到底分りかねる。常識的な考え方をすれば、メッツェのやろうとしていることは、世界を一度滅ぼし、自分の理想とする世界を作ることだ。そのどこにも、フランチェスカは魅力を感じていなかった。世界を滅ぼすということは、あのヨルンの戦い以上の人間が死ぬと言うことだ。そんなこと、許されるはずがない。だが、リアーナは違う。すくなくとも、メッツェとネルの理想に感化されている。

だから、似合いもしない赤銅の鎧に身を包み、二本の剣を構え、対峙しているのだ。

「さあ、ハイ・エンシェントから預かった『黄金の鍵』を渡しなさい。さもなくば、この聖剣アロンダイトで、あなた方を切り刻む。この剣に貫かれれば、あなた方はフォトン化することも出来ず、来世を失うことになりますよ」

そう言うと、リアーナは二対のアロンダイトを交差させ、剣身と剣身をこすり合わせた。寒気のするような金属音が背筋に悪寒を走らせる。

「ハイ・エンシェントをすべて狩り、ダスカードより帰還したギャレットから聞いています。あなた方が、黄金の鍵を持っていることも、フェルト殿下、あなたのことも……。ギャレットは似合っていないといっていました、そのダイムガルドの軍服、よくお似合いじゃないですか」

「お褒めにあずかり光栄だな。でも、あいにく、あんたの赤銅の鎧は、あの黒衣の騎士そっくりで、似合っていないぞ」

皮肉めいたアルサスの口調は、まるでフランチェスカの知るアルサスの喋り方そのものだった。一瞬、記憶を喪っているのが嘘ではないか、とさえ思えてくる。それでも、ダイムガルド帝都で再開したときのアルサスは、明らかな他所他所しさがあった。

根本は変わっていない。アルサスは、本当の自分がどんな人間なのか、不安に思っているようだが、それは彼の取り越し苦労だと、フランチェスカは思う。

「そうですか……。わたしもこのような無粋な恰好は好みません。しかし、天使の騎士となったわたしには必要なものです」

「天使の騎士？」

聴きなれないリアーナの言葉に、フランチェスカは小首をかしげる。

「ええ、そうです。フランチェスカ・ハイトさま。わたしとギャレットさまは、アストレアの天使……。即ち奏世計画の子を守る左右の騎士となったのです。あのお方の理想を叶え、この下らない世界に終止符を打つために」

「そして、あなたの思い通りの世界にするのかしら？ エゴイズムだとは思わないの？ 世界の誰も、この世界が生まれ変わることで望んではいないわ」

「そうでしょうか？ 富める者はますます富み、貧しい者はますます貧しくなる。不公平極まりないこの世界で、今日も明日も争いと憎しみだけが横行する。それを、世界のありのままの姿と受け入れられるのは、支配者階級の人間、即ち、王族や神官、皇室の人間だけです。あなた方は、ハイゼノンで見たはずです。この世界のなれの果てを。血で血を洗う戦争を最後に仕切ったのは、フェルト殿下、あなたの名でした……。と言っても、殿下は覚えておいでではないでしょうけれど」

淡々とリアーナは続ける。確かに、ハイゼノンで騒乱を治めたのは、アルサスが自ら書き記した書状だった。それにより、独立自治権を有するマレイア・ハイゼノンの領地に、王国騎士団が立ち入り、貧者と統治者の騒乱は幕を下ろしたのだ。

だが、その騒乱に巻き込まれたネルは、血の繋がらない、しかし実の血縁以上の絆を持った妹を喪い、心を壊しかけた。そして、それを救ったのがメッツェであり、彼女もまたメッツェの理想に感化され、リアーナと同じように感じながら世界を見下ろしているのだ。「世界再誕を望まない人間がいらない、そう言い張ることこそ、あなた方のエゴイズムです」

「だけど、それであなたたちの行為が正当化されることはないわ。現に、あの『翼ある人』たちは、人々を殺しているのよ」

「どうやら、あなた方は、エンゲル・フェーダー……つまりあなたがたが『翼ある人』と呼ぶ者たちについて勘違いなされているようです。天使である、銀の乙女が『奏世の城』で目覚めさせたのは、殺戮の化物ではありません」

「御託を並べるな！ 現に、多くの人が光の粒になって消えているじゃないか！！ 銀の乙女は、この世界の人間を殺す、殺戮者だ！」
フランチェスカに先んじて、アルサスが声を張り上げた。すると、何故かリアーナは口角を吊り上げる。

「いいえ、そうではありません、フェルト殿下。銀の乙女は、人間を一時的に眠らせているだけです。あの式典で、白き龍の光に包まれたルミナスの人たちも同様です」

「何！？」

「エンゲル・フェーダーの三叉槍で突かれた人間は光の粒、即ちフォトン・ゲージとなるのです。そのフォトンにはあらゆるその人間の情報が複製され、奏世の力によって世界の傷が癒えて、新たな世界に生まれ変わったその時、再び正しい心を持った生命として新たな世界に生まれます。つまり、三叉槍に突かれた人間は死ぬのではないのです。一時的にフォトンに姿を変えただけです」

リアーナのいつていることの意味の半分もフランチェスカには良く分からなかった。三叉槍に貫かれた人は光の粒となる、その光の粒をフォトンと呼ぶらしい。フォトンと言う言葉は、式典会場でメツツエが使った言葉だ。しかし、そのフォトンとは何なのか、それさえも分からない。

同様に、アルサス、セシリア、ジャックの三人もリアーナの言葉を疑いの眼差しで見っていた。フランチェスカは知らないことだが、セシリア隊の隊員であったマークス・ヒルは、そのフォトンとやらが体から漏れ出し、いまま日に日に生気を失ってしるのだ。それを知っているからこそ、彼らはリアーナの言葉を信用できなかった。

「分からなければ結構です。分かっていたただく必要はありません。ただ、一つだけご理解下さい。すべては、苦しみ悲しみもない世界のためです。それは、白き龍が与えるものではない。アストレアの天使が与えるものなのです。さあ！ 黄金の鍵を渡しなさい。世界に現存する、最後の鍵。それがあれば、計画は実行に移されます」

「渡すわけにはいかないわ！ あなた言うことはわたしたちには途方もなく難しいこと。だけど、これだけは理解しているつもりよ。メツツエが作り上げようとする新たな世界を、この世界に生きるすべての人間が、受け入れているわけではないと言うこと。わたしたちは、あなたたちほど、世界にも絶望していないし、人間にも絶望していない。望みと可能性は沢山あるんだって、知っているのよ。そうよね、アルサス」

同意を求めるように、アルサスに言った。振り返るまでもなく、アルサスが頷いたことだけは確かだ。

「どうやら、皆さんとは分かり合えないようですね……。ならば、あなた方とこの要塞を攻め落とし、力づくで奪い取る他ありません。願わくは、メツツエさまとハンナさまの作り上げる新世界では、あなた方と分かり合えることを」

リアーナの両手に握られた剣、アロンドイトが月明かりにキラリと光る。一瞬にして、その刃に殺意に似たものを感じた。その剣に刺されれば、おそらく「翼ある人」の槍に貫かれた時と同じように、光の粒になってしまうだろう。

「フランチェスカどの、下がって！」

威勢良く、要塞のざわめきを突き抜けるセシリアの声だった。その瞬間、アルサスたちの姿がフランチェスカの脇を通り過ぎた。手にした、バヨネットと呼ばれる、フランチェスカの知らない武器が火を噴く。

「ジャック、アルサス、十字砲火！ 敵を逃すなっ」

セシリアの声に併せて、アルサスは蹴りだした。何度も訓練はしているし、ダスカード遺跡でも実戦を積んだ。おかげで、多少なり

ともバヨネットの扱いには慣れてきた。確実に経験はこちらが上である。

アルサスとジャックが渡り廊下の左右の欄干に駆け寄り、セシリアはその中心で、リアーナ・ロシエットとぶつかる。リアーナのアロンダイトと、セシリアのバヨネットの小剣が、甲高い金属音を奏でて、ぶつかり合い火花を散らした。

「今だっ！！」

アルサスは、対側のジャックに目配せをすると、すかさずバヨネットの引き金を引く。いつもなら、兜のバイザー裏に仕込まれた、ヘッドアップ・ディスプレイなるものが照準を誘導してくれる。しかし、今は軍服のまま。感覚と読み、バヨネットのパイル発射口付近に設けられた照準器と呼ばれる突起だけを頼りに、セシリアに流れ弾が当たらないように、狙いを研ぎ澄ませた。

橋のような渡り廊下の両端から発射されたパイルは、同時に交差する射線を描きながら、リアーナだけを狙う。しかし、危険を察したのか突如リアーナは踵を蹴って、後ろへと飛びのいた。

予備の弾倉は持ち合わせていない。無駄撃ちをするわけにはいかず、反射的に射撃を止めたアルサスは、すばやく「迅雷の剣技」のステップでリアーナとの間合いを詰めた。

「せい、やあっ！」

小剣を叩きつけるように、バヨネットを振り下ろす。リアーナは機敏な反応を見せて、しゃがみこむとアルサスよりもすばやい動きで、アルサスの足を払った。

「アルサスっ！！ 危ないっ」

フランチェスカの声がする。そう呼ばれることにどこか懐かしさを感じたその瞬間、視界の星空がぐるりと反転し、アルサスの体はバランスを失って横転した。肩から強く橋の床面に叩きつけられて、痛みが走る。まずい、このままではアロンダイトの餌食になる！

「させるかーっ！！」

怒鳴り声と共に駆抜けるフランチェスカが、鉄槍を振り上げた。

突き、薙ぎ払い、振り下ろし、振り上げ、また突き。しなやかに鉄槍が風を切る。受け流すリアーナも、両手の剣を巧みに使いこなし、打ち払い、掛け流す様は、まるで二人が剣舞にでも興じているかのようだ。

だが、まったく隙がない。一瞬たりとも気を抜けない、緊張感で攻めと守りが互いの武器を打ち合うのだ。

「大丈夫か、アルサス！」

駆け寄るセシリアが心配そうに、アルサスを見つめる。だがジャックに助け起こされたアルサスの顔は青ざめていた。

「ふ、フラン……だめだっ、深入りするなっ」

アルサスは、よろめきながら立ち上がる。と、その刹那フランチェスカに隙が出来た。「フラン」その言葉に反応を示してしまったのだ。その一瞬の心の機微をリアーナは読み取った。防戦一方だったリアーナが、二対のアロンダイトをバツの字に交差させ、フランチェスカの鉄槍を挟み込んだ。リアーナの周りの空気が陽炎のように揺らぐ。

「しまった！」

思わぬ力に、フランチェスカはうろたえた。鉄槍を挟み込んだまま、リアーナの鋭い膝打ちがフランチェスカの腹を抉る。と同時に、辺りのざわめきが消え無音の空間に変わり、まるでスローモーシヨンのような感覚に襲われた。脳が生命の危機を感じ、視覚、聴覚などのあらゆる五感をシャットアウトしたのだ。

「ここまです、フランチェスカさま」

囁くリアーナの声だけがはつきりと、フランチェスカの耳朶を叩く。次の瞬間、狂気を孕んだアロンダイトの刃が、フランチェスカの首筋に迫った。

94. フォトン(後書き)

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せ下さい。

95. 立ち上がれ!

セシリアの制止を振り切り、アルサスは駆け出した。ゼロコンマ一秒。その瞬間にフランチェスカの首が切り落とされる。そんなことがあってはならない。何故なら、フランチェスカは旅の仲間であり、友なのだ。激しい頭痛の中で、アルサスはそのことに気づいた。いや、思い出したのだ。

その一点の突破口から、まるで堰が決壊するかのように、記憶が溢れかえり、あらゆることが、フラッシュバックのように蘇った。

『権力者の手に渡る前に、彼女をその手で殺し、この世界に平和をもたらすのです。それは、己だけの幸福のためではなく、世界すべてに生きる人の平和のため。あなたに、世界を想う心があると、母は信じています』

メリクス湖畔の王家別邸で、アルサスを育ててくれた、優しくも厳しい母の言葉。それがすべての始まり……。

『レイヴンのアルサスに言われたくないよ。あんなすごい力を見せてられて、学校の勉強なんかやってらんないよっ！　ボクも『奏世の力』のこと、知りたいんだ!』

ルミナス島で出会ったのは、どこか生意気だが憎めない魔法使いの少年だった。その瞳は真っ直ぐに未来を見つめ、そんな少年にアルサスも弟のように思っている。

『そんなことはないわ。でも、わたしの心は、間違っていると言っている。己の信念を曲げて、こんなか弱い女の子を殺すことが出来ないだけ。どちらを取るか。表か裏か、白か黒か、光か影か、上か下か、あなたかわたしか。わたしが選ぶのは、わたし。それだけのことよ』

ウェスアで出会ったギルド・リッターの女隊長は、飄々とした食えないやつだ。だが、いつでも冷静で、アルサスたちを影から支えてくれる。

『そうか……だったら僕は何も言わない。君の親友として、ヴェイル家の騎士として、君の力になるよ』

身寄りをなくし、アルサスと共に育った親友は、常にアルサスの傍にいた。そして、迷いの中で戦い続け、気丈な騎士となり、今もその友情に変わりはない。

『策が成らねば、そなたはあやつらに殺されるのであろう？ それでは、あの娘の心を救ってやることが出来ない。それは、即ち、世界が減びる。生まれ変わった世界に、そなたも我もない……。それを止めることが出来るのは、そなただけだ』

『まだ時間はある。ネルが世界を滅ぼす前に、もう一度説得することとは出来るはずじゃ。そのためにも、そなたはここで死んではならん』

人語を解する魔物の長にして、アルサスのことを守ってくれた、ヴォールフとエイゲルは、共に人間の未来を信じ、そのすべてをアルサスに託した。彼らの言葉は、胸に熱く刻まれている。

次々と蘇る、出会いと別れ。ルウ、フランチェスカ、クロウ、バセツト、トンキチ、ウルド、メル、クレイグ、マレイア、カレン、キリク、トライゼン……。出会った数だけ、アルサスは様々な言葉をもらった。

そして……。

『わたしは、多分あなたを信じられない……。嘘で塗り固めた、あなたの言葉を。だって、そうでしょ？ あなたは現に、わたしを剣で貫きました。人が分かり合えないというのなら、あなたとわたしも分かり合えない。だから、あなたの剣がもう一度、わたしを貫く前に、わたしは世界を変える』

あの子は、絶望の中で心の奥底に明るさを閉じ込めて、ただ頑な顔でそう言った。その柔らかな手を掴み引き寄せようとしたアルサスを拒むかのように、彼女は愁いを帯びた顔のまま、金の若子と共に姿を消したのだ。それが、すべて自分の所為だったとは思いたくない。だが、少なからず、彼女の信頼を裏切ったのは、他ならない。

自分自身であり、その迷いを彼女は感じ取って、銀の乙女となった。世界を生まれ変わらせる、銀の乙女に戻ったのだ、封印された記憶とともに。その後姿さえも忘れていた。夢に見ても誰だかわからなかった。だが、今ならはつきりと分かる。

彼女の名は、ネル。

本当は世界のために、彼女の力が目覚める前に、殺すつもりだった。だがそれは出来なかった。何故？ それを問いかけるには、あまりに気恥ずかしい。それだけ、彼女の笑顔や優しさにアルサスは心惹かれていたのだ。

だが、ネルと訣別し、そして自らはフェルト・テイルとなり、ガルナツクの戦いに赴いた。それは、ほとんど逃げているようなものだった。そうして知ったのは、人間が愚かで、分かり合えない生き物だということ。

トンキチが救い出す寸前、「翼ある人」には目もくれず切りかかって来たガモーフの少年兵。彼は、何を思いフェルトを殺そうとしたのか。分からない……。分からないが、とても悲しかった。敵意など見せているつもりはなかった。そもそも、戦争なんてしたくなかった。

いつか人は分かり合える。父から何度「人は分かり合えない」と教えられても、頑として納得しなかったフェルトの信念が、地崩れを起こした瞬間、フェルトは絶望した。やはり人間は分かり合えない生き物なんだ……。そうして、心が何もかもから逃げ出した。

自分がフェルト・テイルであることも、アルサス・テイルであることも、記憶と共に投げ捨てたのだ。だから、思い出そうとするたびひどい頭痛に襲われた。

今も、頭痛で頭の中がガンガンする。だが、忘れてしまったことを受け入れてしまえば、目の前で死に直面した仲間を、友を見捨てることになる。

そんなのは、いやだ！ もう一度、もう一度だけ、アルサス・テイルに戻る。たとえば、人が分かり合えない生き物でも、仲間と共に

ネルを絶望の淵から救いたい。そのためには、自分が絶望の中から立ち上がらなければいけないのだ。

こんな頭痛、痛くも何ともあるものか!!

「させるかーっ!!」

渾身の声で叫ぶと、軍靴のつま先で床をけり、稲妻の速さでリーナの懷に飛び込む。さらに、下段に構えたバヨネットを振り上げ、リーナのアロンドイトを打ち払うと、すかさずその引き金を引き絞る。熱と振動が筒の中を駆け巡り、火薬の爆発するわずかな閃光とともに、至近距離でパイルが火を噴いた。

「くっ!!」

危険を察知したリーナは大きくのけぞりながら、パイルをかわすと軽業師のように、ひょいっと飛び跳ねると、橋の欄干に飛び乗った。月を背後に、アロンドイトを構え、探るような視線をアルサスに向ける。

「フラン、大丈夫か!? 無茶するなんて、あんたらしくもない。ハイゼノンの時みたいだったぞ」

アルサスは、リーナを睨みつけながら、フランチェスカに言う。フランチェスカは蒼い顔をしながらも、口元に苦笑いを浮かべた。

「そうね……あの子の鎧を見てたら、ギャレットの事を思い出したのよ。それより、アルサス、あなた……」

「おしゃべりは後だ! フラン、あんたは下がってろ。セシリア、ジャック! 俺を援護してくれ!!」

返事を待つまでもなく、バヨネットを小脇に構えて、駆け出す。

「お、俺!?!」

狐につままれたような顔をするのはジャックだ。今の一瞬の間に何があったのかは分からないが、明らかにアルサスの雰囲気は今までと違うことに気づいていた。

「いくぞ、ジャック!!」

きょとんとするジャックをセシリアが促す。すでに、アルサスは欄干の上のリーナに飛び掛っていた。それを援護するように、パ

イルを放つが、まるで踊り子のようにリアーナは、一発一発を華麗にかわしながら、アルサスと剣を打ち合う。

リアーナ・ロシェットは騎士ではない。騎士団に伝わる剣術を習得しているわけでもないし、彼女の戦い方はある種独特なものがあった。そう、まさに踊りを踊るかのようだ。そして、その度に彼女の体をつつみこむ陽炎のような揺らぎ。それが何であるか、アルサスたちは知っていた。ウルガンを殺めた、ギャレットも同じ力を使っていたからだ。

「兎戯です。フォトンの力で身体能力を極限まで高めた、わたしたち天使の騎士に、あなたたちでは敵いません」

余裕の表情と言うのだろうか。表情筋がほとんど動かないリアーナの鉄面皮から、それを読み取るのはほぼ不可能に近いが、それでも言葉尻にどこか余裕が感じられた。一方のアルサスは、何度バヨネット先端の小剣を振り下ろしても、その太刀筋すべてが、軽く受け止められてしまう。

それでも相手に気取られないために、
「フォトンの力だかなんだかしらねえけど、そんなものに頼らなきゃいけないなんて、底が知れてるな！」

と、わざと余裕綽々を気取る。だが、根拠はある。

「それに……」

「余所見をするな、リアーナ・ロシェット！！ てやあっ！」

掛け声と共に、セシリアとジャックも射撃から剣戟に切り替えて、リアーナに飛び掛る。リアーナは咄嗟にアルサスのバヨネットを強く押し返すと、体を二人の方向に向け、一太刀ずつその攻撃を打ち払った。その一瞬の隙を見逃す手はない。

アルサスは、バヨネットをクルリとまわし、リアーナの右手にあるアロنداイト長剣を絡め取った。

「あっ！」

思わず、リアーナが声を立てる。しかし、絡め取られた剣はリアーナの手からこぼれて、渡り廊下の橋から、遠く下の地面へと落ち

た。

「それに……俺の仲間も侮るなよ、元メイド長さん」

形勢逆転。そんな風に、アルサスが皮肉った。だが、依然としてリアーナの顔に余裕が垣間見える。二対になったアロンダイトのうち、主力たる長剣を失い、手元に残されたのは、本来的にはパリィ、即ち敵の攻撃を相殺するための小剣のみである。

「さあ、武器を捨てて大人しくしろ！」

バヨネット先端の小剣をリアーナの白い首筋にあてがう。

「まったく……。フェルト殿下もお人が悪いですね。記憶を喪った振りをしていたんですか？　ハンナさまの前で、レイヴンのアルサスの振りをしていたように」

リアーナは小剣を投げ捨てると、再び口角を吊り上げた。

「いや、あんたの顔見てたら、思い出したくないことを全部思い出したよ。メッツェのことも、ネルのことも、俺自身のことも。ついでに一番肝心なことも思い出した。俺は、メッツェの望む世界を望んでいない。誰かが、自分の理想だけで作り上げた世界で生きていくなんて、湿気たワックを齧ってるみたいで、厭だってこと」

「あら、殿下はメッツェさまの理想を理解しているものと思っていました」

「そいつは誤解だ。この世界には、色んな考え方の人間がいて、色んなものを見て生きてる。意見が違ったり、守るべきものが違ったり、欲しいものが違ったりするのは自然なことだ。その中で、俺には分かることが一つだけある」

「分かること……？」

リアーナはそう尋ねながらちらりと、自分の周りに視線を投じた。セシリア、ジャックの銃口もこちらを向いている。避けることは容易いが、背後は、地上からかなりの高さがある欄干の上。さらに、フランチェスカも落ち着きを取り戻し、鋭利な鉄槍の先端をこちらに向けている。

「あんたに言うべきことじゃない。あいつに……ネルに伝えなきゃ

いけないことだ」

「でも、あなたは、ハンナさまの居る所へは行けない」

「いや、行くさ。どんな手を使っても。そのために、あんたに黄金の鍵は渡さない」

「そうですか。でも、わたし言いましたよね。力づくでも、あなたたちから黄金の鍵を奪うと」

不意に、リアーナの陽炎がするすると彼女の両手に集まる。そして、その手アルサスの方に突き出した瞬間、アルサスの体は、簡単に弾き飛ばされた。

まるで、怪力男にでもぶん殴られたような衝撃だ。しかし、リアーナはフランチエスカよりも、セシリアよりも華奢である。その体の何処にそんな力があるのか、それがフォトンによって高めた身体能力の賜物なのか、アルサスには分からなかった。

リアーナはすかさず、セシリアたちの射撃をかわすと、彼らの腹にも拳を叩き込んだ。

「きゃあっ！」

「ぐえっ！」

二人は折り重なるようにして、倒れこむ。アロンダイトが飾りだったかのような、すさまじい力だ。

「くそっ！ ギャレットにしてもあんたにしても、随分化物じみてきたな……！」

よろめきながらもアルサスは立ち上がる。

「減らず口もここまでです。皆さんを殺すことは最優先事項ではありませんでしたし、皆さんにもメツツエさまとハンナさまの作り上げる、理想の世界に生まれ変わって欲しかった。しかし、あなた方が悪いのです。アロンダイトは、もう拾いに行けません。この力であなた方を葬り去るほかなくなりました」

「言ってくれるよ、まったく！」

バヨネットを構えながら、ちらりとセシリアたちの無事を確認する。二人とも、痛みをこらえるように顔をしかめつつも、立ち上が

る。しかし、どうしたら良いのか。全力でぶつかっても、フォトンの力の前には太刀打ちできない。

「アルサスーっ!!」

と、唐突に背後から声がした。一瞬、振り向かけたアルサスの視界に、リアーナが飛び込んでくる。迅雷の剣技よりもすばやい瞬動術、いわゆる「縮地」で一気にアルサスは間合いを詰められた。捻りこまれるリアーナの白い拳。

だが、その拳がアルサスの腹に直撃する瞬間に、アルサスの背後から、炎の矢が飛来した。それは、火矢ではなく、魔法の矢である。動作に入っていたリアーナは不意打ちにも似た、魔法攻撃をかわすことが出来ず、胸に魔法弾の直撃を受け、橋の欄干から叩き落された。

「きゃああっ!!」

女性らしい悲鳴が徐々に下方へと落下する。アルサスは慌てて欄干へ駆け寄った。この高さから叩き落されれば、無事では済まされない。地上に叩きつけられたリアーナの体は無残にも碎け飛び散るだろう。

だが、覗き込んだ地上に、リアーナの遺体はなかった。代わりに、東の空に向かって飛び去る「翼ある人」の姿が、視界を横切った。どうやら、リアーナは「翼ある人」に救われたらしい。

「大丈夫、アルサス？」

ばたばたと、足音が近づいてくる。

「ああ、助かった、ルウ」

人心地ついたようにアルサスは息を吐き出すと、後ろを振り返った。顔の半分を覆う丸ぶちのメガネ、生意気そうな顔……ルウだ。大事そうに抱える魔法杖の先端には、わずかに魔法の輝きが残っていた。

「アルサス……?」

ルウはアルサスの雰囲気が変わったことにすぐ気づいた。アルサスは、ニヤリと笑うと、ルウの頭をくしゃくしゃと撫でる。

「バカで悪かったな……でも、俺はネルを見捨てたりしない。だってそうだろ、俺たちは短い間でも、苦楽を共にした旅の仲間だ」

何故か、アルサスの言葉に、ルウは大きな瞳を潤ませた。アルサスは急に照れくさくなって、ルウの頭を軽く叩くと、

「よし、シオンのところへ急ごう」

くるりと踵を返し、セシリアたちに言った。

95. 立ち上がれ！（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せ下さい。

96. 眠り姫

リアーナが去っても、残された「翼ある人」との戦いは続いていた。剣を打ち合う音、怒号、悲鳴、あらゆる喧騒がない交ぜになりながら、ルートニア要塞を包み込む。すでに、防衛拠点のキリク隊がこちらに向かっている頃だろう。そう距離は離れていない。連絡があつて、すぐに馬を飛ばせば、半時もしないうちに、主力部隊が到着する。

センテ・レーバン王国騎士団とて、これがはじめての戦いではないのだ。ガルナックからここひと月あまり。空飛ぶ化物と戦った。その経験は蓄積され、騎士団の結束につながる。おそらく、センテ・レーバン王国騎士団始まって以来の、固い結束によって、一致団結し敵と戦っていることだろう。

その団結の輪が、センテ・レーバン人の間だけでなく、三国すべての人間に広がれば、それはとても大きな力になる。アルサスは、冴え冴えとした頭でそう思った。

記憶を取り戻すことに不安はあつた。過去の自分をまったく知らないまま、その人格を取り戻せば、予想もしなかったことに心が押しつぶされるんじゃないか、と不安を抱いていたのだ。だが、取り越し苦労とはこのことだ。ダイムガルドを訪れて以降のアルサスと、それ以前のアルサス、そして本当の名であるフェルト、そのすべてが一度に融合したと言い換えるといいかもしれない。

フランチェスカやルウのこと、そしてあの子のことも、はっきりと今なら思い描くことが出来る。その上で、記憶を喪いつつも、セシリア、ジャックとともに戦い、知りえたこと思ったことは、きちんと胸に刻まれているのだ。

「自分が、なにをすべきか……」

西棟の螺旋階段を駆け上りながら、アルサスは呟いた。傍らのセシリアがその呟きを耳にして、訝るような視線を向けてくる。

「どうした、アル……」

言いかけた言葉を飲み込んで、「いかがしましたか、フェルト殿下？」と言い換えた。その言葉の裏に、複雑なセシリアの心情があることに、アルサスは何となく気づいた。そして、すこしだけ顔をほころばせる。

「アルサスでいい。少なくとも、この戦いが終わるまでは、セシリアにもジャックにも今までどおりでいて欲しい。俺も、ダイムガルド軍人をやめたりしない」

「でも、あなたは、この国の王子さま。国王不在の今、この国を率いる義務がある」

「だから、シオンを叩き起こしに行くんだ。あいつは、アイシャに負けないくらい、しっかりした女の子だ。俺よりも、ずっと人望も知恵もある。あいつがいれば、この国は大丈夫だ」

と、アルサスが言うと、今度はジャックが渋い顔をする。

「シオンってのは、お前の妹なんだろう？　なんだよ、全部妹に丸投げするのか」

「まあ、平たく言えば、そういうことになるかな。もっとも、何もかも投げ出すつもりはないさ。シオンの役目は、この世界が本当の意味で平和になったときにやってくる。そのために、俺は兄貴として、その地平を開く」

「なるほど、要するにそのために、アストレアの天使どもを殺しにいくってわけだ」

「違うよ、ジャック。俺は……俺は、あいつらを説得したい。ちゃんと、言葉で分かり合いたい」

アルサスの言葉に、ジャックがきょとんとする。不思議と、厳つい顔にそういう表情が似合っているから、面白い。

「なんだよ、それ。聖人君子じゃあるまいし。分かり合うとか、そんなこと……」

「できると信じてたい。ガルナックでカレンが教えてくれた。いつかは分かり合えるって。俺の親父はそんなの無理だって言ったけれ

ど、俺はカレンの言葉を信じたい。だって、俺も、そう思ってる。それに、ネルが俺の知るあいつのままなら、きっと分かってくれるはずだ」

「希望的観測は承服しかねるな」

セシリアは息も切らさず階段を駆け上りながら、アルサスと視線を合わせなかった。何故だかはよく分からないが、カレンの名を口にしたり、ネルの名を口にしたりとたん、なんだかセシリアの口調に棘が混じった。

「希望は大切だ」

と、アルサスが言うときセシリアは、

「それは、カレン將軍の言葉か？ それとも、銀の乙女の言葉か？」
尚も棘混じりに問い質す。アルサスは思わず苦笑しながら「俺の持論だよ」と返した。もちろん、即興で考えたことだが、記憶が戻ってから頭がすっきりとしているのだ。あれほど悩ませた頭痛もどこかへ消え、今ははっきりと、何をすべきか分かる。

「だから……セシリア、ジャック。力を貸してくれ」

アルサスが言うと、二人はそれぞれにそれぞれの顔をした。セシリアは少しだけ微笑み、ジャックは仕方ないな、と言う顔だ。

「分かっている。わたしたちも、世界を生まれ変わらせたくない。その思いは一緒だ。たとえば、アストレアの天使が作り上げる新しい世界が、平和で豊かで、誰も憎しみあうことがなく、苦しむことがなくとも、わたしは今の世界が好きだ」

「そうそう、辛くても苦しくても、俺たちダイムガルド人には砂漠で鍛えられた、それを乗り越える力がある。それに……ここでお前に協力して、センチ・レーバンにコネを作っておくのも悪くねえ」

厳格で男っぽい口調の真面目なセシリアと、照れ隠しなのか冗談交じりなジャック。二人の仲間に、アルサスは微笑んだ。その視線の先、アルサスたちの後ろを追いかけて、今にも酸欠になりそうなルウと、そんなルウの手を引くフランチェスカに目をやる。

「なに、三人で内緒話してるのかしら？ お姉さん、ちょっと妬い

「ちゃうわよ」

真顔でさりと冗談を言うから、フランチエスカは怖い。だが、そういえばそういう飄々とした人であったことを、アルサスは今更ながらに思い出した。

「もちろん、フラン、あんたも力を貸してくれ。それから……ルウは、もう少し体を鍛えた方がいいな」

たった百余段の螺旋階段で、あっぱっぷしているルウに、アルサスは苦笑する。もともと小食で、同じ年頃の男子に比べれば身の丈の小さな魔法使いの少年にとって、それは地獄の階段なのだろう。それでも、ルウは眼鏡の奥でアルサスを睨むと、

「ボクは、頭脳労働役なの！ アルサスこそ、もっと頭鍛えろよーっ！」

と、皮肉交じりにアルサスを罵った。

そうして、ついに階段は頂点に達する。ルウほどではないにしろ、セシリアをのぞく全員がさすがに息を切らしていた。西棟は、ちょうど鉛筆型の塔になっている。その頂点に当たる部屋に、シオンは眠っているのだ。衛兵の姿は見当たらない。おそらく、衛兵も戦闘に借り出されているのだろう。そう考えると、本当にセンチ・レーバンの人材不足は目に余る、と思わず余計なことに思考を巡らせつつ、部屋の扉の前に立った。

予想通り鍵がかけられている。

「ぶっ壊す。ちよつとどいてろ」

と、ジャックは言うのと、アルサスの了承も取らずにバヨネットの引き金を引いた。ミスリルのパイルが見事にドアノブを打ち抜く。

「あとで、修理の請求書を送るから」

アルサスはニヤリとして冗談を口にしながら、ジャックの打ち破ったドアを押した。観音開きのドアが開く。ふわりと、香の匂いとともに、部屋の明かりが五人の視界を覆った。

部屋には窓はない。どちらかと言えば、密室のような場所。それでも鬱々とした空間にならないように、魔法装置の灯りが煌々とし

ており、それが花柄の壁紙に反射して部屋の中はまるで日中のように明るかった。調度のそれは、シオンの趣味に合わせて世話係がしつらえたのだろうか、女の子の部屋と呼ぶにふさわしい家具やぬいぐるみが置かれ、その真ん中に、ツインのベッドがある。そのベッドの上で、枕と布団に埋もれるようにして、静かな寝息を立てる幼い少女の姿があった。

「シオン……」

アルサスは、そっと妹の名を呼んだ。腹違いとは言え、兄と慕ってくれる可愛い妹である。そもそも、アルサスがフェルトの名を捨てて旅立ちを決めたのは、母の遺言と妹の未来のためだったと言っても過言ではない。その妹は、ライオット・シモンズによって、心を操られ、その後遺症で昏睡したままなのだ。

「眠り姫みたいだ」

呟いたのは、セシリアだった。たしかに、その表現の通り、アルサスたちの気配に気づくこともなく、ただ静かに眠り続ける姫のようだ。

「王子様のキスで目覚めるって言っても、アルサスは兄だから、それはちよつと不味いわね……」

と、フランチェスカが言う。冗談半分にしても、さすがにそれは笑えない。かと言って、ルウやジャックにその役を任せるのは、何となく兄として許せなかったりする。無論、口に出しては言わないが。

「当たり前だろ。だいたい、そんなことで目覚めたら、世話ないよ」とは言ったものの、どうしたらシオンが目覚めるのか分からない。夢さえ見えていない寝顔をそっと見つめながら、アルサスはその小さな手を取った。

「シオン、目を覚ましてくれ。この国のみんなのために……」

願いをそっと口にする。と、その瞬間だった。アルサスの体が、金色の光に包まれる。その微細な光の粒子が、アルサスの手からシオンの手に伝わり、まるで伝播するかのようにシオンも光に包まれ

た。驚きを隠せず、言葉を失う、セシリアたち。

やがてその光が収まると、小さな声が聞こえた。一瞬誰の声だか分からずに、一堂そろって部屋を見回した。だが、ぬいぐるみが口を聞くはずがない。御伽噺ではないのだから。

「お兄さま……?」

今度ははっきりとその声が聞こえた。見れば、シオンが薄く瞳を開き、こちらを見ている。真っ白だった頬に、わずかな赤味が指し、見るからに生気を宿したと分かる。

「お兄さまは、どうして外国の服を着ているんですの? おかしいですわ」

シオンは可愛らしい声でクスクスと笑う。

「そんなに似合っていないか、この軍服」

「いいえ、とてもお似合いです。それより……みなさんお揃いで、何かありましたの?」

部屋を見回すシオンは、見慣れぬ顔に少しかり小首をかしげた。その手を強く握り、兄の顔になったアルサスは、

「聞いてくれ、シオン。お前はライオット操られていた。その間に……」

と、シオンの知らないこれまでのいきさつを語って聞かせた。

「キリク隊はまだですか!？」

剣を振り、「翼ある人」に一太刀浴びせかけ、傍らのブレック・ケイオンに問う。すでに、クロウの両腕は疲労を訴えている。次から次へと上空からルートニア要塞の中庭に舞い降りてくる敵。無機質な顔をして、ひたすらに三叉槍を繰り出してくる彼らに貫かれれば、この五体は光の粒になって消えてしまう。一瞬の油断も許されない状況に、クロウは体力ばかりでなく、精神力まで削り取られていく感覚を覚えた。

「この状況では、キリク隊も敵の襲撃を受けているかと。まさか、ここで一気に勝負をかけてくるとは!」

信頼する副官のブレックは、剣を突き出しながら、クロウの怒号に答えた。

「同盟の阻止が目的か……これはいよいよ、同盟に意義が出てきましたね。でも、その前に、こいつらを片付けなければ、ここで我々が死んでしまうわけには行かない！」

「分かっておりますとも！ 魔法騎士隊！ 敵を薙ぎ払えっ」

ブレックの命令が飛ぶ。すかさず、魔法杖を構えた、魔法騎士たちが整列し、風の魔法を唱えた。ごうっ、と唸り声を上げながら、魔法騎士の数だけの疾風が周囲を薙ぎ払う。いくつかの「翼ある人」が光の粒になって弾けた。しかし、彼らには恐怖を感じる感情がないのか、まったく臆することはない。瞬くうちに、魔法騎士隊に雪崩れ込み、列を乱す。

「このまま押し切られて、城内に入られたら、万事休すですっ！ クロウ隊長っ」

悲鳴にも近い、副官の声。センチ・レーバン軍は完全に劣勢に立たされている。いくら、経験を摘んだところで、相手は空から襲い掛かる。こちらが対空に弓や魔法を射掛けても、たちどころに高く上空へ逃げられれば、矢も魔法弾も失速して届かない。翼のない人間にとって、これほど不利な戦いはあるだろうか。

地の利も、堅牢な壁も、騎士団伝統の剣術も、すべてか「翼ある人」のまえでは、兎戯にも等しい存在でしかないことを痛感する。

だが、撤退すべき場所は何処にもない。言ってみれば雪隠詰めの状態なのだ。せめて、シオン陛下が目覚めるまで……いや、ダイムガルドとの同盟が成るまで、待つて欲しかった。そんな願いを、メツツエが聞き届けるわけではない。

「奮起しろ！ 敵を押し返せ！ まだ決戦の日ではない！ ここでやられては、死んでいったものや先祖たちに顔向けできないものと思え！」

ブレックのみならず、他の騎士団長たちが、声を枯らして叫ぶ。だが、敗北の色が濃厚になればなるほど、兵士たちの意気は、削が

れていく。

明日の命を守るため。そう説いたところで、人間誰しも今日の命が惜しい。怯えた兵士たちの中には、すでに逃げ出そうとしているものや、及び腰になっているものもいる。そういった者たちは、狩でもするかのような敵の格好の餌食となる。

ある者は、妻子や恋人の名を叫び、またある者は母親の名を呼び、べつのある者は、クロウに救いを求めながら、消えていった。

「くそっ！　くそっ！　くそったれーっ！！」

心から湧き出たクロウの叫びは、普段の彼からは聞くことの出来ないような言葉だった。それだけ、悔しさが、胸を貫くのだ。

『聞きなさい、センチ・レーバン騎士の誇り高き騎士たちよ！』

突然に中庭に声が響く。女の、それも幼い少女の声だ。しかし、凜と張り詰めたその声は、苦しみに満ちた辺りの空気を一瞬で払いのけるようだった。

「あれは！？」

ブレックが上を見上げて指差す。夜空に浮かぶ月を背に、南棟と西棟を繋ぐ渡り廊下にくっつかの人影があった。目を凝らせば、それが誰であるかはすぐに察しがついた。

「いまこそ、センチ・レーバン騎士の誇りを見せ付けるのです！

あなた方こそ、五百余年の剣と盾のこの国の礎！　必ずや、正義の女神はあなた方に微笑みます。センチ・レーバンに勝利を！！」

少女は、高らかに宣言する。

「シオン陛下だ！　陛下がお目覚めになられたんだ！」

「フェルト殿下も居られるぞ！」

その一言だけで、一気に周囲の悲鳴は消えうせて、歓声に変わる。そして、士気が見る見るうちに高まる高揚感が、すべての騎士を包み込んだ。

と、その時である。中庭に別の騎士たちが雪崩れ込んでくる。東の防衛拠点を守っていた、キリク隊が到着したのだ。形勢逆転の狼煙が上がった事を感じたクロウは、もう一度、渡り廊下を見上げた。

「クロウ！ 待ってろ、今すぐそちに行くからな！！」
渡り廊下の上で、親友が言った。

96. 眠り姫（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せ下さい。

97. 王たる器

夜が明けると共に、「翼ある人」はルートニアから撤退した。シオンの言葉は、センチ・レーバン兵を活気付け、彼らを追い返すまでに至ったのである。

ここまで、負傷者そして光の粒になって姿を消したものは数知れない。本来的なセンチ・レーバン軍の軍力は、諸侯の軍と騎士団を組み合わせてその体系を維持する。しかし、諸侯が騎士団の要請に応じないため、残された騎士団の力だけで、一ヶ月あまり敵の猛攻に耐えてきた。その疲労感と虚脱感は、あまりにも大きかった。

それが、たった一声シオンが言葉をかけただけで、見違えるように奮起した騎士たちは、次から次へと「翼ある人」を切り伏せていった。もつとも、キリク隊の到着なしには、満身創痍のルートニア守備隊だけで勝利することは難しかっただろう。

そうして、迎えた夜明け。東の空に昇る太陽の美しさに、しばし暫し騎士たちは見とれていた。さらに、彼らの高揚感は続く。シオンが目覚めたこと、そしてフェルトが戻ってきたこと。そのニュースは瞬くうちにルートニアの街に広まった。

新国王となったシオンへの信頼はとても篤い。他の国でもそうだが、統治者への信頼が無償で払われるのは、それなくして、自分たちの生活が立ち行かないからである。すべてが中央集権である国家において、その頂点に位置する、例えば、センチ・レーバンであれば国王、ガモーフであれば法王、ダイムガルドであれば皇帝への信頼は、少なくとも自分たちのあらゆる生活に直結し、王はそれを保障し国家の安定を図らなければならない。

しかし、そう上手くは行かないもので、度重なる飢饉などは、確実に国民生活を締め上げながらも、統治者はそれに対する手立てがないままだった。それゆえに、聡明と言われる新国王シオンへの期待感が、信頼の顕れとなったのである。

驚くべきことは、シオンがその信頼を受け止める覚悟があることである。まだ若干十二歳の少女であるが、多くの事を学び、真摯にかつ慈愛をもち、国王にふさわしい少女であることは、誰の眼にも明白だった。それ故に、自分の思い通りにならないと思ったライオットは、自らが宰相府技術院に開発を命じたレパードの魔法装置で、幼い彼女を操ろうとしたのだ。

まったくその事を予見していなかったわけではない。だが、半年前、父が他界し寂しさに打ちひしがれるシオンにとって、唯一心のよりどころであった兄が姿を消したショックはあまりにひどく、ライオットに付け入る隙をあたえてしまった。そのことは、シオンとしても忸怩^{じくじ}たる思いである。だからこそ、その汚名を雪^{すす}ぎたい。それが今なのだと、シオンはその思いで騎士たちを勇気付けた。

だが、その言葉は同時に自分自身を奮起させる言葉であった事を、兄のフェルトはもちろん、彼の仲間たちも、そして騎士たちも知る由もなかった。

一夜の戦闘が終わり、すぐに騎士団長のクロウ・ヴェイルが陣頭指揮を執り、ルートニア防備の再編が行われた。さらに、負傷者の手当て、カレンとともに一路ルートニア外部へと避難した、ストラインやマクギネスを呼び戻し、同盟会議の再開を呼びかけた。その立派に役目を果たす奮迅^{ふんじん}ぶりは、ひと月ほど前まで、彼がライオット子飼いの親衛騎士であったとは思ってもよらない。亡きトライゼンも認める活躍ぶりだろう。

眠っている間、いや……ライオットに操られている間にいろいろなことがあったようだ。その話を兄と、その仲間たちから断片的ではあるが聞かされた。それだけで、世界に迫っている危機を知るには十分だった。分からないことは、すべて想像力で補填してもあまりある。その事実、あの翼の生えた人間を見れば、明白なのだから。

それよりも、シオンにはもっと驚くべきことがあった。騎士団長のクロウの成長ぶりもそうだし、キリクやカレンなど若い……と言

ってもシオンよりは随分年上ではあるが、自分同様に次世代の人間がしっかりと未来のために戦っていることだ。なにより、目覚めたシオンの前に現れた兄の横顔が、半年前とは見違えるように、凛々しくなっていたことは、再会の喜びと相まって、空虚になりかけたシオンの心を目いっぱい満たした。

そんな兄が何故ダイムガルド軍の制服を着ているのか、兄の仲間の紹介と、そして旅の話、現在、世界を取り巻く事情。メツツェ・カーネリアのこと、ネルという女の子のこと。アストレアの天使のこと。それらを各人の口から聞き終えて、詳細を理解したころには、すっかり翌日のこととなっていた。

「同盟交渉は上手く行っておりません。クロウの申す通り、同盟は不可欠なものです。フェルト殿下が敵軍……いや、ダイムガルド軍に籍を得ている今こそ、その立場を利用し、こちらの要求をかの国に飲ませ、同盟の主導権を握ることが重要かと思われます。聞けば、フェルト殿下はダイムガルド上層部や皇帝と顔見知りとも」

ストラインは、政治家としての立場から、姪であるシオンに懇々と同盟について説いた。同盟に先駆けて、ダイムガルドは領地を欲し、センチ・レーバンは資源を欲している。両者の主張は平行線をたどり、国内の事情が芳しくないセンチ・レーバンは、敏腕外交官であるマクギネス・ハットの論舌に丸め込まれかけていた。

これが初めての公務となる。自分が国王になったことも知らなかったが、少なくとも父の死後、その役目を担うことになるだろうと言うことは、分かっていた。兄は、生まれはどうとしても、そういう立場になりたがらない人だ。だが、いつでも兄として傍にいてくれる。だから、相談したかった。どうするべきか。あまりにも事が大きいため、ストライン一人の言を聞き、その通り裁可を下すと言うわけには行かない。高度に政治的事情が絡まりつつも、現実に危機はすぐ目の前にあって、それと戦うという騎士たちの意志は固い。だが、兄はクロウたち仲間と共に、戦闘の事後処理に追われていた。ある意味、ダイムガルド軍籍にしてセンチ・レーバン王子という不

可思議で宙ぶらりんな立場にあるため、忙しさに拍車をかけているのだろう。

ひひは、兄の力を借りるべきではない。センチ・レーバン王国の新国王となった事を自覚し、その覚悟を見せて、天国の父や、兄を安心させたい。自分が立派に国王となることを、見せたい。

「分かりました、ストライン叔父様……直ちに、謁見の間を用意してください。それから、大臣、騎士団長たちを集め、マクギネスさま、お付の方々、セシリアさん、ジャックさん、お兄様をおよびください。同盟は必ず成立させます。この国の、いえ、世界の未来のために」

「はっ、すぐに。しかし、シオン陛下。叔父様というのは、お止め下さい。あなたはこれから、真の意味で国王陛下となられる。私は亡き先代に代わって、陛下を全身全霊お助けいたします」

「ありがとうございます、叔父さ……ストライン卿。今日から、あなたがライオットに代わり、宰相の地位を引き継ぐ事を認めます。わたしは、まだ十二の娘。分からないことは沢山あります。どうか、力になって下さい」

「ありがとうございます。お任せください」

ストラインはそう言うのと、要塞内に設けられた、シオンの私室を後にした。残されたシオンは、少ばかり背筋を伸ばして、誰に言うでもなく小さく「がんばります」と口にした。

ルートニアは都市機能を持った要塞であるから、謁見の間を準備するのにそれほど長い時間はかからなかった。戦闘の事後処理に追われるアルサスたちが、気がついたときには、カーペットと玉座の置かれた、まがりなりの謁見の間が完成していた。

すぐさま、マクギネスやセンチ・レーバンの大臣たちに招集がかかる。アルサスたちも、マクギネスの護衛と言う立場から、第二回交渉会議に出席することとなった。センチ・レーバン王子であるアルサスが、フェルトとしてではなく、アルサス・テイル少尉として、

その会合に望んだのは本人たつての希望であり、同時にアルサス自身は、ダイムガルドの人間であると言う立場を貫く事を、クロウやマクギネスに承諾させた。

謁見の間には、宰相の地位をライオットより引き継いだストライン、大臣、そして、クロウ、カレン、キリクなどの騎士団長を中心とするセンチ・レーバンの代表たちがすでに、並べられた席に座っていた。部屋の隅には、フランチェスカの姿もある。対するダイムガルドの代表は、外務参事官であるマクギネス、マクギネスが世話係として連れてきた少女たち、少女たちは相変わらず、目深にフードを被っており、その顔はついぞ見ることは出来なかったが、彼女たちが続いて、セシリア、アルサス、ジャックが並び、センチ・レーバン勢と向かいあうように、椅子に腰を下ろした。

「シオン国王陛下のおなりにございます！」

と、ストラインの声が謁見の間に響き渡ると、真っ白なドレスに身を包んだシオンが、上座に置かれた玉座に現れる。玉座の後ろには、センチ・レーバンの紋章が描かれた国旗が掲げられていた。

アルサスはその光景に、ふと即位式典の事を思い出さずに入られなかったが、妹の王冠に輝く宝石は、ごくありきたりな青い宝石で、シオンの瞳も生気を宿している。

あの時とは違う。ストラインは、王家を守ることを信条とする男であり、及び腰なところはあるが、ライオットのように私利私欲に目のくらむような人物ではない。あの時は、騎士団の多くが、諸侯の反乱や一揆の鎮圧に出かけ不在であったが、今はクロウもカレンもキリクも揃っている。その反対に、ついにシオンが本当の意味で、国王の器を試される時が来たと言うことだ。

「マクギネス・ハット参事官さま。それにお付のみなさま、セシリアさん、ジャックさん……アルサスさん。ダイムガルドより遠路はるばる、センチ・レーバンへ良くぞお越しくださいました」

凜としていて、聞くものの耳を揺らす声。可愛らしい少女の声だが、どこか威風を備えているのは、彼女が齡十二にして王の器にあ

るということの何よりの証だった。

「ストライン宰相、騎士団のみなさん、大臣のお歴々、わたしがライオットの罠にかかり、多分なご迷惑をおかけした事をお詫びいたします。しかし、今世界は、アストレアの天使によって、滅びの危機を迎えています。ダイムガルド帝国とは、かつて国境を隔てて何度も戦をして来ました。しかし、いまこそ両国は手を取り合う必要があるはずです」

厳かな言葉の数々に、謁見の間は静かになる。

「アストレアの天使が作り上げようとする、新しい世界。それがどれほど、幸せな世界であったとしても、今の世界に生きるわたしたちには、この世界を変えることが出来る可能性がある。メッツェの望んでいるのは、その可能性の芽すら摘み取ろうとしているに過ぎません。だからこそ、わたしたちは、彼に、そして彼女に見せるのです。わたしたちは成長できる生き物であることを」

「しかるに！」

大臣の一人が、シオンの言葉を遮った。

「マクギネスどのは、この機に領地拡大を王国に要求してきた。ダイムガルドは、その成長を拒んでおられるではありませんかな？」
「何を仰られる。そちらとて、我が国が産出するミスリルの二十パーセントを、向こう五十年間無償提供することを提示してきたではありませんか！」

大臣の言葉に、憤りをあらわにして、マクギネスが反論を叩きつける。

「二十パーセントごとき、大したことではありませんまい。空白地帯の領地と引き換えに出来るものではない。それならば、フェルト殿下、殿下はいかがお考えか！？」

鼻で笑い飛ばした大臣は、その矛先をアルサスに向けた。いち護衛軍人としてマクギネスの後ろにつくアルサスは、少しばかり困ってしまふ。政治的なやり取りが得意でない、と言うよりも、自分はいくまでダイムガルドの立場であることを徹底したかったのだが、

それを理解してくれる人間は少ないようだ。

「私、アルサス・テイル一個人として、大臣どのに申し上げます。ダイムガルドは、みなさんのお考えのような豊かな国ではありません。灼熱の砂漠に囲まれ、食料も水も配給に頼らなければならぬ中、それでも国を守るために、沢山の兵器を作り、そのことで雇用を見出してきました。しかしながら、ミスリルの採掘量には限界があります。二十パーセントものミスリルを無償提供すれば、ダイムガルドの民の二十パーセントが餓死するものとお考え下さい。それだけ、ダイムガルド帝国は、細い糸でのみつなぐれた国なのです。どうか、同盟のために、ダイムガルドの無垢な命を犠牲にすることはお止め下さい」

「フン！ たとえ、腹違いとは言え、シオン陛下の兄君にして、この国の王子殿下ともあろうお方が、ダイムガルドの味方をするとは、けしからん！」

アルサスの言い分が気に食わない大臣は、ムスっとした顔で、そっぽを向く。大臣の多くが同じ考えのようで、アルサスに向けられる視線は尖っていた。だが、それに助け舟を出したのはシオンである。

「お兄さ……いえ、アルサスさんの仰るとおりです。未来のために努力は惜しんではいけない。でも、未来のために誰かを犠牲にすることもあってはならない。それこそ、アストレアの天使の思いつびです。だから……」

シオンは深く深呼吸をすると、一際大きな声で、謁見の間に響き渡るような声で言った。

「センテ・レーバン王国は、すべての要求を破棄し、無条件でダイムガルドとの同盟を結ぶ事を望みます」

俄かに大臣、騎士団長たちにどよめきが生じる。まさかの発言に、よりよい条件で同盟の主導権を握ろうとしていた者たちにとって、それはまさに期待はずれにして、青天の霹靂だった。

「へ、陛下、それはお待ち下さい！」

慌ててストラインがとめるが、シオンの意志が固いことを、彼女の眼が物語っており、思わず閉口してしまった。ところが、そのどよめきを、まるで一条の光が貫くかのように、一つの声が走った。

「ダイムガルド帝国も、無条件で同盟を結びます」

と、口にしたのが明らかにマクギネスでないことは明白だった。

歳若い女……いや少女の声。すると、マクギネスが本国から連れてきた、世話係の少女のうち一人が、すっと立ち上がる。ぴんと背筋を伸ばしたまま、シオンの前まで歩み出ると、少女はおもむろにフードを脱いだ。

思わず、アルサスは息を呑む。出発の時から、どこか見覚えがある、と思っていたのだが、彼女であることにまったく気づかなかった。

「アルサスっ！ あのお方はっ!？」

セシリアも顔を見てはじめて少女の正体を知り、愕然としている。そんないくつもの視線の中で、少女は、シオンの前にたおやかに微笑むと自らの名を名乗った。

「申し送れました、シオン、コルネ・レーバン国王陛下。わらわは、ダイムガルド帝国皇帝、アイシャ・マイト・ダイムガルド、と申します」

一時は治まったどよめきが再び、わっ、と巻き起こる。

「マクギネス参事官！ どうして、アイシャが……皇帝陛下がここにいるんだ!？」

アルサスがマクギネスに掴みかかる。まさか、皇帝自ら赴いているとは誰が想像しただろう。センチ・レーバンの大臣たちはおろか、アルサスたちも、ましてやマクギネスも知る由もなく、一堂と同じように驚いて、酸欠の金魚のような顔をしていた。

どうやら、アイシャの独断だったようだ、と察しが付いたアルサスはすかさず、セシリアとジャックに目配せをする。三人は、近衛騎士として皇帝を守るべく、式典用のサーベルに手をかけた。

クロウたち騎士団も、尋常ならざる事態を察知して、腰の剣に手

をやる。一触即発な緊張感が、謁見の間を包み込んだ。その喧騒を鎮めたのは、またしてもシオンだった。

「みなさん！　どうか落ち着いて。アルサスさん、クロウ、剣を納めてください」

と、言うときシオンは玉座から立ち上がり、アイシャの元へと駆け寄った。端から見ても分かるくらい、傍らのストラインが青ざめた顔をしている。同様に、マクギネスも。

「はじめまして、アイシャ陛下」

「はじめまして、シオン陛下」

二人の少女は、そんな大人たちの心配を他所に、手を取り合うとにっこりと微笑んだ。その笑みに、裏表がないことは、誰の眼にも明らかであった。

「だまし討ちのような真似をしてしもうたこと、平にお許し下さい、シオン陛下。マクギネスを信用していなかったわけではありませんが、我がダイムガルドとセンテ・レーバンの軋轢は、何百年にも及ぶもの。もしも、同盟が成らなかった場合、皇帝として、わらわが自らストライン閣下と交渉するつもりで、紛れ込んでおりました。そのことはフランチェスカ・ハイトどのには、前もってお伝えして居ったのです」

シオンに語るアイシャの言葉に、アルサスはフランチェスカの方を振り向いた。フランチェスカがお茶に招かれた際、アイシャからこの事を告げられていたのは、アルサスの知るところではない。フランチェスカはアルサスの視線を受け止めると、小さく苦笑した。

「よかった……アイシャさまが、同じ想いで。ですが、アイシャさま、あなたの方がわたしより年上です。どうぞ、そのような堅苦しい言葉遣いは止めてください」

「ふむ。それもそうじゃが、大臣の眼もありますゆえ」

「そう、ですね。では、アイシャさま、こちらへ」

シオンは、アイシャの手を引くと、二人して玉座に戻った。そして、一堂の方に向き直ると、繋いだ手を高らかに上げる。

「ここに、センチ・レーバン、ダイムガルドの同盟を結ぶ事を宣言します！ 両軍は、長い歴史の軋轢を乗り越え、共に手を結んで、わたしたちの世界を、未来を救いましょう！！」

声をそろえて同盟宣言を口にする二人の姿は心なしか、輝いて見えた。アルサスは静まり返った謁見の間に拍手を響かせた。次いでクロウが手を叩く。それにつられて、一人、また一人と同盟の採択に歓喜の拍手を送った。

「シオンさま。軍を整える前に、一つだけお願いがあるのじゃ」

拍手の中で、アイシャがシオンに言う。

「あなたの兄君……アルサスたちがダスカード遺跡より、ハイ・エンシェントから預かった『黄金の鍵』を持参しているのじゃ。その鍵で扉は、このルートニアにある。どうか、その場所まで案内して欲しいのじゃ。きつと、この同盟の力になるものが眠っている……」

「ええ。『アルサスさん』から聞きました。おそらく、それは、この城の地下にある『アーカイブ』と呼ばれる遺跡のことだと思えます。直ちに、向かいましょう」

シオンはこくりと頷きながら、アイシャに返した。

97. 王たる器（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せ下さい。

98. アーカイブ

薄暗い地下通路を、シオンは自ら魔法装置のカンテラで照らす。

ここは、ルートニア要塞直下の、地下遺跡。正確には、もともとあったであろう地上部分は長い歳月で崩れ去り、その上に現在の王家によってルートニア要塞が築かれた。そのため、城の中庭には秘密の階段があつて、シオンが魔法の言葉を口にすれば、誰も手を触れていないにもかかわらず、その扉が開いた。

アルサスは、ルートニアにそんな遺跡がある事を知らなかった。

まだ記憶の一部が戻っていない、と言うわけではなくて、そもそも知らないことだった。それもそのはず、この地下遺跡の存在は代々、センテ・レーバン王家の嫡流にのみ伝えられるものであり、まことしやかな噂はあつても、その存在を目の当たりにしたものはほとんどいなかった。無論、遺跡の存在だけでなく、その入り口を開く魔法の言葉も、前王からシオンにのみ口伝えされたものである。

この先に、知るべきすべてが眠っていることは明白だ。そして、それを開く鍵は、マクギネスから預かっている。

遺跡へ足を踏み入れたのは、シオン、アルサスの他に、アイシャと彼女を護衛するために、セシリア、ジャック。それからシオンの護衛のためクロウ、フランチェスカ、ルウが同行することとなった。同盟が成立し、その親書を携えたマクギネスは馬の首を返し、ダイムガルドへと舞い戻り、ストラインは同盟の調整と未だ協力を拒む諸侯への働きかけのため奔走している。そのため彼らの姿はここにはなかった。

遺跡の壁は、ダスカード遺跡に良く似た金属の質感を持っている。思えば、遺跡船の壁も同じだった事を思い出せば、すべてが同じ時代の遺跡であることは明白だった。本当なら、ここへはネルと来るはずだった。旅の行く先なんて分からなかったが、真実を追い求めれば、おそらくここに辿り着いただろう。だが、その前に、アルサ

スとネルはその手を放してしまったのだ。結局、真実を知るための旅は、一つだけピースを欠いたままとなって、終着点へと辿り着いた。

いや、もう一度その手を取りたい。あの時言えなかったけれど、伝えなきゃいけないことがあるんだ……。

「なんじゃ、思いつめた顔をしておるの」

不意に、声がしてアルサスは我に返る。顔を上げると、先頭のシオンに続くアイシャがこちらを見ている。シオンから借りたという赤絹のドレスは、小柄なアイシャにもぴったりだった。もつとも、二人の歳は三つほどしか違わない。

「いや、なんでもないよ。それより、アイシャ。何で密航なんて無茶な真似したんだ。マクギネスも青い顔してたぞ。それに、本国の連中が知ったら、みんな腰を抜かす」

「うむうむ、大臣や侍女どもが慌てふためく様が、目に浮かぶようじゃの」

ニシシッと、笑いをかみ殺す姿は、悪戯が成功した子どものように、アルサスは思わず呆れてしまった。ついひと月前まで、本を読んでは外の世界に憧れるだけの夢見がちな女の子だったのが、驚くべき行動力を発揮して、一瞬にして同盟を纏め上げたと言うのは、まさに驚嘆に値する。それは、アイシャがもともと兼ね備えた皇帝としての素養なのかもしれない。しかし、その一方で、時折歳相応の女の子っぽさを垣間見せるのは、アイシャの不思議なところでもあった。

「あのなら、アイシャ」

「冗談じゃ。べつに驚かせるつもりはなかった。それに、そちだって、センチ・レーバンの王子である事を黙っていたではないか。おあいこじゃ」

「それは、俺が記憶喪失ってやつで……」

「分かっておる。それにしても、王子さまとは、驚きじゃ。わらわは更に惚れなおしたぞ。センチ・レーバンの王子とダイムガルドの

皇帝が夫婦めおととなれば、この同盟は永久のものとなる。そうすれば、両国の民は須らく、安泰の時代を迎えるであろう」

なんだか、預言者のような口調で言うアイシャ。そんな二人を横目に見ながら、先頭を歩くシオンがクスクスと笑う。

「あら、お兄さまとアイシャさまは仲がとってもよろしいんですね」
「うむ、とっても仲良しなのじゃ。そうじゃ、この際であるから、妹君でもあるシオンさまに、わらわとそちの交際を認めていただくうではないか」

「ちよっと、待て待て!!」

嬉々とするアイシャの腕をアルサスは慌てて掴んだ。するとシオンは、平然とした顔で、

「わたしは一向に構いません。ふつつかな兄ですが、よろしくお願ひします。ただ、お兄さま……お兄さまはとっても罪なお方です。ほら、セシリアさんが怖い顔をしてらっしゃいますよ」

と、アルサスの後方に目線をやった。すると、棘のある咳払いが一つ。

「アルサス少尉! 皇帝陛下に無礼が過ぎないか!」

眉間にしわを寄せたセシリアがキツと鋭く睨みつけてくる。アルサスはわけが分からずに、ちらりと視線を送って、ジャックに問いかけたが、返ってきた返事は、無言の「さあね」と小さく首を竦めるだけだった。

「暢気だね、アルサスは。これから、ボクたちは誰も知らない歴史の真実を目の当たりにするんだ。これって、学校じゃ教えてもらえない、図書館じゃ調べられないことかもしれないんだよ。こんなところで、ラブコメしないでよ」

やれやれ、と呆れ眼のルウが言う。アルサスが帰ってきて、よほど嬉しいのか、その言葉尻には、いつもに増して生意気で、こしやくな笑みが見え隠れしていた。

「らぶこめ? なんだそりゃ。そういうお前はどうかんだよ。ナタリーのことはいいのか?」

「な、ななな、何言ってるんだよ！ ナタリーは関係ないじゃんか！」
ルウは赤面しながら目を泳がせた。彼が嬉しそうにしているのは、アルサスが戻ってきたからだけではなかった。もう一つ、王都から更に北にある「イングレス監獄島」に投獄されていた、ナタリー・リウルとその仲間たちがルートニアへ呼ばれる運びとなった。無論、それは無罪放免というわけではなく、裁判を執り行うためである。ナタリーが所属していた、ジャレン・ジャラ率いるガモーフ人第一主義的なグループ「エルフォードの会」はシオンの命を狙った。そのため、逮捕されたのだが、ここ一ヶ月余りの騒動で、裁判自体が有耶無耶となったまま、離島である「イングレス監獄島」に送られていたのである。それが、今になって、呼ばれたのはシオンが目覚めたからに他ならない。

シオンは当時の事を何も覚えていない。レパードの魔法装置に操られ、意識はずっと眠ったままだったからだ。だからこそ、ナタリーたちの言い分を直接聞きたいと申し出たのは、シオン本人だった。しかし「今、そんな事をしている余裕はない」と言うストラインの意見はもつともだ。差し迫る決戦の時を前にして、暗殺者どもの意見に耳を貸している時間的な余裕はない。その一方で、シオンにはひとつの腹づもりがあることを、アルサスは知っていた。

ダイムガルドと手を結ぶだけでは足りない。ガモーフ人とも手を取り合い、この世界に今生きている者たちが、一致団結してこの危機と戦わなければならないのだ。目覚めたシオンは、早速その事を悟った。実に、驚くべきだ。十人十色と言うように、人々の中には、センテ・レーバンの王やダイムガルドの皇帝が年端も行かぬ少女であることに、不安を抱く者もいるだろう。期待が大きい分、そうした不安はもつともなことだが、少なくとも、この少女たちは、どんな王よりも毅然と危機に立ち向かおうとしている。それは、雲間から差し込む一条の光のごとく、である。

「アルサスのバカ。やっぱし、バカーっ！」

「なんだと、クソガキっ!!」

アルサスとルウは、いつものようにお互いを罵りあう。そんな二人を見つめるフランチェスカは、苦笑交じりに、クロウに言った。

「あの子たち、精神年齢が近いのかもしれないわね」

「そうですね……。でもあんなフェルト、なんだかはじめて見るような気がします。昔のフェルトはどちらかと言えば一昨日までの彼に近かった」

感慨深げに言うクロウの言葉はアルサスたちにまで届いてはいない。

「それは、記憶を喪ったアルサスということかしら？」

「ええ。僕の知る限りは。常に影を背負っていた。側室の産んだ望まれない子だと知ってなお、シオンさまのために強くあろうとして、自分を押し殺しながら生きてきた。その最たるものが、人殺しの汚名を被っても、銀の乙女であるネルさんを殺そうと心に決めたことです。でも、迷いに迷って、ガルナツクの彼は追い詰められていた」

「あら、騎士さまは、随分アルサスの事を分かっているのね」

「それはそうですよ。伊達に十年近くの付き合いじゃないですからね。でも王子殿下をこう呼ぶのは変ですが、アルサスに変なヤツですよ。記憶を喪って戻ってきたかと思うと、今度は何か吹っ切れたような顔をしている。今になって思えば、彼こそが、この戦いの常を中心にいた」

「わたしたちは、彼の物語の脇役に過ぎないってこと？」

「いや、アルサスとネルさんの物語の脇役です」

クロウはそう言うと、再びアルサスとルウの方を見る。二人はあいつも変わらず、ああだこうだと言いつつ合いながら、談笑するシオンとアイシャの後を付いていく。呆れたようにしているのは、セシリアとジャックだ。

半年前、シオンを残して王都を出奔したかと思えば、知らぬ間に火中の栗を拾い上げたばかりか、ガモーフ人とダイムガルド人の共を連れていた。そして、今度は、ダイムガルド軍人となり、皇帝陛下に何故か気に入られた上に、軍人仲間とも親しくしているようだ。

本当にアルサスには驚かされることの連続だ。

かつて、政治だの戦いだのと、そんなことにまるつきり疎かった幼い頃。アルサスとともに、メリクス別邸で、彼の母フェリスに育てられた日々が、遠い昔のことのようだ。しかし、あの頃も常に、クロウを引っぱりまわすのは、アルサスの役だった。メリクス迷宮の地図を作ると言って、迷宮の中をさ迷い歩いたり、野うさぎ狩りに出かけようとガルナック平野へ繰り出しては、いつもフェリスたち大人を心配させては叱られていた。

それでも、アルサスとクロウの友情は変わることはない。これからもずっと。

「脇役ってことはないんじゃないかしら。わたしたちは、みな思いを共有する仲間よ。あなただって、ネルを殺したいわけではない。せめて、彼女を説得できたらって思っているでしょう？ この世界に生きる人たちには、それぞれの物語^{テイル}がある。アルサスの物語では、脇役でも、あなたが主人公の物語では、アルサスが脇役なのよ、きつと」

「何ですかそれ。誰かの格言ですか？」

「そうね。フランチェスカ・ハイトの格言かしら……」

そう言って、フランチェスカは意味深に微笑んだ。なんだか、とらえどころのない人、と言うのがハイゼノンで出会ってからずっと抱き続けた、フランチェスカの印象だ。真面目な事を言ったかと思えば、急におどけて見せたり、大人っぽくなったりと、不思議な人である。

「フランさんには、後でもうひと働きしてもらいます」

クロウは、仕事の顔に戻って、フランチェスカに言った。

「あら、人使い荒いのね。お姉さん、若くはないのよ」

「仕方ないでしょう。だって、あなたはギルド・リッターにも顔が利く。出来れば、ギルド連盟を引っ張り出してきて欲しいのです。魔法使いギルドは、白き龍によって滅ばされました。しかし、ギルド・リッターをはじめとして、各ギルドは健在です。彼らを引き入

れることが出来れば、更にこの同盟は磐石となる。ひいては、ガモーフを動かすことにもつながります」

「そうね。まあ、勝手にギルドを抜けたわたしの話なんて、聞いてくれるかどうか分からないけれど、少なくとも、騎士さまのお役にたてるなら、本望よ」

「まったく、あなたと言う人は。そういうことを真顔で言わないで下さい」

「騎士さまは、相変わらず純情なのね」

クスリと笑うフランチェスカは、悪びれた様子もない。

「みなさん、おしゃべりはここまでです。ここが、『アーカイブ』と呼ばれる、遺跡の最深部です」

三者三様の会話を止めたのは、シオンである。いつの間にか、地下通路の突き当たりになで達していた。シオンがカンテラを掲げると、そこには、縦に長細い扉が現れる。その扉は、アルサスたちが遺跡船やダスカードで見た扉に近い意匠が施してあった。

再び、シオンが魔法の言葉を口にする。シオンは、それを「解除コード」と呼んでいる。いくつかの魔法言語を組み合わせたものらしいのだが、魔法文字を少しは理解しているアルサスにも、ルウにも、その意味は良く分からなかった。そもそも、意味を成す言葉かどうか分からない。

「わたしも詳しいことは知らないのですが、かつて父から教えられた言葉です」

と、言うシオンの前で、扉が勝手に左右に割れた。やや埃っぽい空気が、内部から漏れ出してくる。そこは、ちょうどダンスホールほどの広さがある空間だった。小さなカンテラでは辺りを照らしきれないが、それでもドーム状の構造をした、半球の部屋であると言ふことだけは、何となく理解できる。

シオンはそのままつかつかと、部屋の中心へと歩く。すると、そこには人の腰ぐらいの高さの石柱があった。石柱には、穴が開いている。それが何かを尋ねるまでもない。今、アイシヤの手元には、

その穴にぴったりと合う、金色の鍵があるのだ。

「アイシャさま。『黄金の鍵』をこれへ」

シオンに促されて、アイシャは桐の箱から「黄金の鍵」を取り出した。アルサスたちが、ダスカード遺跡でウルガンから預かったものだ。黄金の鍵は、世界に六つあると言う。しかし、そのうちの五つが、神々の時代と呼ばれる太古から現代に至る、二千余年の長い歲月の中で失われてしまった。今、アイシャの手にあるそれは、世界で唯一の、ルートニア遺跡を開放する鍵なのだ。

アイシャは、ゆっくりと鍵穴に黄金の鍵を差し込むと、それを捻った。

『Willkommen zu einem Archiv. Hier kann ich verschiedene Informationen durchsuchen. Verschlüsselt in Login-Password bitte』

突然、魔法言語が部屋中に響き渡る。アルサスたちは思わず辺りを見回したが、そこには他に誰もいない。一体何処から声が聞こえてきたのか……。全員が、石柱を中心に集まる。すると、再び、天井の辺りから、声が聞こえる。

『Welcome to an archive. Here, I can search various information. Please encode a login password』

「魔法の言葉じゃないっ!!」

ルウがうろたえた声を上げる。確かに最初に聞こえた言葉とは、少しだけ違って聞こえる。どこがどう、と言うのは分からないが、明らかに響きが違う。

「みなさん、落ち着いてください! アーカイブが起動したのです! シオンはなだめるように言うが、彼女自身想定していなかったのか、多少声が上擦っていた。

『I recognized a language. I see』

t i t f o r t h e l a n g u a g e o f 4, 200
y e a r s i n t h e C h r i s t i a n e r a : : : よ
うこそ、アーカイブへ。ここでは、様々な情報を検索することが出
来ます。現在、状況自動判断し、ここにあなたがたのパスコードを、
自動受諾したものとします』

こちらの都合などお構いなしに、声は続ける。しかし、アルサス
たちは、唐突に聴きなれた言葉に変わったことに、うろたえている
余裕などなかった。先ほど入ってきた入り口の扉がボタンと音立て
て閉まったかと思うと、ドームの内壁が真っ白な光に満たされたの
である。

9.8. アーカイブ（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せ下さい。

99. アリス

「どうなってるんだ……みんな、無事か？」

光に満たされたドームの中で、アルサスが問う。それぞれに頷き合わせるのを確認すると、その視線を石柱の方に向けた。みれば、石柱から現れた光の魔法文字が文章の形を成して、ぺかぺかと点滅している。

「これは……なんででしょう？」

何を思ったか、アルサスの制止も聞かずシオンが光の文字に触れた。すると、ぱっと文字は弾けて消えてしまう。不味かったのではなからうか、と言いたげに振り向くシオンだが、文字が消えた代わりにドームの天井に小さな穴が開いた。そこから現れたのは七色に輝く小さな鉄アレイである。

『ようこそ。アーカイブへ』

再び、例の声が響いたかと思うと、鉄アレイが光を帯びて、アルサスたちの前に一つの像を作り上げた。それは、シオンよりもやや幼い少女の姿。幻のように透けており、見たこともないデザインの裾の長い緑の衣装に身を包み、襟首に埋まるような少女の顔はどこか「翼ある人」を思わせる無機質感があった。しかし、驚くべきは少女の耳から生える角である。角と言うのは、他に適当な言葉が見当たらないからで、板状の棒が耳から頭上に向かって生えているのである。

人間でも魔物でもない……！ アルサスたちが思わず警戒してしまうのも無理はない。クロウ、セシリアたちが各々の君主の前に出て、各々の武器に手をかける。だが、少女はまったく動じることもなく、

「敵対の意思はありません。どうぞ、武器をお納めください」

と、姿に似合った声で言う。魔法言語ではなく、アルサスにも分かる言葉だ。

「敵対の意志はないって言われても、こちらら、遺跡船で鉄の魔物に襲われた身だ。あんた一体何者だ!？」

「わたしの名はALC8000。今から二千と八十九年前、マリア博士により開発された、アーカイブの根幹を成す、人工デバイスです。この姿は、プログラムによる擬装体であり、お気に召さないようでしたら、男性でも、女性でも動物でもお好みの姿に任意の変更が可能です。いかがなさいますか？」

少女は深々とお辞儀すると、自らの名を名乗った。聞き慣れないどころか、意味の分からない言葉が次から次へと飛び出して来る。

「いや、姿が問題なんじゃなくて……エーエルシー八千？　それがあんたの名前か？」

魔法文字とも違う聴きなれない言葉の響きに、戸惑いを隠しきれず小首をかしげるアルサスに、ALC8000は無表情のまま答える。

「はい。ですが、あなたの氏名のように、わたし固有の名称と言うわけではありません。ALCとは、ITSの標準言語で言えば、アーティフィカル・リーディング・コミュニケーター。頭文字をとって、ALCです。八千とはわたしの作られた形式番号です。もし呼びにくいなら、『アリス』とお呼びください。マリア博士がわたしにつけてくれた名前です……。わたしの使命は、長期間にわたり蓄積したデータを元に、あなた方に有益な情報を与えることにあります。すでに検索深度レベルは、マリア博士によって、あなた方がわたしに尋ねたいことを仰ってください。出来うる限りの蓄積されたデータを元に、お答えいたしましょう。さあ、検索語句を何でも仰って……」

「ちょ、ちょっと待ってくれ」

アルサスは眉間にシワを寄せながら、AHD8000ことアリスの言葉を遮った。

「ここへ来れば、俺たちの知りたいこと、つまりアストレアの天使と奏世の力のこと、世界の真実を知ることが出来ると、ドラグノの

ウルガンから聞いた。だけど、あんたの言ってることの八割がた分らない。もう少し、俺たちにわかりやすく説明してくれないか？」

「はあ、そう仰られましたも……」

アリスはやや困った顔をしながら、アルサスたちの事を見る。そしておもむろに、「わかりました」と言った。

「あなた方の文化水準は、マリア博士が予想した文化水準に達していないようです。時代で言えば、中世の時代程度とお見受けしました」

「それって、ボクたちの時代が、アリスの時代より劣っているっていうの？」

ひょこつと、アルサスの背後から顔をだしたルウは無然とする。

しかし、いとも簡単にアリスは頷いた。

「そうです……神々の時代は今よりずっと進んだ文明を持っていました。もつとも、魔法と呼ばれる力はありませんでしたが、それを補って余りある科学技術が存在していました。その証明が、わたしです」

「魔法がなかった？　でも、この施設もあなたも魔法言語を使っている」

セシリアが訝るような顔を見ると、アリスは少しだけ笑った、ように見えた。

「あなた方が魔法言語と呼んでいる言葉は、わたしたちの時代の言語の一つです。世界の言葉は一つではなかったのです。そのうち、一つだけが、あなた方の時代まで残り、魔法言語と呼ばれるようになったに過ぎません」

「じゃあ、アリスの時代には、精霊もいなかったの？」
すかさずルウが尋ねる。

「魔法の源は、魔力と精霊の力。その二つを呼び出すのが魔法言語のはずだよ」

「精霊……そのようなものはもとこの世界に存在していません。もちろん、精神と言う意味であれば、あなた方に備わっているもの

です。ただ、魔法の力は、けして精霊などと言う具現化されないものによって生み出されているわけではありません。『奏世の力』もしかりです」

「ううっ、頭がこんがらかってきちゃう……神々の時代って一体なんなのさ！」

魔法杖を振り回しながら、ルウは少しばかり苛立ったような声を上げた。すると、アリスは左手をかざす。それを合図に、ドームの壁面に地図が映し出された。魔法か何かの類のように思えたが、それ以前に、遺跡船で見た、文字の映し出される不思議な石版を思い出す。

「なんだ、これって普通の地図じゃないか」

というのは、クロウ。確かに彼の言うとおり、センテ・レーバン、ガモーフ、ダイムガルドの地図である。だが、唐突にルウが「あっ！」と声を上げた。

それは、ほとんど間違い探しのようなものだった。だが、ガモーフ出身の彼は、ひと目でその違いを見抜いたのである。

「ウェスアの弧月湾がない。それに、地名が変だよ。ほら見て、ウェスアは『フィレンツェ』、ガモーフ神都は『ローマ』って書いてある！」

「センテ・レーバン王都は『パリ』、ルートニアは『マドリード』、ハイゼノンは『ジュネーブ』」

ルウに続いて、シオンが地名の違いに気づく。更に、

「スエイド運河は『スエズ運河』、ジルブラント海峡は『ジブラルタル海峡』。これって、どういうことだ？」

と、セシリアが驚愕の顔をする。

「これは、わたしたちの時代、即ち神々の時代とあなた方が呼ぶ時代から遡ること、九十年ほど前の地図です。ご覧のように、各地の地名はわたしたちの時代ともあなた方の時代とも違うものでした。この頃、世界には、百よりもっと多い国が存在していました。あなた方が、未開の大陸と呼ぶ、ガモーフよりも東に至る場所まで、

限なく人が住んでいたのです。しかし、わたしが生まれる少し前、時代はそこで一つの区切りを迎えました」

アリスは淡々と語る。

「わたしたちの時代は、西暦二一一年、あなた方の時代は西暦四二〇〇年。ひと続きの時代であり、神などというあいまいな存在は、精霊同様この世界には存在していませんでした。時代を続けてきたのは常に人、あなた方と同じ人間です。ですが、その文明は一度滅びを迎えたのです。みなさんに、お見せしましょう、世界の真実を」

映像が映し出される。それは、この世界が刻み続けた歴史の映像。モノクロに映るのは、軍服を着た兵隊の行進。バヨネットによく似た武器を携え、穴の中をかくぐりながら走る兵隊。その穴を飛び越えていくのは、芋虫のような姿をした、箱型のもの。箱には、長柄の棒が延びており、その先端が光ったかと思うと、数瞬後に地上に爆炎を巻き上げる。いくつもの折り重なった死体の山。それを持ち越え火を噴き続ける箱。

次に映し出されたのは、デモ行進の映像だろうか。魔法文字の書かれた横断幕を掲げながら、男たちがなにやら声を荒げている。やがて、その憤懣は新たな映像へと結びつく。

ちよび髭顔の男が、恐ろしい剣幕で演説をしている。彼の左腕には腕章が巻かれ、鉤十字の紋章が描かれていた。場面が切り替わるとそこは空。だが、飛んでいるのは鳥ではない。鳥の形をした乗り物に人が乗っかっているのだ。鳥は腹に抱えた、卵のようなものを次々と地上に落としていく。すると、大地が炎に包まれていった。

また場面が変わる。魔法文字ではない、角ばった文字と、白地に赤い丸が書かれた旗がはためき、青年たちが銃を構える。彼らの前には、海があった。沖合いにはいくつかの影が見える。一見島のようだが、島にしては小さいし、船にしては大きい。その影がチカッと光ったかと思うと、青年たちは爆発に飲み込まれ、血肉を撒き散らして碎け散った。

鳥の形をした乗り物が空を飛ぶ。腹からタマゴをいくつも落としていくと、夜空が、真昼のように明るくなり、街は炎に包まれていった。まるで終末の姿に似ている。

ようやく映像に色が付く。何処の森だろうか。うっそうと覆い茂ったジャングルを上空から見つめた映像だ。かすかに映るのは、先ほどの鳥の形をした乗り物の影。その影から、真っ白い粉のようなものが地上に降り注ぐ。瞬くうちに、森の緑は赤い枯葉の森に変わっていく。それを嬉しそうに笑うのは、白い肌青い目をした男たちである。

今度は、砂漠。最初の映像に現れた芋虫のような箱が、鉄で出来た乗り物だと、映像に色が付いてようやく分かった。鉄の芋虫は、キュラキュラと足音を立てながら、砂漠の砂をかき分ける。芋虫の背中から顔を出した男が、一声差叫ぶと、芋虫の頭から突き出した長い棒が火を噴いた。すると、砂の稜線の向こうで、幾人もの人が、血まみれで死んでいく。

「うっ！」

アイシャが顔面蒼白になりながら、口元を押さえた。次々と流れていくその映像は、戦争の歴史。しかも現実の出来事であり、あまりにも凄惨で残酷な映像だった。まだ十五の少女には耐え難いほどの、苦痛の映像だ。

アルサスはすかさずアイシャのもとに駆け寄ると、その背中を軽くさすってやった。

「わたしが生まれるよりも以前、世界は何度も戦争を繰り返してきました。世界には、沢山の国があって、民族、宗教、資源、そういったものを奪い、奪われながら、あらゆる時代が築き上げられていったのです。第一次世界大戦、第二次世界大戦……その中で死んでいった人々の数は、もはや数えることなんて出来ません」

淡々としたアリスの口調が、何故か空恐ろしいもののように思えてくる。皆一様に、黙りこくって、流れ続ける映像を見つめた。

「しかし、そうした長きに渡る戦争の時代を反省しようと言う動きが出たのは、西暦二千百年を前にしたことです。争いに満ちた世界に平和をもたらさるべく、人々は結集し、ITSという連合国家を築き上げました」

「アイティーエス？」

アルサスが問いかけると、アリスは宙を指でなぞり、光の文字を表した。

『International Treaty Standards』

「この時代の言葉で言えば、条約批准国連合、と呼びます。平和のためにお互いが手を取り合い、すべての武器をこの世からなくすことを誓い合い、未然に来るべき最終戦争を防ごうとしました」

「へっ、そんなこと出来るわけじゃないじゃねえか！」

そう声を荒げたのは、ジャックである。あまり頭のいいほうではないジャックとしては、よく分からないままだったのだろうけれども、もっとも的を射た発言でもあった。

「そう、あなたの言う通り。理想と現実には常にぶつかり合うものです。人間が武器を持つのは、自らを守り、相手の富を奪うため。獣と違い、爪も牙もない人間にとって、武器はそれに値する道具なのです。それを容易に捨てられないと考える人たちは、沢山いました。かれらは、ITSの理念に背き、我々から武器を奪われることを拒みました。そんな彼らの事を、わたしたちITSは、非条約批准国ことATUと呼びました」

再び、アリスは宙に文字を書く。

『Anti Treaty Union』

「ITSとATUは、その理想と現実をぶつけ合いながら、やがて、十年以上の世界戦争……第三次世界大戦へと突入しました。戦端を切り開いたのはどちらであったかそれは誰にも分かりません。何故なら、この戦争は最も激しく、最も残酷な戦いだったからです。何故ならITSにとって、脅威であると同時に、最もこの世界で忌む

べき武器をATUはたくさん隠し持っていました。その名は……通称『ホワイト・ドラグーン』」

「ホワイト・ドラグーン？」

「『白き龍』、と呼ばばあなた方にも、よく分かるのではないですか？」

その言葉に、全員がはっとなる。「白き龍」、それはかつてヨルンの戦いで二百万の命を奪い、そしてルミナスを消滅させた、あのライオットが欲しがったものである。

「『白き龍』って生き物じゃないのかの？」

上擦った声で、アイシャが問う。すると、アリスは小さく首を左右に振って、再びてをかざした。彼女の背後の壁面に新たな映像が映し出される。

99. アリス（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せ下さい。

100. 世界の真実

真夏を思わせる雲ひとつない晴天に、眩い光が走る。轟音と衝撃波が巻き起こり、瞬くうちに建物も人も薙ぎ払い吹き飛ばす。後に残されたのは、もくもくと立ち昇る巨大なきのこ状の雲だった。これも記録映像なのだろうか……。アルサスたちは、食い入るように、ドームの内壁に映し出された映像を見つめた。

「これは、西暦一九四五年の夏、世界で始めて『白き龍』を投下された、ヒロシマという街の記録です」

映像が切り替わる。炎と煙に包まれた街並み。全身にガラスの破片をつきたてて、泣きながら歩く人。血まみれになりながら、焼け爛れた皮膚と飛び出した眼球をぶら下げて、水を求めて彷徨う人。もはや、それが人であったことも分からない黒焦げの死骸。灰色の空から降り注ぐのは、インクのような真っ黒い雨。雨に打たれた人たちは、どす黒い血を吐き出しながら、その場に倒れて絶命する。男も女も子どもも老人も、動物も虫も無差別に死んでいく。

それは、どんな戦争よりも残酷で悲惨な光景だった。これが白き龍の仕業だと言うのか。理解すら出来ない頭の中で、アルサスは憤りを募らせていた。

「もうよいのじゃ！ わらわは、このようなひどいものを見るために、ここへ来たのではない！！」

突然、アイシャが悲鳴を上げて、その場に崩れ落ちた。彼女の膝を濡らすのは涙だ。凄惨な映像を直視することに耐え切れなくなったアイシャは、小刻みに肩を震わせていた。十五の少女にとって、あまりにも耐え難い光景だったに違いない。

「大丈夫か、アイシャっ」

心配そうに膝を折るアルサスに、アイシャはしがみついた。アイシャほどでないにしても、その場にいる者すべてが、映し出された恐ろしい光景にただ必死に震えをこらえていた。特に、シオンやル

ウなどは、眼を逸らしたいが、必死に勇気を振り絞っているかのようだった。

「アリス。アイシャさまの仰るとおりだ！ 我々は世界の真実、そして奏世の力とそれに対抗する術を教えてもらうためにここまで来たのだ！」

気丈なセシリアの声もどこか上擦っていた。

「これが、世界の真実です。『白き龍』とは、生き物でもなければ神威の存在でもない。人間がこの世界に生み出した最悪の兵器……。

『白き龍』とは、我々の時代の呼称に過ぎず、本当の名前は『核兵器』といえます」

「核兵器……？」

言葉を詰まらせるのはクロウ。

「センチ・レーバンの伝承では、白き龍が世界に平和をもたらすと言われ、あまつさえ、女神アストレアを地上に遣わせたのが白き龍だとする言い伝えもあります」

「いいえ。長い年月の間に、何処でどのように事実が曲げられて伝えられたのか、あるいはATUのひとたちにとってはそれもまた真実ですが、少なくとも、わたしたちは、白き龍は平和などもたすものでない事を知っています。なぜなら、白き龍とは、絶対にして最悪の殺戮兵器だからです。たった一発の爆弾で、何万人もの命が奪われる。当時、このヒロシマの街には三十三万人もの人が住んでいました。しかし、このたった一発の核兵器によって、その命が潰えたのです。それはとても恐ろしいことである反面、ある意味核兵器には、神がかり的な魅惑が備わっていました」

「神がかり？ さっき、あなたは神威の存在ではないと言い切ったはずよ」

フランチェスカが顔を曇らせる。

「確かに、人間が産んだ武器に過ぎませんが、一瞬で沢山の命を奪える兵器はこの世の何処にもない。人間が戦争を欲する限り、それではなくてはならない兵器となってしまうのです。奇しくも、ヒロ

シマの街はそれを実証して見せたのですから。それから何十年もの間、人々はこぞって核兵器開発に乗り出しました。世界に白き龍が溢れかえったのです。時には、核兵器を廃絶しようと呼びかけるある国の王もいましたが、その魅力の前には打ち勝てず、科学の進歩とともに、どんどん白き龍は力を蓄えていきました」

アリスはあいもかわらず、抑揚のない機械的な口調でそう言う、凄惨な映像を切り替えた。次にドームの内壁に映し出されたのは、初老の男である。センチ・レーバン人に似た顔つきと白い肌。だが、輪郭はひよろりと細長く、少しばかり疲れたような顔をしていた。「この人物は、ヒロシマ型原子爆弾の生みの親である博士の子孫です。世界は長い間小さな競り合いばかりが続き、平和とも戦禍ともに付かぬ時代が過ぎながら、経済や資源などの問題が山積し続けた結果、西暦二〇五〇年代に第三次世界大戦の戦端が切り開かれようとしていました。しかし、彼は、先祖が科学の虜となって生み出した兵器を、世界中の人々が使って戦争すれば、この世界は間違いなく滅びてしまうと世界に呼びかけ、ITSのさきがけを築き上げたのです。世界中の人たちが、核兵器を捨てて、新しい力関係を生み出しながら、安定を模索するべきだ。その訴えは、すぐには人々に浸透しませんでした、彼が打ち出した明確なプランは少しずつ、大きな国、とくにヒロシマの悲劇を教訓とする国々によって指示されていきました」

説明の終わりと同時に、パッと映像が切り替わる。それは、アルサスたちの見たことのない星空だった。夜空よりも沢山のきらめきが漆黒の空を埋め尽くし、その眼下には青く輝く球体がある。それが、アルサスたちの住む世界、惑星「地球」だと前置いたアリスは、「人々は、この世界の外側、即ち、宇宙にその活路を求めました。世界にある白き龍をすべて一つの場所に集めてだれにも触れないようにするということです」

と言った。映像に映し出された星の海の中、奇妙な輪が、一本の軸に貫かれたようにいくつも連結されたような物体が現れる。それ

ら輪は個々に回転しながら、星の海を漂っていた。目を凝らしてよく見れば、輪に見えたそれは、無数の円筒が縦に連なったものであるとすることが分かる。その一つ一つが「核兵器」即ち「白き龍」であると、アリスは説明する。数えることは難しいが、それだけで何十万もの数である。

「核兵器廃絶の条約に調印が行われ、すべての国が保有する核兵器は、それを管理する条約批准国連合ITSの管理下に置かれ、十六個の暗号コードによって秘匿されることとなりました。このコードを言葉にして発言するためには『モノリス』と名づけられた、ある装置が必要でしたしかし、これにより、世界から核兵器が消えた：はずだったのですが、ITSの理念に世界のすべての人が理解を示していたわけではありませんでした」

ちらりと、アリスの視線がアイシャたちダイムガルドの人間に向けられた。訝るセシリアは、少しばかり疑る声で、「どういうことだ？」と問い返した。

「戦争それ自体が経済と密接につながっていることは、言うまでもないでしょう。特に、化石燃料以外の資源に乏しく、大地もまったく肥沃でない中東アジアの国々は、こぞってITSに反旗を翻し、秘密裏に核兵器を製造し続けました。なぜなら、核兵器廃絶に賛同した国々は、それぞれに問題を抱えていたとしても、経済国ばかりです。やがて、そんな中東アジアの国々が結束し、反ITS連盟、即ちATUを結束し、ぶつかり合うことは目に見えていました。事実上それが、第三次世界大戦の発端となりました」

新たな映像に映るのは、砂漠の真ん中から、いくつもの飛び立つ、核兵器である。それらがたなびく白い煙は、さながら本当に御伽噺の世界の「白き龍」そのものだった。それらは、至る文明都市に到着して、ヒロシマの街と同じか、それ以上の破壊を行う。眩い光とともに……。

アーカイブにいる八人の中で、唯一ヨルンの悲劇を目撃したことのあるフランチェスカは、まさにヨルンで見た光景を、昨日のこと

のように思い出していた。

「世界は、ITSとATUの二つの国に別れ、核戦争がはじまりました。何百発、何千発という核兵器が、この地上に降り注ぎ、焼け野が原と変えていきました。たとえば、あなた方がウェスアと呼ぶ街のほとりにある、弧月湾は、核兵器が落着し、大地を抉りこんだ痕です。ちょうどその頃です、世界中の都市が再編され、あなた方も知る地名となったのは。ですが、戦争が始まって、数年足らずで、世界の人口はやく半数以上死滅しました」

「世界の終わり……」

アリスの淡々とした無感情な言葉に、薄ら寒さを覚えたクロウが呟く。

「ライオット閣下がネルさんに呼ばせたのも、ヨルンの悲劇で舞い降りたのも、あの星の空に浮かぶ『白き龍』、いや、核兵器だったのか？」

「でもメツツエが言っていた、十六個のコード……。その暗号コードは『モノリス』と呼ばれるものがなければ、解除できないんじゃないのか？ ネルは『モノリス』なんてもの持てなかったし、それに、ヨルンに白き龍を呼んだのは誰なんだよ!？」

クロウの言葉を受けて、アルサスが疑問をアリスへとぶつけた。確かに、ネルは「モノリス」なるものを所持しておらず、メツツエもそんなことはいっていなかった。十六個のコードさえ、知っていれば、誰にでも解除できる、と。

しかも、そもそもヨルンの悲劇を生み出した、あの「白き龍」は一体なんだったのか。「白き龍」が人間の作り出した兵器だと言うのなら、自らの意志で地上に舞い降りて二百万人もの人を殺した、などということは説明が付かないことだ。

「『モノリス』とは、高高度無電遠隔装置のことです。もともと、あなた方がドラグノから預かったという金の鍵は、モノリスを起動させるための鍵です。六つ作られた鍵のうち、現存するのがこの一つというのは事実ですが、モノリスはすでにわたしたちの時代に紐

解かれていました。そして、そのモノリスを手にしたのが、モノリスを經典と崇め奉る『ベスタ教』だった……といえはあなた方にも、容易に想像つくはずです。ヨルン平原と呼ばれる場所に、白き龍を呼び寄せたのは、あなた方がガモーフと呼ぶ国の王です」

「なんだって！？　じゃあ、十年前の悲劇はガモーフ軍の仕業だったって言うのか！？」

「はい。ただ、彼らがどの程度、白き龍について理解していたのかは分かりません。少なくとも、見方に被害が出るほど強力な兵器であるとは、思っても見なかったでしょう……」

と、アリスが言うと、なぜかそれを合図にするようにフランチェスカがポンと両手を打った。

「それで合点がいったわ。アルサス、覚えてる？　わたしがあなたたちに同行する事を決めた理由」

「ああ、ギルド・リッターにネル殺害の依頼が舞い込んだ……そうか、その依頼主はガモーフ法王。何も知らずに、強力な神の力だと信じたガモーフ王が、ヨルンの悲劇を目の当たりにして」

「そう、ライオット・シモンズがその力を手に入れようとするのを阻止するためだったのよ」

「でも、アリス。それじゃ、どうしてネルがガモーフ神都から遠く離れた、センテ・レーバン王都から十六個のコードを口にしただけで、白き龍を蘇らせることが出来たんだ！？　だって、モノリスはベスタ教とガモーフ神国が持っているんだろう？」

アリスの方に視線を向けると、アルサスは尋ねる。アリスは、「それには、別の人物をお教えしなければなりません」と言って、新たな映像に切り替える。

再び、人の姿が映し出されたが、それは先ほどの初老の男ではない。一見して美人だと分かる若い女性。白い長裾の服と相まって、知性を漂わせた眉目に、どこか疲れの色さえも見えた。センテ・レーバン人だろうか、そんな推測を思い浮かべる、クロウ、セシリア、ジャック、シオン、アイシャを他所に、アルサスとルウ、それにフ

ランチエスカは声をそろえて「あっ！」と声を上げた。

三人は、その女性に見覚えがあった。あれは、エントのローアンに教えられて訪れた、「遺跡船」と呼ばれる鉄の鳥の内部にあった、光る石版に映し出された女の顔だった。

「マリア博士だ！」

と、言ったのはルウだった。それには、さすがのアリスが驚く。

「マリア博士をご存知なのですか？」

「いや、まあ知っているというか……エントの森って場所にある遺跡、俺たちは『遺跡船』と呼んでる鉄の鳥の腹の中で見たんだ。その時は、神々の時代の記録か何かだろう、と思ってたんだが、遠からず近からずだったわけだ」

アルサスが答えると、アリスは意味深に「鉄の鳥、ですか」と呟いた。口調は無機質な割りに、妙に人間じみたところがあるのは不思議である。まさに人間がそうするように、仕切りなおしの咳払いをひとつ払うと、映し出された映像を指し示して言った。

「彼女は、わたしの生みの親でもあり、『奏世計画』を提唱した人物でもあります。彼女の名前は……マリア・アストレア。あなた方が女神アストレア、と呼ぶ方です」

100. 世界の真実（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せ下さい。

101. 奏世計画と女神アストレア

世界を二分化した戦争は、苛烈さを増しながら、何十年にも及んだ。すでに、第二次世界大戦ごろに予想されていた、核兵器による最終戦争、すなわち、第三次世界大戦である。そもそも、戦争の始まりが、民族問題や経済問題、宗教問題に根ざしたものであったとしても、すでにそれらの大義名分はすべて形骸化してしまい、残されたのは、己の利を通すためだけの殲滅戦となった。

通常、戦争というのを一般論化することは難しいとしても、殲滅に至ることは稀である。太古の昔、まだ文明と呼べるものが勃興するかしないかのころ、人々が石や木を手には戦争していた時代とは訳が違う。一定の利潤を得るか、政治的な取引や、首魁の降格、経済的・外交的な圧力などをもって、何らかの形で戦争は終息を向かえるものなのである。戦争を続けるには、戦争する人たちの属する社会に、体力が残されていなければならない。しかし、その体力如何ではなく、ITSとATUという二極化した戦争において、取引も圧力もありえないことだった。そのため、両者は慢性的な疲弊をずるすへると引きずりながらも、戦争は惰性しながら続いていったのである。

その結果、空は常に灰色の雲に覆われ、その隙間から降る黒い雨は、あらゆる緑を枯らし、海を染めていった。太陽を臨むことも、風を肌を感じることも、その放射能の降り注ぐ大地で生き物が生きていくことも難しく成り果てた死の世界は、神々の時代などと言う厳かなこと言葉よりも、暗黒の時代と呼ぶほうが、より相応しいものではなかっただろうか。それでも、殲滅戦争をやめないのは、人間の愚の骨頂でもあった……。

そんな折、ITSに一人の秀才にして天才なる科学者が現れる。名をマリア・アストレア。当時若二十歳の新進気鋭の女性科学者であった。彼女は、正義の女神と同じ名を持つ科学者の家系に生ま

れ、その類稀なる才能を如何なく發揮しては、次々と新なる兵器を生み出していった。粒子加速砲、流体組成バリア、光子力技術、それらは、核兵器を持たない、使わない、ITSにとってまさにそれに代わる兵器であった。そのため、誰もが彼女の才能を女神の御業と称した。

「そうして、彼女が作り上げた技術……例えばハイゼノンの『ウォール』と呼ばれる合成金属『ミスリル』でできた壁は、流体組成バリアによって街に放射能が降り注ぐのを防ぐ装置、ダイムガルドの方々がお使いになられているバヨネットは、粒子加速砲の技術が下敷きとなっているのですが、それらによりますます戦争は激しさを増していきました。そうして、あるとき、わたしの生みの親であるマリア博士は、焦土と化したこの世界を前にして、自らの過ちに絶望したのです。その時彼女に何があったのか、数列のプログラムに過ぎないわたしには、例え産みの母親とは言え、そつすることは出来ません。ただ、彼女の陥った絶望は、ありきたりな、科学者のたどる末路とも言えなくもないでしょう……」

自分が生み出した兵器によって、世界が減ぶ。自分も罪であるなら、その兵器を何の疑いもなく殺戮のために使う兵隊も、核兵器に頼る敵もすべてが罪人である。しかし、その贖罪はすでに人間が滅びるほか道は残されていなかった。たとえ、ITSが勝利を収めても、ATUが核の恐怖で世界を制しても、そう遠くはない未来、この腐敗した大地で人間や動物が生きていくことは難しい。なぜこうなるので、自分を含めた人間は、理解しあおうともせずに、闇雲に武器を振り回すのか。

「マリア博士は、罪の意識に打ちひしがれました。あらゆる開発計画を中止し、再三にわたるITS首脳部の命令にも逆らい続けた彼女は、中央に疎んじられ、辺境であったハイゼノンへと左遷されるという憂き目に会いました。しかし、そんな彼女を救ったのは、二人の子ども。奇しくもハイゼノンの路地裏に溜まる、戦争被害者の浮浪児でした」

アリスの左手が掲げられるのを合図に、マリア・アストレアの映像は端に追いやられ、続いて二枚の写真が現れる。どちらも幼い子どもの写真。一人は、金髪に青い瞳の少年。年のころは、十歳前後といったところだろうか。薄汚れた頬をこすりながら、こちらをにらみ付ける目はどこか他人を寄せ付けないような冷たさを感じる。もう一人は、少年よりも更に幼い、銀色の髪をした少女。海の色に似た無垢な瞳で、興味深そうにこちらを見つめている。

その二人が誰であるか、言うまでもなく、たしかな^{おもかけ}倂がすべてを物語っていた。

「マリア博士は、戦争で両親をなくし、互いに血の繋がりはなくとも、兄妹のようにして肩を寄せ合い、その日の食事も満足に得られない乞食暮らしをしていた二人を、引き取ることにしました。事実上、彼らはアストレアの子となったのです。せめてもの罪滅ぼし、いや、罪滅ぼしにもならないと、彼女は自嘲気味に回顧していましたが。そうして、博士は二人に名前を与えました。少年の名を、フオン・フリーゲル。少女の名をハンナ・フリーゲル」

「メッツェとネルか……」

「そうです。あなた方に、メッツェ・カーネリア、ネル・リミューレと名乗っている後のアストレアの天使たちです。彼らは、その子ども故の純真さで、マリア博士の傷つき折れかけた心を癒しました。ですが、それで何もかもが終わったわけではありません。世界はなおも戦争に明け暮れ、ヒロシマの街のようにいくつもの街が核兵器に焼かれ、自然と名のつくすべてが、汚れていきました」

「でも、あなたの言うことがすべて真実だとして、今現在、わたしたちは放射能などという毒に、脅かされてはいません。それよりもっと恐れるべきものは、その女神アストレア……いえ、マリア・アストレアが引き取ったと言う子どもたちです。彼らが、二千年近く昔、神々の時代の人だと言うなら、何故彼らが今もわたしたちの前にいるのですか？ 彼らは人間ではないのですか？」

シオンが口を挟むように問いかけた。その疑問はシオンだけでな

く、誰もが感じていた。アリスの話すことは、すべて遠い遠い昔のこと、伝説に近い話であるはずなのだ。

「いいえ、彼らは純然たる人間です。あなた方が放射能に脅かされないのも、彼らが二千年の時を越えて未来に存在するのも、すべてはフォトンのためです」

「フォトン……！」

何度も聴いた言葉。ある種都合のいい理由図家の言葉のようにさえ聞こえていた言葉が、突然アリスの口から語られて、アルサスは驚かずにいられなかった。

「フォトンって一体何なんだ？」

「フォトンは、本来光子と呼ばれる目には見えない微粒子の事を指す言葉です。ですが、我々がフォトンと呼ぶのは、光子の名を持つ、ナノマシンのことを指します。ご覧下さい」

そう言つて、アリスがドーム内壁に映し出したのは、小判型の虫のような形をしたものだった。しかし、それが生き物でないことは、目も口もなければ、艶やかな光沢とエッジの立ったボディラインからも明らかだった。強いて言うなら、あの遺跡船でアルサスたちに襲い掛かってきた鉄の魔物に良く似ていた。

「これがナノマシン『フォトン・ゲージ』です。マリア博士は、フォンとハンナに出会うことで、一つの決意をしたのです。それは……未来、その子どもたちが平和に過ごしていける時代を作るため、自分が持ちうるすべての知識と才能を賭けるということでした」

マリア・アストレアは、ITSにいくつかの議題を提出した。その一つが「フォトン計画」だった。

ナノマシンとは、ナノという神々の時代の単位を表す言葉が示すとおり、目には見えない極小の機械を指す。殊に『フォトン・ゲージ』は有機的な材質で作られており、その名のマシンを無数に身に纏うことにより、本人の身体能力の向上、恒常性の安定化、放射能への耐性、と同時に本人の意識から細胞レベルに至るまでの記憶と情報を取得することの出来る万能生体維持装置であり、その機能が

発現する時、光子はわずかな発光を示す。あたかも、光の粒が輝いているかのように見えるのだ。そのため、マリア・アストレアの研究課題であった「光子応用学」からその名をとって、光子と名づけられたのである。

「当初は、動植物に光子を適応化させることで、その細胞、遺伝子レベルで強制的に生態を進化させると言う実験が試みられました。表向きには、動物を兵器化するという、ITS首脳部が求める新兵器開発と言う命令に従うかのようなカムフラージュをして」

そうして生み出されたのが、進化系亜種生物である。しかし、まだ実験段階であった試作品の光子が適応できたのは、狼、鷹、猪、鳥賊、樫の木、蠍、蜥蜴の七種類である。それぞれは、それぞれが持つ生態を最大限に拡張すると同時に、放射能への適応、さらには副産物的に、人間に類似した脳の進化まで果たした。

「それって、まさか……！」

「お察しの通り、この世界で魔物、それもハイ・エンシェントと呼ばれる者たちのことです。魔物とは、魔界から訪れた未知の生物ではなく、科学によって生み出された進化系亜種生物なのです」

マリア・アストレアは、実験の成功を受けて、光子の改良と増産を続けた。ところが、ITS首脳部は、動植物が、誰も想像し得なかった進化を遂げたことに着目し、動物への光子適応による、動物兵器の開発を中座させ、人間に光子を使い、戦闘人間を生み出すことをマリアに命じた。

戦闘にのみすべての意識を投じる光子の狂戦士。それを「ウルク・ハイ」と呼ぶ。

「まさか、ギャレットやリアーナが光子を暴走させたのって……その。ウルク・ハイの技なのか？」

「そうです。彼らは、フォン……即ちメツツエに教えられ、自らの光子を極限にまで高める、ウルク・ハイになることを決めたのです。やがて、彼らは自我を光子にのっとられることでしょう。そうなれば、名実共に、彼らはウルク・ハイになってしまう」

だが、マリアはそんなウルク・ハイを生み出すために、フォトンを作ったのではない。

フォンやハンナといった子どもたちが、放射能まみれになった世界でも平和に過ごしていけるように、フォトンを考え出したのである。そのことを、ITSの首脳たちに叩きつけたものの、返ってきた返事は、命令に服従せよ、の一言だった。

マリアはまたしても壁にぶつかった。今度の絶望は自分へではなく、戦争をする人たちに向けての絶望だった。

どうして人はこうまで貪欲で、他人を思いやったり、理解しあったりしないのか。分かり合えないとしても、分かり合おうとしないために、戦争を続ける。沢山の人が死んで、自然を焼き尽くしても、まだ、そのことに気付かない。どう足掻いても、世界は滅びてしまう。人類がこの地上からいなくなってしまう……フォンも。ハンナも。

「首脳部からの命令を聞く振りをして、『奏世計画』を始めたマリア博士の顔は、鬼気迫るものがありました。残された限りある時間を、すべてその計画に捧げることを決意したのです」

人がどうしても分かり合えないなら、分かり合える世界を作ればいい。どのようにその考えに至ったのか、それが分かるのは、マリア本人だけだろう。まして、ただの記録サーバーの出力ドライブであるアリスには、そんなもの到底分かるはずもなかった。

しかし、マリアは「フォトン計画」を推し進める傍らで、フォトン・ゲージとは異なるフォトンを作り上げた。それが「フォトン・アクション」である。

フォトンは、万人に適応しなければならない。しかし、フォトン・アクションは万人に適応する必要はなく、愛するわが子である、フォンとハンナの二人にだけ適応すればよかった。そうして、完成したフォトン・アクションは、二つの異能力を与えられ、フォンとハンナに宿った。

二つの異能力、即ち世界が誤った道を進まないか監視する『奏世

の眼』と、もしも世界が謝った場合それを滅ぼし新たに生まれ変わらせる『奏世の力』である。そして、眼を与えられた少年を「金の若子」、力を与えられた少女を「銀の乙女」と、彼らの髪の色から、便宜上の名をつけた。

「フォンとハンナに与えられた使命はひとつ。もしも、世界が再び白き龍を求め、絶望的な戦争へと足を踏み入れようとするならば、その時はこの世界を滅ぼして、新たに平和で誰もが分かり合える世界を作ること。フォンとハンナは、マリアの意図を理解し、マリアの絶望を我が物と受け止めて、『奏世の子』となる事を受け入れた、と聞いています」

やがて、当初の計画通り、大量に生産されたナノマシン「フォトン・ゲージ」はあまねく、ITS中にばら撒かれた。人間が殺戮の狂戦士にならないよう、調整と改良を重ねた「フォトン・ゲージ」により、滅び行く世界の中で、人は守られることとなった。

しかし、ITSの首脳部は、命令を聞かなかったマリアを許さなかった。こともあろうか、味方の大軍がハイゼノンに押し寄せてきた。そして、『奏世の眼』であるフォンが味方によってダスカード基地へと連れ去られた。さらに、その手はハンナにも及ぶ。ハンナを渡さなければ、ハイゼノン研究所にいる、マリアを含めた研究員を皆殺しにしたい出したのだ。なんと、粗野で粗暴なことだろうか。だが、そんなことに心を痛めている余裕はなかった。

ハンナにすべての希望を託して、彼らに利用されないように機械的に記憶を封じ、冷凍睡眠にかけて、ダスカードへと送り出した。「その直後です。ハイゼノンに白き龍。即ち、核兵器が投下されたのは……」

ハイゼノンは、流体組成バリア発生装置である、ミスリルの壁だけを残して地図から消滅した。そして、冷凍睡眠つれてダスカードへと運ばれるハンナを乗せた輸送飛行機、通称「鉄の鳥」は、アトリア山脈を越えた先で、ATUの攻撃を受けて墜落した。その森が後に「エントの森」と呼ばれるようになる事は誰も知らなかった。

「さらに、ダスカードも敵の襲撃を受けました。その際、金の若子・フォンも行方も分からなくなってしまいました。そうして、ついに両軍は正面衝突し、マリアの希望とともに、あなた方が神々の時代と呼ぶものは、滅びを迎えたのです。すなわち、文明の崩壊です」

101. 奏世計画と女神アストレア（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せ下さい。

102. 天使の二千年

覚えている……。あれは、アイシャの誘いによって、記憶喪失になったまま、ダイムガルドの軍人になる事を決意した前日の夜のことだ。

見たことのない四角い建物の立ち並ぶ街並み、空を飛ぶ鉄の鳥、そして炎の中で泣き叫ぶ少年の姿。あの夢は、なんだったのか、ずっと疑問に思っていた。それが、今やっと分かった気がする。

夢の中でアルサスを導いた少女こそ、ネルであり、彼女はアルサスに「これはフォトンが見せる夢」と言った。つまり、フォトン・ゲージが蓄えた記憶と、アルサスの根底に残された記憶が重なり合って生まれた夢幻だったのだ。

あの街並みは、二千年前のハイゼノンの街並み。空を飛んで行き、森に墜落した鉄の鳥は、きっとハンナ……ネルを運んだ遺跡船だ。そして、炎に包まれていたのは、ダスカード遺跡。泣き叫んでいた子どもは、フォン……メツツエ・カーネリアだ。

夢幻はなぜ、その光景をアルサスに見せたのか。それは良く分からない。しかし、フォトンと呼ばれるものが、眼には見えなくても、現実存在していることは実証しているようなものである。それに、アルサスたちは、フォトンの姿を見たことがある。そう、「翼ある人」の三叉槍に貫かれた人々は、赤銅の騎士リアーナの言葉を借りるなら、フォトン化したのであり、あの光の粒こそがフォトンそのものである。

「文明が崩壊し、奇しくも戦争は終わりました。しかし、生き残った人々に与えられたのは腐敗した大地と、原始時代並の生活レベルです。それでも、彼らが生き残り、あなた方の祖先となったのは、ばら撒かれたフォトンが人間、動物、植物などあらゆる生き物の身にまとわりつき、あなたがたを見えない力で守ってくれているおかげなのです」

「フォトンって、そんなにすごいものなの？ 信じられないや、ボクの体にもそのフォトンがくつついているなんて……」

ルウが自分の体のあちこちを見回して言う。フォトンは、眼に見えないものだから、そんな風にして見えるものではない。しかし、だからこそ、自分の体にフォトンが存在しているなどと俄かには信じられないのだ。

「マリア博士が、二人の天使を手放す前に、世界にはフォトンがばら撒かれました。それを証明するのは、あなたの使う、魔法と言う力です」

「えっ！？ 魔法っ？」

「はい。魔法とは、フォトンが大気に潜む四つの元素を吸収・凝集させ、力と変えるものです。眼には見えないものが故、人々はその力を魔力と呼び、そして魔法と名付けたに過ぎません。ベスタ教が教える精霊の物語は、あくまで物語に過ぎず、事実ではないのです。しかし、理論上フォトンがあれば、誰にでも魔法を使うことが出来ます。それを使おうとすれば……」

「ちょっと待った！ それでは話のつじつまが合っていない」

と、アリスの言葉を遮ったのは、セシリアである。

「わたしたちダイムガルド人は魔法が使えない。魔法の研究は何度も行われたが、誰一人として魔法を使えたものはいない。マリア・アストレアが、そのフォトンなるものを世界にばら撒き、人々を絶滅から守った、と言うのなら、なぜわたしたちは魔法が使えないのだ？」

「それは……」

急に、アリスの顔が曇る。ひどく人間じみた顔つきは、何か言い出しにくいことがあるかのようで、一堂はそろって訝るような視線をアリスに向けた。

「わたしに蓄積された記憶を述べるなら、あなた方はATUを組織した人たちの子孫であり、フォトン適応がかなわなかったのです。マリア博士に時間があれば、そう、フォトン・アクションに匹敵す

るようなものに、更なる改良を施し、あまねく生き物すべてにフォトンが適応されてしかるべきでした。しかし、先ほども申し上げたとおり、それは味方によって足元をすくわれてしまったのです」

「わたしたちが、核兵器で文明を滅ぼした者たちの子孫……そんなバカな」

「いえ、これもわたしに蓄積された記憶が証明しています。文明が崩壊し、戦争が終わり、絶え間ない放射能の世界から逃げるように、あなた方は、中東アジアから、現在ダイムガルドと呼ばれているアフリカ大陸へとその活路を求め、サバンナの中に地下都市を築き上げました。そうして、五百年に及ぶ苦渋の時を越え、世界から放射能と言う毒が消えうせて、あなた方の先祖は、砂漠の真ん中、太陽の下に国を築き上げたのです。あなた方の国が、古来より沢山の鉱脈を掘り当て、国の資源と出来たのは、五百年の地下生活の時に、掘り当てたもの、といえるでしょう。もつとも、それは遠い過去の話です。今あるあなた方が、それを悔いる必要はないでしょう」

「それは、そうだが……すまない、話の腰を折った。アリス、続けてくれ」

セシリアは若干納得のいかない顔をしながら、アリスから視線を逸らした。

「文明が滅びた後、フォンとハンナの行方は長い間、分からないままでした。やがて、新しい文明が勃興し、過去の出来事と彼らの存在が、伝説という形で残った頃、フォンは一人世界をさ迷い歩いていました。彼のフォトン・アクションは、世界を監視する眼としての機能をもつ故に、彼の体を流れる時間は、通常の何百分の一の遅さで流れ、二千年と言う月日で、やっと彼は十年の成長を得ました。ほとんど、それは永遠とも思える長い時間をすごしてきたと言うべきでしょう」

最初の百年、彼は頼るものもなく、ただアストレアから与えられた使命を果たすということに燃えていた。しかし、成長しない彼を人間たちは気味悪がって、悪魔と罵り迫害した。平穏に生きていけ

る場所など、この世の何処にもなかった。ひとところに留まる事を許されず、放浪し続けた日々が千年にも及び、唯一、心のよりどころであった、養母マリアはとうの昔に死に、妹のように可愛がったハンナは行方が分らない。永遠にも等しい孤独と理不尽な暴力に身を焼かれながら、次第に彼の心が変質し、人間そのものに絶望していったことは、想像に難くない。

やがて彼は、こう思うようになった。

『人間の醜い心が憎い。マリアはそれを滅ぼし、新たな理想世界を築いて欲しいと願って、自分に「奏世の眼」を与えたのだ……』

世界が再び戦争に明け暮れ、白き龍を求めるならば、「奏世の力」を以って、世界を滅ぼしゼロから新しい世界を築き上げる。憎しみも苦しみもない、平和な世界を。そしてその時、人間は本当にわかりあうことが出来るはずだ。

それがフォンとハンナの幼い兄妹に託された「奏世計画」だった。確かに、フォンが至った結論はその解釈を捻じ曲げてはいなかった。ただ、彼の目的は、すでに人間を憎み、人間を滅ぼすことだけに向けられていたのだ。

彼は、南洋の小島へと移り住み静かな千年を過ごした。誰とも交わらず、ただ平穏な時間の中、けして消えない憎しみの炎をくすぶらせたまま、外見に二十歳を越えた彼は、ついに己の使命を果たすべく、成熟しつつある新たな文明に近づいた。

折りしも、世界は三つの国に別れ、それぞれが不均衡な関係のまま、百年近くの争いをしていた時代。ちょうど、ヨルンの戦いにおいて、ガモーフ法王が何も知らず白き龍を蘇らせたころ。フォンは、メツツエ・カーネリアという名前を名乗り、ライオット・シモンズに近づいた。そして、彼が白き龍を欲するように仕向けたのだ。

そうすることで、自ら「約束の日」を現実のものに変えた。彼にとって、アストレアとの「約束の日」はもはや憎しみを晴らす時だった。二千年の月日をただ孤独と戦い続けた彼の、唯一の生きる糧だったと言っても過言ではないのかもしれない。

一方、エントの森で眠り続けたハンナが目を覚ましたのは、フォンが呼びかけるよりも前だった。本来、「奏世計画」の実行を司る「奏世の力」を持った銀の乙女を、永い眠りから目覚めさせるのは、世界を監視する「奏世の眼」を持った金の若子の役目だった。

ところが、鉄の鳥の中でハンナは目覚めた。目覚めさせたのは辺境の村に住むリミュレと言う男であった。エントの森に材木を得るために入った彼は、森を彷徨い、そして遺跡船へと辿り着いた。そこで眠る少女を見つけた彼は、その少女を二千年の眠りから目覚めさせたのだ。

後に、メル・リミュレが語った、ハンナとの出会いはいささか四歳という幼い頃の出来事ゆえに、ほとんど記憶違いであり、ハンナは自力で目覚めたわけではなかった。

ただ、その時、父リミュレは光る石版から啓示を受けた。いずれ、その娘は女神との約束を果たさなければならぬと。それが、今生の別れになるだろうと、予言したのである。

そうして、リミュレ夫妻に引き取られたハンナは、記憶とともに、力を封じられたまま、ネルという名を与えられ、家族の中で何も知らず暖かに成長した。たった十年とは言え、それはフォンの歩んだ人生とは比べ物にならないほど豊かなものであり、彼女はすべてを忘れ去った。そのためセンテ・レーバンで宰相付参謀官の地位を得たフォンことメッツェの呼びかけには答えることが出来なかったのである。

そうして、メッツェは黒衣の騎士団に、ハンナの搜索を命じる。すでに、ギャレットの弱みを握り引き込んでいた彼は、ギャレットたちが多少手荒な真似をすることは分かっていた。

その後の経緯は語るまでもない……。

メッツェが手を下す前に彼女の心は折れ、それを癒してやることで、ネルは本当の名前と使命を取り戻した。そうして、ついにメッツェが待ち望んだ「約束の日」が到来したのだ。二千年の月日を経て……。

「本来、魔物はアストレアの天使を守護する使命を、マリア博士から授かっていました。しかし、バセットをはじめとしたハイ・エンシェントたちは己の自我を優先して、その使命を捨て去ったのです。彼らが、何故人間を、この世界を守ろうとしたのか、その理由はわたしには分かりません。問い質そうにも、すでに七匹のハイ・エンシェントは、ウルク・ハイのギャレット・ガルシアとリアーナ・ロシェットによって殺害されました」

アリスの言葉に、ウルガンが語っていた事をアルサスは思い出す。マリアによって、進化を与えられた彼らは、マリアのためにアストレアの天使を守護する事を誓ったのだろう。だが、バセットもトンキチもウルガンも、皆その使命を捨てた。だから、メッツェによって邪魔な存在でしかない魔物たちは、ギャレットとリアーナによって狩られたのだ。

「本当に、世界を生まれ変わらせる、なんてこと出来るのか？」

アルサスが問うと、アリスは静かに頷いた。

「フォトン・アクションは、あなた方のフォトン・ゲージとは比べ物にならない力を持って、フォンとハンナを守っています。とくにハンナに与えられた、銀の乙女のフォトン・アクションに秘められる、破壊と再生の力をもってすれば、あなた方の想像も出来ないことすら、なしえてしまうのです」

「じゃあ、何のためにネルは……ハンナは『翼ある人』を生み出して、世界の人々を殺しているんだ？」

「殺しているわけではありません。フォトン化しているのです。先ほども申し上げたとおり、フォトンには本人の本人たらしめる精神と情報をコピーする力があります。つまり、フォトンのなかに、その人の情報を詰め込み、一時的に地上から大気の中へ、退避させているのです。そうして、破壊と再生によって世界が生まれ変わったその時、フォトン化した人間は再び肉体を得て地上に舞い降ります。もっとも、その時彼らが元の彼らであるかどうかは、わたしには分かりません」

「なあ、アリス……あんたはどう思う？　メッツェのやろうとしていることは、正しいことなのか？」

「お、お兄さま!？」

アルサスの不意の言葉に、シオンは驚きを隠せず、眼を丸くした。「世界が戦争に溢れ、それでも人は分かり合えない生き物だ。自分が生き延びるためには、他人の不幸だって厭わない。それは、とても悲しいことだ。それを変えようとしているメッツェのしていることが、間違いか正しいことか、俺には分からない……」

「わたしは、機械です。何が正しいことかそれを判断することは出来ません。さらに言えば、わたしを生み出したのは、フォンに『奏世』の使命を与えたマリア博士その人です。たとえわたしに感情が備わっていて、人間と同じ思考をするプログラムだったとしても、フォンとネルの意志を否定することは出来ません」

「そう、だよな……。でも、世界から戦争がなくなって、他人を憎んだり殺したいと思うようなことがなくなることは、とても素晴らしいことだ」

アルサスがそう言うと、アリスはなぜかフツと小さく笑った。人間のような感情がない、と言った割には、随分と人間のような反応だ。

「だけど、あなたはアストレアの天使が作り出す新世界を受け入れるつもりはないのでしょうか？」

「ああ、そうだ。誰かが決めた価値観の中で生きるとは、とても窮屈だ」

「でも、フォトン化して、新世界に蘇れば、そのような感情はなくなっているかもしれませんよ？」

「いや、なくならない。俺のフォトンが俺の情報をコピーしたなら、生まれ変わっても俺は俺以外の何者でもないんだ……」

「ならば、わたしに何が正しいか問う必要はありません。あなたには、二人を止める権利があるのですから」

意味深なアリスの言葉に、アルサスは思わず小首をかしげた。

「それってどういう……」

「フェルト・テイル。あなたは、マリア博士の血を引く末裔です」
アリスは一際荘厳な響きの声で言った。

102. 天使の二千年（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せ下さい。

103. ヒトの可能性

「アルサスが、アストレアの末裔!？」

素っ頓狂な声を上げるルウ。フランチェスカもクロウも、妹のシオンでさえも眼を丸くして、視線をアルサスに集中させた。

「冗談なら勘弁してくれよ。アストレアの子は、メツツェとネルだろ? 俺はセンチ・レーバン国王の父と、神子の母の間に生まれた王国にとって望まれない子どもだ。俺が、アストレアの子孫だなんて言ったら、シオンに申し訳が立たないよ」

ハハハ、とアルサスは空笑いした。しかし、アリスの顔は真剣そのものだ。

「マリア博士には彼女の血を引く子どもはいません。ですが、マリア博士の記憶はフォトンによって守られ、現在に脈々と受け継がれています。あなたの母、フェリス・テイルは間違いなく、マリア博士のフォトンを受け継いだ子孫、そしてあなたも」

「どうして、そんなことが分かる!？」

「ナノマシンであるフォトンは、人の体に取り付くと、宿主には分からないほど微弱な固有駆動振動を発します。それは、人それぞれに違いがあり、いわば顔や声が違うように、みんなそれぞれの固有駆動振動を持っています。そして、フォトンの情報は細胞内の遺伝子と同様に、人から人へ受け継がれていくものなのです。あなたの体にあるフォトンは、マリア博士のフォトンにとっても近しい振動を発しています」

「まさか……母が聞こえると言っていた、神さまの神託までも、フォトンの仕業だとか言うんじゃないだろうな?」

神子と呼ばれた母は、時として預言の言葉を聞くことがあった。ベスタ教を信奉しないセンチ・レーバンにおいて、その神秘の力はほとんど無意味に等しく、母はお城で給仕の仕事をしていた。父も、母のそういう神秘的なところではなく、人としての心根や優しさに

惚れて、母を見初めたと言っていた。

しかし、母は確かに、神託を得ていた。そして今際の床でアルサスに、世界に迫り来る危機を伝え、その危機を回避するために、奏世の力を持つ銀の乙女を殺めるよう託したのだ。母が最初で最後に口にした「殺せ」という言葉。アルサスは耳を疑いながらも、それが神託によるものだと思っていて、母の遺した遺言を受け入れた。

「マリア・アストレアは、ネルにとって母親のような存在だったんだろう？　だったら、どうしてネルを殺すような神託を与える？　世界を生まれ変わらせる力をネルに与えたのは、マリア本人じゃないか！」

「人の心は、わたしには分かりません。ただ……その時代の人が、再誕に抗うことが出来たなら、それは『約束の日』ではないということ。博士は、きっとあなたたち今を生きる人たちに、チャンスを与えたのではないでしょうか……？」

「ネルを殺すことがチャンスだって？　とんだ女神さまだな！」

「だけど、あなたはハンナを殺すつもりはない、そうでしょう？　言わずとも、あなたの顔を見ていれば良く分かります。だって、血の繋がりはなくとも、あなたの顔は眼の色以外、輪郭も髪の色もその眼のまっすぐさも、マリア博士に良く似ている。あなたには、好きな女の子を殺すことなんて出来ない。そういう人のように、わたしの瞳センチには映っています」

「なっ!？」

突然のアリスの発言に、アルサスは頭上から湯気を立ち上らせた。やはり全員の視線がアルサスに痛いほど集中する。

「あなたが、母の遺言を果たすべきか迷ったのは、あなたがハンナを想っていたから。あなたは、その想いを彼女に伝えたいと思っている。ならば、あなたが彼女を殺すことはない。それでも、あなたは二人の手から世界を救いたい。それは、ある種矛盾しているとも言えます。彼らを説得し、彼らが抱えた心の闇を、あなたに解き放つことが出来ますか？」

「出来るか出来ないかじゃない。俺たちは、俺たちの力で未来を切り開きたい。それが例え平和な世界ではなくても、少しでも苦しみのない世界に出来るのは、きっと俺たちの意志だけだ。誰かの価値観だけに縛られた未来を俺たちは望んでいない。その世界に、メツツェもネルも生きるべきだと俺は思う。ちよつと押し付けっばいけどな……でも、そのためには二人を殺して得る未来じゃだめなんだ」

「奪うことのない未来、それが理想だと言うのですか？　それは途方もなく険しい道のりです。いっそ、『奏世計画』にその身を委ねた方が楽でしょう。あなたの望むことと、アストレアの天使が望むことは、同じなのですから」

「いや、違う。メツツェもネルも人の可能性を信じられなくなっている。俺は、たとえどんなヤツだろうと、その可能性を信じたい。そういうことを、俺は旅の中で学んだつもりだ」

「あなたは、心から他人を信じられるのですか？」

「まあ、天才科学者のフォトンを受け継いだ子孫だなんて言われても、俺はあんまり頭のいい方じゃない。そういうのは、他の皆に任せて、俺にできることは信じるくらいだから。大事なものは、二千年前の昔話じゃない。そうだろう？　たとえ過去に何度も大きな過ちがあつて、文明が滅びたとしても、俺たちはこうして今を生きている。それは、その可能性を選び取ったからだ。それなら、今を生きる俺たちは、この危機に対して新たな可能性を選び取らなきゃいけない。未来のために」

アリスは、しばらくの間黙って、アルサスの顔をじつと見つめた。曇りのない眼というのは、こういうことを言うのだろうか……。その眼差しは、フォトン計画を思いつき、それを話してくれたときのマリアに良く似ていた。

あくまでアリスは記録を集め保存する、自動機械に過ぎない。しかし、マリアはフォンとハンナを引き取り愛情を注いだように、アリスにも人間の名を与え、尊厳と思考を与えてくれた。そうして、いつでも友のように語り掛けてくれた。そんなマリアを、アリスは

母のように思い、慕っていた。

しかし、フォンとハンナ、二人の孤児にフォトン・アクションへの適応性があったことが、二人の人生に影を落としたなら、それはマリアの過ちだ。彼らに世界の命運をすべて託し、彼らからいくつもある可能性の未来を摘み取ってしまった。彼女は、きつと絶命する時まで、その事を後悔していたに違いない。だからこそ、マリアは脈々と子孫に受け継がれるフォトンに、彼らを安息へ導くようにメッセージを残したのだろう。たとえそれが、二人の天使を殺めることであつたとしても……。

しかし、今日の前にいる、マリアの子孫の少年は、清清しささえ感じるほど明朗な顔で、まるでマリアの贖罪を果たそうとしている。それは転じて、マリアの責任をすべてその両肩に背負わんとしているのだ。

人間とは傲慢で自己愛に満ちた生き物だと、アリスは二千年間記録を集め続けながら、マリアから与えられた思考プログラムで考え至った。それを変えたい、というマリアの遺志も、ひたすらに彼女の遺志を継ごうとする、二人の天使のことも、理解していたつもりだ。

すべては人間が選び取ること。自分は、記憶ドライブの自動機械として、事実を伝える役目を果たすだけ。いつか、黄金の鍵と呼ばれるようになった、アーカイブの解除キーを持って現れる人間のために。

それがよもや、マリアのフォトンを受け継いだ子孫であるとは、たとえただの自動機械であっても、思わず「運命」と言う言葉を思い浮かべてしまう。ただのプログラムに過ぎない感情は、そういう神がかり的なものまで、演算の対象とはしない。偶然や運命などと言ったものは、ただの数列的ランダムイズの結果であり、起こりうる可能性の一つでしかないのだ。

だが、人間と言うのはおかしなもので、その可能性のひとつを汲み上げて見せた。そうして、アリスの前に、二千年の時を経て、つ

いにアストレアと天使の「約束の日」が実現されるその瞬間を前にして、再びアストレアが姿を現したのだ。それを「運命」と呼ぶ以外、アリスには適当な言葉が思い浮かばなかった。

ここに「運命」的な事象が起こりえたなら、この少年とそして現在を生きる人たちが、かつてマリアを絶望させ、文明を崩壊させた過ちから抜け出し、「奏世の力」による強制的な世界再誕ではなく、今を生きる人間たちがその心根を以って、新たな未来を切り開くことができる、という可能性もあるのかもしれない。

無論、可能性とは、「かもしれない」という不可視的存在。それこそ、ランダムに、無数にある分岐点のどれを選ぶかは分からない。ITS標準言語であった「英語」を用いるなら、沢山のイフが存在している中で、その一つを選ぶのだ。反対に、万に一つ最悪の道、即ち世界の滅亡という分岐点を選ぶこともあるかもしれない。それでも、その不確定要素に賭けてみる価値はある。事実、マリアから「アストレアの天使を守れ」というプログラムは施されていない。自分の進む道は自分で選ぶ権利を、アリスは与えられているのだ。

そこまで思考が及んで、アリスはふと自分に苦笑した。不確定なことに自らを委ねようとするなんて、まるで人間のような思考だ、と。だが、厭な気はしないし、システムもエラーを起こさない。それは、アーカイブの開発者であるマリアが、アリスに人間と等しい尊厳と思考を与えてくれたからに他ならなかった。だから、アーカイブ開発後、マリアがハイゼノンへと赴任し直接顔を合わせる事がなくなって二千年、ようやくめぐり合った少年に、どこか懐かしささえ覚えた。

「アストレアの天使は現在、アトリア山脈は霊峰シエラ山の山頂より、疑似次元空間ベルテスにいます」

アリスはドーム内壁に、現代の地図を映し出す。ガモーフとセンチ・レーバンの上に横たわる国境線はアトリア連峰の、最高峰に赤く光点が現れた。そここそが『疑似次元空間ベルテス』である。だが、聞き慣れない言葉に、アルサスたちは一様に小首をかしげた。

「ぎじじけんくうかん……?」

「原理を説明するのはとても難しいのですが、マリア博士の光子応用学によって作り出された、時間軸を異にする、別次元とでも言うべきでしょうか。それほど広い次元ではないのですが、ベルテスはいわば貝殻のようなもの。内部から閉じてしまえば、外部から侵入することは大変難しいでしょう」

「要は、それが彼らの城と言うわけね?」

フランチエスカがあえて分かりやすい言葉に平たくする。アリスはクスリと笑って「そうです」と言った。

「もともとは、フォトン化した人間の情報を退避させる場所です」アリスの言葉に合わせて、ドーム内壁に緑色の線で描かれたちょうど貝殻のような形をしたものが現れる。ベルテスは視認できるものではないため、いわば仮の姿でアリスが表現したものである。

映像のベルテスは、シエラ山の山頂に乗っかるような形で、がま口を半開きになっている。そこからあふれ出すような矢印が何を意味しているのか、アルサスには分かっていた。

「翼ある人……」

「はい。翼ある人、即ちフォトン化機兵『エンゲル・フェーダー』は、銀の乙女のフォトン・アクションを再構成する、いわば天使の兵隊です。それをこの次元に解き放つ間だけ、ベルテスの口が開きます。とは言え、それは一瞬のこと。その間にベルテス内部に侵入するのは、たとえばダイムガルドの『飛航鯨』を以ってしても無理でしょう。そこで……」

アリスは黄金の鍵が刺さったままの脊柱に小さな手のひらで触れた。すると、石柱が縦に割れて、内部から本より少し大きい、黒い石版が現れた。石版はまるで自ら意志を持つかのように、アルサスの手元に浮遊する。

「その石版には、ベルテスの口をこちらから無理矢理こじ開けるための魔法が記されています。膨大な魔力を必要としなければなりません、それ以外にベルテスへ突入する方法はなく、ベルテスに突

入しなければ、アストレアの天使を説得することは出来ません。あなたの方の最後の戦い、それは、その魔法が完遂できるかにかかっています」

「でも、これ何も書いてないよ」

アルサスの横からひよつこりと顔を出したルウが、石版を覗き込んで言う。黒い艶やかな盤面には、それらしきものは書かれておらず、ただの黒い石の板にしか見えない。

「触れてみてください」

と、アリスは促した。アルサスは石版をルウに手渡す。そして、ルウは指先で石版の盤面をなぞった。すると、まるで遺跡船の中にあつた巨大な石版を思わせるかのように、光り輝き魔法文字が現れた。

「すごいっ」

感嘆の声を漏らすルウ。それも、二千年前の技術なのだろう。触れれば文字が現れる板などと、現代のものさしではありえないことだが、二千年前その素晴らしくも発展した文明社会は、その発展ゆえに滅びた。だが、発展したから滅びたのではない。それを享受すべき人の心が滅ぼしたのだ。

「いいのか？ 俺たちにこれを渡すということは、あんたはアストレアを裏切ることになる」

アルサスは、静かに問い質した。すると、アリスはその少女の姿に良く似合うような笑顔で、「構いません」と言った。

「あなた方は、彼らに対抗する方法を手にするためにここへ来たのでしょうか？ それに、わたしもあなたの方の可能性に賭けてみたい。マリア博士はもう二千年も前に死にました。今あるのは、今を生きるあなたの方。わたしは一度だけ、親に齒向かってみます」

103. ヒトの可能性（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せ下さい。

104. シオンとナタリー

信じがたいことではあっても、アーカイブより帰ってきたセンチ・レーバン国王のシオンとダイムガルド皇帝のアイシャが伝えれば、誰の口から聞くよりも、事実であるという確証だけは、すぐに伝播するものである。

かつてこの世界に「西暦」と呼ばれる時代があり、白き龍を巡る戦争によって、高度に発展した科学文明が滅びた。アストレアの天使はその時代から長い年月を経て、ついにこの世界を滅ぼす寸前にまで追いやった人間の子孫に鉄槌を下そうとしている……などと、普通は感嘆に信じられるような話ではなく、どちらかといえば御伽噺のようにしか聞こえないものである。本来なら、その事実を確かめるため、研究団を組織し長い歳月を経て、事実を確かめなければならぬのだが、そうする余裕もなかったし、ダイムガルド人にとっては古代の文明を滅ぼした一族の末裔という事実を安易に受け入れるわけには行かない。だからこそ、シオンとアイシャの伝えたことから、フォトンやベルテスなどの重要な事柄だけを引き抜くことにして、彼らはアーカイブのアリスが言ったことを、事実と認定したのである。

そこからは、実務者どうしの間での話である。センチ・レーバン、ダイムガルド共通の敵であるアストレアの天使は、シエラ山頂の「疑似次元空間ベルテス」に籠っている。アリスより授かった「魔法」によって、その口をこじ開け、ベルテスに突入しなければ、戦いは終わらない。それをどのような段取り……即ち作戦において行うのかは、両軍の軍部上層者によって協議されなければならないことだ。すぐさま、ダイムガルドより来訪した、軍上層部のエイブラムスたちと、センチ・レーバン騎士団総長のクロウたち騎士団長クラスの間で協議が始まった。残された日は少ない。ダイムガルドとセンチ・レーバンが同盟を結んだということは、すでにメッツェとネル

の知るところであろう。総力を結集した戦いの日は刻々と迫っていた。

そんな折、ルートニアの城門を北からやって来た一台の馬車がぐぐった。三頭立てのウォーラであるが、辻馬車ギルドのものではなく、荷台にはセンチ・レーバンの国旗が掲げられている。その荷台に乗せられているのは、一人の少女。頭の両端に分けて束ねられた長い髪、少し気の強そうな顔と、ルミナス魔法学校の制服。しかし、両手両足に枷を嵌められており、心なしかやせ細った頬には、涙のあとが付いていた。

彼女の名は、ナタリー・リウル。ひと月ほど前、即位式典にて、国王シオンの命を狙った少女である。その後、一時期は王都の地下牢に閉じ込められていたのだが、ルウのとりなしもあって、騎士団総長となったクロウが、処刑を取りやめて、ルートニアの北方にあるイングレス監獄へと身柄移送されていた。それが、突然の召喚命令に伴い、ここセンチ・レーバンの最前線へと送られてきたのである。

今更何の用があるのか……。シオン国王が目覚めたという話は、監獄の中で聞いた。目覚めたシオンが、命を狙った者に、直々に処刑を言い渡すつもりなのだろうか。どうでもいいことだった。どうせ、未練なんてものはない。国と民族の誇りを守るため、その手で敵国の女王を殺そうとした。しかし、人を殺して勝ち得る未来に何の価値もないことは、ルウが教えてくれた。その身を呈して。

ルミナス魔法学園の単調な勉学生活の中で、唯一心を許せる相手。数え切れないほど喧嘩もしたけれど、けして、ルウのことを憎んでいないわけではない。むしろその逆であり、彼の腹を貫いた時、ナイフの先端から伝わる鈍い感触は、寝ても醒めても忘れられず、嫌悪感に吐き気さえ覚えてしまう。

とてもひどい事をしてしまった……。後悔の念は尽きない。イングレスの獄中でナタリーはずっと、後悔の中で砂をかんだような日々を送り、もしも処刑が言い渡されるなら、いっそその方がいい。

「ルウだって、わたしのこと、嫌いになったはず」

人知れず呟いたナタリーの声は、馬車が停止する時の、馬のいななきによってかき消された。荷台の幌が開き、センチ・レーバン騎士団の甲冑を着た男が入ってくる。そして、おもむろに手足の枷を外してくれた。

「大罪人がまさか、女王陛下直々の謁見が許されたのだ、その汚い面くらい拭いておけ」

騎士は毒づきながらも、懷からハンカチを取り出してナタリーに渡す。しかし、そのハンカチは使い込まれているためか、ひどく汚れていて、それで顔を拭いたら余計に汚れてしまうような気がした。ナタリーは騎士に連れられて、荷台を降りた。そこは、ルートニア要塞の中庭。騎士たちが戦の準備のために、武具や馬の鞍などを担いで右往左往しながら、あちらこちらへと駆けて行く。誰も、ナタリーに目を留める者は居らず、ある意味で戦場のような空気を醸し出していた。

「こっちだ。逃げ出そうとしたら、その場で叩き斬るぞ」

と言いながら、騎士はナタリーを手招きする。そして、騎士に連れられてルートニア要塞内部に入ると、迷路のような城内の通路を何度もぐるぐるしながら、ようやく渡り廊下にぬけて、要塞を形成する四つの棟のうち、一番北側の棟へと案内された。

そこからは、紺色のエプロンドレスを着たメイドの女性に引き渡される。メイドは、終始無言にナタリーを棟の最上階へと案内した。「こちらでお待ち下さい」

と、通された部屋は、女の子の部屋だった。可愛らしい壁紙にぬいぐるみ。騎士たちが汗していた中庭とは、随分と隔絶された空間に、思わずぼかんとしてしまう。

すると、唐突に部屋の扉が開き、ナタリーと歳の変わらない少女がメイドを伴ってやって来た。その見事なドレスを見るまでもなく、ナタリーはその顔に見覚えがあった。

「シオン陛下……」

「ナタリー・リウルさんでしたよね？　どうぞ、楽にしてその椅子に腰掛けてください」

シオンはにっこりと微笑むと、部屋の中央に置かれた丸いテーブルの椅子をナタリーに勧めた。その笑顔に、敵愾心がないことに、ナタリーは肩透かしを食らったような気分になりながら、椅子に座った。

「アイシャさま……ダイムガルドの皇帝陛下よりいただいたリーツァというお茶です。人とお話をする時には、もってこいだと教わりました」

と言うシオンの傍らで、一緒に入ってきたメイドが、手早くテーブルの上にティーセットを広げた。そして、カップに注がれた琥珀の茶から、得もいえぬ落ち着いた香りが漂う。

「どうぞ。召し上がってください。ご心配なく、毒など入っていません」

言われるがまま、ナタリーはカップの茶を口に含んだ。もしも、その中に毒が入っているなら、せめてシオンのドレスを汚さないように死ねばいい。そんな風に思っていたが、口の中に広がるのは、程よい甘さと、少しばかりの苦味。ダイムガルドの茶など飲んだこととはないが、とても美味しいものだと思った。

「あの、シオン陛下、わたしは……」

ナタリーは、カップをテーブルに置くと、その琥珀の水面に映る自分の顔を見つめて言った。

「わたしは、とんでもない事をしようとしてしました。どんな罪に問われても、言い訳なんか出来ません。どうか、わたしを処刑するなら、早くしてください」

「処刑はしません。あなたの罪状は、わたしの一存ですべて取り消しました。お恥ずかしながら、わたしはあなたに命を狙われた事を全然覚えていないのです。憎め、と言われても無理です」

十二歳の幼い少女とは思えないほど、凜と張った声で、ナタリーは少しばかり困惑した。何を考えているのかはさっぱり分からない

が、即位式典の時のシオンとはまったく別人のようだった。

「でもっ！」

「もちろん、騎士の中にはわたしの決断に不満を持つ者もいるでしょう。事実は事実ですから。でも、ルウくんの頼みです。わたしは、ルウくんのことを友達だと思っています。その頼みを聞かないわけにはいかないでしょう？」

「ルウ……そんな、わたしはルウのこと！」

「彼は、あなたがした事を責めたりはしません。それは、あなたが一番良く知っているはずです。それでも、あなたをここにお呼び立てしたのは、他でもありません。あなたと、あなたのお仲間、ジャレンさんたちに力を貸して欲しいのです。センチ・レーバンのためでも、ダイムガルドのためでも、ガモーフのためでもなく、世界のために」

「世界のため……？」

戸惑うナタリーに、シオンは語った。今世界に起きていること。アリスから聞いた過去の過ちに始まり、アストレアの天使が「約束の日」を果たそうとしていること。そして、自分たちはその危機から、世界を守るために戦おうとしていること。

シオンが語る間、ナタリーは静かにその話に耳を傾けた。

「世界再誕……」

その言葉を呟きながら、ナタリーはシオンの顔を見た。シオンは、少しだけ微笑んでいた。

「もしかすると、生まれ変わればこの世界はもっと良い世界になるかもしれない。でも、だからと言って、わたしたちはこの世界を捨ててはいけないと思うんです。憎しみ合い、奪い合う、分かり合えない世界でも、わたしたちはこの世界に生きている。わたしは、わたしたちの力で、この世界を少しでも温かな世界にしたい」

「でも、そのためにわたしが出来ることなんてありません。もしも、陛下が白き龍を目覚めさせる十六個の解除コードを知っているなら、それを使えばいい。わたしなんかに出来ることは一つありません」

「だめです。白き龍をこの世に解き放てば、わたしたちは二千年前を繰り返し、新たなヒロシマの街を生み出すだけです。本当に平和をもたらすことができるのは……ここ」

シオンは自らの胸に手を当てる。

「人の心だけです。わたしは、あなたの強い心を信じたい。だから、力を貸して欲しいのです」

「わたしは、強くなんか」

ない、と言いかけたナタリーの口を、シオンは人差し指を当てて塞いだ。

「あなたは、自分の犯した罪が過ちだったと気付いた。それだけで、あなたは正しい心を持っている」

シオンはナタリーの唇から人差し指を離すと続けた。

「アーカイブのアリスから、わたしたちはベルテスの入り口をこじ開ける魔法を授かりました。現在、宮廷魔法使いとルウくんが共に、その魔法の読解を行っています。もうじき、その魔法が読み解かれることでしょう。しかし、その魔法を使うには、沢山の魔法使いが必要です。しかし、ご存知の通り、ルミナスに住む方々は白き龍によって、みなフォトンとなってしまいました。そして、我が騎士団の魔法使いと宮廷魔法使いを併せても、アリスの魔法を使うには魔力が足りません。そこで、一人でも多くの魔法使いの方に協力して欲しいのです。もちろん、お断りになられても、わたしはあなたたち『エルフォードの会』のみなさんを再び罪に問ったりはしません」

「それは……センテ・レーバン国王としての命令ですか？」

ナタリーはすっかり空になったティーカップを覗き込みながら問いかけた。確かに、シオンの言ったとおり、リーツアと言うお茶は、話をするにはもってこいの飲み物だった。不思議と心が落ち着き、この部屋に案内された時のような、暗い気持ちは少しだけ晴れているような気がした。

「いいえ、これはこの世界に住む一人の人間としてのお願いです。国とか民族のためではなくて、未来のため。わたしたちに力を貸し

てください」

思っていたシオンの姿とは随分違う。武力で八百諸侯を纏め上げたセンチ・レーバンの国王は、血も涙もない人間だと思っていた。しかし、どうだろう。目の前にいる少女は、何のためらいもなく、命を狙った者に頭を下げる事が出来る。しかも、己の利益や国家のためではなく、不特定多数の未来のために。不思議な人だ、この人を殺さなくて良かった。いつの間にかナタリーはそう思った。

ルートニア要塞の南棟屋上に立ち、周囲を見渡せば、初夏の草原と森が点在する、センチ・レーバンの風景が一望できる。アルサスの隣でアイシャは、その風景を眺めて、「センチ・レーバンの景色は美しいものじゃ」と目を輝かせた。

「すべては、そちのおかげじゃな。あの日、そちが連れ出してくれなければ、わらわは一生この美しい景色を見ることはなかった。そちとめぐり合えたことは、神さまのお導きじゃの」

「なんだよそれ。神さまはいないってことが、証明されたばかりじゃないか。女神なんていわれても、結局はただの人だった。この世界に神様の意思なんて存在しない。あるのは、俺たちの意志だけだ」と、アルサスが言う、クスリとアイシャは笑う。

「その通りじゃの。わらわは、この戦いが終わって国に帰ったら、無限の砂漠を緑化したい。すぐに実現できるものではないが、少しでも変えて行けたら、わらわは兄上にやっとな褒めてもらえるような気がするのじゃ」

「兄上って……ライベル親王のこと？」

アイシャと兄ライベルの関係は知っている。どちらかと言えば、自分とシオンの関係に近いものがあり、会ったこともない、会うことの出来ないその人に、妙な親近感を感じてしまう。

「アルサスは、兄上に良く似ておる」

「アストレアに似てるって言われた次は、ライベル親王か……そりゃ光栄だな」

アルサスは苦笑しながら、風になびく前髪を押さえた。視線の先の先には、アトリア連峰がある。ここからでは、シエラ山はおろか、擬似次元空間ベルテスの姿も見えないが、たしかにそれは視線の先にあつて、そこにネルがいる。

「冗談ではないぞ。本当じゃ。顔も声も兄上とはまったく違うが、雰囲気は良く似ている。アルサスの傍に居るとな、兄上のことがまぶたの裏に蘇ってくるのじゃ……のう、アルサス」

急にアイシャの声が真剣そのもの、といった具合に低くなった。

その声の変化に戸惑い、思わずアルサスはアイシャと瞳を交わした。「わらわは、本当にアルサスのこと好いておる。冗談や、嘘でも、ましてそなたが白馬の王子だからでもなく、真剣にそう思うのじや。のう、アルサスは、わらわのこと嫌いかな？ それとも好きかな？」

真っ向からそう聞かれれば、答えを返さないわけにはいかない。

アルサスはしばらくの間、アイシャの真剣な瞳を見つめながら、ゆっくりと口を開いた。

104. シオンとナタリー（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せ下さい。

「俺……ぼくもアイシャのことは好きだ。でも、ごめん。わがままかもしれないけど、ぼくは迎えに行かなきゃいけないヤツがいる」
おどけたり賺^{すか}したりすることなく、アルサスは落ち着いた口調でアイシャに返した。アイシャは、やや寂しそうな顔をして、アルサスから視線を逸らすと、眼前に広がる草原を見つめた。

「ネルという子のことかの？」

「ああ、そうだ。あいつが絶望したのは、半分ぼくの所為だ。ぼくが嘘をついてあいつに近づいて、その嘘を貫き通したまま、全部終わらせようとしていた。その嘘がネルの心を傷つけてしまったのかもしれない。だとしたら、ぼくが何とかしなきゃいけないんだ」

「それだけじゃないじゃろ？」

アイシャは俄かに苦笑の笑みを浮かべた。そして、うーん、と背伸びをするように両手を天高く伸ばすと、草原から駆け抜けてきた風に長い髪をなびかせた。

「こうして、アルサスと二人つきりになるのは、皇居のテラス以来じゃ。あのとき、手をつないでくれた温かさを今もわらわは覚えておる。果たして、ネルはその温かさを覚えてるかの？」

「分からない……。もう二度と、あいつはぼくの手を取ってくれないかもしれない」

「それでも、そちはネルのことが好きなんじゃろ？　ならば強引でも、その手をとるべきじゃ。それが出来るのは、アルサス、そちしか居らぬ。そして、そなたが銀の乙女の心を解き放つことこそが、この世界を守ることにつながるっておるのじゃ」

「言われなくとも……」

「そうじゃの」

小さく笑うアイシャに、アルサスも笑う。二人の瞳に写るセンチレーバンの景色。世界とは、これほどに美しいものだったのかと、

改めて思い知らされるような感覚。

「世界はいずれ滅びる。形あるものが未来永劫そのままであるはずがない。と言うのは、ダイムガルドに伝わる、深層心理的な概念じゃ。だから、未来をつなぐために、今を生き抜く、という教えでもある。しかしの、わらわは思うのじゃ。世界が滅びるのはずっとずーっと未来の話。わらわたちの子孫の子孫の、そのまた子孫の子孫の話であって、今このときではないのじゃ。わらわたちは、その未来の子孫たちのために、少しでも形ある未来を遺さなきゃならないのじゃ。けして、アリスのを見せてくれた二千年前のような世界を創ってはならない」

アリスに見せられた映像に、青い顔をしていたのが嘘のように、アイシャはその中から固い決意を得ていた。彼女は、今も常に皇帝として進歩と成長を続けているのだ。彼女であれば、ダイムガルドに未来を切り開くことも出来るだろう。

なんだか、遠い人のように感じて、アルサスは少しばかり寂しく思った。

「じゃがの、死んではならぬのじゃ、アルサス。わらわは、戦う術を持たぬゆえ、戦列に加わることは出来ない。しかし、それでも誰一人欠けることなく必ず生きて帰ってくるのじゃ、ネルとともに……」

アイシャがこちらを見る。おそらく、最後の戦いは、この世界の命運と、天使の使命を賭けた、激しい戦いとなるだろう。だから、確証を持って領けないことだったが、それでもアルサスは強く頷き返した。

「アイシャ陛下っ!!」

突然、アルサスたちの背後の階段から声が飛んでくる。

「ここに居られたのですか。探しましたっ」

と息を切らせながら上がってきたのは、セシリアである。セシリアはちらとアルサスのほうを見ると、アイシャに駆け寄った。

「エイブラムス大將が呼びです。作戦の最終的な調整会議に、シ

オン国王ともどもご列席いただきたいとのことです」

「なんじゃ。堅苦しい戦の話は、エイブラムスにすべてお任せに出来ると思うておったのに」

急に先ほどまでの、大人びた皇帝の雰囲気削いだアイシャは、少しばかり膨れっ面をしながら、階段の方へ歩いていく。

「会議室までご案内します」

と、アイシャの後を追うセシリアに、アイシャは「よいよい。会議室までの道なら覚えているのじゃ」と、手の甲であしらうと、さっさと屋上から姿を消した。なんだか逃げるかのようで、アルサスとセシリアはそろってぽかんとしてしまふ。

ある意味、アイシャの初恋が失恋に終わった……などと、気が付かないアルサスは、それはそれで鈍感だと言える。

「まったく、アイシャさまをこんなところに連れ出して。アルサスはもう少し、他人に敬意の振る舞いを払うべきだ」

ふうっ、と溜息混じりに、先ほどまでアイシャのいた場所にセシリアがやってくる。

「仕方ないだろ。一応これでも王子として育てられた身だ。不遜なのは生まれつきってヤツだよ」

「なんだそれ。この戦いが終わるまでアルサス・テイルとして扱って欲しい、と言ったのはそっちじゃないか」

「だから、俺は作戦会議に呼ばれてないんだよ。もっとも、アイシヤじゃないけど、そういう堅苦しいのはあんまり得意じゃない。誰がどう戦っても、俺はネルを連れ戻しに行くだけだ。まあ、それにお前らを巻き込むのは、本意じゃないけどな」

「別に、わたしたちはアルサスのために戦うわけじゃない。わたしたちはわたしたちの未来を守るために戦う。それだけだ」

セシリアが言うと、アルサスはいつものおどけた調子で、ひゅーっと口笛を吹くと「かっこいいね」と言った。真面目な顔のアルサスと、時として大人であっても平然としている不遜なアルサスのどちらが本当のアルサスなのか、セシリアには時々分からなくなる。

とどのつまりは、どちらもあるサスと言うことなのだけれども。

「結局ここまで俺は何もできなかった。フェルトの名を捨てたつもりで旅に出たのに、ハイゼノンではその名を使わなきゃならなかったし、ガモーフの侵攻をとめるために戦争して、多くの犠牲を払ったのに、おめおめと生き延びてしまった。もちろん、死にたくはないけどな。そして……ネルを殺すこともできず、バセットやトンキチ、それにローアンたちハイ・エンシントが望んだように、あいつを正しい道に導くことが出来なかった。結局、ずっと空回りし続けたんだ」

「でも、最後の最後でそのツケを取り戻せば問題はないだろう？
最初から上手く行くことなんて、少ない」

「それ、誰の言葉？」

「わたしの持論だ」

と、セシリアがまるで胸を張るように言うものだから、アルサスは思わず噴出してしまった。

「何が可笑しいっ。わたしは、アルサスのために思ってやってたんだぞ！？」

「いや、そうじゃなくて……今更なだけどさ、その喋り方似合っていないよ」

確かに、セシリアの声は女の子のそれに輪をかけて女の子らしい。そのため、男のような口調で喋っても、似合わないことこの上ないのだ。無論、セシリア自身が無理をして、そういう口調を心がけているのは、自分が養父オスカー・ラインの後を継ぐ者であるという自負の念からである。

「か、関係ないだろうっ！？」

顔を真っ赤にして叫ぶセシリア。

「そういうアルサスこそ、『ぼくは迎えに行かなきゃいけないヤツがいる』なんていって、サラリとアイシャさまをフツておいてっ！」
「人聞きのわるいっ！ サラリとフツたわけじゃねえっ。っていうか、聞いてたのかよ！？」

「ふんっ、聞こえる声で言ってたそっちが悪いんだ。それにしても、フツたという自覚はあるのだな。ならば、ダイムガルド軍人として捨て置くわけには行かないぞっ」

セシリアが飾りのサーベルに手をかける。慌ててアルサスも、サーベルに手をやったが、先に表情を崩したのはセシリアの方だった。「それでも、アルサスはネルという子のことを連れ戻したいんだろ？」

「ああ、そうだ」

「男つてのは、不器用な生き物なんだな。わたしは、女に生まれてよかったと思っているよ。この戦いが終われば、喋り方くらい元に戻すさ」

そう言うと、セシリアはおもむろにサーベルから手を離れた。本気でやりあうつもりはないし、そもそも剣の勝負では、アルサスに一日の長があることは、すでにその眼見ている。

「そう言や、他のみんなはどうしてる？」

アルサスも、サーベルの柄から手を離し、話題を変えるべくセシリアに尋ねた。

「ルウくんは、魔法使いを集めて、アリスの魔法を読解してる。出陣までに使いこなせるようになると思卷いているよ。クロウどのやカレンどのは、エイブラムス大将、アルフレッド大佐たちと作戦の詰めに入っている。両軍が足並みをそろえなければ、勝利は得られないからな」

「フランは？」

「フランチエスカどのは、クロウどのの要請を受けて、ギルドの連中を集めてる。もっとも、ギルドを抜けた身だから、適わないかもしれないと言いながら、今朝ウエスアへ向かった。

「ジャックは？」

「ジャックは今頃、親衛騎士団にバヨネットの使い方を教えているはずだ。ほら、エイブラムス大将が来られたときに、二百丁のバヨネットを持参しただろ？」

エイブラムスがマクギネスらと共に、正式なルートニア来訪を果たしたのは、アルサスたちがアーカイブから出てきた三日後のことだった。幾人かの近衛騎士団の面々を引き連れての来訪で、アルフレッドたち大隊長もその中に含まれていた。そして、同盟締結における友好のしるしとして、エイブラムスが届けさせたのが、二百丁に及ぶ新品のバヨネットであった。

バヨネットはいわば、センチ・レーバンやガモーフと戦うための切り札として、ダイムガルドが温存し続けた新兵器である。それを提供すると言うのには、センチ・レーバン側も驚きを隠せなかった。酔狂な真似だとする見方もあるが、もともとセンチ・レーバンとダイムガルドの関係が冷え切っていた事を鑑みれば、それは信用を勝ち得、共に同じ敵に相對するための布石であり、事実エイブラムスの思い切った行動のおかげで、作戦会議はセンチ・レーバンがわの歩み寄りによって、ことのほか円滑に進んだ。

「策士だよな、エイブラムス大将閣下は」

「そうだな。しかし、あれをダイムガルド本隊が到着する前に、親衛騎士団たちにモノにさせなきゃいけないんだ。アルサスも知っての通り、バヨネットの扱いは剣とまるで違う。ジャックはあれでもバヨネットの扱いには長けているから、適任といえば適任だ。随分熱心に指導しているよ。もっとも、あいつは変わったよ。アルサスと出会ってから……」

「そういつてもらえると嬉しいな。そうか、みんな頑張ってるんだな……」

「そうだよ、暇をもてあましてるのはわたしたちくらいだ」

溜息交じりのセシリアは、アイシャがそうしていたように、地平に広がるセンチ・レーバンの景色を眺めた。嵐の前の静けさよ、とはよく言ったものの、最後の戦いが始まる前の、平穏な時間になっではじめて、落ち着いてセンチ・レーバンを眺める時が訪れた。

ふと、その景色の中に、見慣れないものを見つけたのはアルサス

だった。遠く南方の空に黒い点が、いくつも浮かんでいる。

「あれは、なんだ？」

アルサスは慌てて、屋上の見張りをする兵のもとに走っていった。そして、見張り兵の持つ双眼鏡をもぎ取って戻ってくる。双眼鏡には、ガラスを研磨したレンズと呼ばれる部品があり、内部の魔法装置によって、百区リーグ近い遠方まで目視することが出来る優れものである。

そうして、レンズ越しに目を凝らすと、その点の一つ一つが灰色をした鯨のような形をしていることに気付く。しかし、本物を見たことはないにしろ、鯨は海を泳ぐ生き物であり、空を飛ぶ生き物ではない。いや、そもそも、その姿が鯨に似ているだけで、全身は明らかに金属で出来ていた。不意に、遺跡船の姿が思い浮かべられる。こちらに向かって悠然と空を飛んでくる鯨は、遺跡船に似ているように見えた。ただ、大きな翼の代わりに、ヒレを動かしながら空を飛ぶ様は、まさに鯨が海を泳ぐ姿に良く似ている。

「あれは、我が軍がほこる主力戦力、ダイムガルド海軍航空戦隊の航空戦艦『飛航鯨』だ」

「あれが……」

セシリアたちとの会話にその名前だけはきいたことがあったが、その正体を問い質したことはない。しかし、センチ・レーバン空に現れたそれは、明らかに空を飛べるような体型でないにもかかわらず、悠然と空を泳ぐのは、「飛航鯨」がこれもウルガンから教わった二千年前の科学技術によって完成した、バヨネットと並ぶ切り札であるということだ。

「一番先頭を来るのは一番艦『ティルピッツ』。そして右に二番艦『ミズーリ』。左は竣工したばかりの三番艦『ドレットノート』。全艦、大型バヨネット電気砲を備えた戦闘艦だ。シエラの山頂にあるベルテスへ殴りこみをかけるには、必要なものだろうか？」

一大艦隊を形成する「飛行鯨」は、先頭を進む巨大艦「ティルピッツ」「ミズーリ」「ドレットノート」の三隻。その周囲に中型の

「巡航鯨」、小型の「駆逐鯨」が数えられるだけでも二十隻以上が群れを成し、威容を空に浮かべていた。

「たしかに、あの飛航鯨があれば、シエラの山肌を登らなくても済むな……」

アルサスは双眼鏡から目を離して、呆然と空飛ぶ鯨を見つめた。次第に、あたり一面に、ごうんごうんと飛行鯨が飛ぶ音が聞こえてくる。どこか、大地がうねるような音だ。

「わたしは、ジャックの様子を見に行ってくる」

セシリアはそう言うと、踵を返した。そして、階段の方へ向かいながら、ふと思いついたように振り返る。アルサスは、再び双眼鏡越しに、空を見上げていた。

「アルサス！ 罪な男だなっ！」

セシリアは、そんなアルサスの背中に向かってなるたけ聞こえるように言ったつもりだったが、飛航鯨の音によって、アルサスに届く前にかき消されてしまった。

フツと、セシリアは笑う。

「わたしも失恋かな？」

今度は誰にも聞こえないような声で言うと、セシリアは屋上の階段を駆け下りた。

105. 飛航鯨（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せ下さい。

106. 地下牢のフランチェスカ

飛航鯨と呼ばれる、ダイムガルド航空戦艦の艦隊と共に、ダイムガルド陸軍本隊がルートニアに到着した。ルートニアには、両軍あわせて、数万の兵隊がごった返すこととなってしまったが、センチ・レーバン諸侯の多くが、新宰相ストラインの呼びかけに応じることなく、馳せ参じることはなかった。そのため、十年前の大戦^{おおいくさ}、ヨルンの戦いの時に比べて、その戦力は極端に少ないと言える。一方で、ネルの生み出す「翼ある人」は無限で不死身。何故なら、フォトン・アクションの集合体であり、生き物ではないのだ。彼^{ひが}我の戦力差を埋め合わせるには、ダイムガルドの新兵器は必要不可欠なものであった。

かくして、到着したダイムガルド軍は、ルートニアの草原地帯にキャンプを張り、来るべき戦いに備え、センチ・レーバン騎士団は、敵国であったダイムガルドの技術力に圧倒されながらも、同盟国となった元敵軍との足並みをそろえるための訓練に明け暮れていた。

「フランチェスカさんからの連絡はまだですか？」

会議室から私室への廊下、狭苦しい通路で並び歩くクロウは、傍らのブレック副官に尋ねた。ブレックから色よい返事は返ってこない。

フランチェスカ・ハイトが、クロウの要請を受けて、ギルド・リッターへの作戦参加を呼びかけるための使者として旅立ったのが、一週間前。全力で馬を飛ばせば、今頃はウェスアに到着していることだろう。目下、「翼ある人」たちがガモーフへの攻勢を強めているとは言え、ウェスアの途上で、フランチェスカが命を落としたとは考えにくい。彼女は顔に見せないだけで、武器を選ばない、相当な手練である。となると、ギルド・リッターはフランチェスカの言には耳を貸さず、彼女を拘束したと考えるのが、妥当だろう。

しかし、今クロウたちには彼女を救出する人的余裕がない。よう

やく、ダイムガルドと足並みをそろえることが出来そうだ、というのに、ギルド連盟にしても、諸侯たちにしても、この期に及んで、まだ事態の全容を把握していないとは、頭の痛い問題である。

「彼女がしくじったとなれば、ギルドの戦力は当てに出来ません。

やはり、ダイムガルド軍主導という形で、我が騎士団との連合軍でヨルンへ進駐するほありません」

「無論、ベルテスへ突入するには、ダイムガルドの航空戦艦が必要不可欠だ。しかし、一人でも多くの人間が力の一つにしなければ、アストレアの天使に我らの意思は示せません。彼女の担う役割はそれだけ大きいのです。今しばらく、連絡を待つ他ないでしょう」

「しかし、フランチェスカどのは、シオン陛下の親書を携えています。それにもかかわらず、成否の連絡がないのは、しくじったと考えなければならんと、私は思いますぞ。すでに他の騎士団長やダイムガルドの軍部は、いつ出陣するのか、やきもきしています。このままでは、全軍の士気にかかわる問題。日和見主義の諸侯どもと同じく、端から当てに出来ない、ギルドの勢力など期待には及びません。何なら、私が一騎当千の働きをばお見せいたしましょう！」

冷静沈着な補佐役のブレックにしては、珍しく血氣盛んな事を言う。今、センチ・レーバン王国騎士団と、ダイムガルド陸海軍の連合勢力は、ブレックと同じように士気に満ち溢れていた。戦争において、士気の優劣が大きく大局に影響する時代ではないことは、ガルナツクの戦いで学んだつもりだが、それでも戦う意思と勇氣はなくてはならないものである。それでも……、

『戦いでしか、未来が切り開けないこの状況にいたるまで、何も知らず、何も出来なかったことは、忸怩たるものだ』

ブレックには言わないが、そう思わずにはいられない。事実として、ライオットの凶行を見逃していたのは、クロウ自身であり、本来ならばその忠誠心からライオットを諫めるべきであった。そうすれば、メツツエは目的に及ぶことが出来ず、ギャレット・ガルシアやリアーナ・ロシェットを野放しにすることもなかっただろう。結

局のところ、自分は親友であるアルサスの両肩にその責任を押し付けていただけではないのか。そして、とうとう戦わなければならなくなった。

騎士とは、平和を守るための存在。戦争をすることが本分ではないという、クロウの持論はもろくも崩れ去ったも同然であり、かといって、今更後悔した所で、すべてが遅い。トライゼンより、騎士団の全権を預かり、今は騎士団総長の代行を務めている。そんな自分に出来る事をやるしかない。それは、親友のためでも、国家・国民のためでもなく、自分自身のけじめのためだ。

「フランチェスカさんを信用しないわけではないが、騎士団からも、正式な支援要請の親書を送るべきでしょう。ダイムガルド軍にも同様の親書を送るよう打診してみます。副官、書務院に騎士団名義の親書を準備させてください」

「はっ！　かしこまりました」

ブレックは敬礼と共に、廊下をすばやく引き返した。

その頃、ウエスアでは……。

もうじき、ガモーフ弧月湾を赤い夕日が染め上げる時刻。だが、薄暗い地下牢に閉じ込められたフランチェスカには、その夕日を眺めることは出来なかった。

ここは、ウエスアのギルド・リッター支部。フランチェスカがウエスアに到着したのはその日の午前。以前訪れた時とは、ウエスアの町は様相を変えていた。ガモーフ神衛騎士団が、教会堂を本拠に町全体にバリケードを形成し、許可のない何人の出入りも禁止されていた。しかし、それは法王と教会勢力の対立のためではない。

少しばかり時計の針を戻そう。アルサスたちがルミナス島から遠路ウエスアに辿り着いた頃、ウエスアでは一つの騒動が起きていた。ベスタ教会の大司祭であり、この街の首長であるウルド・リーが、ガモーフ法王の政策に異を唱えたため、ベスタ教会の軍隊である教会騎士団とガモーフ神国の軍隊神衛騎士団の間に対立が生まれたの

である。この辺りは、ガモーフが特殊な宗教国家である点に起因する。ガモーフ法王はガモーフ神国の最高意思決定者であると同時に、ベスタ教のトップである。しかし、事実上ベスタ教を纏め上げているのは、聖地ウェスアの大司祭という「ねじれ」があった。そのため、飢饉などに心を痛めたウルド・リーはその立場から、法王に苦言を呈したのである。それが、法王の怒りを買うことは火を見るより明らかで、ウルド・リーの逮捕と同時に、街は神衛騎士団の制圧下に置かれた。そして、ウルド・リーの処刑が執行されるや否や、教会勢力は止むを得ず法王への恭順を示し、事態は沈静化に向かったのだ。

ところが、ひと月前、ルミナス島が消えた。ルミナスは魔法使いギルドの管轄する土地ではあるが、ガモーフにとっては国境をまたいだすぐ隣である。しかも、こともあろうに、ルミナスに続く標的にウェスアが選ばれた事を知った法王は、センチ・レーバンに宣戦布告して、大軍をもって敵のガルナック砦へと進軍したのである。

結果、教会騎士団を取り込んだガモーフ軍は圧倒的な戦力を見せ付けたものの、事態は急転直下する。「翼ある人」の出現である。ガモーフ法王が、かつて自らの犯した罪を省みなかったはずはない。

十年前、ヨルンの戦いにおいて、悲劇を生んだのは法王である。經典研究を自らのライフワークと位置づける彼は、その中で「十六個の解除キー」を見つけたのである。そして、それこそがベスタの教えに従わない敵国センチ・レーバンに神罰を下すものだと言った彼は、戦いの最中「白き龍」を解き放った。そうして、どうなったのかは、歴史が物語っている。それは、彼にとって、唯一指摘されたくない大罪であり、その真実を知るウルド・リーがそれを指摘したことはあまり知られていない。

しかし、その大罪に対する神罰が自分に下ろうとしている事を悟った法王は、「翼ある人」に抗うために、センチ・レーバンへの侵攻を中座しても、各地の主要都市の防備に当たらせた。往生際が悪いと言われても、このまま死んでしまうのは、厭だと思う、聖職者

よりも人間としての本質が露になったのである。

そのおかげで、フランチェスカがウェスアの街に入るには、苦勞した。クロウより預かった王国の親書を見せたところで、バリケードを守る番兵は通してくれない。それこそ、これからアルサスたちが突入しようとするベルテスの貝殻のように、ウェスアは殻に閉じこもっているようだった。

そこで、フランチェスカはふと、ある事を思い出した。それは、アルサスたちが街を抜け出すために使った、地下水道のことである。この町は、地下に上下水のトンネルが張り巡らされている。あの時アルサスたちがたどった道を逆にたどれば街に入れるはずだ、と踏んだフランチェスカは一路郊外の丘を目指し、そこから地下水道に入った。

迷路のように入り組んだ地下水道を無事抜け出すことが出来たのは、運が良かったとしか言いようがない。彼女の卓越した方向センスと、理論による正しい分かれ道の選択によって、その日の正午には街の中へと侵入した。目指すは、ウェスアにあるギルド・リッター支部である。センチ・レーバンからは、ギルド・リッターを含めたほとんどのギルド連盟が引き上げてしまっているし、フランチェスカたちが所属していたレメンシアの支部はとうに消えてなくなつた。残るは、ガモーフにあるギルド・リッター支部か本部へと向かう他なかったのだが、その中でも最も大規模でかつ、ルートニアから近い支部はウェスアだった。

ところが、支部に到着するなり、支部長によってフランチェスカは拘束されてしまった。支部長は、あの時ガモーフ法王直々の要請に従って「銀の乙女を殺せ」と命じた男である。

今にして思えば、ネルを殺しておけば、このような事態にはならなかったのかもしれないが、かと言って、世界の真実と奏世の力の真実を知った今でも、ネルを殺したいとは思えない。だからこそ、ギルドもセンチ・レーバンとダイムガルドの連合軍に助力すべきだ、と思ってここへ来たというのに、支部長は耳を貸すどころか、フラ

ンチェスカの命令違反および、勝手な脱退に腹を立てて、激昂したままフランチェスカを地下牢に閉じ込めたのである。

「どうしたものかしらね……」

溜息を吐き出しても、狭くて暗い地下牢から抜け出す場所が見つからず、またフランチェスカの元へと戻ってくるだけだ。脱獄しようにも、武具は奪われた。さすがのフランチェスカも、徒手空拳でギルド・リッターの兵隊と戦うのは難しい。

丸裸にされなかったただけマシというものだが、それにしても時間がないというのに、石頭の支部長を説得することも出来ず、なおかつ閉じ込められてしまったとなると、騎士さま……クロウに顔向けが出来ない。

「ほれ、飯の時間だ」

唐突に守衛の声がして、鉄扉の下面に設けられた小さな扉が開いて、トレイに乗せられた食事が現れる。ガモーフの料理だが、湯気も立っていないいわゆる「冷たい飯」である。石造りの地下牢は、格子戸も取り付けられておらず、守衛の顔を拝むこともかなわないが、フランチェスカは「ありがとう」と礼を言った。すると、帰ってきたのは意外な言葉だった。

「まさか、あんたに冷や飯を運ぶことになるとは思わなかったよ」

よく聞くと、なんだか聞き覚えのある声のような気がしてきた。

フランチェスカはそっと扉に近づいた。

「それは、石頭の支部長がわたしの言葉に耳を貸さないから。アストレアの天使は明日にでも、この世界を滅ぼして、そこに新しい自分たちの理想の世界を創ろうとしている。シオン女王陛下も、アイシャ皇帝陛下も、自分たちの世界を守るために共に手を取り合い立ち上がった。わたしたちギルドも、志を同じくする必要があるわ」

「だからと言って、あんたがセンチ・レーバンの味方をする必要はないだろ？」

「そうじゃない。民族とか国境とか、そういったものの先にこの戦いはある。それに、わたしはセンチ・レーバンのためじゃなく、共

に旅したアルサスやネルのため、そして自分のために協力しているだけ。もつとも、シオンさまはとても聡明な方よ。あなたが思うよりもね……ベイク」

フランチェスカは扉越しに、懐かしい名前を口にした。懐かしい、と言っても、部下であった彼らと袂を分かったのは、数ヶ月前のこと。それなのに、何年も昔のことのように思えるのは、少しばかり不思議だった。

「そういうことを言っただけなのは、隊長らしいと言えば、隊長らしいか」

扉をはさんで、ベイクはそう言うと、おもむろに牢の鍵を開けた。「お久しぶりです、隊長。あなたに、ここは似合いません」

「あら、そうかしら。住めば都かも知れないわよ。雨露しのげて、食事だって運んでくれるし」

フランチェスカは、ベイクの浅黒い顔を見つめながら、にこりと笑った。すると、ベイクはにたりと笑みを浮かべて、

「冷たい飯でいいんですか？ それなら、もう一度鍵をかけますけど」

と軽妙に返した。

「言うわね、ベイク」

「冗談ですよ。隊長の武具はこちらに」

ギルド・リッターの白銀の甲冑とともに差し出された鉄槍は、もともとベイクの武器である。フランチェスカがアルサスたちと同行することを決めたときに、餞別としてもらったものだ。その名を「グラムドリング」というのだが、それはベイクもフランチェスカも知らないことだった。

フランチェスカは甲冑を身に纏いながら、ベイクに問う。

「ランティはどうしたの？」

と、尋ねたその瞬間だった、ちょうど頭上で激しい揺れと爆発音が聞こえてきた。再びベイクがにたりとする。

「奴さん始めたみたいです。さっ、はやくここからずらかりましょ

「う
や」

106. 地下牢のフランチェスカ（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せ下さい。

107. 聖剣アンドゥーリル

爆発音が鳴り止む前に、フランチェスカはベイクと共に、地下牢からの階段を駆け上がった。支部の廊下はすでに白煙に包まれており、あちらこちらから、混乱した支部駐留隊員たちの混乱と怒号が鳴り響いていた。どうやら、ランティがフランチェスカを助けるために、派手な魔法を使っただけらしい。

「ベイク、親書はまだ支部長の手にあるのね？」

「ええ、まあそうでしょう。あの石頭が破り捨てていない限り」

ベイクは煙から喉を守るため口元を押さえながら言った。おそらく、親書を破り捨ててはいない。あれには、クロウの名とともにセンチ・レーバン騎士団の名が記してある。それをむげに破り捨てれば、国際問題にギルドが片足を突っ込むことになるのだ。そういうことが出来るほど、肝の据わった人間でないことは分かっている。そうでなければ、とっくの昔にフランチェスカの言を聞き入れて、ギルド・リッター本部に掛け合ってくれているはずだ。

「支部長が石頭なら、あれをギルド長のいる本部へ直接持っていく。そのためには取り返さなければいけない」

「何言ってるんですか、隊長っ！ 折角ランティが脱獄のチャンスを与えてくれたんです。さっさとずらかりましょう。その後のことは、それから考えればいいことです」

「いいえ、その余裕はないわ。騎士さまはわたしからの連絡を待っている。それに、ギルド・リッターならガモーフも動かせるかもしれない。もはや、国と国がいがみ合っている時代は終わり、二千年前の過ちを繰り返さないためには、三つの国がともに手を取り合って、戦わなければいけないのよ。そのための使者としてわたしはいる。十年前に生き残った者のそれが使命かもしれないと思ってね」

「隊長……」

ベイクにはフランチェスカの言葉はあまりにも酔狂に聞こえた。

支部に戻れば、命令違反の罪を犯した以上捕まってしまうことは分かっていたのに、無謀にも戻ってきたことも酔狂だが、ガモーフ神国まで動かそうという腹積もりは、さらに酔狂だと思う。その一方で、冗談を言うことが好きなフランチェスカの眼は、いつになく真剣そのものであった。袂を分かつてからの数ヶ月、彼女に何があったのか知らないベイクにはその真剣さの意味も分からないが、信頼に足りる人だと言うことは、分かっている。さらに、フランチェスカが多少頑固者であることを思い出したベイクはフツと小さく笑った。

「分かりました、支部長室へ殴りこみましょう。実戦経験なら実務担当の俺たちの方が上です」

と、ベイクが言うと、煙の向こうから「脱獄だ！ フランチェスカ・ハイとが脱獄したぞ！」と言う声が響いてきた。さらに、建物の外からはガモーフ神衛騎士団のものと思しき声も聞こえてくる。この混乱を収めるには、やはり親書が必要である。

「ベイクっ、援護を！」

フランチェスカはそう言うと、白煙に包まれた廊下を駆け抜けた。

クロウがセンチ・レーバン国王名義でギルド・リッターへ直接親書を出して三日、ダイムガルドも同様に皇帝名義の協力をギルド・リッターへ打診したものの、返信が来ることはなく、またフランチェスカからの音信もないままに、ついに出陣の日が訪れた。

センチ・レーバン騎士団長たち、ダイムガルド軍上層士官たちは、出陣を前にした緊張感に包まれながら、ルートニア要塞の簡易謁見の間に集まった。その列の最後尾に、アルサスたちセシリア隊の姿もある。本来セシリア隊は、いち大隊の末端であり、このような場に呼ばれることはない。事実、他の小隊や騎士団の一般兵はみな、出陣の儀が終わるのを、城外で待っている。無論、セシリア隊がこの儀に呼ばれたのは、他ならぬアルサスのおかげでもあった。

「祭典の剣をここに」

玉座がある壇上で、シオンがストラインに言う。シオンの傍らには、ダイムガルドの皇帝であるアイシャが並び、ストラインの持ってきた「祭典の剣」を一振りずつその手に取った。「祭典の剣」は、センチ・レーバンで行われる必勝の祈願儀式用の剣であるため、丈が短く、実戦にはそぐわない華美な装飾が施されていた。

「これより我らは、アストレアの天使と戦う。我らは、ベスタの信徒ではないが、それでも我らの戦いは神殺しに等しい！」

凜と張ったシオンの声は謁見の間に響き渡った。

「だが、滅びを甘んじて受け入れていいのか！？ わたしたちは、わたしたちの未来を守り、この世界をわたしたちの力で変えていく責任がある。そのために、戦うのであって、神殺しはわたしたちの正義だ！」

シオンに続きアイシャが声を張り上げる。

「子々孫々にまで、未来を繋ぐ。みな、心して戦おうっ！！」

そして二人の声が重なり合い、両者の剣がガチンッと打ち合った。それにあわせて、みなから歓声の声が上がる。いよいよ高まった士気は頂点に達した。

誰もが、この世界に苦しみながら、だが誰もがこの世界を愛しているからこそ、戦いたいのだ。確かに、アストレアの天使が生まれ変わらせる世界は、とても素晴らしいものかもしれない。それでも、甘んじて受け入れてはならない。なぜなら、そこにヒトの成長はないからだ。失敗を繰り返しながら、それでも成長していく。その果てに築かれるものが「分かり合える世界」だと思いたい。

もちろん、ここにあつまった全員が同じ志を抱いているとは言いきれないが、少なくとも、アストレアの天使に立ち向かおうとしていることだけは確かだ。それが「神殺し」に値するとしても。

「作戦の概要を今一度確認する。エイブラムス大将、ご説明願いたい」

と、ストラインが言うと、一礼したエイブラムスが壇上に上がる。それと同時に、壇上に運ばれてきたのは「遠見の鏡」に良く似た、

おおきな石版である。それをモニターと呼ぶ。当然のことだが、これもダイムガルド軍がウルガンより授かった二千年前の知識で作りに上げたものである。

「現在、アストレアの天使は、シエラ山頂に築かれた異空間『ベルテス』に籠っている」

遠見の鏡が俄かに輝き、大きな地図が映し出される。シエラ山を中心とした近郊である。シエラ山の直上には、赤い光点が点滅を繰り返していた。

「ベルテスは、フォトン・アクションによって作り出された、こことは異なる次元空間である。故に、かたく扉を閉ざした要塞城と同義のものと捉えていいだろう。そこで、我らは陸と空からシエラ山に総攻撃を仕掛け、その間に魔法使い部隊が『アリスの魔法』によって、ベルテスの固く閉ざされた口を開き、少数精鋭の突入部隊がここを突破する。詳細は以下の通りだ。まず、連合軍・総攻撃部隊は四軍に分かれる。第一軍の司令官は、センテ・レーバン騎士団長クロウ・ヴェイルどの。第二軍の司令官は、ダイムガルド陸軍中将バーソロミュー・クレイ。第三軍の司令官は、センテ・レーバン騎士団長、キリク・クオートどの。第四軍の司令官は、同じく騎士団長、ナックス・ハーレイドどの。続いて、空からの攻撃に海軍中将ミシエル・ヤード率いる、我がダイムガルドの飛航鯨艦隊。および、この作戦の根幹とも言える魔法使い部隊はセンテ・レーバン騎士団長カレン・ミラ・ソアードどのが率いる」

読み上げと共に、エイブラムスが地図上に細長い鞭をあてがうと、そこに、四つの赤色をした矢印の紋様と、青色をした艦隊を表す矢印、さらに緑色に色分けられた魔法使い部隊を表す矢印が浮かび上がる。

「総攻撃部隊は、ルートニアを出発後、一軍と二軍は魔法使い部隊を援護しつつ空白地帯を東進し、ガモーフ領内ヨルン平原へ進駐。第三軍は、一路北上した後、ガルナック方面よりシエラ山麓へ進軍。四軍は海路より、ヨルン平原を南より進軍。同時に、艦隊はアトリ

ア連峰に沿って、軍を進める」

四つの矢印がそれぞれのルートをたどるように、シエラ山を臨むヨルン平原へと進む。ヨルン平原……十年前、三国の軍勢が一堂に介し決戦を行った地が、最後の戦いの舞台となるのは、ある種因縁さえも感じてしまう。

「総攻撃部隊は三方向よりシエラ山を取り囲み、同時攻撃を開始する。おそらく、『翼ある人』の攻勢は激しいだろうが、なんとしても持ちこたえなければならぬ。そのためには、どの部隊も突出することなく、同時刻に攻撃を開始する。これを支援するのは、飛航鯨艦隊である。総力を結集し、空からシエラ山を攻める。その間に魔法使い部隊は『アリスの魔法』を発動。魔法の力によって、ベルテスの口が開いたら、ダイムガルド陸軍突入部隊は駆逐鯨『ユキカゼ』にて、ベルテス内部へと突撃する。その後、突入部隊は速やかにアストレアの天使を見つけ出すこと。突入部隊の成否は、決戦の勝敗に直結するものである。故にその任は重い」

そう言うのと、エイブラムスはちらりと部屋の片隅に並ぶ、セシリア隊に目をやった。

現在突入部隊は、センチ・レーバン親衛騎士団とガモーフ近衛騎士団から、各二十五名の精鋭を選抜している。その中に、セシリア隊も含まれる。むしろ、彼らの場合は、自ら志願して突入部隊に参加することになったと言う経緯があり、また、彼らの部隊はエイブラムスにとっても因縁がないわけではない。

小隊長であるセシリア・ラインは、エイブラムスの戦友、オスカ・ラインの養女である。また、彼らの部隊は子飼いの将であるアルフレッド・ノースのき下にある。だが、何と言っても、忘れられないのは、ダイムガルド軍始まって以来の、センチ・レーバン人の兵士、アルサス・テイルの存在である。

皇居でのクーデター事件の際、単身乗り込んできた少年を只者ではないと思っていた。だから、記憶がないという彼を、アイシャが軍属に入れるというのを、強く反対しなかったのだが、まさかそれ

がセンチ・レーバンの王子だと言うではないか。しかも記憶を取り戻した今も、ダイムガルド軍の軍服に身を包み、あまつさえ突入隊に志願した。

彼には彼の思惑があるにしろ、ある意味で金の卵を拾ってしまったような感覚をエイブラムスは感じていた。ダイムガルド軍人は「かも知れない」などという曖昧な確率に賭けたりはしない。確証をもって戦略を立て、忠実にその命令を守ってこそその軍隊の規律が生まれ、強い軍隊が形成されるのだ。しかし、一個人として見たとき、アルサスと言う少年の破格ぶりには、期待をかけたくなる。

そもそも、自分たちの可能性のために戦う、という曖昧な大義で戦に臨もうとしている。言ってみれば、それはアストレアの天使への反発であり、そこに確たる正義はない。この世界に住む人間の生存本能だと言い換えてもいいかもしれない。ならば、アルサスという少年に賭けを興じるのも、また面白いことだ、とエイブラムスはあるのである。

「ダイムガルド近衛騎士、アルサス・テイル少尉。こちらへ！」

エイブラムスはその名を呼ぶと、ちらりとシオンに目配せをした。居並ぶ騎士団長やダイムガルド士官の視線を一手に受けながら、戸惑いがちにアルサスが壇上へと向かってくる。

シオンはすばやくストラインに視線を送ると頷いた。

「アルサスさん……いいえ、お兄さま。あなたにこれを授けます」
深くお辞儀するアルサスに、そう言うストラインが持ってきた一振りの剣を手を取った。それは、先ほどの祭典用の剣とは違い、実戦用の長剣である。シオンは、その剣を鞘から引き抜くと、剣身を両手で持って、アルサスに差し出した。

「これは……！」

アルサスは思わず驚きを口にする。差し出された剣は見事なミシリルの輝きを放っていた。剣身には、細かな魔法文字の細工。装飾が少ないのは、却ってその剣に神秘的な華麗さを与えているようにさえ見える。

「お兄さまが、キリク將軍に預けた、ナルシルの剣です。王都一の刀匠に折れた剣身を修復させました」

とシオンに説明されるまでもなく、アルサスにはそれが、ガルナツクの戦いで折れてしまった、「ナルシルの剣」であることに気付いていた。王家に伝わる聖剣であり、アルサスが旅立つ際に、城から持ち出した剣だ。本来なら、それを受け継ぐのは、王位継承者であるシオンなのだが、新たに再生して戻ってきたナルシルは、主人の手元に戻ることを喜ぶかのように輝いていた。

「名も新たに『アンドウーリル』と名付けました。未来を照らす輝きの剣、と言う意味です。名付け親はアイシャさまです」

「だけど、これはお前が受け継ぐものだ」

「わたしは戦うことが出来ません。ここにおいて、皆さんの無事を願うことしか出来ない。だからこそ、アイシャまの想い、そして世界中の人の想いが込められたこの剣を、わたしの一番大好きなお兄さまにお持ちいただきたいのです。そして、ネルさんにお兄さまの想いと一緒に届けてください。わたしたちの願いを」

「シオン……、分かった。必ず、お前たちの想いをあいつに伝えるよ。そして、この剣を持つべきお前の元に、必ず返す」

アルサスは強く頷き、新たに「アンドウーリル」の名を与えられた聖剣を受け取った。ずしりと両手に、以前よりも増した重みが伝わる。

「アルサス少尉、今一度、フェルト殿下として、皆に言葉をかけられよ」

端で見守っていたエイブラムスが言う。アルサスは、くると踵を返すと、みなの方に向き直った。いつになく真剣な顔つきは、アルサス・テイルではなく、フェルト・テイル・レーバンの顔のように見えた。

「仲間にも言われたけど……俺は、あまり頭のいい方じゃない。だから、堅苦しいことはいっこなしだ。センチ・レーバンの兵士も、ダイムガルドの兵士も、皆でここに生きて帰ってこよう。必ず!!」

天井高く、アンドウーリルをかざす。その美しいミスリルの剣身が輝き、一際大きな歓声が、謁見の間を埋め尽くした。

アルサスの言葉を出陣の号令として、連合軍がルートニアを出立したのは、翌日の早朝である。作戦通り、クロウ率いる一軍と二軍は、魔法使い部隊を護衛して東進を開始した。その中に、アルサスたちセシリア隊も続いた。決戦の地、ヨルン平原へ……。

107. 聖剣アンドウーリル（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せ下さい。

108. ルートニアの崩壊

「タイムガルド帝国陸軍近衛騎士団！ 進軍開始！」

近衛騎士団大隊長アルフレッド・ノース大佐の号令とともに、金色の鎧に身を包み、ダイムガルド国旗を掲げる一団がルートニア要塞を出発する。

「センチ・レーバン王国騎士団！ 進めっ！！」

続いて、王国騎士団総長クロウ・ヴェイルの掛け声で、銀色の鎧に身を包んだ騎士が、剣と盾の紋章を掲げながら、ダイムガルド軍に続いてルートニアを出発する。

その軍列はぞろぞろと四方に長い帯を作りつつ、遠く地平にまで続き、さらには飛航鯨の艦隊が空を埋め尽くす。その壮観な眺めは、一大決戦の様相を示していた。そんな、軍隊の長い列を、ルートニア要塞の屋上から見つめるのは、シオンとアイシャである。

戦う術を持たない二人は、大臣たちと共に、このルートニアに残ることとなった。ほぼ全勢力を決戦の地ヨルン平原へと差し向けているため、ルートニアを守備するのはたった百名程度の衛兵のみである。それでも、自らの安全より、この戦いに勝利することの方が大事だと言う認識は、二人の共通した想いであった。

「勝てるでしょうか……」

ふと、口について漏れ出した言葉に、シオンはアイシャの横顔をちらと見た。アイシャは、草原より流れてくる風に、髪を押さえながら、漆黒の瞳でじっと軍列を見つめている。

「王国騎士団は、兵力の大部分を構成する諸侯の勢力を欠いています。ストライン宰相の呼びかけに馳せ参じた諸侯は、たったの二百八十諸侯と呼ばれるほど多くの諸侯が存在していると言うのに……。それに、同じヨルン平原の戦いと言っても、十年前とは比べ物にならないくらい寡兵です」

アイシャが何も答えないため、シオンはここぞとばかりに、胸に

過ぎる一抹の不安を吐露した。

飢饉や異常気象などによる影響で、センチ・レーバンのみならず世界中の人口が減少している傾向にある昨今、十年前に比べると、騎士や軍人の数は圧倒的に少なくなっている。いくらダイムガルドに新兵器があっても、戦を決するのが数でないとと言っても、相手は奏世の力によって生み出された、終末の使者。何度でも蘇り、何の思考も持たぬまま、ひたすらに生き物をフォトン化していく、フォトンでできた戦闘機械である。そのため、一人でも多くの人が同じ志を抱いて戦わなければならないのだ。

だが、クロウの親書を持ってウェスアのギルド・リッター支部へ向かったフランチェスカからは、予定されていたエアデ通信の便りも来ない。彼女が、支部に辿り着けたかどうかさえ定かではない。さらに、ガモーフ法王宛に、シオンとアイシャの連名で親書を送ったが、そちらも音信不通のままである。

折角、センチ・レーバンとダイムガルドが、長年の敵対関係を解いて、互いに手を取り合う事を選んだのだ。できれば、その輪の中に、ガモーフとギルド連盟も加わってほしい。そうして、世界の人々が、アストレアの天使に、世界再誕を拒む意思を伝えなければならぬのだ。だが、この危機に及んでも、人は分かり合えないままだ。諸侯も、ガモーフも、ギルドも、すべてが分かり合えないままで、決戦に臨んでいる。それを不安と呼ばずにはいられなかった。

ところが、アイシャはそんなシオンの内心を見透かしたように微笑むと、「大丈夫じゃ」と言った。

「今はまだ分かり合えなくても、十年、二十年先、きっと分かり合える日が来る。そういう世界を、わらわたちの手で作ると決めたのじゃ。その想いは、アルサスだって一緒。みんな同じ想いで、ヨルンへ向かっている。この戦いこそが、分かり合える未来の先駆けとなるのじゃ」

「そう、ですね……ええ、そうですね」

アイシャの一言で、ふっと不安が草原の風に吹き飛ばされていっ

たような気がした。アイシャが言うとおり、自分たちはただ世界再誕を拒むのではない。その先に、分かり合える未来を作り上げるという使命が待っているのだ。

「どうかご無事で、お兄さま……」

信じるべき神を持たないセンチ・レーバン人であるが、それでもシオンは両手を胸の前で合わせて、天に向け祈りを捧げた。

「おお、ここに居られましたか、シオン陛下、それにアイシャさまも！」

かつかつと、靴のかかとを鳴らしながら屋上への階段を駆け上がってきたのは、宰相のストラインである。シオンたちの傍に控えていた衛兵たちは、ストラインの姿を見るや否や、かしこまって敬礼をする。それは、衛兵たちからストラインへの敬意の顕れであった。王室きつての及び腰と揶揄されたストラインではあったが、シオンから宰相の任を授かって以降、ダイムガルド軍との折衝や、諸侯たちへの働きかけなど、寝食を惜しんでの奮闘ぶりは、いつの間にか及び腰の汚名を雪いでいた。それは、シオンにとって嬉しいことである。

「お兄さま……いえ、戦いに赴くみなさんを見送っていました」

シオンはくると振り向いてストラインに言った。ストラインはアライグマのような顔をぐっと引き締める。

「左様にございますか、それはご苦勞様です。しかし、ここは風も強く、何より危険です。ささ、お二人とも中へ。フェルト殿下が戦っておられる間も、我らにはガモーフへの呼びかけなど、まだまだやるべきことが残されています。それが、われわれ武器を持たぬものの戦いなのですから」

「ええ、分かっています。アイシャさま、中に入りましょう」

と、ストラインに同意して促したが、アイシャはじつと空を見つめていた。その視線の先にあるのは、アトリア連峰。浮かぶ艦隊の船団の行く手に、白い鳥の群のようなものが飛んでいる。

「あれは……」

シオンが呟く。アイシャが「敵じゃ」という前に、その群が「翼ある人」であることに気づいた。その数は千に上るだろうか。

飛航鯨もそれを察知して、ウーンウーンと、警報を響かせる。直ちに、鯨の背や腹に備え付けられた、大型パイル・バレット砲塔が旋回して、狙いを定めると火を噴いた。打ち出された、大きなパイルは、群の中心を射抜く。四散する白い群。だが、一見統率のない一団が、白い帯を作りながら、再び固まりあって、艦隊をすばやくかわしていく。

飛航鯨は、巨体ゆえに、安易に回頭することが出来ず、空しく主砲塔を唸らせるだけ。小型艦である駆逐鯨は、艦列を乱すことが出来ず、もたついており、あっという間に「翼ある人」の群は艦隊を通り過ぎた。

「こっちへ来るぞ！」

腹に響き渡るような砲撃の音の隙間で、ストラインが唸る。「翼ある人」の群は、まるで艦隊にも地上を行く連合軍の部隊にも、一切目もくれず、こちらへと背中の翼をはためかせる。

「陛下、要塞の中へ、お急ぎ下さい！ 衛兵！ 連合軍に引き返すよう、信号魔法弾を打ち上げろ！」

「ダメです、宰相っ！ 今、引き返せば勝利は遠のきます。アストレアの天使はそれが分かっている、このタイミングで仕掛けてきたのです」

シオンは咄嗟に、衛兵を視線で制止し、ストラインの袖を掴んだ。「しかし、要塞を守るのは、百余名の守備隊だけ。とても守りきることは出来ません！」

「それなら、わたしたちも戦います。大臣にも武器を持たせてください。ここで引き下がることだけはあってはならないのです。衛兵さん、直ちに武器の用意を。対空防御は最低限の守りで、お願いします！」

そう言うと、シオンはすばやく衛兵に命令を下し、アイシャを引き連れて、城内へと入った。すでに騒然となっている会議室の広間

では、武器の扱いにも慣れていない大臣たちが、剣を恐る恐る手にする。

先に城内に戻っていたストラインが、シオンとアイシャに剣を持つてくる。騎士団で使われるブロードソードは、少女たちの手にずしりと圧し掛かる。

「ごめんなさい、アイシャさま」

シオンは独断を詫びた。すると、アイシャ先ほどと同じように、「大丈夫じゃ」と言った。ここにあって、二人の少女は、大臣たちよりも勇敢な顔をしていた。

大臣たちは、出発したばかりの連合軍が引き返してくれると思っている。しかし、エイブラムス大將が一角の人物であるなら、シオンと同じ結論を出して、そのまま進軍を続けるはずだ。そのために、信号魔法弾は上げなかった。たとえ、ルートニアを見捨てる結果となっても、ここで引き下がれば、士気は挫かれ、連合軍は瓦解する。そして、敗北の二文字だけが目の前に突きつけられることとなるのだ。それが分かっているのは、シオンとアイシャだけであった。

「ストライン、お兄さまの真似事ですが、いざとなったら、脱出通路を使いルートニアを破棄します。そのための爆索の準備をお願いします」

大臣には聞こえないように、小声でストラインに指示を与える。

「そう仰ると思い、すでに準備させております。せめて、お二人だけでも今から脱出通路へ」

「いえ。戦ってもいないのに、わたしが背を向ければ、守備隊の皆さんに顔向け出来ません。わたしたちは、国を統べる、国王と皇帝なのですから」

「頼もしいお言葉。このストライン、お二人をお守りいたしましょう。何、剣の扱いならば、多少は心得がありますゆえ」

ストラインは、俄かに笑うと、いつになく頼りがいのある言葉と共に、腰の剣を構えた。

ずんつ、とルートニア要塞が震え、敵が到着した事を知らせる。

守備隊は弓矢に魔法をかけて、放つが、空から舞い降りる敵に、軽々と避けられていく。そしてその魔法が空で弾け飛ぶ際に起きる振動だ。

「敵が、城内に入ってきたぞーっ!!」

廊下の先から衛兵たちの声が聞こえてきた。しかし、その声はあつという間に悲鳴に変わる。不穏な空気が会議室に流れ、翼のはためく音が会議室の前で止まる。続いて、突然扉を乱暴に叩く音。緊張感が、全員の顔を凍りつかせる。

「来たっ!」

大臣の誰かが言った。ドンっ、ドンっ! ノックすると言うよりは、扉の向こうで蹴破ろうとしているような音。終末の使者「翼ある人」は、そこに人間の気配を感じれば、それが誰であろうと、フオトンに変えようとする。だから、扉が破れるまで彼らが諦めないことは分かっていた。

しかし、会議室の扉は、屈強な四人の守備兵が全身を使って、押さえつけている。しかも頑丈な檜の扉は、簡単に打ち破れるものではなかった。すると、ピタリと扉を叩く音がやんだ。やや沈黙があつて、それを自ら破るかのように、扉の向こうから、三叉の槍が飛び出してくる。それは、衛兵の胸を正確に貫いて、体の反対側からせんたんが飛び出す。

「い、いやだ、死にたくないっ」

その悲鳴と同時に、衛兵の体は光の粒になって碎け散った。仲間のフオトン化を目の当たりにした残りの三人は、うろたえながら、扉から離れた。

「蹴破られるぞ! 大臣ども、お二人をお守りしろ!!」

ストラインが声を張り上げるのと、「翼ある人」の無表情な顔が飛び込んでくるのはほぼ同時だった。

「ひいっ!!」

大臣たちは腰を抜かすだけで、ストラインの掛け声に答えるものはいない。会議室に雪崩れ込んできた、五匹の「翼ある人」は獲物

を物色するかのように、大臣たちの顔をぐるりと見渡すと、尻餅について剣を無闇に振るう、大臣の一人に標的を絞った。その大臣の末路は語るまでもない。

狩りは、圧倒的に「翼ある人」たちの独壇場だった。一度三叉槍を繰り出せば、一人、また一人と、大臣たちは光の粒に変わる。いくつもの悲鳴が折り重なる中、ストラインはシオンとアイシャを守り、曲りなりの迅雷の剣技を見せるが、アルサスやクロウのように鍛錬と経験を積んだ剣士がようやく歯が立つか立たないかの瀬戸際である敵に、切れのないストラインの剣は通用しない。かと言って、戦う方法の一つも知らない、シオンが剣を振りかざしたところで、足手まといは目に見えていた。そもそも、剣を振り上げることすら難しく、「戦う」と豪語した事を、恥ずかしく思う。

「くっ、我ら文人には歯が立たぬかつ。衛兵！ 脱出通路へ！」

ストラインは吐き捨てるように言うと、剣を振って衛兵に指示を与える。その一瞬の隙を付いて、一匹の「翼ある人」が三叉槍をストラインの腹に突き立てた。肉を断つ独特の音はしないが、背中から飛び出した槍の先端に、アイシャは思わず「きゃっ！」と悲鳴を上げて目を瞑る。

「シオン陛下！ 早くお逃げください！！！」

「ストライン宰相！」

ストラインの名を叫ぶシオンの手を、衛兵が掴んで引っ張る。

「ワシがライオットとは違うところを見せてやるっ！ かかって来い、羽つきの化物ども！！！」

腹に槍を突き刺したまま、ストラインは怒号を上げると、剣を振りかざし、自らを貫いた「翼ある人」を切り裂いた。ストラインの体が光の粒となり弾け飛ぶのと、「翼ある人」の体がフォトン・アクシオンに戻るのはほぼ同時だった。だが、ストラインのフォトンが消え去るのを見届ける暇もなく、シオンとアイシャは衛兵に連れられて、会議室を飛び出した。

要塞のあちこちから悲鳴が聞こえてくる。阿鼻叫喚の地獄絵図。

きつとそんな光景が繰り広げられ、百余名の守備隊は十倍の軍勢によって悉く光の粒に変えていくのだろう。彼らに、容赦や情けを説くことは出来ない。

シオンたちは「翼ある人」に追いかけられながら、廊下を曲がり、階段を駆け下りる。目指すは地下にめぐらされた脱出口である。セント・レーバンの城は、何処でもそういう抜け穴のトンネルが設けられている。

ようやく、廊下の先に脱出通路の扉が見えた。すでに、脱出通路で待っていた別の衛兵が「こちらです、早く!」と、鉄の扉に手をかけて、シオンたちを手招きする。

そのときだった、シオンの耳元に、シュッと風切り音が響いた。背後を追いつがる「翼ある人」の一匹が、投擲よろしく、三叉槍を放り投げたのだ。それは見事な精度で、脱出口の鉄扉で待つ衛兵を貫いて、フォトンに変えた。悲鳴も聞こえなかった。

「アイシャさま、先にっ!!」

鉄扉に辿り着いたシオンは、アイシャの背中を押して、脱出口に押し込んだ。

「衛兵さんも、先に!」

シオンたちを会議室から連れてきた衛兵の背中も押し込める。そして、シオンは小さく笑った。振り向いたアイシャは凍りつく。その笑顔に、シオンが何を考えているのか悟ったのだ。

「だめじゃ!」

アイシャが手を伸ばす。だがその前に、シオンは鉄扉を細い腕で閉じた。慌てたのは、アイシャだけではない、脱出口に逃げ込んだ数名の衛兵たちも「陛下、陛下、何をなさるおつもりですか!？」と叫んだ。

「わたしがライオットの暴走を止められていたら……いいえ、もっと強い王であったなら、この世界を守ること出来たでしょう。でも、わたしはお父さまやお兄さまのように強くはない。だから、せめて、皆さんには生き延びてほしいのです」

扉の向こうに、シオンの声は届かない。分かっていると言わずに入られなかった。そして、剣を扉の取っ手に引っ掛けると、魔法の言葉をすばやく唱え、人差し指で剣身を撫でた。すると、指先より現れた炎が、剣を溶かし、扉の取っ手に絡みついた。

「わたしは、センチ・レーバン国王、シオン・コルネ・レーバン！臆するものではありません！」

轟くシオンの声が、迫り来る翼ある人を射抜いた瞬間、シオンの目の前が光で満たされた。

「シオンさまっ！！」

鉄扉の向こうで、シオンの息遣いや気配が聞こえなくなったことに気づいたアイシャは、扉を強く叩いた。だが、扉の向こうではシオンが剣を溶かして扉を溶接してしまった。びくとしなければ、もう二度とその扉を開けることも出来ない。

涙が零れ落ちる。思えば、初めて出来た同年代の友ち呼べる少女だった……。

「アイシャ皇帝陛下。ここに長居するわけには行きません。爆索に点火されれば、この脱出通路も持ちこたえられるかどうか分かりません。どうか気丈に」

衛兵の一人が、心痛な面持ちでアイシャを促した。彼らにとってもシオンは、忠誠を誓う女王陛下だったのだ。アイシャは、涙を拭いて頷いた。

「うむ。いくのじゃ。なんとしてもわらわたちは脱出する」

と、アイシャが言ったそのとき、別の衛兵の声が重なる。

「何で、こいつらがここに！？ 出口から入ってきやがったのか！」
衛兵たちが手持ちの魔法装置の灯りで照らす、脱出口の先。白い翼がはためく。後ろに逃げることも、前に進むことも出来なくなってしまう。やがて、頭上でルートニア要塞が仕掛けられた魔法装置の爆弾によって、崩壊する音が聞こえてくる。

「まだじゃ！ 強行突破するのじゃ！！」

アイシャは、要塞が崩壊する振動の中で、剣を構えた。

108. ルートニアの崩壊（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せ下さい。

109. 決戦の地へ

異変を報せたのは、飛航鯨の警報である。あたり一面に響き渡るような大音量に、誰もが空を見上げ、アトリアの方角から流れてくる白い翼の群を目で追いかけた。それらは、瞬くうちに艦隊をすり抜けると、そのままルートニア要塞に群がった。それは、まるで風鷗の群が、餌をついばむかのような光景で、誰もが閉口しその光景を見つめ、すでに踵を返す部隊まで現れた。

だが、それをとどめたのは、飛航鯨から全軍を指揮する、総司令官エイブラムスの言葉だった。メッツェはこちらの出鼻を挫くために、このタイミングを選んで仕掛けてきた。それが分かっていて今、ルートニアに引き返せば、戦意を削がれるばかりか、メッツェの思うままになってしまう。このままヨルン平原へと進軍する、というエイブラムスからの厳しい通達は、まさに背水の陣でこの戦いに臨むという決意の現れであった。

無論、軍列の中でエイブラムスの言葉を聴いたアルサスは、同意しつつも後ろ髪ひかれる思いだった。ジャックには「いいのか?」と問われたが、頷く他ない。シオンより、王家の聖剣「アンドウーリル」を授かった以上、自ら足並みを乱すような真似をしてはならないのだ。出来ることは、シオンたちが無事脱出通路より逃げおこせたことを、崩壊するルートニアを背後に、祈るばかり。だが、アルサスも誰も、逃げおこせたのがアイシャと数名の守備兵だけであり、彼女たちもまた脱出通路に待ち伏せた敵と戦うことになっていったとは、知る由もなかった。

その一方でルートニア崩壊は、両軍の闘志に更なる火を灯した。絶対に自分たちの世界を守るんだ、という意思がみなぎり、肅々と空白地帯を越えて、ガモーフ領内はヨルン平原へと進んだ。

ヨルン平原は、十年前三国の戦いが一つの決着をみた場所である。ここからならば、シエラ山が良く見える。ちなみに付記すれば、シ

エラ山をはさんで北側はガルナック平原であり、そちら側に迂回した部隊も今は、戦闘の準備に取り掛かっているはずである。

直ちに、軍はヨルン平原に整列した。短期決戦の構えにて、野営は設けることなく、早朝の平原から、何十万人の眼が、じっとシエラの山頂を睨みつける。

やがて、平原に漂う朝靄が通り過ぎると、雲のかかったシエラの山頂付近から、わらわらと白い翼が降ってきた。それを合図に、各部隊の隊長が剣を、バヨネットを振り上げる。

「臆するな！ 勝利は目前だ！ 全軍かかれーっ！！」

響き渡る唸り声と足音は、まるで地響きのようにヨルンへ威厳に響き渡る。騎馬隊が先行し、アルサスたち歩兵隊はその後ろを、魔法使い部隊を守るように進む。

ふとその列の中に、見慣れた小さな後姿を見つけたアルサスは、アンドウーリルを片手に駆け寄った。

「ルウ！」

「アルサス！」

互いに名前を呼び合って頷きあう。出会ったばかりの頃は、ルウの生意気な口ぶりに何度となくいがみ合っては、ネルを困らせてきた。しかし、いつの間にか出来上がった互いの信頼を、ネルが見たらどんな風に喜ぶだろうか。

「どうだ、アリスの魔法、いけそうか？」

アルサスが問いかけると、ルウは無言の返事を返す。その顔は自信に満ち溢れた表情であり、それだけでアルサスは満足する。神童と呼ばれた、ルミナス魔法学園一の才覚の持ち主。男の子にしては小さな体の何処に、それほどの魔力があるのかは分からないが、それでも彼の魔法に助けられたことは一度ではない。

「アルサスこそ、絶対ネルお姉ちゃんを連れ戻してきてね。ボク、待ってるから」

「ああ、任せろ。お前は、ちゃんとナタリーのこと守ってやるんだぞ」

アルサスは魔法使い部隊の端を走る、少女の方をちらりと見た。シオンの要請ら応じ、魔法使い部隊に参加した少女は、かつてシオンの命を狙ったテロリスト。しかし、魔法使い部隊の中には、彼女たちエルフォードの会のメンバーもちろはら見受けられた。

「な、なんで、ナタリーが出てくるのさ！」

「好きなんだろう、あの子のこと。だったら、ピシッとカッコいいところを見せてやんないとな！」

「す、好きじゃないやいっ」

「ふーん、そういうことにしておくよ。じゃあ、頼んだぜ、相棒っ！」

アルサスは手を振ると、セシリアたちの元に戻る。その背中に、ルウは一際大きな声で、「アルサスのバカー！」と、お決まりの科白を叫んだ。

シエラより舞い降りた「翼ある人」の軍勢と、連合軍総攻撃部隊が衝突したのは、両軍が突撃を開始して十分足らず。先頭のクロウの騎馬隊がまず切り込んだ。続いて、アルサスたちダイムガルドの歩兵部隊が突撃する。

ダイムガルド軍には常に二種類の部隊がいる。一つは「バックラー隊」もう一つが「カノーネ隊」である。アルサスたち近衛騎士団は、普段このように二種類に分かれたりはしないのだが、便宜上で言えばバヨネット突撃するセシリア隊はし「カノーネ隊」に分類される。

カノーネ隊は、バックラー隊の持つ大型ミスリルシールドの裏面へ滑り込み、その隙間から応射しつつ、進軍していく。攻防を一体化させ、バヨネットによる飛び道具の戦いを実用化させる戦法であり、言ってみればそれが、十年前にはなかったダイムガルドの新しい剣技である。

アルサスたちは、すばやく駆け抜けるとバックラー隊のシールド裏に身をかがめた。バックラー隊のシールドは、シールドを構える盾兵と、カノーネ隊の射撃兵の二人をすっぽりと覆い隠してしまえ

るほど大きい。そして、シールドには狭間と呼ばれる穴が開いておりそこから、目視と兜の機器を使い、バヨネット射撃を行うのである。

『奴ら、魔法弾を使ってる……』

隣のシールド裏で、セシリアが言う。声は、兜の耳あてにあるスピーカから聞こえてきた。

セシリアの言うとおり、時折戦場に、ドーンという大きな爆発音が響いている。そもそも「翼ある人」の攻撃が、三叉槍だけだというのは勝手な憶測であり、フォトンが魔力の源というのなら、フォトン・アクシオンの集合体である「翼ある人」が魔法を使っても何ら不思議なことはない。

「クロウ隊は善戦してる。俺たちも負けちゃいけない」

アルサスが言うと、耳元にセシリアの苦笑するような笑い声が聞こえてきた。その苦笑を代弁したのは、ジャックだった。

『ライバルってか？　そういうの、俺は好きだぜ』

「だろっ。男の子はいつでもライバルがいるもんさ！　いくぞ、ジャック、セシリアっ!!」

『ガキだな、男って。女に生まれてよかったよ、わたしは。それから、隊長はわたしだ、アルサス少尉!』

三人は、「やあっ!」と声をそろえると、シールドの狭間からバヨネットの銃口を出して、そこから見える敵に向かって、パイルを打ち込んだ。いくつもの杭が火線となって、敵を捉える。着弾したか、敵を射止めたかを確認する余裕はない。

「バックラー隊、進めっ!」

セシリアの声にシールドを構えるバックラー隊は頷いて、シールドを前に押し出しながら、ゆっくりと前進する。魔法弾と、フォトンの粒が舞い散る戦場を、アルサスたちは迎撃しながら進んでいく。一方で、魔法使い部隊は所定の位置に付くと、直ちに魔法円を描いた。複雑な図形は、魔力を一極集中して発現するものである。アリスの魔法、即ちベルテスの口を開くための魔法は、それまで魔法

使いたちが知るどんな魔法とも種類が違った。魔法と言え、四色の精霊の力を借りて発現するものだが、これは違う。膨大な魔力を集中して、ベルテスの口に穴を開けるのだ。言ってみれば、黒い紙に虫眼鏡で光を集中させて、焼き焦がすようなものである。

ところが一口に魔力を集中させると言っても、簡単なことではない。長い精神統一と、全身に宿るフォトンの力を解放しなければならぬ。そのためには、長い術式を唱えてはじめて魔法円の上に、魔法の虫眼鏡が出来るのだ。そのためには、総攻撃部隊が、魔法使い部隊を守らなければならず、ルウやナタリー、それに魔法騎士団などの魔法使いたちは、アルサスたちに全幅の信頼を寄せるほかなかった。

総攻撃部隊は善戦し続けた。戦いが始まって幾ばくも時間が過ぎているが、すでにフォトンになった犠牲者は少なくない。それでも軍の勢いが消沈しないのは、彼らがひとりひとりに使命を抱き、かつ背水の陣で挑んでいるからである。また、空からの支援も大きい。空を飛ぶ飛航鯨の艦隊は、艦砲射撃により、ベルテスから引切り無しに現れる「翼ある人」を打ち砕いた。

「このまま突き崩せーっ!!」

「ひるむなーっ!!」

「センチ・レーバン騎士団の意地をみせろ！」

部隊長たちは、怒号を響かせる。クロウのセンチ・レーバン騎馬隊が戦場駆け巡って突破口を開き、アルサスたちダイムガルド兵が敵を撃破していく。

実戦経験から言えば、アルサスたちは他の兵に劣らない。その射撃精度は以前に増して、敵の弱点と思しき胸をパイルで貫く。だが、相手は自在に宙を舞う鳥のような化物だ。ひらりひらりと、こちらの攻撃をかわしては、シールドの裏へと滑り込み、三叉槍でダイムガルド兵を次々と光の粒に変えた。

アリスの言葉を借りるのであれば、それは死ではない。フォトンにすべての情報がコピーされ、新世界に生まれ変わる準備なのだ。

やがて新世界が完成すれば、そこにフォトン化したものは蘇る。しかし、それが分かっているにも、鋭い槍で突かれれば痛いし、恐ろしいことである。

『くそっ！ 分かっているがキリがねえっ！』

ジャックが唸る。そんなジャックのバヨネットが、カタカタと音を立てて弾切れを報せる。その瞬間、上空から、「翼ある人」が急降下してきた。反射的にアルサスは自分のバヨネットをジャックに投げ渡すと、左手にしたアンドウーリルを振り上げ、迅雷の脚で飛び上がった。

「せいやあっ！」

掛け声よろしく、アルサスはアンドウーリルを横薙ぎに払った。切っ先は「翼ある人」の首を捉え、無表情な顔がごろりと落ちる。それでも自由落下する胴体は、頭など飾りだと言わんばかりに、ジャックを狙い済ましていた。

『首なしの化物がーっ！！』

ジャックが引き金を絞る。火薬の破裂する音共に、打ち出されたミスリルの杭が、首を失った胴体を砕いた。

『し、死ぬかと思った……すまねえ、アルサス』

フォトン・アクシオンの粒が風に乗って、ベルテスへ戻るのを目で追いながら、ジャックは冷や汗を拭くような仕草をした。

「そいつは、ジャックが使える。やっぱ俺には剣の方が似合ってる」
シールド裏に戻ると、アルサスは兜のバイザーを開いて、アンドウーリルを握り締める。と、そのときだった。背後で声がする。

「まずい、何匹か抜けた！ 魔法使い部隊の方に向かってるぞ。守れ、守れーっ！！」

誰が叫んだのかはわからないが、アルサスたちは反射的に振り返った。見れば、総攻撃部隊をすり抜けて、魔法円の周りで、まるで祈禱を行うかのように魔力を込める魔法使い部隊の方に、十数匹の「翼ある人」が向かっている。

「いくぞ、アルサス、ジャックっ！！」

セシリアもバイザーを煩わしそうに開くと、直接アルサスとジャックに言った。返事を待たなくてもいい。いち早くアルサスが走り出して、セシリアとジャックは追撃する敵を牽制しつつその背中を追いかける。

敵が接近してきたとしても、ルウたちは魔力を込める儀式をやめるわけには行かない。魔法の言葉を途中で途切れさせてしまえば、魔力が暴発してしまう可能性があるのだ。一度唱え始めた魔法は最後まで唱えきらなければいけない。とくに大人数で唱える魔法は。魔法使いたちは、それが分かっているから、震えながらも、魔法杖を大地にリズムよく突き刺しながら、ひとつひとつ魔法の言葉を魔法円に注入していく。そのたびに、幾何学模様の魔法円に輝きが宿る。

「魔法使いを守れーっ!!」

混乱しつつある魔法使い部隊をまとめ、騎兵隊を指揮するカレンの声が響く。カレンは双剣を振りかざしながら、迫り来る「翼ある人」の白い羽を切り落としていく。墜落した「翼ある人」はそれでも、立ち上がりながら、三叉槍を繰り出すが、地上に落ちた「翼なき人」など、センチ・レーバン騎士の敵ではない。

だが、一団が総攻撃部隊をすり抜ければ、それを皮切りに、まるで堤防が決壊するかのように、雪崩を打って、標的を魔法使い部隊に絞る。クロウたちの部隊も一路引き返そうとするが、それは敵に背中を見せる行為。

「カレンっ！ 後ろだっ！」

アルサスは、カレンの姿を見つけ、彼女の不意を突いて背後から襲い掛かる敵の姿を認めた。力いっぱい叫んだつもりだが、その声が戦場のざわめきにかき消されることは明白だった。

「翼ある人」の槍が馬上のカレンの背中に狙う。アルサスの脇を掠めて背後のセシリアとジャックがバヨネットを撃つ。風の流れがアルサスの視界を歪ませ、思わず足を止める。すべてがスローモーションのように流れた瞬間、三叉槍がカレンの背中を貫くのと、二本

のパイルが「翼ある人」の胸を撃ち抜くのはほぼ同時だった。

カレンの体が、馬上から崩れ落ちる。青い顔で走り出すアルサスの眼前に、新手が降りて来る。

「邪魔だ、どけろーっ!!」

アルサスは怒りをぶつけるように声を荒げると、一刀のもとに「翼ある人」を切り裂いた。舞い散るフォトン・アクションを払いのけて、少女騎士の名を呼びながら、駆け寄る。

「カレンっ!!」

109. 決戦の地へ（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せ下さい。

110. 東からの援軍

抱え上げたカレンの体は、思うよりも軽かった。なんだか、それがひどく寂しいもののように思いながらも、アルサスは、必死にカレンの体を揺さぶった。

「フェルト殿下、申し訳ありません……油断してしまいました。こんなことでは、トライゼンさまに顔向けできませんね」

苦笑いなのか、自嘲なのか良く分からない笑顔と、戦場の喧騒の中でもはつきりと聞き取れる声が、アルサスを涙ぐませた。傷口からは、カレンのフォトンがあふれ出している。一撃でフォトン化しなかったのは、アルサスが叫んだために、敵の狙いが逸れたのだろう。だが、だんだんと色を失っていくさまは、あの時「危ない」と叫ぶべきだったのか、それとも一瞬でフォトン化させるべきだったのか、曖昧な後悔をアルサスの胸に刻んだ。

「カレン……だめだ、まだ俺はちゃんとお前の歌を聞いていない」「そういえば、そんな約束いたしましたね。忘れていました」

嘘だと分かるような表情のカレンをアルサスは抱きしめた。ガルナックでは、危ういところを救われた。アルサスが記憶を喪い、ダウムガルドに赴いている間も、クロウと共に弱った王国を支えてくれた。口数の少ない少女ではあるが、彼女もまたアルサスの仲間であつただけは確かだ。

「殿下……必ず、勝利を。そして、シオンさまのことお願いいたします」

それがカレンの最期の言葉だった。カレンの華奢な体は、鎧も剣もすべてがフォトンとなって、アルサスの腕の中で消えた。

「くそっ、これからだって言うのにつ!!」

思わず、ぶつけどころのない怒りが胸をこみ上げて、アルサスは、風に流されるカレンのフォトンを見つめながら地面を拳で叩いた。カレンほどの双剣の使い手であっても、一瞬で勝敗が決することが

ある。それが戦場の厳しさだ。そんなことは、ガルナックで厭になるほど教えられた。しかし、改めてその現実がアルサスの前に突きつけられたのだ。

「アルサスっ！！ 悲観にくれてる場合じゃねえぞ！」

こちらへと駆け寄るジャックが叫ぶ。そうだ、悲しむのは後でいい……。たとえ戦争が間違いであっても、今戦わなければ、自分たちの世界を守ることなど出来ないのだ。アルサスはおもむろに立ち上がり、ジャックたちの方に振り向いた。

「このままでは、突き崩されちまう。どうする、アルサス!？」

一見統率など取れていないように見える、敵の軍勢は、ばらばらな動きを見せながらも、半数はクロウたちの総攻撃部隊と、空中の艦隊への陽動攻撃を仕掛け、その隙を縫うように残りの半数が、魔法使い部隊に狙いをつけて飛来してくる。

魔法使い部隊は、アリスの魔法の詠唱で身動きが取れない。一言一句ずつ、魔法円に魔法言語を介して、自らのフォトンに宿る魔力をとめどなく流し込んでいく。そのため、護衛部隊がこれの応戦に当たっているのだが、カレンがいなくなったことで、早くもその勢いに乱れが生じ始めていた。ある者は、恐れをなして、背後を向いた瞬間に、三叉槍の餌食となり、またあるものは果敢で無謀な突撃を試みて、敵の魔法に射抜かれる。

「徐々に圧されはじめている……」

戦局を俯瞰するように、セシリアが言う。「翼ある人」は、感情がないただの人形に例えられる。人間なら一瞬戸惑ったり、敵に恐怖したりするが、彼らはメツツェから……いや、ネルから与えられた任務だけを粛々とこなして、人間をフォトン化していく。それは、作業に過ぎず、彼らに戦っていると言う意思はない。しかも、たとえバヨネットで打ち抜いても、迅雷の剣技で切り裂いても、いちどフォトン・アクションに分散した後、シエラ山へと昇り、そこで再び結集して襲い掛かってくる、不死身の部隊である。これほど厄介で困難な敵はいないだろう。もちろん、そのことは誰もが認識して

いたし、簡単に勝てるような相手でないことは分かっていた。だから、多くの兵が全力で戦っている。

しかし、数が足りない。フォトン・アクションに戻った敵が再び戦列に復帰してくる間を与えないほどの、烈々とした攻撃を加えることが出来ないのだ。そのため、徐々に連合軍は後退を始めていた。

「聞け、みんな！！ ひるむな！ 魔法使いたちは詠唱を続けろ、護衛部隊は魔法使いたちを守れ！ センテ・レーバンの騎士として、ダイムガルドの軍人として、俺たちが時代に名を残すのは今しかない！」

アルサスは聖剣アンドウーリルを高くかざして、算を乱す護衛部隊に一喝を投じた。護衛部隊はなによりも、アルサスの手にある、アンドウーリルに目を留めて、再び息を吹き返す。

「おおっ、フェルト殿下だ！ 殿下が居られるぞ！」

「まだやれるぞ！ ダイムガルド軍、全軍突撃！！」

声が重なり合い、センテ・レーバン騎士団やダイムガルド兵たちは、くじけそうになった心を奮い立たせて、こちらに向かってくる敵を迎え撃った。

アルサスたちも、すかさずその軍に加わって、応戦を開始する。カレンの代わりを担うというわけではなかった。ただ、出来る事をするべきだ、とアルサスのみならず、セシリアもジャックも感じていた。

雨が降り注ぐようなパイルと魔法弾の応酬、切り結ぶ剣と槍、眼前を飛び散る輝きが、はたして人間のフォトン・ゲージであるのか、それでも「翼ある人」のフォトン・アクションであるのか、はつきりしたことは誰にも分からない。わかる必要などない。世界を守るため、己の使命をただ果たすのみ、という一意専心の心構えで、一人、また一人と倒れていっても、護衛部隊は誰も背中を向けなかった。その勇猛果敢たるや、筆舌しがたいほどである。

それでも、アルサスと護衛部隊の間をすり抜けた「翼ある人」は、その手に握る槍で、魔法円に整列する魔法使いを一人ずつ、フォト

ンに変えていく。魔法使いの多くは、センテ・レーバンの魔法騎士を除いて実戦の経験がない。全国から集められた、魔法使いギルドの生き残りたちであり、普段は研究や魔法を使った仕事に従事しているものがほとんどである。中には、怯えて逃げ出すものが現れるのも、無理はない話だった。しかし、一人魔法使いが魔法円から逃げ出せば、彼が中断した魔法言語の詠唱を別の誰かが引き受けなければならぬ。負担は大きくなるが、無視すれば、魔法が暴発してしまう可能性があるのだ。そんな大惨事はあってはならない。

「みんな、逃げちゃダメだ！　ボクたちは必ず、ベルテスの口を開けるんだ！　それが生き残った、魔法使いの使命なんだ！！」

大人たちの前で啖呵を切ったのはルウだった。その声は、今にも逃げ出そうとする、魔法使いたちの足を引きとめた。

「わたしは逃げないよ。シオンさまは、わたしを許してくれるって仰った。わたしはその優しさに報いたい。わたしは、シオンさまのために、絶対逃げないっ！！」

ルウの隣で言うのは、ナタリーである。彼女は、自責の念を払いのけ、シオンの願いを聞き入れた。そうして、ここにいる事を、誇りに思っている。誰かの役に立てることは、この上なく嬉しいことなのだ。だから、逃げ出したくない、という少女の言葉は、大人たちに力を与えたのかもしれない。

詠唱を中断しかけた魔法使いたちは、背後から迫る敵の気配に怯えながらも、魔法の言葉が続けた。だが、その間も、一人、二人と魔法使いたちは光の粒、フォトンとなって消えていく……。その度に、全身にのしかかる重力のような重みや気だるさ。まるで魔法円が、体中の魔力を吸い上げていくかのようにである。立っていられないものも現れる。それでも、魔法使いたちは詠唱をやめない。

「だめだ、魔力が不足してる……」

バヨネットを撃ちながら、魔法円の方に振り向いたセシリアが言う。明らかに、当初予定されていたアリスの魔法が完成する刻限は過ぎていく。だが、まだ魔法円の輝きは薄ぼんやりとしていて、魔

力が足りていないことを示していた。

「敵の攻勢が強すぎるんスよ！」

と、ジャックが言ったその瞬間、空中で大きな音が爆ぜた。眩い光と衝撃波が、戦場をガタガタと揺らす。何事か、全員の視線が空に向かった。最初に「あっ！」と叫んだのは誰であったかわからない。おそらく、アルサスも、セシリアも、ジャックも、他の兵たちも、ほぼ同時に声をあげていた。

青い空に黒い煙……。空からベルテスへの攻撃を加える、飛航鯨の二番艦が黒煙を上げて戦場の西へと墜落していく。響き渡る警報助けを求める飛航鯨から飛び降りる人が、まるで瓦礫のように見える。だが、はるか地上は固く、彼らが無事に助かる可能性は皆無だ。思わずアルサスは目を瞑った。そして、ついに地面に激突した二番艦は炎と煙を上げて大爆発を起こした。もともとは対人用に開発した空を飛ぶ軍艦である。地上から魔法も飛航鯨の飛ぶ高度までは届かない。だが、相手は翼をはためかせながら、まるで三叉槍を銚に例えて、捕鯨するがごとく、飛航鯨を取り囲む。そうやってしまえば、小回りの聞かない巨大な飛行物体は、単なる的でしかなかった。

犠牲者の数など想像したくもない……。

「おのれーっ！！」

怒りを露に突撃する、センチ・レーバン兵。だが、その瞬間、辺りの空気がピリピリと緊張するのを感じた、アルサスは「よせ！」と叫んだが、すでに時遅く、「翼ある人」に運ばれてきた赤銅の人影が、上空より手にした大剣を地面に叩きつけて舞い降りた。

ごうっ！ と土煙と波動があたりを一気に薙ぎ払い、アルサスたちも吹き飛ばされる。

「アロンダイトより数段威力は高いようですね……お久しぶりです、フェルト殿下」

土煙の中から現れたのは、赤銅色の鎧に身を包むリアーナ・ロシエットである。不敵な笑みを浮かべながら、身の丈に明らかに合っ

ていない大剣は、リアーナの身長的一半より大きい。

「エクスカリバー。メッツェさまが、センチ・レーバンに伝わるもう一振りの聖剣コルブランドより鍛えなおした、真なる王者の剣。あなたの持つ、ナルシルなどという剣など、このエクスカリバーの前には、棒切れも同然です」

前回のルートニア襲撃の失態を晴らすために現れたというのか。いや、彼女の瞳には、もっと凍りつくような色があった。

「レパードで操られた、意思のないお人形さんみたいなシオン陛下は可愛かったですわ。フェルト殿下、あなたも両手両足を切り取って、可愛いお人形さんにしてあげますよ。うふふ……」

ちろっと舌を出すと、リアーナはエクスカリバーの剣身に這わせる。その笑みに、引きつった声を上げたのは、セシリアだった。

「く、狂ってる……バーサーカー？ いや、ウルク・ハイだ!!」

アリスの言葉を思い出す。フォトンの力を極限まで暴走させた人間は、フォトンに宿る意識と自分の理性が混濁して、強力な力を得る代わりに、やがて自我をフォトンに奪われて狂った戦士「ウルク・ハイ」と成り果てる。それはもはや、人としての心は持っていない、悪魔に等しい。今のリアーナの姿は、ウルク・ハイの一手手前のように見えた。

「ウルク・ハイだろうと、なんだろうと、死ぬわけにはいかない。それに、元メイド長さん、俺の剣はナルシルじゃない。輝きの剣、アンドウーリルだ!! いくぞ、セシリア、ジャック!!」

アルサスは、剣を振りかざしてリアーナに飛び掛る。他の騎士たちも、一斉にリアーナに攻撃を加えた。ところが、その細腕からは想像も出来ないほどの力で、エクスカリバーをぶんっ、と振るだけで、激しい剣圧が騎士たちを一気にフォトン化してしまう。

咄嗟に身をかがめた、アルサスたちは辛くも、その恐ろしいひと薙ぎから助かったものの、近づけもしない事を悟った。

「近づけないなら!!」

セシリアがバヨネットの引き金を引く。火薬が破裂して、パイル

が打ち出される。

「甘いですっ!!」

リアーナは、バヨネットが剣士にとって厄介な武器である事を知っている。再び、エクスカリバーを地面に叩きつけると、巻き起さる土礫がパイルを打ち落とす。

「甘いのはそっちだ!!」

刹那、リアーナは振り向いた。あらぬ方向からジャックの声が聞こえてきたからだ。セシリアとて、リアーナを侮っているわけではない。自ら囷になることで、リアーナの注意を逸らした。土礫によって、視界が遮られたのはリアーナとて同じこと。その瞬間にリアーナの背後に、ジャックとアルサスが回りこむ。

ジャックが、引き金を引き、反対側からアルサスが迅雷の剣技で詰め寄る。アンドウーリルと、パイルがリアーナに迫る。だが、リアーナは一瞬だけ険しい顔をしたものの、また不敵な笑顔を浮かべると、

「だから、甘いと言っているんですっ!!」

と、叫び、右手でエクスカリバーを振り上げ、左手で魔法を放つ。『こいつ、魔法が使えるのか!?』そうアルサスが思った瞬間リアーナの手のひらに現れた魔法弾が、アルサスの顔面に直撃した。一方ジャックは、剣圧により、パイルとともに大きく吹き飛ばされてしまう。

「アルサス! ジャック!!」

セシリア悲鳴交じりの叫び声を上げる。ジャックは吹き飛ばされただけ。おそらく大丈夫だ、しかし、アルサスは……。駆け寄るセシリアの足元に、アルサスの兜がごろんと転がって来る。バイザーは変形し、鉢金の部分に穴が開いている。

「痛ててっ、畜生。やっぱ、美人には棘があるってホントだな!」

アルサスがむくりと起き上がる。頭から血を流してはいるものの、大事には至っていないようだ。その口から漏れるのは、いつもの余裕のある皮肉だ。

「俺がマリア・アストレアの末裔ってなら、魔法の一つ使えたらよかったのに……、世の中甘くはないか」

「大丈夫か、アルサス？」

「ああ、大丈夫だ。死んでたまるかよ。ジャックは？」

と、セシリアに尋ねながらも、ジャックの姿を探す。ジャックもゆっくりと立ち上がりながら、兜を脱ぎ捨て、脳震盪を起こしかけた頭をぶるぶると振る。

「野郎っ！ やってくれんじゃねえか！！」

ガルルっ。まるで犬が威嚇するかのよう、ジャックが吼える。

しかし、女性であるリアーナに「野郎」はないだろうと、アルサスとセシリアは苦笑した。

「アルサス！」

突然、声がある。魔法円の方からだ。見ればルウが一旦持ち場を離れて、こちらに走ってくる。無事だったか、と安心する間もない、ルウは血相を抱えたまま、

「だめだ、魔力が足りないよっ、これじゃアリスの魔法が完成しない！！」

と叫んだ。その瞬間、ちらつと、リアーナの視線がルウに向く。ひやりと、アルサスの背中に冷たいものが走った。

「ルウっ、逃げろっ！！」

言うよりもはや、アルサスの脚が蹴りだしていた。セシリアがパイルを放つ、ジャックが引き金を引く。だが、そのどれよりも、リアーナのエクスカリバーが剣圧を飛ばすほうが早い。

だめだ、間に合わない！！ アルサスは視界が揺らぐような気がした。ところが、突然ルウの体を青白い光が包み込む。魔法で作られた、水のヴェールである。それによって、リアーナの剣圧はかき消された。

「全軍、装剣。魔法障壁展開！！ 連合軍を守れっ！！」

稲妻が天から降ってくるかのように、どこから声が轟く。と同時に、アルサスたちの背後から、怒涛のごとく「うおーっ！！」

進めー！！」といういくつもの声が、地鳴りのような足音と共に聞こえてきた。咄嗟に、アルサスたちは、振り向く。方角は戦場の東。緩やかな平原の丘陵をこえて、二種類の紋章が描かれた白い旗がはためき、白銀の鎧を着た戦士と、青銅色の鎧を着た、騎士たちが現れる。その数は、連合軍に匹敵する数だ。

白銀の鎧は、ギルド・リッターの軍隊。青銅色の鎧は、ガモーフ神衛騎士団の軍勢である。

「ガモーフ軍だ……！ フランチェスカだ、フランがガモーフ軍とギルド・リッターを連れてきてくれた！！」

アルサスは、その光景に啞然としながらも、湧き上がる喜びをかすれた声で言った。

110. 東からの援軍（後書き）

ご意見・ご感想などございましたらお寄せ下さい。

111. アリスの魔法

「アルサス！ よかった、無事だったのね」

ガモーフ神国軍と共にヨルン平原に姿を現した、ギルド・リッターの軍勢の中から、三頭の騎馬が土煙を上げながら、駆け出してくる。先頭を来るのは、フランチェスカだ。その両側を随伴している、二人の男の顔にも見覚えがあった。確か、名前はベイクとランティと言ったか。ギルド・リッター時代のフランチェスカ直属だった部下の二人である。

「大遅刻だな、フラン！」

やって来たフランチェスカに、アルサスはニヤリと笑う。心は感謝でいっぱいだったし、予想外の援軍を引き連れてきてくれたことは、勲功一番に列せられるほどの働きである。ただ、それを口にしないのがアルサスで、口にしなくても分かるのが、フランチェスカだった。

「あら、いいタイミングでしょ？ 真打は、カッコよく登場するものなのよ」

フランチェスカのいつもの皮肉返しに、アルサスはフツと笑って、辺りを見回した。戦線に参加したガモーフの軍勢は、迅速かつ的確に二つの部隊に分かれると、一隊は総攻撃部隊の援護に、もう一隊は魔法使いたちが詠唱を続ける魔法円に寄り集まった。それは、青い波のうねりが、波間に浮かぶ白い鳥を飲み込んでいくかのようだ。

見れば、いつの間にか、リアーナの姿もない。つい今しがたまで、狂気を孕んだ殺気を振りまいていたと言うのに、自らが起こした土煙に紛れて、一旦後方へと退いたのだろう。戦況を鑑みた、その冷静な判断は、まだ彼女が完全な狂戦士「ウルク・ハイ」にはなっていないということだ。

「苦戦してたみたいね、リアーナ・ロシェットに」

「まあな。俺はあんたほど、手練じゃないからな」

「あら、これでもわたしだっていろいろこれでも苦労したのよ。はじめて、地下牢に閉じ込められる気持ちも味わったわ」

「どうだった？ あんまりいいものじゃないだろ。しかし、ガモーフまで連れてきてくれるとは、思いもよらなかった。どんな手を使ったんだ？」

「あら、大人にはお子様に分からない、ヒミツの技があるのよ。ぼ、う、や」

フランチェスカは、少しばかりおどけて、チュツと投げキッスの真似事をする。もちろん冗談に過ぎないことは分かっているのだが、本当にお子様なルウは、真っ赤な顔に目を白黒させながら、うろたえた。

「ええっ、ど、どういこと！？」

「そりゃあ、なあ。フランチェスカ、アレだろ？」

「ええ、アレよ」

訳知り顔のアルサスとフランチェスカに、ルウはぽんっと頭の上から湯気を立てた。その姿に、思わずアルサスたちは顔をほころばせる。

フランチェスカは、ずっと総攻撃隊の援護に入った、ガモーフ神国軍の神衛騎士を指差した。そこには、白いマントを羽織った、一際勇猛果敢に敵を切り崩していく一人の青年がいる。

「ニタ・ホルバ。名前くらい聞いたことがあるでしょ？ ガモーフ神衛騎士団の若きホープ。保守派の神官たちには嫌われているけれど、法王からの信頼は篤いのよ」

ウェスアに、神衛騎士ニタ・ホルバが居たことは、ほとんど幸運であった。ランティとベイクのおかげで、ギルド・リッター支部の地下牢を抜け出したフランチェスカは、支部長を説得しようと試みたが、当然のように首を縦に振りはしなかった。それどころか、フランチェスカたちを犯罪者として、討伐しようとした。ところが、騒ぎを聞きつけてやってきたのが、ウェスア駐留隊を指揮していた

ニタがやって来たのである。ニタは、ウルド・リーの処刑に猛烈な反対をして、議会の神官たちからウェスアへと左遷された身だった。しかし、彼の愛国心と聡明さを風の噂に聞いていたフランチェスカは、ニタに事の次第を解いて聞かせた。一度に理解してしまうことは難しいような内容であり、あまつさえ、敵国の連合軍に加勢するなど、ニタ一人で決められることではなかった。

しかし、ニタは直ちにフランたちを率いて、ガモーフ神都へと向かった。初めて訪れる、ガモーフの中枢にしてメッカである神都の景色を観光している余裕などなく、フランチェスカは法王の下に案内された。もともと、ニタは法王の外戚の甥であり、法王が最も信頼する青年であった。とんとん拍子に話がすすみ、フランチェスカは緊張する間もなく、法王に直訴し、支部長から取り戻したシオンの親書を見せた。ギルド・リッターに宛てられたものだが、法王はニタに意見を求め、ニタがフランチェスカたちの言う事を信じるべきだ、今ガモーフが連合軍に協力すれば、十年前の遺恨と名誉を取り戻せる、ウルドもそれを望むはずだ、という進言に法王は頷いた。

過去に犯した過ち。白き龍が恐るべきものであることも知らず、戦場に放った罪、そしてウルドの進言を聞き入れる勇気がなかったことを悔いていた法王の心情をフランチェスカは知る由もない。直ちに、ガモーフ法王からギルド・リッターのギルド長に宛てた親書を携えて、神都から程近い街にあるギルド・リッター本部に駆け込んだ。ギルド長がガモーフ法王と懇意にしていることもあって、その説得は支部長を説得するよりも遥かに容易なことであった。しかし、その頃、フランチェスカからの報告がないまま、連合軍は決戦の地、ヨルン平原に進軍を開始した。

報告がする間がなかったことを言い訳するわけにも行かないフランチェスカはとんぼ返りで、ベイクとランティにギルド・リッター集結の号令を飛ばすよう命じると、神都に戻った。すでにニタはガモーフ軍の出陣準備を整え終えていた。

そうして、ヨルンへの道すがら、ギルド・リッターの各部隊を加

えつつ、進軍を開始した。時間的には、決戦が始まるまでに間に合うかどうか、微妙なラインだった。しかし、なんとしても間に合わせなければならぬ。フランチエスカばかりでなく、ニタも同様の使命を感じていた。

「世界が、一つになる。あんたのおかげだよ、フラン。まさか、ここまでやれる女だとは思ってなかった」

アルサスが意外そうな顔を差し向けると、フランチエスカの後ろで馬を降りた、褐色肌のダイムガルド人、ベイクが少しばかり気に食わない、と言う顔をして、「当たり前だろ、隊長をなめるな、クソガキ」と悪態をつく。それをすかさず嗜めたのは、ランティだ。眼鏡面はあいかわらず冷静そのものではあったが、それでもやや焦ったような顔をしていた。

「ご無礼を。よもや、あなた様がフェルト殿下だったとは露知らず、ウェスアでの無礼の数々、お許し下さい」

と、ランティは慇懃に頭を下げる。無理もない、ランティはセンテ・レーバン人であり、ギルドの一員であっても、愛国心がないわけではない。しかし、アルサスはそれを分かっている、あえて親しげな笑みを浮かべると、

「許すも何も、俺はダイムガルド軍のアルサス・テイルだ。悪いけど、そういう話は、フェルトにしてくれ。でも……これからの働き次第で、フェルトも許すだろうよ。まだ戦いは始まったばかりだ」

アルサスは、背後を振り返った。丘陵の上に描かれた魔法円が俄かに輝きを強める。ガモーフ軍の魔法使いが、アリスの魔法に魔力を込めてくれるおかげだ。十分すぎる魔力がほとばしっている。

「わっ、カッコいいところを軍隊に持っていかれちゃう！」

慌てたように、ルウが踵を返し持ち場へと戻る。アルサスはその後姿を見送り、ちらとフランチエスカとその部下、そしてセシリア、ジャックに目配せをする。

「魔法が発動するまで、敵を魔法円に近づけさせるな。行くぞ！」
「領く全員に、アルサスはアンドウーリルを振りかざした。戦いは

まだ続いているのだ。救援にただ喜んでいるわけには行かない。アルサスたちは、戦場に飛び込んだ。ガモーフとギルド・リッターの援軍は、想像以上に善戦してくれる。勢いづいた連合軍は、再び、息を吹き返して、「翼ある人」を圧倒し始めた。

悲劇から十年、いや、過ちだらけだった二千年の時代を超えて、自分たちの世界を守る、という同じ目的のために、戦場にいる者すべてが一丸となった。その背中は、戦いに参加できない民衆や生き物たち、魔物たちの祈りに強く押されているかのようなだった。

そうして、そう長くはない時間が過ぎ、戦場に七色の輝きが走り抜ける。その光を受けた「翼ある人」たちは一瞬怯んだ。表情らしい表情のない顔に、曇りが生じる。光は、魔法円から発せられたものであった。ついに、魔法円に魔力が充填されたのである。キラキラと、幾何学の紋様が輝きを放つ。

「ベルテスの門を開く！」

魔法使い部隊の隊長が声を上げた瞬間、ルウ、ナタリーたち魔法使いたちが手にした魔法杖を高らかにかざした。それぞれの、ミスリルやとねりこの木でできた杖の先端から、七色の光が帯になって空に舞い上がる。それは虹のようなアーチを描きながら、シエラ山の山頂へと飛んでいった。そして、薄く張った雲の中で、パーンつと弾け飛だ。それは、まるで戦場に降り注ぐ七色の流れ星のように見えた。

「空間が歪んでいる……あれが、ベルテスの口、いやベルテスの門？」

セシリアがごとりと唾を飲み下す音が聞こえてきた。アリスの魔法が直撃したシエラ山の山頂に、楕円形をした空間の歪みが現れる。そこだけ真っ黒に塗りつぶされ、空に突如として現れた穴のように見えた。

「アルサスーっ！！」

総攻撃部隊の中からかけてくる、銀の鎧。赤いマントは、クロウのものである。クロウは、アルサスの元までやってくると、馬から

飛び降りた。

近くで見ると、クロウの鎧き血しぶきと、泥に汚れていた。しかし、クロウの体に目立った怪我はないようだ。むしろ彼のほうが、アルサスの頭から流れる血に青ざめた。

「大丈夫なのか、アルサス！」

「ああ、ちよっとリアーナにビンタを食らった。でもどうてことはない。それより、軍の指揮をしなくてもいいのか？」

「ニタ・ホルバどのに軍の指揮を委譲した。僕もベルテスに行くよ。最後まで見届けたいんだ。ライオット閣下のでかしたことの顛末を。そういえば、カレンは、カレン將軍はどこに？」

クロウの視線が、カレンの姿を探すように辺りを見回す。

「カレンは……」

言いづらいことだ。クロウとカレンは、トライゼン亡きあと、弱体化の一途をたどるセンチ・レーバンを共に守ってきた、仲間である。しかし、すべて言わずとも、クロウは、アルサスの顔色だけですべてを悟った。

「そうか。カレンは、フォトンになったか……」

出来るだけクロウは悲痛な顔を見せないように、アルサスたちに背中を見せて、カレンのフォトンが消えたであろう空を見上げた。わずかに両肩が震えているように見える。そんなクロウの視線の先に、一隻の駆逐鯨が舞い降りてくる。

「ユキカゼだ！」

ジャックが指差した。駆逐鯨「ユキカゼ」は飛航鯨の十分の一ほどの大きさしかないが、それでも海運ギルドの客船ほどの大きさである。それが土ぼこりを巻き上げながら、アルサスたちの目の前に着陸した。ちょうど翼に当たるヒレの付け根の辺りにあるラッタル付きのタラップ開き、中から艦長らしき男が降りてくる。

「ユキカゼ艦長、ニール・リング大尉です」

男は軍帽を脱ぐと、クロウに一礼して名を名乗る。

「第一部隊騎士団長クロウ・ヴェイルです。お迎えご苦労様です、

ニール艦長。これより、我々はベルテスへ突入します。しかし、突入部隊に充てられていたほとんどの部隊が戦死いたしました。残っているのは、ここにいる近衛騎士団のセシリア隊のみです」

「なんと……！　しかしそれでは作戦は」

ニールは驚きを顔一面で表した。おそらく元は海の男だったのだろう、軍服の袖から覗く太い腕に、わずかな潮気を感じる。

「いえ、わたしとフランチエスカ・ハイトどのも同行し、ベルテスへ乗り込みます」

「あら、騎士さま。わたしは行くなんて言っていないわよ」

クロウの説明に、やや驚きながらフランチエスカが言うと、クロウは少しばかりニヤリとして、「行かないんですか？」と問い返してきた。

「行くわよ。わたしだって、最後まで見届ける権利はあるわ。それにしても、騎士さまったら、なんだかアルサスに似てきたわよ」

「それは、光栄なことです。あと、それから……」

一度ニールの方に向き直った、クロウは次に魔法円の方を見た。

役目を果たした魔法円は、まだわずかに輝きを帯びていた。しかし、魔法使いたちは、すでに戦闘に参加することが出来ない。魔力を使い果たした彼らは、足手まとい以外の何者でもないのだ。そんな魔法使いたちの集団の中から、二人の子どもが走ってくる。ルウと、ナタリーである。

「ボクも、ボクもベルテスへ行きます！」

そんなルウの姿を見ていると、アルサスはふと、旅に同行したいとアルサスの後を追いかけてきたルウの事を思い出した。

「ルウ、魔力を使い果たしたんじゃないのか？　お前を守ってやれるほど余裕はないぞ」

アルサスが言うと、駆け寄ってきたルウはぷうつ、と頬を膨らませた。

「ボクを見くびらないでよね。後、一回くらいなら魔法を使えるように、力は残してる。皆には悪いけど、メツツェに一発お見舞いし

てやるんだ。お姉ちゃんを返せてね！」

ころころと表情を変えて片目を瞑って言うルウに、アルサスは少しばかり呆れた。変わってないな、と思う。「では、この六名でベルテスに突入します。よろしくお願いします、ニール艦長」

クロウが頭を下げると、ニールは「こちらです、お急ぎ下さい」と全員を艦内へと案内する。

「隊長、ご無事で。我々は、ここで戦って待っています」

ベイクとランティがフランチエスカに別れを告げる。フランチエスカは「行ってくるわ」とまるで近所に出かけるように、安穩と返しつつユキカゼに乗り込む。もちろん、それはフランチエスカなの、氣遣いだった。

「ルウ、絶対帰ってきてね」

ルウの手を掴み、ナタリーも別れを告げる。

「わたしね、ルウと一緒に魔法使いギルドをもう一度立て直したい。出来るかどうか分からないけど、あなたとだったら、何でも出来る気がするの。だから、絶対、絶対帰ってきて、お願い」

「う、うん。大丈夫だよ。だから、待っててね、ナタリー」

ルウはやや氣恥ずかしそうに、ナタリーの手を解くと、後ろ髪引かれる思いを断ち切るように、ユキカゼのタラップを駆け上った。

ルウの後を、セシリアとジャックが続く。そして、最後に残されたアルサスとクロウは互いに頷くと、ユキカゼに乗り込んだ。

駆逐鯨ユキカゼは、降り立った時と同じように、土煙を巻き上げながら、地上を飛び立つ。戦場に残る多くの人たちに見送られて、真っ直ぐベルテスの門へ……。

111. アリスの魔法（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せ下さい。

112. ベルテス突入

シエラ山の山頂にぽっかりと円形に開いた、ベルテスの門。フォトン・アクションの力によって形成された、次元の少しずれた場所へつながる入り口である。ベルテスは、二千年前にアストレアが計画した「奏世計画」の根幹である世界再誕において、フォトン化した人々を一時的に収容するための、仮の入れ物である。同時に、計画の司令塔の役割を果たしている。

いわば、天使がそこにいる以上、天界とでも言うべきであろうか。もっとも、天使などと言っても、フォトン・アクションを纏った、ただの人間に過ぎない。だからこそ、メツツェは二千年の時をフォトン・アクションによって生きながらえさせられ、見たくないもの聞きたくないもの、人間のそういった汚く歪んだものを目に、耳にしてきた。そして、彼に残されたのは、人間の愚かな我欲と、人間は分かり合えないものなのだという結論だけである。

たとえライオットが、白き龍を手に入れようとしなくても、メツツェは世界を生まれ変わらせただろう。彼にとって、それだけが二千年を生きた使命なのだ。そして、彼が信じるものは、養母であるマリア・アストレアと、血の繋がらない妹ネルだけである。そうしたのは、結局のところ人間のあくなき欲のために巻き起こる、いくつもの戦争だ。

血で血を洗い、それでも己の価値観だけを無理矢理押し通すために、あるときは正義を、あるときは愛などという陳腐な言葉で着飾って、敵とする相手を殺す。何よりも、マリアが悲しんでいたことを知っているだけに、彼とネルに託された最後の頼み、即ち「世界が再び争いに満ち溢れるなら、奏世の眼と奏世の力によって、正しく分かり合える世界に生まれ変わらせて欲しい」という、切なる願いを果たすことだけが、彼らにとっての未来なのだろう。

それはとても悲しいことだと、アルサスは眼前に迫るベルテスの

門を見つめて思った。人を信じることが出来なくなった、絶望に縁取られた冷たい心の奥からあふれ出す憎しみが、まるで真っ黒なベルテスの門から、湧き出しているかのようにさえ思える。

「あの空間の歪に、艦を突撃させます。あなたがたを降ろした後は、本艦は後退しますが、おそらく、戦列への復帰は望めないでしょう」

ニールは艦橋の、キャプテン席に腰掛けながら、アルサスたちに言った。駆逐鯨の艦橋は、海洋の鯨に例えるなら、ちょうど脳天のある場所に位置している。思うよりも狭い空間であり、操舵手や聴音手、砲雷手などが、艦橋内に方をぶつけ合うほどの距離で詰まっているものだから、尚のこと狭苦しく感じられ、自分たちが今空の上にいるんだと言う感慨はほとんどなかった。むしろ、飛航鯨と呼ばれる船がどうやって飛んでいるのかを考えれば、却って恐ろしくも思うので、みな一様に考えないようにして、意識は真っ直ぐベルテスの門に向いていた。

「ならば、私たちを降ろした後は、戦線を離脱し、総員に退艦命令を出してください。ユキカゼは、それで十分な使命を果たしたものだと思います」

クロウは丁寧な口調でニールに言うと、ニールはやや笑って、「そう言ってもらえると助かります」と年下の騎士に返した。

艦橋の窓から見える眼下の戦場は、金色、銀色、青銅色の甲冑が入り乱れながらも、一糸乱れぬ動きで共闘し、白い翼の軍隊を押し返しつつあった。すでに階級の下など、形だけのものであり、そこにいる誰もが仲間という連帯感や絆で結ばれている。分かり合えないと思えたものが、一つに繋がって行く姿を、その三色は表しているのかもしれない。

「ネルお姉ちゃんは、この光景をみているのかな？　ボクたちは分かり合えるんだってこと、分かってくれたかな？」

いつの間にか、アルサスの傍にいたルウが、同じ光景を見つめながら、呟くように尋ねた。ああ、きっとそうだ、とは言えなかった。彼女の絶望は、こんなもので洗い流せるものではない。メルを奪

った人の心を世界そのものを憎んで、そして嘘をついたアルサスのことを憎み、使命を与えられた自分の存在そのものを憎んでいる。それは、あの時、差し伸べられたメッツェとアルサスの二つの手から、メッツェの手を取ったネルの寂しそうな瞳がすべて物語っていた。ネルは、自分の未来など見てはいない。世界が平穏になり、人が人を憎んだり、殺しあったりしない世界を作るためなら、自分のことなんてどうでもいいと、言っているような気がしてならなかった。

本当のネル、つまりハンナがどのような女の子だったのかは知らない。アルサスが知っているのは、ネル・リミュレという銀色の髪の少女だ。穏やかな春の風のような明るい笑顔と、誰にも優しさを振りまける少女だった。それが、たとえアストレアが銀の乙女の記憶を封印するために、ネルに与えた捏造の性格だったとしても、彼女の手の柔らかさも、いつも真っ直ぐな目をしていたことも、それが偽りの彼女の姿だったとは思いたくはない。彼女が、フェルト・テイルの事を知らなくても、アルサスはアルサスであるように、ネルもまたネルであると信じたのだ。その上で、メッツェがその封印を解き、ネルに使命を思い出させたとしても、自分の知るネルであれば、もう一度その手を取る事が出来ると思う。そして、今度は離さない。例えば彼女が拒絶しても、その手を無理矢理取ってやる。それが、アルサスの本当の決意だ。

「大丈夫だ。ネルは、俺たちの知ってるネルだよ」

アルサスは、ポンとルウの頭に手を置くと、くしゃくしゃにその頭を撫でてやった。ルウはちょっと嫌がりながらも、アルサスの顔を見上げる。その顔に、即位式典の時のような、迷いのある曇りはなかった。

「ベルテス突入まで、ふと六十秒！」

操舵手が声を上げる。と同時に、船体がガタガタと音を立てて揺れ始めた。擬似空間から流れ出してくる、風に船が反発しているのだ。

「エアブレーキ作動！ 船首フィジカル・シールド展開！！ このままの体勢で一気に、ベルテスへ飛び込め！！」

「ダメですっ！！」

ニールの命令に、すかさず聴音手の男が耳に当てる、インカムの音に青ざめた顔をする。

「ベルテスの門から魔力を感知しました！ 内部から無数の魔法弾が接近中！！」

「くっ！ ベルテスの防御機構かつ。砲雷長、弾幕を張れっ！！」
ニールが舌打ちとともに叫んだ瞬間、漆黒の異次元から、いくつもの発光体が現れた。それらが、特大の魔法弾であることに気付いた艦橋の全員は、「爆雷防御！」とのニールの言葉が飛ぶ前に、咄嗟に身をかがめた。激しい衝撃が、天井と床の両方から突き上げてくる。その度、アルサスたちの体は、天井と床に激しく叩きつけられた。

「第一雷撃管損傷！ 主砲塔大破！」

「左舷フラップ制御出来ません！」

「フィジカル・シールド出力低下っ！！」

キャプテン席の脇にある、金色のラッパのような形をした伝声管から次々と、被害の報告が上がってくる。それでも、ベルテスの門から撃ち出される魔法弾の直撃を受けずに航行できるのは、艦に乗り組む者たちの熟練した操船技術の賜物と言えるだろう。アクティブ・ソナーから聞こえる音を頼りに、魔法弾が飛び出してくる軌道を予測し、的確に船のかじを切りつつ、砲撃によって魔法弾を牽制する。息の合った乗組員たちの、まに芸術的な芸当だった。

「ベルテスへ突入しますっ！！」

操舵手が叫んだとたん、艦橋は一際激しく揺れて、唐突に目の前が真っ暗になった。ところが不思議なことに、それは夜闇とはちがう。光が何処にもない静寂と闇の空間であるはずが、人の顔ははっきりと見えるのだ。それこそ、ここが擬似次元空間という、摩訶不思議な空間であることの何よりの証だった。

「ここから直下に、着陸出来るようです」

ベルテスへ突入できたことにホッと胸をなでおろす暇などない。アクティブ・ソナーから聞こえてくる音を頼りに、聴音手が報告する。そこは空も陸も分らないほど真っ黒に塗りつぶされた空間であり、本当に着地できるのか疑わしいところではあったが、確かに、ユキカゼはランディング・ギアを伸ばし、着陸した。

アルサスたちは、警戒を厳にしつつ昇降口のタラップから、ベルテスへと降り立つ。ベルテスは匂いも音もない、気味の悪い空間だった。足元に地面の感触はあるのだが、そこが地面なのか、目の前にどれほどの空間が広がっているのかも、まったく分からない。

「よろしいんですか？ このまま我々は帰っても」

ニールがクロウに問う。見れば、ユキカゼは想像以上に破損しており、おそらく、もう一度ベルテスから抜け出すのがやっとであろう。ここは、敵の本拠地だ。もしも、ここで何かに襲われれば、この満身創痍となった艦はあっという間に残骸にはや代わりするだろう。そこまで、付き合わせるのは酷というものだ。もともと、ベルテスへの突入は、少数精鋭で行うと決めていた。

「脱出の手立てまで考えている暇はありません。ニール艦長、お役目ご苦労様でした。どうか、乗組員の皆さんと共に、地上へ無事戻られますよう」

クロウが言うと、ニールは頷いて敬礼を返すと、タラップの扉を閉めた。ややあって、ユキカゼはベルテスに、アルサスたちを残して再び飛び立つ。アルサスたちは、去っていくユキカゼの姿が見えなくなるまで、見送った。

「バカに静かだな」

アルサスが呟く。ユキカゼが去ってしまうと、辺りは耳かツンとするほど静かだ。まるで、戦争が嘘のような、穏やかな静けさ。肌に触れる空気は冷たくも温かくもない。言うなれば、ちょうどいい気温。体にのしかかる重力も、外部とそれほど変わりはない。ただ、ここには風景と言うものではなく、インクで塗りつぶしただけのよう

な寂しい世界が広がっていた。

「さて、何処へ行けばいいのか？」

と、その言葉に合わせるかのように、目の前に光の階段が出来上がる。踏み板が淡く発光する階段は点々と彼方まで伸びていく。

「来いって言ってるみたいだな」

セシリアがその階段の行く手を指差した。まさか、とは思うが、まるでメツツエがアルサスたちの到着を歓迎しているかのように見える。おそらく、その先に何もないと言うことはないだろう。現に、セシリアだけでなく、全員の顔がぐっと強張っていた。

「来いって言ってるなら、行くしかないだろ。みんな、準備はいいか？」

アルサスが確認の意味を込めてそう言うと、全員こくりと頷く。そして、アルサスたちは一列に並び、階段に足をかけた。靴音はしないが、足裏には不思議な硬い感触があった。

そうして、どれだけ階段を上り詰めただろう……。最初のうちは段数を数えていたルウも、とうとう数えるのが億劫になったのか、それとも疲れたのか、数える事を断念した頃、ようやく階段は途切れた。その最後の段の向こうに誰かの姿がある。

一瞬、メツツエとネルかとも思ったが、見える姿は一人分。しかも、ネルというには大柄で、メツツエと言うには筋骨が張りすぎている。しかも、その男は真っ黒なベルテスの空間に溶け込むような、黒い鎧を身に纏っていた。

「ギャレット・ガルシア。やっぱり生きていたか……」

「やっぱりというなら、貴様もやっぱりここまでたどり着いたか。記憶を取り戻したそうだな、フェルト殿下」

ギャレットは、愉快そうに言いながら、階段を昇りきったアルサスたちの下へと近づいてくる。どうやら、ウルガンとの戦いで生き延びたとは言え、無傷では済まされなかったようで、右の頬に大きなやけどのただれた痕があった。

「まあな。おかげで、あんたの憎たらしい顔も思い出したよ、ギャ

レット・ガルシア」

「憎たらしいか……俺にとっちゃ、王家の者ほど憎たらしい顔はないがな。その辺りは、意見の相違というやつだ。まあ、今更長話をするつもりはない。俺は十年前に喪った騎士としての名誉を、ここに取り戻す。そのために、いけ好かないが、メッツェの駒になったんだ。なあ、フェルト殿下、剣を取れよ。俺のアスカロンで、その聖剣を砕いてやる」

「ああ、その言葉、そっくりそのままあんたに返してやるよ!!」

アルサスは腰に帯びた、アンドウーリルの柄に手を当てた。ところろがその手を、フランチェスカがそつと止める。彼女は、アルサスの前に歩み出ると、

「そう言って時間稼ぎをするつもりでしょう？　メッツェはいよいよ世界再誕をはじめめるつもりね。でもそうは行かないわ。アルサス、ここはわたしに任せて頂戴」

と言って、ベイクから預かった鉄槍「ブリューナク」を構えた。

「フラン……だめだ、あんたにとってこいつは……」

「ええ、隊長の仇。十年間恨み続けた相手よ。でも、心配しないで、ハイゼノンのときのような醜態は晒さない。だって、お姉さんは大人ですもの」

にこり、と笑顔を見せるフランチェスカに、アルサスはアンドウーリルから手を離れた。

「やられるなよ、フラン。俺はあんたを信じてる」

「わたしも、あなたを信じているわ。ネルのこと、お願いね」

アルサスはフランチェスカと頷きあい、ルウの魔法による牽制攻撃が水蒸気の煙幕を上げたのを合図に、ギャレットの脇を抜けて走り出した。空間の奥に新たな光の階段が現れる。アルサスたちは振り向くことなく、その階段を昇った。

一方、ギャレットと対峙するフランチェスカは、自分の傍らに、クロウが残っている事に気づき驚いた。

「加勢して、なんて言った覚えはないわよ、騎士さま」

「ギャレットは、侮れない相手です。あなたを放っておくわけには行きません。それに、アルサスにはセシリアさんやジャックさん、ルウくんもいます」

クロウは、ちらりと笑顔を向けると、剣を鞘から引き抜いた。

「あら、嬉しい。騎士さまが、わたしを心配してくれるなんて……」
笑顔に笑顔で返すと、クロウは少しばかり頬を赤らめて、「冗談は後にして下さい」と言った。二人は、互いの武器を構えると、ルウの魔法による水蒸気が晴れるとともに、ギャレットに飛び掛った。

112. ベルテス突入（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せ下さい。

113. 破壊の力

キリク・クオーツは軍を率い、ガルナツクのある北部からヨルン平原へと進駐した。本隊との合流後は、予定していたとおり、やや総攻撃開始から時間的な差を置いての突撃である。しかし、戦場は予想していたよりも、混乱していなかった。無論、当初は劣勢に立たされたが、空からは、エイブラムスの座乗する飛航鯨の艦隊が、地上援護を行い、地上では、ダイムガルド軍、さらには救援にやって来た、ニタ・ホルバ率いるガモーフ神衛騎士団軍とともに、打ち合わせがないにも拘らず、連携を取りながら、ベルテス内部から次々とあふれ出してくる、「翼ある人」を囲い込んでいった。

キリクは、アルサスとともに、ガルナツクにてトライゼンの最期を見届けた。フォトン化は死を意味することではない、とは言え、光の粒になってしまったトライゼンは、もはやキリクや騎士団に助言を与えることも、渴を入れることも出来ない。ならばせめて、自分はトライゼンのように強い騎士であろうと、このひと月余り、身を粉にして戦ってきた。そうして、長らく間、ともに手を取り合った仲間のカレンもまたフォトンとなった。ベルテスへ乗り込んだ、クロウの安否は分からない。すべてを託された形となったキリクは、残された力のすべてを賭けて、この地上の戦いを制することを心に強く念じていた。

「各都方面隊、徐々に押し戻し始めています！」

「魔法使い部隊は、ガモーフ軍護衛されて戦線が無事脱出しました！」

「ベルテス内部に突入した、ダイムガルド駆逐鯨『ユキカゼ』が帰還！」

次々と上がってくる報告の数々に耳を傾けながら、シエラの西方に位置する、一際小高い丘陵の上から、戦場を俯瞰する。ヨルン平原は想像よりも広大な平原である。今、自分たちが戦っているのは、

その一部に過ぎず、その彼方に「墓標の地」と呼ばれる、十年前の戦の遺恨が残っている。

十年前、キリクはまだ二十歳そこその若者であり、騎士団の末席にいた。クオート家は、ヴェイル家やソアード家のような騎士の家系ではないため、彼の地位は今ほど高くはなく、当時、センチ・レーバン軍の本拠地となった、ガルナツクの守備隊に配属され、戦場に赴くことはなかったのだ。悪い言い方をすれば、戦場の最後方にて、指をくわえて生きながらえただけ。

「だが、今私はここにいる……」

キリクは人知れず呟く。十年の時を経て、戦場の最前線へと戻ってきた。ここで、トライゼンに恥じぬ戦いぶりを見せることこそが、十年の月日を取り戻すこと、そしてなによりも自分の使命である。

「ベルテスへ潜入したフェルト殿下たちを信じて、このまま一気に押し返せ！ 全軍に総攻撃の合図っ！ センテ・レーバン騎士団の意地と強さを見せ付けろ！！ 我らの戦いが、この戦いを決する！！」

ぶんつ、と剣を振り下ろすと、キリクの命令に従って、キリク隊は「おおーっ！！」と声を上げて一気に丘陵を駆け下りた。

戦場の中心では、クロウ隊をはじめとするセンチ・レーバンの各部隊、ならびにダイムガルド陸軍歩兵隊、ガモーフ神衛騎士団が、入り乱れつつも、統率を欠くことなく、敵と善戦を繰り広げていた。キリク隊が到着した時点で、勝敗は決したと言っても過言ではない。たとえば相手が、何度でも再生して戦場に舞い戻ってくる、無敵の化物だとしても、油に火を灯すのと同じように、一度付いた勢いはもはや、「翼ある人」でも止めることは難しいだろう。

だが、その確約が揺らぐ瞬間は、地上の揺れとともにやって来た。地震であろうか、と誰もが動きを止めたその瞬間、空気そのものがまるで巨大な羽虫が羽ばたいたかのような音をたてて、震えたのである。

「これは……一体!？」

驚きにいななき、前足を高く上げた騎馬の首筋をさすって落ち着かせながら、キリクは山頂のベルテスを見上げた。そこには、真っ黒な穴が開いている。魔法使い部隊がアリスの魔法でこじ開けた、ベルテスの門である。そこから、闇の片鱗とでも言うべきか、黒いものが食指を伸ばすようにうねりながら、這い出してくる。

「何だあれはっ!!」

誰もが驚きに口をそろえた。闇の食指は、うねうねとシエラの山肌を滑りながら、こちらに向かって降りてくる。と、その時である。全員の脳裏に、聞き覚えのある声が響いた。それは、直接頭の中に語りかけてくるように。

『世界再誕の運命に抗いし、愚かなる人間どもよ! 貴様たちが抗うと言うのなら、奏世の破壊の力、とくと見るがいい!!』

メツツエの声とともに、闇の食指はついに地表へと達する。次の瞬間、食指は飛び散るように弾けとび、戦場全体に激しい衝撃波を巻き起こした。騎馬隊も飛航鯨も、自分たちの兵隊であるはずの「翼ある人」もすべてを、一気に吹き飛ばす。さらには、地面がささくれ立つように割れて、岩や石礫が飛び交い、木々がなぎ倒されていく。その光景をキリクは目の当たりにした。そして、衝撃波がキリクの体を吹き飛ばす直前、彼はベルテスを睨みつけて呟いた。

「これが、銀の乙女に与えられた、破壊の力……!」

わき目も振らずに、アルサスは、セシリア、ジャック、ルウを従えて、光の階段を駆け上った。この不可思議な空間に、何らかの感慨や推察を挟みたい気持ちはあったが、フランチェスカの話が本当であれば、メツツエは計画を練り上げるつもりなのだ。ここにアルサスたちを誘い込むような真似をしたのも、決着をつけるためだとしたら、そのつじつまが合う。メツツエにとって、三国が手を結ぶことは、予想し得なかったことである。人間とは分かり合うことが出来ない、我欲に満ちた愚かな生き物である、というのが彼の至った結論だとすれば、目を疑いたくなる光景だろう。もっとも、アル

サスはそれをメッツェとネルに見せたかった。人はすぐに分かりあえなくても、いつかわかりあうことが出来る。カレンが教えてくれたこと。そして、自らが至った、メッツェとは対極の結論だ。

再び階段が途切れる場所まで上り詰めた、アルサスたちは、脳裏に直接語りかけるメッツェの言葉を聞いて、フランチェスカの言葉が真実になったことを知った。世界再誕なるものがどのようにして行われるのか、他次元として形成されたベルテスの内部から、それを見ることは叶わない。破壊と再生……即ち、ハイゼノンでネルが見せた破壊の力で世界を一度粉々に破壊してしまい、傷を治す再生の力によって復元する、アストレアが望んだ世界……いや、メッツェの望む世界に。

その世界をネルは本当に望んでいるのか？

去来する疑問と不安。それをかき消したのは、狂気に満ちた笑い声だ。見れば、ギャレットがそうしていたように、剣を手にした、赤銅色の鎧がこちらに歩み寄ってくる。すでに、赤銅の騎士、リアーナ・ロシェットにはかつてメイドという仕事をしていた名残など何処にもない。精神の殆どを、フォトンに食われてしまっているようだ。彼女の何がそうさせるのかは分からないが、理性を失いつつある分、ギャレットよりも厄介な相手だろう。

「やっときた、やっときた。クフフ」

リアーナは黒々とした笑みを浮かべ、華奢な腕で大剣エクスカリバーをぶんぶんと振り回す。その度、ぴりぴりとした空気が、アルサスたちの肌を突き刺した。

「リアーナ！ あんたに恨みはない。冷静になれ！ フォトンの暴走に頼りすぎると、あんたの意思はフォトンに吸い取られてしまう。そうってからじゃ遅いんだ！！」

「れいせい？ わたしは、れいせいですよ、でんか。だって、おいしそうなでんかがめのまえにいるんですもの。ライオットさまも、だいこうぶつのくだものをたべるときには、こんなかおしてましたよ。クフフ」

歪みきった顔のリアーナは、ぺろりと舌なめずりした。今更、アルサスの言葉に耳を貸すはずもないことは分かっていたが、今のリアーナは貸すべき耳さえも失ってしまっているのだ。その細腕で、大剣を振り回せるのも、フォトンの持つ力を暴走させているためだ。彼女は、ギャレットと違って、暴走をコントロール使用とはしていない。もしも、彼女を救うことが出来るとすれば、それはまだ「ウルク・ハイ」などという狂戦士になる前、人であるうちに殺めてやる他ない。余りにも残酷な話だが、人間である事を捨てたりリアーナの末路としては仕方がないものだとも言えるだろう。

「アルサス、ここはボクに任せてよ」

と、アルサスの前に歩み出たルウは魔法杖を構えた。

「何言ってるんだ、お前もネルのところへ行くんだろ？」

「だけど、ボクじゃ、お姉ちゃんを連れ戻せない。お姉ちゃんを連れ戻すことが出来るのは、アルサスだけなんだ。時間がないよ。早くっ！！」

「ダメだ！ お前を一人にしたら、ナタリーに顔向けできない……」

「いや、ルウくんを一人にはさせない！」

アルサスの言葉にかぶせるように、セシリアが言う。

「この先はアルサス一人でも行けるだろう？ わたしたちもここに残る」

「そう言うこった。さっさと行って、銀の乙女を連れ戻せ。メッツェがそれを拒むなら、奪って来い、アルサスっ！！」

セシリアに同調するように、ジャックは言うど、ニヤリと笑う。迷っている暇はない、三人の眼がそう訴えているような気がした。アルサスは、止むを得ず頷いた。ここに残ってリアーナと戦っていれば、手遅れになるかもしれない。世界再誕が成る前に、ネルに伝えることがある。

「頼んだっ！」

アルサスの声を合図に、セシリアとジャックが駆け出す。すばやくバヨネットの引き金を引くと、リアーナはパイルを意図も簡単に

薙ぎ払ってしまう。しかし、それは織り込み済み。セシリアとジャックの攻撃の隙に、ルウは魔法の言葉を唱えた。いくつもの火の矢がリアーナの頭上に降り注ぐ。アルサスはそれを好機と、リアーナの傍を駆け抜け、彼女の背後に伸びる光の階段を一気に駆け上がった。

ルウたち三人は、じつとアルサスの背中を見送った。アルサスはフランチェスカの時と同じように、一度も振り返らなかった。

「二人とも、良かったの？」

アルサスの姿が見えなくなつて、ルウがセシリアとジャックに問う。

「邪魔したら悪い。わたしたちは、アルサスの露払いをするのが使命だ。わたしたちは、アルサスの仲間だからな」

「まあ、いけ好かないところはあるが」

セシリアの言葉と、ジャックの苦笑いに、ルウはにっこりと微笑むと、もう一度魔法杖を構えなおした。

「あらあら、わたしのでんかがいっちゃいました……。つまらない、あなたたちじゃころしがいいがないです」

クフフと、奇妙な笑い声を上げながら、魔法弾をすべて弾き飛ばしたりリアーナは言うと、やや高潮した顔で、ルウたちの事を見る。そのおぞましい視線に、ルウは背筋が凍るような思いを感じた。

『ううん。頑張るんだ。ナタリーのために』

「行くぞ、二人とも。リアーナ・ロシェットに息つく暇を与えるなっ！！」
いかにわたしたちが殺し甲斐がないか、思い知らせてやれっ！」

セシリアの声を合図にして、三人はリアーナに飛び掛った。

何百、何千という階段を昇る。脚は痛みを訴え、全身は汗を噴出して気だるい疲れを訴える。それでも、足を止めるつもりはなかった。何故なら、その先にネルが待っているはずだ。ルウの言う言葉を借りるわけじゃないけれど、強引だって構わない、絶対に連れ戻

す。その一念だけがアルサスの脚を動かしていた。

翼の音が近づいてくる。見れば、真っ黒に塗りつぶされた空間に「翼ある人」が現れる。この先には行かせないと、言っているかのようだ。

「どけろっ!! お前たちに構ってらんないんだっ!!」

アルサスはアンドウリルを引き抜くと、階段を駆け上りながら、翼ある人に向かって叫んだ。しかし、そのような言葉に従うような相手ではない。「翼ある人」はついでに鳥のように三叉槍を突き出しては、アルサスを足止めしようとする。

「ぐっ!」

一匹の三叉槍を受け流し、二匹目の攻撃をかわし、三匹目の槍を受け止め力任せに押し返す。さらに、剣を振り上げて、四匹目の胸を切り裂く。だが、疲れを溜め込んだ脚が不意にバランスを崩したのは、その拍子だった。ふわりと体が傾いて、後ろへと倒れる。このままでは、階段から転げ落ちてしまう。そう思ったアルサスは、慌ててアンドウリルを階段の踏み板に突き刺した。何とか、バランスを取り戻したが、その瞬間に背後から襲い掛かる、五匹目の攻撃を避け切れなかった。

三叉槍の尖った先端が、ぐさりとアルサスの甲冑を突き破る。金色の鎧に赤い糸を引きながらも、アルサスは振り向きざまに、五匹目の体を上半身と下半身に切り裂いた。

「悪いな、俺の体に宿る特殊なフォトンは、俺の体をフォトン化させないみたいだ。なにせ、男だけど女神の末裔らしいからな。今なら、この血がもつ意味も分かる気がするよ」

飛び散る光の粒と化した「翼ある人」に、アルサスは皮肉めいた口調で言う。もちろん答えは返ってこないし、フォトン化しないということとは、三叉槍で突き刺されれば死ぬだけということだ。

「邪魔するな!」

アルサスは、再び走り出した。追いかけてくる、「翼ある人」を交わしながら、傷つきながら。それでも、ネルに会うために……。

「ネルっ！ 今行く、すぐ行くから、待ってろっ！！」

叫びとともに、アルサスは剣を振るい続けた。一体いくつの「翼ある人」を切り裂いただろう。聖剣は刃こぼれ一つすることなく、アルサスを支えた。そうして、どれだけの段を上ったか、どれだけの時間が経ったかも分からなくなり、体中の傷口から溢れる血とともに、疲れという疲れが全身を押しつぶしそうになった瞬間、ついに光の階段の終着点に足をかけた。

すると、アルサスの目の前が、一気に明るくなる。それまでの、インクに塗りつぶされたような黒い空間が、真っ白で輝きに溢れた場所が変わった。一瞬うろたえながらも、アルサスはついにベルテスの最深部にたどり着いた事を悟った。

「フェルト殿下……随分傷ついておられるようですね」

驚きの感情も、心配するような口調でもない、ただ平静で抑揚のないメツツエの声がする。アルサスは、口の端からこぼれる血を手のひらで拭うと、アンドウーリルを構えた。

かつかつ、と靴音が聞こえてくる。それは、二つになり、やがてアルサスの目の前に姿を現したメツツエは、真っ白な鎧に身を包み、ネルは白いドレスを身に纏っていた。すべてが輝き溢れるこの白い空間に溶け込んでしまいうさだ。

「アルサス……」

ネルが、アルサスのボロボロの姿を見て、驚きを口にする。その声にアルサスは胸が熱くなった。即位式典で訣別したのは、ほんのひと月ほど前の話だというのに、何年も何十年もネルの声を聞いていなかったような、そんな懐かしさを感じながら、そっと左手を差し伸べる。

「ネル、迎えに来た。帰ろう、皆のところに……」

113. 破壊の力（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せ下さい。

114. それぞれの願い

フランチェスカの武器を選ばない槍さばきと、クロウの迅雷の剣技は、木々をなぎ倒す俊烈なる風のように、暗雲から降り注ぐ苛烈な稲妻のように、ギャレットを攻め立てた。だが、アスカロンを手に、まったく怯む様子のないギャレットは、フランチェスカたちの攻撃を容易く受け流していく。

ギャレットの迷いのない太刀筋には、ある種殺意が込められている。その分、フランチェスカたちの攻撃に比べて、恐ろしいまでのキレがあった。だが、フランチェスカたちもギャレット相手に無傷で住むとは思っていないし、たとえギャレットをこの手で殺めることが無益な殺生になったとしても、ここで負けるわけには行かないという、意地のようなものがあつた。

敵は十年の間、ライオットの汚れ仕事を賄ってきた、手練である。無論、フランチェスカもクロウもこの十年片時も剣を手放したことはない。しかし、ギルド・リッターという正義を立てた仕事をこなしていたフランチェスカと、親衛騎士としてライオットの表の仕事を中心に賄ってきたクロウでは、その潜り抜けた修羅場の数は、圧倒的にギャレットの方が勝っている。その分だけ、フランチェスカたちに不利な戦いでもあつた。

「せい、やあっ!!」

クロウが掛け声よろしく剣を突き出せば、ギャレットは身に染み付いた王国騎士団時代の迅雷の剣技ですばやくかわし、逆側から攻めてくるフランチェスカの懐に蹴りを入れ、次いでクロウに斬撃をお見舞いする。

寸でのところで、クロウはアスカロンの切っ先をかわしたが、顔面に迫り来るギャレットの左拳をかわすことは出来ず、いとも簡単に殴り飛ばされてしまい、同様に蹴り飛ばされたフランチェスカの上に倒れこんだ。

「す、すみません。フランさん」

「え、ええ。大丈夫よ……」

慌てて飛びのくクロウに、フランチェスカは顔をしかめた。どうやら、ギャレットの蹴りによって、肋骨の一、二本折れてしまったらしい。幸いにも内臓に突き刺さっていないのか、痛みは骨だけに響く。

「体重が軽すぎるから、簡単に殴り飛ばされるのだ、クロウ・ヴェイル……。貴様のその華奢なりは、騎士に向いていない」

アスカロンを肩に担ぎながら、悠然と語るギャレット。

「剣技とは常に重さで勝負するもの。脚力などその添え物に過ぎない。一対一の戦いに主眼を置く、王国騎士団の剣技における最大の留意点は重さだ。それを理解している俺のほうが、一枚上手だと言うことだな」

「一枚上手かは、まだ決まっていはいない。そもそも、その曇った眼で振るう剣に、王国騎士としての誇りはあるのか？」

「何をっ！」

クロウの言葉に反応して、ギャレットは怒りを込めた眉間にしわを寄せた。しかし、クロウは気に留めず、気丈な態度で続ける。

「貴様は騎士としての誇りを取り戻したいと言った。だが、己の血に汚れた手を見るがいい！ 騎士とは何か！？ 武器を携え隣国を攻め取り、戦利品と領地を得ることだけが、騎士の務めではない。平和を守り、この世界に住むすべての人が安寧に暮らせる世の中を実現することが、騎士の本分だ！」

「黙れ、小僧っ！！ 辛酸の二文字を知らぬ若造が何を言うかつ！

！ 騎士とは力！ 相手を倒し、滅ぼす力のことだ！！」

「力ならば、十分もてあましているじゃない、ギャレット……」

クロウの傍で立ち上がったフランチェスカが低い声で言う。

「それでも、あなたが名誉を失ったのは、ライオットの所為でも、センチ・レーバン王家の所為でもない。あなた自身が、十年前のあの戦場で捨てたのよ。二度と拾うことの出来ない奈落の底に」

鉄槍を杖代わりに立ち上がるフランチェスカの姿は見るからに、痛々しげであった。思わずクロウは心配そうな目になる。

「大丈夫ですか、フランさん」

「ええ、そんなに困った顔で心配しないで、騎士さま。でも……あなたのそう言うところ、好きよ」

少しばかり冗談なのか、それとも真剣なのか分からない言葉をクロウに囁くと、再び厳しい視線をギャレットに向けて投げつけた。

「十年前、戦線に乗り遅れ、功の一つも欲しかったあなたは、命乞いをするわたしたちの隊長を、虫でもひねり潰すかのような顔をして殺した。あの日から、寝ても醒めても、あなたへの恨みがしこりのように心の奥に残っていた。でも……騎士さま、クロウはわたしに騎士のあるべき姿を見せてくれた。たとえば、力では劣っても、どちらが本当の騎士の姿か、ひと目見るだけで、子どもでも分かる。あなたは、騎士になりたくてもなれない、半端な殺人鬼に過ぎないのよ！」

「言わせておけばっ！」

こめかみに青筋を立てるギャレットは、アスカロンを両手で構えた。すると、ギャレットの体を俄かに陽炎のようなものが覆う。

「まずい、フォトンを暴走させるつもりだ!!」

クロウがそう叫んだ瞬間、振り下ろされたアスカロンから激しい突風が吹き荒れた。クロウとフランチェスカの体は、舞い散る木の葉のように吹き飛ばされてしまう。

「貴様たちの甘っちょろい話など、反吐がでる。簡単な話だ、ここで最後まで立っていた者の言うことが正しい」

「勝者の理論を振りかざすなーっ!!」

立ち上がりざまに、クロウは剣を袈裟に振り下ろした。しかし、手ごたえがない。見れば、攻撃とは重さだと言った舌の根の乾かぬうちに、ギャレットは俊敏な脚裁きで、クロウの背後に廻っていた。いや、彼のすばやさは、その豪腕から繰り出されるアスカロンの斬撃に対する裏打ちに過ぎないのだ。

「ぐあっ！」

咄嗟に踵を擦り付けて、切っ先が届くのは防いだものの、クロウの体が剣圧にねじれる。右足の骨がボキリと音を立てて割れるのを感じながら、クロウは漆黒の床に崩れ落ちた。

「さあ、命乞いをしろクロウ・ヴェイル。十年前と同じように、あの女に目の前で人が死ぬところを見せてやる！」

ギャレットは、クロウの折れた右足を踏みつけて、ニヤニヤと残忍な笑みを浮かべながら言う。クロウは、駆け抜ける痛烈な痛みに顔をしかめつつも、口を真一文字に結んだ。

「二度同じことは起こさせない。人間なら、同じ轍は踏まないものよ」

フランチェスカは鉄槍を斜に構えると、一気にギャレットとの間合いを詰めた。そして、ギャレットの眼前で、突き出すと思われた槍を両手に持ち替えて、振り下ろされるギャレットのアスカロンを受け止めた。幸いであったのは、フランチェスカの槍がブリュナクと呼ばれる名工の業物であったことだ。

「同じことは二度起こるさっ！！」

ギャレットは太い腕に渾身の力と、上半身の体重を上乗せして、ぎりぎりとフランチェスカを押し戻していく。

と、突然、フランチェスカは両手の力を抜いた。不意を突かれてギャレットの体がバランスを崩す。その一瞬を、クロウは見逃さなかった。折れた右足を踏みつけられながらも上体を起こして、剣をギャレットの背中につきたてた。

「二度同じことが起きる……。どうやらそれだけは、同じ意見みただ」

そう言うと、クロウはさらに剣をギャレットの体内に押し込んだ。即位式典の時と同じ方法。事前に打ち合わせたわけではないが、フランチェスカの一瞬の目配せで悟った。

「ぐぬうっ！！」

ギャレットは、短く悲鳴をあげ、口から大量の鮮血を吐き出す。

それは紛うことなく、人間の血であった。だが、その赤い色がやけに冷たく思える。

「やった、のか……？」

クロウは恐る恐る剣の柄から手を離れた。ギャレットは動かない。まるで石造にでもなったかのように、硬直したまま、カッと目を見開き、絶命していた……。

「フランさん、ご無事ですか？」

クロウが問いかけると、フランチェスカは静かに頷き、顔にかかったギャレットの血しぶきを拭い取った。

「騎士さま、大丈夫……じゃなさそうね」

見れば、クロウの右足は血に濡れて、あらぬ方向に曲がってしまっている。ギャレットに踏みつけられて、彼の足の骨は粉々に砕けているだろう。再起は不可能なほどに。

しかし、クロウはそれでも「アルサスのもとへ」と言い、立ち上がろうとしてよろめく。すかさず、フランチェスカは、クロウに肩を貸した。そして、満身創痍の二人は、目指す階段の先を見つめる。その階段から降りてくるのは、白い翼を背中に生やした「翼ある人」。

「どうやら、簡単には行かせてくれそうにもない見たいね」

フランチェスカは、鉄槍を硬く握り締めた。

打ち出すパイルが、リアーナを捉えても、エクスカリバーから放たれる剣圧は、杭の勢いをそぎ落とし、床に落とす。魔法についても同様に、放たれた魔法弾が見事に真つ二つにされ、虚空にはじけ飛ぶのだ。ギャレットよりも、厄介。そう言った本人だけでなく、全員がそれを理解していた。

「クフフ、クフフ。たのしいですね……」

狂気をはらんだ瞳で、リアーナが晒^{わら}う。

「弾切れまで時間の問題だな」

額に汗を滴らせつつも、セシリアはジャックに囁いた。だいぶ、

弾倉が軽くなってきた。アルサスからバヨネットを受け取ったジャックはもとより、セシリアも予備の弾倉がもう一つも残っていない。一気に勝負をつけたいが、迷いもない凶刃が寄せ付けてくれない。大剣エクスカリバーの懷に忍び込もうとすれば、リアーナの細腕からは想像も出来ない速さと破壊力の斬撃によって、切り裂かれてしまうことだろう。

「楽しいわけねえだろうっ！」

毒吐くように、ジャックは怒鳴った。だが、リアーナは奇妙な晒いを止めようとはしない。

「リアーナ・ロシェット！ あなたの望みはなんだ！？ わたしたちは、殺し合いをするためにここへ来たわけではない。あなたの望みと、わたしたちの使命が互いに利を害さないなら、その剣を収め、自我を強く持て！」

銃口にしっかりとリアーナを捉えながら、セシリアは無駄だと分かっている。でも説得を試みる。ギャレットのように、戦いにしか生きる道を見出せない輩であれば、メッツェに協力する意味も多少は理解できる。しかし、ライオット付きのメイドに過ぎなかったリアーナが、主人を裏切りメッツェに協力する意味は良く分からない。アルサスもクロウも口をそろえて、リアーナとメッツェの接点がないと言っていた。

「のぞみ……ないの。あたしには、それが無いのようっ!!」

ぎゃははと、下品に笑ったかと思うと、リアーナはぶんとエクスカリバーを振り回す。悲しんでいるのか喜んでいるのか、その判別もつかないような、歪んだ顔は、リアーナの美しい顔に似合っていないような気がした。

リアーナは、かつてライオットのメイドであった頃、「鉄面皮」と呼ばれていたらしい。たしかに、ルートニアで対峙した時のリアーナは、硬い表情をほとんどそれと分かるように崩したりはしなかった。しかし、今のリアーナはどうだ。鉄面皮とは程遠いほどに、晒い続けている。

「復讐……」

不意に、傍らのルウが言う。

「リアーナのお父さんは、ライオットによって、殺された。ライオットがクロウのお父さんの制止も聞かず、無謀な命令をリアーナのお父さんに下して、ヨルン平原の戦いで戦場の真ん中で白き龍によって消えた。だから、リアーナは、ずっとお父さんの仇を討つ機会を狙ってたんじゃないかな」

「何で、そんな事を知っているんだ、クソガキ!？」

ジャックは、目を白黒させた。クソガキと言われた、ルウはあからさまに顔をしかめる。

「調べたんだ。出陣の前に」

「出陣の前って、お前たち魔法使いどもは、アリスの魔法を習得してたんじゃないのかよ!？」

「あのさ、ジャック。ボクを誰だと思ってるの？ ルミナス魔法学園の神童だよ。アリスの魔法なんて、一日で覚えたよ。だから、その後で、騎士の人たちに色々聞いて廻ったんだよ。ヒマだったからね」

「ちっ、減らず口を」

フンと鼻を鳴らすルウと、舌打ちとともに呆れ顔をするジャック。セシリアはそんな二人を諷めるように、ルウに尋ねた。

「でも、復讐は成ったわけだろ？ ライオットは死んだ。だったら、わたしたちに刃を向ける理由なんて何処にもない」

「それだよ、セシリアさん。リアーナは、復讐という目的をやり遂げて空っぽになった。だから、自分という存在、望みを求めて、メツツェの騎士となったんだ。あんな、似合いもしない赤銅の鎧に身を包んで……」

「その結果か……哀れだな」

セシリアは小さく呟いて、狂気の中で剣を振り回すリアーナを見遣った。結局、多くの人が、十年前の悲劇を人生のトラウマにしている。ある人はそれを乗り越えようとし、またある者は抗い、別の

ある者は打ち負かされた。セシリアとて、養女という立場ながら、父の後を継いで軍属になったのも、父が両足を失って、ヨルンの戦場から帰ってきたからだ。幸い、オスカー・ラインは今も健在である。

しかし、何処に人の人生の岐路があるか分からない。父を失ったクロウは、その運命を乗り越えて、立派な親衛騎士となっている。フランチェスカも、十年前に抗い続けながら、けして道を踏み外すことはなかった。それぞれに願うものはあるにもかかわらず、リアーナは復讐の二文字に捉われた結果、今セシリアたちの眼前で、狂気に身を襲^{やっ}している。それを哀れと言わずして、なんとしよう。だが、それはリアーナが心を強く持っていられなかったからだ。彼女に道を踏み外したすべての責任を押し付けたくはない。人が戦争などしなければ、ヨルンの悲劇も起こらず、リアーナは幸福のうちに人生をまっとうできたかもしれない。

同じことは、メッツェとネルにも当てはまる……。

「だからと言って、他人から未来を奪い取っていい理由にはならない」

「その通りだよ、セシリアさん。こんなやつ、さっさとやつつけて、アルサスを追いかけよう」

ルウは、強く頷いて魔法杖を構えた。しかし、彼が放てる魔法は、後一発程度だろう。温存していたとは言え、アリスの魔法にほとんどの魔力を吸い取られているはずだ。

「簡単に言うんじゃない、クソガキ」

ジャックが窘める。セシリアたちの手持ちパイルももう残り少ない。連続射出すれば、三秒足らずで空っぽになるだろう。そうなってしまうえば、バヨネットは先端に取り付けた小剣を振り回すための短い柄の槍、もしくは剣身の寸足らずな剣に過ぎない。セシリアたちは、アルサスほど剣術には長けていない。そうなれば、力任せにエクスカリバーを振り回すリアーナに敵うはずもない。何とかして、敵の攻撃を逸らして、一気にカタをつけなければ、これ以上の長期

戦は、不利そのものだ。

「ジャック、ルウ、二人ともわたしに命を預けてくれるか？」

セシリアは一際小さな声で、二人に囁いた。二人はやや驚いた顔をする。

「策があるんスカ？」

「策と呼べるかどうかとも分らないけれど、少なくとももうチャンスは後一回しかない」

「大丈夫だよ、ボクやるよ」

ルウがにつこりと笑うと、ジャックも負けじと「俺も！」という。どうやら、二人の精神年齢はちょうどいい具合に同じなのかもしれない、と思ったセシリアは、僅かに苦笑して、二人に耳打ちした。

そして、耳打ちが終わると同時に、セシリアはリアーナの真正面に切り込んだ。

「ギャハ、ぎやはははっ」

言葉などもはや解さないのか、リアーナは晒い声とともに、セシリアに向けて剣を振り上げた。セシリアは、狙いを定める。しかし、セシリアが引き金を引くよりも早く、リアーナの剣はバヨネットを打ち碎いた。内部に残る火薬が激しく破裂し、破片がセシリアの頬に傷をつけた。きつと顔に傷跡が残るかもしれない、またアルサスに女の子らしくないと言われるな……などとセシリアはふと思った。

「隊長！！」

叫ぶジャック。しかし、その声は、セシリアの背後ではなく、リアーナの背後から飛んできた。野生の勘とでも言うのか、リアーナは咄嗟に振り向く。

「こっちだよっ！！」

今度はルウの声。さらに背後から。セシリアを囲に、ジャックとルウが三方に散らばったのだ。

ジャックのパイルと、ルウの魔法弾の射軸がセシリアの前で交差する。慌てたように、リアーナは剣を振り回したが、ジャック渾身

のパイルは剣圧をかいぐぐって、リアーナの胸を貫いた。さらにタ
イミングをずらしたルウの魔法弾が、リアーナの背中を焼く。

しかし、リアーナは「ぎゃははは」と笑うだけ。

「せめて、狂気から解き放たれ、安らかに眠れ、リアーナ・ロシェ
ット！」

セシリアは頬を伝う血を拭い、バヨネットの残骸から小剣だけを
取り出すと、一気にリアーナに接近し、その腹に飛び込んだ。

肉を断つ感触……。

「お父さま、リアーナもそちらへ参ります」

一瞬だけ、リアーナが呟いたような気がした。空耳であったかも
しれない。しかし、最期の瞬間に、リアーナは正気に戻ったのだと、
セシリアは思いたかった。

エクスカリバーを落とし、床に倒れたリアーナには、すでに息は
なく、セシリアはその体から小剣を引き抜く。その瞳が捉えたのは、
アルサスが昇って行った階段のその先から降りてくる、「翼ある人」
。

セシリアは、ルウに向かって小剣を放り投げる。弧を描いた小剣
はルウの手にすっぽりと収まる。

「ルウ、それで身を守れ」

「セシリアさんは？」

「わたしは、これを使う」

と、拾い上げたのはリアーナのエクスカリバー。ずしりと両腕に
のしかかる大剣は簡単に振り回せるものではない。かと言って、フ
ォトンを暴走させるのはごめんだし、そもそもそんなやり方を知ら
ない。それでも、あの化物を退けるためなら、十分な武器だろう。

「ジャック、ルウ！　これが、わたしたちの最後の戦いだ。アルサ
スが戻ってくるまで、絶対生き残るぞ！！」

両腕でエクスカリバーを振り上げたセシリアは、声高に叫んだ。

114. それぞれの願い（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せ下さい。

115. コンテイル

「帰るって、何処に帰るんですか？　もう、わたしには帰る場所なんてありません。お父さんもお母さんもメルもこの世にいない……。フォトンになって消えたんじゃないくて、その命は永遠に戻らないんです」

差し伸べられた手を、ネルは掴まなかった。頑なに拳を握り締め、メツツエの隣で訴えるネルの姿は、アルサスの胸をきつく締め付ける。

「だから、世界を生まれ変わらせるのか？　永遠に命が戻らないなら、君はそれを受け止めて、前に進まなきゃダメだ」

アルサスは差し出した手をそのままに、ネルに問いかけた。ネルは、静かに首を左右に振る。

「違います……。これは、わたしに与えられた使命なんです。メツツエ……いいえ、わたしの兄フォンが記憶を呼び戻してくれたおかげで、すべて思い出しました。マリアさまは、ずっと悩んでいました。自分のしたこと、沢山の命を奪ってしまった事を。だけど、世界は終わりを迎えようとしていて、自分には何もできない事を苦しんで、そういう母の姿を見たくないから、わたしと兄さんは、アストレアの天使となる事を自分で望んだんです」

「自分で……？　二千年もの間、使命を背負い続ける事を、自分たちで望んだのか？」

「はい。それが、孤児^{みなしご}だったわたしたちを救ってくれた、母に対する唯一の恩返し。そして、何より、わたしたちが世界を救いたいという思いを持っていたからです。しかし、奏世計画の完成は、世界が終わるその日と同じ瞬間でした。わたしは、長い間遺跡船の中で眠っていました。だから、昨日のここのように思い出せる。わたしたちに、すべての責任を押し付ける形になってしまった事を、以後まで後悔していた母の顔を……」

「それなら、なんで世界を生まれ変わらせる必要があるんだ？ 今地上では、三つの国が互いに手を取り合って、戦っている。やっと分かり合えたんだ。憎しみあい、殺しあってきた三つの民族が一つになったんだ。まだ人間には可能性が残されているって思わないか？」

アルサスの問いかけに、ネルは長い睫を伏せた。代わって答えたのは、二人の会話に何も言わず耳を傾けていたメッツェである。

「危機が訪れて、心が一つに結ばれた。しかし、危機が去れば、人間はまた互いに争いを始める。白き龍の存在は世界に解き放たれた。次に起きる戦争は、二千年前と同じ核戦争だ」

あくまで、冷淡なメッツェの言葉に、アルサスは言うていいのか分からなかった。

「何度でも過ちを繰り返す。私は二千年の歳月を生きて、その事を学んだ。人間とは、この世界で最も愚かな生き物だ。なまじ、本能を理性で押し殺し、知能という天恵に縋り、己の欲を全うしようとする姿は、畜生にも劣る。しかし、人間は永遠にそのことに気付くことはないだろう」

「人間は永遠に分かり合えない、だから争う。だったら、分かり合える世界を作りたい。言葉だけじゃなく、心と心が通い合う世界を。その世界には、悲しみも苦しみもない。白き龍に代わって、わたしたちがそれを実現するんです」

二人の間にあるのは、幾重にも積み重なった絶望だ。今よりもひどい戦争の時代に生まれ、本当の両親を失い、互いに身を寄せ合って生きた二千年前、絶望的な生活から救ってくれた母との別離、そして、本当の兄妹のように過ごした短い時間が終わり、一人きりで生きぬいたそれからの二千年。やがて、少年は二千年をかけて大人になり、少女は永い眠りから目覚め、新たな家族を手に入れた。しかし、その家族を失った少女は絶望の中で、少年と同じ結論に至った。

それらの絶望と悲しみを、アルサスにはどうすることも出来ない。

改めて、二人を前にして、無常なまでネルと自分の生きてきた人生の隔たりを感じ、少女が遠い人であることを痛感した。

「ネル……メッツェ、どうして人間を信じられない？ 確かに、愚かな生き物だとしても、お前が二千年で学んだように、俺たちも未来に様々なことを学ぶかもしれない。その可能性を信じてくれないのか？ 三国が手を取り合えたように、人は手を取り合えるかもしれない。誰の心にも優しさはあるはずだ」

「かもしれない。私もその言葉に二千年賭け続けた。フォトン・アクシオンがなければ、私もハンナも、ただの人間だ。だが、二千年の間、私を裏切り続けたのもまた人間だ。マリアはこうなることを予測して、我らに使命を与えたのだ」

メッツェの淡々とした言葉は、ますますアルサスを引き離していく。

「人間が再び戦争に明け暮れ、核兵器に手を出すなら、この世界を生まれ変わらせると」

「でも、ライオットをそう仕向けたのは、お前だろ！？」

「少し背中を押したただけだ。踏みとどまろうと思えば踏みとどまれた。現に、ガモーフの法王は自ら過ちを犯したではないか」

「それは、何も知らなかったから……」

「知らないから許されるのであれば、それを理由に罪を犯してもいい、と言うことにはならない。無論、私も沢山の罪を犯した。だからこそ、世界を生まれ変わらせる。苦しみも悲しみもない素晴らしい世界に。あえてお聞きしよう、フェルト殿下。何故それを拒むのだ？」

「未来は誰かに与えられるものじゃない。自分で切り開かなきゃいけないんだ。俺……いや、ぼくもお前たちも。アストレアだって、そういう未来を望んで、お前たちを生かしたんじゃないのか？」

「違うな。人間に未来を切り開く力はない。だから与えるのだ。女神の子である我々が。よく見てみる、ここに至っても、私たちとお前の間には意見の相違がある。分かり合えないんだ。分かり合えない

い気持ちは、やがて憎しみに変わり、争いを生み、悲劇となる。そんなことが繰り返されていいはずがない。繰り返させないために、私とハンナは二千年を生き抜いたのだ。お前ごときには、到底分かるまい」

メッツェはそう言うと、腰に携えた剣をおもむろに引き抜いた。精錬な輝きを放つ剣は、メッツェの意思に何ら曇りがない事を示しているかのようだ。

「わかってもらう必要もない。ここでフォトンとなり、次に目覚めた時には、新世界が誕生している」

俄かに、メッツェの剣に殺意が籠った。

「あいにくだけど、俺はフォトン化しない。俺のフォトンは、アストレアから受け継いだ特殊なものらしい」

と、アルサスが言うのと、それまで黙りこくって睫を伏せていたネルが、驚きを顔に浮かべた。しかし、メッツェはそのことを知っていたのか、さして驚く様子もなく、剣の切っ先をアルサスに向ける。「なるほど、ならば死ねばいい。私とハンナが奏でる物語の中に、貴様という異物は不要だ。マリアのフォトンを受け継ぎながら、その意思を理解できない人間よっ！」

メッツェが床を蹴る。咄嗟にその剣を受け止めるも、すでに疲れが蔓延した腕では、メッツェの攻撃を受け止めることは出来ず、アルサスは袈裟に肩から胸を切り裂かれた。

真っ白な床に、ぱらぱらとアルサスの赤い血がこぼれる。ネルは両手で口元を押さえ、今にも泣き出しそうな顔をしていた。

「ネル、思い出して。旅の間に出会った人たちの優しさを。ルウ、フランチェスカのことを。バセットやトンキチ、ガムウ、ローアンたち魔物の事を。みんなお前のことを守ろうとした。ウルドも、メルも、ソアンさんも！ そんな人たちが望んだのは、新しい世界じゃない」

アルサスは掠れた声で、必死に訴える。だが、メッツェは容赦な

く「黙れっ！」と叫んで、アルサスを斬りつけ続け、その度にアルサスの体から大量の血があふれ出していき、アルサスの顔は見る見るうちに青白くなる。それなのに、アルサスの顔は何故か死を覚悟した悲壮な顔ではなく、あまりにも状況にそぐわないほど、穏やかな顔をしていた。

「貴様が死者の言葉を代弁するな！　それは、冒涇だ、傲慢だ！！」
「傲慢なのは今に始まったことじゃないさ。分かり合えない世界には、辛いことや悲しいことが世界には溢れてる。でも、ネル。お前がラクシャで暮らした六年間のように、幸せなことも世界には沢山あって、世界はとっても輝いている。空も、風も、星も、海も、山も、緑も、そこに暮らす人たちも！！　それを全部壊していいなんて、間違ってる。人間は何度でも失敗する。でも何度でも反省する。そうして、一つずつ未来を作っていくんだ」

「御託などもう沢山だ！　奇麗事なら、あの世で言えっ！！」

メッツェの剣がアルサスの肩に食い込む。ダイムガルドの鎧など、メッツェの剣の前では、紙切れに等しいほど軟^{やわ}であった。とうとう、アルサスは立っていられなくなって、その場に膝を付いた。それなのに、アルサスの眼は真っ直ぐにネルを見つめている。

耐え切れなかった。もうアルサスの事を信じたくない、と思っていたのに、ネルは心の奥で、アルサスが傷ついていくのを黙ってみていることは出来なくなった。

「もう、やめて下さい、兄さん！」

ネルの叫びは、メッツェを止める。ズルリと音を立てて、アルサスの肩から引き抜かれる、メッツェの剣。

「どうして、戦わないんですか？　その聖剣を振りかざして、わたしたちを殺そうとしないんですか？　アルス答えてください……」
「どうしてって、俺はお前たちを殺しに来たんじゃない。世界は分かり合えるんだってことを教えたかった。だってそうだろ？　人間には言葉があるんだ。剣を振りかざさなくても、俺の想いをお前に伝えることくらいできるさ」

アルサスは、ほとんど虫の息だった。だくだくと流れ出す血は、彼の周りに真っ赤な血溜まりを生む。それでも、アルサスはアンドウーリルをかざすことなく、ネルに向かって左手を差し伸べる。

「その心が、人を分かり合えなくさせているんです……わたしと、あなたのように」

ネルが言うと、アルサスは小さく微笑んだ。苦笑や嘲笑ではなく、ネルの知るアルサスの温かく優しい笑顔だった。

「多分この先も、ずっと分かり合えないままかもしれない。だけど分かり合えない世界で、たった一つだけ確かなことがある」

君が思っている以上に、俺は君のことが好きだ……。

アルサスの告白が終わると同時に、メッツェの剣は彼の腹を貫いた。背中から飛び出した、剣の先からは、赤い血がしぶきとなって噴出した。ネルの心に、フラッシュバックのようにアトリアの森での出来事が蘇る。バセットに斬られて、絶命寸前だったアルサスを見たとき、心が引き裂かれそうになったことを。

「アルサスっ!!」

叫んだ時にはもう、走り出していた。メッツェの脇を通り過ぎ、斃れたアルサスを助け起こす。見る見るうちに温かさが喪われていくのを両手に感じながら、今度はメルのを思い出す。あの、命が消えるその一瞬を。

「戯言を。そのような感情など、世界にとって何の関係もないことだ！」

メッツェは血の滴る剣を手に、毒づいた。しかし、ネルの耳にその言葉は届かない。必死になって、何度も何度もアルサスの名を呼び、大きな瞳に涙を浮かべていた。その滴がひとつふたつと、アルサスの顔を濡らしていく。

「ごめんなさい、わたしは……」

きっと最初からそうだった。空からアルサスが舞い降りてきた時

から、出会って手をつないだその時から、ずっと。

「ネル……どうか、みんなを、ぼくを信じて欲しい。お願いだ……『こんな世界』でも、素敵なことは沢山あるんだよ。これは、ぼくと君が奏でる世界の物語なんだ」

「ダメです。これ以上喋らないで下さい、血がっ」

ネルは白い手で必死にアルサスの傷を押さえた。しかし、致命傷となった腹の傷はどれほど押さえても、次から次へと血をあふれ出させる。

「ぼくはね、思うんだ。相手の気持ちが分からないから、キライになるんじゃないかって、少しだけ信じて好きになってみるんだ。そうしたら、苦しくたって、悲しくたって、例え絶望したって、きつとお互いに分かり合える日が来るって。漠然としたことだけど、心はもともと漠然としたものなんだ。どんな風にだって、心持一つで変えられるんだよ」

まるで最期の言葉を伝えるかのようにアルサスは言う。そうして、アンドウ・リルを手放して、アルサスはネルの手を両手でしっかりと握った。だが、そうしていられたのは、ほんのひと時だけだった。吸い込まれるように、アルサスの両手から力が消えていく。

「アルサスっ！ 待ってっ！ 待ってくださいっ、わたしを置いていかないでくださいっ！！」

冷たくなるアルサスに縋るように、ネルは泣いた。

「わたしも……わたしもアルサスのことが好きです。出会ったときから、ずっと……」

「立て、ハンナ！ 世界再誕は今、始まったばかりだ。この世界を救うため、お前は新たな女神となるのだ」

「いやです……。世界が生まれ変わっても、アルサスのいない世界なんて、いやです」

「ふざけるな！！」

メツツェの剣が、ネルの背中に突きつけられる。怒りに満ち満ちたその顔は、人間のそれと何の変わりもなかった。そう、メツツェ

もネルも人間に過ぎないのだ。そんな人間が、フォトン・アクションという力を手に入れたからと言って、世界を生まれ変わらせるなどど、おこがましい事ではないのか？ アルサスは言った。分かり合えると……。それなら、自分がしようとしたことは一体、何だというのか。

「そいつは死んだ！ もはや、新世界にもそいつの居場所などないっ！！ 人間一人の死に心が揺らいだというのか、ハンナっ！？

人の死など、我らの願い、いやアストレアの願いの前には、とても小さなことだ！！」

「人の死は小さなことではありません！ みんな、一生懸命生きているんです。だれもが、未来のために！！」

ネルは顔を上げると、振り向きざまにメッツェを睨みつけた。

「お前まで、私を絶望させるのか？ ハンナっ！！」

「わたしは、ハンナではありません！ 私の名前はネルです！ ラクシヤのお父さんとお母さんが、メルのお姉さんになるようにって、わたしに付けてくれた、大切な名前ですっ！！」

「黙れ、黙れっ！！」

怒りに任せた剣が、ネルの頭上に振り下ろされる。しかし、けしてネルは逃げなかった。

「これは、わたしとアルサスの奏でる物語ですっ！！」

剣がネルの体を切り裂く寸前、俄かに輝きを纏った。それは、フォトン・アクションの放つ輝きであった。そして、それに呼応したのか、アルサスの捨てたアンドウールルが、まるで意思を持ったかのように、メッツェの胸倉を貫いた。

「無駄だ！ フォトン・アクションが傷を癒す限り、私たちは不死身だという事を忘れたか、ハンナ！！」

仕切りなおしと言わんばかりに、メッツェは再び剣を振り上げる。ところが、体が硬直して動かない。さらに、アンドウールルを伝って、血のしずくがぼたりぼたりと落ちてくるではないか。

「どうなってるんだ！？ これが、聖剣の力だとも言うのか！？

ハンナっ、ハンナあ!!」

怯えた瞳。うろたえた声。滴り落ちるメツツエの血。だが、ネルは助けを求めるようなメツツエから目を伏せた。嵐が過ぎるように、すべてが終わるように……。

115. コンテイル（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せ下さい。

116. もう一度ここから

ずっと、瞳を閉じていた。固く、固く……。何も聞こえない、何も見えない中で、ネルは必死にアルサスの手を握り締めた。

いくつもの人の死があった。父、母、村の人々、ウルド、ソアン、メル。ネルの知らないところでも、いくつもの命が失われた。その度に、ネルの心は少しずつ硬化していき、記憶とともに呼び覚ました使命に縋った。

その結果はどうだ。

最愛の人の死を目の前にして、ただ泣いているしか出来ない。奏世の力などといって、世界が恐れることは何もない。ネルは何も出来ない、ちっぽけで弱虫な女の子に過ぎないのだ。それなのに、世界を生まれ変わらせて、世界から憎しみや悲しみを取り除こうとした。

バセットやトニア、ガムウ、ローアンなど、本来アストレアの天使を守る役目にある魔物たちが、何度も「正しい道を」と言ったのに、少なくとも正しいかどうか分からない道に進んで、アルサスを失ったのだ。

やがて、無音がネルを支配する。深遠の闇の中で、たった一人うずくまっているみたいだった。とうとう、ひとりぼっちになってしまったのだ……。

だが、それでいい。自分が犯した罪の数だけ、罰を受けなければならぬ。かつて、マリアが自分を戒めて、贖罪に残りの人生を注ぎ込んだように、自分も罪を購うただけに、生きなければならぬ。

『まだ、終わってはいませんよ』

不意に語りかけてくる優しい言葉。瞳を開くと、アルサスの亡骸が淡い光に包まれていた、フォトン化しない、とアルサスは言っていたはずなのに、アルサスの体から青白い光が輝くと、光の粒があ

ふれ出したのだ。そうして、アルサスの体がすべて、フォトンになると、それは一粒ずつ集合して、一つの像を作り上げた。その像の前に、ネルは思わず呟いた。

「お母さん……」

目の前にいるのは、紛れもなく、二千年前戦災孤児となったメッツェとネルを救った、一人の女性だった。マリア・アストレア。現代に女神として語り継がれる彼女の姿を忘れるはずがない。記憶にはしっかりと刻まれているし、エントの森の遺跡船でもその姿を見た。あの時は、記憶を封じられていたから、マリアの顔を思い出すこともなかったが、今なら分かる。それが母であることを。

「どうして、お母さんが？」

『この赤い瞳の少年が母親から受け継いだフォトンは、わたしのフォトン。わたしのフォトンは特別なフォトンで、あなたたちのアクシオンや、人々のゲージのように力を発揮することはありませんが、わたしの記憶を永遠の時間の中に、複製し続けるのです。もしも、あなたたちが道に迷った時、あなたたちに責任を押し付けてしまったわたしが、最後に出来ることです』

「そんな……」

『大きく、そして美しくなりましたね、ハンナ』

まるで、慈しむかのように、フォトンの集合体である母の像は、ネルの頭を優しく撫でた。

「わたしは、きっと間違ってた。人が分かり合えないって思い込んで、大切な人を失い、多くの罪を犯しました。もう取り返しが付きません」

『どうして、あなたは人が分かり合えないものだと思ったの？』

「人の心は様々だから。想いは人の数だけあって、それぞれに違う。だから、誰かを傷つけても、想いを守ろうとする。そうやって、悲しみが生まれることを誰も分かってくれないから」

『でも、わたしがあなたを愛しているように、人には優しい心もあります。時にはぶつかったり、憎しみあったりしても、それは、永

遠のものではありません。人間とは、とても不器用で、とても拙い生き物です。憎めば憎むほど恐ろしくもなり、ともに分かり合おうと努力すれば、分かり合えないなどと言うことはないのです』

「それじゃあ、どうしてお母さんはわたしに、奏世の力を与えたんですか？ わたしは、こんな力なんていらないっ！ アルサスと一緒にいられたら、それだけでいいんです」

わあっ、と溢れる涙を抑えきれずに、両手で顔を塞ぐネル。

「わたしは死にたい。もう誰も傷つけることのないよう、すべての罪の中で死んでしまいたいのです！ アルサスの元に行かせて……！」

『なりません！ あなたが犯した罪は、あなた自身で、償わなければなりません』

「償いなんて、どうしたらいいのか分からない。失われた命は、永遠に戻ることはない」

『たしかに、失われた命は戻ることはない。それが自然の摂理です。メルも、あなたが滅ぼしたルミナスの人たちも、二度と戻ってはきません。ですが、まだ終わりではありません。あなたの力。本当に活かして欲しかったのは、再生の力。世界が傷つき、それでも尚争いをやめないとき、荒れ果てた大地と荒れ果てた人の心を癒すための力です。そのために、メツツェと手を取り合って、世界を守って欲しかった。本当の意味の奏世計画とは、今ある世界を壊すことではなく、今ある世界を見守ることだという願いを込めたつもりでした。間違った方向にすすめば、それを正す。そうして、世界を守っていくこと。それを、あの子に伝えられなかったのは、わたしの罪です。二千年越しの……』

「お母さん……」

『フォトンに複製された記憶は、このベルテスに残されています。あなたがそれらを集めて、もう一度再生するなら、世界を元に戻すことが出来る。それが銀の乙女なのです』

マリアの像は再び、慈愛に満ちた瞳でネルの頭を撫でた。

「わたしに出来るでしょうか？」

『できます。信じる心がある限り、フォトンとなった人々も、赤い瞳の少年も、もう一度未来を切り開くことが出来ます。ただ、そのためには、あなたに残された、フォトン・アクションのすべての力を使い果たさなければなりません。一度使えば、もう二度とあなたは奏世の力を使うことは出来ないでしょう。それは、あなたが銀の乙女ではなくなると言うことです。あとはあなた次第。あなたが、償いのために生きると心に決めるだけです』

「償いのために生きる……お母さんには、もう会えないの？」

ネルが問いかけると、マリアは少しだけ困ったような顔をした。これがきつと今生の別れになる。そんな予感がネルの心にも、マリアのフォトンにも過ぎっていた。

『大丈夫、あなたにはこの赤い瞳の少年も、そしてあなたを心配してくれる人たちもいます。独りぼっちではありませんよ』

「そう、なのかな……？」

『それでも、もしも、あなたがもう一度わたしに会いたいと言うなら、ここから三千キロの東。かつてアジアと呼ばれた、現在の未開の地に、二千年前の遺跡が残されています。そこには、わたしがあなたたちと出会ってから残した日記があるはずです』

「その日記の中なら、わたしはお母さんにもう一度会えるんですか？」

『ええ、何度でも。あなたの心の中に、わたしが行き続け。そしてあなたがちゃんと、赤い瞳の少年の手を離すことがなければ』

マリアは、微笑みをネルに与えた。ネルはマリアの娘として頷き返すと、頬を濡らす涙をこしこしとふき取った。また目は赤いが、それでもネルの顔に、悲しみの色とは違うものが浮かんでいた。

『さあ、ハンナ！ 銀の乙女としての最後の務めを果たしなさい』

「はいっ！」

ネルは瞳を閉じて、意識という意識すべてをフォトン・アクションに投げた。やがて、ネルの体は眩い光に包まれる。けして棘のあ

る光ではなく暖かな光。それは、見る見るうちにあたり一面を、そして世界を取り囲んだ。あるべき命を元に戻す。その一念のみにすべてを託して。

マリアのフォトンは、そっとそんな娘の姿を見つめ続けた。

瓦礫の山が動く。大きな岩盤と化したのは、そこにあった城砦の壁の一部。それが、地下脱出通路の出口をべったりと塞いでいたのだ。ようやくそれを取り除いた時には、すでに夕刻の風が、ルートニアの草原を駆け抜けていた。

「出口ですっ！ やりました！ 俺たち、助かったんですよ、アイシャさま！」

アイシャの手を引いて地下通路を出てきたのは、ルートニア守備兵の一人。主ではない少女を守り抜き、ようやく外の空気を肺いっぱいに吸い込んだ守備兵の青年は、喜びに顔をほころばせた。

地下通路に逃げ込んだ数名の守備兵はみな、待ち構えていた「翼ある人」によってフォトンに変えられた。残ったのは青年とアイシャの二人のみ。そんな二人の顔も、必死の戦いの末に、泥と血で汚れ、見る人が見なければ、ルートニア守備兵と、ダイムガルドの皇帝とは思ってもよらないだろう。

「総攻撃はどうなったのでしょうか？」

守備兵の青年は、じっとシエラの山がある方を見つめる。ここからでは戦いがどのようなになったのかは、分からない。

「勝ていても、負けていても、彼らには帰る場所がないのじゃ……シオンさまも」

自分たちを逃がすために盾となった、シオンの事を思い出したアイシャは、ぽろぽろと涙を落とした。

「な、泣かないで下さい、アイシャさま！ 最後まで私があなたをお守りいたします。必ず、命に代えても！」

「ダメじゃ！ ダメなのじゃ。そちは死んではならん！ 何があっても、わらわとともに生き抜くのじゃ。そして、みなへの帰りを待つ

のじゃ！」

「はい。必ず！」

センチ・レーバン騎士であるこの守備兵の青年にとって、アイシヤは敵国の皇帝である。にもかかわらず、必死になってアイシヤを守り抜いた。そこにセンチ・レーバン人という括りもなければ、絶体絶命の中で、ただ人間として、一人の男として、アイシヤを守ろうと心に決めたのだ。

ふと見れば、もう繋いでいる必要はないのに、しっかりとアイシヤの手が青年の手を握り締めていた。

「いや、これは失礼！」

慌てて、青年は手を離そうとしたが、アイシヤはしっかりと握り締め「このままできて欲しい」と言った。やや気恥ずかしくなったのか、青年は頬を染めながら、もう一度シエラ山の方角に視線を投じた。すると、一瞬だけ、その方角がキラリと光り輝いたではないか。驚いた青年は目をしばたいて、凝らした。

何か、きらめく砂のようなものが、こちらに向かって飛んでくる。

「あれは、フォトンじゃ！」

と先に気付いたのは、アイシヤだった。やがて、フォトンが風に流されるように、二人の傍に舞い降りた。そして、それらは徐々に人の形に変わる。見覚えのある人の形に。

「シオン陛下！ ストライン閣下、みんなっ！！」

青年は嬉々として叫んだ。目の前に現れたのは、フォトン化したはずの、シオンやストライン、守備隊の者たちの姿だった。

「あらあら、お二人とも仲がよろしいんですね」

なんだか、アルサスを思わせる冗談めかしたシオンの言葉に、二人は慌てて繋いでいた手を放し、再会の喜びに満たされた笑顔を浮かべた。

「もう、ダメかな……」

呟いたのは、ルウだった。いつになく弱気な声には、だれも答え

る者はいなかった。

リアーナを撃破し、アルサスが辿ったであろう光の階段を逆に降りて、クロウたちと合流を果たしたセシリアたちだったが、すでに武器はボロボロになり、剣を振るう力も、魔法を唱える力も残されていなかった。

クロウは右の足をひどく痛めつけられ、すでに迅雷の剣技で敵を討つことはできない。フランチェスカの槍は穂先が欠けて、もはやただの鉄の棒に過ぎず、業物もこうなってしまうては形無しというのを体現しているかのようだ。それは、セシリアのエクスカリバーも、ジャックの小剣も同じ。

だが眼前にはまだ何千匹もの「翼ある人」が背中に生やした翼をためかせながら取り囲み、攻撃の機会をうかがっている。逃げ場など何処にもない。いや、あるとすれば、フォトンとなって散るこ
とくらいか……。

「アルサス、大丈夫かな。ネルお姉ちゃんをちゃんと連れ戻してくれるかな」

再び、ルウが弱気に呟いた。すると、フランチェスカがいつになく厳しい顔でルウを睨む。

「信じるのよ、ルウ！ アルサスなら、きっとネルを連れ戻す。全部が上手く行くって！」

「そうだ、信じるんだ、あいつの事を。だから、それまで、僕たちは死んじゃいけないんだ！」

クロウが役に立たない足を引きずりつつ、ルウの杖を武器代わりに振りかざす。

「俺たちは、そのためにここに来たんだ！」

ジャックの声が轟く。慣れないバヨネットの接近戦で、すでにジャックの鎧はボロボロだ。それでも、闘志だけは両目に滾らせ
た。たぎ

「一気に駆け抜ける。ジャックはクロウどのを背負え！ 躓いたり遅れても、助けてやれないからな！」

セシリアは渾身の力を振り絞って、エクスカリバーを振りかざした。そして、これが最後だと言わんばかりに、腹の底から声を上げる。

「行くぞ、みんな!!」

駆け出したセシリアに続き、フランチェスカ、ルウ、クロウを背負うジャックと続く。しかし、疲れはピークに達し、走っていても膝が笑い、腕が震え、「あっ!」と思ったときにはもうすでに時遅く、セシリアの両手からエクスカリバーが零れ落ちていた。

その隙を「翼ある人」が見逃すはずなどない。急降下よろしく、数十匹が一気にセシリアたちを取り囲んで、三叉槍を繰り出してくる。観念とか覚悟などと言うのとは程遠い。ただ静かにその瞬間が訪れてしまうことをセシリアは、言葉とは別に予感していたような気がした。

しかし、「翼ある人」の三叉槍がセシリアの体を貫いてしまう直前、それは起こった。まるで、その槍で貫かれた人が光の粒になって消えてしまうのと同じように、「翼ある人」の体がパーンっ、と弾けて消えたのである。

これは一体どうしたことか。フォトンに視界をふさがれながら、セシリアは驚きに後ろを振り返った。

「みんな、大丈夫か?」

「ええ。でも、これはどういうこと?」

フランチェスカがみなを代表して言う。しかし、セシリアにも分からない。一体何が起きたのか。

やがて「翼ある人」のフォトンが散り散りになって消えると、今度は階段の遥か彼方が、輝きに満たされた。その輝きは、階段を滑るように下りてくると、セシリアたちを包み込んだ。驚いている暇などない。あたり一面にフォトン・ゲージの粒が舞い、やがてそれらが一つの像を築き上げる。

「トライゼン將軍、カレン!!」

叫んだのは、クロウだった。見れば、そこには髭面の老将と、鎧

姿の似合わぬ少女が立っていた。

「マーカス！」

ジャックが叫ぶ。振り向けば、そこにいるのは、セシリアの部下であったマーカス・ヒルの姿があった。

次々と、セシリアたちの周りに現れるのは、多くの戦いでフォトンと化した者たちだった。そうして、セシリアたちは、やわらかく温かな光の中で、突然の再会に驚きと喜びをかみしめたのだった。

人の心は漠然として不確。だから、分かり合えなくて、仲違いをする。やがてそれは、憎しみへと変わり、次第に大きくなって戦争へと発展する場合もある。己の利益、富、名声、未来、あらゆるものをかけて、時には正義を振りかざし、時には悪意を持って、互いに命を削るのだ。

その根幹にある者は、相手を嫌いだと言う心。でも、少しだけ待って欲しい。あいてを嫌いだと言う気持ちの、ほんの少しだけでいいから、相手の事を好きになろうとして欲しい。そうすれば、見た目は違ってくるはずだ。

けして、この世界は分かり合えない世界ではないと言うことが、きっと分かるはずだ……。この広い世界はそれほど暗澹としたものではないし、人はそれほど愚かな生き物でもない。本当は、誰もが、分かり合える生き物なんだ。それは、一人一人の心の持ち方次第……。

どこかで小鳥の音がする。青い空を飛びながら、東へと飛んでいく。

風が頬を撫でる。土の匂いに混じって、つんと夏草の匂いがした。穏やかで、どこか静かで、でも生き物や自然の喜びに溢れた平和な音がする。

「ネル！ ネル起きて」

肩を揺さぶられて、ネルはゆっくりと目を覚ました。そして驚い

た。アルサスの顔かすぐ近くにあったからだ。

「アルサス……？」

「よかった。ずっと眠ったままだったらどうしようかと思ったよ」
アルサスがゆっくりと顔を離し、ほっと胸をなでおろす。ネルは、まだぼやけたままの頭で、体を越した。ここは何処だろう。

見渡す限り草原。その向こうには、霞がかったアトリア連峰と、アトリアの森が見える。そして、草原の真ん中で交わる三本の街道。ここは、空白地帯の中心にある草原だと、分かったネルは辺りを見回した。そこに戦争の煙は上がっていないし、メツツエの姿もなければ、戦いの跡もない。

おもむろに立ち上がったネルは、更に驚いた。自分が着ているのは純白のドレスではなく、カチュアの紋様が刺繍されたワンピース。頭に被るのは、サークレットではなく箱型の帽子。一体全体何が起きたのだろうか……祖思いながら、アルサスの方を見る。

アルサスは、うーんと唸りながら両手を高く突き上げて背伸びをしていた。しかし、彼が着ているのは、なんだか懐かしいような、銀色の胸当て。ノミの市で手に入れたという、ギルド・リッターの鎧だ。

「どうしたの、ネル？ まだ寝ぼけてる？」

きょとんとしたアルサスが振り返る。

「ううん、大丈夫です……それより、その」

何と尋ねたらいいのか分からずに言い淀んだネルに、アルサスは小さく笑った。

「俺にも良く分からない。でも、目が覚めたらこの恰好で、ここに寝転がってた。かすかに、ネルが俺の事を呼んでいたのは、覚えてるよ」

「でも……わたし、アルサスたちにひどいことしました。わたしは」
突然、アルサスの人差し指が、ネルの口を塞ぐ。それ以上言うな、とアルサスの赤い瞳が言っていた。本当は、それだけでは許されないことは分かっている。それでも、今だけは、その優しさに縋りた

い。これから始まる贖罪の前に。

「いいんだ。俺もネルも生きてる。フォトンになった人たちも、元通りになった。それだけで、とても素晴らしいことだよ。例えば何があっても、俺の気持ちは変わらないさ」

と言うアルサスの言葉に、ネルは自分の気持ちを伝えていなかった事を思い出した。わたしも、あなたのことが好き。その一言を口にしようとしたネルは、再び口を塞がれた。それも言わなくてもいい、言わなくなっただけで分かってるよ、そんなアルサスの微笑み。

「さて、これからどうしようか……。まだ依頼の件、終わってなかったよね」

そう言って、アルサスが懐から取り出したのは、金貨の詰まった麻袋だ。ガモーフの関所で依頼者から前金で貰った、などといったが、本当はアルサス自身が用意したもので、依頼者も言わばアルサス自身なのだ。

「流浪の旅人レイヴンとしては、ちゃんと依頼を終えなければならぬ。もしも、君がその気なら、ラクシャまで送るよ。きっと世界は、復興に向かってる。それを見ながら旅するのも、悪くないと思うよ」

「だけど、アルサスは、センチ・レーバンの王子様ですよ？」

「いや、違う。それはフェルト・テイルのことだろ。俺は、レイヴンのアルサス・テイル。君が、ハンナ・フリーゲルじゃなく、ネル・リミユレであるように。ネルの前にいるのは、フェルトじゃなく、アルサスだよ。さて、それじゃ、街道をガモーフに向けて歩こう。そのうち、辻馬車が通るだろう」

アルサスが草を分けて歩き出す。ネルは慌ててその背中を呼び止めた。

「待ってください。あのっ……依頼。依頼していいですか？」

ネルが言うと、アルサスは少し驚いて振り返る。

「わたし、これから沢山の人のために生きたい。でも、独りでは何も出来ません。だから、そのっ、アルサスと一緒にいて欲しいんで

す。傍に、いてくれるだけでいいんです」

「それは、罪滅ぼし？」

アルサスが問うと、ネルは頭を左右に振ってそれを否定した。
「違います。わたしの罪は、きつといつまでも消えません。でも、この世界がもつといい世界になるように、わたしに出来る事をしたいんです。ダメ、ですか？」

「いや、ダメじゃないよ。俺で力に慣れるなら」

「あのっ、それから、もう一つ。アストレアさまがわたしに言ったんです。遠く未開の地に、アストレアさまが残した日記があるって。もう、二千年も前の日記だから、もう残ってないかもしれません。でも、わたしはその日記を手に入りたい。きつと、これからの贖罪に役に立つと思うんです」

「レイヴンの依頼変更両は高いよ。しかも、未開の地への旅となるとさらに倍」

にやりと、アルサスが白い歯を見せる。いつもの、皮肉めいた調子だ。

「そのっ、わたしお金なんて持ってなくて」

言いかけたネルの目の前に、アルサスの晴れ晴れした顔と、手が差し出される。

「この手を離さなければそれでいい。俺も、もうネルに嘘つかない」
「アルサス」

「でも、未開の地となると、遠いし険しいな。ルウとフランも誘った方が良さそうだ。まずは、カルチェトの港から二人のところに行つて、それから……それからは後で考えればいいか」

自分自身に笑ったのか、アルサスは少し気恥ずかしそうにすると、空いた手で頭をかいた。そして、急に真顔になって続ける。

「ネル、もう一度ここから、俺たちが出あったこの場所から、旅を始めよう」

そうだ、この場所は、アルサスと出会った場所。ここから始まった物語は終わる。そして新しい物語が始まる、もう一度この場所か

ら。

「はいっ！」

ネルはにっこりと微笑んで、アルサスの手に自分の手をそっと添えた。その手をアルサスが強く握り締める。初めて手をつないだときのような、温かさがネルの心に伝わってくる。

「あっ！ やばい。辻馬車が行ってしまう」

アルサスの視線の先。街道を黄色い三角旗がはためく三頭立ての馬車「ウォーラ」が走っていく。街道を走る辻馬車の数は多くない。「ネル、走ろうっ！ 置いていかれたら、カルチェトの港まで地獄の徒歩になっちまうっ！！」

ぐっと、力強くネルの手が引っ張られた。

「おおーい、その辻馬車、待ってくれーっ！！」

アルサスの声と、二人の足跡が草原を駆け抜けた。ネルは風に飛ばされそうな帽子を片手で押さえながら、つないだ手はしっかりとアルサスの手を離さないように力を込めた。

もう一度、ここから旅をはじめよう……。

（おしまい）

あとがき

はじめまして&こんにちわ。

この度は、拙作「奏世コンテイル」を最後までお読み頂き、まことにありがとうございます。三人称文体にいちいち苦戦しながら、それでも予定していた物語を消化させて、この物語を完結させることが出来たのは、一重にお読み下さった、皆様のおかげです。何度お礼の言葉を申し上げても足りないくらいです。本当にありがとうございます。ございました。

もしも、読んでいないと仰られるお方が、居られましたら、かなり長いお話となってしまうましたが、読んで、物語中に散りばめたわたしの伝えたかったメッセージの一つでも、受け取っていただけたなら、大変嬉しく思う次第です。

この先は「あとがき」という体裁をとった、製作のお話をしたいと思っています。ネタバレも沢山含んでいますので、ひとつ本編を読んだから、再びこの先を読んでいただけたらと思います。

今作は、「剣と魔法のファンタジー」として計画を立てました。

しかし、当初の段階では、ハイ・ファンタジーを目指していたのに、蓋を開けてみると、結局現実の現代から遠い延長線上、二千年後の未来という世界設定となり、ロー・ファンタジーとなりました。さらに、王道からは足を踏み外した内容であり、正統派ファンタジーではなく、邪道のロー・ファンタジーという、かなり変な小説だと、自分では評価しています。

もともと、前回の剣と魔法ファンタジーの小説「トーコと黒いこもり傘」は、実際に伝わる伝承などをふんだんにモチーフとして取り入れました。物語の骨格から、登場するアイテム、魔物に至るまで、とにかく下敷きを用意したのが、前作です。それに対して、「奏世コンテイル」は、わたしが勝手に考えた設定を多く取り入れ

て、物語を作っていました。

毎度ながらに言っていることですが、素晴らしいファンタジー作品なら、このサイトに沢山存在しています。ファンタジーに疎いわたしが、それらになんとかしがみついたためには、独自設定を考えるほかなかった、と言うこともあります。

また、当初よりキーワードに「空想科学」と書いたように、ファンタジーに多少のSF（サイエンスフィクションではなく、サイエンスファンタジー）に近いものを積極的に取り入れようという事を考えていました。その結実は、ダイムガルド軍に顕れている、と思います。

独自設定を作るのは、伝承をいじり倒すより地味に大変な作業であり、時間はかかったものの、好き勝手に出来るというのがありました。おかげで、どのようになでも物語のつじつまが合わせられる部分はありました。

物語は、当初からラストに至る部分まで考えており、前半は冒険モノ的なノリ、後半は戦争メインとなり、極端にシリアスな流れへと変化してしまうことも織り込み済みで、それにあわせて、当初読みやすくするために用意した「魔法の言葉」は、中盤から一切使わないようにしました。だったら、最初から使わなきゃ良かった、とも思いますが、大目に見てください。

しかし、本人の予想を上回る流血まつり。それなのに残酷描写あまりに設定しなかったのは、そこを強調したくなかったからです。今作には沢山のテーマやメッセージを込められるだけ詰め込んでいます。それが何であるかは、読んでいただいた皆様が考えていただくとしているものの、ひとつは「戦争と平和」がテーマにあります。その上で、人の死は避けて通れません。人が死ぬところが、それほど美しいものであるはずもなく、悲しみや残酷さだけが際立ってしまします。にもかかわらず、あえて断行したのは、そこに伝えたいメッセージを込めたかったと言う意図があります。

その点において、明るい冒険ファンタジーを期待された方には、

大変失礼な事をしてしまったと、反省している次第であります。なにぶん、これもファンタジー門外漢の小説ゆえに、大目に見てやってください。ごめんなさい。

さて、話は変わって。ちよつとした設定に関する裏話を。

物語の初期で使われていた魔法の設定は、すべて拙作「トーコと黒いこうもり傘」から引用しています。ドイツ語をベースとした言葉であり、同時に魔法言語や神々の時代の言葉は、すべてドイツ語となっています。翻訳機にかければ、ある程度意味が分かるかもしれません。

いつも変な共通点を設ける登場人物の名前ですが、今回はこれといった拘りはほとんどありません。アルサスの名前は、イギリスの「アーサー王伝説」の主人公アーサーを読み替えたものです。正確には「アルトス」ですが、異世界ファンタジーを書く際の主人公などの登場人物の名前にしようと、あたためていた名前です。今後の雪宮ファンタジーでも、ちらほらとその名が登場するかもしれません。

また、マリア・アストレアですが、マリアは聖母マリアから、アストレアはタロットカードの「正義」にも描かれている女神「アストライアー」から取ってあります。

他は、戦車の名前や、好きなハリウッド女優の名前などから取っており、比較的散漫とした名前の付け方になっています。

各軍のイメージも差異をつけたつもりです。センチ・レーバンはいわゆる中世ヨーロッパの王国をイメージし、ガモーフは十字軍やテンプル騎士団などのキリスト教系の軍隊をイメージしました。そして、ダイムガルドは旧日本軍や近代軍隊のイメージを投影しています。もちろん、そのままではなく、かなりアレンジを加えています。

また、後半に登場するアスカロンなどの剣の名前はすべて、伝承などのものを採用しています。結構節操なくあちこちから響きの好

きなものを選びました。

その一方で、アルサスの剣「ナルシル」と「アンドウーリル」は、伝承ではなく「指輪物語」の主人公の一人が持っている剣の名前から取りました。あえて、アルサスの剣だからと言って、エクスカリバーにはしませんでした。

他にも、部分部分で、伝承や「指輪物語」から名前だけをチョイスしている部分があります。探してみると、面白いかもしれませんよ。

余談ですが、十二章を書いている間、ずっと「BUMP OF CHICKEN」のアルバムを聞きながら書いていました。物語とは関係ありませんが、何故か筆が進みました。

制作期間六ヶ月。全部で百十六回、十二章、約六十五万字に及ぶ今回の物語は、これまでわたしが書いた物語の中でも最も長編となりました。非常に長い時間をかけ、何度も心折れそうになっただけに、今作にかける愛情はひとしおです。

しかし、上手くかけなかったところや、尺の都合から割愛した部分があります。（例えば、四章と五章の間で、アトリア山脈を越えるところとか）

そういったところは、今作最大の反省点であり、誤字や脱字、文章力を含めて次回作への課題点となりました。次回が、ファンタジーがはたまた別のジャンルとなるかは、まだ明かせませんが、日々精進していきたい所存ですので、是非今後ともよろしくお付き合いくださいませ。

また、わがままと知っていながらも、皆さんのご意見をお聞かせいただきたくも思います。ご意見・ご感想、質問などはいつまでも受け付けておりますので、重ね重ねよろしく願いいたします。

それでは最後にもう一度。お読み下さった皆様、お気に入り登録

して下さった皆様、感想をお書きになってくださいました皆様、本当にありがとうございます。

それでは、また次回作でお会いできることを楽しみにしつつ……。

雪宮鉄馬 2011／3

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3777o/>

奏世コンテイル

2011年3月23日11時55分発行